

神宮司廳藏版

古事類苑

神祇部一

古事類苑刊行會


LIBRARY
MAR 23 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

古事類苑

神祇部第一冊目録

古事類苑

神祇部一

神祇總載

古事類苑

神祇部一

神祇總載

天地剖判ノ初ニ、先ヅ天地ヲ鎔造スル神アリ、獨化ノ神ナリ、繼テ男女耦生ノ神アリ、國土始テ成リ、生齒繁殖ノ源ヲ啓キ給フ、其後ニ至リ、國土ヲ修理スル神アリテ、國土漸ク闢ケタリ、天孫是ニ於テ此土ニ降臨シ、天壤無窮ノ皇基ヲ建テ給フ、時ニ尙ホ神世ニ屬ス、蓋シ太古ニ在リテハ、神世人世ヲ以テ年代ヲ區劃セリ、神世ニハ、其地位ニ就キテ天神地祇ノ別ハアレド、其時ニ出デ給ヒシモノハ皆神ナラザルハナシ、故ニ稱シテ神世ト云フ、

神ニハ各主ル所アリ、日ニ日神アリ、月ニ月神アルガ如ク、風雷水火、山海草木、盡ク神アラザルハナシ、枉津日神ノ禍害ヲ爲シ、直日神ノ禍害ヲ厭スルガ如キモ、亦各主ル所アルナリ、醫藥ノ神ハ古昔ヨリ稱スル所ニシテ、歌神鞠神ハ後世ニ出デシモノナレド、其主宰スル所アリトスルハ一ナリ、

神トハ、尋常ニ卓越スルノ稱ナレバ、古ハ或ハ虎狼ノ如キモノヲ呼ビテ神ト爲スアリ、其中ニハ眞ニ祀リテ神ト爲セル者モナキニアラズ、後世斯ル類ニハ淫祠多シ、

後世ニ至リ、三十番神ノ說アリ、其中ニテ天地ヲ擁護スルアリ、內侍所ヲ守護スルアリ、王城ヲ守護スルアリ、此種ハ皆三十二神ヲ四分シ、八神ヅヽ常ニ東西南北ノ中ノ一方ヲ守ルナリ、又吾國ノ守護アリ、禁闕ノ守護アリ、法華ノ守護アリ、此三種ハ一月ノ中ニ、三十神各每日

神

交替ス、而シテ法華ノ三十番神ハ、神道篇ニ更ニ之ヲ詳ニセリ、

我邦、古ヨリ神國ト稱シ、特ニ神祇ヲ崇奉シケレバ、神祇官ノ神名帳ニ載セタル社モ、三千餘座ノ多キニ至レリ、諸國ニモ神名帳アリシカド、多クハ亡ビテ傳ヲズ、然レドモ其纔ニ存セルモノニ就キテ之ヲ視レバ、亦其一端ヲ知ルニ足ル、朝廷ニテハ庶政皆神事ヲ以テ先トシ、神祇官ヲ以テ諸官省ノ上ニ置キ、大中小祀ノ等級ヲ設ケテ、祭祀ノ輕重ヲ明ニシ、散齋致齋ノ品アリテ、齋戒ノ緩急ヲ示シタリ、是皆神祇ヲ崇奉シテ、萬世ノ標準ヲ立テタルニ外ナラズ、故ニ下庶民ニ至リテモ、吉凶禍福一ニ皆神祇ニ憑依シ、祈禱ヲ以テ事ト爲シケレバ、神祇ノ事ハ、典籍ノ中ニ盈溢シタリ、此篇ハ特ニ古事記、日本書紀等ニ載セタル神代ノ事ノ、神祇ノ大體ニ係レル事ヲ擧ゲ、傍ラ他書ニ據リテ、後世ニ出デタル說ヲモ取レリ、高天原黃泉國ハ、專ラ神祇ニ屬スルモノニアラザレドモ、亦姑ク此ニ取メタリ、

〔倭名類聚抄二鬼神〕天神　周易云、天神曰神、食鄰反、和名加美、

〔類聚名義抄示七〕神　音辰、カミ、鬼神

〔伊呂波字類抄加人倫〕神　カミ、天神地祇

〔萬葉集二挽歌〕天皇〈天智〉崩時婦人作歌

空蟬師、神爾不勝者、離居而、朝嘆君、放居而、吾戀君、玉有者、手爾卷持而、衣有者、脫時毛無、吾戀、君曾伎賊乃夜、夢所見鶴、

〔萬葉集三雜歌〕娘子復報歌

吾祭、神者不有、丈夫爾、認有神曾、好應祀、

〔萬葉集十一寄物陳思〕

千早振、神持在、命、誰爲、長欲爲、

靈治波布、神毛吾者、打棄乞、四惠也壽之、恠無、

〔萬葉集十四東歌〕未勘國防人歌

和伎毛古爾、安我古非思奈婆、曾和敝可毛、加米爾於保世牟、己許呂思良受氐、

〔萬葉集略解十四下〕加米、一本加未とあり、いづれか是ならん、

〔萬葉集十六〕戀夫君歌

左耳通良布、君之三言等、玉梓乃、使毛不來者、憶病、吾身一曾、千磐破、神爾毛莫負、卜部座、龜毛莫燒曾、戀之久爾、痛吾身曾、○下略

〔冠辭考六〕ちはやぶる

萬葉卷二に、千磐破神曾著常云、卷二十に、知波夜夫流、神乎許等牟氣云々多し、こはいちはやぶる神てふ語なるをはぶきていへり、○中略そも〳〵此語は、古事記に、詔此葦原中國者、略於此國道速振荒振國神等之多在、是使何神而將言趣、また神代紀に、勅天稚彥略慮有殘賊强暴橫惡之神者、故汝先往平之云々、この同じ事を古事記には、借字にて道速云々とかき、紀には理をもて殘賊云々と書たり、この二つを相むかへて、ちはやぶるあらぶるかみとよみ來れるなり、然れば此辭を萬葉にはさま〴〵書つれど、たゞ祟はしく荒き神てふ意なるを知べし、○中略又萬葉卷七に、千磐破、金之三崎乎、過鞆吾者不忘、牡鹿之須賣神、こは奈良の朝の歌にて、古今集に、ちはやぶる加茂の社、其後にちはやぶるかしひの宮などいふが如く、神のます所には、此語を冠らしむる事となれるなり、上つ世は荒ぶる神と、猛き人などにのみ冠らしめたるを、中つ世より轉り行て、よしあしのわかちなく、神てふ冠辭とのみなりたり、

〔伊勢物語下〕昔いやしからぬ男、われよりはまさりたる人をおもひかけて年へける、

人しれずわれこひしなばあぢきなくいづれの神になき名おほせん、

〔續古今和歌集 神祇七〕述懷　　光明峰寺入道前攝政左大臣〇藤原道家

わが國はよるひる守る神しあればたのむぞやがて祈るなりける

〔玉葉和歌集 神祇二十〕神祇の心を　　藤原爲守

皆人のいのるこゝろもことわりにそむかぬみちを神やうくらん

〔續千載和歌集 神祇九〕入道前太政大臣家十五首歌に述懷　　津守國助

一すぢにうきをもいかになげかまし神にまかせぬわが身なりせば

題しらず　　後近衞關白前右大臣

大かたの世をしづかにと祈るこそ神のこゝろにまづかなふらめ

〔續後拾遺和歌集 神祇二十〕神祇をよめる　　津守國夏

君が代をいのるかたにはみしめ繩神のこゝろもさこそひくらめ

〔新拾遺和歌集 神祇十六〕題しらず　　伏見院御製

神やしる世のためとてぞ身をもおもふ身のためにして世をば祈らず

〔新續古今和歌集 神祇二十〕神祇歌の中に　　勝定院贈太政大臣〇足利義持

すむは空ににごるはつちとわかれにしそのいにしへも神ぞしるらん

永曆二年內裏歌合に　　前中納言匡房

八百よろづそこらの神のとしなみによるひるまもる君が御代かな

〔神代口訣 一〕神者、嘉牟(カム)嘉美(カミ)也、略云嘉美、神靈如明鏡之照萬物、不捨一法、不受一塵也、在天者神、在萬物者靈、在人者眞心也、萬物之靈、人之心、淸明則神也、儒書云、陽之精氣曰神、陰之精氣曰靈、廣雅云、神弘也、〇中略 神者淸明之理、靈者通達之事也、

〔日本書紀纂疏 上一〕夫一心者、混沌之宮、神明之舍也、〇中略 蓋心與混沌其體全一、又名曰神、故尙書

洪範五行傳曰、心藏神也、夫天地人物之理氣、蘊在混沌中、譬猶本覺與心含藏一切眞俗境界也、及其開闢、而爲天爲地、爲人爲物、爲有情爲無情、皆一氣之分、神理之變也、〇中略神明之道以明鏡爲正體、則有取於此在者也、混沌一氣、分而爲二、峙而爲三、所謂輕清者爲天、重濁者爲地、冲和者爲人、此三者莫不各具陰陽、而其氣之變、神理亦隨焉、則在天者爲天之神、在地者爲地之神、在人者爲人之神、周禮曰、祀大神、享大鬼、祭大祇、鄭玄註曰、大神者天也、大鬼者人也、大祇者地也、孔安國孝經傳曰、天精曰神、地爽曰祇、又說文曰、神字从示申、徐廣曰、申卽引也、陰陽二氣引出萬物、故曰神、周易大傳曰、陰陽不測之謂神、程子曰、鬼神天地之功用、而造化迹也、張横渠曰、鬼神者二氣之良能也、朱晦菴曰、以二氣言、則鬼者陰之靈也、神者陽之靈也、以一氣言、則至而伸者爲神、反而歸者爲鬼、其實一物而已、又史記注云、陽魂爲神、陰魄爲鬼、或統陰陽而謂之神、或分陰陽而謂之鬼神、或配三才而謂之神祇鬼、其實一氣之精靈耳、〇下略

〔圓珠菴雜記〕神カミかゝみの略といへり、明神を日本紀にあらかゝみと點じたれば、さるにや、

〔東雅四神祇〕神カミ
上古の時、神といひしは人なり、日本紀に神聖神人等の字、讀てカミといひし卽此なり、我國の語、凡稱してカミといふは尊尙の義なりければ、君上のごとき、官長のごとき、皆これをカミといひ、近く身にとりても、頭髮のごときをいひ、遠く物においても、上なる所をさしてカミといふ、ましてや斯人の神聖なる、是を尊び稱してはカミといひ、また大神とも、大御神ともいひけるなり、〇下略

〔貞丈雜記十六神佛〕神をかみと云は上なり、貴ふべき物ある故、上におはします名にてかみと云なり、

〔日本書紀通證二〕今按、嘉美之爲言、赫見カヾミ也、與鏡訓通、有神明照臨之義、

〔倭訓栞前編加六〕かみ　神は明見(アカミ)の義、神明照臨ましますよりいへり、又赫見(カヾミ)の義、鏡出來らざる前に、日月の事を天鏡尊と申奉れり、史記の注に、鬼之靈者曰神とも見えたり、

〔古事記傳三〕迦微と申す名義は未思得ず、（舊く說ることども皆あたらず、）さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐御靈をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸木草のたぐひ、海山など、其餘何にまれ、尋常ならずすぐれたる德のありて、可畏き物を迦微とは云なり、（すぐれたるとは、尊きこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、惡きもの、奇しきものなども、よにすぐれて可畏きをば、神と云なり、さて人の中の神は、先かけまくもかしこき天皇は、御世々々みな神に坐こと、申すもさらなり、其は遠つ神とも申して、凡人とは遙に遠く、尊く可畏く坐ますが故なり、かくて次々にも神なる人、古も今もあることなり、又天下にうけばりてこそあらね、一國一里一家の内につきても、ほど〳〵に神なる人あるぞかし、さて神代の神たちも、多くは其代の人にして、其代の人は皆神なりし故に、神代とは云なり、又人ならぬ物には、雷は常にも鳴神神鳴など云ば、さらにもいはず、龍樹靈狐などのたぐひも、すぐれてあやしき物にて、可畏ければ神なり、木靈とは、俗にいはゆる天狗にて、漢籍に魑魅など云たぐひの物ぞ、書紀舒明卷に見えたる天狗は異物なり、又源氏物語などに、天狗こだまと云ることあれば、天狗とは同なるがごと聞ゆめれど、そは當時俗に天狗とも云ひ、木靈とも云るを、何となくつらね云るにて、實は一つ物なり、又今俗にこだまと云物は、古へ山彦と云り、これらは此に要なきことどもなれども、木靈の因に云のみなり、又虎をも狼をも神と云ること、書紀萬葉などに見えたり、又桃子に意富加牟豆美命と云名を賜ひ、御頸玉を御倉板擧神と申せしたぐひ、又磐根木株草葉のよく言語したぐひなども皆神なり、さて又海山などを神と云ることも多し、そは其御靈の神を云に非ずて、直に其海をも山をもさして云り、此らもいとかしこき物なるがゆゑなり、）抑迦微は如此く種々にて、貴きもあり、賤きもあり、強きもあり、弱きもあり、善きもあり、惡きもありて、心も行も其さま〴〵に隨ひて、とり〴〵にしあれば、略○註　大かた一むきに定めては、論ひがたき物になむありける、（然るを世人の、外國にいはゆる佛菩薩聖人などゝ同じたぐひの物のごと心得て、當然き理と云ことを以て、神のうへをはかるは、いみじきひがことなり、惡く邪なる神は、何事も理にたがへるふわざのみ多く、又善神ならむからに、其はぞにふたがひては、正しき理のまゝにのみなし、えあらぬ事あるべく、事にふれて怒り坐る時などは、荒びたまふ事あり、惡き神も悦ばゝ心なごみて、物事はふること絶て無きにしもあらざるべし、又人は然は知られども、その、のとしあたりては、惡しと思はるゝ事も、まことには吉く、善しと思はるゝ事も、まことには惡き理のある、などもあるべし、凡て人の智は限ありて、まことの理はえしらぬものなれば、かにかくに神のうへは、みだりに測り論ふべきものにあらず、）まして善きも惡きもいと尊くすぐれたる神たちの御うへに至りては、いともいとも妙に靈く奇しくなむ坐

ませば、さらに人の小き智以て、其理などちへのひとへも測り知らるべきわざに非ず、たゞ其尊きをたふとみ、可畏きを畏みてぞあるべき、迦微に神字をあてたる、よくあたれり、但し迦微と云は體言なれば、たゞに其物を指て云のみにして、其事其德などをさして云ことは無きを、漢國にて神とは物をさして云のみならず、其事其德などをさしても云て、體にも用にも用ひたり、たとへば彼國書に神道と云るは測りがたくあやしき道と云ことにて、其道のさまをさして神とは云るにて、道の外に神と云物あるには非ず、然るを皇國にて迦微之道と云へば、神の始めたまひ行ひたまふ道と云ことにこそあれ、其道のさまを迦微と云ことはなし、もし迦微なる道といはゞ、漢國の意の如くなるべけれど、其もなほ直に其道をさして云にこそあれ、其さまを云にはならず、書紀に神劍神龜などある神字も漢文の意に、其德をさして云るにて、あやしきたち、あやしきかめと云ことなれば、迦微とは訓むべからず、もしカミタチ、カミガメなどよむときは、たゞに劍をさし、龜をさして迦微と名くるになるなり、凡て皇國言の意と、漢字の義と全くは合がたきもの多かるを、かたへに合はざる處あるをも、大方の合へるを取て當たるものなれば、その合ざる所のあることをよく心得分べきなり、又漢籍に陰陽不測之謂神、あるは氣之伸者爲神、屈者爲鬼など云るたぐひを以て迦微を思ふべからず、かくさまにさかしだちて物を說くは、かの國人の癖なりかし、

〔槻の落葉〕神ちふ言、くさ〴〵說あれど、すべてよからず、神はかしこみ恐るゝ意と見えて、須佐之男命は大蛇にむかひまして、汝可畏神也との給ひ、欽明紀には、虎をさしても、狼をさしても、威神也(カシコキカミナリ)といひ、萬葉十六卷には、から國の虎とふ神といひ、まくら詞には、狼の事を大口の眞神が原とつゞけたり、これらをおしわたして、神ちふ意を知るべし、すさのをの命を神素戔嗚命と申せる神も、この意、ちはやぶる神代といへる發語も、かしこむ意につゞけたり、

〔傍廂前篇〕神の御姿

神の御姿を畫くは、恐るべく愼むべき事なり、人の目には見え給はぬ故に、隱身といふを略きて神とはいへるなり、天地の始に天津神たちは、獨神成りまして御身を隱し給ひきとあるにて、御祖もなく、おのづからなり出で給ひ、其處にまします他神の御目にも見え給はざりし故なり、人の世となりては、いづれの神も其所にまし〳〵ながら、人のめに見え給はぬ故に、おしなべて神といへり、神は名のみにて見えねばなしと思ふがおろかなり、たとへば簾の中より主君の見給ふをしらず、廣庭にて下部が不敬のわざする如きものなり、まれ〳〵に人にさと

し給ふ事ありて、御姿あらはし給ふ事あれば、或は老翁童女などの姿と見え、又は大蛇猛獸などに見えて、眞の御姿は見ることあたはず、略○中神代の神はいかにともかくべきやうなし、

〔古史傳　一〕迦微と云物のことは、略○中師宣長○本居説いと委き考には有れど、此は迦微てふ物既に有て、其後の德用を說示されたるにて、其名義また元か稱へ初たる所以をば何とも記されず、略○注此は千言萬語の有が中にも、最第一に辨へ知らずば有べからざる事なる故に、今此に說辨へんとす、其はまづ神と云ふ言義は、御紀の卷首に、古天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟涬而含牙云云と有る。牙(カビ)これなり、但し此を古く阿斯加備とも訓たる由なれど、其は誤なり、葦牙とは固より異なり、また佐邪志と訓たるは尤當らず、さて加備の加は彼(カ)の意にて、物を其と指て云こと、備(ビ)は靈妙なる物を云語なり、師には牙(カビ)靈(ミエ)の約まりたるならむとの思へりしかど、然には非ず、かくて加備は迦微と同く、加夫とも加牟とも通へり、其は神靈を加夫呂とし、加牟呂とも、賀味留伎、賀味留美とも云にて知べし、また酒をカミ、カム、カモスなど云は、全く同言同義にて、物を釀成す意あり、然ればまた、タミ、タム、タヒとも通ひて、君も同言ならむか、約りてはキとしも云ひて、物を組織すり、進もれこはもねり、また道奥の末蝦夷あたりの國にては、今も神、また國司なカムイ、或はカムヰと云とぞ、此はカミてふ言の延たるなり、頭大く下細き形を云ひて、頭槌之劔、鏑矢などの加夫も本より同言なるが、株(カブ)蕪(カブラ)冠(カガフリ)被(カヅク・カブル)みな同じく、ラ、ルに動辭の活用なり、凡てこの加微てふ言の活用の多く限りあきことと、是に勝る詞なく、自づから神の御功德の廣く大なるにも叶ひて、いと〳〵靈異く奇妙なる事にこそ、略○中然れば加備とは世に生出たる物の元始にて、いと〳〵奇靈なる物なるが、是より延て、都て奇靈なる物を云ふ稱とも爲れる事を辨へ曉るべし、略○注さて加備と加微は同言にて、其いと奇靈しく妙なる事を稱より及びて、造化の事に與り給ふ加微等は申すも更なり、凡て世に奇しく靈しき功德ある者を加微と云ひ、其をやがて神と書り、略○注又後には凡人の中にも卓絶たる人を加微と稱ひ、是より延て頭、守、長官などをカミと云も尊みて云ること、また頭上をカミと云も同意なり、また髮をカミと云も、頭上に生るより云なるべし、閑部集云、後世人は神と上とを分て用ふるから、文字にのみ目なれて、言の意を忘れて、字につきて別なりとのみ思ひ、附會の理窟を以て解むとするは強なし、皇朝には一言を轉じてあまたの事に云なり、一言を一事とするは漢風なり、萬物の中にも卓越たる物をば、宏

神世

く稱へて神と云ふ事とぞ成れりける、

〔加微二言考〕さて加微といふ言の本を、五十音の義によりて攷ふるに、その意は加微の二言に備りて、加音は第三等の義なる隱れて奇しき象にて、目にも見とめがたく、手にも取られぬ意なり、そは香(カ)、目にも見とめがたく、手にも取られぬ意、歟(カ)、上の意に同じく、夫より疑の助辭となれるなり、風(カゼ)、目にも見とめがたく、手にも取られぬものゝせまる意なり、そのせまる意は、せ音第一等の義なり、翳(カゲリ)、これも同じ意にて、隨に見とめがたき物の、手理の二意にて、動きて顯はるゝ意となるなり、幽(カスカ)、これも見とめがたき意、霞(カスミ)、これも上に同じく、ミノ一音にて、滿ちて顯はるゝ意となる、さてまた微は滿たる象にて、實(ミ)身(ミ)、頭手足など凡てをいふ名なれば、ミの義あるなり、三(ミ)、數は三にて、滿足る意あるなり、また富(トミ)、豐は物の一による意、美は上におなじ、並(ナミ)、奈は物にそはる意、美は上におなじ、膿(ウミ)、宇は內の意、美は上におなじ、網(アミ)、阿は廣き意、美は上に同じくて、廣きものを一にみたする意、加微はこの二音を合せて、目にも見とめがたく、手にも取られぬものゝ饒に滿たる義となる。目にも見とめがたく、手にも取られぬ意は、神の凡人の目に見奉ることなく、奇異なるに通ひ、滿たる意は、然見奉ることなきものから、猶神實の饒に坐しますにかなへり、さてまたかくては、神代の神達の現に坐しましゝに適はざるがごときものから、神といふ言の起元は、天上に坐して其御形のこの顯國より見え給はで、其御德の奇異にましますを稱へていひそめたる言なれば、上にいへる加微の二音の義奇しくも協へり、○注略夫より云轉して顯國に在坐して、現に見奉るをも、凡て稱へ奉れる言となれるなり、○中略また奇異(クシビ)といふ言の幽(カミ)といふ言の意に同じきを以て、加微の名義を猶思ひ定むべし、されど加微といふ言は、久志備といふ言の約りたる言とするにはあらず、然云意は、久志の二音に隱れて奇しき象ありて、加微の加の音に通へり、備(ビ)は靈(ヒ)にて美(ミ)に通ふ、波行の濁音は、萬行に通ふ例、その美は則加微の微に專同じことなり、加微の微則靈(ビ)なればなり、

〔古事記上〕天地初發之時、○中略次成神名、國之常立神、訓常立亦如上、○如上トハ、本書上文天之常立神ノ注ニ、訓常云登許、訓立云多知、トアルヲ指ス、次豐雲上野神、○中略次成神名、宇比地邇上神、次妹須比智邇去神、此二神名以音次角杙神、次妹活杙神、二柱次意富斗能地神、次妹大斗乃辨神、此二神名亦以音次淤母陀琉神、次妹阿夜上訶志古泥神、此二神名皆以音次伊

邪那岐神、次妹伊邪那美神、〔此二神名亦以音如上〕

上件自國之常立神以下、伊邪那美神以前、幷稱神世七代、〔上二柱、獨神各云一代、次雙十神、各合二神云一代也、〕

〔古事記傳三〕神世とは、人代〔人代といふこと古今集序に見ゆ〕と別て云稱なり、其はいと上代の人は、凡て皆神なりし故に然言り、さて何時までの人は神にて、何時より以來の人は神ならずと云きはやかなる差はなき故に、萬葉の歌どもなどにも、たゞ古を廣く神代と云り、〔六卷に、日本國者、皇祖乃、神之御代自、敷座流、國爾之有者とは、神武天皇の御代を申し、同卷に、自神代、芳野宮爾、蜻通、高所知者、これも人代になりての事なり、十八卷に、皇神祖能、可見能大御世と、垂仁天皇の御世をよめり、又一卷には、當代をしも讀來て、神乃御代とよめり、〕然れども事を分て云ときは、鵜葺草葺不合命までを神代とし、〔書紀に此までの二卷を、神代上下卷と標されたり、姓氏錄にも、此までの御子孫を神別とし、神武天皇より以來のを皇別とせらる、〕自橿原朝〔○神武〕より以來を人代とす、信に此御時より、世間のありさま新なりしかば、さも云つべきものなり、

〔日本書紀神代一〕開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、于時天地之中生一物、狀如葦牙、便化爲神、號國常立尊、次國狹槌尊、次豐斟渟尊、凡三神矣、〔○中略〕次有神、埿土煑尊、沙土煑尊、次有神、大戶之道尊、大苫邊尊、次有神、面足尊、惶根尊、次有神、伊弉諾尊、伊弉冉尊、凡八神矣、〔○中略〕自國常立尊、迄伊弉諾尊、伊弉冉尊、是謂神世七代者矣、

〔萬葉集一雜歌〕中大兄〔近江宮御宇天皇○天智〕三山歌

高山波、雲根火雄男志等、耳梨與、相諍競伎、神代從、如此爾有良之、古昔母、然爾有許曾、虛蟬毛、嬬乎相格良思吉、

〔萬葉集三雜歌〕柿本朝臣人麻呂下筑紫國時海路作歌

大王之、遠乃朝庭跡、蟻通、嶋門乎見者、神代之所念、

登筑波岳丹比眞人國人作歌

鷄之鳴、東國爾、高山者、左波爾雖有、朋神之、貴山乃、儕立乃、見果石山跡、神代從、人之言嗣、國見爲、筑羽

乃山矣、○下略

〔萬葉集雜歌五〕好去好來歌

神代欲理、云傳介良久、虛見津、倭國者、皇神能、伊都久志吉國、言靈能、佐吉播布國等、加多利繼、伊比都賀比計理、○中略

天平五年三月一日良宅對面獻三日山上憶良謹上大唐大使卿○多治比廣成記室

〔萬葉集雜歌六〕天平八年丙子夏六月、幸于芳野離宮之時、山部宿禰赤人應詔作歌、

自神代、芳野宮爾、蟻通、高所知者、山河乎吉三、

悲寧樂故鄉作歌

八隅知之、吾大王乃、高敷爲、日本國者、皇祖乃、神之御代自、敷坐流、國爾之有者、○下略

過敏馬浦時作歌

八千桙之、神之御世自、百船之、泊停跡、八嶋國、百船純乃、定而師、三犬女乃浦者、○下略

〔萬葉集雜歌七〕詠月

久方乃、天照月者、神代爾加、出反等、年者經去乍、

〔萬葉集雜歌九〕鷺坂作歌

山代、久世乃鷺坂、自神代、春者張乍、秋者散來、

〔萬葉集雜歌十三〕

葦原笑、水穗之國丹、手向爲跡、天降坐兼、五百萬、千萬神之、神代從、云續來在、甘南備乃、三諸山者、○下略

〔萬葉集十八〕教喩史生尾張少咋歌

於保奈牟知、須久奈比古奈野、神代欲里、伊比都藝家良之、父母乎見波多布刀久、妻子見波、可奈之久米具之、○中略

神世七代

右五月十五日、〇天平勝寶元年〇越中守大伴宿禰家持作之、

橘歌

可氣麻久母、安夜爾加之古思、皇神祖能、可見能大御世爾、田道間守、常世爾和多利、夜保許毛知、麻爲泥許之登吉、〇中略

閏五月二十三日、〇天平勝寶元年大伴宿禰家持作之、

〔古今和歌集五秋下〕二條后〇清和后高子の、東宮〇清和のみやす所と申ける時に、御屏風に、龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる、　業平朝臣

ちはやぶる神代もきかずたつた川からくれなゐに水くゝるとは

〔古今和歌集十七雜上〕二條のきさきの、まだ東宮のみやすん所と申ける時に、大原野にまうでたまひける日よめる、　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひいづらめ

〔新千載和歌集十八神祇〕冬神祇といふ事をよませ給ける　伏見院御製

天の戸のわけし昔をうつしきて神代にかへすあさくらのこゑ

等持院贈左大臣〇足利尊氏家にてよみ侍ける歌の中に同じ心〇神祇を　藤原長秀

住吉の松のことのはかはらすは神代にかへれしき嶋の道

〔日本書紀一神代〕開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、于時天地之中生一物、狀如葦牙、便化爲神、號國常立尊、次國狹槌尊、次豐斟渟尊、凡三神矣、〇中略次有神、埿土煮尊、沙土煮尊、亦曰、埿土根尊、沙土根尊、次有神、大戸之道尊、大苫邊尊、一云、大戸之邊、亦曰、大戸摩彥尊、大戸摩姫尊、又曰、大富道尊、大富邊尊、次有神、面足尊、惶根尊、亦曰、吾屋惶根尊、亦曰、忌橿城尊、亦曰、青橿城根尊、亦曰、吾屋橿城尊、次有神、伊弉諾尊、伊弉冉尊、凡八神矣、〇中略自國常立尊、迄伊弉諾尊、伊弉冉尊、是謂神世七代者矣、

天神地祇

〔釋日本紀 五述義〕神世七代　私記曰、問云、神世七代何數乎、答云、國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、並是男神也、謂之三代、次男女耦生之神有八神矣、是則通計男女二柱合爲一代、是謂四代、都合爲七代、是全古事記之意也、

〔古事記 上〕天地初發之時、○中略 次成神名、國之常立神、訓常立亦如上、○此註ノ事、上條神世ノ下ニ在リ、次豐雲上野神、此二柱神亦獨神成坐而隱身也、次成神名、宇比地邇上神、次妹須比智邇去神、此二神名以音、次角杙神、次妹活杙神、二柱、次意富斗能地神、次妹大斗乃辨神、此二神名亦以音、次淤母陀琉神、次妹阿夜上訶志古泥神、此二神名皆以音、次伊邪那岐神、次妹伊邪那美神、此二神名亦以音如上、

上件自國之常立神以下、伊邪那美神以前、并稱神世七代、上二柱、獨神各云一代、次雙十神、各合二神云一代也、

〔新千載和歌集 十神祇〕文保百首歌奉りける時　法印定爲

あめつちのひらけしときのあしかびや神の七代のはじめなるらん

〔古事記傳 三〕此に伊邪那美神までを神世と云るは、後五代の神代に言りし稱の遺れるなり、其は人代となりて後に、鵜葺草葺不合命の御時までを申す如くに、五代の神代の時には、又此七代を神代と申せしなり、信に此七代は天地の初發の時にして、神の狀も、世のさまも、又甚く異なりしぞかし、○中略 さて此は十二柱神のうち、初二柱は獨神成坐し、次十柱は男女二柱づゝ耦(タグヒ)坐(マシ)れば、たゞ十二柱神世と申しては、其趣分り難き故に、後の世嗣の例に准へて、假に七代とは申せるなり、

〔令義解 二神祇〕神祇令第六 天神曰神、地神曰祇、

凡天神地祇者、神祇官皆依常典祭之、謂天神者、伊勢、山城鴨、住吉、出雲國造齋神等類是也、地祇者、大神、大倭、葛木鴨、出雲大汝神等類是也、常典者、此令所載祭祀事條是也、

凡天皇即位、總祭天神地祇、謂即位之後、仲冬乃祭、下條所謂大嘗者、每世一年、國司行事是也、

〔古事記上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、訓高下天云阿麻下效此、次高御產巢日神、次神產巢日神、○中略次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉之時、琉字以上十字以音如葦牙因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神、此神名以音次天之常立神、訓常云登許訓立云多知○中略

上件五柱神者、別天神、○中略

於是天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用幣琉之國、賜天沼矛而言依賜也、

〔日本書紀神代一〕一書曰、天神謂伊弉諾尊、伊弉冉尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩之、迺賜天瓊戈、

〔釋日本紀五述義〕天神　私記曰、問、今此云天神者何神哉、答、案上注云、高天原所生神名、曰天御中主尊、次高皇產靈尊、次神皇產靈尊、又案古事記、總有五柱天神、是等天神也、又問、天神總有五柱、然則五神之中、獨指何神哉、答、古記稱天神者、以高皇產靈尊爲其最首、但此云天神者不知何神也、若五柱天神共授此瓊戈歟、故古記云、天神諸命、改云諸命、明非一神也、

〔古事記上〕故所避追而降出雲國之肥上河上在鳥髮地、此時箸從其河流下、於是須佐之男命以爲人有其河上而尋覓上往者、老夫與老女二人在、而童女置中而泣、爾問賜之、汝等者誰、故其老夫答言、僕者國神、大山上津見神之子焉、僕名謂足上名椎、妻名謂手上名椎、女名謂櫛名田比賣、○又見日本書紀

〔古事記傳九〕國神、こは大山津見神に係りて聞ゆれども、子の下に助字をおきて、此下にはおかず、又下に更に僕名と云るなどを思へば、大山津見へ係りて聞ゆれども、書紀に吾是國神號脚摩乳と見え、又記中に僕者國神名猿田毘古神、又僕者國神、名謂井氷鹿などある例に依るに、自云るなり、されば此にてしばらく讀きるべし、さて國神とは、高天原に坐す神を、天神と申すに對へて、此國なる神を云なり、神祇令義解に別ちたる、天神地祇に與ひあり、但何事も此國にて言ことある故に、天神とは申せども、國神とは徒には言ず、是首に、五柱天神なれば、別天神とあれども、其

次に此國に成坐る七代神をば、たゞ神世七代と云て、國神世とは云はず、是その意ぞ、國神とは、たゞ天神に對ふときのみ云稱なり、此も天より降來坐る神に對て申す言なり、右に引る猿田毘古神も然り、又邇々藝命の詔に、必國神之子とあるも、天神の御子ならじの意なればなり、中卷白檮原朝神武○段に云るは、いさゝか異なり、そはそこに云べし、○中卷云云見下文國神條

〔古語拾遺〕素戔鳴神、娶國神女、生大己貴神、

〔日本書紀神代二〕天稚彥、乃取高皇產靈尊所賜天鹿兒弓天羽羽矢、射雉斃之、其矢洞達雉胸、而至高皇產靈尊之座前也、時高皇產靈尊見其矢曰、是矢則昔我賜天稚彥之矢也、血染其矢、蓋與國神相戰而然歟、

一書曰、天照大神勅天稚彥曰、豐葦原中國、是吾兒可王之地也、○中略時有國神、號天探女、

〔古事記上〕爾日子番能邇邇藝命、將天降之時、居天之八衢、而上光高天原、下光葦原中國之神於是有、故爾天照大御神、高木神之命以、詔天宇受賣神、汝者雖有手弱女人、與伊牟迦布神自伊至布以音面勝神、故專汝往將問者、吾御子爲天降之道、誰如此而居、故問賜之時、答白、僕者國神名猨田毘古神也、所以出居者、聞天神御子天降坐故、仕奉御前而參向之侍、

〔古事記上〕木花之佐久夜毘賣參出白、妾姙身今臨產時、是天神之御子、私不可產故請、爾詔、○邇々藝命佐久夜毘賣、一宿哉姙、是非我子、必國神之子、爾答白、吾姙之子、若國神之子者、產不幸、若天神之御子者幸、○下略

〔古事記神武中〕故從其國○吉備上幸之時、乘龜甲爲釣乍打羽擧來人、遇于速吸門、爾喚歸問之、汝者誰也、答曰、僕者國神、

〔古事記傳十八〕國神とは、此土地の神と云意なり、當國人を國人、當里人を里人と云が如し、天神に對へて云、國神にはあらじ、さて人と云はずして神と云るは、猶神代の言のまゝなるか、將乘龜來るは凡人に非ず、實に神なる故か、下なる贄持之子など三人の名のりも、皆國人といへり、書紀にもかくぞある、さて此下に必其名を

告べきに、名の無きは脱たるなるべし、誰ぞと問給はんに、ただ國神とのみ申て止べきかは、

〔日本書紀三神武〕其年〇甲寅十月辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、至速吸之門、時有一漁人、乘艇而至、天皇招之、因問曰、汝誰也、對曰、臣是國神、名曰珍彥、

〔古事記中神武〕到吉野河之河尻時、作筌有取魚人、爾天神御子〇神武問、汝者誰也、答曰、僕者國神、名謂贄持之子、此者阿陀之鵜養之祖、従其地幸行者、生尾人自井出來、其井有光、爾問、汝者誰也、答曰、僕者國神、名謂井氷鹿、此者吉野首等祖也、即入其山之、亦遇生尾人、此人押分巖而出來、爾問、汝者誰也、答曰、僕者國神、名謂石押分之子、今聞天神御子幸行、故參向耳、此者吉野國巢之祖

〔新撰姓氏錄左京神別〕天神

藤原朝臣　出自津速魂命三世孫、天兒屋根命也、

地祇

弓削宿禰　出自天押穗根命爲洗御手時、水中化生神爾伎都麻呂也、

〔新撰姓氏錄右京神別〕天神

采女朝臣　石上朝臣同祖、神饒速日命六世孫、大水口宿禰之後也、

地祇

安曇宿禰　海神綿積豐玉彥神子、穗高見命之後也、

〔新撰姓氏錄山城國神別〕天神

今木連　神魂命五世孫、阿麻乃西乎乃命之後也、

地祇

石邊公　大物主命子、久斯比賀多命之後也、

〔新撰姓氏錄大和國神別〕天神

葛木忌寸　高御魂命五世孫、劔根命之後也、

地祇

大神朝臣　素佐能雄命六世孫、大國主命之後也、

〔新撰姓氏錄攝津國神別〕天神

委文連　角凝魂命男、伊佐布魂命之後也、

地祇

物忌直　椎根津彥命九世孫、矢代宿禰之後也、

〔新撰姓氏錄河內國神別〕天神

佐伯首　天押日命十一世孫、大伴室屋大連公之後也、

地祇

等禰直　椎根津彥命之後也

〔常陸風土記久慈郡〕郡東七里太田鄕、○中略自此以北薩都里、○中略東大山謂賀毗禮之高峰、卽有天神、名稱立速日男命、一名速經和氣命、本自天降、卽坐松澤松樹八俣之上、神祟甚嚴、

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓

大中臣、○中略天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮、如此久乃良波、天津神波、天磐門乎押披氐、天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐所聞食武、國津神波、高山之末、短山之末爾上坐氐、高山之伊穗理、短山之伊穗理乎撥別氐所聞食武、

〔延喜式九神名〕天神地祇總三千一百卅二座

社二千八百六十一處

前二百七十一座

〔日本書紀神武三〕神日本磐余彥天皇、○中略及年四十五歲、謂諸兄及子等曰、昔我天神高皇產靈尊、大日孁尊、擧此豐葦原瑞穗國、而授我天祖彥火瓊瓊杵尊、　戊午年九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巓、瞻望域中、時國見岳上、則有八十梟帥、又於女坂置女軍、男坂置男軍、○中略復有兄磯城軍、布滿於磐余邑、賊虜所據、皆是要害之地、故道路絕塞、無處可通、天皇惡之、是夜自祈而寢、夢有天神、訓之曰、宜取天香山社中土、以造天平瓮八十枚、幷造嚴瓮、而敬祭天神地祇、亦爲嚴呪詛、如此則虜自平伏、天皇祇承夢訓、依以將行、○中略於是天皇甚悅、乃以此埴、造作八十平瓮、天手抉八十枚、嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇、　四年○甲子二月甲申、詔曰、我皇祖之靈也、自天降鑒、光助朕躬、今諸虜已平、海內無事、可以郊祀天神、用申大孝者也、乃立靈畤於鳥見山中、其地號曰上小野榛原下小野榛原、用祭皇祖天神焉、

〔日本書紀崇神五〕十二年九月己丑、始校人民、更科調役、此謂男之弭調、女之手末調也、是以天神地祇共和享、而風雨順時、百穀用成、家給人足、天下大平矣、

〔日本書紀神功九〕九年○仲哀十月辛丑、從和珥津發之、○中略便到新羅、時隨船潮浪、遠逮國中、卽知天神地祇悉助歟、新羅王、○中略降於王船之前、因以叩頭之曰、○中略殊闕春秋之朝、忍廢梳鞭之貢、天神地祇共討焉、　四十七年○攝政四月、百濟王、使久氐、彌州流、莫古令朝貢、時新羅國調使、與久氐共詣、○中略時皇太后、○神功譽田別尊、○應神責新羅使者、因以祈天神曰、當遣誰人於百濟將檢事之虛實、當遣誰人於新羅將推問其罪、便天神誨之曰、令武內宿禰行議、因以千熊長彥爲使者、當如所願、於是遣千熊長彥于新羅、責以濫百濟之獻物、

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、

〔出雲風土記意宇郡〕安來鄉、○中略卽北海有毘賣埼、飛鳥淨御原宮御宇天皇○天武御代甲戌七月十三

日、語臣猪麻呂之女子、遙〇遙上恐脫遣字件埼、邂逅遇和爾所賊不切、〇切恐歸誤爾時父猪麻呂所賊女子斂毘賣埼上、〇中略郎搖訴云、天神千五百萬、地祇千五百萬、幷當國靜坐三百九十九社、及海若等、大神之和魂者靜、而荒魂者皆悉依給猪麻呂之所乞、

〔日本書紀天武二十九〕七年正月己卯、是春將祠天神地祇、而天下悉祓禊之、

〔日本書紀持統三十〕三年八月壬午、百官會集於神祇官、而奉宣天神地祇之事、　四年正月庚子、班幣於畿內天神地祇、及增神戶田地、　七月戊寅、班幣於天神地祇、

〔續日本紀文武一〕天之眞宗豐祖父天皇、〇中略高天原廣野姬天皇〇持統十一年立爲皇太子、　八月庚辰、詔曰、〇中略高天原爾事始、而遠天皇祖御世中今至麻氏爾、天皇御子之阿禮坐牟彌繼繼爾、大八嶋國將知次止、天都神乃御子隨母、天坐神之依之奉之隨、〇中略此乃食國天下乎調賜比平賜比、天下乃公民乎惠賜比撫賜奈牟止奈母隨神所思行佐久止詔天皇大命乎諸聞食止詔、

〔續日本紀聖武十〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略諸國天神地祇者、宜令長官致祭、

〔續日本紀聖武十五〕天平十五年五月癸卯、宴群臣於內裏、〇中略因御製歌曰、〇中略阿麻豆可未美麻乃彌己止及、登理母知氐、許能等與美岐遠、伊寸〇寸恐末誤多氐末都流、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字四年三月甲戌、詔曰、比來皇太后御體不豫、宜祭天神地祇、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜元年十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、改元寶龜、詔曰、〇中略此乃天日嗣高御座之業者、天坐神地坐祇乃相宇豆奈比奉、相扶奉事爾依氐志此座者平安御坐氐、天下者所知物爾在良之止奈母所念行須、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜八年二月戊子、遣唐使拜天神地祇於春日山下、去年風波不調、不得渡海、使人亦復頻以相替、至是副使少野朝臣石根重修祭禮也、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年二月庚午朔、廢務、爲遣唐使祠天神地祇於北野也、

〔萬葉集三挽歌〕天平元年己巳、攝津國班田史生丈部龍麻呂自經死之時、判官大伴宿禰三中作歌、
天雲之向伏國、武士登所云人者、〇中略母父爾妻爾子等爾語而、立西日從、帶乳根乃母命者、〇中略平間幸坐與、天地乃神祇乞禱、何在歲月日香、茵花香君之牛留鳥名津匝來與、立居而待監人者、〇中略何方爾念坐可、欝蟬乃惜此世乎、露霜置而往監、時爾不相之天、

〔萬葉集四相聞〕二年〇神龜乙丑春三月、幸三香原離宮之時、得娘子作歌、　笠朝臣金村
三香之原、客之屋取爾、珠桙乃道能去相爾、天雲之外耳見管、言將問緣乃無者、情耳咽乍有爾、天地神祇辭因而、敷細乃衣手易而、自妻跡憑有今夜、秋夜之百夜乃長有與乞〇中略宿鴨、

五年〇神龜戊辰、太宰少貳石川足人朝臣遷任、餞于筑前國蘆城驛家歌、
天地之神毛助與、草枕羈行君之、至家左右、

大伴宿禰駿河麻呂歌
不念乎、思常云者、天地之神祇毛知寒、邑禮左變、

〔萬葉集五雜歌〕好去好來歌
神代欲理云傳介良久、〇中略唐能遠境爾都加播佐禮麻加利伊麻勢、宇奈原能邊爾母奧爾母、神豆麻利、宇志播吉伊麻須諸能大御神等、船舳爾道引麻遠志、天地能大御神等、倭大國靈久堅能阿麻能見虛喩阿麻賀氣利見渡多麻比、〇中略都々美無久佐伎久伊麻志氐、速歸坐勢、

戀男子名古日歌
世人之貴慕、七種之寶毛我波、何爲、〇中略天神阿布藝許比乃美、地祇布之氐額拜、可加良受毛可賀利毛神乃末爾麻仁等、立阿射里我乞能米登須臾毛、余家久波奈之爾、漸々可多知久都保里、〇中略手爾持流、安我古登婆之都、世間之道、

〔萬葉集六雜歌〕神龜二年乙丑夏五月、幸于芳野離宮時、笠朝臣金村作歌、

足引之、御山毛清、落多藝都、芳野河之、河瀨之、淨乎見者、〇中略玉葛、絶事無、萬代爾、如是霜願跡、天地之、神乎曾禱、恐有等毛、

〔萬葉集十三相聞〕

蜻嶋、倭之國者、神柄跡、言擧不爲國、雖然、吾者事上爲、天地之、神毛甚、吾念、心不知哉、〇中略犬馬鏡、正目君乎、相見天者社、吾戀八鬼目、

菅根之、根毛一伏三向凝呂爾、吾念有、妹爾緣而者、〇中略天地之、神祇乎曾、吾祈、甚毛爲便無見、

反歌

乾地乃、神乎禱而、吾戀、公似必、不相在目八毛、

〔萬葉集十三問答〕

何爲而、戀止物序、天地乃、神乎禱迹、吾八思益、

天地之、神尾母吾者、禱而寸、戀云物者、都不止來、

〔萬葉集十三挽歌〕

欲見者、雲井所見、愛、十羽能松原、少子等、率和出將見、琴酒者、國丹放嘗、別避者、宅仁離南、乾坤之、神志恨之、草枕、此羈之氣爾、妻應離哉、

〔萬葉集十五〕遣新羅使人等悲別贈答、及海路慟情陳思、幷當所誦詠之古謌、〇中略

安米都知能、可未乎許比都々、安禮麻多武、波夜伎萬世伎美、麻多婆久流思母、

右一首娘子

〔萬葉集十五挽歌〕

安米都知能、可未奈伎毛能爾、安良婆許曾、安我毛布伊毛爾、安波受思仁世米、

右中臣朝臣宅守

〔萬葉集十八〕賀陸奥國出金詔書歌

葦原能、美豆保國乎、安麻久太利、之良志賣之家流、須賣呂伎能、神乃美許等能、御代可佐禰、(中略)鷄鳴、東國能、美知能久乃、小田在山爾、金有等、麻宇之多麻敝禮、御心乎、安吉良米多麻比、天地乃、神安比宇豆奈比、皇御祖乃、御靈多須氣氐、遠代爾、可可里之許登乎、朕御世爾、安良波之氐安禮婆、御食國波、左可延牟物能等、可牟奈我良、於毛保之賣之氐、(中略)

天平感寶元年(天平勝寶元年)五月十二日、於越中國守館、大伴宿禰家持作之、

教喩史生尾張少咋歌

於保奈牟知、須久奈比古奈野、神代欲里、伊比都藝家良之、(中略)天地能、可未許等余勢天、春花能、佐可里裒安良多之家牟、等吉能沙加利曾、(中略)

右五月十五日、(天平勝寶元年)守(中略)大伴宿禰家持作之

〔萬葉集十九〕悲傷死妻歌

天地之、神者無可禮也、愛、吾妻離流、光神、鳴波多嬬、携手、共將有等、念之爾、情違奴、(中略)

右傳誦遊行女婦蒲生是也

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

阿米都之乃、以都例乃可美乎、以乃良波加、有都久之波々爾、麻多己等刀波牟、

右一首埴生郡大伴部與佐

阿米都之乃、可未爾奴佐於伎、伊波比都々、伊麻世和我世奈、阿禮乎之毛波婆、

右昔年防人歌矣

二月、(天平寶字二年)於式部大輔中臣清麻呂朝臣之宅宴歌、

和我勢故之、可久志伎許散婆、安米都知乃、可未乎許比能美、奈我久等曾於毛布、

別天神

天神七代 地神五代

右一首主人中臣清麻呂朝臣

〔萬葉集一雜歌〕高市連黒人感傷近江舊堵作歌

樂浪乃、國都美神乃、浦佐備而、荒有京、見者悲毛、

〔萬葉集十七〕大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中守、卽取七月赴任所、於時姑大伴坂上郎女贈家持歌〈中略〉更贈越中國歌、

美知乃奈加、久爾都美可未波、多妣由伎母、之思良奴伎美乎、米具美多麻波奈、

〔源氏物語榊〕かけまくもかしこきおまへにとて、ゆふにつけて、なる神だにこそ、

やしまもる國つみかみも心あらばあかぬわかれの中をことわれ、思ひ給るにあかぬこゝちし侍かなとあり、いとさわがしき程なれど御かへりあり、宮の御をば女別當してかゝせ給へり、

國つ神そらにことわる中ならばなほざりごとをまづやたゞさん

〔古事記上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、〈訓高下天云阿麻、下效此、〉次高御產巢日神、次神產巢日神、此三柱神者、並獨神成坐而隱身也、次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用弊琉之時、〈流字以上十字以音、〉如葦牙因萌騰之物而成神名、宇麻志阿斯訶備比古遲神、〈此神名以音、〉次天之常立神、〈訓常云登許、訓立云多知、〉此二柱神、亦獨神成坐而隱身也、

上件五柱神者別天神、

〔皇代記〕天神七代

國常立尊

國狹槌尊

豐斟渟尊〈已上三代陽神也、○中略、〉

泥土煮尊〈陽神〉　沙土瓊尊〈陰神〉

大戸之道尊（陽神）　大戸間邊尊（陰神）
面垂尊（陽神）　惶根尊（陰神○中略）
伊弉諾尊（陽神）　伊弉冉尊（陰神）

地神五代

天照大神（伊弉諾伊弉冉尊子也、卽御二於天一、）
正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊（天照大神子也、卽還二於天一、）
已上二代尙御二天上一、仍不レ知二治世年紀一矣
天津彥彥火瓊瓊杵尊（正哉吾勝勝早日天忍穗耳尊太子○中略）初天二降於日向襲之高千穗峰一矣、（○中略）
彥火火出見尊（天津彥彥火瓊瓊杵尊第二子也○中略）
彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊（彥火火出見尊太子也○下略、又見二皇胤紹運錄、拾芥抄一、）

〔釋日本紀一開題〕問分二神代上下一卷一其意如何、答、師說、第一卷載二天神七代之事一、故曰二神代上一、第二卷載二地神五代之事一、故曰二神代下一也、

〔水鏡序〕まづ神の代七代、そのゝち伊勢大神宮の御世よりうのかやふきあはせずのみことまで五代、あはせて十二代のことは、ことばにあらはし申さんにつけて、はゞかり多く侍るべし、

〔源平盛衰記三十〕大神宮行幸附廣嗣謀叛幷玄昉僧正事
伊勢大神宮ト申ハ、天神第七代伊弉諾伊弉冉尊ノ御子、地神最初ノ御神也、

〔源平盛衰記三十二〕還俗人卽位例事
我朝ニハ神武天皇ハ、地神五代ノ御讓ヲ稟御坐シヨリ以來、故高倉院ニ至ラセ給迄八十代（○下略）

〔古今著聞集一神祇〕天地いまだわかれず、渾沌雞の子の如し、そのすめるは、たなびきて天となり、濁れるは、沈み滯りて地となる、時に天地の中にひとつのものあり、かたち葦牙の如し、すなはち化

して神となる、國常立尊これなり、夫よりこのかた、天神七代地神五代なり、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊の御子、神武天皇よりぞ人代とはなりにける、

〔承久軍物語一〕夫我朝は神國として、天神七代地神五代とあひつゞかせ給ひ、かんやまといはれひこのみことに御位をゆづりたまふ、

〔新後撰和歌集神祇十〕百首歌めされしついでに神祇　太上天皇○後宇多

ちはやぶる七代五代の神世よりわがあし原にあとをたれにき

〔古事記傳三〕後世に此七代○七代神世を天神七代と申し、後ノ五代を地神五代と申すなるは、いかなるをこの者の云初つることにか、更に事の由をも考へず、たゞに強て天と地とに配(アテ)むとての漫說なるを、世に普く云なれて、そのいみじき非なることを辨へたる人もをさ〳〵聞えねば、いかにぞや、先此七代を天神と申せること、古書に見えたることとなし、只姓氏錄に、角凝魂命と申すは、此七代の中の角杙神なるべく思はるゝに、其後胤を天神部に收られたれども、此は正しく角杙神とあるにも非ず、名の異なれば、たゞ名に就て、高御魂神などの例として、天神ノ部には入られたる物なるべければ、證とすばかりのことにも非ずかし、既に天之常立神の下に、上件五柱を天神と申すよしことわりたれば、○前條別天神之下可二參看一其次々は天神と申すに非ること明し、天位を知看を天神と申すなど云說は、近世の漢意の例の私言なり、天に坐神をこそ天神とは申すなれ、然るに伊邪那岐伊邪那美神の御事を記せるさまを考るにも、天に坐ス神とは見えず、此地に坐神とこそ見えたれ、然ればかにかくに此七代は、並此國土に就坐る神たちにぞ有ける、然はあれども、又正しく是を地神と稱せることも物に見えざるなり、地神とは、後ノ五代に至て、此國土なる神を天神に對て申す稱にぞありける、さて又地神五代と申すも、甚く違へることなり、まづ天照大御神は高天原を知看て、今も眼當(マノアタリ)天に坐ませば、天神なること更なり、次

日神 月神

に天之忍穗耳命、日子番能邇邇藝命も、高天原に成坐つれば天神なり、故是以穗穗手見命より以下を、天神御子と申すなり、さて此穗穗手見命、鵜葺草葺不合命は、此國土に生坐て、此國土に坐ましゝかば、天神とは申さず、然れども又此を地神と申せることは、更に物に見えず、國土には生坐れども、天神御正統に坐が故に、皇孫とも、又漢文には天孫とも申すなり、かゝれば天神七代地神五代と申すは、返々當らぬ妄稱と知るべし、

〔古事記上〕是以伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在祁理、此二字以音故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原、而禊祓也、○中略於是洗左御目時所成神名、天照大御神、次洗右御目時、所成神名、月讀命、次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命、須佐二字以音○中略此時伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生生子而、於生終得三貴子、卽其御頸珠之玉緖母由良邇此四字以音、下效之、取由良迦志而、賜天照大御神而詔之、汝命者所知高天原矣、事依而賜也、○中略次詔月讀命、汝命者所知夜之食國矣、事依也、訓食云袁須次詔建速須佐之男命、汝命者所知海原矣、事依也、

〔日本書紀一神代〕既而伊弉諾尊、伊弉冉尊、共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是共生日神、號大日孁貴、大日孁貴、此云於保比屢咩能武智、孁音力丁反、一書云、天照大神、一書云、天照大日孁尊、此子光華明彩、照徹於六合之內、故二神喜曰、吾息雖多、未有若此靈異之兒、不宜久留此國、自當早送于天、而授以天上之事、是時天地相去未遠、故以天柱擧於天上也、次生月神、一書云、月弓尊、月夜見尊、月讀尊、其光彩亞日、可以配日而治、故亦送之于天、

〔古事記傳六〕天照大神と申す御名を、一書曰と記し給へるは、ひがことなり、亦名とあるべきことなり、其故は、此より次々にはいづこにもたゞ、天照大神とのみ書たまへれば、一書の說にはあらず、若一書の說とせば、前後相違へるをや、又師說に大日女貴の、女は咩に通ひて、持の約れるなり、月夜見の見と對へて知るべし、貴字はかなひ難しとあり、是によりて宣長今思ふに、書

紀の訓注に、於保比屢咩能武智とあるは、本はオホヒルムチなりしを、後人さかしらに咩能の二字をば加へたるにや、此外何れにも、ひるめの命ひるめの神などゝのみありて、ひるめのむちと云は見えず、されば大ひるむちと申せば、ムチ卽メに當れり、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊曰、吾欲生御宙之珍子、乃以左手持白銅鏡、則有化出之神、是謂大日孁尊、右手持白銅鏡、則有化出之神、是謂月弓尊、又廻首顧眄之間、則有化神、是謂素戔嗚尊、卽大日孁尊及月弓尊、並是質性明麗、故使照臨天地、素戔嗚尊是性好殘害、故令下治根國、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊勅任三子曰、天照大神者、可以御高天之原也、月夜見尊者、可以配日而知天事也、素戔嗚尊者、可以御滄海之原也、既而天照大神在於天上曰、聞葦原中國有保食神、宜爾月夜見尊就候之、月夜見尊受勅而降、已到于保食神許、保食神乃廻首嚮國、則自口出飯、又嚮海則鰭廣鰭狹亦自口出、又嚮山則毛麁毛柔亦自口出、夫品物悉備、貯之百机而饗之、是時月夜見尊忿然作色曰、穢矣鄙矣、寧可以口吐之物、敢養我乎、廼拔劒擊殺、然後復命、具言其事、時天照大神怒甚之曰、汝是惡神、不須相見、乃與月夜見尊、一日一夜隔離而住、

〔日本書紀神武三〕神日本磐余彥天皇、〇中略及年四十五歲、謂諸兄及子等曰、昔我天神高皇産靈尊、大日孁尊、擧此豐葦原瑞穗國、而授我天祖彥火瓊瓊杵尊、〇下略

〔日本書紀神代一〕一書曰、日神尊、以天垣田爲御田、

〔古事記中神武〕於是與登美毘古戰之時、五瀨命於御手負登美毘古之痛矢串、故爾詔、吾者爲日神之御子、向日而戰不良、故負賤奴之痛手、自今者行廻而背負日以擊、〇下略、又見日本書紀、

〔日本書紀用明二十一〕橘豐日天皇、〇中略十四年〇中略九月戊午、天皇卽天皇位、〇中略壬申、詔曰云云、以酢香手姬皇女、拜伊勢神宮、奉日神祀、〇是皇女、自此天皇時、逮于炊屋姬天皇(推古)之世、奉日神祀、(中略)或本云、三十七年間、奉日神祀、自退而薨、元年正月壬子朔、〇中略葛城直磐村女廣子、生一男一女、〇中略女曰酢香手姬皇女、歷三代以奉日神、

〔日本書紀十五顯宗〕三年四月庚申、日神著人、謂阿閉臣事代曰、以磐余田、獻我祖高皇產靈、事代便奏、依神乞、獻田十四町、對馬下縣直侍祠、

〔延喜式十神名〕對馬嶋下縣郡阿麻氐留神社

〔狹衣四下〕あまてる神の御けはひ、いちじるくあらはれ出たまひて、さた〳〵とのたまはする事ども有けり、〈略〉中天てる神のほのめかしたまひけん事も、あるやうありける事にこそとおぼしやる、

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事

天照坐皇大神〈所稱天照意保比流賣命〉

〔萬葉集二挽歌〕日並皇子尊〈天武太子草壁〉殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

天地之、初時之、久堅之、天河原爾、八百萬、千萬神之、神集、集坐而、神分、分之時爾、天照、日女之命、〈一云、指上日女之命〉天乎波、所知食登、葦原乃、水穗之國乎、天地之、依相之極、所知行、神之命等、天雲之、八重搔別而、神下、坐奉之、〈略〉下

〔萬葉集十八〕七夕歌

安麻泥良須、可未能御代欲里、夜洲能河波、奈加爾敝太氐氐、牟可比太知、蘇泥布利可波之、伊吉能乎爾、奈氣加須古良、〈略〉中

右七月七日、仰見天漢、大伴宿禰家持作之、

〔神樂歌〕晝目歌

いかばかりよきわざしてかあめなるやひるめの神をしばしとゞめん

〔古今和歌集二十大歌所〕ひるめのうた

さゝのくまひのくま川にこまとめてしばし水かへかげをだに見ん

〔日本書紀十五顯宗〕三年二月丁巳朔、阿閉臣事代、銜命出使于任那、於是月神著人謂之曰、我祖高皇產靈、有預鎔造天地之功、宜以民地奉我月神、若依請獻我、當福慶、事代由是還京具奏、奉以歌荒樔田、壹岐縣主先祖、押見宿禰侍祠、

〔延喜式十神名〕壹岐嶋壹岐郡月讀神社（名神大）

〔延喜式九神名〕山城國葛野郡葛野坐月讀神社（名神大、月次新嘗、）

綴喜郡樺井月神社（大、月次新嘗、）

月讀神社（大、月次新嘗、）

伊勢國度會郡月讀宮二座（荒御魂命一座、並大、月次新嘗、）

月夜見神社

〔延喜式十神名〕丹波國桑田郡小川月神社（名神大）

〔萬葉集四相聞〕湯原王歌

月讀之、光二來益、足疾乃、山乎隔而、不遠國、

和歌一首　不審作者

月讀之、光者清、雖照有、惑情、不堪念、

〔萬葉集七雜歌〕詠月

海原之、道遠鴨、月讀、明少、夜者更下乍、

〔萬葉集十三〕雜歌

天橋文、長雲鴨、高山文、高雲鴨、月夜見乃、持越有水、伊取來而、公奉而、越得之早母、

〔萬葉集十五〕遣新羅使人等悲別贈答、及海路慟情陳思、并當所誦詠之古歌、

月余美能、比可里乎伎欲美、神嶋乃、伊素末乃宇良由、船出須和禮波、

右〇中略　乘船入海路上作歌

從長門浦船出之夜仰觀月光作歌

風神

風神

月余美乃、比可里乎伎欲美、由布奈藝爾、加古能古惠欲妣、宇良末許具可母、

〔萬葉集雜歌六〕湯原王月歌

天爾坐、月讀壯子、幣者將爲、今夜乃長者、五百夜繼許會、

〔萬葉集譬喩歌七〕寄月

三空往、月讀壯士、夕不去、目庭雖見、因縁毛無、

〔日本書紀神代二〕一云、二神(○武甕槌神、經津主神、)遂誅邪神、及草木石類、皆已平了、其所不服者、唯星神香香背男耳、故加遣倭文神建葉槌命者則服、

一書曰、天神遣經津主神、武甕槌神、使平定葦原中國、時二神(○二神名、見上文、)曰、天有惡神、名曰天津甕星、亦名天香香背男、請先誅此神、

〔古事記上〕既生國竟(○伊邪那岐伊邪那美二神、)更生神、故生神名、(○中略)次生風神、名志那都比古神、(此神名以音)

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、然後伊弉諾尊曰、我所生之國、唯有朝霧、而薰滿之哉、乃吹撥之氣化爲神、號曰級長戶邊命、亦曰級長津彥命、是風神也、

〔延喜式祝詞八〕六月晦大祓

科戶之風乃、天之八重雲乎吹放事之如久、(○下略)

〔古事記傳五〕師(○賀茂眞淵)説に、龍田風神祭祝詞(○下に見ゆ)に、此神は、比古神比賣神ならび坐こと見えたるければ、古事記日本紀、たがひに一神おちたるべしと云れき、

〔日本書紀天武二十九〕四年四月癸未、遣小紫美濃王、小錦下佐伯連廣足、祠風神于龍田立野、

〔延喜式祝詞八〕龍田風神祭

龍田爾稱辭竟奉皇神乃前爾白久、志貴嶋爾大八嶋國知志皇御孫命乃、遠御膳乃長御膳止、赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始氐、天下乃公民乃作物乎、草乃片葉爾至万氐不成、一年二年爾不在、歲眞尼久

雨師

傷故𪜈、百能物知人等乃卜事𪜈出牟神乃御心者、此神止白止負賜支、〇中略是以皇御孫命大御夢𪜈悟奉久、天下乃公民乃作作物乎、惡風荒水𪜈相都都不成傷波、我御名者天乃御柱乃命、國乃御柱乃命止御名者悟奉氐、〇中略吾宮者、朝日乃日向處、夕日乃日隱處乃、龍田能立野𪜈小野𪜈吾宮波定奉氐、吾前乎稱辭竟奉者、天下乃公民乃作作物者、五穀乎始氐、草乃片葉𪜈至万氐、成幸閉奉牟止悟奉支、〇下略

〔延喜式神名九〕大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座並名神大、月次新嘗、

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年三月廿九日壬子晦、授伊豫國正六位上風伯神從五位下、

〔三代實錄陽成四十四〕元慶七年十二月廿八日庚申、授安藝國正六位上風伯神從五位下、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授大和國正四位下丹生雨師神從三位、

〔延喜式神名九〕大和國吉野郡丹生川上神社名神大、月次新嘗、

〔類聚三代格一〕太政官符

應禁制大和國丹生川上雨師神社界地事

四至東限塩匂、南限大山峯、西限板波瀧、北限猪鼻瀧、

右得神祇官解偁、大和神主大和人成解狀偁、別社丹生川上雨師神祝禰宜等解狀偁、謹撿名神本紀云、不聞人聲之深山吉野丹生川上、立我宮柱以敬祀者、爲天下降甘雨止霖雨者、〇中略

寛平七年六月廿六日

〔新葉和歌集雜十六〕芳野の行宮にて、五月雨晴まなかりける比、雨師の社へ止雨の奉幣使などたてられける比、思食つゞけさせ給ける、　後醍醐天皇御製

この里は丹生の川上程ちかしいのらばはれよ五月雨のそら

〔萬葉集相聞二〕天皇〇天武賜藤原夫人御歌

吾里爾、大雪落有、大原乃、古爾之鄕爾、落卷者後、

雷神

藤原夫人奉和歌
吾岡之於可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命拔所御佩之十拳劍、斬其子迦具土神之頸、爾著其御刀前之血、走就湯津石村所成神名、(中略)次集御刀之手上血、自手俣漏出所成神名、(訓漏云久伎)闇淤加美神、(淤以下三字以音、下效此)

〔日本書紀一神代〕一書曰、伊弉諾尊拔劍、斬軻遇突智為三段、其一段是為雷神、一段是為大山祇神、一段是為高龗、

〔古事記傳五〕闇淤加美神、(中略)此神は龍にて、雨を物する神なり、書紀に高龗と云もあり、そは山上なる龍神、この闇淤加美は谷なる龍神なり、

〔日本書紀一神代〕一書曰、伊弉諾尊拔劍、斬軻遇突智為三段、其一段是為雷神、

〔古事記上〕於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黃泉國、爾自殿縢戸出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟、故可還、爾伊邪那美命答白、悔哉不速來、吾者為黃泉戸喫、然愛我那勢命、(那勢二字以音、下效此)入來坐之事恐、故欲還、且具與黃泉神相論、莫視我、如此白而還入其殿內之間、甚久難待、故刺左之御美豆良、(三字以音、下效此)湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加禮斗呂呂岐氐、(此十字以音)於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黑雷居、於陰者拆雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、并八雷神成居、

〔日本書紀一神代〕一書曰、伊弉諾尊欲見其妹、乃到殯斂之處、是時伊弉冉尊猶如生平出迎共語、已而謂伊弉諾尊曰、吾夫君尊請勿視吾矣、言訖忽然不見、于時闇也、伊弉諾尊乃擧一片之火而視之、時伊弉冉尊脹滿太高、上有八色雷公、伊弉諾尊驚而走還、是時雷等皆起追來、時道邊有大桃樹、故伊弉諾尊隱其樹下、因採其實以擲雷者、雷等皆退走矣、此用桃避鬼之緣也、時伊弉諾尊乃投其杖曰、自此以還、雷不敢來、是謂岐神、此本號曰來名戸之祖神焉、所謂八雷者、在首曰大雷、在胸曰火雷、在腹曰土雷、在

水神

背曰稚雷、在尻曰黑雷、在手曰山雷、在足上曰野雷、在陰上曰裂雷、

〔日本書紀二十八天武〕元年七月辛亥、先是軍金綱井之時、高市郡(○大和)大領高市縣主許梅、儵忽口閉而不能言也、三日之後、方著神以言、(○中略)又牟狹社所居名生雷神者也、(○下略)

〔延喜式九神名〕主水司坐神一座鳴雷神社

山城國乙訓郡乙訓坐火雷神社(名神大、月次新嘗、)

大和國宇智郡火雷神社

高市郡氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社二座

和泉國大鳥郡火雷(○雷或作電、)神社

〔延喜式十神名〕上野國那波郡火雷神社

〔萬葉集十四東歌〕伊香保禰呂爾、可未奈那里曾禰、和我倍爾波、由惠波奈家杼母、兒良爾與里氐曾、

右(○中略)上野國歌

〔伊勢物語上〕むかし男ありけり、女のえうまじかりけるを、年をへてよばひわたりけるを、からうじて盜み出て、いとくらきにきけり、(○中略)かみさへいといみじうなり、雨もいたう降ければ、(○下略)

〔後撰和歌集十四戀〕女のをとこをいとひて、さすがにいかゞおぼえけんいへりける、

よみ人しらず

ちはやぶるかみにもわらぬわが中の雲ゐはるかになりもゆくかな

〔拾遺和歌集十九雜戀〕かみいたくなり侍けるあしたに、せんねうでんの女御のもとにつかはしける、

天暦御製(○村上)

きみをのみおもひやりつゝかみよりもこゝろのそらになりしよひかな

〔倭名類聚抄二鬼神〕水神　左傳注云、魍魎、(日本紀私記云、水神美豆波、)水神也、

大神

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉冉尊、爲軻遇突智所焦而終矣、其且終之間、臥生土神埴山姬、及水神罔象女、

一書曰、伊弉冉尊、生火產靈時、爲子所焦而神退矣、中略○其且神退之時、則生水神罔象女、及土神埴山姬、又生天吉葛、

一書曰、伊弉冉尊、且生火神軻遇突智之時、悶熱懊惱、因爲吐、此化爲神、名曰金山彥、次小便化爲神、名曰罔象女、次大便化爲神、名曰埴山媛、

〔古事記上〕既生國竟○伊邪那岐伊邪那美二神更生神、故生神名、中略○次生火之夜藝速男神、夜藝二字以音亦名謂火之炫毘古神、亦名謂火之迦具土神、迦具二字以音因生此子、美蕃登此三字以音見炙而病臥在、中略○次於尿成神名、彌都波能賣神、

〔延喜式八祝詞〕鎭火祭

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氐、中略○麻奈弟子爾、火結神生給氐、美保止被燒氐石隱坐氐、中略○與美津枚坂爾至坐氐所思食久、吾名妹命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氐來奴止宣氐、返坐氐更生子、水神、匏、川菜、埴山姬、四種物乎生給氐、此能心惡子乃心荒比留波、水神、匏、埴山姬、川菜乎持氐鎭奉止事教悟給支、

〔日本書紀神武三〕戊午年九月戊辰、勅道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、用汝爲齋主、授以嚴媛之號、而名其所置埴瓮爲嚴瓮、又火名爲嚴香來雷、水名爲嚴罔象女、

〔古事記上〕既生國竟○伊邪那岐伊邪那美二神更生神、故生神名、中略○次生火之夜藝速男神、夜藝二字以音亦名謂火之炫毘古神、亦名謂火之迦具土神、迦具二字以音因生此子、美蕃登此三字以音見炙而病臥在、中略○故伊邪那美神者、因生火神、遂神避坐也、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾伊弉冉尊、中略○生火神軻遇突智時、伊弉冉尊、爲軻遇突智所焦而終矣、

獨化神

一書曰、伊弉冉尊生火產靈時、爲子所焦而神退矣、

〔延喜式八祝詞〕鎭火祭

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氐、國能八十國、嶋能八十嶋乎生給比、八百萬神等乎生給比、麻奈弟子爾火結神生給氐、美保止被燒氐、石隱坐氐、夜七日、晝七日、吾奈見給比曾、吾奈妹乃命止申給支、此七日波不足氐隱坐事、奇止見所行須時、火乎生給氐、御保止乎所燒坐支、如是時爾、吾名妹乃命能、吾乎見給布奈止申乎、吾乎見阿波多志給比津止申給氐、吾名妹能命波、上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知止申氐石隱給氐、與美津枚坂爾至坐氐所思食久、吾名妹命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氐來奴止宣氐、返坐氐更生子、水神、匏、川菜、埴山姬、四種物乎生給氐、此能心惡子乃心荒比曾波、水神、匏、埴山姬、川菜乎持氐、鎭奉禮止事教悟給支、

〔日本書紀三神武〕戊午年九月戊辰、勅道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、用汝爲齋主、授以嚴媛之號、而名其所置埴瓮爲嚴瓮、又火名爲嚴香來雷、

〔延喜式九神名〕伊豆國田方郡火牟須比命神社

〔延喜式十神名〕紀伊國名草郡香都知神社

〔詠百寮和歌跋〕抑此百首和歌を、（中略）先年火神にとられ侍る間、無念至極さに、煙の跡に殘り散ける燒はたくひ、灰はこりをかき集め侍るなるべし、

〔古事記上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、（訓高下天云阿麻、下效此、）次高御產巢日神、次神產巢日神、此三柱神者、並獨神成坐而隱身也、次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣琉之時、（琉字以上十字以音、）如葦牙因萌騰之物而成神名、宇麻志阿斯訶備比古遲神、（此神名以音、）次天之常立神、（訓常云登許、訓立云多知、）此二柱神亦獨神成坐而隱身也、

上件五柱神者別天神

〔日本書紀神代一〕開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、于時天地之中生一物、狀如葦牙、便化爲神、號國常立尊、次國狹槌尊、次豐斟渟尊、凡三神矣、乾道獨化、所以成此純男、

男女耦生神

〔日本書紀神代一〕一書曰、男女耦生之神、先有埿土煑尊、沙土煑尊、次有角樴尊、活樴尊、次有面足尊、惶根尊、次有伊弉諾尊、伊弉冉尊、

〔釋日本紀述義五〕私記曰、耦生、謂男女共相耦生也、非謂夫婦耦合而生息也、

修造天地神

〔日本書紀顯宗十五〕三年二月丁巳朔、阿閉臣事代、銜命出使于任那、於是月神著人謂之曰、我祖高皇產靈、有預鎔造天地之功、宜以民地奉我月神、若依請獻、我當福慶、事代由是還京具奏、奉以歌荒樔田、四月庚申、日神著人、謂阿閉臣事代曰、以磐余田獻我祖高皇產靈、事代便奏、依神乞獻田十四町、

〔古事記上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、訓高下天云阿麻、下效此、次高御產巢日神、次神產巢日神、此三柱神者、並獨神成坐而隱身也、

〔古事記序〕乾坤初分、參神〇天之御中主神、高御產巢日神、神產巢日神、作造化之首、陰陽此開、二靈爲群品之祖、

むすびの神

〔倭名類聚抄二鬼神〕產靈　日本紀云、產靈和名無須比乃加美

〔新撰字鏡示〕祇方止反上、以祇紀二同會也、字牟須比万豆利、

〔奧儀抄中之下〕よろづの物につかさどれる神おはす、〇中略むすぶの神はうぶの神なり、產靈とかけり、

〔日本書紀神代一〕一書曰、〇中略又曰、高天原所生神名、曰天御中主尊、次高皇產靈尊、次神皇產靈尊、皇產靈、此云美武須毗、

〔古事記上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、訓高下天云阿麻、下效此、次高御產巢日神、次神產巢日神、

〔古事記傳三〕產巢日は、字は皆借字にて、產巢は生なり、其は男子女子、又苔の牟須萬葉に、草武佐などもあり、

など云牟須にて、物の成出るを云、日は書紀に產靈と書れたる靈字よく當れり、凡て物の靈異なるを比(ヒ)と云、高天原にまします天照大御神を、此地より瞻望奉りて日(ヒ)と申すも、天地間に比類もなく、最靈異にますが故の御名なり、○中略されば產靈とは、凡て物を生成す事の靈異なる神靈を申すなり、

〔狹衣二下〕いとかくしも造りおききこえさせけん、むすぶの神さへうらめしければ、○下略

〔狹衣三中〕女宮も限りなくあでなる御心といへども、前の世よりむすぶの神のしおきたまへる御契りなればにや、輕々しき御名を流したまへる、

〔源平盛衰記十九〕文覺發心附東歸節女事

親ノ爲ニハ去ヌ孝養ヲモスル習也、御命ニ代リ奉ラン、結(ムスブ)ノ神モ哀ト思召トテ、口ニハ甲斐々々シク云ケレ共、渡○渡邊ガ事ヲ思ヒ出ツヽ、目ニハ淚ヲコボシケリ、○渡妻袈裟

〔十六夜日記〕過行道に目に立社あり、人にとへば、むすぶの神ときこゆるといへば、

まもれたゞちぎりむすぶの神ならばとけぬうらみに我まよはさで

〔空穗物語樓の上上〕女のはかまのこしに、赤き薄やうに、

人しれぬむすぶの神をしるべにていかゞすべきとなげく下紐

〔元輔集〕たかときが子の、加茂の祭の日、はかまぎし侍りしに、

ちとせとはわれならねどもゆふだすきむすぶの神もいのりかくらん

〔拾遺和歌集十九雜戀〕題しらず　よみ人しらず

君見ればむすぶの神ぞうらめしきつれなき人をなにつくりけん

〔詞花和歌集七戀〕題しらず　能因法師

心さへむすぶの神やつくりけんとくるけしきも見えぬ君かな

產生國土神

〔夫木和歌抄 三十四神祇〕仁安二年八月經盛卿家歌合　藤原伊行
とけやらぬ人の心はつらからでむすぶの神をうらみつるかな

〔箋註倭名類聚抄 一天地〕无須比乃加美、（○中略）後爲呼无須夫乃加美、（○中略）按、拾遺集雜戀云、无須夫乃加美、然其義則不誤、淺人遂謂結神、以爲漢俗所謂月下老人之類、見空物語樓上卷、後俗多依此義、

〔古事記 上〕於是伊邪那岐命先言阿那邇夜志愛袁登賣袁、後妹伊邪那美命言阿那邇夜志愛袁登古袁、如此言竟而御合生子、淡道之穗之狹別嶋、（訓別云和氣、下效此、）次生伊豫之二名嶋、此嶋者身一而有面四、毎面有名、故伊豫國謂愛上比賣、（此三字以音、下效此也、）讚岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣、（此四字以音、）土佐國謂建依別、次生隱伎之三子嶋、亦名天之忍許呂別、（許呂二字以音、）次生筑紫嶋、此嶋亦身一而有面四、毎面有名、故筑紫國謂白日別、豐國謂豐日別、肥國謂建日向日豐久士比泥別、（自久至泥以音、）熊曾國謂建日別、（曾字以音、）次生伊伎嶋、亦名謂天比登都柱、（自比至都以音、訓天如天、）次生津嶋、亦名謂天之狹手依比賣、次生佐度嶋、次生大倭豐秋津嶋、亦名謂天御虛空豐秋津根別、故因此八嶋先所生、謂大八嶋國、然後還坐之時、生吉備兒嶋、亦名謂建日方別、次生小豆嶋、亦名謂大野手上比賣、次生大嶋、亦名謂大多麻上流別、（自多至流以音、）次生女嶋、亦名謂天一根、（訓天如天、）次生知訶嶋、亦名謂天之忍男、次生兩兒嶋、亦名謂天兩屋、（自吉備兒嶋至天兩屋嶋并六嶋、）

〔日本書紀 一神代〕伊弉諾尊、伊弉冉尊、（○中略）爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、故名之曰淡路洲、廼生大日本豐秋津洲、次生伊豫二名洲、次生筑紫洲、次雙生隱岐洲與佐度洲、世人或有雙生者象此也、次生越洲、次生大洲、次生吉備子洲、由是始起大八洲國之號焉、卽對馬嶋、壹岐嶋、及處處小嶋、皆是潮沫凝成者矣、亦曰水沫凝而成也、

一書曰、天神謂伊弉諾尊伊弉冉尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩（しらす）之、廼賜天瓊戈、於是二神、（○中略）同宮共住而生兒、號大日本豐秋津洲、次淡路洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次隱岐三子洲、次佐度洲、次越洲、次吉備子洲、由此謂之大八洲國矣、

一書曰、二神〇伊弉諾神伊弉冉神、合爲夫婦、先以淡路洲淡洲爲胞、生大日本豐秋津洲、次伊豫洲、次筑紫洲、次雙生隱岐洲與佐度洲、次越洲、次大洲、次子洲、

一書曰、先生淡路洲、次大日本豐秋津洲、次伊豫二名洲、次隱岐洲、次佐度洲、次筑紫洲、次壹岐洲、次對馬洲、

一書曰、以磤馭慮嶋爲胞、生淡路洲、次大日本豐秋津洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次吉備子洲、次雙生隱岐洲與佐度洲、次越洲、

一書曰、以淡路洲爲胞、生大日本豐秋津洲、次淡洲、次伊豫二名洲、次隱岐三子洲、次佐度洲、次筑紫洲、次吉備子洲、次大洲、

〔古語拾遺〕一聞、夫開闢之初、伊弉諾伊弉冉二神、共爲夫婦、生大八洲國、及山川草木、

〔延喜式八祝詞〕鎭火祭

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氏、國能八十國、嶋能八十嶋乎生給比、八百萬神等乎生給比氏、〇下略

〔古事記上〕故大國主神、坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天之羅摩船而、內剝鵝皮剝、爲衣服、有歸來神、爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知、爾多邇且具〇且恐誤久白言、自多下四字以音此者久延毘古必知之、卽召久延毘古問時、答白、此者神產巢日神之御子、少名毘古那神、自毘下三字以音故爾白上於神產巢日御祖命者、答告此者實我子也、於子之中、自我手俣久岐斯子也、自久下三字以音故與汝葦原色許男命爲兄弟而作堅其國、故自爾大穴牟遲與少名毘古那二柱神、相並作堅此國、然後者、其少名毘古那神者、度于常世國也、〇中略於是大國主神、愁而告、吾獨何能得作此國、孰神與吾能相作此國耶、是時有光海依來之神、其神言、能治我前者、吾能共與相作成、若不然者國難成、爾大國主神曰、然者治奉之狀奈何、答言、吾者伊都岐奉于倭之青垣東山上、此者坐御諸山上神也、

〔古事記上〕於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黃泉國、爾自殿騰戶出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國、未作竟、故可還、○下略

〔日本書紀神代一〕一書曰、大國主神、亦名大物主神、亦號國作大己貴命、亦曰葦原醜男、亦曰八千戈神、亦曰大國玉神、亦曰顯國玉神、其子凡有一百八十一神、夫大己貴命與少彥名命、戮力一心、經營天下、○中略嘗大己貴命謂少彥名命曰、吾等所造之國、豈謂善成之乎、少彥名命對曰、或有所成、或有不成、是談也、蓋有幽深之致焉、其後少彥名命行至熊野之御碕、遂適於常世鄉矣、亦曰至淡嶋、而緣粟莖者、則彈渡而至常世鄉矣、自後國中所未成者、大己貴神獨能巡造、遂到出雲國、乃興言曰、夫葦原中國、本自荒芒、至及磐石草木、咸能強暴、然吾已摧伏、莫不和順、遂因言、今理此國、唯吾一身而已、其可與吾共理天下者、蓋有之乎、于時神光照海、忽然有浮來者、曰、如吾不在者、汝何能平此國乎、由吾在故、汝得建其大造之績矣、是時大己貴神問曰、然則汝是誰耶、對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、大己貴神曰、唯然、廼知汝是吾之幸魂奇魂、今欲何處住耶、對曰、吾欲住於日本國之三諸山、故卽營宮彼處、使就而居、此大三輪之神也、

〔延喜式八祝詞〕出雲國造神賀詞

高天能神王高御魂神魂命能、皇御孫命爾天下大八嶋國乎事避奉之時、出雲臣等我遠祖天穗比命乎國體見爾遣時爾○中略荒布留神等乎撥平氣國作之大神乎毛媚鎭天、大八嶋國現事顯事令事避支、

〔日本書紀十九欽明〕十六年二月、百濟王子餘昌遣王子惠、○中略蘇我卿曰、昔在天皇大泊瀨○雄略之世、汝國爲高麗所逼、危甚累卵、於是天皇命神祇伯、敬受策於神祇、祝者廼託神語報曰、屈請建邦之神、往救將亡之主、必當國家謐靖、人物乂安、由是請神往救、所以社稷安寧、原夫建邦神者、天地割判之代、草木言語之時、自天降來、造立國家之神也、頃聞、汝國輟而不祀、方今悛悔前過、修理神宮、奉祭神靈、國可昌盛、汝當莫忘、

〔釋日本紀十三述義〕造立國家之神　已貫神也、大己貴神也、

〔出雲風土記意宇郡〕母理郷、中略所造天下大神大穴持命、越八口平賜而還坐時、來坐長江山而詔、我造坐而命國者、命或令誤皇御孫命平世所知依奉、但八雲立出雲國者、我靜坐國、靑垣山廻賜而、玉珍置賜而守詔、故云文理、神龜三年改字母理、

〔出雲風土記嶋根郡〕手染郷、中略所造天下大神命詔、此國者丁寧所造國在詔而、故丁寧負給、而今人猶誤謂手染郷之耳、

〔出雲風土記飯石郡〕多禰郷、屬郡家、所造天下大神大穴持命與須久奈比古命、巡行天下時、稻種墮此處、故云種、神龜三年改字多禰、

〔大三輪神三社鎭座次第〕初伊弉諾伊弉冉二神共爲夫婦、生大八洲國及處處小嶋、而地稚如水母浮漂之時、大己貴命與少彥名命、戮力一心、殖生蘆葦、固造國地、故號曰國造大己貴命、

〔續日本紀三十光仁五〕寶龜九年十二月甲申、去神護中、大隅國海中有神造嶋、其名曰大穴持神、至是爲官社、

〔類聚國史十神祇〕弘仁五年二月乙酉、大隅國曾於郡造嶋神、預幣帛例、

〔延喜式九神名〕大隅國贈於郡大穴持神社

〔文德實錄八〕齊衡三年十二月戊戌、常陸國上言、鹿嶋郡大洗磯前有神新降、中略時神憑人云、我是大奈母知、少比古奈命也、昔造此國訖、去往東海、今爲濟民、更亦來歸、

〔萬葉集六雜歌〕冬十一月、○天平二年大伴坂上郎女發帥旅人家上道、超筑前國宗形郡名兒山之時作歌、
大汝、少彥名能、神社者、名著始雞目、名耳乎、名兒山跡負而、吾戀之、千重之一重裳、奈具佐末七國、

〔萬葉集七雜歌〕羈旅作
大穴道、少御神、作、妹勢能山、見吉、

右〇中略柿本朝臣人麻呂之歌集出

〔萬葉集十八〕教喩史生尾張少咋歌

於保奈牟知、須久奈比古奈野、神代欲里、伊比都藝家良之、父母乎、見波多布刀久、妻子見波、可奈之久米具之、〇中略

右五月十五日〇天平勝寶元年守〇越中大伴宿禰家持作之、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿于四十、奉造聖像卌躯、〇中略副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生志津國固〇造興之、瀛津波、起毎年、春波有度、今年之春波、毎物實滋榮〇下略

〔散木弃歌集秋三〕月のいらんとするを見てよめる

月見ればすくなみかみぞうらめしき西には山をつくらざりせば

治大地官神

〔日本書紀六垂仁〕二十五年三月丙申、一云、是時倭大神、著穗積臣遠祖大水口宿禰、而誨之曰、太初之時、期曰、天照大神悉治天原、皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官者、言已訖焉、〇下略

〔大倭神社註進狀〕傳聞、倭大國魂神者、大己貴神之荒魂與和魂、戮力一心、經營于天下之地、建得大造之績、在大倭豐秋津國、守國家、因以號曰倭大國魂神、亦曰大地主神、

治幽事神

〔日本書紀二神代〕一書曰、天神遣經津主神、武甕槌神、使平定葦原中國、〇中略時高皇產靈尊乃還遣二神、勅大己貴神曰、今者聞汝所言、深有其理、故更條條而勅之、夫汝所治顯露之事、宜是吾孫治之、汝則可以治神事、〇中略於是大己貴神報曰、天神勅教、慇懃如此、敢不從命乎、吾所治顯露事者、皇孫當治、吾將退治幽事、

〔日本書紀纂疏下二〕顯露之事者人道、幽冥之事者神道也、二道猶如晝夜陰陽、二而爲一、人爲惡於顯明之地、則帝皇誅之、爲惡於幽冥之中、則鬼神罰之、爲善獲福者亦同之、神事則冥府之事、非祭祀

現人神

牲幣之禮、祭祀牲幣、猶屬顯露事也、

〔古事記傳十四〕幽事は此上文に神事とあると一事にて、神事は言のまゝに書る字、幽事は意を以書る字なり、故二つ共に、加微碁登と訓べし、書紀舒明卷に幽顯とあり、此訓を以て、幽事をかみごとゝ訓べきことを思ひ定めよ、さて今より皇孫のしろしめすべき顯露事とは、即朝廷の萬の御政にて、現人の顯に行ふ事なり、幽事はそれに對ひて、顯に目にも見えず、誰が爲すともなく神の爲したまふ政なり、凡て此世にあらゆる事は、皆神の御心もて爲たまふなれども、其中にも姑く現人の爲す事に對へて、分て神事とはいふなり、

〔倭名類聚抄二鬼神〕現人神　日本紀云、現人神、和名安良比止加美

〔萬葉集六雜歌〕天平十年、石上乙麻呂卿配二土佐國一之時歌、

石上振乃尊者、〇中略住吉乃、荒人神、船舳爾、牛吐賜、〇下略

〔拾遺和歌集十神樂歌〕住吉にまうでゝ　安法法師

あまくだるあら人がみのあひおひをおもへば久しすみよしの松

〔大鏡二左大臣時平〕菅原のおとゞ、〇道眞右大臣の位にておはします、〇中略かしこ〇太宰府にてうせ給へるよのうちに、北野にそこらの松をおふさしめ給ひて、わたり住給ふをこそは、唯今の北野宮と申して、あら人神におはしますめれ、

〔十訓抄十〕鳥羽法皇の女房に、小大進と言歌よみ有けるが、待賢門院の御衣一重失たりけるをおひて、北野にこもり、〇中略小大進、

おもひいづやなき名たつ身はうかりきとあら人神になりし昔を〇又見二古今著聞集一

〔袖中抄十四〕あらひとがみ

あまくだるあらひとがみのあひおひをおもへば久しすみよしのまつ

蝦夷地神

顯昭云、あらひとがみとは、まさしき人の神となれるを申べきにや、後拾遺には、八幡によせたてまつる歌、

すべらぎもあらひと神もなごむまでなきけるもりのほとゝぎすかな

續詞花に北野によせたてまつる歌

おもひいづやなき名をたつはうかりきとあら人がみもありしむかしを

大菩薩は、應神天皇にておはします、北野天神は、菅丞相にておはしませば、共にあらひと神と申べし、今歌は住吉明神をもあらひと神とよみたてまつれり、

〔續後撰和歌集 九神祇〕北野宮によみて奉りける　前大僧正慈鎮

くもるべきうきよの末をてらしてやあら人神はあまくだりける

〔類聚名物考 神祇七〕現人神　あらひとがみ

此詞もとは、當今の天皇をさして申奉る事なり、現はうつゝと訓て、すなはち現在にして今日に見えたる所なり、天皇は人にして神におはしませば、御身をさしてあがめ申奉る事なりしを、後世は轉りて、此世にてまさしく名ある人の死して後神とあらはれ、いつき祭りしを現人神とはいふなり、近くは天滿宮の御事などしかいへる事歌にも見えたり、古今の異なる事わきまへしるべし、

○按ズルニ、天皇ヲ現人神ト稱シ奉ル事ハ、帝王部帝號篇現人神ノ條ニアリ、

〔日本書紀 二十六齊明〕五年三月、是月、遣阿倍臣、闕名率船師一百八十艘、討蝦夷國、○中略即以船一隻與五色綵帛、祭彼地神、

〔日本書紀 二十六齊明〕四年四月、阿倍臣闕名率船師一百八十艘、伐蝦夷、齶田渟代二郡蝦夷望怖乞降、○中略齶田蝦夷恩荷、進而誓曰、不爲官軍故持弓矢、但奴等性食肉故持、若爲官軍以儲弓矢、齶田浦神

造立韓地神

草神

知矣、將清白心仕官朝矣、

〔日本書紀欽明十九〕十六年二月、百濟王子餘昌、遣王子惠奏曰、〇中略蘇我卿曰、昔在天皇大泊瀨〇雄略之世、汝國爲高麗所逼、危甚累卵、於是天皇命神祇伯、敬受策於神祇、祝者廼託神語報曰、屈請建邦之神、往救將亡之主、必當國家謐靖、人物乂安、由是請神往救、所以社稷安寧、原夫建邦神者、天地剖判之代、草木言語之時、自天降來、造立國家之神也、頃聞、汝國輟而不祀、方今悛悔前過、修理神宮、奉祭神靈、國可昌盛、汝當莫忘、

〔日本書紀神代一〕一書曰、素戔嗚尊所行無狀、故諸神科以千座置戸、而遂逐之、是時素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處、

〔日本書紀神代一〕伊弉諾尊、伊弉冉尊、〇中略於是陰陽始遘合爲夫婦、〇中略次生草祖草野姬、亦名野槌、

〔日本書紀神代一〕一書曰、日神擧體不平、故以恚恨、廼居于天石窟、閉其磐戸、于時諸神憂之、〇中略野槌者、採五百箇野薦八十玉籤、凡此諸物皆來聚集、時中臣遠祖天兒屋命則以神祝祝之、

〔古事記上〕既生國竟、〇伊邪那岐伊邪那美二神更生神、故生神名、〇中略次生野神、名鹿屋野比賣神、亦名謂野椎神、

〔日本書紀神武三〕戊午年九月戊辰、勅道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、用汝爲齋主、授以嚴媛之號、〇中略草名爲嚴野椎、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡在京齋場者、〇中略又卜部率郡司以下雜色人等、入卜食野、苅草、即祭野神、

〔夫木和歌抄秋十一〕仁安二年八月經盛家歌合草　登蓮法師

秋の野の花に心をそめしよりくさかやひめもあはれとぞおもふ

此歌判者清輔云、右くさかやひめの日本紀に侍事にや、此紀にはいざなぎのみこと、いざなみのみこと、みとのまぐはひして、先國土出きて山をうむ、次に諸國山川海をうむ、草木をうむと侍る、木のおやくゝのち、くさのおやかやのひめなり、歌の心はたがはねど、くさかやひ

めとつゞきたるおぼつかなし、かゝる事日本紀竟宴歌にも、どし毎の春や昔のかやのひめとこそよめ、たゞしかやうの事は、たしかに見る所ありてこそよまれたるならんと云々、

木神

〔倭名類聚抄 二鬼神〕樹神　文選蕪城賦云、木魅山鬼、今按、木魅卽樹神也、内典云、樹神、〈和名古太萬〉

〔古事記 上〕旣生國竟、〈○伊邪那岐伊邪那美二神〉更生神、〈中略〉次生木神名久久能智神、〈此神名以音〉

〔日本書紀 一神代〕伊弉諾尊、伊弉冉尊、〈中略〉於是陰陽始遘合爲夫婦、〈中略〉次生木祖句句廼馳、

一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、〈中略〉又生海神等、號少童命、〈中略〉木神等號句句廼馳、

〔延喜式 八祝詞〕大殿祭

此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美、〈中略〉○平久〈氣〉安久奉護留神御名乎白久、屋船久久遲命、〈是木靈也〉屋船豐宇氣姫命、〈是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世產屋、以辟木束稻、置於戶邊、乃以米散屋中之類也、〉御名乎波稱辭竟奉利、皇御孫命乃御世乎、堅磐常磐爾奉護利、〈下略〉

〔古事記傳 五〕此祝詞に如是申すは、御殿造れる材の靈の故にはあらずて、彼の辟木束稻の事によりて、其靈二神を祭たまふなるべし、

葉守神

〔夫木和歌抄 三十四神祇〕千五百番歌合　正三位季能卿

くゝのちの神もうらめしいかなればあだに櫻の花となりけん

〔奧儀抄 中之下〕よろづの物につかさどれる神おはす、はもりの神は樹の神なり、

〔袖中抄 二十〕葉もりの神

顯昭云、はもりの神とは樹神也、よろづの木をまつる神也、さて葉を守る神と云なり、

〔俊頼口傳集 下〕はもりの神とは、木の葉を守る神の、木にはおはするなり、

〔大和物語 上〕批把殿〈○藤原仲平〉より、どし子が家に、かしは木の有けるを折にたまへりけり、折らせてかきつけて奉りける、

わが宿をいつかは君がならしばのならし顔にはをりにおこする、御返し、
かしは木にはもりの神のましけるをしらでぞをりしたゝりなさるな〇初句、後撰和歌集作「ならのはの」

〔枕草子三〕木は、〇中略かしは木いとをかし、はもりの神のますらんもいとかしこし、

〔源氏物語三十六柏木〕かしは木とかへでとの、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを、いかなるちぎりにか、末あへるたのもしさよなどのたまひて、しのびやかにさしよりて、
ことならばならしの枝にならさなんはもりの神のゆるしありきと、〇中略少將の君といふ人して、
かしは木にはもりの神はまさずとも人ならすべき宿の木末か

〔夫木和歌抄四春〕百首歌　隆祐朝臣
さくら木のはもりの神はしらねども春のかけたるはなのしらゆふ

〔新古今和歌集三夏〕雨中木繁といふ心を　藤原基俊
玉がしはしげりにけりなさみだれにはもりの神のしめはふるまで

〔夫木和歌抄二十九雜〕柏　後德大寺左大臣
ちらすなよこのてがしはのうすもみぢはもりの神もめでざらめやは

〔明德記下〕抑當宮〇伊勢神宮ノ祭禮ハ、〇中略三角ノカシハノ盃トテ、二見ノ東ナル、サヽラ嶋ト云所ニテ、柏ノ葉ヲ取事アリ、譬ヘバ此嶋ケンソニシテ、陸地ヨリ通路無間、高鹽ノ絶タル時、此嶋ノ陰ニ船ヲ浮メテ、此柏ノ葉ヲ浪ノ上ヘ苅落ス、神杯ニ成ベキハ必浮ブ、其器ニ當ラザルハ悉ク沈テミクヅトナル、其故ヲ以神拜〇拜一作杯ヲ占フ也、是ヲ柏ノ神ト號ス、

〔祭主輔親卿集〕みもすそ川といふ所に、齋宮〇重明親王女徽子とゞまりて御はらへし給ふに、女日をたちかくれつゝ、みつのかしはといふ柏をおこせて、これは何とかいふといへるに、

食物神

わぎもこをみもすそ川の岸におふる人をみつのゝ柏とをしれ

〔倭名類聚抄二鬼神〕保食神　日本紀私記云、保食神、宇介毛知乃加美、師說、保猶保持也、宇氣者、食之義也、言是保持食物之神也、

稻魂　日本紀私記云、稻魂、宇介乃美太萬、俗云、宇加乃美太萬、

〔古事記傳九〕和名抄に、稻魂和名宇介乃美太萬、俗云、宇加乃美太萬、とあるは誤なり、こは書紀の訓注の字を、さ讀るひがことゝ見ゆ、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊共生大八洲國、○中略又飢時生兒號倉稻魂命、

一書曰、天照大神在於天上曰、聞葦原中國有保食神、宜爾月夜見尊就候之、月夜見尊受勅而降、已到于保食神許、保食神乃廻首嚮國則自口出飯、又嚮海則鰭廣鰭狹亦自口出、又嚮山則毛麤毛柔亦自口出、夫品物悉備、貯之百机而饗之、是時月夜見尊忿然作色曰、穢矣鄙矣、寧可以口吐之物敢養我乎、廼拔劒擊殺、然後復命具言其事、時天照大神怒甚之曰、汝是惡神、不須相見、乃與月夜見尊一日一夜隔離而住、是後天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、顱上生粟、眉上生蠒、眼中生稗、腹中生稻、陰生麥及大豆小豆、天熊人悉取持去、而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子、又因定天邑君、卽以其稻種始殖于天狹田及長田、其秋垂穎八握莫莫然甚快也、

〔日本書紀神代一〕一書曰、軻遇突智娶埴山姬生稚產靈、此神頭上生蠶與桑、臍中生五穀、

〔古事記上〕旣生國竟、○伊邪那岐伊邪那美二神更生神、故生神名、○中略次生大宜都比賣神、此神名以音次生火之夜藝速男神、夜藝二字以音○中略因生此子美蕃登此三字以音見炙而病臥在、多具理邇此四字以音生神名、金山毘古神、訓金云迦那、下效此、○中略次和久產巢日神、此神之子謂豐宇氣毘賣神、自宇以下四字以音

〔古事記傳五〕大宜都比賣神、宜は食、大食とつゞきて濁る故に、濁音の宜の假字をかけり、是をさよむは非なり、都は例の助辭なり、さ

て此食を放ちては宇氣と云、下なる豐宇氣毘賣神、書紀の保食神など是なり、此は大食とつゞく故に、宇を省て云、又宇氣を轉て宇迦とも云、下なる宇迦之御魂神、書紀神武卷の稻魂女など是なり、かゝれば氣、宇氣、宇迦、みな同言にて、右の神等の御名、いづれも此食の意なり、〔御膳御饌などいも書て、凡て食物の事なり、書紀に倉稻など書れたるは、意を得てのことぞ、〕さて御食津神と云は、正しく此と同名なり、

〔古事記上〕速須佐之男命、〔中略〕又食物乞大氣津比賣神、爾大氣都比賣、自鼻口及尻種種味物取出、而種種作具而進、時速須佐之男命立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神、故所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆、故是神產巢日御祖命、令取玆成種、

〔古事記上〕其速須佐之男命、〔中略〕娶大山津見神之女、名神大市比賣、生子大年神、次宇迦之御魂神、〔二柱、宇迦二字以音、〕

〔日本書紀神武三〕戊午年九月戊辰、勅道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、用汝爲齋主、授以嚴媛之號、〔中略〕粮名爲嚴稻魂女、

〔止由氣宮儀式帳〕天照坐皇大神、〔中略〕大長谷天皇〔雄略〕御夢爾誨覺賜天、吾高天原坐氐見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴、然吾一所耳坐波甚苦、加以大御饌毛安不聞食坐故爾、丹波國比治乃眞奈井爾坐、我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支、爾時天皇驚悟賜氐、卽從丹波國令行幸氐、度會乃山田原下石根爾宮柱太知立、高天原爾知疑高知氐、宮定齋仕奉始支、是以御饌殿造奉氐、天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕大御饌乎日別供奉、

〔古事記上〕登由宇氣神、此者坐外宮之度相神者也、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡拔穗田者、國別六段、〔中略〕於齋院祭神八座、〔御歲神、高御魂神、庭高日神、大御食神、大宮女神、事代主神、阿須波神、波比伎神、〕

〔延喜式祝詞八〕大殿祭

此乃敷坐大宮地、〇中略御床都比能佐夜伎、夜女能伊須須伎伊豆都志伎事無久、平氣久安久奉護留神御名乎白久、屋船久久遲命、是木靈也、屋°船°豐°宇°氣°姬°命°、是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世産屋、以辟木束稻、置於戸邊、乃以米散屋中之類也、以御名乎波奉稱利氏、皇御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利、〇下略

〔延喜式神名九〕神祇官西院坐御巫等祭神廿三座並大、月次新嘗、御°食°津°神°

〔延喜式祝詞八〕新年祭

大御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、神魂、高御魂、生魂、足魂、玉留魂、大宮乃賣、大°御°膳°都°神°、辭代主登御名者白而辭竟奉、〇下略

〔延喜式神名九〕大膳職坐神三座並小、御°食°津°神°社°

大和國廣瀨郡廣瀨坐和°加°宇°加°乃°賣°命°神°社°名神大、月次新嘗、

〔延喜式祝詞八〕廣瀨大忌祭

廣瀨能川合爾稱辭竟奉流皇神能御名乎白久、御膳持須留若°宇°加°能°賣°能°命°登御名者白氏、此皇神前爾辭竟奉久、〇下略

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月辛亥、進山城國稻荷神階、〇中略河内國恩智大°御°食°津°彥°命°神°、恩智大°御°食°津°姬°命°神等並正三位、

〔延喜式神名九〕河内國高安郡恩智神社二座並名神大、月次相嘗新嘗、

〔延喜式神名十〕丹後國竹野郡大°宇°加°神°社°

〔神樂歌〕採物

幣

みてぐらはわがにはあらずあめにます豐°を°か°姬°の神のみてぐら神のみてぐり

杖

このつゑはいづこの杖ぞあめにます豐をか姬のかみの杖なりかみの杖なり

鉾

このはこはいづこのはこぞあめにます豐をか姬のみやのはこなりみやのみはこぞ

〔古事記上〕速須佐之男命、中略又娶大山津見神之女、名神大市比賣、生子大年神、

〔古事記傳九〕大年神、名義、大は例のたゞへ名、年は田寄なり、多余なることを、つゞめて登志とも余志とも云る例古に多し、然云故は、まづ登志とは穀のことなる、其は神の御靈以て田に成して、天皇に寄奉賜ふ故に云り、田より寄すことを云ことばいふなり、新年祭祝詞に、皇神等能依左志奉牟奥津御年乎云云、八束穗能伊加志穗爾、皇神等能依左志奉者云云、とあるを以知べし、天下に成さし成ろ給ふなる穀は、悉く天皇に寄さし奉ろなり、奥津御年は、師說に、稻を云、稻は穀の中にも晚く成ゆゑに奥と云なり、同じ稻の中にても、晚きをおくてと云にて知べし、さて穀を一度取收るを、一年とは云なり、されば登志と云名は、穀を本にて年月の登志には末なり、かくて此神は、此穀の事に大なる功ましゝ故に、此御名を負給へるなり、

〔古事記上〕故其大年神、中略又娶香用比賣、此神名以音生子、大香山戸臣神、次御年神、二柱

〔古語拾遺〕昔在神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歲神之子、至於其田、唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神令片巫志止止鳥肱巫今俗竈輪及米占也占求其由、御歲神爲崇、宜獻白猪白馬白鷄以解其怒、依教奉謝、中略是今神祇官以白猪白馬白鷄祭御歲神之緣也、

〔延喜式一四時祭〕新年祭神三千一百卅二座、中略右神祇官所祭幣帛一依前件具數申官、中略御歲社加白馬白猪白鷄各一、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

御年皇神等能前爾白久、中略御年皇神能前爾、白馬白猪白鷄種々色物乎備奉氐、皇御孫命能宇豆乃

土神

幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

〔延喜式九神名〕大和國葛上郡葛木御歳神社名神大、月次新嘗、

高市郡御歳神社二座　御歳神社鍬靫

〔古事記上〕既生國竟、更生神、故生神名、伊邪那岐伊邪那美二神〇中略 次生火之夜藝速男神、夜藝二字以音〇中略 因生此子、美蕃登此三字以音見炙而病臥在、〇中略 於屎成神名、波邇夜須毘古神、此神名以音次波邇夜須毘賣神、此神名亦以音次於尿成神名、彌都波能賣神、

〔日本書紀一神代〕一書曰、生火神軻遇突智時、伊弉冉尊爲軻遇突智所焦而終矣、其且終之間、臥生土神埴山姬及水神罔象女、

一書曰、伊弉冉尊生火產靈時、爲子所焦而神退矣、亦云神避矣、其且神退之時、則生水神罔象女及土神埴山姬、

一書曰、伊弉冉尊且生火神軻遇突智之時、悶熱懊惱、因爲吐、此化爲神、名曰金山彥、次小便化爲神、名曰罔象女、次大便化爲神、名曰埴山姬、

一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、〇中略 又生海神等、〇中略 土神號埴安神、

〔古事記上〕大年神、〇中略 又娶天知迦流美豆比賣生子、〇中略 次大土神、亦名土之御祖神、

〔延喜式八祝詞〕鎭火祭

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背二柱嫁繼給氏、〇中略 麻奈弟子爾火結神生給氏、美保止被燒氏石隱坐氏、〇中略 與美津枚坂爾至坐氏所思食久、吾名妹命能所知食上津國爾、心惡子乎生置氏來奴止宣氏、返坐氏更生子、水神、匏、川菜、埴山姬、四種物乎生給氏、此能心惡子乃心荒比曾波、水神、匏、埴山姬、川菜乎持氏、鎭奉禮止事教悟給支、

〔延喜式九神名〕大和國十市郡畝尾坐健土安神社大、月次新嘗、

山神

〔延喜式(神名十)〕阿波國美馬郡彌都波能賣神社　波爾移麻比彌(彌原作爾、今改)神社

〔倭名類聚抄(二鬼神)〕山神　内典云、山神(和名夜萬乃加美)日本紀云、山祇、

〔古事記(上)〕既生國竟(○伊耶那岐伊耶那美二神)更生神、故生神名、(中略)次生山神、名大山(上)津見神、(中略)又生海神等、(中略)山神等號山祇、

〔日本書紀(神代一)〕一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、(中略)一書曰、伊弉諾尊斬軻遇突智命、爲五段、此各化成五山祇、一則首化爲大山祇、二則身中化爲中山祇、三則手化爲麓山祇、四則腰化爲正勝山祇、五則足化爲䨄山祇、

〔萬葉集(一雜歌)〕幸(○持統)于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

安見知之、吾大王、神長柄、神佐備世須登、芳野川、多藝津河内爾、高殿乎、高知坐而、上立、國見乎爲波、疊有、靑垣山、山神之、奉御調等、春部者、花挿頭持、秋立者、黄葉頭刺理、遊副川之、神母、大御食爾、仕奉等、上瀨爾、鵜川乎立、下瀨爾、小網刺渡、山川母、依氐仕流、神乃御代鴨、

坂之御尾神

〔古事記(中崇神)〕此天皇之御世、疫病多起、人民死爲盡、爾天皇愁歎、而坐神牀之夜、大物主大神顯於御夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古而令祭我御前者、神氣不起、國安平、(中略)卽以意富多多泥古命爲神主、而於御諸山拜祭意富美和之大神前、(中略)又於坂之御尾神及河瀨神、悉無遺忘以奉幣帛也、因此而疫氣悉息、國家安平也、

道神

〔古事記(上)〕伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米(上)志許米岐(此九字以音)穢國而在祁理(此二字以音)故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐(此三字以音)原、而禊祓也、(中略)次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神、(中略)次於投棄御褌所成神名、道俣神、

〔日本書紀(神代一)〕一書曰、伊弉諾尊已至泉津平坂、(中略)與伊弉冉尊相向而立、遂建絶妻之誓、(中略)因曰、自此莫過、卽投其杖、是謂岐神也、又投其帶、是謂長道磐神、

〔夫木和歌抄(三十四神祇)〕閑居百首中　參議爲相卿

めぐりあはんちぎりの末はなが道祖の神のしるべをたのむばかりぞ

〔倭名類聚抄鬼神二〕岐神　日本紀云、岐神、和名布奈止乃加美

〔箋註倭名類聚抄天地一〕云布奈止云久那止者、詔黃泉醜女曰、莫經來此處之名、左部者、亦陸留黃泉醜女之謂、則爲一神也明矣、源君順分爲二神非是、

〔日本書紀神代一〕一書曰、一云、伊弉諾尊已至泉津平坂、故便以千人所引磐石、塞其坂路、與伊弉冉尊相向而立、遂建絕妻之誓、中略因曰、自此莫過、卽投其杖、是謂岐神也、

一書曰、伊弉諾尊欲見其妹、乃到殯斂之處、中略伊弉冉尊脹滿太高、上有八色雷公、伊弉諾尊驚而走還、是時雷等皆起追來、中略時伊弉諾尊乃投其杖曰、自此以還、雷不敢來、是謂岐神、此本號曰來名戶之祖神焉、

〔日本書紀神代二〕一書曰、二神經津主神、武甕槌神降到出雲五十田狹之小汀、而問大己貴神曰、汝將以此國奉天神耶以不、中略於是大己貴神報曰、天神勅教、慇懃如此、敢不從命乎、中略乃薦岐神於二神曰、是當代我而奉從也、中略故經津主神以岐神爲鄉導、周流削平、下略

〔延喜式祝詞八〕道饗祭

高天之原爾事始氏皇御孫之命止稱辭竟奉、大八衢爾湯津磐村之如久塞坐、皇神等之前爾申久、八衢比古、八衢比賣、久那斗止御名者申氏、辭竟奉久、根國底國與里麁備疎備來物爾相率相口會事無氏、下行者下乎守理、上往者上乎守理、夜之守日之守爾守奉齋奉禮止、中略進宇豆乃幣帛乎平久聞食氏、八衢爾湯津磐村之如久塞坐氏、皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉、茂御世爾幸閉奉給止申、

〔袖中抄下略〕ゆふけとふうた

ふなどさへゆふけの神にものとへば（○へ、袋草紙作は、）みちゆく人よ うらまさしかれ（○しかれ、袋草紙作にせ、）

〔倭名類聚抄鬼神二〕道祖　風俗通云、共工氏之子好遠遊、故其死後、祀以爲祖神、漢語抄云、道祖、佐倍乃加美、

〔本朝世紀〕天慶元年九月二日丙午、近日東西兩京大小路衢、刻木作神、相對安置、凡厥體像髣髴丈夫、頭上加冠、鬢邊垂纓、以丹塗身、成緋彩色、起居不同、遞各異貌、或所作女形、對丈夫而立之、臍下腰底刻繪陰陽、構几案於其前、置坏器於其上、兒童猥雜、拜禮慇懃、或捧幣帛、或供香花、號曰岐神、又稱御靈、未知何祥、時人奇之、

○按ズルニ、本文ノ岐神ハ、下文收ムル所ノ諸書ニイハユル、道祖神ノ謂ナラン、故ニ此ニ收ム、

〔新猿樂記〕西京有右衞門尉者、○中略第一本妻者、○中略不知吾身老衰、常恨夫心等閑、故本尊聖天供如無驗、持物道祖祭似少應、○中略五條道祖奉粢餅、千葉手(ヒラデ)、東寺夜叉祀飯餉(イカデ)百籮子(アシカ)、○下略

〔今昔物語十三〕天王寺僧道公誦法花救道祖語第卅四

今昔天王寺ニ住ム僧有ケリ、名ヲバ道公ト云フ、年來法花經ヲ讀誦シテ佛道ヲ修行ス、常ニ熊野ニ詣デヽ安居ヲ勤ム、而ルニ熊野ヨリ出デヽ本寺ニ返ル間、紀伊ノ國ノ美奈部郡ノ海邊ヲ行ク程ニ日暮ヌ、然レバ其ノ所ニ大ナル樹ノ本ニ宿ヌ、夜半計ノ程ニ馬ニ乘レル人二三十騎計來テ、此ノ樹ノ邊ニ有リ、何人ナラント思フ程ニ、一ノ人ノ云ク、樹ノ本ノ翁ハ候フカト、此ノ樹ノ本ニ答テ云ク、翁候フト、道公此レヲ聞テ、驚キ恠テ、此ノ樹ノ本ニハ、人ノ有ケルカト思フニ、亦馬ニ乘レル人ノ云ク、速ニ罷出デヽ御供ニ候ヘト、亦樹ノ本ニ云ク、今夜ハ不可參、其故ハ駒ノ足折レ損ジテ乘ルニ不能レバ、明日駒ノ足ヲ踠ヒ、亦他ノ馬ヲマレ求テ可參也、年罷老テ行歩ニ不叶ト、馬ニ乘レル人々此レヲ聞テ皆打過ヌト聞ク、夜曙ヌレバ、道公此事ヲ極テ恠ミ恐テ、樹ノ本ヲ廻リ見ルニ、總テ人无シ、只道祖ノ神ノ形ヲ造タル有リ、其ノ形舊ク朽テ多ノ年ヲ經タリト見ユ、男ノ形ノミ有テ女ノ形ハ无シ、前ニ板ニ書タル繪馬有リ、足ノ所破レタリ、道公此ヲ見テ、夜ハ此道祖ノ云ケル也ケリト思フニ、彌ヨ奇異ニ思テ、其繪馬ノ足ノ所ノ破タルヲ、糸ヲ以テ綴テ、本ノ如ク置ツ、道公此事ヲ今夜吉ク見ムト思テ、其日留テ尚樹ノ本ニ有リ、夜半計ニ夜前ノ如ク多ノ馬ニ

乘レル人來ヌ、道祖亦馬ニ乘テ出デヽ共ニ行ヌ、曉ニ成ル程ニ道祖返來ヌト聞ク程ニ、年老タル翁來レリ、誰人ト不知、道公ニ向テ拜シテ云ク、聖人ノ昨日駒ノ足ヲ療治シ給ヘルニ依テ、翁此公事ヲ勤メツ、此恩難報ジ、我レハ此レ此樹ノ下ノ道祖此レ也、此多ノ馬ニ乘レル人ハ、行疫神ニ在マス、國ノ內ヲ廻ル時ニ、必ズ翁ヲ以テ前役トス、若シ其レニ不共奉テバ笞ヲ以テ打チ、言ヲ以テ罵ル、此苦實ニ難堪シ、然レバ今此下劣ノ神形ヲ弃テヽ、速ニ上品ノ功德ノ身ヲ得ムト思フ、其レ聖人ノ御力ニ可依シト、道公答テ云ク、宣フ所妙也ト云ヘドモ、此レ我ガ力ニ不及ト、道祖亦云ク、聖人此樹ノ下ニ今三日留テ、法花經ヲ誦シ給ハムヲ聞カバ、我法花ノ力ニ依テ、忽ニ苦ノ身ヲ弃テヽ、樂ノ所ニ生レムト云テ、搔消ツ樣ニ失ヌ、道公道祖ノ言ニ隨テ、三日三夜其處ニ居テ心ヲ至シテ法花經ヲ誦ス、第四日ニ至テ前ノ翁來レリ、道公ヲ禮シテ云ク、我レ聖人ノ慈悲ニ依テ、今既ニ此身ヲ弃テヽ貴キ身ヲ得ムトス、所謂補陀落山ニ生テ、觀音ノ眷屬ト成テ菩薩ノ位ニ昇ラム、此偏ニ法花ヲ聞奉ツル故也、聖人若シ其ノ虛實ヲ知ラムト思給ハヾ、草木ノ枝ヲ以テ小キ柴ノ船ヲ造テ、我ガ木像ヲ乘テ海ノ上ニ浮テ、其ノ作法ヲ可見給ト云テ、搔消ツ樣ニ失ヌ、其後道公、道祖ノ言ニ隨テ、忽ニ柴ノ船ヲ造テ、此道祖神ノ像ヲ乘セテ、海邊ニ行テ此レヲ海ノ上ニ放チ浮ブ、其時ニ風不立ズ波不動シテ、柴船南ヲ指テ走リ去ヌ、道公此ヲ見テ、柴船ノ不見成ルマデ泣々禮拜シテ返ヌ、亦其鄕ニ年老タル人有リ、其人ノ夢ニ、此樹ノ下ノ道祖、菩薩ノ形ト成テ、光ヲ放テ照シ耀キテ、音樂ヲ發シテ、南ヲ指テ遙ニ飛ビ昇ヌト見ケリ、道公此事ヲ深ク信ジテ、本寺ニ返テ彌ヨ法花經ヲ誦スル事不怠、道公ガ語ルヲ聞テ人皆貴ビケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、〇又見二法華驗記一

〔今昔物語三十一〕豐前大君知世中作法語第二十五

今昔□□天皇ノ御代ニ、豐前ノ大君ト云フ人有ケリ、柏原ノ天皇〇桓武ノ五郎ノ御子ノ御孫ニテナム有ケル程ニ、位ハ四位ニテ、官ハ刑部卿ニテ、大和ノ守ナドニテナム有ケル、此人世ノ中ノ事

ちぶりの神

ヲ吉ク知リ、心バヘ直ニテ、公ノ御政ヲ吉モ悪モ吉ク知テ、除目有ラムズル時ニハ、先ヅ國ノ數タ開タルヲ、各次第ヲ待テ望ム人々ノ有ルヲモ、國ノ程ニ宛テ押量テ、其人ヲバ其國ノ守ニコソ被成ラメ、其ノ人ハ道理立テ望メドモ、否不成ジカシナド國毎ニ云タリケル事ヲ、人皆聞テ所望叶タリケル人ハ、除目ノ後朝ニハ此大君ノ許ニ行テナム讃ケル、此大君ノ押量リ除目露不違ザリゲレバ、世擧テ尙此大君ノ押量リ除目賢キ事也トナム云ヒ喤ケル、除目ノ前ニモ此大君ノ許ニナム行キ集テ問ケレバ、思ヒ量タルマヽニナム答ヘ居タリケル、可成ト被云タル人ハ、手ヲ摺テ喜ビテ、尙此大君極キ人ト云テナム返ケル、不成ジト云フヲ聞タル人ハ、大キニ嗔テ、長ハ何事云居ル舊大君ゾ、道祖ノ神ヲ祭テ狂ニコソ有ヌレナド云テ、腹立テナム返ケル、(下略)

〔空穗物語後陰〕大殿にはよべかくわかこ君おはしまさずとて、御ともにさぶらひける人々、おにの兵衛佐の君をいみじうかうがへのたまひて、(中略)まづおはしまいたる方を、加茂の御社まで願をたてヽ求め奉るに、三條京極のつじにたちたまへり、(中略)さらばこヽにやよべよりたちたまへりつる、おやしのさへのかみやといひて、されば今のまもいかにさわぎ給らんとて、もろともにおはしぬ、

〔源平盛衰記七〕笠嶋道祖神事
奥州名取郡笠嶋ノ道祖神、(中略)コレハ都ノ賀茂ノ河原ノ西、一條ノ北ノ邊ニオハスル出雲路ノ道祖神ノ女也ケルヲ、イツキカシヅキテ、ヨキ夫ニ合セントシケルヲ、商人ニ嫁テ、親ニ勘當セラレテ、此國ヘ被追下給ヘリケルヲ、國人是ヲ崇敬テ、神事再拜ス、上下男女所願アル時ハ、隱相ヲ造テ、神前ニ懸莊リ奉テ、是ヲ祈申ニ叶ハズト云事ナシ、

〔土佐日記〕廿六日、(承平五年二月)まことにやあらん、海賊おふといへば、夜中ばかりより船を出して、こぎくる道にたむけする所あり、かぢとりしてぬさたいまつらするに、ぬさのひんがしへちれば、

かぢとりのまうして來る事は、此ぬさのちる方にみ船速にこがしめ給へとまうして奉る、これをきゝてあるめのわらはのよめる、

　わたつみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やまずふかなん、とぞよめる、

〔袖中抄十九〕ちぶりのかみ

　ゆくけふもかへらん時も玉ぼこのちぶりの神をいのれとぞおもふ

顯昭云、ちぶりの神とは、みちぶりの神といふにや、海路にもよめり、○中略隱岐國にこそ知夫利崎といふ所に、わたすの宮といふ神はおはすなれ、船出すとては、其神に奉幣してわたりを祈るとぞ申す、それを本體にて海をもくがをも道を祈る神をば、ちぶりの神と名づけたるにや、又其神を思ひてかの所にもつけたるにや、是はあまりの事あり、

〔延喜式十神名〕隱岐國知夫郡海神社元名和多須神

〔大日本史神祇十八〕按本書、○延喜式元名已下六字、在由良比女社下、然國內帳有由良姫和田酒二神、不容混也、故今移于此、社今在知夫里村南岬、曰渡明神、其近傍有渡嶋、土佐日記歌詞、有和多都美知夫里神之語、袖中抄云、隱岐知夫里崎有和多須神、可以相證、

たむけの神

〔倭名類聚抄二鬼神〕道神　唐韻云、禓音傷、和名太無介乃加美、道上祭、一云、道神也、

〔箋注倭名類聚抄一天地〕按太无介、嶺也、今俗謂呼多字偶、行道之人於山嶺祭此神、故謂嶺爲手向、後謂是神爲嶺神也、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年五月八日癸卯、授越中國正六位上手向神從五位下、

〔源氏物語十五蓬生〕かくおぼえぬ道にいざなはれて、はるかにまかりあくがるゝ事とて、

　玉かづらたえてもやまじゆく道のたむけの神もかけてちかはん

〔河海抄七蓬生〕手向の神は、道祖神の事なり、羈旅の人にぬさ以下の物を送る、此神のたむけのた

めなり、是途中の祈禱なり、

〔古今和歌集羇旅九〕朱雀院の奈良におはしましける時に、たむけ山にてよめる、　菅原朝臣

此たびはぬさもとりあへず手向山もみぢのにしき神のまに〳〵

素性法師

たむけにはつゞりの袖もきるべきにもみぢにあける神やかへさん

〔伊勢集下〕ものへかづらやるとて

けづりこし心もありて玉かづらたむけの神になるがうれしさ

〔紀貫之集八〕あひしれる人のものへゆくにぬさやるとてよめる

もみぢばも花をもをれる心をば手向の山の神ぞしるらん

左中辨濟光朝臣の、人のうまのはなむけのぬさにかゝんとてよませたる、夏なりければ、

玉ほこの手向の神もわがごとくわがおもふことをおもへとぞおもふ

〔權中納言兼輔卿集〕扇にぬさつけて

風にしもつけつるぬさは道のべの手向にわかぬ神なかれとぞ

〔夫木和歌抄雜二十〕あふ坂山家集　源仲正

鳥居たつあふ坂山のさかひなるたむけの神にわれないさめそ

〔夫木和歌抄雜三十二〕祓麻　よみ人不知

そめたちていのれるぬさのおもひとはたむけの道の神やしるらん

〔夫木和歌抄神祇三十四〕社たむけのかみ　よみ人不知

君をおもふ我心しぞみえぬべきたむけの神もいかゞおもはん

河神

〔倭名類聚抄 二鬼神〕河伯 兼名苑云、河伯、一云、水伯、河之神也、和名加波乃加美、

〔日本書紀 十一仁德〕十一年十月、將防北河之澇、以築茨田堤、是時有兩處之築、而乃壞難塞、時天皇夢有神誨之曰、武藏人強頸、河內人茨田連衫子、二人以祭於河伯、必獲塞、則覓二人而得之、因以禱于河神、爰強頸泣悲之、沒水而死、乃其堤成焉、唯衫子取全匏兩箇、臨于難塞水、乃取兩箇匏投於水中、請之曰、河神祟之、以吾爲幣、是以今吾來也、必欲得我者、沈是匏而不令泛、則吾知眞神、親入水中、若不得沈匏者、自知僞神、何徒亡吾身、於是飄風忽起、引匏沒水、匏轉浪上而不沈、則潝潝汎以遠流、是以衫子雖不死、而其堤且成也、

〔日本書紀 二十四皇極〕元年六月、大旱、七月戊寅、群臣相謂之曰、隨村村祝部所敎、○中略 或禱河伯、既無所効、

〔萬葉集 一雜歌〕幸○持統于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

安見知之、吾大王、神長柄、神佐備世須登、芳野川、多藝津河內爾、高殿乎、高知坐而、上立、國見乎爲波、疊有、青垣山、山神乃、奉御調等、春部者、花挿頭持、秋立者、黃葉頭刺理、遊副川之、神母、大御食爾、仕奉等、上瀨爾、鵜川乎立、下瀨爾、小網刺渡、山川母、依氐奉流、神乃御代鴨、

海神

〔倭名類聚抄 二鬼神〕海神 文選海賦云、海童於是宴語、海童海神也 日本紀私記云、海神、和名和太豆美、

〔古事記 上〕既生國竟、○伊邪那岐伊邪那美二神 更生神、故生神名、○中略 次生海神名大綿津見神、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、○中略 又生海神等、號少童命、

〔古事記 上〕伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在祁理、此二字以音 故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原、而禊祓也、○中略 次於水底滌時所成神名、底津綿上津見神、次底筒之男命、於中滌時所成神名、中津綿上津見神、次中筒之男命、於水上滌時所成神名、上津綿上津見神、訓上云字闕 次上筒之男命、此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也、

（伊以下三字以音、下效此、）故阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也、（宇都志三字以音）其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、墨江之三前大神也、○（又見日本書紀）

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊勅任三子曰、天照大神者、可以治高天原也、月讀尊者、可以治滄海原潮之八百重也、素戔嗚尊者、可以治天下也、

〔古事記上〕故火照命者、爲海佐知毘古、（此四字以音、下效此、）而取鰭廣物鰭狹物、火遠理命者、爲山佐知毘古而取毛麁物毛柔物、爾火遠理命、謂其兄火照命、各相易佐知欲用、三度雖乞不許、然遂纔得相易、爾火遠理命、以海佐知釣魚、都不得一魚、亦其鉤失海、○中略於是其弟泣患居海邊之時、鹽椎神來問曰、何虛空津日高之泣患所由、答言我與兄易鉤而失其鉤、是乞其鉤故、雖償多鉤不受云、猶欲得其本鉤故泣患之、爾鹽椎神云、我爲汝命作善議、卽造无間勝間之小船、載其船以教曰、我押流其船者、差暫往、將有味御路、乃乘其道往者、如魚鱗所造之宮室、其綿津見神之宮者也、到其神御門者、傍之井上有湯津香木、故坐其木上者、其海神之女、見相議者也、（訓香木云加都良、）故隨教小行、備如其言、卽登其香木以坐、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊、○中略還向於橘之小門而拂濯也、于時入水、○中略出吹生大地海原之諸神矣、

〔日本書紀神武三〕神日本磐余彥天皇、諱彥火火出見、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四子也、母曰玉依姬、海童（ワタツミ）之小女也、○中略其年（○甲寅）十月辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、○中略戊午年六月丁巳、遂越狹野、到熊野神邑、且登天磐盾、仍引軍漸進、海中卒遇暴風、皇舟漂蕩、時稻飯命乃歎曰、嗟乎吾祖則天神、母則海神、如何厄我於陸、復厄我於海乎、言訖乃拔劒入海、化爲鋤持神、三毛入野命亦恨之曰、我母及姨並是海神、何爲起波瀾以灌溺乎、則蹈浪秀而往乎常世鄕矣、

〔日本書紀神代二〕彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、以其姨玉依姬（○海神豐玉彥之女）爲妃、生彥五瀨命、次稻飯命、次三毛入野命、次神日本磐余彥尊、凡生四男、

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、(中略)亦進相摸、欲往上總、望海高言曰、是小海耳、可立跳渡、乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩、而不可渡、時有從王之妾、曰弟橘媛、穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌、王船欲沒、是必海神(古事記作渡神)心也、願以妾之身、贖王之命而入海、言訖乃披瀾入之、暴風即止、船得著岸、故時人號其海曰馳水也、

〔延喜式神名十〕播磨國明石郡海神社三座(並名神大、月次新嘗)

筑前國糟屋郡志加海神社三座(並名神大)

對馬嶋上縣郡和多都美神社(名神大)

下縣郡和多都美神社(名神大)

〔新撰姓氏錄右京神別〕安曇宿禰　海神綿積豐玉彥神子、穗高見命之後也、

海犬養　海神綿積命之後也

凡海連　同神男、穗高見命之後也、

八太造　和多罪豐玉彥命兒、布留多麻乃命之後也、

〔新撰姓氏錄攝津國神別〕凡海連　安曇宿禰同祖、綿積命六世孫、小栲梨命之後也、

阿曇犬養連　海神大和多罪神三世孫、穗己都久命之後也、

〔新撰姓氏錄河内國神別〕安曇連　綿積神命兒、穗高見命之後也、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄玉

海神、手纏持在、玉故、石浦廻、潛爲鴨、

海神、持在白玉、見欲、千遍告、潛爲海子、

潛爲、海子雖告、海神、心不得、所見不云、

〔萬葉集九雜歌〕詠水江浦嶋子

河瀨神

春日之霞時爾、(中略)水江之浦嶋兒之、(中略)海若神之女爾、邂爾伊許藝趍、相誂良比言成之賀婆、加吉結、常代爾至、海若神之宮乃、內隔之細有殿爾、携二人入居而、老目不爲死不爲而、永世爾有家留物乎、(下略)

〔古事記崇神中〕此天皇之御世、疫病多起、人民死爲盡、爾天皇愁歎而坐神牀之夜、大物主大神顯於御夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古而令祭我御前者、神氣不起、國安平、(中略)卽以意富多多泥古命爲神主而、於御諸山拜祭意富美和之大神前、(中略)又於坂之御尾神及河瀨神、悉無遺忘以奉幣帛也、因此而疫氣悉息、國家安平也、

水戸神

〔古事記上〕既生國竟、(伊邪那岐伊邪那美二神)更生神、(中略)次生海神名大綿津見神、次生水戸神、名速秋津日子神、次妹速秋津比賣神、此速秋津日子速秋津比賣二神、因河海持別而生神名、沫那藝神、(那藝二字以音、下效此、)次沫那美神、(那美二字以音、下效此、)次頰那藝神、次頰那美神、次天之水分神、(訓分云久麻理、下效此、)次國之水分神、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊、共生大八洲國、(中略)又生海神等、(中略)水門神等號速秋津日命、

〔古事記上〕僕(大國主神)住所者、(中略)於出雲國之多藝志之小濱、造天之御舍、(多藝志三字以音)而水戸神之孫、櫛八玉神爲膳夫、獻天御饗之時、禱白而櫛八玉神化鵜入海底、咋出底之波邇、(此二字以音)作天八十毘良迦、(此三字以音、下略)

嶋神

〔日本書紀允恭十四年〕十四年九月甲子、天皇獵于淡路嶋、時麋鹿猨猪、莫莫紛紛、盈于山谷、焱起蠅散、然終日以不獲一獸、於是獵止以更卜矣、嶋神祟之曰、不得獸者、是我之心也、赤石海底有眞珠、其珠祠於我、則悉當得獸、爰更集處處之白水郎、以令探赤石海底、海深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、勝於諸海人、是腰繫繩入海底、差頃之出曰、於海底有大蝮、其處光也、諸人皆曰、嶋神所請之珠、殆有是蝮腹乎、亦入探之、爰男狹磯抱大蝮而泛出之、乃息絕以死浪上、既而下繩測海底、六十尋、割

鰒實眞珠有腹中、其大如桃子、仍祠嶋神而獵之、多獲獸也、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄海

雲隱小嶋神之恐者目間心間哉

〔夫木和歌抄雜二十三〕建長八年百首歌合　左近中將具氏

さりともと身のうきことはおほ嶋の神の心をたのむばかりぞ

浦神

〔日本書紀仲哀八〕八年正月壬午、幸筑紫、〇中略既而導海路、自山鹿岬廻之、入岡浦、到水門、御船不得進、則問熊鰐曰、朕聞汝熊鰐者、有明心以參來、何船不進、熊鰐奏之曰、御船所以不得進者、非臣罪、是浦口有男女二神、男神曰大倉主、女神曰菟夫羅媛、必是神之心歟、天皇則禱祈之、以挾抄者倭國菟田人伊賀彥、爲祝令祭、則船得進、

〔日本書紀欽明十九〕五年十二月、越國言、於佐渡嶋北御名部碕岸、有肅愼人、乘一船舶、而淹留、〇中略於是肅愼人、移就瀨波河浦、浦神嚴忌、人不敢近、渴飮其水、死者且半、骨積於巖岫、俗呼肅愼隈也、

〔日本書紀齊明二十六〕四年四月、阿倍臣闕名率船師一百八十艘、伐蝦夷、齶田渟代二郡蝦夷、望怖乞降、於是勒軍、陳船於齶田浦、齶田蝦夷恩荷進而誓曰、不爲官軍故持弓矢、但奴等性食肉故持、若爲官軍以儲弓矢、齶田浦神知矣、將淸白心仕官朝矣、

門神

〔古事記上〕天石戶別神、亦名謂櫛石窻神、亦名謂豐石窻神、此神者御門之神也、

〔釋日本紀十四述義〕土左國風土記曰、土左郡有朝倉鄕、鄕中有社、神名天津羽羽神、天石帆別神、今天石門別神子也、

〔延喜式九神名〕山城國葛野郡天津石門別稚姬神社名神大、月次新嘗、

大和國高市郡天津石門別神社

攝津國嶋下郡天石門別神社

〔延喜式神名十〕近江國伊香郡天石門別命神社
陸奥國白河郡伊波止和氣神社
丹波國多紀郡櫛石窻神社二座並名神大
石見國那賀郡大祭天石門彦神社
美作國英多郡天石門別神社
備前國御野郡石門別神社　石門別神社
阿波國名方郡天石門別八倉比賣神社大、月次新嘗、　天石門別豐玉比賣神社
土佐國吾川郡天石門別安國玉神社
〔三代實錄清和二〕貞觀元年五月廿八日癸未、授山城國正六位上天照御門神從五位上、
〔三代實錄清和七〕貞觀五年十月廿九日戊子、安藝國正六位上天磐門別神社在屋神並從五位下、
〔三代實錄清和十〕貞觀七年三月廿一日壬寅、授太政大臣○藤原良房東京第无位天石戸開神從三位、
○按ズルニ、神祇官中御門巫祭神アリ、載テ官衙社篇神祇官祭神條ニ詳ナリ、

井神

〔古事記上〕故此大國主神、○中略故其八上比賣者、雖率來、畏其嫡妻須世理毘賣而其所生子者、刺挾木俣而返、故名其子云木俣神、亦名謂御井神也、
〔延喜式神名九〕大和國宇陀郡御井神社
〔延喜式神名十〕美濃國多藝郡御井神社
各務郡御井神社
出雲國秋鹿郡御井神社
出雲郡御井神社

地震神

〔日本書紀推古二十二〕七年四月辛酉、地動、舍屋悉破、則令四方俾祭地震神、

枉津日神
直日神

〔日本書紀 神代一〕一云、(中略)伊弉諾尊既還、乃追悔之曰、吾前到於不須也凶目汚穢之處、故當滌去吾身之濁穢、則往至筑紫日向小戸橘之檍原、而祓除焉、遂將盪滌身之所汚、乃興言曰、上瀨是太疾、下瀨是太弱、便濯之中瀨也、因以生神、號八十枉津日神、次大枉津日神、(印本無次大枉津日神六字、據一本補、)次將矯其枉而生神、號曰神直日神、次大直日神、

一書曰、伊弉諾尊、(中略)但親見泉國、此既不祥、(中略)故還向於橘之小門、而祓濯也、于時入水吹生磐土命、出水吹生大直日神、又入吹生底土命、出吹生大綾津日神、

〔古事記 上〕伊邪那岐大神詔、吾者到於伊邪志許米(上)志許米岐(此九字以音)穢國而在祁理、(此二字以音)故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐(此三字以音)原而、禊祓也、(中略)於是詔之、上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱、而初於中瀨隨(恐墮誤)迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神、(訓禍云摩賀、下效此、)次大禍津日神、此二神者、所到其穢繁國之時、因汚垢而所成之神者也、次爲直其禍而所成神名、神直毘神、(毘字以音、下效此、)次大直毘神、

〔延喜式 八 祝詞〕大殿祭

齋部宿禰某(我)弱肩(爾)太襁取懸(氐)、言壽(伎)鎭奉事(能)漏落(武)事(乎波)、神直日命、大直日命、聞直(志)見直(志氐)、平(久氣)安(久氣)所知食(登)白、

御門祭

四方四角(與利)疎(備)荒(備)來(武)、天能麻我都比登(云)神(乃)言(武)惡事(爾、古語麻我許登、)相麻自許(利)相口會賜事無久、自上往(波)上護(利)、自下往(波)下護(利)、(中略)參入罷出人名(乎)問所知(志)咎過在(乎波)、神直備大直備(爾)見直聞直坐(氐)、平(久氣)安(久氣)令奉仕賜、(下略)

遷却祟神祭

皇御孫之尊(乃)天御舍之內(仁)坐(須)皇神等(波)、荒備給(比)、健備給(比)、祟給事無(志氐)、高天之原(爾)始(志)事(乎)、

神奈我良毛所知食氐、神直日大直日爾直志給比氐、下略

〔古事記上〕故各〇二神日月隨依賜之命所知看之中、速須佐之男命不知所命之國、而八拳須至于心前啼伊佐知伎也、自伊下四字以音、下效此、其泣狀者、青山如枯山泣枯、河海者悉泣乾、是以惡神之音、如狹蠅皆滿、〇滿恐涌誤萬物之妖悉發、

〔日本書紀神代二〕天照大神之子、正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、娶高皇產靈尊之女栲幡千千姬、生天津彥彥火瓊瓊杵尊、故皇祖高皇產靈尊特鍾憐愛、以崇養焉、遂欲立皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊、以爲葦原中國之主、然彼地多有螢火光神、及蠅聲邪神、復有草木咸能言語、〇中略於是二神、〇武甕槌經津主二神誅諸不順鬼神等、一云、二神遂誅邪神及草木石類、皆已平了、

一書曰、天照大神勅天稚彥曰、豐葦原中國、是吾兒可王之地也、然慮有殘賊強暴橫惡之神者、故汝先往平之、乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢遣之、

一書曰、及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇產靈尊勅八十諸神曰、葦原中國者、磐根木株草葉猶能言語、夜者若熛火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之云々、

〔古事記上〕爾高御產巢日神、天照大御神之命以、於天安河之河原、神集八百萬神集而、思金神令思而詔、此葦原中國者、我御子之所知國、言依所賜之國也、故以爲於此國道速振荒振國神等之多在、

〔延喜式祝詞八〕六月晦大祓十二月准之

高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美能命以氐、八百萬神等乎神集集賜比、神議議賜氐、我皇御孫之命波、豐葦原乃水穗之國乎安國止平久知所食止事依志奉伎、如此依志奉志國中爾荒振神等乎波神問志問志賜、神掃掃賜比、語問志磐根樹立、草之垣葉乎毛語止氐、天之磐座放、天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氐、天降依志奉支、

遷却祟神祭

高天之原爾神留坐氐、事始給志、神漏伎神漏美能命以氐、天之高市爾八百萬神等乎神集集給比、神議議給氐、我皇御孫之尊波、豐葦原能水穗之國乎安國止平久氣所知食止、天之磐座放氐、天之八重雲乎伊頭之千別爾千別氐、天降所寄奉志時爾、誰神乎先遣波、水穗國能荒振神等乎、神攘攘平氣止武神議議給時爾、中略、經津主命、健雷命二柱神等乎天降給比、荒振神等乎神攘攘給比、神和和給氐、語問志磐根樹立、草之片葉毛語止氐、皇御孫之尊乎天降所寄奉支、

出雲國造神賀詞

高天能高王高御魂神魂命能、皇御孫命爾天下大八嶋國乎事避奉之時、出雲臣等我遠祖天穗比命乎國體見爾遣時爾、天能八重雲乎押別氐、天翔國翔氐、天下乎見廻氐返事申給久、豐葦原乃水穗國波、晝波如五月蠅水沸支、夜波如火瓮光神在利、石根木立青水沫毛事問天、荒國在利、然毛鎭平天、皇御孫命爾安國止平久所知坐之米牟止、中氐、己命兒天夷鳥命爾、布都怒志命乎副天、天降遣天、荒布留神等乎撥平氣、國作之大神乎毛媚鎭天、大八嶋國現事顯事令事避支、

〔古事記中神武〕故神倭伊波禮毘古命、從其地○男水門廻幸到熊野村之時、大熊髮(髮恐誤字)出入即失、爾神倭伊波禮毘古命、倏忽爲遠延、及御軍皆遠延而伏、(遠延二字以音)此時熊野之高倉下(タカクラジ此者人名)齎一横刀、到於天神御子之伏地而獻之時、天神御子即寤起、詔長寢乎、故受取其横刀之時、其熊野山之荒神、自皆爲切仆、爾其惑伏御軍悉寤起之、中略、於是亦高木大神之命以覺白之、天神御子自此於奧方莫使入幸、荒神甚多、今自天遣八咫烏、故其八咫烏引道、從其立後應幸行、

〔日本書紀景行七〕二十七年十月己酉、遣日本武尊令擊熊襲、中略、既而從海路還倭、到吉備以渡穴海、其處有惡神、則殺之、亦比至難波、殺柏濟之惡神、　二十八年二月乙丑朔、日本武尊奏平熊襲之狀曰、中略、是以西州既謐、百姓無事、唯吉備穴濟神、及難波柏濟神、皆有害心、以放毒氣、令苦路人、並爲禍害之藪、故悉殺其惡神、並開水陸之徑、　四十年六月、東夷多叛、邊境騷動、　七月戊戌、天皇持斧鉞、以授曰

本武尊曰、朕聞其東夷也、識性暴强、凌犯爲宗、○中略亦山有邪神、郊有姦鬼、遮衢塞徑、多令苦人、○中略郎巧言而調暴神、振武以攘姦鬼、　十月癸丑、日本武尊發路之、○中略進入信濃、是國也、山高谷幽、翠嶺萬重、人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、然日本武尊披烟凌霧遙徑大山、旣逮于峯而飢之、食於山中、山神令苦王、以化白鹿立於王前、王異之、以一箇蒜彈白鹿、則中眼而殺之、爰王忽失道不知所出、時白狗自來、有導王之狀、隨狗而行之、得出美濃、吉備武彥自越出而遇之、先是度信濃坂者、多得神氣以瘼臥、但從殺白鹿之後、踰是山者、嚼蒜塗人及牛馬、自不中神氣也、日本武尊更還於尾張、卽娶尾張氏之女宮簀媛而淹留踰月、於是聞近江膽吹山有荒神、卽解劒置於宮簀媛家、而徒行之、至膽吹山、山神化大蛇當道、爰日本武尊不知主神化蛇之、謂是大蛇必荒神之使也、旣得殺主神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行、時山神興雲零氷、峯霧谷曀、無復可行之路、乃捿遑不知其所跋涉、然凌霧强行、方僅得出、猶失意如醉、因居山下之泉側、乃飮其水而醒之、故號其泉曰居醒泉也、

〔古事記中景行〕天皇惶其御子○倭建命之建荒之情而詔之、西方有熊曾建二人、是不伏无禮人等、故取其人等而遣、○中略然而還上之時、山神河神、及穴戶神皆言向和而參上、○中略爾天皇亦頻詔倭建命、言向和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人等、而副吉備臣等之祖名御鉏友耳建日子、而遣之、○中略自其入幸、悉言向荒夫琉蝦夷等、亦平和山河荒神等、而還上幸時、到足柄之坂本、於食御粮處、其坂神化白鹿而來立、爾卽以其咋遺之蒜片端待打者、中其目乃打殺也、○中略自其國、○中略越科野國、乃言向科野之坂神、而還來尾張國、入坐先日所期美夜受比賣之許、○中略故爾御合、而以其御刀之草那藝劒、置其美夜受比賣之許、而取伊服岐能山之神幸行、於是詔、茲山神者徒手直取、而騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛、爾爲言擧而詔、是化白猪者、其神之使者、雖今不殺還時將殺、而騰坐、於是零大氷雨打惑倭建命、此化白猪者、非其神之使者、當其神之正身、因言擧見惑也、故還下坐之、到玉倉部之清泉以息坐之時、御心稍寤、

〔常陸風土記信太郡〕古老曰、天地權輿、草木言語之時、自天降來神名稱普都大神、巡行葦原之中津國、

和平山河荒梗之類、

〔播磨風土記賀古郡〕鴨波里、○中略此里有舟引原、昔神前村有荒神、毎年留行人之舟、於是往來之舟、悉留印南之大津江、上於川頭、自賀意理多之谷引出、而通出於赤石郡林潮、故曰舟引原、

〔釋日本紀五述義〕筑後國風土記云、昔此堺上有麁猛神、往來之人半生半死、其數極多、因曰人命盡神、于時筑紫君、肥君等占之、令筑紫君等之祖甕依姫爲祝祭之、自爾以降、行路之人不被神害、是以曰筑紫神、

〔肥前風土記基肄郡〕姫社郷、此郷之中有川、名曰山途川、其源出郡北山、南流而會御井大川、昔者此門之西有荒神、行路之人、多被殺害、半凌半殺、于時卜求祟由、兆云、令筑前國宗像郡人珂是古祭吾社、若合願者、不起荒心、覓珂是古、令祭神社、珂是古卽捧幡祈禱云、誠有欲吾祀者、此幡順風飛往、墮願吾之神邊、使卽擧幡順風放遣、于時其幡飛往、墮於御原郡姫社之社、更還飛來落此山途川邊之田村、珂是古自知神之在、○中略自爾已來、行路之人不被殺害、因曰姫社、今以爲郷名、

〔源順集〕六月祓

ねぎごとをきかずあらぶる神だにもけふはなごしと人はしらなん

〔古事記上〕速須佐之男命不知所命之國、而八拳須至于心前、啼伊佐知伎也、自伊下四字以音、下效此、其泣狀者、青山如枯山泣枯、河海者悉泣乾、是以惡神之音、如狹蠅皆滿、○滿恐涌誤萬物之妖悉發、

〔古事記上〕爾速須佐之男命白于天照大御神、○中略因此言者、自我勝云而於勝佐備、此二字以音、離天照大御神之營田之阿、此阿字以音、埋其溝、○中略故於是天照大御神見畏、閉天石屋戶而刺許母理坐也、此三字以音、爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此而常夜往、於是萬神之聲者、狹蠅那須、此二字以音、皆滿、○滿恐涌誤萬妖悉發、

〔日本書紀神代二〕天照大神、○中略遂欲立皇孫天津彥彥火瓊瓊杵尊、以爲葦原中國之主、然彼地多有螢

疫神

火光神、及蠅聲邪神、

〔釋日本紀八述義〕蠅聲邪神

私記曰、問此神名如何、答、案下一書文、如五月蠅而沸騰云云、五月蠅三字之訓、サバヘト讀之、今此蠅聲同點也、

〔日本書紀二神代〕一書曰、及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇産靈尊勅八十諸神曰、葦原中國者、磐根木株草葉猶能言語、夜者若熛火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之云云、

〔延喜式八祝詞〕出雲國造神賀詞

高天能神王高御魂神魂命能、皇御孫命爾天下大八嶋國乎事避奉之時、出雲臣等我遠祖天穗比命乎國體見爾遣時爾、○中略天下乎見廻氐返事申給久、豐葦原乃水穗國波、晝波如五月蠅水沸支、夜波如火瓮光神在利、

〔拾遺和歌集二夏〕題しらず　藤原長能

さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしのはらへなりけり

〔夫木和歌抄九夏〕六帖題なごしのはらへ　權僧正公朝

あし原やほたるかゞやく神までもとびちるばかりはらへするなり

〔倭名類聚抄二鬼神〕瘧鬼　蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而爲疫鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、和名衣夜美乃加美

〔箋註倭名類聚抄一天地〕獨斷二卷漢蔡邕撰、原書作疫神、帝顓頊有三子、生而亡去爲鬼、其一者居江水、是爲瘟鬼、其一者居若水、是爲魍魎、其一者居人宮室樞隅處、善驚小兒、按東京賦李善註、引漢舊儀曰、昔顓頊氏之有三子、亡而爲疫鬼、一居江水、爲瘧鬼、其文與此所引獨斷略同、

〔日本靈異記中〕閻羅王使鬼受所召人之饗而報恩緣第廿五

讃岐國山田郡有布敷臣衣女、聖武天皇代、衣女忽得病、時偉備百味、祭門左右、賂於疫神而饗之也、

〔續日本紀 三十 光仁〕寶龜元年六月甲寅、祭疫神於京師四隅畿内十堺、

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜二年三月壬戌、令天下諸國祭疫神、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜六年六月甲申、遣使祭疫神於畿内諸國、　八月癸未、是日祭疫神於五畿内、

〔日本紀略 九 一條〕正暦五年六月廿七日丁未、爲疫神修御靈會、中略　會了送難波海、此非朝議、起自巷説、

〇又見朝野群載

〔日本紀略 十 一條〕長保三年五月九日庚辰、於紫野祭疫神、號御靈會、依天下疾疫也、

〔日本紀略 十二 三條〕長和四年六月廿日戊辰、依疫神託宣、立神殿、奉崇重也、

〔今昔物語 十三〕天王寺僧道公誦法花救道祖語第三十四

今昔天王寺ニ住ム僧有ケリ、名ヲバ道公ト云フ、中略　紀伊ノ國ノ美奈部郡ノ海邊ヲ行ク程ニ日暮ヌ、然レバ其所ニ大ナル樹ノ本ニ宿ヌ、中略　道祖亦馬ニ乘テ出デヽ共ニ行ヌ、曉ニ成ル程ニ道祖返來ヌト聞ク程ニ、年老タル翁來レリ、誰人ト不知、道公ニ向テ拜シテ云ク、中略　此多ノ馬ニ乘レル人ハ、行疫神ニ在マス、國ノ内ヲ廻ル時ニ必翁ヲ以テ前役トス、

〔藤原長能集〕いつのやまひにか有けん、家の内におきたりし人なくなりし程に、里のとねの中やう、五條にてやく神の祭つかまつるになんある、下略

〔御湯殿の上の日記〕慶長三年正月十九日、はやしまで八郎やくじんへ御代くわんまいるすみしやうらい、おげまいらする、

〔康富記〕享德四年正月十九日乙丑、石清水八幡宮厄疫會延引歟、

〔都名所圖會 五〕疫蠹堂 一鳥居の南東下の内にあり、此所八幡宮御旅所也、疫神は正月十九日日の勧請也、送疫式に曰、山城と攝津の堺に疫神を祭るとあり、世人正月十五日より十九日まで、男山へ群參して其年の疫癘を拂ふなり、此日には蘇民將來の札、日釘竹破魔弓モ御幣など求めて家に收め、邪鬼を退くるなり、

〔親長卿記〕文明三年後八月六日、稱送疱瘡之惡神之由、〈參尼公出來之由、女出稱之、不可說、〉見所々有囃物、毎日事也、七日、今日町送疱瘡之惡神、有囃物、室町殿御前、北小路殿御前等可渡之、或仁構棧敷招請之間、罷向、了、見物不相應也、種々有囃物、

〔南嶺子三〕疱瘡は、胎毒のわざとかや、古にいふ膿瘡是なりなど、諸説まち〳〵なれ共、其父母夢に痘鬼を感じ、つひに物がゝぬ童部物をかき、あやしきわざなきにしもあらず、予新町二條の下に住ける隣家に、小田垣氏の人あり、いさゝかもうきたる事をいはず、物がたき醫生なりけるが、話して曰、わが父の伯父、但馬國氣多郡伊福村にて、小田垣傳右衞門といひけるが三人の子あり、皆幼少なりしに、第一の子痘にかゝりてより、はやく大熊へゆかんと晝夜にせがみける、大熊といふは、廿四五町もへだゝりたる處にて墓原なれば、幼兒の名を知るべきにもあらず、傳右衞門はいふにおよばず、親屬此事を甚忌おもふ內に、次第にあしく成て死したり、その翌日よりふたりめの子大熱出て、是もたゞ大熊へゆかんとのみ他なくいひ、痘もすがたあしくやがて果たり、第三の子は、二歲ばかりにて物いひもさだまらぬに、直に痘瘡出て、大くまへゆかんといふことばあざやかにて成人のごとし、しきりに此事をいふ故、傳右衞門つく〴〵思案し、兩兒すでに此ことばを以てむなしく成ぬ、此子とてもたすかるべきにあらず、のりうつりたる邪物あらば、ともに刀にかけんとおもひさだめ、やがてその子を引提、奧の一間へ入、刀をぬきさげ切にせんとせしに、小兒おそるゝ聲しはがれて、のうゆるしたまへ、われ立さりて此子は安穩ならしめん、たすけたまへやとわぶる故、さま〴〵にことばをかためゆるしけるより、たちまち熱もうすろぎ、次第に全快せし、その時のありさま、父にて侍りし人まのあたり見たる事と語られき、怪力亂神はかたるまじき事ながら、醫人理學にくゝられては、天地の妙はつくしがたかるべし、人其子を愛するあまりに、除夜に痘の神とて燈燭をかゝげ、媚へつらふのみかは、其嬰兒熱出て、痘と見るや

煩神

迷はし神

いなや、棚をかざり供物を列ね、敬屈する事、明神に仕るがごとし、此禮敬のあつきに乘じて、邪靈恣に其兒を侵に至る、如大量の君子ありて、痘鬼を祭る事を禁じ、害にもこれを敬せば、罪に充る程ならば、痘はやむとも、鬼は侵べからず、たとへば善人はこれを敬すれば其禮に報じ、凶惡の人は、是を敬すればその敬に乘じて、驕慢さかりになるがごとく、邪靈は敬する人氣に行れて、日々張行盛になるの理うたがふべからず、痘鬼何ぞあらんや、只是胎毒のみといふは理儒者流の説のみ、熊野路をはじめ痘をうけざる地處々にあり、その地のみ胎毒すべてあき理もあるべからず、鬼あらば彌まつるべからず、兒に托して、茶をこのみ、酒をのみ、食を求む、いやしむべし敬すべからず、兒にまどふが故に、大人君子も賤鬼に屈伏す、嗟呼おろかなるかな、

〔古事記上〕伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐以音穢國而在祁理、以音故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐以音原、而禊祓也、中略次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神、以音

〔古事記傳六〕此神名、御衣に由ありても聞えず、強て云はゞ、穢し御衣を脱棄たるは、煩はしき事を脱れて、心のさはやぎたるに似たればか、後世の歌に、なき名立らるゝを、ぬれ衣著ると云も、衣に譬へたる意は似たり、さて今俗に行逢神に行遇てわづらふと云事あるは、此神なども由ありや、此前後の神みな道路によれり、

〔日本書紀神代一〕一書曰、一云、伊弉諾尊已至泉津平坂、中略與伊弉冉尊相向而立、遂建絶妻之誓、中略因曰、自此莫過即投其杖、中略又投其衣、是謂煩ワヅラヒノ神、

〔夫木和歌抄神祇三十四〕日吉社戀五首歌合　　法橋顯昭
いさなぎのぬぎし衣もなきものをなぞあふ事にわづらひの神

〔今昔物語二十七〕左京屬邦利延値迷神語第四十二
今昔、三條ノ院ノ天皇ノ御時ニ、石清水ノ行幸有ケルニ、左京ノ屬邦ノ利延ト云者、供奉シテ仕タ

醫藥神

リケルニ、九條ニテ可留カリケルヲ、何ニ思ケルニカ、長岳ノ寺戸ト云フ所マデ行ニケリ、其ヲ行ケル程ニ、人共有テ此ノ邊ニハ迷ハシ神有ナルゾカシト云ツヽ渡ケル程ニ、利延モ然カ聞タリナド云テ行ケルニ、日モ漸ク下レバ、今ハ山崎ノ渡ニハ行著ヌベキニ、怪ク長岳ノ邊ヲ過テ、乙訓ノ川邊ニ行クト思ヘバ、亦寺戸ノ岸ヲ登ル、寺戸ヲ過テ行キ持行ク程ニ、乙訓ノ川ニ來テ渡ルト思ヘバ、亦過ニシ桂川ヲ渡ル、漸ク日モ暮方ニ成ヌ、前後ヲ見レドモ人一人モ不見エ成ヌ、多ク次ギ行ツル人モ皆不見エ、而ル間夜ニ成ヌレバ、寺戸ノ西ノ方ナル板屋堂ノ檐ニ下居テ、夜ヲ明シテ朝思ヘバ、我レハ左京ノ官人也、早九條ニテ可留カリケルニ此マデ來ツラム、極マリテ由无シ、其レニ同所ニ路返シ廻行ケルニ、九條ノ程ヨリ迷ハシ神託テ、將狂ハシテ行カセケルナメリト思テ、其レヨリナム西ノ京ノ家ニハ返リ來タリケル、然レバ迷ハシ神ニ値ヌル希有ノ事也、此ク心ヲモ口カシ道ヲモ違ヘテ謀ル也、狐ナドノ爲ルニヤ有ラム、此レハ利延ガ語リシ也、希有ノ事ナレバ、此ク語リ傳ヘタルト也、○又見宇治拾遺物語

〔日本書紀神代〕一書曰、夫大己貴命與少彥名命、戮力一心、經營天下、復爲顯見蒼生及畜產、則定其療病之方、又爲攘鳥獸昆虫之災異、則定其禁厭之法、是以百姓至今、咸蒙恩賴、○中略其後少彥名命行至熊野之御碕、遂適於常世鄕矣、

〔本草和名草六〕石斛、○中略和名須久奈比古乃久須禰、○又見醫心方、倭名類聚抄、伊呂波字類抄、類聚名義抄、

○按ズルニ、石斛ハ、本草綱目ニ諸書ヲ引キテ、虛勞ヲ補ヒ、腸胃ヲ厚クシ、身ヲ輕クシ、年ヲ延ブル功アリト稱ス、其須久奈比古乃久須禰ト名ヅクル、恐クハ少彥名命ノ、療病ノ藥方ヲ定メシト關係アラン、姑ク此ヲ擧ゲテ考ニ備フ、

〔文德實錄八〕齊衡三年十二月戊戌、常陸國上言鹿嶋郡大洗磯前有神新降、初郡民有煮海爲鹽者、夜半望海、光耀屬天、明日有兩怪石、見在水次、高各尺許、體於神造、非人間石、鹽翁私異之、去後一日、亦有

廿餘小石、在向石左右、假若侍座、彩色非常、或形沙門、唯無耳目、時神憑人云、我是大奈母知、少比古奈命也、昔造此國訖、去往東海、今爲濟民更亦來歸、

〔文德實錄九〕天安元年十月己卯、在常陸國大洗磯前酒列磯前兩神、號藥師菩薩名神、

〔延喜式九神名〕常陸國鹿嶋郡大洗磯前藥師菩薩神社名神大

那賀郡酒列磯前藥師菩薩神社名神大

〔日本書紀通證五〕今按、藥師訓久須志、光明皇后佛足跡歌所謂、久須理師是也、推古紀醫惠日、醫訓久須志、孝謙紀曰、德來五世孫惠日、小治田朝廷御世、被遣大唐、學得醫術、因號藥師、遂以爲姓、大寶積經曰、譬如藥師持藥囊、自身病不能療治、此亦謂醫也、蓋因藥師名以稱菩薩、從俗稱也、今也諸國二神之所鎭坐、至莫不安藥師佛、吁不亦甚哉、

造酒神

〔日本書紀九神功〕十三年二月癸酉、是日皇太后神功宴太子應神於大殿、皇太后擧觴以壽于太子、因以歌曰、虛能彌企破、和餓彌企那邏儒、區之能伽彌、等虛豫珥伊麻輸、伊波多多須、周玖那彌伽未能、等豫保枳、保枳茂苔陪之、訶武保枳、保枳玖流保之、摩莵利虛辭彌企層、阿佐孺塢齊佐佐、

〔釋日本紀二十四和歌〕私記曰、少彥神、是造酒神也、

市神

〔藻鹽草三市〕市ひめ　いちひめの神、いちはにいはひたる神の事也と云々、

〔倭訓栞中編二伊〕いちひめのかみ　市を守りたまふ神なりといへり、大山祇の女大市姬也といひ、一説に、市杵島姬命を祭るなりといふ、○中略もと七條堀川にありし、五條市屋の道場に移す、

〔金光寺緣起〕東市屋市姬大明神三座、延曆十四年五月七日、贈相國冬嗣公祭宗像大神于東西市、爲守護神、因號市姬、九月七日祭之、

〔爲賴朝臣集〕いまの左大辨の御子のいかに、おはわりこのふたに、いちひめのかたらなどかけるところに、

市姫の神のいがきのいかなれやあきなひものに千代をつむらん

〔神德略述頌〕市廛守護大市姫　商賈始祖西宮戎

大市姫者、大山祇女、素戔嗚妃、見古事記、今京都有市姫社、爲市店之守護神、蓋此神也、本朝通記云、推古天皇九年春三月、太子始市、使商賈知貿買術、當此時、奉蛭子神、爲商賈鎭護神、後世以惠美須崇福德神、自是始焉、按此說未詳本據、然其相傳也最舊矣、故今從而作句、

船靈

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年八月壬午、初遣高麗國船名曰能登、歸朝之日、風波暴急、漂蕩海中、祈曰、幸賴船靈、平安到國、必請朝庭、酬以錦冠、至是緣於宿禱、授從五位下、其冠製錦表絁裏、以紫組爲纓、

〔延喜式神名九〕攝津國住吉郡船玉神社

和歌神

〔源平盛衰記七〕和歌德事

凡和歌ハ、國ヲ治メ人ヲ化スル源、心ヲ和ゲ思ヲ遣ル基也、〇中略只住吉玉津嶋ノ此道ノ崇神タルノミニ非ズ、伊勢、石淸水、賀茂、春日ヨリ始奉テ、託宣ノ詞ハ、夢想ノ告、何モ歌ニ非ザルハ少シ、

〔諸神記中〕一和歌兩神事

住吉三神表筒男　中筒男　底筒男

三聖人丸　赤人　衣通姫

家〇吉田之口訣如此

〔倭訓栞前編和四十二〕わかさんじん　住吉秘記にいふは、住吉の表筒男命、中筒男命、底筒男命の三神あり、三聖といふは、人丸、赤人、衣通姫なりといへり、

〔類聚名物考神祇三〕和歌三神

近世の人云、堂上地下によりて、祭る所三の品あり、地下のあがむる所は、人丸明神、赤人、天滿宮、おもふに是らは一向事しらぬ人のいふ事なれども、かくいふ事の有としるも、又しらぬには

鞠神

勝れり、

〔悦目抄肆〕立申起請文事

右件元者上秘抄、非₂實子₁者不₂可₁相承、○中略若そのほか人に傳之者、住吉、玉津嶋、人麿呂、赤人、殊下照姬、素戔烏尊の惡を棄て、今生にはながくもとむる所の六義にしたがひ、後生にはかならずいとふ所の三途におち候はん、仍起請文狀如件、○中略

正安元年二月十七日　前大納言為世在判

〔和歌三神考〕此文には三神に限らず、赤人もあり、下照姬も、素戔烏尊もありて六神なり、後に是を約めて三神とするは、佛家にて阿彌陀、觀音、勢至を合せて、三尊と稱するをまねて、三神の數を合せて、歌よむ人の本尊にするなるべし、

〔寶篋院殿住吉詣記〕貞治三年卯月上旬、○中略住吉にまかりて、○中略此御神は和歌の道に心ざし深き人をよくまもらせ給ふと、昔よりいひ傳へ侍り、ことに秀歌を好む人、此神にまゐりて祈誓申せば、必その道にかなひけるとぞ、

〔榻寢自語下〕和歌三神住吉社、天滿宮、玉津嶋姬社の三柱たる事、後奈良院宸記にあり、中御門宣胤卿など、此御記の如くに神號を染筆したまふこと記に見えたり、

〔諸社根元記中〕一鞠神

中御門西洞院東頰滋野井小社三座、是鞠神也、此地成通卿舊跡、

一計案林　二春陽花　三樹尊ニ形鞠、額ニ金色文字アリ、說上神名ヲ闕、

申日以₂紀氏人₁祭₂之、故年始鞠始ニハ用₂申日₁、

〔成通卿口傳日記〕我鞠を好みて後かゝりの下に立事七千日、其うちに日をかゝずとはす事二千日也、さきの千日にまんずる日、時の鞠の上手を集めて、殊に引つくろひて鞠をわく、各執す

る事にて、數三百餘りあげて、落ぬさきに自ら鞠を取る、棚を二間まうけ、一の棚には鞠を置く、一の棚にはやう〳〵の供祭を色々にかまへて、ご幣一はさみ立たり、其幣を取て鞠を拜す、○中略夜に入て其事日記せんとて、灯臺を近くよせて墨をする時、棚におきつる鞠我前にまろびくるさまを、あやしくやうありと思ふに、顏は人にて、手足身猿にて、三四歲ばかりの兒三人、手づからかいて鞠のくゝりめを抱きてあり、あさましと思ひながら、何物ぞとあらくとへば、御鞠の精なりと對ふ、○中略おの〳〵が名を知食べし、是を御覽せよとて、眉にかゝりたる髮をおしあぐ、一人が額には春楊花といふ文字あり、一人が額には夏安林といふ文字あり、一人が額には秋園といふ文字あり、○中略今より後は、さる物ありと御心にかけておはしまさば、御守となりまゐらせて、御鞠をもいよ〳〵よくなし參らせんといふ程に、其形見えずなりぬ、

三十番神

〔諸神記下〕一七種番神

第一　天地擁護三十番神番二也、並也、双也、兩也、

東方八神

第一歲星神　此曰木祖句々廼馳

第二角宿神　此曰草祖野槌

第三亢宿神　此曰小島神

第四氐宿神　此曰大島神

第五房宿神　此曰神雷神

第六心宿神　此曰神風神

第七尾宿神　此曰飛鳥神

第八箕宿神　此曰浮船神

北宮八神

第一辰星神　此曰川神

第二斗宿神　此曰下津神

第三牛宿神　此曰大和山神

第四女宿神　此曰努根神

第五虛宿神　此曰萬雄神

第六危宿神　此曰海原神

第七室宿神　此曰忌部神

第八壁宿神　此曰齋播多尾神

西宮八神

第一太白神　此曰金祖神

第二奎宿神　此曰澤邊水神

第三婁宿神　此曰烏野多神

第四胃宿神　此曰瀧祭神

第五昴宿神　此曰膽雄神

第六畢宿神　此曰浦上神

第七觜宿神　此曰酒守神

第八參宿神　此曰時守神

南方八神

第一熒惑星神　此曰火神

第二井宿神　此曰井筒守神

第三鬼宿神　此曰產魂主神

第四柳宿神　此曰道祖兒玉神

第五星宿神　此曰澄水吉見神

第六張宿神　此曰片山野神

第七翼宿神　此曰神高見神

第八軫宿神　此曰時主天兒神

右深秘家傳之訣也、容易不可傳云々、

第二　內侍所三十番神（番與前同）

第一離火神　此曰手比留尊

第二大日雲神

第三日前尊

第四國懸尊

第五坤地神　此曰國津母命

第六伊弉冉命

第七天香久山尊

第八三輪高見尊

第九兌澤尊　此曰少女神

第十字多鬼尊

第十一押山雄取子尊

第十二烏龍尊

第十三乾天尊　此曰天津祖尊

第十四伊弉諾尊

第十五佐種原尊

第十六心太尊

第十七坎水尊　此曰河主神

第十八國常立尊

第十九國狹槌尊

第廿豐斟渟尊

第廿一艮山尊　此曰山主尊

第廿二泥土煮尊

第廿三大戶道尊

第廿四素戔鳴尊

第廿五震雷尊　此曰雷主尊

第廿六天津彥彥火瓊瓊杵尊

第廿七彥火火出見尊

第廿八鸕鷀草葺不合尊

第廿九巽風神　此曰神風尊

第卅沙土煮尊

第卅一大苫邊尊

第卅二惶根尊

以上所奉勸請內侍所者三十番神也、上古不秘之、自延喜聖代以來、平人不傳授之、神儒之家决、勿令他視之、勿愼怠云云、

第三　王城守護三十番神　番與上同

左靑龍八神

第一寅神　第二甲神　第三日神

第四卯神　第五乙神　第六辰神

第七雷神　第八風神

以上乃八神乎波將軍塚內仁封之天、自東朱雀至町而、九町之內於擁護之、

前朱雀八神

第一巳神　第二丙神　第三火神

第四午神　第五丁神　第六河伯神

第七己神　第八地神

以上八神於波男山淸水乃〇淸上恐脫石字畔仁封之天、自九條至五條坊門而十九町之內於擁護之、

右白虎八神

第一申神　第二庚神　第三月神

第四酉神　第五辛神　第六太白神

第七獰神　第八天神

以上八神於波高雄麓鳴瀧川邊仁封之天、自西朱雀至西洞院而九町之內於擁護之、

後玄武八神

第一亥神　第二壬神　第三水神
第四子神　第五癸神　第六海神
第七龍神　第八山神
以上乃八神於波紀森邊仁封之天、自一條至綾小路而廿町之内於擁護之、
第四　吾國守護三十番神（番與上不同、唯如字用之、聊有口訣、）
第一天神與地神　第二日高與太元
第三陰神與陽神　第四内宮源與外宮宗
第五狹槌與豐斟渟　第六泥土煮與沙土煮
第七大戸道與大苫邊　第八面足與惶根
第九忍穗耳與瓊瓊杵　第十火火出見與葺不合
第十一伊弉諾與伊弉冉　第十二日前與國懸
第十三淡路胞與淡路洲　第十四伊豫二名與筑紫洲
第十五隱岐洲與佐渡洲　第十六越洲與大洲
第十七對馬與壹岐嶋　第十八潮沫與水沫
第十九海原與野原　第二十川神與山神
第廿一野槌與句々迺馳　第廿二脚摩孔與手摩孔
第廿三思兼與手力雄　第廿四照日與月夜
第廿五杵築與八重垣　第廿六兒屋根與天種子
第廿七天御蔭與日御蔭　第廿八織津與秋津
第廿九氣吹戸與速佐須良　第卅夜司與晝司

高天原仁共誓曰、他國與利吾國與、他人與利吾人止、故天長久地久久、君樂人安、異賊襲來之恐毛無久、雜々罪事咎祟毛無、祝々他人不傳云々、

第五　禁闕守護三十番神

初十日伊勢國伊勢　　十一日山城國男山石清水
十二日山城國上下賀茂　　十三日同國松尾
十四日山城國大原野　　十五日大和春日
十六日山城平野　　十七日近江大比叡
十八日近江小比叡　　十九日近江聖眞子
二十日近江客人　　廿一日近江八王子
廿二日山城稻荷　　廿三日攝津住吉
廿四日山城祇園　　廿五日山城赤山
廿六日近江健部　　廿七日近江三上
廿八日近江兵主　　廿九日近江苗荷
卅日備中吉備津
初一日尾張熱田　　初二日信濃諏訪上下
初三日攝津廣田　　初四日越前氣比
初五日近江氣多　　初六日常陸鹿嶋
初七日山城北野　　初八日山城大原江文
初九日山城貴布禰○第五三十番神、又拾芥抄諸社部ニ見ユ、標シテ三十神名ト云フ、

閏月、備之前中後之三吉備津、一旬充守護之、但補每年六日之闕云爾、當日當番中、當神不企參詣、神

不在焉也、是故强不秘之云々、

此外番神有二種、一曰、傳敎大師與桓武皇帝、草創日枝山之時、誓約于神、而逐日令鎭府五神守護所依經云爾、因之號爲法華三十番神、番者直日番也、二曰、慈覺大師於楞嚴峰杉洞、如法經始行之時、每日有化現之瑞、號又曰番神云々、

第六　法華守護三十番神

大比叡 每月自朔日至六日守護之　小比叡 自七日至十二日守護之

聖眞子 自十三日至十八日守護之　客人 自十九日至廿四日守護之

八王子 自廿五日至晦日守護之

右件五神、山門鎭護靈神也、因玆令五神守護此經云々、閏月者爲諸末社之役云、

第七　如法經守護三十番神

初一日伊勢　初二日石淸水

初三日賀茂　初四日松尾

初五日平野　初六日稻荷

初七日春日　初八日大比叡

初九日小比叡　初十日聖眞子

十一日客人　十二日八王子

十三日大原野　十四日大神

十五日石上　十六日大倭

十七日廣瀨　十八日龍田

十九日住吉　廿日鹿嶋

廿一日赤山　廿二日健部
廿三日三上　廿四日兵主
廿五日苗荷　廿六日吉備津
廿七日熱田　廿八日諏訪
廿九日廣田　卅日氣比

凡人以禁闕守護番神爲法華守護、又以法華守護爲如法經守護、此段曾无蹤跡、抑慈覺大師者、貞觀六年甲申正月十四日入滅、是後經數年垂跡神多、如此番神中於祇園社者、貞觀十八年丙申始勸請之、北野天神者、延喜三年癸亥二月廿五日、於太宰府薨、慈覺大師入寂之後經四十年也、然天暦元年丁未六月九日、影向於右近馬場、是故改建祠堂於彼地、奉授神號、謂北野天滿天神、貞觀六年以降經八十餘年星霜者也、自彼分此、自此分彼、證迹知之、愼而莫怠矣、口訣亦多、○以上全文又見諸社根元記

〔類聚名物考神祇十〕三十番神

近代法華宗日蓮の派にて此名見ゆ、もとは比叡山如法經の守護神の三十番神を私に我物として、日本國の諸神、法華をもて勸請せざるは、悉く天上したまふなど日蓮の書に有よし、禁斷日蓮義十卷に云、日蓮の時代に三十番神を勸請したる事はなし、今も關東の日蓮宗の寺には多分番神を勸請せず、京都に於て日蓮滅後に、日蓮黨談合して三十番神を立と見えたり、いはんや如法經と云は、慈覺大師の御所行なり、然るに日蓮深く慈覺大師を誹謗し、然も如法經守護の番神を取て己が宗の鎭守とする事、豈盗たるにあらずやとも見えたり、又案に今此番神問答といふ書を得て見るに、卜部兼倶以下日蓮宗の僧徒との問答あり、委しくは事長ければ此に記さず、其書を見て知べし、

〔保元物語一〕新院御謀反露顯幷調伏附内府實能意見事

七福神

吾國邊地粟散ノ界トイヘドモ、神國タルニ依テ、總ジテハ七千餘座ノ神、殊ニハ三十番神朝家ヲ守リ奉リ給フ、

〔簸思記〕菅丞相〈○道眞〉百千の祟となり、〈○中略〉御殿さくるばかりになりさがりし時、御門〈○醍醐〉大にさわがせたまひ、今日の番神は、いかなる神にておはするぞと貞信公〈○藤原忠平〉にとはせたまへば、御はかしのつかがしらに白狐の現じたまふを見て、御心安くおぼしめされぬ、稻荷の大明神の御番にておはすと答へたまひければ、程なく神もなりやませたまひ、雨もはれ侍しとなり、

〔書言字考節用集十數量〕七福神〈辨財天、毘沙門天、大黑天、惠比須、福祿壽、布袋和尙、壽老人〉

〔仁王護國般若波羅蜜經受持品〕南閻浮提有十六大國、五百中國、十千小國、其國土中有七災難、一切國王爲是難故、講讀般若波羅蜜、七難卽滅、七福卽生、萬姓安樂、帝王歡喜、

〔日本七福神傳凡例〕一國俗以吉祥、辯才、多聞、大黑四天、布袋和尙、南極老人、及吾國蛭子神、稱七福神祭之、

元祿龍集戊寅十一年菊月穀旦　　　寓關東　摩訶阿賴耶識撰

○按ズルニ、佛神感應錄本朝七福神ノ名義利益ノ事トアル條ノ註ニ、七福神ノ傳ハ、ソノ撰者摩訶阿賴耶トシルセリ、コレハ大心ノ梵語ナリ、或人ノ云ク、大倫禪師ノ法嗣大心義統ナリトアリ

〔七福神考序〕　　北山　山本信有撰

我邦俗、相傳有七福神者、不知其所始、自數百年前既然、或云、名畫狩野氏創意爲之、一幅上收有若以帽服之貴、不貪權勢、獨樂于釣漁者、曰惠美主、有若居巾袴之富、安分知足以自守其有者、曰大黑、有若老而益得群鶴鹿、避名利全天年者、曰壽老、有若長頭短身形雖醜心甚美、故人忘其醜愛其美、醜却得淸閑、因美常遊衆君子之間、不敢斥者、曰福祿、有若如介冑大漢將軍武威猙獰使人怵伏不能仰見、然

能敬老崇德、擇交求諍懷、干城之器、長完功名者、曰毘沙門、有若在方外、無牀無吝、腹飽食囊滿物、吾不遺世、世亦不遺我懷少者、弄兒童遊戲三昧、如花過歲月者、曰布袋、有若清如梅潔如月、美而不冶、妍而不艷、天然異態遠山之眉輕蟬之鬢、細柳之腰、彎弓之足、不假紅粉之氣、而有幽貞之操者、曰辨財天、啓各雖殊、唯是一團和氣、堂上掛對、苟能觀念之、此是福其可量哉、又至畫趣粧點之妙、有倭人、有漢人、有不倭不漢人、其間添天神、星精、美人、武夫、方外之士、譬如一部水滸傳、金瓶梅、寫出種々人物、可喜可愛可敬可異之狀、抑至今長傳不廢者爲此也、○中略 寛政己未秋九月

〔南嶺子一〕世に七福神のかけ物といふものあり、漢土の布袋、日本の蛭兒、天竺の吉祥天女、あまさすもらさぬ取こみやうは、貪欲者流の物好なるべし、

〔神道問答下〕七福神

問云、七福神といへるも異國の神なるか、

答云、大國主命と、法華の大黑天と、よく似たる故に附會せしなり、其故は大國の字音、又御別名の大己貴の字音など大黑に近し、其上袋を負ひ給ひし事、鼠の古事などかた〴〵よく似たり、少彦名命、常世國に渡り給ひし故に夷(エビス)と名づけ、事代主命、魚釣給ふを樂みとし給へると、彦火火出見命の、鉤に釣をとられ給ひしを合せて、又蛭子(ヒルコ)の文字をよみ誤りなどして、夷といふを作りしなり、市杵嶋姬命を始め、なべての姬神たちを、蓮華三昧經、及辨財天經などにある、財施といふにもとづきて辨財天としたるなり、此三神は附會ながら皇朝の御神なり、毘沙門天は、四天王の中の一人にて、北方の門を守ると阿含經にあり、布袋は、外國經山寺の住僧なる由いへり、福祿壽は、よき字を撰び集めて一人の名とし、異形の人物を作りたる琉球人の僞作なり、さて六神にては數わろしと思ひて、尋常の老人を一人加へて、壽老人と號け、七神の數を合せて、天南星の化身といひのがれたるなり、

動植物爲神

〔東都歲事記一〕正月廿不定　七福神參　大國神、愛比壽、(神田社地、或は上野淸水堂の傍、)辨天、(不忍池中)毘沙門、(谷中天王寺)壽老人、(同所裏門前長安寺)布袋、(日暮里)福祿壽、(田畑西行庵、或は壽老人を除きて、上野大佛の前、吉祥天祠へ詣るあり、又山の手七福神參り、毘沙門、二本榎細川侯御やしき前、布袋、白金瑞聖寺天王殿、壽老人、福祿壽、白金妙圓寺妙見堂の内、辨天、目黑蟠龍寺、愛比壽、大黑、目黑不動尊境內、)

〔日本書紀神代一〕一書曰、是時素戔嗚尊下到於安藝國可愛之川上也、彼處有神、名曰脚摩手摩、其妻名曰稻田宮主簀狹之八箇耳、此神正有妊身、夫妻共愁、乃告素戔嗚尊曰、我生兒雖多、毎生輙有八岐大蛇來呑、不得一存、今吾且產、恐亦見呑、是以哀傷、素戔嗚尊乃敎之曰、汝可以衆菓釀酒八甕、吾當爲汝殺蛇、二神隨敎設酒、至產時、必彼大蛇當戶將呑兒焉、素戔嗚尊勅蛇曰、汝是可畏之神、敢不饗乎、乃以八甕酒、毎口沃入、其蛇飮酒而睡、素戔嗚尊拔劍斬之、

〔古事記上〕大國主神之兄弟、八十神坐、然皆國者避於大國主神、所以避者、其八十神、各有欲婚稻羽(○因幡)之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負帒、爲從者率往、於是到氣多之前時、裸菟伏也、爾八十神謂其菟云、汝將爲者、浴此海鹽、當風吹而伏高山尾上、故其菟從八十神之敎而伏、爾其鹽隨乾、其身皮悉風見吹拆、故痛苦泣伏者、最後之來大穴牟遲神見其菟、言何由汝泣伏、菟答言、僕在淤岐(○隱岐)嶋、雖欲度此地、無度因、故欺海和邇(此二字以音、下效此、)言、吾與汝競欲計族之多小、故汝者隨其族在悉率來、自此嶋至于氣多前、皆列伏度、爾吾蹈其上、走乍讀度、於是知與吾族孰多、如此言者、見欺而列伏之時、吾蹈其上讀度來、今將下地時、吾云汝者我見欺言竟、卽伏最端和邇、捕我悉剝我衣服、因此泣患者、先行八十神之命以誨告浴海鹽、當風伏、故爲如敎者、我身悉傷、於是大穴牟遲神敎告其菟、今急往此水門、以水洗汝身、卽取其水門之蒲黃、敷散而輾轉其上者、汝身如本膚必差、故爲如敎、其身如本也、此稻羽之素菟者也、於今者謂菟神也、故其菟白大穴牟遲神、此八十神者、必不得八上比賣、雖負帒、汝命獲之、

〔古事記傳十〕伯耆國人の云く、本國八橋郡東積村に、鷲大明神と云あり、須佐之男命を祭ると云、同村に大森大明神と云あり、大穴持命を祭ると云り、件兩社の神主細谷大和と云、さてその鷲

大明神を疱瘡の守神なりと云て、そのわたりの諸人あふぎ尊みて、小兒の疱瘡の輕からむことを祈る、○中略若は菟神は此社にて、鷺とは菟を誤りたるならむか、○中略貝原好古が和爾雅てふ物に、伯耆國素菟(ツサギ)大明神と云を載せたるも、彼社を云るにやあらむ、

〔古事記傳十〕おひつぎの考

出雲國意宇郡大庭神魂社神主秋上得國云、素菟神は、今も因幡國高草郡の海邊内海村に、白菟社とてあり、今は高草郡なれども、氣多郡に並て、氣多崎の内なり、かの伯耆なる鷺大明神と云は、出雲大社にも同名の社有て、疱瘡を祈る神なり、菟神は其には非ずといへりき、

〔古事記上〕綿津見大神、○中略即悉召集和邇魚問曰、今天津日高之御子、虛空津日高、爲將出幸上國、誰者幾日送奉而覆奏、故各隨己身之尋長、限日而白之中、一尋和邇白、僕者一日送卽還來、故爾告其一尋和邇、然者汝送奉、若渡海中時、無令惶畏、卽載其和邇之頸送出、故如期一日之内送奉也、其和邇將返之時、解所佩之紐小刀、著其頸而返、故其一尋和邇者、於今謂佐比持神也、

〔日本書紀神武三〕戊午年二月丁未、皇師遂東、六月丁巳、到熊野神邑、且登天磐船、仍引軍漸進、海中卒遇暴風、皇舟漂蕩、時稻飯命○神武同母兄乃歎曰、嗟乎吾祖則天神、母則海神、○玉依姬如何厄我於陸、復厄我於海乎、言訖乃拔劍入海、化爲鋤持(サヒモチノ)神、

〔古事記傳十七〕神武卷に、○中略化爲鋤持神とあるは、いたく異なる傳なり、此記に於今謂とあるを以見れば、後まで傳る中に佐比持神と云神の有ける、其神の初の由縁の傳の、此と彼と異なるなり、此神の二つあるにはあらず、

〔日本書紀欽明十九〕天皇幼時、夢有人云、天皇寵愛秦大津父者、及壯大必有天下、寐驚遣使普求、得自山背國紀伊郡深草里、姓字果如所夢、於是忻喜遍身、歎未曾夢、乃告之曰、汝有何事、答云、無也、但臣向伊勢商價來還、山逢二狼相鬪汚血、乃下馬洗漱口手、祈請曰、汝是貴神、而樂麁行、儻逢獵士、見禽尤速、乃抑止相鬪、拭洗血毛、遂遣放之、俱全命、天皇曰、必此報也、乃令近侍優寵日新、大致饒富、及至踐祚、拜大

藏省、

〔日本書紀十九欽明〕六年十一月、膳臣巴提便還自百濟言、臣被遣使、妻子相逐去、行至百濟濱、日晩停宿、小兒忽亡、不知所之、其夜大雪、天曉始求、有虎連跡、臣乃帶刀擐甲、尋至巖岫、拔刀曰、敬受絲綸、劬勞陸海、櫛風沐雨、藉草班荊者、爲愛其子令紹父業也、惟汝威神、愛子一也、今夜兒亡、追蹤覓至、不畏亡命、欲報故來、旣而其虎進前、開口欲噬、巴提便忽申左手、執其虎舌、右手刺殺、剝取皮還、

〔萬葉集十六有由緣并雜歌〕乞食者詠

伊刀古、名兄之君、居居而、物爾伊行跡波、韓國乃、虎云神乎、生取爾、八頭取持來、其皮乎、多多彌爾刺、(下略)

〔常陸風土記行方郡〕古老曰、石村玉穗宮大八洲所馭天皇(繼體)之世、有人箭括氏麻多智、截自郡西谷之葦原、墾闢新治田、此時夜刀神、相群引率、悉盡到來、左右防障、令勿耕佃、(俗曰、謂蛇爲夜刀神、其形蛇身頭角、率紀免(紀免二字恐似兎誤)時有見人者、破滅家門、子孫不繼、凡此郡側郊原甚多所住之、)於是麻多智大起怒情、著被甲鎧之、自身執仗打殺驅逐、乃至山口、標杭置堺堀、告夜刀神曰、自此以上、聽爲神地、自此以下、須作人田、自今以後、吾爲神祝、永代敬祭、冀勿祟勿恨、設社初祭者、卽還發耕田一十町餘、麻多智子孫相承致祭、至今不絕、其後至難波長柄豐前大宮臨軒天皇(孝德)之世、壬生連麻呂初占其谷、令築池堤、時夜刀神昇集池邊之椎樹、經時不去、於是麻呂擧聲大言、令修此池、要在活民、何神誰祇、不從風化、卽令役民曰、目見雜物魚蟲之類、無所憚懼、隨盡打殺、言了、應時神蛇避隱、所謂其池今號椎井也、

〔仙覺萬葉抄二〕常陸風土記云、新治郡驛家名曰大神、所以然稱者、大蛇多在、因名驛家云々、

〔日本書紀十四雄略〕七年七月丙子、天皇詔少子部連蜾蠃曰、朕欲見三諸岳神之形、汝膂力過人、自行捉來、蜾蠃答曰、試往捉之、乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇、天皇不齋戒、其雷虺虺、目精赫赫、天皇畏蔽目不見、却入殿中、使放於岳、仍改賜名爲雷、

器物解神

〔古事記 上〕於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黃泉國、○中略於是伊邪那岐命見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命言、令見辱吾、卽遣豫母都志許賣、此六字以音令追、○中略猶追到黃泉比良此二字以音坂之坂本時、取在其坂本桃子三箇待擊者、悉逃返也、爾伊邪那岐命告桃子、汝如助吾、於葦原中國所有宇都志伎此四字以音青人草之、落苦瀨而患惚時、可助告、賜名號意富加牟豆美命、自意至美以音

〔日本書紀 神代一〕一書曰、伊奘諾尊欲見其妹、到殯斂之處、○中略是時雷等皆起追來、時道邊有大桃樹、故伊奘諾尊隱其樹下、因採其實以擲雷者、雷等皆退走矣、此用桃避鬼之緣也、

〔古事記 上〕伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生生子、而於生終、得三貴子、卽其御頸珠之玉緖母由良邇此四字以音、下效此、取由良迦志、而賜天照大御神而詔之、汝命者所知高天原矣事依而賜也、故其御頸珠名、謂御倉板擧之神、訓板擧云多那

〔古事記 上〕故大國主神坐出雲之御大之御前時、自波穗、乘天之羅摩船而、內剝鵝皮剝、爲衣服、有歸來神、爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知、爾多邇且且恐具誤久白言、自多下四字以音此者久延毘古必知之、卽召久延毘古問時、答白、此者神產巢日神之御子少名毘古那神、自毘下三字以音○中略故顯白其少名毘古那神、所謂久延毘古者、於今者山田之曾富騰者也、此神者、足雖不行、盡知天下之事神也、

〔古事記傳 十二〕山田之曾富騰、こゝの文を按に、當時久延毘古と云ひしは、卽今世に至るまで、山田の曾富騰とて有る物是なりと云意なり、然れば久延毘古、卽曾富騰のことなり、さて曾富騰は、後の歌に曾富豆(ソホヅ)とよめる物にて、○中略名義は、或人、雨露にぬれそほちて立てる由なりと云り、今按に曾富豆と云は、後のことにて、本は曾富騰なれば、そほぢ人(ヒト)てふ意にや、○中略さて久延毘古てふ名も、よとゝもに雨露にうたれ、風に吹破られなどして、身體の壞れそこなはれたる意にもやあらん、

〔古今和歌集 十九誹諧〕題しらず　よみ人しらず

高天原

わしびきの山田のそほづおのれさへわれをはしといふうれはしきこと

〔後撰和歌集 五秋〕二人の男にものいひける女の、ひとりにつきにければ、今ひとりがつかはしける、

よみ人しらず

あけくらしまもるたのみをからせつゝたもとそほづの身とぞなりぬる

〔拾遺和歌集 九雜〕圓融院御時、大將はなれ侍て後、久しくまゐらでそうせさせ侍ける、

東三條太政大臣

あはれわれ、いつゝの宮の宮人と、その數ならぬ身をなして、略○中たれならなくにをやまだを、人にまかせてわれはたゞ、たもとそほづに身をなして、略○下

〔續古今和歌集 十七雜〕備中國湯川どいふ寺にて

僧都玄賓

山田もるそうづの身こそあはれなれあきはてぬればとふ人もなし

〔曾根好忠集〕秋

山田もるそほづも今はながめすな鶴やかたよりはさき見ゆめり

〔奥儀抄 下〕そほづとは、田におどろかしに立たる人がたなり、

〔古事記 上〕天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、訓高下天云阿麻、下效此、○又見日本書紀、

〔釋日本紀 五述義〕高天原　私記云、師說、謂上天也、案可謂虛空也、

〔古事記傳 三〕高天原は、すなはち天なり、略○註かくてたゞ天と云と、高天原と云との差別は如何ぞと云に、まづ天は天神の坐ます御國なるが故に、山川木草のたぐひ、宮殿そのほか萬の物も事も、全御孫命の所知看此御國土の如くにして、なほすぐれたる處にしあれば、略○註大方のありさまも、神たちの御上の萬の事も、此國土に有る事の如くになむあるを、此記及書紀神代卷に見て知べし、みな正しき神代の傳說なり、高天原としも云は、其天にして有る事を語るときの稱なり、[illegible]るな萬葉などに、天原ふりさけ見

れば、さよめるなどは、やゝ後のことなるべし、如此さまに、たゞ打見たるのみの天など、天ノ原とも云るが如きは、神代の御典などには見えぬことなり、さて然稱ふ由は、
高とは是も天を云稱にて、たゞに高き意に云るとはいさゝか異なり、然れば此高は體言なり、日の枕詞に、
高光(タカヒカル)と云も天照(アマテラス)と同意、高御座も天の御座と云ことにて、是等の高も同じ、又高行(タカユク)や隼別(ハヤブサワケ)など
は、高津ノ宮段の歌にあり、虛空を高と云るなり、此も高く行と云には非ず、抑天と虛空とは別なれば、細くは分て云ることもあれども、共に上方にあれば、此國土よりは天をそらとも、虛空を天とも通はし云も常にて、天つそらなど云り、されば高とも、天と虛空とを通はしたる名なり、共に高き方にあればなり、今世にも、天つ虛
空を然言ことあり、物の虛空に高く上るを、高へ上るなど云めり、但此は天下にあまねく云ことには非るか知らず、此伊勢國などにてはなり〳〵然云を聞くなり、古言のこれるなるべし、原とは廣く平らなる處を云、海原野原河原葦原などの如し、萬葉ノ歌には國原とも
あり、かゝれば天をも天原とは云なり、之原(ノハラ)と云例も、海之原(ワタノハラ)など、そのほかもあり、さて其に高てふ言を添て、高天ノ原
とは、此國土より云ことなり、凡て天を高とも云は、高きを以云稱なればなり、されば天照大御神の、天ノ石屋に隱坐る處
の御言、天ノ原自闇云々、又書紀の須佐之男命の天に上坐時、又御誓の處の天照大御神の御言必當奪我天ノ原云々、令治天ノ原也云云、などには、皆たゞ天ノ原とあり、其は天にして詔ふ御言なるが故なり、然るに書紀神代下卷に、同大御神の吾高天ノ原と詔へる處の一あるは、撰者の何心もなく書れたるか、いかにもあれたゞ此一をもて、なべてを疑ふべきにはあらず、多きに就て決むべきものぞ、これらの餘、此
國土より云るところになむ高天原とはある、凡て古文はかゝる事のいと正しきなり、

〔古事記 上〕伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生生子、而於生終得三貴子、卽其御頸珠之玉緖母由良邇此四字以音、下效此、取由良迦志、而賜天照大御神而詔之、汝命者所知高天原矣、事依而賜也、〇又見日本書紀

〔日本書紀 神代一〕於是素戔嗚尊請曰、吾今奉敎將就根國、故欲暫向高天原、與姉〇天照大神相見而後永退矣、勅許之、乃昇詣之於天也、

〔日本書紀 神代一〕一書曰、日神本知素戔嗚尊有武健陵物之意、及其上至便謂、弟所以來者非是善意、必當奪我天原、乃設丈夫武備、

〔古事記 上〕於是天照大御神見畏、閉天石屋戸而刺許母理此三字以音坐也、爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、

因此而常夜往。〇中略天宇受賣命、手次繫天香山之天之日影、而爲鬘天之眞拆、而手草結天香山之小竹葉、而訓小竹云佐佐於天之石屋戸伏汙氣、此二字以音而蹈登杼呂許志、此五字以音爲神懸而掛出胸乳、裳緒忍垂於番登也、爾高天原動而八百萬神共咲。〇中略故天照大御神出坐之時、高天原及葦原中國自得照明、

〔古事記上〕僕〇大國主神住所者、如天神御子之天津日繼所知之登陀流、此三字以音下效此天之御巢而於底津石根宮柱布斗斯理、此四字以音於高天原氷木多迦斯理、多迦斯理四字以音而治賜者、僕者於百不足八十坰手隱而侍、亦僕子等百八十神者、卽八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者、違神者非也、如此之白而於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍、多藝志三字以音而水戸神之孫櫛八玉神爲膳夫、獻天御饗之時、〇中略是我所燧火者、於高天原者、神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟、訓凝烟云州須之、八拳垂摩弖燒擧、摩弖二字以音地下者、於底津石根燒凝。〇下略

〔日本書紀神代二〕天照大神〇中略勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗、亦當御於吾兒、

〔神皇正統記神代〕大日孁尊、これを天照大神と申、又日神とも皇祖とも申なり。〇中略おはします所も、一には高天の原と云、

〔延喜式八祝詞〕新年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、高天原爾神留坐皇睦神漏伎命、神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久、〇下略

春日祭

天皇我大命爾坐世、〇中略春日能三笠山能下津石根爾宮柱廣知立、高天原爾千木高知氐、天乃御蔭日乃御蔭止定奉氐、〇下略

〔萬葉集二挽歌〕天皇〇天智聖躬不豫之時、大后〇天智后倭姫王奉御歌、

天原、振放見者、大王乃、御壽者長久、天足有、

黃泉國　根之堅洲國　根國底之國　下津國

日並〇並下疑脫二知字一皇子尊〇天武皇子草壁殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌、
天地之、初時之、〇中略高照、日之皇子波、〇中略天原、石門乎開、神上、上坐奴、〇下略

〔萬葉集雜歌三〕大伴坂上郞女祭神歌
久堅之、天原從、生來、神之命、奧山乃、賢木之枝爾、白香付、木綿取付而、〇下略

〔金槐和歌集〕神祇
やはよろづよもの神たちあつまれりたかまがはらにきゝたかくして

〔古事記上〕於是欲相見其妹伊邪那美命、追往黃泉國、爾自殿騰戶出向之時、伊邪那岐命語詔之、愛我那邇妹命、吾與汝所作之國未作竟、故可還、爾伊邪那美命答白、悔哉不速來、吾者爲黃泉戶喫、然愛我那勢命、那勢二字以音、下效此、入來坐之事恐、故欲還、且具與黃泉神相論、莫視我、如此白、而還入其殿內之間、甚久難待、故刺左之御美豆良三字以音、下效此、湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加禮斗呂呂岐氐、此十字以音、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黑雷居、於陰者拆雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、幷八雷神成居、於是伊邪那岐命見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命言、令見辱吾、卽遣豫母都志許賣、此六字以音、令追、爾伊邪那岐命取黑御鬘投棄、乃生蒲子、是摭食之間逃行、猶追、亦刺其右御美豆良之湯津津間櫛引闕而投棄、乃生筍、是拔食之間逃行、且後者、於其八雷神副千五百之黃泉軍令追、爾拔所御佩之十拳劒、而於後手布伎都都、此四字以音、逃來、猶追到黃泉比良此二字以音、坂之坂本時、取在其坂本桃子三箇待擊者、悉逃返也、爾伊邪那岐命告桃子、汝如助吾、於葦原中國所有宇都志伎此四字以音、青人草之落苦瀨而患惚時可助告、賜名號意富加牟豆美命、自意至美以音、最後其妹伊邪那美命身自追來焉、爾千引石引塞其黃泉比良坂、其石置中各對立、而度事戶之時、伊邪那美命言、愛我那勢命、爲如此者、汝國之人草、一日絞殺千頭、爾伊邪那岐命詔、愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百產屋、是以一日必千人死、一日必千五百人生也、故號其伊邪那美命

謂黃泉津大神、亦云、以其追斯伎斯此三字以音而號道敷大神、亦所塞其黃泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黃泉戸大神、故其所謂黃泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也、是以伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在祁理、此二字以音故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原、而禊祓也、

〔出雲風土記出雲郡〕宇賀鄕、中略○即北海濱有礒、中略○自礒西方有窟戸、高廣各六尺許、窟內有穴、人不得入、不知深淺也、夢至此礒窟之邊者必死、故俗人自古至今、號云黃泉之坂、黃泉之穴也、

〔古事記傳六〕黃泉國は、豫母都志許賣、又書紀に、余母都比羅佐可などの例多きに依て、豫母都久爾とよみつ、たゞ黃泉とのみあるは、豫美とよむべし、さて豫美は、死し人の往て居る國なり、中略○源氏夕霧卷に、よみぢのいそぎとあるは泉路なり、榮花物語音樂卷に、よみづとにし侍むとあるは、黃泉にゆく裹なり、生返をよみがへると云も、黃泉より返るなり、俗にも黃泉路へ、黃路障などいふ、名義は、口訣に夜見土とある土字は非なれど、夜見はさも有ぬべし、

〔伊呂波字類抄人與〕蘇ヨミガヘル

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊追至伊弉冉尊所在處、便語之曰、悲汝故來、答曰、族也勿看吾矣、伊弉諾尊不從、猶看之、故伊弉冉尊恥恨之曰、汝已見我情、我復見汝情、時伊弉諾尊亦慙焉、因將出返、于時不直默歸而盟之曰、族離、又曰不負於族、乃所唾之神、號曰速玉之男、次掃之神、號泉津事解之男、凡二神矣、及其與妹相鬪於泉平坂也、伊弉諾尊曰、始爲族悲及思哀者、是吾之怯矣、時泉守道者白云、有言矣曰、吾與汝已生國矣、奈何更求生乎、吾則當留此國、不可共去、是時菊理媛神亦有白事、伊弉諾尊聞而善之、乃散去矣、但親見泉國、此既不祥、故欲濯除其穢惡、乃往見粟門及速吸名門、

〔延喜式八祝詞〕鎭火祭
神伊佐奈伎伊佐奈美乃命、妹背二柱嫁繼給氐、國能八十國、嶋乃八十嶋乎生給比、八百萬神等乎生

給比氏、麻奈弟子爾火結神生給氏、美保止被燒氏、石隱坐氏、〇中略如是時爾吾名妹乃命能吾乎見給布奈止申乎、吾乎見阿波多志給比津申給氏、吾名妹能命波上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知牟止申氏、石隱給氏、〇下略

〔延喜式八祝詞〕六月晦大祓

氣吹戸坐須氣吹戸主止云神、根國底之國爾氣吹放氐牟、如此久氣吹放氐波、根國底之國爾坐、速佐須良比咩登云神、持佐須良比失氐牟、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊奘諾尊勅任三子曰、天照大神者、可以治高天原也、月讀尊者、可以治滄海原潮之八百重也、素戔嗚尊者、可以治天下也、是時素戔嗚尊年已長矣、復生八握鬚髯、雖然不治天下、常以啼泣恚恨、故伊奘諾尊問之曰、汝何故恒啼如此耶、對曰、吾欲從母於根國、只爲泣耳、伊奘諾尊惡之曰、可以任情行矣、乃逐之、

〔日本書紀神代一〕是時素戔嗚尊、自天而降到於出雲國簸之川上、〇中略遂就於根國矣、

〔古事記上〕故伊邪那岐大御神詔速須佐之男命、何由以汝不治所事依之國而、哭伊佐知流、爾答白、僕者欲罷妣〇伊邪那美神國根之堅洲國、故哭、爾伊邪那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可住此國、乃神夜良比爾夜良比賜也、自夜以下七字以音

〔古事記上〕御祖命〇刺國若比賣告子云、可參向須佐能男命所坐之根堅洲國、必其大神議也、故隨詔命而參到須佐之男命之御所者、〇中略喚入八田間大室、而令取其頭之虱、故爾見其頭者、呉公多在、於是其妻以牟久木實與赤土授其夫、故咋破其木實、含赤土唾出者、其大神以爲咋破呉公唾出而、於心思愛而寢、〇中略故其所寢大神聞驚、而引仆其室、然解結椽髮之間遠逃、故爾追至黄泉比良坂、遙望呼謂大穴牟遲神曰、其汝所持之生大刀、生弓矢以而、汝庶兄弟者、追伏坂之御尾、亦追撥河之瀨而、意禮二字以音爲大國主神、亦爲宇都志國玉神、而其我之女須世理毘賣爲嫡妻而、於宇迦能山三字以音之山本、於底津石

根宮柱布刀斯理、(此四字以音)於高天原氷椽多迦斯理(此四字以音)而居、是奴也、

〔榮花物語(十七音樂)〕御堂(〇法成寺)供養、治安三年七月十四日と定めさせ給へれば、(中略)〇あやしのものども、あまりなるまでおまへ近う立こみたり、人々いと見苦し、かれ少しのけさせよとのたまはすれば、(中略)〇わが君や、よ〇み〇づ〇と〇にし侍らんずるなり、助け給へと手をするもあはれにて、えきはやかにもおはす、

〔空穗物語(國讓中)〕たゞ宰相をなん思ひ侍に、よ〇み〇ぢもやすくもまかるまじく、よろづのところのせきとなることゝ、ちし侍を、(下略)〇

〔源氏物語(二十二玉葛)〕老の身の殘りとゞまりたるも、いと心うけれど、うち捨奉りたまへるわか君の、らうたくあはれにておはしますを、よ〇み〇ぢのほだしにもてわづらひ聞えてなん、またゝき侍るといひつゞくれば、(下略)〇

〔源氏物語(三十九夕霧)〕さても契りふかくなる世をしらせんの御心なゝり、俄にうちつゞくべかなる、よ〇み〇ぢのいそぎは、さこそは契り聞えしかど、いとつれなく聞えて、何くれとこしらへ聞えてなやさめたまへば、(下略)〇

〔萬葉集(九挽歌)〕哀弟死去作歌

父母賀成乃任爾、箸向、弟乃命者、(中略)〇遠津國、黃〇泉〇乃界丹、蔓都多乃、各各向向、天雲乃、別石往者、(下略)〇

見菟原處女墓歌

葦屋之、菟名負處女之、(中略)〇倭文手纒、賤吾之故、丈夫之、荒爭見者、雖生、應合有哉、宍串呂、黃〇泉〇爾將待跡、隱沼乃、下延置而、打嘆、妹之去者、(下略)〇

〔倭名類聚抄(二鬼神)〕醜女　日本紀云、醜女、(和名志古女)或說云、黃〇泉〇之〇鬼〇也、世人爲恐小兒稱許〇許〇女〇者〇此〇語〇之〇訛〇、

〔十訓抄四〕堀河院御時、中宮の御方に、半物に砂金と云て、双なき美女有けり、略〇中鬼しこめし〇鬼こめ、古今著聞集十六作鬼こいめ、をも物ならず思へる武士は、恐ろしき物ぞ、思とも叶ふべからず、無沙汰にて有あんと云、

〔續詞花和歌集二十戲咲〕濟圓仲胤は、かたちのにくさげなるを、かたみにおにとつけてなんいどみわらひけるに、濟圓公請にまゐらすとて、綱所の下部つきて、房をこぼちたくなりと聞ていひつかはしける、

僧都仲胤

まことにや君がつかやをやぶるなる世にはまされるこゝめありけり〇又見續世繼二

〔日本書紀九神功〕九年〇仲哀十月辛丑、從和珥津發之、略〇中新羅王遙望、以爲非常之兵將滅己國、讋焉失志、乃今醒之曰、吾聞東有神國、謂日本、亦有聖王、謂天皇、必其國之神兵也、豈可擧兵以距乎、卽素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降於王船之前、

〔大神宮諸雜事記一〕用明天皇卽位二年丁未、聖德太子與守屋大臣合戰、其故者、太子修行佛法、我朝欲弘法爪、大臣我朝偏依爲神國、欲停止佛法志天成欲誅殺太子之命、

〔源平盛衰記二十九〕三箇馬場願書事

昔越前國麻生津ニ、三神ノ安角ガ二男、越大德神融禪師ト云人マシ〳〵キ、略〇中元正天皇御宇養老元年ニ、和尙當國大野郡伊野原ニ遊止シ給ヒタリケルニ、一人ノ貴女化現シテ云、日本秋津嶋ハ本是神國也、我天神最初ノ國常立尊ヨリ跡ヲ降シテ以來、百七十九萬二千四百七十六歲、上ハ上皇ヲ讓、下ハ下民ヲ撫、略〇下

〔東大寺要錄一〕天平十四年十一月三日、右大臣正二位橘朝臣諸兄、爲勅使參入伊勢大神宮、天皇〇聖武御願寺可被建立之由所被祈也、爰件勅使歸參之後、同十一月十五日夜示現給布、帝皇御前玉女坐、而放金光、氐宣久、當朝ハ神國ナリ、尤可奉欽仰神明給也、略〇下

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年十二月十四日丁酉、遣使者於伊勢大神宮奉幣、告文曰、〇中略日本朝波所謂神明之國奈利、神明之助護利賜波、何乃兵寇加可近來岐、廿九日壬子、遣使者於石清水神社奉幣、告文曰、〇中略若賊謀已就天、兵船必來倍久在波、境內爾入給須天、之逐還漂沒米給比、我朝乃神國止畏憚來禮留故實乎、澆太之失比賜不奈、〇下略

〔小右記〕長元四年八月廿三日戊辰、早朝大外記文義來申云、廿六日國忌、而廿五日伊勢使可立、〇中略兵部權大輔忠貞持來宣命草、〇中略天皇我詔旨度掛畏岐、〇中略天照坐皇大神乃廣前仁恐見恐美毛申賜波止久申久、本朝波神國奈利、〇中略往聖モ猶其道乎專須、況朕之不德奈留、偏奉欽仰乃見奈利、〇下略

〔保元物語一〕新院御謀反露顯幷調伏事附內府實能意見事

新院〇崇德御謀反ノ事、〇中略敎長卿思計ナクシテ、兄德大寺內大臣實能公ノ許ニ行、斯ル御計ヒコソ候ヘト聞エシカバ、內府大ニ驚カセ給ヒテ、〇中略哀詮ナキ御企哉、末代ト云ナガラ、サスガ天子ノ御運ハ、凡夫ノ思フ處ニアラズ、天照大神正八幡宮ノ御計ヒナリ、吾國邊地粟散ノ界トイヘドモ、神國タルニ依テ、總ジテハ七千餘座ノ神、殊ニハ三十番神朝家ヲ守リ奉リ給フ、〇下略

〔源平盛衰記一〕淸盛捕化鳥幷一族官位昇進附禿童幷王莽事

日本ハ是神國也、伊弉諾伊弉冉尊ノ御子孫、國ノ政ヲ助給フ、

〔源平盛衰記六〕小松殿敎訓父事

內府〇平重盛ヤヽ暫ク在テ、直衣ノ袖ヨリ疊紙ヲ取出シ、落ル淚ヲ推拭被申ケルハ、〇中略日本ハコレ神國也、神ハ非禮ヲ受給ハズ、〇中略濫リガハシク法皇〇後白河ヲ傾進セントノ御計ヒ、方々不可然、

〔吾妻鏡四〕元曆二年五月廿四日戊午、源廷尉義經〇中略付因幡前司廣元、奉一通欵狀、〇中略彼書云、

左衛門少尉源義經乍恐申上候、〇中略猶以無御宥免、我國神國也、神不可稟非禮、所憑非于他、偏仰

貴殿廣大之御慈悲、○下略

〔撰集抄九〕内侍所御事

我朝は是神國なり、佛法の佛法たる、是神の力、王法の王法たる、擁護の神力なり、一天のあるじ、萬乘の寶位と仰がれ給へる天子は、忝も伊勢大神の御ながれ、藤氏の長者、天下の攝政といつかれたまふは、春日の明神の御末にいまそかりける、百寮何か神氏をはなれたまへるはおはしまさず、

〔續後撰和歌集神祇九〕神祇の心をよませ給うける　土御門院御製

光をば玉くしの葉にやはらげて神の國とも定てしがな

〔玉蘂〕承久二年四月十三日壬申、齋日魚味之例、公家六齋日供魚味事、遣問師重朝臣之處、申狀無殊事、○中略我朝者神國也、因茲當神事供魚味尤有謂、其外輙難供魚味歟、

〔風雅和歌集神祇十九〕雜歌の中に　前大僧正慈鎭

日の本は神のみ國ときヽしより○きヽしより、一本作きくからにいますがごとく賴むとをしれ

〔平戸記〕仁治三年正月十九日壬寅、東使只今參入阿波院宮嵯峨後可宜之由令申之由、粗所聞也、○中略抑此事關東計申之條○中略一旦雖被仰合、愍以凡卑之下愚計立帝位之條、未曾有事也、我朝者神國也、不似異域之風、自茲天地開之後、國常立尊以降、皆先主令計立給、○下略

〔本朝文集〕贈蒙古國中書省牒　菅長成

日本國太政官牒、蒙古國中書省、附高麗國使人牒送、○中略凡自天照皇大神耀天統、至日本今皇帝受日嗣、聖明所覃、莫不屬左廟右稷之靈、得一無貳之盟、○中略故以皇土永號神國、非可以知競、難以力爭、○中略今以狀牒到、准牒故牒、文永七年正月日、

〔神皇正統記神代〕大日本は神國なり、天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ、我國のみ此事

惟神

あり、異朝には其類無し、此の故に神國といふなり、

〔神皇正統記應神〕この國は神國なれば、神道に違ひては、一日も日月を戴くまじきいはれなり、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

貞永ニ五十一箇條ノ式目ヲ定テ、〇中略世治リ民直ナリシカ共、我朝ハ神國ノ權柄、武士ノ手ニ入、王道仁政ノ裁斷、夷狄ノ眸ニ懸リシヲコソ歎キシカ、〇下略

〔新拾遺和歌集十六神祇〕題しらず　源智行

天地のひらけしよりやちはやぶる神の御國といひはじめけん

〔權談治要〕一神をうやまふべき事

我國は神國也、天地開けて後、天神七代地神五代相つぎ給ひて、よろづのことわざを始め給へり、又君臣上下、おの〳〵神の苗裔にあらずといふ事なし、是によりて百官の次第をたつるには、神祇官を第一とせり、又議定始評定始といふ事にも、先神社の修造、祭祀の興行をもはらさだめらる、皆神をうやまふ故なり、

〔日本書紀二十五孝德〕大化三年四月壬午、詔曰、惟神惟神者、謂隨神道、亦自有神道也、我子應治故寄、是以與天地之初、君臨之國也、〇中略是故今者隨在天神、屬可治平之運、使悟斯等、而治國治民、是先是後、今日明日、次而續詔、

〔古事記傳一〕直毘靈

書紀の難波長柄朝廷孝德〇事御卷に、惟神者、謂隨神道亦自有神道也、とあるをよく思ふべし、神道に隨ふとは、天下治め賜ふ御しわざは、たゞ神代より有こしまに〳〵物し賜ひて、いさゝかもさかしらを加へ給ふことなきをいふ、さてしか神代のまに〳〵大らかにしろしめせば、おのづから神の道は足らひて、他にもとむべきことなきを、自有神道とはいふなりけり、かれ現

御神と大八洲國しろしめすと申すも、其御世御世の天皇の御政、やがて神の御政なる意なり、

萬葉集の歌などに、神隨云々とあるも同じこゝろぞ、

〔延喜式祝詞八〕遷却祟神祭

皇御孫之尊乃天御舍之内仁坐須皇神等波、荒備給比健備給比祟給事無志氏、高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食氏、中略山川乃廣久淸地爾遷出坐氏、神奈我良鎭坐世止稱辭竟奉止申、

〔續日本紀聖武九〕神龜元年二月甲午、受禪卽位於大極殿、大赦天下、詔曰、中略四方食國乃年實豐爾牟倶佐加爾得在止見賜而、隨神母所念行爾、中略天日嗣高御座食國天下之業乎、吾子美麻斯王爾聖武授賜讓賜止詔天皇元正大命乎頂受賜恐美持而、中略天地之心母勞久重、百官之情母辱愧美奈母、隨神所念坐、

〔萬葉集雜歌一〕幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作

安見知之、吾大王持統、神長柄、神佐備世須登、芳野川、多藝津河内爾、高殿乎、高知坐而、中略山川母、依氏奉流、神乃御代鴨、

反歌

山川毛、因而奉流、神長柄、多藝津河内爾、船出爲加母、

藤原宮之役民作歌

八隅知之、吾大王、高照、日之皇子、荒妙乃、藤原我宇倍爾、食國乎、賣之賜牟登、都宮者、高所知武等、神長柄、所念奈戸二、天地毛、縁而有許曾、磐走、淡海乃國之、衣手能、田上山之、眞木佐苦、檜乃嬬手乎、物乃布能、八十氏河爾、玉藻成、浮倍流禮、中略新代登、泉乃河爾、持越流、眞木乃都麻手乎、百不足、五十日太爾作、泝須良牟、伊蘇波久見者、神隨爾有之、

〔萬葉集挽歌二〕日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

[illegible]

天地之初時之、○中略高照日之皇子波、飛鳥之淨之宮爾、神隨、太布坐而、天皇之敷坐國等、天原石門乎開、神上、上坐奴、○下略

弓削皇子薨時置始東人歌

安見知之、吾王、高光、日之皇子、久堅乃、天宮爾、神隨、神等坐者、其乎霜、文爾恐美、○中略臥居雖嘆、飽不足香裳、

〔萬葉集十三相聞〕

葦原、水穗國者、神在隨、事擧不爲國、雖然、辭擧叙吾爲、○中略百重波、千重浪敷爾、言上爲吾、

〔萬葉集十九〕向京路上依興預作侍宴應詔歌

蜻嶋、山跡國乎、○中略所知來流、天之日繼等、神奈我良、吾皇乃、天下、治賜者、○下略

〔職原抄上〕神祇官、（唐大常寺、又云祠部、）

以常官置諸官之上、是神國之風儀、重天神地祇故也、

〔職官志一〕神祇官

夫祀、邦之大典、是以其叙官也、神祇處首、所貴於王道者、於是乎見、

〔令義解二職員〕攝津職（帶津國）

大夫一人、（掌祠社、謂祠者、祭百神也、社者、檢校諸社也、凡稱祠社者、皆准此例、）戶口、○中略及寺、僧尼名籍事、

大宰府（帶筑前國）

主神一人、（掌諸祭祠事、）帥一人、（掌祠社、）戶口、○中略歸化、饗讌事、

大國

守一人、（掌祠社、）戶口、○中略及寺、僧尼名籍事、

〔職官志五〕攝津大夫及亮、掌國之祠社、以祈福祥、司民之簿帳、以課農桑、（僧尼名簿亦知之、按祀之與政其致一、天子之職[illegible]之）

而已、京師別之二官、一曰神祇、一曰太政、外廷唯於太宰府置主神、掌諸祭祠事、置帥貳掌軍國之政、是皆所以多務分其職也、諸國司不敢分其職、使守介兼掌祀政、一國攝津職、所以因神道成民事、於是乎可見、

〔延喜式十一太政官〕凡內外諸司所申庶務、辨官總勘、申太政官、其史讀申皆依司次、若申數事、各先神事、

〔禁秘御抄上〕賢所

凡禁中作法、先神事、後他事、旦暮敬神之叡慮無懈怠、

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年七月己卯、天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問大夫與百伴造等、以悅使民之路、　庚辰、蘇我石川麻呂大臣奏曰、先以祭鎭神祇、然後應議政事、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年四月己巳、勅、祭祀神祇、國之大典、若不誠敬、何以致福、如聞諸社不修、人畜損穢、春秋之祀、亦多怠慢、因茲嘉祥弗降、災異荐臻、言念於斯、情深慙惕、宜仰諸國莫令更然、

〔年中行事秘抄〕天子每日御拜事

仁和四年十月十九日御記、辰刻、我國者神國也、每朝敬拜四方大中小天神地祇、敬拜之事、自今後一日無怠云々、

〔權記〕長保二年正月廿八日丙午、立后(○一條后彰子)宣命日、可令擇申之由、先日內々以此氣色可告大臣(○彰子父藤原道長)之由蒙勅命、(○中略)當時所坐藤氏皇后、東三條院(○圓融后詮子)皇太后宮(○圓融后遵子)中宮(○一條后定子)皆依出家無勤氏祀、(○中略)今加其一、令勤神事有何事哉、我朝神國也、以神事可爲先、中宮雖爲正妃、已被出家入道、隨不勤神事、(○中略)重立妃爲后、令掌氏祭可宜歟、(○下略)

〔朝野群載六神祇官〕行幸神祇官事

右我朝神國也、以敬神可爲先、以如在可爲禮、而皇居程遠、弃而不被行者、公事已絕、神慮可恐、(○中略)抑自里亭行幸八省、是騎馬也、其儀宜被准據歟者、以此旨可然之樣可被洩達之狀如件、

十月五日　權大納言實行

○按ズルニ、朝野群載ノ十月五日ハ、長承元年ナランカ、中右記同年十月二日ノ下ニ、頭中將送消息云、神祇官行幸、近代以降、皇居程遠無其儀、神事違例職而斯由、今改徒步之儀、可興騎馬之例歟、又無便宜之時、就無其例、不可有沙汰歟、兩端之間、可令計申者、トアレバナリ、附シテ後考ニ供ス、

〔玉蘂〕建暦二年三月廿二日宣旨左大臣右大辨

一可如法勤行諸社祭祀神事等事

抑吾朝彝範、爲先敬神、萬機繁務、無過愼祭、是以治邦安民、恐懼幽冥、恒例臨時、宜儆禮儀、而有司怠慢、而不關職掌、諸國拒捍、而如忘本條、非只乖忤、且是狎瀆神禁、事之陵夷、責而有餘、早守祭式、宜令催行、

一可停止京畿諸社祭供奉人裝束已下過差事

抑邊鄙之民、下愚之輩、或裁綾羅錦繍、或飾金銀珠玉、雖似神事之嚴重、偏爲國家之煩費、永從禁制、不可違濫、

〔兵範記〕久壽三年○保元元年三月十三日甲寅、裏書、新司○藤原親隆宣、伊豫國在廳官人等、

仰下三箇條

一可勤行恒例神事事

右治國之務、爲先神事、仍守恒例之式日、可致如在之禮奠矣、

一可被行德政事○中略

〔兵範記〕仁安三年十二月廿九日丙辰、左大臣○藤原經宗參著仗座、○中略

右大將藤原朝臣定申云、本朝者神國也、國之大事、莫過祭祀、而近年神事動多違例、思其神享、豈有其應乎、自今以後宜仰祠官、殊可儆禮奠歟、○下略

〔三長記〕建仁元年七月十八日丙寅、於院或人語曰、右少辨親國、去年歳事被仰齋宮行事、者四月始、群

行之事、所受不致一事、沙汰神事之禮甚以忘敬神、常以泊會舞妓、或競袖酣醉之後、於齋屋注連之中令舞妓之間、忽然蛇出來、郎隱不見、自翌日病惱、仍辭退奉行云云、去八日被仰右少辨光親也、此間連日參會行事所、用途六萬匹、當時一塵無拾納物云云、我朝神國也、嚴重神事、猶以擁怠、可悲可悲、

〔壬生家文書〕太政官符山陰道諸國司

雜事拾貳箇條

應任式條令勤行年中諸祭事

右左大臣宣、奉勅國之大事莫過祭祀、因玆諸國調庸貢進之日、總計年中祭物之數、可納別藏、勒其事狀、載延長四年五月廿七日符、而近年緣事所司積習常例、每事怠慢、禮奠之遲、專背如在、供祭之物、多非本色、敬神之道可其然乎、就中祈年祭者、京官外國相分、所奠之神三千餘座也、事緊日還令闕神供云云、自今以後先祭ロ箇日、下知諸司、任式勤行者、○中略

以前條事如件、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣

修理宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰

治承二年七月十八日

〔吾妻鏡 三〕壽永三年○元暦元年二月廿五日甲申、朝務事、武衛○源頼朝注御所存、條々被遣泰經朝臣之許云云、其詞云、

言上

條々○中略

一諸社事

我朝者神國也、○中略恒例神事守式目、無懈怠可令勤行由、殊可有尋御沙汰候、

〔御成敗式目〕一可修理神社專祭祀事

右神者依人之敬增威、人者依神之德添運、然則恒例之祭祀、不致陵夷、如在之禮奠、莫令怠慢、因玆於關東御分國國幷庄園者、地頭神主等各存其趣、可致精誠也、兼又至有封社者、任代々符、小破之時且加修理、若及大破、令言上子細者、隨其左右、可有其沙汰矣、

〔平戸記〕寬元三年二月十日乙亥、殿下又被仰下云、神事可被興行間事可計申者、大藏卿已上又申之、一巡申了之後、又有評定、彼是頗似喧嘩、如何、此儀良久不成、殿下頻有御問答、（中略）神事興行事、祈年、祈年穀、月次祭已下諸社祭禮等、皆可有糺行之儀者、先幣物裹物庭積等、於今者無實也、皆悉可有尋沙汰、而件事等臨末代難治歟、可守式數者、其物今者多以無實也、仍文治意見、光長卿議定云、無實物等、可被定其代物、可被立新式歟云云、此儀可然之由有沙汰、於記錄所被定之、然而終無施行、建曆末、建保初、又及此沙汰、已雖被定其奉行等人數、終又無施行、近者仁治、此沙汰子細同前、可被興行者、先有此豫議、可被定其法歟、近來如季宛幣、猶有違亂、郡以對捍國分逐年被召越之間、其辨不可勝計、謂召越者、以夏季春時召越之也、兩三年分引上云云、被召越之間、諸國愁申之、不堪譴責、或前日、或當日、尋求之間、不能織儲、皆以切績、神宮御幣者、不切績事也、殊被織事也、近例如此、件季宛者、建久年分勾當辨極範朝臣申行之定置也、其後無違亂、而年序相隔之間、有相違之國等、依之其後度々被切替之處、頃年以降、又以如此、以後所納物、國々對捍之國分、且被尋子細、且所申有謂者可切替、所申無謂者可有譴責之沙汰歟、如此事其數已多、無一々之沙汰者、興行之儀不可有其詮歟、

土御門前内府、此篇申神社修造事、其條々言上之趣、不能記之、有封之神事、於今者封戸無實、其條又難叶歟、（中略）○

久我前内府申詞、後日尋聞之、（□頗宮圓尋同注之云云）

條々大概同評議、（中略）彼神事興行尤可有沙汰、祭禮之幣物庭積等、末代之法、如式數不可叶、折中

之儀可ㇾ有二評議一歟、久安年中、於二上卿里第一召二寄人等、神祇官外記等覽一有二此沙汰一之由見及候、任二彼例一可ㇾ有二沙汰一歟、被ㇾ付二造國司一社等、不ㇾ臨二土木之營一一任空過、尤不便、殊可ㇾ被ㇾ誡、

〔花營三代記〕應安七年十二月廿八日

下仰三ヶ條

一神事

右神之爲ㇾ神以二人之祭禮一人之爲ㇾ人以二神之加護一因ㇾ玆守二式目一專二如在之禮奠一限二永代一爲二不朽之勤行一焉、〇中略

以前三ヶ條所ㇾ仰如ㇾ件

年號正月日

〔樵談治要〕一神をうやまふべき事

我國は神國也、〇中略是によりて百官の次第をたつるには、神祇官を第一とせり、又議定始、評定始といふ事にも、先神社の修造、祭祀の興行をもはら定めらる、これ皆神をうやまふ故なり、

〔續古事談〕一王道后宮堀川院在位ノ御時、坊門左大辨爲隆職事ニテ、大神宮ノウタヘヲ申入ケルニ、御笛ヲフカセ給テ、御返事モナカリケレバ、爲隆白川院ニ參テ、內裏ニハ御物氣起ラセオハシマシタリ、御祈ハジマルベシト申ケリ、院驚カセ給テ、內侍ニ問セ給ケレバ、サル事夢ニモ侍ラズト申ケリ、アヤシミテ爲隆ニ御尋アリケレバ、其事ニ侍リ、一日大神宮ノ訴ヲ奏聞シ侍シニ、御笛ヲアソバシテ勅答ナカリキ、是御物ノケナドニアラズバアルベキ事ニアラズト思テ申侍リシ也ト申ケレバ、院ヨリ內ヘ其由申サセ給ケリ、御返事ニハ、サル事侍リキ、タヾノ事ニハアラズ、笛ニ祕曲ヲ傳ヘテ、其曲ヲ千遍フキシ時、爲隆參テ事ヲ奏シキ、今二三反ニナリタレバ、フキ果テイハムト思シホドニ尋シカバ、マカリ出ニキ、ソレヲサ申ケル、イト恥シキ事也ト

ゾ申サセ給ケル、

白川院ノ御前ニテ、爲隆事ヲ奏シケルニ、題目事ノ外ニ重リテ、ウルサゲニ思食タリケルヲ、此次ニ申文ノアル限リ奏シハテムト思テ、知ズ顔ニテ申居タリケルニ、申文今五六通バカリニナリテ、院タヽセオハシマサムトシケルヲ、爲隆見ズ顔ニテ、祭主大中臣某謹申請天裁事トヨミ聞セ進ラセタリケレバ、大神宮ノ訴ヨナトテ返リ居サセ給ニケリ、ソレヲカニテ殘ヲモ申ハテヽゾ出ニケル、スベテカヤウニセシカウアリテ、ユヽシカリケル人ナリ

〔令義解二神祇〕凡一月齋爲大祀、謂上條云散齋一月、卽此條所謂齋者、皆散齋也、唯於一日齋更無散齋、其致齋者皆在散齋限內也、三日齋爲中祀、一日齋爲小祀、

○按ズルニ、一月齋ノ事ハ、大嘗祭篇齋戒禁忌ノ條ニ辨アリ、參看スベシ、

〔令義解六衣服〕親王禮服、〇中略諸王禮服、〇中略諸臣禮服、〇中略大祀大嘗元日則服之、謂此文承上三條也、大祀者、臨時之大祀、假如祀天神之類也、

〔令義解七公式〕論奏式

右大祭祀、謂神祇令所言大祀、及臨時大祀之類也、〇中略並爲論奏、畫聞訖留爲案、御畫後注奏官位姓、

〔延喜式一四時祭〕凡踐祚大嘗祭爲大祀、祈年、月次、神嘗、新嘗、賀茂等祭爲中祀、大忌、風神、鎭花、三枝、相嘗、鎭魂、鎭火、道饗、園韓神、松尾、平野、春日、大原野等祭爲小祀、

〔律疏〕八虐

六曰、大不敬、謂毀大社、及盜大祀神御之物、乘輿服御物、

〔律疏職制〕凡大祀不預申期、及不頒告所司者、笞五十、以故廢事者徒一年、謂依令、祭祀所司預申太政官、官散齋之日平旦頒告諸司、其不預申期、及不頒下者、各笞五十、卽闕事中及頒下、少不闕所祭事、以故廢事者、所由官司徒一年、應連坐者、各依公坐法、節級得罪、幣帛之屬不如法、杖六十、謂不依常式、一事有闕少者、闕數者杖八十、謂闕一事小者、全闕者杖一百、謂全闕一色、中小祀遞減二等、謂大祀以下闕者、中祀減大祀二等、小祀減中祀二等、故云遞減、

二等、餘條中小祀準此、（謂下條大祀在散齋弔喪問疾、盜律盜大祀神御物之類、本條無中小祀罪名者、準此遞減、）

凡大祀在散齋、而弔喪問疾、判署刑殺文書、及決罰、食宍者笞五十、奏聞者杖七十、（判謂定罪、殺謂戮人、此等文書不得判署、及不得決罰杖笞、違者笞五十、若以此刑殺決罰等事奏聞者杖七十、）致齋者、各加二等、

〔律疏賊盜〕凡盜大祀神御之物者中流、（謂供神御者、大社神寶亦同、供神御者謂大嘗、）

〔平戶記〕寬元三年四月十四日戊寅、今夕彙盜罪名事、法家陳狀可有杖議也、去月廿六日俄延引、今夜可被遂行云云、○中略

權大納言源朝臣○通忠定申云、明法博士等辨申之旨無其謂、條々大概同群議、○中略又大祀神御物事、神祇令所謂祭天神地祇之外不可有大祀之由、辨申之條太以不便、且如備中權守藤原朝臣定申、臨時大祀所見分明者歟、但以宮寺恒例祭謂大祀者、式條所立之中祀小祀其義如何、殆可在豫議、倩按公式令、總記臨時之大祀、又以一月齋歟、如衣服令、大祀者諸臣著禮服也、已祭祀之禮爲邂逅之儀歟、粗就國史窺其先規、常祀之外有雜祭等、群臣竭心敬禮神祇、周祀山川之儀也、承和年中、兩度祭天神地祇、諸司廢務云云、如此儀猶多蹤跡、皆是群官嚴禮、祭享及廣者歟、而於祭宗廟者、不論常祀、可謂大祀之內、雖爲群議、思而不議奏者、靈鑒還可有恐、仍粗令擧一端之許也、於爲大祀者、饌具之屬在神前盜毀之科、可入八虐事誠以必然歟、○中略

權大納言源朝臣○顯定定申云、○中略次御膳散落事、依守宣下狀不勘申云云、被下調度文書之上載狀中事、文法所指爭不勘申哉、陳狀云、大祀與大社可分別、謂大祀者、所載神祇令大嘗是也、謂大社者伊勢大神宮是也云云、先以大嘗爲大祀事、於所引之神祇令、粗雖見其義、猶未詳其文、而至于式文、分祭祀立大中小祀、以踐祚大嘗爲大祀、凡就此一隅、大祀偏可限大嘗之由、進潔白陳狀之條太以不可然、如備中權守藤原朝臣定申、按律集解以宗廟爲大祀、其文非一、加之長德佐理卿、寬治實政等卿罪名已下、宇佐宮正八幡宮、皆以大祀文勘申之、先儒之勘文、豈以爲謬哉、若背此等義可立申今案之新儀

者、尤可重破先賢義之勘狀也、不然者爭掠文法、可立自由之謬按哉、早可被尋存知之旨歟、就中建仁香椎宮慶龕狼藉之時、明法博士章親以大祀勘申了、乍見此勘文章久進罪、何是何非、父子之間蕭猶未知其據、尤可被尋問歟、（中略）

侍從藤原朝臣（季實）定申云、就群卿議奏之趣、有法家勘答之旨、支法所據旨趣未詳、忝以宗廟寶殿之內、雖准殿內所犯之科事、先度群議之時、人々多被定申歟、（中略）神膳落失條疑難之趣、備中權守藤原朝臣委細雖令定申、拼申之旨猶可被尋究歟、如狀者、大祀大社大幣雜物等可有差別、大祀大幣之外物不入八虐、以大嘗爲大祀、以伊勢神宮爲大社云云、如右答者、大和大神等六社爲中社、自餘爲小社云云、然者法家所存可奉准何社哉、又分別大中小祀之時、當宮御節可准何祀哉、重被尋所存、且召別勘文、可有其沙汰歟、（中略）

備中權守藤原朝臣（定嗣）定申云、（中略）以大嘗爲大祀、以宗廟不可准大祀之趣也、就之案之、名例律大不敬條、謂盜大祀神御之物、集解云、昊天上帝、五方上帝、皇地祇、神州宗廟等爲大祀、賊盜律大祀條集解云、大祀、謂昊天上帝、皇地祇、五方上帝、□宗廟等是、職制律大祀條集解云、大祀、謂天地宗廟等是、唐律文同之、就此等之文、古來之名儒先引大祀之文、所立宗廟之制也、義在可疑、數家兼別之、於此義者、釋文皆一同也、凡言祀者祭享同、若大祭大享所同大祀、職制律大祀條集解云、冬至日祀上帝於圜丘、卽在天稱祀、夏至日祭皇地於方丘、在地稱祭、四時以孟月享大廟、卽宗廟名享、雖亦不殊云云、彼十月朔日宮寺御節叶此文歟、據令條案之、先神祇令總祭天神地祇、散齋一月、又一月齋爲大祀云云、此卽位條之義解、幷集解不載宗廟事、隨事設文之故歟、天神卽伊勢大神宮也、宗廟雖相同之、律每文載之、今不載之、非無所以歟、凡大祀大嘗之號者、令條之意、猶不限一代一度之事歟、神祇令仲冬下卯大嘗祭云云、已入四季之常典、又大嘗者每世一年、國司行事、以外每年所司行事、雜令以十一月大嘗日爲節日云云、彼是與新嘗不分別之、衣服令有大祀大嘗之分別、義解云、大祀者隨時大祀也、大嘗者每世

一年國司行事是也、就此文按國史、謂臨時大祀者、爲遣唐使祭天地之類也、延喜式踐祚大嘗祭爲大祀、祈年月次神嘗新嘗賀茂等祭爲中祀、然而未見除宗廟之文、賀茂以下定中小祀、宗廟可准大祀之義爰可知之歟、別論宗廟之制者、或雖超大社之禮、不可准中小祀之社、就中就棄毀大祀神御物之文、有此議、然者先可引彼律條一同之釋、强不可求令條不同之文歟、職制律大祀條、謂幣帛之屬不如法杖六十、集解云、稱之屬者、謂黍稷以下不依祀令之法云云、大祀與宗廟其義無相違者、御膳者可謂神御之物、又是幣帛之屬也、凡衣服加於身、飲食入於口、是以宮掖天子之物皆曰御、皇祖宗廟之物同此義、先儒多存此由、如大寶二年詔書者、伊勢大神宮封物者、是神御之物、宜准供神事云云、饗薦之具已供神文、饌呈未饌呈等各有其差別、別封物者、未饌呈之物歟、然而於神戶成其犯、或猶入八虐歟、有律條、逢格改之謂歟、何況於供神之間哉、且長久之比、齋宮寮司、於飯高郡、搜取供祭物、神供御酒御贄等及闕怠、明法博士道成勘申、毀大祀神御物之科、仁平之比入村松御厨、有取穢二宮朝夕御膳料之犯人、明法博士兼成業倫等同勘申此科了、如此之例不可勝計、天仁大嘗會近江國司、課花垣保催彼祭物、有闘亂事、可准大神宮事哉之由、所被尋法家也、一代大嘗會與伊勢大神宮何輕何重哉、然而彼者於八省朝堂前、只儲一日薦享之神座、此者於五十鈴河上、答立万代鎭座之宮柱、思天仁之叡情、猶以宗廟爲本、大菩薩垂跡於男山、近鎭護皇基、尊崇之禮同大神宮、而今如章久等之所存、大神宮事猶不可及大嘗會歟、誠是非啻忘本朝敬神之禮義、似不辨法曹先代之舊言歟、大幣事以大神宮爲大社、謂其大幣者、金水桶金線柱云云、如此申狀者、大幣可限大社歟、而住吉楯戈又載之、已不限大社歟、又大祀大幣之外、大社神寶不入八虐、又大幣神寶、其實一云云、前後錯亂不足言歟、所詮辨申之本意者、伊勢神宮者大社也、不可爲大祀、以大嘗大幣可謂大祀大幣之由歟、然者大嘗祭之時、金水桶線柱等供何等哉、大祀與大社、大幣與雜物委可有別口、不知分別之時、法意錯亂、罪條失中之由、載陳狀引文法不搜義理者、爭吐此辨陳可載奏狀哉、文々句々定究奥義歟、具可辨申之由重可被尋問之、凡大祀神

祭祀禁制

御之物、及非服而御之屬、色類既多、或問其色、答不見文、如延喜式者、金線柱者、大神宮廿一種神寶之第一也、雖為大幣之證、廣瀨龍田社同奉之、戈者以奉住吉社、雖為本、他社又同奉之、平野春日社等祭幣又裁大幣帛、大幣之號必不限大祀大社歟、神祇令者、先擧諸社有限之神寶、因准大祀大幣之色類歟、(下略)○

〔律疏 職制〕凡祭祀、及朝會侍衞、行事失錯、及違失儀式者笞卅、(謂、百官朝參集會、及侍衞祭祀之事、行事失錯、及違失儀式者、謂當[illegible]議簠、坐立意儀衆者乃坐、謂擧高讌閑、坐立不正、不依儀式、與衆乖者乃坐、)不應集而主司不告、及告而不至者、各笞五十、(謂、祭祀以下、及論事合集之人、而主司不頒告、令集者、罪在主司、告而不至、論坐不至之者、故云、各笞五十、)

〔法曹至要抄 上〕一神事違例事

案之、神事違例、不指其社、又不指其事、違犯神事、觸類多端、若犯過之人可處此科、但有位有職之人、若罪條不明之類、令候散禁、若凡下之輩見決放免、既使廳例也、

〔延喜式 三臨時祭〕凡緣無服殤請假者、限日未滿被召參入者、不得預祭事、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

禁制南京幾內夜祭歌儛事

右被右大臣宣偁、夜祭會飲先已禁斷、所司寬容不加捉搦、遂乃盛供酒饌、互事醉亂、男女無別、上下失序、至有鬭爭閙起、淫奔相追、違法敗俗、莫甚于茲、自今以後嚴加禁斷、祭必晝日、不得及昏、如猶不悛更有違犯、不論客主尊卑、同科違勅之罪、但五位以上錄名奏聞、其隣保不告、亦與同罪、事緣勅語、不得違犯、

延曆十七年十月四日

〔吾妻鏡 二十八〕寬喜三年四月廿一日、被仰遣六波羅條々、先洛中諸社祭、非職輩、好武勇事可停止、

〔新編追加〕神事祭禮條

一諸社祭之時、非職之輩、好武勇之類、礫飛之次、及傷殺害之條、固可被加制止也、而依令禁遏此事、世間飢饉之由、京中雜人風聞云云、泰時〇北條在京之時、殊雖加制、全以無其儀、是則好武勇之輩、寄事於左右、令構申歟、甚不足信用、但於礫飛者非制之限、至武藝者可停止之由所仰候也、仍執達如件、

寛喜三年四月廿一日　武藏守　判

相模守　判

〔百練抄 十六後深草〕建長三年九月十三日庚午、天滿宮祭也、而可停止飛礫之由、承別當宣、使廳下部等制止之間、棄置彼神輿於大理門中退散之、

〔吾妻鏡 五十〕文應二年〇弘長元年二月廿九日辛酉、關東御分寺社、殊可興行於神事之由、日來有其沙汰、今日被始行之、

一諸社神事勤行事

祭豐年不奢、凶年不儉、是禮典之所定也、而近年神事等、或陵夷背古儀、或過差忘世費、神慮難測、人有何益、自今以後恒例祭祀、不致陵夷、臨時禮奠勿令過差矣、〇又見新編追加

〔享保集成絲綸錄 二十一〕貞享二丑年十一月

覺

一於國國所所、向後新規之祭禮無用候、無拠子細有之者、寺社奉行江可被相伺之事、

一有來神事祭禮無懈怠、如前前彌輕輕可執行事、以上、

十一月

〔御定書百箇條〕新規之神事佛事、幷奇怪異說御仕置之事

一新規之神事佛事致候もの出家社人に候はゞ、其品重きは所拂、其品輕きは逼塞、俗人に候はゞ過料、

〔大成令〕寶永五子年九月九日

覺

祭禮其外之儀觸候付而、大鼓を打相廻り候、火事大鼓と紛敷、其上さわがしくも候之間、向後祭禮は、當日計大鼓打可申候、其外觸之儀に付而大鼓打候事、可爲無用旨、可被申付候、以上、

九月

享保六丑年四月廿九日

所所祭禮に付、ねり物幷人數等之儀、左之通自今可相心得候、

一やたい一切無用に可仕候事

一ねり物人數之儀、一組合又者一町切に差出候町町之人數、高多きは三分一、其次は半分、其餘は右に準じ相應に減可申候事、

一ねり物一通り之儀計に用候衣類、作り物等かねて拵置候儀一切可爲無用候、其節に至り有合候品を用可申候事、

一總體ねり物結構に仕間敷候事

右之趣町中江不殘可觸知者也

四月

享保六丑年五月廿八日

向後祭禮ねり物渡り掛り候節、棧敷よりは勿論、往來之者も雖所望之儀堅無用に可仕候、尤前方致約束置、相對に而渡物之方より踊いたし見せ候儀は可爲各別候、

右之趣相背候者有之、後日に聞え候はゞ、可爲越度候、此段武家其外町方迄可被相觸候、以上、

五月

〔寶暦集成綸錄 二十〕寶暦九卯年五月

所々祭禮之儀に付、町々心得之趣、享保六丑年相觸候處、近來者猥に相成相違之品も相見ゑ不埒候、乍ㇾ然神事之儀、町人共一統信仰之上、町中追日繁榮に隨ひ、おのつから人數も相增候事に候條、咎め之沙汰不ㇾ及候、以來者先年相觸候通、急度相守、やたいは勿論、やたいに紛敷體之だし等一切無用に可ㇾ仕候、然共其外者神事之儀候得者、賑い候樣に者可ㇾ致事候、鼓笛大鼓之儀者勿論、近來差出來候通之練物、幷日覆等致し差出候儀、又者三味線等之音曲抔、相止候樣にとの事に而者無ㇾ之候、尤衣服等之儀、都而結構之品相用間敷候、唯今まで相用候衣服に候共、金入紗縮緬之類、决而不ㇾ相用、金入相用候所者、眞鍮箔等相用、紗縮緬之所者紅晒相用、此餘者右に准じ可ㇾ申候、

右之趣町中不ㇾ殘可ㇾ觸知者也

五月

〔貴嶺問答〕古私記云、散齋荒忌、致齋眞忌者、

〔古今神學類編 祭祀 四十八〕散齋 致齋六色禁法

按ルニ、凡祭ㇾ神交ㇾ神靈事ナレバ前齋誠精意思ヲ齋ヘ居所ヲ易、衣服ヲ改、鑽ㇾ燧、和漢同旨也、是故ニ神道ノ前齋ニモ致齋散齋ノ儒語ヲ用ル事尙シ、其齋ハ同致ニシテ其名目ハ異也、神道ニ於テハ齋場ト稱シ、湯津ト云ヒ、慇紀ト云ヒ、物忌ト云ヒ、齋(イモイ)ト云ヒ、齋(ユ)ト云ヒ、神事ト稱スル皆是常談也、延喜式ニ所ㇾ謂大祀中祀小祀ノ齋、大祀ハ大嘗會、此齋ハ一月也、中祀齋ハ三日、小祀齋ハ一日也、俗傳ニ三日齋ヲ言テ謂ㇾ之二夜三日、一日齋ヲ言テ謂ㇾ之一夜神事是也、而シテ散齋致齋ノ名目ハ出ㇾ祭義、致ㇾ齋於ㇾ內、散ㇾ齋於ㇾ外ト云云、註ニ齋爲ㇾ言齊也、所ㇾ以其意志齊ㇾ不齊、而極ㇾ致其齊ㇾ之義也、又禮記曰、七日戒、三日宿、愼之至也、註七日戒散齋也、三日宿致齋也、〇中略是皆齋明盛服交ㇾ神明ノ事ナレバ、心身百事、皆神明ニスルノ法也、〇中略又散齋謂ㇾ之外淸淨、致齋謂ㇾ之內淸淨、此淸淨ノ

語ハ儒書ニモ不見、而シテ司馬遷ガ史記ニ出ヅ、神代卷ニ吾素盞烏尊出雲ノ清地ニ到リ給テ、吾心清清之ノ御言擧アリ、是清淨ノ謂也、是以神記ニ吾心清清之ノ上ノ清ハ則內清淨、下ノ清ハ則外清淨也ト注セリ、○下略

〔令義解二神祇〕凡天皇卽位、總祭天神地祇、(謂卽位之後、仲冬乃祭、下條所謂大嘗者、每世一年國司行事是也、)散齋一月、(謂仲冬之月、自朔至晦、)致齋三日、(謂自丑至卯、其辰日以後、卽爲散齋、故下條云、致齋前後兼爲散齋也、)

凡散齋之內、諸司理事如舊、不得弔喪、問病、(謂有親戚病者、不在預禁之限也、)食宍、亦不判刑殺、不決罰罪人、不作音樂、(謂不作絲竹歌舞之類也、)不預穢惡之事、(謂穢惡者、不淨之物、鬼神所惡也、)致齋唯祭祀事得行、自餘悉斷、其致齋前後、兼爲散齋、

凡一月齋、爲大祀、(謂上條云散齋一月、卽此條所謂一月齋也、唯於散齋一日齋者、皆在散齋限內也、)三日齋爲中祀、一日齋爲小祀、

〔法曹至要抄〕一神事時觸穢事

案之、不慮令穢齋內之時、依違式之科、可處笞罪、若故穢之日、准闌入、處徒罪、隨形可取科斷矣、

○按ズルニ、衞禁律ニ、闌入大社門者徒一年、中社小社各減三等トアリ、

〔令集解七神祇〕凡散齋之內、諸司理事如舊、不得弔喪、問病、(釋云、以下所禁諸事、只爲百官人耳、但於親喪病、聽式處分耳、穴云、諸司謂官人也、但官內人弔喪以下事、不見行事、但悪依假寧令、給假以上色者皆退耳、其官人遭親喪者、合有別式爲長假、假寧令爲無事時立文故也、雖非官人、爾可預祭事者亦同之、親病者可假退者、臨時聽狀耳、自餘喪等皆不合假退、跡云、諸司理事如舊者、但遣大祭之所問者、弔喪以下事、皆親事者、令(令忌合議)得式處分也、)食宍、亦不判刑殺、不決罰罪人、(穴云、職制律云、(中略)千注云、謂斷定罪、殺謂殺罪人、此等文者不得判署、及不得決罪杖笞云云者、未知殺文者何、又刑文書者障碍也、然則不可判署罪人斷罪、部知不可決笞杖、而何爲罪不決罰罪人云云、其日不行刑事也、不必判書也、又不決罰罪人者、細言耳、不可有別義、朱云、不判刑殺、諸罪案判之、不決不徹聽耳、)不作音樂、(朱云、不作音樂者、不作也、不在臨時作音樂者、動不得行、)不預穢惡之事、(釋云、穢惡之事、謂神之所惡耳、假如祓詞所謂上條下淫之類、穴云、穢惡者如令釋也、古記云、問穢惡何、答、生產婦女不見之類、跡云、穢惡謂佛法等世間者也俗謂也、非文所制也、)致齋唯祭祀事得行、自餘悉斷、(朱云、雖不預祭事、百官皆止耳、)其致齋前後兼爲散齋、(朱云、凡此條廢爲諸祭立也、只不爲卽位一條者、)

凡一月齋爲大祀、(穴云、問於一日齋有散齋後、答、不可有耳、朱云、一日之內可有散齋者、明未後處爲無散齋也、一日內散齋耳者、)

〔令抄神祇〕食宍　僧尼令義解云、食肉者、廣包含生之肉也、今祀祭祀、多用魚鳥含生之肉、專非式意、仍撿日本紀、垂仁紀昔丹波國桑田村甕襲家犬、咋山獸牟自那、此文以獸讀肉、以食猪鹿可稱喫肉、世俗所謂鹿肉猪肉也、

穢惡　釋云、穢惡二事也、惡者打人幷佛事等、穢者上烝下淫等也、

〔禮記註疏祭義〕致齊於內、散齊於外、齊之日、思其居處、思其笑語、思其志意、思其所樂、思其所嗜、齊三日、乃見其所爲齊者、註、致齊思此五者也、散齊七日不御不樂不弔耳、見所爲齊者、思之熟也、所嗜素所欲飮食也、疏、正義曰、此一節明祭前齊日之事、思其居處者、謂祭致齊之日也、思其居處以下五事、謂孝子思念親存之五事也、先思其麁、漸思其精、故居處在前、樂嗜居後、齊三日、乃見其所爲齊者、謂致齊思念其親、精意純熟、目想之若見其所爲齊之親也、

〔學山錄二〕齋

散齋七日、致齋三日、凡十日也、祭統云、是故君子之齋也、散齋七日以定之、致齋三日以齋之、禮運云、七日戒三日宿、愼之至也、祭義云、致齋於內、散齋於外、齋三日、乃見其所爲齋者、鄭康成注、散齋七日、不御不樂不弔耳、孔穎達疏、齋三日、乃見其所爲齋者、謂致齋、又周禮天官冡宰職云、祀五帝則前期十日、帥執事而卜日遂戒、鄭康成注、十日容散齋七日、致齋三日、此等說其可證耳、但秦法則異、月令云、以立春先立春三日云云、天子乃齋、孔穎達疏、今秦法簡省、故三日也、蓋散齋二日、致齋一日、至隋唐之制亦復不同、隋禮儀志云、凡大祀齋宮皆於其晨、集尙書省受誓戒、散齋四日、致齋三日、又唐禮志云、大祀散齋四日、致齋三日、中祀散齋三日、致齋二日、小祀散齋二日、致齋一日、

〔令義解二神祇〕凡祭祀、所司預申官、謂所司者神祇官也、預申官者、卽一日齋亦須預申官之、官散齋日平旦、頒告諸司、

〔類聚三代格一〕太政官符

改仰齋日事

右據令條、凡祭祀所司預申官、官散齋日平旦、頒告諸司、○中略今被右大臣宣偁、奉勅散齋之日頒告

諸司諸司未承事之前、或有犯禁忌之徒、宜改令條散齋之前一日頒告諸司、自今以後永爲恒例、

弘仁二年二月六日

〔延喜式三臨時祭〕凡新年、賀茂、月次、神嘗等祭、前後散齋之日、僧尼及重服奪情從公之輩、不得參入内裏、雖輕服人、致齋幷散齋之日不得參入、自餘諸祭齋日皆同此例、

凡宮女懷妊者、散齋日之前退出、有月事者、祭日之前退下宿廬、不得上殿、其三月九月潔齋、預前退出宮外、

〔延喜式四十一彈正〕凡散齋之内、不得弔喪問疾食宍、不判刑殺、不決罰罪人、不作音樂、不預穢惡之事、若有違犯、嚴加禁制、

〔年中行事秘抄〕可相定大中小祀、其致齋散齋間幷忌佛寺故者事之限事、

貞觀神祇式云、凡宮女懷妊者、散齋之前退出、以前令式文如件、據案此等文、只似可忌齋日之中文、

年來神事已前許似書勘文、左右可求之、

齋月諸陵官人不可參内事

見康保三年十二月十日御記、

〔有嶺遺稿三〕物忌の札は、大切神事行ふとき、赤紙小さく切て齋と書て、側にてつかふ人の髪につけおく、是古風也、古來は桃の木の皮を去て、それに書付て髪に付たり、今は紙にてとゝのふ也、今に葵祭なとの勅使の家來是をする也、玉海に齋の事永々と佛法によるやうに書玉へとも、さやうにてはなし、神代の故事とみゆ、○中略

神事札は神事也、僧尼重輕服不可有來入也と有、攝家方には不可參と有、甘露寺親長卿記に、古來は也の字書す、中古より也の字と有、是は也の字書さるがよき也、也の字あれば上の神事也の三字うこく也、なければ動かざる也、也の字下にあれば上神事神事也となる、用に使ふ官女等と云、

體につかふを男聲と云よし、業資王の和調抄に有、梵語に地獄にならつかと云時は、地獄の罪人の事に成體に成也、

〔台記〕久安四年九月十日乙未、幸天王寺、〇鳥羽 余〇藤原頼長 乘輿候御後、十七日壬寅、今日春日若宮祭、仍不取念珠、不得私入堂、自京師奉幣、〇中略 及禮拜時、詔余曰、汝有神齋、不可拜乎、對曰、君前何以私齋闕禮耶、復詔曰、所奏合禮之意、然而今非所行正禮之處、不如闕禮佛之勤、全敬神之忠矣、全從詔旨、

〔玉勝間〕十七 不如闕禮佛之勤、全敬神之忠との詔、〇中略 鳥羽法皇の詔也、こは法皇天王寺に御幸ありて、彼寺におはしましける時、頼長公も御供にてさぶらひ給へるほどの事也、さる佛事の御をりしも、さすがに神わざをやむごとなくおぼしめしたるみことのりの、たふとくおぼえ奉るまゝにしるしつ、

〔玉海〕壽永三年〇元暦元年 十二月一日丙辰、午上、神齋、寫心經如例、

〔延喜式〕九 神名上

天神地祇總三千一百卅二座

社二千八百六十一處

前二百七十一座

大四百九十二座

三百四座並官幣、預祈年月次新嘗等祭之案上、就中七十一座預相嘗祭、

一百八十八座並預祈年國幣、

小二千六百卅座

四百卅三座並預祈年案下官幣、

二千二百七座並預祈年國幣、

宮中神卅六座

神祇官西院坐御巫等祭神廿三座並大、月次新嘗、

御巫祭神八座並大、月次新嘗、中宮東宮御巫亦同、

神產日神○中略

宮內省坐神三座並名神大、月次新嘗、

園神社

韓神社二座○中略

京中坐神三座並大

左京二條坐神社二座並月次相嘗新嘗○中略

畿內神六百五十八座大二百卅一座小四百廿七座

山城國一百廿二座

大五十三座並月次新嘗、就中十一座預相嘗祭、

小六十九座並官幣

乙訓郡十九座大五座小十四座

羽束師坐高御產日神社大、月次新嘗、

與杼神社○中略

東海道神七百卅一座

大五十二座就中十九座、預月次新嘗等祭、

小六百七十九座

伊賀國廿五座大一座小廿四座

阿拜郡九座大一座小八座

陽夫多神社○下略

〔三代實錄 三十撰成 二〕元慶元年九月廿五日癸亥、分遣中臣齋部兩氏人於五畿七道諸國、班幣境内天神地祇三千一百三十二神、緣供奉大嘗會也、

〔春日權現驗記 二十〕凡我朝は神國として、宗廟社稷三千餘座、各記現まち〳〵に、利益とり〳〵なれども、○下略

〔年中行事歌合 十番〕

右　新年祭 二月四日　秀長朝臣

祈てふ年のを永き君が代を三ちゞあまりの神やうくらん

右祈年祭は、大神宮以下三千一百三十二座の神を祭りて、年災を祈申さるゝによりて、年ごひの祭と申侍なり、

〔神社私考〕按るに、三代實錄に、○中略見えたる其神の座數、此神名帳と全同じければ、はやく元慶の比定まりたりつる官社のまゝなるにやとおもはるゝに、其元慶元年より後、此式を撰れたる間に、元慶四年三月廿七日、大和國城上郡宗像神社預於官社と三代實錄に見え、又延喜十一年正月六日官符に、山城國宇治郡山科神社二座を、宮道氏人等が請に依りて、被附官帳預四度幣と新國史、また本朝月令等に見えて、すなはち帳に宗像神社三座、並名神大、月次新嘗、山科神社二座並大、月次新嘗と載られたるこれなり、なほありぬべけれど、しばらくかの元慶元年のときの神座數に、件の五座を加へ數ふる時は、延喜の此帳には、三千一百三十七座とあるべきを、なほ元慶元年の度の數と同じきは、其後官社を停られたるもありしにや、但し三代實錄に、元慶三年十一月六日、停梅宮祭云云、歷承和仁壽二代、以爲官祠、今永停廢焉と見えたれど、同八年四月七日、始祭梅宮神云云、頃年之間、停春秋祀、今有勅更始而祭と見え、三代實錄の後は、國史なければ詳ならぬを、色葉字類抄梅宮の條に、件の兩度の廢興を載て、次に寬平又停之、永延以

後祭之、十一月同之と記せり、師光年中行事に記せるも同じ、かくて永延の度の事は、年中行事秘抄に、兩度の事の次に、寛和二年十一、廿一、宣旨云、新依御願、初復舊甚、以今月廿五日、令勤仕、但自明年可用式日とあり、寛和三年四月五日永延と改られたれば、此說相合へり、玄かれば延長五年に撰成て上られたる此神名式に、梅宮神社を載らるべきにあらず、寛和二年の宣旨によりて、後に更に載られて、總の座數祭式等をも加へ改められたるなるべし、此ほか官社の增減のありたらむにも、元慶元年の此の班幣の神の座數と同じきは、おのづから合へるなるべし、

〔延喜式一 四時祭上〕新年祭神三千一百卅二座略○中

不奠幣案上新年神四百卅三座略○中

座別絁三尺、略○中就中六十五座、各加鍬一口、靫一口、卅座各鍬一口、三座各靫一口、皇見神名帳

○按ズルニ、延喜式神名帳ハ、卽神祇官帳ナレドモ、稱シテ神名帳ト云フヲ以テ、特ニ此ニ收ム、其神祇官帳ノコトハ、收メテ社格篇官社條ニ在リ併セ見ルベシ、

〔三代實錄七 十淸和〕貞觀五年九月廿五日甲寅、勘解由使廳請二條、其一曰、神社帳准官舍帳、勘了之日、令移式部省、略○中太政官處分、並依請、

〔和泉國神名帳〕合伍佰參拾肆社

一位六社　二位一社　三位九社　四位五十七社　五位三百三十二社　前百三十三社

大鳥郡三百八拾四社

一位二社　三位四社　四位卅社　五位百五拾二社

正一位大鳥大社略○中

正應二年正月廿九日書寫之　大鳥社禰宜播磨臣高信

○按ズルニ、本書社數合五百三十四社トアレド、今之ヲ計ルニ、一位以下六類、五百三十八社ア

リ、又大鳥郡モ、同ジク一位以下四類、計百九十八社ニシテ、三百八十四社ノ數ニ合ハズ、姑ク附シテ考ニ備フ、

〔尾張國内神名牒〕正月十一日、有座主讀國内神名張神事、

熱田大神宮奉唱王城鎭守諸大明神

伊勢二所梵尊〇中略

尾張國内諸神社

海部郡二十座

從二位上大國玉名神〇中略

從三位上諸桑天神〇中略

正四位下大井天神〇中略

中嶋郡四十八座

正一位眞清田大明神〇中略

愛知郡二十七座

正一位熱田皇大神宮〇中略

奉始武塔天神幷八王子

右神名帳所奉唱如件

依文治二年丙午三月日宣命狀、國中諸神皆增位階、爲天下安穩御祈禱、

于時貞治三年甲辰正月七日酉刻識上　右筆行範

〔三河國内神明名帳〕

八幡三所大菩薩

若宮兩所天滿天神
正一位砥鹿大菩薩
大明神十九所
正一位池鯉鮒大明神　坐碧海郡〇中略
明神二十二所
正四位下伊麻留明神　坐碧海郡〇中略
天神百十五所
正五位下鷲取天神　坐碧海郡〇中略
小初位神七所
今槻若御子　坐寶飯郡〇中略
三州賀茂郡猿投大明神前　寶樹院周海書之

〔伊豆國神階帳〕伊豆國三ヶ郡內神明帳事
正一位三嶋大明神
一品きさきの宮
一品當きさの宮
正五位上第三王子幷十八所御子達
正一位千眼大菩薩
從五位上六所王子
從一位やきわらの明神〇中略
大嶋幷嶋々十五所各五位上

康永二年辛亥十二月廿五日　在廳判

〔上野神名帳〕上野國總五百七十九座

鎭守十二社

正一位拔鉾大明神〇中略

甘良郡三十三座

正一位拔鉾大神

從一位宗岐明神〇中略

餘社十五座〇下略

〔今昔物語十九〕陸奥國神報寺平維叙恩語第三十二

今昔陸奥守トシテ、平維叙ト云者有ケリ、貞盛朝臣ノ子也、任國ニ始テ下テ、神拜ト云フ事ストテ、國ノ内ヲ所々ノ社ニ參リ行キケルニ、□□ノ郡ニ道邊ニ木三四本許有ル所ニ小サキ仁祠有リ、〇中略其郡ニ仰テ、忽ニ社ヲ大ニ造ラセテ、朔幣ヲ參リ、神名帳ニ入奉リナドシケリ、

〔若狹國神名帳〕若狹國諸神合百四十五所

遠敷郡坐神八十九所

正一位勳三等若狹彥大明神〇中略

右一卷者、元祿七甲戌年九月八日、若州遠敷莊上下宮神主笠朝臣ヘ栗栖市呼ニ菱屋治右衛門相傳也、

今于予免書寫謹而認畢、

于時享保十乙巳年九月二日　大中臣朝臣近房

〔隱州神名帳〕周吉郡

正一位玉若酢大明神〇中略

隱地郡
正一位天健金草明神〇中略
知夫郡
從一位天佐自彥大明神〇中略
海部郡
從一位奈伎良姬大明神〇下略
〔南海道紀伊國神名帳〕國內勅請給大小諸大明神達百九十三社
官知神七十五社
未官知神百十八社
名草郡坐八十九社
官知神四十四社
天神十四社
日前大神宮
國懸大神宮
正一位勲八等伊太祁曾大神
正一位鳴大神大〇中略
地祇三十社
正一位高橋大神〇中略
未官知四十五社
伊都郡坐十九社

官知五社〇中略

寛□九二月下旬

正德三癸巳季秋三日寫之

朝散大夫丹生康澄判

〔筑後國神名帳〕

借從五位下　大多良男神

借從五位下　大多良咩神

已上二前、前司守和朝臣利親在任之時、以去延喜廿三年三月□日、奉授件位、

正六位上卅二前

大中臣神社〇中略

右太宰府去三月四日符、今月三日到來偁、件諸神位記案、依天慶四年九月十日、同五年六月廿五日、兩度官符旨、可寫進狀仰下頻了、而多送年月、于今未進、然間重被太政官去年八月廿二日符、今年二月廿三日到來偁、撿事意、件神名帳、造進既有其期、況太政官去年九月下彼府符偁、管國嶋神名帳悉以朽損、雖可據勘、宜仰管國嶋、早令注進者、而于今不進、府之緩怠責而有餘、大納言正三位兼行右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣實賴宣、奉勅、宜仰彼府、神名本位、隨以勘錄、令言上之者、府宜承知、依宣行之者、方今彼國每官符仰下頻也、而徒有下知之營、更無寫進之勤、已依國宰之緩怠、責□府司之不勤、國宜承知、件諸神位記案、幷神名帳等、早速進上、若其本位記、散逸不存、敍位年月、依官符旨、改□據具注言上、不得重怠者、今撿案內、高良玉垂命神、豐比咩命神、幷二前御位記、適納國底、足爲後代之鑑、仍詳注敍日、兼寫位記、進上如件、但至諸神、或國司商量、奉授借位、或位記紛失、不知敍日、如此之類、唯錄當階及神名、同以言上、以解、

天慶七年四月廿二日

守從五位下吉志宿禰花押　正六位上行掾秦宿禰

〔調所文書〕○首文闕

肝屬郡卅九前
正五位下中山明神一前
副諸神位記卅九卷
從二位大明神七前
中宮國玉大明神○中略
從三位大明神五前
神崎大明神○中略
從四位上明神廿五前
御崎明神○中略
從四位下明神十二前
包源明神○中略

馭謨郡十三前
副諸神位記十三卷
從四位下篠悉日明神一前
正五位下明神五前
渦江明神○中略
從五位上明神七前
郡明神○中略

熊毛郡卅前
從三位大明神十八前
國玉大明神〇中略
正四位下明神三前
貴鍬明神〇中略
從五位上明神九前
從明神〇中略
右與國之基、無先祭祀、敬神之道、不如褒崇、方今職爲都督、政同朝庭、是以尋長德三年之例、管內大小諸神、奉增爵一級、國〇大隅宜承知、申官之間、且以施行、不得疎略之、符到奉行、
參議正三位大貳源朝臣在判〇資通　正六位上行大典山宿禰在判
天喜貳年二月廿七日
以永正古書寫之

〔戒壇院公用神名帳〕
依例奉勸請大菩薩大明神等於無
金峯大菩薩　八幡三所大菩薩　與文大菩薩　二十五所大明神　飯道大明神　水分大明神〇中略
日本洲有官知未官知、万三千七百餘所大明神等、八嶋御靈　靈安寺御靈　西寺御靈〇中略
文明十一年己亥正月日
爲且興隆、爲且祈禱、勸諸人、令新調之、所寄附也、
維那良津
右筆叙義

〔東大寺要錄四〕二月堂

今此堂者、實忠和尚之創草也、○中略始自天平寶字五年辛丑二月十五日、至于弘仁六年、合六十二年、奉供涅槃會矣、今聞、古人云、實忠和尚被始六時行法時、二月修中、初夜之終、讀神名帳、勸請諸神、由茲諸神皆悉影嚮、或競與福祐、或淨爲守護、

〔碧山日錄〕長祿四年○寛正元年庚辰二月十四日壬戌、鷄鳴發足、○中略詣實榮院、僧侶二見觀音懺、○中略夜半而有一人、讀諸州神祇之籍、蓋爲護法也、

〔塵添壒囊抄十二〕修二月事

修二月トハ、○中略天平勝寶四壬辰年ニ始リシヨリ、今ニ无斷絶ト云々、○中略二月ノ修法ナル故ニ、此堂○東大寺實榮院ヲ二月堂ト云也、又請諸神、各其御名ヲ讀ケルニ、若州遠敷明神、此勸請ヲ喜テ託シテ云、我獻閼伽水、忽ニ黒白二鵜、石地ヲ穿出テ、飛テ傍ノ樹上ニ登レリ、其跡ヨリ甘泉涌出ス、仍和尚○實忠疊石、閼伽井トシテ今ニアリ、

〔多武峯略記下〕第四總社○中略

勸請鎭守

右當寺鎭守者、天一神等一百餘所也、修正神名帳所列是也、又安和二年正月十日、如覺禪師啓白文曰、當寺鎭守七十餘所諸大明神矣、故昔奉勸請七十餘所歟、

〔清瀧宮勸請帳〕奉請鎭護大明神

當所清瀧大明神

天照大神

八幡三所大菩薩　豐前國

吉備產聖靈　備中國○中略

飯岡天神　山城

井出天神等申ス

〔恒例修正月勸請神名帳〕

伽藍護法　　當所神等在毛

三界諸天　　二類神祇

閻魔王界　　五道將軍

太山府君　　伺命伺錄略○中

大和國爲二正月守護一

春日大明神略○中

山城國爲二二月守護一

賀茂大明神略○中

河内國爲二三月守護一

平岡大明神略○中

攝津國爲二四月守護一

依羅大明神略○中

和泉國爲二五月守護一

大鳥大明神略○中

東海道十五箇國爲二六月守護一

國津大明神略○中

東山道八箇國爲二七月守護一

三上大明神

北陸道爲八月守護

氣比大明神〇中略

山陰道爲九月守護

出雲大明神〇中略

山陽道八箇國爲十月守護

垂冰大明神〇中略

南海道六箇國爲十一月守護

日前大神宮〇中略

西海道九箇國爲十二月守護

寶滿大菩薩〇中略

已上二百六十餘所卷尾

右恒例修正月勸請神名帳一卷、以僧頓阿手跡本寫之、

寛政元年己酉仲冬　　無佛幹

〔參考本國神名帳集說序〕謹以、王者建宗廟、奉其祀者、追遠之誠、立社稷、致其敬者、仁民之實也、若其禱嘗祈報及由辟、設許多禮儀、固有天子諸侯之分、而不可得僭犯焉、養老元后〇元正詔曰、凡國神祇、宜使長官各國守也致其祭祀、若有限外當祭山川、則聽享焉、寳龜明主〇光仁初定諸社大中小、以正三位以上爲大社、以從四位以上爲中社、以從五位以下爲小社、而定遣社殿字之制、以別官幣國幣之禮矣、代又立名神、天神、地神三等、別祭祀隆殺、貞觀延喜昭代、新錄各州神社者凡三千餘所、國司幣祈神社、凡大小二千三百九十五座、而我本州八郡神祇一百二十一座也、其後國衙錄國帳、所奠幣神祠九十餘所、其係國典官有人焉、氏社有氏人、國社有其地職部、儀有制焉、而恭饗之禮尤盛也、及皇綱解紐、祀典不修、其氏人散亡、而爲非族私祭、神祠亦荒蕪、四至阨狹、其舊墟希存矣、甚者至失號無由訪其地者、豈

遑于得董乎、我敬公〇德川義直國務之餘、記式內神社之故、名神祇寶典、以藏秘府焉、元祿中、誠公〇綱誠更有興繼台旨、使有司撰修國志、然至封內神社者、頗不甄者多矣、故吾儕等考諸舊卷雜錄、略錄所傳梗槩、撰定未畢之間、公家有不諱、而諸生終閣毫、可不亦哀惜乎、丁亥仲春、正四位下度會神主延經、偶訊弊廬、神主曾有志于神名式註解、而以其稿示僕、幸一閱之、實先人未發之說、而微者著失者歸、以足解千古之疑、其博也其勉也、可謂竹秘書漢也、嗚呼僕昔日蒙鴻命、忝國志編摩副員、叨開秘閣版圖、螢窗雪影三匝指、伏懷往事、則槐下夢斷、歲月轉空、今也繙新篇而同舊感、便抄錄本州神社之說、以本之更參伍古記實錄、考訂神名社地、竊述我國帳集說一号、庶幾同志、補正其闕誤、以令覽者不惑、則將有裨於斯云爾、

寶永四年端午日　　尾州末學藤信景序

〔國內神名帳集說〕狹投神社〇三河國賀茂郡にて、每年正月五日の夜に、社僧國內の諸神の御名を讀申す神事ありと聞れば、板倉政方神主にたよりて、かの社僧白鳳寺がり此事を問つるに、社僧の外は、漫に見る事を許さゞる定の由いへれど、懇に乞て其帳を見つるに、全同書なれば、挍合して狹投本と標しおけるが、此度其本を本文となし、上云山本塙本などの異あるを、比挍したり、さて其神事に讀人聞人といふが有て、聞人と云は、社僧仕にて、職名を法橋と稱て津原某と云人、大紋風折烏帽子を著て讀聞す、但讀所は神前中門の西にて、經所といふところなりとぞ、かねて杖傘草鞋等の旅具を備へ置て、もし讀誤れる事あれば、たゞちに其場より追放する掟にて、その讀法は、大明神の部は、一聲に一神づゝ、天神の部は、三神づゝ、亦初位の部は、一神づつ讀上る古例なりとぞ、熱田神社にも、此事ありしと見えて、尾張國內神名帳の熱田座主如法院本に、正月十一日座主讀國內神名帳神事ありと記して、卷末に、右神明帳所奉唱如件、于時貞治三年甲辰正月七日酉刻讀上、右筆行範とあり、されど今此事は絕たりとぞ、尾張名所圖會三ノ三十五丁熱田神宮寺大藥師條ニ、修正會ハ正月五日ノ夜是ヲ行フ、俗ニ鬼祭ト云テ、鬼形ノ者ヲ追フコトヲ

載セタリ、サレド名帳ヲヨムコトハ見エズ、國人津田正生云、尾張ニテハ熱田社國府宮甚目寺觀音等ニテ、早春ゴトニ修正會ト云コトアリテ、國內神名帳ヲ讀上ルコトアリトイヘリ、又國府宮ニテハ、毎正月十三日、社僧修正ノ法ヲ行ヒ、行路ノ人ヲ捕ヘ、追儺ニ擬スト吉見氏イヘリ、存寔覺ノ承元三年正月十二日、神宮寺始行修正、十四日、今日修正經結願鬼走トアリ、カヽレバ修正會ニハ、必鬼ノ行事アルコトナルベシ、已上首書また同國中島郡大國靈神社俗ニ國府宮にも、元龜三年の奥書ある神名帳有て、毎年正月十二日、十三日夜、社僧威德院政所に於て、讀上の神事ありといへり、また年中行事大成に云、伊勢國津、惠日山觀音寺に、毎二月朔日鬼押神事といふあり、此時神名帳を讀むとあり、後に聞に、この惠日山のは、式のにてもあらず、其寺にて勸請して讀上る帳なり、頭ニアリまた穗井田忠友云、凡て大和國中の、さるべき古佛刹にては、神名帳讀上の事處々にこれあり、中にも東大寺二月堂の神名帳は、弘安の頃の古寫本にて、假字附ことにねもごろなるよしいへり、修正ト云ハ、密家ノ修スル吉祥天悔過法ナリトイヘリ、其法ハ續紀二十一十二丁ノ詔始テ見ユ、伊勢神宮ニモ、毎正月七日比谷神事ノトキ名帳ノコトアリ、

古事類苑

神祇部二

神號

古事類苑

神祇部二

神號

神號トハ、各神ノ別名ヲモ云フベケレド、今ハ別名ニ加フル所ノ通號ヲ指スナリ、此ニ尊崇嘉美ニ出デタルモノト、區別ニ用ヰルモノトノ二種アリ、尊崇ニ出デタルモノヽ中ニ於テ、大神大御神ノ如キハ別ニ解釋ヲ要セズ、明神ハ舊說ニ云ク、卽チ名神ニテ音通假借ナリト、然レドモ名神ハ社格ナレバ、名神タラザル社ニ施スベキニアラザルニ、之ニ加ヘタルモノ頗ル多シ、故ニ明神ハ支那ノ語ニ本ヅキシモノニテ、名神トハ異ナルニテモアルベシ、其中ニハ名神ノ社ヲ指シテ明神ト爲シタルモノナキニアラズ、又名ト明トハ固ヨリ同音ナレバ、通用シタルモノモアルベシ、中世ヨリハ名神ト云フコトハ漸ク少ク、後世ハ明神ノミニテ名神ハ全ク無キニ至レリ、明神ノ外ニ大明神アリ、上野國神名帳ニハ、式內ナルヲ大明神ト爲シ、式外ナルヲ明神ト爲シ、調所文書ニ載スル所ノ大隅國神名帳ニハ、二位三位ノ社ヲ大明神ト爲シ、四位五位ヲ明神ト爲シタリ、後世ニハ大明神ノ稱ヲ、吉田家ノ執奏ヲ經由シテ授ケ奉リシコトアリ、菩薩ハ佛陀ニ亞グノ位ナリ、權現ハ大權聖者ノ世間ニ出現シ、方便シテ人ヲ導キ、佛道ニ引入スルノ義ナルベシ、天王ハ大梵天王、四天王ノ類ニ倣ヒタルモノナリ、菩薩ヨリ以下、皆佛敎ノ說ニ據リ稱スル所ニシテ尊崇ノ稱ナリ、

天神地祇ハ、系統ニ由レルモノニテ區別ノ稱ナリ、中世菅原道眞ノ祟ヲ祀リテ天神ト稱ス

皇大神

ルガ如キハ、別ニ是レ一種ノ天神ナリ、而シテ天神地祇ハ、アマツカミ、クニツカミト云ヒシナルベク、此ハ始ヨリ音讀シテ、テンジント云ヒシナルベシ、五條天神、祇園天神ナド皆附リ、正宮、若宮、新宮、今宮ハ、本社、分社ヲ頸別スル所ノ區分ノ稱ナリ、其中ニテ正宮ハ、分社ニ對シ本社ヲ稱スルモノニテ、正八幡宮ハ、大隅國ノ八幡ノミノ稱ナリシガ、後ニハ廣ク餘ノ八幡ヲモ云フニ至レリ、新宮ト今宮トハ、本社ニ對シテ分社ヲ云ヘルモノニテ全ク同ジコトナリ、唯漢語ト國語トノ別アルノミ、若宮ハ鎌倉八幡ノ如ク分社ヲ云ヘルモアレド、多クハ本社ノ御子神ヲ稱スルナリ、御前ハ尊崇ノ稱ナリ、卽チ大前廣前ニ同ジクシテ御座ヲ云フナリ、

〔大神宮諸雜事記　一〕垂仁天皇卽位廿五年(丙辰)天照坐皇大神天降坐於大和國宇陀郡、

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事

天照坐皇大神(所稱天照意保比流貴命)

〔類聚國史　神祇四〕天長四年四月癸巳、御大極殿、奉幣帛伊勢大神宮、(中略)制曰、天皇我(ガ)大命(爾)坐、度會乃五十鈴之川上(爾)坐皇大神(乃)大前(爾)申給(久)、(下略)

〔延喜式　八祝詞〕祈年祭

辭別伊勢(爾)坐天照大御神(能)大前(爾)白(久)、(中略)遠國者八十綱打掛(氐)引寄如事皇大御神(能)寄奉(波)、荷前者、皇大御神(能)大前(爾)如横山打積置(氐)、(下略)

〔後拾遺和歌集　二十神祇〕長元四年六月十七日、伊勢のいつき、内宮にまゐりて侍りけるに、俄に雨ふり風吹て、いつきみづから託宣して、祭主輔親をめして、おほやけの御事など仰られけるついでに、たび〳〵御みきめして、かはらけたまはすとてよませたまひける、

さかづきにさやけき影のみえぬればちりのおこりはあらじとをしれ

大神

御和奉りける　　祭主輔親
おほぢちゝむまごすけちかみよまでにいたゞきまつるすべらおほんかみ

〔廿二社本緣〕伊勢事
大神宮仁内外宮坐須也、仍二所大神宮登申須、内乎波皇大神宮、外乎波豐受大神宮登奉號志、豐受乃宮仁毛皇乃字乎可幾被加之由、外宮連々申之、然而トモ内宮乃支申須事也、大方多外宮乃鎭座、依天神勅留緣起ニリ七志式條仁在其乃法、末代乃今、皇乃字乎可登被加申請留、神慮難測事也、
○按ズルニ、此事ニツキ、皇字沙汰文ニ、二宮禰宜ノ爭議アレドモ、繁冗ニシテ擧グルニ勝ヘズ、故ニ收メズ、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年二月八日丙申、春日祭如常、是日齋女始參於社、告文曰、○中略掛畏岐皇大神乃齋女留藤原朝臣可多子乎定天、令奉仕之狀乎聞食天、○下略

〔延喜式八祝詞〕春日祭
神主留某官位姓名乎定氏、獻流宇豆乃大幣帛乎、安幣帛乃足幣帛登平久安久聞食者登、皇大御神等乎稱辭竟奉登久白、

〔尾張國内神名牒〕愛智郡
正一位　熱田皇大神宮

〔賀茂皇大神宮記〕承平五年四月廿五日に、賀茂御やしろに行幸なりて、ふかく信心おこたらせ給すして御願ましましけり、○中略此帝朱雀のえいりよには、賀茂皇大神のおうごの御めぐみふかくましますゆに、世はしづまりぬと覺しめしゝかば、御しんかうましまして、幣帛をそなへ、神德をかゝやかし給ひけり、

〔古事記上〕故號其伊邪那美命、謂黄泉津大神、亦云以其追斯伎斯、此三字以音而號道敷大神、亦所塞其黄

泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神、

〔日本書紀神代一〕一書曰、其於泉津平坂所塞磐石、是謂泉門塞大神也、亦名道返大神矣、

〔古事記上〕底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三柱神者、墨江之三前大神也、

〔日本書紀神代一〕一書曰、底筒男命、中筒男命、表筒男命、是即住吉大神矣、

〔古事記上〕此時伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生生子而、於生終得三貴子、卽其御頸珠之玉緖母由良邇、此四字以音、下效此、取由良迦志而、賜天照大御神而詔之、汝命者所知高天原矣事依而賜也、

〔日本書紀神代一〕一書曰、伊弉諾尊、〈中略〉洗左眼、因以生神、號曰天照大神、

〔古事記上〕故伊邪那岐大御神、詔速須佐之男命、何由以汝不治所事依之國、而哭伊佐知流、爾答白、僕者欲罷妣國根之堅洲國、故哭、爾伊邪那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可往此國、乃神夜良比爾夜良比賜也、自夜以下七字以音、故其伊邪那岐大神者、坐淡海之多賀也、

〔古事記上〕故此大國主神、娶坐胸形奥津宮神、多紀理毘賣命、生子、阿遲二字以音鉏高日子根神、〈中略〉此之阿遲鉏高日子根神者、今謂迦毛大御神者也、

〔古事記傳十二〕大御神と申すことは、天照大御神の如く、最尊神ならでは、如何ぞや思はるゝを、此記の例、天照大御神のみは、いづこも〳〵、大御神とあり、其餘は伊邪那岐大御神さへ只一處にあるのみにて他には見えず、大御神とは此彼を申せり、此にかくあるは、記中には例なきことなれど、〈中略〉古は何神をも、尊みては申けるにこそ、

〔日本書紀神代二〕一書曰、天照大神勅天稚彥曰、豐葦原中國、是吾兒可王之地也、〈中略〉衢神對曰、聞天照大神之子今當降行、故奉迎相待、吾名是猨田彥大神、

〔日本紀略醍醐一〕延喜六年二月七日、授讃岐國氏大神從五位下、　十年八月廿三日、授丹波國出雲大神正四位上、　九月五日、授讃岐國氏大神從五位上、

〔萬葉集五雜歌〕好去好來歌

明神

宇奈原能、邊爾母奥爾母、神立麻利、宇志播吉伊麻須、諸能、大御神等、船舳爾、反云、布奈能閇、道引麻遠志、天地能、大御神等、倭大國靈、久堅能、阿麻能見虛喩、阿麻賀氣利、見渡多麻比、事了、還日者、又更、大御神等、船舳爾、御手打掛氐、中略

天平五年三月一日良宅對面獻三日山上憶良謹上

〔萬葉集十九〕天平五年贈入唐使歌

虛見都、山跡乃國、懸麻久乃、由由志恐伎、墨吉乃、吾大御神、船乃倍爾、宇之波伎坐、下略

〔延喜式神名帳頭註〕豐前宇佐郡

八幡　三所者、一八幡、二比女神、三大帶姬也、豐前國宇佐郡菱形山、廣幡八幡大神、坐郡家東馬城峯頂、後亦人皇四十五代聖武帝御宇、神龜四年就此山奉造神宮、名曰廣幡八幡大神宮、

〔大神宮參詣記〕帝祖をあがめて、大神と號す、

〔柱史抄下神事〕神位事

於大明神者、多是正一位也、

〔神道名目類聚抄四神祇〕明神號　神宮ヲ上トシ、明神是ニ次、今世俗都テ諸社ヲ稱シテ、何某ノ大明神ト稱スルモノハ誤ナリ、明神ハ勅許ノ號ナリ、勅許ナキハ何某ノ大神、亦何某ノ神社ト稱ス、

〔松落葉三〕名神明神井大明神

名神とは、天の下に神社のあまたあるが中に、名だゝる神をまつれりといふこゝろにものしたまへるにて、すぐれたるかぎりをいへり、延喜式に名神大としるされたるこれなり、中略此名神を國史に明神ともかゝれしは、さやうにもいひつることとなるべし、日本後紀弘仁四年のくだりに、奉幣於名神、報豐稔也と見え、同紀の又の年のくだりには、奉幣於明神、報豐稔也と見えたるなど、また〱同じやうにおもはる、しかのみならず、文德實錄仁壽元年のくだりに、詔以近江國散久

難度神」列於明神」と見えたる同じ神社を、延喜の神名式には、佐久奈度神社名神大としるされたるにて、名神明神同じきこといよ〳〵さだかなり、國々に明神ときこゆるは、いと〳〵おもき神社にて、世々の國史に見えたるやうことゝあるをり〳〵には、勅使まゐりて幣たてまつりたまひき、この吉備のみちの中に、明神ときこゆるは、高倚がつかへまつる大神のみやしろにかぎりぬ、されば此國人の、こゝにまうづるをみやうじんまゐりとぞいふ、いにしへよりのいひならはしなるべし、名神も明神も、字音にいふべくかゝれし文字と見ゆれば、げに呉音にみやうじんといふべきことぞかし、又いとまれには、明神に大といふもじをそへてもいひし例あり、三代實錄仁和二年の宣命の文に、松尾大明神と見えたり、おほといふ詞は、いにしへ大御神大神などゝ稱みてそへいひつる例にて、しかものしたまへるなり、たゞしこれは、文字ごゑに、だいみやうじんといひしにこそ、今もさやうにいへり、此ころはかいなでの神のやしろをみななにがし大明神と世の人のいひあへるは、いとみだりなることになん、ついでにいはん、大明神といふこと、般若心經といふはとけぶみに見ゆるによりて、かしこのにならひたまへるならんとおもふはたがへり、こゝのは、上のくだりにいへるがごとし、かの經なるは、呪文をほめたる語にて、まことの神にはあらず、用ひたるやう、いたくたがへり、おのづからいひざまのかよへるのみなり、佛道には、いかやうのこゝろにものすとも、こゝにとやかくといふべき事ならねど、それによりてみくにの大明神をこゝろえあやまる人のありもぞするとて、かくさだめいふになん、

○按ズルニ、般若心經ニハ、是大神呪是大明呪ノ語アリテ大明神ノ文ナシ、恐クハ誤ナラン、

〔古今要覽神祇三〕名神は社をさし奉る號、明神は神をさし奉る號なり、たゞし名神は、その宮地の主神と勸請の神とをわかち奉らん爲の號にして、明神といふは、その宮地の主神、勸請の神の差別をいはず、親しく神の御名を稱し奉る時は、いつも明神といふなり、

〔毛詩註疏十八之二大雅雲漢〕祈年孔夙、方社不莫、昊天上帝、則不我虞、敬恭明神、(○明神、一本作明祀、)宜無悔怒、

〔周禮註疏三十六秋官〕司盟、掌盟載之灋、凡邦國有疑會同、則掌其盟約之載、及其禮儀、北面詔明神、既盟則貳之、(明神、神之明察者、謂日月山川也、)

〔春秋左氏傳三莊公〕三十二年秋七月、有神降于莘、惠王問諸内史過曰、是何故也、對曰、國之將興、明神降之、監其德也、將亡、神又降之、觀其惡也、

〔帝王編年記七欽明〕三十二年辛卯、八幡大明神、顯給豐前國宇佐郡、

〔帝王編年記十一稱德〕神護景雲二年戊申、春日大明神自常陸國御垂跡大和國三笠山、(○中略)天照大神誓天兒屋根命曰、以朕子孫者掌天位、以汝子孫者執國柄、自其以來、于今不絶、大織冠内大臣藤原相公(○鎌足)者、天兒屋根命二十一代孫、然者日本國治事者、春日大明神御計也、

〔一代要記稱德〕天平神護二年丙午、春日大明神始垂跡、

神護景雲二年戊申十一月九日、藤原四等明神、奉崇春日山、(○大鏡裏書載之、作藤原四所明神、)

〔增鏡二新島守〕かの平家の亡ぶべき世の末に、人の夢に、頼朝が後はその御大刀あづかるべしと春日大明神仰せられけるは、今の若君(○藤原頼經)の御事にこそありけめ、

〔宇都宮大明神奇瑞記〕凡當社之根元者、稱德天皇神護景雲元年、顯現日光山、其後仁明天皇御宇、承和五年戊午、温左郎麻呂奉懷大明神、奉移河内郡小寺峯、號補陁洛大明神矣、

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年三月壬申、勅奉充山城國乙訓郡山崎明神御戸代田二町、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十二月九日丙辰、勅甲斐國八代郡立淺間明神祠、列於官社、卽置祝禰宜、隨時致祭、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年閏三月十日乙未、授隱岐國從四位下天健金草明神從四位上、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年八月七日癸丑、自去四日、霖雨至此、大風雨洪水、分遣使者於賀茂上下、松

尾、稻荷、貴布禰、丹生、河上六社、奉幣祈止雨、告文曰、天皇我詔旨止掛畏岐松尾大明神乃廣前申賜止倍申、〇下略

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年四月六日己酉、分遣使者、奉幣山城國八幡、伊勢國多度、近江國日吉、駿河國淺間明神社、

〔伊呂波字類抄安諸社〕淺間大神在富士山、號名富士明神、

〔看聞日記〕永享九年四月十三日、抑光臺寺鎭守社賀茂大明神鳥居額可染愚筆之由、坊主參申之間、雖斟酌就敕神書遣、

〔日本紀略一醍醐〕延喜六年二月七日、授紀伊國伊太祁曾明神正六〇六恐四誤位上、玉出嶋明神從五位上、

〔類聚符宣抄一〕太政官符神祇官

正五位下橫山明神在□□國

今奉授從四位□

延喜十八年□月十七日下

從五位上瀧倉明神在大和國

今奉授從四位下

正六位上東屋明神

大神明神並在肥前國

彙今奉授從五位□

延喜廿年十一月□日下

右得中務省解偁、件叙位依例申送知、作者官宜承知、依例行之、符到奉行、

位左少辨　　　　　　　　　　　　　　位左少史

延喜廿一年二月廿七日

〔將門記〕于時(〇天慶三年)本天皇(〇朱雀、本天皇、一本作本天、)請十日之命、於佛天厥內屈名僧於七大寺、祭禮奠於八大明神、(〇一本無明字、)詔曰、忝膺天位、幸纂鴻基、而將門濫惡爲力、欲奪國位者、昨聞此奏、今必欲來、早饗名神、停此邪惡、速仰佛力、拂彼賊難、乃本皇下位攝二掌於額上、百官潔齋請千祈於仁祠、

〔宇都宮大明神奇瑞記〕天慶年中、將門追罰之後、正一位勳一等位記一島居額等是也、

額文云　正一位勳一等日光山大明神

〔帝王編年記〕十七一條長保三年辛巳五月九日、船岡祭今宮、是謂紫野明神、

〔續世繼〕二手向ひらの(〇ひらの、一本作ひらえの、)明神は、法華經まもり給神におはします、

〔百練抄〕四一條寛弘三年四月、東三條角明神加階、行幸賞也、

〔上野國神名帳〕上野國總五百七十九座

鎭守十二社

正一位　拔鉾大明神　赤城大明神　伊香保大明神　榛名大明神　甲波宿禰大明神

從一位　小祝大明神　火雷大明神　倭文大明神　大國玉大明神　加茂大明神　美和大明神

宇藝大明神

甘良郡三十三座

正一位　拔鉾大神　從一位　宗岐明神

從三位　丹生明神　秋山明神　鳥總明神

從四位下　拔鉾若御子明神　正五位　天津社明神　從五位下　玉山明神

從五位上　佐位明神　新屋明神　億津宮明神　朝賀保明神　小船明神　高垣明神(下略)

〇按ズルニ、本書ハ、延喜式神名帳ニ載スル所ノ十二社ヲ以テ大明神ト稱シ、式外ノ社ヲ以テ

明神ト稱セリ、

〔調所文書〕肝屬郡卅九前

從。二。位。大。明。神。七前

中宮國玉大明神○中略

從。三。位。大。明。神。五前

御崎大明神○中略

從。四。位。上。明。神。廿五前

御崎明神○中略

從。四。位。下。明。神。十二前

包源明神○中略

天喜二年二月廿七日

〔百練抄四後冷泉〕治暦三年十月五日、行幸平等院、七日、還幸、○中略離宮明。神。授一階、○又見扶桑略記

〔中右記〕長承二年五月八日、今日宇治鎭守明。神。離宮祭也、

〔百練抄七近衞〕久安二年五月十二日、河尾明。神。社、爲洪水流失、

〔百練抄八高倉〕安元元年十月廿六日、強盜亂入河合社之內、廊壁射立矢、小鳥明。神。前血落、

〔百練抄八高倉〕治承元年正月卅日、朱雀院鎭守、石神明。神。燒亡、

〔長門本平家物語三〕我○藤原成親九の歳より、住吉大明。神。を敬し奉て、すでに四十にあまり、五十に及ぶまで、志をはこぶ事今に怠らず、

〔平家物語四〕還御の事

同き廿九日、○治承四年三月御船かざりてくわんぎよなる、をりふし波風はげしかりければ、御舟こぎ

もどさせ、其日はいつく嶋のうち、ありの浦といふ所にとゞまらせ給ふ、上皇〇高倉、大明神〇嚴島の御なごりをしみに、歌つかまつれ人々と仰ければ、〇下略

〔吾妻鏡 一〕治承四年九月五日甲寅、有御參洲崎明神、十月廿一日庚子、秉燭之程、御湯殿令詣三嶋社給、〇中略御信仰之餘、點當國內、奉寄神領給、則於寶前令書御寄進狀給、其詞云、

伊豆國御園　河原谷　長崎

可早奉免敷地三嶋大明神

右件鄕園者、爲御祈禱安堵公平、所寄進如件、

治承四年十月廿一日　源朝臣〇賴朝

〔御成敗式目〕總日本國中六十餘州大小神祇、別伊豆筥根兩所權現、三嶋大明神、〇中略神罰冥罰各可罷蒙也、仍起請如件、

貞永元年七月日〇日上、一本有二十字、

〔平家物語 七〕竹生嶋まうでの事

頃は卯月中の八日〇壽永二年の事なれば、〇中略このまゝのけしきを見給ふに、心もことはもおよばれず、〇中略ある經の文に云く、えんぶだいの中に水うみあり、其中に金りんざいよりおひ出たる水精輪の山有、天女すむ所といへり、則此嶋の御事なりとて、經正〇平氏明神の御前につい居給へり、

〔吾妻鏡 七〕文治三年八月十五日癸未、鶴岡放生會也、〇中略諏方大夫盛澄者、〇中略今日俄被召出之、被仰可射流鏑馬之由、盛澄申領狀、〇中略次可射件三箇串之由、重被仰出、盛澄承之、既雖思切生涯之運、心中奉祈念諏方大明神、拜還瑞籬之砌、可仕靈神者、只今垂擁護給者、然後皺於平仁捻廻天射之、五寸串、皆射切之、觀者莫不感、

〔玉海〕文治三年九月十八日丙辰、○中略又勅曰、今奉進ル斎内親王潔子は、此依恒例天、三箇年間は斎清天、天照大明神乃御杖代爾定天奉進ル内親王爾、中臣宜ク吉ク申天奉進禮、

〔拾芥抄下本諸社〕三十神名大明神三字略之十日伊勢大明神○下略

〔仲資王記〕元久元年三月廿七日庚寅、稲荷下社神主忠清來申云、去比田中明神近邊在家、強盗亂入、

〔八幡愚童訓下〕建長始、或上人交名入ント祈請セシカバ、第三日丑時、武内大明神、白張裝束立烏帽子ヲ被召、御殿ヲ廻給テ、汝交名ニ可入ト隨仰有キ、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕關の明神のすぎむらは、神の代かけてかすみつ

〔長明無名抄〕關明神

會坂に關の明神と申すは、昔の蟬丸の、かの藁屋の跡をうしなはずして、そこに神となりて住み給ふなるべし、

〔鎌倉大草紙〕天長山國淸寺○伊豆と申は、○中略鎮守の社は、○中略文殊明神、東宮明神、杉橋明神、○中略鷲大明神、四阿山權現等を崇、又上杉代々、武州の守護にてありしゆゑにや、武州府中六所大明神をも、此寺の内に勸請して社壇あり、

〔臥雲日件錄〕寶德四年二月廿三日、寄書慈聖院、告大歳明神之事、蓋錦小路殿○足利直義死後頗有神崇、故祭之爲大歳明神、蓋鎌倉有大藏谷也、圓修院殿亦號新大歳明神、蓋配錦小路殿也、

〔續史愚抄後土御門〕明應三年八月廿三日己卯、被奉贈大明神號於後鳥羽院、在攝津水無瀨御影堂

〔忠富王記〕文龜三年七月云々日欠次中原師親申、石見國小岩見三宮明神號勅許之由、吉田二位許へ申遣了、

案文宗源

今宜授大明神號者

右依

今上皇帝　聖勅神宣

御表之神　璽如件

文龜三年七月廿五日

從二位卜部朝臣（判）

神部伊岐宿禰（奉判）

〔宣胤卿記〕永正三年八月三日、今後多武峯社頭、堂舍僧坊不殘一字爲宗登燒失云々、言語道斷事也、神體（大織冠、後花園院御代被奉授大明神號、）奉取出云々、十七年十一月十二日、秀房朝臣來條々問之、近江國神崎郡小幡社、可奉號總社大明神之由、被聞食訖者、依天氣執達如件、

永正十七年十一月十二日　左中辨（判）

小幡山神官中

〔千載和歌集（二十神祇）〕有馬の湯に忍びて御幸有ける御供に侍りけるに、湯の明神をば三輪の明神となむ申侍と聞て、物にかき付て侍ける、○下略

〔皇年代略記（後陽成）〕（首書）慶長四年、四、十八、賜于豐臣廟號、爲豐國大明神、

〔豐國大明神祭禮記錄〕任御遺言之旨、東山阿彌陀ガ峯地形平建立社壇、鏤金銀甍ヲ並繼軒、巍々堂堂奉移御身體宮內、吉田神主二位兼見、承號豐國大明神、（與）日本之總名豐葦原中津國ト云ヘル故也、大閤秀吉公者、依爲和朝之主、奉號豐國大明神、（與）御社領吉田神主二位兼見（仁）被仰付、行事無退轉、可相勤之旨、秀賴公御諚ニテ、禰宜神主捧幣帛於大床、

〔伊達成實記〕秀吉公、新八幡ト祝可申由御遺言ニ候ヘドモ、勅許ナキニヨッテ、豐國ノ明神ト祝申候、東山ニ宮被相立候、

〔護王大神記〕嘉永四年三月十五日

神號宣式云云

一神號宣旨

左中辨藤原朝臣泰光傳宣、權大納言源朝臣建通宣、奉勅以故民部卿兼造宮大夫和氣朝臣清麿、

宜奉號護王明。神。者、

嘉永四年三月十五日

修理東大寺大佛長官刑部少輔兼主殿頭左大史小槻宿禰輔世奉

〔花園雑話六十〕車裂明神

西嵯峨ノ車裂ノ明。神。ハ、清原賴業ヲ祀リタル祠ナリ、本朝諸國風土記坤之卷、京都太秦車前ノ宮之事ニ云、京都下嵯峨太秦(ウヅマサ)ノ西ニ禿倉(ホコラ)アリ、○中略此所ハ清原ノ眞人賴業ヲ葬リシ地トカヤ、往昔龜山帝嵐山ヘ行幸アリケル時、關白兼平公ノ車ハ、此塚シルシノ石ノ前ニテ、牛俄ニ地ニフシテスヽミ行ズ、供奉ノ人アヤシミ其アタリヲ馳廻ハリ見ルニ、丸キ石ヲ草ムラニテ見付タリ、此石ノ下ウヅ高ク築アゲタル形アルヲ不審カリテ石ヲ取除ントスルニ、サノミ大キ成石ナラネドモサラニ揚ルモノナシ、石ノ形ハ冬瓜ニ似タリ、依テアタリノ人ヲ召ナレテタヅネ給ヒシカバ、此石ノ祟リトシリ、且ハ古墳ノ名ヲモシラセ給テ、神ト祟メ車前ノ宮トイヒシガ、○下略

〔大日本史百五十一〕清原賴業、○中略文治五年卒、年六十八、○中略子孫建祠祭之、後嵯峨帝賜號曰車

折大明神(舟橋家藏清原系圖)

〔山州名跡志四下〕兼倶靈社(在春日社東南山上)　神龍大。明。神。　後奈良院勅號

天神

〔續日本後紀九仁明〕承和七年六月戊辰、奉授遠江國周智郡無位小國天。神。、磐田郡無位矢奈比賣天。神。並從五位下、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年十一月癸酉、奉授尾張國无位大縣天神、眞清田天神二前、並從五位下、

〔文德實錄五〕仁壽三年六月庚午、以尾張國多天神、預於名神、　七月辛丑、加尾張國多天神從五位上、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年三月廿六日壬午、授安藝國正六位上大麻天神、伊都岐嶋中子天神、水分天神、天社天神、並從五位下、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年二月八日己丑、授從五位上荒係天神正五位下、〈○荒係、一本作荒穗〉

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年四月三日己卯、授正六位上肥前國宗形天神從五位下、

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年八月四日丙申、駿河國從五位下美和天神授從五位上、

〔三代實錄二十七清和〕貞觀十七年五月廿七日戊申、授讃岐國正五位下大水上天神正五位上、從五位上賀茂天神、神谷天神、並正五位下、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年五月十七日壬子、授駿河國從五位上美和天神正五位下、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十年八月廿三日、授讃岐國大麻天神從四位下、

〔延喜式九神名〕武藏國多磨郡布多天神社　大麻止乃豆乃天神社

阿豆佐味天神社　穴澤天神社

入間郡物部天神社

安房國朝夷郡天神社

〔延喜式十神名〕備前國御野郡天神社

土佐國長岡郡豐岡上天神社

吾川郡天石門別安國玉主天神社

〔政事要略二十二〕八月四日北野天神會事

延喜四年二月廿五日、薨〈○菅原道眞〉於任所、〈年六十一〉其後號天滿天神、庶人皆歸之、

〔菅家御傳記〕安樂寺學頭安修奏狀云、○中略延喜五年八月十九日、味酒安行、依神託、立神殿、○大宰府神社稱曰天滿大自在天神、

○按ズルニ、翻譯名義集ノ摩醯首羅ノ注ニ、大論此云大自在、○中略十住經云、大自在天、光明勝一切衆生トアリ、文字ハ同ジケレドモ此トハ別ナリ、

〔本朝文粹十三祭文〕北野天神供御幣幷種々物文　中原長國獻上

大江匡衡

右天滿自在天神、或塩梅於天下、輔導一人、或日月於天上、照臨萬民、就中文道之大祖、風月之本主也、○中略

寛弘九年六月廿五日　正四位下行式部大輔兼文章博士丹波守大江朝臣匡衡敬白

〔梅城錄〕或說云、西都有巨岳、名云寶滿、菅公○道眞既不賜環、自料曰、人衆勝天、天定勝人、苟非上蒼、誰爲雪冤、遂三沐浴、疏、直到岳尖、露香七日、鬚髮盡白、期滿之日、雲葉忽來、取線章升天、久之天滿天神四字從降、蓋忉利帝錫也、公儼然曰、是特表内潛德、實未足得自在神力、以脚尖踊回之、少選又加大自在三字、黃金寶篆現於空中、於是公意充然、使九頓首而退、剏立之跡印于盤陀、今謂之天拜岩、

〔帝王編年記十五醍醐〕延長元年癸未、今年正月之比、右大辨公忠小松天皇(光孝)孫、號三滋井辨頓死、經兩三日蘇生、子息信明信孝被扶、俄以參内奏事由、主上驚令出逢給、公忠頓死至冥途、長一丈人著衣冠、手取文插、有訴申延喜聖主○醍醐事、是天神○菅原道眞御坐、三十餘人冥官之中、第二冥官云、延喜荒凉、若有故之者如何云、仍改延喜爲延長、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶四年、道賢上人冥途記云、○中略大政天曰、我是上人本國、菅相府○道眞也、卅三天呼我字日本大政威德天、○中略佛子言、我本國之人、上下俱稱火雷天神、尊重猶如世尊、何故有此怨心、

〔元亨釋書十八神仙〕北野天滿大自在天神者、菅丞相之靈也、昌泰四年、因左僕射藤時平之讒、左遷太宰府都督而去、未至之先、自裁疏訴天帝、故其靈烈激爲威德天神、

〔親長卿記〕長享三年六月廿八日、天滿大政威德天は、威德天。神。歟、只天歟、其故口後小松宸筆名號、南無大政威德天ト被ㇾ遊き、一昨日尋ㇾ申藏人〈卜部兼致〉之處、天神之由返答、如何可ㇾ爲ㇾ天神云云、

〔百練抄〈四圓融〉〕天延元年三月十三日、北野天。神。宮燒亡、

〔菅家御傳記〕外記日記曰、一條天皇永延元年八月五日、始行ㇾ北野聖廟祭祀、宣命云、掛畏〈支〉北野〈爾〉坐天滿宮天神云云、天。滿。天。神。之勅號、始起ㇾ此哉、

〔本朝文粹〈十三願文〉〕賽ㇾ菅丞相廟ㇾ願文　慶保胤

沙彌〈某〉前白ㇾ佛言、〈○中略〉其一願曰、就ㇾ天滿天。神。廟ㇾ會ㇾ文士ㇾ獻ㇾ詩篇、以ㇾ其天神爲ㇾ文道之祖詩境之主ㇾ也、〈○中略〉

寬和二年七月廿日

〔古事談〈二臣節〉〕富小路右大臣〈顯忠〉時平御子也、每夜出ㇾ庭、奉ㇾ拜ㇾ天。神。云云、

〔拾芥抄〈下本靈所〉〕八所御靈

火雷天。神。〈北野御事也〉

〔百練抄〈十一土御門〉〕正治二年四月廿五日、五。條。天。神。被ㇾ奉ㇾ授ㇾ二階ㇾ、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕延慶二年十二月五日、日吉神輿入洛し給へば、祇園北野京極寺五條天。神。に至るまで、末社の神輿皆いで給ふ、

〔本朝世紀〕久安四年三月廿九日丁亥、今日從ㇾ姉小路南ㇾ自ㇾ白河之東邊燒亡、而間依ㇾ北風甚ㇾ至ㇾ于祇園天。神。、　四月十日丁酉、今日祇園一社、被ㇾ奉ㇾ幣帛ㇾ、〈○中略〉大内記藤長光、進ㇾ宣命草ㇾ少内記藤孝佐、勤ㇾ清書役、

天皇〈我〉詔旨〈止〉掛畏〈支〉祇園天。神。〈乃〉廣前〈爾〉、恐〈美〉恐〈美毛〉申給〈止〉波久申〈久、〉〈○下略〉

〔玉蘂〕承久二年四月十四日、祇園社燒亡例事、

地祇

延久三年八月廿五日寅剋、祇園天神、奉遷新造神殿、

〔延喜式 九神名〕山城國綴喜郡地祇社

武藏國入間郡國渭地祇社

常陸國多珂郡佐波波地祇神社

〔類聚符宣抄 一〕太政官符神祇官

正六位上天津高結槻本地祇(坐[illegible]國)

今奉授從五位下

延喜廿年二月十五日下

右得中務省解偁、件叙位依例申延如件者、官宜承知依例行之、符到奉行、

位左少辨　　位左少史

延喜廿一年二月廿七日

菩薩

〔帝王編年記 七欽明〕三十二年辛卯、八幡大明神顯給豐前國宇佐郡、即現三歳小兒託曰、我是日本人皇第十六代譽田天皇、廣幡八幡麻呂也、我名曰護國靈驗威力神通大自在王菩薩、國々所々、垂跡於神明、初顯坐耳、(○又見二十二社註式、宇佐宮託宣集、諸社根元記、)

〔東大寺要錄 四〕太□□符　太宰府

應令大神宇佐二氏□八幡大菩薩宮□事

右得太宰府解偁、(中略)天應之初、託宣神德、更上尊號曰、護國靈驗威力神通大菩薩、延曆二年五月四日託宣、吾無量劫中、化生三家、修方便、導濟衆生、吾名是大自在王菩薩、宜今加號曰、護國靈驗威力神通大自在王菩薩者、如此之驗、不可勝計、(中略)

弘仁十二年八月十五日　　格外

〔新抄格勅符抄〕太政官符　太宰府
一應ㇾ納ニ府庫ㇾ八幡大菩薩封一千四百戸〇中略
延暦十七年十二月廿一日

〔延喜式神名十〕豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮名神大

〔大鏡八〕ひとゝせのひでりの御いのりにこそは、東三條殿〇藤原兼家の御賀茂まうでせさせ給ひしには、此一條殿〇源雅信もまゐらせ給ひき、大臣にならせたまひぬれば、さるれいなけれども、天下の大事なりとて、御いでたちのところにはおはしまさず、わが御とのゝまへわたらせ給ひしほどに、ひきいでゝぐし申させ給ひしなり、この生に御ずゞとらせ給ふ事はなくて、只毎日に南無八幡大菩薩、南無金峯山金剛藏王、南無大般若波羅密多經と、ふゆの御あふぎをかずにとりて、一百八遍づゝぞねんじ申させ給ひける、それよりほかの事つとめさせ給はず、

〔源平盛衰記二十七〕信濃横田川原軍事
親忠〇源六郎大法堂ノ前ニシテ、馬ヨリ下リ、甲ヲ脱デ、八幡社ヲ伏拜ミ、南無八幡大菩薩、我君先祖崇靈神也、願ハクハ木曾殿〇義仲今度ノ軍ニ勝事ヲ得セシメ給ヘ、〇下略

〔拾芥抄下本諸社〕三十神名
十一日八幡大菩薩

〔延喜式神名十〕筑前國那珂郡八幡大菩薩筥崎宮名神大

〔憲法類編十四祭典〕八幡大菩薩ノ稱號被ㇾ爲ㇾ止、其外神佛混淆ノ儀廢止ノ事、
戊辰〇明治元年三月　日神祇局達
一此度御一新ニ付石清水、宇佐、筥崎等、八幡大菩薩ノ稱號止メサセラレ、八幡大神ト奉ㇾ稱候樣被ㇾ仰出ㇾ候事、

戊辰〇明治元年四月　日御布告

此度大政御一新ニ付、石清水、宇佐、箱崎等、八幡大菩薩之稱號被爲止、八幡大神ト奉稱候樣被仰出候事、

戊辰〇明治元年五月三日御沙汰

石清水

　八幡大神

右大菩薩號被止候ニ付、魚味奉供候旨被仰出候事、

〔類聚名物考神祇二〕八幡大菩薩　應神天皇の神靈をいはひ奉りて、八幡石清水にも祭りましゝ宇佐に、もとは鎮奉りしを、後に神託の由にて、大菩薩と申奉るも、佛法流布の後のまわざなり、

〔文德實錄九〕天安元年十月己卯、在常陸國大洗磯前、酒列磯前兩神號藥師菩薩名神、

〔延喜式九神名〕常陸國鹿嶋郡大洗磯前藥師菩薩神社名神大

那賀郡酒列磯前藥師菩薩神社名神大

〇按ズルニ、大洗磯前、酒列磯前二神ヲ菩薩ト稱スル事、神祇總載篇醫藥神ノ條ニ說アリ、參看スベシ、

〔類聚符宣抄一〕太政官符太宰府

應補任筑前國宗像宮大宮司正六位上宗形朝臣氏能事〇中略

右得神祇官貞元三年八月五日解偁、〇中略天慶年中以往不置件宮司、只以神主職、爲雜々執行之長、其時口慶度々祭只壓山海爲先漁獵、而藤原純友凶亂和平之後、登坐正一位勳一等之階、爰源清平朝臣、爲彼時大貳之間、可言上公家奉授菩薩位之由託宣頻了、仍且注託宣旨言上解文、且爲使少貳藤原朝臣惟遠、奉授菩薩位矣、〇中略

天元二年二月十四日

〔吾妻鏡十七〕建仁三年六月四日庚子、巳剋、仁田四郎忠常出人穴、歸參、往還經一日一夜也、〇中略古老云、是淺間大菩薩御在所、往昔以降、敢不得見其所云々、

〔八幡愚童訓上〕神龜元年筑前國若椙山、香椎宮造、崇聖母大菩薩給ヘリ、

〔八幡愚童訓上〕仲哀天皇御時、異國ヨリ責寄トテ、〇中略抑此后ト申ハ、第十五代ノ帝皇神功皇后後ニハ顯神明、聖母大菩薩ト申ハ、此后ノ御事也、

〔古今著聞集一神祇〕住吉は四所におはします、一御所は高貴德王大菩薩也、乘龍御託宣にいはく、我是兜率天内高貴德王菩薩也、爲鎭護國家、垂跡於當朝墨江邊松林下、久送風霜、時有受苦、自當北方有一勝地、願奏達公家、建立一伽藍、轉法輪云々、これによりて、神宮寺をば建立せられけるなり、

〔春日權現驗記一〕承平七年二月廿五日、亥時ばかり神殿鳴動して風吹、子時に橘氏女御寶前にて聲をはなつ、神殿守ならびに預なをめしあつむれば、已つヽしみおそれて候、又今月廿三日より御讀經に候、興福寺僧勝圓をめす、卽御託宣云、我ははやく菩薩に成にたり、しかるを公家いまだ菩薩の號を得しめざるやとおほせらるヽに天台山修行の僧千良申けるは、菩薩の御名をば、いかゞ申侍覽と申せば、慈悲萬行菩薩と名のらせ給、太政大臣及左右大臣、もろ〳〵の公卿も、わがことわる所也など、さま〳〵おほせ事どもありけり、

〔加州石川郡白山緣起〕吾身乃伊弉冉尊是也、今號妙理大菩薩、此神岳白嶺、乃吾神務國政時都城也、日城男女之元神也、

神龜元年甲午六月十八日　泰澄沙門

〔元亨釋書十八神仙〕白山明神者、伊弉諾尊也、〇中略今號妙理大菩薩、此神岳白嶺者、我主國之時都城也、我乃日城男女之元神也、

權現

〔釋氏要覽中三〕菩薩（菩薩者、具足應云菩提薩埵、菩提言覺、有情、覺者、所求果也、有情者、所度境也、具云摩訶薩者、此云大有情、即能求能度人也、地持論云、薩埵是勇猛義、精進求大菩提、故名摩訶薩、）

〔翻譯名義集一三乘通號〕菩薩（肇曰、正音云菩提薩埵、菩提佛道名也、薩埵秦言大心衆生、有大心入佛道、名菩提薩埵、無正名譯也、安師云、開士、始士、荊溪釋云、心開故、始發心故、淨名疏云、古本翻爲高士、既異翻不定、須留梵音、但諸師翻譯不同、今依大論釋、菩提名佛道、薩埵名成衆生、天台解云、用諸佛道成就衆生、故名菩提薩埵、又菩提是自行、薩埵是化他、自修佛道、又化能故、賢首云、菩提此謂之覺、薩埵此曰衆生、以智上求菩提、用悲下救衆生、）

〔本朝神社考序〕大權同塵、故名曰權現。。

〔神道名目類聚抄四神祇〕權現號　勅許ノ號ナリ、兩部習合ノ社ニ此號アリ、

〔盂蘭盆經疏新記〕周孔皆是大權、先制禮法、使人從善、然後佛化易可弘通、　首書云、權者暫用而捨之意、禮記立君臣之義、以權之、註權暫也、法華玄義所謂如來爲一乘之實而施三乘之權、故擬經說權權道、其實爲佛乘是也、

〔走湯山緣起三〕嵯峨天皇弘仁十年己亥　東寺大和尙（勅諡弘法大師）古迹巡禮之時、略○中巡禮當山社頭、結壇念誦當三箇夜、有二人化童語曰、我等是走湯權。。現王子也、爾時及澆漓人懷驕慢、權現欲隱形、僕之神鏡寶鉾、可奉入神輿、和尙進來惟太可也、略○下

〔二十二社註式〕石淸水
人皇五十六代淸和天皇貞觀元年己卯四月十五日、行敎和尙（大安寺傳燈法師位）奉宣旨、參籠宇佐宮、同八月廿三日到來男山之邊、一宿之間、更倍信心祈願之、行敎和尙致誠祈請、拜見權。現。大。神。之垂跡本身、（又見諸社緣元記、）

〔大法師淨藏傳〕又以去年月、法師與同法僧玄眞智淵等、共參崇福寺、經三箇日、退指竹生嶋、參向之途、於三津邊、法師佇立於或宅邊乞食、略○中宅主隨喜、餝船而送著彼嶋了、略○中法師命曰、我日者於權現。寶前、隨分精勤、若有感喜者、可顯一驗呪杖、

〔百練抄五白河〕承暦二年十月十六日、前遠江守資成下女、依呪咀事、於使廳勘問之間、奉念熊野權現、縄切杖折、不加勘問、爲奇異、

〔長寛勘文〕熊野權現御垂跡縁起云、〇中略庚寅農年、石多河乃南河内乃住人、熊野部千與定土云、犬飼猪長一丈五尺奈留射跡追尋氏石多河於上行、犬猪乃跡於聞氏行仁、大湯原行氏、件猪乃一位農木乃本仁死伏世利、宍於取氏食、件木下仁一宿於經氏、木農末月乎見付氏問申具、何月虛空於離氏木乃末仁波御坐止申仁、月犬飼仁答仰云、我乎波熊野三所權現止所申、一社乎證誠大菩薩土申、今二枚月乎者兩所權現乎土奉申仰給布云云、

〔平家物語二〕やすよりのつとの事

丹波の少將〇成經と康頼入道は、もとよりくまの信心の人々にておはしければ、いかにもして此嶋のうちに、三所權現をくわん衣やうし奉て、歸洛の事をいのらばやといふ、

〔本朝續文粹十一記〕白山上人縁記　　敦光朝臣

側聞、養老年中有一聖僧、泰澄大師是也、初占靈崛、奉崇權現以降、効驗被于遐邇、利益及于幽顯、〇中略保安二年六月一日、佛子西因爲貽將來揚推記之、

〔吾妻鏡一〕治承四年十月十六日乙未、今日令進發駿河國給、〇中略今夜至于相模國府六所宮、於此所被奉寄當國早河庄於箱根權現、

〔春日權現驗記八〕建保のころ、京にある尼公、嵯峨の釋迦堂にまゐりて、いさゝか啓白することありけり、やがて其所の別當仁雅法眼をもて導師とす、ことのおこりをかたるやう、わが身はもと南京菩提山の邊にすみ侍し程に、つねに春日社に參しに、緣につきて在京の後、ほどとはければ、おのづから春日まうでかなはぬことをなげきゐたるほどに、夢のうちに大明神しめし給やう、我はすなはち嵯峨の釋迦堂にあり、はやちかくなれば、わがもとへまゐるべしとうけたまは

るとみる、これによりてことに參詣して、祈請をいたすといひけり、權現御本地釋迦にておはしますといふことすでに符合しぬ、いとたふときことなり、この事建保六年十二月十五日、釋迦堂にて仁雅法眼、笠置解脫房にかたり申けり、

〔鎌倉大草紙〕鎮守の社は、清瀧權現。〇中略藏王權現。四阿山權現等を崇、

〔北條五代記〕一かまくらのかさいが谷は、北條時政のやしき、代々北條家居住とす、高時時行ほつらく以後、源尊氏公かまくらにおはしまして、御いくわういみじかりき、然所に御當家に樣々の怪異出來す、是たゞ事ならずとて、占方に尋給へば、いにしへほろびし平家の亡魂共恨みをなすよし申によりて、高時がやしきの跡に、寶戒寺といふ寺を建立し、おほくの平家の亡靈をとぶらひ、高時を德崇權現と號し、此寺の鎮守にいはひ給ひければ、さてこそさとしもしづまりぬ、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕まづ二宮權現と申は、伊弉諾伊弉冉尊の第二の御子、月神すなはちこれなり、陰德をつかさどり、あらがねの土を領し給ひて、萬物を生育し、神代のそのかみよりこの宮にすみ給ひて、彼母山のあるじと成給ふ、故に地主權現とは申也、次に大宮權現と申は、伊勢大神宮の御再誕とも申、そのいはれなきにはあらされども、まさしく素盞烏尊の第四の御子大己貴尊是也、

〔玉葉和歌集二十神祇〕
ちかひてきわまの岩戸をわけしよりかたきねがひをかなふべしとは
此歌はある人司をのぞみ申て、清水寺の地主權現に祈り申けるに、しめし給けるとなん、

〔大神宮參詣記〕傳敎大師、北嶺〇延曆寺をひらきて、一乘を七社權現の威光にかゞやかし、弘法高祖の南山をきめし、三密を四所明神の德風にひろむ、佛法獨たゝず、偏に神道の助によるものなり、

〔嚴神抄〕山王權現鎮座御事

大宮權現ト申スハ、大和國三輪ノ社ヨリ御影向、○中略
八王子權現ト申ハ、天照大神ノ御子、五男三女八王子ニテ御坐也、就中奉號八王子ト事ハ、於八人御中太郎王子掌御名也、
客人ノ宮ト申ハ、卽白山ノ妙理權現ノ御事也、
十禪師權現ハ、天照大神ノ御孫、火瓊々杵尊ノ御事、是ヲ號皇孫尊、又ハ天孫トモ申也
三宮權現ハ、八王子ノ御兄弟八人ノ內、三女ノ神ヲ別ニ齋シ顯シ奉ル、故ニ三ノ宮ト奉號シ、第三ノ影向ト申ニテハ非ズ、只三女ノ神ヲ以テ三宮ト申也、
大行事權現ハ、猿田彥神ニテ御ス也、又ハ衢靈神トモ號ス、

〔八幡宮本紀〕二宗砌法師云、○中略神代卷抄云、小戶、今日向小戶磐屋也、此說甚非也、何哉問之日向國人云、有鵜戶而無小戶、鵜戶磐屋有神、號鵜戶權現云、

〔壬生家文書〕東照大權現宣命
天皇我詔旨良萬止、故柳營大相國源朝臣○德川家康詔倍止勅命乎聞食止宣、○中略東照乃大權現止上給比治賜布、此狀乎平介久安介久聞食、○中略
元和三年二月廿一日

○按ズルニ、東照大權現神號宣下ノ事ハ、日光東照宮編ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔神道名目類聚抄〕四神祇天王號　祇園天皇、藤杜天皇等ノ類ナリ、是亦勅許ノ號ナリ、

〔祇園會細記〕三牛頭天王荒魂由來
抑當國乙訓の郡西の岡訓世鄕國中社牛頭天王と申奉るは、掛も畏き素盞嗚尊にてましﾏす、○中略天王御出現の事は、延曆の比なり、朕古の事を思ひて、王城守護の爲爰に來るはと仰られて則鎭座し給ふ、新羅にて、曾尸茂理(ソシモリ)の牛頭方(ゴヅハウ)といふ所にましませる故、牛頭天王と申奉る由、假令ば牛

宿に、河鼓星乘て牽牛と申がごとく、古物を體として申事也、

〔諸社根元記上〕一祇園

中間　大政所　牛頭天。王。〈素盞嗚尊〉

西間　少將井天。王。〈奇稻田姫神〉

天祿三年、以祇園社爲日吉末社、祇園牛頭天。王。初垂跡於播磨明石浦、移廣峯、其後北白川東光寺、其後陽成院御宇、移感神院、

〔玉蘂〕承久二年四月十四日、祇園社燒亡例事、

延久二年十月十四日辛未、戌剋感神院神地燒亡、牛頭天。王。御足燒損、

〔藤森社緣起〕弘仁七年、大師〈空海〉〇〈當〉稻荷大明神爲勸請、藤森天。王。敷地之内、所望之由被達叡聞、被伺中當社神慮之處、可奉借之由依有神託、三山之麓勸請之、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年閏三月七日壬子、伊豫國從四位上野。間。天。皇。神授正四位下、

○按ズルニ、類聚國史ニ之ヲ載セテ、亦野間天皇神ニ作ル、蓋シ天皇ト天王トハ其呼ブ所相似タルヲ以テ通用セシナラン、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十二月廿八日壬寅、授伊豫國正四位上野間神天。皇。神。從三位、

○按ズルニ、上條本書貞觀八年閏三月ノ文ニ依ルニ、野間神。ノ神ノ字ハ衍文ナルベシ、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年十月五日庚午、授飛驒國正六位上四。天。王。神。從五位下、

○按ズルニ、一代經律論釋法數ニ、四天、即四天王、皆帝釋之外臣也、又稱護世者、以能護持世間故也トアリテ、四天王ハ提頭頼吒、〈又云二多羅吒一、華言二持國一、謂能護二持國土一也、亦云二安民一、謂令二人民得一レ安隱一也、居二須彌山東黄金山一、〉毘留勒叉、〈又云二毘嚕陀迦一、華言二增長一、謂令二自他善根增長一也、居二須彌山南瑠璃山一、〉毘留博叉、〈又云二毘嚕博叉一、華言二廣目一、謂以二其目威一大遮二於人眼一彼也、居二須彌山西白銀山一、〉毘沙門、〈華言二多聞一、福德之名聞二於四方一也、居二須彌山北水精山一、〉是ナリ、但シ三代實錄ニ云フ所ハ、此ト同異如何ヲ知ラズ、

正宮

〔三代實錄陽成三十四〕元慶二年九月十六日戊申、是日授正六位上石見國石塔鬼王帝釋天王國社神並從五位下、

○按ズルニ、帝釋天王ハ、大方等大集經諸天王護持品等ニ在リ、亦三代實錄ニ云フ所ト同ジキカ、否ラザルカヲ知ラズ、

〔諸神記下〕一粟田口天王事

天王者四十年已前、故二品御勸請也、天文八年七月九日注之

〔鎌倉大草紙〕其後勅特賜天長山國淸萬年寺と號す、鎭守の社は、○中略祇園天王、

〔山州名跡志四下〕東天王社　在岡崎黑谷山南　鳥居南向石柱　額正一位東天王　拜殿同社同所祭牛頭天王、

〔憲法類編十四祭典〕戊辰○明治元年三月　日神祇局達

一中古以來、某權現、或ハ牛頭天皇抔ト稱シ、其外佛語ヲ以神號ニ相稱シ候神社不少候、何レモ其社ノ由緒ニ基キ、稱號相改可申事、

〔諸神記上〕大隅八幡

長承元年正月之比、大隅正八幡宮御幸大路中云云、

〔安齋隨筆前篇十四〕正八幡宮　古き軍談の冊子等に、武士の誓語に正八幡宮も照覽あれと云語あり、八幡宮の本地は阿彌陀なりとて、八幡大菩薩と號するに依て、神と佛と入交り紛はしきゆゑ、本地去りて正眞の正八幡大神宮と云意なるべし、觀音も三十三身に變化するといふ、依て變化せざる時の正體を正觀音と號するに同じ、

〔百練抄六崇德〕長承元年六月廿三日、太宰府言上正八幡宮、高四尺、弘三尺、厚二尺石二、自然出來、各有八幡二字銘事、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年元久元年○十月十七日丙午、大隅國正八幡宮寺訴申事、被經沙汰、是故右幕下○源頼朝御時、掃部頭入道寂忍○中原親能爲正宮地頭之處、宮寺依申子細、被停止其儀訖、其後又三箇所被補三人地頭之間、造宮之功難成之由云々、仍今日所止彼地頭職等也、

〔長門本平家物語四〕大隅のけしきの森につき給ふ、少將○成經此森を見給て、

秋ちかきけしきの森になく蟬の涙の露や下葉そむらむ、といふ名所は、是やらむとこそおぼしめしけれ、正八幡宮の御わたりを、よ所ながらをがみ奉り、宿願をたてゝ通られけり、

〔宇佐八幡託宣集〕太宰府大監惟宗爲主所持舊記云、宇佐宮二殿御體玉依姬歟、是陳大王娘令流付大隅國、其王子卽大隅正宮是也、其母玉依姬宇佐二殿云云、或記云、宇佐宮二殿玉依姬歟、是陳大王娘流付大隅國、其王子正八幡歟、其母后改生天、爲大菩薩御母歟云々、大比留女

〔八幡愚童訓下〕大比留女、筑前國若椙山へ飛入給テ、後香椎聖母大菩薩ト顯玉フ、皇子ハ大隅國ニ留テ、正八幡ト被祝給リ、

〔諸神根元抄〕五所別宮

大隅國正八幡宮

正宮者始在大隅國、爾入流之後、後豐前國坐宇佐郡、

〔百練抄五堀河〕寛治二年二月一日、諸卿定申宇佐宮神人訴申、檢非違使公則盜取黃金并大貳實政射危正八幡宮神輿事、

〔夫木和歌抄三十四神祇〕正八幡宮をうさのみや宇佐

わたのはらなみちへだつるうさのみやふかきちかひはよゝにかはらじ　後京極攝政

〔島津文書〕奉寄進正八幡宮、日向國見作郡田貫田尼藤左衞門尉時綱領、右爲朝安穩、異國降伏、所奉寄進也、爲向後、就社務令管領、可被御祈禱者、依鎌倉殿□奉寄如件、正安三年十二月廿四日、正

若宮

五位下行相模守平朝臣師時列、□四位下行武藏守平朝臣時村列、

〔神葉日記〕此日本國をば、當社〇日吉の御成敗ある事にて侍り、其故は伊勢大神宮、正八幡、春日大明神、此三社の帝王をも、人臣をも、器量をえらばせ給事にて有也、

〔椿葉記〕つたなき隱士の家より出させ給て、かたじけなくも天日嗣を受させ給〇花園後事、天照大神、正八幡大菩薩の神慮とは申ながら、ふしぎなる御果報にて渡らせ給へば、これもわたくしの幸運眉目にてあらずや、

〔二十二社註式〕石清水

應神天皇〇中略人皇三十代欽明天皇卅二年辛卯宇佐宮御示現、廣幡正八幡大神宮是也、

〔續古事談臣節二〕後三條院はこの定文を御覽じて、〇中略伊勢大神宮、正八幡宮いかゞおぼしめしけんとぞおほせられける、

〔二十二社註式〕石清水

人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥二月十一日、依勅願詔大中臣清麻呂近江國栗太郡於矢橋浦奉勸請聖母大神、住吉、高良三所、正八幡宮一座在山田郷、同日鎭座、

〔神道名目類聚抄神祇四〕若宮　此號アマタ心得アル事ナリ、或本宮御子ノ神ヲ祭テ若宮ト稱ス、譬バ石清水八幡宮ニ若宮ト稱スルニハ、仁德天皇、水若宮ト稱スルハ、宇治皇子ナリ、本宮應神天皇ニテマシマス故ナリ、又勸請シテ其社號ヲ、若宮ト稱スル事アリ、若宮八幡宮ノ類是ナリ、新ニ爰ニ祭ノ名ニシテ、本宮ニ對シテ新宮ノ義ナリ、又和州春日ノ若宮、一社ノ深秘ニシテ、神主一人相承シテ、他人是ヲ知事ナシ、又三輪社ノ若宮ハ、大田々根子命、梅宮ノ若宮ハ、橘諸兄公ナリ、此類心得アル事ナリ、其所ニ求テ識得スベシ、

〔類聚名物考神祇十一〕若宮　わかみや　老せぬ宮

八幡宮を配祀に、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇、この三所を必すあはせ祭なり、然に若宮と申時は、仲哀天皇をのぞき奉りて、仁德天皇を加へ奉る是を若宮とは申也、歌に老せぬ宮とも申奉れり、

〔三代實錄〕二十四清和 貞觀十五年八月四日丙申、授飛驒國從六位上氣多若宮神從五位下、

〔三代實錄〕四十陽成 元慶五年十月九日甲申、授飛驒國從五位下氣多若宮神從五位上、正六位上賀茂若宮神從五位下、

〔賀茂御幸記〕寬元四年四月二十九日戊子、今日賀茂御幸也、先奉仕御祓、御裝束大略如八幡、但御座幣案等皆東向儲之、幣案白妙御幣、○中略 若宮、貲布鋪、片岡、大田各一捧、在北

〔中右記〕元永二年五月朔日丙午、頭辨云、先日仍伊賀國司申、春日御領新立莊々可被停止之由、被下宣旨了、予奉件宣旨也、內々申殿下之處、此中壬生野莊ハ、宛春日若宮常燈、既經年序、

〔諸神記上〕春日社若宮、

嘉禎二年十二月七日宣旨、春日別社若宮祭、宜令奉官幣、前日發遣其使事、

〔二十二社註式〕第八十六代四條院治五年、嘉禎三年十一月廿九日、新年穀奉幣宣命辭別云、去三日神木歸座、自今始天向後仁至末天、專以公卿天可爲勅使、兼又若宮之祭禮者、當社之壯觀也、殊凝叡襟天可奉官幣、十二月十七日庚子、春日若宮祭也、

〔續拾遺和歌集二十神祇〕春日の若宮神主にて、久しくつかへまつる事を思てよめる、○下略

〔日吉社神道秘密記〕

若宮　俗形上之大將軍勸請之、○中略

若宮　女形宮津之南若宮勸請之、○中略

北背酒井町酒之泉涌出タリ、故號酒井町、此泉之精神祟之建社、以石形爲神體、有遷宮、南若宮大明神是、穴太村ヨリ勸納大明神勸請之、女形之御神體勸納之社、客人宮ヨリ勸請之、客人宮者、日本開

闘之明神是也、然富津南若宮客人明神也、〇中略

若宮小比叡大明神勸請、依之號比叡辻、俗形 本地藥師、

若宮和田町俗形

〔吾妻鏡一〕治承四年十月十二日辛卯、寅剋爲崇祖宗、點小林郷之北山、構宮廟、被奉遷鶴岳宮於此所、〇中略本社者後冷泉院御宇、伊豫守源朝臣頼義、奉勅定、征伐安倍貞任之時、有丹祈之旨、康平六年秋八月、潜勸請石清水、建瑞籬於當國由比郷、〇今號之下若宮、　十六日乙未、爲武衛御願、於鶴岳若宮、被始長日勤行、

〔增鏡四三神山〕正月〇仁治三年の五日より、内の上〇四條例ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつかせ給はねば、いとさう〴〵しく人々おぼしあへるに、九日の曉かくれさせ給ひぬとてのゝしりあへる、いとあさましともいふばかりなし、〇中略さてしもやはにて、あづまへぞ告げやりける、〇中略京よりのはしり馬といへば、何事ならむとおどろきながら、使めしよせて聞くにいとあさまし、さりとてあるべきならねば、その席よりやがて神事はじめて、若宮〇鶴岡の社にて、くじをぞとりける、〇又見五代帝王物語

〔吾妻鏡五〕文治元年十二月卅日己卯、令拜領諸國地頭職給之内、以土佐國吾河郡、令寄附六條若宮給、彼宮者、點故廷尉禪室〇爲義源六條御遺跡、被奉勸請石清水、

〔玉葉和歌集二十神祇〕後深草院御灌頂、長講堂にて侍りけるに、とらの時の水とらせ給はんとて、六條若宮の閼伽井に臨幸の時よみ侍りける、〇下略

〔八幡宮本紀附錄〕山城國佐女牛八幡宮　愛宕郡五條橋の東四五町許にあり、若宮八幡とも云、六條西洞院佐目牛通堀河邊に有故に、世に西洞院若宮とも、佐女牛八幡とも云、〇中略後冷泉院天喜元年勅願によりて勸請し給ふ、卜部兼親これを奉行せり、

新宮

〔吾妻鏡十五〕建久六年三月九日甲午、今日將軍家、御參石淸水幷左女牛若宮等、依爲臨時祭也、

〔源平盛衰記二十七〕信濃橫田川原軍事

覺忠〈○原六郎〉大法堂ノ前ニシテ馬ヨリ下リ、甲ヲ脫デ、八幡社ヲ伏拜ミ、南無八幡大菩薩、我君先祖崇靈神也、願ハ木曾殿〈○義仲〉今度ノ軍ニ勝事ヲエセシメ給ヘ、御悅ニハ六十六箇國ニ、六十六箇所ノ八幡社領ヲ立テ、大宮ニ御神樂、若宮ニ仁王講釆兒ノ御前ニ左右ニ八人宛ノ神樂女、同神樂男、退轉ナク神事勤ナ、進ントゾ祈念シケル、

〔二十二社註式〕若宮八幡四所御事

若宮　仁德天皇也、

今宮　宇治王子也

宇禮　姉

久禮　妹〈一本云、姉妹歟、則男體國若宮、〉

私云、仁德天皇繼王位給畢、不可有若宮之稱歟、〈○又見神祇記〉

〔看聞日記〕應永二十六年六月廿五日、廿四日夜、八幡鳥居風不吹ニ顚倒了、若宮御前鳥居也、

〔延喜式神名帳頭註〕紀伊牟婁郡

熊野　崇神天皇十六年、〈○熊野略記作六十五年〉始建熊野本宮、又景行天皇五十八年、建同新宮、

〔百鍊抄十二順德〕建保二年十一月廿二日、今日熊野新宮寶殿以下、拂地燒亡云云、

〔平家物語十〕くまのさんけいの事

本宮より舟にのり新宮へぞ參られける、

〔百鍊抄九安德〕壽永二年正月九日、入道太政大臣〈師長法名理覺〉東山妙音堂供養、〈○中略〉上皇〈○後白河〉御幸、作文、寄進新日吉社、被人所領五ヶ所、可爲上皇御結衆所、　四月十九日、上皇參籠新熊野、有御遊、公卿殿上

今宮

人有田樂、

〔玉葉和歌集二十神祇〕

夜もすがら佛の御名をとなふればこと人よりもなつかしきかな

是は德治三年の春の比、新熊野に本山の衆どもうつりゐて、おこなひなどしけるに、○中略うちまどろみ侍りける夢に見えけるとなん、

〔源平盛衰記四十二〕勝浦合戰附勝磨并親家屋嶋尋承事

備屋嶋ヨリ此方ニ敵アリヤト問ヘバ、近藤六申ケルハ、今三十町計罷テ、勝宮ト云社アリ、彼ニ阿波民部大輔成能ガ子息、傳内左衛門尉成直、三千餘騎ニテ陣ヲ取タリツルガ、此間河野四郎通信ヲ攻ントテ、伊豫國ヘ越タリト聞ユ、餘勢ナドハ少々モ候ラント云ケレバ、判官○源義經急々トテ、○中略一人當千ノ者共ヲ、先トシテ、打ヤ〱トテ、勝宮ニ押寄セテ見レバ、傳内左衛門尉ガ兵士ニ置タリケル歩兵等少々在ケレ共、散々ニ蹶散シテ逃ル、ハタマ〱遁ケリ、向奴原一々ニ頸切懸テ打程ニ、新八幡ノ寶前ヲバ、判官下馬シテ再拜スレバ、郎等モ又如此、

〔雍州府志二神社〕愛宕郡

新玉津嶋　在五條松原通室町東、此邊古爲藤俊成卿之宅地、因稱五條三位、家内勸請紀州和歌浦玉津嶋明神、而號新玉津嶋神、是允恭天皇之后、衣通姫、而稚渟毛二岐皇第二之女也、

〔日本紀略十一後〕長保三年五月九日庚辰、於紫野祭疫神、號御靈會、依天下疾疫也、○中略京中上下、多以集會此社、號之今宮、

〔諸神記中〕一紫野今宮

寛治三年五月九日、於紫野有疫神祭事、此祭長保年中所始行也、世號今宮祭、毎年五月九日祭也、件日、本宮奉白妙幣、備供神物、

御前

〔親長卿記〕明應五年二月廿二日、紫野今宮御神樂兩座行之、○中略今宮有立願事、所務取直者萬疋令寄進造營歟、兼爲何事可沙汰云云申付今宮別當了、

〔看聞日記〕應永廿三年七月廿六日、或說、京下方ニ住男、宇治今伊勢へ參詣シケルニ、社頭邊白蛇アリ、此男扇ヲ開テ、若宇佛ナラバ此扇へ來ルベシト云ケルニ、此蛇扇ノ上へハヒノボリケレバ、悅テ裹以テ下向シケリ、

〔諸神記上〕一周防國朝倉八幡　神體圓子宇佐大神

貞觀元年、立行宮勸請之、同國今八幡者、從此社後人之勸請歟、

〔百練抄七後二條〕永曆元年十月十六日、奉移熊野御體於新造社壇、今熊野是也、上皇○後白河御願也、

〔源平盛衰記十八〕文覺淸水狀天神金事

文覺、○中略舳頭ニ立踏テ、奥ノ方ヲ睨ヘテ、龍王ヤ候〳〵、イカニ海龍王共ハナキカ、叫々トゾ呼タリケル、舟中ノ者ドモ、コハ如何ナル事ゾヤ、淺猿ヤ、斯折節ニハ龍王御前トモコソカシヅキ申ベキ、惡口申テイトヾ龍神ノ御腹立進ナンズ、中々詮ナク起ニケリト悲シキ中ニモ、今少怖シナゾマサリケル、

〔源平盛衰記二十七〕信濃橫田川原軍事

親忠、○源六郎大法堂ノ前ニシテ、馬ヨリ下リ、甲ヲ脫デ、八幡社ヲ伏拜ミ、○中略願ハ木曾殿、○義仲今度ノ軍ニ勝事ヲエセシメ給へ、御悅ニハ、○中略峯兒ノ御前ニ、左右ニ八人宛ノ神樂女同神樂男、退轉ナク神事勤テ進ントゾ祈念シケル、

〔大神宮參詣記〕大宮のたつみに、御池を隔て高き山にましますは、高宮と申す、古語には多賀の御前と申なり、

〔延喜式神名帳頭註〕尾張年魚市郡

熱田、〇中略源大夫御前、紀大夫御前、

〔玉葉和歌集 二十神祇〕

まてしばし恨なはてそ君をまもる心の程は行末をみよ

此歌はある人、身のしづめる事を、熊野にまうでゝうれへ申けれど、しるしなくて久しくなりける事を恨みて、御前に通夜して、〇中略まどろみ侍けるに、西の御前の方より、人の聲にてしめし給けるとなん、

〔二十二社註式〕祇園社

西間 本御前、奇稻田媛垂跡、一名婆利女、一名少將井、脚摩乳、手摩乳女、

東間 蛇毒氣神、龍王女、今御前也、

北野社

中間御前 菅丞相

〔諸社根元記 上〕廣田社本緣事

須川御前、

〔山城名勝志 十二宇治郡〕高野鄕總社

ウシノゴゼン、按緣起云、牧御前云云、

〔神社啓蒙 三〕祇園

美御前三座

社家者流云、素盞烏尊所生之三女神也、第一京上﨟、第二岐御前、第三小上﨟、

〔山州名跡志 二〕祇園

美御前社 在本殿東西向 所祭 素盞烏御子也

〔美濃國因幡社緣起〕后御前（大若隨、更衣兒御前母、依也、毛里嶋守倫深女也、）

〔八幡宮但供名帳〕
奉備東御前　但供愛納受
奉備中御前　但供愛納受
奉備西御前　但供愛納受

〔延喜式神名帳頭註〕大隅桑原郡
鹿兒嶋　南面應神天皇、若宮仁德、大御前大比留女、

〔諸神根元抄〕大隅宮
大御前　大比留女歟（舉右簾之神功歟）

〔雍州府志二神社〕愛宕郡
下御前　在同處（入）則日吉聖眞子、而正哉吾勝尊也、

〔宮寺緣事抄一〕劍御前事
仍爲降伏天魔、奉祝劍御前（中略）即表魔緣降伏之本誓也、依此義故本名劍御前歟、

〔神祇拾遺〕愛宕權現（式丹波國桑田郡）
端御前　軻遇槌命也
奥御前　伊舍那美尊

〔山州名跡志七〕下御前　大原庵西到北路傍左云小祠、上御前　右社北一町餘社傍云小祠（二開下、由東詳、）

古事類苑

神祇部三

神魂



古事類苑

神祇部三

神魂

名義

神魂トハ、天神地祇ノ靈魂ニシテ、之ヲミタマト云ヒ、其作用ニ從ヒテ、荒魂(アラミタマ)、和魂(ニギミタマ)、幸魂(サキミタマ)、奇魂(クシミタマ)等ノ稱アリ、荒魂ハ其剛健ノ性ヲ具有スルトキノ稱、和魂ハ其和穩ノ德ヲ保持スルトキノ稱、之ヲシテ幸福アラシムルトキハ、則幸魂ト云ヒ、其奇靈ノ德ヲ以テ庶事ヲ識別スルトキハ、則奇魂ト云フ、共ニ皆神魂ノ德用ニシテ、或ハ物ニ憑依シテ以テ其威靈ヲ示ス、而シテ分魂ノ作用及靈德ニ就テハ、後世學者ノ解說一ナラズ、今併セテ卷尾ニ附載ス、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、大己貴神問曰、然則汝是誰耶、對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、○中略 幸魂此云佐枳彌多摩、奇魂此云倶斯美枕磨、

〔日本書紀 九神功〕九年○仲哀 九月己卯、神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、和魂此云珥岐瀰多摩、荒魂此云阿邏瀰多摩、

神魂種別

〔倭名類聚抄 二鬼神〕幸魂 日本紀云、幸魂、和名左岐美太萬 俗云、左岐太萬

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

造奉荒祭宮一院 在大神宮以北相去廿四丈

稱大神宮荒魂宮、御形鏡坐、○中略

月讀宮一院 在大神宮以北相去三里、○中略

此一稱伊弉諾尊、次稱伊弉冉尊、已上奈良朝廷御世定祝、次稱月讀命、御形馬乘男形、著紫御衣、
金作帶大刀佩之、次稱荒魂、已上內人物忌定供奉、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中行事幷月記事

六月例

以同日〇十九日未時、月讀宮祭行事
四神殿在西宮二殿、一殿坐伊佐奈岐尊、一殿坐伊佐奈美尊、東方二神殿在之中、一殿坐月讀神、一殿坐同神荒魂、

〔御鎭座傳記〕荒祭宮一座
皇大神荒魂神也、伊弉諾尊到筑紫日向小戸橘之檍原、而祓除之時洗左眼、因以生日天子、大日靈貴也、天下化生名曰天照大神荒魂、荒祭神也、號祓戸神、瀨織津比咩神是也、

〔止由氣宮儀式帳〕管高宮壹院等由氣大神宮之荒御玉神也、

〔御鎭座傳記〕多賀宮一座
止由氣皇大神荒魂也、伊弉諾尊到筑紫日向小戸橘之檍原、而祓除之時洗左眼、因以生日天子、是大日靈貴也、天下化神名曰天照大神之荒魂、荒祭神也、復洗右眼、因以生月天子、天御中主靈貴也、天下化而名曰止由氣大神之荒魂、多賀宮是也、

〔延喜式神名帳頭註〕攝津武庫郡
廣田　日本紀云、神功皇后九年、○中略伐新羅之明年春二月、天照大神誨曰、我荒魂不可近皇居、當居御心廣田國、隨神敎以鎭座焉、或說云、廣田者天照大神之荒魂也、可謂神宮御同體、如式文者一座也、

〔日本書紀神代一〕一書曰、夫大己貴命與少彥名命、戮力一心、經營天下、○中略其後少彥名命行至熊野之御碕、遂適常世鄕矣、○中略自後國中所未成者、大己貴神獨能巡造、遂到出雲國、乃興言曰、夫葦原中國、

本自荒芒、至及磐石草木、咸能强暴、然吾已摧伏、莫不和順、遂因言、今理此國唯吾一身而已、其可與吾共理天下者、蓋有之乎、于時神光照海、忽然有浮來者、曰、如吾不在者、汝何能平此國乎、由吾在故汝得建其大造之績矣、是時大己貴神問曰、然則汝是誰耶、對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、大己貴神曰、唯然、廼知汝是吾之幸魂奇魂、今欲何處住耶、對曰、吾欲住於日本國之三諸山、故郎營宮彼處、使就而居、此大三輪之神也、

〔先代舊事本紀 四地神〕大己貴命問曰、汝命是誰耶、名字云何、對曰、吾是汝之幸魂奇魂術魂之神也、

〔大倭神社註進狀〕園韓神社三座

傳聞、園神者、大己貴命之和魂大物主神也、

〔倭姬命世記〕荒祭宮一坐、（皇大神荒魂、伊弉那伎大神所生神、名八十枉津日神也、○中略）

荒魂命（右）方形鏡坐（飛鳥宮御宇丙寅年十一月十一日、遷魚見神社也、）

〔延喜式 四伊勢大神宮〕月讀宮二座、（去大神宮北三里）

月夜見命一座

荒魂命一座

〔倭姬命世記〕泊瀨淺倉宮大泊瀨稚武天皇（○雄略）即位廿一年丁巳冬十月、倭姬命夢敎覺給（久、○中略）明年戊午秋七月七日、以大佐々命（天）從丹波國余佐郡眞井原（志天）、奉迎止由氣皇大神、度會山田原（乃）下津磐根（爾）大宮柱廣敷立（氏）、高天原（爾）千木高知（氏）鎭定坐（止）稱辭竟奉（利）奉饗（利）、神賀吉詞白賜（倍利、○中略）

又皇大神第一攝神荒魂多賀宮（乎）波、豐受大神宮（爾）奉副從給者也、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年八月甲寅、幸難波内親王第、此日異常風雨、拔樹發屋、卜之伊勢月讀神爲祟、於是每年九月准荒祭神奉馬、又荒御玉命、伊佐奈伎命、伊佐奈彌命入於官社、

〔大倭神社註進狀〕謹考舊記曰、大倭神社在大和國山邊郡大倭邑、蓋出雲杵築大社之別宮也、傳聞、倭

大國魂神者、大己貴神之荒魂與和魂、戮力一心、經營天下之地、廼得大造之績、在大倭豐秋津國守國家、因以號曰倭大國魂神、亦曰大地主神、以八尺瓊為神體奉齋焉、

〔延喜式 (九神名)〕大和國城上郡狹井坐大神荒魂神社五座 (鍬靫)

〔大倭神社註進狀〕狹井神社 (在大和國城上郡)

傳聞、狹井神者、大己貴命之荒魂、大國魂神、即當社別社也、

〔大三輪神三社鎭座次第〕祭禮之事

鎭華祭者、式三月擇日、於神祇官奉敬祭當社狹井社也、當社行之、春華飛散之時、疫神分散而行癘、為其鎭遏必有此祭、故曰鎭華祭也、此祭自大寶元年而始矣、狹井社大己貴命之荒玉也、

〔古事記 (中仲哀)〕故是以新羅國者、定御馬甘、(○中略) 爾以其御杖、衝立新羅國主之門、即以墨江大神之荒御魂、為國守神而祭鎭還渡也、(○神功皇后)

〔日本書紀 (九神功)〕皇后從新羅還之、(○中略) 於是從軍神表筒男、中筒男、底筒男三神、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰、啓于皇后曰、神欲居之地、必宜奉定、則以踐立為祭荒魂之主、仍祠立於穴門山田邑、(○中略) 皇后之船、直指難波、于時皇后之船、廻於海中以不能進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂、不可近皇居、當居御心廣田國、即以山背根子之女葉山媛令祭、(○中略) 亦表筒男、中筒男、底筒男三神、誨之曰、吾和魂宜居大津渟中倉之長峽、便因看往來船、於是隨神教以鎭坐焉、

〔延喜式 (十神名)〕長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座 (並名神大)

〔延喜式 (三臨時祭)〕祟神祭 (○中略)

右荒魂和魂各中分並薦而祭、若新有祟神者、依件鎭祭、移弃山野、

〔釋日本紀 (十二述義)〕土左國風土記曰、土左郡郡家西去四里、有土左高賀茂大社、其神名為一言主尊、其祖

末詳、○中略或說云、時神與天皇○雄略相競有不遜之言、天皇大嗔奉移土佐、神隨而降、神身已隱、以祝代之、初至賀茂之地、後遷于此社、而高野天皇寶字八年、從五位上高賀茂朝臣田守等、奏而奉迎鎮於葛城山東下高宮岡上、其和魂者猶留彼國、于今祭禮而云云、

〔萬葉集五雜歌〕筑前國怡土郡深江村子負原、臨海丘上有二石、○中略古老相傳曰、往者息長足日女命神功皇后征討新羅國之時、用茲兩石插著御袖之中、以爲鎮懷、實是御裳中矣所以行人敬拜此石、乃作歌曰、可既麻久波、阿夜爾可斯故斯、多良志比咩、可尾能彌許等、可良久爾遠、武氣多比良宜氏、彌許許呂遠、斯豆迷多麻布等、伊刀良斯氏、伊波比多麻比斯、麻多麻奈須、布多都能伊斯乎、世人爾、斯咩斯多麻比氏、余呂豆余爾、伊比都具可禰等、和多能曾許、意枳都布可延乃、宇奈可美乃、故布乃波良爾、美氏豆可良、意可志多麻比氏、可武奈何良、可武佐備伊麻須、久志美多麻、伊麻能遠都豆爾、多布刀伎呂可儛、阿米都知能、等母爾比佐斯久、伊比都夏等、許能久斯美多麻、志可志家良斯母、

〔延喜式八祝詞〕出雲國造神賀詞

大穴持命乃申給久、皇御孫命乃靜坐牟大倭國申天、己命和魂乎八咫鏡爾取託天、倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天、大御和乃神奈備爾坐、○中略皇御孫命乃近守神登貢置天、八百丹杵築宮爾靜坐支、

〔大三輪神三社鎮座次第〕腋上池心宮御宇天皇御世、○孝昭神明憑吉足日命、曰吾國造大己貴命也、大初己命之和魂、取託八咫鏡、名曰倭大物主櫛𤭖玉命、鎮座大三輪神奈備云云、令造瑞籬奉齋焉、隨神託立瑞籬於大三輪山、遣吉足日命令崇齋大己貴命、大物主命詔吉足日命、自今已後可爲宮能賣、是神宮部造先祖也、

〔大倭神社註進狀〕家牒曰、腋上池心宮御宇天皇○孝昭元年秋七月甲寅朔、遷都於倭國葛城、丁卯、天皇夢有一貴人、對立殿戶、自稱大己貴命曰、我和魂自神代鎮三諸山、而助神器之昌建也、荒魂服玉身在大殿內、而爲寶基之衛護、即得神教、而天照大神、倭大國魂神、並祭於天皇大殿之內、

神魂解說

〔日本書紀 九神功〕皇后則識神教有驗、更祭祀神祇、躬欲西征、(中略)既而神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、(和魂、此云珥岐瀰多摩、荒魂、此云阿邏瀰多摩、)即得神教而拜禮之、因以依網吾彥男垂見爲祭神主、(中略)既而據荒魂爲軍先鋒、請和魂爲王船鎭、

〔出雲風土記 意宇郡〕安來郷(中略)北海有毘賣埼、飛鳥淨御原宮御宇天皇御世(天武)甲戌七月十三日、語臣猪麻呂之女子遙(逍上恐遙二字)作埼、邂逅遇和爾、所賊不皈、爾時父猪麻呂所賊女子斂毘賣埼上、大發聲憤、號天踊地、行吟居嘆、晝夜辛苦、無避斂所、作是之間經歷數日、然後興慷慨志、磨箭鋭鋒、撰便所居、即擡訴云、天神千五百萬、地祇千五百萬、並當國靜坐三百九十九社、及海若等、大神之和魂者靜、而荒魂者皆悉依給猪麻呂之所乞、良有神靈坐者、吾所傷助給、以此知神靈之所神者、爾時有須臾而和爾百餘、靜圍繞一和爾、徐率依來、從於居下、不進不退、猶圍繞耳、爾時擧鋒而刃中央一和爾、殺捕已訖、然後百餘和爾解散、殺割者女子之一脛屠出、仍和爾者殺割而挂串立路之垂也、

〔釋日本紀 七述義〕幸魂奇魂　私記曰、問、其義如何、答、幸魂是左支久阿良之尤留魂也、行矣者是久道之意也、奇魂者城衞之義也、言此魂守衞宮門之魂也、私案、五行大義曰、死者魂氣登天爲神、魄氣下降爲鬼云云、今案幸魂者是魂神也、奇魂者是魄鬼也、以之謂之奇魂、若用魄字之條可叶本義歟、又幸者行之義、奇者久止之義歟、

〔神代口決 三〕幸魂奇魂者、一魂兩化之名、幸魂者念而先臨而就、奇魂者不念而成、是即天命一身之主也、

〔日本書紀纂疏 上五〕幸魂奇魂者、魂魄之名也、左傳曰、人生始化曰魄、既生魄陽曰魂、用物精多則魂魄强、是以有精爽至於神明、京房易云、六十四卦五世之後、四爻變爲遊魂、三爻二爻變爲歸魂、世傳曰、世魂術今非此義、大己貴之幸魂化神、始顯照海之異、遂歸住大和國之三諸山、是蓋大三輪明神也、

〔神代卷惟足抄 三〕幸魂奇魂是魂魄也、サキハ先也、始也、黑白ヲ早見早合點スルガ魂也、クシハ赤黑

白ノ品々ヲトクトク了解スルガ魄也、魂魄ヲ離テ又何者カ自問スルゾト云ヘバ、天ヨリ命ジ玉フ唯一神也、彼陰陽魂魄ヲナスユヱンノモノガ有、魂魄ノ主トナリテ命令ヲナスモノ也、是道體ノ唯一神也、唯然ト有、是即唯一神ナリ、萬事ハ皆魂魄ノ所爲ナリ、是天命ノ唯一神ヨリナサシムル處ナリトサトリ玉フ也、

〔古史通〕二舊事紀にみえし所は、此神の言に、我は汝の幸魂奇魂術魂の神也とのたまひしと記されたり、さるは此術魂。。といふは、陽魂陰魄の外に、又いかなる魂をいひしや、おもふに上世の俗に、佐枳彌多麻(サキミタマ)、倶斯美拖磨(クシミタマ)などいひしこと、かならずさる名附るものあるべけれども、後代に及びて其說傳はらざれば、其義の詳ならぬなり、

〔神學辨疑〕三十四和魂荒魂辨

謹按、和魂荒魂二者、造化與人體各有焉、神功紀所謂表筒男、中筒男、底筒男三神、其和魂服玉身而守壽命、荒魂爲王船鎭矣、祭攝津國住吉郡住吉神社、及南邊大津渟中倉之長峽是也、荒魂爲先鋒而導師船焉、祭長門國豐浦郡住吉坐荒魂神社是也、此三神造化海潮之神、而有和魂荒魂、譬如潮汐平穩者稱和魂、潮汐洪濤者稱荒魂、皆神之作用而不可誣焉、人體亦有和魂荒魂、所祭天照大神於攝津國武庫郡廣田社者稱之荒魂、則所祭於伊勢內宮者、不言而爲和魂也明矣、所祭大己貴命於大和國城上郡大神大物主神社者和魂也、所祭同郡狹井坐大神荒魂神社者其荒魂也、神祇令釋云、狹井者大神之麁御靈也、散而行疫是也、凡和魂者猶言和妙、和平之意也、荒魂者猶言荒妙、麁暴之意也、又按延曆內宮儀式帳、有別宮荒魂社、然猶載五部書、附會之說而不可信焉、古典之證如左、○中略

右蒙先生之命、而筆記以奉机前伏乞訂正、

延享三年秋九月　恭軒先生門人河村秀與書

〔日本書紀通證〕五正通曰、幸魂奇魂者、一魂兩化之名、卽天之所以命我而爲一身之主者也、盧邊曰、先臨而知之

謂二中魂一、謂レ恩而得レ之、謂二奇魂一、玉木翁附、中先也、智豊而知者、奇靈也、內守而覺者、舊事紀又有二斷魂一、謂レ鬯化於用也、今按倭名抄中魂、俗云二佐岐太里一、今俗謂下他人有レ心、我付二度之一、爲中佐岐太里上、靈魂、蓋據二中魂之義也、兼良曰、幸魂則陽魂、主レ氣與レ生、可下以慶二幸一矣、奇魂則陽魄、主レ形與レ死、可下以奇二異一矣、

〔古事記傳十二〕幸魂奇魂は、共に和魂の名にて、幸奇とは、其德用を云なり、二魂には非ず、荒魂を定魂とし、奇魂を和魂とするは非なり、其故は若二の魂ならば、二神と現れたまふべきに、今現れたまふ神は一柱なり、且出雲國造神賀詞にも、倭の大美和に嗣るは、此神の和魂とこそ見えたれ、下に其文を引く、云るを見よ、さて幸魂書紀に、此云二佐枳彌多摩一とは、私記に、是左支久阿良之牟留魂也と云て、字の如く、其身を守りて幸あらする故の名なり、書紀神功卷に、和魂服二玉身一、而守二壽命一とある、是其意なり、是にて幸魂といふも和魂の總稱なることをさとれ、奇魂も書紀に、此云二俱斯美多摩一とあり、字の如くにて、奇靈德を以て萬事を知識辨別て、種々の事業を成さしむる故の名なり、高靈玉に、可武佐伊成須久志美多摩こあるには、石を將て奇しき御玉さ云るなれば、魂のことには非ず、即上には眞玉成二の石とあるを見て知べし、さて今大國主神の己命獨しては、此國を得作竟じと憂賜ふは、書紀に、理二此國一、唯吾一身而已と云て、ほこりたまへる國く、たゞ荒御魂のみすゝみて、和御魂の乏しかりしなり、故今神產巣日神の御詔にて、萬事を成しむるには、皆此神の御靈なり、別に其和魂の御形を現はして、如此示し教へしめたまふなり、かくて此教のまにまに齋祀りたまふに因て、和魂滿足し榮坐て、其御身を守り幸へたまひ、奇靈き德を以て、遂に天下を作竟しめたまふ、故是を幸魂奇魂とは云なりけり、此幸魂奇魂を、漢籍に、いはゆる魂魄にあてゝ云る說、又幸を先の說とせる說など、皆ひがことなり、又こゝの問答を、山崎氏（名嘉、號闇齋）などが、自問自答といへるなど、漢意に溺れて、神道をえしらぬものなり、

〔古事記傳三十〕凡て麁（アラ）と和（ニギ）とを對言こと多し、和多閇（ニギタヘ）荒多閇（アラタヘ）、和稻（ニギシネ）荒稻（アラシネ）、和海布（ニギメ）荒海布（アラメ）、毛柔物（ケノニゴモノ）毛麁物（ケノアラモノ）此等は皆祝詞の言なりなどの如し、此和荒に種々の意ありて、荒金荒玉などの類は、物の生れるまゝにて、未修治を加へぬを云、其に對へて修治たる物を和某と云、右の荒和などもみななり、此は生魂の事の意なり、■岐多豆と云、又物の鈍きと精きとをも云、強きと柔なるとをも云、又人家などの荒るゝと饒ふと、魂名を■津と書り、又浪風の騷ぐを荒ると云、靜まるを和ぐと云、神の心なども荒ると云、和むと云、[illegible]

ごも、間岐、間非、間碁本などゝ同言なり、さて又物の間隙の間遠なるを亂しと云、大間、鹿間、あらゝ松原などの類なり、遠放るを荒ぶと云、萬葉にあらぶる君、又あらびなゆきそなど云る是なり、分散をあらくと云、〇略註　右の種々を思ひわたして、和御魂、荒御魂てふ名の義を度り知べし、さて神の御靈を此二に對言は、たゞ其德用を云名にこそあれ、全體の御靈は御靈にして、必しも此二に分れたる外、無きにはあらず、嘗に或人此二御魂のことを問へりしに、己火に譬へて答たりしことあり、其はまづ一の火あらむに、其を分取て燭と薪とに著れば、燭にも薪にも移りて燃れども、本の火も亦滅ることなく、減ることもなくして、有しまゝなるが如く、全體の御靈は本の火にして、和御魂荒御魂は、燭と薪とに移し取たる火の如し、然るを世人此義を知らず、全體の御魂を此二に分て、其片つ方荒魂になれば、今片つ方をばおして必和魂と心得るは非なり、たとへば伊勢の荒祭宮は、大御神の荒魂に坐せども、然りとて本宮は和魂と申す物にはあらず、全體の御魂に坐せり、又津國の廣田神社も、天照大御神の荒魂なり、如此同神の荒魂の一に限らざるも、彼火をいくつも薪に分取たらむが如し、又大和の大三輪は、大國主神の和魂なるに、狹井神社は其大三輪神の荒魂なるは、和魂神に又荒魂あるなり、此は彼分取たる燭の火を、又分取て薪に移したらむが如し、さてかく大國主神は、大和國に和魂も荒魂も坐せども、出雲國杵築大社も亦同神の御魂に坐は、本の火もなほ本のまゝなるが如し、是又三輪の和魂なるに對へて、おして杵築を荒魂とせむは非なり、杵築は全體の御靈に坐こと、上に引る神賀詞の文のさまにても知べきなり、或人問、書紀に住吉大神の荒魂は、長門國に、和魂は攝津國に祠給ふとある、然らば其全體の御靈は何の社ぞや、答、社を建て祀ると、しからざるとは此方の事にて、彼方の御靈のうへにはあづからず、されば神代に尊き神たちの中にも、其主とある社は無きも多し、さりとて其神は御靈無しとは云べからず、且此度住吉大神を祭賜へるは、其和魂荒魂の御ちはひによりて、功成し故に、其を祭賜ふなり、かくて和魂荒魂とて、別物にはあらず、即其神の御靈なれば、其外に別に全體の御靈の社とては無きも、何事かあらむ、さて又何神にもあれ、社を建て和魂とも荒魂とも云に限れることには非ず、但同神といへども、其祭る社に隨ひて其御魂もほど〱に尊卑大小けぢめなどはある、此彼火を分取るに、燭にまれ、薪にまれ、其餘何にまれ著る物の大小多少に隨ひて、うつれる火も、其けぢめあるが如し、

〔古史傳十九〕篤胤熟々この師說〇上文古事記傳を考ふるに、幸魂奇魂のこと、大抵如此くあるべけれど委からず、然るはまづ此大神〇大國主神の御上などは、其御魂の大なること、凡人の上などゝは遙に勝れて御坐せば、幾柱にも分り給ふべき事、謂ゆる分身をいふ申すも更なり、然れども唯に御魂の大なる故に、分り給ふ事とのみ思はむは如何なり、もと此御魂は、其御本體の成生給ふ時に、天津神の大

御魂を殊更に分賜り給ひて、令生給へるが故に、其を別て幸魂と云ひ、又その靈妙なる德用を爲給へる故に、奇魂とは稱すにて、是を總ては和魂と申す事とぞ思はるゝ、今かく寄來給へる時には、御自らの分身とは知し召さず、誰ぞと問給へる御事なるを思ひて、奇魂と申す名義を悟るべし、いと／＼奇妙なる事ならずや、但し此は此大神のみ然るに非ず、都ての神々の御上にも必有べき事にて、其大小優劣にある可けれど、幸魂といふは、必天神の賜へる物と思ふべく、奇魂と云は其靈用の靈妙なる所を殊稱へて申す事と思ふべく、此を常に取總ては、只に和魂と申す事と心得て違ふことなかるべし、又畏けれど、凡人の上も小く卑き事こそ異れ、其趣は同事と思ふべし、

〔玉手襁四〕さて荒魂とは、伊都速く荒けき御魂をいひ、和魂とは平穩しく和しき御魂をいふ、此は凡人と云へども、誰々に從ひて、此二魂は有るを、其魂の强く凝れるは、體より分りて、種々の靈異を顯はす事あり、○中略神世の大神たちは、皆その御魂の大きに坐ます中にも、大國主神などは、其魂の殊に大きく、凡人の魂に比べては幾萬倍の大なりと云ことを知べからず、是をもて殊に御魂を凝し給ふとも無く、その荒魂和魂の分りて、別神の如く本體に向ひ立て、互に物言ひ交し給へる事も有しなり、○中略さて大國主神の幽冥事をしろし看ことと、謂て申せる古傳はかくの如くにて、荒魂は大地官を掌りて、大國魂と坐し、和魂は有ゆる地祇を掌りて、大物主と坐して、御國の幽冥のみに非ず、有ゆる萬國の幽冥をも悉しろしめすこと、日月の大御神たち是御國に生坐して、其御光を萬國に照し幸へ給ふ道理に同くぞ有ける、

〔古傳通解四〕わが古言に奇靈幸靈といふことあり、クシミタマは混がり合ひ集まるをいひ、幸靈は分れ離れ散るをいふ、分れてまた混かる、これにより大國主神のサキミタマ、大物主神とあらはれたまへるとき、みづからあがみことのサキミタマ、クシミタマとのたまへり、サキミタマはわかれたるをいひ、クシミタマはあつまりて一神となれるそのたまへるものになむ、

水戸神の入柱、そのみたまを合せて一神となりたまへるをクシミタマノカミといへり、これをもて、混分につきてサキミタマといふ名あり、集合につきてクシミタマの名あることをさ

とるべし

〔稜威道別四〕そも〳〵荒魂は、顯生魂の義にして、本靈より更に別れ給ふをこそ稱せ、和荒なぞの荒にはわらざるぞかし、神功紀云、於是從軍神、表筒男、中筒男、底筒男三神、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰啓于皇后曰、神欲居之地必宜奉定、則以踐立爲祭荒魂之主、仍祠立於穴門山田邑とある、是彼御時に顯れ給ふ御魂神を祭り給ひつれば、神名帳にも、長門國豐浦郡住吉坐荒魂神社三座（並名神大）とこそは稱せるなりけれ、又同紀に、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇居、（伊勢大御神の御所な放らせ給ひし、此御處坐故ならん、）當居御心廣田國、卽以山背根子之女荒山媛令祭とあるも、彼御時、於檀日宮而顯はれ給ひし御魂の事を誨へさせ給ふなり、かゝれば彼伊勢別宮坐荒祭大神も、崇神垂仁等の朝に顯れ給ひし御魂を祭れるにて、儀式帳に、荒祭宮稱大神宮荒御魂宮とは稱せるなり、又大神荒魂神と申すなども、顯はれ給ふ御魂をこそ申せ、其神より以前に顯生給ふを荒御魂と申せる事絕てなし、出雲風土記云、天神千五百萬、地祇千五百萬、幷當國靜坐、三百九十九社、及海若等、大神之和魂者靜而、荒魂者皆悉依給とあるは、少し紛はしきやうなれど、是も本よりの和魂は、各其所に鎭留て、事とある時に顯れ給ふ顯御魂は、皆來依給へと云なり、

〔稜威道別七〕吾是汝之幸魂奇魂也云々、○日本書紀、文見上條、幸へ助くる奇き御魂と云ことを、如此二つに分て云は、たゞ詞の文なり、彼生てある獸に逆ひて剝事を、生剝逆剝といひ、生水の榮え出る井を、生井坂井と云るが如し、古き長歌の對疊には、殊にかゝる云なしざま多かり、さて如此己命の魂の顯れ出で、又一柱神と成給ひしは、凡人とは際ことなる靈異なり、然れども誓て御兒顯生し給ふ例によらば、疑ふべきにあらず、今世の人の上にも深く思ひ望む物なぞには、若吾魂の往て導きけるにやと思ふはぞの事、誰が身にもありなん、他國書にも思之思之、亦思之而不措、神來助之

また精誠不已、神將來助、其思之也深、其行之也熟矣などと云り、

〔幽顯考論〕此荒魂和魂の御本の上を少辨置ざれば、其事の意通え難ければ次々辨ふべし、さるは本來伊邪那岐命の豫美國より還坐まして、其汚に觸たる物どもを悉く掃去給ひて、日向之阿波岐原にして禊祓し給ひし時、彼豫美國の穢汚き不淨を、太く惡み嫌ひ給ふ御心の、一偏に凝固りたる御心より、生坐る神を禍津日神と稱して、大淸淨潔白の御性に坐けるが故に、若事に觸れて少にても穢に觸る事しあれば、其御心荒び踈び健び坐て、遂には種々の災害をも發起しめ、禍禍しき御所行をさへ爲し給ふめれば、其荒び踈び給ふ禍を直し、平温和順ならしめんと思し人發せ給へる御心より生坐る神を直日神と稱して、是も同じく大淸淨潔白の御性には坐れど、何事の上に就ても容易く怒り荒び給はず、人の思の外なる過ち、不意に穢に染が如き事ありとも、よろづ平穩にのみ見直し聞直し坐て、咎給はぬ御性の神に坐り、然るに此時一地球の大主君と坐べき、天照大御神、須佐之男大神を生坐りしを、彼直日神の御身體は、永に天照大御神の和魂として脇副給ひ、禍津日神の御身體は、須佐之男大神の荒魂として脇副給ひしが、其後關係て須佐之男大神の御所行の荒び健び給ふ間に、天照大御神と須佐之男大神との御中に、吾勝命を誓生給へるに、皇美麻命の天津御祖には坐ましける、さて此禊時、荒魂和魂の神等は生出給へりしかども、以前に生坐りし造化の五柱神等にも、此時より此二魂の御德用は副り給へりしものなる事、古典の上に著明にて、此時より後は貴賤衆庶に依らず、推並て此二魂の副坐して、人毎に分副し給へる精神を補助て、成功を遂しめ給ふ事とは成れるなりけり、〇中略かくて此二魂は、人毎に賦與し給ふ物ゆゑ、人に男女の差あり、體に左右の強弱差別あるが如く、何れ一方は進み、一方は後るゝ習なるを、本然の精神仁慈忠誠を本體として、勇猛健固に神代の古態を顯、神習ひ勤むるときは何れも不足の方無く並進みて、其精神を助け、功業を成しめ給ふことと疑無し、〇中略さて荒

魂の進て活用所の所行の上には、暴行に渉るが如く、和魂の退きて守る上には、仁柔にも近きが如く通ゆる事もあれど、然にはあらず、此二魂は上に辨へたるが如く、共に穢惡を惡ひ給ふが中に、荒魂は現て甚しく、和魂は隱れて和平なるが如き違あるにて、共に清淨潔白なる魂なれば、本然の精神清淨潔白なるときは、譬へば人の何にまれ惡行有ば、荒魂これを見て堪忍ぶ事能はず、其惡行を制止せんと爲れども、事の障碍ありて思ふが如くには爲す事あたはず、さりとて區々として堪忍ぶべくもあらざるより、遂に其惡行にも增るが如き暴行を爲すにも到るを、和魂これを和るときは、堪忍ぶべき時には堪忍びて、其事發すべきの時宜を謀りて事を行ふが故に、其事行を全くして、遂に成功を遂るに至る、これ和魂の活用なり、されば和魂は柔に似て柔ならず、荒魂は暴に似て暴ならざるを、本府の精神清淨潔白ならざる時は、此二魂共に離散して、凶徒界の妖鬼二魂府に交替し、種々の暴惡を行はしむるに至る、かゝれば顯れたる上には、同じ惡行の如く見ゆれども、善より出たる惡行と、不善より出たる惡行との違あるを、善より出たる惡行よ、假令其身は誅るゝといへども、顯には其子孫斷絶せず、幽には神の赦し給ひ、尙事に依ては其位をも騰用し給ふを、不善より出たる惡行は、顯幽共に其罰責を免るべからず、されば本府の精神清淨潔白誠忠仁慈を失はざるときは、事に觸て如何ぞや通ゆる行ども縱や交れるとも、產須奈神も深くは咎め給はざるなり、然るを儒にはかゝる差別なきが故に、惡とだに云へば一向に惡とし、善とだに云へば一偏に善と建るなり、故に遂には表邊を善事に潤飾て、心裏に姦佞邪曲の行をなす事を恐れざるに到れるなり、こゝに到りては皇國學と儒學とは、氷炭の違あり、心を注て考ふべし、

〔捧賢木〕其魂の靈妙の作用も一ならぬ故に、其德につきて、幸魂奇魂和魂荒魂など稱へ申せり、(中略)いで其奇魂とは、奇靈につきていへる名、幸魂とは幸くある方につきていへる名なり、(中略)和

魂荒魂も言の如し、〇中略是皆魂の妙用中の一端を以て命なり、さて然分れては本魂各其德を別にして、また一神の用を爲たまへり、〇中略さるを或は他神を、某神の和魂とし、また荒魂とし、〇中略或は一神の分魂を、其一方荒魂なれば、一方を和魂とし〇中略或は荒魂は、強剛のみにて、和柔の德なく、和魂は、和柔のみにて強剛の德なしとおもふなど皆非なり、〇中略さてまたかくさまざまに別れても、全體の魂は、いさゝかも減ことなし、

古事類苑

神祇部四

神體 船代、樋代、靈寳、附入

古事類苑

神祇部四

神體 船代、樋代、璽筥、[併入]

神體ハ、正體又ハ御形トモ、靈體トモ云フ、神體ニハ鏡ヲ以テスルアリ、玉ヲ以テスルアリ、石ヲ以テスルアリ、兵器ヲ以テスルアリ、影像ヲ以テスルアリ、兵器ニハ弓アリ、矢アリ、劍アリ、矛アリ、影像ニハ木像アリ、畫像アリ、佛説ノ之ニ混ジテヨリ以後ハ、佛、菩薩、沙門ノ像ヲ以テ、神體トスルアリ、此外ニ鈴ヲ以テスルアリ、笏ヲ以テスルアリ、釜ヲ以テスルアリ、或ハ神名ヲ記シテ神體トスルガ如キハ、影像ニ近キモノナリ、而シテ幣帛ヲ以テ神體トスルハ、特ニ後世ノ事タリ、

樋代及璽筥ハ、神體ヲ納ムル具ニシテ、船代ハ樋代ヲ納ムル具ナリ、並ニ此ニ併載ス、

〔伊呂波字類抄志疊字〕神體

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事

同殿坐神二柱（坐二左方一、稱二天手力雄神一、靈御形弓坐、坐二右方一、稱二萬幡豐秋津姫命一也、(中略)靈御形劒坐、）

〔大神宮儀式解一〕神の御影を留め奉る物を靈御形といふ、加多は形象なり、日本紀に圖をもよめり、そのかたにつのやすめ言を添へ、加多都といふ、その都を同音の智に轉じてかた智といふ也、（加多智は、堅土の義などいふはよくも覺えず、）さて其御形とする物は、卽其神の御たましひなり、和名抄鬼神部四聲字苑云、靈郎丁反、日本紀云、（美太麻）一云、（美加介）又用魂魄二字と見ゆれば、美加介乃美加多とも

鏡爲神體

よむべし、

〔日本書紀神代一書曰、於是日神方開磐戸而出焉、是時以鏡入其石窟者、觸戸小瑕、其瑕於今猶存、此卽伊勢崇秘之大神也、

〔古語拾遺〕於是從思兼神議、令石凝姥神鑄日像之鏡、初度所鑄少不合意、是紀伊國日前神也、次度所鑄其狀美麗、是伊勢大神也、

〔古事記上〕於是副賜其遠岐斯此三字以音八尺勾璁鏡及草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神、而詔者、此之鏡者、專爲我御魂而、如拜吾前伊都岐奉、次思金神者、取持前事爲政、此二柱神〇神鏡及思金神者、拜祭佐久久斯侶伊須受能宮、自佐至能以音

〔倭姬命世記〕天照皇大神一座、大日孁貴、此云於保比屢咩能武智、御靈御形八咫鏡坐、

豐受大神一座、御靈御形眞經津鏡坐、圓鏡也、神代三面內也、

多賀宮一座、豐受宮荒魂也、伊弉那伎大神所生神、名伊吹戸主神、亦名神直日大直日神是也、靈形鏡坐、

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

造奉荒祭宮一院、在大神宮以北、相去廿四丈、

稱大神宮荒魂宮、御形鏡坐、

伊雜宮一院、在志摩國答志郡伊雜村、大神宮相去八十三里、

稱天照大神遙宮、御形鏡坐、

瀧原宮一院、在伊勢志摩兩國堺大山中、大神宮以西相去九十二里、

稱天照大神遙宮之、御形鏡坐、

一管度會郡神社行事

田邊神社一處

稱大神御滄川神、形鏡坐、大長谷天皇〈○雄略〉御宇定祝、

稱大神御陰川神、形鏡坐、大長谷天皇御宇定祝、

蚊野社一處

〔延喜式祝詞八〕出雲國造神賀詞

大穴持命乃申給久、皇御孫命乃靜坐牟大倭國申天、己命和魂乎八咫鏡爾取託天、倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天、大御和乃神奈備爾坐、

〔百練抄七近衞〕久安六年八月五日、興福寺衆徒蜂起數千人、春日神民二百餘人、捧榊神木入洛、〈件神木付鏡數枚、稱春日大明神御正體、是先例也、〉吹法螺其聲充滿洛中、

〔春日權現驗記十九〕ちかきころ興福寺の學侶蜂起して、大和惡黨を先かへり取て流罪せらるべきよし新申事有しほどに、正安三年十月廿五日子時、惡黨社頭に亂入て、大宮四所の御體おのおの二面、若宮六面、合て十四面の神鏡を盜取たてまつりて、當國高尾の別野といふ所にひき籠りぬ、〈○中略〉十二月十三日、當社神人守職、神鏡を求め奉らんとて、高尾の別野に向ひぬ、〈○中略〉花形の御正體五面、しもの堂の本佛の御身の中より、もとめいだしたてまつる、〈○中略〉十四面の御正體ことゆゑなく、三月のうちにことごとく本社にかへりいらせたまふ事、いと不思議なりし事なり、

〔百練抄九安德〕壽永二年八月廿一日、武士亂入大原野、打開神殿、取御體鏡四枚幷神寶等、稻荷社奉取御正體幷之、

〔明月記〕天福元年五月十二日、卜筮異事、石淸水八幡宮所司等言上去十二日注文口、去七日巳時、高良社御正體鏡鳴動、今日卯時、同社御正體鏡二面重鳴動光耀事者、是依何咎所口哉云云、

〔宮寺緣事抄〕一石淸水八幡宮炎上造營之事

注進

石清水八幡宮御正體奉尋出事

右外殿御簾御正體鏡華形九面、内三面御坐、六面紛失之由先度注進畢、而今日廿五日午剋有事次、拜見護國寺佛壇之處、九面共所令出現給也、神慮之至揭焉之間、注進言上如件、

曆應元年十一月廿五日　執行少別當覺延

注進

石清水八幡宮鏡々

一神鏡等事

花形御正體九面並御几帳御正體圓形知形、久御崇敬之子細依異他、月日同時件役人等奉拜持之、先所奉入内殿也、

曆應元年三月十六日　執行少別當覺延

〔伊豫國二十四社記〕桑村郡　大須伎神社　在高橋村

所祭神未詳、以鏡爲神體面影、大須伎大明神之六字、

〔新編武藏風土記稿百十五多摩郡〕羽黒權現社　コノ祭神ハ高皇産靈尊、天穗日命ニテ、八角鏡ヲ神體トスルヨシ、

〔安齋隨筆前編十四〕掛鏡爲神體

諸神祠に、鏡を掛て神體とする事は、八咫鏡を以て、伊勢大神の神體とするを學びたる也、八咫鏡は、天照大神の常に持せたまひし鏡なるを、御孫瓊瓊杵尊に讓り授け給ひ、此鏡を見る事、吾を見るが如くせよと宣ひし故に、其鏡を大神の神體とあがめ祭る也、是其故あれば也、諸祠の神體とする鏡は、其神の常に持ち給ひし物にもあらず、此鏡を見る事、吾を見るが如くせよとの神語もなきに、伊勢の神宮のまねをして、鏡を以て諸祠の神體とするは、當らざる事也、或說

に鏡を以て、總て諸祠の神體とする事は、神德は鏡の一圓相にして稜なく、光明清淨にして、一點の曇りなく、萬民を照し守りたまふの表相也、拜禮する人其鏡に向へば、其人の形映る、是即ち神は汝が身也、心正直清淨にすべしとの敎の爲に、何の神の神體にも、鏡を用る也と云へり、貞丈云、此或說は佛法の說に、宋儒の心學とを附會して理說を述たる也、上古に如此むづかしき說はなし、宋儒の心學理學は、鎌倉の北條が末つかたよりはやり出し也、されば其以前は右のごとくなるむづかしき說はなし、天照大神は、此鏡を見る事吾を見るが如くせよとのたまひしより外にむづかしき奧深き理說をば宣はざりし也、むづかしき事なきは神の心也、神の事を奧深くむづかしき說を述たるは、皆後代の作り事也、用ゐる事なかれ、

〔類聚名物考神祇十〕鏡をもて神體とするは、古人の傳へに、鏡と神との訓意同じといへり、今思ふに鏡のあきらかなるを、神德の明靈なるにたとへていふ、○中略日の事を鏡にたとへて天鏡ともいへり、宋儒の家言に明德を虛靈不昧といへるも、鏡にたとへし事にて、故なきにはあらず、

〔古事記中應神〕故其天之日矛持渡來物者、玉津寶云而、珠二貫、又振浪比禮、比禮二字以音、下效此、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、又奧津鏡、邊津鏡、并八種也、此者伊豆志之八前大神也、

〔釋日本紀述義十〕兼方案之、神物一說幷古事記八種也、神名帳伊豆志社八座也、以一種神物爲一座神體而已、

〔大倭神社註進狀〕傳聞、倭大國魂神者、大己貴神之荒魂、與和魂、戮力一心、經營天下之地、建得大造之績、在大倭豐秋津國、守國家、因以號曰倭大國魂神、亦曰大地主神、以八尺瓊爲神體奉齋焉、

〔宗像社記〕筑前風土記曰、宗像大神自居崎山天降之時、以靑蕤玉置奧津宮之表、以八坂瓊紫玉置中津宮之表、以八咫鏡置邊津宮之表、以此表成神體之形、而納三宮、卽納隱之、

〔釋日本紀七〕先師説云、胸肩神體爲玉之由見風土記、然則尋其由來、爲其神像者也、

〔伯家部類〕御神體〇神祇官八神殿 御寳之事二重寳

一御殿五色糸、榊葉八枚、内寳外大和錦包、平緒ニテ十文字ニ結、内ニ水晶御玉、御鏡、御劒、

二御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

三御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

四御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

五御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

六御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

七御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

八御殿内寳圓斷、榊葉八枚、五色糸、御玉、

已上

石爲神體

〔江戸名所圖會十六〕清水稻荷社　駒形町にあり、往古嘉承〇嘉承恐承和誤年中、弘法大師東國遊化のみぎり、此國へ入給ひし頃、靈告によつて、如意寳珠を神體とし、稻荷に勸請したまふとぞ、

〔日本靈異記下〕女人產生石以之爲神而齋緣第卅一

美乃國方縣郡水野鄕楠見村有一女人、姓縣氏也、年迄于廿有餘歲、不嫁未通而身懷妊逕之三年、山部天皇〇桓武世、延曆元年癸亥春二月下旬、產生二石方丈五寸、一色青白斑、一色專青、每年增長、有比郡名曰淳見、是郡部内有大神、名曰伊奈波、託卜者言、其產二石是我子、因其女家内立忌籬而齋、往古今來未都見聞、是亦我聖朝奇異事矣、

〔皇大神宮儀式帳〕一管度會郡神社行事

小朝熊神社一處

稱神櫛玉命兒大歳兒櫻大刀自形石坐、又苔虫神形石坐、又大山罪命子朝熊水神形石坐、

薗相神社一處

稱大水上兒曾奈比々古命形石坐、

鴨社一處

稱大水上兒石己呂和居命形石坐、

〔文德實錄八〕齊衡三年十二月戊戌、常陸國上言、鹿嶋郡大洗礒前有神新降、初郡民有煮海爲鹽者、夜半望海光耀屬天、明日有兩恠石見在水次、高各尺許、體於神造、非人間石、鹽翁私異之、去後一日、亦有廿餘小石在向石左右、似若侍坐、彩色非常、或形沙門、唯無耳目、時神憑人云、我是大奈母知少比古奈命也、昔造此國訖、去往東海、今爲濟民更亦來歸、

〔扶桑略記二十四裏書〕延喜十八年十月十五日、太宰府解、壹岐嶋言上怪異等、解文云、〇中略又長比賣明神社、住吉明神社、如大鼓鳴動、御體美石出寶殿在地上、

〔延喜式十神名〕能登國羽咋郡大穴持像石神社

能登郡宿那彥神像石神社

〔古事記傳三十一〕文德實錄八、齊衡三年云々の事などを思ふに、此二柱神に石は彼此由縁あれば、常世國に於て、其御靈の石にて立賜ふにもあるべし、

〔八幡宇佐宮御託宣集馬城峰〕一云、八幡大菩薩成神明之時、發三柱石高一丈五尺、廣一丈五尺、爲寶體、忽出三鉢水廣六寸餘、深四寸餘、爲神慮、大雨不增、大酌不減、大旱不干、大寒不凍、御貌寫于此水之坐、或記云、御許山峯有三並石、號三所御體、以此三石爲三所、以鉢水爲三身御意、鎭護國家、經正法像法末法云々、六人行者記〇節略

〔拾遺都名所圖會一平安城〕平將門社、　新町通の西、四條の南、膏辻子にあり、〇中略空也上人、將門の亡靈をこゝに供養し、石を建て印とす、今高三尺計の瓜の如きなる石祠内にあり、これを神體とす、

兵器爲神體

〔江戸名所圖會 十九〕熊野權現祠(〇立石村)　神體は一箇の靈石にして、(長二尺八寸ばかり、圍み本にて二尺ばかり、末にて六寸あまり、)其餘武州練馬の石神井村石神井社、及び多摩郡阿佐が谷神明等の神體の靈石、(其形像をつぼめたるがごとし、)何れも其形相似たり、

〔日本書紀 一神代上〕一書曰、素戔嗚尊勅蛇曰、汝是可畏之神、敢不饗乎、乃以八甕酒毎口沃入、其蛇飮酒而睡、素戔嗚尊拔劍斬之、至斬尾時、劍刃少缺、割而視之、則劍在尾中、是號草薙劍、此今在尾張國吾湯市村、即熱田祝部所掌之神是也、

〔熱田大神宮緣起〕倭武尊奄忽遷化之後、宮酢姫不違平日之約、獨守御床、安置神劍、光彩亞日、靈驗著聞、若有禱請之人、則應感同於影響、於是宮酢姫會集新舊、相議曰、我身衰耄、昏曉難期、事須未斂之前占社奉遷神劍、衆議咸之、定其社之地、有楓樹一株、自然炎燒倒水田中、光焰不銷、水田尚熱、仍號熱田社、

〔大倭神社註進狀〕相殿神二座

八千戈神　御歳神

傳聞、八千戈神者、大己貴命以廣矛爲杖、令撥平豐葦原中國之邪鬼、是時大己貴命號曰八千戈神、〇中略此矛亦上古在天皇大殿之內、其藏齋爲八千戈神之神體、

〔古事記 中神武〕故天神御子(〇神武)問獲其横刀之所由、高倉下答曰、己夢云、天照大神、高木神、二柱神之命以、召建御雷神而詔、葦原中國者、伊多玖佐夜藝帝阿理祁理、(此十一字以音)我之御子等、不平坐良志、(此二字以音)其葦原中國者、專汝所言向之國、故汝建御雷神可降、爾答曰、僕雖不降、專有平其國之横刀、可降、(此刀名云佐士布都神、亦名云甕布都神、亦名布都御魂、此刀者坐石上神宮也、)降此刀狀者、穿高倉下之倉頂、自其墮入、

〔日本書紀 六垂仁〕八十八年七月戊午、詔群卿曰、朕聞、新羅王子天日槍初來之時、將來寶物今有但馬、元爲國人見貴、則爲神寶也、朕欲見其寶物、即日遣使者詔天日槍之曾孫淸彥而令獻、於是淸彥被勅、乃

自捧神寶而獻之、羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具、唯有小刀一、名曰出石、則清彥忽以爲非獻刀子、仍匿袍中而自佩之、天皇未知匿小刀之情、欲寵清彥而召之、賜酒於御所、時刀子從袍中出而顯之、天皇見之、親問清彥曰、爾袍中刀子者、何刀子也、爰清彥知不得匿刀子而呈言、所獻神寶之類也、則天皇謂清彥曰、其神寶之豈得離類乎、乃出而獻焉、皆藏於神府、然後開寶府而視之、小刀自失、則使問清彥曰、爾所獻刀子忽失矣、若至汝所乎、清彥答曰、昨夕刀子自然至臣家、乃明旦失焉、天皇則惶之、且更勿覓、是後出石刀子自然至于淡路嶋、其嶋人謂神而爲刀子立祠、是於今所祠也、

〔皇大神宮儀式帳〕天照坐皇大神宮儀式幷神宮院行事
同殿坐神二柱（坐左方、稱天手力男神、靈御形弓坐、坐右方、稱萬幡豐秋津姫命也、此皇孫之母、靈御形劒坐、）

〔釋日本紀九述義〕山城國風土記曰、賀茂建角見命、娶丹波國神野神伊可古夜日女、生子名玉依日子、次曰玉依日賣、玉依日賣於石川瀨見小川遊、爲時丹塗矢自川上流下、乃取挿置床邊、遂孕生男子、至成人時、外祖父建角身命造八尋屋、竪八戶扉、釀八腹酒、而神集集而七日七夜樂遊、然與子語言、汝父將思人令飮此酒、卽擧酒坏向天爲祭、分穿屋甍而升於天、乃因取祖父之名號可茂別雷命、所謂丹塗矢者、乙訓郡社坐火雷命在、

〔甲斐國志神社六十五〕巨摩郡
諏訪明神（大八田村）　社記云、建岡神社ナリ、日本武尊ノ舊蹟ニテ、其靈ヲ天神ト祠ル、是地主神ナリ、頭槌劒ヲ神體トス、

〔江戸名所圖會三〕石神社（○高輪南町）　相傳ふ、石。劒。を祭るといふ、

〔江戸名所圖會十三〕山住彥三郎舊趾　七社權現より艮の方、三町ばかりを隔たる小さき岡を云、（○中略）此岡の根に諏訪の神祠ありて、石。劒。を神體とす、（其質傳く銅鐵の如し）

雜物爲神體

〔釋日本紀 七述義〕大倭本紀一書曰、天皇之始、天降來之時、共副護齋鏡三面子鈴一合也、注曰、○中略一鏡及子。鈴。者、天皇御食津神、朝夕御食、夜護日護齋奉大神、今卷向穴師社宮所坐、解祭大神也、

〔倭姫命世紀〕豐受大神一座

相殿神三座 大一座、天津彦彦火瓊瓊杵尊、御形鏡坐、前二座、天兒屋根命、笏。坐、

土御祖神二座 宇迦之御魂神、形寶瓶。坐、土乃御祖神、形鏡坐、

調御倉神 三狐神、形寶形也、宇賀能美多麻神、保食神是也、

酒殿神形岳坐 豐宇賀能比賣命、缶。坐、丹波國竹野郡奈具社坐神是也、

北御門社形瓶坐也 一名若雷神、加茂社同神也、形瓶。坐、

〔御鎭座本紀〕亦素戔嗚尊孫大土祖一座、衞神太田命一座、宇賀魂大年神一座、山田原之地護神定祝祭也、 大土祖靈、鏡坐、太田命靈、鏡石坐、宇賀魂靈、瑠璃。壺。坐也、

〔日本紀略 四村上〕天德四年十一月十九日乙卯、今夜坐内膳司忌火庭火等御神、奉遷冷泉院内膳、仍權大納言師尹卿已下奉遷之、平。野。謂。釜。二。口。也、庭。火。謂。鍋。一。口。也、各有臺長櫃等、衞士持之、奉移院乾方新屋、庭火平野、別々屋也、安置之後、宮主申祝詞、

〔百錬抄 十六後深草〕寶治二年十月廿二日乙未、内膳屋燒亡、御。竈。神。燒。損。給。云々、 廿四日丁酉、近日御竈神燒損、可鑄改哉否事、被問諸卿云々、 十一月十九日壬戌、軒廊御卜、内膳竈燒損事也、内大臣○藤原實基行之、次於直廬被議定同事、 閏十二月廿二日乙丑、被定内膳御竈可鑄改日時、定日來廿八日云々、

〔都のつと 家久〕その日くるゝほどにまはがきの浦に行つきぬ、則神體はやがてま。は。が。き。にてわたらせ給ふ、御前につやし侍りぬ、

〔玉海〕文治元年十月十七日丙寅、今日宇佐宮追補事、文書并下官申狀等、以淨所之人令書、送觀雅之許、[illegible]早可奏聞之由有返報、余申狀猶加之、

宇佐宮條々事

一以黃金可爲御正體哉否事

自寛治之初至嘉保之末云仗議云、問注沙汰雖及數度御體歟、神寶歟、左右猶不一決、但愚案之所覃、此條强無疑慮歟、所以何者如師尙勘申、嘉保三年十一月卅日問注記者、放生會之儀、以鷹御枕奉乘神輿、以香爐筥(黃金在此中)令列神寶、修正之時、只以中筥奉移彌勒寺云々者、以之思之、神寶之條雖無異儀、崇重之趣殆類御體歟、倩案宗廟之用靈寶、嘗猶公家之重劍璽、推而准之、自叶物議歟、抑此事不召官勘文之條如何、

一履朝事

如神官申狀者、以鷹御枕爲正體云々、付之案之、諸社之火災猶有此儀、況於宗廟之有事哉、論御體之紛失、(寶御鈴同紛失之由、載本宮解狀、)超神殿之回祿、校量之處、輕重不侔、然則乍達此災於天聽、爭闕其禮於朝廷哉、濫行雖爲去年沙汰已在近日、違期之條不可有其難、但此條同可依諸道之勘奏也、

〔八幡宇佐宮御託宣集 小山田社〕元正天皇五年、養老三年癸未、大隅日向兩國隼人等襲來、擬打傾日本國之間、同四年甲申、公家被祈申當宮之時神託、我(禮)行而可降伏(志)者、豐前守正六位上宇努首男人、奉官符令造進神輿之時、白馬自然來令副御輿、彌信仰矣、諸男朝臣倩以何物爲御驗可奉乘神輿哉、豐前國下毛郡野仲之勝境、林間之寶池者、大菩薩御修行之昔、令涌出之水也、參訴(〇訴恐詣誤)彼所欲祈申、仲勝境、〇中略寶池爲體、雙嶋之崎、切水以出北、一池之形、分波以入南、一面而三角、地窄而勢寬、挺綠而生薦、懸鏡而洗塵、〇中略此薦爲御枕、發百王守護之誓、此池爲御座、灌衆生罪業之垢、八幡遊化之寶所、八功德水之淨土也、有常隨之者、非直人之儀、依神誓守靈池、其壽二百餘歲、宇佐池守是也、諸男常臨之時、池守申云、化人乘船頭浮池上、詠云、大貞也、三角能池(乃)、眞薦草、那尼遠綠仁天、胎見生字覽、諸男彌致信、殊抽誠祈申行幸御驗之時、初秋之天、初午之日、雲波滿池、烟波依渚、涌返々々、而雲中有

擧而宣、我〈爾〉昔者此鷹爲枕、發百王守護之誓、〈異〉百王守護者可降伏凶賊也者、依之諸男奉渡此鷹令造洲屋、七日參籠、一心收氣、奉裏御枕、御長一尺、御徑三寸、皆以神慮也、豐前守將軍奉請大御神、〈禰〉宜辛嶋勝波豆米爲大御神之御杖、〈女官名也〉立御前、行幸彼兩國、

〔八幡宇佐宮御託宣集〈小倉山社〉〕神託云、我體者、有也、空也、以正道爲體、〈已上〉有者垂迹示現令奉拜之廟社也、空者本地幽玄不奉見之神體也、又有者衆生利益之應體、十界暫時之形聲也、又空者眞空冥說之靈神、虛空同體之妙身、皆是正道也、而今以奉顯御枕之屋、號鵜羽屋也、御枕者御體之料不可徒設也、准擬之而申御體歟、以尤御體敬信御體之故、被致如在之祭、食膳如意之饌、神服者奉擬昔帝位之調進也、御枕者奉仰今靈託之御驗也、爰以或以徵表爲御體、或以宗廟爲御裝、

〔神名帳考證土代〈十之四十〉〕豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮

松下見林自筆記、宇佐ニ菱潟池アリ、彼社家說秘說、此池ニ茭アリ、此マコモニ付テ大事アリト云フ、扣之ニ宇佐社家アマタアル中ニ、小山田氏ヲ御裝束所ト稱ス、御衣ヲ調進スルニアラズ、彼社ニ行幸會ト云フ事アリ、天子ノ行幸ニハアラズ、宇佐神ノ行幸會也、宇佐ノ末社六七社、本殿ハ二社アリ、大宮新殿ト二通リニ建アリ、行幸會ノトキ、小山田氏ヨリ御神體ヲ調進ス、本殿ノ舊神體ヲ新殿ヘ遷シ、新殿ナリシヲバ第一ノ末社ヘウツシ、段々ニクリテ遷シ、最末ノ社ヲ小山田社ト云ヘリ、其小山田社ノ舊主ヲ、ウツロ舟ヲ造リテノセテ海上ヘ流スニ、伊豫國ノ海中ニ御机石トテ、海ノ正中ニアリ、ソノ石上ヘ件ノ流シタル舊神體、毎度ノコト〳〵クキツト流レツキテ、石上ニ坐シ玉ヒテ、石上ニテ朽テナクナリ玉フ也、此正體ヲ奉ルニ、件ノ菱潟池ノマコモヲカリテ編テ、木ヲ切テ枕トシテ、ソノ枕ヲマコモニテツヽム、是御體也、タヽ枕ノゴトク横タヘテスエ奉ル、此御正體ヲ調進スルガ小山田氏ノ掌也、故ニ裝束所ト稱ス、ソノ木枕三ツ出來ス、三座ノ御シルシ也、コレ一社ノ秘說也、

〔玉手綴〕五此村〇上總國天羽郡金谷村に、金谷大明神と云ふ小祠あり、其神體は圓き鏡の形して、眞鐵の厚さ四寸五分ばかり、徑四尺計なるが銹たれど、其面は平にて墨を引たる如く、中より二つに破たる物にて、祠の後に巖窟を作りて納め在るを、靈異の事ども多しとて、土人は鐵尊明神と稱して畏む事なり、

〔鹽尻初編十二〕熱田宮御正印とて、神幸の時神輿に奉ずる箱有ける、貞享造替の日、大宮司季通彼箱を開き見しに、水晶の念珠一串の外、別に物なかりし、彼念珠を取出し、尾張氏をして家傳の璽を封せしめて今此を奉ず、又内院に古へより多賀の神體とて一の箱有り、錦を以てはり封せり、是をも開きしに、人形を土にて作りし物、破損したるまゝに有し、宮司取捨けるとかや、故有る古物なるべきに、可惜事はさらなり、かゝる神寶は白地に開き侍らざらむをよしとする事を志らで、妄にせしも不敬の事にや、

〔甲斐叢記五〕玉室祠竹森村〇山梨郡

神殿に、水晶、高七尺餘、周圍六尺八寸許なるあり、これを神體と齋ひ奉るといへり、

〔並山日記四〕竹盛村〇甲斐國山梨郡のおくなる、玉諸明神の山にわけいる、七八町ばかりのぼりゆけば、いとこもりかなる杉むらのうちに、さゝやかなるみやしろあり、御正體は高さ五尺ばかりなる水精のおひいでたるにて、みやしろはそれにおほひかけたるなりけり、

〔沙石集一〕出離神明祈事

三井寺ノ長吏公顯僧正ト申シハ、顯密ノ明匠ニテ、道心有人ト聞ケレバ、高野ノ明遍僧都、カノ行業オボツカナク思ハレケルマヽニ、善阿彌陀佛トイフ遁世ヒジリヲカタラヒテ、彼人ノ行儀ヲミセラル〇中略サテ事ノ體能々ミテ、朝ノ御所行コソコトヤウニ見奉レ、イカナル御行ニカト申ケレバ、スヽミテモ申タク侍ニ、問給ヘルコソ本意ナレ、我身ニハ顯密ノ聖敎ヲマナビテ、出離ノ

要道ヲ思ハカラツニ、自力ヨワク、智品アサシ、勝縁ノ力ヲハナレテハ、シュツリノ望トゲガタシ、仍テ都ノ中ノ大小ノ神祇ハ申ニオヨバズ、邊地邊國マデモキヽ及ニシタガヒテ、日本國中ノ大小ノ諸神ノ名ヲカキタテマツリテ、此一間ナル所ニ請ジ置奉テ、心經三十卷神咒ナンド誦シテ、法樂ニ備テ、出離ノ道、偏ニ和光ノ御方便ヲ仰グ外、別ノ行業ナシ、

〔拾遺都名所圖會 四〕城南神社　小枝の東、森の中にあり、○中略 桓武天皇平安城開闢の時、鎮護の爲、伊勢、石清水、加茂、松尾、平野、稻荷、春日の七社、併せて王城の南方なれば、城南神となづけ、卽桓武帝宸筆の神名を、當社の神體とす、

〔大倭神社註進狀〕相殿神二座

八千戈神　御歲神

御歲神者、守護禾穀神也、是以入提器稻爲神體、

〔武江神寺錄 一〕平川天神

太田道灌、武州河越ヨリ平川口ヘ勸請セラル、神體ハ五本骨ノ扇ナリト云々、

〔江戸名所圖會 八〕氷川明神社　大窪村にあり、○中略 昔の神體は江戸氏の兜の立物にして黄金の瓶子に畠山重忠と銘してありしとなり、されどもいつの頃にか失ひたりとて、今はなしといふ、

〔伊呂波字類抄 與 社〕吉田社 永延元年、山陰中納言奉勸之、春日、大原野本社之、以鏡爲正體、

〔鹽尻 二十二〕或問、神璽を神體なりと云はいかん、大荒の世時、鏡を榊にかけて祭る、榊は後世の御戸立のごとし、直に榊を神體とするにあらず、春日祭の御榊神鏡を懸奉るにて知るべし、神行に先だちて捧げ行榊は、これ幣にして太玉串と稱す、さればもろこしにもかゝる類あり、宋の沙隨が社主は、宜き所の木を以て、刻て主とすと云ひしを、朱子所宜の木を以て、主とするは、世俗に云、神樹の模樣の如、木を將來り、截て主を作るにはあらず、其地にある所の木を以て爲

に名づく樑社枌楡社のごとしといへり、是我國三輪の神杉と一般の事歟、是は其地に有所の樹木は、其土地の氣を得て生長す、故に神氣自寓せり、故にこれを主として祭るは、古昔質朴の風なり、宮殿に神靈を祀りながら、又外に榊を植てこれを御體と云は、理において誤れり、

〔鹽尻二編十五〕問、榊は神の御正體也とならひしに、神輿と榊と共にあるはなんぞや、答、榊に二の心得あり、古人神を祭る時、その所宜樹をたてゝ神をよらしむ、是をひもろぎと云、是は御正體也、又榊に木綿大麻なんどとり垂て、神に獻ずるは、太玉串といひて幣也、今神遊に先立昇行榊は、大概幣帛の意なれば、神輿と同じからず、

〔玉手繦九〕さて其神體を調ふる法の委き事は、中々にこゝに記し得べくも非ねば、その略式を云むに、謂ゆる幣束をつくりて、其神體にあてゝ神棚にまれ、靈屋にまれ、其厨子の関の前に安じて、有らゆる神、有ゆる靈の、盡く其幣により憑ませりと觀拜すべし總じて神の靈代に今の樣なる幣束を用ふること、古に證なる證あることは無く、中世より始れる事には有れど、それ當の例となれる故に、神にまれ、靈にまれ、其神體と定むれば、其靈かならず其幣により留まれる物なり、

〔安齋隨筆前編十四〕立幣爲神體

小祠などの、鏡をも掛ざる祠には、幣を立て神體とするもあり、是も又當らぬ事也、○中略我國上古神代には、人に謁見するには、必ずヌサを持向て進物とす、是上古の禮也、○中略右に云ごとく、ヌサは禮物なるゆゑ、後代に至ても神を拜する人は、上古の禮物を神に奉て禮を行へる也、○中略右のごとくヌサは禮物也、神體とすべき物にあらず、

〔民家敬神錄〕伊勢兩宮を齋奉るに、御師より納る御祓を神體として祭る家多し、是は彼御宮の祓の麻ヌサにて、神體には事たがへど、神體には鏡、大刀、弓、矢、榊、石等、種々のものを齋奉れば、御祓をとりあへず、神體と崇めんも咎むべき事にはあらず、若御神體別に勸請せば、御祓は其傍又は外に納むべきなり

〔神名帳考證十代首卷〕舊社ノ神體ニ男莖形多シ、尾張國丹羽郡田縣神社ノ御正體ハ、古ヘヨリ木造ノ男莖形ナリト云リ、祭祀ノ時ハ、コトニ大キナルヲ造リテ持出ヅト、國人大脇道輔語レリ、陸奥國黑川郡石神山精神社、筑後國三原郡御勢大靈石神社等モ、石モテ作レル同物歟、今ノ世ニ金勢精トモ書ル有大明神トテ、所々ニアルヲモ思フベシ、

〔日光山志四〕金精峠

金精權現と稱する小祠あり、祭神しられず、往古何ものゝ納たるにや、銅に鍍金せし男根をもて神體とせり、

〔嬉遊笑覽七祭祀〕陽物を祭、東國には石にて刻める男根を祭る處多し、津輕などには銅にて作れるもあり、もと是道祖神なり、そのこと余喜多村信節傀儡考に委しくいへり、古へ遊女はことに道祖を祭れり、今娼家にて男根の形を作り、神として祭るもよしありて覺ゆ、しかれどもこはいと近き習俗と見えたり、古きことなど知てよりしには非ず、耳袋に、或商人中國の旅店に宿し、亭主なる者神を祈るをみて、其家の妓女に何の神を祈るにかと尋ればこれの主はもと貧しかりしが、石にて作れる男根を拾ひ、こは陽氣第一のもの、めでたしとて朝夕これを祈りしに、それより日增に富て、今は我等如き女共百にも至れりと語りければ、夜中ひそかに彼神とあがむる陽物を盜み、知らぬふりにて歸りしが、その陽物を祭り、これもほどなく富を得たる由をいへりこれ今にてはめづらしからぬことなるを、かくしるせるは明和安永の頃までも、妓家にこれを祭れることなかりしなるべし、

○按ズルニ、道祖神ノ事ハ、神祇總載篇道祖神ノ條參看スベシ、

〔一夜船三〕鍋蓋大明神

紀伊の國綱知らずといふ港に神社あり、中略此國に一さいしよの氏神と崇めて、松柏からく〜

影像

しく、繁りたる森の中に、小さき祠五つ六つ並びおはします、され共神體拜みたるものもなく、幾年經れども修覆の業もせざりしが、ある年の八月例の大風吹て、祠皆ころびて、田の中、道の街にちりとばせしを、氏子共よりあつめ、はじめの所に居直しぬるついでに、御神體をも拜み申せとて、おの〳〵板をはづして差覗きければ、一社は干鮭、又はよこづち、あるひは杓子、檑木、塗桶、緣の離れしいがき、鍋の蓋、破たる火桶をひとつ宛こめおきたり、

〔皇大神宮儀式帳〕一管神宮肆院行事

月讀宮一院、〇中略

次稱二月讀命一御形馬乘男形、著二紫御衣一、金作帶二大刀一佩レ之、

〔玉手繦九〕久延毘古命は、亦の名を曾富登神とも云ふ、〇中略神典に此神は足は行ねども、天の下の事を盡く知れる神なりと有れども、實には田畠に作り立て、鳥獸のおどしに用ふる案山子の事なり、〇中略然るに此を神としも云ふは、其形いと見惡く卑き物には有なれども、神世よりかく作り設けし御靈、また神像の本にして、有ゆる神祇精靈の憑つきて、天下の事は更なり、天上の事をも知れる、最も奇しき物なる故に、神とも命とも申せるなり、

〔軍神問答〕問云、軍神を祭るに、木像にても、畫像にても作て、是を祭らんと欲す、其像の體をば如何樣にすべきや、

答云、像を造て祭る輩は、佛家にてする事なり、像をば作るべからず、其故はいかにとなれば、鬚髮一すぢ、皺一つにても、其人に違へば其人に非ず、況や見ぬ世の昔の人を像るには、其顏色以下大に違ふべし、又神を祭るは、我誠心を其神靈に感通せん事を欲するなり、然るに像を設け置ば、我心其像にとゞまるが故に、其像に障へられて、眞の神靈に感通する事なし、像は不レ可レ用、

〔康富記〕文安元年十月二日丁未、栂尾春日大明神御影御帳被レ開レ之、南都大乘院被二所望一申、被レ開レ之、此

次所望之族、上下道俗男女拜見無子細之由、兼有其聞之間、奉伴淸大外史幷藏氷等、今日參之令拜見了、其儀有開帳、寺家之衆有講論之儀式、其後南都衆有法樂之後、大乘院殿有御拜見、御退出之後、諸人群集願狼藉之體也、栂尾本堂ヨリ遙ニ東ニ倚テ、有檜皮葺堂一宇、南面也、春日御影ハ東方西向奉懸之繪像、住吉御影彼是兩鋪也、殊勝々々、逢此時節奉拜見、可申恐幸哉、及黃昏了間、借坊中夜宿了、

〔本朝世紀〕久安五年四月廿九日庚辰、今日八幡宮御飯事官勘申云、(中略)亦松尾社御正體所持給之御笏、落坐上、撰吉日奉令持、更不可作改、(下略)

〔稻荷大明神流記〕龍頭太事

或記云、古老傳云、龍頭太ハ和銅年中ヨリ以來、既ニ百年ニ及ゾマデ、富山麓ニイホリヲ結デ、晝ハ田ヲ耕シ、夜ハ薪ヲコルヲ業トス、其ノ面龍ノ如シ、顏ノ上ニ光アリテ、夜ヲ照ス事晝ニ似リ、人是ヲ龍頭太ト名ク、其ノ姓ヲ荷田氏ト云フ、稻ヲ荷ケル故ナリ、而ニ弘仁ノ比ニ哉、弘法大師此山ヲトシテ、難行苦行シ給ケルニ、彼翁來テ申テ曰ク、我ハ是當所ノ山神也、佛法ヲ護持スベキ誓願アリ、願ハ大德常ニ眞密ノ法味ヲ授ケ給フベシ、然者恐老忽ニ應化ノ威光ヲ耀テ、長ク靈迹ノ當地ヲカザリテ、鎭ニ弘法ノ練字ヲ守ルベシト、大師專服膺セシメ給テ、深ク敬ヲ致シ給フ、是以其面顏ヲ寫テ彼ノ神體トス、種々ノ利運速々ニ斷絕スル事ナシ、彼ノ大師御作ノ面ハ、當社ノ竈戶殿ニ安置セラル、毎年祭禮ノ時、神輿相共ニ出シタテマツル、

〔神名帳考證土代附考〕稻荷神影(山城國葛野郡栂尾高山寺閼伽井坊ニ稻荷ノ神影アリ、寬輔讚部ノ畫タトコロナリト云リ、)

〔本朝畫史上上古畫錄〕宅間澄賀(中略)栂尾高山寺、有春日住吉二神像、俗傳二神來受法於明惠、澄賀請見之、明惠曰、凡謁拜之則恐有害、然固請不已、而姑許之、澄賀竊見便模寫、促其駕歸京城、頭馬而卒於道、上人之言果然也、

〔多武峰緣起〕堂東大樹邊、異光時時現、和尚○定慧點此處造方三丈御殿、今聖靈院之草創也安置大臣○藤原鎌足靈像、造師近江國高男丸也、大織冠聖靈、降神當嶺以來、氏長者幷一門重臣、若本所怪所、常有凶事之時、陵山鳴動、異光顯現、或時其光遠至三笠山、或時彼山同發光云云、

〔古事談 五 神社佛寺〕天慶二年之比、粟田口山科北里有一神祠、號藤尾寺、南邊有別道場、件所有一尼、自先年奉造石清水八幡大菩薩像、安置年尙、凡厥靈驗觸事多端、仍遠近僧尼貴賤男女歸依如林、輻湊成市、○中略而件尼蒙如本宮之告、經年無所改定、爰本宮神人等數千人、發向件山科新宮、壞弃其社殿、耕彼尼身、至于其靈像者、奉移石清水本宮云云、

〔今昔物語 十三〕天王寺僧道公誦法華救道祖語第卅四
夜曙ヌレバ、道公此事ヲ極テ恠ミ恐レテ、樹ノ本ヲ廻リ見ルニ、總テ人无シ、只道祖ノ神ノ形ヲ造タル有リ、其形舊ク朽テ多ノ年ヲ經タリト見ユ、男ノ形ノミ有テ、女ノ形ハ无シ、○中略其後道公、道祖ノ言ニ隨テ、忽ニ柴ノ船ヲ造テ、此道祖神ノ像ヲ乘セテ、海邊ニ行テ、此レヲ海ノ上ニ放チ浮ブ、○下略

〔本朝世紀〕天慶元年九月二日丙午、近日東西兩京大小路衢、刻木作神、相對安置、凡厥體像、髣髴丈夫、頭上加冠、鬢邊垂纓、以丹塗身、成緋彩色、起居不同、遞各異貌、或所又作女形、對丈夫而立之、臍下腰底刻繪陰陽、構几案於其前、置坏器於其上、兒童猥雜、拜禮慇懃、捧幣帛、或供香華、號曰岐神、又稱御靈、未知何祥、時人奇之、

〔源平盛衰記 七〕笠嶋道祖神事
奥州名取郡笠嶋ノ道祖神、○中略上下男女所願アル時ハ、隱相ヲ造テ神前ニ懸莊リ奉テ是ヲ祈申ニ叶ハズト云事ナシ、○下略

〔鹽尻 初編 七〕男體女體神像

諸社俗體の神形とて神殿に置奉る、是は神社に神衣調進の時崇むる事なり、其時安置し奉る男體女體ともに有りとて祭りしも、此像も是より起れるか、中世より已來瑞あれば、必作りて殿內に凡神座の數ほど納む、尤麁なる像にて有之、按するに、昔日の幸の神の類と覺ゆ、又ひなも是より起れるか、

〔走湯山緣起二〕礒城嶋御宇〈○崇神〉十一年、天下大疫、人民死亡、又神火燒禁闈、仍被降綸命、課三箇國、〈伊豆、駿河、武藏、〉名戸士民被行臨時祭祀、金銅圓鏡一面、〈徑二尺〉權現御體、〈六尺二寸〉被込神殿、此像御衣木者、和泉國茅沼海中有音如雷、光如日之物、帝遣勅使令覽之、長九尋楠木也、以之造彫佛神之像、謂吉野光像、當山權現像是也、

〔本朝畫史上上古畫錄〕菅丞相〈○菅原道眞〉仕寬平昌泰朝、爲天下之鴻儒、沒而有精靈、贈正一位太政大臣、號天滿大自在天神、處處立祠、世有稱自畫像者、筆勢不凡、威儀可仰矣、曾象跡稀、蓋在于北野東向觀音寺、及洛東高臺寺、又在於攝州上宮社、納之、其異蹟無疑者也、

〔羅山文集十五記〕河內國佐太菅廟記

河內國茨田郡佐太鄕有菅神廟、俗傳稱佐太、或作沙汰、〈○中略〉寬永十年癸酉、信州大守大江姓永井氏尙政、受台命、改野州古河徙封城州淀城、增食邑凡十萬石、此鄕亦隸屬焉、自淀河陸行八里、到攝州難波、此鄕在淀城之西五里、與難波相距者纔三里、傍河有樹林、其中有此祠、故水陸往還者來詣不鮮矣、大守行春施政之次、到此傷其傾側、再興廟堂、寄附燈戶、挑案前之燈、增燈燭之明、且祈邦國無窮之福、時寬永十七年也、〈○中略〉自是三長月每値神之忌日、率由舊章以爲恆例、又請曼殊院法親王良恕、書神號於板、以爲祠堂之顏色、而使畫工狩野探幽圖東帶天神影、紫野禪師宗玩書贊詞於別幅、且命好事者模寫歌仙三十六人於小板、而請良恕弟子法親王良尙、書其歌於像上、掛於廟壁、其鑑絕之美可謂盛矣、

〔江戶名所圖會十八〕宰府天滿宮　龜戶村にあり、○中略社記云、開祖信祐、菅原善升の苗裔なり始筑前太宰府にありし頃、正保三年丙戌、一夜菅神の靈示を蒙る、其夢中、十立(カツダチ)て榮ふる梅の稚枝かな、といへる發句を得たり、依其後飛梅を以て、新に神像を造り、是を護持して江戶に下り、彼天滿宮を今の龜戶村に勸請す、

〔東都歲事記一下〕二月廿五日、高輪東禪寺に菅神眞筆の御影を掛て拜せしむ、御酒を獻ずる時は、神顏必赤しといへり、今日寺中見物をゆるす、

〔天滿宮御傳記略下〕御託宣には、諸人我前に來りて願を遂むとならば、其心僞なく淸くして、鏡に向ふ如くすべしと宣へり、さて物讀み手習に行ときは云ふに及ばず、朝々顏手を洗ひ口すゝぎて拜み奉り、月々の二十五日には御神像をかけ奉りて御榊を奉り、御神酒、御備、または御洗米にても奉りて、手を二つ拍て拜み、左の祝詞を讀べし、○下略

〔北野藁草渡唐十〕からわたりのひじりのみかげのいはれ云畫に寫し贊に書たる御影多く廣まりてをがむ事は、雪舟歸朝の折から、徐氏の圖を得て、雪山と云弟子、そのほか大元より繪を好む人あまたともなひ來て、それらもおほく寫して世に殘れり、

〔町人袋二〕ある富限なる町人の子、渡唐の天神を信仰して、家內に安置し、每日の拜禮折節の備へ物おこたる事なし、○下略

〔鵞峰文集四記〕江州佐佐木社記

中葉以來、宗源神風不行於世、群國神社、或爲釋氏被混、或爲淫祠被掠、而皆失其本也、其從役者旨豐無以知之、豈不悲痛乎、聞此社秘殿有四廚子、各安神像、號四所明神、傳稱其本地者觀音、藥師、不動、毘沙門也、然則先是浮屠既有覬覦之志、然猶僅存其本緣者、亦是神之幸也、

〔出雲神社巡拜記凡例〕當國に八所八幡宮と云あり、○中略申傳ふる所は、賴朝卿、かまくら鶴岡大藏

山に生たる所の厚朴一本伐らせ、中の間を八段となし、大神の靈體を作らせ、自ら御眼を入させられ、扨當國に送り、時の守護職宇多天皇九代の孫、佐々木五郎左衛門尉義清をして、造營せしめられたり、

〔神僊集附錄〕學頭敬蓮、延寶元年極月二十五日入院仕候、社僧中より當山學頭前々より入院以後御神體拜見の事に候間、拙僧にも拜見仕可然よし申候間、翌年正月十五日朝、御神體可奉拜由申候之間、定知院案內仕、御內陣へ入候而、御在世御德威盛入候程奉拜見候も恐多奉存候由、定知院へ語り、併前々より先住達拜見被申候間、致開帳候樣にと申候、則定知院開帳仕候而、一目奉拜見、二目拜見仕候はゞ恐多候間、早々閉帳仕、御宮より下向道に而存出し候者、御神體之樣子とくと不奉窺候、扨々御殘多奉存候、罷歸り候、其日晝時分、急に睡眠來候故、假寢仕候へば、夢現之樣子に御木像之御神體、右之膝之上御影向被遊候而、御神體共不覺罷在候處に、御木像御機嫌能御樣體にて、ふなゆり被遊候を不審に存、氣を付見候程、今朝拜見之御神體に違不申候に付、偏に恐多罷成、其儘目を閉、早々御上り被遊候樣にと恐々て夢は覺候へ共、一時程無性之樣に罷成、殊之外草臥申候、夢の事、神以少しも僞に無御座候事、

〔百錬抄高倉〕安元元年六月十六日、蓮花王院總社鎭座、八幡已下廿一社、其外日前宮、熱田、嚴嶋、氣比等社、本地御正體圖繪像、但日前宮、熱田御本地無所見、仍只被用鏡、

〔十訓抄四〕粟田讃岐守兼房といふ人有けり、年比和歌をこのみけれど、宜き歌もよみ出さゞりければ、心に常に人丸を念じけるに、あるよの夢に、西さか本とおぼゆる所に、木はなくて梅花ばかり雪のごとくちりて、いみじくかうばしかりけるに、心にめでたしとおもふほどに、かたはらに年たかき人あり、直衣にうすいろの指貫、紅の下の袴をきて、なへたる烏帽子をして、えぼしの尻いとたかくて、常の人にも似ざりけり、左の手に紙をもて、右の手に筆を染て、物を案ずるけしき

なり、あやしくて誰人にかとおもふほどに、此人いふやう、年比人丸を心にかけ給へる其こゝろざし深により、形を見え奉るとばかりいひて、かきけち失ぬ、夢さめて後朝に繪師をよびて、此樣をかたりてかゝせけれど似ざりければ、たび〳〵かゝせて、似たりけるを寶にして、常にをがみければ、そのしるしにや有けん、さき〳〵よりもよろしき歌よまれけり、年比ありて死んとしけるとき、白河院に進たりければ、ことに悅ばせ給ひて、御寶の中にくはへて、鳥羽の寶藏に納められにけり、六條修理大夫顯季卿、〇季原作輔、據一本改、さま〴〵に度々申て、信茂を語て書寫してもたれたりけり、敦光に讃作らせて、神祇伯顯仲に淸書させて、本尊として始て影供せられける、

〔古今著聞集 五和歌〕白河院此道御好有て、かの影〇人丸をめして、勝光明院の寶藏にをさめられにけり、修理大夫顯季卿近習にて所望しけれ共、御ゆるしなかりけるを、あながちに申てつひに寫しとりつ、〇中略兼房朝臣の正本は、小野皇太后宮申うけて、御覽じける程に燒にけり、貫之が自筆の古今も、其時おなじく燒にけり、口惜事也、されば顯季卿本が、正本に成にけるにこそ、

〔町人袋 一〕或人のいへるは、大黑を福の神といひて、萬人祝ひ敬ふ、此謂佛經に有とかや、され共我その深きことわりをばしらず、われ是を信仰するに心得あり、いかにといふに、先大黑は色黑く、たけひきく、形見にくし、色黑きは美麗のかざりなきいましめ、たけ短きは身を謙る形なり、足に米穀の俵をふみ、手に財寶の袋をにぎり、同じく小槌をもてり、人の身を養ふ事、米穀財寶を第一とす、是を用ることおろそかにせず、みづからつとめ守るべし、打出の小槌は、四民ともに、面々それぞれの家業職分の道具をしばらくも手を放つ事なかれとの敎なり、かくのごとく勤行ふ時は、富貴に至りて千萬人をも養ふべし、是福の神の儀なり、世俗に橋の板を以て造る處の大黑は、靈驗ありといふは橋は通じがたき所を通じて、廣く萬民を渡し、日夜踏ことたえず、その板を以て造れるは、是萬人に謙り、諸人の胯下にありても、終に身をたて用を達せんとおもふ心也、此て

とわりをわきまへなば、橋板にあらずとも有なん、去神道者のいへるは、世に信仰する大黑の像は、日本大國神の像にして、佛說にいへる大黑天神といへるにはあらず、天竺にては摩訶迦羅天神といひて其神體おそろしき像なり、摩訶迦羅といふを、唐土の文字に飜譯すれば、大黑の二字也、しからば今世に用ゆる所の形像は、日本神道の大國神にして、天竺の大黑天神にはあらず、とりちがへたるもの也、いかさま形像の體、日本の人の裝束めきて、天竺姿とは見えず、則惠美酒神と父子にてましますよし、

〔日本七福神傳〕凡例

一國俗以吉祥、辨才、多聞、大黑四天、布袋和尙、南極老人、及吾國蛭子神、稱七福神祭之、(中略)

蛭子三郞傳

系曰、世彫釣魚之形、爲蛭子異像、彫負俗之形、爲大黑異像、稱二福神、安之一小廚、戶戶祭之、其大黑負俗之事非無其據、其蛭子釣魚之事不知所據、

〔竈神祭考〕今世おしなべて家々にいつき祀れる竈神は、はじめ佛法の神とかいへるものにして、誠はそれ彼方にても正しく古より祭り傳へたるものにはあらで、漸くだれる世に、この國の資僧の私に作り傳へたる名也とぞ、さてこの拜き祭る繪像とかいへるものゝ形容よ、いとむくむくしきものにて、鬼とかいふめる類にひとしく、更に此世のものとも、おもはれざるやう畫て、名をも三寶荒神とぞいふなる、

〔新編武藏風土記稿 百二十多摩郡〕阿豆佐美天神社　祭神ハ少彥名命ニテ、神體ハナク、畫像ヲ掛ク、

〔古事談 五神社佛寺〕敎實親王奉造立大菩薩御影二鋪、一鋪俗形、一鋪僧形、奉備御供、被致祈請之後、被奉拜見之處、僧形ノ御供ニ被立御著云々、依之以法體爲御體、奉安置外殿、多被寄進田園云々、作御體保延炎上之時不奉取出、燒失云々、

件御體、權俗別當兼貞不堪不審、供御供之次奉禮、白檀僧形、首戴日輪、御手令持鉢給云々、兼貞此事之故不運而止云々、

〔鹽尻 十二〕八幡所々神像ノコト
尾公東都市ヶ谷屋敷内に八幡宮あり、此御體は僧形にして地藏に似たり、もと弘法大師筆にて、石淸水の古物なりとぞ、東寶院に男山の御體比丘尼の說有よし見ゆ、昔よりの古像と見ゆ、東都穴八幡御體、開帳の時拜し奉るに、これ又僧形立像にて、錫杖を持給へり、市谷稻園八幡は甲冑の御體なり、牛込若宮八幡は束帶乘馬の御形也、京師東寺の八幡僧形にてましますよし、寺記に見え侍る、

〔百練抄 十三後堀河〕嘉祿二年九月七日、有御卜、日吉社十禪師御正體木作千體地藏、去月比動搖給事、

〔耀天記〕第二大宮之事
尋云、寶殿安置之時、御尊體者誰人所造耶、又俗形歟、僧形歟、親成答云、大宮者唐崎大樹之上顯現之時、宇志丸拜見之、卽形像ヲ不違奉造、所奉安置者、俗形御體也、

〔懷橘談 下神門郡〕日御崎
社中をみれば、御正體とて、佛像を鑄あらはしたる鏡のごとき物を懸ならべ、香を燒、幡を懸、いむとていはぬ事にもあらねば、僧は經をよみ、鐘をたゝく事頻也、

〔鹽尻 初編七〕讚州象頭山は金毘羅神を祀る、其像坐して三尺餘僧形也、いとすさまじき面貌にて、今の修驗道の所戴の頭巾を蒙り、手に羽團をとる、藥師十二神將の像とは、甚異なりとかや、

〔新編武藏風土記 二百七多摩郡〕姬宮明神社　神體ハ釣鏡三面ニテ、厨子ノ内ニ掛ク、中央ハ釋迦ノ像、左右ニ文殊普賢ノ像ヲ鑄出セリ、

〔江戸名所圖會 十〕國安明神祠　神體は左の如きものにして、世に云所の鑄形の神像なり、○中略

國安神像　銅物、わたり六寸四分ばかり、上に天蓋など付たりしと覺しき跡あり、下の方にも花瓶の如きものありて、上の方に口あり、神體は俗形にして、寶珠と劒とを持し給ふ形なり、

〔倭姬命世記〕蓋聞、垂仁天皇女倭姬內親王、隨神託、定大小神社、或神代神寶奉崇神體、或以變化之靈物爲神形、專致其精明之德云云、

〔玉海〕文治元年十月九日戊午、申刻藏人左衞門權佐親雅來、傳院宣云、宇佐宮黃金(或爲御正體、或爲社寶、)之間事、條々可計奏者、(副調度文書外記勘文等獻之、)此事爲經房卿奉行所被仰下也云云、件狀如此、

宇佐宮兩條事

一外記勘申黃金事

當宮之習、以鑄御鈴幷黃金奉稱御正體之由、上洛神官等所申也、然而寬治之比有沙汰、事不切之由見外記勘文、雖縱爲神寶、非可不崇重、安置所奉送之儀、幷被奉謝之間事、就外記申狀可被計申之由、向左右內三府許可被仰合、兼又可令申攝政(○藤原基通)給者、(○中略)

右兩條存此旨、可令申沙汰給者、依院宣執達如件、

九月廿二日　權中納言經房上

藏人左衞門權佐殿

〔八幡宇佐宮御託宣集(小倉山社)〕天平廿一年己丑正月、陸奧守從五位上百濟王敬福奉黃金、出部內小田郡、卽進上九百兩、賞福信授從三位、皇帝感於神驗、其上分百二十兩被奉神宮、一廷長伍寸貳分、廣壹寸貳分、厚貳分、一廷長伍寸壹分、廣壹寸壹分、厚貳分、一廷長肆寸陸分、廣壹寸貳分、厚貳分、(○中略)件勅使四月六日參宮、被奉黃金之時、大菩薩手自請取之坐、被納香爐筥、在第一御殿今號黃金御正體是也、

〔鶴岡八幡宮寺社務職次第〕賴仲　康永元壬午五月十九日、爲將軍家(○足利尊氏)御願自京師被御正體二

面調進、奉閼伽供養、卽奉納寶殿也、

〔太平記五〕大塔宮熊野落事

野長瀨〈〇六郞七郞兄弟〉畏テ申ケルハ、昨日ノ晝程ニ、年十四五計ニ候シ童ノ、名ヲバ老松トイヘリト名乘テ、大塔宮明日十津河ヲ御出有テ、小原ヘ御通リアランズルガ、一定道ニテ難ニ逢ハセ給ヌト覺ルゾ、志ヲ存ゼン人ハ、急ギ御迎ニ參レト、觸廻リ候ツル間、御使ゾト心得テ、參テ候トゾ申ケル、宮此事ヲ御思案アルニ、直事ニ非ズト思食合セテ、年來御身ヲ放サレザリシ、膚ノ御守ヲ御覽ズルニ、其口少シ開タリケル間、彌怪シク思食テ、則開被御覽ケレバ、北野天神ノ御神體ヲ金銅ニテ被鑄進タル、其御眷屬老松ノ明神ノ御神體、遍身ヨリ汗カイテ、御足ニ土ノ著タルゾ不思議ナル、

〔吉黃記〕建長八年〈〇康元元年〉九月十日、資定奏、

粟田宮條々

御正體間事

抑文曆沙汰之次第、只爲被散御不審也、只今非可被鑄改之儀、日來沙汰不可有相違、

〔宣胤卿記〕長享三年〈〇延德元年〉十月十六日、被尋下諸社神體靈寶等叡覽先規事、

神體叡覽事、先規未勘得之、

靈寶事、兩大神宮廿年一度遷宮神寶御裝束奉遣時、叡覽每度儀也、

應永十七年八月十三日、八幡宮璽御筥調獻、幷一社奉幣也、先朱漆御辛櫃昇立無名門前、〈敷薦〉藏人左少辨淸房、藏人右少辨宣輔兩人、降自殿上小板敷、昇御辛櫃立御前退、次頭中將實秀朝臣、進寄開御辛櫃鏁居蓋上、將參之、叡覽之後如元奉納云云、於璽筥者、奉比神體者歟、

左大史雅久上

〔吉記〕壽永三年四月一日己未、式部權少輔範季朝臣來談云、崇德院御粉社每事未定、御正體可被用

何物乎之由有儀、先被尋兵衛佐局、申云、年來御持佛普賢像并御鏡當時見在、又以木御枕被奉造佛像、先被仰台左府〇藤原經宗之處、可被安如意輪普賢二體、御枕之外右府〇藤原兼實被申云、二體之體無謂可被〇被下恐有誤脱如意輪、今一體奉安如經所可有其勤歟云々、

〔小朝熊社神鏡沙汰文〕勘申

祭主神祇大副大中臣能隆卿言上〇中略

抑御鏡本口見不分明、但或書云、朝熊水神形石坐、倭姬內親王御世定祝者、彼岩上御鏡二面之外、他御體不坐云々、御鏡已爲御體歟、抑神宮司宜令註進子細、隨狀被量行、且令致祈請、且可被期感應歟、仍註進如件、

正治元年五月廿日〇中略

小朝熊御鏡事引勘舊儲起本不詳〇中略神殿崇山腹、文籍雖無所疑、御鏡坐巖首、時代既不分明、然而神異殊勝、世傳稱之、今忽紛失尤可驚、恐先行御卜、隨狀跡可被計行歟、且任長寛例、立伊勢奉幣使可被謝申歟、彼度所奉懸御帳之御鏡二面、三月紛失、八月新調被奉獻、雖可准彼者爲神寳、此者稱御體、輕重尤異、准的、豈又改造之儀更不可然、靈器或燒損、或紛失、然而先規有議、皆不鑄治、如聞彼御鏡二面之內、一面大、一面小云、既賭古例、豈稱新造乎、唯專新謝、令仰神威者、靈鏡早坐巖上、靈化彌海內者歟、

右文籍所註如件

正治元年五月廿日　大外記兼主水正助教伊勢權守淸原眞人良業勘申

〔八幡愚童訓上〕文永十年十二月廿五日、御鏡可改造否事被行仗議、參陣公卿內大臣師繼、大納言源通基、同藤原伊頼、同信嗣、中納言藤原經俊、太宰權帥源雅言、參議伊豫守小成俊、左近衞權中將具房、四位參議實冬朝臣等也、又檢校法印宮淸、別當法印行淸被召、御鏡御體歟、神寳歟、爲御尋也、行淸申

云、神體也、貞觀六年造寶殿、崇三所御體トアル、今御劍是也、委細之深義奏聞セラレ畢、宮清法印可有上洛、共頭風氣有トテ不及參內、可注進之由被仰下、奉行內藏頭賴親也、仍所司解以此申、其狀云、右宗廟御璽者、鏡與劍御歟、件御劍者、尊神垂跡之後、廟壇草創以來、崇敬年久、幽明難測、彼御劍准神寶否、宜有聖斷乎、被裁タリケリ、如斯重々有御沙汰、御劍被造改義無、神體有謂故也、ゲニモ今御劍、御璽宮上安置、若神寶ナラバ、御璽上誰人可置劍哉、共御體ナル條不可及異儀、安心院ニテハ借神自御劍御體拜見、御託宣ニモ靈鏡ヲエテ照朝野、以神劍振隣敵アルヲモテ、御劍崎ヲ以テ向異國アツル事アリ、向王城事白地ニモセヌ事也、

〔親長卿記〕文明八年八月十三日、奏、鴨前社務祐躬、去々年社務相論之時御折勘、所詮每事可有勅免、神體事、多々須敵亂入放火之時紛失了、于今社務等不尋出、被尋出申有勅免、可被任社務歟之由申之、仰云、去々年罪科勅定之間、違背之間、一往有御折勘、如此申之上者可有勅免、神體事已觸凡人之手、又何樣之草堂にか安置し候つらん、雖然立歸可被用神體歟否事、召寄吉田三位可尋云々、仍兩亞相、（○勸修寺、廣橋、）并召寄吉田三位、（兼俱）吉田三位參仕、仰云々趣、申云、諸社神體事、樣々相替也、以靈寶爲神體、以神木爲神體、賀茂社事、以矢爲神體、鴨社事、有別神體之由、先年故祐顯三位相語之間、不知子細、但爲其神體者、已累年爲神體上者、觸凡人之手、自然雖安置堂舍佛閣、不可苦云々、卽奏聞、仰云、書載可申云々、又彼神體事、所詮召寄惣社司等、令撿知、無子細者、其時忠節事、一段可被仰之由、可仰祐躬云々、次兩亞相參仕、仰云々趣、申云、爲武家被成奉書之事、有糺明歟否事、爲傳奏尋武家奉行、依其一左右可被申合武家歟云々、奏彼趣、先可尋云々、次歸華、元連可來之由仰了、所勞之間一兩日之間可來之、入夜吉田三位來、載之申子細云々、次雜談、如此就神體之儀、有先規之由存之云々、然者可注進之由仰了、

鴨社先年回祿之時、神體紛失之處、近日出現、但數年奉安置佛閣歟、非無汚穢混合之疑、因茲新可

被定申御體歟、可被奉用古物歟否事、先被決一社一同勸進、元來鎭座之神體、殆據已爲分明者、可被用件御體之條、不御猶豫歟、但可被執行靈神安鎭祭、幷鎭御魂等者乎、且先蹤備左、

祟神天皇卽位十六年秋九月、皇大神初而奉遷大和國笠縫邑、以來諸國遷座、每度被祭靈神安鎭幷鎭御魂等矣、

神護景雲二年、春日大明神自鹿嶋奉遷御笠山之時、爲被旅宿之汚穢、被行件兩祭矣、

文明八年八月日　　神道長從三位卜部朝臣兼倶

〔豐前志田河郡二〕採銅所上下採銅所町

此村ナル長光家ノ古文書云、宇佐宮放生會、行幸會之二大會每被遂行、上古從朝廷遣勅使、勅使著船于今居津、御逗留于草場村之、在廳奉官人至採銅所、而金銅奉鑄之儀被供奉云々、宣案云、今居津、草場村ハ仲津郡ナリ、

御正體金銅奉鑄之儀被供奉云々

一淸祀殿一宇　板葺九尺間三間、四方柱十二本、高各二丈二尺、殿內鑪而土坐ノ中央鍛冶床口之、

一勅使殿一宇

一在廳官人小屋一字

先勅使引官人、兼日到著採銅所、寶鏡造進之間、神事被供奉、次淸祀殿御事始、先淸祀殿四方立御鉾、此御鉾料者、於致域郡御本山若林山兩山之麓筑後堀之內、材木伐取之、右之兩山者、桑田鄕內也、亦四方四隅立幣帛八本、四方奉引御注連、以綾錦奉圍殿外、爲戒非常也、次香春嶽御山開祭有之、古宮神官奉仕之、先一御嶽、一之殿寶鏡之料次第有之、三山御靈在第三之御嶽山之麓、御祭御供神酒等古宮神官、授秘訣也、次長光奉鑄寶鏡之前日、黄金之鉢盛淸水、立其坂木、取添白和幣、奉申降天照大神從兩長光齋七日、身滌于嶮負川、其後三七日潔齋之後、奉鑄御正體、御鏡在之、古宮官勤之、次奉鑄之次第、限

日長光出、淸祀殿勤神事、正當日初一午日奉鑄寶鏡二御殿料三銅或六銅、〔〇口訣〕卯日奉磨寶鏡、三御殿料三銅或六銅、〔〇口訣〕次奉磨之事終、而三御殿御正體入御于神宿殿、奉安置于石御床上、結願之祭兩日、長光奉仕之、次奉納御正體於御箱、次奉乘神輿三振御二殿分也、次神輿御發幸採銅所、其日入御草場村豐日別宮、御剋御進發、駕輿丁二十四人、吉田鄕東鄕北鄕之所役也、次供奉次第、勅使在廳人、及神官神人氏等云々ト見エタリ、

〔千とせの松〕寬文七年秋、會津郡〔〇岩代〕蠶養國神社は、延喜式神名帳に有之名社之處、社頭久しく荒廢いたし、舊地の古木のみ有之を御再興仰付られ、神職まで御付け、社領十石御寄附被成候、此外古社之修覆等仰付られ候儀、前後數多の儀、中にも耶麻郡〔〇岩代〕磐椅神社も、延喜式に載られ候社の處、此頃は神號を失ひ峯明神など唱候を、古き御正體の銘に、磐椅神社と彫付有之を以て、神號を復せられ、社頭御修覆なされ、筑前守樣〔〇會津藩主松平正之〕御家督以後、社領十五石御寄附なされ候、

〔扶桑略記〕〔二十九後三條〕延久二年十月十四日辛未、戌時感神院大廻廊、舞殿、鐘樓、皆悉燒亡、但天神御體奉取出之、別當安譽身焦餘焔、翌日入滅、世人以爲神罰、

〔百錬抄〕〔十三後堀河〕寬喜元年十一月廿七日夜、備後吉比津宮燒亡、御體已下爲灰燼、　二年七月廿三日、右大臣〔〇藤原實數〕已下參入、廣田千栗兩社御體燒亡事有群議、

〔中右記〕長承二年六月六日庚寅、鎭西宗像社、去年九月十一日、寶殿幷御體燒亡歟思食、如元可奉造立由可被載辭別者、件宗像社者、大神宮之子孫之由見解狀也、

〔玉蘂〕承久二年四月十四日癸酉、祇園燒亡事、内々遣尋勘例於大外記師重朝臣許、使者注進也、

祇園社燒亡例事

延久二年十月十四日辛未、戌剋感心院神地燒亡、牛頭天王御足燒損、八王子御體幷蛇毒氣神、大將軍御體同燒亡、　廿七日甲申、戌剋差遣左少史紀重倫幷左史〔直〕上村主重邦等於祇園社、被實撿燒

亡事、

官使撿注云、燒亡子細、尋問寺家所司之處、申云、〇中略去十四日夜戌剋程、件炎中猛火出來、本堂燒亡及于寶殿、別當安譽幷僧等悵然欺、雖入御殿内、烟滿塞之上、本自不知御體立所、僅隨搜得八王子一體奉取出之程、安譽身燒損、其後聊曉登向寶殿幷堂塔皆悉燒亡之後、上下諸人各汲水、諸御所火事求御體之處、被埋大壁、五頭天王幷婆梨女御體御座、乍悅上座圓快、都維那公能、承仕忠範等雖奉懷出、成恐不奉見、即奉裹既畢、但左右御足燒損給、各御長六尺餘許歟、八王子三體所々燒損、同所御座也、御長三尺許、件御體等丑寅方、若宮御社奉移之後、假殿乎造假所奉安置也、其儀八王子四體、蛇毒氣神、大將軍御體等、皆悉燒失畢云云、

〔文永六年實文宿禰勘文〕准據例

治暦四年□月廿九日、加賀國白山社、幷神殿、幷御體等燒亡、

延久二年十月十四日、感神院寶殿燒亡、牛頭天王御足燒損、八王子御體、幷蛇毒氣神、大將軍御體、同以燒失、〇中略

已上被造立神殿御體等畢、就中延久感神院蛇毒氣神御體事、或行卜筮、或致祈請、遂依夢之告有其沙汰者、〇中略

嘉祿元年十月廿七日、廣田社神殿、御體等燒失、

安貞二年十二月二日、千栗宮神殿爲神火燒亡、御體同燒亡、

已上不被造立御體、專爲如在之禮、□廣田社者、天照大神荒御魂、千栗宮者、八幡五所別宮、可准宗廟之由雖有沙汰、不及議例者也、兼又八王子三宮等御體、追被造立之由有其說、本社定存知歟、

斯外寛弘長暦兩度、内侍所神鏡燒損頻有議定、遂不改鑄、

〔鹽尻 九〕神社御正體鏡ノ說ハ神ノコト

我國古神社の御正體と稱するは、鏡に其社の本地御形を鑄たるを云、但し是は中世以來の事にして、古への製作にあらず、東鑑等に有之、是より佛者の本地垂跡といふ事始りたる也、決して四大師にては有まじ、往古其以前は、其神社に納ある神器を以て祠中に安置し、其神のよる處として崇しのみ、釋氏より以來、佛菩薩の三摩耶形を以て安置せし社も有と見ゆ、貞按、此說非ナリ、鏡ニ鑄タルニテハナシ、唐銅ニテ圓形ニシテ、本地ノ形、或ハ梵字ヲ鑄付タルモノナリ、

五輪塔形大日　鉢釋迦八相成道三形釋迦　羯摩金剛界釋迦　寶鐸胎藏界釋迦　蓮花彌陀　寶幡地藏　未敷蓮花觀音不開花

此外劒玉、弓矢、玉笏等種々形あり、勢州神宮倭姬世記に委し、略レ之、是を不辨して、佛像の外は、皆往古より崇むる神體なりと執するもあり、文治四年十二月、度會雅明佛者也大倭姬世記奥書に、大小神祇、神代の神寶を以て正體と崇め奉り、或は變化の靈形を神體として、專ら其精明の德を致すと云るは、上古の風俗の如し、但し是も恐らく三摩耶形の說にちかく侍るにや、大神宮の八咫の鏡を崇奉るは、皇大神この靈鏡を皇孫の尊に授け玉ひて、是を見玉ふ事、猶吾を見ますがごとくし玉へと勅言ありしゆゑ、末代まで永く皇大神の御かたみとて、皇居に崇玉ひしが、崇神帝の御時より、別に神宮をたて給へり、草薙劒も、日本武尊東征の時、倭姬より授け給ひしを、還御の時、此尾張の宮酢媛の家に殘し、後かたみとなし參らせられしかば、薨御の後社を建て、武尊を御體として奉祀せり、是等の義を取、德を表して神體とせしにあらず、上古質直の人情を見つべし、或秘記、天兒屋根命は弓に坐、太玉命は劒に坐すと云り、是內宮御相殿の事、外宮に遷しまし〳〵て、兒屋根命は玉を以て御體とす、是弓は左の謂、劒は右の謂にして、上代質素の風なり、世と參を取て巧にいふにあらず、我國古へ神を祭るに、賢木を立て和魂の表とせし、これも根本は幣物にして、鏡木綿玉などを榊にかけしなり、夫榊は一時の物、器物は永く藏めて祠中に置しゆゑ、おのづから其

社の御體となりて、鏡劒玉などを奉じける社も多しと見ゆ、

〔軍神問答〕問云、武家にて、正月軍神には鏡餅を供へずして、具足の餅とて、鎧に餅を供ふる事は如何、

答云、鎧は武士の身を包み、矢石劒戟を防ぐ要器にして、軍器の第一なる物也、故に鎧を以て軍神の神體になぞらへて、鎧に餅を供ふる也、即是軍神に供ふる也、

〔橘窓自語 一〕五條天神〈今松原通西洞院西南角〉の神體は、金のたから船なるよし、天明の大火災の時、動座させ奉りし町家菊屋權兵衞語れりしと、中野熊吉物語りせり、この天神は少名彥の神なり、例年大晦日節分に、たから舟の畫を出せるを、人々請受て守りとするをおもへば、御神の御影の心にや有らん、

〔町人袋底拂 上〕日本の神道は、儒佛の法にもあらず、此國自然の風俗にして、唐土上古の儒道に相叶へるにや、諸社の禮式、又は神體の儀を聞に、神體にさま〲あり、或は石を神體とし、或は樹木、或は鏡、又は御幣を神體とし、或弓矢劒刀、或は木像畫像を神體とするおの〱其社の故實舊例にしたがひて同じからず、或は三輪の社は、山を神體として寶殿なしとかや、神明は無體にして、物に應じて不在といふ事なし、社に神代よりの社あり、後代の靈社あり、靈社には影像をも神體とする社あり、

〔古今神學類編 四十六祭祀〕遷宮

兼倶記ニ云、延喜五年十二月二十六日、宣下於山城國愛宕郡如意嶽神祇齋場所、奉安鎭三千一百三十二座之神體〈大神四百九十二神、小神二千六百四十神、〉同月廿八日、奉渡神體於六十餘州、矣天下諸神奉授神體之時、於齋場所、以神代正印被定神宣、延喜以來畫斷也ト云云、此等ノ所說モ其家ノ舊來トナレバ、世久ク口實トスル所也、大社モ悉ク此時神體御正體迄ヲ、ト部家ヨリ沙汰セシ事トモ不見其所々

ノ舊來神傳アリ、神號上古ヨリ神記ニ載、神體御鎭座以來ノ不易也、然レドモ其家說亦以一據有之乎、唯其家ナラズシテ他家ヲ沙汰セン事、無益ノ談而已ニ非ズ、神道ノ巨害不可過之、又諸社上代ヨリ御正體無物社アリ、神名而已ヲ傳テ而モ神祠アル事、宗廟ノ末社ヲ始メ多例也、是モ一例ニシテ、無物勸請ト云ヘル神傳モ聞侍リ、總テ諸州大中小社ニ於テ御正體品級、又ハ其由緒古來ヨリ神典ニ載タルノ外、奇異ノ傳說、間々是ヲ聞見スル類、尤不遑枚擧候、

〔橘家神體勸請卷〕神體勸請之傳

凡神體於封祭和、君民乃差別有氐封祭留也、又存生內仁自己止自己我神靈於封祭止、又人仁封祭ㇾ令留止、又死後仁封祭止也、死後仁封祭仁留二津有、道於知人於封祭止、道於不知人於封祭止差別有也、悉下仁記寸、

極祕神體勸請

御璽箱五握四方檜木於以造、蓋有箱濃內仁神體於納藏、箱於錦於以包美、絲於以結堅女、前表仁札於挿立留、神體波渾沌濃形也、極秘有、口傳曰、寸法五握仁不定、社波大小仁應氐、置乃箱大小宜久造留、

極祕曰、靈山濃清所仁、四面仁榊於立鎭繩於引、一年前、或波一月前、或波一旬前與利清祓於行比、其所乃埴土於取氐、圓形能玉仁造留、白絹於以包奉留、玉波渾沌能形也、惶謹極祕也、口授白絹裹理毛包奉留、

三種勸請之傳

三種於以神體止爲氐封祭波、天子波玉鏡劍三種於一箱仁藏祭也、玉一津、圓形乃鏡一津、劍一津、各白絹於以包奉留、箱波內仁絹於布奉留、玉中央、鏡左、劍右、本心幸魂奇魂於封祭奉留也、臣下波三種勸請無志、玉毛仁氐、鏡毛仁氐、劍毛仁氐一種於箱仁藏封祭留也、二種波添置也、

御柱勸請之傳

御璽箱檜木於以造留、箱內上下仁縱橫能木於入、御柱於立留、御柱波靈山清所能榊本末於斷捨、中

段於長五握仁爲氏、白絹於以包、麻仁氏縛奉留、麻二筋於以、下與利上江一筋波左縛、一筋波右縛、一度仁縛上留、左表也、上下仁氏結奉留、箱波中央仁立奉留、箱内御柱能外於榊枝仁氏飾奉留、箱能外和極秘神體勸請能如志、

口授曰、柱長五握仁不限、或三握、或二握、祭主乃心仁任す、

榊勸請之傳

檜木乃圓器於作利、内仁靈所乃埴土於納女、榊枝乃美敷於中央仁指立氏、木綿於垂神體止爲其外仁幾重毛榊乃枝於立、中央乃榊於覆比藏志、外仁注連於引、此於神籬勸請止云、上仁衣於覆奉留、

同榊勸請之傳

寢箱神體勸請仁同、榊枝二本左右能手仁持、箱能内江幸魂奇魂止思入氏打込、則警蹕氏箱能蓋於覆奉留、箱乃外、上仁同、口授有、

笏勸請之傳札勸請

笏勸請波其人所持乃笏仁、神號於書氏封祭也、

表　神號

●何明神　神靈

裏　年號月日

封移氏、眼形波内於奴留也、笏於白絹於以包、箱仁藏、箱於錦仁氏包、絲於以結奉留、札勸請波、笏無人波板札仁、笏勸請波如久封須留也、

神體封之傳

清殿仁氏神體於封也、先清殿悉神體能具、神寶等於移志、左右能案仁置、覺箱錦掛絲等悉久祓清氏、榊枝仁氏水於濺由洗清女、大麻仁氏祓清女、箱於錦仁氏包、假仁臺於覆、案波上仁置奉利、衣於掛奉留、箱波五

船代

握四方、蓋波上仁有、板波厚於用、木波檜木於用、四方釘於以打付留、蓋波釘於不用、錦於以四方利與包、下於折反志、上波錦於餘氏志蓋於覆氏後、錦於折反氏志包也、加良美波後仁掛留、緋波白糸能組、又波紫、又波緋也、向利與下、次仁南利與西、次仁東、次仁前、次仁隅、次仁右、次仁向、次仁左、次仁南、次仁隅、次次仁掛奉留、總氏縱五筋、横毛五筋、二殿掛奉留、左右惠廻氏志掛結鎮女奉留、口授有、加良美乃勸請以後仁掛奉留也、又始利與神體於箱仁藏封志、加良美奉氏後勸請毛爲也、封事終氏、清殿濃御戸於閉退出、

勸請之傳

御靈移波子刻也、先清殿乃階前仁氏美曾幾志、進氏清殿惠入、御璽箱於戴、渾沌殿乃前階利與進氏、殿内渾沌社能内乃案仁置奉留、從者渾沌殿乃内乃燈仁雲蓋於覆比、殿於出氏外利與前能御戸於閉、後乃御戸於開久、祭主勸請極祕也、勸請終微音仁從者於召、從者進氏後乃御戸於閉、前能御戸於開、進入氏雲蓋於撤、祭主面於覆、手繦於掛、從者又退出、御戸於閉、祭主御加良美於掛、御札於立、御舟仁乘世奉利、衾於覆氏退出、

極祕口訣曰　虚津彥　神光　鳴動　感心

勸請能時、祭所乃神來格給氏、璽箱仁止利給也、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事并用物事

造奉物

正體御船代一具長七尺五寸内五尺七寸内深一尺四寸廣二尺五寸高二尺一寸内弘二尺

相殿坐神御船代二具長各七尺六寸内七尺六分廣一尺五分内一尺五分高一尺九寸内一尺

山造并庭造工二人給明衣料、庸布二端、各一端、官庫物、

〔大神宮儀式解八〕御船代は、美不那志呂とよむべし、御樋代を藏奉る具也、此御船代作らん爲に木本の祭あるは、右に

御船代

見えたり、船は乘べきもの、代はかはりの意也、代の意、所によりてかはれり、上條に委くいへり、さて神世、天上と此國と往來するは、天浮橋あり、又神武紀饒速日命天岩船にのりて、葦原の中國に降給ふ事あり、日本紀竟宴歌、阿麻能伊婆布然玖陀斯志波と詠しこれ也、然れば大御神の御靈鏡、皇孫命と共に天降り給ふとき、御船にのせ奉りて、天降し奉りし其御船の形代をのこして、後の世まで御船代といふ物に納奉れり、御樋代も神世の時、御靈鏡を納奉りてありし御櫃の形代の意也、たゞに御船、御櫃といひて足るを、代といふは、神代の本の御船、御櫃の代りといふ意也、又天より降給はぬ神にも、船代樋代あるは、これをもとゝして、かれにも此稱の及也、たとへば大御神の御旅行の時故に、倭姫命に御杖代の御稱あるを、後々皇女も御杖代といふがごとし、又案に船は形長して、物を納る器の稱也、略○中代は實の意と見るべく思へり、しかるを火災を除ん爲に緣て名を負しめ、舟代と稱ふといひ、その餘かにかくにいふは、皆古をしらぬ也、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉造時行事幷用物事

造奉物

正體御船代壹具長六尺、廣二尺四寸、

御座壹基高一尺、徑七寸、

相殿神御船代貳具長四尺、廣一尺五寸、

高宮御船代壹具長四尺、廣一尺五寸、

庭造工二人給明衣料、庸布二段、各一段、官庫物、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮造奉時行事幷用物事

造奉物

正體御船代一具、略○中御樋代一具、深一尺四寸、內八寸三分、徑二尺、內一尺六寸三分、

一新宮遷奉御裝束用物事

樋代御裝束六種

小文紫御被一條、長五尺、弘二幅、納綿八純、小文緋御被一條、長五尺、弘二幅、納綿八純、小文緋一匹、折累數・料、表覆帛被二條、長各一丈、弘四幅、各納綿十純、五窠錦御被一條、長一丈、廣五幅、納綿廿純緋裏、

〔大神宮儀式解八〕御樋代は美比之呂とよむべし、御正體をひめ奉る具也、昔はいかなりし歟、いつの世より樋代を造奉るは、頭工、頭工代、小工、御材とる山に入、その木本を祭後奉伐、此を御祝木と稱て、宮中に引入始とす、委右にいふがごとし、樋は借字、櫃の義也、其比都もとは比にて、都は助語也、すべて物をかくすを比米といふ、比米も秘也、秘をひめとよむは、字音ならず、訓也、姫を比米とよむも、秘女にて婦人深窻の中にある貌をいふ、文安假殿遷宮記、一神主、御櫃代蓋を開奉仕と註せり、かゝれば櫃代樋代同意しるべし、代は加波利の意也、神世天上より大御神の御靈天降し奉りし時、納ありし櫃の代といふ意也、その事右船代下にいへり、樋は水に縁あり、火災を防ぎてかく名付しなど、かにかくにいふはよからず、近世樋代傳とて、唐ざまなる理をいふは論にもたらず、

〔延喜式四伊勢大神宮〕造備雜物

大神宮船代三具、〇中略樋代一具、正宮料高二尺一寸、深一尺四寸、內徑一尺六寸三分、外徑二尺、度會宮船代四具、〇中略樋代一具、正宮料、徑高各一尺五寸、

〔釋日本紀七述義〕八咫鏡　先師申云、天德回祿之時、件神鏡內侍所在灰燼之中不燒損、其鏡徑八寸許、頭雖有小瑕、專無損之由、御記文炳焉、然則彼八咫鏡徑八寸歟、重窺大神宮式、樋代一具、高二尺一寸、深一尺四寸、內徑一尺六寸三分、外徑二尺云云、若就講書之說者、圓數六尺四寸、其徑二尺一寸三分餘、雖奉納彼御樋代內、可爲此儀者、八咫之義已以相違、旁非無疑殆、廻今案、咫字者、中婦人手長八寸、謂之咫云云、

璽筥

○按ズルニ、船代及樋代ノ事ハ、伊勢大神宮ノ篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔皇大神宮儀式帳〕一新宮遷奉御裝束用物事

相殿坐神御裝束囊二口長八寸

坐東神御形納奉生絁囊一口、長七尺二寸、廣二幅、坐西神御形納奉生絁囊一口、長四尺二寸、廣二幅、

〔大神宮儀式解十〕東は左方にて、天手力雄神を祭れり、此神の御形をつゝみ奉る囊也、御形弓に坐ば、囊の長七尺二寸あるべし、此囊は大神宮式、左神料絹囊二口、長七尺二寸、廣二幅、長暦官符、左坐神料生絁囊一口、長七尺二寸、廣二幅、寬正官符、元祿調進式目も皆同じ、今もたがはず、○中略西は右方にて、萬幡豐秋津姬神を祭れり、此神の御形をつゝみ奉る囊也、御形劒に坐せば、囊の長さ東方坐神の御料より短し、

〔延喜式四伊勢大神宮〕相殿神二座裝束

左神料絹囊一口、長七尺二寸、廣二幅、右神料絹囊一口、長四尺二寸、廣二幅、

〔神道名目類聚抄三祭器〕御璽箱ミシルシノハコ　御靈體ヲ封ジ奉ル箱ナリ

〔古今神學類編四十六祭器〕璽筥

按ズルニ、璽筥ト云物ハ、卜部家ノ流傳ニシテ、他家ニハ不聞之、釋日本紀ニ、八坂瓊曲玉ノ事ヲ註シテ、當時璽筥內物ハ皆是也ト侍リ、或人云、類推シテ案ルニ、璽筥ヲ以爲神體封之密之ノ事、異朝封禪璽ノ事ニ彷彿ス、封禪書、及白虎通ノ趣ヲ見ルニ、金泥銀繩、或云石泥金繩、封之以印璽ト、又貞觀政要註ニ、漢制封禪用玉牒玉撿、以水銀和金爲泥ト、此等ノ說ヲ以テ併按ルニ、其制庶幾乎ト、余解シテ云、何爲其同之乎、釋日本紀既ニ以曲玉註スル、則此箱神靈トシテ封ズル事、古來神器古物以御靈形トヤルニ不異、何ゾ異邦ノ事實ヲ取テ證スルニ及バンヤ、其筥ノ封認、或ハ諸社ニヨリテ大同小異モアルベキ事ナレバ、曲玉ノミトモ推可窮知、且又一家ノ秘事トナ

レバ、他家ノ人何ゾ妄リニ許之乎、可致思、

〔左經記〕長元四年十月十七日辛卯、今朝頭辨於殿上被示云、出雲國杵築社無風顚倒之由奉國解、守俊孝朝臣語云、兼兩三度有光、次震動顚倒、材木一向自中倒臥、唯乾角柱一本不倒、此社中以七寶作寶殿、安置七寶宮於寶殿中、是稱御正體云、而其宮露居顚倒材木上、仍禰宜等爲奉禮、件禰宜等度々忽沐浴潔齋、深致愼奉取、奉移假殿了云々、

〔百練抄六崇德〕大治二年十月二日、諸卿定申官外記勘申八幡宮寶御宮破損可被修補哉否、以件寶宮爲御正體云々、

〔中右記〕大治二年十月十四日庚午、兩宰相參入、則持來草、披見之處、以八幡寶御宮爲御正體之由書入也、予難云、八幡兩度年解不注申御正體由、而被載宣命畢ハ、後代以此宮爲御正體歟、此事不可然也、可止御正體文者、內記持歸、　四年九月七日、依八幡奉幣、辰時參內、著端座、令敷膝突、〇中略召大內記宗光、仰宣命趣、昨日依頭中將宣下、內々仰畢、是八幡兩寶御宮破損之由所言上也、乍驚令官寮卜之處、公家御怪、天下病事、神事不信不淨之由所卜申也、神事不信仰寺家、令注申寶御宮了、去年依中ノ宮宮例作新宮、明年放生會時可奉收之、東宮御宮破損了由雖不言上、年序久積、膠漆之口有舊損恐、仍同作新宮、同可奉收之由所載也、　五年八月六日、今日有奉幣八幡一所、是寶御宮二合、日者作於今日被調進也、〇中略寶御宮入于唐櫃、覆兩面、置左衛門陣外、相具幣、

〔親長卿記〕文明十九年十月廿四日、及未剋兼俱卿來對面、予仰云、賀茂下上御神體事、先年社頭擾亂之時炎上歟、雖然於社司等者、御現在之由申之、雖然被加御糺明、紛失爲治定者可有勸請、大概用脚功程可爲何樣哉、可談合之由仰之旨、答返云、已前就外宮御神體被仰下之間、申入巨細之旨之處、一向兼俱所行之故、無御神體之由、有其沙汰之由、祭主卿腹立、是又社務禰宜等定可腹立者、申出中々不可有詮歟、予云、可相替其儀、社家之儀可申試之由仰之、然者可申入、就中諸社之儀、自神代事巨細

命之所詮三千七百餘座、神體各有擬寫、有寸法、其寫可鑄之失墜二千匹、勸請之儀、彼是一社別五十匹分、最省略之儀云々、

古事類苑

神祇部五

神異

古事類苑

神祇部五

神異

神祇靈異ノ事跡タル、古來載籍上頗ル多クシテ、悉ク擧グルニ勝ヘズ、且ツ本書中ニモ各篇ニ散見シタレバ、今ハ僅ニ顯著ナルモノ數件ヲ取レリ、而シテ神異ノ神託ニ關聯セルモノハ、神託ノ篇ニ收メテ此ニ取ラズ、

〔出雲風土記意宇郡〕所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、八雲立出雲國者、狹布之稚國在哉、初國小所作、故將作縫詔而、栲衾志羅紀乃三埼矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黑葛聞々耶々〇聞聞耶耶、恐閉閉那那誤、下文亦然、爾河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米〇米、恐爾誤支豆支乃御埼也、此而堅立加志者、石見國與出雲國之堺有、名佐比賣山是也、亦持引綱者、薗之長濱是也、亦北門佐伎之國矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黑葛聞々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自多久乃打絶而、狹田之國是也、亦北門良〇良、恐良誤波乃國矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黑葛聞々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自手縫〇縫、恐結誤之打絶而、闇見之國是也、亦高志之都々乃三埼矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黑葛

閉々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、三穗之埼也、持引綱者、夜見嶋是也、因堅立加志者、有伯耆國大神岳是也、今者國引訖詔而、意宇杜爾御杖衝立而、意惠詔、故云意宇、

〔日本書紀二十九天武〕十三年十月壬辰、逮于人定大地震、○中略是夕有鳴聲、如鼓聞于東方、有人曰、伊豆嶋西北二面、自然增益三百餘丈、更爲一嶋、則如鼓音者、神造是嶋響也、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年十二月甲申、去神護中大隅國海中有神造嶋、其名曰大穴持神、至是爲官社、

〔類聚國史十神祇〕弘仁五年二月乙酉、大隅國曾於郡造嶋神預幣帛例、

〔本朝文粹十二記〕富士山記　都良香

山東脚下有小山、土俗謂之新山、本平地也、延暦廿一年三月、雲霧晦冥、十日而後成山、蓋神造也、

〔釋日本紀十五述義〕日本後紀曰、淳和天皇天長九年五月庚戌、令卜筮八九、祟於內裏、伊豆國神爲祟、奏○一本作癸丑、伊豆國言上、三嶋神伊古奈比咩神二前預名神、此神塞深谷推高巖、平造之地二十○十一本作千町許、作神宮二院池三處、神異之事不可勝計、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年九月乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作嶋、本名上津嶋、此嶋坐阿波神、是三嶋大社本后也、又坐物忌奈乃命、卽前社御子神也、新作宮四院、石室二間、屋二間、闔室十二基、上津嶋本體草木繁茂、東南北方巖峻峭峙、人船不到、纔西面有泊宿之濱、今成燒崩、與海共成陸地、幷沙濱二千○千一本作十許町、其嶋東北角有新造神院、其中有壟、高五百許丈、基周八百許丈、其形如伏鉢、東方片岸有階四重、靑黃赤白色沙次第敷之、其上有一閣室、高四許丈、次南海邊有二石室、各長十許丈、廣四許丈、高三許丈、其裏五色稜石屛風立之、巖○巖下一本有壁字伐波、山川飛雲、其形微妙難名、其前懸夾纈軟障、卽有美麗濱、以五色沙成岻、次南傍有一磯、如立屛風、其色三分之二悉金色矣、眩曜之狀不可敢記、亦東南角有新造院、周垣二重、以壘築固、各高二許丈、廣一許丈、南面有二門、其中央有一壠、周六百許丈、高五

百許丈、其南片岸有十二闇室、八基南面、四基西面、四基周各廿許丈、高十二許丈、其上階東有屋一基、以黒甃玉瓦形葺造之、長十許丈、廣四許丈、高六許丈、其壁以白石立周、則南面有一戸、其西方有一屋、以黒瓦葺作之、其壁塗赤土、東面有一戸、院裏礫砂皆悉金色、又西北角有新作院、周垣未究作、其中有二疊、基周各八百許丈、高六百許丈、其體如盆伏、南片岸有階二重、以白沙敷之、其頂平麗也、從北角至于未申角、長十二許里、廣五許里、皆悉成沙濱、從戌亥角至于丑寅角、長八許里、廣五許里、同成沙濱、此二院元是大海、又山岑有一院一門、其頂有如人坐形石、高十許丈、右手把劍、左手持桙、其後有侍者、跪瞻貴主、其邊嵯峨不可通達、自餘雜物燎燄未止、不能具注、去承和五年七月五日夜、出火、上津嶋左右海中、燒炎如野火、十二童子相接取炬、下海附火、諸童子履潮如地、入地如水、震上大石、以火燒摧、炎煬達天、其狀朦朧、所々燄飛、其間經旬、雨灰滿部、仍召集諸祝刀禰等、卜求其祟、云阿波神者、三嶋大社本后、五子相生、而後后授賜冠位、我本后未預其色、因茲我殊示怪異、將預冠位、若禰宜祝等、不申此祟者、出麁火將亡禰宜等、國郡司不勞者、將亡國郡司、若成我所欲者、天下國郡平安、令產業豐登、今年七月十二日、眇望彼雲嶋、烟覆四面、都不見狀、漸比戾近、雲霧霽朗、神作院岳等之類、露見其貌、斯乃神明之所感也、　十月丙辰、奉授無位阿波神、物忌奈乃命、並從五位下、以伊豆國造嶋靈驗也、

〔扶桑略記二十二宇多〕仁和三年十一月二日、伊豆國獻新生嶋圖一張、見其圖中、神明放火、以潮所燒、則如銀岳、其頂有綠雲之氣、細事在圖中、不更記之、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十二月九日丙辰、勅、甲斐國八代郡立淺間明神祠、列於官社、即置祝禰宜、隨時致祭、先是彼國司言、往年八代郡暴風大雨、雷電地震、雲霧杳冥、難辨山野、駿河國富士大山西峯忽有熾火、燒碎巖谷、○中略郡家以南作建神宮、且令鎭謝、雖然異火之變于今未止、遣使者撿察、埋剗海千許町、仰而見之、正中最頂飾造社宮、垣有四隅、以丹青石立、其四面石高一丈八尺許、廣三尺、厚一尺餘、立石之門相去一尺、中有一重高閣、以石構營、彩色美麗、不可勝言、望請齋祭兼預官社、從之、

神婚

〔釋日本紀 五述義〕山城國風土記曰、賀茂建角身命、娶丹波國神野伊可古夜日女、生子、名玉依日子、次曰玉依日賣、玉依日賣於石川瀨見小川之遊爲時、丹塗矢自川上流下、乃取插置床邊、遂感孕生男子、至成人時、外祖父建角身命造八尋屋、竪八戶扉、釀八腹酒、而神集々而七日七夜樂遊、然與子語言、汝父將思人、令飮此酒、卽擧酒坏、向天爲祭、分穿屋甍而升於天、乃因取外祖父之名、號可茂別雷命、今所謂丹塗矢者、乙訓郡社坐火雷命坐、○又見本朝月令

〔古事記 中神武〕求爲大后之美人時、大久米命曰、此間有媛女、是謂神御子、其所以謂神御子者、三嶋湟咋之女、名勢夜陀多良比賣、其容姿麗美、故美和之大物主神見感、而其美人爲大便之時、化丹塗矢、自其爲大便之溝流下、突其美人之富登、此二字以音、下效此、爾其美人驚、而立走伊須須岐伎、此五字以音、乃將來其矢、置於床邊、忽成麗壯夫、卽娶其美人、生子、名謂富登多多良伊須須岐比賣命、亦名謂比賣多多良伊須氣余理比賣、是者惡其富登云事、後改名者也、故是以謂神御子也、

〔古事記 中崇神〕此謂意富多多泥古人、所以知神子者、上所云活玉依毘賣、其容姿端正、於是有神壯夫、其形姿威儀、於時無比、夜半之時、儵忽到來、故相感共婚、供住之間、未經幾時、其美人妊身、爾父母怪其妊身之事、問其女曰、汝者自妊、無夫何由妊身乎、答曰、有麗美壯夫、不知其姓名、每夕到來、供住之間、自然懷妊、是以其父母、欲知其人、誨其女曰、以赤土散床前、以閇蘇此二字以音紡麻貫針、刺其衣襴、故如敎而旦時見者、所著針麻者、自戶之鉤穴控通而出、唯遺麻者三勾耳、爾卽知自鉤穴出之狀、而從糸尋行者、至美和山、而留神社、故知其神子、

〔常陸風土記 那賀郡〕茨城里、自此以北高丘、名曰晡時臥之山、古老曰、有兄妹二人、兄名努賀毗古、妹名努賀毗咩、時妹在室、有人不知姓名、常就求婚、夜來晝去、遂成夫婦、一夕懷妊、至可產月、終生小蛇、明若無言、闇與母語、於是母伯驚奇、心挾神子、卽盛淨杯、設壇安置、一夜之間、已滿杯中、更易盆而置之、亦滿盆內、如此三四、不敢用器、母告子曰、量汝器宇、自知神子、我屬之勢、不可養長、宜從父所在、不合有此者、

時子哀泣、拭面答曰、謹承母命、無敢所辭、然一身獨去、無人共去、望請矜副一小子、母曰、我家所有、母與伯父而已、是亦汝明所知、當無人可相從、愛子含恨、而事不吐之、臨決別時、不勝怒怨、欲震殺伯父、而昇天、時母驚動、取瓮投之、觸神子不得昇、因留此峯、所盛瓮甕、今存片岡之村、其子孫立社致祭、相續不絕、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年七月己亥、奉授出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下、餘如故、兼宛神封二戶、詔曰、天皇我詔旨爾坐、大物忌大神爾申賜波久、頃皇朝爾綠有物怪天、卜詢爾、大神爲祟賜倍利、加以、遣唐使第二舶人等廻來申久、去年八月爾南賊境爾漂落氏、相戰時、彼衆我寡氏、力甚不敵奈利、儻而克敵留波似有神助止申、今依此事氏臆量爾、去年出羽國言上太留大神乃於雲裏氏、十日間作戰聲後爾兵石零利止申世之利月日、與彼南海戰間正是符契世利、大神乃威稜令遠被太留事乎、且奉驚異、且奉歡喜、故以從四位爵乎奉授、兩戶之封奉宛良乎久申賜波止久申、

〔陸奧話記〕康平五年春、依賴義朝臣任終、更拜高階朝臣經重、爲陸奧守、揚鞭進發入境、著任之後無何歸洛、是國內人民皆隨前司指撝故也、朝議紛紜之間、賴義朝臣頻求兵於光賴幷舍弟武則等、於是武則以同年秋七月、率子弟萬餘人兵、越來於陸奧國、將軍大喜、率三千餘人、以七月二十六日發國、八月九日、到栗原郡營崗、○中略於是武則遙拜皇城、誓天地言、臣既發子弟應將軍命、志在立節、不顧殺身、若不苟死、必不空生、八幡三所、照臣中丹、若惜身命、不致死力者、必中神鏑先死矣、合軍攘臂、一時激怒、今日有鳩翔軍上、將軍以下悉拜之、○中略十七日未時、將軍命士卒曰、各入村落壞運屋舍、塡之城埤、亦每人苅萱草積之河岸、於是壞運苅積、須臾如山、將軍下馬遙拜皇城誓言、昔漢德未衰、飛泉忽應校尉之節、今天威惟新、大風可助老臣之忠、伏乞八幡三所出風吹火燒彼柵、則自把火稱神火投之、是時有鳩翔軍陣上、將軍再拜、暴風忽起、煙焰如飛、先是官軍所射之矢、立柵面樓頭、猶如蓑毛、飛焰隨風著矢羽、樓櫓屋舍一時火起、城中男女數千人、同音悲泣、賊徒潰亂、或投身於碧潭、或刎首於白刃、○下略

〔玉海〕元曆二年○文治元年二月廿日甲戌、範季朝臣示送云、自住吉社進奏狀云、去十六日、自寶殿神鏑指

西衆去畢、（神官聞之云云）實希有事也、昔彼征討將門之時、住吉大明神合力之由有證據等、今又如此、神明未
弃國歟、但無隱世猶以難測歟、爲之如何、

〔吾妻鏡四〕元暦二年（文治元年）○二月十九日癸酉、住吉神主津守長盛參洛經奏聞、去十六日當社行恒例
御神樂之間、及子剋鳴鏑出自第三神殿、指西方行云云、此間奉仕追討御祈、靈驗揭焉者歟、○（又見源平盛衰記）

〔太平記三十九〕自大元攻日本事
倩三餘ノ暇ニ寄テ、千古ノ記スル處ヲ看ルニ、異國ヨリ吾朝ヲ攻シ事、開闢以來已ニ七箇度ニ及
ベリ、殊更文永弘安兩度ノ戰ハ、大元國ノ老皇帝、支那四百州ヲ討取テ、勢ヒ天地ヲ凌グ時ナリシ
カバ、小國ノ力ニテ難退治カリシカドモ、輙ク大元ノ兵ヲ亡シテ、吾國無爲ナリシ事ハ、只是尊神
靈神ノ冥助ニ依シ者也、○中略去程ニ文永二年八月十三日、大元七萬餘艘ノ兵船、同時ニ博多ノ津
ニ押寄タリ、○中略懸リシ後ハ重テ可戰樣モ無リシカバ、筑紫九國ノ者共、一人モ不殘四國中國ヘ
ゾ落タリケル、日本一州ノ貴賤上下、如何ガセントソ周章騷グ事不斜、諸社ノ行幸御幸、諸寺ノ大法
秘法、宸襟ヲ傾テ肝膽ヲ碎カル、都テ六十餘州大小ノ神祇、靈驗ノ佛閣ニ勅使ヲ被下、奉幣ヲ不被
捧云所ナシ、如此御祈總巳ニ七日滿ジケル日、諏訪ノ湖ノ上ヨリ、五色ノ雲西ニ聳キ、大蛇ノ形ニ
見エタリ、八幡御寶殿ノ扉啓ケテ、馬ノ馳チル音轡ノ鳴音、虛空ニ充滿タリ、日吉ノ社二十一社ノ
錦帳ノ鏡動キ、神寶刀トガレテ、御沓皆西ニ向ヘリ、住吉四所ノ神馬、鞍ノ下ニ汗流レ、小守勝手ノ
鐵ノ楯己ト立テ、敵ノ方ニツキ雙ベタリ、凡上中下二十二社ノ震動奇瑞ハ不及申、神名帳ニ載ス
ル所ノ三千七百五十餘社、○（此社數神名帳ト合ハズ）乃至山家村里ノ小社、櫟社、道祖ノ小神迄モ、御戸ノ開ヌ
ハ無リケリ、此外春日野ノ神鹿、熊野山ノ靈烏、氣比宮ノ白鷺、稻荷山ノ名婦、比叡山ノ猿、社々ノ仕
者、悉虛空ヲ西ヘ飛去ルト、人毎ノ夢ニ見エタリケレバ、サリ共此神々ノ助ニテ、異賊ヲ退ケ給ハ
ヌ事ハアラジト、思フ計ヲ憑ニテ、幣帛ヲ捧ヌ人モナシ、活ル處ニ弘安四年七月七日、皇大神宮ノ

禰宜荒木田尚良、豐受大神宮ノ禰宜度會貞尚等十二人、起請ノ連署ヲ捧テ、上奏シケルハ、二宮ノ末社、風ノ社ノ寶殿ノ鳴動スル事良久シ、六日ノ曉天ニ及テ、神殿ヨリ赤雲一村立出テ、天地ヲ耀シ、山川ヲ照ス、其光ノ中ヨリ夜叉羅刹ノ如クナル青色ノ鬼神顯レ出テ、土嚢ノ結目ヲトク、大風其口ヨリ出テ、沙漠ヲ揚ゲ大木ヲ吹拔ク、測知ヌ九州ノ異狄等、此日卽可滅ト云事ヲ、事若誠有テ奇瑞變ニ應ゼバ、年來申請ル處ノ宮號、以歡威儀可被宣下トゾ奏シ申ケル去程ニ大元ノ萬將軍、七萬餘艘ノモヤヒヲトキ、八月十七日辰刻ニ、門司赤間ガ關ヲ經テ、長門周防ヘ押渡ル、兵已ニ渡中ヲサシヽ時、サシモ風止ミ雲閑ナリツル天氣俄ニ替テ、黑雲一村艮ノ方ヨリ立覆フトゾ見エシ、風烈ク吹テ逆浪天ニ漲リ、雷鳴霆テ電光地ニ激烈ス、大山モ忽ニ崩レ、高天モ地ニ落ルカトオビタヾシ、異賊七萬餘艘ノ兵船ドモ、或ハ荒磯ノ岩ニ當テ微塵ニ打碎カレ、或ハ逆卷浪ニ打返サレテ、一人モ不殘失ニケリ、〇中略抑大元三百萬騎ノ蒙古共、一時ニ亡シ事、全吾國ノ武勇ニ非ズ、只三千七百五十餘社ノ、大小神祇、宗廟ノ冥助ニ依ルニ非ズヤ、

〔一代要記後宇多〕文永十一年十月五日、異國群勢襲來之由、自宰府申之、〇中略同廿日始合戰、宰府軍兵皆敗北了、爰同日亥刻許、兵船二艘出來、晴天合戰、非凡慮之所及、則知是神明之化儀也、卽異國軍兵破退散、彼兵船一艘留之、所乘之人數六十人許云云、

〔八幡愚童訓下〕今度〇文永十一年十一月既武力盡終テ、若干之大勢逃失ヌ、今カウトミエシ時、夜半ニ白張裝束人卅人許、宮崎宮ヨリ出テ、箭サキヲ調射ケルガ、其コトガラオビタヾシク、身毛竪テ怖ク、家家燃燔海面移レルヲ、波中ヨリ猛火燃出ルトミナシテ、蒙古肝モ心モ迷総テ、我先ト逃レバ、被生捕日本人カヘレルト、蒙古被生捕タルト一同申ハ、更不可有謬、從是コソ蒙古寄時、海バタニ火ヲ燒コト出キニケル、日本軍兵一騎ナリトモヒカエタリシカバ、大菩薩御戰トイハレズシテ、我高名ニテ追歸シタリトモ申ナマシ、一人モナク落失テ後、多異賊オヂ恐テ迯シカバ、神軍威勢嚴重

不思議、彌顯玉ケリ、

〔一代要記後宇多〕弘安四年六月一日、中刻異國兵船五百艘計、襲來對馬之濱之由、自宰府飛脚到來、閏七月一日、官廳行幸、依日蝕夜陰之儀也、自官廳行幸于神祇官、此儀希代之例也、甚雨大風、自上古第三度云々、九日、宰府飛脚到來云、去朔日大風頓吹、而異國兵船悉以漂沒了、是併神明之靈威、非人力之所及云々、

〔八幡愚童訓下〕弘安四年夏比、蒙古大唐高麗以下國々兵共、駈具三千餘艘、大船數千萬乘列テ來ケル、○中略サルマヽニハ、米穀類西國ヨリハ不上、京都ノ商人ハ賣買不轍、コハイカニ蒙古亂入セズトモ、此飢渴ニハ可死、縱命可盡トモ飢動ニシテ失ナン事悲サヨ、不遂九品往生之望、逢五道輪回苦ヲ何トセン、我身一次事雖小ノ忽病無シテ絕入、無暫ナンド無限、心ウヤゲニ此亂今生後世障哉、擧頭訴天天色蒼々タリト被詠、孔子心理也、神明佛陀御助ニ非ンヨリ外ハ、人力武術ハ盡ハテヌ、無爲方トゾ歎ケル、去文永モ味方既落ハテヽ、萬死一生ニ被責成タリシニ、大菩薩爭神軍給ナ降伏遠也キトテ、只常社○石清水ニテ有御祈請、○中略廿六日○七月初夜時ヨリ、南都北京持戒僧七百餘人、常社寶前ニテ尊勝ダラ尼アリ、○中略南都西大寺思圓上人、舞殿ニシテ尊勝法ヲ修シ給フ、オモテニハ四海疊浪、眉垂八字翁、六大無旱、秋月胸中朗三聚淨戒、夜珠袂上顯、見ルニ貴サ備シテソヾロニ敬被成ケル、閏七月一日、登高座致啓白、人エ物云ヤウニクドキ申ナレシハ、異國襲來シ、貴賤上下道俗男女、一味同心歎、七道諸國煩也、悲哉二千餘社權者實社亡、神國十二部經大乘小乘失法門、縱皇運末ニナリ、政道無誠、神祇非禮ヲトガメ、佛天懸慮妄玉フトモ、他國ヨリハ我國他ノ人ヨリハ吾人、爭カ捨サセ給フベキ、公家勢衰テ、人民無力時ト奢給シハ今當此時、早施威靈、却怨敵可御坐、○中略二時計、徹骨髓摧心肝、挼ニ挼テゾ被祈、懸河辨說ウキアガリ、心地法水澄上、大慈大悲泪落シマヽニ、香衣香袈裟シボル程ニゾ成玉フ、滿座首ヲウナ垂テ、隨喜ノ心アマリ、兩神モ定剛召此

理趣捨不給覺シニ、殿中ハツタト一聲鳴タリ、サレバコソ大菩薩御納受アルニコソト、彌信仰深キ、○中略去程十日餘比、西國早馬著テ申、去七月晦日夜半ヨリ、乾風オビタヾシク吹テ、閏七月一日賊船悉漂蕩シテ海ニ沈ヌ、大將軍船、風已前靑龍海ヨリ頸ヲ指出シ、硫黃香滿虛空、異類異形者共遮眼恐テ迯去、所殘船共ハ、破テ上磯オキニ漂テ、海面算ヲ散ニ不異、○中略唐人共中ニハ少々生取テアル由ヲ披露セシ時ニコソ、京都關東モ靜テ、上下ノ人々色直ケレ、

〔神皇正統記〕後宇多辛巳の年、弘安四年也蒙古の軍多くの船をそろへて、わが國をおかす、筑紫にて大に合戰あり、神明威を顯し形を現じて防がれけり、大風俄に起りて、數十萬艘の賊船、皆漂倒破滅しぬ、末世とはいへども、神明の威德不可思議なり、誓約のかはらざる事、これにても推量るべし、

〔増鏡十老の波〕弘安も四年になりぬ、○中略そのころ蒙古おこるとかやいひて、世のなかさわぎたちぬ、色々さまざまにおそろしう聞ゆれば、本院○後深草新院○龜山はあづまへ御下あるべし、内○後宇多春宮○伏見は京にわたらせ給ひて、東の武士どものぼりてさぶらふべしなどさたありて、山々寺々御いのり數しらず、伊勢の勅使に經任大納言まゐる、新院も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老めされて、眞讀の大般若供養せらる、○中略七月一日おびたゞしき大風吹て、異國の舟六萬艘、兵のりて筑紫へよりたる、みな吹破られぬれば、あるは水にしづみ、おのづからのこれるも、なくなく本國へ歸りにけり、石淸水のやしろにて、大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴たる空に黑雲一村、にはかに見えてたな引、かの雲の中より、しろき羽にてはぎたるかぶらやの大なる、西をさして飛出て、なるおとおびたゞしかりければ、かしこには大風のふきくると、兵のみゝには聞えて、浪あらくたち、海のうへあさましくなりて、みなしづみにけるとぞ、なほ吾國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ、

〔看聞日記〕應永二十六年六月廿五日、抑大唐蜂起事有沙汰、出雲大社震動流血云云、又西宮荒戎宮

震動、又軍兵數十騎廣田社ヨリ出テ東方ヘ行、其中ニ女騎之武者一人、如大將云云、神人奉見之、其後、爲狂氣云云、自社家令注進、伯二位〇資忠王馳下、尋實否云云、異國襲來瑞想勿論歟、又廿四日夜八幡鳥居風不吹ニ顛倒了、若宮御前鳥居也、さゝやきの橋打碎云々、室町殿〇足利義持御參籠時分也、殊有御驚云云、　廿九日、北野御靈西方ヲ指テ飛云云、御殿御戸開云云、諸社怪異驚入者也、唐人襲來、先陣舟一兩艘已有合戰云云、大内若黨兩人爲大將、海上ニ行向退治、其以前神軍有奇瑞之由注進云云、　八月十三日、抑異國襲來事、去六日探題注進狀、不慮披見記之、

畏言上

抑六月廿日、蒙古高麗一同に引合て、軍勢五百餘艘對馬嶋に押寄、彼嶋を打取之間、我等太宰小貳の勢計にて、時日をうつさす、浦々泊々の舟著にて、日夜之間合戰を致之間、敵御方死する物其數をしらす、既難儀之間、九ヶ國の軍勢を相催、同廿六日、各手をくだき安否の合戰を致之間、異國の軍兵三千七百餘人打取斬棄、其外は數をしらす、總じて敵の舟海上に浮物一千三百餘艘也、海賊に仰付て夜晝を限らす所々の合戰、或は舟に乘損じて海上に沈物甚多し、さる間合戰最中、奇特神變不思議の事一度ならす、敵の舟において、雨風震動す、雷とゞろき霰降、大寒手こゞえて、打物の束もにぎられす、氷死する物其限を不知、就中に奇瑞には、合戰難儀の時節、いづくよりとはしらす、大船四艘、錦の旗三流差たるが、大將とおぼしきは女人也、其力量べからす、蒙古が舟に乘移て、軍兵三百餘人手取にして、海中に投入了〇中略その外敵の舟ども七月二日悉退散仕ぬ、如此急速に落居、併神明の威力に仍也、上樣の御運も殊目出畏入候、委細省略して注進狀如件、

七月十五日　　探題持範判

重、末代神明威力、吾國擁護顯然也、此注進狀正說也、

〔日本書紀 七景行〕十八年三月、天皇將向京、　四月壬申、自海路泊於葦北小嶋、而進食時、召山部阿弭古之祖小左、令進冷水、適是時嶋中無水、不知所爲、則仰之祈于天神地祇、忽寒泉從崖傍涌出、乃酌以獻焉、故號其嶋曰水嶋也、其泉猶今在水嶋崖也、

〔日本書紀 九神功〕九年〇仲哀四月甲辰、皇后則識神教有驗、更祭祀神祇、躬欲西征、爰定神田而佃之時、引儺河水、欲潤神田、掘溝及于迹驚岡、大磐塞之不得穿溝、皇后召武內宿禰、捧劒鏡令禱祈神祇、而求通溝、則當時雷電霹靂、蹴裂其磐、令通水、故時人號其溝曰裂田溝、

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣淸麻呂薨、本姓磐梨別公、右京人也、〇中略淸麻呂脚痿不能起立、爲拜八幡神輿病郎路、及至豐前國宇佐郡楉田村、有野猪三百許、挾路而列、徐步前駈十許里、走入山中、見人共異之、拜社之日、始得起步、〇中略始駕輿而往、後馳馬而還、累路見人莫不歎異、

〔神皇正統記 稱德〕道鏡ハ法王の位を授けられたりしを、猶あかずして皇位につかんと云ふ志有りけり、女帝〇稱德さすがに思ひ煩給ひけるにや、和氣の淸麻呂と云人を勅使に差して、宇佐の八幡宮に申されける、大菩薩さまぐ〵託宣ありて、更に許されず、淸麻呂歸參して有のまヽに奏聞す、道鏡いかりをなして、淸麻呂がよぼろ筋を斷ちて、土佐〇土佐恐大隅誤の國に流し遣す、淸麻呂愁へ悲みて、大菩薩を恨みかこち申ければ、小蛇出來てその疵をいやしけり、

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年五月丙辰、前遣渤海使外從五位下內藏宿禰賀茂麻呂等言、歸鄕之日、海中夜暗、東西掣曳、不識所著、于時遠有火光、尋逐其光、忽到嶋濱、訪之是隱岐國智夫郡、其處無有人居、或云、比奈麻治比賣神、常有靈驗、商賈之輩、漂宕海中、必揚火光、賴之得全者、不可勝數、神之祐助、良可喜報、伏望奉預幣例、許之、

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年十二月庚子、太宰府言、管豐前國田河郡香春岑神、辛國息長大姬大目命、

忍骨命、豐比咩命、總是三社、元來是石山、而土木總無、至延暦年中、遣唐請益僧最澄、躬到此山祈云、願緣神力、平得渡海、卽於山下、爲神造寺讀經、爾來草木蓊鬱、神驗如在、每有水旱疾疫之災、郡司百姓就之祈禱、必蒙感應、年登人壽、異於他郡、望預官社、以表崇祠、許之、

〔續日本後紀 十八 仁明〕承和十五年○嘉祥元年七月甲申、因幡國法美郡無位宇倍神、奉授從五位下、卽預官社、以國府西有失火、隨風飛至、府舍將燒、國司祈請、登時風轉火滅、靈驗明白也、

〔三代實錄 二十六 淸和〕貞觀十六年八月十三日己巳、遣從五位下守玄蕃頭弘道王於伊勢大神宮、奉幣絡去火蟲、從此以後蝗虫或化蝶飛去、或爲小蜂所螫殺、一時消盡矣、

〔權記〕寬弘二年十二月十四日戊子、巳剋自壹志郡○伊勢國家出、經飯高郡多氣郡、未剋詣於多氣河祓、申剋著離宮、比至飯高郡、忽有陰雲、雨脚忽降、心中祈申大神宮、廼霽有神恩也、一思王命、任身於神明云云、況今度用信□至感顯者也、此夕神宮方有光影異也、

〔春日權現驗記 二〕二條關白殿○藤原敎通出仕の時、劍をわすれさせ給たりけるに、女房かへり入て、とりてまゐらせんとしければ、關白殿、もとのごとくおはしまして、劍を御ひざのまたにおきて、はゑみ給はず、女房おぞろきあやしみて歸まゐれば、御車のうちより、なぞ劍をもちてまゐらぬぞとおはせられければ、おさましと思ひてかへり入ば、又たゞさきのごとし、これは春日の大明神のかげのごとくしたがひまもり給て、かやうに現じ給とぞ時の人申ける、

〔吉野拾遺 上〕おなじみかど○後醍醐花山院をひそかに出御ならせたまひて、やまとのかたへおもむかせたまひけるに、いとくらき夜なりければ、御ともにさぶらひける人々も、いかにせむとわびあへるをきかせたまひて、こゝはいづくのほどにやとたづねさせたまひければ、忠房の侍從、いなりの御やしろのまへにこそとそうし給へば、御歌、

むば玉のくらきやみぢにまようなり我にかさなんみつのともし火とてふしをがませたま

神異

ひければ、みやしろのうへより、いとあかき雲一村むらたち出きて、りん幸の道を照しおくりて、やまとのうちやまにいらせ玉へば、雲はかねのみたけのうへにて消うせにけり、まさしく御供に侍らひてみしことにこそ、

〔太平記三十一〕南帝八幡御退失事

五月十一日〇正平七年ノ夜半計ニ、主上〇後村上ヲバ寮ノ御馬ニ乗進セテ、前後ニ兵共打圍ミ、大和路へ向テ落サセ給ヘバ、〇中略古津川ノ端ヲ西ニ傍テ、御馬ヲ早メラルヽ處ニ、備前ノ松田、備後ノ宮ノ入道ガ兵共、二三百騎ニテ取籠奉ル、十方ヨリ如雨降射ル矢ナレバ、通レ給フベシ共不見ケルガ、天地神明ノ御加護モ有ケルニヤ、御鎧ノ袖草摺ニ二筋當リケル矢モ、皆テ裏ヲゾカヽザリケル、法性寺左兵衞督、是マデモ倚離レ進セズ、只一騎供奉シタリケルガ、跡ヨリ敵懸レバ、引返シテ追散シ、敵前ヲ遮レバ、懸破テ主上ヲ落シ進ラセケル處ニ、何クヨリ來ルトモ不知、御方ノ兵百騎計、皆中黑ノ笠符著テ、御馬ノ前後ニ候ケルガ、近付敵ヲ右往左往ニ追散シテ、カキ消樣ニ失ニケレバ、主上ハ玉體無恙シテ東條へ落サセ給ニケリ、内侍所ノ櫃ヲバ、初メ給テ持タリケル人ガ、田ノ中ニ捨タリケルヲ、伯耆太郎左衞門長生、著タル鎧ヲ脱捨テ、自荷擔シタリケル、跡ヨリ追敵共、蒔捨ル樣ニ射ケル矢ナレバ、御櫃ノ蓋ニ當ル音、板屋ヲ過ル村雨ノ如シ、サレ共身ニハ一筋モ不立ケレバ、長生兎角カヽグリ付テ、賀名生ノ御所ヘゾ參リケル、多クノ矢共御櫃ニ當リツレバ、内侍所モ矢ヤ立セ給ヒタルラント、淺猿クテ御櫃ヲ見進セタレバ、矢ノ跡ハ十三マデ有ケルガ、纔ニ薄キ檜木板ヲ射徹ス矢ノ、一筋モ無リケルコソ不思議ナレ、

〔播磨風土記揖保郡〕神嶋、伊刀嶋等、所以稱神嶋者、此嶋西邊在石神、形似佛像、故因爲名、此神顏有五色之玉、又胸有流淚、是亦五色、所以泣者、品太天皇〇應神之世、新羅之客來朝、仍見此神之奇偉、以爲非常之珍玉、屠其面色、堀其一瞳、神由泣、於是大怒、卽起暴風、打破客船、漂沒於高嶋之南濱、人悉死亡、乃

埋其濱、故號曰韓濱、于今過其處者、愼心固戒、不言韓人、不拘盲事、

〔日本書紀 二十六 齊明〕七年五月癸卯、天皇遷居于朝倉橘廣庭宮、是時斮除朝倉社木、而作此宮之、故神忿壞殿、亦見中、由是大舍人及諸近侍病死者衆、　七月丁巳、天皇崩于朝倉宮、

〔日本書紀 二十九 天武〕朱鳥元年六月戊寅、卜天皇病、祟草薙劍、卽日送置于尾張國熱田社、

〔常陸風土記 久慈郡〕東大山謂賀毗禮之高峯、卽有天神、名稱立速日男命、一名速經和氣命、本自天降、卽坐松澤松樹八俣之上、神祟甚嚴、有人向行大小便之時、令示災致疾苦者、近側居人、每甚辛苦、具狀請朝、遣片岡大連敬祭祈曰、今所坐此處、百姓近家、朝夕穢臭、理不合坐、宜避移可鎭高山之淨境、於是神聽禱告、遂登賀毗禮之峯、其社以石爲垣、中種屬甚多、幷品寶弓桙釜器之類、皆成石存之、凡諸鳥經過者、盡急飛避、無當峯上、自古然、爲今亦同之、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年四月己卯、震西大寺西塔、卜之、採近江國滋賀郡小野社木構塔爲祟、充當郡戸二烟、

〔續日本紀 三十六 光仁〕寶龜十一年二月丙申朔、神祇官言、伊勢大神宮寺、先爲有祟、遷建他處、而今近神郡、其祟未止、除飯野郡之外、移造便地者、許之、

〔日本後紀 十三 桓武〕大同元年三月丁亥、是日日赤無光、大井、比叡、小野、栗栖野等山共燒、煙灰四滿、京中晝昏、上(○平城)以爲所定山陵地、近賀茂神、疑是神社致災火乎、卽決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今災異頻來、可不愼歟、卽自禱祈、火災立滅、

〔類聚國史 三十四 帝王〕天長四年正月辛巳、詔曰、天皇(○淳和)詔旨止、稻荷神前爾申給閉止申久佐、頃間御體不愈、大坐須爾依氐、占求留爾、稻荷神社乃樹伐禮留罪祟爾出太利止申須、然毛此樹波先朝乃御願寺乃塔木爾用牟我爲之天、東寺乃所伐奈利、今成祟利止申世波故爾、畏天奈毛、內舍人從七位下大中臣雄良乎差使天、禮代爾從五位下乃冠授奉理治奉留、實爾神乃御心爾坐波、御病不過時日除愈給倍、縱比神乃御心爾不在

止毛、威神乃護助給波牟力留依天之、御躬波安万利平支給牟止所念食止奉憑流止申給布天皇詔旨乎申給波止久申、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年二月廿九日癸酉、參議從四位上行太宰大貳清原眞人岑成卒、○中略貞觀元年拜參議、二年爲太宰大貳、卒於官、○中略至于爲大貳、西府倉屋破壞特甚、有意修造、不遑寧居、伐神社之木、充結構之用、或人諫云、此神見稱有靈、祟咎所致不利於人、岑成拒而不肯、強令伐取、因此受病、不幾而卒、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十一月廿一日辛丑、去六月二十一日、出羽國秋田城中、及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃、陰陽寮言、當有凶狄陰謀兵亂之事、神祇官言、彼國飽海郡大物忌神、月山神、田川郡由豆佐乃賣神、倶成此恠、祟在不敬、勅令國宰恭祀諸神、兼愼警固、

〔源平盛衰記七〕笠嶋道祖神事

終ニ奥州名取郡笠嶋ノ道祖神ニ被蹴殺ニケリ、實方馬ニ乘ナガラ、彼道祖神ノ前ヲ通ラントシケルニ、人諫テ云ケルハ、此神ハ効驗無雙ノ靈神、賞罰分明也、下馬シテ再拜シテ過給ヘト云、實方問テ云、何ナル神ゾト、答ケルハ、コレハ都ノ賀茂ノ河原ノ西、一條ノ北ノ邊ニオハスル、出雲路ノ道祖神ノ女也ケルヲ、イツキカシヅキテ、ヨキ夫ニ合セントシケルヲ、商人ニ嫁テ、親ニ勘當セラレテ、此國ヘ被追下給ヘリケルヲ、國人是ヲ崇敬テ、神事再拜ス、上下男女所願アル時ハ、隱相ヲ造テ神前ニ懸荘リ奉テ、是ヲ祈申ニ叶ハズト云事ナシ、我ガ御身モ都ノ人ナレバ、サコソ上リ度マシマスラメ、敬神再拜シ祈申テ、故郷ニ還上給ヘカシト云ケレバ、實方サテハ此神下品ノ女神ニヤ、我下馬ニ及バズトテ、馬ヲ打テ通ケルニ、神明怒ヲ成テ、馬ヲモ主ヲモ罰シ殺シ給ケリ、其墓彼社ノ傍ニ今ニ是有トイヘリ、人臣ニ列テ人ニ禮ヲ不致バ被流罪、神道ヲ欺テ神ニ拜ヲ不成レバ横死ニアヘリ、實ニ奢ル人也ケリ、

雜載

〔大神宮諸雜事記一〕寶龜三年八月十六日、大風洪水、仍豐受神宮之瑞垣、幷御門一字流散、但件水御正殿之許一丈際專不流寄、志天土下涌入也、甚神妙也云々、

〔大神宮諸雜事記一〕寶龜十年八月五日、夜丑時大神宮正殿東西寶殿、及外院殿舍等皆悉燒亡畢、于時御正體幷左右相殿御體、幷錦御衾中被纏裹御乍、從猛火中飛出御天、御前松樹乃上懸御世利、仍宮司忽造假殿、奉安鎭御體、以同七日言上本官、隨則上奏、

〔古事談五神社佛寺〕延曆十年八月五日、子刻有盜人、燒大神宮正殿一宇、財殿二宇、御門瑞垣等、御體出自火中、懸坐御前松樹枝云々、○又見大神宮諸雜事記

〔續日本後紀六仁明〕承和四年四月戊申、陸奧國言、玉造塞溫泉石神、雷響振動、晝夜不止、溫泉流河、其色如漿、加以山燒谷塞、石崩木折、更作新沼、沸聲如雷、如此奇恠不可勝計、仍仰國司、鎭謝災異、教誘夷狄、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月丙申、詔以武藏國奈良神列於官社、先是彼國奏請、撿古記、慶雲二年、此神放光如火燎然、其後陸奧夷虜反亂、國發控弦赴救、陸奧軍士載此神靈、奉以擊之、所向無前、老弱在行、免於死傷、和銅四年、神社之中、忽有湧泉、自然奔出、漑田六百餘町、民有疫癘、禱而癒、人命所繫、不可不崇、從之、

〔文德實錄七〕齊衡二年二月癸亥、備中國言、吉備津彥神、庫內鈴鏡一夜三鳴、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年十二月廿六日己卯、太宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神靈池、去十月三日夜有聲震動、池水沸騰空中、東西洒落、其落東方者、如布延蔓、廣十許町、水色如漿、黏著草木、旬日不消解、又比賣神嶺、元來有三石神、高四許丈、同夜一石神頽崩、府司等決之蓍龜云、應有水疫之災、

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年五月廿六日甲辰、是日山城國石淸水八幡大菩薩宮自鳴、如擊鼓聲、雨樓鳴、如風波相激成聲、雖數剋而不停、神祇官卜云、大菩薩心有所願、陰陽寮占云、可警兵事、

〔本朝文粹十二記〕富士山記　都良香

富士山者在駿河國、○中略承和年中、從山峯落來珠玉、玉有小孔、蓋是仙簾之貫珠也、又貞觀十七年十一月五日、吏民仍舊致祭、日加午、天甚美晴、仰觀山峯、有白衣美女二人、雙舞山嶺上、去嶺一尺餘、土人共見、古老傳云、山名富士、取郡名也、山有神名淺間大神、○下略

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年八月四日丁卯、是日彼國○出羽正三位勳五等大物忌神、進勳三等正二位、勳六等月山神四等、從五位下勳九等小物忌神七等、先是右中辨兼權守藤原朝臣保則奏言、此二神自上古時、方有征戰、殊標奇驗、去五月賊徒襲來、挑戰官軍、當此之時、雲霧晦合、對坐不相見、營中擾亂、官軍敗績、求之蓍龜、神氣皈賊、我祈無感、增其爵級、必有靈應、國宰齋戒祈請慇懃、望請加進位階、將答神望、仍增此等級、送致綵帛一百三十匹於出羽國、

〔扶桑略記二十四裏書〕延喜十八年十月十五日、太宰府解、壹岐嶋言上怪異等、解文云、西南方彗星二三夜見、又長比賣明神社、住吉明神社、如太鼓鳴動、御體美石出寶殿、在地上、高御祖名神社內亂聲、炎光照耀、指東飛去、下部等申云、彼嶋內疾兵革、

〔日本紀略二朱雀〕天慶二年正月二日甲辰、春日社鳴、如擊太鼓、其後有鳴鏑聲、　三年十月三日乙未、紀伊國言、九月十七日日前國懸大神御殿戸振鳴由、

〔日本紀略四村上〕康保三年三月廿二日丁亥、軒廊御卜、尾張國言上、正一位熱田大明神自今月一日三箇日、幷十二日亥時、社中鳴如大皷亂聲、同五○五上恐脫二十字日夜振鳴如大鈴、恠異也、　五月十三日丁丑、賀茂社鳴、

〔日本紀略六圓融〕天延二年五月七日甲寅、今日近江國解云、兵主三上神社、自去三月、打大皷并鉦之音、經日不絕、仍有御卜、

〔左經記〕長元四年十月十七日辛卯、今朝頭辨於殿上被示云、出雲國杵築社無風顚倒之由、本國解、守

俊孝朝臣語云、兼雨三度有光、次震動顛倒、社木一向自中倒臥、唯乾角柱一本不倒、此社中以七寶作寶殿、安置七寶宮於寶殿中、是稱御正體云、而其宮寫居顛倒材木上、仍禰宜等爲奉移假本殿、作宮五寸許不及、仍構路立梯奉取、常五寸許不及、仍禰宜等度々忽沐浴潔齋深致愼、奉取奉移假殿了云々、仰云、前年顛倒云々、可令問彼例者、　閏十月三日丁未、中宮權大夫於左仗座、召神祇陰陽等於軒廊被令卜筮出雲國杵築社顛倒之由、神祇官申云、依所非奏兵革有疾疫事歟、陰陽寮申云、自艮巽方非發兵革事、天下爲疾疫事歟云々、仰云、出雲并艮巽方國々可愼疫疾兵革事之由、可賜官符云々、

〔百練抄四後朱雀〕長久元年七月廿六日、伊勢豐受大神宮正殿、幷東西寶殿瑞垣悉以顛倒、〇中略延暦神宮炎上之時、神體懸木、今度有顛倒之今〇今恐衍中、但御體不動傾、奉渡膳殿、

〔百練抄五白河〕應德二年十一月十四日、去八月太宰府言上高良社石硯幷高座金花忽生事、有御占、先令諸道勘申之、

〔百練抄五堀河〕寛治七年八月廿六日、興福寺大衆、奉舁春日神民、集會勸學院、捧御榊神木隨身鏡鈴、神人所持之鏡、於案上放光耀、自然鳴動、本宮御笠山上、同時有光耀云々、是依訴申近江守爲家朝臣凌礫神民事也、　十月廿八日、御笠山上有光耀、放其光五ヶ度、

〔袋草紙四〕江都督〇大江匡房

堯母廟荒、寒竹染一掬之涙、徐君墓古、秋松懸三尺之霜、是於安樂寺行曲水宴、自所書之序文也、披講之時、御廟鳴云々、肥後大進忠兼語云、下向肥後之時、有故老之府官、語云、件曲水宴之時文人云々、仍同廟鳴實否、答云、實也、始ハ御後山方響鳴、其聲近々也、而漸近聞、後ニ御廟中ニハ聞云々、

〔古今著聞集一神祇〕基隆朝臣周防國をしりける比、保安三年十月にかたりけるは、彼國にしまの明神とておはします、神主年能の事有て、論じけるもの有とて、神田をかりとらんとしければ、寶前より蛇三百計出たり、其内につの有二つ有けり、しばしありて入ぬ、其後對からんとしければ、烏

數萬とび來りて、神田の稻の穗をくひぬきて、みな神殿のうへに置けり、ふしぎの事也、本國の神、かゝる事中々おはする物也、

〔台記〕天養二年三月七日壬子、左馬權頭顯定來云、左大將雅定伊勢勅使精進之間、雖渡他所、衣裳雜具等猶在中院第、仍佛經等不置家中、而間中院寢殿有煙、件煙掩屋上隣里驚存放火由、驚放天井見之、有繪像佛五體色旗等、出件物於門外之後煙散盡、

〔古今著聞集一神祇〕仁安三年四月廿一日、吉田祭にて侍りけるに、伊豫守信隆朝臣氏人ながら神事もせで、仁王講をおこなひけるに、御わかしの火障子にもえ付て、その夜やけにけり、大炊御門室町なり、そのとなりは民部卿光忠卿の家也、神事にて侍りければ、火うつらざりけり、おそるべき事にや、

〔玉海〕治承四年七月十四日甲子、傳聞、奈良大衆二異成了、別當僧正與一乘院法印爲諍、兩方之大衆相逢爲拂云々、又聞、去十二日、若宮御殿鳴動、御戸開了、自其內鏑二筋被射出、有其聲云々、白晝事、衆人見之云々、

〔玉海〕壽永三年〇元曆元年正月十四日甲辰、傳聞、自大神宮怪異之由、注進義仲之許、其狀云、

一正月一日、雷電之中間、自辰巳指戌亥方天、光物數千萬光天渡了云々、

一大神宮ヨリ北ニ向天、箭四筋被放了、事一定也、

一雷電ニ二日被打寄蛇異虫、永松栗眞庄安乃々津、總テ津々浦々ニ藻被纒天、或二三或四五、每浦寄テ皆生タリ、其後經兩三日天紛失了、凡昔モ今モ異虫ノ海ヨリ打上ラルヽ事ハ、伊勢國ニ曾テ不候、件蛇自海東寄來ル云々、

一天下ノ大事チカヅキ候ニタリ、尤御用意有テ御祈可候云々、是神宮注文云々、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元曆元年正月廿三日癸丑、常陸國鹿嶋社禰宜等、進使者於鎌倉、申曰、〇中略同廿日

戌刻、黑雲覆寶殿、四方悉如向晦、御殿大震動、鹿鷄等、多以群集、頃而彼黑雲亙西方、鷄一羽在其雲中、見人目、是希代未聞奇瑞也者、武衞〈○源賴朝〉令聞之給、則御湯殿下庭上、遙拜彼社方給、彌催御欽仰之誠云々、件時剋、京鎌倉共以雷鳴地震云々、

〔源平盛衰記〕四十三　二位禪尼入海幷平家亡虜人々附京都注進事

兵共先帝〈○安德〉ノ御船ヘ亂入テ、大ナル唐櫃ノ鏁チヂ破、中ナル箱ヲ取出シ、箱ノカラゲ緒切解テ蓋ヲアケン〳〵トシケレバ、忽ニ目眩鼻血タル、平大納言時忠卿見給テ、內侍所ノ御箱也、狼藉也ト宣ヘバ、判官〈○源義經〉是ヲ聞テ制止ヲ加フ、武士共御船ヲ罷出ヌ、卽平大納言ニ申テ、如元御唐櫃ニ奉納入、末代トイヘ共、カク靈驗ノ御坐コソ目出ケレ、

〔玉海〕文治二年五月十七日甲午、光長進春日社解狀云、去十五六七三箇日、金色蛇出來云々、仰可行合占之由返給也、　廿二日己亥、光長朝臣申云、春日神主以消息申云、〈春日社解〉去十八日子剋、御山光云云、此事可被行御占歟、將內々可遣問歟、可隨仰云々、

〔吾妻鏡〕四　元曆二年〈○文治元年〉八月廿七日丁丑、午剋御靈社鳴動、頗如地震、此事先々爲怪之由、景能驚申之、仍二品〈○源賴朝〉參給之處、寶殿左右扉破訖、爲解謝之、被奉納御願書一通之上、巫女等面々有賜物、〈各藍摺二段〉被行御神樂之後、還御云々、

〔吾妻鏡〕十一　建久二年十二月廿六日庚子、去廿二日子剋、常陸國鹿嶋社鳴動如大地震、聞者驚耳、是爲兵革幷大葬兆之由、禰宜中臣廣親所注申也、幕下〈○源賴朝〉有御謹愼、則以鹿嶋六郞、被奉神馬云々、

〔吾妻鏡〕十三　建久四年十一月十八日辛巳、武藏國飛脚參申云、昨夕當國太田庄鷲宮御寶前血流、爲凶怪之由云々、則卜筮之處、兵革兆云々、

〔吾妻鏡〕十七　建仁二年八月十八日己丑、午剋鶴岡若宮西廻廊、鳩飛來、數剋不避立、仍供僧等恠之、其智房法橋、大學房等、修問答講一座、令法樂之、將軍家〈○源賴家〉爲見聞參給、遠州大官令等扈從、其外貴賤

成市、及酉剋、件鳩指西方飛去云々、

〔吾妻鏡十九〕承元三年二月十日甲戌、武藏國太田庄鷲宮寶殿鳴動之由馳申之、

〔百練抄後嵯峨十五〕寛元四年二月七日丁卯、大原祭也、辰時同社釜吠、其聲遙聞云々、　七月四日庚申、北野一夜松、此四五日烟立給云々、

〔吾妻鏡四十〕建長二年三月廿日丙戌、去月四日、依爲大神宮祈年祭例日、相州時頼○北條被奉幣物、東條次郎大夫爲御使參宮之處、彼御裳濯河水色如紅、經一日一夜歸本流、凡今度公家御幣物等、任例爲忘却、官人奉行奉裹之時、有鼠怪異、及辨上卿等渡祭主之期、殊驚申、去承久三年有此奇特云々、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年三月十四日甲戌、去比信濃國諏訪社頭、大嶋并唐船等出現、片時之間、如消而失云々、此事無先規之由、社家驚申云々、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年五月一日甲申、鶴岡宮、恒例御神樂也、而上宮寶殿御戸不被開、自卯刻及午一點、神主依申子細、被行御占、如卯刻者不快、午刻爲吉兆云々、於御膳者、可備大床之由、相州被計申之、

〔百練抄後深草十七〕康元元年六月十四日癸酉、是日八幡寶殿鳴動、午刻自樓門上、似白幡物立上、飛行之由經奏聞云々、

〔帝王編年記後深草二十五〕正嘉二年五月四日、住吉社第一神殿鳴動、狛犬形落地、

〔帝王編年記龜山二十六〕弘長元年七月七日、出雲國杵築社鳴動云々、

文永元年七月廿九日、亥時春日山鳴動、　十一年十二月十四日、軒廊御卜、一賀茂山鳴動事、一八幡宮鳴動事、

〔春日權現驗記十九〕ちかきころ興福寺の學侶蜂起して、大和惡黨を先かへり取て、流罪せらるべきよし祈申事有しほどに、正安三年十月廿五日子時、惡黨社頭に亂入て、大宮四所の御體おのおの二面、若宮六面、合て十四面の神鏡を盗取たてまつりて、當國高尾の別野といふ所にひき籠り

ぬ、〇中略同十一月八日、天こゝろよくはれたるに、當國常葉といふ所の堂に、にはかに瑞光あり、其貌虹のごとし、行客土民あやしみをなして堂內をうかゞひ見れば、神鏡三面しろき布袋にいれて佛前にかけたてまつる、〇中略事のよしを平田庄の地頭につげければ、地頭いそぎ土民をもよほして金勝寺にうつしたてまつる、そのほど二上の嶽より黑雲そひき、霰しきりにふりて、五色の雲春日山に立かゝる、拜見の緇素感淚を催さずといふ事なし、同卅日寅刻、春日神人康景、夢の告有ければ、其朝やかて高尾山におもむくに、いまだかの山にのぼらずして、はるかに嶺をみれば、瑞口みえけり、いとたうとく覺て、其所をもとむるに、次日午時、神鏡一面地より堀いだしたてまつりて、まづ金勝寺にうつしたてまつり、前後の神鏡七面、かつ〳〵感儀をとゝのへて、本社へわたしたてまつりぬ、十二月十三日、當社神人守職神鏡をもとめたてまつらむとて、高尾の別野にむかひぬ、かの山に昇て後、山のうちしきりに鳴動しければ、かつはおそれ、かつはあやしみて、事のよしを住侶にたづぬれば、惡黨亂入の後、連々かくなんあるといひけり、いとゞ信おこりてもとめたてまつるに、花形の御正體五面、しもの堂の本佛の御身の中よりもとめいだしたてまつる、同十五日、やがて本社にわたしたてまつりぬ、同廿三日當國布陀山の岑にて、御正體二面、またもとめいだしたてまつる、これ遠春法師が分なりけり、廿五日、本社に渡したてまつりぬ、さても花形の神鏡五面を、他所へいれたてまつらんとすれば、あせをながさせ給事、水のわき出るがごとし、其うち少々光をはなたせ給き、この靈驗を申つたへんとて、ひとり身をすて罷とゞまりて、おりのまゝに申よし、遠春法師起請文にのせて、學侶のなかへ申けり、

〔春日權現驗記二十〕嘉元二年、興福寺の寺僧の中に、大和國の地頭を追たるともがらありしかば、關東大にとがめ有て、衆徒神人などおほく召とられて、當國に地頭をおかるゝ事侍き、一寺なげきかなしみて、みな逐電せしほどに、七月のはじめつかたより、春日山の木いまだ黃落の期をむ

かへ侍らぬに、たちまちにみどりのいろを變じて、梢すぎ、神さびゆきしかば、神護景雲二年の御託宣に、藤氏繁昌、法相護持のために、御笠山に跡をたれましまず、末代におよびて神事違例し、政かけざらん時、樹木たちまちにかるべし、我當山をさりて天城にかへりましますとゑるべしとあれば、今にあたりて垂跡のとぼそをとぢて、本覺の城にかへらせ給にやとなげきあへりし程に、かやうの事ども關東へきこえて、おほきに驚て地頭をたてられにけり、この事いまだ南都へもきこえぬに、九月廿八日の夜、たがいふともなく、大明神かへりいらせ給といひさわげば、人人面々たちいでゝ見たてまつるに、四方の雲の色、炎上の餘氣のやうにひかりて、涼風ゆるくふき、微雨まゝそゝぐ、遠近の火、濟々星のごとくとびあるきて、社々にいらせ給、大方目もあやなり、社頭にてまた御歸座のやうに、松明二行に見えけり、又人もけたぬに、寶前の燈爐の火一度にきえてけり、さき〴〵大明神いでさせ給時もいらせ給時も、火をけつ事にてなん有けり、長者より御神樂をおこなはれじをりふしなりしかば、陪從近衞召人などおの〳〵見さわぎけり、

〔園太曆〕康永四年〇貞和元年二月三日、兵庫頭宗長法師入來、謂之、有雜談事等、近來諸社恠異以外事也、公家武家無驚御沙汰、以外也、伊豆國三嶋社拂地回祿、下野雨石、鎌倉光物、八幡宮光物幷鳴動、彼是重疊以外之由示之、

〔太平記〕二十七天下妖恠事附淸水寺炎上事

貞和五年正月ノ比ヨリ、犯星客星無隙現ジケレバ、旁其愼不輕、王位ノ愁、天下ノ變、兵亂疫癘アルベシト陰陽寮頻ニ密奏ス、是ヲコソ如何ト驚處ニ、〇中略同六月三日、八幡ノ御殿、辰刻ヨリ酉時マデ鳴動ス、神鏑聲ヲ添テ、王城ヲ差テ鳴テ行、〇下略

〔續神皇正統記〕崇光第九十九代崇光院、〇中略己丑の年〇貞和五年即位、庚寅改元觀應とす、南風のきほひによりて、同二年八月、俄内裏土御門殿より持明院殿に行幸、内侍所同渡御、主上春宮に〇直本院

〇光嚴御同宿とかや、新院〇光明ハ廣義門院の御所にぞまします、此ごろ神宮より、外宮寶殿鳴動して、虚空に鏑のみづゝきのおとする事半時ばかりなり、同日荒祭宮より、鏑矢乾のかたへ出、又外宮よりも、神鏑酉をさして出よし注進す、ふしぎ也ける事どもなり、恐怖の處に、南朝御合體の事、武家申行はるゝむね有て、元弘天下一統のごとく、毎事聖斷たるべきよし治定して、南朝の年號正平六年をもちひられ、官位も同南主〇後村上の御はからひにぞ成侍る、

〔太平記三十二〕直義追罰宣旨御使事附鴨社鳴動事

同八月十八日、〇觀應二年征夷將軍源二位大納言尊氏卿、高倉入道左兵衞督〇尊氏弟直義追討ノ宣旨ヲ給テ、近江國ニ下著シテ、鏡ノ宿ニ陣ヲ取ル、〇中略去程ニ高倉入道左兵衞督、石塔畠山桃井三人ヲ大將トシテ、各二萬餘騎ノ勢ヲ差副、同九月七日近江國へ打出、八相山ニ陣ヲ取ル、兩陣堅ク守テ其戰ヲ不決、其日ノ未ノ刻ニ、都ニハ鴨ノ糺ノ神殿鳴動スル事良久シテ、流鏑矢二筋天ヲ鳴響シ、艮ノ方ヲ差テ去ヌトゾ奏聞シケル、是ハ何樣將軍兄弟ノ合戰ニ、吉凶ヲ被示恠異ニテゾアルラント諸人推量シケルガ、果シテ翌日ノ午刻ニ、佐々木佐渡判官入道ガ手ノ者共ニ、多賀將監ト秋山新藏人ト、楚忽ノ合戰シ出シテ、秋山討レニケレバ、桃井大ニ怒テ、重テ可戰由ヲ申ケレ共、自餘ノ大將ニ異儀有テ、結句越前ノ國へ引返ス、

〔太平記三十四〕二度紀伊國軍事附住吉楠折事

四條中納言隆俊卿、龍門山ノ軍ニ打負テ、阿瀨河へ落ヌト聞エケレバ、吉野ノ主上〇後村上ヲ始進セテ、龍顏ニ咫尺シ奉ル月卿雲客、色ヲ失ヒ膽ヲ消シ給フ、斯ル處ニ又住吉ノ神主津守國久、密ニ勘文ヲ以テ申ケルハ、今月〇延文四年四月十二日ノ午刻ニ、當社ノ神殿鳴動スル事良久シ、其後庭前ナル楠、不風吹中ヨリ折レテ、神殿ニ倒レ懸ル、サレ共枝繁ク地ニ支テ中ニ橫ハル間、社壇ハ恙ナシトゾ奏シ申ケル、諸卿此密奏ヲ聞テ、神殿ノ鳴動ハ因ヲ示シ給フ條無疑、楠今官軍ノ棟梁タリ、楠倒

レバ誰カ君ヲ擁護シ奉ルベキ、事皆以不吉ノ表事ナリト私語キ合レケルヲ、大塔忠雲僧正不聞敢申サレケルハ、好事不如無ト申事候ヘバ、マシテ此事吉事ナルベシトハ難申、但神凶ヲ告給フハ天未捨者也、

〔續神皇正統記(後花園)〕去廿三日(○嘉吉三年九月)夜、大神宮櫪御馬、御厩を出て懸まはり、汗をながし鞍をまくわとわりて、又御厩に歸入給ふ由、次第奏狀到來、凶徒參入の夜の事也、神宮御まぼりのはげもいよ〳〵あらたにこそ侍れ、

〔康富記〕寶德元年八月廿二日庚午、是日軒廊御卜被行之、去六月廿八日、未刻天氣長閑、折節豐受大神宮正殿鳴動、西寶殿千木鰹木覆板悉頽落事、禰宜等注進之故也、

〔鎌倉管領九代記(五)〕天變地妖

康正三年に及びて長祿と改元あり、(○中略)七月廿一日、吉田の社鳴動する事おびたゞし、天下大なる御つゝしみなりとて、陰陽の博士勘文をさゝげて奏聞す、

〔親長卿記〕文明四年正月廿五日、及曉聞、去夜夜半、內侍所鳴動云々、可驚ロロ、九年正月九日、戌刻許內侍所鳴動之由刀自注進、文明二年有鳴動、有舊院御事、(○後花園崩)同四年又鳴動、其後無事、今又有何事哉、驚入者也、但內侍所御殿咫尺之間、有鳴動者人々同心可聞之處、無其儀如何、以兼倶卿所勞、仍召進卜部兼致、龜卜事被仰、民部卿申次也、召有宣三位、同被召、古文、凡以御祈奉行職事、如此可被仰付也、就咫尺戶部每事申之條、且不可說也、

〔基量卿記〕延寶五年七月十五日、持明院羽林入來、(○中略)被談曰、先日十日夜戌刻計歟、從內侍所神殿、如弓矢火二ツ飛出、當於軒廊柱消了、誠是近代珍事也、若宮中混穢之有疑歟、依之神體飛去給かと云々、依之攝家中以下及勅問之處、所詮宮中清淨ニ御沙汰候て、諸事御愼可然由也、此事堪嗟、古代如此之事有是時ハ、必軒廊御卜等被行之由往々所見也、當時零落不足論、依之自一昨日爲火災愼、

近臣數二人ヅヽ不寢而勤番云々、誠以不可説事共也、

古事類苑

神祇部六

神託

古事類苑

神祇部六

神託

名稱

神託トハ、神ノ人或ハ物ニ憑リ、又ハ夢ニ託シテ以テ吉凶ヲ示シ、意志ヲ宣シ給フヲ云フ、故ニ又託宣トモ云フ、其間或ハ自ラ其形ヲ現シ給フコトアルモ亦神託トス、神託ハ古來之ニ據リテ疑ヲ決シ、事ヲ處セシモノナレド、其詐稱ニ出デシコトモ往々アリテ、之ガ爲ニ制禁ヲ立テシコトモアリキ、抑神託ノ史乘ニ於ケル實ニ夥クシテ擧グルニ勝ヘズ、今ハ古來最モ著聞ニシテ人口ニ膾炙スルモノヲ取リ、其餘ハ多ク闕略セリ、

〔日本書紀一神代〕猨女君遠祖天鈿女命、○中略顯神明之憑談、顯神明之憑談、此云歌牟鵝可梨、

〔伊呂波字類抄太疊字〕託宣

〔下學集上神祇〕託宣

〔運歩色葉集志〕神託

〔書言字考節用集三神祇〕神託　託宣　憑談

〔神道名目類聚抄六雜〕託神　按ニ神ノ人ニカヽリテ事ヲツグルアリ、聖廟ノ比良ノ神官ガ子ニカヽリテ告給フノ類、又神皇后ニカヽリテナド云事日本書紀ニ見タリ、是亦神ガヽリナリ、

託宣　神ノ告タマフ事ヲ託宣ト云、夢ニ告或ハ人ニカヽリテ告タマフ、皆託宣ナリ、

夢告

〔古事記中神武〕故神倭伊波禮毘古命、從其地廻幸到熊野村之時、大熊髮○髮字、山田以文本作髮鬚二字、出入卽失、附

神倭伊波禮毘古命、倏忽爲遠延、及御軍皆遠延而伏、(遠延二字以音)此時熊野之高倉下、(此者人名)齎一横刀、到於天神御子(○神武)之伏地而獻之時、天神御子卽寤起、詔長寢乎、故受取其横刀之時、其熊野山之荒神、自皆爲切仆、爾其惑伏御軍悉寤起之、故天神御子問獲其横刀之所由、高倉下答曰、己夢云、天照大神、高木神二柱神之命以、召建御雷神而詔、葦原中國者、伊多玖佐夜藝帝阿理那理、(此十一字以音)我之御子等不平坐良志、(此二字以音)其葦原中國者、專汝所言向之國、故汝建御雷神可降、爾答曰、僕雖不降、專有平其國之横刀、可降、(此刀名云佐士布都神、亦名云甕布都神、亦名布都御魂、此刀者坐石上神宮也、)降此刀狀者、穿高倉下之倉頂、自其墮入、故阿佐米余玖、(自阿下五字以音)汝取持獻天神御子、故如夢教而、旦見己倉者、信有横刀、故以是横刀而獻耳、於是亦高木大神之命以、覺白之、天神御子、自此於奧方莫使入幸、荒神甚多、今自天遣八咫烏、故其八咫烏引道、從其立後應幸行、故隨其敎覺、從其八咫烏之後幸行者、到吉野河之河尻、

〔日本書紀三神武〕戊午年六月、天皇獨與皇子手研耳命、帥軍而進、至熊野荒坂津、(亦名丹敷浦)因誅丹敷戸畔者、時神吐毒氣、人物咸瘁、由是皇軍不能復振、時彼處有人、號曰熊野高倉下、忽夜夢、天照大神謂武甕雷神曰、夫葦原中國猶聞喧擾之響焉、(聞喧擾之響焉、此云左揶霓利奈離)宜汝更往而征之、武甕雷神對曰、雖予不行、而下予平國之劒、則國將自平矣、天照大神曰、諾、(諾、此云宇毎那利)時武甕雷神登謂高倉下曰、予劒號曰韴靈、(韴靈、此云赴屠能瀰哆磨)今當置汝庫裏、宜取而獻之天孫、高倉下曰、唯唯、而寤之、明旦依夢中教、開庫視之、果有落劒、倒立於庫底板、卽取以進之、于時天皇適寐、忽然而寤之曰、予何長眠若此乎、尋而中毒士卒悉復醒起、既而皇師欲趣中州、而山中嶮絶、無復可行之路、乃棲遑不知其所跋渉、時夜夢、天照大神訓于天皇曰、朕今遣頭八咫烏、宜以爲鄕導者、果有頭八咫烏、自空翔降、天皇曰、此烏之來、自叶祥夢、大哉赫矣、我皇祖天照大神、欲以助成基業乎、　九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巓、瞻望域中、時國見丘上則有八十梟帥、(梟帥、此云多稽屢)又於女坂置女軍、男坂置男軍、墨坂置焃炭、其女坂男坂墨坂之號、由此而起也、復有兄磯城軍、布滿於磐余邑、(磯、此云志)賊虜所據、皆是要害之地、故道路絶塞、無處可通、天皇惡之、是夜自祈而

寐、夢有天神訓之曰、宜取天香山社中土、（香山、此云介遇夜摩、）以造天平瓮八十枚、（平瓮、此云毘邏介、）幷造嚴瓮、（嚴瓮、此云怡途背、）而敬祭天神地祇、亦爲嚴呪詛、（嚴呪詛、此云怡途能伽辭離、）如此則虜自平伏、天皇祇承夢訓、依以將行、時弟猾又奏曰、倭國磯城邑有磯城八十梟帥、又高尾張邑、（或本云、葛城邑也、）有赤銅八十梟帥、此類皆欲與天皇距戰、臣竊爲天皇憂之、宜今當取天香山埴、以造天平瓮、而祭天社國社之神、然後擊虜則易除也、天皇旣以夢辭爲吉兆、及聞弟猾之言、益喜於懷、乃使椎根津彥著弊衣服及蓑笠、爲老人貌、又使弟猾被箕、爲老嫗貌、而勅之曰、宜汝二人到天香山、潛取其巓土、而可來旋矣、基業成否、當以汝爲占、努力愼焉、是時虜兵滿路、難以往還、時椎根津彥乃祈之曰、我皇當能定此國者、行路自通、如不能者賊必防禦、言訖徑去、時群虜見二人、大咲之曰、太醜哉、（大醜、此云鞅奈瀰爾句、）老父老嫗、則相與闢道使行、二人得至其山、取土來歸、於是天皇甚悅、乃以此埴、造作八十平瓮、天手抉八十枚、（手抉、此云多衢餌離、）嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇、

〔大倭神社註進狀〕家牒曰、腋上池心宮御宇天皇（孝昭）元年秋七月甲寅朔、遷都於倭國葛城、丁卯天皇夢有一貴人、對立殿戶、自稱大己貴命、曰、我和魂自神代鎭三諸山、而助神器之昌建也、荒魂服玉身、在大殿內、而爲寶基之衞護、卽得神敎、而天照大神、倭大國魂神、並祭於天皇大殿之內、

〔古事記〕（中崇神）此天皇之御世、疫病多起、人民死爲盡、爾天皇愁歎而坐神牀之夜、大物主大神顯於御夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古而令祭我御前者、神氣不起、國安平、是以驛使班于四方、求謂意富多多泥古人之時、於河內之美努村、見得其人貢進、爾天皇問賜之汝者誰子也、答曰、僕者大物主大神娶陶津耳命之女活玉依毘賣生子、名櫛御方命之子、飯肩巢見命之子、建甕槌命之子、僕意富多多泥古白、於是天皇大歡、以詔之、天下平、人民榮、卽以意富多多泥古命爲神主、而於御諸山拜祭意富美和之大神前、又仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、（此三字以音也、）定奉天神地祇之社、又於宇陀墨坂神祭赤色楯矛、又於大坂神祭黑色楯矛、又於坂之御尾神及河瀨神、悉無遺忘、以奉幣帛也、

〔日本書紀〕（五崇神）七年二月辛卯、詔曰、（中略）○是夜夢有一貴人、對立殿戶、自稱大物主神、曰、天皇勿復爲愁、

國之不治、是吾意也、若以吾兒大田田根子命祭吾者、則立平矣、亦有海外之國自當歸伏、 八月己酉、倭迹々神淺茅原目妙姬、穗積臣遠祖大水口宿禰、伊勢麻績君三人、共同夢而奏言、昨夜夢之、有一貴人、誨曰、以大田田根子命、爲祭大物主大神之主、亦以市磯長尾市、爲祭倭國魂神主、必天下太平矣、天皇得夢辭、益歡於心、 九年三月戊寅、天皇夢有神人、誨之曰、以赤盾八枚、赤矛八竿、祠墨坂神、亦以黑盾八枚、黑矛八竿、祠大坂神、 四月己酉、依夢之敎、祭墨坂神、大坂神、

〔延喜式祝詞八〕龍田風神祭

龍田爾稱辭竟奉皇神乃前爾白久、志貴嶋爾大八嶋國知志皇御孫命擬乃神○遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始氐、天下乃公民乃作物乎草乃片葉爾至万氐、不成一年二年爾不在、歲眞尾久傷故爾、百能物知人等乃卜事爾出牟神乃御心者、此神止白止負賜支、此乎物知人等乃卜事乎以氐卜止毛、出留神乃御心母無止白止聞看氐、皇御孫命詔久、神等乎波天社國社止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行波須乎、誰神曾天下乃公民乃作作物乎不成傷神等波、我御心曾止悟奉禮止宇氣比賜岐、是以皇御孫命大御夢爾悟奉久、天下乃公民乃作作物乎、惡風荒水爾相都都不成傷波、我御名者天乃御柱乃命、國乃御柱乃命止、御名者悟奉氐、吾前爾奉牟幣帛者、御服者明妙照妙和妙荒妙五色乃物、楯戈御馬爾御鞍具氐、品品乃幣帛備氐、吾宮者朝日能日向處、夕日能日隱處乃龍田能立野爾小野爾、吾宮波定奉氐、吾前乎稱辭竟奉者、天下乃公民乃作作物者、五穀乎始氐、草乃片葉爾至万氐、成幸閇奉牟止悟奉支、下略○

〔古事記中垂仁〕天皇命詔其后言、凡子名必母名、何稱是子之御名、爾答白、今當火燒稻城之時、而火中所生、故其御名宜稱本牟智和氣御子、○中略然是御子八拳鬚至于心前眞事登波受、此三字以音○中略於是天皇患賜而御寢之時、覺于御夢曰、修理我宮如天皇之御舍者、御子必眞事登波牟、自登下三字以音如此覺時、布斗摩邇邇占相而、求何神之心、爾祟出雲大神之御心、

〔釋日本紀十 述義〕尾張國風土記中卷、丹羽郡吾縵郷、卷向珠城宮御宇天皇〈垂仁〉○品津別皇子生七歲而不語、傍問郡下、無能言之、乃後皇后夢有神告曰、吾多具國之神、名曰阿麻乃彌加都比女、吾未得祝、若爲吾充祝人、皇子能言、亦是壽考、

〔古事記 中 仲哀〕故建内宿禰命、率其太子、爲將禊、而經歷淡海及若狹國之時、於高志前之角鹿、造假宮而坐、爾坐其地伊奢沙和氣大神之命見於夜夢云、以吾名欲易御子之御名、爾言禱白之、恐隨命易奉、亦其神詔、明日之旦、應幸於濱、獻易名之幣、故其旦幸行于濱之時、毀鼻入鹿魚、既依一浦、於是御子令白于神云、於我給御食之魚、故亦稱其御名、號御食津大神、故於今謂氣比大神也、

〔止由氣宮儀式帳〕等由氣大神宮院事

天照坐皇大神、始卷向玉城宮御宇天皇御世、國々處々大宮處求賜時、度會乃宇治乃伊須々乃河上乃大宮供奉、爾時大長谷天皇〈雄略〉○御夢爾海覺賜天、吾高天原坐氏見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴、然吾一所耳坐波甚苦、加以大御饌毛安不聞食坐故爾、丹波國比治乃眞奈井爾坐、我御饌都神、等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支、爾時天皇驚悟賜氏、既從丹波國令行幸氏、度會乃山田原下石根爾宮柱太知立高天原爾知疑高知氏、宮定齋仕奉始支、是以御饌殿造奉氏、天照坐皇大神乃朝乃大御饌夕大御饌乎日別供奉、

〔元亨釋書 一 傳智〕釋最澄、世姓三津氏、近州滋賀郡人也、○中略澄泛海時、宿田河郡賀春山下、夢梵僧來前、袒衣露身、左肩似人、右肩如石、言之曰、我是賀春明神也、和尚慈悲救吾業道之身、我當加助求法、晝夜守護、欲知我實、海中急難現光爲驗、澄明旦晞山右邊崩巖、草木不生、如夢中半身、心異焉、又海中風浪果有光曜、是以思神之不浪也、

〔天滿宮託宣記〕正曆四年御託宣

正曆四年八月十五日、宮師淨洞、夢夜候御在所之間、子時許、夢御前へ召、故撿挍鎭延大法師、仍參上、

憑人

御被仰云、依賄官事、勅使下向者、是非本意、依非舊例、更不可承引、件使來者、令知我他行之由、左右不可相定、依無面目也、種々雜事、非可仰者、同十六日夜、座主松壽大法師夢、子丑時計夢見、不知之人來告云、可參廟院者、答云、誰人仰事乎、一家主達被集會所被聞也云々、仍著袈裟參進、廊内外有十人、自西戶參入、中門著座、四位五位數多也、其中知面之人、三位文時卿、左近中將英明朝臣、諸解由長官在躬朝臣、山城守雅規朝臣等也、告示云、公使下向、其事非御本意、寺司等不可承引云々、然間覺畢、

〔平家物語八〕宇佐行幸の事

平家はつくしに都を定め、〇中略まづうさの宮へ行かうなる、〇中略七日參籠の曉、大臣殿〇平宗盛の御爲に夢想のつげぞありける、御寶殿の御戶おし開き、ゆゝしうけだかげなる御聲にて、

世中のうさには神もなきものをなにいのるらんこゝろつくしに

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衞門事

或時相模守〇北條時頼鶴岡ノ八幡宮ニ通夜シ給ケル曉、夢ニ衣冠正シクシタル老翁一人枕ニ立テ、政道ヲ直クシテ、世ヲ久ク保タント思ハヾ、心ニ私ナク理ニ不暗、青砥左衞門ヲ賞翫スベシト慥ニ被示ト覺エテ夢忽覺テケリ、相模守夙ニ歸、近國ノ大庄八箇所、自筆ニ補任ヲ書テ青砥左衞門ニゾ給ヒタリケル、青砥左衞門補任ヲ啓キ見テ大ニ驚テ、是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大庄給リ候ヤラント問奉リケレバ、夢想ニ依テ先ヅ且宛行也ト答給フ、青砥左衞門額ヲ掘テ、サテハ一所ヲモエコソ賜リ候マジケレ、且ハ御意ノ通モ歎入テ存候、物ノ定相ナキ喩ニモ、如夢幻泡影如露亦如電トコソ金剛經ニモ說レテ候ヘ、若某ガ首ヲ刎ロト云夢ヲ被御覽候ハヾ、無科共如夢被行候ハンズル歟、報國ノ忠薄シテ超涯ノ賞ヲ蒙ラン事、是ニ過タル國賊ヤ候ベキトテ、則補任ヲゾ返シ進セケル、

〔古事記上〕天宇受賣命、手次繫天香山之天之日影而、爲縵天之眞拆而、手草結天香山之小竹葉而、〇中略

竹云佐佐於天之石屋戸伏汗氣此二字以音而蹈登杼呂許志此五字以音爲神懸、而掛出胸乳、裳緒忍垂於番登也、

〔日本書紀神代一〕猨女君遠祖天鈿女命、則手持茅纏之矟、立於天石窟戸之前、巧作俳優、亦以天香山之眞坂樹爲鬘、以蘿爲手繦、而火處燒、覆槽置、顯神明之憑談、

〔釋日本紀述義七〕私記曰、問、凡云神懸者必有其神説宣、此託宣何神哉、答、此與他處爲少異也、諸神欲令日神深見奇物、故俳優万態不可殫記、鈿女命假爲他神、有所託宣耳、是欲令日神深奇故也、然則是假爲之言、未必有神所託也、

〔大三輪神三社鎭座次第〕腋上池心宮御宇天皇〇孝昭御世、神明憑吉足日命曰、吾國造大己貴命也、天初己命之和魂取託八咫鏡、名曰倭大物主櫛瓺玉命、鎭座大三輪神奈備云云、令造瑞籬奉齋焉、隨神託、立瑞籬於大三輪山、遣吉足日命、令崇齋大己貴命、大物主命詔吉足日命、自今已後可爲宮能賣、

〔日本書紀崇神五〕七年二月辛卯、詔曰、昔我皇祖大啓鴻基、其後聖業逾高、王風轉盛、不意今當朕世數有災害、恐朝無善政、取咎於神祇耶、盍命神龜以極致災之所由也、於是天皇乃幸于神淺茅原、而會八十萬神、以卜問之、是時神明憑倭迹迹日百襲姫命曰、天皇何憂國之不治也、若能敬祭我者、必當自平矣、天皇問曰、教如此者誰神也、答曰、我是倭國域內所居神、名爲大物主神、時得神語、隨教祭祀、然於事無驗、天皇乃沐浴齋戒、潔淨殿內、而祈之曰、朕禮神尚未盡耶、何不享之甚也、冀亦夢裏教之、以畢神恩、

〔日本書紀崇神五〕六十年七月己酉、〇中略故出雲臣等畏是事、不祭大神而有間、時丹波氷上人名氷香戸邊啓于皇太子活目尊曰、己子有小兒、而自然言之、玉萋鎭石、出雲人祭、眞種之甘美鏡、押羽振甘美御神、底寶御寶主、山河之水泳御魂、靜挂甘美御神、底寶御寶主也、是非似小兒之言、若有託言乎、於是皇太子奏于天皇、則勅之使祭、

〔大倭神社註進狀〕纏向珠城宮御宇天皇〇垂仁廿七年九月甲子、以皇女倭姫命、爲御杖代、貢天照大神、倭姫命隨神誨、立宮於伊勢國渡遇五十鈴川上、奉遷焉、是時倭大國魂神著大水口宿禰而誨之曰、太初

之時、期曰、天照大神悉治高天原、皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官者、言已訖焉云云、大地主神之號起于是時矣、

〔日本書紀 八仲哀〕八年九月己卯、詔群臣以議討熊襲、時有神託皇后而誨曰、天皇何憂熊襲之不服、是膂之空國也、豈足擧兵伐乎、愈茲國而有寶國、譬如美女之睩、〈睩此云麻用弭枳〉有向津國、眼炎之金銀彩色、多在其國、是謂𣑥衾新羅國焉、若能祭吾者、則曾不血刃、其國必自服矣、復熊襲爲服、其祭之、以天皇之御船、及穴門直踐立所獻之水田、名大田、是等物爲幣也、天皇聞神言、有疑之情、便登高岳、遙望之、大海曠遠而不見國、於是天皇對神曰、朕周望之、有海無國、豈於大虛有國乎、誰神徒誘朕、復我皇祖諸天皇等盡祭神祇、豈有遺神耶、時神亦託皇后曰、如天津水影押伏而我所見國、何謂無國、以誹謗我言、其汝王之如此言而遂不信者、汝不得其國、唯今皇后始之有胎、其子有獲焉、然天皇猶不信、以強擊熊襲、不得勝而還之、

〔日本書紀 十二履中〕五年九月壬寅、天皇狩于淡路嶋、是日河內飼部等從駕執轡、先是飼部之黥皆未差、時居嶋伊弉諾神託祝曰、不堪血臭矣、因以卜之、兆云、惡飼部等黥之氣、故自是後頓絕以不黥飼部而止之、

〔大三輪神三社鎭座次第〕磐余甕栗宮御宇天皇〈清寧〉○中略勅大伴室屋大連、奉幣帛於大三輪神社、祈請無皇子之儀、時神明憑宮能賀曰、天皇勿憂之、何非絶天津日嗣哉、上古吾與少彥名命戮力一心、所以經營天下、其所以而今少彥名命來臨吾邊津磐座、與吾及和魂共能可敬祭、守皇孫齊人民矣、於是起立磐境、崇祭少彥名命、于時天皇元年冬十月乙卯日也、

〔日本書紀 十五顯宗〕三年二月丁巳朔、阿閉臣事代銜命出使于任那、於是月神著人謂之曰、我祖高皇產靈有預鎔造天地之功、宜以民地奉我月神、若依請獻、我當福慶、事代由是還京具奏、奉以歌荒樔田、〈歌荒樔田在山背國葛野郡〉壹伎縣主先祖押見宿禰侍祠、　四月庚申、日神著人、謂阿閉臣事代曰、以磐余田獻我祖高

皇產靈事代便奏、依神乞獻田十四町、對馬下縣直侍祠、

〔日本書紀二十八天武〕元年七月壬子、先是軍金綱井之時、高市郡大領高市縣主許梅、儵忽口閉、而不能言也、三日之後方著神以言、吾者高市社所居、名事代主神、又牟狹社所居、名生雷神者也、乃顯之曰、於神日本磐余彥天皇〇神武之陵、奉馬及種種兵器、便亦言、吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉、今且立官軍之中守護之、且言自西道軍衆將至之、宜愼也、言訖則醒矣、故是以便遣許梅而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、又捧幣而禮祭高市身狹二社之神、然後壹伎史韓國自大坂來、故時人曰、二社神所敎之辭適是也、又村屋神著祝曰、今自吾社中道軍衆將至、故宜塞社中道、故未經幾日、廬井造鯨軍自中道至、時人曰、卽神所敎之辭是也、軍政既訖、將軍等擧是三神敎言而奏之、卽勅登進三神之品以祠焉、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿三年二月庚戌、運收大和國石上社器仗於山城國葛野郡、　廿四年二月庚戌、造石上神宮使正五位下石川朝臣吉備人等支度功程、〇中略　既而聖體不豫、典闈建部千繼被充春日祭使、聞平城松井坊有新神託女巫、便過請問、女巫云、今所問不是凡人之事、宜聞其主、不然者不告所問、仍述聖體不豫之狀、卽託語云、歷代御宇天皇以慇懃之志所送納之神寶也、今踐穢吾庭、運收不當、所以唱天下諸神、勸誂贈天帝耳、登時入京密奏、卽詔神祇官幷所司等、立二幄於神宮御飯盛銀笥、副御衣一襲、並納御鞍、差典闈千繼充使、召彼女巫、令鎭御魂、女巫通宵忿怒、託語如前、遲明乃和解、

〔文德實錄八〕齊衡三年十二月戊戌、常陸國上言、鹿嶋郡大洗磯前有神新降、初郡民有煮海爲鹽者、夜半望海光耀屬天、明日有兩恠石見在水次、高各尺許、體於神造、非人間石、鹽翁私異之、去後一日、亦有廿餘小石在向石左右、似若侍坐、彩色非常、或像沙門、唯無耳目、時神憑人云、我是大奈母知、少比古奈命也、昔造此國訖、去往東海、今爲濟民更亦來歸、

〔三代實錄十一淸和〕貞觀七年十二月九日丙辰、勅甲斐國八代郡立淺間明神祠、列於官社、卽置祝禰宜、隨

時致祭、先是彼國司言、往年八代郡、暴風大雨、雷電地震、雲霧杳冥、難辨山野、駿河國富士大山西峯、忽有熾火、燒碎巖谷、今年八代郡擬大領無位伴直眞貞託宣云、我淺間明神、欲得此國齋祭、頃年爲國吏成凶咎、爲百姓病死、然未曾覺悟、仍成此怪、須早定神社、兼任祝禰宜、潔奉祭、眞貞之身、或伸可八尺、或屈可二尺、變體長短、吐件等詞、求之卜筮、所告同於託宣、於是依明神願、以眞貞爲祝、同郡人伴秋吉爲禰宜、郡家以南作建神宮、且令鎭謝、雖然異火之變、于今未止、遣使者檢察、埋剗海千許町、仰而見之、正中最頂、飾造社宮、垣有四隅、以丹青石立其四面、石高一丈八尺許、廣三尺、厚一尺餘、立石之間、相去一尺、中有一重高閣、以石構營、彩色美麗、不可勝言、望請齋祭、兼預官社、從之、

〔菅家御傳記〕安樂寺學頭安修奏狀云、太宰府安樂寺者、贈大相國菅原道眞公爽塏之地、十一面觀世音大菩薩靈感之處也、延喜五年八月十九日、味酒安行依神託立神殿、稱曰天滿大自在天神、北野社家者說曰、天慶五年七月十二日、神降著右京七條坊蜂文子、託曰、我昔丞相之靈也、欲居右近馬場、可造神殿也、其女賤而不能營作、專奉家邊、

天曆九年三月十一日、亦著近江比良神人良種子年七歲、託曰、我昔任右大臣、先參松生我身而使折、是以我知昇三公官、又逢左遷既嚮、以故我欲居之地必當生松也、一夜之中松數千本生北野、於是朝日寺僧最珍與良種蜂文子、戮力一心造立神殿、

〔續古事談〕四神社佛寺一條院ノ御時、六月晦日ニ、風吹雷オドロ〱シクナリケルホドニ、母后ノ御方ニ、藤典侍トイフ人ニ、北野天神ツキタマヒテノタマヒケル、我家ヤブレタリ、修理セラルベシ、又攝政上達部ヒキグシテ、賀茂ニマウデヽ、十列音樂タテマツラル、ウラヤマシキコロシ託宣アリテ、歌ツヨミ給ケル、

ウラヤミニマヨヒシ胸ノカキ陰リフルハ淚ノナマヲミナシレ、此アヒダ、殿上ノ殿モリ司一人、見聞ニテシユイリタリケリ、障ノ外ニ昇イデイキイデエケリ、ソノヽチ攝政、人々フグシテ、北

野ニマウデヽ作文和歌アリケルトゾ、

〔古今著聞集一神祇〕同年〈○長暦二年〉中比、大中臣佐國祭主になりたりけるを、同三年四月二日、荒祭宮の御託宣に、祭主あしかへらるべきよしありけり、遷宮の間に嚴重の事共あれ共、恐れあればしるさず、六月廿六日、佐國つひに伊豆の國へ流されにけり、かゝる程に七月十日、荒祭宮、齋宮の內侍に御託宣あり、祭主配流しかるべからずとありけり、同十六日、かさねて御託宣ありて佐國が孫淸佐をめして仰られけるは、佐國を流さるゝ事しかるべからず、先日の託宣にも配流の事なし、然るをかくのごとく大きなる誤りあり、おこなはるゝ旨道理にそむけり、はやくめしかへすべきよし奏聞すべし、佐國いまだ伊勢の國のさかひを出ざるにめすべき也、勅定待ばおそかりぬべし、是より使をつかはしてめしかへすべしと侍ければ、齋宮の史生をもちてめしにつかはされにけり、此よし奏聞せられければ、同十九日、佐國めしかへされけりとなん、其比御託宣たびたび有けり、かたじけなかりける事也、

〔平家物語二〕ざすながし附一行あじやりの事

こゝにむぞうじはうし、ぜうえんりつしが、めしつかひける鶴丸といふわらはあり、生年十八歲になりけるが、じん〳〵をくるしめ、五體におせをながいて俄にくるひ出たり、我十ぜんじごん現のゝりゐさせ給へり、末代といふとも、いかでか我山のくわんじゆをば他國へはうつさるべき、生々世々に心うし、ざらんに取ては、われ此ふもとにあとをとゞめても何にかはせんとて、左右の袖をかほにおしあてゝさめ〴〵となきければ、大衆これをあやしみて、誠に十ぜんじごんげんの御たくせんにておはしまさば、我等しるしをまゐらせん、一々にもとのぬしに返し給へとて、老僧共四五百人、手々にもちたるじゆずどもを十ぜんじ權現の大ゆかの上へぞなげあげたる、彼物ぐるひはしりまはりひろひあつめて、少もたがへず、一々皆もとのぬしにぞくばりけ

る、大衆、神明のれいげんあらたなる事のたつとさに、皆たなごゝろをあはせて、ずいきのかんるいをぞもよほしける、

〔源平盛衰記　四〕殿下御母立願事

父ノ大殿〈○藤原師實〉ノ御母儀北政所御歎斜ナラズ、カタガタ御祈始ラル、〈○中略〉御母儀北政所忍テ御參社〈○日吉〉有テ、七箇日御參籠アリ、三ノ御願ヲ立給ヘリ、是ヲバ人知ザリケリ、出羽ノ羽黒ヨリ上タル身吉ト云童御子ノ籠タリケルガ、十禪師ノ御前ニテ、俄ニ狂出テ舞カナデケルガ、暫有テ死入ケル、何者ゾ、門外ヘ舁出セト云ケルニ、事ノ樣ヲ見ヨトテ大庭ニ舁居テ是ヲ守ル、良有テ走出テ舞カナヅ、人奇特ノ思ヲ成處ニ、汗押拭申ケルハ、衆生等慥ニキケ、我ニハ十禪師權現乘居サセ給ヘリ、我御前ニハ攝籙ノ御母儀、大殿ノ北政所、七箇日御參籠有テ、心中ニ三ノ御願有、攝籙山王ノ御答トナ、親ニ先立テ世ヲ早クシ給ハントス、今度ノ命ヲ助サセ給ヒ候ハヾ、一ニハ八王子ノ御前ヨリ二宮樓門マデ、渡廊造進スベシ、大衆參社ノ時、雨露ノ難ヲ除カン爲ナリ、二ニハ五人ノ姫君ニ、御前ニテ芝田樂囃セテ見セ奉ルベシトナリ、此事コソ哀ニ思食セ、女御后ニモトイツキカシヅキ、玉簾錦茵ニ勞奉テ、アダニモ出入給ハヌ姫君達ヲ、一人ノ子ノ悲サニ角思召コソ最惜ケレ、三ニハ自ラ都ノ住居ヲ捨テ、御輿ノ下殿ニ候、宮籠ニ相變テ、唐崎ヨリ白砂ヲ千日運テ進セントナリ、太政大臣家ノ北政所トシテ、此業已ニ命ヲ捨給程ノ御事也、此三ノ御願ハ、七社權現ノ外ニ人是ヲ知ラズ、眞ニ爭カ知ベキ、親子ノ昵、恩愛ノ情コソ神慮モ悲思召トテ、左右ノ袖ヲ顔ニ當テ、ハラハラトコソ泣タリケレ、暫有テ母ノ子ヲ思フ志、助バヤト思召共、世ニ安カリシ訴訟ヲ大事ニ成、所司社司射殺サレ、山上山下時騒、我身ノ上ノ歎也、禰宜友實ガ頼治ニ射ラレタリシ疵ハ、我身ニ立タルナリ、血出シテ見セントテ、肩ヲ脱タリケレバ、背ノ中ニ疵アリ、疵中ヨリ血ノ出事夥シ、此上ハ如何ニ祈申サセ給共助奉ラントハエ申サジトテ、元ノゴトク舞カナヅ參詣ノ道

俗男女、御子宮司、身ノ毛竪テゾ覺ケル、〇中略良久有テ彼童御子申ケルハ、既ニ上ラセ給ハントシツルニ、北政所重テ御心ノ底ニ一ノ願ヲ發給ヘリ、長命マデコソ叶ハズトモ、半年一年ナリ共今度ノ命ヲ助給ヘ、八王子ノ御前ニテ、毎日法華講行テ、法樂ニ備ヘントナリ、此間様々ノ御願有トイヘドモ、一乘ノ法味ハ飽思召事ナシ、聞共聞共彌メヅラカ也、何レノ願ヨリモ目出ケレバ、二年ノ命ヲ奉ル、其後ハ我ヲ恨ト思召ナ、必死決定トテ、權現上ラセ給ニケリ、北政所御所ニ歸入セ給テ、此御物語有ケレバ、上下萬人身毛竪テゾ覺ケル、御託宣聊モ違ハセ給ハズ、御歷物愈サセ給テ、御心地本復セサセ給ケレバ、紀伊國田中庄ハ、殿下ノ渡庄也ケレドモ、八王子ニ御寄附アリ、是ニ依テ問答講トテ、今ニ退轉ナシ、〇下略

〔康富記〕文安五年九月廿九日壬子、是日被行贈位宣下也、西宮左大臣高明公於備前國奉勸請神云云、作社此間有託宣、曰、某村人、令成祟給之間、自地下有申請仁、就山科中將顯言朝臣經奏聞、有勅許被行之、被贈從一位者也、

〔東大寺要錄四〕諸神社

一八幡宮

筑紫豐前國宇佐郡厩峯菱潟池之間、有鍛冶翁、甚奇異也、因之大神比義絕穀三年、籠居精進、卽捧御幣祈言矣、汝神者我前可顯、卽現三歲小兒、立竹葉託宣云、我是日本人皇第十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也、我名曰護國靈驗威力神通大自在王菩薩、國々所々垂跡於神道、是初顯御坐、是卽欽明天皇御時也、

〔元亨釋書十八神仙〕白山明神者伊弉諾尊也、初泰澄法師捿越前州越知峯、常望白山曰、彼雪嶺必有靈神、我當登彼乞顯應、〇中略昇右峯、見一奇服老翁、神字閑雅、語曰、我是妙理大菩薩之弼也、名曰大己貴、西刹主也、言已又隱、自此靈感益顯著也、

紀州丹生明神者、弘仁七年、空海師遊紀州求勝地、漸上高野山、嶮岨嶺峰、林木森然、不知所之、時婦人出來曰、妾者山神也、夙負殺罪、苦處幽陰、思歸眞乘、未逢其人、今師到此、妾之幸也、此山方數百里、願施師懺罪、乃導海至山中平坦所曰、是福地也、營構於此、初唐元和元年八月、海將歸朝、泛船之日、手執三鈷杵、祈願曰、密教入日域、久隆流傳者、願此杵先占密區、便向本邦擲之、其杵飛入雲中、到此其杵懸松枝、於是知神女之言不虛也、便奏建金剛峯寺、安寶塔、高一十六丈、爲密乘興繁之勝場、神女者丹生明神也、

新羅明神者天安二年、圓珍師泛船自唐歸、洋中忽有老翁、現船艫曰、我是新羅國之神也、誓護持師教法、至慈氏下生、語已不見、珍入京、將傳來教籍、藏內書省、時海上翁來曰、此所不堪祕經書、是日域中有一勝地、我已先相攸、師闢官建院宇、庋此典籍、我鎭加護、又佛法是王法之治具也、佛法若衰、王法亦衰、語已形隱、珍歸叡山、至山王院、時山王明神現形曰、傳來經書、宜置此所、新羅明神又出曰、此地來世必有諍爭、不可置也、南行數里、是爲勝處、珍乃與新羅山王二神及二比丘、到滋賀郡園城之寺、僧敎待說寺事、既而山王廻叡嶽、新羅明神語珍曰、我卜居寺之北野、時百千容屬倏來圍繞、唯珍獨見、他人不知、於是有乘輿人、儀衞甚多、以美饌饗新羅、敎待來賀、而後乘輿人形隱不見、珍問明神、執爂者爲誰、新羅曰、三尾明神也、〈今在寺南〉自此新羅明神威靈益顯、

〔古今著聞集〈神祇一〉〕慈覺大師如法經かき給ひける時、白髮の老翁杖にたづさはりて、山によぢ上りけるが、おなくるし、內裏の守護といひ、此如法經の守護といひ、年はたかく成てくるしう候ぞと宣ひけり、たが御わたり候ぞと尋申されければ、住吉の神也とぞなのり給ける、

〔伊勢物語〈下〉〕むかしみかど、住吉に行幸し給ひけり、

我見てもひさしくなりぬ住吉のきしのひめまついく世へぬらん

おほん神げ。ぎ。や。うし給ひて

むつましと君はしら浪みづがきのひさしき世よりいはひそめてき

〔平家物語五〕もつけの事

源中納言雅頼の卿のもとにめしつかはれける、せいじが見たりけるゆめもおそろしかりけり、たとへば大内のじんぎくわんとおぼしき所に、そくたいたゞしき上らうのあまたよりあひ給ひて、ぎぢやうのやうなる事のありしに、ばつ座なる上らうの平家の方人し給ふとおぼしきを、其中よりしておつたてらる、はるかの上座にけだかげなる御しゆくらうのまし〳〵けるが、此日比平家のあづかり奉るせつたうをばめしかへいて、伊豆の國の流人さきの右兵衛のすけよりともに賜ずるなりと仰ければ、其そばに猶御宿老のまし〳〵けるが、其後はわが孫にもたび候へとぞ仰せける、せいじ夢の中に、あるらうおうに次第に是をとひ奉る、ばつ座なる上らうの平家の方人し給ふとおぼしきは、いつくしまの大明神、せつたうをよりともに賜ふとおはせらるゝは八幡大ぼさつ、其後我孫にもたべと仰けるはかすがの大明神、かう申すおきなはたけうちの明神とこたへ給ふといふ夢を見て、さめて後人にこれをかたるほどに、入道相國もれ聞給ひて、雅頼の卿のもとへ使者をたてゝ、それに夢見のせいじの候なるを給はつて、くわしうたづね候はゞやとの給ひてつかはされたりければ、彼ゆめ見たりけるせいじあしかりなんとやおもひけん、やがてちくてんしてけり、

〔日本書紀六垂仁〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜姫命、託于倭姫命、爰倭姫命求鎭坐大神之處、而詣菟田篠幡、篠此云佐佐更還之入近江國、東廻美濃、到伊勢國、時天照大神誨倭姫命曰、是神風伊勢國、則常世之浪重浪歸國也、傍國可怜國也、欲居是國、故隨大神教、其祠立於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、則天照大神始自天降之處也、一云、天皇以倭姫命為御杖、貢奉於天照大神、是以倭姫命以天照大神、鎭坐於磯城嚴橿之本而祠之、然後隨神誨、取丁巳年冬十月甲子、書紀集解作甲午遷于伊勢國渡遇宮、是時倭大神著穗積臣遠祖大水口宿禰、而誨之曰、太初之時、期曰、天照大神悉治天原、皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官

者、言已訖焉、然先皇御間城天皇、雖祭祀神祇、微細未探其源根、以粗留於枝葉、故其天皇短命也、是以今汝御孫尊、悔先皇之不及、而愼祭、則汝尊壽命延長、復天下太平矣、時天皇聞是言、則仰中臣連祖探湯主而卜之、誰人以令祭大倭大神、卽渟名城稚姬命食卜焉、因以命渟名城稚姬命、定神地於穴磯邑、祠於大市長岡岬、然是渟名城稚姬命、既身體悉瘦弱、以不能祭、是以命大倭直祖長尾市宿禰令祭矣、

〔日本書紀 九神功〕爰伐新羅之明年春二月、○神功攝政元年皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、○中略時皇后之聞忍熊王起師以待之、命武内宿禰懷皇子、横出南海、泊于紀伊水門、皇后之船直指難波、于時皇后之船廻於海中、以不能進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇居、當居御心廣田國、卽以山背根子之女葉山媛令祭、亦稚日女尊誨之曰、吾欲居活田長峽國、因以海上五十狹茅令祭、亦事代主命誨之曰、祠吾于御心長田國、則以葉山媛之弟長媛令祭、亦表筒男、中筒男、底筒男三神誨之曰、吾和魂宜居大津渟中倉之長峽、便因看往來船、於是隨神教以鎭坐焉、則平得度海、

〔日本書紀 十二履中〕五年三月戊午朔、於筑紫所居三神、見于宮中言、何奪我民矣、吾今慚汝、於是禱而不祠、

十月甲子、葬皇妃、既而天皇悔之不治神祟而亡皇妃、更求其咎、或者曰、車持君行於筑紫國而悉校車持部、兼取充神者、必是罪矣、天皇則喚車持君以推問之、事既實焉、因以數之曰、爾雖車持君、縱檢校天子之百姓、罪一也、既分寄于神祇車持部、兼奪取之、罪二也、則負惡解除善解除、而出於長渚崎、令祓禊、既而詔之曰、自今以後、不得掌筑紫之車持部、乃悉收以更分之、奉於三神、

〔江家次第 五二月〕園幷韓神祭

裏書 上卿著廳、入自宮内省南門、著神院北屋座、園韓神口傳云、件神延暦以前坐此、還都之時、造宮使欲奉遷他所、神託宣云、猶坐此處、奉護帝王云々、仍鎭坐宮内省、

〔大鏡裏書〕賀茂臨時祭事

寛平御記云、寛平元年十月壬午、從一日雨少降、未登祚○字之時、賀茂明神託人曰、自餘之神一年得二度之祭、只予一度而已、其自弘仁始得奮女幷百官供奉、不敢所怨、只悔寂寞、然秋時欲得此幣帛、是所

告佛事

以曠汝也、〇下略

〔日本紀略 十二 三條〕長和四年六月廿日戊辰、依疫神託宣、立神殿、奉崇重也、

〔百練抄 五 後堀河〕寛治三年八月十六日、諸卿定申石清水社與松尾社相論事、幷賀茂社御供事、件御供自去應德三年、依託宣供之、而於今者社司无力之由言上之故也、　四年三月廿六日、自今日始調備賀茂社神膳、依託宣云々、有奉幣、　七年五月八日、諸卿定申尾張國火上社臥木起立事、幷賀茂社託宣御馬飼事等、

頭書　江記曰、神託事、先例或用之、賀茂御供是也、或不用之、伊勢友平被止神鏡事也、

〔扶桑略記 六 元正〕養老四年九月、有征夷事、大隅日向兩國亂逆、公家祈請於宇佐宮、其禰宜辛嶋勝代豆米、相率神軍、行征彼國、打平其敵、大神託宣曰、合戰之間、多致殺生、宜修放生者、諸國放生會、始自此時矣、

〔元亨釋書 十八 神仙〕伊勢皇大神宮者、天照大神之廟也、初聖武皇帝欲創東大寺、卽思念我國家歷代奉神、今營佛宇、不知戾神意、不欲試機宜、天平十三年、勅行基法師、授佛舍利一粒、詣勢州獻皇大神宮、基於內宮南門大杉下、縛廬而居、期七日持念、告上旨、第七之夜、神殿自開、大聲唱曰、實相眞如之日輪、照却生死之長夜、本有常住之月輪、爍破煩惱之迷雲、我今逢難遭大願、如渡得船、又受難得寶珠、如暗得炬、師其持舍利藏埋飯高鄉、以賴邦家、基捧舍利、藏彼所、反都奏事、皇情大悅、上又謂朕以行基爲廟使、恐不協朝儀、十一月三日、重勅特進右僕射橘公、〇諸兄詣勢州、十五日僕射復奏、其夜上夢皇大神宮告曰、日輪是毘盧遮那也、帝得此意、爲營與言、已現日輪相、其光赫如也、帝覺感激、以故東大寺大像高一十六丈、蓋擬毘盧也、

〔類聚三代格 四〕太政官符

應以高雄寺爲定額幷定得度經業等事

請神命

右正五位下行河内守和氣朝臣眞綱等上表偁、昔景雲年中、僧道鏡辱僣法王之號、遂懷窺覦之心、遍邪幣於群神、行權謠於佞黨、爰八幡大神猶天嗣之頽弱、發猥奴之將興、神兵交鋒、鬼戰連年、彼衆我寡、邪強正弱、大神歎自威之難當、仰佛力之奇護、乃因御夢、請使者、有勅喚臣等故考從三位行民部卿清麻呂、面宣御夢之事、仍以天位讓道鏡之事令言大神、清麻呂奉詔旨、向宇佐神宮、于時大神託宣、夫神有大小、好惡不同、善神惡淫祀、貪神受邪幣、我爲紹隆皇緒、扶濟國家、寫造一切經及佛、諷讀最勝王經一萬卷、建一伽藍、除凶逆於一旦、固社稷於萬代、汝承此言、莫有遺失、○中略

天長元年九月廿七日

〔遊行上人略緣起〕夫宗祖一遍上人は、原俗姓、伊豫國領主河野七郎道廣の次男なり、○中略後宇多院建治元年の冬十二月下旬より、紀の熊野本宮證誠殿に、一百日參籠、念佛安心の正路を祈願し給に、翌る建治二年三月廿五日、大權現示現の頌に曰、六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華、此文を得悟の時より、名を一遍上人と改め給ひ、神勅に任せ、南無阿彌陀佛決定往生六十萬人の札を國中の諸民に賦算す、

〔古事記仲哀〕大后息長帶日賣命者、當時歸神、故天皇坐筑紫之訶志比宮、將擊熊曾國之時、天皇控御琴、而建內宿禰大臣居於沙庭、請神之命、於是大后歸神、言教覺詔者、西方有國、金銀爲本、目之炎耀、種種珍寶多在其國、吾今歸賜其國、爾天皇答白、登高地見西方者、不見國土、唯有大海、謂爲詐神而押退御琴不控、默坐、爾其神大忿詔、凡茲天下者、汝非應知國、汝者向一道、於是建內宿禰大臣白、恐我天皇、猶阿蘇婆勢其大御琴、自阿至勢以音、爾稍取依其御琴而那麻那麻邇控坐、此五字以音、故未幾久而不聞御琴之音、即擧火見者、既崩訖、爾驚懼而坐殯宮、更取國之大奴佐而、奴佐二字以音、種種求生剝、逆剝、阿離、溝埋、屎戶、上通下通婚、馬婚、牛婚、鷄婚、犬婚之罪類、爲國之大祓而、亦建內宿禰居於沙庭、請神之命、於是教覺之狀、具如先日、凡此國者、坐汝命御腹之御子所知國者也、爾建內宿禰白、恐我大神、坐其神腹之御子何

子歟、答詔男子也、爾具請之、今如此言敎之大神者、欲知其御名、卽答詔、是天照大神之御心者、亦底筒男、中筒男、上筒男三柱大神者也、此時其三柱大神之御名者顯也今寔思求其國者、於天神地祇、亦山神、及河海之諸神、悉奉幣帛、我之御魂坐于船上、而眞木灰納瓠、亦箸及比羅傳此三字以音多作、皆皆散浮大海以可度、故備如敎覺、整軍雙船度幸之時、海原之魚不問大小、悉負御船而渡、爾順風大起、御船從浪、故其御船之波瀾、押騰新羅之國、旣到半國、於是其國主畏惶奏言、自今以後隨天皇命、而爲御馬甘、每年雙船不乾船腹、不乾柂檝、共與天地無退仕奉、故是以新羅國者定御馬甘、百濟國者定渡屯家、爾以其御杖衝立新羅國主之門、卽以墨江大神之荒御魂、爲國守神而祭鎭還渡也、

〔古事記傳三十〕さて然神の命を請ふには、必琴を彈ことにて、其琴上に其神の降來坐て、人に託りて命をば詔ふなり、此事彼天詔琴の處にも云るが如し、考合すべし、なほ萬葉九二十六丁に、神南備、神依板爾、爲杉乃とある神依板も此にて神の託坐料の板なり、大神宮儀式帳六月例に以十五日夜乃亥時、第二御門仁、御巫內人仁御琴給氏、大御事請氏、以十六日從宮西河原仁退出云々、また九月神嘗祭條にも以十五日云々、以同日夜亥時御巫內人乎、第二御門爾令侍氏、御琴給氏、請天照坐大神乃神敎氏、卽所敎罪事乎、自禰宜館始、內人物忌四人館別解除淸畢云々、また御巫內人職掌條にも三節祭、十五日夜、以亥時第二御門令侍、木綿蘰御琴給氏、請大神御命云々、同宮年中行事、六月御祭、十五日條に、御巫內人自外幣殿鵄尾琴請、件御門外東方儀、御殿向先詔刀中、其詞云、云云等不淨事疑於御前御占淸淨令占定給恐々申、次以箒御琴搔三度、每度有警蹕、次奉下神、其御歌、阿波利矢、遊波須度万宇佐奴、阿佐久良仁、天津神國津神、於利万志万世、阿波利矢、遊波須度万宇佐奴、安佐久良仁、余留伊賀津千毛、於利万志万世、阿波利矢、遊波須度万宇佐奴、安佐久良仁、上津大江下津大江毛、摩伊利太万江云云、御巫內人以同詞又申、御琴搔、內嚕件嚕音鳴以濟知、以不鳴不淨知也、云云、其後又御巫內人三度御琴搔、警蹕之後、奉上神、御歌知本、但所奉下神御名中、今度歸御申云云とあるも、儀式帳に見えたると同度の事なり、とあるは、上代の禮の遺れりしなり、何事も漢樣を學ぶ世になりては、上代の禮儀は多く亡て、たゞ後世までも神事にぞ、かつ〳〵も殘れる事はありける、今世にも古き神社には琴の板とて板を叩きて神を降來るかたを行ふ事往々あり、かの萬葉の神依板、思合すべし、抑此の神の御命を請奉る事、上代には人心直かりしかば、正しき御諭の必有しを、後にはなまさかしき漢心になりて、神の御命をも疑ひて、信ぬこと多くなり來ぬるままに、正しき御諭も無きが如くなれるなり、

〔日本書紀神功九〕九年○仲哀三月壬申朔、皇后選吉日入齋宮、親爲神主、則命武内宿禰令撫琴、喚中臣烏賊津使主、爲審神者、因以千繒高繒置琴頭尾、而請曰、先日教天皇者誰神也、願欲知其名、逮于七日七夜、乃答曰、神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉、亦問之、除是神有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾田節之淡郡所居有之也、問亦有耶、答曰、於天事代於虛事代玉籤入彥嚴之事代神有之也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、於是審神者曰、今不答而更後有言乎、則對曰、於日向國橘小門之水底所居而水葉稚之出居神、名表筒男、中筒男、底筒男神有之也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、遂不言且有神矣、時得神語、隨教而祭、然後遣吉備臣祖鴨別令擊熊襲國、未經浹辰而自服焉、　九月己卯、令諸國集船舶練兵甲、○中略爰卜吉日而臨發有日、○中略既而神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、和魂、此云珥岐瀰多摩、荒魂、此云阿邏瀰多摩、即得神教而拜禮之、因以依網吾彥男垂見爲祭神主、　十二月辛亥、生譽田天皇○應神於筑紫、○中略於是從軍神、表筒男、中筒男、底筒男三神、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰、啓于皇后曰、神欲居之地必宜奉定、則以踐立爲祭荒魂之主、仍祠立穴門山田邑、

〔釋日本紀十一述義七〕播磨國風土記曰、息長帶日女命欲平新羅國下坐之時、禱於衆神、爾時國堅大神之子爾保都比賣命、著國造石坂比賣命教曰、好治奉我前者、我爾出善驗而比々良木八尋桙根底不附國、越賣眉引國、玉匣賀賀益國、苦尻有寶白衾新羅國矣、以丹浪而將平伏賜、如此教賜、於此出賜赤土、以其土塗天之逆桙建神舟之艫舳、又染御舟裳及御軍之著衣、又攪濁海水渡賜之時、底潛魚及高飛鳥等、不往來、不遮前、如是而平伏新羅已訖還上、乃鎭奉其神於紀伊國管川藤代之峯、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年十一月壬子、大隅國司言、從今月二十三日未時至二十八日、空中有聲、如大鼓、野雉相驚、地大震動、　丙寅、遣使於大隅國、檢問、并請問神命、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年九月己丑、○中略初大宰主神習宜阿曾麻呂、希旨方媚事道鏡、因矯八幡

神託敍位任官

神敎言、令道鏡卽皇位天下太平、道鏡聞之深喜自負、天皇召淸麻呂於牀下勅曰、昨夜夢、八幡神使來云、大神爲令奏事請尼法均、宜汝淸麻呂相代而往聽彼神命、臨發道鏡語淸麻呂曰、大神所以請使者、蓋爲告我卽位之事、因重募以官爵、淸麻呂行詣神宮、大神託宣曰、我國家開闢以來、君臣定矣、以臣爲君未之有也、天之日嗣必立皇緖、無道之人宜早掃除、淸麻呂來歸奏如神敎、於是道鏡大怒、解淸麻呂本官、出爲因幡員外介、未之任所尋有詔、除名配於大隅、其姉法均還俗配於備後、

〔日本後紀桓武八〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣淸麻呂薨、○中略寶字八年、大保惠美忽勝叛逆伏誅、○中略此時僧道鏡得幸於天皇、○中略出入警蹕、一擬乘輿、號曰法王、太宰主神習宜阿蘇麻呂媚事道鏡、矯八幡神敎言、令道鏡卽帝位、天下太平、道鏡聞之、情喜自負、天皇召淸麻呂於牀下曰、夢有人來、稱八幡神使云、爲奏事請尼法均、朕答曰、法均軟弱、難堪遠路、其代遣淸麻呂、汝宜早參聽神之敎、道鏡復喚淸麻呂、募以大臣之位、先是路眞人豐永爲道鏡之師、語淸麻呂云、道鏡若登天位、吾以何面目可爲其臣、吾與二三子共爲今日之伯夷耳、淸麻呂深然其言、常懷致命之志、往詣神宮、神託宣云々、淸麻呂祈曰、今大神所敎、是國家之大事也、託宣難信、願示神異、神卽忽然現形、其長三丈許、色如滿月、淸麻呂消魂失度、不能仰見、於是神託宣、我國家君臣分定、而道鏡悖逆無道、輙望神器、是以神靈震怒、不聽其祈、汝歸如吾言奏之、天之日嗣必續皇緖、汝勿懼道鏡之怨、吾必相濟、淸麻呂歸來、奏如神敎、天皇不忍誅、爲因幡員外介、尋改姓名、爲別部穢麻呂、流于大隅國、尼法均還俗、爲別部狹虫、流于備後國、

〔續日本紀光仁三十〕寶龜元年八月辛卯、○中略使雅樂頭從五位下伊刀王受神敎於住吉神、

〔續日本紀孝謙十八〕天平勝寶二年十月丙辰朔、詔授正五位上藤原朝臣乙麻呂從三位任太宰帥、以八幡大神敎也、

〔扶桑略記後朱雀二十八〕長曆三年八月七日、祭主大中臣兼興任若狹守、依託宣停祭主也、

神託爲姓

齋宮神託

〔續日本紀十二聖武〕天平九年十一月壬辰、宴群臣於中宮、敍位正六位上大倭忌寸小東人、大外記從六位下大倭忌寸水守二人、賜姓宿禰、自餘族人連姓、爲有神宣也、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶七年三月丁亥、八幡大神託宣曰、神吾不願矯託神命、請取封一千四百戶、田一百四十町、徒无所用、如捨山野、宜奉返朝廷、唯留常神田耳、依神宣行之、

〔大神宮諸雜事記二〕長元四年六月十七日、大神宮御祭也、仍齋內親王依例參宮、着於齋王殿、又男女官等同參詣、祭主宮司參宮了、而御玉串供奉以前仁忽大雨降天、雷電穿雲光耀天、天地震動、仍參詣集人迷心神成恐之間、齋王俄放音叫呼給、祭主輔親朝臣遣召須、仍祭主禰宜等、引率齋王殿參、而齋王御託宣云、我皇大神宮之第一別宮荒祭宮也、而依大神宮勅宣天、此齋內親王仁所託宣也、故何者、寮頭相通、幷妻藤原古木古曾及數從者共仁、年來間狂言之詞巧天、我夫婦仁二所大神宮翔付御坐、男女之子共仁荒祭高宮乃付通給也、女房共和仁今五所別宮乃付給也止號志天、巫覡之事遠謹陳天、二宮化異之由遠稱須、此尤奉爲神明毛仁、奉爲帝王毛仁、極不忠之企也、皇大神宮高天原和與天降御之後、人間仁未寄翔御須、而件相通夫婦仁、件無實之詞稱出天、以狂言驚人間之耳目事和、甚無禮之企也、須一日仁與神別也、然而爲後代爲天下仁、無止祭庭仁志天、齋內親王令託宣也、是則以件相通等令處重科天、欲令配流也、依伊賀神戶之訴、伊賀守光清被配流畢、其根元極難有狹少事、依神事御事之餘也、何況今夜託宣、尤神妙奇特事也、祭主輔親以我託宣旨、早可上奏公家也者、其御託宣間仁、御神殿御酒召古止數十坏也、其次和歌一首令詠御須、御酒盞於祭主仁下賜之、隨則祭主依宣天作御盞賜預天、三獻御御和歌進上、既了御託宣之旨條々雖有具不記、爰寮頭相通妻子共、即時仁從神宮差使、宮掌大內人度會弘行、大小內人祝部等追越御川之間、洪水俄滿天、人馬雖不往反、依恐御託宣天、不顧時剋追渡了、〈○中略〉以同十九日祭主記件御託宣之由、三員司幷大神宮神主寮官主神司進署名天、祭主解狀幷寮解等相副天上奏了、內侍別當女房一々被奉御消息於本院、又了、以同日亥時齋王歸着

齋宮了、其後以七月六日巳時、大神宮六禰宜正六位上荒木田神主延基、權禰宜大物忌父同氏貞、大少內人等五人祝部等、外宮五禰宜正六位上度會神主常親、權禰宜大物忌父氏茂、大少內人五人祝部等寮頭館仁到著天、寮頭乃造立禿倉二字城外持出、令四保住人燒掃既了、是則依祭主下文、二宮神官所行申也、件禿倉和荒祭高宮御殿號造立也、同年八月四日宣旨到來偁、右大臣宣、奉勅齋宮頭藤原相通幷妻子等尋捕慥加守護、依有可糺定事、宜仰彼國尋捕其身加守護隨彼仰參上、同月十二日、宣旨到來偁、右大臣宣、奉勅件宣旨者、寮頭被配流之由也、寮頭相通者佐渡國、妻古木古曾子者隱岐國仁宣旨具也、同十八日宣旨到來偁、右大臣宣、奉勅領送流人藤原相通等小木古曾等之使左衞門府生秦茂近、右衞門府生淸內永光等于今遲怠、早不進發之由有聞、仍早爲令追立也云々、使々部伴安枝、越知若光等也、(永光遣隱岐國使、茂近遣佐渡國使、)同月廿日宣旨偁、右大臣宣、奉勅流人藤原相通、可配流佐渡國之由給官符先了、而可配流伊豆國、宜加下知、先出伊勢國堺、暫留路次國、相待後官符、令發向配所者、同廿三日官符偁、右爲領送流人藤原相通、差件等人發遣如件、遣伊豆國官符也、

〔左經記〕長元四年八月四日己卯、入內、頃之右府被參入、頭辨仰右府云、去六月伊勢齋王參大神宮之間、荒祭宮付齋王有託宣云々、祭主輔親朝臣可令問其趣者、右府則頭辨令召輔親、輔親參入、令頭辨問託宣之旨、良久之後、頭辨申事由、(齋々於御書所自問之云云、其趣云、齋王參外宮祭了、次參內宮、欲始事之間、忽大風雨電殊甚、供奉諸司爲恐之間、荒祭宮付齋王、託宣種々也、其中齋宮寮頭藤原資通妻女、年來宅內作大神宮寶殿、而稱大社(社恐神誤)仰、誑惑愚民、是甚無禮者也、早可配流、若不然者、奉爲公家幷齋王關白、可恐、又恒例神事、臨時奉幣幷馬等、甚疎略也、是不可然之事也、自此事等之外、公家無可聞食驚事云々、)卽被仰可奏之由、(此間忽大雨雷電、群卿頗爲恐、)辨奏之、傳勅云、資通所爲甚以非常、如託宣可配流也、遠近如何、又其妻雖不入託宣、事之起在彼女、同可流歟、若可流者、可在輕重歟、又可被申聞食恐之由歟、若可被申者、以祭主輔親可被爲使歟、將可立遣他人歟、可定申者、右府幷民部卿權大納言、侍從中納言、右兵衞督、左大辨、幷余相議被奏云、夫妻共可被處遠流歟、又尤可被申恐之由也、但祭主是恒例使也、於此度者、事已大事、以可然人可被祈申歟、仰聞食了、擇無忌之日可被行配流事

云云、又流女之例可尋之由有仰云云、又可被立使日時可令勘申者、右府仰辨令勘日時被奏、廿五日云々〇

又見二小右記一

〔日本紀略 後一條 十四〕長元五年八月廿日己未、仰明法道令勘申出雲守橘俊孝言上杵築社顚倒并託宣事無實之由、又以官位授人罪科事、

〔百練抄 後一條 四〕長元五年九月廿日、略〇廿日、日本紀作二廿七日一出雲守橘俊孝勘罪名、配流佐渡國、是杵築社顚倒并有神託由奏聞、仍遣實撿使之處、皆無實之故也、

或記云、稱託宣授官位於人云々、

〔春記〕長暦四年〇長久元年八月十四日丙申、有召參御前、密被仰云、只今自齋宮送書云、從先日可祈申顚倒事之由遣示、仍祈申之間、有託宣、託宣云、奉幣使參入由云々、而御假殿之間、神居不宜、外人參入奉拜願可無便也、神居復尋常之後可奉遣者、　十七日己亥、俊平來談伊勢口事、託宣速々不絶、中臣清佐一日自齋宮參上、有託宣事云々、彼宮女房密々示送云、外宮顚倒事、非主上御愼、只天下可有大事、其事在近之由託宣云々、　廿日壬寅、參皆殿、命云、一日皇后宮大夫相談云、伊勢託宣太以索々也、此間事等俊平頼兼等任意增減其事云、亦有事也、人心不可謀、可恐々々云々、奉幣延引事是依託宣云云、〇中略齋宮主神司清佐來云、先日參上已經四五日、爲宮御使所參上也者、談云、先日託宣云、天下女有大事歟、公家大可歎息給事也者云々、其後外宮顚倒、是世間之大事也、若又他事歟、不可知云々、又其後託宣云、依政務不直、御神早所避給也、天下之事、以非道爲宗、更無術、但此徴非給公家御事、奉幣使可被奉遣事御所極輕々也、猶復舊之後可有左右歟、如此事太以多々也、不可申盡云々、是只御乳母内侍之外又不託宣他人者

〔百練抄 堀河 五〕寛治七年二月二日、祭主親定、大宮司公房、前宮司國房等、自所訴神宮重事六ヶ條、於大膳職對問、〇中略大内人友平稱託宣、陣人々濫觴事等也

〔源平盛衰記二十八〕源氏追討使事

壽永二年四月十七日、木曾仲○義追討ノ爲ニ官兵北國ニ發向、其ヨリ東國ニ責入テ頼朝ヲ誅スベシト聞ユ、大將軍ニハ權亮三位中將維盛卿、越前三位通盛卿、薩摩守忠度、左馬頭行盛、參河守知度、但馬守經正、淡路守清房、○中略暇申テ打出給フ處ニ、白淨衣ニ立烏帽子著タル老翁六人、梅ノ楉ニ卷數付テ各捧テ、六人ノ大將軍ニ奉ル、門出ヨシトテ、弓ヲ脇ニ挾ツヽ、各卷數ヲ披テ讀給ケルゾ面白キ、

第一維盛卿　堯雨斜灑　平家平國　頓河伐流　源子失源　嚴嶋明神ヨリ
權亮三位中將殿ト書レタリ

第二通盛卿　平家庭上　立不老門　源氏逢苑　放毒箭鏃　嚴嶋明神
越前三位殿ト書レタリ

第三行盛朝臣　東海榮花　開平家園　嚴嶋神風　破源氏家　嚴嶋明神
左馬頭殿

第四知度朝臣　平家繁昌　白駒滾庭　源氏衰浪　漁翁失船　嚴嶋明神
參河守殿

第五經正朝臣　日本放日　平家餘風　太白犯星　源氏物怪　嚴嶋明神
但馬守殿

第六清房朝臣　平家如王　源氏能敬　源氏似鼓　平家打之　嚴嶋明神
淡路守殿トゾ侍リケル

六人各馬ヨリ下テ再拜シ給ヒケルゾ目出キ、馬引給ハントシケルニ、翁ハ化シテ失ニケリ、是ハ實ノ嚴嶋明神ノ嚴重ノ御示現希代ノ不思議也、明神コレ程御託宣ノ上ハ、平家繁昌源氏衰滅ノ

三社託宣

條疑アラジトコソ悦アヘリケレ、後ニ聞エケルハ、彼嚴嶋ノ神主平家ヲ奉祈志、心中ニ深シテ、合戰ノ門出ヲ奉祝作事ニテゾ有ケル、

〔北條九代記 九〕時頼入道與青砥左衛門尉政道閑談

神職祝部ノモノハ、神道ノ深理ヲトリ失ナヒ、陰陽顯冥ノ相ニ惑ヒ、祈禱ニ綠ヲヨセテ財寶ヲムサボリ、託宣ニ詞バヲ假テ利欲ヲムネトス、

〔德川禁令考後聚 二十三〕祈禱之奇瑞ニ而出候旨可申觸と有體不申出社人咎之事

延享元年十月御仕置之例

大傳馬鹽町 平七店 伊藤若狹

此もの儀、岩附町喜右衛門方之旅人幸助久次郎所持之金子被盜取候盜人喜兵衛と馴合候儀は無御座候得共、最初金子之儀番所江訴出候節、稻荷神前江金子投込、岩附町江屆候樣ニ申候趣有體に不申取拵申出其上此度祈禱仕候故被盜候金子出候と世上江申觸し候はゞ、稻荷信仰之もの多く可相成と大慶成儀と存候旨申候得ば、畢竟此以後若狹祈禱に奇瑞有之由可申觸仕方巧成儀に御座候間、江戶拂可申付候哉、

御差圖

奇怪異說申觸候もの江戶拂之御定候は、拵事を致、咸少之事を色々取繕申立候もの共之事に候、此もの儀は有體を不申迄之儀に候、江戶拂に不及、過料可申付事、

〔運歩色葉集作〕三社託宣

八幡大菩薩　雖食鐵丸不受心汚人之物、雖坐銅焔不到心穢人之處、

天照皇大神宮　謀計雖爲眼前利潤必當神明罰、正直雖非一旦依怙終蒙日月憐、

春日大明神　雖曳千日注連不到邪見之家、雖爲重服深厚可赴慈悲之室、

〔諸神本懷集末〕天平勝寶元年、八幡宮ノ御託宣ニイハク、タトヒ銅柱鐵牀ニハフストモ、邪幣ヲバウクベカラズ、汙穢不淨ノ身ヲバキラハズ、タヾ諂曲不實ノコヽロヲイム、タトヒ千日ノシメヲカクトモ、邪見ノカドニハノゾムベカラズ、タトヒ二親ノ重服ナリトモ、慈悲ノイヘニハハナルベカラズトノタマヘリ、

〔眞言假名聖教闕典錄六〕批評云、此鈔本懷集○諸神ハ存覺上人三十五歲、元亨四年ノ春正月、了源ノ所望ニ依テ、先ヨリ流布セシ諸神本懷集ノ不審ナル所ヲ改テ、添削ヲ加テ授與スルノ由、法要ノ原本ノ尾ニ跋アリ、サレバ此鈔ハ存覺師ノ始テ撰述シ給フニ非ズ、元ヨリアリシヲ删修シ、コレヲ傳フル者ナリ、

〔八幡愚童訓下〕神護景雲三年七月十一日御託宣、意汚ハシク、オノガ分ヲ不知、愚癡巧謀シテ夏虫火ニ入如ク、貪欲迷惑シテ好惡衆生ヲバ、諸天厭神祇拂給也、銅ノ火ムラヲ飯ト食ストモ、意穢シキ人物ヲバウケズ、正眞○眞恐直誤人ノ頭ヲ捿トス、諂曲人ヲバ不稟、

〔親長卿記〕長享三年六月廿八日、今日吉田二位兼俱來閑談、○中略三社託宣事者、同夜ニ彼是ニ有託宣云々、

天照大神ハ

八幡大菩薩ハ

春日大明神ハ伊比丸ニ託宣云々、兩予忘、八幡ハ、已前ハ爲權現、後於宇佐宮託宣大菩薩、

〔宣胤卿記〕文龜二年二月十一日甲寅、侍從二位兼俱卿所望之三社託宣幷天神名號、行海律師所望弘法大師卅二相、繼友ガ天神名號、以上今日書之遣之、三社託宣服中所不可書之由、兼俱卿演說、任彼商量了、十七日庚申、三社託宣一幅、兼永朝臣所望書之、三月十三日乙酉、自花恩院、○中略三社託宣短冊三有下給、予本ニ所望云々、十八日庚寅、花恩院所望之三社託宣以下書之、

〔甲陽軍鑑〕一甲州法度之次第

毎遍不可虚言事

　神託云、雖非正直一旦依怙、終蒙日月之憐、

〔甲陽軍鑑〕十七金丸平三郎爲落合彦助被伐事、幷長坂源五郎被誅事、

日本あるじ天照皇大神宮の御託に、謀計は眼前の利潤たりといへども、必神明の罰をあたると也、

〔三社託宣略抄〕託宣起之事

今此三社ノ託宣ノ起リハ、正應年中、大和國奈良ノ京、東大寺ノ東南院聖珍親王ノ御時、庭前ノ池水ニ天照大神、八幡大菩薩、春日大明神、三社ノ託宣ノ文字アキラカニ顯レタリト也、〇中略一說ニハ、日本ハ神國ニシテ、唐土天竺ニモ勝レテ、神變不思議ノ國ナリ、上代ハ上下トモニ人モ正直正路ヲ面トシテ、少シモニガミタル事ナシ、然レドモ末ノ世ニクダリテ、人ノ心モヨコシマニ曲ミ行ニヨッテ、神慮ノ御惠モウスクナレル者ナリ、是ニヨッテ三社ノ御神ハ、末ノ世ノ人ノ心ヲ正シク直クセン爲ニ、吉田ノ神主ニノリウツリ給ヒテ、心ヲ知ヤスク、言葉ヲヤハラゲテ、三社ノ神各ノ託宣シ玉フト也、

〔新蘆面命〕坤三社託宣は、垂加〇山崎嘉の仰られしは、託宣にはあらず贊なり、中は嵯峨天皇の贊、八幡は弘法大師、春日は吉田兼延の贊なり、

〔俗神道大意〕四此ハ垂加ノ様アッテ云ツタコトカ、何サマニモ贊トイフ套ノモノデゴザル、

〔古今神學類編〕四十五祭祀三社託宣

世ニ所謂三社託宣ト云者ハ、神樂岡記、又ハ愚蒙訓ナドニ見エタリ、今世ニ行フ三社託宣抄ト云物ヲ閲セシニ、九十一代伏見院正應年中ニ、大和國奈良東大寺東南院ノ池水ニ文字分明ニ浮ブ

トモ、亦吉田神主ニ憑リテ三社共ニ託シ給フトモ云ヘリ、而シテ今時此三社託ト稱スル者、牀上ニ掛ルヲ見ニ、其託多種ニシテ不一決モ有之、天照大神ノ託ナド、彼神宮雜事記ニ所謂行基師ノ聞シ神託ヲ書シタルモアリ、沙石集ニハ此天照大神ノ託ト稱スル者ヲ載セテ聖德太子ノ語也ト侍リ、其出據ハ聖德太子御記文ト稱スル書ニ有之、又少異文アリ、其文曰、謀計爲眼前之利潤、終當神明之罰、正直者非當時之依怙、遂蒙日月之惠ト云々、又或記ニハ、三社託バ卜部兼豐之擬作也トモ云ヘリ、不知是非、又正直ノ頭ヲ照スト云ル語ハ倭姫世記ニ出タリ、雄略天皇御宇ニ、大神託倭姫命曰、日月廻八洲雖照六合、當照正直之頭ト云々、或人云、三社託出據ハ、天照大神ノ託ハ、嵯峨天皇以來流布セリ、八幡ノ託ハ、宇佐宮舊記ニ出タリ、春日託ハ、卜部平麻呂以來ノ傳説ナリト、又或説ニハ三社ノ神像ヲ畫キテ、彼三託ヲ書スル事アリト、○中略余倩此三神託配合ヲ按ルニ、伊勢八幡ハ宗廟ト云ヒ、春日ハ神代ヨリ臣家ノ大祖ニ坐テ、其神德ト申シ、後世君臣ノ二祖神ナレバ、殊ニ古クヨリ如斯此神託ヲ牀上ニ掛テ、其神恩萬民ニ蒙ル事ヲ敬尊シ奉ル事歟、然レドモ三神託ヲ掲見ス事ハ、何人ノ所爲ト云事未見之、託宣ノ始末、後世襲テ衆説ヲ設クト云ヘドモ、大和論語ニ出タルヲ取テ言ヲ添タル者ト見エタリ、○中略而テ千日注連ヲ引ドモノ託ハ、諏訪ノ神託中、其外ノ託中ニモ往々見ユレバ、古語神託ノ常語也ト見タリ、此書ノ趣ヲ取捨スル事尤明矣、故何ントナレバ、此神託眞名ニ不可書ノ由緒アレバ也、彼書序云、後鳥羽院御宇、穀倉院清原良業蒙勅語、用倭字至神託、及聖帝金言、公武忠言、貴女至言、幷釋子芳言、悉以記錄之ト云々、○中略唯是故實ヲ味テ以テ神託ノ則トスベキ者歟、

〔廣益俗説辨神祇四〕三社託宣の説

俗間に三社託宣とて流布するものあり、そのかみ三社の神、倭姫皇女に告給ふといふ、あるひは正應年中に此文字、大和國東南院の池にうかぶといふ、○中略

今按るに、此託宣俗間に傳ふるばかりにて、正史實錄神書に見えず、其語いやしく其理つたなし、無住法師が沙石集に、聖德太子の御ことばに、謀計雖、爲眼前之利潤、終當佛神之罰、正直雖非一旦之依怙、必蒙日月之哀と記するをみて、三社託宣には、厩戸皇子擬神託妄作せられしことを知ぬ、信するにたらざることなり、

〔廣益俗說辨遺編 三十或問〕或問、足下の俗說辨に、三社託宣を神託にあらずとそしれり、去かれども後人の作にもせよ理たゞしければ取べしといふものありいかむ、答ていはく、此託宣文勢いやしきのみにあらず、義理またつたなし、○中略右の託宣に貪鐵丸、坐銅焔などの語を見れば、厩戸の作といへるもうたがはし、恐らくは文盲なる僧巫の作なるべし、若神託を用とならば、倭姬世記、鎮座本紀、傳記、次第記、本緣、寶基本記、類聚本源等に神託を多くのせたり、神驗の人に請て書しむべし、何の闕たる事ありて三社託宣のみにかぎらんや、識趣の凡陋笑ふべし、

〔神道獨語〕神道者の說に、神道の本は三社の託宣に在りといへり、是謬說也、其託宣は何れの天皇の御宇、何の年月日何の國何人に託し給ひし神語なるや、時代も出所もなき根なし事也、總而何の三神和歌三神、軍陣三神の類なりといふは、皆阿彌陀の三尊のまねをしたる也、かの三社、天照大神、八幡大菩薩、春日大明神の三神も亦同じ、沙石集梶原景時が孫無住法師が作卷六、正直之人實を得事と云條に、聖德太子の御詞には、謀計雖爲眼前利潤、終當佛神之罰、正直雖非一旦依怙、必蒙日月之哀、まことなるかな、心あらん人ふかく此心を存べき也云々、此太子の語を先に置、謀計と云語を後に置替へ、佛神の佛の字を明の字に改め、當の字を蒙の字に改め、哀の字を憐の字に改て、天照大神の託宣にこしらへたるなり、八幡と春日との神託は新作也、八幡の神託の鐵丸銅焔は、地獄めきたる語也、佛者の口氣あり、春日の神託の邪見と慈悲は佛家の語也、何も其語溺して古雅ならず、兩部習合家の僞作也、神託に非るを神託也と僞るは正直に非ず、心汚邪見の人の謀計也、必日月神明の罰を蒙り

しならん、笑べし、

〔一話一言二〕三社託宣

三社託宣といふは、嵯峨天皇の御作にて、三社の御讚なるよし或書に見えたり、

〔日本書紀十四雄略〕九年三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也、天皇由是不果行、

〔倭姬命世記〕天皇〇雄略卽位二十三年己未二月十五日、略倭姬命召集於宮人及物部八十氏等宣久、〇中略大神託宣摩志木、〇中略摩志日月廻四洲、雖照六合、須照正直頂止詔命明矣、

〔八幡愚童訓上〕神龜元年、筑前國若楫山香椎宮造、崇聖母大菩薩〇神功皇后給ヘリ、正直者頭ト梢平楫枝我可往御誓アル故トテ、余所杉木立事替、此社頭梢々平生タリ、

〔八幡愚童訓下〕大菩薩〇八幡氣比社トハ甚深御契約不淺、故御託宣ニハ、我ニ幣帛ヲ奉者、第一間可申トアリ、參詣人々可知之、正月元日朝拜神事モ第一間ヨリ參始儀式アリ、但當宮武内大明神寶殿乾方奉崇、第一間事、一說口傳舊記注ス處也、叢蘭欲茂秋風破之、王者欲明讒臣蔽之ト云ル樣、大菩薩如何正直ナラント思食共、執事大臣讒佞ニ坐マサバ違事モ有ヌベシ、臣以君爲心、君以臣爲體、心安ケレバ體安、君泰卿臣泰ナリ、無心章於中、而體悅於外、君憂於上、而臣樂於下ザルガ如ク、大菩薩正直頭ヲ拔シ、武内無實讒奏ヲ歎給、君臣一心上下無違、

〔十訓抄七〕光明山といふ山寺に老尼有けり、いかなるにや、日吉付なやまし給ひて、さま〳〵託宣ども聞えける時、〇中略八幡大菩薩忝正直の者の頭にやどらんと誓はせ給に合て、

わりきつゝきつゝみれ共いさぎよき人の心をわれ忘れめや、とよませ給へるたのもしさよ、

〔廣益俗說辨四神祇〕神は正直の頂にやどるといふ說

俗說云、神は正直の頂にやどるといふは、なまじひに書をよめば心高上になり、物をうたがふ事出來てよろしからず、たゞ童のやうに何ごゝろもなきが、かへつて神明感應ましますなり、これ

を正直の頭に神やどると云なり、

今按るに非なり、是は忌部正通が神代口訣に、古語大道、而僻疑嬰見、心求神聖など有を見あやまりていへるにや、○中略神は正直の頭にやどるといふ語は、倭姫世記曰、○中略冥加以正直為本、日月雖照六合、須照正直頭、是身の私欲に克て其心の徳を全くするをいふ、○中略是正直を守る意なり、

〔續日本紀稱德二十七〕天平神護二年四月丙申、奉八幡比咩神封六百戸、以神願也、

〔類聚三代格一〕太政官符

應檢察神託宣事

右被大納言正三位藤原朝臣園人宣偁、奉勅、怪異之事、聖人不語、妖言之罪、法制非輕、而諸國信民狂言、申上寔繁、或言及國家、或妄陳禍福、敗法亂紀、莫甚於斯、宜仰諸國令加檢察、自今以後若有百姓輙稱託宣者、不論男女、隨事科決、但有神宣灼然其驗尤著者、國司檢察定實言上、

弘仁三年九月廿六日

〔水鏡下嵯峨〕五年○弘仁の春、傳教大師もろこしへわたり給ひしをりの願をとげむとて、つくしへおはしてほとけをつくり經をうつし給ふ、又うさの宮の神宮寺にてみづから法華經を講じたまひしに、大菩薩託宣し給ひて、われ久しくのりをきかざりつ、いまわがためにさまざまのくどくを行ひたまふ、いとうれしき事なり、わがもてるころもありとのたまひて、託宣の人、御殿に入て紫の七條の御けさ一帖、むらさきのふすま一領を大師にたてまつり給ひき、ねぎはふりなど、むかしよりかゝることをいまだ見きかずと申侍りき、其けさふすまいまにひえの山にあり、

〔大鏡二左大臣師尹〕内裏燒けて度々造らしめ給ひしも、圓融院の御時の事なり、匠ども裏板どもを、いとうるはしくかなかきてまかり出つ　又のあしたにまゐりて見るに、きのふのうらいたに、

物のすゝけて見ゆるところのありければ、はしにのぼりて見るに夜のうちに虫の喰めるなりけり、その文字は、つくるとも又も燒けなん菅原やむねのいたなのあはぬかぎりは、どこそありけれ、それもこの北野のあらはし給へるところそは申めりしか、

〔本朝續文粹一雜詩〕參安樂寺○在太宰府　　江都督○大江匡房

康和二年秋、淸涼八月時、我詣安樂寺、寺在東北陲、○中略昔有南峯僧、入定見金姿、大聖威德天、昭臨作二麗、率百萬猛靈、主傍千靈祇、皇居頻有火、制造課班倕、虫成卅一字、板上著其詞、○下略

〔古事談五神社佛寺〕住吉大明神託宣云、昔伐新羅之時、吾爲大將軍、日吉爲副將軍、其後伐將門之時、日吉爲大將軍、住吉爲副將軍、是依天台宗之繁昌、日吉受法施無限、威德倍增之故也云々、

〔日本紀略三村上〕天曆元年九月十五日丙寅、召祭主大中臣賴基、於左衞門陣外被仰依天變幷神託宣等、可有兵革事可祈申之由、

〔左經記〕長元七年十一月十九日乙巳、左中辨被示、今曉寅刻采女備後、稱伊勢御神託宣有所申事等之中、從今日三箇日之間、禁中可被愼火事云云、權辨爲中使參殿申事由云云、相次有二十一ヶ寺御誦經、若依託宣歟者、

〔長門本平家物語五〕應神天皇と申は、今の八幡大菩薩の御事なり、○中略御本地事石體にあらはれ給へり、石體の文はふかさ八寸ゑり入たる金銘云、

昔於靈鷲山、說妙法華經、今在正宮中、示現大菩薩、

と也、

〔吾妻鏡二十二〕建保四年正月十五日己巳、相模國江嶋明神有託宣、大海忽變道路、仍參詣之人無船之煩、

〔廣益俗說辨四神祇〕人平に生丸力といふ託宣の說

俗説に人倫の出生すること、天照大神の神力によれり、是によつて伊勢の二字は、人ㄧ生丸力といふ神託より出たりといふ、

今按るに非なり、伊字の旁は尹字にして、平字にあらず、勢字の偏は幸字にして、生字にあらず、殊に二字ともに漢字なれば、其誤明なり、山崎垂加本朝社語にも、伊勢則五瀬二字之倭訓、出自五十鈴川之名也（伊勢風土記云、取國神伊勢津彦命之名、號伊勢、與社名異也、）といへり、思ふに右の妄説は漸く草字を知て、眞字を知ざる者の云出せることとなるべし、

○按ズルニ、勢字の偏は幸字にして生字にあらずト云ヘルハ非ナリ、此字ノ偏ハ⿱ナリ、

〔廣益俗説辨殘編四十五或問〕又問、一書に神託をのせていはく、もろこし西天の敎を信じて、神明のみことのりをおさはかに思はん衆生をば、重き病をさづけ、嬰兒をうしなひ、從者をしりぞけんとあり、いかむ、

答云、黑白しらぬが凡夫の情なれば、矜不能の御心こそおはすべきに、左はなくして、儒佛の敎をうやまひ、神明の託宣をおさはかに思ふがにくきとて、推て重病をうけさせ、東西わかたぬ嬰兒を殺し、科もなき從者をしりぞけ給はんは、恐らくは神明の御こゝろに有べからず、後人の擬作するところ、毎々矛盾かくのごとし、

〔神路事編三〕神託の事

ある人の曰、神は虛にして靈有とて形はなき物也、形なくして物いふ事有べからず、神託とは心元なし、答、我朝の歷史に委し、看るべし、形無きに社を建、宮所を營む事有べからず、神佛兩道より神馬神寳の類まで、形なき神に用ゆる事有べからず、形あるの歷跡爲をもつて計べし、（下略）

〔歌林四季物語二〕廿五日（二月）二の宗廟の神事やんごとなき事なるべし、氏の公卿おの〳〵つどひ、心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神や守らん、の二くさの御歌（詞略）を何のか

みにおき、おるはその要字をとりてから歌にのべつらねて、〇下略

〇按ズルニ、此歌後世ノ僞作ナル由、本居宣長ノ玉勝間ニ辨アリ、

〔古今著聞集一神祇〕三井寺の鎮守新羅明神は、娑竭羅龍王の子也、智證大師渡唐の時、大師の佛法をまもらんとちかひ給て、かたちをあらはして、かの寺にあとをたれ給へる也、圓滿院僧正明尊はじめて祭禮をおこなはれける、明神よろこばせ給ひて、一首の和歌を託宣し給ける、

からふねに法まもりにとこしかひはありけるものをこゝのとまりに

〔平家物語一〕しゝのたにの事

大納言〇藤原成親おそれをもいたされず、ひるは人目のしげければ、よな〳〵はかうにて、中の御門からす丸の宿所より、かもの上の社へ七夜つゞけてまゐられけり、七夜にまんずる夜、宿所に下向して、くるしさにすこしまどろみたりける夢に、かもの上のやしろへ參たるとおぼしくて、御ほうでんの御戸おしひらき、ゆゝしうけだかげなる御こゑにて、

さくらばなかもの川風うらむなよちるをばえこそとゞめざりけれ、

〔平家物語七〕平家山門へのれんしよの事

くわんじゆこれをあはれみ給ひて、さうなう衆徒にひろうもし給はず、十せんじ權現のしやだんにこめ、三日かぢして、其のち衆徒にひろうせらる、始はあり共見ざりける願書の上まきに歌こそ一首出來たれ、

たひらかに花さくやども年ふればにしへかたぶく月とこそみれ

山王大師是をあはれみ給ひて、三千のしゆと力をあはせよと也、

古事類苑

神祇部七

神階

古事類苑

神祇部七

神階

神ニ位階ヲ授ケ奉ラルヽコトハ、何ノ世ヨリ始マルニカ詳ナラザレドモ、書冊ニ見エタルハ、東大寺要錄ニ、八幡大神ヲ三位ニ叙セラレタルヲ以テ始メトス、次ニ品位ヲ授ケラレタル始メハ、續日本紀ニ、天平勝寶元年十二月、八幡大神ニ一品、比咩神ニ二品ヲ授クト見エタリ、又勳位ヲ授ケラレタルハ、同書寶龜二年十月戊辰ノ條ニ、越前國從四位下勳五等笥飯劒神ト見エタルヲ以テ始メトス、爾來仁明、文德、清和、陽成等ノ天皇ノ御代ニ至リテハ、祈願報賽、或ハ遷都行幸等ノ事ニヨリテ、進階セラレタルコト多シ、特ニ至大ナル祈願アル時ニハ、天下ノ諸神、或ハ一國ノ諸神ノ階級ヲ進メラレタルコトアリ、然シテ私ニ勸請スル神ハ、本社ノ位階ニ准ズベキニアラザルハ、普通ノ制ナルガ如シト雖モ、或ハ朝廷ノ許可ヲ得テ、其靈ヲ他所ニ分祀スル神ニハ、本社ニ准ジテ同位ヲ授ケラルヽコトモアリ、而シテ伏見ノ稻荷神社ヲ他ニ勸請スルトキニハ、本社ヨリ同位ノ位記ヲ授與スルガ如キハ後世ノ事タリ、又國守ノ管内ノ神社ニ假ニ位ヲ授ケテ更ニ勅許ヲ待ツコトアリ、是ヲ借位ト云フ、後世ニ至リ、卜部兼俱一種ノ位記ヲ爲リテ叙位加階ス、是ヲ宗源宣旨ト云フ、

〔東大寺要錄四〕太□□符　太宰府

應令大神宇佐二氏□八幡大菩薩宮□事

右得太宰府解偁、撿案內、府去弘仁六年十二月十日解偁、得神主正八位下大神朝臣清麿等解狀偁、件大菩薩是亦太上天皇御靈也、卽磯城嶋金刺宮御宇天國排開廣庭天皇〇欽明御世於豐前國宇佐郡馬城嶺始現坐也、〇中略天平十二年、依大軍事、馳遣勅使、奉封廿戶、宜神寶及造寺度僧、天平十八年天皇〇天武不豫、禱祈有驗、卽叙三位、封四百戶、度僧五十口、水田廿町、〇中略

弘仁十二年八月十五日　格外

〇按ズルニ、神ニ位階ヲ授ケ奉リシコト、此ヨリ古キハナシ、而シテ三位ニハ正從アレバ、單ニ三位トノミ云フベキニアラズ、恐クハ三品ノ誤ナラン、三品ノ位封ハ恰モ四十町ナリ、而シテ田二十町トアルハ、田五十町ノ誤ナルベシ、卽チ三品ノ位田ナリ、尙下ニ引ケル冠位通考ノ說、及ビ神領篇神戶ノ條參考スベシ、

〔大日本史神祇二〕凡品位制、所以叙王臣尊卑、本無關於神祇、令義解唯天武帝、以高市牟狹等神有靈驗、詔陞其品、而祀焉、則亦固有尊卑禮數之等也、日本書紀然其制不詳、至勝寶神護間、奉八幡神品位戶田、其制適與王臣食封位田之數合、而其他若伊與伊曾乃神、大山積神、雖各授神位封戶、不準王臣之例、則亦非必據令制以定階級也、但神祇叙位乃昉于此、時僧道鏡竊弄威柄、欲假神威以遂其志、卽此制亦或出乎其意、續日本紀〇中略然授位之制後遂爲例、自寶龜訖弘仁、因祈禱報賽、崇其祀者皆奉位勳、但其數無幾矣、續日本紀、日本紀略、自承和後、群神授位日多、續日本後紀至此天下大小之社、皆授位階、文德實錄下至仁和、叙位進階、無歲不舉行、三代實錄然非必有封戶位田之奉、亦非概秩神祇尊卑也、其國郡諸社毋論威靈著者、水旱兵疫禱而有應、則必授位勳、特崇其社、以鎭民心、故雖祀同神者、其社已異、則其位亦不同、而間有充戶田者、皆不因位階也、凡授諸神位階、其策命必曰奉授御冠、其階位勳等之目、雖同于王臣、而尊卑負異、人神自別、因無相雜糅也、唯若大神宮及日前國懸諸社、未嘗奉位階者、蓋以其尊最殊於他神也、

〔有職問答 一〕神位事

必四位迄有事にて候、今宮は近來迄は三位にておはします、佐々木明神は四位にて候、依奇瑞轉位せよと申事候、近代は正一位は一向神位に定り候由被仰出候畢、其分に候哉、當時天下諸神、大略正一位ノヤウニ候歟、毎度神位ヲ加ヘモテキタリ候事歟、

〔古今神學類編 神階二十九〕天下ノ諸神ハ、皆二所大神ノ乃子乃臣ノ御事ナレバ、推シテ神位記ヲ被奉授事ト見エタリ、〇中略神位ニ品位ノ二級アル事モ、乃子ノ神ニハ品ヲ被授、乃臣ノ神ニハ位ヲ被授ツル事ニヤ、品ヲ被授神社尤稀ナレバ也、但シ品ハ四級アリト見ユ、諸神追尊ノ時ニヨリテ、昇進越階ノ品々代々ニ不定バ、後々ハ其定例ハナキ御事ニコソ、〇中略或人云、人臣既ニ一位二位三位アリ、神位ノ却テ人位ヨリモ降リ、或ハ人位ニ等キハ何也、曰、是想フニ幽明一致、君臣ノ理アルヨリ備レル禮ト見エタレバ、幽ニシテハ宗廟ニ對シテ諸神位アル事ト見ユ、人臣ノ如キハ顯在ノ御事也、而レドモ至尊ハ是神孫ニ御坐バ、其禮禁裏ヨリ出テ、幽冥ノ神位ヲモ被奉授事、是則今日ノ皇孫尊ニテワタラセ給ヘバ也、是ナン國朝神皇一姓ノ御由緒ナルベキト覺エ侍ル、

〔安齋隨筆 後編十一〕神位之事　貞文請問

八幡は應神天皇、氣比は仲哀天皇、高津は仁德天皇、皆帝祖也、然るに人臣の位階をもつて授奉は如何、位田を神領に寄られん爲か、位田を神に寄らるゝ明徵記文有歟如何、

神位は位田を寄られん爲也と云は、普通の說にて考疎也、

是は准三宮の宣下ありて、官爵等を賜ると混じたる推量ならん、舊典を考れば、堅固位田の事にはあらず、文德實錄、天安二年二月己卯、在周防國正六位上仁壁神授從五位下、三代實錄天安二年冬十月廿二日、授伊豫國正六位上布都神從五位下、又貞觀元年正月廿七日、奉淡路國无品

勳八等伊佐奈岐命一品云々、正六位上與度神、名佐神、向神、賀原神、山口神、久我神、高橋神、雙栗神、
水度神、伊勢田神、无位小社並從五位下、是等各无品、或勳八等、其餘ハ正六位ノ神也、新ニ授玉ふ
所ハ、一品並從五位ニて、以來ハ位田も有べし、是まで无品勳八等正六位上ハ、位田なければ此
聞不詳、
神祇令曰、凡神戸調庸、及田租者、並充造神宮及供神調度、其税者一准義倉、皆國司撿挍、申送所司、
義解云、謂租稅者、並是田賦云々、
三代格、嘉祥四年〈○仁壽元年〉太政官符、應國內諸神不論有位無位、叙正六位上事云々略、
文德實錄文同略、四年正月廿七日の條にあり、親房造殿儀式曰、正一位より從二位以上爲大社、
正三位より從四位以上爲中社、正五位より從五位以上爲小社云々、
寛平九年十二月二十九日、太政官符、應停止分神封鄕寄神宮寺云々略、
此等の文あるを以て、神封戸田賦調庸は、位階を以て寄せられざる事を知る也、然して造殿儀
式を以て僻案すれば、新に位階を授け玉ふものは、其社地の大中小等の甲乙、御崇敬の淺深な
ぜにや、未だ的當すべき所見なし、
〔冠位通考〕神階は四品以上四階、〈○中略〉五位以上十四階、正六位上一階、すべて十九階あり、これ令
條の制度にあらず、天平勝寶元年に、東大寺八幡宮に位階奉られたるぞはじめにはありける、
史、十二月丁亥、大神禰宜佐太朝臣社女、拜東大寺、天皇、太上天皇、太后亦同行幸云々、因奉大神一
品、比咩神二品云々、二年正月〈○正月恐二月誤〉戊子、奉充一品八幡大神封八百戸、位田八十町、二品比賣
神封六百戸、位田六十町、〈祿令に、凡食封者、一品八百戸、二品六百戸云々、田令に、一品八十町、二品六十町とある給授の數にかなへり、〉どみえたり、此時
は神田神封をよせらるべきことぐさにて、〈此時代は、よろづに位階をたて物する事をおほくせられたる時にて、外位を內官に叙し、勳位を勳功なき人にたまひ、上正六位上を叙し、當時に二色九階を置れたる、みな此ほど也、されば其うつりにてかゝる有し也、〉尊卑の階級とまではおぼさゞりけ

むもとよりさる格式を立られたるにもあらず、堅固の別儀なり、かくて寶龜、延曆、大同、弘仁などには、さ〲此事なかりしを、(天長は史記欠たり、いかゞありけむ、)承和、嘉祥、貞觀、元慶神階の叙位數しらず多みえたり、此度は神封位田のさたはなくて、(益非義習の況さて、神に位階を授奉るは、位田な寄らるべき料なりといふ人あり、神位といふ事なの似つかはしからぬ故、さる事にやと人のおもふべき事なれど、しからず、凡王臣に給ふ位田食封は、養本にしたがひて收公せらるゝ物なれば限あるを、神供は永代なるべければ、少し寄られんにも容易の事にあらず、まして一日に數百社叙位せられたる事もあり、さばかり度ゝの新叙加階に、食封位田などさ〲くよせられば、天下の戸田半に過たる覧なるべし、畢竟は不通の說なり、)神々の尊卑の階級なり、さらば神階の稱呼は別に立らるべきに、やがて王臣を叙する位號を用られたるは、まぎらはしうて快もあらねど、神は神どちの尊卑にて、人臣の階とは別物なりと心得べし、(内記式に、神位記式、勅無位某神今奉レ授二某位一とあり、本字な加へたる計にても、王臣の位と異なる事しるし、)位といふは朝參行立の次第なるに、神は神とおはしませば、親王王臣と肩をならべ、袖をつらね給ふやうもなく、上直下退し給ふべきにもあらねば、(位田といふは、奉公する人に給はる俸祿也、神々は朝參行立なし給ふにもあらず、上直下退し給ふにもあらねば、位田の有べきやうはなし、こは上にいふべきな物のついでにこゝにいふ、)稱呼は同じくてもまぎらはしき事はなし、親王四品は諸臣の一位よりも尊く、神階の五位六位は親王の一品よりも、すぢことに尊くおはします、されば一品親王一位大臣にて、六位の神を拜し給はんに露禮にたがふ事なし、神は神、人は人、差別を嚴重におもふべし、

〔神名帳標目私考〕神位神戸等の事、○中略神に位階を授給へる狀を史共に考ふるに素より其神の尊卑に依らず、大社名神の等に依れるにもあらず、只時にふれたる禱祈賽報、或は神威を崇め畏み給ひなどして奉給へる例にて、上に說へる如く、孝謙天皇の御世の頃より、專と其擧與りて、仁明、文德、清和、陽成の天皇の御世御世は、相續て殊に多く、其後の御世御世にも絕えず行はせ給へり、さて其位階を授給へる神は、何處の社に坐さむも同じ神階を授給ふにあらず、其社にます神のみにかぎりて授給ふ例なり、(故同神にても、此と彼との社によりて、位階別なるもあり、又此社の神无位にまして、彼社の神に位階

な授給ふこともあり。

（皇都午睡三下）神社に位階を授るは、尊卑をわかつ爲にはあらず、正五位には田十二町、正四位には田廿四町を奉らるなり、正一位には田八十町の神領を寄附する也、今稻荷といへば一歩の田もなく、正一位と唱ふることいとをかしからずや、

（續日本紀二十七稱德）天平神護二年四月甲辰、伊豫國神野郡伊曾乃神、越智郡大山積神、並授從四位下、充神戶各五烟、久米郡伊豫神、野間郡野間神、並授從五位下、神戶各二烟、

（續日本紀三十四光仁）寶龜八年七月乙丑、內大臣從二位藤原朝臣良繼病、叙其氏神鹿島社正三位、香取神正四位上、

（續日本紀三十八桓武）延曆三年十一月丁巳、遣近衞中將正四位上紀朝臣船守、叙賀茂下上二社從二位、又遣兵部大輔從五位上大中臣朝臣諸魚、叙松尾乙訓二神從五位下、以遷都也、

（日本紀略桓武）延曆十三年十月丁卯、鴨、松尾神加階、以遷都也、

（日本紀略桓武）延曆二十一年正月甲子、陸奧國三神加階、緣征夷將軍奏驗也、

（日本紀略平城）大同元年四月丁巳、攝津國住吉大神奉授從一位、以遣唐使祈也、

（日本紀略嵯峨）弘仁九年四月丁丑、大和國吉野郡雨師神奉授從五位下、以祈雨也、

（續日本後紀二仁明）天長十年六月壬午、詔、奉授坐尾張國從三位熱田大神正三位、並納封十五戶、

（續日本後紀五仁明）承和三年正月乙丑、詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黃金神封戶二烟、以應國司之請、介探得砂金、其數倍常、能助遣唐之資也、

（續日本後紀五仁明）承和三年五月庚子、授无位小野神從五位下、依遣唐副使小野朝臣篁申也、

（續日本後紀五仁明）承和三年五月丁未、奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位、常陸國鹿島郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位、河內國河內郡從三位勳三等天兒屋根命正三位、從四位下比

賣神從四位上、其詔曰、皇御孫命留坐、四所大神留申給波久、大神等乎彌高留彌廣留仕奉止毛奈思保志食、
是以件等冠留上獻狀乎中務少輔從五位下藤原朝臣豐繼、內舍人正六位下藤原朝臣千萬等留令
捧持氏奉出事乎申給久止申、辭別氏申給久、神那我良母皇御孫之御命乎堅磐留常磐留護奉幸閉奉
給部、下略〇

〔續日本後紀九仁明〕承和七年七月己亥、奉授出羽國俀海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下、餘如
故、兼充神封二戶、詔曰、天皇我詔旨留坐、大物忌大神留申賜波久、頃皇朝留緣有物怪天卜詢留大神爲
祟賜倍利、加以、遣唐使第二舶人等迴來申久、去年八月留南賊境留漂落氏相戰時、彼衆我寡氏力甚不
敵奈利、儻而克敵留波似有神助止申、今依此事氏臆量留、去年出羽國言上太留大神乃於雲裏氏十日閒作
戰聲、後留兵石零利止申世利之月日、與彼南海戰閒正是符契世利、大神乃威稜令遠被太留事乎、且奉驚異、且
奉歡喜、故以從四位爵乎奉授、兩戶之封乎奉宛良久止申賜波久止申、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年十月丙辰、奉授無位阿波神物忌奈乃命並從五位下、以伊豆國造嶋靈驗
也、

〔文德實錄二〕嘉祥三年七月丙戌、進山城國火雷神階、授從五位上、遠江國事任鹿苑兩神並授從五位
下、〇下下恐脫進字大和國丹生川上雨師神階授正四位下、龍田天御柱命神、國御柱命神、若字加乃賣命神、
並加從五位上、策命曰、天皇我詔旨仁坐、天御柱國御柱神等乃廣前留申賜倍止申久、國家乎鎭護賜布留
依天、御位奉授天乃後、年月久成多利、因茲神祇少副正六位上大中臣久世主乎差使天、御位上奉利稱奉
留、古毛今毛風雨隨時比、五穀豐登之女、天下平安留、天皇朝廷乎堅磐留常磐留護賜比助賜倍止申賜波久
止申、

〔文德實錄二〕嘉祥三年九月己丑、遣參議藤原朝臣助向春日大神社、策命曰、天皇我詔旨止大神乃廣
前留申賜倍止申久、皇大神乃厚護留依天之、天日嗣乃高御座留波平介久即賜止毛奈所念行須、因茲天先先留

給申賜之比御冠止爲天奈毛建御賀豆智命、伊波比主命二柱乃大神爾乎正一位爾、天兒屋根命爾乎從一位爾、比賣神爾乎正四位上乃御冠爾上奉利、崇奉留狀乎、神財乎令捧持天奉出須、此狀乎聞食天、益益爾天皇朝廷乎堅盤爾常盤爾幸倍奉賜比、天下平安爾護賜比助賜止恐見恐見毛申賜波久申、○刊本有二謹謂二、據二一本一訂、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年十月辛亥、進山城國稻荷神階、授從四位上、授攝津國廣田神從五位下、進大和國大和大國魂神階、授從二位、石上神、及大神大物主神、葛木一言主神等並正三位、夜岐布山口神從五位下、河內國恩智大御食津彥命神、恩智大御食津姬命神等並正三位、丹比神從五位上、伊勢國阿邪賀神從五位上、尾張國熱田神正三位、越前國氣比神正二位、筑前國宗像神從五位上、竈門神正五位上、筑後國高良玉垂命神從四位上、肥後國健磐龍命神正三位、伊豆國三嶋神從五位上、

〔文德實錄 三〕仁壽元年十月丙午、進肥後國健磐龍命大神階、加從二位、　乙丑、進信濃國建御名方富命、前八坂刀賣命等兩大神階、加從三位、

〔神名帳標目私考〕文德實錄に、仁壽元年十月丙午、進肥後國健磐龍命大神階、と見えたるは、大の神階を進られたる由にて、大社の列とせられたる由ときこゆ、

○按ズルニ、神名帳標目私考ニ、大ノ神階ヲ進メラレタル由ト說ケルハ非ナルベシ、健磐龍命等ヲ稱シテ大神トハ云ヘルナルベシ、

〔文德實錄 三〕仁壽元年十月乙卯、遣使者向平野神宮、策命曰、天皇我詔旨止、平野大神等爾申給倍止申久、大神等乎彌高爾彌廣爾崇奉牟止那毛所念行須、故是以正三位今木大神爾乎從二位爾、正五位上久度古關等二前乃神爾乎從四位下爾、合殿坐須比咩神爾乎正五位下乃御冠爾上奉利、崇奉流狀乎、參議正四位下左大辨兼行左近衞中將陸奧出羽按察使藤原朝臣良相乎差使氐、申奉出須、此狀乎聞食氐、神那我良母天皇御孫命乎堅盤爾常盤爾護幸奉賜比、天下平安爾守矜賜倍止申賜久止申、

〔文德實錄十〕天安二年五月甲戌、先是高良玉垂神及比咩神等正殿遇失火、位記皆被燒損、仍今日勘舊文案更令書之、但彥神本位從三位、今授正三位、比咩神本位從五位下、今授從四位下、又同神殊授封廿七戶、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、京畿七道諸神進階及新叙、總二百六十七社、奉授淡路國无品勳八等伊佐奈岐命一品、備中國三品吉備都彥命二品、神祇官无位神。產日神、高御產日神、玉積產日神、生產日神、足產日神、並從一位、无位生井神、福井神、綱長井神、波比祇神、阿須波神、櫛石窻神、豐石窻神、生嶋神、足嶋神、並從四位上、〇中略對馬嶋從五位下和多都美神、高御魂神、住吉神、並從五位上、

〔三代實錄二十五清和〕貞觀十六年閏四月七日乙丑、山城國正四位上稻荷上中下三名神、並奉授從三位、告文曰、天皇我詔旨止稻荷神乃廣前爾申賜部止申久、京都爾近之天公私爾崇仰禮坐須御德高岐御冠猶卑爾依利天奈毛殊爾有所念行天、從三位乃御冠爾上奉利崇奉流此狀乎、神祇大副從五位下大中臣朝臣有本乎差使天、御位記乎令捧持天申奉出須、神奈可良毛聞食天、天皇朝廷乎寶祚無動久、常磐堅磐爾護幸倍奉賜比、天下平安爾之天、水旱之災、疫癘之憂無聞久、風雨順時比、五穀豐登世之女給波々、彌高彌廣爾榮飾利崇奉无止申賜波久止申、

〔三代實錄三十一陽成〕元慶元年六月廿三日壬辰、詔授大和國從三位丹生川上雨師神正三位、卽便奉幣黑馬、以祈雨、告文云云、散位正六位上大中臣朝臣岑雄乎差使天、正三位乃御位記爾禮代乃大幣乎令副捧天奉出流、

〔大鏡三太政大臣忠平〕此貞信公〇忠平は宗像明神うつゝにものなど申たまひけり、我よりは御位たかくてゐさせ給へるなんくるしきと申たまひければ、いとふびんなる御事なるかなとて、神位は申まさせ給へる也、

〔祈雨日記〕應和元年七月七日戊辰、右大將藤原朝臣〇師尹令藏人爲光奏室生龍穴神社所奏讀經遍

歟、同使權律師祥延申、加叙龍王階、兼因准舊例施給度者十一人、又申云、不仰可新加龍穴神社階事、而祥延自所祈願也、令仰云、非輙新神位階事、不可然、結而已、所申請有感應之由何無報賽、須儲問申龍王事、又令勘申件讀經給度者例、　十七日戊寅、此日降雨、右大將藤原朝臣、令藏人雅材奏延喜十八年二月廿九日等龍穴御讀經僧給度者例、申文前因祥延所祈龍王位階事、此使彼龍穴神名歟、仰云、此度龍穴御讀經僧等依先例令給度者、又新增神位階事非宜旨、不可輙祈申、然而已祈其由、又有感應、何令止乎、須勘本位、可行加位階事、但可誡仰律師祥延、　廿六日丁亥、右大將藤原朝臣令藏人雅材、權律師祥延注申龍穴神位階、又仰令撿增一天下神位之時不授之由、　八月十四日乙巳、此日陰雨、遣左中辨文範於右大將藤原朝臣第、仰云、龍穴本位仰右少辨善理令勘申、而未申其報、但間民部卿藤原朝臣〇在衡申云、授一天下神位一階之時、無件位記案、仍不授云々、以此由仰律師祥延、祥延進本位記二卷、就此見之、彼時漏不授、令神申結、則此度可授二階歟、即令奏室生龍穴神位記二卷、貞觀九年八月十六日、授正五位下、一卷延喜十八年八月十三日、授從四位下、即仰謝申龍穴神位階宜授二階、　十七日戊申、藤原朝臣令雅材奏室生龍穴神位記、依天曆御讀經之時所祈、授一天下神位階之日、須授從四位上、而漏不授、仍此度相加律師祥延之所祈、授正四位下、覽了返給捺印、　廿日辛亥、申剋右大將藤原朝臣、令藏人雅材奏、授龍穴神位階宣命、

〔日本紀略十一一條〕寛弘三年三月四日丙午、天皇自東三條遷御一條院、〇中略又行慶賞、角振隼兩神並授位、　四月五日丙子、請印角振隼兩明神奉授正二位位記、幷叙人等位記、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁元年十二月一日乙丑、詔、授貴布禰、片岡、河合神等正二位、依行幸之賞也、

〔小右記〕寛仁元年十二月一日乙丑、大閤〇藤原道長云、行幸日、河合、片岡、貴布禰三座明神可奉增御位、其事被示攝政、〇藤原賴通、中略、明日源大納言俊賢卿、可行位記請印事、其次令捺印神位記、神人位記、如何者、答、可令請印由、但三座明神本位可注申事、又社司等叙人可請給神御位記、〇恐并讓各位記事、仰重尹朝臣、件位記事、須可仰内記、事示源納言、位記料色紙、從藏人所早可給内記所之事、須以重尹令傳、

示藏人所了、臨晚余退出、　二日丙寅、史惟信參來、神達本位事、頭辨仰了、而未注申、如何、申云、昨夕辨朝臣傳仰、仍仰遣社司等所訖、又令仰社司等可參入由者、神本位注申者、可付源大納言之由云、遣辨許、　三日丁卯、大外記文義申、○中略問昨日神御位事、申云、河合、片岡、貴布禰被奉增正二位、社司注進本位從二位、仍所被奉增作昨日御位記者、

〔百練抄安德九〕壽永二年九月十五日、上皇○高倉御幸日吉社、去七月廿四日、御登山之間有御願之旨云云、被奉增神位、

〔百練抄後堀河十三〕安貞二年十月廿四日、日吉社聖眞子八王子客人十禪師三宮等、可奉授一階之由被宣下、

〔園太曆〕康永三年八月廿九日、近江國栗太郡小杖社神主源重賴誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩且奉爲寶祚延長、且爲增神明威光被授正一位狀、

右當社神明者、國中無雙之鎭守、郡內五所之隨一也、爲著御尊崇被授位記、先例爲民令渴仰、鎭有勤行之恒式粗載左、所謂淸和天皇御宇、貞觀五年被授從五位下位階、元慶六年從五位上、寬平十年正五位下小杖神今正五位上、延喜十一年被授從四位下之由具見國史等、其後天慶三年已來、天下諸神奉增一階宣下及度々之間、至建治元年、相當從一位之神也、又年中神事繁多之上、正月仁王經、四季大般若經、長日如法經等、勤行不退轉、所奉祈天長地久國土安穩也、然則正一位小杖神之由被懸額於鳥居示社頭之莊嚴、神明之威光何事如之哉、望請天恩因准傍例、須勅許者、彌仰明時有道之善政、奉祈寶祚延長之仙算矣、重賴誠惶誠恐謹言、

康永二年十二月日

近江國小杖社神位間事、被仰下之旨謹承了、如社解者、貞觀五年被授從五位下以降、元慶、寬平、延喜三代、又授位之義無相違候、凡計天下諸神奉增一階之宣下、被定本位之條、皆以先例歟、自天慶至建

治八ヶ度、此神本位相當從一位、被今申請正一位、可爲理運候歟、許否可有勅定候哉、次顯事、先規不詳候、且文永元年、高野山天野社申請之時、鳥居顯公家御沙汰之例不分明之由、其沙汰候歟、可得此等御意候、兼員恐惶謹言、

六月廿四日　　神祇權大副卜部兼員(請文)

〔御湯殿の上の日記〕慶長四年四月十九日、豐國の大明神のぢんのぎあり、じやうけいさいさふぎ、大將不行、日野頭辨せいしよ、中の御かど(すけ たね)てうもんみとあり、一位になしまいらせらるゝ、ぢんのぎの御いわゐ、三こんまいる、

〔義演准后日記〕慶長四年四月十六日、大佛鎭守遷宮條々、○中略

十九日、神位(正一位)上卿西園寺大納言、三木中御門、辨日野、大内記(五條)、外記、

十九日、豐國大明神正一位送賜云々、家康卿元以下諸大名社參云々、

〔季連宿禰記〕元祿九年八月十六日庚子、權大納言(中御門資熈)內々切紙到來、

久不得面談候、餘暑之節、彌堅固候哉、然者今度多田權現神階宣下、近日可有之候、官符も可有之儀候哉と思給候、所存如何、尤久敷神階宣下沙汰無之候間、官符留などは被見當候はゞ事も候はん哉、於催者可有之物哉と被存候、宿々可示給候、若書中難盡事候はゞ、今晩は內に居候之間、夕飯後入來待入候、以面可申談候、爲其如此候也、

八月十六日

尙々下官よりかやうに申候と申事、沙汰無之尤云々、

官務殿　　判

一曉景參權大納言之亭、亞相被面謁、神位官符天曆六年四月十五日二通(自左丞抄出之)寫之、自懷中取出之、令覽亞相之處、亞相被命云、此官符之體可然例也、季連所存如何云々、予申云、文明贈位之時、官符

不及沙汰之間、今度不申出之由申之處、亞相云、文明廟也非神階、今度爲神階之上者、官符古案爲分明之間、明日內々可示武家傳奏也、季連無所存哉云々、如此之事可願申之條爲本儀、然今及此御沙汰、爲大幸之由言上了、誠冥助之至難述禿筆者也、

十七日辛丑、入夜自藏人頭左中辨俊淸朝臣御教書到來、

來廿一日可有宣下事、任例可被沙汰之狀如件、

八月十七日　　中辨判

四位史殿

追而

可爲神階宣下刻限巳一點候也、

切紙云

口上刻限一點ト被仰出候得共、辰半刻無遲々可有參集候也、

八月十七日　　俊淸

一請印案之事、貞享四年御讓位警固固關官符請印案者塗木也、然而木工寮弘之所存爲尋問遣書狀尋之、返報云、貞享御讓位警固固關之時、請印之案白木ニ而可有御座候、先日御返事申進候通、塗申候者相殘可有之存候、左樣ニ御心得被成可被下候、尙又遂吟味、相知候者可申進候、巳上木工寮弘之之返報也、所詮爲急事之間、先白木案可用意之由仰之了、廿一日爲陣儀之間、墨塗案非可出來、只任延寶(輪門王叙品、嚴有院殿贈位)之例、白木不可有難候歟、又件案子細去九日記之、

廿一日乙巳、今日攝津國多田權現神階宣下也、卯半刻著朝衣、令參陣、諸司各參集、案置所之事、其外雜事、奉行職事大外記予等言談、少納言以下將監等、自月華門邊經宣陽殿東、可進出歟之由商量之、然而臨期以前依奉行職事示、自宣仁門進著、主殿寮撤陣幔、掃部寮敷薦、昇立案等之路者、自月華門

邊進出向軒廊也、陣儀之間雖雨聊休止、始終爲雨儀、仍上卿之外者各不乘、抑今日之作法各次第之中、以朱書加之、仍不別記、

多田權現授正一位位記幷宣命奏聞次第

上卿著仗座(奥)

次職事來仰、仰詞(今度宣命位記之事同時仰之、依宣命之事重而不仰之、)

次上卿移著外座

次上卿令官人敷軾

次上卿以官人召內記、仰位記事(仰詞)

次上卿以官人召外記、問諸司

次內記持參位記(入筥)

次上卿披見

「次令內記內覽(今日內覽被免云々、仍無其儀、)」

次上卿進弓場奏聞、(內記持筥相從)奏聞了返賜、仰仰詞、

次上卿歸著陣、內記置筥於上卿前退出、

次上卿以官人召近衞司、將監參候小庭、

次上卿仰請印事、(仰詞)將監稱唯退出、

「此間主殿寮陣幔二張撤之、其路出月華門邊、經宣陽殿東、」

次掃部寮立案於軒廊東二間、

次小納言、主鈴、將監等列立案下、

次上卿以官人召外記、仰云、中務候乎、外記申候之由、

次上卿仰云、召セ、外記稱唯退出、
次中務輔著レ軾
次上卿賜二位記筥於輔一、賜レ之經二小庭一、置二位記於案上一披レ之、
次少納言請印
次中務輔返二上位記筥於上卿一退入
次上卿披見
此間少納言、主鈴、將監等退出、
次掃部寮撤レ案
「次內覽「被レ免レ之」
次上卿進二弓場一奏聞、奏聞了返賜、
次上卿歸二著陣一
次上卿取二位記一懷中、返二賜空筥一、內記取レ之退入、
「次職事著レ軾仰二宣命事一（仰詞「最前仰レ之、仍今度不レ仰レ之、」）
次上卿以二官人一召二內記一、仰二宣命事一、（仰詞）
次內記持二參宣命草一（入レ筥）
次上卿披見、披見了賜二內記一、
「次內覽「被レ免レ之」
次上卿進二弓場一奏レ草、奏聞了返賜、（仰二仰詞一）
次上卿歸二著陣一
次內記置二宣命筥於上卿座前一、上卿返賜仰二淸書事一、（仰詞）內記稱唯退入、

次内記持參清書、(入筥)上卿披見、披見了、
「次内記被免之」
次上卿進弓場、奏聞、奏聞了返賜、
次上卿歸着陣、
次内記置宣命筥於上卿前、退入、(今度留内記宣命位記入筥賜内記、可持參使許之由仰之、)
「次上卿以官人召使、使來、軾、(使不出陣)」
「次上卿賜位記宣命於使、使賜之退出、
「次上卿以官人召内記、返賜空筥、
次上卿令官人撤軾、
次上卿起座退出、
右昨夜所到來之次第也、御次第之中、今日相違之分、并書加之分、以朱威之、
一上卿久我源大納言、(通誠)奉行職事頭左中辨俊清朝臣、少納言宣通朝臣、(伏原、侍從、主水正)中務輔大輔長時朝臣、(清岡、帶刀)大内記、(不參)大外記師庸朝臣、左大史季連、權少外記中原友鐵、右大史高橋春宣、少内記職永、○(中略)
一案立所東二間云々、相似第三間、然而東一間者依作合歟、凡軒廊作合者、或東或西、有兩說之由或人令語給、今日案立所、延寶六年同八年之例相違也、不知可否、
一案今度白木也、(長四尺五寸計也云々)此白木塗木之事、去九日同十七日記之、
一案下少納言西面、中務東面、主鈴南面、少監北面、共進宣仁門、依兩儀各不下、然依兩儀不可下重尻之儀、往昔記無所見之由、野宮羽林定基朝臣、去春歟被語之、彼朝臣博學之人也、節會兩儀之作法者、於大内裏皆兩番之内也云々、

一今日宣命位記日付、皆今年六月九日也、此事不審之間、尋申後淸朝臣之處、密語云、此自關東之奉書之日付也云々、未曾有不可說事也、此神階關東被執申歟、後聞、宣命日付、後日密々今月今日乃日付被書改云々、不知實說、○中略

官符日付之事、尋申之處、陣以後此折紙、又自後淸朝臣給之、

口上

官符日付、今月今日彌可被相調候、出來次第早々可給候、已上、

八月廿一日　後淸

官務殿

一官符陣儀以後淸書之、進後淸朝臣之許、加署以後可被傳少納言、請印以後可返給也、官符記左、此符兼日依權大納言異見認之、委被日記之、官符請印捺所、近代誤來之故、今度可改之由、中御門權大納言昨日有命、

太政官符攝津國

應奉神位記事

納韓櫃壹合　宛夫貳人

使從四位上行神祇權大副兼左京權大夫中臣朝臣德忠　從捌人

神部壹人　從壹人

右正二位行權大納言源朝臣通誠宣、奉勅、爲奉多田權現神位記、差件等人宛使發遣者、國宜承知依宣施行、仍須國牧宰潔齋擇定便所、與使者共披讀宣命、然後國司請取位記奉之、不得違失、符到奉行、

正四位行左中辨藤原朝臣　修理東大寺大佛長官從四位上行主殿頭兼左大史小槻宿禰判 奉

元祿九年八月廿一日

右官符、以天曆六年四月十五日官符體作之、

○按ズルニ、位記并宣命奏聞次第中、原本朱書ノ文ハ、今上下ニ「」ヲ加ヘテ之ヲ區別ス、

〔季連宿禰記〕元祿十四年十一月十七日庚子、自今夜構神事、依明日宜下事也、　十八日辛丑、今日西入條六孫王權現、被授正一位神階、有宣下事、未明著朝服、卯一點介參陣、(史亮益、召使大倉人等同來、相作之、)主殿頭(兼良)相伴之、上卿早被參、諸司大概相具了、暫被始其儀、如御次第、上卿右大將(今出川大納言伊季卿)奉行職事頭左中將隆長朝臣、(櫛笥)○中略少納言行康朝臣、(石井)中務大輔資順朝臣、(三室戸)大內記資長、(東坊城)左大史季連、權大外記師英、權少外記中原昌範、左少史三善亮當、少內記職永、召使宗岡行秀、副使宗岡行長、同宗岡康行、○中略

一今日巳剋許陣儀了、使德忠朝臣(藤波神祇權大副、左京大夫)參向西八條六孫王權現社頭云々、爲京洛之神之故、今度無官符、此事去五日記之、○中略

一後聞、禁中非御神事之儀、自昨夜至今日御潔齋云々、

一宣命位記、藏人後日寫贈、仍記左、

天皇我詔旨良万止六孫王權現爾申賜倍止白久、權威於閫外爾振比、征伐四克、軍旅屢動、遠路無虧、惟神源家乃良將、武門乃雄才多利、是以正一位乃極位乎授奉利、崇爾狀乎、正四位下行神祇權大副兼左京大夫大中臣朝臣德忠乎差使氐、神位記乎令持氐奉出須、此狀乎聞食天、天皇朝廷乎常盤堅磐爾守幸奉賜比、天下平安、武運延久爾護助賜倍止申給倍止久申、

元祿十四年十一月十八日

〔季連宿禰記〕元祿十四年十一月廿一日甲辰、入夜構神事、依明日宣下可參陣也、　廿二日乙巳、今日卯一點、壺井權現被授正一位神階宣下也、曉天著束帶、卯一點令參陣、權大外記師英參陣、其外諸司各以參集、辰剋許被始陣儀、其儀一々如次第、上卿中山大納言(篤親)奉行職事頭右大辨輝光朝臣、少納言時光朝臣、(西洞院、本日官符請印、少納言同時光朝臣也、)中務大輔資順朝臣、(三室戸)使左兵衞權佐兼音朝臣、(吉田、今日自陣子直進發云々、)大內記資長(東坊城)等也、○中略

一今日使兼章朝臣、自陣于直進發河內國也、仍於三條京極人家暫休息、自彼邊乘船、高瀨云々官符可遣使之許間事、與頭右大辨令申談、付使部藤井重康令贈遣三條京極之休所之處、請取給之由有返答、

官符案記左、官符加禮紙、請印之體以朱圖之、

太政官符河內國

應奉神位記事

納韓櫃壹合

宛夫貳人

使從四位下行左兵衞權佐卜部朝臣兼章　從捌人

神部壹人　從壹人

右從二位行權大納言藤原朝臣篤親宣、奉勅爲奉壺井權現神位記、差件等人宛使發遣者、國宜承知依宜施行、仍須國牧宰潔齋擇定便所、與使者共披讀宣命、然後國司請取位記奉之、不得違失、符到奉行、

正四位上行右大辨藤原朝臣判　修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰判奉

元祿十四年十一月廿二日

一官符近年誤來書府字、仍今度以府改符、子細去十九日記之、〇中略

一傳聞、壺井權現之事、河內守賴信朝臣、伊豫守賴義、八幡太郎義家朝臣、此三所勸請、權現號之事、神階之事等、今度自關東被申請之由風聞、不知慥說、

一宣命位記、後日頭右大辨輝光朝臣注給、仍記左、

天皇我詔旨止其万壺井乃權現爾申賜止倍白久、各武略於八埏爾運志、征戰大克、邦域盡靜留万、希世乃威烈奈利、惟神源家乃良將、累代乃英武多利、是以正一位乃極位乎授奉利崇奉留狀乎、從四位下行左兵衞權佐卜部朝臣兼章乎差使氐、神位記乎令持氐奉出給布此狀乎聞食氐、天皇朝廷乎常磐堅

磐冒護幸賜比氏、四海靜謐冒、武運延久冒、護恤賜倍止中給止者久申、

元錄十四年十一月廿二日宣命、大內記實長作進、黄紙也、

〔益春宿禰記〕享保八年二月一日辛亥、今日辰刻、石見國柿本社神階宣下也、刻限已前、著朝衣參陣、奉行職事頭左中辨顯胤朝臣也、上卿中院大納言、通躬卿辨顯胤朝臣被參了、少納言範篤朝臣、大內記致長朝臣、中務大輔國廣朝臣、勅使侍從兼雄朝臣、大外記師岑、左大史予、權少外記中原永清、左少史三善亮兼、少內記職永、主鈴康成、左近將監源元實、陣官人橘久孝、召使宗岡行篤、宣命副使宗岡行佐、位記副使宗岡行篤、大藏省弘方、木工同人、掃部寮藤原利晉、同俊賢、主殿寮職茂、大舍人藤井重好、使部二人等如恒、陣次第、壹井社神階宣下同前、御朱印以前、主殿官人自宜陽殿壇進陣小庭、撤軾二條如例、勅使兼雄朝臣參陣、就軾位記宣命給了、委見次第、午下刻事了各退出、

一官符者、如壹井社令持使部藤井重矩、大紋直垂入令持向于吉田、請取給之由歸申候、

太政官符石見國

應奉神位記事

納韓櫃壹合

使從四位下行侍從卜部朝臣　從捌人

神部壹人　從壹人

宛夫二人

右正二位行權大納言源朝臣通躬宣、奉勅、爲奉柿本大明神神位記、差件等人、宛使發遣者、國宜承知、依宣施行、仍須國牧宰潔齋擇定便所、與使者共被讀宣命、然後國司請取位記奉之、不得違失、符到奉行、

正四位上行左中辨藤原朝臣顯胤加署　從五位上行主殿頭左大史小槻宿禰奉判

享保八年卯二月一日

女房奉書

今度柿本社神號神位の事、一事のさはりもなく、御さたをとげられ候、いよ〳〵天下太平、寶祚ゑむ長、ならびに歌道はんじやうの御きとう、せい〳〵ぬきんでべきのよし、はるかの國社つかさにつたへられ候へとかしく、

中院大納言殿

中山大納言殿

〔押小路家記〕柿本社位記官符宣命

天皇我詔旨止柿本神乃廣前爾申賜〈倍止〉申久、時波千載乎歷〈多禮止母〉、道波百世爾崇〈止天〉之公私爾敬禮坐須靈德彌高久、神位猶卑爾上奉利崇奉流、因茲從四位下行侍從卜部朝臣兼雄乎差使天、御位記乎令捧持天奉出ス此狀乎聞食天、天下平安爾、詞ノ林繁榮爾、天皇朝廷乎堅磐爾護賜比助賜〈倍止〉申賜止申、

享保八年卯二月一日

〔資方朝臣記〕享保八年二月一日、人麻呂大明神〈千年忌〉正一位神階宣下、上卿中院大納言〈通躬〉奉行葉室頭辨、

〔公卿補任〈櫻町〉〕享保二十一丙辰年〈○元文元年〉十一月卄日、羽州大物忌神社神階宣下、〈消息〉上卿權大納言、奉行光綱朝臣、

〔續史愚抄〈櫻町〉〕享保二十一年十一月三十日戊子、被奉授正一位位記於出羽國正二位大物忌神社、口宣上卿新大納言〈爲久〉、奉行藏人頭左中辨光綱朝臣、

〔續史愚抄〈桃園〉〕延享五年〈○寬延元年〉四月十七日辛未、被奉授正一位位記于播磨國長壁神、〈奉行藏人頭右中將實連朝臣〉陸奧鹽竈神〈奉行藏人左少辨說道〉等、〈各口宣〉

〔護王大神記〕嘉永四年三月十五日、高雄山和氣清麻呂、護王大明神宜下式作法、（別紙略之）
一宣命仰詞
贈正三位民部卿和氣朝臣清麻呂、爲人義烈、仕朝忠誠、忘身直言、全皇緒之功詳國史、追思其功勲、今宜崇護王大明神授正一位、令作宣命位記、
一位記神書
護王大明神右可正一位
中務、能掃祆凶、固守忠節、計議竝深、忠懇咸到、宜授極位式表神明、可依前件主者施行、
嘉永四年三月十五日
一官符
太政官符　神護寺
應奉神位記事
納韓櫃壹合
宛夫貳人
右正二位行大納言源朝臣建通宣、奉勅爲奉護王大明神神位記、差件等人宛使發遣者、寺宜承知、依宣施行、仍須寺僧等潔齋擇定便所、與使者共披讀宣命、然後寺僧長宿請取位記奉之、不得違失、符到奉行、
正四位上左中辨藤原判　修理東大寺大佛長官從四位上刑部少輔主殿頭兼左大史小槻宿禰判（奉）
嘉永四年三月十五日

授品

〔續日本紀　十七孝謙〕天平勝寶元年十二月丁亥、大神禰宜尼大神（○日本紀略作大神、無禰宜二字、）朝臣社女（一其輿紫色、一同乘輿、）拜東大寺、天皇太上天皇（○聖武）太后（○光明）同亦行幸、是日百官及諸氏人等咸會於寺、請僧五千、禮佛讀經、

作大唐渤海呉樂、五節、田儛、久米儛、因奉大神一品、比咩神二品、左大臣橘宿禰諸兄、奉詔白神曰、天皇我御命爾坐申賜止申久、去辰年河內國大縣郡乃智識寺爾坐盧舍那佛遠禮奉天、則朕毛欲奉造止思登毛得不爲之間爾、豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閉止〈○爾以下五字、恐有錯誤、〉勅久、神我天神地祇乎率伊左奈比天必成奉无事立不有、銅湯乎水止成、我身遠草木土爾交天、障事無久奈佐牟止勅賜奈我良成奴禮波、歡美貴美毛奈念食須、然猶止事不得爲天、恐家禮登毛御冠獻事乎恐美恐美毛申賜久止申、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年二月戊子、奉充一品八幡大神封八百戸、前四百二十戸、今加三百八十戸、位田八十町、前五十町、今加三十町、二品比賣神封六百戸、位田六十町、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月丁巳、特授備中國吉備津彥命四品、列於官社、

〔文德實錄十〕天安二年五月辛未、是日八幡比咩神授一品、

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授淡路國无品勳八等伊佐奈岐命一品、備中國三品吉備都彥命二品、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年十月戊辰、詔充越前國從四位下勳。六。等。劒神食封廿戸、田二町、

〔有職問答一〕勳位事

一等より十二等迄候也、勳一等は一位、二等は二位、かやうに一位より七位はどに至迄、其唐名此勳位にあたると申、常に品位又位階あどのごとく叙任する事はなし、神位に專有也、

〔神道名目類聚抄四神祇〕勳位　勳位トハ、假令バ從一位勳三等枚岡天子屋根神、正三位勳六等石上神ナドノ如ナリ、勳位ハ文位ノ外ナリ、勳一等ヨリ勳十二等以上ナリ、昔ハ神社又人臣ニモ、軍功アレバ其賞ニ勳位ヲ賜、其例國史所見勝計ガタシ、勳位ト文位トノ列立ノ次第ハ、官位令ニ見タリ、諸社ニ勳位ヲ授タマフ事、タトヘバ逆臣アル時、祈願アリテ追討ノ後、其神ニ勳位ヲ授テ宿禱ヲ賽ス、是故ニ文社ハアリテ勳位ナキ神社アリ、然ルヲ文位アレバ必勳位アル事ト

神階同位

思ヘルハ誤ナリ、勳位ハ各別ニ勅許アル事ナリ、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦元年五月壬寅、陸奥國言、祈禱鹿嶋神、討撥凶賊、神驗非虛、望賽位封、勅奉授勳五等、封二戸、

〔日本紀略 淳和〕弘仁十四年十月壬寅、坐肥後國阿蘇郡從四位下勳五等建磐〈○磐下恐脱龍字〉命神、特奉充當郡封二十戸、此神炎旱之時、祈即降雨、護國救民、庶不頼之、

〔續日本後紀 三 仁明〕承和元年九月癸酉、坐能登國正三位勳一等氣多大神宮禰宜祝二人、始令把笏、

〔續日本後紀 四 仁明〕承和二年二月戊戌、坐越前國正三位勳一等氣比大神祝禰宜、准鹿島能登兩大神祝禰宜、令以把笏、

〔三代實錄 三十四 陽成〕元慶二年八月四日丁卯、是日彼國〈○出羽〉正三位勳五等大物忌神進勳三等正二位、勳六等月山神四等、從五位下勳九等小物忌神七等、先是右中辨兼權守藤原朝臣保則奏言、此三神自上古時、方有征戰、標奇驗、去五月賊徒襲來、挑戰官軍、當此之時、雲霧晦合、對坐不相見、營中擾亂官軍敗績、求之蓍龜、神氣歸賊、我祈無感、增其階級、必有感應、國宰齋戒祈請恩數、望請加進位階、將答神望、仍增此等級、

〔三代實錄 三十七 陽成〕元慶四年五月廿五日戊寅、授上野國正四位上勳八等貫前神從三位勳七等、〈中略〉正五位下小祝神、波己曾神並正五位上勳十二等、從五位上賀茂神、美和神、並正五位下勳十二等、正六位上稻裹地神從五位下勳十二等、

〔三代實錄 二 清和〕貞觀元年二月卅日丙辰、筑前國從二位勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫神、並授正二位、此正二位、太政大臣〈○藤原良房〉東京一條第、從二位勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫神、並授正二位、此六社居處異、實是同神也、

〔神道名目類聚抄 四 神祇〕神位　神階　諸神ニ奉リ玉フ位階ヲ云、〈○中略〉按ニ、神位其心得アリ、階ハ、

諸神同時叙位進階

和州三笠山春日神ハ正一位ナリ、他所ニ勸請シテ本宮ニ准ジテ、正一位春日神社ト稱スルハ非ナリ、夫神位ハ各別ニ勅許ナクテハ稱スベカラズ、件ノ神ハ無位ノ神ナリ、仁壽元年正六位上ノ定モ所以アリ、私ニ勸請ノ社ハ此例ニアラズ、若本宮ニ准ジテ神位ヲ稱セバ、大己貴神ヲ祭社ニ正一位ヲ授給フ時、都テ諸國ニ大己貴神鎭座ノ社ハ皆正一位ナルベキヤ、タトヒ同神同社タリトモ、別所ニ勸請アレバ、又別ニ神位ヲ勅許アルナリ、其例國史ノ中ニ見テ知ベシ、私ニ勸請ノ神ヲ、本社ニ准ジテ神位ヲ稱スル事甚誤ナリ、神何ゾ其非禮ヲ受給ベキ、神職ノ人能是ヲツキマフベキナリ、

〔長寛勘文〕伊弉冉尊與熊野權現爲別事〇中略

貞觀元年正月廿七日甲申、授淡路國無品勳八等伊弉諾命一品、〇中略

伊弉冉尊事、已有兩說、未詳、若以紀伊國有馬村爲定說者、如淡路伊弉諾尊何無授一品事哉、是兩宮無隔別故也、

〔類聚三代格〕一太政官符

應國內諸神不論有位無位叙正六位上事

右太政官去年十二月廿八日下五畿內七道諸國符偁、右大臣宣、奉勅特有所思、天下大小諸神、或本預官社、或未載公簿、有位更增一階、無位新叙六位、唯大社幷名神雖云無位、奉授從五位下者、而今推量、六位之中、其階有四、至于奉行必應有疑、宜除奉授從五位之外不論有位無位共叙正六位上、

嘉祥四年〇仁壽元年正月廿七日〇又見文德實錄

〔古史傳〕一天下の諸神とあるに付て論ふべき事あり、其はまづ仁壽元年に、有位無位を論はず、正六位上に叙し給ふと有るは、天下の有ゆる神たちの事ならむには、此餘に無位の神坐べき謂なし、但し其より後に由ありて、新に齋かれ給へる神等は、今云ふ限りに非ず、然かるに此後に無位某神に某位を授け奉り給へ

りと云こと、國史を始め其外次々の諸書に數多あり、いと不審き事なり、依りて按ふに、天下諸神とはあれど、有ゆる神等にはあらで、此は官にて祭られ給ふをはじめ、國内の神名帳などに出たる、又は其外にも由ありて官に知られ給へる神等にのみ、御位を叙し給へるにて、官に知られ給はざるは、漏給へる事と知られたり、

〔三代實錄 二 清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、京畿七道諸神進階及新叙、總二百六十七社、○下略

〔諸社根元記 上〕一大和

御位記　貞觀元、正、廿七、從一位、此後諸神一階度々、仍正一位也、

〔諸神記 上〕一廣田

御位記　貞觀十、十二、十六、從一位、此後諸神一階度々、極位不能左右歟、

〔日本紀略 一 醍醐〕寛平九年十二月三日甲辰、奉授五畿七道諸神三百卅社各位一階、

〔大倭神社註進狀〕新國史曰、寛平九年冬十二月壬寅朔甲辰、奉授五畿七道諸神三百四十社各位一階、

〔諸神記 中〕一八所御靈緣由事

至德元年九月十八日癸丑、晴早旦、御靈社神位事談合家君、可宣下之由被仰賴房朝臣了、八所御靈神位記 正一位 事、被仰談兼熈朝臣、可被宣下之狀如件、

九月十八日　御判

頭左中辨殿

中山中納言家君奉書云

御靈社神位記事、被申攝政殿、可有申御沙汰之由被仰也、恐々謹言、

九月十八日　親雅

大弼殿〈略○中〉

同神位記事〈貞觀以後、天下一同諸神一階奉計之〉

寛平九年十二月十三日　從五位下
天慶三年正月六日　從五位上
承暦五年二月十日　正五位下
永治元年七月十日　從四從下
治承四年十二月十三日　從四位上
元暦二年三月四日　正四位下
建仁二年二月十三日　從三位
弘長元年二月二十日　正三位
建治元年七月二十日　從二位

已上九ヶ度也、奉計之令相當從二位給了、〈不計正上五位四品也〉

此社事於鎭座年紀者不分明也、仍以貞觀以後天下諸神一階奉計之、同廿一日丙辰、晴、早旦予詣四辻一品〈善成卿、殿下御猶子之儀也、〉則被對面、題進之可存知之由被申之、暫雜談、詣儀同三司第、御靈神位記事、攝政殿下御書持向之、賴房朝臣同對面、可談家君之由被裁御書、可爲何樣哉之由談合之間、正一位不可有子細、從二位神也、無位神直被奉授極位例存之、已二品也、則於當座書出之、〈○中略〉

至德元年九月廿一日宣旨
從二位御靈神
宜奉授正一位位記
藏人頭左中辨藤原賴房奉

口宣一紙獻上之、早可令下被行〈○被行二字、恐知給誤、〉之狀如件、

九月廿一日　　左中辨頼房奉

進上　大炊御門大納言殿

御位記持參事被仰家君、給旨云、

御靈神位記可令持參給之由、攝政殿御氣色所作也、仍執達如件、

九月廿一日　　左中辨頼房

謹上　神祇大副殿

抑大内記殿暇之後未補也、於位記者、追可被進之歟、且先例證文天慶諸神一階位記、至天暦延引了、先以宜下被告申社頭、追可被進位記也、刑部大輔殿〇卜部兼豐父紫野今宮極位事、然本居中御沙汰、今上御靈社者、家君〇卜部兼豐予〇卜部兼敦之本居也、追被申沙汰了、神慮定有擁護者歟、

〔園太暦〕延文元年八月三日、諏訪社事、〇中略寛平九年十二月十三日、天慶三年八月、天下諸神被奉授一階之間、當時已爲正一位之極位、此事同載貞和注進

〔諸神記上〕一稻荷

御位記　天慶三、八、廿八、從一位、此後諸神一階度々也、極位勿論也、

〔日本紀略二後篇〕天慶四年十二月十九日、奉授神祇官神、左京職、宮内省、攝津國凡十七所階級、

〔本朝世紀〕天慶五年四月十一日丙子、今日初請印坐京中幷山城國諸神位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被祈討滅賊類後、天下諸神可被增加位一階之由、但至于極位神可被奉寄封戸者、

〔柱史抄下〕神位事

天暦六年、天下諸神增一階、其後連々不絶、

〔諸神記中〕一諏方

位記、　天暦諸神一階正一位、

〔百練抄六崇德〕永治元年八月廿五日、天下諸神可增一階之由宣下、

〔源平盛衰記四十三〕住吉鏑幷神功攻新羅附住吉諏訪幷諸神一階事

同(元暦二年)三月三日、平家追討ノ御祈ニ、諸國ノ明神ニ一階ヲ授奉ラルヽノ由宣下セラレケリ、凡兵革ノ祈禱、天下安穩ノタメニ、諸國ノ神明ニ一階ヲ增セラルヽ事、代々ノ例ナリ、仁明天皇ノ御宇嘉祥四年正月ニ、天下諸神不論有位無位、共叙正六位上ト云官符ヲ下サルヽヨリ以降、朱雀院ノ御宇天慶三年正月、諸國諸神一階ヲ增奉ル、白河院ノ御宇永保元年二月、同ク一階ヲ增奉ル、崇德院ノ御宇永治元年七月、同ク一階ヲ增奉ル、高倉院ノ御宇治承四年十二月、同ク一階ヲ增奉ル、仍今度モ加樣ニ行ハレケリ、

〔諸神記中〕一紀伊國高野山天野社

丹生高野兩神

元暦三、天下諸神一階之時、可爲正一位、

〔諸神記中〕一五條天神

延文五年五月十日、神主藤原國定解狀云、當社者、高野大師之草創、去正治二年四月廿五日、被奉授正五位下訖、其後諸神一同被增一階事、已及度々歟、當時御位階爲正三位之由所傳來也云々、件位記當時可被奉授一階、而階級之事可計申之由、被仰下兼豐畢、申狀云、正治二年四月廿五日正五位下事無相違者也、記曰、上卿帥中納言宗賴奏聞、頭右大辨資實朝臣奉行、神祇官史生季俊持向云々、正治以後者、天下之諸神御加階以上三ケ度也、爭可至正三位哉、所謂建仁元年二月、諸神一同被奉增一階之間、此神可爲正五位上也、(天下一同之時者無階云)弘長元年二月、同被奉授諸神之一階、此日從四位下也、建治元、七、又奉增一階、但其中於極位之神者、禰宜祝等宜令叙位之旨被宣下、然者當階可爲從四位上之條無左右歟、今般被奉授從二位者可宜乎云々、同十六日被奉授從二位畢、奉行藏人頭右

中辨忠光也、

〔尾張國内神名帳〕依文治二年丙午三月日宣命狀、國中諸神皆增位階、爲天下安穩御祈繕、

〔外記勘文〕勘申辛酉被行例事

永保元年（○永暦五年）例（○中略）

二月十日丁卯、内大臣以下諸卿參著仗座、被定申諸道勘申今年辛酉當革命否幷改元事、（改承暦爲永保、）詔文被載辛酉事云々、是日天下諸神、可奉增一階之由被下宣旨、（○中略）

永治元年（○保延七年）例（○中略）

十月十日丙午、左大臣以下諸卿參著仗座、被定申權中納言藤原實光卿幷諸道勘申今年辛酉當革命否事、又有改元事、（改保延爲永治、）詔文云、俗及澆漓、暦告辛酉云々、是日左大臣宣下云、應早奉增一階、且注進本位管内諸國大小神事云々、

建仁元年（○正治三年）例（○中略）

二月十三日甲午、左大臣、右大臣以下諸卿參著仗座、被定申諸道勘申今年辛酉當革命否事、又有改元事、（改正治爲建仁、）是日天下諸神可奉增一階之由被宣下、被仰大内記菅原爲長云々、（○中略）

弘長元年（○文應二年）例（○中略）

二月廿日壬子、左大臣以下之諸卿參著仗座、被定申諸道勘申今年辛酉當革命否事、又有改元事、（改文應爲弘長、）是日天下諸神可奉增一階之由被宣下、召大内記藤原明範被仰云々、（○中略）

元亨元年（○元應三年）例（○中略）

三月廿八日壬寅、諸社神位事被仰之、（○中略）

永徳元年（○康暦三年）例（○中略）

二月廿四日庚辰、右大臣以下諸卿參著仗座、被定申今年辛酉當革命否事、又有改元事、（改康暦爲永徳、）是

贈位

日諸國諸神可レ奉レ增二一階一之由被二宣下一、召二大內記菅原言長朝臣一被レ仰レ之、

〔守光公記〕明應十年二月廿七日、依二人々定申一可レ有二改元事一、令二文章博士菅原章長朝臣式部大輔令レ撰二中年號ノ字ヨ、改二明應十年一予可レ爲レ元、任レ例令レ作二詔書一ヨ、天下諸神可レ奉レ增二一階一令レ作二位記一ヨ、　廿九日、各著陣、○中略次進レ軾、天下諸神令レ奉レ增二一階一ヨ、仰レ之退云々、

〔日本紀略一九條〕正曆四年五月廿日丁未、贈二故右大臣正二位菅原朝臣○道眞左大臣正一位一、

○按ズルニ、此ノ贈位ハ人臣ノ位ヲ贈リタルニテ、神位ヲ授クルトハ異ナリ、故ニ本條贈位ノ目ヲ設ケテ、神ニ人臣ノ位ヲ贈リタルモノヽ一斑ヲ示ス、

〔二十二社註式〕北野社　末社

宰相殿正三位菅原輔正　壽永三年三月廿七日、贈二正二位一、

和泉殿從四位下菅原定義　同時贈二正二位一、

〔杜史抄下〕神位事

天曆六年天下諸神增二一階一、其後連々不レ絕、近例壽永二年、日吉諸神幷丹生、高野明神等被レ奉二階級一、同三年、北野宰相殿被レ增二正二位一、和泉殿被レ增二從三位一等也、

〔古今著聞集一神祇〕北野宰相殿は、天神○菅原道眞四世の苗裔也、○中略寬弘六年十二月に、八十五にてうせ給、其後神とあらはれて、叢祠を廟壇の傍にひらかる、壽永三年三月に贈正一位の加階にあづかり給ひけり、

〔康富記〕文安五年九月廿九日、是日被レ行二贈位宣下一也、西宮左大臣高明公於二備前國一奉二勸請一神云々、件社此間有二託宣一、厲二某村人一令レ成レ祟給候間、自二地下一有二申請仁一、就二山科中將顯言朝臣一經二奏聞一、有二勅許一被レ行レ之、被レ贈二從一位一者也、○中略大內記菅原在治作二進宣命位記一了、件宣命位記爲二遠國一之間、被二申請一之仁方可二付遣一也、其間少納言可二預置一之由、執柄被二許申一之故也云云、

借位

〔筑後國神名帳〕

借從五位下　大多良男神

借從五位下　大多良咩神

已上二前、前司守和朝臣利親在任之時、以去延喜廿三年三月□日、奉授件位、〇中略

借從四位上斯禮賀志命神正一位高良玉垂命神第一王子

右神ハ元慶八年四月四日、奉授借正六位上、時吏依其神驗顯然、延喜十五年五月十三日、奉授借從五位下、以同廿年十二月十一日、奉授借從四位下、當時守吉志宿禰公忠、又感其神驗之明、以去天慶六年五月十九日、奉授借從四位上、〇中略

右太宰府去三月四日符、今月三日到來偁、件諸神位記案、依天慶四年九月十日、同五年六月廿五日兩度官符旨、可寫進狀仰下須了、而多送年月、于今未進、然間重被太政官去年八月廿三日符、今年二月廿二日到來偁、檢事意、件神名帳造進既有其期、況太政官去年九月下彼府符偁、管國嶋神名帳悉以朽損、難可據勘、宜仰管國嶋早令注進者、而于今不進、府之緩怠責而有餘、大納言正三位兼行右近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣實賴宣、奉勅宜仰彼府、神名本位僞以勘錄、令言上之者、府宜承知、依宣行之者、方今彼國、毎官符到、仰下頻也、而徒有下知之勞、更無寫進之勤也、依國郡之緩怠、責官府司之不勤、國宜承知、件諸神位記案、幷神名帳等早速進上、若其本位記散逸、不存叙位年月、依官符旨改、證據具注言上、不得重怠者、今檢案內、高良玉垂命神、豐比咩命神、幷二前御位記、遞納國底、足爲後代之鏡、仍祥注叙日、兼寫位記進上如件、但至諸神、或國司商量、奉授借位、或位記紛失、不知叙日、如此之類唯錄當階及神名、副以言上、以解、

天慶七年四月廿二日　　守從五位下吉志宿禰〇花押略

正六位上行掾秦宿禰

位記

〔大日本史神祇三〕初元慶延喜間、國宰有所禱、或私奉位階于部內諸神、而未賜位記、謂之借授、授位之制寖濫、至此〇天喜二年資通〇大宰大貳、源氏、蓋亦因此例進位階也、

〔神名帳標目私考〕神位神戸の事、〇中略借位とて、諸國にて國守の計らひて、神位を借奉れる例あり、公家より授奉られたる本位と、その借位との混ひありて、差別の詳ならぬ、はた多かりぬべし、

〔延喜式內記十二〕神位記式

勅

無位某神　今奉授某位

年月日

〔柱史抄下〕神位事

於大明神者多是正一位也、仍無增其位、諸國小社有靈驗之由、國宰奏聞之時、先有仗議、次仰內記令勘申本位、當日上卿著陣、召內記仰云、某神可被增其位、可造進位記、內記造進之、內覽奏聞之後、上卿行請印事、令須給之、

〔延喜式內記十二〕凡裝束位記式

神位記三位已上者、縹紙、綠褾、雜綺帶、黃楊軸、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月甲子、遣左馬助從五位下紀朝臣貞守〇中略伊太祁曾神社曰、〇曰下恐脫策命二字天皇我詔旨留申給久、御冠授奉牟止祈申賜比留之依天、從五位下乃御冠留上奉利崇奉留狀乎、御位記令持天奉出須此狀乎聞食天、天皇朝廷乎常磐堅磐爾護幸奉倍止〇奉下恐脫賜字申給久止申、亦遣右大辨兼右近衛中將從四位下藤原朝臣氏宗、向園神、韓神等社、策命曰、天皇我詔旨留申給久、御冠奉授无止禱申賜比留之依天、從五位下乃御冠留奉授利崇奉留狀乎、御位記令持天奉出須此狀聞食天、天皇朝廷

平常磐堅磐爾護幸奉賜倍止申給久止申、

〔類聚符宣抄 一〕奉授神位記事

太政官符神祇官

正五位下横山明神在□□國

今奉授從四位□

延喜十八年□月十七日下

正六位上天津高結機本地祇在讃岐國

今奉授從五位下

延喜廿年二月十五日下

從五位上瀧倉明神在大和國、

今奉授從四位下

正六位上東屋明神

大神明神並在肥前國

並今奉授從五位□

延喜廿年十一月□日下

右得中務省解偁、件叙位依例申送如件者、官宜承知、依例行之、符到奉行、

位左少辨　　　位左少史

延喜廿一年二月廿七日

〔日本紀略 二朱雀〕天慶元年六月廿六日辛丑、請印諸神並僧尼位記、

〔本朝世紀〕天慶五年四月廿六日己卯、參議藤原忠文朝臣、伴保平宿禰、著左衞門陣座、而上卿遲參、仍

無政、移刻之後、大納言藤原師輔卿、中納言同顯忠卿、參議同忠文朝臣、伴保平宿禰、藤原在衡朝臣、著宜陽殿西庇、神位百卅餘卷請印、

〔日本紀略 三村上〕天暦元年三月四日己丑、大納言藤原師輔卿著宜陽殿、請印神位記、　十一月四日甲寅、請印神位記、　十二月五日乙酉、請印神位記、　二年三月五日甲寅、神位記請印、

〔類聚符宣抄 一〕奉授神位記事

太政官符神祇官

應頒奉宮中京中諸神位記事

右左大臣宣、奉勅件位記宜令頒奉者、官宜承知、依宣行之、仍須於官齋院披讀宣命、然後頒奉、符到奉行、

右少辨　　　　左少史

天暦六年四月十五日

太政官符五畿內諸國司

應頒奉神位記事

納韓櫃一合　　宛夫二人

使神琴師正六位上大中臣朝臣高枚　從二人　神部一人　從一人

右左大臣宣、奉勅爲奉諸神位記、差件等人宛使發遣者、諸國宜承知、依宣施行、仍須每國牧宰潔齋、擇定便所、與使者共披讀宣命、然後國司請取位記頒奉、不得違失、符到奉行、

右少辨　　　　左大史

天暦六年四月十五日

〔新儀式 臨時四〕奉加神位階事

神位階者、隨諸司諸國申請、上卿奉勅、先令下勘本位、奉加授矣、令內記勘作位記、附內侍奏聞之、請印訖、令頒給之、

〔北山抄 六〕神位記等事

延喜十六年正月廿八日、神位記（上野國々等）付內侍受領位記、參御所、付藏人奏之、（并補）天慶九年六月廿六日、內印、次請印、神位記、僧位記、令持內記二人、付內侍奏之、神位記捺印畢、返上後、給僧位記、

〔本朝世紀〕長保五年六月五日癸亥、今日有神位記事、并加階令位記請印事、

〔兵範記〕保元三年二月三日甲午、藏人左少辨俊憲出仗座、仰按察大納言云、日吉明神春屬牛豆依御邪氣雲驗、奉授叙爵、造位記、即可令請印者、上卿召大內記信重仰之、令造進位記、（用黃紙、中略）次召社司於殿上口、密々給件位記云々、

正六位上牛豆明神

今奉授從五位下、

保元三年二月二日

此外無他狀、先例云々、

〔傳宣草 上〕神位記事

元應元年七月二日　宣旨

近江國沙々貴社

宣奉授正二位位記

藏人頭宮內卿藤原成隆奉

口宣一枚

沙々貴社神位記事

右奉入如件　春宮大夫判奉

七月二日

大內記局

〔季連宿禰記〕元祿十四年十一月十八日辛丑、今日西八條六孫王權現被授正一位神階有宣下事、○中略

六孫王權現

右可正一位

中務、威德惟大、令名每盛、崇靈口龍潭、揚名於扶桑、贈以高位、專成感應、用護國家、可依前件、主者施行、

元祿十四年十一月十八日

無品中務卿邦永親王　宣

正四位下行中務大輔臣藤原朝臣賌順　奉

從五位下守中務少輔兼行少內記臣中原朝臣職永　行

正二位行權大納言兼右近衞大將　臣　伊季

正二位行權大納言　臣　通誠

從二位行權大納言兼左近衞大將　臣　綱平

從二位行權大納言　臣　豐忠

從二位行權大納言　臣　持實

從二位行權大納言　臣公量
從二位行權大納言　臣篤親
權大納言正三位　臣公全
權大納言正三位　臣家久
權大納言正三位　臣師孝
正三位行權中納言　臣爲茂
正三位行權中納言　臣時方
正三位行權中納言　臣基勝
正三位行權中納言　臣通躬
正三位行權中納言　臣賴重
正三位行權中納言　臣致季
正三位行權中納言　臣經晉
正三位行權中納言　臣昭尹
正三位行權中納言　臣尹隆
正三位行權中納言兼左近衞權中將　臣吉忠等言
制書如右、請奉
制附外施行、謹言、
元祿十四年十一月十八日
制可
月日辰時

正四位下行大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師庸　　左中辨兼廉

關白從一位朝臣

太政大臣闕

左大臣正二位朝臣

右大臣正二位朝臣

內大臣正二位朝臣

式部卿闕

正二位行式部大輔

參議從三位行左大辨俊清

告六孫王權現奉

制書如右符到奉行

式部少輔闕　　大錄

少錄

少錄

元祿十四年十一月十八日

右請印六ヶ所有之以朱圓之○朱印形略

〔季連宿禰記〕元祿十四年十一月廿二日乙巳今日卯一點壺井權現被授正一位神階宣下也○中略

壺井權現

右可正一位

中務、武德大明、奇策全備、
靖寇於千里、建功於万年、
宜崇威賞、式贈尊位、可依
前件、主者施行、
元祿十四年十一月廿二日
無品中務邦永親王　宣
正四位下行中務大輔臣藤原朝臣貴順　奉
從五位下守中務少輔兼行少內記臣中原朝臣職永　行
正二位行權大納言兼右近衛大將　臣伊季
正二位行權大納言　臣通誠
從二位行權大納言兼左近衛大將　臣綱平
從二位行權大納言　臣豐忠
從二位行權大納言　臣持實
從二位行權大納言　臣公量
從二位行權大納言　臣篤親
權大納言正三位　臣公全
權大納言正三位　臣家久
權大納言正三位　臣師孝
正三位行權中納言　臣爲茂
正三位行權中納言　臣時方

正三位行權中納言　臣　基勝
正三位行權中納言　臣　通躬
正三位行權中納言　臣　賴重
正三位行權中納言　臣　致季
正三位行權中納言　臣　經音
正三位行權中納言　臣　昭尹
正三位行權中納言　臣　尹隆
正三位行權中納言兼左近衞權中將　臣　吉忠等言、
制書如右、請奉
制附外施行、謹言、
元祿十四年十一月廿二日
制可
月日辰時
正四位下行大外記兼掃部頭造酒正中原朝臣師庸　左中辨兼廉
關白從一位朝臣
太政大臣闕
左大臣正二位朝臣
右大臣正二位朝臣
內大臣正二位朝臣
式部卿闕

正二位行式部大輔

參議從三位行左大辨俊淸

告龜井權現奉

制書如右、符到奉行、

式部少輔闕

大錄

少錄

少錄

元祿十四年十一月廿二日

〔押小路家記〕柿本社位記

柿本社

右可正一位

中務、千載垂光、萬邦仰德、究

誠直於神道、開蘊奧于歌林、

宜授極位、式耀祠壇、可依前

件、主者施行、

享保八年二月一日

二品行中務卿邦良親王　宣

正四位下行中務大輔臣藤原朝臣國廣　奉

從五位下行少外記兼中務少輔少外記臣中原朝臣職永　行

〔神體勸請深秘傳〕城州伏見稻荷社ヨリ官位之次第

正一位稻荷大明神之事

右雖ㇾ爲ニ本宮之奥秘ㇾ依ニ各別之願望ㇾ略式修ニ封之ㇾ嚴璽令ニ授與ㇾ焉、祭祀愼ㇾ之莫ㇾ怠也、

文化十四年六月豐日　　正宮目代

従四位下行伯耆守荷田宿禰信資

武藏國嘉佐意受知村

岩船三右衛門殿

〔本朝文粹六奏狀〕請ㇾ殊蒙ニ天裁ㇾ依ニ勤績及儒勞ㇾ叙ニ従三位ㇾ狀　　菅三品〇菅原文時

右文時、〇中略初拜ニ内史ㇾ之時、郎奉ニ仕五畿七道諸神位記事、名號之訛、階級之誤、獨自所ㇾ考正、總六千餘社、其三千六百餘者是文時手書、〇下略

〔出口延經家反古中抄出〕

神宣　肥前國佐賀郡與賀庄

正一位與止日女大明神

右、欽明天皇廿五年八月廿八日垂跡以來、代々被ㇾ増ニ一階ㇾ尠ニ年紀ㇾ爲ニ極位神ㇾ者、依ニ神宣ㇾ啓狀如ㇾ件、

永正十年八月十三日　　神部伊岐宿禰判奉

神道長上侍従卜部朝臣判〇又見ニ増益辨卜抄俗解ㇾ

〔神祇破僞顯正問答上〕尙博問、吉田卜部奉ㇾ授ニ神位ㇾ事有ㇾ之哉如何、

答、神位ヲ授ケ奉ラルヽ事ハ、朝廷ヨリノ事ニテ、殊ニ大切ナル深意アル事ナリ、然ニ吉田卜部、上ヲ蔑シ、神ヲ輕ジ、諸人ヲ欺キ、神官ヲ僞リ、宗源宣旨ト云フ物ヲ宿紙ニ書キテ出セリ、文如ㇾ左、〇中略

宗源　宣旨

石部大明神
今宜授正一位者
右依。
今上皇帝　聖勅　神宜
御表之神璽如件
延寶七己未年五月吉曜　神部伊岐宿禰奉
神祇道管領勾當長上卜部朝臣兼連

右如此ノ物ナリ、此ノ印略〇印ハ二寸計ノ印ニテ、明ノ字ノ古文字ナリ、ソレヲヤリ違ニ重テ踏タル物ナリ、古代朝家ヨリノ神位式ハ延喜式ニ見エタリ、今世神祇官ノ四分アリトイヘドモ、有名無實ニシテ、歌學ニ耽テ神書政要ノ書ニウトキガユエニ正ス學力ナク、卜部家次第ニ應揚ノ思ヲナシ、正道ノ神祇日々ニ衰ヘ、自然ニ濁ヲ飲テ、大道ヲ知ザル神祇ノ家アリテ、三種祓等ノ卜家ノ説ヲ甘ジ、神官ノ幣物ヲ貪ル、哀哉、

〔増益辨卜抄俗解下〕元祿年中、伊勢國足見田夜後社所授神階僞文如左、

宗源　宣旨
正一位足見田夜後大明神 伊勢州三重郡水澤村
右靈跡以來被増一階、勘年紀爲極位神、
元祿十一年十二月六日　神部伊岐宿禰奉
神祇道管領長上勾當正三位侍從卜部朝臣兼敬

〔増益辨卜抄俗解下〕卜部家記曰、天下諸神奉授神號之時、於齋場所以神代正印被定神宜事、延喜以來聖斷也、

按に、宗源宣旨などいふも、卜部家の詞にて珍しき宣旨なり、笑ふべきに非ずや、遠國田舍の祠官等は文盲なるまゝに、或は大明神の號、或は正一位の神階を望むに任せ許し遣し、禮銀あまた貪り取事際限なし、夫神階と申は、子細ありて賜る事故に、妄りに願ふべからず、又妄に勅許有る事に非ず、近年の例にても考べし、元祿十四年、河內國壺井神社へ正一位の神階を贈位ありしも、其祭神源賴信、賴義、義家を祭りて、源家の御祖神故に、將軍家常憲院綱吉公の御執奏にて勅許有し事也、享保八年、石見國人麻呂社千年忌に中れり、歌道御尊敬に仙洞靈元帝の御執奏にて、正一位を贈進したまへり、其儀式禁裏月華門の北陣の座にて、上卿職事執行ひ、宣命位記、及び太政官符、勅使參向、下行米の沙汰ありて、容易ならざる事、公武の上裁なれば、吉田卜部が私に神階を授る事能はず、依之識者是を難ずれば、吉田答て言、神階を私に授るには非ず、其社の神階をば考へくれよと申により、古記の趣を勘へ遣すのみといふ、皆遁辭なれば强て責るに及ばず、其授し神階といふを聞に、實の神階位記宣命とは甚異にして、えしれぬ文言にて慥ならざる書面なり、文盲なる祠官等は、實の神階賜はりたりと心得て頂戴し、金銀數多禮謝し、故鄕に歸り、村民等にふらしぬれば、同愚昧なる者共難有事なりと悅び、又其所の奉行役人等も、吉田は神道の頭にて神づかさなれば、斯る事を許さるゝよと怪む心もなし、中院右大臣通躬公の御物語に、享保八年、石見國人麻呂社へ神階を賜し時、通躬公武家傳奏にて大納言の折節、右の上卿を蒙り、親ら其事を取扱給ひし、其社の別當、夫より以前吉田へ願ひ、正一位の神階を申請、且つ日光御門主守全親王御筆にて、正一位の額を賜り、鳥居に掲て人皆知る所なれば、重て又正一位の神階を賜べき事如何と申すにより、僉議有しかば、別當は不學にて其虛實は知らず、甚當惑して最前の神位記といふ物、本社に納置しを取出し差上れば、公卿披見あるに、吉田より私に遣したる例の僞れる神位記の文句なれば反古となり、別に正一位の位記を

雜載

賜りぬ、此に付てもさま〴〵をかしき咄も多かりしと語り給ひぬ、又當國の內、或社の社人何某といふ小ざかしき男にて、社の爲に神階を申請、自分も官位願として、上京の爲と言觸し、檀方其外へ金銀を乞求め上京しけるが、吉田へ願ひ、正一位の神階并自分官位をも賜りたるとて、何の大和守と名乘し、其神階記及び自分へ賜りし口宣、宣旨、位記あせ有や見せよといへば、本社に納置べき由、吉田よりの申付なりとて他見を免さず、依之委尋れば、例の似せ物あり、是は吉田より社人を欺しか、但し社人より檀方等を欺しか、俱に僞にて有ける、其源正しからざれば、末々に至るまで、相互に利の爲に正直の道を失ひ、神罰にてや有けん、大和守後には惡病を受て身をかりぬるぞ、凡實の神階と僞の神階と、其文格別なりといへども、人皆知らざる故に欺かるゝに至る、何事も末を糺して糺さんとすれば際限なし、根元を正して本を知る時は、末の邪正自ら分明也、本を知とは國史官牒、及び律令格式を本として、夫に違ふは僞と知べし、實の神階といふは、人臣へ賜る位記の文に似たる事にて、時の攝政、或は關白、太政大臣、左大臣、右大臣、內大臣、親王、及び大納言、中納言等の連署ありて、天皇之璽といふ御朱印あり、中々欺べからざる文言也、

〔長寬勘文〕天照大神不可類他神事〇中略

今依是等說案事情、以大神宮與熊野權現付稱同體之勘文有三疑也、一者神有三等、大社中社小社是也、大神宮爲大、以如加茂住吉爲中、餘皆小云々、凡物求類、猶取於近、爰大小隔中、雖云同體、二者諸神有稱宮之神、有稱社之神、宮社若有差別者、同體之儀可有深意、三者有授品之神、有授位之社、品位皆非等差者、同體之謂可未思慮、就中本朝載式之明神、何不授品位、而至大神宮者、本授品位之文所未勘得也、今准人臣之法、重思慮之處、親王公卿以下臣、兼叙品叙位、未曾聞帝皇有品位之號、若依此儀者歟、然者或稱之日神、無與日均之光、或申之君神、無與君均之人、而強令少社稱

同體、欲レ令三少臣欺二朝家一之徵也、兒女子之謳歌事自然符合、況勘文哉、恐無二此沙汰一者、必有二後煩一焉、仍勘申者也、

長寬二年四月二日

〔皇字沙汰文〕豐受皇大神宮神主依二綸旨一注二進當宮皇字一事

天照大神者、惟祖惟宗、尊無レ二、自餘諸神者、乃子乃臣、孰能敢抗云々、就レ之案レ之、內外兩宮者、依レ爲二惟祖惟宗一、無二尊號之增減一、天下餘社者、依レ爲二乃子乃臣一、有二位記之階級一、〇節略

〔宣胤卿記〕永正十四年七月三日、正一位八幡宮、此額事、兼滿朝臣所望、八幡ハ天皇、正一位ハ臣下ノ位也、不レ可レ然之由申遣了、　五日、兼滿朝臣所望額事、女房傳達之間、かな書一紙遣レ之、

近年諸社ノ額ニ正一位と書そへ候へと望候、いかゝにて候へとも中に任候、をかしき事に候、是は田舍かた山陰人もしらぬ神の威光に申候歟、八幡宮御事は、かた陰にも勸請申候へ、御威德は誰も奉レ知事に候、其上八幡御事は、其古帝王にてまします御事に候、正一位は臣下の位にて候、常に神に授申さるゝ位にては候へとも、神も神により候べきにて候、よも天照大神に授申され候事は候はじにて候、若昔此位を授申され候事候とも誤たるべく候、所々にて額を見候も、八幡宮の三字ばかりにて候、東山慈照寺の鎭守の額は、平岡八幡のがくをうつし候へど、室町殿仰にて、故實久卿書候もたゞ三字候、一位を書そへ候はゞ神慮にも違べく候歟、此樣所望申候方へ演說候はゞ可レ然候歟、額事は入木道七ヶの大事の內にて、相傳候はて書候へば天罰を蒙候、愚老相傳は勿論候へども、八旬に及候て老屈候間、心を盡し候事無術候、先年も承候て書候つ、又當年も承候て書候しは、額の分にては候はで、只かげ字の心に書候つ、世尊寺は其家候、誰も申入候はゞ、我方へ與奪し候へと申候て書たがり候、程に、度々引付候し、是も申遣候はゞ悅候べき歟にて候、さりながら傳達は斟酌事候、直に御使可レ然候、心中難レ盡狀候、

世俗寺社ヲ書たる事は依禮物所望也、兼滿朝臣傳達無禮物之間如此書遣也、去三日所望、翌日可來賀之由申之、以外聊爾無興餘、報子細者也、額事は實久卿口傳也、

八幡宮ニ正一位ヲ被奉授事古帝皇ニテ坐候間不可有之旨、尊意無興儀存候、但八幡、天平勝寶元年十一月、御託宣ニヨッテ御位ヲ被授申候、平野社第二殿仲哀天皇、第三殿仁德天皇ニテ坐候、雖然貞觀六年七月十日、被奉授正一位、伊勢兩大神宮ニ於テハ、御位幷本地ノ沙汰ナク候、然ドモ春日第四殿天照大神ニテ坐候、嘉祥三年九月、被奉授正一位、諸社ノ相殿ニマシマシテハ如此候、度々神位記分明候就中額事條々蒙仰候、畏入存候、懇望仕候者ニ尊命之趣具ニ申含候、
兼滿

御託宣不審事也、平野社事ハ、第一、第五御殿帝王ノ神ニ不坐、第二、第三御殿トナシテ被捧申哉、其段不審、又春日第四御殿事同前、

〔春湊浪話下〕正一位の神社

中御門宣胤卿、文明の比の能書なりし故に、諸寺社の額ども多く書給ひし、或人の求にて、卜部の兼俱より正一位八幡宮といふ扁額を書れんことを乞れしに、宣胤卿肯かずしての給ひけるは、一位は人臣の極位なれば、人臣の神に正一位を贈らるゝはさも有べし、應神天皇のごとき宗廟の神に、如此事あるべからざることも、吾是を書ことを好まずとて、辭して書たまはざりしといふ、尤さも有べき事なり、されども昔よりのならはしにて、其例多かるべし、天平勝寶元年十二月廿七日、八幡大神に一品、比咩神に二品を授たまふといふ事、續日本紀に見えたり、

○按ズルニ、本書ニ兼俱ト云ヘルハ、兼滿ノ誤ナルベシ、兼滿ハ兼俱の孫ナリ、

〔多々良問答〕一神位事

必四位迄有事ニ而候、今宮ハ近來迄ハ、三位迄まします、佐々木明神ハ四位ニ而候、依寄進轉位せ

よと申事候、近代正一位ハ一向神位ニ定り候由被仰出候畢、其分ニ候哉、

當時天下諸神、大略正一位のやうに候歟、每度神位を加へもてきたり候事也、

○按ズルニ、本書前文ハ多々良義隆ノ問ニシテ、後文低書ハ西三條實隆ノ答ナリ、

〔法曹後鑑〕諸神社正一位神階之儀ニ付答書

吉田二位より被出候書付

諸神社正一位神階之儀ハ、勅裁之御事御座候、尤壽永年中以後、吉田家より宗源神宣を以被授候社も有之候得共、神位之儀ハ爲重事之間、自今以後可爲勅裁、其社之祠官等於相願ハ可致執奏之旨、寛保年中吉田家江被仰渡候ニ付、右以來ハ勅裁ニ相限候故、猶又社柄等相糺、吉田家被致執奏候事御座候、

一稻荷正一位之儀も同前之事御座候、藤森より差出候與申儀有之間敷與存候、既寛保年中右稻荷社中江被及尋問候之處、神位出シ候儀曾而無之旨申答候事御座候、

一神階之儀ハ正一位ニ相限候儀ニハ無之候、國史等ニも相見候通御座候、右之外勅裁有之候社ハ勿論、吉田家以前宗源神宣を以被授候神社之神號相願候もの有之候節ハ、被致染筆候事、

白川神祇伯より被出候書付寫

神社正一位神階之儀、從當家可差出哉之旨御尋御座候、

諸神社正一位神階之儀、非私事、各勅許勿論ニ候、且諸國之內に本祠有之候神社同座勸請之事は、伯家說によつて、其神等之願主之祠江奉勸遷候、且又靈神號之事は自古來令附屬來候事、

稻荷社中より出候書付寫

就御尋言上書

稻荷社より神階差出候事抔無之儀ニ候哉、御尋ニ御座候、

此儀當社より神階差出候儀ハ、曾テ無御座候得共、當社之神體分神勸請仕候儀ハ、從古來社傳を以、信心の璽紅御璽物相授來、右璽物ニ正一位之神號相記申候儀ニ御座候、右起本之儀ハ、後三條院延久三年三月廿六日、當社行幸之砌、正一位神階被奉授、後鳥羽院建久五年十二月二日、當社行幸之砌、當社ハ五穀衣食住之守護神ニ而、諸人可令尊信儀ニ候間、信心之輩其所ニ致鎭祭候は當社之分神ニ候條、從本社勸請之神體ニ者、正一位神階書加可相授之旨、勅許被成下候ニ付、其砌より本社社司共傳來之修法を以、右勸修相授來、古來より當社社司共一子相傳之儀ニ御座候、就御尋此段言上仕候條、宜御沙汰被成下候樣奉願候、此等之趣宜御披露賴入存候、以上、

稻荷社

社中

寛政五丑年七月

〔經濟錄祭祀〕吾國ニテモ、古ハ諸國諸祠ノ名神ニ、皇朝ヨリ爵位ヲ賜ハルコト、三位ヨリ上ナルハ稀也、爵ヲ重ンジタマフ故ナリ、今ノ世ハ、在々處々ノ小祠、或ハ都下ノ市中ニ在ル稻荷ノ祠ナド、數ニモ足ラヌホドノ賤キ神ヲ正一位ニ敍シ、白河、吉田ノ兩家ヨリ、宣旨ヲ申シ下シテ巫祝ノ業ニ與フル事甚多シ、サレバ處々ノ神廟ニ正一位ノ額ヲ掛ザルハ稀ナリ、是大ニ禮ニナキ事ニテ、吾國ノ古禮ニ違ヘル也、縱淫祀ニアラザル正シキ神ナリトモ、三品以上ノ爵ヲバ輙ク賜ハルマジキ義ナリ、況ヤ狐ヲ祭リ、蛇ヲ祭ル類ノ淫祀ニ正一位ヲ賜ハルベキヤ、日本ノ古禮ハ、三公モ生前ニ正一位ニ陞レル人ハ稀ナリ、然ルヲ今小々ノ賤キ神ヲ正一位ニ敍シテ、大祠ノ貴キ神ヲバ如何ナル爵位ニ陞スベキヤ、是國家ニ古ヲ稽ル人ナキ故ナリ、爵ヲ瀆ストイフハ此類ノ事ナリ、

〔經信卿母集〕圓融院の御入からうのとき、人々まゐりしに、北野の社のまへにて、大臣上達部みな車よりおり侍りければ、宮司など立いでゝ、とゞめさせ給べしなどいふ、經信朝臣は車ながらやりわたさるゝを宮司いでゝむかひ、こゝにて人々もおりさせ給ふにといへども、さらぬていにてす

きたまふ、これはいかなることにか侍る、ばつあるべきなどあざびあへる、はうにこえたり、まだ御八講もはてぬにうちにきこえけり、かのはゝぎみのちゝは、大宮女院のしかうの人にて侍しかば、此人わかゝりしときよりしろしめして、いたはりおもほしける人なり、その御所の左衛門、出羽などきゝおどろきて、はやくはゝのもとへつげしらせて、きたのへへいはくし給べしといひおくられしかば、母、少納言〇信經がおもふところこそあらめとて、おどろきたるこたへもなかりしに、御八講はてゝかへり給しに、かのごたちのもとより、かくしらせてさぶらふ、しかありしやとゝはれければ、彈正式に、四位は二位に車よりおりずと侍る、菅右府〇道眞二位にて侍るに、神になりたまひても、みちにたがふ事あるまじきなれば、車よりおりなばかへつてたがへるすぢにて、神もうけ侍らじとこたへ申されければ、母さこそとて、なほたゞにやみぬ、よのつねの女ごころならば、さしおきものすべきものにはあらず、またうちにてしかありつることを、殿上人などのとひきかれしありしに、はゝに申されしにおなじくこたへられし也、はたしてことなく、正二位大納言までになり給ひし也、〇又見二古事談一

古事類苑

神祇部八

社格

古事類苑

神祇部八

社格

神社ニ格アルハ、天社國社ヲ以テ創見ト爲シ、崇神天皇ノ朝ニ之ヲ定メ給ヘリ、其後大中小社、大小社ノ稱アリ、大中小社ハ、律ニ見エテ、説者ノ説ニ依レバ、大社ヲ伊勢大神及八幡宮ト爲シ、中社ヲ賀茂住吉ノ類ト爲シ、其餘ヲ小社ト爲シ、其社殿等ヲ犯スモノハ、罪ニ等差アリ、又一種ノ大中小社アリ、五位以上ノ社ニ限レルモノニテ、正三位以上ヲ大ト爲シ、從四位以上ヲ中ト爲シ、其餘ヲ小社ト爲シ、社殿ノ構造、四至ノ廣狹、遞ニ隆殺アリ、此位階ヲ以テ等級ヲ立テタルハ、大ニ疑フベキアリテ、事ハ其條下ノ按語ニ詳ニセリ、大小ノ二等ヲ立テタルモノハ、國史ニ載スル所ニシテ、延喜ノ神名式ニ據リテ、殊ニ明瞭ナルコトヲ得ルナリ、原來神社ニハ、官社アリ、官社ナラザルアリ、官社トハ、神祇官ノ神名帳ニ記載セラレ、祈年ノ祭ニ預ルモノニテ、其大小社ハ皆官社ナリ、大小社ニハ各官幣アリ、國幣アリ、官幣トハ、神祇官ヨリ幣帛ヲ頒ツヲ云ヒ、國幣トハ國司ヨリ之ヲ獻ズルヲ云フ、官幣大社ハ、案上ノ官幣ニ預ルモノニテ、名神ト名神ナラザルトアリテ、各月次相嘗新嘗ノ三祭ニ預ルト、月次新嘗ノ二祭ニ預ルトアリ、官幣小社ハ、祈年ノ祭ニ案下ノ官幣ニ預ルモノニテ、幣ニ定數アレド、其中ニテ或ハ特ニ鍬靫ヲ加ヘ、鍬ヲ加ヘ、靫ヲ加フルアリ、畿內ノ小社ハ皆是ナリ、國幣ハ祈年祭ニ預ルノミニテ、月次等ノ祭ニ預ルコトナク、其大社ハ名神ト、名神ナラザルトノ二種ノミ、小

社ハ一樣ニ定數ノ幣ニ預ルノミニテ、鋪設ヲ加フルモノナシ、畿外ノ小社ハ皆是ナリ、名神ハ上ニ言ヘルガ如ク、官國二幣ノ大社ニ限ンルコトニテ、名神祭ニ預レルヲ云ヘルナルベシ、必ズシモ第一等ノ神社ニアラズ、祈年、月次、相嘗新嘗ハ、各其篇アリテ之ヲ詳ニセリ、此二種ノ大小社ヲ亦式內神社ト云フ、延喜ノ神名式ニ登錄セラレタルヲ謂フナリ、其餘ヲ式外神社ト云フ、此式外ニモ古ヨリ有名ナルモノアリ、石淸水、大原野、香椎ノ如キ是ナリ、

神社ニ、一宮、二宮、三宮、四宮等ノ稱アリ、一國中ニ就キテ等級ヲ立テタルナリ、蓋古昔國司ノ任ニ在ルヤ、管國有名ノ神社ヲ擧ゲテ參拜スベキヲ、其中ノ一二ヲ取リテ拜スルコトノ起リシニ由リ、此稱アリト云フ、是或ハ然ラン、崇神、垂仁ノ二朝ニ起レリ等ノ衆說アレド皆疑フベシ、而シテ此稱ノ明ニ書冊ニ見エタルハ、今昔物語ニ周防國ノ一宮ヲ擧ゲタルヲ以テ始トス、事ハ一條天皇長德年間ニ在リ、此一宮ハ多クハ延喜式ニ言ヘル大社ナレド、或ハ其國ニ大社アルニ拘ラズ、小社ヲ以テ一宮トスルアリ、式外ノ社ヲ以テ之ニ充ツルアリ、二社ヲ各一宮トスルアリ、三國ヲ通ジテ一社ヲ以テ一宮トスルアリテ一樣ナラズ、蓋當時ノ便ニ從ヒシナラン、其中ニハ古來異說アリテ定ラザルモノモアリ、

二十二社ハ、伊勢大神宮ヲ除キテハ、皆畿內ノ神社ニシテ、朝廷奉幣ノ爲ニ定ムル所ナリ、其稱ハ始テ醍醐天皇ノ昌泰元年祈雨ノ奉幣ニ見エタリ、然レドモ其社ハ某々ナリシニカ、今之ヲ詳ニスルニ由ナケレドモ、北野神社ハ此時未ダ創立セラレザリシカバ、此列ニ在ラザリシハ言論ヲ費サズシテ自ラ明ナリ、此後ノ奉幣ニハ、十六社ナルアリ、十九社ナルアリ、二十社ナルアリ、二十一社ナルアリ、時ニ臨ミ加除シテ未ダ定數ハアラザリシガ、白河天皇ノ永保元年ニ至リ、始テ定メテ二十二社ト爲シ、永ク增減スルコトナシ、卽伊勢、石淸水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生、貴布

天社國社

禰神社是ナリ、

攝社ト云ヒ、末社ト云フハ、本社ニ對スル稱ナリ、或ハ本社ノ境外ニ在ルモノアリ、或ハ境内ニ在ルモノアリ、別宮モ亦本宮ニ對スル稱ナリ、

神社ヲ某宮ト稱スルコトハ、往古ヨリアレド、宮號ヲ以テ社號ヨリ重シトスルハ、何ノ時ニ起レルヲ知ラズ、清和天皇ノ貞觀九年ニ、伊勢國伊佐奈岐伊佐奈彌神社ヲ改メテ宮ト稱セシハ、既ニ宮號ヲ以テ社號ノ上ニ置キ、シガ如シ、然レドモ社ト云フハ其總稱ナレバ、宮ト稱スルモノヲモ社ト稱スルコトナキニアラズ、後世ニ至リ東照宮ノ如キハ、特ニ至貴ノ名ヲ以テ之ニ加ヘシナリ

宗廟ハ、支那ノ制ニ倣ヒテ假ニ稱スル所ニシテ、伊勢大神宮ヲ稱シ、又八幡宮ヲ第二ノ宗廟トス、又古來廟ト稱スルモノアリ、香椎廟、大帶姫廟ノ如キ是ナリ、又聖廟アリ、天滿宮ヲ以テ孔丘ノ廟ニ擬シタルモノナリ、

〔倭名類聚抄　二鬼神〕天神　周易云、天神曰神、(食鄰反、和名賀美、日本紀私記云、安萬豆夜之呂、)

地神　周易云、地神曰祇、(巨支反、日本紀私記云、久邇豆夜之呂、)

〔日本書紀　三神武〕戊午年九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巓、瞻望域中、時國見丘上則有八十梟帥、(○中略)是夜自祈而寢、夢有天神訓之曰、宜取天香山社中土、以造天平瓮八十枚、幷造嚴瓮、而敬祭天神(アマツヤシロ)地祇、(クニツヤシロ)亦爲嚴呪詛、如此則虜自平伏、天皇祇承夢訓、依以將行、時弟猾又奏曰、倭國磯城邑、有磯城八十梟帥、(○中略)此類皆欲與天皇距戰、臣竊爲天皇憂之、今當取天香山埴以造天平瓮而祭天社國社之神、然後擊虜則易除也、

〔日本書紀　五崇神〕七年(○七年、古語拾遺作六年、)十一月丁卯、(○中略)卜祭他神吉焉、便別祭八十萬群神、仍定天社國社、及神地神戶、

〔古事記中仲哀〕此天皇之御世、○中略仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、此三字以音也定奉天神地祇之社、

〔日本書紀天武二十九〕十年正月己丑、詔畿内及諸國、修理天社地社神宮、

〔仙覺萬葉抄一〕尾張國風土記云、葉栗郡川嶋社在河沼郡川嶋村

奈良宮御宇聖武天皇時、凡海部忍人申、此神化爲白鹿、時々出現、有詔奉齋爲天社、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十一月庚辰、詔曰、○中略朕方佛乃御弟子天菩薩乃戒乎受賜天在、此仁依天上都方波三寶仁供奉、次仁天社國社乃神等乎毛爲夜備末都利、○下略

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年三月廿六日壬午、授安藝國正六位上大麻天神、伊都岐嶋中子天神、水分天神、天社天神、並從五位下、

〔延喜式八祝詞〕祈年祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣、神主祝部等共唯、餘宣准之、高天原爾神留坐皇睦神漏伎命、神漏彌命以、天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久、○下略

〔祝詞考上〕天つ神國つ神ちうことは、神代に既に有しかど、天つ社國つ社と定めましゝは、崇神天皇の御代にこそあれ、思ふに皇祖神等の命を以といふよりつゞければ、天つ神國つ神と書べきを、後世によりて社と書しにや、

〔常陸風土記行方郡〕郡東國社、此號縣祇、

〔三代實錄二十五淸和〕貞觀十六年五月十一日戊戌、授正六位上常陸國國都神從五位下、

〔風雅和歌集十九神祇〕嘉元百首歌奉りける時、神祇、　後西園寺入道前太政大臣

あまつ神國つ社とわかれてもまことをそうくる道はかはらじ

おなじ心を　後宇多院御歌

あまつ神國つやしろをいはひてぞわがあし原の國は治まる

〔續日本紀 三文武〕慶雲三年二月庚子、是日甲斐、信濃、越中、但馬、土左等國一十九社、始入祈年幣帛例、其神名具神祇官記、

〔古語拾遺〕至大寶年中、初有記文、神祇之簿猶無明案、望秩之禮未制其式、至天平年中、勘造神帳、中臣專權任意取捨、有由者小祀皆列、无緣者大社猶廢、

〔出雲風土記 意宇郡〕

熊野大社 中略

以上卌八所、並在神祇官、

宇由比社 中略

以上一十九所、並不在神祇官、○以下諸郡今略

〔皇大神宮儀式帳〕一管度會郡神社行事

合四十處之中 官帳社廿五處、未官帳社十五處、

〔止由氣宮儀式帳〕一所管度會郡神社事

合貳拾肆處 載官社名社十六處、未載官帳名社八處、

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年正月辛卯、在石見國五箇郡中神總十五社、始預官社、以能應吏民之禱、久救旱疫之災也、其神名具在神祇官帳、

〔延喜式 十一太政官〕凡太政官下諸司諸國符、隨事請內外印、其下頒留貢及預官社神、○中略 並請內印、

〔延喜式 三臨時祭〕凡諸神預名神官社等者、待官符下更修下國符請內印、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年八月甲寅、荒御玉命、伊佐奈岐命、伊佐奈彌命、○並在伊勢國度會郡 入於官社、

〔神名秘書〕月讀宮二座

寶龜三年八月入於官社

(續日本紀三十五光仁)寶龜九年十二月甲申、去神護中大隅國(〇贈唹郡)海中有神造嶋、其名曰大穴持神、至是為官社、

(續日本紀三十六光仁)寶龜十一年十二月丁巳、陸奧鎮守副將軍從五位上百濟王俊哲等言、己等為賊被圍、兵疲矢盡、而祈桃生白河等神一十一社、乃得潰圍、自非神力、何存軍士、請預幣社、許之、

(續日本紀三十七桓武)延曆二年十二月丁巳、大和國(〇平群郡)平群久度神叙從五位下、為官社、

(續日本紀四十桓武)延曆九年十一月丁亥、陸奧國黑川郡石神山精社並(〇並恐衍)為官社、

(日本後紀五桓武)延曆十五年八月甲戌、上野國山田郡賀茂神、美和神、那波郡火雷神、並為官社、

(日本後紀十三桓武)延曆廿四年十二月乙卯、甲斐國巨麻郡弓削社預官社、以有靈驗也、

(日本紀略嵯峨)弘仁七年七月乙酉、山城國紀伊郡乘島田神、與幡寸神預官社例、並鴨雷神之別也、弘仁十四年正月丁丑、常陸國(〇筑波郡)從五位下筑波神為官社、以靈驗頻著也、

(續日本後紀六仁明)承和四年三月戊子、常陸國新治郡佐志能神、眞壁郡大國玉神、並預官社、以此之中特有靈驗也、　八月壬辰、日向國子湯郡都濃神、妻神、宮埼郡江田神、諸縣郡霧嶋岑神(〇霧嶋岑神、式岑字无)預官社、　十二月庚子、太宰府言、管豐前國田河郡香春岑神、辛國息長大姬大目命、忍骨命、豐比咩命、總是三社、元來是石山、而土人總無、至延曆年中、遣唐請益僧最澄躬到此山祈云、願緣神力平得渡海、即於山下為神造寺讀經、爾來草木蓊鬱、神驗如在、每有水旱疾疫之災、郡司百姓就之祈禱、必蒙感應、年登人壽、異於他郡、望預官社、以表崇祠、許之、

(續日本後紀七仁明)承和五年九月辛酉、下野國那須郡三和神預之官社、

(續日本後紀九仁明)承和七年六月甲子、播磨國揖保郡家嶋神、赤穗郡八保神、並為官社、　七月庚子、以肥後國玉名郡疋石神(〇延喜神名式作疋野神)預官社、　十一月庚辰、對馬嶋和多都美御子神、波良波神、(〇上縣郡)都都知神、銀山神(〇下縣郡)並預官社、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年八月辛丑、土左國〇香美郡美良布神、〇延喜神名式作大川上美良布神石土神、〇長岡郡並預官社、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年九月乙巳、隱岐國智夫郡由良比賣命神、海部郡宇受加命神、穩地郡水若酢命神、並預官社、　十月乙亥、但馬國氣多郡山神、雷神、戸神、獨椒神、城埼郡海神等五前、並預官社、

〔續日本後紀 十七仁明〕承和十四年七月丁卯、修造攝津國大依羅社、肥後國阿蘇郡國造神社、爲官社焉、

〔續日本後紀 十八仁明〕承和十五年〇嘉祥元年　七月甲申、因幡國法美郡无位宇倍神奉授從五位下、即預官社、以國府西有出火、隨風飛至、府舍將燔、國司祈請、登時風輟火滅、靈驗明白也、

〔續日本後紀 十九仁明〕嘉祥二年四月庚寅、常陸國久慈郡稻村神預之官社、縁水旱之時祈必致感、　七月癸酉、美濃國池田郡養基神預官社、縁有靈驗也、　十一月壬子、播磨國佐用郡佐用津姬神預官社、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月丙申、詔以武藏國〇幡羅郡奈良神列爲官社、先是彼國奏請撿古記、慶雲二年此神放光如火燄、然其後陸奧夷虜反亂、國發控弦赴救、陸奧軍士載此神靈奉以擊之、所向無前、老弱在行、免於死傷、和銅四年、神社之中忽有湧泉、自然奔出、漑田六百餘町、民有疫癘、禱而癒、人命所繫、不可不崇、從之、

〇按ズルニ、此事又續日本後紀嘉祥二年十一月壬子ノ條ニ見ユ、今ハ其文ノ詳ナルニ從ヒ、彼ヲ捨テヽ此ヲ取ル、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年六月己酉、詔以武藏國〇入間郡廣瀨神、常陸國〇新治郡鴨大神御子神主玉神、竝列於官社、　庚戌、壹岐嶋〇壹岐郡角上神列於官社、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年八月戊申、詔以遠江國角避比古神列官社、先是彼國奏言、此神叢社瞰臨大湖、湖水所漑、舉土賴利、湖有一口、開塞無常、湖口塞則民被水害、湖口開則民致豐穰、或開或塞、神實爲之、請加崇典、爲民祈利、從之、　九月甲申、詔以伊勢國〇桑名郡多度大神列於官社、　十月丁卯、詔以壹岐嶋〇石田郡天手長男、天手長比咩兩神列於官社、　十一月甲戌朔、詔以伊豆國〇賀茂郡伊古奈比女、安房〇安房、延

〈喜神名式作二阿波一〉物忌奈三神列於官社、十二月庚戌、詔以上野國〈○群馬郡〉甲波宿禰神列於官社、

〔文德實錄三〕仁壽元年六月戊午、以薩摩國〈○出水郡〉賀紫久利神預於官社、十一月辛巳、詔以尾張國眞清〈○眞清、延喜神名式作眞墨、〉田〈○中嶋郡〉大縣〈○丹羽郡〉兩神列於官社、十二月壬寅、詔以淡路國〈○三原郡〉大和大國魂神列於官社、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月丁巳、特授備中國〈○賀陽郡〉吉備津彥命神四品、列於官社、七月辛卯、以大和國〈○宇陀郡〉都賀那木神列於官社、閏八月丙子、以遠江國〈○敷智郡〉息神列於官社、十二月癸亥、以美濃國〈○不破郡〉伊富岐神列於官社、

〔文德實錄五〕仁壽三年六月丁卯、以尾張國大國靈神、大御靈神、〈○中嶋郡〉偉處神〈○海部郡〉等列於官社、

〔文德實錄六〕齊衡元年十月戊辰、以山城國〈○乙訓郡〉神足神列於官社、

〔文德實錄七〕齊衡二年二月癸丑、以陸奧國〈○白河郡〉永倉神列於官社、七月壬申、以紀伊國〈○牟婁郡〉天手力男神預於官社、

〔文德實錄八〕齊衡三年五月戊辰、以山城國〈○愛宕郡〉片山神〈○延喜神名式、作二片山御子神社一、〉列於官社、兼預相嘗祭、九月丁巳、越前國〈○敦賀郡〉天八百萬比咩神、天國津比咩神、天國津彥神、天鈴神、玉佐々良彥神、信露貴彥神等、並預官社、

〔文德實錄九〕天安元年五月丙辰、是日在相模國〈○高座郡〉從五位下石楯尾神預官社、六月甲申、在出雲國〈○飯石郡〉從五位下天穗日命神預官社、八月辛未、在常陸國大洗磯前〈○鹿嶋郡〉酒列磯前神〈○那賀郡〉等預官社、丁亥、在播磨國〈○佐用郡〉從五位下天一神〈○延喜神名式、作二天一神玉神一〉預官社、

〔文德實錄十〕天安二年二月丙戌、在伊勢國〈○度會郡〉正六位上葭原神預官社、己丑、在河內國〈○安宿郡〉從五位下伯太彥、伯太姬神、並預官社、三月甲戌、在周防國〈○都濃郡〉二俣神預官社、己丑、在大和國〈○吉野郡〉從五位下波寶神、波比賣神、並預官社、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年五月四日己未、丹波國〇天田郡荒木神列於官社、　七日壬戌、和泉國〇和泉郡舊府神、聖神、比賣神、〇日根郡等、列於官社、　十七日壬申、肥後國〇阿蘇郡從四位下阿蘇比咩神列於官社、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年七月五日戊午、大和國〇高市郡從五位下氣吹雷神、從五位下響雷神、並列官社、　七日庚申、筑後國〇三井郡從四位下豐比咩神列於官社、　八月十七日庚子、上野國〇那波郡正六位上倭文神列於官社、　十月七日己丑、武藏國〇荏原郡從五位下磐井神列於官社、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年三月辛亥朔、近江國〇栗太郡建部神列於官社、　五月廿日己巳、讃岐國〇多度郡從五位下雲氣神列於官社、　六月九日戊子、能登國大穴持神、〇羽咋郡宿那彥神像石神〇能登郡二前、並列於官社、　十月十五日辛卯、河內國〇安宿郡正四位下飛鳥戶神列於官社、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年二月十三日丁巳、讃岐國〇香川郡從五位上田村神列於官社、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年五月十七日甲申、詔以河內國〇丹比郡從五位下田坐神列於官社、　六月四日辛丑、武藏國〇兒玉郡正六位上金佐奈神列於官社、　十五日壬子、山城國〇宇治郡正六位上天穗日命神、陸奧國鎭守府正六位上石手堰神、並預官社、　十一月十一日乙亥、詔以河內國〇若江郡從五位下栗栖神預之官社、

〔三代實錄八清和〕貞觀六年三月丁亥朔、詔以因幡國〇岩井郡從四位下宇治神預之官社、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年八月十四日戊辰、詔以美作國〇苫東郡從四位下仲山大神、武藏國〇荏原郡從五位下蒲田神、並列官社、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年五月十七日丁酉、詔以紀伊國〇名草郡從五位上堅眞神〇本書貞觀元年五月二十六日辛巳、作堅眞音神、延喜神名式亦同、列於官社、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年六月廿二日辛未、山城國〇葛野郡從五位上天津石門別稚姬神列於官社、　十二月九日丙辰、以甲斐國八代郡立淺間明神祠列於官社、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年五月廿四日丁卯、以大和國平群郡雲甘寺從五位下楢本神、列於官社、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年二月廿六日丙申、以河內國大縣郡石神、常世岐姬神、志紀郡林氏神、(○延喜式神名作伴林氏神社)辛國神、若江郡加津良神、中村神、並預官社、　三月廿六日丙寅、詔以信濃國(○更級郡)從二位武水別神、列於官社、　五月廿一日己未、詔又以因幡國正三位天穗日命神、列於官社、

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年三月廿七日庚辰、以大和國城上郡宗像神、預於官社、

〔台記〕久安四年八月十四日己巳、頭資信朝臣來傳勅云、平野社司請以縣神預官社、可許否、對曰、神社之預官社、國之大事、難輙許、但事不得止、先召諸卿議之可定行歟、

〔法曹至要抄上〕一毀燒神社事

衞禁律大社條疏云、賊盗律云、毀大社者遠流、不顯中社小社罪、若毀中社者、減三等處徒二年、小社者又減三等處杖一百之類、雜律云、於官府廨院及倉庫內失火者徒二年、在宮內加二等、延燒廟內宮闕及大社者遠流、說者云、故燒大社者遠流、若贓滿十端處絞刑、

案之、稱大社者、伊勢大神宮、八幡宮之類也、須任此律取科斷矣、

一闌入神社事

衞禁律云、闌入大社門者徒一年、中社小社各減三等、

案之、稱大社者、伊勢大神宮、八幡宮也、中社者賀茂、住吉社之類也、自餘小社也、而闌入之時皆得其罪、但中小社有所減而已、

〔金玉掌中抄〕一闌入罪事

衞禁律疏云、以不可入之身、入公門幷大社門者也、御在所者絞、持仗者斬、迷誤者不坐、太上天皇門亦同、

〔律疏〕入處

六曰、大不敬、（謂毀大社、及盜大祀神御之物、乘輿服御物者、神御物者、謂大幣、大社神寶亦同、）

〔律疏 賊盜〕凡（中略）謀毀大社者徒一年、毀者遠流、

凡盜大祀神御之物者中流、（謂供神御者、大社神寶亦同、）

〔令義解 公式七〕大社（中略）

右如此之類並闕字

〔長寬勘文〕勘申

甲斐守藤原朝臣忠重幷目代右馬允中原清弘在廳官人三枝守政等罪名事（中略）

謹撿名例律云、八虐、六曰、大不敬、注云、謂毀大社、及盜大祀神御物、疏云、神御物者、謂大幣者、大社神寶亦同、說者云、大社者伊勢大神宮、自餘稱中小社、（中略）

太政大臣殿（藤原伊通）御勘文（中略）

非同體（伊勢熊野）勘文

天照大神不可類他神事

神有三等、大社、中社、小社是也、大神宮爲大、以如加茂社住吉爲中、餘皆小云々、

〔類聚神祇本源 十一外宮別宮〕一大中小社差別事

太政官府　神祇官幷五畿七道諸國司

應早定置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥居幷四至內地町數事

正一位正三位以上爲大社

從三位從四位以上爲中社

正五位從五位以上爲小社

一大社四至限九町

三間檜皮葺正殿一宇、（高一丈二尺、在板敷戶一木、）堅魚木八丸、（長五尺、徑九寸、）千木四支、（長一丈三尺、）瑞垣一重、（方二丈、高七尺、）珠垣

二重、（方各五丈六尺、高八尺、）內外鳥居二基、（內一本高九尺、口徑八寸、外一本高一丈、口徑九寸、）三間檜皮葺幣殿一字、（高一丈一尺、在板數戸一本、）五間草葺拜殿一字、（高八尺、）五間板葺饌殿一字、（高八尺、）五間板葺直會殿二字、（高八尺、）萱葺板倉二字、三間草葺盛屋二字、（在戸二本、）左右板葺廊二字、（各高七尺、）五間外舍二字、（高八尺、）五間廐二字、

一中社四至限八町、

三間檜皮葺正殿一字、（高一丈一尺、在板數戸一本、）堅魚木六丸、（長四尺、徑七寸、）千木四支、（長一丈、）一瑞垣一重、（方二丈五尺、高七尺、）珠垣一重、（方三丈五尺、高八尺、）內外鳥居二基、（高八尺、徑七寸、）三間板葺幣殿一字、（高七尺、戸一本、）三間板（○板恐草誤）葺拜殿一字、（高七尺、）五間板葺饌殿一字、（高七尺、）三間板葺直會屋二字、（高七尺、）五間外舍二字、

一小社四至限四町、

二間板葺正殿一字、（高八尺、在板數戸一本、）堅魚木四丸、（長四尺、徑七寸、）千木四支、（長八尺、）瑞垣一重、（方二丈、高五尺、）鳥居一基、（高六尺、徑六寸、）三間草葺拜殿一字、（高七尺、）三間板葺饌殿一字、（高七尺、）五間雜舍二字、（高尺、）

右被左大臣宣、偁、奉勅、諸國神社正殿雜舍幷四至町數、所定如件、宜仰在國司、以正稅物數、令造進、自今以後、不可違失、若有破損者、應令社司修造、無其勤者、科大祓、解却見任、宜承知、依宣行之、符到奉行、

寶龜二年二月十三日　正四位上行左大辨兼右兵衞督藤原朝臣　百川

左大史外正六位上阿倍志斐連　東人

〔古今要覽稿神祇七〕按に此官符、續日本紀に載られず、北畠准后（○親房）何によられしや、未だ考されどもいふべき事あり、其故は藤原朝臣百川、初め雄田麻呂といふ、寶龜元年八月四日庚巳（○八月四日庚巳、十月丑朔誤、）己從四位上藤原朝臣雄田麻呂授正四位下、五年正月丁未正四位上とあり、然る時は二年二月の比は正四位下なり、又二年三月庚午、正四位下藤原朝臣百川（本名雄田麻呂）爲太宰帥、右大辨內豎大輔右兵衞督越前守並如故といふ、こゝに左大辨とあるは右大辨の誤なるべし、ことに

内豎大輔越前守をば何故に落せしにや怪むべし、然のみならず、正一位正三位以上云々とかけるも語をなさず、且正三位以上を大社とし、從四位以上を中社とし、從五位以上を小社とせられんには、別に大社の宣旨あるべき謂れなし、然るに山城國貴布禰社は、弘仁十年〇十年恐九年誤、下文同、五月大社に列す、其神位を考ふるに、弘仁〇仁下脫二九年二字一六年〇年月誤、從五位下に叙し、承和十年十二月正五位下、〇下恐上誤貞觀元年正月正五位上より從四位下、同十五年五月正四位下にのぼり給へり、是皆正史に載する所にして疑ひなきものなり、是によれば弘仁十年は、五位の社なるに大社に進ましめ給ふは、此官符の制度にたがへる事又怪むべし、又此符中に大社正殿一字高一丈二尺とあり、然るに伊勢皇大神宮は並びなき大社なれば、其正殿高さ一丈二尺の制なるべきに、延暦二十三年の儀式帳に、正殿壹區、高壹丈壹尺とあり、寳龜二年二月に定められし所の制度、はや延暦の時に改られし事は有まじきにや、

〇按ズルニ、古今要覽ハ寳龜ノ官符ヲ源親房ノ造殿儀式ヨリ引ケリ、造殿儀式ハ分チテ二段ト爲シ、上段ハ大中小社差別ニシテ、類聚神祇本源外宮別宮篇ニ出デ、下段ハ造宮制度ニシテ、同書寳基篇ニ出デタルノミナラズ、同書ノ、神鏡篇ノ奥書ニハ、一覽畢一品判北畠殿私記トアリテ、其次ニ此卷依二北畠一品入道家之召一借進之處、御書寫、可レ點二進御書寫御本一之由被二仰下一之間、披見之處、被レ貽二此奥書一畢トアレバ、造宮儀式ハ、類聚神祇本源ヲ抄出セシモノナルベシ、故ニ今ハ類聚神祇本源ヲ取レリ、而シテ古今要覽ノ説ハ、一々肯綮ニ中レルモノニテ、類聚神祇本源ノ疑フベキヲ證スルニ於テハ餘アルモノナルベシ、正一位正三位以上大社トアルハ、正一位至二正三位一以上大社ト云フ意味カトモ思ハルレド、尙妥當ナラズ、且位階ノ正從ハ相均シキモノニテ、古來法律制度ノ上ニテ、終ニ正從ヲ以テ等ヲ異ニスルモノナキニ、三位ノ中ニテ正ヲ大社ト爲シ、從ヲ中社ト爲セルモ不通ノ制ナリ、又其位ノ高卑ニ由リテ、社ノ大中小ヲ分ツコトハ、

諸書ニ言ハザル所ニシテ、大社ハ必シモ正三位以上ナラザルコトハ、古今要覽ニ言ヘルガ如クニシテ、松尾神社ノ、天平二年ニ大社ト爲リ、其後延暦五年ニ從五位下ヨリ從四位下ト爲リ給ヒシガ如キ、河合神社ノ、天安二年ニ名神大社ト爲リテ、貞觀元年ニ從五位上ト爲リ給ヒシガ如キモ、古今要覽ニ引ケル貴布禰神社ノ例ニ同ジ、且名神ハ必ズ大社ナレド、名神ト爲リ給ヒシ時ニ、從四位以下ナルハ比々トシテ皆是ナリ、又小社ニシテ三位以上ナルモアリ、貞觀二年ニ越中國從三位高瀨神ノ正三位ニ進ミ給ヒシガ如シ、或ハ類聚神祇本源ニ云フ所ハ、造殿ノ儀式ニ止マリテ延喜式ニ異ナリトスルモ、神階ノ高卑ニ從ヒテ、社殿ノ大小、四至ノ廣狹ヲ異ニスル等ノ事ノ、此書ノ外ニ絶エテ見エザルヲ如何セン、要スルニ、此書ハ決シテ信ズベカラズ、神鏡篇ノ奧書モ、名ヲ親房ニ託シタルニテ、更ニ造殿儀式ヲ著シタランモ知ルベカラズ、然レドモ久シク世上ニ行ハレ、援引シタルモノモアレバ、姑ク之ヲ錄スルノミ、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡大祓使發訖、卽差遣供幣帛於天神地祇使、中略其幣法、大所各絁五尺、五色薄絁各一尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、小所各絹三尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹葉薦九十枚、並以大藏物充之、大所、小所、謂諸社預祈年祭者、

〔伯家部類〕神祇官之事

大奉幣大小神社幣物之事

大社座別、絹各五尺、五色薄絁各三尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、

小社座別絹各三尺、五色絁五寸、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、中略

右依官宣所勘申如件、

正安三年八月□日　　正六位上少史齋部宿禰業親

從三位行伯業顯王　巳上

〔延喜式三臨時祭〕行幸時祭、若不經宿不祭、

路次神幣

大社別五色薄絁各一尺、絹五尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹葉薦五尺、

小社別五色薄絁各一尺、絹三尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹葉薦三尺、

〔類聚三代格一〕太政官符

應國內諸神不論有位無位敍正六位上事

右太政官去年十二月廿八日下五畿內七道諸國符偁、右大臣宣、奉勅特有所思、天下大小諸神、或本預官社、或未載公簿、有位更增一階、無位新敍六位、唯大社幷名神、雖云無位奉授從五位下者、而今推量六位之中其階有四、至于奉行、必應有疑、宜除奉授從五位之外、不論有位無位共敍正六位上、

嘉祥四年〇仁壽元年正月廿七日

〔三代實錄九淸和〕貞觀六年七月十七日辛丑、頒下五畿七道諸國、班幣境內大小諸神、爲穀祈也、

〔類聚三代格一〕太政官符

應以女爲禰宜事

右撰格所起請偁、太政官去天長二年十二月廿六日符偁、承前之例、諸國小社、或置祝無禰宜、或禰宜祝並置、舊例紛謬、准據無定、加以或國獨置女祝永主其祭、左大臣宣旨、自今以後禰宜祝並置社者、以女爲禰宜、但先置者令終其身者、諸國依格遵來年久、而太政官齊衡三年四月二日符偁、得神祇官解偁、撿案內住吉、平岡、鹿嶋、香取等神主幷祝禰宜皆是把笏、自餘神社未預此例、祭祀之日拱手從事、望請三位已上神社神主幷祝禰宜等同預把笏以增神威、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅入色者依請、白丁者不在此限者、如今諸國神社其數巨多、國司偏稱靈驗請增爵位、二三年間或敍三位以上、因玆諸國雜色人等、皆補禰宜祝、莫非把笏、差使之人、職此之由、熟尋物情諸社有祝專主祭事、至于禰宜有職無

務、伏望除非先置社之外、新叙三位已上神社禰宜依天長二年十二月廿六日符、停把笏以女補任、然則於公有益、於社無損者、中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔類聚三代格 一〕太政官符

應以大社封戶修理小社事 四箇條之初條

右撿格所起請偁、太政官去弘仁十三年四月四日下大和國符偁、得彼國解偁、撿案內太政官去弘仁三年五月三日符偁、有封之社令神戶百姓修造、無封之社令禰宜祝部等永加修理、國司不存撿挍、有致破壞者、遷替之日拘其解由者、國依符旨、行來尙矣、而今有封神社已有治力、無封神社全無修料、仍貧弊祝部無由修社、更加撿責、各規逃隱、推其苦跡、誠有所以、仍撿神苗裔、本枝相分、其祖神則貧而有封、其裔神則徹而無封、假令飛鳥神之裔天太玉〇太玉下恐脫櫛玉二字臼瀧、賀屋鳴比女神四社、此等類是也、望請以無封苗裔之神、分付有封始祖之社、則令有封神主鎭無封祝部、然則社有修掃之勤、國無祟咎之兆者、右大臣宣、奉勅依請者、事施一國、遍行有便、伏望下知四畿內及七道諸國者、中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十六年六月廿八日

〔中右記〕嘉承元年八月三日、有依陣定酉時許參內、右大將治部卿、新中納言、宰相中將二人、新宰相不參集、去四月、賀茂上社失火之輩罪名、明法博士貴淸勘申事也、彼社預實久、准大社失火、可處遠流徒年者、先日陣定之時、稱大社者伊勢神宮也、於此社者、從昔不定大中小社、而稱大社條、若是有證據歟、可進證文之由前日下官定申了、仍被問明法處、今度重勘文不進證文、只申准據之由、人々可勘定之由議、但去四月本社燒亡之後、准大社被行廢朝了、如此之間難左右、故可隨叡斷之旨定申、　廿二日、後聞今夜被行賀茂失火輩罪名了、上卿右大將新宰相頭實□、少納言家隆參仕、本社預實久流罪、權禰宜二人徒罪三

年准大社火事被行歟、

〔延喜式四時祭一〕祈年祭神三千一百卅二座

大〇四百九十二座(三百四座案〇上〇官〇幣〇)

神祇官祭神七百卅七座

奠幣案上神三百四座(宮中卅座、京中三座、畿内山城國五十三座、大和國一百廿八座、河内國廿三座、和泉國一座、攝津國廿六座、東海道伊勢國十四座、伊豆國一座、武藏國一座、安房國一座、下總國一座、常陸國一座、東山道近江國五座、北陸道若狹國一座、山陰道丹後國一座、山陽道播磨國三座、安藝國一座、南海道紀伊國八座、阿波國二座、)

〔延喜式九神名〕天神地祇總三千一百卅二座〇略中大〇四百九十二座

三百四座(並預祈年月次新嘗等祭之案〇上〇官〇幣〇、就中七十一座預相嘗祭、)

〔延喜式九神名〕山城國葛野郡木嶋坐天照御魂神社(名神大、月次相嘗新嘗、)

松尾神社二座(並名神大、月次相嘗新嘗、)

〔年中行事秘抄四月〕上申日松尾祭事

舊記云、〇略中天平二年預大〇社〇者〇、

〔延喜式九神名〕山城國愛宕郡賀茂別雷神社(亦名若雷、名神大、月次相嘗新嘗、)

賀茂御祖神社二座(並名神大、月次相嘗新嘗、) 鴨川合坐小社宅神社(名神大、月次相嘗新嘗、)

〔本朝月令四月〕中酉賀茂祭事

奉河〇合〇神〇幣帛事

依天安二年八月七日太政官符預大〇社〇、

〔年中行事秘抄四月〕中酉日賀茂祭事

川合神、

彼社祝申云、去天安二年八月七日、預四度官幣、

〔本朝月令 四月〕中酉奉河合神幣帛事
延喜元年十二月廿八日太政官符偁、得神祇官解偁云々、件河合神、是御祖別雷兩神之苗裔之神也、加之、此神靈驗顯然、貴賤歸仰、奉大神幣帛之時、先奉此神云々者、左大臣宣、奉勅依請者、預相嘗祭云云者、

〔延喜式 九神名〕大和國葛上郡鴨都味波八重事代主命神社二座並名神大、月次相嘗新嘗、
葛木坐一言主神社名神大、月次相嘗新嘗、　高天彥神社名神大、月次相嘗新嘗、

〔日本後紀 十三平城〕大同元年四月己未、大和國葛上郡正四位上高天彥神預四時幣帛、緣吉野皇太后光○仁后井上廢也、

〔延喜式 九神名〕大和國葛上郡高鴨阿治須岐託彥根命神社四座並名神大、月次相嘗新嘗、
忍海郡葛木坐火雷神社二座並名神大、月次相嘗新嘗、
吉野郡金峯神社名神大、月次相嘗新嘗、

〔文德實錄 六〕齊衡元年六月甲寅朔、以大和國金峯神、預於相嘗月次幷神今食祭也

〔延喜式 九神名〕大和國城上郡大神大物主神社名神大、月次相嘗新嘗、
穴師坐兵主神社名神大、月次相嘗新嘗、
高市郡飛鳥坐神社四座並名神大、月次相嘗新嘗、
十市郡多坐彌志理都比古神社二座並名神大、月次相嘗新嘗、
山邊郡大和坐大國魂神社三座並名神大、月次相嘗新嘗、　石上坐布留御魂神社名神大、月次相嘗新嘗、
河內國高安郡恩智神社二座並名神大、月次相嘗新嘗、
河內郡枚岡神社四座並名神大、月次相嘗新嘗、
攝津國住吉郡住吉坐神社四座並名神大、月次相嘗新嘗、　大依羅神社四座並名神大、月次相嘗新嘗、

名神大月次新嘗

東生郡難波坐生國咲國魂神社二座（並名神大、月次相嘗新嘗、）
比賣許曾神社（名神大、月次相嘗新嘗、）
嶋下郡新屋坐天照御魂神社三座（並名神大、月次新嘗、就中天照御魂神一座預相嘗祭、）
武庫郡廣田神社（名神大、月次相嘗新嘗、）
八部郡生田神社（名神大、月次相嘗新嘗、）　長田神社（名神大、月次相嘗新嘗、）

〔延喜式 神名 十〕紀伊國名草郡日前神社（名神大、月次相嘗新嘗、）
國懸神社（名神大、月次相嘗新嘗、）　伊太祁曾神社（名神大、月次相嘗新嘗、）
鳴神社（名神大、月次相嘗新嘗、）

〔延喜式 神名 九〕宮内省坐神三座（並名神大、月次新嘗、）　園神社　韓神社二座
山城國乙訓郡乙訓坐火雷神社（名神大、月次新嘗、）

〔續日本紀 文武 二〕大寶二年七月癸酉、詔、（中略）在山背國乙訓郡火雷神、每旱祈雨、頻有徵驗、宜入大幣及月次幣例、

〔延喜式 神名 九〕山城國乙訓郡自玉手祭來酒解神社（名神大、月次新嘗、）
葛野郡葛野坐月讀神社（名神大、月次新嘗、）　平野祭神四社（並名神大、月次新嘗、）
梅宮坐神四社（並名神大、月次新嘗、）　天津石門別稚姬神社（名神大、月次新嘗、）
愛宕郡貴布禰神社（名神大、月次新嘗、）

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁九年（○九年、二十二社註式作十年、恐誤、）五月辛卯、山城國愛宕郡貴布禰神爲大社、

〔延喜式 神名 九〕山城國愛宕郡三井神社（名神大、月次新嘗、）
紀伊郡稻荷神社三座（並名神大、月次新嘗、）
大和國添上郡春日祭神四座（並名神大、月次新嘗、）

平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座(並名神大、月次新嘗)

平群坐紀氏神社(名神大、月次新嘗)

〔類聚國史十神祇〕天長元年八月丁酉、依從三位右衞門督兼播磨權守紀朝臣百繼、從四位上行越前加賀守紀朝臣末成等奏、紀氏神中□□幣帛例、

〔延喜式九神名〕大和國廣瀨郡廣瀨坐和加宇加乃賣命神社(名神大、月次新嘗)

葛上郡葛木御歲神社(名神大、月次新嘗)　葛木水分神社(名神大、月次新嘗)

〔延喜式考異〕葛木水分、名神祭不載、案水分神凡四社、而有名神二字者此一社耳、恐錯誤、

〔延喜式九神名〕葛下郡片岡坐神社(名神大、月次新嘗)　火幡神社(名神大、月次新嘗)

吉野郡大名持神社(名神大、月次新嘗)　丹生川上神社(名神大、月次新嘗)

〔類聚國史十神祇〕延曆十九年十月壬辰、丹生□□□□月次祭、

〔延喜式九神名〕大和國城上郡高屋安倍神社三座(並名神大、月次新嘗)

高市郡高市御縣神社(名神大、月次新嘗)　太玉命神社四座(並名神大、月次新嘗)

氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社二座(並名神大、月次新嘗)

河內國安宿郡杜本神社二座(並名神大、月次新嘗)　飛鳥戶神社(名神大、月次新嘗)

和泉國大鳥郡大鳥神社(名神大、月次新嘗)

攝津國嶋下郡新屋坐天照御魂神社三座(並名神大、月次新嘗)

豐嶋郡垂水神社(名神大、月次新嘗)

伊豆國賀茂郡伊豆三嶋神社(名神大、月次新嘗)

武藏國足立郡氷川神社(名神大、月次新嘗)

安房國安房郡安房坐神社(名神大、月次新嘗)

大月次相嘗新嘗

下總國香取郡香取神宮名神大、月次新嘗、

常陸國鹿嶋郡鹿嶋神宮名神大、月次新嘗、

〔延喜式神名十〕近江國甲賀郡川田神社二座並名神大、月次新嘗、

野洲郡御上神社名神大、月次新嘗、

高嶋郡水尾神社二座並名神大、月次新嘗、

若狹國三方郡宇波西神社名神大、月次新嘗、

丹後國與謝郡籠神社名神大、月次新嘗、

播磨國明石郡海神社三座並名神大、月次新嘗、

安藝國佐伯郡速谷神社名神大、月次新嘗、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年七月己酉、安藝國佐伯郡速谷神、○中略預名神例、兼四時幣、

〔延喜式神名十〕紀伊國伊都郡丹生都比女神社名神大、月次新嘗、

名草郡大屋都比賣神社名神大、月次新嘗、　都麻都比賣神社名神大、月次新嘗、

在田郡須佐神社名神大、月次新嘗、

阿波國麻殖郡忌部神社名神大、月次新嘗、

〔延喜式神名九〕京中坐神三座並大、　左京二條坐神社二座並月次相嘗新嘗、

太詔戸命神　久慈眞智命神

山城國愛宕郡出雲井於神社大、月次相嘗新嘗、　片山御子神社大、月次相嘗新嘗、

〔文德實錄八〕齊衡三年五月戊辰、以山城國片山神列於官社、兼預相嘗祀、

〔延喜式神名九〕山城國久世郡水主神社十座並大、月次新嘗、就中同水主坐天照御魂神、水主坐山背大國魂命神二座、預相嘗祭、

大和國添上郡宇奈太理坐高御魂神社大、月次相嘗新嘗、

大月次新嘗

城上郡卷向坐若御魂神社 大、月次、相嘗、新嘗

城下郡村屋坐彌富都比賣神社 大、月次、相嘗、新嘗　池坐朝霧黄幡比賣神社 大、月次、相嘗、新嘗

高市郡甘樫坐神社四座 並大、月次、相嘗、新嘗

河内國若江郡弓削神社二座 並大、月次、相嘗、新嘗

〔延喜式 神名九〕宮中神卅六座

神祇官西院坐御巫等祭神廿三座 並大、月次、新嘗

御巫祭神八座 並大、月次、新嘗、中宮東宮御巫亦同

神產日神　高御產日神

玉積產日神　生產日神

足產日神　大宮賣神

御食津神　事代主神

座摩巫祭神五座 並大、月次、新嘗

生井神　福井神

綱長井神　波比祇神

阿須波神

御門巫祭神八座 並大、月次、新嘗

櫛石窻神 四面門各一座　豐石窻神 四面門各一座

生嶋巫祭神二座 並大、月次、新嘗

生嶋神　足嶋神

造酒司坐神六座 大四座

大宮賣神社四座 並大、月次、新嘗

左京四條坐神一座（大、月次、新嘗、）
隼神社

山城國乙訓郡羽束師坐高御產日神社（大、月次、新嘗、）
大歳神社（大、月次、新嘗、）

小倉神社（大、月次、新嘗、）

葛野郡伴氏神社（大、月次、新嘗、）

宇治郡許波多神社三座（並大、月次、新嘗、）

〔釋日本紀〕（八述義）先師申云、拗風土記曰、宇治郡木幡社、（祇社）名天忍穗根尊云々、○中略弘長（○龜山）諸祭興行之時、當社新年月次祭幣帛、神主請取之由載本官史生散狀、當時見在歟、

〔延喜式〕（九神名）山城國宇治郡山科神社二座（並大、月次、新嘗、）

〔本朝月令〕（四月）上巳山科祭事

太政官符、神祇官應附官帳坐山城國宇治郡山科神二座事、右得宮道氏人內藏少允宮道良連等去年八月七日解偁、件氏神依去寬平十年三月七日奉勅之宣旨、初享公家春秋之祭祀、雖然未附官帳、歲月稍久、望請特被天裁、准於本神、被附官帳、預四度幣、然則値聖主之昌運、永流神冥之威德、以成威歟、鎮守國家者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣忠平宣、奉勅依請者、官宜承知依宣行之、（延喜十一年正月六日）

〔延喜式〕（九神名）山城國久世郡石田神社（大、月次、新嘗、）
水主神社十座（並大、月次、新嘗、）

綴喜郡樺井月神社（大、月次、新嘗、）
月讀神社（大、月次、新嘗、）

棚倉孫神社（大、月次、新嘗、）

相樂郡祝園神社（大、月次、新嘗、）
和伎坐天乃夫支賣神社（大、月次、新嘗、）

岡田鴨神社（大、月次、新嘗、）
岡田國神社（大、月次、新嘗、）

大和國添上郡鳴雷神社（大、月次、新嘗、）
和爾坐赤坂比古神社（大、月次、新嘗、）

太祝詞神社大、月次、新嘗

夜支布山口神社大、月次、新嘗

添下郡矢田坐久志玉比古神社二座並大、月次、新嘗

添御縣坐神社大、月次、新嘗

伊射奈岐神社大、月次、新嘗

平群郡往馬坐伊古麻都比古神社二座並大、月次、新嘗

平群石床神社大、月次、新嘗

伊古麻山口神社大、月次、新嘗

平群神社五座並大、月次、新嘗

葛上郡巨勢山口神社大、月次、新嘗

鴨山口神社大、月次、新嘗

葛下郡葛木倭文坐天羽雷命神社大、月次、新嘗

長尾神社大、月次、新嘗

石園坐多久豆虫神社二座並大、月次、新嘗

調田坐一事尼古神社大、月次、新嘗

金村神社大、月次、新嘗

葛木御縣神社大、月次、新嘗

當麻山口神社大、月次、新嘗

大坂山口神社大、月次、新嘗

葛木二上神社二座並大、月次、新嘗

吉野郡吉野水分神社大、月次、新嘗

吉野山口神社大、月次、新嘗

宇陀郡宇太水分神社大、月次、新嘗

城上郡神坐日向神社大、月次、新嘗

他田坐天照御魂神社大、月次、新嘗

志貴御縣坐神社大、月次、新嘗

忍坂坐生根神社大、月次、新嘗

長谷山口坐神社大、月次、新嘗

忍坂山口坐神社大、月次、新嘗

宗像神社三座並大、月次、新嘗

城下郡鏡作坐天照御魂神社大、月次、新嘗

高市郡高市御縣坐鴨事代主神社大、月次、新嘗

宗我坐宗我都比古神社二座並大、月次、新嘗

飛鳥山口坐神社大、月次、新嘗

檜代坐神社大、月次、新嘗

牟佐坐神社大、月次、新嘗、
畝火山口坐神社大、月次、新嘗、
輕樹村坐神社二座並大、月次、新嘗、
天高市神社大、月次、新嘗、
櫛玉命神社四座並大、月次、新嘗、
川俣神社三座並大、月次、新嘗、
波多瓱井神社大、月次、新嘗、
十市郡十市御縣坐神社大、月次、新嘗、
目原坐高御魂神社二座並大、月次、新嘗、
石村山口神社大、月次、新嘗、
畝尾坐健土安神社大、月次、新嘗、
耳成山口神社大、月次、新嘗、
子部神社二座並大、月次、新嘗、
天香山坐櫛眞命神社大、月次、新嘗、
山邊郡都祁水分神社大、月次、新嘗、
山邊御縣坐神社大、月次、新嘗、
都祁山口神社大、月次、新嘗、
河内國高安郡天照大神高座神社二座並大、月次、新嘗、
讃良郡高宮神社大、月次、新嘗、
志紀郡志貴縣主神社大、月次、新嘗、
志紀長吉神社二座並大、月次、新嘗、
當宗神社三座並大、月次、新嘗、
丹比郡狹山堤神社大、月次、新嘗、
狹山神社大、月次、新嘗、
菅生神社大、月次、新嘗、
攝津國住吉郡中臣須牟地神社大、月次、新嘗、
生根神社大、月次、新嘗、
西成郡坐摩神社大、月次、新嘗、
嶋下郡伊射奈岐神社二座並大、月次、新嘗、
豐嶋郡阿比太神社大、月次、新嘗、

官幣小社

新年祭加奠幣

武庫郡名次神社（大、月次新嘗、○名次、本書作伊和志豆、今據延喜時祭式新嘗祭條改之、）
有馬郡湯泉神社（大、月次新嘗、）
伊勢國度會郡大神宮三座（相殿坐神二座、並大、預月次新嘗等祭、）　荒祭宮（大、月次新嘗、）
瀧原宮（大、月次新嘗、）　伊佐奈岐宮二座（伊佐奈彌命一座、並大、月次新嘗、）
〔三代實錄十四清和〕貞觀九年八月二日戊辰、勅伊勢國伊佐奈岐、伊佐奈彌神、改社稱宮、預月次祭幷殿内人一員、
〔延喜式九神名〕伊勢國度會郡月讀宮二座（荒御魂命一座、並大、月次新嘗、）
度會宮四座（相殿坐神三座、並大、月次新嘗、）　高宮（大、月次新嘗、）
〔延喜式十神名〕阿波國名方郡天石門別八倉比賣神社（大、月次新嘗、）
〔延喜式九神名〕天神地祇總三千一百卅二座（○中略）
小°二千六百卌座
四百卅三座（並預新年案°下°官°幣°）
〔延喜式一四時祭〕新年祭神三千一百卅二座（○中略）
小°二千六百卌座（四百卅三座、案°下°官°幣°、）
神祇官祭神七百卅七座（○中略）
不上奠幣案上新年神四百卅三座（並小、宮中六座、畿内山城國六十九座、大和國一百五十八座、河内國九十座、和泉國六十一座、攝津國卅九座、）
○按ズルニ、四百三十三座ハ、畿内ノ小社ノ總數ニテ、皆官幣ナリ、即新年祭ニ案下ノ官幣ニ預ル、
〔延喜式一四時祭〕新年祭神三千一百卅二座（○中略）
不上奠幣案上新年神四百卅三座（並小、○中略）

社三百七十五所

座別、(中略)○就中六十五座各加靫一口鍬一口、卅座各鍬一口、三座各靫一口、(並見神名帳)

〔延喜式 神名九〕山城國宇治郡宇治神社二座(靫鍬)　宇治彼方神社(靫鍬)

久世郡水度神社三座(靫鍬)　伊勢田神社三座(靫鍬)

綴喜郡咋岡神社(靫鍬)　高神社(靫鍬)

佐牙乃神社(靫鍬)

大和國添上郡奈良豆比古神社(靫鍬)　大和日向神社(靫鍬)

添下郡菅田比賣神社二座(靫鍬)

葛上郡多太神社(靫鍬)　長柄神社(靫鍬)

宇陀郡阿紀神社(靫鍬)　門僕神社(靫鍬)

丹生神社(靫鍬)　高角神社二座(靫鍬)

八咫烏神社(靫鍬)

城上郡狹井坐大神荒魂神社五座(靫鍬)　桑內神社二座(靫鍬)

曳田神社二座(靫鍬)

城下郡岐多志太神社二座(靫鍬)　倭恩智神社(靫鍬)

比賣久波神社(靫鍬)　服部神社二座(靫鍬)

富都神社(靫鍬)

高市郡治田神社(靫鍬)　波多神社(靫鍬)

御歲神社(靫鍬)　鳥坂神社二座(靫鍬)

十市郡坂門神社(靫鍬)　畝尾都多本神社(靫鍬)

河內國石川郡咸古神社鍬靫

讃良郡須波麻神社鍬靫

茨田郡津嶋部神社鍬靫

交野郡片野神社鍬靫

若江郡御野縣主神社二座鍬靫　川俣神社鍬靫

志紀郡樟本神社三座鍬靫

丹比郡丹比神社鍬靫　阿麻美許曾神社鍬靫

大津神社三座鍬靫　櫟本神社鍬靫

和泉國大鳥郡山井神社鍬靫　大鳥神社鍬靫

生國神社鍬靫　等乃伎神社鍬靫

日根郡日根神社鍬靫　加支多神社鍬靫

攝津國住吉郡草津大歳神社鍬靫　神須牟地神社鍬靫

嶋下郡須久神社二座鍬靫　阿爲神社鍬靫

井於神社鍬靫　走落神社鍬靫

幣久良神社鍬靫　溝咋神社鍬靫

太田神社鍬靫

河邊郡伊佐具神社鍬靫

武庫郡伊和志豆神社鍬靫〇伊和志豆、本書誤作名次、今改之、

菟原郡大國主西神社鍬靫　保久良神社鍬靫

有馬郡公智神社鍬靫

〔延喜式 神名九〕大和國添上郡神波多神社 鍬
廣瀨郡於神社 鍬
宇智郡高天岸野神社 鍬　落杣神社 鍬
高天山佐太雄神社 鍬
吉野郡高桙神社 鍬　川上鹿鹽神社 鍬
波寶神社 鍬　波比賣神社 鍬
河內國安宿郡伯太彥神社 鍬　伯太姬神社 鍬
大縣郡若倭彥命神社 鍬　若倭姬神社 鍬
河內郡梶無神社 鍬　栗原神社 鍬
茨田郡細屋神社 鍬
交野郡久須須美神社 鍬
若江郡都留美嶋神社 鍬　長柄神社 鍬
志紀郡長野神社 鍬
和泉國大鳥郡蜂田神社 鍬　大鳥濱神社 鍬
大歲神社 鍬
和泉郡積川神社五座 鍬　舊府神社 鍬
聖神社 鍬
日根郡比賣神社 鍬
〔延喜式 神名九〕大和國宇陀郡椋下神社 叙
城下郡綵井神社 叙

國幣大社

名神大

〔神社私考〕帳（○延喜式神名）の神社の下に、鍬又靫と書たるがあり、○中略但し其鍬靫を奠らるゝ神たちを今帳に揄ふるに、いづれの本も件の座數に合ず、故帳の諸本を按合て、いづれの本にも見えたる所をもて計ふるに、鍬靫と註せるが五十七社ありて、七十五座なり、六十五座とあるに合ず、又鍬と註せるは二十社ありて二十四座なり、是も二十座とあるに合ず、又靫と註せるは一座の神二社ありて、是も三座とあるに合ず、かくて又帳の諸本を按ふるに、件の神たちを除きて別神に鍬と註し、又鍬靫と註し、或は互に一種を註して區なるが九座ばかり、又其外に鍬と註し、鍬靫など註せるを、一本には無きが十座ばかりあり、はやくよりかくとりぞりに寫し混へたるものなり、今外に考定むべき由なし、

〔延喜式一四時祭〕國司祭祈年神二千三百九十五座

大○一百八十八座（東海道卅三座、東山道卅七座、北陸道十三座、山陰道卅六座、山陽道十二座、南海道十九座、西海道卅八座）

〔延喜式九神名〕天神地祇總三千一百卅二座○中略

大○四百九十二座○中略

一百八十八座（並預祈年國幣）

〔延喜式九神名〕伊勢國壹志郡阿射加神社三座（並名神大）

桑名郡多度神社（名神大）

尾張國中嶋郡大神神社（名神大）

眞墨田神社（名神大）

丹羽郡大縣神社（名神大）

愛智郡熱田神社（名神大）

孫若御子神社（名神大）

太神社（名神大）

日割御子神社（名神大）

高座結御子神社（名神大）

遠江國濱名郡角避比古神社名神大
榛原郡敬滿神社名神大
駿河國富士郡淺間神社名神大
伊豆國賀茂郡伊古奈比咩命神社名神大　物忌奈命神社名神大
阿波神社名神大
田方郡楊原神社名神大
甲斐國八代郡淺間神社名神大
相模國高座郡寒川神社名神大
武藏國兒玉郡金佐奈神社名神大
上總國埴生郡玉前神社名神大
常陸國鹿嶋郡大洗磯前藥師菩薩神社名神大
久慈郡靜神社名神大
筑波郡筑波山神社二座一名神大、一小
那賀郡吉田神社名神大　酒列磯前藥師菩薩神社名神大
新治郡稻田神社名神大

〔延喜式十神名〕近江國滋賀郡小野神社二座名神大　日吉神社名神大
栗太郡佐久奈度神社名神大　建部神社名神大
野洲郡兵主神社名神大
蒲生郡奧津嶋神社名神大
伊香郡伊香具神社名神大

美濃國不破郡仲山金山彥神社大名神
信濃國諏方郡南方刀美神社二座大名神
安曇郡穗高神社大名神
更級郡武水別神社大名神
水內郡健御名方富命彥神別神社大名神
小縣郡生嶋足嶋神社二座大名神
上野國甘樂郡貫前神社大名神
群馬郡伊加保神社大名神
勢多郡赤城神社大名神
下野國河內郡二荒山神社大名神
陸奧國白河郡都都古和氣神社大名神
苅田郡苅田嶺神社大名神
宮城郡志波彥神社大名神　鼻節神社大名神
色麻郡伊達神社大名神
信夫郡東屋沼神社大名神
牡鹿郡零羊埼神社大名神　拜幣志神社大名神
桃生郡計仙麻大嶋神社大名神
行方郡多珂神社大名神
栗原郡志波姬神社大名神
會津郡伊佐須美神社大名神

安積郡宇奈己呂和氣神社名神大
柴田郡大高山神社名神大
宇多郡子負嶺神社名神大
出羽國飽海郡大物忌神社名神大　月山神社名神大
若狹國遠敷郡若狹比古神社二座名神大
越前國敦賀郡氣比神社七座並名神大
丹生郡大虫神社名神大
能登國羽咋郡氣多神社名神大
越中國射水郡射水神社名神大
○按ズルニ、射水神社ノ下ナル名神大ノ三字諸本ナシ、臨時祭式名神祭ニモ載セズ、今ハ姑ク
雲州本ニ依ル、
〔延喜式十神名〕越後國蒲原郡伊夜比古神社名神大
丹波國桑田郡出雲神社名神大　小川月神社名神大
船井郡麻氣神社名神大
多紀郡櫛石窓神社二座並名神大
丹後國加佐郡大川神社名神大
與謝郡大虫神社名神大　小虫神社名神大
丹波郡大宮賣神社二座名神大
但馬國朝來郡粟鹿神社名神大
養父郡夜夫坐神社五座名神大二座、小三座、　水谷神社名神大

出石郡伊豆志坐神社八座並名神大

〔古語拾遺〕泊于橿向玉城朝垂仁、○中略新羅王子海檜槍アマノヒボコ来帰、今在但馬国出石郡、為大社也、

〔延喜式神名十〕但馬国出石郡御出石神社名神大

気多郡山神社名神大　戸神社名神大

　雷神社名神大　楊椒神社名神大

城崎郡海神社名神大

因幡国法美郡宇倍神社名神大

出雲国意宇郡熊野坐神社名神大

出雲郡杵築大社名神大

隠岐国知夫郡由良比女神社名神大

海部郡宇受加命神社名神大

穏地郡水若酢命神社名神大　伊勢命神社名神大

播磨国揖保郡粒坐天照神社名神大　中臣印達神社名神大

　家嶋神社名神大

宍粟郡伊和坐大名持御魂神社名神大

美作国苫東郡中山神社名神大

備前国邑久郡安仁神社名神大

備中国賀夜郡吉備津彦神社名神大

安芸国佐伯郡伊都伎嶋神社名神大

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年七月己酉、安芸国佐伯郡○中略伊都岐嶋神、並預名神例、兼四時幣、

〔延喜式神名十〕安藝國安藝郡多家神社名神大
長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座並名神大
紀伊國名草郡伊達神社名神大　志磨神社名神大
静火神社名神大
牟婁郡熊野坐神社名神大
淡路國津名郡淡路伊佐奈伎神社名神大
三原郡大和大國魂神社名神大
阿波國板野郡大麻比古神社名神大
讃岐國香川郡田村神社名神大
阿野郡城山神社名神大
苅田郡粟井神社名神大
伊豫國宇摩郡村山神社名神大
新居郡伊曾乃神社名神大
越智郡大山積神社名神大　姫坂神社名神大
多伎神社名神大
○按ズルニ、姫坂神社、及多伎神社ノ下ナル、名神大ノ三字一本並ニ無シ、臨時祭式名神祭ニモ亦載セズ、今ハ姑ク雲州本等ニ依ル、
〔延喜式神名十〕伊豫國野間郡野間神社名神大
溫泉郡阿治美神社名神大
伊豫郡伊豫神社名神大

筑前國宗像郡宗像神社三座並名神大　　織幡神社名神大
那珂郡八幡大菩薩筥崎宮名神大
○按ズルニ、織幡神社、臨時祭式名神祭ニ無シ、八幡大菩薩筥崎宮ノ下、諸本名神ノ二字ナシ、延喜式考異ノ説ニ據リテ補フ、
〔延喜式神名十〕筑前國那珂郡住吉神社三座並名神大
糟屋郡志加海神社三座並名神大
御笠郡筑紫神社名神大　　竈門神社名神大
下座郡美奈宜神社三座並名神大
筑後國三井郡高良玉垂命神社名神大　　豐比咩神社名神大
豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮名神大
〔東大寺要錄四〕太口口符　　太宰府
應令大神宇佐二氏八幡大菩薩宮口事
右得太宰府解偁、○中略天平三年際顯神驗、奉預官幣、○中略
弘仁十二年八月十五日　　格外
〔延喜式神名十〕豐前國宇佐郡比賣神社名神大　　大帶姬廟神社名神大
肥前國松浦郡田嶋坐神社名神大
肥後國阿蘇郡健磐龍命神社名神大
壹岐嶋壹岐郡住吉神社名神大　　兵主神社名神大
月讀神社名神大　　中津神社名神大
石田郡天手長男神社名神大　　天手長比賣神社名神大

大

對馬嶋上縣郡和多都美神社名神大　和多都美御子神社名神大

下縣郡高御魂神社名神大　和多都美神社名神大、

太祝詞神社名神大　住吉神社名神大

○按ズルニ、伊賀、志摩、土佐、豐後、大隅諸國ニハ大社アレド名神ナシ、

〔延喜式九神名〕伊賀國阿拜郡敢國神社大

志摩國答志郡粟嶋坐伊射波神社二座並大

安房國安房郡后神天比理乃咩命神社大

〔延喜式十神名〕丹後國竹野郡竹野神社大

土佐國土佐郡都佐坐神社大

豐後國大分郡一座大　西寒多神社

大隅國桑原郡一座大　鹿兒嶋神社

壹岐嶋石田郡海神社大

○按ズルニ、三河、飛驒、加賀、佐渡、伯耆、石見、備後、周防、日向、薩摩ニハ大社ナシ、

國幣小社

〔延喜式九神名〕天神地祇總三千一百卌二座中略

小〇二千六百卌座中略

〔延喜式一四時祭〕國司祭祈年神二千三百九十五座中略

二千二百七座並預二祈年國幣一

小〇二千二百七座東海道六百八十(八十、七十九誤)座、東山道三百卌座、北陸道三百卌八座、山陰道五百廿三座、山陽道百廿四座、南海道百卌四座、西海道六十九座、

〔延喜式十神名〕越前國丹生郡小虫神社

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年十二月甲午、越前國丹生郡小虫神爲二幣社一焉、

名神

〔延喜式神名十〕隱岐國知夫郡比奈麻治比賣命神社

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年五月丙辰、前遣渤海使外從五位下内藏宿禰賀茂麻呂等言、歸郷之日、海中夜暗、東西掣曳、不識所著、于時遠有火光、尋逐其光、忽到嶋濱、訪之、是隱岐國智夫郡、其處無有人居、或云、比奈麻治比賣神、常有靈驗、商賈之輩、漂宕海中、必揚火光、頼之得全者、不可勝數、神之祐助、良可嘉報、伏望奉預幣例、許之、

〔延喜式神名十〕大隅國贈於郡大穴持神社

〔類聚國史神祇十〕弘仁五年二月乙酉、大隅國曾於郡造嶋神預幣帛例、

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜九年十二月甲申、去神護中、大隅海中有神造嶋、其名曰大穴持神、

〔延喜式神名九〕武藏國都筑郡杉山神社

〔續日本後紀仁明七〕承和五年二月庚戌、武藏國都筑郡杉山神社預之官幣、以靈驗也、

〔延喜式神名十〕越中國射水郡氣多神社

〔延喜式神名帳頭註〕越中礪浪郡〇礪波郡、射水郡誤、氣多　延喜八年八月十六日乙卯、以越中氣多大神預官幣、

〇按ズルニ、延喜神名式載ル所單ニ神名ノミヲ揭ゲテ、其下ニ大小、若クハ諸祭ノ名目ヲ揭ゲザルモノハ、都テ國幣小社トス、故ニ今陞幣例ニ預ルト云フ例證アルモノヽミヲ收メテ、其餘ハ悉ク闕略ニ從ヘリ、

〔延喜式臨時祭三〕名神祭二百八十五座

園神社一座　韓神社一座已上坐宮内省

賀茂別雷神社一座　賀茂御祖神社二座

松尾神社二座　稻荷神社三座

貴布禰神社一座
鴨川合神社一座
御井神社一座
葛野月讀神社一座
木嶋坐天照御魂神社一座
平野神社四座
梅宮神社四座
乙訓神社一座
酒解神社一座亦號二山埼神一已上山城國
春日神社四座
大和神社三座
石上神社一座
多坐神社二座或號二大社一
飛鳥神社四座
高市御縣神社一座
氣吹雷神社二座
大神神社一座
太玉神社四座
穴師神社一座
高屋安倍神社三座
大名持御魂神社一座
丹生川上神社一座
金峰神社一座
鴨神社二座
葛木御歲神社一座
葛木一言主神社一座
高鴨神社四座
高天彥神社一座
葛木火雷神社二座
片岡神社一座
火幡神社一座
廣瀨神社一座
龍田神社二座
平群坐紀氏神社一座已上大和國
恩智神社二座
枚岡神社四座
杜本神社二座
飛鳥戸神社一座已上河內國

大鳥神社一座和泉國

住吉神社四座　大依羅神社四座

難波生國魂神社二座　比賣許曾神社一座亦號下照比賣

新屋神社三座　垂水神社一座

廣田神社一座　生田神社一座

長田神社一座已上攝津國

阿射加神社三座　多度神社一座已上伊勢國

太神社一座太或作多　眞墨田神社一座

大縣神社一座　熱田神社一座

日割御子神社一座　孫若御子神社一座

高座結御子神社一座已上尾張國

角避比古神社一座　敬滿神社一座已上遠江國

淺間神社一座駿河國

三嶋神社一座　伊古奈比咩命神社一座

物忌奈命神社一座　阿波咩命神社一座

楊原神社一座已上伊豆國

寒川神社一座相模國

氷川神社一座　金佐奈神社一座已上武藏國

安房神社一座安房國

玉前神社一座上總國

香取神宮一座 下総國
鹿嶋神宮一座
静神社一座
吉田神社一座
稲田神社一座 已上常陸國
小野神社二座
佐久奈度神社一座
川田神社二座
奥津嶋神社一座
水尾神社二座 已上近江國
仲山金山彦神社一座 美濃國
南方刀美神社二座
生嶋足嶋神社二座 已上信濃國
貫前神社一座 或作二拔鋒一
赤城神社一座 已上上野國
二荒神社一座 下野國
都都古和氣神社一座
志波彦神社一座
志波姫神社一座
東屋沼神社一座

大洗磯前藥師菩薩神社一座
筑波山神社一座
酒列磯前藥師菩薩神社一座
日吉神社一座 比叡神同
建部神社一座
御上神社一座
伊香神社一座
穗高神社一座
伊加保神社一座
苅田嶺神社一座
鼻節神社一座
伊達神社一座
零羊埼神社一座

拜幣志神社一座
計仙麻神社一座
多河神社一座
伊佐酒美神社一座
宇奈己呂和氣神社一座
大高山神社一座
子負嶺神社一座已上陸奥國
大物忌神社一座
月山神社一座已上出羽國
若狹比古神社二座若狹國
氣比神社七座
大虫神社一座已上越前國
氣多神社一座能登國
伊夜比古神社一座越後國
出雲神社一座
小川月神社一座
麻氣神社一座
櫛石窓神社二座已上丹波國
大川神社一座
籠神社一座
大虫神社一座
小虫神社一座
大宮賣神社二座已上丹後國
粟鹿神社一座
夜夫神社二座
伊豆志神社八座
山神社一座
戸神社一座
雷神社一座
楊椒神社一座
海神社一座已上但馬國
宇倍神社一座因幡國
熊野神社一座
杵築神社一座已上出雲國

由良比女神社一座
宇受加命神社一座
水若酢命神社一座
伊勢命神社一座已上隱岐國
海神社三座
粒坐天照神社一座
中臣印達神社一座
家嶋神社一座
伊和神社一座已上播磨國
中山神社一座美作國
安仁神社一座備前國
吉備津彥神社一座備中國
速谷神社一座
伊都伎嶋神社一座
多家神社一座已上安藝國
住吉荒御魂神社三座長門國
丹生都比女神社一座
日前神社一座
國懸神社一座
伊太祁曾神社一座
大屋都比賣神社一座
都麻都比賣神社一座
鳴神社一座
伊達神社一座
志磨神社一座
靜火神社一座
須佐神社一座已上紀伊國
淡路伊佐奈岐神社一座
大和大國魂神社一座已上淡路國
大麻比古神社一座
天日鷲神社一座已上阿波國
粟井神社一座讃岐國

村山神社一座　大山積神社一座
野間神社一座　阿治美神社一座已上伊豫
志加海神社三座　住吉神社三座
宗像神社三座　八幡神社一座
筑紫神社一座　竈門神社一座
美奈宜神社一座已上筑前
高良玉垂命神社一座　豊比咩神社一座已上筑後
八幡比賣神社一座已上豊前
田嶋坐神社一座肥前國
健磐龍命神社一座肥後國
住吉神社一座　兵主神社一座
月讀神社一座　中津神社一座
天手長男神社一座　天手長比賣神社一座已上壹岐嶋
和多都美神社一座　和多都美御子神社一座
高御魂神社一座　和多都美神社一座
太祝詞神社一座　住吉神社一座已上對馬嶋

座別絁五尺、綿一屯、絲一絇、五色薄絁各一尺、木綿二兩、麻五兩、裹料薦廿枚、若有大幣者、加絁五丈五尺、以布一端代絲一絇、

○按ズルニ、本書神名式ニ名神トアリテ、而シテ本文名神祭ニ列セザルモノアリ、乃チ山城國葛野郡天津石門別稚姫神社、大和國葛上郡葛木水分神社、尾張國中嶋郡大神神社、甲斐國八代

郡淺間神社、近江國野洲郡兵主神社、信濃國更級郡武水別神社、水內郡建御名方富命彥神別神社、若狹國三方郡宇波西神社、越中國射水郡射水神社、但馬國養父郡水谷神社、出石郡御出石神社、紀伊國牟婁郡熊野坐神社、讃岐國香川郡田村神社、阿野郡城山神社、伊豫國新居郡伊曾乃神社、越智郡姬坂神社、多伎神社、伊豫郡伊豫神社、筑前國宗像郡織幡神社、豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮、大帶姬廟神社等ノ二十一社是ナリ、

〔神社私考〕神社に名神と申す事、式より前には續日本紀に、天平二年十月庚戌、遣使奉渤海信物於諸國名神社、とあるを始にて、史どもにあまた見えたり、いづれにも天平の以往より有し稱號なり、(中略)かくて其名神祭は、臨時の祭にて、恒例の祭にはあらず、事ある時に臨て、御祈の爲に、名神三百九座(延喜神名式ニ據テ數フル所ナリ)の中にて、祭らるゝ例社を定置れたるにて、其祭の時座別に幣をたてまつられ、大嘗の時は幣を增さるゝ例なり、(中略)さて名神と云ふ由は、字書に、名は大也、功也、聲稱也、などいへる義にて、(名君名將名僧など云も同じ)其神を故ありて別に稱へ奉られたるなるべし、そは帳(延喜神名式)を撿るに、名神は悉大社にて、大社に名神ならぬはいと多きをも思ひ合すべきなり、又日本後紀に、弘仁三年七月の勅に、神明之道、轉禍爲福云々、宜奉幣於天下名神とみえたるは、なべて天下の諸神を名神と詔へるなり、又延曆の外宮儀式帳に、載官帳名神十六處、未載官帳名社八處といへるは、名社はいはゆる名神にはあらず、稱へて云へるなり、(同度の內宮儀式帳にも、同例の文ありて、そこには名の字なきを思ひ合すべし、)日本紀略にも、たゞ神社と云ふべきを、名社と書るが多くあるも同じ、又三代實錄に、貞觀三年五月十五日、遣使者於近京名神七社、奉幣祈雨、告文曰云々、八幡大菩薩乃廣前(爾)申賜(倍止)申久云々、自餘社告文准之、と記されたる名神も又同じ、(中略)帳に名神大社にて、祈年月次相嘗新嘗の四祭に預りたまふ神は、山城の賀茂別雷神社、同御祖神社二座をはじめ、諸國にもこれかれおはするは、殊に重く崇めたまへる極なるべくそらには思は

るれど、いとも尊き伊勢二所皇大神宮の、其中の相嘗に預りたまはず、やむ事なき出雲杵築大社の、新年の外の祭に預りたまはざるなどを思へば、件の四祭に預りたまふが、重く崇めたまへるにはあらず、又必しも各神のしろしめせる御功德などに因れるのみにもあらず、たゞ前の御世御世より、次々に然定めて祭り來りたまへるまゝに行はれて、官帳に記し置るを、やがて式にもとり載られたるものなるべし、

○按ズルニ、延喜式神名帳ニ云フ所ノ名神トハ、名神祭ニ預レルモノヲ指セルナラン、其數ノ少カ名神祭ニ合ハザルモノハ、拔入轉寫等ヲ經テ、誤ヲ致セルニ由レルナルベシ、原來延喜式中ニ在リテ、尤モ諸本ノ不同アルモノハ、神名帳ニ若クモノナケレバ、疑ヲ此ニノミ懷クベキニアラズ、サテ名神祭ノ僅ニ臨時祭式ニノミ見エテ、更ニ他ニ見エザルモノハ、此祭ハ神祇官等ニ於テスルニハアラズシテ、臨時ニ其社ニ奉幣スルモノニテ、下文ニ引ケルガ如キモノナルベシ、卽名神トハ、全國中有名ノ社ヲ擧ゲテ全國ノ社ニ代ラシムルモノナラン、但盡ク大社ナレドモ、必シモ第一等ノ神社ニアラズ、然レドモ國史中ニハ、某神社ヲ以テ名神ト爲ス等ノ文ノ外ニハ、有名ノ神社ヲ汎稱スルコトモ偶ナキニハアラズ、

〔延喜式臨時祭三〕凡諸神預名神官社等者、待官符下、更修下國符、請內印、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年七月己酉、安藝國佐伯郡速谷神、伊都岐嶋神、並預名神例、兼四時幣、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁九年十一月丙午、筑後國御井郡高良玉垂命神爲名神、　十二月乙丑、丹波國桑田郡出雲社預名神、

〔釋日本紀十五述義〕日本後紀曰、淳和天皇天長九年五月庚戌、令卜筮人九、集於內裏、伊豆國神爲祟奏、伊豆國言上、三島神、伊古奈比咩神〇賀茂郡二前預名神、

〔續日本後紀仁明二〕天長十年七月戊子、越後國蒲原郡伊夜比古神預之名神、以彼郡每有旱疫致雨救、

病也、

〔續日本後紀 四仁明〕承和二年九月辛未、以上野國群馬郡伊賀保社預之名神、十二月壬午、尾張國(○愛智郡)日割御子神、孫若御子神、高座結御子神、總三前舉預名神、並熱田大神御兒神也、

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年十一月己巳、美濃國不破郡仲山金山彥大神奉授從五位下、即預名神、

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年八月戊戌、伊豫國從四位下大山積神、(○越智郡)從五位下野間神、(○野間郡)並預名神、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年五月丙午、大和國葛上郡從三位高天彥神爲名神、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年二月己酉、備前國邑久郡安仁神預名神焉、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年十一月乙卯、讃岐國(○苅田郡)栗井神預之名神、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年四月己未朔、坐梅宮(○山城國葛野郡)正五位下酒解神、從五位下大若子神、從五位下小若子神三前、並奉授從四位下、從五位下自玉手祭來酒解神(○山城國乙訓郡)一前正五位下、並預名神、

○按ズルニ、本書本文ノ下ニ、丁丑山崎神預之名神トアレド、延喜神名式ニ、自玉手祭來酒解神社(元名山埼社)トアレバ、別神ニアラズ、又同年十月壬申ノ下ニモ、梅宮從四位下酒解子神一前預之名神トアリ、蓋竝ニ誤謬ナランカ、附シテ後考ヲ俟ツ、

〔續日本後紀 十五仁明〕承和十二年十二月庚辰、從四位下稻荷神預名神例、

〔文德實錄 五〕仁壽三年六月己巳、以大和國(○吉野郡)金峰神預於名神、庚午、以尾張國(○中嶋郡)多天神預於名神、甲戌、以伊豫國(○宇摩郡)村山神預於名神、七月甲午、以駿河國(○富士郡)淺間神預於名神、十一月癸丑、以遠江國(○榛原郡)敬滿神靈預於名神、

〔文德實錄 七〕齊衡二年正月壬寅、以伊勢國(○壹志郡)阿射賀神預於名神、九月癸丑、以園神韓神(○宮內省坐神)

列於名神、

〔文德實錄九〕天安元年十月己卯、在常陸國大洗磯前〇鹿島郡酒列磯前〇那賀郡両神、號藥師菩薩名神、

〔文德實錄十〕天安二年八月丁未、在山城國〇愛宕郡從五位上鴨川合神預名神、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十年九月五日、〇中略某日授越前國日野名神從五位下、

〇按ズルニ、日野神ハ、本國今立郡ニ在リ、延喜神名式外神社ナリ、

〔類聚符宣抄一〕太政官符神祇官

應預祈年祭幣大原野神社肆座事

右祈年祭者、京畿外國名神靈社皆享禮奠、各預幣帛、〇中略

長元三年二月廿日

〔續日本紀十聖武〕天平二年十月庚戌、遣使奉渤海信物於諸國名神社、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年十一月癸丑、遣使奉幣於近江國名神社、先是仲麻呂之走據近江也、朝廷遙望祈請國神、而其出境內、即伏其誅、所以賽宿禱也、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆七年五月己酉、詔群臣曰、宜差使祈雨於伊勢神宮及七道名神、是夕大雨、其後雨多、遠近周匝、遂得耕殖矣、

〔續日本紀四十桓武〕延曆九年五月甲午、以炎旱經月、公私焦損、詔奉幣畿內名神、以祈嘉澍焉、

〔類聚國史十神祇一〕延曆十六年六月壬申、遣使奉幣畿內七道諸國名神、皇帝〇桓武於南庭親臨發焉、以祈萬國安寧也、

大同五年七月丙辰、勅、夏苗已茂、秋稼始熟、恐風雨失時、嘉穀被害、宜遣使畿內、奉幣名神、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年七月丁巳朔、勅、頃者疫旱竝行、生民未安、靜言于此、情切納隍、但神明之道、轉禍爲福、庶憑祐助、除此災禍、宜走幣於天下名神、

〔類聚國史 神祇十一〕弘仁七年七月癸未、勅、風雨不時、田園被害、○中略宜仰畿内七道諸國、其官長清愼齋戒、奉幣名神、禱止風雨、莫致漏失、十二年八月丙寅、勅、今嘉穀垂穗、多稔方熟、恐風水爲災、致其傷害、宜奉幣名神、以護秋稼也、

天長元年八月丁丑朔、奉幣帛名神、祈除風雨損也、七年七月甲申、遣使十八寺、令讀經奉幣五畿内七道諸國名神、爲攘災也、八年八月庚午、奉幣名神、爲防風雨之災也、九年七月乙巳、奉幣五畿内七道諸國名神、防風雨也、

〔續日本後紀 四仁明〕承和二年七月乙巳、走幣於天下名神、預攘風雨之災、

○按ズルニ、毎年夏秋ノ交、諸名神ニ奉幣シテ、預テ風雨ノ災ヲ禳フコトハ、當時已ニ一定ノ恒儀トナレルガ如シ、故ニ此後多クハ闕略ニ從ヘリ、

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年七月壬午、○壬午二字、據類聚國史補、勅曰、方今時屬西成、五穀垂穗、如有風雨愆序、恐損秋稼、宜令五畿内七道諸國奉幣名神、攘災未萌、其幣帛料用正税、長官率僚屬、自親齋戒、祭如神在、必致徵應、

〔續日本後紀 十一仁明〕承和九年三月丁巳、遣使奉幣松尾、鴨御祖、鴨別雷、乙訓等名神、祈雨也、是日雨降、通宵不綏、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月丙戌、是日有勅、爲諸名神令度七十人、各爲名神發願誓念、其得度者、皆以神字被於名首、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年九月庚子、下知五畿七道諸國、班幣名神、同告賀瑞之由、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應國内諸神不論有位無位叙正六位上事

右太政官去年十二月廿八日、下五畿内七道諸國符偁、右大臣宣、奉勅特有所思、天下大小諸神、或本

預官社、或未蒙公譴、有位更增一階、無位新叙六位、唯大社幷名神雖云無位、奉授從五位下者、而今推量、六位之中其階有四、至于奉行、必應有疑、宜除本授從五位之外、不論有位無位、共叙正六位上、

嘉祥四年〇仁壽元年正月廿七日

〔文德實錄 六〕齊衡元年四月丁巳、遣傳灯大法師位智戒、興智、眞秀、傳灯法師位明昭、玄永、傳灯滿位僧基慶、基秀、向七道諸國名神社、轉讀般若、祈民福也、

〔文德實錄 九〕天安元年二月乙酉、遣使內外諸名神社、賀木連理、白鹿等之瑞、〇下略

〔文德實錄 十〕天安二年四月辛丑、於冷泉院南路大祓、爲遣諸名神社奉幣帛之使、

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年五月十五日戊子、遣使者於近京名神七社、奉幣祈雨、告文曰、天皇我詔旨止掛畏支八幡大菩薩乃廣前仁申賜止倍申久、〇中略自餘社告文准此、

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年三月四日丙寅、勅班幣七道諸國名神、今春咳嗽流行、人多疫死、仍總名社神明、有祓因以賽之、

〔三代實錄 十三清和〕貞觀八年七月六日戊申、遣使於伊勢大神宮、告以應天門火、〇中略又班幣南海道諸神、告文曰、天皇我詔旨止南海道諸名神乃廣前爾申給久、〇中略名神達爾京庫乃幣帛乎齋使天奉幣、〇中略內豎正八位上齋部宿禰社雄乎卜定天奉給布詔旨乎平久聞食天、今毛今毛御體乎天地日月共爾護惠比助給比、旱魃風雨災無久助給止恐美恐美毛申給止申、〇下略

〔類聚三代格 一〕太政官符

一應任用神主事 四箇條內

右太政官弘仁十二年正月四日下大和國符偁、彼國解偁、部內名神其社有數、〇中略假令大和、大神、廣瀨、龍田、賀茂、穴師等大神是也、〇中略

貞觀十年六月廿八日

案上案下社

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年五月十六日辛酉、先是出羽國司言、從三位勳五等大物忌神社、在飽海郡山上、○中略弘仁年中見火、其後不幾有事兵仗、決之蓍龜、並云、彼國名神因所禱未賽、又冢墓骸骨汙其山水田、○下略

〔類聚三代格一〕太政官符

應禁制大和國丹生川上雨師神社界地事○中略

謹撿名神本紀云、不聞人聲之深山、吉野丹生川上立我宮柱以敬祀者、爲天下降甘雨止霖雨者、○中略

寬平七年六月廿六日

〔日本紀略一醍醐〕昌泰元年七月廿日戊子、下知五畿七道諸國、奉幣神寶於諸名神社、

〔日本紀略六圓融〕天祿二年十月廿八日庚寅、五畿七道名神社五十五社差使一人、毎社奉舍利一粒、入銀壺、宇佐宮被奉法服、

〔延喜式一四時祭〕祈年祭神三千一百卅二座

大四百九十二座三百四座案上官幣○中略

小二千六百卅座四百卅三座案下官幣○中略

神祇官祭神七百卅七座

奠幣案上神三百四座宮中卅座、京中三座、畿內山城國五十三座、大和國一百廿八座、河內國廿三座、和泉國一座、攝津國廿六座、東海道伊勢國十四座、伊豆國一座、武藏國一座、安房國一座、下總國一座、常陸國一座、東山道近江國五座、北陸道若狹國一座、山陰道丹後國一座、山陽道播磨國三座、安藝國一座、南海道紀伊國八座、阿波國二座、

不奠幣案上祈年神四百卅三座並小、宮中六座、畿內山城國六十九座、大和國一百五十八座、河內國九十座、和泉國六十一座、攝津國卅九座、○中略

右神祇官所祭、○中略三后皇太子御巫祭神各八座、並奠幣案上、○中略致齋之日平明奠幣物於齋院、案上幷案下所司預敷案下、幣藁○中略忌部頒幣帛畢、大神宮幣帛者、置別案上、發使進之、

〔延喜式九神名〕天神地祇總三千一百卅二座○中略

大四百九十二座　三百四座（並祈年月次新嘗等祭之案上官幣、〇中略）
小二千六百卌座　四百卌三座（並祈年祭案下官幣、）

〔儀式　三〕踐祚大嘗祭儀
卯日平明、神祇官班幣於諸神、（謂新年祭案上神、）

〔日本紀略　十四後一條〕長元三年十二月十日戊子、初奉月次祭案上幣於大原野社、

〔延喜式神名帳頭註〕山城愛宕郡
太田　人皇七十四代鳥羽院〇中略元永三年官符預案上官幣、

〔國太暦〕延文元年八月、諏訪社事、〇中略
諏訪社間事、一紙加一見謹返上候、〇中略凡此社者、式内之名神、案上之幣奠也、（謂式内者、延喜式事也、案上案下、依相分也、）〇中略號案上案下之官幣者、二月四日新年祭、六月十一日月次祭、十一月中卯日新嘗祭、十二月十一日月次祭、（已上四度）公家被獻官物候也、得此御意、可令披露給候、恐々謹言、
　八月七日　神祇大副兼豐

〇按ズルニ、官幣大社ハ盡ク案上官幣ニシテ、官幣小社ハ盡ク案下官幣ナリ、而シテ國幣ノ大小社ハ、何ヲ以テ區別スルヲ知ラズ、延喜四時祭式ノ、國司祭祈年神ノ儀ノ註ニ、祭日并班幣儀並准神祇官トアル文ニ依リテ之ヲ推セバ、疑ラクハ亦案上案下ノ國幣ヲ以テ、社ノ大小ヲ別ツナラン、

〔儀式　三〕踐祚大嘗祭儀
卯日平明、神祇官班幣帛於諸神、（謂新年祭案上神、）座別絁五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、四座置一束、八座置一束、楯一枚、槍一竿、葉薦五枚、庸布一丈四尺、（前神部）

社首之別

式内外社

〔延喜式神名九〕天神地祇總三千一百卅二座
社二千八百六十一處
前。二。百。七。十。一。座。

〔延喜式四時祭一〕祈年祭○中略奠幣案上神三百四座
社一百九十所○中略前。一。百。六。座。○中略
不奠幣案上祈年神四百卅三座○中略
社三百七十五所○中略前。五。十。八。座。

〔古事記傳十二〕此社と前との分をよく考へ知れる人なし、皆おしあての妄説をのみなせり、己考るに、社と云るは、神座の數にかゝはらず、一社を一として、其數を都合て社若干所と云、前と云るは、二座以上の神社の中に、主たる神一座を除きて、其餘を幾座にても前として、前若干座と云なり、たとへば三座を祠れる社ならば、中に主たる神一座を除きて、餘の二座を前二座と定めたるものなり、主たる一座は社と云中に在る故に、前と云中には入れざるものぞ、此格を以て計る時は、右の式に擧たる數皆よく合へり、但宮中京中の神は、其神名を擧たるは各一社とす、たとへば御巫祭神八座の如き、各名を擧たる故に八社とするなり、其餘神名を擧ずして、某社幾座とあるは皆右の格なり、凡て社と云數の中に入れる神は幣物多く、前の神は幣物減れり、さて主たる神一座も實は前なれども、そは其社の主たる故に社を指て申し、餘は其社の主に非る故に神座を指て前とは申すなり、故に社には若干所と云ひ、前には若干座と云ひ、二を總ても若干座と擧られたり、

〔廿二社本縁〕此廿二社幷仁上中下乃品於被定事、中古已來事也、皇城乃近境仁取氏、別志氏崇敬乃神乎被定、細々仁臨時乃奉幣アリシナリ、此外皇都乃近國仁モ、式内式外乃神多久坐す、撰定乃儀難測里、

〔朝野群載六神祇官〕式。外。神。社進合御卜證文

宮主外從五位下行神祇少祐卜部宿禰兼良解申請官宣旨事

壹紙被裁應令神祇少祐卜部宿禰兼良早進上不載式神卜合御體御卜祓證文事、副進證文四通、

一卷延久五年十二月陣解文案

一卷承曆四年六月奏案

一卷延久六年六月問文

一卷承保二年十二月問文

右被去三月廿四日宣旨、同四月十九日到來偁、右中辨平朝臣時範傳宣、權中納言藤原朝臣季仲傳宣、奉勅宜仰兼良早令進上件證文者、謹所請如件、抑不載式之神合御卜之條、是承前之例也、近則去延久二年十二月御卜、坐越後國春日布河兩社、坐陸奧國鹽竈島海二社、同六年六月御卜、坐陸奧國浮嶋鹽竈島海三箇社、承保二年十二月御卜、坐紀伊國小野社、承曆四年六月御卜、坐丹波國須岐社、坐阿波國白鳥社等是也、皆是雖爲式外已合御卜了、縱雖不合御卜、不載式之神社注占問文、又以常例也、具旨見所進證文等矣、而兼良苟傳祖父之間文、專致靈龜之占兆、更非今案、已以舊跡也、誠是所以冥則畏神明、顯則畏奉公之故也、望請官裁、任前例欲被裁許、仍注事狀謹解、

康和二年六月二日

宮主外從五位下行少祐卜部宿禰兼良

〔諸社根元記上〕一大原野

式。外。、或日、山城國乙訓郡大原野神社四座、同春日、

〔類聚符宣抄一〕太政官符神祇官

應預祈年祭幣大原野神社肆座事

右祈年祭者、京畿外國名神靈社、皆享禮奠各預幣帛、而件社自爲被祭、已忘如在、今加料量、直備其數、

右大臣宣、奉勅宣預案上幣列春日社下、自今以後立爲恒例者、官宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位上行權左中辨藤原朝臣　　　從五位下行左大史惟宗朝臣

長元三年二月廿日

〔諸神根元抄〕一石淸水

山城國久世郡八幡宮三座式外

〔諸社根元記上〕一祇園

山城國愛宕郡八坂鄕祇園三座式外

〔二十二社註式〕北野社式外

〔二十二社註式〕吉田社式外

〔諸神記上〕一吉田

堀河院長治三、官符預四度祭、

〔樵談治要〕廿二社のうち、石淸水、吉田、祇園、北野の四社は、延喜式の神名帳にのらざる社たるによりて、式外の神と申なり、

〔諸神記中〕一宗像社

建治二年勘文曰、東一條宗像神社三座、元爲式外之神、而去年建治元年兼文依勘奏子細、可預四度官幣之由宣下了、

〔諸社根元記中〕一比良神式外、近江國滋賀郡、

〔園太曆〕延文元年八月、諏訪社事、中略

諏訪社間事、一紙加一見謹返上候、中略凡此社者、式內之名神、案上之禮奠也、號式內者、延喜式事也、中略得此御意、可令披露給候、恐々謹言、

八月七日　神祇大副兼豐

〔諸神根元抄〕一宮崎

延喜神祇式曰、筑前國那珂郡八幡大菩薩筥崎宮一座式°内°

〔諸神根元抄〕一五所別宮各°式°外°也°

筑前國大分宮　肥前國千栗宮　肥後國藤崎宮　薩摩國新田宮　大隅國正八幡宮

〔諸社根元記中〕香椎宮筑前國糟谷郡香椎宮、式外、

〔秘本玉くしげ下〕今かくめでたき治平の御代久しくつゞけるに付ては、大名方はいよ〳〵領内領内の神社を興立し、厚く祭りたまひ、殊に式内の社などは、御自身もをり〳〵御參詣あるべき御事なり、

一二三四五宮

〔大日本國一宮記〕鴨大明神號二下社一、大山咋父、故號二御祖一、父日二糺宮一、大己貴命也、　山城愛宕郡

賀茂大明神號二上社一、大山咋神也、號二別雷一、母玉依姫、武角身命女、

三輪大明神號二大神一、大物主神、大己貴命也、父素戔嗚、母稲田姫、　大和城上郡

平岡大明神號二枚岡神一、天兒屋命也、又於二奈良春日第三殿一祭レ之、　河内河内郡

大鳥神社日本武尊也　和泉大鳥郡

住吉神社底筒男、中筒男、表筒男三座、號加二神功皇后一四座也、　攝津住吉郡

敢國神社號二南宮一、金山姫命也、　伊賀阿拜郡

都波岐神社號田彥神也　伊勢河曲郡

伊射波神社　志摩答志郡

眞墨田神社號眞清田大明神此也、大己貴命、　尾張中嶋郡

〔承久軍物語三〕六月五日三〇承年久辰の刻に、諸軍勢尾°張°國°一°の°宮°につきしかば、方々いくさの手わ

けをぞせられける、

〔十六夜日記〕洲俣〈○美濃國安八郡〉とかやいふ河には、舟を並べて、まさきのつなにやわらん、かけとゞめたる浮橋あり、〈○中略〉一宮といふやしろをすぐとて、
一の宮名さへなつかしふたつなくみつなき法をまもるなるべし、廿日尾張國おりど〈○中略郡〉といふむまやをゆく、

○按ズルニ、此一宮ハ、延喜式ニ載スル所ノ、尾張國中島郡眞墨田神社ヲ云フナラン、

〔大日本國一宮記〕砥鹿大明神〈大己貴神〉　參河寶飯郡
己等乃麻知神社〈號二事任神一、祓田彦命〉　遠江佐埜郡

〔享保集成絲綸錄〕〈二十一寺社〉寛保二〈戌〉年五月
遠州一宮神主　鈴木彈正
遠江國　駿河國　三河國　信濃國〈○中略〉
右遠州一宮明神社、〈○中略〉修復爲二助力一勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參、去酉十月ゟ、當戌十二月迄、御料私領寺社領在町可レ致二巡行一旨、志之事は物の多少によらず可レ致二寄進一旨、御料は御代官、私領は領主より可二申渡一候、

〔大日本國一宮記〕淺間大明神〈號二富士權現一、大山祇女、木花開耶比咩、〉　駿河富士郡
三島大明神〈大山祇命〉　伊豆賀茂郡
淺間神社〈同二富士一〉　甲斐八代郡
寒川神社〈八幡也〉　相模高座郡

〔吾妻鏡〕〈二〉養和二年〈○壽永元年〉八月十三日辛亥、若公〈○源賴家〉誕生之間、〈○中略〉御家人等獻二御馬一、及二百餘匹一、以二此龍蹄等一、被レ奉二于鶴岳宮、當國一宮一、〈○中略〉兼二備父母一之壯士等被二撰定御使一云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年八月九日己酉、早旦以後、御臺所御產氣、○中略鶴岳相模國神社佛寺奉神馬、被修誦經、所謂、○中略

一宮佐河大明神

〔吾妻鏡二十二〕建保二年十月二日癸巳、入夜將軍家○源實朝自二所還着相州、○北條義時爲當國一宮奉幣御使逗留給、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年○寶治元年八月十四日甲午、被奉神馬御劍等於相模國一宮三浦六郎兵衛尉時連爲御使、是相怪異事歟、

〔新編相模國風土記六十二高座郡〕寒川佐本加波神社　棟札ノ文ニ曰、相州一宮御寶殿破壞日久矣、依之奉再興、所冀國家安泰、人民快樂、子孫繁衍、兵戈獲利、大永閼午九月吉日、相州大守北條新九郎平氏綱花押

〔大日本國一宮記〕氷川神社素戔嗚命　武藏足立郡

〔寶曆集成絲綸錄十九寺社〕寛延二巳年三月

武州足立郡宮本鄕一宮簸河神社神主　武笠播磨

右一宮簸河明神社頭就大破、爲修復料御寄進之品有之、其上爲助力、御府内武家方寺社町方并武藏一國家別ニ一宮之札相賦リ、勸化御免被成下、○下略

〔大日本國一宮記〕安房神社誠洲崎大明神六大玉命也、　安房安房郡

玉前神社高皇產靈尊、生產靈一男、前玉命、　上總埴生郡

〔古今著聞集一神祇〕延久二年八月三日、かづさの國一のみやの御たくせんに、懷姙の後すでに三年におよぶ、いま明王の國をゝさむる時に望て、若みやを誕生すと仰られけり、これによりて海濱を見ければ、明珠一顆ありけり、かの御正體にたがふ事なかりけり、ふしぎなる事なり、

〔吾妻鏡　二〕養和二年(○壽永元年)八月十一日己酉、及晩御臺所有御産氣、(中略)○爲御祈禱、被立奉幣御使於伊豆箱根兩所權現、幷近國宮社、

所謂(中略)○

相模一山(梶原平次)

上總一宮(少權介眞)

〔吾妻鏡　三〕壽永三年(○元曆元年)正月八日戊戌、上總國一宮神主等申云、故介廣常存日之時、有宿願、奉納甲一領於當宮寶殿云云、武衞被仰下曰、定有子細事歟、被下御使可召覽之云云、仍今日被遣藤判官代幷一品房等、進御甲二領、彼奉納甲者、已爲神寶、無左右難給出之故、以兩物取替一領之條、神慮不可有其祟歟之旨被仰云云、　十七日丁未、藤判官代邦通、一品房、幷神主兼重等、相具廣常之甲、自上總國一宮歸參鎌倉、卽召御前覽彼甲、(小櫻威)結付一封狀於高紐、武衞自令披之給、其趣所奉祈武衞御運之願書也、(中略)○

願書云

敬白

上總國一宮寶前

立申所願事

一三箇年中可寄進神田二十町事

一三箇年中可致如式造營事

一三箇年中可射萬度流鏑馬事

右志者、爲前兵衞佐殿下、心中祈願成就、東國泰平也、如此願望令一々圓滿者、彌可奉崇神威光者也、仍立願如右、

治承六年七月日　上總權介　平朝臣廣常

〔大日本國一宮記〕香取神社 齋主命也、於二春日本第二殿一祭レ之、　下總香取郡

鹿島神社 武甕槌神、春日第一殿祭レ之、　常陸鹿嶋郡

建部神社 大己貴命也、三輪一體、　近江栗太郡

〔源平盛衰記 三十一〕木曾登山附勢多軍事

大田倉光、名乘テ中々恐シカリナントテ、馬ノ鼻ヲ引返シ、勢多ノ橋二三間ヲ引落シテ、當國〇近江ノ一宮建部社ニ陣ヲ取ル、

〔寺德集〕此神〇新羅明神知音神明多之所謂鹿嶋明神、山王三聖、建部神等也、來臨始、依爲當國一宮、介□建部社給、

〔大日本國一宮記〕南宮神社 金山彥命也　美濃不破郡

〔源平盛衰記 三十五〕範賴義經京入事

角ヲ山路ヲ出デヌレバ、殖栢〇殖栢二字恐誤倒二里、クラブ山、風ノ森ヲモ打過テ、當國〇美濃ノ一宮南宮大菩薩ノ御前ヲバ、心計ニ再拜シテ、暫ク新居川原ニ著タリ、

〔大日本國一宮記〕水無神社 大己貴命女、御歳神也、　飛驒大野郡

南方刀美神社 大己貴二男、建御名方刀美命也、號二諏訪大明神一、　信濃諏訪郡

拔鋒大明神 經津主神也、　上野甘樂郡

〔寶曆集成綠綸錄 十八 寺社〕延享三寅年正月

上野國一宮拔鋒大神大宮司　一宮民部

右拔鋒大神社、及二大破一候付、修補爲二助力一、上野一國、勸化御免被二仰付一、〇下略

〔大日本國一宮記〕二荒山神社 大己貴命男、事代主神、　下野河內郡

都都古和氣社大己貴男、高彥根、　陸奥白河郡

〔諸社根元記　下〕一諸國一宮神名帳

鹽竈大明神　陸奥國

〔大日本國一宮記〕大物忌神社倉稻魂神也　出羽飽海郡

遠敷大明神號若狹彥神、上社彥火火出見、下社豐玉姬、妹玉依姬、　若狹遠敷郡

氣比神社又號笥飯宮、人皇十四代仲哀天皇也、　越前敦賀郡

白山比咩神社下社伊弉冊尊、上社菊理媛、號白山權現、　加賀石川郡

氣多神社大己貴命　能登羽咋郡

氣多神社同上　越中礪波郡

伊夜日古社饒速日尊皇子、天香久山命也、　越後蒲原郡

〔諸社根元記　下〕一諸國一宮神名帳

宜現大明神　越後國

〔大日本國一宮記〕渡津神社大己貴命兄、五十猛神、名大屋彥神、　佐渡羽茂郡

出雲社大己貴命妻、三穗津姬也、父高皇產靈尊、　丹波桑田郡

〔吾妻鏡　三〕壽永三年〇元暦元年九月廿日丙午、玉井四郎資重濫行事、所被下院宣也、今日到來于關東、武衛〇源賴朝殊依恐申給、則可停止之旨被仰下云云、

〇〇〇〇〇〇丹波國一宮出雲社者、蓮華王院御領也、預給能盛法師、年來令知行、何有稱地頭之輩哉、年來又不聞食及、而號彼御下文、玉井四郎資重恣押領、其理可然哉、有限御領不可有異儀事也、早可停止件濫行之由、令下知給、可宜之由院之御氣色候也、仍執達如件、

八月卅日　　右衛門權佐

謹上　兵衛佐殿〇源頼朝

〔出雲神社古文書下年山集所引〕尊氏公御教書議在二比宮

丹。波。國。一。宮。出。雲。社。領、任二元明天皇御時之例一、指圖目錄之旨、不レ可二相違一之狀如レ件、

文和三年閏十月廿一日　御判

社家中

〔大日本國一宮記〕籠神社一名籠守權現、住吉一體也、　丹後與謝郡

〔丹後國諸莊鄕池田數帳〕正應元年八月日

與佐郡

一細工所保卅四町一段二百六十七步內

一町　一宮御領

一光國保三町拾八步內

三段　一宮御領

一籠宮田四拾六町二百十步　一宮御領

一朝幣料田十二町　一宮御領

丹波郡

一大野鄕廿四町一段內

一町一段　一宮御經料所

〔大日本國一宮記〕粟鹿神社上社彥大火出見、中社籠神、下社玉依姫、　但馬朝來郡

〔諸社根元記下〕一諸國一宮神名帳

出石社　但馬國朝來郡〇朝來郡、今石見郷、

〔延喜式神名帳頭註〕但馬出石郡

出石 又號一宮也

〔但馬國大田文〕出石郡

當國一宮

出石社　百四十一町六十分

常荒流失　三町一反、又出石鄕押領四町四反小云々、

長日御祭田　七十一町二百五十六分

講經修理田等　二十七町九反大

引聲幷御神樂　十一町一反大

田以下料

領家佃案主給　六町半

定田　八町八反百四十分

菅莊　南方　二十五町半　地頭多々良岐孫太郎長基

一宮田　三町六反

〔大日本國一宮記〕宇倍神社 式内大巳也　因幡法美郡

〔中右記〕元永二年七月三日丙午、侍從宗成爲令下向因幡國、〇中略是九ヶ年間未令下向、猶有恐之由、國人申合云々、仍爲參向彼國一宮、俄所參向也、　十日、因幡守宗成今年九ヶ年不成籤符也、仍今日令請印也、爲令參彼國一宮、來十四日下向也、　十四日、曉因幡守宗成令下向、是九ヶ年未下向也、於神拜者、先日以目代令遂了、然而一度未參一宮、是有恐之故也、仍俄令下向也、今度可令行臨時祭也、

〇按ズルニ、當時王政既ニ衰ヘ、國守京ニ在リテ任國ニ赴カザルヲ例トス、然ルニ特ニ一宮ヲ

拜スル爲ニ任國ニ下ルヲ見レバ、以テ其崇敬ノ厚カリシヲ知ルニ足レリ、

〔歷名土代〕從五位下　因幡一宮神主　伊福部宗世（大永七、正、廿二、）

〔大日本國一宮記〕倭文神社（大己貴命女、下照姫也、）　伯耆川村郡

杵築宮（大己貴命、素盞烏命、）　出雲出雲郡

物部神社（饒速日尊子、宇麻志麻治命、）　石見安濃郡

〔寶曆集成絲綸錄（十八寺社）〕延享三（寅）年七月

石見國一宮物部大明神國造金子左京禁足付名代社家　庵原內記

石見國　出雲國　因幡國　伯耆國　安藝國　周防國　長門國

右物部大明神社頭、先年類燒、此度再建付、爲助成勸化御免、（下略）

〔大日本國一宮記〕由良比咩社（大己貴嫡后、須勢利姫、）　隱岐智夫郡

伊和神社（大己貴御魂也）　播磨宍粟郡

〔百鍊抄（十六後深草）〕建長元年四月四日乙巳、軒廊御卜、（播磨國一宮燒亡事）

〔大日本國一宮記〕中山神社（大己貴御魂也）　美作苫東郡

吉備津宮（孝靈天皇子吉備津彥命者非也、孝靈三世吉備武彥命也、備前、備中、備後三國一宮也、）　備中賀夜郡

〔太平記（三）〕櫻山自害事

去程ニ櫻山四郎入道ハ、備後國半國計打順ヘテ、備中ヘヤ越マシ、安藝ヲヤ退治セマシト案ジケル處ニ、笠置城モ落サセ給ヒ、楠モ自害シタリト聞エケレバ、一旦ノ付勢ハ皆落失ヌ、今ハ身ヲ離ヌ一族、年來ノ若黨、二十餘人ゾ殘ケル、（中略）人手ニ懸リテ尸ヲ曝サンヨリハトテ、當國ノ一宮ヘ參リ、八歲ニ成ケル最愛ノ子ト、二十七ニ成ケル年來ノ女房トヲ刺殺シテ、社壇ニ火ヲカケ、己ガ身モ腹掻切テ、一族若黨二十三人、皆灰燼ト成テ失ニケリ、

〔太平記十六〕兒島三郎熊山擧旗事附船坂合戰事

爰ニ備前國一宮ノ在廳ニ、美濃權介佐重ト云ケル者、可引方ナクシテ、已ニ腹ヲ切ラントシケルガ、屹ト思返ス事有テ、脱タル鎧ヲ取テ著、捨タル馬ニ打乘テ、向フ敵ノ中ヲ推分テ播磨ノ方ヘゾ通リケル、

〔大日本國一宮記〕伊都岐嶋神社 天照與二素盞烏一誓給生三女内、市杵嶋姫、　安藝佐伯郡

〔源平盛衰記十二〕新院嚴嶋鳥羽御幸事

三月十七日 治承四年 ニハ、新院 高倉 安藝國一宮嚴嶋ノ社ヘ可成御幸由披露有ケル程ニ、諸寺諸山騷動シテ、京中ノ貴賤何トナク騷合ケル、

〔源平盛衰記二十三〕新院自嚴嶋還御附新院恐御起請并落書事

十月六日 治承四年 新院 高倉 嚴嶋ヨリ還御アリ、中略 彼明神ト申ハ、安藝國第一ノ鎭守ナリ、國務ノ人ハ、マヅ此神拜ヲ專ニス、

〔玉葉和歌集 八旅〕安藝の一宮へ參りけるに、たかとみの浦と云所にて、風に吹とゞめられて程へければ、とまふきたりけるいほりより、月のもりけるを見て、

西行法師

波の音を心にかけてあかすかなとまもる月の影を友とて

〔大日本國一宮記〕玉祖神社 伊弉諾男、玉屋命、　周防佐波郡

〔今昔物語十七〕依地藏助活人造六地藏語第廿三

今昔周防國ノ一ノ宮ニ玉祖ノ大明神ト申ス神在マス、其社ノ宮司ニテ玉祖ノ惟高ト云フ者有ケリ、中略 長德四年ト云フ四月ノ比惟高身ニ病ヲ受テ日來ニ惱ミ煩フ、

〔大日本國一宮記〕住吉神社 底筒男、中筒男、表筒男也、　長門豐浦郡

日前國懸宮〈天見國懸、石凝姥、〉　紀伊名草郡
伊佐奈岐神社〈式、多賀社、〉　淡路津名郡

〔淡路常磐草四津名郡〕伊佐奈岐神社　多賀村に有り、一宮多賀社といふ、〈中略〉元久の廳宣一通、賀集山護國寺にあり、其文曰、

廳宣　留守所

可令早引募一二宮法花樓兩會舞樂料荒野拾町事

右兩會舞樂料荒野拾町、可引募東神代八木兩郷之由、去子年雖被成下御廳宣件郷等無催促之由、〇中略早令開發板列并西神代之荒野、可引募彼料田之狀、仍執達如件、

留守所宜承知、敢勿違失、以宣、

元久二年四月　守藤原朝臣〈押字〉

〔大日本國一宮記〕大麻比古神社〈猿田彥神〉　阿波板野郡
田村社〈同上〉　讚岐香川郡
大山祇神社　伊豫越智郡

〔金葉和歌集十雜上〕範國朝臣にぐして伊豫國にまかりたりけるに、正月より三四月迄、いかにも雨のふらざりければ、なはしろもせで、よろづにいのりさはぎけれどかなはざりければ、守、能因歌よみて一宮にまゐらせて、雨いのれと申ければ、まゐりて祈申ける歌、

能因法師

天河苗代水にせきくだせ天降ます神ならば神

神感ありて、大雨降りて、三日三夜やまずと家集に見えたり、

〔大日本國一宮記〕都佐神社〈式、高賀茂大明神、味鉏高彥根、〉　土佐土佐郡

〔百練抄 十三 後堀河〕元仁元年十月六日、或人云、土佐國一宮、去八月十八日以後至廿二日大風、大木等顚倒也、皆神殿已下不殘一宇顚倒云々、

〔大日本國一宮記〕宮崎宮 八幡大神、二聖母神后、三竈門、號宮崎八幡、　筑前那珂郡

〔筑前國續風土記 四上 那珂郡〕建武三年、尊氏九州下向の時、此御神に祈り、神領寄進有し文書、今に至て神職家に留れり、其文章に曰、

寄進筑前國一宮　豐前國河崎庄也

右今度之義兵遂本望、祈天下之安寧家門繁昌、寄進如件、建武三年三月八日、源朝臣書判有、

〔大日本國一宮記〕高良玉垂神 武內宿禰　筑後三井郡

宇佐宮 應神天皇、比賣神、大帶姬、吾朝宗廟、　豐前宇佐郡

西寒多神社 號大分宮、宮崎同體也、又名柞原八幡、　豐後大分郡

與止日女神社 號河上大明神、八幡伯母、神功皇后妹也、　肥前佐嘉郡

健磐龍神社 人皇十二代景行帝御出現、阿曾郡彥也、　肥後阿蘇郡

〔東寺文書〕異國降伏御祈事、先々被仰畢、武藏、上野、伊豆、駿河、若狹、美作、肥後國一宮、國分寺□寺社、殊可令致精勤之由相觸之、可執達卷數之旨、可令下知給之由被仰下候也、仍執達如件、

正應五年十月五日　陸奥守御判

進上　相模守殿

〔阿蘇文書 五〕肥後國一宮阿蘇社、同健軍、甲佐郡浦四箇社事、爲一圓神領令知行之、可致天下靜謐祈禱精誠之狀如件、

觀應元年七月十九日　花押

阿蘇大宮司殿

〔大日本國一宮記〕都農神社 大己貴命　日向兒湯郡

鹿兒嶋神社〈號二大隅正八幡宮一派右云、神功皇后也、〉　大隅桑原郡

和多都美神社〈號二枚聞神社一、鹽土老翁、鹽田彥神、〉　薩摩頴娃郡

〔諸社根元記下〕一諸國一宮神名帳

八幡大菩薩　薩摩國

〔大日本國一宮記〕天手長男神社〈天思兼神一男派〉　壹岐石田郡

和多都美社〈八幡宮也〉　對馬上縣郡

右諸國一宮神社如此、秘中之深秘也、

〔神社私考〕世に一宮記と云書ありて、諸國の一宮と稱ふを一社づゝ載たり、みな延喜式内の神なり、○中略さて中むかしの書どもに、一宮と記せる社號を見るに、みな此一宮記に合ひ、今も然云ひ來れる社諸國に多かり、然るに其一宮を定られたるは何の御世、いかなる由にて定られたるにか詳ならずといへども、唯一神道など云ふ徒の、漫に作定たるものにはあらず、但しもとは社號ばかり載たりけんを、今在る本には神號の書ざま、又社號の下に祭神を注せる中には、いかゞある事もうち交りて聞ゆるぞ、かの神道者流などの所爲なるべき、〈榮花四の四季物語四月の段、賀茂社の事を云へる處に、仁和の始の年になむ、もろ〳〵の國に一の宮を定たまふ時、此御神を山城國の一の宮に定められ、かけまくもかしこき御事よ云々、その云へるは、そのかみの傳にては有けめど、史にも見えたる事なく、又先帝天皇の御世の頃、さる式を定たまふべき御代のまゝにあらず、延喜の神祇式にも其稱見えたる事なし、すべて無據に、賀茂の神たちの古事などいへる說どもの、みなみだりなるに思ひ合するに、其一宮の事もそのかみ既に云ひならひ來れる俗說なる事也、又伊豫國の事を記せる類事記〔一事記、類國處實記〕といふ書に、諸國に於て一宮と云ふは、伊豫の大三嶋より外にはなきなり、一國に一宮と云ふは、其後聖武天皇之御宇、六十六箇國に一社づゝおきたまふと云へるは、こまに書しき說なりかし、○中略〉かくて一宮記なる社號を按ふるに、いづれも式社にはあれど、必しも名神大社にもあらず、又神位の高きにもよらず、小社も預りたまひ、又神階の卑きもあり、中にも天照大御神の宮敷坐ませる伊勢國にては、河曲郡都波岐神社の、小社にておはするをさへに一宮として載たり、そ

もく一宮と稱す神社を定られたる事は、正しき古書どもに見えず、何の御世、何なる由にて定られしにか詳ならず、今つらく推考るに、延喜の神名式定られたる後の御世に、諸國の神社へ、神祇官或は國守などより、移送布告すべき事などの狀によりては、豫て各國に一社を定め置て、まづ其社司に告知せ、其社司奉り專當して、國內の諸社司に傳達せさせ、又諸社司より申す事をも執達せさする爲に、そのかみの神社の在かたにつけて、便宜にまかせ、或は時勢によりなどして定められたる新式なりしなるべし、猶よく尋考ふべし、（今諸國の中に、一宮な置き神社さして中には闕頒などいひて、國內の神社の事を專當せる例なるがこれかれ聞えたるも、古のなごりなるべし、〇中略）又二宮三宮などいへるがあるは、其一宮に障りある時、次々にかかりに其事に預るべく、國內限りに、私に定たる國々のありしなるべし、

〔長明四季物語 四月〕仁和のはじめのとしになん、もろもろの國に一。の。宮。をさだめ給ひし時、此御瑞籬（〇賀茂社）を山城の國の一の宮に定められ、かけまくもかしこき御事よ、

〔古今神學類編 五神國〕按ニ諸州皆一宮二宮ノ稱アリ、是ハ十代崇神天皇、天社地社神地神戶ヲ定メ置ルヽノ時、其天社地社ヲ以テ、總テ其國ノ一宮ト稱レ之、其後垂仁天皇ノ御宇ニモ、亦同ク定置キ給シ國社ヲ諸州ノ二宮ト奉レ稱ト也、又一說ニハ、崇神帝ノ時ニ定ル天社ハ一宮、地社ハ二宮也トモ云ヘリ、又或神記ニ云、諸國ノ神社代々ニ神階ヲ進メラレテ後、一二ノ宮ト云事モアリト見エタリ、是國分寺ナド置レシ如ク、一時ノ定メトハ不レ見、一宮記アリト云ヘドモ、其時ヲ慥ニハ不レ記、中比ヨリ申シ出シタルコトナリ、上代ノ記錄ニ、一宮ト云コトナシ、

〔伯家部類〕神祇官御年貢進社事
尾張國　一宮（八丈五匹）
佐渡國　一宮（神主本官被レ成二年貢一、且鮑三百貝進、）
伯耆國　一宮（莚百枚進）

長門國　一宮（上牛一頭）
淡路國　一宮（炭五十籠、木五十束、）
右大略注進如件
永萬元年六月日

〔吾妻鏡　五〕元暦二年（〇文治元年）十一月廿四日癸卯、二品（〇源頼朝）爲國土泰平、被奉御願書於諸社、先大神宮分、被付生倫神主、其外近國一宮云云、

〔吾妻鏡　十四〕建久五年十一月廿七日乙卯、近國一宮幷國分寺、可修復破壞之旨被仰下云云、

〔吾妻鏡脱漏〕元仁二年（〇嘉祿元年）五月廿二日壬午、於鶴岳八幡宮、而千二百口傳供養有之、寅刻衆會各著座於左右廻廊幷假屋等、先仁王經一卷轉讀之、次誦心經尊勝陀羅尼等十返、亦心經尊勝陀羅尼各一千卷被摺之、次彼經各百卷、以金泥令書寫畢、是諸國彼毎一宮可被奉納一卷宛云云、

〔吾妻鏡　二十七〕安貞三年（〇寛喜元年）十一月十日、依去四日雷電、爲世上御祈、近國一宮被立奉幣御使、相模國駿河守、武藏國武州御使、上野國相模五郎時直、安房國駿河前司義村、上總國足利五郎長氏等也、各被進神馬御劒等、又於社壇可轉讀大般若經之由被仰別當等、助教師員、源正忠、季氏等奉行之、

〔建武年間記〕一諸國一二宮事
本家幷領家職事、可停止其號之由以前治定了、於社敷地幷神職收公地頭跡者、被尋究可被停止之、至神領地頭職者、隨事之體、追可有沙汰矣、

〔延喜式神名帳頭註〕河内高安郡
恩智　御食津神也、當國二宮、

〔甲斐叢記　五〕美和明神（二宮村）　社領百七十七石餘、大己貴命を祀る、又忤衛神社とも稱ふ、本州の二宮なり、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年四月廿日癸酉、今日迎伊豆國三島社祭日、武衛〇中略、頼朝、以糠田長崎爲八月放生會〇二宮〇八幡宮料所、被付神主盛成、

〔吾妻鏡 十二〕建久三年八月九日己酉、早旦以後御臺所御産氣、〇中略鶴岳、相模國神社佛寺、奉神馬被修誦經、所謂、〇中略

二宮 河勾大明神

〔新編相模國風土記 四十 淘綾郡〕山西村

二宮明神社　往古ハ川勾神社ト稱ス、是延喜式ニ載スル所、當國十三座ノ一ナリ、

〔延喜式神名帳頭註〕石見那賀郡

多鳩　二宮也

播磨多可郡

荒田　二宮也

美作苫東郡

高野　二宮也

〔山陽道美作記〕二ノ宮緣起

作陽苫西郡神部郷三輪村、正一位高野大明神ハ、地神第五代彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の鎮座にして、人王の始祖たり、〇中略當宮の神領等中頃の亂世より絶たりしを、慶長年中、森中將忠政卿、一國の主となり給ひしより、神領寄附し給ひぬ、然しより以來、彌以天下泰平、國家豐饒の神事、怠慢なく修行ありしなり、

〔國花萬葉記 十三 美作〕二之宮　二之宮ニ有、後宇多院弘安四年九月、此所郷民に告あるにより、伊勢兩宮を此所に勸請すと云々、

〔周防國一宮玉祖靈記〕御坂大明神（中正二位、當國二宮、）

〔本朝無題詩　七〕著長門境即事　　釋蓮禪

浪聲涉旬猶泛然、愁中有興綴詩篇、隣船礎日引麻布、里社祈風供木綿、（遠岸有一社、當州第二宮、於府中所遂拜、指社頭而來、付是不日新頓無、○下略）

○按ズルニ、此二宮ハ、延喜式ニ、長門國豐浦郡忌宮神社ト見エタル神社ニシテ、今モ猶二宮ト稱スト云フ、

〔淡路常磐草　五三原郡〕大和國魂神社　同じ村（○上八太村）榎山にあり、二宮と稱す、封田若干、國君より殿舍を營建し給ふ、○中略按ずるに、二宮とは、淡路國式內大小神社の內に名神大社二座あり、伊佐奈岐社大和社なり、既に伊佐那岐社を一宮といへば、當社は其序第二にある故に二宮といふなり、

〔伯家部類〕神祇官御年貢進社事

尾張國　二宮　八丈十匹

伯耆國　二宮　鐵五十枚

周防國　二宮

長門國　二宮

淡路國　二宮　鹿五十帳、鰒百束、

右大略注進如件

永萬元年六月日

〔伊賀名所記〕三宮　國府のわたりに侍るよし、宗祇の垂寶抄に侍る、これは仁德天皇のよし、ある記に侍る、

〔伊呂波字類抄　安諸社〕熱田（在尾張國、第三宮也、）

〔源平盛衰記 十二〕大臣以下流罪事

同七日、〇治承三年十一月妙音院太政大臣師長ハ、參河國ヘトハ披露有ケレドモ、實ニハ尾張國井戸田ヘ流罪トテ、都ヲ出サレ給ケリ、〇中略或夜當國第三宮熱田社ニ詣給ヒケリ、

〔甲斐叢記 三〕國玉祠 村國玉 社領六十二石餘、〇中略本州の三宮なり、

〔吾妻鏡 十二〕建久三年八月九日己酉、早旦以後、御臺所御產氣、〇中略鶴岳、相模國神社佛寺、奉神馬被修誦經、所謂、〇中略

三宮 冠大明神

〔新編相模國風土記 五十大住郡〕三之宮

三宮明神社 當村及ビ栗原神戸白根四村ノ鎭守ナリ、當社ハ當國第三宮ニシテ、神名帳ニ載ル所ノ郡中四座ノ一、比々多神社ナリト云傳フ、

〔梅花無盡藏 七雜文〕濃州第三宮因幡大菩薩祭禮再興之題辭

美濃州第三宮、因幡大菩薩靈社、祭禮神事再興式日、件々之題辭、

伏惟、昔日厚見之一郡、比屋共勤祭儀、中年以來、郡中之平民、大半稱良家子、蔑神祖家、唯加納井口之兩鄕、僅繼之而已、斯此神乎、訖或人曰、不腆之祭、雖卿設蘋蘩薀藻之菜、筐筥錡釜之器不備、階除塵積、而瞻仰之人稀、廡宇苔茂、而巫祝之歌短、我社頭之零落、無所可訴也云々、以神夢之靈、巫官告府、府已欵頭、故就當郡之富民、攀前例、令督祭禮之舊儀、永々保持而無怠焉、則彌爲國家之珍護也、

明應五年丙辰三月三日

件々式日之次第記、在巫官之家、

〔但馬國大田文〕養父郡

當國三宮　領家關東御分預所地頭神主水谷左衛門大夫淸有

水谷大社　六十九町三反内
水谷大社　十町三反
流失　三十町七反二百十分
作田　三十八町五反百五十分〇中略
十二ヶ度御祭、御衣以下講經三昧、大祝用等也、
散在分
安美郡　六町二反内二町大般若田、供僧二口分、四町二反、六月臨時御祭田、
石禾莊　一町六反德成末御祭田、近年爲地頭、唯稱光寺積押領之間、經上訴云々、〇中略
已上五十八町四反
小佐鄕　五反爲地頭代被押領之間、經上訴云々、
土田鄕　二反行信地
公田　十町二反內流失二町四反二百步、殘所得分一町、
定御年貢田
九町二反內見作、六町七反六十分、安藝書院、并領家御方備進厚紙、并鎮云々、
〇按ズルニ、本書末尾ニ、弘安八年十二月、守護人大江殿失ノ十四字アリ、
〔周防國一宮玉祖靈記〕仁壁社中從二位、當。國。三。宮。、
〔吾妻鏡十二〕建久三年八月九日己酉、早旦以後御臺所御產氣、〇中略鶴岳、相模國神社佛寺、奉神馬、被修誦經、所謂、〇中略
四。宮。前取大明神
〔新編相模國風土記大住郡四十二〕四宮村

四宮明神社　村ノ鎭守トス、延喜式神名帳ニ載スル所ノ前烏神社是ナリ、

〔延喜式神名帳頭註〕播磨飾磨郡

白國　四宮也

〔周防國一宮玉祖靈記〕赤田社〈○中四宮〉

〔新編相模國風土記四十八大住郡〕平塚新宿

八幡社　當宿及八幡、馬入三村ノ鎭守ナリ、〈○中略〉當社ハ當國第五ノ宮〈○古ヨリ八幡宮ト稱シテ、五宮ノ唱ハナシ、按ズルニ、東鑑ニモ、四宮ノ次ニ八幡宮ト載ス、又一宮以下祭禮ノ時、神輿ヲ列スル次序モ、當社第五ニアリ、〇下略〉ナリ、

〔吾妻鏡十二〕建久三年八月九日己酉、早旦以後、御臺所御產氣、〈○中略〉鶴岳、相模國神社佛寺、奉神馬、被修誦經、所謂〈○中略〉

四宮〈前取明神〉　大八幡宮

〔延喜式神名帳頭註〕播磨飾磨郡

高岳　五宮也

〔周防國一宮玉祖靈記〕山田社〈○中五宮〉

〔廿二社本緣〕凡昔伊勢、八幡、賀茂〈平波〉三社〈○天、神領毛餘社不准、崇重禮異他者也〉

〔日本紀略一九條〕寛和二年十一月一日乙丑、於八省院奉幣〈○幣恐道誤〉三社幣使、〈伊、石、賀、〉

〔本朝世紀〕康治元年十一月三日辛卯、權大納言藤原宗輔卿參仗座、被立三社奉幣使、蓋被告大嘗會由也、〈伊勢、石淸水、賀茂、當日有定、〉

〔源平盛衰記四十一〕義經院參西國發向附三社諸寺祈禱事

元暦二年正月十日、九郎大夫判官義經ハ、平家追討ノ爲西國へ發向ス、〈○中略〉同十四日、伊勢、石淸水、賀茂三社へ奉幣使ヲ被立、平家追討ノ御祈ノ上、三種神器無事故可返入給之由、被載宣命ケリ、

十六社

〔伏見院御記〕正應元年十一月十三日甲午、三社(伊勢、石清水、賀茂、)奉幣、

〔拾芥抄下本諸社〕十六社(或云、二十二社内、自上數之十四、加丹生、貴布禰、日吉已下六至北野除之也、)

伊勢　石清水　賀茂　松尾　平野　稲荷　春日　大原野　石上　大和　大神　廣瀬　龍田　住吉　丹生　貴布禰

〔日本紀略一醍醐〕昌泰元年五月八日、祈雨奉幣十六社、

〔日本紀略四村上〕康保三年閏八月廿一日壬午、爲止雨奉幣十六社、

二十二社

〔伊呂波字類抄仁諸社〕二十二社

伊勢　石清水　賀茂下上　松尾　平野　稲荷　春日　大原野　大神　石上(同上一所)　大和(同上三所)

廣瀬(同上一所)　龍田(同上二所)　住吉(同上四所)　日吉(同上)　梅宮(橘氏五位一人、勤使四所、)　吉田(藤氏五位一人、勤使四所、)　廣田(五位一人、勤使一所、世俗號西宮、)　祇園(同上二所)　北野(菅家五位一人、勤使一所、)　丹生(使ハ神祇官差遣之、一所、)　貴布禰(同上一所)

頌曰(伊、石、賀、松、平、稲、春、原、神、上、和、瀬、龍、住、日、梅、吉、廣、祇、北、丹、貴布禰、)

〔二十一社記〕二十一社(分賀茂下上爲二社、則二十二社也、)

上七社

伊勢　石清水　賀茂　松尾　平野　稲荷　春日

中七社

大神　大倭　石上　廣瀬　大原野　吉田　住吉

下七社

日吉　廣田　梅宮　祇園　北野　丹生　貴布禰

〇按ズルニ、此ハ龍田神社ヲ省キ、賀茂神社ヲ分チテ、下上各一社トナシタルナリ、

〔拾芥抄下本諸社〕二十二社

伊勢〈度會郡五十鈴川、號二大神宮一、王一人、中臣一人、齋部一人、勅使、大神宮内宮、齋部一人、豐受宮外宮也、〉

石清水〈山城國男山、源氏四位勅使、幣三前、〉

賀茂下上〈山城國、參議一人、五位一人勅使、〉〈下鴨御祖皇大神二前、上賀茂別雷皇大神一前、〉

松尾〈同上、二前〉　平野〈同上、四前〉

稲荷〈山城、四位一人勅使、三前、〉　春日〈大和、藤原五位勅使、四前、〉

大原野〈山城、同上四前、〉　大神〈五位一人勅使、一前、〉

石上〈大和、同上一前、號二之布留社一、〉　大和〈同上三前〉

廣瀬〈同上二前、或一、延久六、始預二官幣一中絶、永保元、〉　龍田〈同上二前、或一、〉

住吉〈同上四前、或一、〉　日吉〈近江、同上、八捧、〉

梅宮〈橘氏五位一人勅使、四前、〉　吉田〈山城、藤氏五位一人勅使、四前、〉

廣田〈攝津、五位一人勅使、一前、或二前、世俗號二四宮一、〉　祇園〈同上、感神院三前、八王子八前、〉

北野〈山城、菅家五位一人勅使、一前、〉　丹生〈近江、或云大和、一前、〉

貴布禰〈山城、已上二社使、神祇官差二遣之一、一前、〉

〔日本紀略一醍醐〕昌泰元年七月三日辛未、祈雨奉二幣二十二社一、

〔二十二社註式〕二十二社事

人皇六十二代村上天皇治十九年、康保二年乙丑、霖雨經レ月、九天覆レ雲、依レ之閏八月廿一日、被レ奉二獻官幣於十六社一止レ雨、

伊勢　石清水　賀茂下上　松尾　平野　稲荷　春日　大原野　大神　石上　大和　廣瀬

龍田　住吉　丹生　木船等

第六十六代一條院治五年、正暦二年辛卯、炎天送レ日、萬物變レ色、依レ之六月廿四日、祈雨奉幣時、加二吉田、廣

田、北野、以上三社、被奉獻官幣、爲十九社、

吉田、廣田、北野次第事、可爲住吉次丹生之上由宣下、

同五年二月十七日、祈年祭時加梅宮、被奉獻官幣、爲二十社、

梅宮事、可爲吉田之上、住吉之次由宣下、

第六十六代一條院治十年、長德元年乙未二月廿五日、被奉獻臨時官幣之日、加祇園社爲廿一社、

第六十九代後朱雀院長暦三年己卯八月十八日、被奉獻官幣之日、加日吉社爲廿二社、

日吉社事、可爲住吉之次、梅宮上由宣下、

二十二社次第幣數

上七社　伊勢　石淸水三本　賀茂二本　松尾同　平野四本　稻荷三本　春日四本

中七社　大原野四本　大神一本　石上一本　大和同　廣瀨一本　龍田二本　住吉四本

下八社　日吉　梅宮　吉田四本　廣田　祇園　北野　丹生　木嶋一本

以上廿二社

〔百錬抄五白河〕永保元年十一月十八日、奉幣之次以日吉社永被加廿二社、據此事、

〔古今著聞集一神祇〕わが朝は神國として、大小の神祇部類眷屬、權化の道感感應嚮く通するものなり。〇中略これによりてかたじけなくも廿二社の尊神をさだめて、もつぱら百王百代のちんごん〔ご原作こ、今從一本改〕にそなへ奉る。

〔諸社根元記上〕定二十二社次第事

日本國中三千餘座、預年中四度官幣幷臨時祭祀者也、其中於廿二社者、以勅使被奉獻幣帛者也

〔朝野群載十二内記〕廿二社奉幣次第

伊勢　石淸水　賀茂上下　松尾　平野　稻荷　春日　大原野　大神　石上　大和　廣瀨　龍

攝社末社

田　住吉　日吉　梅宮　吉田　廣田　祇園　北野　丹生　貴布禰

宣命紙　伊勢標紙　賀茂紅紙　自餘社皆黃紙

奉幣使伊勢、王中臣忌部各一人、　石清水源氏四位　賀茂公卿一人、五位一人、　松尾公卿一人、五位一人、　平野上同　稻荷四位一人　丹生貴布禰神祇官五位各一人　自餘諸社五位各一人

〔百練抄五堀河〕寛治七年十月廿九日、被立廿二社奉幣使、南北衆徒事被載宣命、

〔百練抄十後鳥羽〕元曆元年六月廿三日庚戌、依神鏡幷神璽寶劔等御祈、被立廿二社奉幣使、

〔古今著聞集十三哀傷〕仁治三年正月六日、俄に御不豫の事有て、○中略四條七日節會に御出もなし、○中略廿二社の奉幣、非常赦おこなはれしか共、更に益なし、

〔梅松論上〕隱岐國において、○中略佐々木富士名三郎左衛門尉と云者、○中略君○後醍醐をぬすみ出し奉る、○中略君兼てより諸佛諸神、殊には伊勢石清水、加茂、平野、春日廿二社を御祈念有て、種々の御願を立られける故に、おぼしめすまゝに御渡海あり、

〔玉海〕治承三年二月七日乙未、今日新宰相中將定能來示新年穀奉幣之間事、來廿四日七日之間可被行云々、廿二社之外、可被奉加伊都岐嶋明神云云、

〔百練抄八高倉〕治承三年二月廿四日、以安藝國伊都岐嶋社可加廿二社之次第、幷祭祀日時等有其沙汰、

〔山槐記〕治承三年二月廿九日丁巳、今日被發遣祈年穀奉幣、安藝伊都岐嶋可令列廿二社之由有沙汰、頭中將通親朝臣被仰下云云、而猶彼社祭日只可令預官幣之由有議、被止廿二社列云々、

〔二十二社註式〕內宮○伊勢神宮所攝廿四座神名

朝熊社　園相社　湯田社　田乃家社　蚊野社　鴨社　大土御祖社　國津御祖社　朽羅社

伊佐奈美社　津長社　大水社　大國玉比賣社　江神社　神前社　粟皇子社裘茲係　久具都比

貴社　奈良比良社　榛原社〔○榛原、皇大神宮儀式頓、送宮式等作二榛原一、〕　御船社　坂手國生社　狹田國生社　多伎原社　川原社

今案、此末社、倭姫皇宮勸請也、

〔太平記　三十九〕自二大元一攻二日本一事

弘安四年七月七日、皇大神宮ノ禰宜荒木田尙良、豐受大神宮ノ禰宜度會貞尙等十二人、起請ノ連署ヲ捧テ上奏シケルハ、二。宮。ノ末社、風ノ社ノ寶殿ノ鳴動スル事良久シ、六日ノ曉天ニ及テ、神殿ヨリ赤雲一村立出テ、天地ヲ耀シ、山川ヲ照ス、○中略測知ヌ、九州ノ異狄等、○元此日卽可レ滅ト云事ヲ、事若誠有テ奇瑞變ニ應ゼバ、年來申請ル處ノ宮號、以二叡感儀一可レ被二宣下一トゾ奏シ申ケル、

〔新抄〕文永二年閏四月九日丁丑、軒廊御卜、伊。勢。大。神。宮。末。社。草。名。伎。社。依レ授二宮號一、可レ被レ獻二官幣一由本宮申二請之一、被レ問二三公一、又御卜也、

〔和漢三才圖會　七十一伊勢〕内宮

總。末。社。　本宮之近所數多、遙拜殿相雙、

内宮八十五　外宮四十七

俗傳内宮八十、外宮四十、合百。二。十。末。社。者、大概而無二證蓋據一、有二末社員數一、各處々散在、而社地不レ詳亦有、

〔二十二社註式〕貴布禰

末。社。

奥深　吸葛

〔和漢三才圖會　七十二本山城〕貴布禰社

攝。社。三座　奥深社　吸葛社　私市社

末。社。　梶取明神　在二二瀨村北一、

〔和漢三才圖會　七十二本山城〕石淸水八幡宮

攝社

若宮皇子即仁德天皇、在本殿之艮、　姬若宮宇禮姉、久禮妹、在若宮之傍、

水若宮宇治皇子、在若宮之傍、　上高良武內宿禰也、

下高良藤大臣連保也、相傳此神即干珠滿珠之奉行、名玉垂命、　栂尾社地主神、大國玉命也、在本社西牛里山中、

下院厄神社山城攝津之堺所祭神、每正月十八九日群集、

〔實麗卿記〕文久三年四月十一日丁亥、○中略出御有催、○石淸水行幸各下殿經階下列立于南庭、○中略今剋本宮、○中略西方武內社有御拜、依社前狹少、從外斜御拜、次攝社攝社有御拜、

〔諸社根元記中〕北野末社

宰相殿正三位菅原輔正　和泉殿從四位下菅原定儀

〔春日社記〕山內外末社五十一神、此內降跡卅五所、口傳也、故不上、神秘候、

〔鹿嶋志上〕息洲神社　息洲村の海邊にあり、住吉三神、底筒男、中筒男、表筒男命を祭れり、これも鹿嶋の攝社として、年毎の祭禮等皆鹿嶋よりつとむ、

〔和漢三才圖會六十六常陸〕筑波山權現

末社有九十九社

〔二十二社註式〕日吉社

日吉末社

大行事高島鷹靈　早尾一名藏住、猿田彥、　下八王子　王子宮健御名方　聖女稻荷妙說、云下照姬、　氣比仲哀天皇　小禪師

巳上中七社

惡王子　新行事瀨津姬　石瀧諸稚姬命　劔宮素戔烏　牛御　若宮　護因

巳上下七社

〔二十二社註式〕祇園社

第六十四代圓融院天祿三年、以祇園社爲日吉末社、

〔源平盛衰記四〕涌泉寺喧嘩事

目代師經在國○加賀ノ間、白山中宮ノ末寺ニ、涌泉寺ト云寺アリ、國司ノ廳ヨリ程近キ所也、彼山寺ノ湯屋ニテ、目代ガ舍人、馬ノ湯洗シケリ、僧徒等制止シテ、○中略目代師經ヲ誅罸スベシトテ、○中略山門○延暦寺ニ訴訟シケリ、大衆此事ヲ聞、本社白山ノ事ナラバ左モ有ナン、彼社ノ末寺也、許容ニ及バズトテ其沙汰ナシ、

白山神輿登山事

其夜○安元三年三月九日大講堂ノ庭ニ三塔會合シテ、○中略末社訴訟不可疏、末寺ノ僧侶不可苟、末寺トシテ既ニ本山ヲ憑、本山イカデカ末寺ヲ棄ン、就中神輿○白山旅宿ニ御坐、空ク本社ニ還御アラバ、白山面目ヲ失ヒ、神慮尤難測、早本末力ヲ一ニシテ、神輿ヲ迎ヘ奉リ、佛神威ヲ垂給ハヾ、豈無裁許哉ト云ケレバ、尤々ト同ジケリ、

〔和漢三才圖會七十六紀伊〕日前宮

末社東名草彦命西名草姫命　此外六十有餘末社悉不記之

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十日丁卯、鶴岡末社熱田社祭也、

〔吾妻鏡十〕文治六年○建久元年四月二日丁酉、鶴岡末社三嶋社祭如例、

〔吾妻鏡十一〕建久二年八月廿七日癸卯、鶴岡若宮、幷末社熱田三嶋社廻廊等上棟云云、　十一月廿一日丙寅、鶴岡八幡宮、幷若宮及末社等遷宮也、

〔玉蘂〕建暦二年三月廿二日宣旨左大辨右大辨

一可停止京畿諸國建立諸社末社別功事

抑近曾愚拙之徒、恣立仁祠於帝都之際、知行之輩、屢祝末社於神領之中、雖似敬神之有餘、還涉瀆〈○瀆恐瀆誤〉祭之不信、加之、就別宮末社之加增、致郡鄙田地之掠領、敗法亂紀、莫甚於斯、自今以後、永加禁遏、若猶不怕嚴制、縱雖令企奉鎭、隨從停廢之儀、勿致如在之禮、乖違皇憲者、其奈神鑒何、於違犯輩、任法斷定、

〔止由氣宮儀式帳〕九月例

神嘗祭供奉時行事

大贄〈乃〉淨〈乃米〉大祓仕奉、然湯貴備奉所〈爾〉持參入氏、所々〈乃〉枝神〈爾〉令奉氏、〈○下略〉

〔三代實錄〈十二清和〉〕貞觀八年正月廿日丁酉、先是常陸國鹿嶋神宮司言、大神之苗裔神三十八社、在陸奥國、〈○下略、又見類聚三代格一〉

〔延喜式〈十神名上〉〕陸奥國牡鹿郡鹿嶋御兒神社

行方郡鹿嶋御子神社

〔類聚三代格〈一〉〕太政官符

應以大社封戶修理小社事〈四箇條之初條〉

右撰格所起請偁、〈○中略〉撿神苗裔、本枝相分、其祖神則貴而有封、其裔神則微而無封、假令飛鳥神之裔、天太玉、〈○太玉下恐脫櫛玉二字〉臼瀧、賀屋鳴比女神四社此等類是也、〈○中略〉

貞觀十六年六月廿八日

〔本朝月令〈四月〉〕中西奉河合神幣帛事

延喜元年十二月廿八日、太政官符偁、得神祇官解偁云々、件河合神、是御祖別雷兩神之苗裔之神也、

〔類聚符宣抄〈一〉〕太政官符〈民部省〉

應以山城國愛宕郡捌箇鄕奉寄賀茂上下大神宮事(○中略)

右去年十一月廿五日行幸彼社、以件八鄕被奉寄了、(○中略)自今以後悉爲神領、卽以其應輸物、永宛恒例祭祀、神殿雜舍、幷上下枝屬神社、神館、神宮寺等修造、幷臨時巨細之料矣、(○中略)

寬仁二年十一月廿五日(○又見小右記)

○按ズルニ、神社ニ本枝ト云フコト始テ此ニ見ユ、蓋末社ハ、上文ノ苗裔神、若クハ裔神御子神ヲ、其祖神社卽本社ニ對シテ稱スル所ナルベシ、サレド後ニハ轉ジテ他社トイヘドモ、一社內ニ在ルモノハ、之ヲ末社ト稱スルニ至レリ、乃祇園社ノ日吉社ニ於ル、熱田社ノ鶴岡社ニ於ルガ如キ是ナリ、

宮號

〔延喜式 九神名〕伊勢國度會郡大神宮三座(相殿坐神二座、並大、預月次新嘗等祭、)

荒祭宮(大、月次新嘗、)

瀧原宮(大、月次新嘗、○以上三宮、又見本書大神宮式、)

〔延喜式 四伊勢大神宮〕瀧原並宮一座(大神遙宮、在瀧原宮地內、)

〔延喜式 九神名〕伊勢國度會郡伊佐奈岐宮二座(伊佐奈彌命一座、並大、月次新嘗、○又見本書大神宮式、)

〔三代實錄 十四淸和〕貞觀九年八月二日戊辰、勅伊勢國伊佐奈岐、伊佐奈彌神、改社稱宮、

〔延喜式 九神名〕伊勢國度會郡月讀宮二座(荒御魂命一座、並大、月次新嘗、○又見本書大神宮式、)

〔神名祕書〕月讀宮二座

貞觀九年八月、改社號稱宮、

〔延喜式 九神名〕伊勢國度會郡度會宮四座(相殿坐神三座、並大、月次新嘗、)

高宮(大、月次新嘗、○又見本書大神宮式、)

〔延喜式 四伊勢大神宮〕伊雜宮一座(大神遙宮、在志摩國答志郡、去大神宮南八十三里、)

〔神名祕書〕土宮(伊勢神宮四宮)三座

大治三年六月五日官符、改社號爲宮、預祈年月次神嘗祭幣也、

〔神名秘書〕月讀宮一座

右神准土宮之嘉例、依神事之增加、定別宮可被增作寳殿寸法之由、承元四年三月廿五日次第上奏之處、同年五月廿二日依請被下宣旨、

〔太平記三十九〕自大元攻日本事

弘安四年七月七日、皇大神宮ノ禰宜荒木田尙良、豐受大神宮ノ禰宜渡會貞尙等十二人、起請ノ連署ヲ捧テ上奏シケルハ、二宮ノ末社、風ノ社ノ寳殿ノ鳴動スル事良久シ、六日ノ曉天ニ及テ、神殿ヨリ赤雲一村立出テ、天地ヲ耀シ山川ヲ照ス、〇中略測知ヌ、九州ノ異狄等寇〇元此日可滅ト云事ヲ、事若誠有テ奇瑞變ニ應ゼバ、年來申請ル處ノ宮號以叡感儀可被宣下トゾ奏シ申ケル、

〔類聚神祇本源十一外宮別宮〕風宮

社記曰、正應六年〇永仁元年三月廿日官符、改社號奉授宮號、預官幣、依異國降伏之御祈也、

〔新抄〕文永二年閏四月九日丁丑、軒廊御卜、伊世大神宮末社草名岐社、被授宮號、可被獻官幣由本宮申請之、被問三公、又御卜也、

〔類聚國史五神祇〕承和十一年十一月壬子、鴨上下大神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等歎云、〇下略

〔類聚三代格一〕太政官符

應置石清水八幡宮神主事坐山城國久世郡〇中略

貞觀十八年八月十三日

〔菅家御傳記〕外記日記曰、一條天皇永延元年八月五日、始行北野坐廟祀、宣命云、掛畏支北野爾坐天滿宮天神云云、

〔北野緣起〕北野天滿自在天神宮創建山城國葛野上林鄕、

〔廿二社本緣〕北野社事

此神(和)太宰府乃天滿宮(天仁)坐す、彼(乃)頼(仁)天滿宮安樂寺(部里、同)仍此北野(乎モ)宮寺(祢)號す、

〔帝王編年記(二十三後鳥羽)〕元曆元年四月十五日癸酉、白河中御門末北春日川原東、造神殿、奉崇號崇德院之御靈、保元戰場是也、一院(○後白河)廳沙汰云々、建久四年癸丑八月二日甲申、號粟田宮、

〔日本書紀(六垂仁)〕三十九年十月、五十瓊敷命、居於茅渟菟砥川上宮、作劍一千口、(○中略)藏于石上神宮也、

〔日本書紀(二十九天武)〕三年八月庚辰、遣忍壁皇子於石上神宮、以膏油瑩神寶、

〔尾張國熱田大神宮緣記〕正二位熱田大神宮者、以神劍爲主、(○中略)貞觀十六年春神宮別當正六位上尾張連淸稻捜古記之文、問遺老之語、粗加緝寫、有件緣記、

〔延喜式(九神名)〕下總國香取郡香取神宮(名神大、月次新嘗、)

常陸國鹿嶋郡鹿嶋神宮(名神大、月次新嘗、)

〔忠利宿禰記〕正保二年十一月十七日、今度上(○後光明)ヨリ忍召子細有テ、東照社改宮號給、宣命正保二年十一月三日日附也、

〔大猷院殿御實紀(六十二)〕正保二年十一月九日、勅使菊亭前右大將經季卿引見あり、これ東照大權現に宮號を賜ふの詔、并御位記の宣旨持參あるにより、御直垂にて白木書院に出たまひ、御みづから拜受し給ふ、

〔萬葉集(十七)〕赴參氣比大神宮、行海邊之時作歌(○歌略)

右件歌詞者、依春出擧、巡行諸郡、當時所屬目作之、大伴宿禰家持(○越中守)

〔續日本後紀(八仁明)〕承和六年二月戊寅、越前國氣比大神宮雜務、停預國司、讓神祇官、

〔續日本後紀(三仁明)〕承和元年九月癸酉、坐能登國正三位勳一等氣多大神宮禰宜祝二人、始令把笏、

〔日本書紀(五崇神)〕六十年七月己酉、詔群臣曰、武日照命、從天將來神寶、藏于出雲大神宮(○杵築社)、是欲見焉、

〔扶桑略記 二十二 宇多〕寛平八年、善家秘記云、余寛平五年、出爲備中介、時有賀夜郡賀陽良藤者、頗有貨殖、○中略弟統領豐蔭、吉備津彥神宮禰宜豐恒、及良藤男左兵衛志忠貞等、皆豪富之人也、○又見今昔物語

〔百練抄 十四 四條〕嘉禎元年五月十二日甲辰、奉幣日前宮使、先例神祇官人也、今度被用紀氏者、造替遲引之由被謝申之、

〔風雅和歌集 十九 神祇〕神祇を　紀俊文朝臣

名草山とるやさかきのつきもせず神わざしげき日のくまの宮

〔延喜式 十 神名〕筑前國那珂郡八幡大菩薩筥崎宮名神大

〔續日本紀 十二 聖武〕天平九年四月乙巳、遣使於伊勢神宮、大神社、筑紫住吉、八幡二社、及香椎宮、奉幣以告新羅无禮之狀、

〔延喜式 二十三 民部〕凡太宰府充仕丁者、○中略其香椎宮守戸一烟、

〔延喜式 十 神名〕豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮名神大

〔續日本紀 十四 聖武〕天平十三年閏三月甲戌、奉八幡神宮秘錦冠一頭、金字最勝王經、法華經各一部、度者十八人、○十八人、類聚國史作二十人封戸、馬五匹、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶八歲四月壬子、遣從五位下日下部宿禰古麻呂、奉幣帛于八幡大神宮、

宗廟

〔拾芥抄 下本 諸社〕兼豐註進云、宗廟事、大神宮、石淸水御事也、口傳云、宗廟社稷之號、分別事云々、皇帝祖神號宗廟、又勅願社稱社稷、○又見塵添壒嚢抄

〔神皇正統記 垂仁〕此御時皇女大倭姬命、豐鋤入姬にかはりて天照大神をいつき奉る、○中略伊勢の國度會郡五十鈴の川上に宮所をしめ、○中略是より皇大神とあがめ奉て、天下第一の宗廟にまします、

〔廿二社本緣〕伊勢事

第十一代垂仁天皇乃御宇、〈○中略〉伊勢國度會郡五十鈴乃河上仁鎭座給宇、皇大神宮豆崇天、無二宗廟仁坐天須、

〔神宮雜例集 二〕第六内侍所事

永暦元年二月十一日、宣命云、〈○中略〉爰去年〈○平治元年〉十二月十日、事出不圖天、兵革俄起之間、爲凶惡之輩、被掠取内侍所毛、依宗廟之厚助天、本納之櫃雖紛失毛、正體自然出來給利、

〔大神宮參詣記〕相殿〈○伊勢神宮〉に三柱の神まします、皇孫尊天兒屋根命太玉命是なり、天兒屋根命のましますゆゑに當宮を宗廟社稷の神とは申せり、

〔諸神記 上〕石清水御事

一諸記曰、八幡大菩薩者、朝庭之宗廟也、

〔八幡愚童訓 上〕第卅代欽明天皇十二年正月ニ至テ、大神比義斷五穀精進捧御幣祈申時、二歳小兒ト顯レ立竹葉上玉フ、我日本人王十六代譽田天皇也、護國靈驗威力神通大自在王菩薩也告給、百王鎭護三韓降伏神明、第二宗廟ト祝ハレ給者也、

〔神皇正統記 清和〕此御時宇佐の八幡大菩薩、皇城の南、男山石清水にうつりたまふ、天皇きこしめして、勅使をつかはし、其所を點じ、もろ〳〵の工におはせて、新宮をつくりて宗廟に擬せらる、

〔廿二社本緣〕石清水事

清和天皇御宇貞觀年中、〈○中略〉勅天之諸司造立セ令神殿于、自是擬天之宗廟仁、被獻官幣于、

〔法曹至要抄 標記〕名例律、謀大逆註曰、謂謀毀山陵及宮闕、賊盜律云、謀大逆者絞、疏云、上文大逆即據逆事已行、此爲謀而未行、唯得絞罪、又云、謀反及大逆者皆斬、父子若家人並沒官、而唐律山陵上有宗廟二字、然此間律除之、則上古皇邦無宗廟之制必矣、夫謀毀山陵宮闕者、猶得絞罪、若謀毀伊勢大神宮者罪當斬、不待辨明矣、按史、延暦十年八月辛卯、有盜燒伊勢大神宮正殿一字、財殿二字

御門三間、瑞籬一重、此時盜大逆已行、刑當斬、而其時之刑法、史闕、今無所考、夫皇邦雖无宗廟之名、謹按、皇大神宮者、准西土之制、則爲宗廟矣、而後世以伊勢八幡妄稱二所宗廟、是野史之私言、固非朝典、○中略皇大神宮者、无上之尊、朝野之崇敬、異于他、豈可比大社哉、以文聊述愚說、伏仰法家之明辨云、

文政九年六月　阿波介以文謹誌

大廟

〔兵範記〕仁安三年十二月廿九日丙辰、左大臣經宗○藤原云、去廿一日、伊勢大神宮正殿幷東西寶殿以下燒亡、令官寮卜申吉否、○中略下官奉殿下基房○藤原仰下、給諸道勘文、○中略右大辨藤原朝臣定申云、○中略任師元朝臣勘申、有五日之廢務、表大廟之異他矣、

〔御鎭座傳記〕天照大神則主火氣、止由氣大神則主水氣、而萬物長養也、故兩宮者、天神地祇大宗、君臣上下元祖也、惟天下大廟也、國家社稷也、

〔碧山日錄〕長祿三年九月七日丙戌、近歲諸州路國俗之强豪者、置關以征之、往來悉難焉、相公命諸史而破之、因爲改造伊勢之大廟、於安城之七路、自諸州入京之路、其數七也、前月二十一日、各置一關征之而已、往來咸喜、此也、俗子貞信來語之、

神社稱廟

〔延喜式十神名〕豐前國宇佐郡大帶姬廟神社名神大

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年八月己亥、遣太宰帥三品船親王於香椎廟、奏應伐新羅之狀、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年十一月庚寅、遣參議從三位式部卿藤原朝臣巨勢麻呂、散位外從五位下土師宿禰犬養奉幣于香椎廟、以爲征新羅調習軍旅也、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年十二月壬午、遣參議正四位下巨勢朝臣野足、奉幣帛於八幡大神宮、樫日廟、賽靜亂之禱也、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年四月壬戌、遣從四位下行伊豫權守和氣朝臣眞綱、奉御劒幣帛於八幡大

社稷

菩薩宮及香椎廟、告新即位也、

〔拾芥抄下本諸社〕香椎筑前、承保四年月日、香椎焼亡、公卿定云、件社或神功皇后廟、或稱仲哀天皇廟、無一定、貴賤云、仲哀天皇廟也、尤定抄有所見歟云々、

〔古事記傳三十〕抑此廟は、仲哀天皇なりとも申し、神功皇后なりとも申して、定らざる由なり、中略此をば神社と申さずして、古書に廟とのみある事、他に例なき事なり、又神名帳にも載らず、いかさまにも所以ある事なるべし、故思ふに、先漢國の意を以て云はゞ、諸の神社は皆廟とも云べき物なれども、然云る例なく、凡て皇國に廟と云る事は無きに、此をのみ殊に廟と云は、神功皇后のことむけ賜ひし後、三韓國ひたぶるにまつろひ參來し御代に、彼國より此皇后の御靈を奉齋れる宮にやあらむ、されば皇國のなべての神社の例に非ず、異國より奉齋れる宮なるが故に、其例を別む爲に、廟とは號奉り賜へるにやあらむ、此はこゝろみに推度りて云のみなり、

〔菅家御傳記〕外記日記曰、一條天皇永延元年八月五日、始行北野聖廟祭祀、

〔本朝文粹十三〕三月盡日陪吉祥院聖廟、北野同賦古廟春方暮、　江以言

廟基拓地欲百年之間、家業繼踵及七代之後、中略以助聖廟之威儀、以貢聖廟之風月、下略

〔本朝文粹十三〕七言九月盡日、侍北野廟各分一字、　高積善

夫形者、百年之旅館也、名者、萬代之嘉賓也、中略如我聖廟、其不然哉、聖廟傍事可知、下略

〔廿二社本緣〕北野社事

代々乃作文仁、北野聖廟爾書多里、後宇多院御幸爾里作文被新題目也〇新題云字如此、而先朝行幸始天作文聖廟有天沙汰、北野乃社登被書、廟登云字有憚故也、

〔拾芥抄下本諸社〕社稷事、賀茂、松尾、平野、春日、吉田等社事也、凡物類皆崇靈神總名云云、口傳云、宗廟社稷之號分別事云云、皇帝祖神號宗廟、又功臣號社稷、

〔拾芥抄〕中末 諸院 中和院 内裏西、號中院、神嘉殿、天子祭社稷神所、

〔園太暦〕延文元年八月、諏訪社事、○中略

諏訪社間事、一紙加一見、謹返上候、○中略在廳官人、稱祭使參行、爲勅命候哉事、是又當社事、無殊所見候、案事情、二十二社之中、公家被立上卿辨内侍外記史等被祭候、宗廟社稷之神者、不能左右候、○中略得此御意、可令披露給候、恐々謹言、

八月七日　　神祇大副兼豐

〔玉勝間〕六 神社を宗廟社稷と申す事

神社を、後世の人の、それは宗廟ぞ、それは社稷ぞなど、かしこげにいふは、から國ごとのわたくしごと也、古にすべて宗廟社稷といへることなし、書紀などにをり〳〵、其字は見えたれど、ただ潤色(カザリ)の漢文にして、もとより神社をいへるにはあらず、さる故に、くにいへなど訓り、くにいへとは、漢文の國家の訓をうつしたる也、さてもろ〳〵の神社を、廟とは申すまじきよしは、筑前國の香椎(カシヒノ)廟のみ、古書どもに、とりわきて廟とは申して、こは神名帳にいらず、故あることなるべし、これをおきては、豐前國の大帶姫廟神社あり、これらのことのよしは、古事記傳三十の卷にいへり、考へ見べし、さるゆゑよしをもたどらで、神社を宗廟よ社稷よと申すは、皇國の古の御定めをばすてゝ、ひたぶるにから國ごとにゑたがへるみだりごと也、すべて神の道をとくともがらの、かくのみよろづを、から國ごとにいひなすなるは、ほうしのともがらの神をおのが佛のかたざまに引入れむとかまふると、同じことなるを、えさとらざるは、いかにまどへる心ぞや、

古事類苑

神祇部九

社祠上

古事類苑

神祇部九

社祠上

社ハ、ヤシロト云フ、神祇ヲ鎭祭スル殿舍ナリ、ヤシロト云フ語ハ、屋代ニシテ其義ハ、或ハ齋場ヲ以テ宮殿ニ代フルト爲シ、或ハ纔ニ屋ノ形ヲ成セリト爲ス、皆其始ニ原ヅキテ言フナリ、祠モ亦ヤシロナレドモ、或ハホコラト訓ミテ、小祠ノ事トモ爲セリ、宮モ亦神社ノ稱ニシテ、之ヲミヤト云フ、卽チ御屋ノ義ニシテ、之ヲ尊ビテ稱スルナリ、

神社ハ、大神神社ヨリ古キハナシ、是大國主神ノ自ラ其幸魂奇魂ヲ祀リ給ヒシニ起ル、然レドモ當時ノ宮殿ノ制ハ詳ナラズ、之ニ繼グモノヲ杵築大社トス、天孫瓊瓊杵尊ノ大國主神ノ爲ニ建テ給フ所ニシテ、其制明ニ國史ニ見エ、底ツ石根ニ宮柱太知リ、高天ノ原ニ氷木高知ルコト、天皇ノ御所ノ如クシタリ、氷木ハ卽チ千木ナリ、凡テ神社ハ屋蓋ニ瓦ヲ用キズ、千木鰹木ヲ設ケタリ、然ルニ後世ニ至リテハ其形狀モ一ナラズシテ漸ク古制ト背馳ス、其中ニ於テ神明造ト稱スルハ古樸ヲ守リタレド、其餘皇子造、石ノ間造等ノ類、質樸ヲ失ヒ、華美ニ趨ケリ、況ヤ兩部神道ノ說ノ盛ニ行ハルヽニ隨ヒ、寺院ノ殿堂ニ髣髴タルモノアルニ至ル、社ニハ大アリ小アリ、新舊アリテ、其構造ノ同ジカラザルノミナラズ、其殿舍ノ數モ均カラズシテ、其名モ或ハ異ナルモノアリ、今其大體ニ就キテ言ヘバ、主神ヲ奉安スル殿ヲ神殿ト云フ、卽チ正殿ナリ、又寶殿アリ、神庫アリ、共ニ神寶ヲ收貯スル處ニシテ、上古ニ齋藏ト云ヒ、

後ニ寶倉、寶藏等ノ名アリ、寶倉又秀倉ニ作ル、其結構ノ高頭秀出スルヲ謂フナリ、而シテ寶殿ハ亦正殿ノ名ト爲ル、至小ノ神舍ノ名モ亦寶倉ト稱シテ大ニ神庫ト混ズルモノアリ、而シテ禿倉ノ字(秀倉ノ誤寫ヨリ出デタ、古來之ヲ慣用ス、)ニ作レルモノヲホコラト云フ、字或ハ叢祠ニ作ル、幣殿ハ幣帛ヲ奉ル殿ニシテ、拜殿ハ拜禮スル殿ナリ、其餘舞殿、神樂殿ノ類頗ル多シ、

神社ヲ修造スルニハ、古ハ神税ヲ用ヰ、神戸ノ衞丁ヲ役シ、或ハ神職國司ノ輩ヲシテ費用ヲ辨ジ、土木ノ事ヲ董督セシメシ事アリ、鎌倉幕府ノ比ニハ、犯罪ノ士ヲシテ修セシメシ事アリ、足利氏ニハ、其費用ノ爲ニ關料ヲ收メシ事アリ、德川氏ノ時ニハ、或ハ神領ヲ以テ之ニ充テ、或ハ大名以下ノ錢財ヲ募リ、或ハ氏子ノ協力ニ依ルアリ、而シテ容易ニ創立ヲ許サヾルコトハ往時ノ例ニ依ル、

神籬ハ、讀ジテヒモロギト云フ、蓋上古神祭ノ時、清淨ノ地ヲ點ジ、周圍ニ常磐木ヲ植エ、以テ神居ト爲スモノニテ、又社殿ノ類ナリ、後世室内庭上等ニ於テ神祭ノ時、神木ヲ机上ニ奉安シテ以テ神座トナスモノ亦コレヨリ出タリ、又瑞籬玉垣ハ、社殿ヲ繞ラシ、界限防衞ヲ爲スモノニシテ、後世ニ至リテハ内ニ在ルヲ瑞籬ト云ヒ、外ニ在ルヲ玉垣ト云フ、鳥居ハ卽チ社ノ門ニシテ、額ハ鳥居ニ懸クルモノナリ、並ニ千木堅魚木ト共ニ掲出シテ之ヲ詳ニセリ、而シテ神輿ハ、祭祀ニ神ノ之ニ遷御シ給フモノナリ、神輿宿ハ、神輿ヲ藏ムル舍ニシテ、或ハ御旅所ヲモ稱ス、御旅所トハ、祭祀ノ時、神輿ノ駐リ給フ所ナリ、此類モ亦此ニ收メタリ、

社祠ノ事ハ、諸社ニ散見スルヲ以テ、互ニ相參看スベキハ勿論ニテ、特ニ伊勢大神宮ニ於ケル事ハ、其篇ニ詳ニシタレバ就キテ見ルベシ、此他樓門、渡殿等ノ事ハ、居處部ニ各其篇アレバ參看スベシ、

〔類聚名義抄 七〕社 時野反、ヤシロ、社正 祿古

〔伊呂波字類抄 也地儀〕社ヤシロ

〔出雲風土記 意宇郡〕屋代鄕、郡家正東卅九里一百二十歩、天乃夫比命御伴天降來社〇社恐坐誤伊支等之遠祖天津日子命詔、吾靜將坐社詔、故云社、神龜三年、改字屋代、

〔圓珠菴雜記〕社ヤシロ屋代なり

〔日本釋名 上宮室〕社　屋代なり、上古の時かりそめある神祠は、たゞ人家のかたばかりにつくりし故に、屋代と名付しにや、神殿の大になりしは其後の事なるべし、一說うや〳〵し也、ろは助字也、神社はうやまふべき處なり、

〔東雅 四神祇〕社、ヤシロ、　ヤシロとは屋代也、又ミヤシロともいふが如きは御屋代也、上古之時には、地を掃ひ、齋場を設けて、神を齋祀る義あり、其齋場をユニハなどいひしを、其後其齋場を屋代ともいひしは、齋場をもて宮殿に代るの義なり、古語にシロといひしは、御手代、御杖代などいふがごとく、それにかはるといひし也、信濃國に屋代部といふあるがごときも、またかゝる義によれりと見えたり、　大倭國靑垣三諸の社は、大三輪大神の願のまに〳〵大己貴神の齋奉られし所也、しかるに此社のごときは宮殿等の制もあらず、唯其齋場を設けられし所にて、漢にして社といふものゝごとく也ければ、社の字を用ひて、ヤシロとは讀し也、延喜式の神名帳にみえし所の神社のごとき、今に至ては其神蹟さだかならぬが有るも、其宮殿の廢れ壞れて、其蹟をもとむべからざるのみにもあらじ、初より大三輪の社のごとく、只齋場を設けて其神を齋祀られしを、世久しくなりて、其禮典の廢れしによりて、其齋場をあはせてしるべからぬに至りしも多かるべき事也、宮殿の制なるがごときをもヤシロといふ事は、後代の俗に出し所とぞ覺ゆる、

〔日本書紀通證 二〕重遠曰、凡造宮殿、皆用長度、八尋蓋古昔造正殿之長度也、今按八則天地之全數、尋之爲言廣也、蓋有廣大全備之意、殿戶名也、殿各有名、今稱神社云也志呂、蓋八尋殿之轉也、

〔類聚名物考 神祇十一〕社 やしろ

今思ふに、八尋殿の轉語也といへる事、その詞ちかゝらず、たゞ八尋とのみいひて神社の事とはいふべからず、千尋八尋みな長く遠きたとへ也、これは屋代なるべし、屋は神にも人にも古へはすべていふ也、代は土地を引ならしたる所を云、今も苗の種子物ふせる所をしろといふ、苗代などの如し、城をば支とも志呂ともいふもその意也、

〔禮記 郊特牲〕社祭土而主陰氣也、君南鄕於北墉下、答陰之義也、日用甲、用日之始也、天子大社必受霜露風雨、以達天地之氣也、是故喪國之社屋之、不受天陽也、薄社北牖、使陰明也、社所以神地之道也、地載萬物、天垂象、取財於地、取法於天、是以尊天而親地也、故敎民美報焉、家主中霤、而國主社、示本也、

〔段氏說文解字注 示一上〕社、地主也、五經異義、今孝經說曰、社者土地之主、土地廣博、不可遍敬、封五土以爲社、古左氏說、共工爲后土爲社、許君謹案曰、春秋稱公社、今人謂社神爲社公、故知社是上公、非地祇、鄭駁之云、社祭土而主陰氣、又云、社者神地之道、謂社神、但言上公、失之矣、今人亦謂雷曰雷公、天曰天公、豈上公也、宗伯以血祭祭社稷五祀五嶽、社稷之神若是句龍柱棄、不得先五嶽而食、又引司徒五土名、又引大司樂五變而致介物及土示、土示五土之總神、即謂社也、六樂於五地無原隰、而有土祇、則土祇與原隰同用樂也、[illegible]、按許謂社爲地主、此用今孝經說、制以地主也、从示土之云、先於左氏傳、則異義从左氏說者、不得盡許君異義先成、說文時家往往有說文之說、異同於鄭君之駁者、如社稷、發天、聖人感天而生、三家等皆是也、从示土、

〔正字通 午下〕社、說文、社古文作䄯、田藝衡曰、社祀五木以爲主、故从木、篆作䄯、亦作𥙐、按社爲土神、郊特牲云、社祭土、主陰氣、日用甲、土居中央、兼五行、各樹其土所宜之木、非从木立義、古文加木贅、

〔正字通 午下〕祠 新茲切、音詞、廟也、

〔倭玉篇 示上〕祠 ホコラ

〔日本書紀 垂仁 六〕二十五年三月丙申、離天照大神於豐耜入姫命、託于倭姫命、爰倭姫命求鎭坐大神之處、中略故隨大神敎、其祠立於伊勢國、

〔日本書紀 神功 九〕九年仲哀中略十二月辛亥、中略於是從軍神表筒男、中筒男、底筒男三神、誨皇后曰、我荒魂

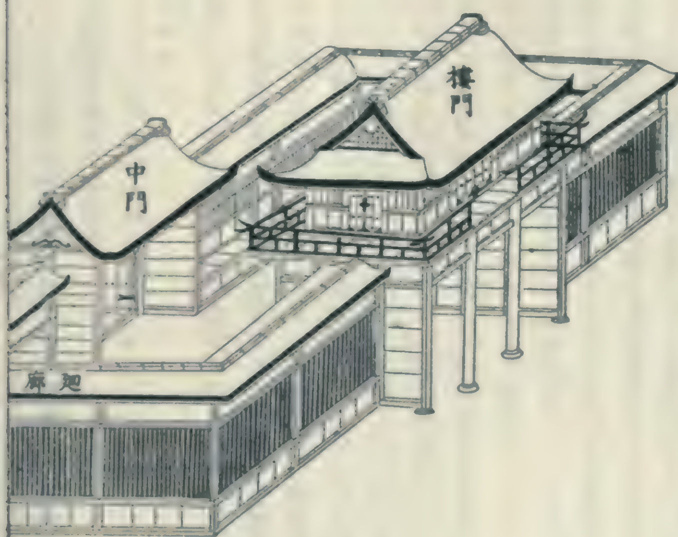
令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰、啓于皇后曰、神欲居之地、必宜奉定、則以踐立為祭荒魂之主、仍祠立於穴門山田邑、

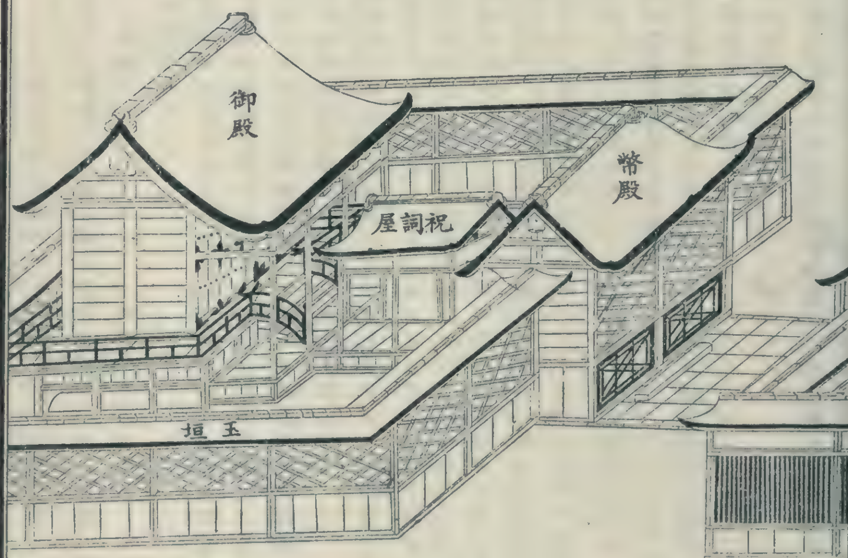
〔撮壤集上神〕宮

〔和爾雅二居處〕宮ミヤ 王宮也、又宗廟也、

〔東雅四神祠〕宮　みやの義、下の宮殿の條に見えたり、宮殿を造りて神を齋き祀らるゝ事の始は、舊事、古事、日本紀等の中に據るに、高木の神、大己貴神のために、天之日隅宮を造られ、天穗日命して、其祭を主らしめられしをもて、其事の起りとすべき所也、〇中略天御柱國御柱など云がごとき、そのハシラといふは、舊說によるに、ハとは永き義なりといひけり、萬葉集抄シラとは標也、神功皇后杖給ひし矛をもて新羅王門に樹られて、為後葉之印といふがごとき卽此義也、陰陽二神礙馭盧嶋に立給ひしといふも、大和國龍田に坐す天御柱國御柱といふものも、後の代になりては見る所なくなりにたれど、皇孫の命日向國高千穗久士布流多氣に天降りましける始に建られしものは、猶今も見在せり、其事なは神功皇后の御事のごとし、されば國中の天柱といひしは、其國を開かれし初に、永世之標鎭とおされし所をいひし程に、凡宮室を始建るごときも、まづ一つの柱を建て其標鎭とし、又是をばハシラといひけり、顯宗天皇紀にみえし室壽の詞に、築立杜者、此家長御心之鎭也といふが如き是也、彼の天の日隅宮の制のごときは、舊事紀にみえし所も詳にして、後代に及ていつき祭られし處、大社、中社、小社の差等によりて、正殿、幣殿、拜殿、舞殿、直會屋、外舍、雜舍、などいふものゝ如き定制ありて、其後俗に神明造り、王子造りなどいふがごときは、其制のおなじからぬ事どもありとみえたれど、それらの事詳にしるさんは言長し、悉く擧ぐるにいとまあらず、

〔神道名目類聚抄　一宮社〕宮社構圖




御殿
幣殿
祝詞屋
玉垣

社祠雜見

〔神道名目類聚抄〈一宮社〉〕宮社ノカマヘハ、樓門ヨリ中門ニ至テ廻廊アリ、樓門ト中門ノ間ニ拜殿ヲ設ク、中門ヲ通リテ幣殿アリ、幣殿ト宮殿ノ間ニ祝詞屋アリ其外ニ宮殿ヘ往還ノ廊ヲ渡廊、又渡殿ナド云、玉牆ハ宮殿ノ御後ノ方ヨリオシマハシ、前幣殿ノ方ニ至テハ大方渡殿ナルモノナリ、然レドモ宮社ノ便ニヨリ、其品カハリアルナリ、

〔續日本後紀〈九仁明〉〕承和七年九月乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作島、本名上津島、此島坐阿波神、是三島大社本后也、又坐物忌奈乃命、卽前社御子神也、新作寶四院、石室二間、屋二間、闇室十二基、〈○下略〉

〔日本紀略〈一九後一條〉〕永祚元年八月十三日辛酉、酉戌刻大風、〈○中略〉祇園天神堂同以顚倒、

〔百錬抄〈四後冷泉〉〕治暦二年三月十八日、吉祥院新造天神堂奉移御神、

〔古今著聞集〈五和歌〉〕基俊城外しける事ありけり、道に堂あるに、むくの木有、その木に六歳はかり成小童のぼりて、むくを取てくひけるに、この堂をば何といふぞと尋ければ、やしろ堂と申ところへけるを聞て基俊なにとなくくちずさみに童にむかひて、

この堂は神か佛かおぼつかな

といひたりければ、此わらはうち聞てとりもあへず、

ほうしみこにぞとふべかりける

といひけり、基俊おさましくふしぎに覺て、この童はたゞものにはあらずとぞいひける、

〔出羽國風土略記〈六飽海郡〉〕大物忌神社、月山神社、
慶長年中、〈○中略〉其比は土俗、本社を差して御にどうと云り、神主家に傳たる書付にも御堂と有、

〔吉田藩社寺舊記〕元宗村分〈○伊達郡北字和郡〉
一權現堂一社　御神體木像

〔古事記〈上〉〕於是大國主神愁而告、吾獨何能得作此國、孰神與吾能相作此國耶、是時有光海依來之神、

其神言、能治我前者、吾能共與相作成、若不然者、國難成、爾大國主神曰、然者治奉之狀奈何、答言、吾者伊都岐奉于倭之青垣東山上、此者坐御諸山上神也、

〔古事記傳十二〕御諸山は、卽三輪山のことなり、〇中略註まづ御諸は、御室にて、(御室なぞと云說は非なり)凡て神社を云、〇中略さて御諸とは、右に云る如く、何處にまれ、神社のことなるに、此山にしも其名を負るは、取分て此大神を尊崇めるからなり、(今京にて祭といへば、賀茂祭、山といへば日枝山なるがごとし、)さて此御社に鎭坐御名を、大物主大神と申すなり、

〔日本書紀神代一〕一書曰、夫大己貴命與少彥名命、戮力一心、經營天下、〇中略自後國中所未成者、大己貴神獨能巡造、遂到出雲國、〇中略于時神光照海、忽然有浮來者、曰如吾不在者、汝何能平此國乎、由吾在故、汝得建其大造之績矣、是時大己貴神問曰、然則汝是誰耶、對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、大己貴神曰、唯然、迺知汝是吾之幸魂奇魂、今欲何處住耶、對曰、吾欲住於日本國之三諸山、故卽營宮彼處、使就而居、此大三輪之神也、

〔類聚神祇本源十一外宮別宮〕大中小社差別事

太政官符　神祇官幷五畿七道諸國司

應早定置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥井幷四至內地町數事

正一位正三位以上　爲大社

從三位從四位以上　爲中社

正五位從五位以上　爲小社

一大社四至(四限)九町

三間檜皮葺正殿一宇、(高一丈二尺、板敷戸一本、)在堅魚木八九、(長五尺、徑九寸、)千木四支、(長一丈三尺、)瑞垣一重、(方二丈、高七尺、)珠垣二重、(方各五六丈、高八尺、)內外鳥居二基、(內一本高九尺、口徑八寸、外一本高一丈、口徑九寸、)三間檜皮葺幣殿一宇、(高一丈一尺、板敷戸一本、)在五

間草葺拜殿一宇、（高八尺）五間板葺僻殿一宇、（高八尺）五間板葺直會屋二宇、（高八尺）萱葺板倉二宇、三間草葺盛家二宇、（在戸二本）左右板葺廊二宇、（各高七尺）五間外舍二宇、（高八尺）五間馬屋二宇、

一中社四至限八町

三間檜皮葺正殿一宇、（高一丈一尺、在板數戸一本、）堅魚木六丸、（長四尺、徑七寸、）千木四支、（長一丈）瑞垣一重、（方二丈五尺、高七尺、）珠垣一重、（方三丈五尺、高八尺、）內外鳥居二基、（高八尺、徑七寸、）三間板葺幣殿一宇、（高七尺、戸一本、）三間板葺拜殿一宇、（高七尺）五間同僻殿一宇、（同尺）三間同直會屋二宇、（高七尺）五間外舍二宇、

一小社四至限四町

二（〇一本作三）間板葺正殿一宇、（高八尺、在板數戸一本、〈八一本作七〉）堅魚木四丸、（長四尺、徑七寸、）千木四支、（長八尺）瑞垣一重、（方二丈、高五尺、）鳥居一基、（高六尺、徑六寸、）三間草葺拜殿一宇、（高七尺）三間板葺僻殿一宇、（高七尺）五間雜舍二宇、（同尺）

右被左大臣宣偁、奉勅、諸國神社正殿雜舍、幷四至町數所定如件、宜仰在國司、以正稅物數令造進、自今以後不可違失、若有破損者、應令社司修造、无其勤者、科大祓解却見任、官宜承知、依宣行之、符到奉行、

正四位上行左大辨兼右兵衞督藤原朝臣百川

左大史外正六位上阿倍志斐連東人

寶龜二年二月十三日

〇按ズルニ、此官符ニ就キテ辨ジタル說ドモ、社格篇大中小社ノ條ニ在リ、參看スベシ、

〔玉葉〕建曆元年五月十九日、長俊朝臣來、申昨日納言返事、諸社造替之間、增寸法作加神殿以下之事、先例必及仗儀被行御卜歟□被增寸法被加神殿以下事□□還不知神慮被定神宮文書行上卿知此料也、尤可被答御存知下歟、辨雖殿上奏聞宣旨又不存候、奉行事、雖申定猶付職事令宣下故實也、不可有御承引、況於此大事哉、未剋、左中辨宣房朝臣來、予仰云、月讀宮造營間事、可准別宮之由、宣

建築方法

下已畢、又可増寸法、一定切了、雖不可□長承例、已有議定御占等、今度無沙汰被仰下□守神慮非無疑、若准長承例被行御占歟、不審申之由便宜可聞傳奏忠親卿也、如此申狀非無恐、然而先度已無□仰下而可進忽·不申外□依申諸給之了、

〔古事記上〕爾天鳥船神、副建御雷神而遣、是以此二神降到出雲國伊那佐之小濱而、伊那佐三字以音拔十掬劒、逆刺立于浪穗、趺坐其劒前、問其大國主神言、天照大御神、高木神之命以問使之、汝之宇志波祁流此五字以音葦原中國者、我御子之所知國言依賜、故汝心奈何、○中略故更且還來問其大國主神、汝子等事代主神、建御名方神二神者、隨天神御子之命勿違白訖、故汝心奈何、爾答白之、僕子等二神隨白僕之不違、此葦原中國者、隨命既獻也、唯僕住所者、如天神御子之天津日繼所知之登陀流此三字以音、下效此、天之御巢而、於底津石根宮柱布斗斯理、此四字以音於高天原氷木多迦斯理多迦斯理四字以音而治賜者、僕者於百不足八十坰手隱而侍、○中略故隨白而○此四字、據古事記傳補、於出雲國之多藝志之小濱、造天之御舍、多藝志三字以音

〔日本書紀神代二〕一書曰、天神遣經津主神、武甕槌神、使平定葦原中國、○中略既而二神降到出雲五十田狹之小汀、而問大己貴神曰、汝將以此國奉天神耶以不、對曰、疑汝二神非是吾處來者、故不須許也、於是經津主神、武甕槌神、○武甕槌神四字、據下文補、則還昇報告、時高皇產靈尊乃還遣二神、勅大己貴神曰、今者聞汝所言、深有其理、故更條條而勅之、夫汝所治顯露之事、宜是吾孫治之、汝則可以治神事、又汝應住天日隅宮者、今當供造、卽以千尋栲繩結爲百八十紐、其造宮之制者、柱則高大、板則廣厚、○中略於是大己貴神報曰、天神勅敎慇懃如此、敢不從命乎、

〔釋日本紀述義八〕天日隅宮

私記曰、問此何處哉、答、出雲國杵築社、是大己貴神也、其社之制作高大也、世號之出雲大社、已叶此紀一書文、以之案之、以杵築社稱日隅宮歟、

〔出雲風土記楯縫郡〕所以號楯縫者、神魂命詔、五十足天日栖宮之縱横御量、千尋栲繩持、而百結結、八

十結結下而此天御量持而所造天下大神（大己貴神）之宮造奉詔、

〔古語拾遺〕凡奉造神殿者、皆須依神代之職、齋部官率御木麁香二郷齋部、伐以齋斧、堀以齋鉏、然後工夫下手、造畢之後、齋部殿祭及門祭訖乃可御坐、而造伊勢宮及大嘗由紀主基宮、皆不預齋部、所遺四也、

〔一貫和風抄下〕神社作法

問、諸神社往昔無瓦葺、頃年多以銅瓦、以土瓦、此理如何、曰、往昔例如問話、凡神社者、大抵以伊勢爲規模、内外宮皆以盧葺之、然於于他者、皆以檜皮、禁裏殿閣皆然也、蓋太政官一舍耳瓦葺也、故其和歌有數首詠之、今所擧神社以銅瓦葺之、是近年復火災之理歟、蓋是可謂略儀也、

〔大神宮儀式解五〕檜の皮もて屋を葺くも古く見ゆ、式部式上木工寮檜皮工一人、修理職檜皮工一人、職人歌合、月のもる軒ばのきりのうすひはだふきもとはさぬ秋の風哉、軒つけを先ふきそひるひはだやのまたむねおはぬ戀もする哉など見ゆ、皮を波多とよむは、河波多、海波多などの如く邊をいふ、皮薄、異木皮、などいふも同じ、（皮を加波とよめるは外側なれば、加を添てよむも意は相通ひて同じきなり、）

〔公裁錄廿一社〕銅瓦葺願之事

上總國長柄郡一ノ宮本郷村神社、文化元子年銅瓦葺願、加納遠江守ゟ寺社奉行大久保安藝守江問合挨拶、

御書面本郷村鎭守玉嶋明神本社銅屋根願之儀者、實に銅屋根に無之候而者、差支之筋も有之候はゞ、坪數餘計にも無之間、糺之上外に障之儀も無之候はゞ、御聞届候而も不害筋被存候、

九月

私云、銅瓦葺之儀、其始末に寄、坪數百坪迄者願相濟、其餘過坪者難成儀にも難成歟、其筋能々可糺事、

〔古今神學類編 十六宗廟〕宮社造制

大小神社造營ノ本致ヲ考フルニ、神代ニ瑞殿、神籬、日少宮、日隅宮、八尋殿アリ、サレドモ推シテ是ヲ思フニ、宮社ノ元由ト見エタリ、神祭ニ就テ神靈ヲ依シメ奉ルニ、眞坂樹ノ根堀ナルゾ神祠ノ本基トハ申スベキ、由是神籬トハ榊也ト云ヘル陳説モ侍ルト見エタリ、人皇ニ至リテハ、神武帝ノ靈畤ニ始リ、五十串ノ事、是亦瑞舍ノ本緣ナルベキ歟、ソレヨリ以降崇神帝ニ至リ、大和ノ磯城ニ神籬ヲ建テ、三種神器ヲ移シ申サレ、大國魂神ヲ祀ラレ、其外天神地祇ノ神地ヲ定メ給ト云ヘドモ、其宮社造營ノ制ハ不傳、就テ想フニ宗廟ノ御茅葺、大社ノ檜皮葺、皆是上古質素ノ宮室、神世第宅ノ制、自然ノ狀ト見ユレバ、此ニ心ヲ注ベキ事甚切也、負古人家ノ不定時ハ、巢ニ居リ穴ニ處リ、其後ゾ和漢萬邦共ニ人屋ト云事モ定リヌルト也、易ニ所謂聖人乾坤ノ象ヲ求メテ、始テ居屋ノ制ヲ始メ給ト云ヘバ、何レノ國モ一般ノ天理ニ出タル事ハ等シク、今更素朴ノ神殿ヲ拜スル毎ニ、昔覺テ粟粒膚ニ生ジ侍ルゾカシ、神武天皇本紀ニモ、今運屬此屯蒙、民心朴質、巢棲穴住、習俗是常ナリト侍ルモ、我國人家ノ全備ナキアリサマ也、文選西都賦ニ、其宮室也、體象乎天地、經緯乎陰陽、據坤靈之正位、效大紫之圓方ト、善註曰、七略曰、王者師天地、體天而行、是以明堂之制、內有大室、象紫微宮、南出明堂、象大微、春秋元命苞曰、紫之言此也、宮之言中也、言天神圖法、陰陽開閉、皆在此中也、坤靈トハ地神也、又曰、紫宮ハ大宰ノ室也、言建宮室、方圓ハ取象於天地、經南北也、緯東西也、言東西南北合陰陽之法ト云云、夫神社ノ南面タル事モ皆天地一象ノ定範也、又天日隅宮トハ、神代ニ大己貴命退休ノ神地、則高皇產靈神ノ詔ニシテ造營シ給フ瑞舍也トゾ、則神代卷ニ此宮營ノ事ヲ今當供造、卽以千尋栲繩結爲百八十紐、其造宮之制者、柱則高大、板則厚廣ト、忌部正通之口訣曰、以千尋栲繩結爲百八十紐者、神社敷地之牓示、四至百里也ト云云、此說ニヨレバ出雲國一國ヲ以大社ノ遠四至ト定メラレシ事也、サモアルベキ神功無雙ノ大神ニヤ、而シテ神社ノ四至、疆場ノ

沙汰、神代ニ於テハ始テ見于此者乎、又地祇ノ宮營、後世マデ宗廟ニ異リテ、莊麗ニシテ或ハ丹塗、或ハ金玉ヲ彫鏤ムルニ至ルノ元始モ、日隅宮ノ造構ニ本ヅク事著眼スベシ、總テ大中小社四至遠近ノ定メハ、延長四年ノ神祇官符ニモ見エタリ、諸社共ニ遠四至、近四至ノ沙汰、今ハ廢レテ其封域不慥、増テ多クハ山林冢廟ト成リ、宮地ノ不知モ條多ナリト見エテ、毎州式內ノ神社モ名神ニ列セラルヽ社サヘ、社地ノ分明ナラヌ事多シト也、諸ノ大小神祇ニ從テ、神祠造營ノ制格定レル事ハ、類聚神祇本源ノ第五末社篇ニ載テ云ク云云、件ノ官符ニ宗廟ノ宮制ヲ不載、是ハ天下諸社ノ制耳、宗廟ハ別ニ大神宮式、又ハ儀式帳ニ備リ、其外舊典アリテ各別ノ御事也、抑御萱葺ノ事ハ、其元由ヲ不聞人モ打向奉ルヨリ、何トナキ威敬發リ、昔覺エテ異他ナル信ヲ懷ク事人皆等シキニコソ、尋常ノ深山幽林ニ建立ノ神社ダモ、古メカシキハ平林ノ寶祠ニ不似、信ヲ催ス事多シ、是ヲ上久トモ、神宿タリトモ、神衰トモ奉稱事アリ、況其宮制人爲ニ非ルヲヤ、都テ本朝ノ古ヘ殿堂ト云フ者ハ、神社官廳學校ノ外ハ更ニ不聞、胡法交リテ三ノ者ヲ超越セリト云云、本朝ノ諸神社宗廟ノ外、正殿茅葺ナキ例也、東鑑ニ鶴岡八幡、初ハ松柱茅軒タリシヲ、加華飾奉貴神威ト侍ルモ、此茅ノ軒トハ由緒アリテカヽルニ非ジ、唯倹荒ナリシガ故ニ、花美ヲ加ヘラルトニヤ、都テ大社中社迄ハ檜皮葺ヲ以テ爲貴、是其素朴宗廟ニ次グリ、又神代ニ神ノ詔ニ、檜ハ瑞宮ヲ造ル材トスベシトモ侍レバ有故者乎、想フニ檜皮モ今ヨリ見之則華美ニ似タリ、爾ニ此殿ハウベモ富ケリ、茅草ノ三ツバ四ツバニトノ作リシテ、ト云ル茅草モ檜ノ事ナリト云ヘド、檜皮ヲ葺事ハ只是質朴ヲ取テ也、是モ玄古ノ人屋葺クニ木ノ皮草ノ葉ヲ以スル事ヨリ、古風倹廉ヲ悟シ給ヘル神敕ノ標ト知奉ルベシ、今トテモ山家ノアリサマハ、人家ノ軒ミ都會ノ人家文華ナルニ大異ニシテ、自ラ古風殘レル事多シ、檜皮モ多クハ丹波ヨリ出之ト見ユ、彼國此木ニ宜キ山多キ故ナル歟、今世モ是ヲ以小民蓋屋貼四壁、風雨ヲモ防ギ得ト也、加旃又春宮黒木鳥居想合スベシ、古老口實

傳、永正記共ニ云、祠官等黒木假屋可有思慮也、但剝皮者無恐事ト、此制禁祇ニハ非ズ、小社ノ板葺ニ至テハ、既ニ人爲巧工ノ始ニシテ、縦ヒ質素也ト云ヘドモ、茅葺檜皮ノ古ナルニハ不似、悉ク不辨シテ明ケシ、神殿ノ營ミ而已ナラズ、別宮參道ノ砌墌ニモ皆自然石ヲソノマヽナルゾ心ヲ注ベキ處也、是ヲ想フニ諸社石切等ノ道堦ニ異ナラズヤ、又丹塗ノ神社ニ於テハ華美甚シト云ヘドモ、亦世情ニ時ナル宮營ニシテ、和漢ニ此例其道理アル事歟、異朝ノ廟ニ釁ルト云ガ如キモ、陽ヲ助クル深理アリトゾ、鐘ニ血塗テ釁アハシムルノ類ニ異ナル歟、故ヱ丹塗ニハ是異域同致ノ子細アリト云説モ侍リ、サレドモ只是裝飾彫鏤ヲ加ヘテ神威ヲ添ヘ、且ツ祖廟ノ如キハ子孫ノ恭敬ヲ盡スニアル耳、或又小社ノ中瓦蓋ニ至ルヲ見ル事偏鄙ニアリ、倭姫命內外七言ノ忌詞ニ、寺ヲ瓦葺ト云ヘト侍レバ、決シテ神祠ニハアルマジキ事也、裝飾シテ神威ヲ貴ルトモ亦非例違義ナルハ非古、夫茅屋越席ト一豐一儉、其制ヲ異ニスト云ヘドモ、而モ不莊麗以威靈ヲ兆民ニ觀スニ不足、既ニ大己貴命ノ日隅宮ニ地祇ノ華美其漸アルニ似タリ、又神社ノ瓦葺ハ違例也ト云ヘドモ、都テ宮殿ノ瓦ヲ用ル事ハ、齊明天皇紀ニ板葺ノ宮瓦覆トセンノ朝議見ユ、其議曰小墾田造起宮闕擬將瓦覆、續日本紀ニ、聖武帝ノ御宇太政官奏言、上古淳朴、冬穴夏巣、後世聖人代以宮室、亦有京師帝王爲居、萬國所朝、非是莊麗何以表德、其板屋草舍、中古遺制、難營易破、空殫民財、請仰有司、令五位已上及庶人堪營者構立瓦舍、塗爲赤白、奏可之云云、西都賦ニモ屋不呈材、牆不露形、裛以藻繡、以綸連ト、又穀梁傳ニ丹桓宮ト云ル註ニ、禮天子諸侯黝堊、大夫蒼、士黃ト、又刻桓宮桷ト云註、禮天子之桷斲之礱之加密石焉、諸侯之桷斲之礱之、大夫斲之、士斲本ト云ヘリ、左傳ニモ云、丹楹刻桷皆非禮也、御孫諫曰、臣聞之、儉德之共也、侈惡之大也、先君有共德而君納諸大惡、無乃不可乎ト云云、想フニ丹塗ヲ式文ニハ赤塗塗丹トモ書リ社稷神社ハ剏建ノ時ヨリ必ズ赤塗ニスベキ時世ニ非レバ、後代ニ至テ百廢再興ノ全盛ニ依テ、自然ニ神威ヲ貴ルノ説アリト見エタレド、如在崇

敬不得已ノ勢ヒニ依レリ、必シモ釁テ陽ヲ助クルノ禮ニ倣而已ニハ非ジ、禮雜記篇ニ、凡宗廟器其名者、成則釁之以豭豚、注ニ長樂陳氏曰、釁者、塗釁以血、交神明之道也、又云、廟成則釁、室成則不釁、以室不可以神之也ト、釁神廟ノ說ハ、禮記及大戴禮ニ見エタリ、朔按ズルニ、凡ソ神祠ト禁裏トノ殿作リハ故實ヲ本トスルガ故ニ、容易ニ改メラレザル事ト也、而レドモ諸社ニ於テハ宮制ヲ忘レショリ、多クハ伽藍ニ類スルガ如ク、却テ是ヲ世人尊敬スル風俗ニ換リヌ、彼基俊ノ社堂ノ歎想像スベシ、按ズルニ、檜ハ神宮ノ良材タル事、神代神宣ニ定レリ、或ハ栗ヲ以テシ、梢ヲ以テスル事モ、是唯土宜ナレバ、強チ一概ニ難論事、於是始テ識之爾、サレドモ皇字沙汰文ニハ風宮造營ノ事ニ就キテ、檜ノ外ニ杉ヲ用ル事違例タルノ趣モ侍リ、是ハ土地ノ宜シキニ不拘、宗廟ハ禮ノ出ル所ナレバ、神式ヲ不弛故ニヤ、又諸社共ニ四至ノ遠近定ル事ナレド、澆季ニ至リテハ、神社ノ軒ヲ限リテ民屋トナリ、社地ノ不知ハ則民ノ敷地トナリテ、祟リヲ受ル事不少、間亦因宅ト稱スル者ハ穢而由此、凡宗廟ヲ始メ神社ノ近隣ニハ民屋ヲ禁ズル古例深ク有以也、神宮雜例集曰、謹検案內、大神宮四至、東南西深山無有人宅、北限宇治川者、其程去宮一里餘、此內不住人宅、禁制尤嚴、此則爲禦穢事也、此宮〈外宮〉四至未被定置、但去寬平五年十一月廿七日司符偁、宮近居住百姓之宅、有火失事、殆及宮內、自今以後任格條、自宮四方各四十丈之內、居住人宅一切制斷ト云云、此例ヲ想フニ、第一穢氣失火ノ恐レ至極ノ道理也、サラズトテモ、神祠ノ近邊民家ノ遙ラン事目安カラヌ事也、尤民家ノ繁榮ハ神ノ惠澤ニシテ所富ミ民豐ナランハ、神慮ノ御賚トハ云ナガラ、木々ニ至リテハ、人家ノ災神社ニ及ブ事例シ多ケレバ也、且又神社ハ山川ニ近キハ申ニ不及、平地ナラバ增テ民家ニ遠ク、古木平林ノ森々トシテヲグラキコソ今一入信モ彌增シニ、樹間ノ寒燈神宿タランコソ貴サモ身ニ染ム心地シ侍レ、殊ニ寶龜十年八月、延曆十年八月ヨリ以降、アマタヽビ宗廟ノ回祿ヲ想合スベシ、況餘社ノ故實ヲ失ヒシモ、皆カヽル道失ヨリノ事也、兵燹ニ罹ル事ハ、非常ノ

例此限リヲ期シ難ケレド、平素ノ愼ニモ民家ニ近キ神社ハ褻瀆シ奉ル事多ケレバ、尤早ク是ヲ改メ避ベキ事ニヤ、

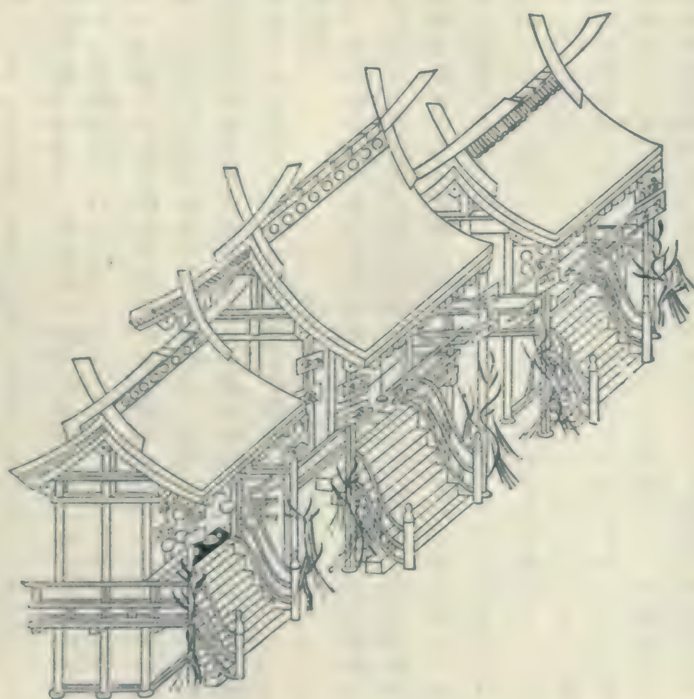
〔神道名目類聚抄一宮社〕宮殿御殿、御舍、　神代卷ニ云宮ヲ造制ハ、柱ハ則高大、板則廣厚云云、宮社ニハ組物彫モノナドヲセズ、千木造ナルベシ、

〔大日本史神祇二十二〕垂仁帝與天祖神宮于宇治五十鈴川上、雄略帝遷建豐受宮于度會山田原、二宮通稱曰伊勢大神宮、其宮殿之制、與皇居無異、屋皆茅茨、木不彫鏤、上安冰椽堅魚木、潔樸不華、而宏偉尊嚴、蓋莫以加焉、唯皇居之制、歷代之久、文質殊宜、而神宮則萬世不敢改其制也、若其天下諸社雖有尊卑之等、大小之異、蓋皆取則於此、而各有所斟酌也、

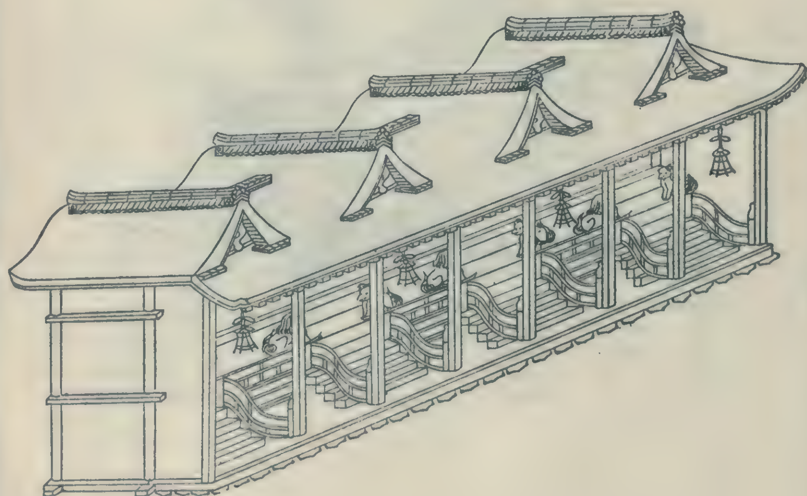
〔家屋雜考一〕家作沿革

寢殿造といふは、一家一構の内、中央に正殿あり、南面、其東西もしくは北に對屋といふものあり、正殿は主人常住のところ、對屋は家内眷屬の居るところなり、さてまた正殿の前數十歩に池を湛へ、中島を築き橋をかく、又東西の對屋より南へ通ふ廊あり、其廊のはし池に臨める所に一屋を構へ、是を釣殿とし、又泉殿とす、東西廊の中程に各小門あり、廊の內を切通しにして扉なし、是を兩中門といふ、こはいはゆる回廊にて、東の渡殿、西の細殿などいふ是なり、其の廊の回れる内をさして中庭といふ、その庭よりつゞきて池島などあり、さてまた件の廊の内には、家司所從の役所役所等ありて、今時の神社の回廊、或は寺院の東西寮などの如し、こはそのかみ攝關大臣の御屋形をはじめ、四位五位の家々とても、大抵右やうの屋造ならざるはなし、されば今時神社の本殿拜殿、寺院の本堂客殿、東西寮など常人の家に較れば、大に異樣なるでとくおもはるれども、そのかみはそれもこれも各相似たるものなりしと見えたり、

（年中行事繪卷 城南神祭所載神殿圖）



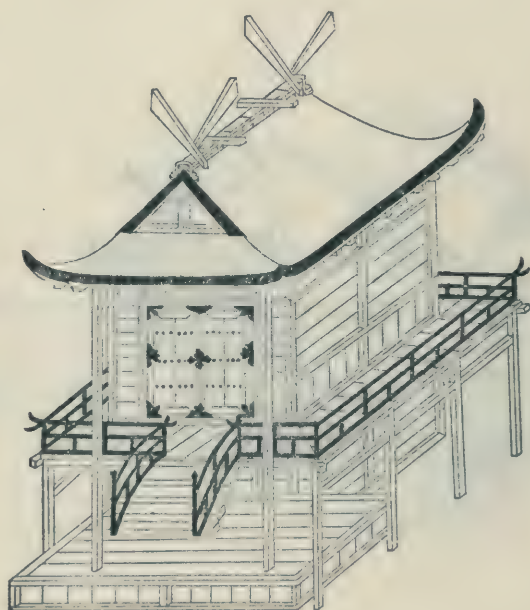
年中行事繪卷 平野祭所載神殿圖



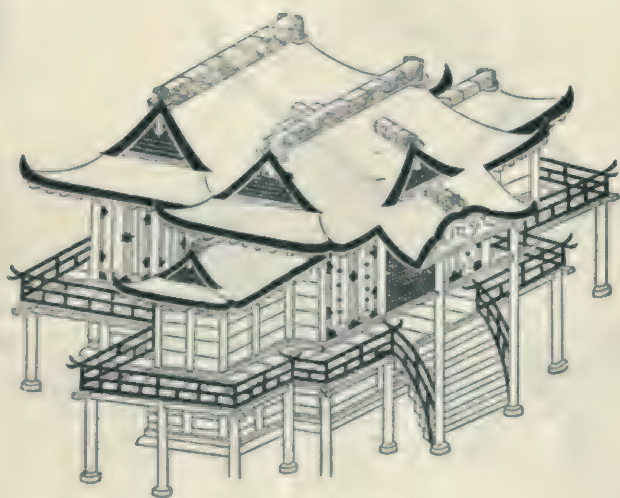
〔神道名目類聚抄　一宮社〕神明造



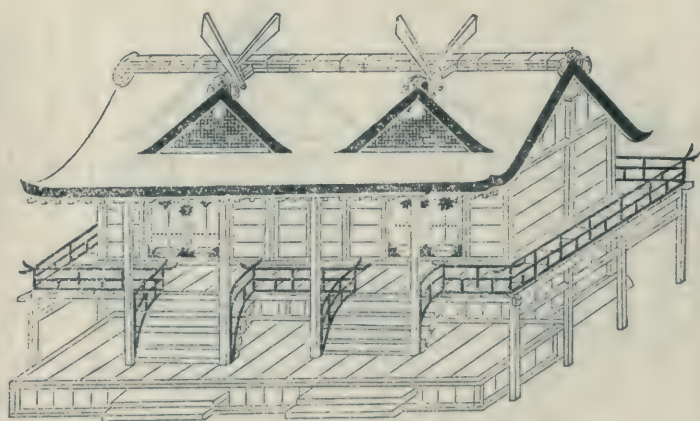
〔神道名目類聚抄 一宮社〕皇子造　春日造トモ云



（神道名目類聚抄一宮社）石間造　俗ニ八棟造ト云



〔神道名目類聚抄一宮社〕相殿造

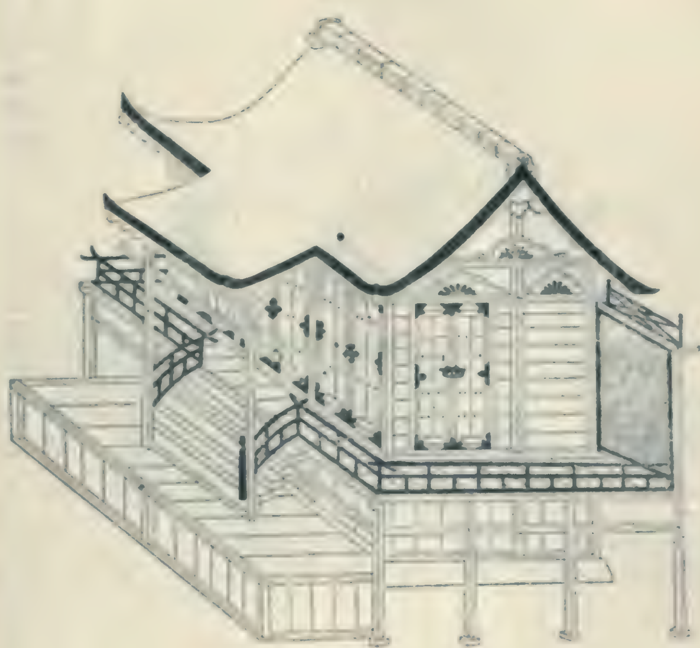


二間社トモ云

一神道名目類聚抄 一宮社一 權現造

堂社造

此御殿ハ組モノ彫モノ等アリ、或ハ彩色ナドスルナリ、



〔古今要覽神祇五〕神社制作

上古神社の制度いかなりしや考ふる處なし、たま〳〵宮柱、氷椽、神籬などの語によりておもふに、大方は知るべしといへども、いまだその詳なることを得ず、延暦二十三年大神宮司大中臣朝臣眞繼注進する處の儀式によりて考ふれば、伊勢内外宮の制作をしるべし、まづ正殿正面に御橋あり、四方に高欄あり、屋根に比木堅魚木あり、その廻りの垣を瑞垣といふ、その外にあるを玉垣といふ、三重なり、たゞし外宮には、板垣蕃垣の名あれども、別に垣あるにあらず、二三の玉垣をいふのみ、此垣に門あり、門に上ふくと上ふかざるとの差別あり、これをもつて當時神社のさまおもひやるべし、その後神明造り、石間作り、皇子造、(又春日造り)堂社造り、(又權現造り)相殿造り、(二間社ともいふ)禿倉造り、(神道名目類聚抄)等のわかちあり、

〔親長卿記〕文明十七年四月二日、早旦詣吉田、(中略)參神前、(六角神殿、勸請諸神、)也、

〔日光山志二〕新宮權現本社　南向八棟造、五間四方、銅葺總赤塗、棟に巴の金紋を附、向拜に金色の鰐口三ツ、三正體の額を正面かけ、三屏黑ぬり、高欄脇障子彫物彩色、上部を設く、三方緣折廻し、格天井、社前階段五級黑塗、前に銅葺の門あり、瑞籬折廻し、拾五間に拾六間許、銅屋根丹塗、

〔大神宮儀式解四〕正殿　正殿の制皆檜木を用、(神代卷上一書、檜可以爲瑞宮之材といひし故實によるにや、)屋は草以て葺、比木を上、堅魚木を臥、欄を四方にめぐらし、御階を架、居玉を安き、金を以て材木の端を莊れり、又御形の樋、株橋樋、貫、障泥板、覆板、鞭懸など今尙古法の如く式年造替奉れり、草にて屋を葺は古風にて、その事萬葉集中に多く見え、祝詞式大殿祭告刀、引結幣留葛目能綴比、取葺計留草乃噪無久、又同告刀に久久遲命、豐受姫命をいふも材木と茨草をいふを考べし、(古代加耶といふ草にて、今のごとく茅にかぎらず、稻藁をはじめくさぐさの草を用ひしなり、加耶は草の總名なり、)古代の御屋、今のごとく厚板にて葺、その上に草を葺にはあらじ、垂椽の上、直に草を以て葺奉ると見えたり、(本宮針返内人は、大宮を草もて茨、屋の表より針もて繩を通すを、殿内屋の裏にありて、その通せし針を又表へ返し、草を

（縁図しむる役人にて、代々の御遷宮祀文此役名見えたるに、今の世は先厚板して葺く故に、萱〆の針して打かため、萱の表より内裏へ針を通す事なし、仍此役人も近代はなくなりたり、）定に宮造作制は、神代巻下一書、天日隅宮の造作の事をいふ所に、即以千尋栲縄結為百八十紐、其造宮之制者、柱則高大、板則広厚といひ、又仁徳紀茅茨之蓋弗割斉也、顕宗紀取結縄葛者、此家長之御寿之堅也、取葺草葉者、此家長之御富之餘也、などゝ同じ制にて、神代のまゝに作り奉るなり、材の端々金にて飾るは、次に材木別端以金飾といひ、大神宮式、正殿内張、帳鋪一百三十二勾、殿戸上下閾端入口、帳懸鐶三枚、位金三枚、棟端金四枚、（四隅、依神主云、作二、）鎚目釘十六隻、桁端金四枚、鎚目釘三十二隻、垂木端金八十六枚、鎚目釘三百四十四隻、鐵形木覆金廿四枚、簾懸木端金十六枚、妻塞押木打鋪十二口、壁角柱長押貼金四枚、鎚目釘五十六隻、壁柱長押釘覆鋪十四口、板敷釘覆金一百隻、（式にはそのす法悉くあるせざ、事ふけゝるによりてこゝに略せり、下に引たるもこれに倣ふべし、）ど見えたり、その大数をしらしめむ為に大神宮式を引用れど委しからず、金物色目後々増加の品等は、長暦官符、寛正官符、調進式目、を参考してしるべし、今の世大凡寛正の如く調進し、御殿をかざり奉るなり、

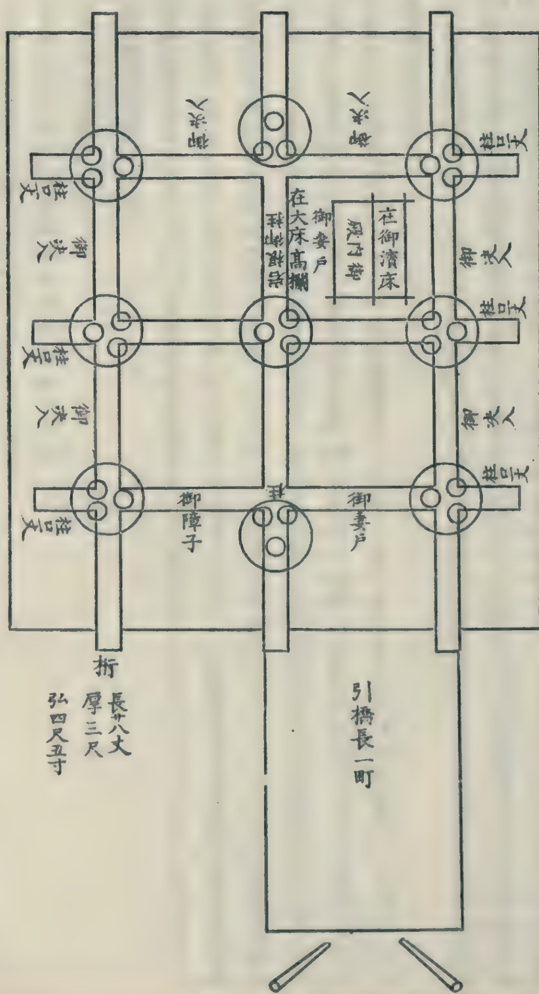
〔大社志〕本社（御日隅宮是也、祭ニ大己貴大神一、社高八丈、御殿四間四方、柱四本、各一間中、天井霞雲、）

〔玉勝間十三〕出雲大社金輪の造営の図

出雲大社神殿の高さ、上古のは三十二丈あり、中古には十六丈あり、今の世のは八丈也、古の時の図を金輪の造営の図といひて、今も国造の家に伝へもたり、其図左にしるすが如し、

此図千家国造の家なるを写し取れり、心得ぬことのみ多かれど、皆たゞ本のまゝなり、

今世の御殿も、大かたの御構は、此図のごとくなりとぞ、


御妻戸
御障子
柱
御妻戸
桁
長十六丈
厚三尺
弘四尺五寸
引橋長一町

〔日光山志 四〕三社權現本社

銅葺總赤塗、南向、二間に三間、大床造、箱棟、鍍金かな物、高欄彫物彩色、正面三扉黑塗、鰐口三ツ掲ぐ、瑞籬四邊を折廻し、是も赤塗、正面と東の方に門あり、此内庭に玉石を敷けり、

〔新編相模國風土記 二十八足柄下郡〕箱根三社權現社

本社（桁行四間二尺餘、梁間三間二尺餘、側六尺、五寸以下間ト云、此下間ト云モノ皆同、）

靜殿（桁行二間二尺餘、梁間三間一尺、）

拜殿（桁行六間一尺餘、梁間三間二尺餘、）

〔新編相模國風土記 三十三足柄下郡〕東照宮御宮、御陣場跡ノ構内西方ニ在、○中略是ハ元和三年和泉守秦久ノ子忠兵衞ト云者、御旅館タルヲモテ、御宮ヲ造立シ奉ルト云、其頃松平右衞門大夫正綱、伊丹播磨守康勝參拜シ、御宮造立ノ由緒ヲ尋問セシニ、忠兵衞具ニ言上セシカバ、總テ台德院殿ノ高聽ニ達シ、同八年領主阿部備中守正次ヘ御宮御造營ノ事ヲ命ゼラレ、御本社（三尺ニ二尺五寸）二覆屋（二間ニ間）二間四面ノ御拜殿（二間三間四）ニ等落成ス、此時御宮地（方二十間）ト大門（長二十間、幅二間）ノ間數ヲモ定メラル、其後元祿十六年地震ノ時、御宮破損セシカバ、市郎左衞門ノ家ニテ假ニ御本社（三尺ニ二尺五寸）ニ覆殿（二間ニ三間、ハ四方ヲ建込ナリ）ヲ造立シ今ニ至ル、

〔日本書紀 五崇神〕八年十二月乙卯、天皇以大田田根子令祭大神、是日活日自擧神酒獻天皇、仍歌之曰、○中略如此歌之宴于神宮、即宴竟之、諸大夫等歌之曰、宇磨佐開、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、伊弟氏由介那、瀰和能等能渡烏、於是天皇歌之曰、宇磨佐階、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、於辭寐羅箇禰、瀰和能等能渡烏、即開神宮門而幸行之、

〔日本書紀通證 十〕瀰和能等能能（三輪之神殿也）阿佐妬珥毛（朝戸之、朝日開戸、朝戸開也、朝日戸開、朝戸通訓、）

〔日本書紀 六垂仁〕三十九年十月、五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮、作劒一千口、因名其劒謂川上部、亦

名曰裸伴、（裸伴、此云阿箇播娜我等母、）藏于石上神宮也、

〔日本後紀　八桓武〕延暦十八年五月辛未、遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣弟枚、改作伊勢大神宮正殿、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院

正殿壹區（長三丈六尺、廣一丈八尺、高一丈一尺、）

御橋一枚、（長六尺、廣五尺、）高欄四方廻、（高三尺、廣二尺五寸、）飾金花形、幷戸具於居𡍮、殿扉金鏁壹具、飾金御鎰壹勾、已上從朝廷官庫奉入、上博風肆枚、（長二丈八尺、弘八寸、厚四寸、）號稱比木、釘覆大𡍮、堅魚木十枚、（長各七尺、徑一尺七寸、）材木別端以金飾、

〔大神宮儀式解　四〕正殿　正殿は音讀也、所によりては美阿良加、または保久羅などもよむべし、萬葉二歌、御在香乎、高知坐而、祝詞式大殿祭告刀、御殿、古語云阿良加、古語拾遺、皇孫命乃美豆乃御殿乎造奉仕也、故其裔今在紀伊國名艸郡御木麁香二鄕、（古語正殿謂之麁香、）云云、造殿齋部所居謂之麁香是其證也、と見えたり、阿良可は在所也、（須美可、阿里加の加は所也、もとは古に古古、比の古と加と同音によりて、加ともいへり、）或人、阿良加は阿里波可ならん、儻にそこと定りたる所を波加といふ、伊都波加となき、又いづこをはかなどのはかにやといへり、いづれにまれ、それに御の字を加へ美阿良可といふ、

〔止由氣宮儀式帳〕一大宮一院

正殿一區（長三丈、廣二丈六尺、高一丈、）

〔延喜式　四伊勢大神宮〕修飾神宮調度

正殿內張帳鎰一百卌二勾（○下略）

〔古語拾遺〕素戔嗚尊奉爲日神行甚無狀、種種凌侮、（○中略）于時天照大神赫怒、入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、爾乃六合常闇、晝夜不分、群神愁迷、手足罔措、凡厥庶事、燎燭而辨、高皇產靈神會八十萬神於天八湍河原、議奉謝之方、爰思兼神深思遠慮議曰、（○中略）令手置帆負彥狹知二神、以天御量（大小斤雜

器等之名也伐大峽小峽之材而造瑞殿(古語、美豆能阿良可)兼作御笠及矛盾、

〔古事記傳十四〕御舍は美阿良阿と訓む、玉垣宮(○垂仁)段、又朝倉宮(○雄略)段などにも、天皇之御舍と見え、遷却祟神祝詞にも、皇御孫之尊乃天御舍と見え、大殿祭祝詞に、皇御孫之命乃、天之御翳日之御翳止造奉仕禮流瑞之御殿(古語云、阿良可)、古語拾遺に瑞殿、(古語美豆能美阿良可)萬葉二(二十八丁)に、御在香乎高知坐而などあり、(地の祝詞に、阿良阿と云し舍根なり、地は舍を立る根なればなり、底津石根に宮柱布刀斯理てと云々をおもふべし、)又古語拾遺橿原大宮造の處に、仍令天富命(太玉命之孫)率手置帆負彥狹知二神之孫、以齋斧齋鉏、始採山材、構立正殿、故其裔今在紀伊國名草郡御木麁香二鄕、(古語、正殿謂之麁香、)採材齋部所居謂之御木、造殿齋部所居謂之麁香、是其證也とあり、(和名抄に、名草郡に能賀郷あり、御木郷と云は見えず、)さて阿良阿の名義は在所か、又在波阿にても有べし、(波阿は、いづこにかなど云加にて、そこと定まりたる處を云、理波を切れば良なり、)さて今此造奉る御舍は、大國主神の御靈の鎭坐む御社にて、卽杵築大社なり、國造神賀詞に、乃大穴持神乃申給久云云申天、己命和魂乎云云、皇御孫命能近守神登貢置天、八百丹杵築宮爾靜坐支とあり、抑此御社の事は、(○中略)其構殊に廣く大きにて他社に勝れり、故大社としも名に負て、今世に至るまでもなほ然りとなむ、

〔百練抄四 三條〕長和四年六月廿日、京人花園邊建立神殿、祠疫神、依疫神託宣也、

〔左經記〕長元七年十一月九日乙未、參殿被仰云、從中宮被仰云、齋院神殿東棟分戶、一日顚開矣、作戶先例不開云云如何、若是依無戶指爲風被吹開歟、但先例如何、案內前院可示者、　十日丙申、早旦令申神殿戶事於前齋院、御返事云、御坐彼院之間、作戶前立大御厨子、總無開時、去永祚元年大風、殿內所々皆破損而作戶不動、又不知戶指有無、神殿內相當祭夜外無人入見、其夜依無指事、人々不倚作戶下、仍不見戶指有無也、故馨子齋院女房前年語云、作戶總不開、故大齋院(選子)庭外作戶開、其後有諸門兵亂云云、但年來依以戶指摺固不開歟、然〻加修理之間、依不作具戶指、自然爲風被吹開歟、先例

有不例事之時者、令卜筮知其吉凶、可被行御卜歟者、參殿申此旨等、仰云、以指固戸自然開、可爲怪也、無戸指直推開戸爲風被吹開、更不可怪奇、尋問彼戸體可左右歟、

〔玉海〕承安四年十二月六日己未、藏人左衛門權佐光雅、爲關白使來、余相逢、光雅云、住吉社大海神殿寸法相違事出來、子細在國司申狀、別在狀解何樣可被行哉、

件事子細神殿宇長、如長承覆勘文者、三丈六尺也、而仁平神殿當時神殿三丈七尺五寸也、相違長承例、今所造之神殿任彼仁平例、同三丈七尺五寸也、而舊殿神殿其條相重者煩于造營、彼船之置設宮所於前後、彼是相替造營、今度奉造後宮地度也、撿仁平覆勘文之處、三丈六尺也、同長承見在之法與覆勘之正文、

已上參差問社司之處、每度有一分之增、仍寸法相違歟、此條无其謂、長承以後、令有一分之增所積三分歟、今有一尺五寸之相違、專不當之申狀也、又社司申狀云、於今度可退新宇柱跡、工等申曰、可壞舊殿蔣、是皆權議、神慮有恐者、抑撿天仁以往覆勘文之處、皆以同寸法三丈六尺也者、申云、先被尋先例於外記、猶被問子細於社司公再、仁平國司右大辨後還等、可被計行歟、但仁平以往覆勘文一度、而无載三丈七尺五寸之例、奚知仁平神殿所誤造也、然者經代々覆勘文可被縮寸法歟、愚意之所及如此、已上猶尋搜子細、事若不決者、可被訪占卜歟、

〔壬生家文書〕鳥文殿

勘申薗韓神社注進可被造進神殿御鏁貳具例事

右件例宜令勘申者、引勘文簿之處、件鏁不被修造神殿之時、臨時被造進之例無所見、但去永久二年八月、大原野社神殿四字金物幷鏁等、爲盜人被放取之由彼社司所言上也、仍以榮爵一人敘料可造進之狀、同三年六月十八日被下宣旨、隨以件敘料被造進既了、仍勘申、

治承二年五月十一日　　右史生秦信久

中原國行

左史生紀守康
安倍真友

〔玉海〕治承三年二月二日、日吉社司等解申請天裁事、請特蒙天裁被改造大宮神殿已下舍屋等狀、檜皮葺三間三面神殿壹宇、

〔百練抄九安德〕壽永二年八月廿一日、武士亂入大原野、打開神殿、取御體鏡四枚并神寶等、

〔百練抄十三後堀河〕安貞二年四月五日、日吉大宮遷宮也、近江國司清綱造進神殿云々、

〔應永十四年春日社造替日記〕同日(月○十一七日)隨堯殿ノ方ヨリ神殿ミガキ奉ル、木賊百連ノ内、現木賊六十連、殘四十連、代四百八十文、コレヲ常住代印請取テ、三方ノ神殿守ノ中ヘ出候、若宮方ノ分、現木賊十二連、用途九十二文、(此八連分也)是ヲ請取テ兩常住支配スル、九日(午剋)神殿ヲミガキ奉ル、兩常住(宗專、宗忠、)沙汰也、立エボシニ、カリギヌ、大口、大カタビラヲキル、チハヤヲカク、手袋足袋ヲスル、但御タナニテスル、ソレマデハキヨキゲタヲハク、

〔古今著聞集一神祇〕基隆朝臣周防國をしりける比、保安三年十月にかたりけるは、彼國にしをの明神とておはします、神主宇龍の事有て論じけるもの有とて、神田をかりとらむとしければ、寶前より蛇三百計出たり、其内に角ある二つありけり、しばしありて入ぬ、其後猶からむとしければ、烏數萬とび來りて、神田の稲の穗をくひぬきて、みな神殿の上に積けり、ふしぎの事也、

〔百練抄四一條〕永延元年、今年改造北野寶殿、(月日可尋、上月一日下右記、昨日暴風雷雨之間、北野天神於寶前太后宮寄託異與傳、北野宮寺緣事云々、有歟、)

〔中右記〕元永二年十一月朔日癸卯、有御使早可參者、乘車參院、(白河)御所三條烏丸亭、以消辨被仰云、賀茂下御社、此戌剋燒亡了、火出從庫中、及寶殿之由、只今禰宜惟長祝惟助馳參所奏也、誠驚思食、傳問子細可申者、依仰問之處、今日依相嘗供新嘗了、其後各歸家休息之處、御社方有火、驚馳參見之、火炎廣及、已付正殿、奉取御正體、渡御經所了、其後中門廻廊樓等以爲灰燼也、

〔百練抄六崇德〕保延六年正月廿三日、石淸水八幡宮寶殿、幷廻廊寶藏若宮悉以燒亡、貞觀以來無此例、聖御筥奉取出、自餘寶物皆爲灰燼、

〔春日權現驗記十一〕永萬二年七月廿三日、春日の一鳥居のまへにふだをたてたり、その狀にいはく、

寺中の大衆蜂起不知何事、然間參詣御社、四所の寶殿のきたのはしらの戶開たり、內に有人音、而寶殿のうちより雲聳きて往、南方本宮の邊に山と等しき長けある人あり、人に誰人ぞといへば、人答云、彼は春日大明神令還本社、御むかへの人也、板本の御送に御すと云々、其雲聳て本宮の南より往辰巳の方、其中尤おをき榊の枝みゆ、三宮とおぼしきに云く、希有なる幼き人に世を預てと云て、寶殿よりおしをさしおろして御坐す、此とき御寺の人愁歎して或流淚し、或いかゞせんずなどいふ、夢中このことをかたる人、自も他も流淚無限、此事方々雖有恐、神明の告有其由、仍注狀如件、廿二日夜夢想

永萬二年七月廿三日

とかきたり、

〔源平盛衰記十三〕入道信嚴嶋幷垂跡事

抑嚴嶋明神ト申ハ、推古天皇御宇癸丑端正五年十一月十二日、內舍人佐伯鞍職ト云者爲網釣、恩賀島ノ邊ニ經回シケルニ、西方ヨリ紅ノ帆舉タル船見エ來ル、船中ニ瓶アリ、瓶ノ內ニ鉾ヲ立テ赤幣ヲ附タリ、瓶ノ內ニ三人ノ貴女アリ、其形端嚴ニシテ人類ニ同ジカラズ、託宣シテ云、吾爲百王守護、離本所近王城、御寶殿幷廻廊百八十間造立シテ我ヲ嚴嶋大明神ト崇ベシト宣ヘバ、(下略)

〔三長記〕建仁元年七月廿七日乙亥、橘盛家申、嚴倉院大多羅志女寶殿複勤事、兵衞府功

〔春日御託宣記〕去ル建仁年中ノ比、上人、(中略、解脫、)又申曰、我住所ニ御寶殿造テ勸請シ奉ラムトキ、必

御身ヲツケテ住セシメ給ベシ、

〔明月記〕嘉祿元年十一月八日、伯資宗朝臣消息之次、去月廿七日、廣田社寶殿以下炎上、假殿經營云云、諸社如此事理尤可然歟、可歎了、

〔花園院御記〕正和三年五月一日、今日聞、新日吉社武士與日吉神人等有喧嘩事云々、○中略又武士破却新日吉社寶殿云々、希代珍事歟、

〔太平記三十九〕自大元攻日本事

八幡御寶殿ノ扉啓ケテ、馬ノ馳サル音、轡ノ鳴音、虛空ニ充滿タリ、

〔古今著聞集一神祇〕前攝津守橘以政朝臣、わかくより賀茂につかうまつりけるに、四品の望につかれて、思あまりて申文を書て御戸開の夜參て、何となき願書のよしにて、社司をかたらひて御寶殿にこめてけり、

〔和歌童蒙抄二〕鹽竈

ミチノクノチカノシホガマチカナガラカラキハキミニアハヌナリケリ

昔ミチノクニノカミ、ジホガマノ明神エチカヒ申コトアリテ、ヒトリムスメアキテマキリテ、カノ神ノ寶殿ノウチニオシイレテカヘリケリ、コノムスメナキカナシビテ神殿ヨリナシイデタリ、チヽコレヲミケルニ、心マドヒニケリ、ソレヨリコノ神ノ命婦ハ、ミヤブカナノカヅラムカギリハ、オヤコタガヒニミユマジトチカヘリ、年ニヒトタビノマツリノヒナラヌカギリハ、ヒトニアヒミエズ、件ノムスメノ子孫イマニツギテソノ命婦タリ、

〔石淸水八幡宮護國寺略記〕三所大菩薩移坐此男山峯、即奉安置御體、爲後代緣起事

右行敎俗姓紀氏、專爲業修行、久送多年矣、而間恒時欲奉拜大菩薩也、爰以去貞觀元年、參宇佐宮、○中略以七月廿日、京上、八月廿三日、到來山崎離宮之邊、寄宿之間更倍信心所願申云、伏蒙示

現者、同廿五日夜被示云、吾移坐近都、爲鎭護王城也者、卽撰何處可奉安置寶體、願垂示現給云云、以卽夜示宜可移坐之處、石淸水男山之峯也、吾將現其處者、〇中略　爰同以九月十九日、下勅使令實撿點定參上、次下宣旨木工寮、令勸申御殿六宇材木支度等、卽以寮權允橘良基令造立六宇寶殿、三宇正殿、三宇禮殿、已畢、奉安置三所御體畢、

〔嚴島圖會　一〕大宮寶殿、明神鎭座の正殿をいふ、桁十二間、梁五間五尺餘、

客人社寶殿、大宮の右三十間にあり、西南にむかふ、桁七間餘、梁四間五尺、

〔和漢三才圖會　七十七播磨〕靜窟　在印南郡生石村

神號稱生石子大明神、神殿號石寶殿、天女用石所造也、　其高二丈六尺、經營甚奇、而非可人力致者、　峯相記云、二神顯坐時、天女降擬造社、旣及黎明也、不暇起立、遂上天去耳、卽今石寶殿是也、

〔播州名所巡覽圖會　三〕石寶殿　靜巖室と稱す、生石子村、山中殿にあり、石殿を以て神體とす、大さ二丈三尺四方、高さ二丈六尺、すべて社壇の形に作りたるを橫に倒したる也、故に屋根は土臺とも橫に見えて、拜する人は寶殿の底に面す、一石を以て作りなしたるは、元より此地は近國の名物、龍山石を產ずる山にして、寶殿も一箇五十餘丈の石山の中を切拔、卽ち切拔たる所にて造り、其所に倒し捨たるさまなり、土臺と屋根との間は四方ともに切かけて挾く、上に成りたる所には自ら土留りて松を生ず、四周に水の溜りたるは是掘て窪ければなり、

〔百練抄　七近衞〕仁平三年九月、近日所々立社壇、家々行淫禮、停止之由宣下、

〔春日權現驗記　五〕ある時社壇にまうで侍けるに、夜雨蕭々として、社壇寂々たりければ、つねよりも心すみて、いつとなく此世のために神諂することのはかなさよとおもひつゞけゝるに、神口口御殿のかたにけだかき御聲にて、菩提の道も我山の道ときこえけり、隨喜の淚いかばかりかとおもひやる袖さへともにぬれ侍り、

〔春日權現驗記十七〕範顯やがて禪定院に侍ける桴の木樣を申出て、其まゝに作て錦の袋に入て、本並夢の狀にあひぐしてつかはしたりければ、同年○建保五年二月十六日、近與樂人どもをかたらひて、社壇の寶前にて古の桴をもて鉦を奏す、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年十一月廿四日、辰剋鶴岳内三嶋社壇鳴動、仍有御占、依神事穢氣不淨也、可被愼御病事之由占申之云々、

〔春日三十講最初御願文〕厥聞先就寶乘院之蓮宮、專讚法相宗之花文、積率六十口於社壇、分展三十講之梵筵、每日之儀、希代叡念也、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕十二月十四日より德治元年になる、山門は連々の衆訴何も是非の裁許にあづからず、年序のみつもり行ほどに、神事も佛事もまたからざれば、神慮も又いかゞなり給ひけん、昔よりいまにいたるまで、おほくの猿どもの生ずるも死するも、そのかたちを社壇に現せざれば、是ぞ誠に垂跡のしるしなりけるとおもひ侍るに、同二年の夏、數十匹の猿ども社壇にたふれふして死骸を現じ、神殿をけがしけり、

〔神皇正統記後醍醐〕官軍なほ心をはげまして、男山に陣を取て、しばらく合戰ありしかど、朝敵しのびて神壇をやきはらひしより、事ならずして引しりぞく、

〔太平記十七〕立儲君被著于義貞事附鬼切被進日吉事

新田左中將○義貞潜ニ日吉大宮權現ニ參社シ給テ、閑ニ啓白シ給ケルハ、臣苟モ和光御願ヲ憑テ日ヲ送リ、連綿ヲ結ブ事日已ニ久シ、願ハ征路萬里ノ末迄モ、擁護ノ御眸ヲ廻サレテ、再大軍ヲ起シ、朝敵ヲ亡ス力ヲ加ヘ給ヘ、我縱不幸ニシテ、命中ニ此望ヲ不達ト云共、祈念冥慮ニ不違バ、子孫中ニ必大軍ヲ起ス者有テ、父祖尸ヲ清メン事ヲ請、此二ノ内、一モ達スル事ヲ得バ、末葉永ク當社ノ檀度ト成テ、靈神ノ威光ヲ耀シ奉ルベシト信心ヲ凝シテ祈誓シ、當家累代ノ重寶ニ鬼切ト云大

刀ヲ社壇ニゾ被籠ケル、

〔應安二年春日卅八所造替記〕西遷ノ宮ノ後、御社壇カヾヤク計御座アル間、皆々參詣也、

〔廣瀨社緣起〕夫當社者、人皇十代崇神天皇御宇、大和國廣瀨郡河合村出現給、所以者何、彼里長藤時門外、異人著冠束帶而化來、其容貌端正、靈香甚薰、然而託里長曰、汝家北有一龍池是號水足池其深厚八億由旬也、其底下龍宮城也、是池上可造立社壇云々、藤時答言、冷水八百會也、何爲可建立社壇、

〔走湯山緣起五〕權現女體事、幽玄而人不奉知之本地彌陀如來、金春造立御祭所、本是女體所安社壇也、

〔多聞院日記略〕元龜元年三月十九日、比叡山へ上、〇中略山王廿一社拜見、社壇ノ結構警固、雖參詣人モ希ニ社人社僧モ不見、神サビタル體也、

〔春日權現驗記一〕承平七年二月廿五日、亥時ばかり神殿鳴動して風吹、子時に橘氏女御寶前にて聲をはなつ、神殿守ならびに預などをめしわつむれば、己つゝしみおそれて候、

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年正月一日壬申、卯剋、武衞御參鶴岳宮、被奉神馬一匹、佐野太郎忠家引之、其後於寶前、令法樂法華壽量品給云々、

〔明月記〕嘉祿元年十月十七日、兵部〇菅原在高來談之間、〇中略又云、資賴九日剪寶前〇一本社後欅木、翌日有此事被罰云々、近日剪社頭舊木、殊勝之櫻在其中云々、

〔當宮緣事抄〕當宮〇男山八幡宮寶前已下、小神殿堂塔佛閣舍屋等修造事、奏聞之處、任先例支配、社務以下祠官幷女子後室甲乙人等、別納知行之地、急速可致催沙汰之由被仰下之旨、右大將殿御消息所候也、恐々謹言、

二月十八日〇延慶二年　散位敎宣

謹上　八幡撿校法印御房

神庫

〔應氏六帖 上 宮室〕神庫(ホカラノクラ)

〔軍防令講義 一〕供行戎具等、並貯當色庫、

庫の制は、今云土藏にあらず、板倉にして床の高さ大抵七八尺、柱は五尺間位に立て、その上に尋常の屋造り、四方に戸を設て風の障りなきをむねとなし、屋根は瓦葺にして雨露を禦ぐを専とす、または校倉(アゼクラ)とて、五寸角ほどの材を角違にかさねて、材と材との間より風の通ふやうにかまへしもあり、階は一方に設けて、常には階をひきてみだりに人の登らぬやうに定めたり、今も山里などは火の災は自ら遠く、盗人は猶更のことなれど、霧濕の常にとぢこめて、穀にもあれ、衣服にもあれ、黴濕にをかさるゝがうるさければ、床高く作ることゝ聞もし見もすることなり、海外の琉球、または八丈島などの庫も又然りとぞ、これをホクラと云は、平常の家居より高く太く秀でたれば、やがてホと云語を負せしなり、

〔日本書紀 六 垂仁〕八十七年二月辛卯、五十瓊敷命謂妹大中姫命曰、我老也、不能掌神寶、自今以後、必汝主焉、大中姫命辭曰、吾手弱女人也、何能登天神庫耶、神庫、此云保玖羅、五十瓊敷命曰、神庫雖高、我能爲神庫造梯、豈煩登庫乎、故諺曰、神之神庫隨樹梯之、此其緣也、　八十八年七月戊午、詔群卿曰、朕聞新羅王子天日槍初來之時、將來寶物、今在但馬、元爲國人見貴、則爲神寶也、朕欲見其寶物、卽日遣使者、詔天日槍之曾孫淸彥而令獻、於是淸彥被勅、乃自捧神寶而獻之、○中略唯有小刀一、名曰出石、則淸彥忽以爲非獻刀子、仍匿袍中而自佩之、○中略則天皇謂淸彥曰、其神寶之豈得離類乎、乃出而獻焉、皆藏於神府、然後開寶府而視之、小刀自失、

〔日本書紀 二十九 天武 下〕三年八月庚辰、遣忍壁皇子於石上神宮、以膏油瑩神寶、卽日勅曰、元來諸家貯於神府寶物、今皆還其子孫、

〔鎭所謂 一〕石上社桙佐伯二殿

臨時祭式ニ、凡石上社門鎰一勾、匙二口、納官庫、臨祭在前、遣官人神部卜部各一人、開門掃除供祭、自餘正殿并伴佐伯二殿、各一口同納庫、不得輙開トアリテ、コノ伴佐伯ノ二殿古來明說ナシ、按ズルニ、永久寺所傳石上緣起云、所謂石上社所納神寳、稱天神庫者、上古物部氏守護之、或布留宿禰爲神主、而延曆以後、伴佐伯兩氏守護之、分衞神殿、在正殿左右、左者伴氏、右者佐伯氏掌之、延喜式所謂、伴佐伯二殿是也、今ハ右殿ノミ形ノ如ク殘テ、寳劍ヲ唐櫃ニ納テ藏シ、祭日コレヲ出ト云リ、

〔類聚三代格一〕太政官符

應收納神庫充用祭料氣比神宮封租穀事

右得神祇官解偁、彼神宮司大中臣安根解偁、撿案內、太政官去延曆十二年二月廿七日下越前國符偁、宮司大中臣魚取解偁、封租穀須勘納神庫充用祭料、而國更徵納官庫、充用他色、臨彼祭時、不肯下行、度々祭事由其闕怠、望請勘納神庫充用祭料、謹請官裁者、右大臣宣、依請、國依符旨行來旣尙矣、而去弘仁元年、介橘朝臣永繼與宮司有意相爭、專任國行、自爾以後積習爲例、充用遠郡、運漕之間殆過祭期、神事疎略大槪在茲、貢神之物豈可如此、望請徵納神庫、以省申請之煩者、官撿案內、件租穀專爲神用、不充他色、然則納於官庫、還無公益、納於神庫、尤有便宜、望請重仰國宰、據准舊例、徵納神庫、以充祭料、謹請官裁者、右大臣宣、依請、但至于出納件物、國司宮司相共行之、

元慶八年九月九日

〔日光山志五〕三神庫

三棟亞春造り、二王御門を入て、右の方に相雙ぶ、ともに總朱塗、銅葺、滅金御紋、其餘かなもの皆滅金、花鳥草木の極彩色、柱上は金襴卷、一庫每に三扉、前に椽側並に階を設く、一の御神庫外、長押上破風下に、鼠色と白色との大象を彩色に圖せり、恰生たるが如し、大さ五尺ばかり、是は探幽法印

の下給なりといひ傳ふ、

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、〇中略妖氣既晴、無復風塵、建都橿原、經營帝宅、〇中略當此之時、帝之與神、其際未遠、同殿共牀、以此爲常、故神物官物亦未分別、宮內立藏、曰齋藏、令齋部氏永任其職、〇中略至於長谷朝倉朝、〇雄略秦氏分散、寄隷他族、秦酒公進仕蒙寵、詔聚秦氏、賜於酒公、仍率領百八十種勝部、蠶織貢調、充積庭中、因賜姓宇豆麻佐、〇中略自此而後、諸國貢調、年年盈溢、更立大藏、令蘇我麻智宿禰檢校三藏、齋藏、內藏、大藏、

○按ズルニ本朝事始ニ、庫藏、孝昭天皇二年庚寅、始建庫藏、以官物與神物同居安之、蓋依神勅也トアリ、此說本ヅク所ヲ知ラズト雖モ、此ニ附記シテ參考ニ供ス、

〔撮壤集神上〕寶藏

〔神道名目類聚抄宮社〕寶藏御倉、神庫、神寶又ハ奉納ノ神物ナド納置所ナリ、

〔明月記〕嘉祿元年十月廿五日、午時兵部〇菅原在高來臨、〇中略兵部今日雜談之中、雖无益事注之、下官先年於故殿見額櫃と云物、大內以下所々諸寺額每數被移置、予申云、是被寫何所本哉、仰云、是皆法性寺殿〇藤原忠通御本也、當時在執柄當時關白許歟、先年邦綱卿被出來、入道殿所被寫也、今日事次語云、伊經〇世尊寺伊行子傳先祖額本事、全非父相傳、定信〇伊行孫成賀茂上御社寶藏、伊行〇定信子不傳之、邦綱卿聞此事、召神主重保被令出之、非神物只私物也、仍私持之、全非法性寺殿御物、而依優其家先祖依書等授與伊經之、入道殿下更不可持給者、

〔春日祭舊例〕弘安六年二月十一日、御祭、〇中略御前指圖等、依不參不明分、

抑御供以後、各參御寶藏、正預祐家參開御寶藏、奉出神寶、副役權官能道氏人祐篤神人等、持參神寶神前、

〇中略

弘安六年十一月八日、春日祭、〇中略四ケ度御供備進之後、打後夜鐘、其後兩總官以下權官等參御寶

藏、正預禰家幷權預能道入御寶藏、奉出神寶事如例、

〔康富記〕文安元年四月十三日壬辰、是日辰剋計、北野天滿宮社頭拂地炎上、（中略）今日於寶藏者、雖不回祿、當時寶藏狹少也、神輿二基難被安置歟、將又今日儀相替先々、有惡黨之怖畏、仍先暫被奉安置僧坊松梅院者也、

〔皇大神宮儀式帳〕寶殿二宇、（長各二丈一尺、廣各一丈四尺、）並搏風上、

鏁二具、（打立四隻、）目塞四枚、

戶具（鎰一勾、鏁六勾、雌立二枚、引手二勾、徑四枚、戶坏四枚、蝙目釘十二隻、）

臥堅魚木各八枚

瑞垣一重（長道卅九丈、高一丈、）

宿衛屋四間（長各二丈）

〔延喜式四伊勢大神宮〕六月月次祭（十二月准此）

物忌內人等、昇幣帛案入奉置瑞垣內財殿、

凡大神宮廿年一度、造替正殿寶殿及外幣殿、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年八月辛卯夜、有盜燒伊勢大神宮正殿一宇、財殿二宇、御門三間、瑞籬一重、

〔止由氣宮儀式帳〕一大宮壹院

寶殿貳宇（長各一丈六尺、廣一丈二尺、高一丈、）

〔鵝嶺雜日記〕嘉承元年四月十二日癸酉、今夜丑刻、賀茂別雷社、東西寶殿經藏等燒亡、

〔三長記〕建永元年七月廿一日庚子、去比二位殿（春宮御母儀也）以錦一段銀笛被奉春日社、以權神主泰宗奉納之、（中略）傍輩云、事已嚴重也、可納寶藏、仍納了、

〔壬生家文書[illegible]〕鴨御祖社司等言上

欲早被行御占今月十四日未剋西御寳殿登階高欄東脇柞木下金花開事
右件金花、任例爲被行御占言上如件、
文永六年六月廿日
祝正四位上鴨縣主光家
禰宜正四位上鴨縣主祐俊

勘申鴨御祖社司言上西御寳殿登階高欄東脇柞木下金花開例事
治承二年九月一日、酉時、賀茂末社若宮社御殿、金花開、弘長元年十二月廿七日、權中納言源定實卿著仗座、被行軒廊御卜、是鴨御祖社司言上、去十一月八日酉時、西寳殿御戸兩方扉幷柱等銀花開事也、官卜云、依本所神事違例不淨所致之上、怪所可有口舌事歟、寮占云、依神事違例不淨所致之上、從怪所幷震巽方、有口舌鬪諍事歟、
右文請所注如件、仍勘申、
文永六年七月二日　大外記淸原眞人良季勘申

〔倭名類聚抄十三調度〕寳倉　漢語抄云、寳倉保久良　一云神殿、

〔箋注倭名類聚抄五調度〕按垂仁紀神庫、本注云、神庫此云保玖羅、天武紀神府同訓、蓋庫、神寳之府庫也、其制高峻、秀於尋常府庫、故云保久良、與神武紀浪秀訓奈三保、又頴穗訓保之保同、漢語抄用寳倉字者、假以寳爲保久良之保、恐非、又按、保久良、後世轉爲叢祠之名、拾遺集小序、稻荷乃保久良、綸詞花集、大鳥王子乃保久良是也、故云、一云神殿也、又轉爲云保古良、見爲忠崩百首耻類歌、

〔大神宮儀式解四〕保久良は秀庫也、保は稱美の辭、庫は坐の義也、秀を保とよむに、[illegible]津國、又やまとは國の眞秀[illegible]いふ類也、金を久良とよむに、國金入金藏、和名抄、[illegible]上を加美佐安佐久良といふたくびなり、垂仁紀八十七年神庫、此云保久羅、和名抄漢語抄云、寳倉保久一云神殿、又唐令云、殿電反、和名止乃、宮殿名といへり、

〔伊呂波字類抄保地儀〕寳倉ホクラ一云神殿庫

〔類聚名義抄 九〕秀倉 ホクラ 一云神殿 寶倉 或木

〔三代實錄 三十四 陽成〕元慶二年七月廿六日己未、大和國廣瀨龍田兩社、造立倉各一宇、爲納神寶也、

〔日光山志 五〕銅御倉。

東の御廻廊に接す、外の廻りは總銅にて裹たる御倉ゆゑに名附たり、御寶物數品納置るゝ所なり、

〔鹿嶋志 上〕神寶、○中略毎年七月七日、寶倉を開きまつりて虫干の神事あり、

〔神道名目類聚抄 一 宮社〕幣殿　參詣ノ人奉幣ノ時、又ハ獻上物ナド、此所ニツイテ奉ルナリ、

〔古今神學類編 二十 諸院〕幣殿 寶藏

二所大神宮ニハ、正殿ノ東西ニ寶殿アリ、是ヲ東方殿、西方殿ト稱シ、又ハ寶基本記ニハ寶藏ト云ヒ、江次第ニハ財殿ト云ヘリ、東寶殿ニハ、禁裏ヨリノ幣帛ヲ奉納、此幣帛トハ、錦綾ノ類歟、西寶殿ニハ、是モ禁裏ヨリノ幣物、御鞍等奉納ト也、世人ハ是ヲ左右ノ相殿也ト謂ヘリ、相殿ノ御事ハ前ニ如記、又幣殿ト云ハ、此東西寶殿ノ外ニ、荒垣ノ內乾方ニ當テ建リ、是攝家其外高貴將軍家ヨリノ、御幣物ヲ奉納スル御殿也トゾ、一名外幣殿トモ云ニヤ、幣物トハ其品非一、皆是神宮奉納ノ物ノ總名也、幣ノ字ミテグラトモ、ニギテトモ、マヒナヒトモ訓ゼリ、內宮儀式帳ニ、寶殿二宇、長各二丈一尺、廣各一丈四尺、幣殿一院、殿一宇、長一丈五尺、弘一丈二尺、高八尺、一外宮儀式帳ニ、寶殿貳宇、長各一丈六尺、弘一丈二尺、高一丈、幣帛殿壹宇、長一丈、廣一丈二尺、高一丈、トアリ、但シ外宮ノ幣殿長壹丈二尺タルベキニ、此記文疑アリト也、諸社ノ如キモ、太政官符寶龜二年ノ定メ、大社三間檜皮葺、幣殿一宇、高一丈一尺、板敷戸一本、在ニ中社三間板葺幣殿一宇高七尺、戸一本、トアリ、而シテ小社ニハ無之、○中略諸社ノ寶倉ニモ、上津方ヨリノ御寄附アルノ外ニ、如クハ遠國他境ヨリノ奉納ノ時ハ、物ニヨリテ其詔刀師職ノ宅ニ預ル事アリ、又直ニ寶庫或ハ內陣ニ奉納スベキ物アリ、其品其事物ニヨリテ定例侍ラズ、但シ內陣ニ納ン物、

拜殿

小綠ノ沙汰ニテハ否ノ事歟、是故ニ庫貧アレバ也、

〔皇大神宮儀式帳〕幣殿一院

殿一宇、長一丈五尺、弘一丈二尺、高八尺、　玉垣一重、長十六丈二尺、

〔中右記〕元永二年十一月朔日癸卯、以頭辨被仰云、賀茂下御社、此戌剋拂地燒亡了、火出從庫中及寶殿之由、只今禰宜惟長、祝惟助、馳參所奏也、　二日甲辰、後聞、神人國貞ガ從者男、取松火入幣殿、出了閉戶、須臾而火從幣殿出來、定知件松之餘火、落留付幣紙出來也、

〔春日權現驗記七〕興福寺權別所範顯寺主、延保五年正月十二日寅時の夢に、春日社に參詣して、幣殿の前の藤のもとに侍て、御殿の方を拜すれば、(下略)

〔百鍊抄十三後堀河〕安貞二年十月七日、朝間東風吹雨降、及未剋坤風猛也、(中略)神祇官御幣殿、異賢院四足等顚倒了、

〔快元僧都記〕天文四年五月晦日、大工四人自小田原歸宅、奈良大工御寶殿(八幡宮)御修理事被下知、其武內社玉繩番匠大工、幣殿御格子鎌倉大工、拜殿以下伊豆番匠大工大部可仕分歟云々、

〔嚴島圖會一〕幣殿(正殿の前にあり、桁三間二尺、梁二間五尺、)

〔運步色葉集〕拜殿

〔和漢通用集天地〕拜殿(ハイデン)神前

〔和爾雅二居處〕拜殿(ハイデン)(神前拜之所也)

〔神道名目類聚抄一社〕拜殿　諸社ノ拜殿ハ、官幣使ノタメノ設ナリ、

〔古今神學類編二十二〕拜殿(殿齋、神樂殿、儀殿、勅使殿、)

寶龜二年二月十三日ノ太政官符曰、大社五間、茅葺拜殿一宇(高八尺)五間板葺幣殿一宇(高八尺)中社三間、板葺拜殿一宇(高七尺)五間同幣殿一宇(高尺)小社三間草葺拜殿一宇(高七尺、)三間板葺幣殿一宇(高七尺)ト

見エタリ、而シテ勅使殿ノ事無之、想フニ諸社ノ勅使殿ト稱スルハ、直會院ノ俗傳ナルニヤ、又ハ勅使參向ノ時ハ、件ノ勅使殿ヨリ拜殿ニ候シ、宣命等畢テ、又勅使殿ニ退下アリテ、神主祝部等陪從シ、直會饗饌ノ儀式アリテ事訖ル古法也トモ云ヘリ、諸社多クハ直會殿斷絶シテ、年中行事ノ直會饗饌ハ、皆拜殿ニ於テ勤之耳也、又諸社ノ神家拜殿ヲアヤマリテ舞臺ト稱ス、是モ舞殿斷絶ノ神社ハ、拜殿ニ於テ神樂ヲ奏シ、巫女ノ袖振ル事ナレバ云フニヤ、舞臺トハ俗ニ臺敷(ダイシキ)トモ稱シテ、其本ハ舞殿ノ濫觴、天磐戸ノ前ニテ天鈿女命俳優シ給フ時ニ至テ、覆槽置テ舞玉フニ事起レリ、以後舞臺トハ成レルト也、常ニ神樂殿ト稱スル則舞殿ノ事也、

〔廣隆寺來由記〕鎭守三十八所

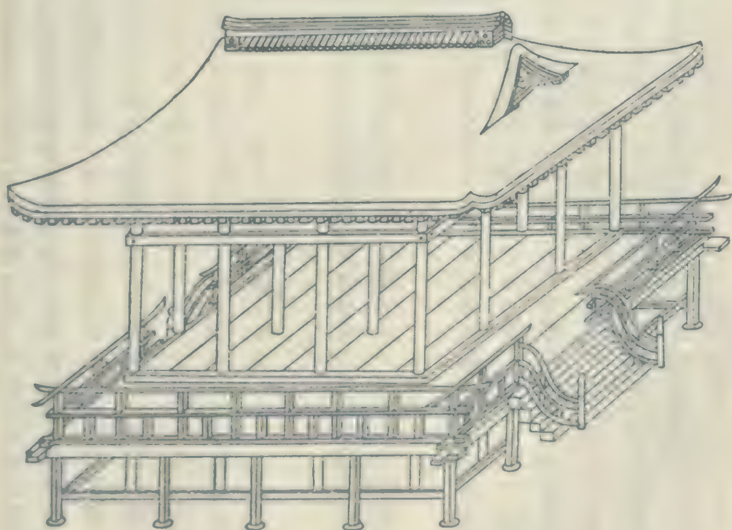
醍醐天皇延喜年中、大別當增命、以三十七所護法神之繪像安置一社、永爲鎭守、鳥羽院御宇、加秦大夫、爲三十八所也、拜殿。一宇、供花堂一宇、〇中略

木島明神、〇中略拜殿。一宇、御供所一宇、

〔春日權現驗記〕四三條内大臣〇公數重病をうけられたりけるに、松林院の教縁僧正公圓法橋を春日社へまゐらせていのり申されける、おの〳〵御社にこもりて日來へにけり、曉京へのぼらむとしけるに、若宮の拜殿にて巫女一人舞けるが、庭にいでゝおほくの人のなかに、この兩人につげていはく、かの祈申事はたすくべけれども、身氏人として大位にのぼりながら、あへて我をあがめず、尤遺恨也、しかあればこのたび命をめしをはりぬといふ、兩人あやしみながら、その曉上洛するに、京の使は道にあひて、すでに事され給ぬと申けり、

〔高倉院嚴島御幸記〕治承四年になりぬ、〇中略いつくしまへ御幸あるべしなどさゝやきあひたるも、ゆめのうきはしをわたる心地するに、〇中略廿五日〇三月の中の時に、おきの國うましまといふところにつく、〇中略廿七日、今日はぬのゝ御淨衣をぞめしたる、國々の守どもまゐらせたるもの、

（年中行事繪巻 城南神祭所 獻拜殿圖）



宮のまへにはこびおく、廊の前に樂屋をつくりて、拜。殿。をたてたり、

〔後鳥羽院熊野御幸記〕十二日〇建仁元年十月遲明參御所、〇中略次出濱參、爲代王子、此所爲御小養御所、無入御、此。拜。殿。板每度被注御幸人數、先云々、右中辨召番匠板放天カンナヲカク、書人數天如元令打付之、建仁元年十月十二日、

〔新古今和歌集十九神祇〕熊野へまうで侍しに、いはしろの王子に、人々の名など書付させてしばし侍しに、拜。殿。のなげし。に書つけ侍し歌、　讀人しらず

いはしろの神はしるらんしるべせよ賴むうき世の夢の行すゑ

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年二月廿四日、武藏國六所宮拜。殿。破壞、有修造之儀、武藤左衛門尉資賴奉行之、

〔弘安四年春日入洛記〕木ヅドノニモ御殿ナシ、御供モマイラズ、拜。殿。舞女御供申サル、トイヘドモ、御テンナケレバ、カリヤイゲモナキニヨリテマヒヲバマハズ、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕廿八日淨衣の儀式にて、御宮廻りわたらせ給ひて、十禪師拜。殿。にいらせ給ふ、大衆また御前にて延年仕りければ、拜殿の階下には公卿候じ、〇下略

〔親長卿記〕文明三年五月廿二日、詣悲田院彼寺邊北野天神勸請、或仁卅六人歌人可書進拜。殿。寸法所望之由令申之間、罷向見廻了、

〔回國雜記〕同〇文明十八年六月十六日、〇中略大原までみな〳〵うちおくりに來侍る中に、乘々院法印經親神明の拜。殿。にて、わりごなど携侍りて數刻輿をもよほし侍りき、此社頭は伊勢にてわたらせ給ひけるとなん、西山の大原をおもひ出て、神殿に法樂し奉りける、

〔親長卿記〕明應二年十月七日、參詣鞍馬寺、八日於畑枝八幡拜。殿。有一獻、

〔快元僧都記〕享祿五年六月一日、神輿三基飾拜。殿。奉安置之處ニ、諸人ノ參散錢二三千匹計有之云

云、廿一日迄蟄中、

〔紹巴富士見道記〕廿六日〇永祿十二年二月に門前椰色寺〇伊勢給庵正法寺前花見せらるべしとて、後の山へ登る程十町に餘り、岩屋にこそあれ、羽黑影向の跡と讃給ひて和尚、〇大雄寺大源

年々に巢がへる鷲の山もとやおとす羽黑の餘波成らん、と書付て拜。殿。よりくだるに、靈雲見、桃花悟道もかゝる所からとや、

〔出羽國風土略記六飽海郡〕大物忌神社、月山神社、〇中略

舊用したる上下、兩社〇大物忌、月山、の拜。殿。に有しに、寶永年、兩社炎上の時に燒失したりとぞ、

〔日光山志一〕本宮權現

本社拜。殿。銅葺、總赤塗、

〔日光山志二〕新宮拜。殿。

拜殿三佛堂と相雙ぶ、六間に七間半許、四方緣あり、前後に扉有、四方上緣、丹塗、銅葺、大床舞臺造、前後に石階あり、

〔日光山志五〕御拜殿

御唐門より内は、唐人の具に拜覽すべき所ならねば知がたし、階下にて拜み奉る、折から其莊嚴なる事、十が一もこゝろに晴じがたく、遍體へ聞けるも御深秘なれば大概を誌せり、御。拜。殿。御正面、およそ拾一二間許、横間四五間程なり、向拜下迄、御唐門内石敷なり、衆庶此石敷の所にて拜み奉ることとなり、備御石敷の向は御階段なり、五級一面に滅金かなものにて張詰たり、上に御鰐口三つ掲たり、皆金色なり、御濱椽幷高欄ともに黑塗色にて、御内の御柱向は總金だみ、外なる御長押うへは素木鳳凰の高彫、金彩色、御唐戶黑塗色、金の唐草蒔繪、正面の御本間、御天井折揚二重の格天井、其内へ岩紺靑にて丸龍の彩色、其形皆異なり、御内承塵上に三十六歌仙の御額を掲玉ふ、

和歌は後水尾院の御宸翰なり、畫は土佐將監が筆といふ、東西の御襖戸、東は金泥地にして竹に麒麟の彩色、西の方は獅子の繪なり、探幽の筆なりといふ、御拜殿の東の御門を御聽聞所と唱へ、將軍家御座の間と稱す、御天井天蓋折揚造り、眞中に伽羅木にて、葵の御紋一ッを造れり、御間の堺には御簾を垂たり、又御間の東の羽目に、桐に鳳凰を紫檀黑檀たがやさん等の寄木の細工、目を驚かしたる妙手を盡せり、又西の御間は、御門主御方の御休息所と唱ふ、御天井の眞中に天人の彫物、西の御羽目は、鷲に松柏唐木よせの彫工なり、御拜殿と御石の間の取合の御柱は、堆朱の卷柱と稱するもの四本ありと聞けり、此餘結構なる事、悉枚擧するを得ず、御石の間、御拜殿と御本殿のあひだの御間をいふ、紅縁の御疊を敷、御疊下は石敷なりといふ、此邊より結構なることはしるさず、

〔多武峯略記 下〕第四總社 檜皮葺

三。面。拜。殿。 檜皮葺、正面七間、南一面三間、北面三間、元三間一面、

天仁燒失、其後所造拜殿 五間 承安燒失、其後建久五年四月十九日、柱一本立之上假棟、五月七日斧始、

大工散位友成、六月十三日棟上、同六年四月廿八日葺了、

〔嚴島圖會 二〕三。棟。拜。殿。 幣殿の前にあり、桁十五間一尺、梁六間半、

客神社三。棟。拜。殿。 桁十二間四尺、梁四間四尺、

〔應永十四年春日社造替日記〕御料木ハ八九寸一支、○中略 在所ハ拜。ノ。屋。ノ內北ヨリニオキ申也、

大宮ドノヽ御柱四本ハ、其マヽ三ヶ日同所ニ在、若宮ドノヽ御柱ヲバ、其日ハ拜。屋。ニ置也、

マクックシ、ダッル事、御前ノカラ庇ノ御柱ヨリシモヘ二行ニ立ナリ、拜。屋。ノ辰巳ノ柱ヨリ□□ノ柱ニタテッヘル、

五月廿一日、若宮ノ拜。屋。上葺口始之、

著到殿

同廿二日、拜屋ノ番匠作事始之、

六月十三日、拜屋ノ雲形、若宮ノ神主殿ヨリ御寺ヘ御注進事、雲形八端、（四丈紺布）代六貫四百文、此外竹代百文、（十二本分也）此分御注進之處、寺門ノ御返事ニハ、去年御遷宮雲形ヲ可致置□□□□注進不可然由被仰、神主殿以春雄□チ寺門ヘノ仰ニハ、去年同時ニ被造替ハ無子細、雲形モ通用也、且又御造替之後、隔年紀拜屋御造替度々在之、雲形又每度新調也、

〔走湯山緣起五〕永觀元年（癸未）造立三間檜皮葺大門、安置金剛力士、同年改造御祭所幷禮殿、

〔吾妻鏡二〕治承五年正月一日戊申、卯剋、前武衞參鶴岳若宮給、（○中略）著御于禮殿、專光房良暹豫候此所、先神馬一匹引立寶前、

〔百練抄十四（四條）〕文曆元年二月十四日癸未、今日未刻、北野宮神殿禮殿小社廻廊拂地燒亡、

〔康富記〕文安元年四月十三日丁卯、今夜子時計、天滿北野御在所、幷禮殿燒亡、

〔齋諧俗談一〕熊野連歌

紀伊國熊野權現の本宮の禮殿にて、每年正月二日社家と地下の人と相まじはりて、百韻の連歌興行あり、

〔神道名目類聚抄一（宮社）〕著到殿（トウチヤクデン）　大和春日社ニアリ、勅使此殿ニ著タマフ、

〔左經記〕萬壽二年十一月五日癸未、爲寮使下向春日、　六日甲申、及午剋、使少將來向宿所、及未剋向少將宿所、次向列見迅頤之右馬寮使、（頭兼房朝臣）掌侍近衞府使關白殿神馬等來進、次第參社、頃先被、次著著到殿、（今〈源經賴〉使、爲兼氏不著此所、右馬頭與家云云）

長元四年四月廿三日庚子、及未剋、左中辨相共參吉田、先著著到殿、辨、外記、史、氏人、有官別當等同著之了、

〔玉葉〕承元四年三月五日癸巳、修明門院（○後鳥羽后重子）春日御幸也、（○中略）入御著到殿、其儀可尋記、

舞殿

〔春日祭舊例〕弘安六年二月十一日、御祭、〇中略上卿自著到殿御參之次第、上卿ハ自著到殿東ヘ令御出、自餘使ニハ著到殿ノ北向ノ切戸ヲ出テ、各同慶賀門ヘ令御入之時、上卿御手水在之、

弘安六年十一月八日、春日祭、〇中略此間上卿辨、著到殿事行遂之、

〔康富記〕文安四年十一月廿日戊申、吉田祭也、〇中略當社自今年夏有遷座假殿、假殿本社ヨリ東方也、以南爲上向西立御、仍祭禮儀可違常儀哉否、上卿辨有思案、雖然去應永廿五、六、七、此兩三年當社假殿之間也、祭儀無殊儀歟、此事予先謁社務兼名朝臣相談之、祭禮無殊儀之由返答也、但庭座者、於假殿御前庭中有之、上卿辨南上東面也、常儀拜殿之南也、上卿辨東上北面也、著到殿、直會殿、如常者也、

〔小右記〕寛仁四年七月廿八日丁丑、頭、晩宰相〇資平從入道殿來云、於賀茂上下御社、被供養仁王經各十部、下社者於舞殿被供養、上社者橋殿、

〔壬生家文書月〕廣田社

長治二年正月彼社司□□□□□□□□□□社舞殿參籠女頓死、依爲寢死、傍人不覺悟、宿直神人、召從女所令出閑所也、社中已以爲穢之間、不勤行恒例御祭等者、

二月廿五日　宣

〔百練抄五堀河〕長治二年十一月三日、光淸〇八幡別當中略不可勘罪名、依件社訴、不可止宮寺司之由被仰下、且又八幡神民奉舁出神輿於舞殿、可入洛之由、有其聞之故也、

〔百練抄十後鳥羽〕元曆元年五月廿一日戊申、賀茂上社舞殿、無風顚倒云々、

〔賀茂御幸記〕寛元四年四月廿九日戊子、今日賀茂御幸、〇後嵯峨也、〇中略舞殿北第二間備御拜座、

〔八幡御幸次第〕御參宮〇中略

先是舞殿中央傍犬防立案、倚立白妙御幣、總官役之案南敷祝師座、宮寺儲之同第三間敷小莚二枚、其上加高麗端半帖、爲御拜御座、總儲之

〔春日祭舊例〕弘安六年二月十一日、御祭、略〔中〕舞殿第二間ニ、北向ニ上卿御著座、
弘安十一年二月五日、御祭、略〔中〕上卿略〔中〕自慶賀門參舞殿、
〔應永十四年春日社造替日記〕九月十六日、舞殿ノ御棟上、午一點ニ在ヤウ、マヒドノニ御棟ノ東西ニ口ヤアリ、幷ニ御幣五色ニカクル、南方ニタソル杏形ノモチ三完三所ニ置也、下ニ白布一端完シク、ヲケ、ヒサゲ、テウシ同ジク、此後總大工虎太郎國時布衣チハヤヲカクル、南門ノ内ニテ莚ニヒザツキ置テ、五度拜シテ御幣ヲムネノ中ニ打付候、次於大工三人淨衣ニテ御棟上テ棟ヲ祭ル、其後ツチ一同ニ三度打也、アツミワナシ、

神樂殿

〔新編鎌倉志〕一鶴岡八幡宮
舞殿　上ノ地ヘ登ル石階ノ下ニアリ、三間ニ二間アリ、

〔神道名目類聚抄〕一社宮神樂殿　神樂ヲ奏スル殿ナリ

〔鹿嶋志〕下神樂　さて神樂は日一日夜二夜の間おこなはる、其式は神樂殿の前に、青和幣、白和幣、木綿垂など取懸、庭上にて庭燎をたき湯立をす、又庭の四角に四神をたつ、略〔中〕神樂殿の内には、神樂男等大鼓をうち、笛をふき、鈴をふりて舞の曲あり、そのとき禰宜祝御饌神酒を備へ奉りて祝詞まうせり、

〔日光山志〕五御神樂堂　陽明御門の東にあり、御拜殿へ向ふ、銅葺黑塗、前後側階段あり、

御饌殿

〔神道名目類聚抄〕一社宮御饌殿神供所　神膳ヲ調フル所ナリ

〔古今神學類編〕二十社院御饌殿忌屋殿、竈殿、御炊殿、釣殿、
御饌殿已下ノ諸殿、宗廟諸社共ニ有之、而シテ稱號或ハ異ニ、經營亦各少異アリ、大抵諸社ハ政府ニ因テ古制ヲ失ヒ、稱號ヲアヤマル事不少、又今諸社ニ就テ覽之ニ、宗廟ニ異リ、御饌殿ハ正殿ノ正中ニ當テ建之、其正殿ト御饌殿ノ間ヲ釣殿ト稱シテ打橋ヲ渡シ、上ヲ葺蓋ヒタル也、御饌殿ヲ

或ハ稱シテ祭供殿ト稱シ、御供所ト稱シ、或ハ其正面ニ御簾几帳ヲ垂テ、幣帛ヲ立、狛犬ヲ置ク、故ニ直ニ正殿ノ如クニシテ、而モ其後ニ相離レテ正殿ノ坐ス神社モアリ、故ニ御饌殿ノ御屋、或ハ殿ノ東掖ニ開キテ、此ニ盛屋ヲ相兼スル處モ見ユ、盛屋トハ御饌盛調ノ所也、自是御饌殿ニ奉備事也、前ニ記ス太政官符ニ、大社ニ三間草葺ノ盛屋二宇、二在戸本ト侍ル是也、一宇ハ於于茲盛調ジテ以御饌殿ニ運之所、一宇ハ則御炊殿歟、御炊殿トハ則御饌ヲ炊ク所ニシテ、諸社ニモ相離レテ建之、忌屋殿ト云モ、同殿ノ別稱歟、神社ニヨリテ御饌殿ヲ御稀殿ト云ヒ、盛屋ヲ御炊殿トモ云ニヤ、宗廟ノ御饌殿ハ御垣ノ内艮ノ方ニ當テ建テリ、此外諸神事ノ殿舍御廚酒殿等ノ謂レ遂一ニ不可記、載セテ舊記ニ詳ナレバ不贅、諸社ニ通用ナラス御事モ多ケレバ也、又宗廟ノ御饌殿忌屋殿ハ東方殿ト等シク假殿ニ用テ遷幸ナシタテマツリシ例モアリト也、是御饌殿ナドハナミナミノ諸殿ニ異ナレバナルベシ、由是例スレバ、諸社ノ御饌殿ニ於テモ、取分キ奉奏洒掃ヲ不怠、殊ニハ職掌人ノ外ニハ闌人ヲ禁忌シ、敬謹ヲ專トスベキ事勿論也、尤御饌調備ノ節ハ他事ヲ不談、増テ高聲ナルベカラズ、是故ニ覆面シテ不息者ニ似レルノ謹ミ、或ハ是傳記ノ所載條々也、又御供ノ二字ヲ唱テ稱異々、是略音而已、是故ニ御供所ヲモ謂テ、異々所ト稱スル社例モ侍リ、御饌、御氣、御酒、同訓ニシテ、ミケト通音セリ、又御饌所斷絶ノ以後、正殿ノ中ニ奉備事アリ、是諸社ノ傳來ニハ非ズシテ、違例ノ當ト成レル者ナルベシ、小社ト云ヘドモ、正殿ノ外ニ御饌殿アル事是定格ナレバ也、遷宮ノ外昇賢可否ノ事ナル者也、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

御饌殿壹宇（長一丈、廣一丈、）

〔大神宮儀式解〕五御膳一院　御膳殿は美計登能とよむべし、又美加之波止乃ともよみなん、美加之波は、美は御、加之波は柏也、（中略）是古食を柏に盛よりいふなり、膳部を加之波伴といふも

御炊殿

同じ、

〔顯廣王記〕安元三年四月廿八日丁酉、神祇官八神殿柏殿御倉燒了、

〔百練抄十三後堀河〕貞應元年五月廿九日、松尾社寳神殿幷供御所寶藏等燒亡、

〔平戸記〕寛元三年二月十五日庚辰、今日被行軒廊御卜、大神宮東御寶殿不被開事、幷八幡流血事等也、但八幡事小供御所屋事云々、

〔新編相模國風土記二十八足柄下郡〕箱根三社權現

供所(七間ニ二間半)

〔新編鎌倉志一〕鶴岡八幡宮

小御供所　樓門ノ西ノ方回廊ニアリ、每月朔日十五日、又五節供ニ御供ヲ具フル所ナリ、御殿司一人出テ八幡宮幷ニ諸末社等ニ供ス、

〔嚴島圖會一〕御供所(本社の東にあり)

〔日光山志二〕新宮權現末社　御供所(板葺四間に三間)

〔紀伊國名所圖會三下海士郡〕加太淡島大明神

御供所總舍

〔大社志〕供祭所(有ニ本社左右二宇)

〔神道名目類聚抄一宮社〕御炊殿(ミカシキトノ)　御饌ヲ炊ク所ナリ

〔皇大神宮儀式帳〕御酒殿一院

大炊屋一間(長二丈、弘一丈、高七尺、)

〔大神宮儀式解五〕大炊屋は於保爲耶とよむべし、說文、取其進火謂之爨、取其氣上謂之炊、とあり、(大炊を於保爲とよむに、和名抄、大炊寮、於保爲乃豆加佐、とあるによれり、)祭使寮宮人直會院にて給ふ飯を此屋にて炊儲けるなり、

此屋も盛殿の邊にあるべし、いつの代よりか絶たり、

〔皇大神宮儀式帳〕禰宜齋館一院
炊屋二間、〈齋火炊屋一間、大炊屋一間、〉並長一丈五尺、高八尺、弘一丈、〈○一丈、一本作二五尺一、〉

〔大神宮儀式解〕〈五〉炊屋は加志伎耶とよむべし、炊爨の所也、二間は齋火炊屋一間、大炊屋一間也、今は齋館一連にて一禰宜館に炊屋厨も造りこめ、禰宜九人の料の炊所一所〈齋館の西北の隅〉ありて、別に齋火炊屋厨屋等はなし、右齋火炊屋はことに火を忌、服氣人にも食しめず、年中行事〈正月十日〉其後吉書政所進之、拜禮如常、服氣等禰宜館參候時、吉書幷節ヲ送進、但除二火物一長官館火服氣輩依レ不二食用一法也と見ゆ、是古代一禰宜館に忌火炊屋ありて、殊に火を忌し遺なり、此法によりて、今の世も一禰宜館の火はことに忌敬、服氣人等食用する事なし、又右に見ゆる大炊屋は陪從人等の食物炊く所なり、

〔太平記〕〈十八〉比叡山開闢事
大宮〈○日吉神社〉ノ竈殿ハ大日、聖眞子ノ竈殿ハ金剛界ノ大日、二宮竈殿ハ日光月光、

〔快元僧都記〕天文三年四月四日、座不冷壇所ヲ假殿脇、竈殿被移之由自會所惠光院被觸了、　四年五月十二日壬申、天晴早、午剋於竈殿座不冷千遍陀羅尼如口行西風拂雲畢、

〔新編鎌倉志〕〈一〉鶴岡八幡宮
竈殿　頼朝社ノ西ノ方ニアリ、五間ニ三間アリ、八幡宮記ニ八幡ノ姨、寶滿菩薩ヲ安ズトアリ、俗ニオミルメトモ申スト也、此所大御供所ナリ、毎年正月三箇日四月三日ノ御祭禮五々三ノ御供御寶殿ニ獻ル樂ヲ奏スルナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕御酒殿一院
盛殿一間〈長五丈、廣一丈七尺、高八尺、〉

齋館

〔大神宮儀式解五〕盛殿は、毛理登能とよむべし、祭使寮官人等直會殿にて給へる、飯已下のもの盛備ふる殿なるべし、此殿は酒殿の西廳舎の北の邊りなるべし、いつの代よりか絶たり、

〔止由氣宮儀式帳〕御酒殿壹院
盛殿壹間（長三丈、廣一丈六尺、高九尺、）

〔神道名目類聚抄一宮社〕齋館（サイクワン、イミノタチ）神事潔齋ノ時、神官參籠スル所ナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕禰宜齋館一院
齋殿一間（長二丈、弘一丈、高八尺、）炊屋二間（齋火炊屋一間、大炊屋一間、）並長一丈五尺、高八尺、弘一丈、○一丈、一本作五尺、倉一字（長一丈八尺、弘一丈五尺、高一丈、）厨一間（長二丈、弘一丈、高八尺、）厩一間（長二丈、弘一丈五尺、高一丈、）防往籬一重（長廻五十丈）

宇治大内人齋館一院
齋殿一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）忌火炊屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）厨屋一間（長三丈、弘一丈、高八尺、）防往籬一重（長廻廿丈）
右禰宜幷宇治大内人二人、常食忌火物、不食他火物、

大内人二人宿館二院
齋侍屋二間（長各四丈六尺、弘各一丈、高八尺五寸、）厨大炊屋二間（長各三丈二尺、弘一丈、高八尺、）防往籬一重（長廻四十丈）
右二人大内人、忌火物不食、但齋御供奉、與宇治内人同、

物忌幷小内人宿館五院
大物忌齋館一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）齋火炊屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）厨屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）大炊屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）
宮守物忌齋館屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）齋火炊屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）
地祭物忌齋館屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）齋火炊屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）
菅裁物忌齋館屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）齋火炊屋一間（長二丈、弘九尺、高八尺、）

已上四人、常食忌火物供奉、

諸物忌小内人常宿齋館屋一十二間

五間、（長各三丈、高八尺、弘一丈二尺、）七間、（長二丈、弘一丈、高八尺、）防往籬廻一重、（長廻七十五丈）

右清酒作物忌以下、御巫内人以上、齋館院食、但齋敬供奉、與大内人同、

〔大神宮儀式解五〕齋館は、伊美（美は音便にて、牟の如く唱べし、）多智とよむべし、此院現存すれど、今は齋火炊屋も廚も皆一字に造りなして御倉は絕たり、（中略）齋は神事供奉の爲に潔齋齋敬をいふ、（中略）禰宜神事に供奉の時、齋宿する殿を此院内に建るなり、齋殿は伊美登能とよむべし、昔はいかなりしにか、今世は登玖佐茸也、古は禰宜一員たるによりて、齋殿も一間也、村上天皇應和元年より、次第に加補せられ、禰宜十員となりにたれば、追々に造り加へ、今は一禰宜齋殿一間、（西面）二禰宜より十禰宜まで九人の齋殿合九間（南面）を一連に作りなせり、朽損するに隨ひ造替或修覆せらるゝ也、平戸記仁治元年十二月十八日、大神宮外院燒亡事云云、去十二日子時、自禰宜齋館出來所燒出、不幾而出橋赴正殿之間、年中行事（正月一日）政印、上古一禰宜宿館被安置など見え、其餘の記文、禰宜齋館の事多く注せり、悉あぐるに遑あらず、

〔止由氣宮儀式帳〕齋館壹院

大内人三人宿館屋參間（長各二丈、廣一丈二尺、高各八尺、）

物忌五人宿館屋伍間（長各二丈、廣各一丈二尺、高各八尺、）

物忌父小内人等宿館屋伍間（長各二丈、廣各一丈、高各八尺、）

〔左經記〕萬壽三年四月十五日辛酉、齋王向社頭（○賀茂）之間、余率史等向神館宿、

長元元年四月廿日乙酉、齋王乘腰輿參社（○賀茂）之後、余率史以下趣神立宿、（廚家儲饌）

〔百練抄四後朱雀〕長久二年四月廿日、賀茂祭還立、於神館撿非違使追捕近衛使少將信宗、依牛童過差

祓殿

也、

〔中右記〕嘉保二年四月五日、今日賀茂行幸點地也、〈中略〉參上御社、著御所屋、〈神館〉

〔長秋記〕天永二年四月九日、今日巳刻、賀茂權禰宜成忠參內申之、神館齋王御所、幷公卿座屋、爲大風頽倒者、

〔賀茂御幸記〕神館御所、今度社家沙汰也、去年〈〇建長五年〉二月、御寄進御領讃岐國鴨部鄕ヲ補任可子孫相傳之由被下宣旨、造進畢、御簾御座等、以成功公人等調進之、柱松貳本、如先々社家沙汰也、

〔一社奉幣使參向記〕永正十六年九月十四日、一社〈〇伊勢神宮〉奉幣、次第大概如先規、但今度御馬〈波〉祭主〈爾〉可納由、澤地藏人藤浪三郎兩人爲使、官長宿館〈仁氏〉終夜懇望申、官長〈波〉先規〈毛〉神宮〈爾〉給〈乃〉間、可任例由雖被申、兩使堅申間、今度計〈波〉預申〈乃〉由〈仁氏〉遣之、又錦綾〈波〉神宮〈爾〉奉納、子良〈乃〉齋館〈爾〉預置、

〔新古今和歌集三夏〕齋院に侍ける時、神たち〈〇賀茂〉にて　式子內親王

忘めやあふひを草に引結びかりねの野べの露の曙

神たちにて郭公を聞て　前中納言匡房

卯花の垣ねならねどほとゝぎす月のかつらのかげになくなり

〔新續古今和歌集三夏〕文治六年女御入內屏風に、賀茂下社神館のほとりに、葵かざしたる人有所、　前中納言定家

千早振賀茂のみづがき年を經て幾世のけふにあふひ成らん

〔神道名目類聚抄一社〕祓殿〈ハラヘドノ〉　神官祓ヲ修行スルノ殿ナリ

〔類聚名物考神祇十〕祓殿　はらへどの

神佛に詣でゝ、禊祓する所の殿をいふ、

〔蜻蛉日記中之下〕からうじてつばいちにいたりて、れいのことゝかくしていでたつほどに、日も

暮はてぬ、雨や風猶やまず、火ともしたれどふきけちていみじくくらければ、夢路のこゝちしていとゆゆしく、いかなるにかとまでおもひまどふ、からうじてはら〳〵殿〈○春日神社〉にいたり給ければ、雨もふらず、たゞみづのこゑのいとはげしきをそれなりときく、

〔後鳥羽院熊野御幸記〕十六日〈○建仁元年十月〉拂曉、又出發心門、王子二〈内水飲〉自祓殿歩指參御前、過山川千里、遂奉拜寶前、感涙難禁、自是入宿所、遲明更歸參祓殿、〈左中辨自夜在此邊〉爲奉待御幸也、

〔玉蘂〕承元四年三月五日癸巳、修明門院春日御幸也、〈○中略〉院司等小臣相引入南面樓門、直進祓殿、

〔百練抄〈十二順德〉〕承久元年十一月廿七日己未、巳時、白川祓殿邊燒亡、及數町、

〔大神宮參詣記〕櫛田川祓殿をもすぎて行ほどに〈○下略〉

〔嚴島圖會〈一〉〕祓殿〈三棟、拜殿の前にあり、俗にこれを組入と稱す、桁八間一尺餘、梁五間半、〉

〔左經記〕寬仁二年四月廿一日甲申、大殿攝政殿相共令詣賀茂給、〈○中略〉於下御社祓所有御祓、

〔春日祭舊例〕弘安三年二月十二日甲申、恒例御祭、〈○中略〉可有御著祓戸之處、依大雪、祓戸之儀於著到殿被行之、

〔春日祭舊例〕弘安六年二月十一日御祭〈○中略〉

祓戸庭座指圖〈○圖略〉

弘安十一年〈○正應元年〉二月五日、御祭、〈○中略〉夜半祓戸儀式如例、

正應三年二月〈小〉七日甲申御祭〈○中略〉

今度祭ニ依テ、勅願臨時祭別行之也、

先祓戸著座如例〈以東爲上、藤北面、但辨人ハ不著座、一座辨、次藏助、次近衞使、〉

〔春日祭次第〕上卿辨近衞使等著祓戸、

〔神道名目類聚抄〈一宮社〉〕祝詞屋　神官常ニ神拜シ、祝詞ナド此所ニ著テ行フナリ、

直會殿

〔紀伊國名所圖會三下海士郡〕加太淡島大明神

○祝詞舍○

〔神道名目類聚抄一宮社〕直會殿（ナホラヒドノ）　神官會集シテ、神供神酒等ヲ戴キ享ル所ナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕直會殿一院

九丈殿一間、長十丈、廣二丈、高一丈一尺、五丈殿一間、長五丈、廣二丈、高一丈一尺、四丈殿一間、長四丈、廣一丈六尺、高九尺、已上皆檜皮、

御門一間、高一丈三尺、長九尺、防往籬一重、長十丈、高六

〔大神宮儀式解五〕直會殿は奈保良比能とよむべし、下五丈殿、四丈殿、九丈殿、共に皆直會殿といふ、大神宮式月次祭には、此三殿を解齋殿といふ、（齋を解て直會業の殿なれば也）件三殿一院の中にありて御門等もありしを、今の世はたゞ五丈殿（又一之殿ともいふ）のみ遺りて、其餘は悉く絶たり、奈保良比は、奈保利阿比の約語也、（直會は和多里阿比なり、それを和多良比と約に同じ、）神事はてゝ形をも直し會合して酒食するをいふなり、天平神護元年紀十一月、詔今日乃大嘗會乃猶比良乃、下例六月以同日夜御食奈保良比、禰宜大内人幷諸物忌內人等、及物忌父母等、戸人男女等、皆悉參集など見えて、神事供奉後集會して飮食するをいふ也、平宣長、奈保良比は那保里阿比の約言也、奈保留とは俗に立直る、居直るなどの直に同じくて、改むる心あり、齋敬て神事に供奉し畢りて、無爲に勤仕せしまゝ、敬心をもゆるめ、形をもくつろげて、神事につかへし人々會して酒食するの義なりといへり、この殿を解齋殿ともいふを以て見れば、此說得たりといふべし、或人、直は宿直の直也、その所にふたり居るをいふ、（直神といふ直あり、直宿の義の字なり、）神人の集り會る所を直會殿といふ、その所にて神膳神酒を戴く故に、直に御膳をも直會といふ也といひ、又或人神事に供奉して後、家に歸らずして、神人直に會して神饌をいたゞく故に直會といふ也といへり、此二說は字にのみよりて言に據らず、各ひがことなるべし、

宿直所

〔止由氣宮儀式帳〕直會所壹院
五丈殿貳間一長四丈、廣一丈六尺、高一丈、一長六丈、廣二丈、高一丈、
九丈殿壹間廣二丈、高一丈、
直會御門一長一丈三尺、廣一丈、高一丈、

〔左經記〕萬壽三年二月一日戊申、及申剋使々參社頭、〇春日先祓、右大辨、皇太后宮使、次權辨、章信、藏司使、次左馬頭、兼理、中宮使、次範基、東宮使、次懷尹、關白殿、事了、權辨著著到殿、大丞幷余暫徘徊直會殿邊、

〔春日祭舊例〕弘安三年二月十二日甲申、恒例御祭、〇中略次大和舞、其後直會殿之事行、終後ニ又御著到殿之後御手水、〇中略次御棚、カザリ御棚也、ノ直會殿與舞殿造合ヨリ、神人樓門ノ前ヘ持參、　六年二月十一日、御祭、〇中略上卿自著到殿御參之次第、〇中略次列御幣等直會殿前ニ、六位史持參、祐家、延秀、祐良、祐親等參テ請取、不及申祝、面々御階ニ備進之、〇中略次上卿直會殿御著座、例御座也、南向、辨東向ニ著座、次會參氏人二人、引ノケテ著座、東ノ列ニ西向ニ六位史二人著座、二臈ハ宿院目代左少史朝清也、其南北向二人六位史著座、獻盃役正預祐家ハ御酒土器、權預延秀ハ御酒役也、第三度ニ辨參テ御酒土器ヲ進上、上卿則賜之、次會參氏人等不及勸盃也、西向六位史二人勸盃、酒土器役神宮預祐親、酒役權預能道、引ノケテ著座スル六位二人、酒土器ヲ社司可取繼之由雖令申之、依無先例能道一切不取繼、仍不給之也、　十一月八日、春日祭、〇中略直會殿神事如例、

〔神道名目類聚抄一宮社〕宿直所トノヰドコロ　神官出仕シテ御番ヲ勤ムル所ナリ

〔皇大神宮儀式帳〕寶殿二字、〇中略
宿衞屋四間長各二丈

〔大神宮儀式解四〕宿衞屋は登能韋耶とよむべし、神人宿直の屋也、賀茂直淵、登乃伊は殿寢の意

なれは、假字も登乃伊也、殿居の義ならずといへり、平宣長宿直の假字は、登乃草にて殿居の意也、殿寢とするは意得ず、宿直の義は、俗にいふ泊り番にて夜通に勤る意也、宿は寢る意ならず、夜もつとむる意也、さて夜明まで起居てもつとむべき事なければ寢るなり、寢れどもその寢るは勤にはあらず、我勝手にて寢るなり、たゞ殿に夜相つむるなれは、殿居といふへし、然らは晝もいふべきに夜に限ていふはいかにといはん、晝はそれ〲の勤ありてその事を執行ゆゑ、たゞ居とはいはず、夜はつとむべき事はなくして、たゞ相つめ居る故に居といふ也、伊は禰武留事也、禰は臥すにも禰武留にもいふ、よりて思ふに、若殿寢（トノネ）の意ならば、登乃禰とはいふべけれど、登乃伊といひては事たがへり、伊と禰との差別を思ふべしといへり、古言梯、此假名引證なし、侍宿の類な證さすがれに據もてよめに證にはなしがたし、又宿衞屋は萬毛里耶どもよみなん、萬葉一歌野守、同歌守部、催馬樂古本河口、世支乃安良可支也末毛禮止毛などもよめり、玉篇、宿夜止也、毛詩注、一宿曰宿、宮衞令義解、衞、禁衞也、篇海、衞、防也、玉篇、衞、護也、晉書元帝紀、禁衞嚴警と見えて、各其所に宿し守る義也、

〔止由氣宮儀式帳〕大宮壹院

宿直屋參間長各一丈四尺、廣各八尺、高各六尺、

〔貞治三年春日御動座記〕三月十五日、侍所ヨリコテチリ五郎次郎以、當時京中ニ火事ノ行ル事ハ、更ニ禰宜ノ火付アルクヨシ其カクレナキヤウヲ申候間、此由ヲ本社ノ神人ノ中へ、六條殿番衆ヨリ、同十六日、チンジ下サルヽ間、此事一大事ノ事ニテアルニヨツテ、三月廿日音樂田心見ノ酒一斗、宿直屋ノシロセテ、三方評定シテカクレウエモ申入テ、三方申言ヲシテ社家ノケウ状以、御寺へ申入候間、此事以外ノ事也トテ、ゾケエ引ノカキアゲヲセサセタマヒテ、侍所ヲメシナガサルベキヨシ申サルヽ也、

〔神道名目類聚抄一宮社〕齋屋（イミノヤ）　神官會集シテ神事ヲ議スル所ナリ

○按ズルニ、廳屋ハ神官ガ神事ヲ議スルノミナラズ、總テ事務ヲ掌ル所ナラン、

〔皇大神宮儀式帳〕御酒殿一院〇中略

務。所。廳。一間長三丈、弘一丈七尺、高一丈、

〔大神宮儀式解五〕務所廳は萬牟登許呂耶とよむべし、此廳現存して官道の北中道木の下の東にあり、廳舍といふ、古へは萱葺なりしに、今は止知板葺なり、中世絶えたるを、慶安年中これを再興せられ、其後は朽損に隨ひて、或造替或修覆せらる、此舍にて官務を執り行ひ、職掌人を補任し、番直交替等の事を聽なり、此舍にて集議し、その事を奉行する文を廳宣といふ、和名抄四聲字苑云、廳汀反、延賓屋也、又衙廳也、和名萬豆利古止止乃、職員令左官掌二人、掌云々廳事鋪設、集解釋云、廳事者、宮司所聽政事之處、謂之廳事、韻會、古者治官之處、謂之廳事、後語省、直曰聽、加广通作廳、吏學指南、禮記曰、聖人南面而聽天下、漢晉以來作聽事、六朝始加广、とあるを思へば、政事を聽く屋なるを會意せし字也、

〔止由氣宮儀式帳〕御酒殿壹院〇中略

務。所。廳。壹間長三丈五尺、廣一丈六尺、高一丈、

〔壬生家文書鳥〕文殿

勘賀茂別雷社司言上今月廿八日午時見付當社廳。屋。板敷下犬死倒事

右引勘文簿之處、去寛元二年十二月、彼社司言上云、去十一月廿四日辰時、見付當社二鳥居内犬死、者、可勘例之由、雖被下宣旨、其後不及別御沙汰、〇中略

建長五年十二月卅日　右史生紀

〔外宮子良館舊記〕神事のてい、長官御出立例所へ御著候而、御鹽は有べし、〇中略夫より例所まで御下向有て、小柴垣の前に御待有之候、人長案内と申候而、廳。舍。へ御著可有候、正月一日の神事の體

也、○中略

祇承の參體、例所より大宮殿へ參候て、又遙拜所へ參候て、又一の殿へ參候て、又小柴垣の所へ參候て、又北の御門へ參る、其時廳。舍。の南にて手洗候て、御下向に御籬へ御參候而、みゆす殿迄參候て、子良の館の鳥居迄參る也、

八百會拜所

〔古今神學類編 二十四 諸院〕八。百。會。拜。所。

按ズルニ、伊勢神宮ニ此拜所ノ名目專稱之ト云ヘドモ、諸社ニ亙リテアル所也、サレドモ世以其由ヲ不知、唯ニ社例ニ從テ拜則拜セリ、一社ノ神拜畢テ或ハ四方ニ向フ事自東始メ、或ハ唯定例ニヨリテ、一方ニ嚮ヒテモ共ニ闔國ノ大小神祇ヲ拜ス、二所宗廟又ハ其社ノ遙宮等ヲ拜スル事ハ勿論也、其拜所、或ハ宮中、或ハ宮外社傳非一隅乎、○中略諸社ニハ其名目各別ニシテ或ハ總。拜。所。ト稱シ、覽。拜。所。トモ云フ人アリ、唯是其地一社ノ諸神拜覽ナリ、闔州名神且所知ノ小社ニ至ヤデ志ノ所之ヲ拜スル事ナレバ、其本格外ノ至敬ヨリ發リテ、一文不通ノ神役人ト云ヘドモ此神拜ハスル事ナリ、況諸社本ヨリ此總拜ナキ事不能、社例ニヨリテ儀禮ノ少異、名目ノカハリアル事ハ、都テ此等ノ法式ニカギラズ、總ジテ神拜神事、其外ノ神態モ上古ハ、其處々ノ先達格式ヲ定メ、或ハ勅裁ニ定レル事實多カリシト見エテ、衰廢ノ今トテモ形バカリ殘レル中ニ、昔覺エテ殊勝ノ勤メ多ク、又ハ名目等ニ至リテモ、牢ハ俗事佛故ニ紛レタル事ナド多キヲ見聞毎ニ、初昔博好熟練ノ先達ニ非ズバ、イカデカヽル事業ヲナラハシ置ベキト感慨頻リナル神勤モ侍レド、イツトナク正ナキ行止ニ倣ヒカヘテ、牢バ事元ノ曉シ難キヲ見ルニモ、爭デカク迄ハ衰廢ニ及ビツルニカト訝キ歎キモ彌增ナリ、

假殿

〔運歩色葉集 賀〕假殿カリドノ

〔撮壤集 上 神〕假殿カリドノ

〔神道名目類聚抄一宮社〕權殿(カリドノ・ゴンデン) 遷殿(ウツシドノ) 造營修覆ノ時、御神體ヲ假ニ鎭坐ノ所ナリ、或云、遷殿トハ新ニ御神體ヲ封ジ、イマダ本宮ニウツサヾル前、假ニ安置シ奉ル所ヲウツシドノト云フ、

〔百練抄五後三條〕延久二年三月十二日、諸卿定申八幡宮寺申、御殿修理、可奉移假殿哉否、十六日、被行御卜、奉移正座、無其祟者、仍令勘申造假殿日時、又被問前帥并入道大納言、前大貳卿等、七月七日、但記云、八幡權別當法眼戒信、別當法橋清秀、預僧等、相共開正殿、可實撿損色之由被宣下、畢、件御殿預僧三人之外他人不參入、而今度有議、初所被仰下也、依申件破損之由、去四月被作假殿、遷御一定日時之後、依無遷御之先例、日來有其議定、所被延引也、八月九日、右中辨正宗、參向宮寺、注損色、十八日、諸卿定申八幡宮修造間事、廿八日、八幡宮御體渡假殿、可本殿修理、令行御卜、彼是相違事未決、三年三月八日、奉幣八幡宮、止奉渡假殿、可修理本殿之由被祈申也、同四月九日寅刻、奉遷石淸水宮西第三御體、乍帳奉移東馬道、其後始造作、未時奉渡本所云々、

〔百練抄十三後堀河〕貞應二年九月廿一日、軒廊御卜也、宇佐宮假殿葺萱上笋八本出事、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十月廿一日癸卯、鶴岳宮寺依可有修理、今夕御正體等奉渡假殿、

〔康富記〕嘉吉四年〇文安元年四月廿五日甲辰、北野社假殿遷宮也、〇中略假殿社頭者、本社頭之北ニ當テ令造立、或云、總用八百貫也、社僧奉行之、於正殿者、六月可被立之由、有其沙汰云々、

文安四年、四月廿七日戊子、是日吉田祭也、先有假殿遷宮并日時定等事、是去二月廿三日、第一御殿大床上有五體不具穢間、閏二月十七日、被行軒廊御卜、三月廿四日、被立祈謝奉幣使畢、其後御殿可被造替之由社家强申入之間、可被造替也、仍今夜有假殿遷宮、其儀終後有祭禮者也、

〔親長卿記〕文明二年十月十日、鴨禰宜祐康祝秀顯來、可移假殿於禰枝事、不苦者爲一社沙汰可渡申、假殿用脚事、禰枝事、可被返付事、被成武家料所可被仰出事、難叶棟別事、是又當土民完可爲難澁、此上者可被如何哉、猶可然事一社加談合之由有仰之趣仰了、去六日奏聞先了、然者御奉加事、可被仰

小社

村歟之由申之、何樣可奏聞之由仰了、當時松崎御座敷陣近之間、毎度敵可亂入之由有其聞、難治之間、可移申末社領福枝郷也、

〔快元僧都記〕天文二年正月八日、就八幡宮○鶴岡假殿事始可有之、自小田原○北條氏飛脚到來、月日事相尋由、院家中殿被相尋、返狀云、

鶴岡假殿地形可被爲引事、兩所御札各披見申候、先以目出度存候、先例者、月日限不相定候哉、況只今事者、兎モ角モ屋形樣可被思召立迄者、昔年號月日別紙ニ書進間、不能具由衆議候、恐々謹言、

正月八日　　　　會所執行

大道寺藏人佐殿

三月十二日、假殿下地被引、爲大道寺藏人佐、太田兵庫助、後藤左京亮已下奉行、皆以所領役諸侍間別ニ請取普請、不遑書者也、　四月十一日甲申、御假殿事始、番匠木屋入數十人、即尺木巾廊被結立、十八日、氏綱可有社參云々、○中略假殿礎少自曾町之時宗喚寄、以大鼓時剋定、而夜中被敷了、奉行大道寺太田兵庫助以下、　五月一日、自氏綱假殿柱立可有之由被尋了、○中略上棟之義式、廿九日如先書之以大鼓夜之入比柱立、午剋上棟、　五月十八日、假殿拜殿造畢、仙波入道於若宮拜殿勸盃、神主小別當社人中奉行衆悉專盃、

〔應永卅四年春日社遷宮日記〕應永卅四年丁未四月七日ヨリ、移殿ノ白壁ヌリナホシ申ス、南北ノ常住代印ヲパ硯酒ニヨビ申テ、若宮常住ヲパヨバレズ、神殿守春雄、壁ヌリノ大工爲淸、同舍スル、十八日ヨリ移殿白壁ヌリナホシ申、下番常住代印宗繁一人行、　七月十六日、移殿丹ヌリ申、大工仕町安近南郷北郷、常住ハ御精進トテ行カレズ、

〔類聚名義抄九〕秀倉ホクラ、一云神殿、

〔運步色葉集〕保禿倉

〔神道名目類聚抄一宮社〕禿倉造　ホコラトハ、凡テ神ヲ祭殿社ヲ云事ナレド、世俗ニハ小社ヲ云ヤウニ心得タリ、

〔日本書紀通證四〕兼良曰、日之少宮、謂良宮也、（中略）垂加翁曰、日座云比久良、火藏也、心藏也、神祠云保古良、此之謂也、今按、心謂與火藏通、兼良公曰、心者混沌之宮、神明之舍也、

〔類聚名物考神祇十一〕禿倉
思ふに、禿は秀の誤なり、秀をほとよめり、萬葉秀倉をほくらとよめり、すべてほといふは、物の高くぬきでゝ有物をいふ也、草の穗といふも同じ、若菜秀といふも花の咲出たるなり、

〔筆のみたま前四十三〕ほくらの事はこらといふ名さてかゝる小社を今はこらといふ、和名抄には寶倉を然よめり、今昔物語廿六に、大ナル寶藏あり、瑞垣事々シク廣ク垣籠タリ、〇中略一ノ寶倉ト云フ寶倉ノ戸、壒囊抄には小禿倉をコホコラ、樑社をツブテヤシロと訓り、垂仁紀には、天神庫と見え、天武紀には神府ともあり、百錬抄應德二年七月のところには、自朔日、東西二京諸條、每辻造立寶倉、鳥居打額、其銘福德神、或長福神、白朱社云云ともあり、袖中抄九に、三輪明神の御ほくらの內に入れりと云事もあり、くらとは元居る所にもいひ、物を置所をもいへり、然れば神の座所を云も、神寶など置所を云も、ともにたがはず、ほは美稱なり、さてつぶて社は、つぶては、つぼねと云意にて、小さきを云にや、引つぼねなど云も、小く構るを云言也、

〔中右記〕元永二年十一月朔日癸卯、以頭辨被仰云、賀茂下御社、此戊剋拂地燒亡了、〇中略去嘉承元年四月十二日夜、上御社燒亡時、御正體所奉渡貴布禰社也、依彼例若所殘之小社候者、可奉渡也、禰宜申云、氏神社と號小社殘也、然者欲奉渡彼社如何、奏事之由、尤可然也、

〔年中行事繪卷 祇園神祭所載秀倉圖〕







（直幹申文繪卷）

〔春日權現驗記十六〕笠置般若臺の鎭守に、春日大明神を勸請したてまつらんがために小社を一宇造營す、

〔牟川社遷宮記〕牟川御社一御殿東側ノ左方ニ小社一字御座在、號天王云々、今度應永八年被申造替、御役事、自律家新坊、北郷常住德守ヘ被仰付候、則御役事勸化申候、御幣散米代二百文被下行之、

〔本朝俗諺志二〕齒の神

大坂天王寺の東門の内に齒の神と云小祠あり、もろ〳〵の齒のわづらひを祈るに立所にしるしあり、

〔本朝俗諺志三〕疱瘡神

越後國所道可考一森の中に、疱瘡の宮といひつたへ、方二間ばかりの小祠あり、四方板羽目にして、わたり三四寸程の穴所々に明たり、鼬のやうなる獸、限りなく件の穴より出入し叢を栖とす、

〔北野緣起下〕天慶五年七月、西京七條に住せし賤女にあや子といひける者に託宣まし〳〵て、我昔世にありし時、右近の馬場にあそぶ事多年也、都のほとりの閑勝の地此所にしくはなし、我非道の罪を蒙りて、西海の波にしづむといへども、ひそかにかの所にゆきてあそぶ時ばかりこそすこし心もなぐさめ、ほこらをかまへて立よるたよりをえせしめよと託宣ありけれども、身のほどのいやしさにはゞかりて、社をもつくり奉らで、柴の庵にいがきをむすびて、五年の間あがめ奉りけるに、天慶九年六月九日にぞ北野にはうつし奉りける、

〔應安二年春日卅八所造替記〕牟川ノ御前ニホコラ一社オハシマス間、□□□依爲牟川御祠北郷方常住神殿守クワンジャウアルナリ、則クワンジャウノ御布施物、新坊ヨリ二百文被召候、

〔神宮雜例集二〕御鎭座事附改宮地事

神武天皇以後九代之間者、皇大神乎天皇乃同宮内相殿令坐奉事也、崇神天皇御代波爾宮中大庭穢ツ

椋○作令出生奉齋皇女以豐鋤入姫命供奉、

〔大神宮諸雜事記 一〕長元四年六月十七日、大神宮御祭也、〇中略其後以七月六日巳時、大神宮六禰宜正六位上荒木田神主延基〇中略等、寮頭館仁到著天、寮頭乃造立禿倉二宇城外持出令四保住人燒掃既了、是則依祭主下文、二宮神官所行申也、件禿倉和荒祭高宮御殿號造立也、

〔本朝世紀〕仁平三年六月廿六日甲申、貴布禰社言上、今月五日申時、奧院明神新宮禿倉前向、應羊立事也、

〔出羽國風土記 四略記 田川郡〕本羽黑

老たる山伏いふ、阿久谷の內、北の方に小山有、本羽黑と云、中古迄權現の神祠、僅の禿倉にて此所に有しとぞ、故に本羽黑といふ名を殘せり、

〔小右記〕長元四年八月四日己卯、頭辨持來宣旨、或可定申、或勘申宜旨、有覆奏、又即歸來傳關白御消息云、伊勢大神宮御託宣事、近會從齋宮內々示送、〇中略齋王御聲猛高無可喩事、御託宣云、寮頭相通不無、妻亦狂亂、造立寶小倉、申內宮外宮御在所、招集雜人、連日連夜、神樂狂舞、京洛之中、巫覡祭狐、柱定大神宮、如此之事、不然之事也、〇下略

〔今昔物語 二十六〕飛驒國猿神止生贄語第八

山ノ中ニ大ナル寶倉有、瑞籬事々シク廣ク垣籠タリ、〇中略然ル間一ノ寶倉ト云フ寶倉ノ戸ヌヤロニキト鳴テ開ケバ、其ニゾ少シ頭ノ毛太リテムクツケク思ケル、其後次々ノ寶倉ノ戸共次第ニ開渡シツ、

〔源平盛衰記 十〕賴豪成鼠事

賴豪ハカラキ骨ヲ碎テ、皇子ヲバ祈出シ進セタレドモ、戒壇ハ御免ナシ、大惡心ヲ起シテ干死シケルゾ無慙ナル、去程ニ山門〇延暦寺又皇子ヲ奉祈出、御位ニ即セ給タリケレバ、賴豪ガ死靈モイト

ド怨靈トナリ、山門ト云處ガアレバコソ我寺ニ戒壇ヲバ免サレネ、サレバ山門ノ佛法ヲ亡サント思テ大鼠ト成、谷々房々充滿テ、聖敎ヲゾカブリ食ケル、是ハ賴豪ガ怨靈也トテ、上下此彼ニテ打殺踏殺ケレ共、彌鼠多出來テ夥ナンドハ云計ナシ、此事只事ニ非ズ、可宥怨靈トテ、鼠ノ寶倉ヲ造テ神ト奉祝、サテコソ鼠モ鎭リケレ、圓宗ノ敎ヲ學テ可成佛賴豪ガ、由ナキ戒壇ダテヱエニ鼠トナルコソヲカシケレ、

○按ズルニ、太平記ニハ此事ヲ擧ゲテ、鼠ノ寶倉ヲ鼠ノ禿倉ニ作ル、

〔日吉社神道秘密記〕鼠祠（ネズミノホコラ）　是王子宮末社之内也、子之神也、〇中略　是三井寺法師賴豪靈神之由申非說、自昔在之社也、大宮化現之由也、

〔百練抄　五白河〕應德二年七月、自朔日、東西二京諸條、每辻造立寶倉、鳥居打額、其銘福德神、或長福神、或白朱社云々、洛中上下群集、盃酌無算、可破却之由被仰、撿非違使、爲淫祀有格制之故也、

〔日本書紀　六垂仁〕八十八年七月戊午、詔群卿曰、朕聞、新羅王子天日槍初來之時、將來寶物、今在但馬、元爲國人見貴、則爲神寶也、朕欲見其寶物、即日遣使者、詔天日槍之曾孫淸彥而令獻、於是淸彥被勅乃自捧神寶而獻之、〇中略　唯有小刀一、名曰出石、〇中略　是後出石刀子、自然至于淡路島、其島人謂神而爲刀子立祠（ホコラ）、是於今所祠也、

〔古語拾遺〕至於輕島豐明朝、〇應神　百濟王貢博士王仁、是河內文首始祖也、秦公祖弓月率百廿縣民而歸化矣、漢直祖阿知使主率十七縣民而來朝焉、秦漢百濟內附之民各以萬計、足可褒賞、皆有其祠、未預幣例也、

〔三代實錄　十淸和〕貞觀七年十二月九日丙辰、勅、甲斐國八代郡立淺間明神祠、列於官社、即置祝禰宜、隨時致祭、先是彼國司言、往年八代郡、暴風大雨、雷電地震、雲霧杳冥、難辨山野、駿河國富士大山西峯、急有熾火、燒碎巖谷、今年八代郡擬大領無位伴直眞貞託宣云、我淺間明神欲得此國齋祭、頃年爲國吏

成凶咎、爲百姓病死、然未曾覺悟、仍成此怪、須早定神社、兼任祝禰宜、潔奉祭、眞貞之身、或伸可八尺、或屈可二尺、變體長短、吐件等詞、求之卜筮、所告同於託宣、於是依明神願、以眞貞爲祝、同郡人伴秋吉爲禰宜、郡家以南作建神宮、且令鎭謝、雖然異火之變、于今未止、遣使者撿察、埋剗海千許町、仰而見之、正中最頂飾造社宮、垣有四隅、以丹青石立其四面、石高一丈八尺許、廣三尺、厚一尺餘、立石之間、相去一尺、中有一重高閣、以石構營、彩色美麗不可勝言、望請齋祭兼預官社、從之、

〔和爾雅二居處〕叢祠

〔日本釋名上宮室〕叢祠　小社を云、ほは細也、こらは座なり、座する所をくらと云、おぐらなと云が如し、神の座するほそきくら也

〔史記四十八陳勝世家〕二世元年七月、發閭左適戍漁陽、九百人屯大澤鄕、陳勝吳廣皆次當行、爲屯長、會天大雨、道不通、度已失期、失期法皆斬、陳勝吳廣乃謀曰、○中略乃丹書帛曰、陳勝王、置人所罾魚腹中、卒買魚烹食、得魚腹中書、固以怪之矣、又閒令吳廣之次近所旁叢祠中、（張晏曰、戍人所止處也、叢鬼所憑焉、索隱曰、（中略）墨子云、建國必擇木之修茂者以爲叢位、高誘註戰國策云、叢祠、神祠叢樹也、）夜篝火、狐鳴呼曰、大楚興、陳勝王、卒皆夜驚恐、

〔文德實錄二〕嘉祥三年八月戊申、詔以遠江國角避比古神列官社、先是彼國奏言、此神叢社、瞰臨大湖、湖水所濺、擧土顆利、

〔北野緣起下〕同○天慶九年、○中略良種右近の馬場にゆきむかひ、朝日寺住僧最鎭、法儀鎭世等に此託宣の旨をかたり、子細を相議する程に、一夜のうちに松數千本生侍りき、忽に林をなす、神靈眼前にあらはれ、みる人涙をながす、僧最鎭と狩弘宗と、文子が伴る寺主滿增星河秋長と力を合せて、叢祠の露をみがき、松扉の風をあふぎけるとかや、

〔石淸水不斷念佛緣起〕伏惟八幡大菩薩、昔是萬乘之君、今又百王之祖也、一天之下戴其德輝、四海之中霑其恩澤、於戲本覺理性之月、誠雖照蓮臺於佛位、和光同塵之日、猶垂叢祠於神道、○中略

延久二年十月日　左少辨大江朝臣匡房

〔本朝續文粹七〕上啓兩箇所望事　敦光
一式部大輔闕事〈中略〉
皇子御誕生之告文可有感應之由、染松筆新叢祠、〈中略〉
保安三年十二月九日　大學頭藤原敦光〈狀〉
謹々上　頭中將殿〈御直廬〉

〔本朝續文粹八〕七言、秋夜侍都督前納言水閣、同賦秋深夜漏闌應教詩一首、〈以爲韻、并序〉
藤原匡輔
都督前納言〈匡房〇大江〉尋閑、懷八葉徑寸之國寶、爲三代函丈之帝師、文成棟廟、名過本朝、瓊戸揚廉、都府再勤、叢祠之雲、紫泥降草、率土皆帶竹膝之露、〈下略〉

〔春日社三十講最初御願文〕方今花夏理世之明時、李舜司節之初月、翫三笠山之叢祠、波七箇日之法寳、

〔一遍聖人六條緣起一〕建治二年の夏、熊野へ參詣し給ふ、山復山、脊嶺に雲をふみ、水復水、碧潭に波をしのぐ、玉つしまの叢祠にのぞめば、光無明のやみをてらし、岩田河の流水をわたれば、浪生死のあかをあらふ、

〔太平記五〕大塔宮熊野落事
雨ヲ含メル孤村ノ樹、夕ヲ送ル遠寺ノ鐘、哀ヲ催ス時シモアレ、切目ノ王子ニ著給フ、其ノ夜ハ叢祠ノ露ニ御袖ヲ片敷テ、通夜祈申サセ給ケルハ、〈下略〉

〔古今著聞集一神祇〕北野宰相殿〈輔正〇菅原〉は、天神四世の苗裔也、〈中略〉寛弘六年十二月に、八十五にてうせ給、其後神とあらはれて、叢祠を廟壇の傍にひらかる、

〔明月記〕嘉祿元年十一月十六日、前納言成敎山階出木、无休止時、前叢祠之灌木、以其木欲充新造社棟木山王之間、忽中風、言語斷絕、子息僧子法眼馳向由聞之云々、

〔太平記三十九〕自大元攻日本事

凡上中下二十二社ノ震動奇瑞ハ不及申、神名帳ニ載スル所ノ三千七百五十餘社、乃至山家村里ノ小社、櫟社、道祖ノ小神迄モ、御戶ノ開カヌハ無リケリ、

〔神祇稱號考一〕櫟社　此櫟社は大なる神木の下にかりそめの秀倉をまうけ、或は鳥居のみ立たるなどをいふなり、

〔莊子人間世二〕匠石之齊、至乎曲轅見櫟社樹、其大蔽牛、絜之百圍、其高臨山十仞、而後有枝、其可以爲舟者、旁十數、觀者如市、

〔莊子因人間世二〕見櫟社樹(以櫟樹爲土神而祀之、此二十五家之私社也、)

〔本朝續文粹十二願文〕白河法皇八幡一切經供養願文　敦光朝臣

敬白

奉書寫一切經律論等事(〇中略)

右經律論賢聖集等、敬於石淸水八幡宮、所奉開講演說也、(〇中略)是以踐祚之初、承保之曆、先以參詣八幡大菩薩寶殿矣、自爾古每年姑洗之候、整萬乘臨幸之儀、(〇中略)遜讓以來四十餘載、時々促鸞於松壖之嵐、念々輸誠於叢祠之砌、拜觀之儀、前後相幷二十五度也、(〇中略)初冬十月下旬二日、便於祠壇、展以齋席、枉華轅於枌楡之社、仙官影從、屈羅袙於桐柏之山、(〇中略)

大治三年十月廿二日

〔吉記〕壽永三年(〇元曆元年)四月一日己未、式部權少輔範季朝臣來談云、崇德院御枌社、每事未定、(〇下略)

〔史記封禪二十八〕高祖初起、禱豐枌楡社、(張晏曰、枌白楡也、社在豐東北十五里、或曰、枌楡鄕名、高祖里社、)天下已定、詔御史令豐謹治枌

遙拜所

楡社、常以四時春以羊豕祠之、

〔今昔物語十九〕陸奧國神報寺平維叙恩語第三十二

今昔陸奧守トシテ、平維叙ト云者有ケリ、貞盛朝臣ノ子也、任國ニ始テ下テ、神拜ト云フ事ストナ、國ノ内ヲ所々ノ社ニ參リ行キケルニ、□□ノ郡ニ道邊木三四本許有ル所ニ、少サキ仁。祠有リ、

○按ズルニ、仁祠ハ後漢書楚王英傳ニ尚浮屠之仁祠トアルガ如ク、寺院ノ事ナレドモ、本文小社ノ事ニウツシ用キタルナラン、

〔古今神學類編諸院二十四〕遙拜所

按ズルニ、遙拜所ハ無神殿、唯存拜殿、或ハ又存鳥井者也、是併社例ノ異故爾、或ハ遙拜所ト不言、伏(フシ)拜(ヲガミ)トモ稱セリ、又遙ニ拜スル故ニ、不敬ニ非ザレドモ倉卒ナル拜ト云心モ侍ルニヤ、二所大神宮ノ遙拜所ハ兩宮互ニ有之、〇中略其外ノ遙拜所ニ秘拜ノ沙汰ナド秘傳問答ニ見エタリ、古詩ニ、道ノ邊ノ賀茂ノ河原ノフシヲガミ古木ノ樗陰モナレニキト侍ルハ、遙拜所ノ遺址ニ古木ノ樗ノミアルニヨリテナルベシ、哀レ深ク感慨ヲ含メル意、言外ニ餘勢カギリナクコソ、此類ノ遙拜所、今世諸社ニ其形計リナルハセメテノ事ニテ、大抵皆佛地ニ變ジ、謬傳シテ何ノ佛、何ノ菩薩ノ舊跡ナド云處多カルニヤ、

〔永正十五年一社奉幣使參向記〕參向次第

神宮荒祭遙。。拜所。。乃邊西、四姓司乃下向ヲ相待、各一禮志天過天、遙拜所西神官相著天、各北向神拜有、畢先禰宜退出、次四姓退出、

〔外宮子良館舊記〕神事のていゝ長官御出立、例所へ御著候而御禮は有べし、是より大宮へ御參候て御ちやう拜有、同遙。。拜所。。にて四所の拜有、同一の殿にて内宮の御拜有、

〔和漢三才圖會山城七十二本〕神宮　在上京柳原

本地堂

往古伊勢祭主宅地、而遙拜所也、在兩大神宮、其傍有榊樹、毎月朔日、十一日、二十一日、以上三箇日、祭主供神酒以遙拜焉、

〔永昌記〕嘉承元年十二月十六日癸酉、今日關白右大臣殿令參春日社給、〇中略於八幡伏拜下御、

〔源平盛衰記四十六〕義經行家出都并義經始終有樣事

八幡ノ伏拜ノ所ニテ、義經馬ヨリ下、甲ヲヌギ、弓脇ニ挾デ跪キ申ケルハ、〇下略

〔和漢三才圖會七十二本山城〕洞峠　在男山南、有楠樹、八幡宮遙拜之地、山城河内之國界也十二月八幡山下安居頭屋門前、剃起此地芝草、築壇、勸請八幡宮、安居十五日中、朝夕其頭人拜之、

〔雍州府志三神社〕松尾神社　在洛西、〇葛野郡、中略松尾神坐近江比叡山、號山王大宮大權現、用鳴鏑神也、本殿之左右有社、號神宮、爲北本社之遙拜所、又爲賀茂別雷神、南號本宮、爲南本社之遙拜所、

〔兵範記〕仁平三年三月廿七日丙辰、若宮渡御仁和寺宮、〇中略自大宮北行、自一條西行、自宮城西大路更南行、不可令過北野伏拜給之故也、

〔日吉社神道秘密記〕一八王子伏拜　拜殿アリ

一竹生嶋伏拜有

〔北國紀行堯惠法印〕八月〇文明十七年の末には又旅立、柏崎といへる所まで夕こえ侍るに、〇中略越後信濃上野のさかひ三國峠といへるを越て侍るに、諏訪のふしをがみあり、

〔神道名目類聚抄一宮社〕本地堂　某神社、本地佛菩薩ノ像ヲ安置ス、宮僧ノ預ル所ナリ、

〔日光山志四〕本地觀音堂

拜殿より西の方、銅瓦赤塗、本尊千手大士、立木の像、一丈六尺素木、勝道上人の作、堂内の左右は四天王の像を安す、坂東十八番の札所なり、

〔日光山志五〕御本地堂

修造

鼓樓の西に有、大間造五間に十間許、銅葺東向にて、向拜四間に七間、鰐口を掲ぐ、前三扉、御内陣四間に七間許、向拜虹梁の上に虎の彫物あり、柱金襴卷、長押上も同く地紋彩色金銀を鏤たり、二重垂木黑塗滅金かなもの有、御内陣天井には長八間の蟠龍墨畫なり、狩野永眞安信の筆なり、堂内に安置奉れる尊像は、三州峰の藥師を模し給ふといふ、左右日光月光、十二神將、四天王、愛染明王、千手觀音、如意輪觀音を安置し給ふとぞ、

〔新編相模國風土記〔二十八足柄下郡〕〕箱根三社權現

本地堂(桁行二間五尺、梁間二間一尺、)一名相殿堂ト云、本地佛ハ今本社ニ置キ、此堂ニハ觀音(銅像)及弘法大師(木像)萬卷上人(同上)ノ像ヲ安ズ、慶長四年八月宇賀兵庫奉納ノ鰐口ヲカク、

〔新編相模國風土記〔四十淘綾郡〕〕二宮明神社

本地堂　本社ヨリ南方四町許ヲ隔、海道ノ入口ニアリ、前ニ華表アリ、(礎石ノミニテ再建ナラズ)本地藥師及十二神ヲ安ズ、

〔新編相模國風土記〔四十一淘綾郡〕〕高麗權現社

本地堂　千手觀音ヲ置ク、是高麗權現ノ本地佛ト云、

〔武江神寺錄〔三〕〕愛宕山權現

芝ニアリ、元稻荷ノ社地ナリト云、京ノ愛宕山ヲ移シ玉フ(中略)山ノ鎭守ハ稻荷大明神、本地堂アリ、

〔日本書紀〔二十九天武〕〕十年正月己丑、詔畿内及諸國修理天社地社神宮、

〔續日本紀〔十一聖武〕〕天平六年四月癸卯、遣使畿内七道諸國、檢看被地震神社、

〔續日本紀〔十二聖武〕〕天平九年十一月癸酉、遣使于畿内及七道、令造諸社、

〔續日本紀〔二十六稱德〕〕天平神護元年十一月壬戌、遣使修造神社於天下諸國、

〔續日本後紀二仁明〕天長十年六月癸亥、命天下諸國、修理寺塔破壞者及神社、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年九月甲戌、勅令修理天下定額寺堂舍幷佛像經論、及神祇諸社、

〔三代實錄九淸和〕貞觀六年七月廿七日辛亥、勅曰、去年七月廿五日、頒下五畿幷伊賀、伊勢、志摩、遠江、相模、上總等國云、鎭護國家、消伏災害、尤是敬神祇、欽祭禮之所致也、是以格制頻下、警告慇懃、今諸國牧宰不愼制旨、專任神主禰宜祝等、令神社破損、祭禮疎慢、神明由是發祟、國家以此招災、今欲令神社一時新加華飾、而經月踰年、未有修造、宜早加修飾、勿致重怠、

〔類聚三代格一〕太政官符○中略

一應停官人任諸社神主事

右太政官同日○弘仁十二年正月四日下同國○大和符偁、彼國解偁、有官之輩、若兼任神主、全直本職、不勞神社、神社傾覆、職此之由、望請擇抽無官、一任神主、專事祈禱、令修理神社者、同○右大臣宣、奉勅依請、○中略

以前撰格所起請偁、上件事條、遵行有便、伏望下知四畿內及七道諸國者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔左經記〕寬仁四年三月十九日、下國爲行仁王會也、加階後今日始下向、仍朝光令成神社可修理符遣諸郡已了、

〔朝野群載六神祇官〕注神社全破事

左辨官下南海道諸國

應遣使令實撿言上國內神社全破事

使大中臣義則

史生秦長國

右得神祇官去年七月十七日解狀偁、謹撿案內、去年正月七日宣旨偁、得神祇官去年十月廿二日解狀偁、撿先例、去嘉保三年正月十二日宣旨偁、左大臣宣、奉勅五畿七道諸國社毎有破壞、加其修造、格制重、起請明、而近代以降、多致破損、是則國司不加督察、社司恣致阿容之故也、五畿內神社遣使令注全破、七道諸國預大神實社、下知國司等、早加修理、令復舊基、但官符到來百日之內、錄其勤否、宜經言上、國司若詐此旨、處以重科、永不敍用者、國宜承知依宜行之者、件社司等新雖不被下宣旨、格條所指禁制已重、不可及大破、況乎乍蒙綸旨、猶不令修造、被下官使、愁進官請文之後、全無其勤、貪利潤之間、偏不愼神慮、就中彼國等大小神社破壞、爲風殆可顚倒之由普有其聞、論之物議、乖朝憲、神事違例、職而之由、望請天裁、准五畿內例、被下宣旨者、遣使、且令修造破壞之神社、且注拒捍之輩、經言上者、左大臣宣、奉勅任續文依請者、國宜承知依宜行之、使者經彼之間、依例供給、路次之國、亦宜准此、官符追下、即依宣旨遣使者於彼國々、令實撿神社之處、修補者萬之一、破損者十之九、是則境遠而不加撿知、人怠而不致催促之故也、而蒙此綸旨、皆致勤、或國吏進修復之請文、或社司上造補之解狀、是推一道諸國亦然、望請天裁因准先例、早被下宣旨、遣使者被令實撿件國々神社者、爲神偏致嚴章之誠、爲國永存鎭護之計者、權大納言藤原朝臣公實宣、奉勅任續文依請者、諸國宜承知依宜行之、使者經彼之間、依例勤供給、路次之國人、亦宜准此、官符追下、

康和五年六月七日　大史小槻宿禰

右少辨藤原朝臣　敦光朝臣

〔本朝續文粹二 勘文〕變異疫疾飢饉盜賊等勘文

一去年風水有難今年春夏飢饉事

夫衰弊之漸、其來區分、一者依廟社之不祀也、〇中略 諸國所在大小神社、雖有破壞、難加修理、雖有顚倒、無復基趾、國宰不參祭祀之場、社司無致修理之事、況非家譜之輩知社務之人、誰能竭謹愼之誠乎、誰

能整齊肅之禮乎、

保延元年七月廿七日　　正四位下行式部大輔藤原朝臣敦光

〔吾妻鏡三〕壽永三年○元暦元年二月廿五日甲申、朝務事、武衞注御所存、條々被遣泰經朝臣之許云云、其詞云、

言上

條々○中略

一諸社事

我朝者神國也、○中略若有諸社破壞顚倒事者、隨功程可被召付處、功作之後、可被御裁許候、○中略

壽永三年二月日　　源賴朝

〔吾妻鏡六〕文治二年五月廿九日丙午、神社佛寺興行事、二品○源賴朝日來思食立由、且所被申京都也、且於東海道者、仰守護人等、被注其國總社、幷國分寺破壞、及同尼寺顚倒事等、是重被經奏聞、隨事體爲被加修造也、爲善信、俊兼、邦通、行政、盛時等奉行、今日面々被下御書云云、　六月九日乙卯、去四月之比、政道事、殊可致興行之趣、付議卿令奏聞給了、勅答之條々、執職事目錄、帥中納言被進之、今日所到來也、

條々

一諸社諸寺修造事

於神社者、大概被付國訖、諸寺尤大切、東寺以下殆無其跡、如此令申旨可然事也、早可計仰之由、被申攝政訖、

〔式目新編追加〕可被崇敬佛神事

九州爲宗寺社破壞以下所遂撿見、且可令注進損色之由所被仰使者也、但於遠所者、使者撿見爲難

營造制度

治者、可計沙汰、

寛元三年十二月十六日　武藏守判

備前守殿

〔當宮緣事抄〕當社〈○男山八幡宮〉修理事、祠官一同嚴密被仰下之處、榮淸、承淸一向不致其沙汰之條、頗招其科歟、仍榮淸知行備中國水内庄、承淸知行肥後國泉本庄所被仰付也、早致兩庄同時之管領、可終一社不日之修功者、院宣如此、仍執達如件、

五月廿一日〈○延慶二年〉　左大辨在判

八幡撿挍法印御房

〔新編相模國風土記〈三十七足柄下郡〉〕天神社　村〈○國府津村〉鎭守トス、弘治元年五月北條氏ノ文書ニ〈寶金剛寺藏〉當社修造ノ時ハ、當所ノ番匠ニ命ズベキ由見ユ、〈○中略〉幣殿拜殿アリ、神樂堂　庵〈社ヲ守ルモノ住ス○中略〉

八幡社　當社モ弘治元年ノ文書ニ修理ノ時ハ、當所ノ番匠ヲ召仕フベキ由載タリ、

〔新編相模國風土記〈三十七足柄下郡〉〕寶金剛寺　弘治元年五月、小田原評定衆石卷下野守康保奉リテ、當所ノ寺社修造ノ時、召仕フベキ番匠ノ事ヲ令ス、〈其文書曰、於國府津番匠可召仕事、八幡宮天神宮修造之時、依大郞例成共可召仕事、(中略)大工之事者、八郎左衞門仁相定事、以上右相定上見角中番匠有之者、急度可被申上由被仰出狀如件、天文廿四年五月廿八日、評定衆石卷奉之、北條氏康朱印、〉

〔延喜式〈四伊勢大神宮〉〕凡大神宮廿年一度、造替正殿寶殿及外幣殿、〈度會宮及別宮餘社、造神殿之年限准此、〉皆採新材構造、自外諸院新舊通用、〈宮地定置二處、至限更遷、〉

〔延喜式〈三臨時祭〉〕凡諸國神社隨破修理、但攝津國住吉、下總國香取、常陸國鹿島等神社正殿、廿年一度改造、其料便用神稅、如無神稅、即充正稅、

〔日本後紀〈二十二嵯峨〉〕弘仁三年六月辛卯、神祇官言、住吉、香取、鹿島三神社、隔廿箇年一皆改作、積習爲常、其弊不少、今須除正殿外、隨破修理、永爲恆例、許之、

〔西宮記臨時六〕諸社遷宮事

伊勢宮廿年一度、(在式文、使辨若伯)宇佐宮卅年、(太宰府勤之)住吉廿年、(使神祇副、自餘有例、可勤入神寶事、辨執行、)造春日社之時、自氏院差事生、令注損色、奏聞之後、或附國、令造云云、凡氏社事、氏人承行云々、鹿嶋香取廿年一度、

〔尙通公記〕永正三年七月廿七日乙巳、及晩從南都宗益入國ニツキテ有申狀、文章如此、

就今般武士入國之事、爲寺門連々雖致涯分之計略、尙以無相調儀候、特當社(春日神社)廿一ヶ年之御造替相當明年之間、當年取向營作之大儀處、若及一國錯亂候者、恒例臨時之課役等難事調間、御鎭座以來曾無闕怠御遷宮、至此時可及違亂退轉之條、歎而有餘子細候、〇中略可然之樣可有御披露候、恐々謹言、

七月廿四日　　良家衆等

越前上座御房

〔八幡愚童訓上〕我日本人王十六代譽田天王也、護國靈驗威力神道大自在王菩薩也告給、百王鎭護三韓降伏神明、第二宗廟祝給者也、豐前國宇佐郡馬城峯石體最初垂跡所也、天平勝寶元年造營宇佐宮、卅三年ニ必造替シ奉ル、九州平均課役也、

〔日本紀略嵯峨〕大同四年四月辛卯、勅修造諸國神社之狀、宜勅先訖、而經涉年月、未加修造、自今以後所在長官專當其事、勤致修理、其料度者、以神稅宛、無封之社宜用正稅云云、

〔類聚三代格一〕太政官符

應令神戶百姓修理神社事

右奉勅、諸國神戶例多課丁、供神之外不赴公役、宜役其身、修理神社、隨破且修、莫致大損、國司每年巡撿修造、若不遵改、更致緩怠者、隨狀科祓、

弘仁二年九月廿三日

〔類聚三代格 一〕太政官符
應令無封神社令禰宜祝等修理事
右有封之社、令神戸百姓修理之狀、下知已訖、至于件社、未有處分、今被大納言正三位藤原朝臣園人宣偁、奉勅、宜仰諸國、自今以後、令件等人永加修造、毎有小破、隨卽修之、不得延怠令致大破、國司毎年屢加巡檢、若禰宜祝等不勤修理、令致破損者、並從解却、其有位者卽追位記、白丁者決杖一百、國司不存檢按、有致破壞者、遷替之日、拘其解由、但遭風火非常等損、難輙修造者、言上聽裁、
弘仁三年五月三日

〔延喜式 三 臨時祭〕凡神戸調庸、充祭料幷造神社、及供神調度、但田租貯爲神税、
凡國幣神兩社、讚岐國封戸調庸租米者、送納此官、〈〇神祇〉充修社料、
凡枚聞社、武藏國封戸調庸租穀者、停收此官、〈〇神祇〉收社充修社料、
凡住吉社、長門國封租穀者、令封戸傜夫運送、除運功之遺、令遣傜分、用修社料、但豐浦郡封戸傜夫者、便留充御蔭社、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年四月戊辰、是日勅、敬神如在、視民如子、國宰能事、今古通規、是以屢施條章、觀彼治道、而吏乖公平、民苦疾疫、年穀不登、氣候荐變、論之政迹、理合懲貶、事天之則、懷人之情也、宜更下知五畿內七道諸國、改旣往之怠、成方來之勤、巡行所部、修造神社、禰宜祝等若有怠者、解却決罰、一依前格、年中修造之數、別錄言上、若三年之內、遣使覆檢、猶有破壞者、國司郡司科違勅罪、

〔類聚三代格 七〕太政官符
應神社帳准官舍帳勘畢之日、令修式部省事
右得勘解由使解偁、官舍器仗池堰國分寺神社等類、中破已上前司出料幷修理之狀、毎年申上明立格制、而諸國言上不與解由狀內、多數神社破損、因玆卽仰神祇官、令勘破損色目、申云、或國雖進社帳、

不具色目、或國不進其帳、無由據勘者、是則無積科責之所致也、夫有司勘事文案爲本、不撿彼帳何辨眞僞、今撿弘仁十一年三月十九日格偁、民部省解偁、官舍池溝等帳偏載修理之色、不顯其總目、或不見修理之由、只注其總目、望請下知諸國、上件色目一々令申、進官之日、即下二寮、召朝集使爲例勘合、勘畢之日、省移式部省、待移文到、乃爲上日、如此則諸國進有據之帳、使者致勘出之帳、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅依請者、望請神社帳因准件格、令神祇官爲例勘會、即下知諸國具注色目、幷移式部省等事、一同官舍帳者、右大臣〔○藤原良相〕宣、依請、

貞觀五年九月廿五日

〔類聚三代格　一〕太政官符

應以大社封戸修理小社事

右撰格所起請偁、太政官去弘仁十三年四月四日下大和國符偁、得彼國解偁、撿案內、太政官去弘仁三年五月三日符偁、有封之社、令神戸百姓修造、無封之社、令禰宜祝部等永加修理、國司不存撿挍、有致破壞者、遷替之日拘其解由者、國依符旨行來尙矣、而今有封神社、已有治力、無封神社、全無修料、仍貪幣〔○食幣一作貪幣〕祝部無由修社、更加撿責、各規遁隱、推其苦跡、誠有所以、仍撿神苗裔、本枝相分、其祖神則貴而有封、其裔神則微而無封、假令飛鳥神之裔天太玉臼瀧賀屋鳴比女神四社此等類是也、望請以無封苗裔之神、分付有封始祖之社、則令有封神主鎭無封祝部、然則社有修掃之勤、國無祟咎之兆者、右大臣宣、奉勅依請者、事施一國、遍行有便、伏望下知四畿內及七道諸國者、中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十六年六月廿八日

〔政事要略　五十四〕勘解由使勘判抄

一神社事

无教判云、令前司并同任出料、見任修理待了放還、少破无教判云、有封神社、見任之吏、令神戸百姓造、
无封神社、令禰宜祝等造、

淡路 前司伊勢春友死去　新司菅野直紹使藤仙生

常赦判云、无實者、失由不明、須令前司并同任禰宜祝等修填、待了放還、

延喜六年判

又云、无實者不修填、怠在前司去任之後、依格入京、須見任與彼同任居職史共催責郡司禰宜祝等
修填、若非國司自犯者勿責赦前司、破損者、中破以上者、未修之怠事在恩前、彼司相承、同令禰宜祝等
修理、莫拘前司、

淡路 前司伊勢春友死　新司菅野直紹使藤仙生

又云、大中破損、大風大雨、異損之由已經言上、須見任相承、有封之社者、以彼封物令禰宜祝等修理、无
封之社令禰宜祝等修理、若多損少料者、申官聽裁、

延喜六年判

下野 使藤方由

非常赦判云、前司卒去、同任會赦、須見任相承、无實者、令禰宜祝及神戸百姓等早修填、若无封少社者
分祖神社封戸、令同前人等修造修填、

〔政事要略五十四〕太政官符神祇宮内等官省

應°修°理°神°社°事°

右修理神社、具在格條、而時世漸久、憲法頽緩、爰件社禰宜祝等不修少破、遂致大損、是則待公家之修
理、不加私功之緩怠之所致也、左大臣宣、奉勅、自今以後、差公使令修理之狀、社修理之時、禰宜祝并社
預等相共檢知、請覆勘文、同加署名、仍須十年爲限、其間小破、禰宜祝并社預等卽加修理、立爲恆例、不

得違失者、官省承知、依宜行之、符到奉行、

參議右大辨藤原朝臣　　　　左大史阿刀宿禰

延長四年五月廿七日

〔新抄格勅符抄〕太政官符　神祇官

雜事拾壹箇條○中略

一應重禁制神社破損事

右神社破損其制已重、犯過之輩罪科不輕、○中略而國宰不守憲章、社司無有勤節、彌倍頽壞常爲墟蕪、或指枯木之下稱社、或排荒野之中稱祠、空違潔愼之勤、動招侮蔑之祟、同○左大臣宣、奉勅自今以後、國司屢以巡撿、令勤修理、兼致守護、符到之後猶有怠慢之輩、加其科責一如先格、○中略

正五位下守右中辨源朝臣道方

正五位下行左大史多米朝臣國平

長保元年七月廿五日

〔類聚符宣抄〕一應五畿内七道諸國司修造神社、令所司加載功過勘文、舊損新功明其勤惰事

右太政官今日下五畿内七道諸國符偁、修理神社、敬愼祭祀、先格後符載而分明、而近代以來遠近諸社、或破壞損失、或顚倒無實、不事祭祀、如忘憲法、是則時及澆季、吏少勤節之所致也、今須國司專當、每年巡撿、有封之社、令神戸百姓如舊繕修、無封之社、令禰宜祝等同以營造、每有小破隨以修之、不致大破、以嚴祭場、國宰無勤隨狀科祓、遷替之日拘其解由、社司致損從以解却、侮慢神事之怠、社司雖重、忘却朝章之責、國宰何避、權左中辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉勅下知諸國、早加修造、如舊祭祀、兼仰所司、自今以後加載功課勘文、舊損新功明其勤惰、令成勤之輩殊預勸賞、令致惰之倫必從重科者、

長保四年十月九日　　左大史小槻宿禰奉親奉

〔壬生家文書花〕太政官符山陰道諸國司

雜事拾貳箇條

一應令有封社司并諸寺別當修造本社本寺事

右保元二年十月八日符云、修造之務載在格條、隨破且修何致大損、而諸司社寺官長、徒貪所領田園之利潤、不顧□□舍屋之破壞、頽毀之後、初經奏聞、申請別功、致其造營、論之朝章、理不可然、儻令本社本寺本司等、勤其修造、若背符旨尚致懈緩、解却見任、永不叙用、其中顚倒無實及大破等私力難及者、各勤在狀、不日言上者、同宜奉勤任彼符、儻令遁行者、

以前條事如件、諸國承知、依宜行之、符到奉行、

治承二年七月十八日　正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣〇花押略

修理左宮城判官正五位下行左大史播磨介小槻宿禰〇花押略

〔玉葉〕建暦二年三月廿二日宣旨左大臣右中辨

一可令有封社司修造本社事

抑已上修造之勤、格條炳焉、而社司寺司等徒貪社領寺領之利潤、不顧本社本寺之破壞、然間靈祠鞠莬、而秋露空濕、幽若檐頽分、春雨不留、須隨小破且加修理、而及大損始經奏聞、須申請別功、剩爲己忠、僞稱致造畢、偏忘公平、論之政途、殆指拘〇推恐誤科條、儻令彼司等致遂々修造、若背符旨尚有懈怠者、解却見任、撰人改補、兼又有殊功宜加褒賞、但其領不幾其勤難及者、注損色經言上、課別功令造營、

〔御成敗式目〕一可修理神社專祭祀事

右神者依人之敬增威、人者依神之德添運、然則恆例之祭祀不致陵夷、如在之禮奠莫令怠慢、因玆於關東御分國々并庄園者、地頭神主等各存其趣、可致精誠也、兼又至有封社者、任代々符、小破之時且加修理、若及大破、令言上子細者、隨其左右、可有其沙汰矣、

〔吾妻鏡四十〕建長二年七月廿二日、都鄙神社廢陵事、殊可有興行之由及御沙汰、於勅願所事者、追可被任奏聞、先至關東御分所々者、任被定置之旨、可抽修理之功、若又及大破者、不日可令言上、隨其左右可有御沙汰之由所被仰出也、是當世別當神主等、只貪佛物神領、輙無興隆之志之旨、度々評定之時、凝群儀如此云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年二月廿九日辛酉、關東御分寺社、殊可興行於神事之由日來有其沙汰、今日被始行之、〇中略

一可修造本社事

有封社者、任代々符、少破之時、且加修理、若及大破言上子細者、隨其左右可有其沙汰之由被定置訖、而近年社司恣貪神領利潤、無顧社壇之破損、匪啻不恐神慮、專可謂忘公平、自今以後於背此制法輩者、可被改補其職矣、

〔式目新編追加〕一社壇修理事、次神事退轉事、

或加修復、或可勤行之由可仰含總官、若緩怠之輩者可注申之旨、可相觸守護人、

近國諸社修理御祈禱訴訟御寄進所領等、於引付可申沙汰事、弘安七、八、二、

一番伊豆宇都宮　　二番三嶋熱田六所宮

三番鶴岡香取　　四番諏方上下

五番宮根日光

右寺社奉行人可尋下、有子細者守此旨可賦引付也、既有沙汰之分者、本引付可申沙汰、

〔新御式目〕弘安七、五、廿、

寺社領如舊被沙汰付、被專神事佛寺、被止新造寺社、可被加古寺社修理事、

〔康富記〕文安元年四月十七日丙戌、於軒廊被卜北野火事、造假殿可奉請歟、卜云吉、占云凶、回廊間數字、舊跡

可減歟、卜(云吉、占云凶、)造宮事、菅氏長者大藏卿爲長卿給長門國、可致其沙汰之由被仰下了、

〔權別當宗清法印立願文〕敬白　立願事

一當宮御修理不奏聞公家可爲寺領勤事

右宗廟之爲重事、朝家殊有尊崇者歟、是以領數萬戸之民烟、爲大小社之神領、五畿七道國衙莊園、入官家者十之二三、領神社者十之八九、就中世及澆末、人輕朝威、權臣擅國、公家少利、而諸寺諸社寺官社官、徒貪寄進之田園、不致破壞之修造、偏爲朝家之煩、如忘公平之基、至當宮者、省充寺領、令致營作、兼定置其所、莫令成對捍、自少破各用意、無大費終其功、凡非過分之大營者、宜駐任意之上奏矣、

建保五年正月廿七日　弟子石淸水護國寺權別當法印大和尚位宗淸

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一諸社神事祭禮等、從先年如相定、不可有退轉事、附以其社領寄進物可成程者、可加修理、若及大破不叶時者、奉行人迄可相理者也、右於無沙汰者、神主社家可爲曲事事、

〔寶曆集成絲綸錄(十九寺社)〕寶曆七(丑)年五月

寺社御修復願之儀、享保年中ゟ度々申渡、寬保元酉年御修復願出候寺社多有之候節、御代々思召を以、御造營御修復等被仰付候寺社、永々御修復所と相心得、大破に及び候上、御修復之願、又は勸化等之儀願出候、左樣には有之間敷事に候、向後上ゟ御修復被仰付間敷候、勿論寺社領相應に有之場所者、自今以後小破之節、早速修復を加、及大破候節願出、或は專ら勸化之事願候儀者有之間敷儀に候旨、右之通御修復寺社(江)可被申渡旨相達候所、其節御修復願候寺社、其外右に可准寺社(江も)不洩樣申渡無之哉、此以後願出候はゝ際限無之事候條、以來彌前書之趣に相心得、公儀(江)もたれ不申、寺社領、或者世間之助力を以、修復致候樣、兼而寺社之者共(江)猶又不洩樣得と可被申渡置候、且又寬保之度相達候趣、被申渡候上にて、自力修復難調儀(者)有之願出候はゝ、寺社之格合を

以、勸化御免被仰付候儀茂可有之、其助成を以修復に取懸り候節、御由緒之輕重に應じ、御金材木之内可被下哉、是亦寺社之者共江申渡候儀者無之、寺社奉行心得之爲申聞置候段、其節相違置候通に候得ば、縱御修復、或は勸化等之儀願出候共、容易に者取上候筋には無之候處、近頃者願次第一通り被相糺候迄に而、得と寬保之度申渡置候書面之趣を以被相糺、被申聞候儀にも不相見候、此度相達候趣、尙又寺社之者共江被申渡候上にても、御修復或者勸化等願出候寺社茂有之候はば、彌前書之趣を以得と被相糺、無據筋者被申聞候樣、可被相心得候、

右之通此度寺社奉行江申渡候、享保年中ゟ度々申渡、勸化又は御金材木等被下可相濟場所茂、其以後御修復願出候節、右之吟味無之、願之書面を以吟味有之、又候御修復被仰付候類茂有之、區々に相成候條、以來御修復願等吟味に下げ候節、前書之趣を以得と遂吟味、以來間違無之樣可被相心得候、

五月

〔寶曆集成綠綸錄十九寺社〕寶曆八寅年八月

寺社奉行江

總而寺社之分、前々公儀ゟ御修復被仰付候場所場所、幷御金槫木類被下、或は勸化開帳等御免、助力を以致修復候箇所箇所共、此度一統不洩樣相調、右寺社之格合、御由緒之輕重、寺社之多少、幷御修復金被附置候分委く相糺、去丑年相達候書付之趣を以被作略、自今共御修復可被仰付分、又は御金槫木類被下、或者勸化開帳等御免可被仰付分、其外共委く認分、帳面に仕立可被差出候、勿論御宮御靈屋等有之場所茂、所により前々御修復被仰付候儀茂有之、又御金被下候儀も有之候得共、御宮料御靈屋料幷御修理料金之有無多少等に寄、御手當可有之儀に候之間、其趣相心得、尤寬保年中寺社御修復願之儀に付、伺相濟候箇所之分者、右伺相濟候趣にて、右之振合を以、總寺社、不

渡候樣相糺、書付可被差出候、

八月

〔天明集成絲綸錄寺社二十六〕寶曆十三未年八月

寺社奉行江

遠國寺社御修復願等にて出府仕候者、願之否相濟候迄、當地に相詰罷在候而者難儀茂可致間、以來者自分勝手にて當地に罷在候者格別、左に無之分者、何茂江願書被請取候はゞ、一旦歸度者は、勝手次第相歸候樣可被致候、

八月

〔天明集成絲綸錄寺社二十九〕安永三午年十二月

寺社奉行江

總而寺社御修復等之願申立、各より被申聞候迄、右願通相濟候樣致度段、年寄を以御所方江相願、禁裏御崇敬茂有之候に付、願之通被仰付候樣被成度旨御沙汰之趣、所司代より申來候類茂有之候、一旦公儀江相願候儀を、猶又御所方江相願候儀者有之間敷事に候、以來右體之儀有之候はゞ、却而願之障にも相成、筋に寄急度被及御沙汰候儀茂可有之旨、寺社之輩江可被申渡候、

十二月

〔天明集成絲綸錄寺社三十〕安永六酉年五月

寺社奉行江

遠國寺社御修復之儀、向々より願出、是迄段々被相伺候分箇處多、一度に御修復被仰付候而者、御入用相嵩候に付、三州信光明寺、攝州多田院御修復等之儀者、當年御差延之積り可被相心得候、勿論以來者、遠國寺社御修復一ヶ年御入用高定置、願捨置分計、御修復被仰付候筈に候間、其趣被相

心得、向々より御修復願出候はゞ、破損之様子得と相糺、輕重之趣可被申聞候、尤其時々御勘定奉行江可被談候、

〔天保集成絲綸錄 五十五 寺社〕寛政二戌年十二月

諸寺社御修復等之儀ニ付、度々被仰出茂有之、御代々思召ヲ以、御造營御修復等被仰付候寺社、永永御修復旨相心得、只今迄者及大破候上、御修復又者勸化等之儀願出候、左樣ニ者有之間敷事ニ候、向後ハ上ゟ御修復被仰付間敷候、勿論寺社領相應ニ有之場所、自今以後小破之節、早速修復を加可申、及大破候上願出、或者專勸化之事願出候者有之間敷儀ニ候旨、寛保寶曆之被仰出茂有之候處、年久敷儀ニ而不相辨向も有之哉、近來御修復又者勸化富興行等之願數多有之、就中富之儀者箇所多く相成、世上之風儀にも拘り候間、追々被減候筈ニ候、實ニ無據子細有之願出候ハゞ、品ニ寄勸化開帳等ハ御免も可有之候得共、可成丈小破之節修復を加へ、公儀江もたれざる樣ニ可致事一ニ候條、可存其旨候、

十二月

〔御成敗式目〕一謀書罪科事 付以論人所帶證文稱謀書事

右於侍者可被沒收所領、若無所帶者、可被處遠流也、至凡下輩者、可被捺火印於其面也、執筆者又與同罪、次以論人所帶之證文、爲謀書之由多以稱之、披見之處、若爲謀書者、尤任先條可有其科、又無文書之訛謬者、仰謀略之輩可被付神社佛寺之修理、但至無力之輩者、可被追放其身也、

〔寺社奉行留書 一〕覺

一神社佛閣修造金銀之事、

一出家之出世金、座頭之官金等之類之事、

右二ヶ條者、向後年月之無構、可有裁許候事、

元祿十五被仰出候

午閏八月

〔寺社奉行留書 六〕寺社奉行江

寺社御修復之儀享保十一年申渡候通、彌可被相心得事、

古跡之重キ寺社、又ハ各別御由緒有之候處、寺社領も少く、旦方氏子等之助力も無之處者、御手不被附候而者退轉可有之候條、御修復金可被下候、有來ル通り不殘不致修復候而も、可相濟所ハ省略致し、修補候樣可被相心得事、

京六孫王社、修宮、江戸穴八幡之類候事、

右寺社領茂相應ニ被附置、其上世間之助力も有之、かなりに修復可相務所者、自力を以修補候樣ニ申聞置、取掛候節、輕ク御金可被下候事、

武州六所明神、淺草觀音堂之類候事、

以上

三月（享保十二年）

〔寺社奉行留書 一〕本多伯耆守口上ニ而申渡之覺

江戸廻古跡拜領寺社之分作事願候節、向後堀改來江不及屆手紙候間、普請修覆等奉行所江不及斷可仕候、勿論前々被仰出候御定之通、相違無之樣ニ入念乾度可相聞、幷別紙御書付之通、是又堅可相守也、尤改方彌可被相改候、若此上不埒於有之者可為越度候、

右之段觸下、幷門前町屋等迄申渡者也、

元祿四年未八月十四日

〔寺社奉行留書 一〕覺

寺社方作事之儀、前々被仰出候通、彌堅ク可相守、總而新規之普請、作直總構之作事、門建直し者、繪圖書附を以奉行所江相伺可受差圖候、但葺替等有來之通無相違致修復候ハヽ、奉行所江不及屆作事可仕候、

右之趣向後堅可相守者也

元祿十四年巳四月　日

右伊賀守宅内寄合ニ而、觸頭共江申渡之、

覺

寺社方作事之事、葺替根繼等有來通無相違致修復ニおいては、不及達奉行所江可加修理、新規之普請建立作足、且又外ヶ輪總構、幷門修復等之事者、以繪圖書付達奉行所江可受差圖、門前屋敷等右ニ可准事、

右作事儀、元祿年中申渡候趣有之といへ共、近年相亂、或ハ心得違之事共有之條、向後右之趣可相守者也、

正德三年癸巳六月十八日

右之書付之儀、同役中遂相談、御用番井上河内守殿江伺之上、巳六月十八日、月番於森川出羽守宅觸頭共召出、松平對馬守、土井山城守、出羽守、列座ニ而、元祿年中申渡候寺社方家作等之儀、心得違之事茂有之ニ付、此度相改申候間、觸下江可申渡旨、出羽守申渡候書付相渡ス、依之書留置者也、

〔寺社奉行留書二〕諸作事

戌十二月十九日戸田山城守殿御渡候書付土井伊豫守ゟ相廻

一寺社境內作事之事〇〇〇〇〇〇〇〇

右者有來所修復之分ハ不及伺ニ、勝手次第致し候樣ニ可被申渡候、

一同表向幷門前町屋作事之事
右可爲同前候
一同境内新規作事、幷造り足作事之事、
右新規之作事、或は作り足作事之儀、有來通にて事濟可申義ハ、其通ニ可差置候、作事不致候而不叶義於有之ハ、隨分輕ク可仕候、若花麗成儀仕候ハヽ潰可申候間、兼而左樣可心得旨可被申渡候、○中略
一遠國御修復願之事
右者可爲伺之通候、尤難成筋ニ候ハヽ、其趣申聞可被差戻候、
以上
左記四通之書付、文三月十日於御城、戸田山城守殿江差出、
一寺社境内作事修復建直之節、寺社奉行所江相願被差免候、則拙者共方へ爲繪圖以口上相屆申候、寺社奉行衆江願相濟候間、作事之儀勝手次第仕候樣ニと申渡候、若御帳面と境内坪數門前町屋、或持添地仕添地、本寺違文字相違之儀有之候節、家作ニ障無之樣ニ而御座候へハ、作事ハ勝手次第可仕候、ヶ樣之相違有之間、寺社奉行衆印形之斷手紙可致持參由申渡、印狀致持參候節申上、御帳相直申候、○中略
右之通御座候、相違無之候得者、願之通可仕由申渡候以上、
正月

本藏鄕右衛門
朽木十兵衛
榊原隼之助
有田忠右衛門

飯田四郎左衛門
酒井新三郎

一寺社境内作事之事
右有來所修復之分ハ、奉行所江不及願出、勝手次第可致修復候、
一同表向作事之事
右有來通之修復、又は門塀葺替等之類、只今迄ニ相替品も無之分ハ、奉行所江不及願出、可改作事、
一同境内新規作事、幷造り足之事、總而有來通ニ而可事濟義ハ、新規幷造り足可致無用候、不致作事候而不叶義於有之ハ、隨分輕ク可仕候、若花麗成義仕、追而相知候ハヽ爲取崩可申候間、兼而左樣可相心得候、右之分も向後者奉行所江不及願出、可致作事候、〇中略
右之趣被得其意、觸下幷門前町家之者共迄可被申渡候、
十二月 〇享保二年

〔寺社奉行留書 一〕寺社方作事觸、幷申渡之覺、元祿四未年八月十三日於御城、寺社奉行江阿部豐後守殿被相渡候書付、
覺
古跡拜領地、寺社方借添之地、作事幷作り出シ候儀、彌以堅仕間敷事、〇中略
右之通急度可相守、斷無之於令違背者、可爲曲事者也、
八月十三日

〔評定所規則留 二〕百姓刀を帶商賣事、佛像建立之儀、御代官江申渡候事、
覺　和泉守殿御渡シ

以成功修造

在々新規之小き祠、或ハ佛像建立停止之事、

丑〇享保六年閏七月

〔朝野群載六神祇官〕申神社損色

圖幷韓神社

請特蒙天裁被下宣旨差賜官使勘注神殿雜舍廻垣等損色令別功粮致修造狀、

右謹撿案內、御社去治暦二年修造以後、漸及廿ケ年、神殿舍垣等、多以破損、雖遁風雨二季祭奠、諸官供奉祗敬之間、蒸嘗有煩、望請天裁被下宣旨差賜官使勘注損色、將令別功粮早致修造、仍勒在狀謹解、

永保二年正月十三日　　　預宮主從五位下行神祇大祐卜部宿禰兼宗

〔長秋記〕元永二年十一月十五日、賀茂御祖社燒亡事、左府被仰云、於正殿二字者、本社司可令造進也、而治部卿申、嘉承例不苦由、若其餘懼思食者、可被行御卜、是神慮難測故也、於廻廊中門等、如人々定申、尋付成功輩可被造歟、但募成功輩漸多、其數待次第之間、自然送年月、不遂其望有辭去者、尤可哀憐事也、又募率遷任當任受領成功之時、寄事於左右、神社仍守封家納實物、全以不濟、只亡庄園、煩士民、爲一身之勤功、爲朝有何益哉、然者支配諸國、減少其功者、不日之功易成歟、於雜殿屋者、如人々申、本社造假殿、倚臨時祭、尤有其便歟、以此趣可示遂顯隆朝臣許者、仍略注件旨、相副圖皮文書、遂遣辨許、　十九日、頭辨御消息申左大臣殿云、鴨社造營事、本社司與成功者、吉凶被問官〇神祇寮〇陰陽寮申、本社司吉由、官申成功吉由、就何可被造營哉、可令量申給者、相副形事卜　御返事云、官寮御卜相違時、於伊勢事者、付官卜所被行也、但如今度卜狀者、只申成功吉由、不申社司不吉旨、於寮者社司吉也、成功不吉由所卜申也者、重言上、吉凶委被尋問、隨申旨可被行也、吉事外旨、吉凶相違者、付官申可被行歟、此旨可被奏者、此趣省略消書相副卜形返遣了、

〔中右記〕元永二年十一月八日、今夕頭辨依院(白河)御氣色送消息云、鴨御祖社早可造進事、社司辭申也、當社無成功例、何樣可被行哉可量申者、

進返狀云、件御社造營事、是正殿幣殿下知社司可被造進也、正月元三之間、御假殿事頗不穩便、年月內可造畢之旨、可被仰社司也、若力不可堪之由猶以言上申請事可被裁許也、如榮爵被下宣旨如何、中門廻廊舞殿等已及廿年了、早尋成功者、明年四月祭以前可造進由可被仰下也、當社未有如此大事、仍可被忩作事也、春日、平野、大原野、吉田等社、有大破時、皆募受領功所被造營也、依彼社等例被修造有何難哉、但臨時祭在近、作假殿屋擬舞殿、被遂如在之禮可宜歟、早以此趣可被奏達之狀如件、

〔玉海〕治承五年(○養和元年)三月十一日丁亥、午剋頭辨經房朝臣爲院(○後白河)御使來、余(○藤原兼實)謁之、經房云、鴨社遷宮當今年、而神領等爲所々領被押取事等、度々雖訴申、無裁許之上、關東神領等、併爲賊徒被虜領了、仍社家之力、不可堪造營、(先例爲本社之沙汰、所被造營也、)仍任他社例被付成功、爲公家御沙汰可被成土木之由、彼社司進解狀、此事已爲新儀、何樣可被行哉者、申云、於訟訴任道理可被裁許歟、關東神領等事、所申無疑殆、但彼社領等必限關東歟、以他領幷神封等之力猶可勵勤之由可被仰付樣、所詮之不足又不可默止、被付成功何事之有哉、年來爲社家之沙汰、偏爲蒙御沙汰之條不可然事歟者、經房云、左府申狀同前也、　九月十八日辛卯、戊剋頭辨經房爲院御使來問兩條事、

一伊勢大神宮伊壯宮、爲熊野賊徒被追捕之間、寶殿破損、仰宮司可被造替之處、依申功程莫大其力難及之由、可被付成功也、所望之輩六人、(各雖有子細、不遑悉注、)此中以何可爲專一哉、宜令計奏者、下官申云、或前宮司募還任之功、或先補神祇副之後、可申造進之由、或權宮司募申所分前之間、皆以難被許、大中臣基親(祭主親基二男)申募神祇副功可造宮之由尤穩便也、更不可及異議云、

〔吾妻鏡〕(六)文治二年五月二日己卯、前對馬守親光可被還任之由、重所被申京都也、此親光(○中略)任中之間、爲御祈禱或令修造八幡宮以下鎮守諸大明神六十餘社之御寶殿、或奉飾同宮放生會御輿裝

東、并鎧御帳及神殿御戸帳、舞裝束等、其准額爲三萬餘匹云云、載目六、先日持參關東、凡任國之時、修造此等神殿之者、蒙其賞被仰重任遷任之例也、可蒙賞之旨言上、〇中略以此次可拜任尋常國之趣、內擧二品〇源賴朝御擧達、而無闕國、如元可拜任彼島之由被奏聞之、以除目之次可被任之旨勅答畢、

以料所修造

〔細々要記 二〕康永三年十一月十八日、夜神木御遷座金堂前、當社ノ中社以下造替料所、楠葉關ヲ依成一切經ノカタギ料所、衆徒訴訟也、

〔新編相模國風土記 足柄下郡 二十七〕早川庄

湯本村、由モ度幸眞〇中略古ハ東海道中ノ宿驛ニテ、湯本宿ト唱ヘシ由、古書等ハ多ク湯本宿ト記セリ、〇中略永享ノ頃ハ、當所ニ關門アリ、其征錢ヲ鎌倉大寶稻荷社修理ノ料ニ宛ラル、〇鶴岡神主大伴氏藏文書曰、大藏稻荷社修理並相州湯本關所事、如元當社關務之儀、可有御成敗候、十月二十三日、修理亮殿憲允清方、按ニ、文中ニ如元當社關務云々トアレハ、是ヨリ以前ニ修理料ニ充ラレシコト知ベシ、清方ハ永享十一年管領トナレリ、

〔新編相模國風土記 足柄下郡 二十四〕禁制

鶴岡八幡宮兩界一切經以下修理料所、相模國小田原宿關所事、右甲乙人等不可致違亂煩、若有違犯輩者、可被處罪科之狀、依仰下知如件、

寶德四年四月廿一日　前下野守花押

以勸化修造

〔享保集成絲綸錄 寺社 二十一〕寛保二戌年五月

諸國寺社修復爲助力勸化御免之上、寺社奉行連印之勸化狀持參、御料私領寺社領在町致巡行候寺社之儀、只今迄村方により勸化停止之旨、地頭方申渡有之候間、勸化難成由斷申所々も候段相聞候、私之勸化相留候儀は、領主心次第ニ候、從公儀御免之上、諸國巡行之事ニ候條、寺社奉行連印之勸化狀持參候寺社之儀江ハ、志次第可致勸化旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭方、兼而可申聞置候、

右之通可被相觸候

〔寶暦集成綸錄 寺社 十九〕寶暦九卯年六月

都而諸勸化之儀相願候者は、家別割ニ不殘寄進有之事之樣ニ存候も有之趣相聞候、既志之輩者可致寄進旨相觸、其上ニ而不差出分には志無之者ト相聞候、右之趣ニ候間、此度之觸者難相成候間、其段得と可被申聞候事、

〔御觸並御書付留 五〕諸國寺社修復爲助成、相對勸化巡行之節、自今者寺社奉行一判之印狀持參、御料私領寺社領可致巡行候、

公儀御免之勸化ニ而者無之、相對次第之事ニ候間、御免勸化と不紛樣可致旨、御料者御代官、私領ハ領主地頭ゟ、兼而可被申聞置候、

右之趣可被相觸候

明和三戌年八月

〔御觸〕諸國寺社修復爲助成、相對勸化巡行之節、自今者寺社奉行一判之印狀持參、御料私領寺社領在町可致巡行候、公儀御免之勸化ニ者無之、相對次第之事に候間、御免勸化と不紛樣可致旨、御料者御代官、私領ハ領主地頭ゟ、兼而可申聞置候、

右之通明和三戌年相觸置候處、年暦相立、御免勸化ハ其度々觸有之、相對勸化ハ寺社奉行一判之印狀を持參候故、不審ニ存候而も相聞候得共、紛敷者ニ者無之候間、其段可相心得候、右之通御料者御代官、私領者領主地頭より、不洩樣可觸知者也、

天保十四年卯六月

〔寺社奉行留書 六〕諸國寺社勸化巡行御觸之義ニ付申上候書付　寺社奉行

○○○○○○○○○諸國寺社修復爲助力勸化相願御免之上、寺社奉行連印之勸化狀持參、御料私領寺社在所巡行仕

候節、村方ニ而諸勸化堅ク停止之旨、地頭ゟ彙而申渡有之候旨觸無之候而者、勸化難成旨斷申、一向取合不申村方數多有之候付、修復助力ニ不罷成、無益之失却相懸リ難儀仕候、地頭々々江御觸有之候樣仕度旨願出候寺社茂御座候、右之通勸化相滯候而ハ、御免之上巡行仕候而茂、修復助力ニ不相成候間、自今寺社奉行連印之勸化狀持參、巡行致候寺社之輩江者勸化可仕旨、御料は御代官、私領は領主地頭ゟ可申渡旨、一統御觸御座候樣仕度奉存候、依之奉伺候、則別紙御觸書案奉入御覽候、

四月

(朱書)戊四月左近將監殿江進達、同十二日御返し被成候、

御觸書案

諸國寺社修復爲助力勸化御免之上、寺社奉行連印之勸化狀持參、御料私領寺社領在町致巡行候寺社之輩江者、自今無滯可致勸化旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ゟ彙而可申聞置候、

四月

(朱書)戊四月十日左近將監殿江進達、同十二日御返被成候事、

諸國寺社

勸化巡行御觸之儀被仰聞候趣付申上候書付　寺社奉行

諸國寺社修復爲助力勸化相願、御免之上寺社奉行連印之勸化狀持參致巡行候寺社之輩江者、御料私領寺社領在町共ニ無滯勸化可仕旨、一統之御觸御座候樣ニ仕度段相伺候處、申上候通ニ而者紛敷儀も出來、末々ニ至候而者不行屆事も可有御座候間、勸化御免之寺社江者、其度々申上、何國之寺社、誰何ノ年ゟ何ノ年之間、何レ之國々勸化御免致巡行候間、御觸被成下候樣ニ其度々申上、御觸有之候方可然旨被仰聞承知仕、御尤奉存候、私共儀も勸化御免之寺社、其度々御觸御座候

様仕度存寄ニ御座候得共、勸化願出候寺社、其度々御觸被ㇾ申儀如何ニ奉ㇾ存候付、一統御觸も御座候はヾ、勸化滯候儀も有二御座一間敷哉と存申上候得共、被二仰聞一候通ニ而者、其度々申上、御觸御座候方可ㇾ然奉ㇾ存候、則觸書案奉二入御覽一候、

右之通御觸御座候はヾ、先達而相伺候一統之御觸ニ者及申間敷奉ㇾ存候、

四月

（朱書）戊四月十日左近將監殿江進達、同十二日御返被ㇾ成候寫、

御觸書案

何國　　何國何宮寺

何國

何國　　誰

何國

右寺社及二大破一候付、修復爲二助力一勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參、何ノ年ゟ何ノ年迄、御料私領寺社領在町可ㇾ致二巡行一間、物の多少ニよらず、志次第可ㇾ致二寄進一候、猶勸化之狀ニ書載候條、御料者御代官、私領者領主地頭、寺社領ハ其支配頭ゟ可ㇾ被二申渡一候、

四月

〔天明集成絲綸錄二十九寺社〕安永三午年三月

寺社奉行江

都而寺社修復等之ため勸化相願候節、勸物取集方之儀、向々より勸化所江相納、或者在町役人共ゟ勸物取集、最寄勸化所江相渡候様致度旨申立、願之通被二仰出一茂有ㇾ之候得共、追々右之通役人共より勸物取集、勸化所江遣候様成行候而者際限も無ㇾ之、在町共迷惑可ㇾ致候付、別して御由緒有ㇾ之寺社、又者譯立候願之筋者格別、其外之儀者以來難二相成一間、其旨被二相心得一、右之趣向々江可ㇾ被二申達

以兵于協力修造

僧侶

三月

〔雍州府志神社三〕稻荷社　今所存之愛染院者、當社修造之本願人、而勸進聖也、俗呼僧成稱聖、凡斯社破壞、則斯聖勸尊卑諸人、而請造營之資料者也、每年正月五日、五月五日、九月五日、社家各聚斯院、是則舊例、而謀社頭修補之微意也、

〔新編相模國風土記三浦郡百十五〕大明寺　藏王權現社、村ノ鎭主トス、略○中　元和元年三月十五日再建ノ棟札アリ、奉修復、當社宮一宇、三浦中興勸建、當時第十三世資闕山日光、大工山下久右衞門尉、慶長二十年三月十五日、

〔新編相模國風土記足柄下郡三十二〕熊野社　二、一ハ小名谷本ニアリ、神體銅像、鈴木大和進持、古梁牌三枚アリ、一ハ天文十八年、記シテ云、奉造立熊野三所大權現宮御寶前、當願成就所、相州古槇谷本村大檀那雨宮修理殿、同代官山田若狹殿、井木願、于時天文十八年己酉十一月廿七日、禰宜三郎左衞門、大工四郎左衞門、僧者永藏坊敬白、一ハ天正十四年、錄シテ云、奉造立熊野三所大權現宮、諸願成就新所敬白、相州西郡之庄內土肥吉濱原之鄕守護心仍鎭、誠知件、天正十四年中十一月、小代官池田清兵衞、導師滿藏坊、大工又二郎、本願主永勝、禰宜口口口ナリ、略○節

〔新編相模國風土記三浦郡百三十五〕鹿島社　天正二年ノ棟札ヲ藏ス、文ニ奉造立鹿島御寶前、大檀那朝比奈六大夫敬白、相州三浦横須賀郷之內、逃見村百姓中、井代官今口口口、當大夫宮內秀、當大工山內六郎左衞門、當鍛冶小松原獵五郎、子時天正甲戌年閏霜月廿日、請願成就、皆令滿足、筆者平朝臣賢衞ト氏ス、

古事類苑

神祇部十

社祠下

古事類苑

神祇部十

社祠下

神籬

〔倭名類聚抄十三祭祀具〕神籬 日本紀私記云、神籬俗云、比保路岐、

〔箋註倭名類聚抄五祭祀具〕崇神紀本註神籬此云比莽呂岐、釋日本紀引私記、作比母呂支、按莽母竝讀若毛、卽菩之半濁音也、古語拾遺云、神籬者、古語比茂侶伎、萬葉集寄物陳思歌、神名火爾、紐呂寸立而、雖忌、皆是也、據以上諸書、比毛路岐之古名明矣、此引私記、不可云俗云、疑註首脫比母呂支四字、下乃當云俗云比保路岐也、

〔類聚名義抄七〕神籬 ヒボロギ

〔撮壤集上神〕神籬 和名ヒモロギ

〔東雅四神祇〕神籬、ヒモロギ、 皇孫天降り給ひし時に、高皇產靈神詔して、吾則天津神籬と天津磐境とを葦原中國に起樹て、吾孫の爲に齋かるべし、汝天兒屋命、天太玉命は、天津神籬を持て、葦原中國において、吾孫の爲に齋奉れとのたまひ、其後神武天皇大倭國畝傍の橿原の宮にして、卽位ましませし元年、皇天二祖の詔に從ひ、神籬を建樹給ひ、亦其後崇神天皇六年の秋、倭笠縫邑に磯城神籬を立られしなどいふ事は、舊事紀、日本紀、及古語拾遺等に見えし所にて、日本紀、古語拾遺の註に、神籬讀てヒモロギといふと見えたり、亦垂仁天皇三年の春、新羅王子天日槍齋來りし物の中に、熊神籬といふもの有けり、舊說に神籬者叢祠也、磐境者兆域なりといひ、ま

た神籬は坂木也、磐境は天香山の磐をひきかきたる也といふ、或說に此事秘旨あり、後說のごとき大に志からずといふ也、前說は日本紀纂疏に出し所にて、後說は從三位宣賢卿の抄せられし所、もと是卜部家の說にして、神籬は磐境とともに、たとへば朝家に三種の神寶を傳へらるゝ事のごとく、天兒屋より今にいたる迄、我家に相傳ふる所也とまるされたり、はじめ高木神言別給ひて、兒屋太玉の二神に詔し給ひし所なれば、其秘旨あらむ事はいふに及ばず、凡事にもこそよれ、此事に限りては卜部家の說のごとき外人の吻を容る處にあらず、但し我思ふ所は、ヒモロギと聞えしもの其制二つありぬべし、天兒屋天太玉二神、高木の神の詔をうけられしとみえしものは、天より持來られし所也、天日槍の齎來れる所は、韓地にして神を祭れるものとみえぬれば、其制の同じからぬ所あるべき事也、是等のことに依て、後人の說のごときに至りても同からぬ所やあるらん、其ヒモロギ、イハサカといふ義の如きは並に詳ならず、胙の字讀てヒモロギといふは別に是一物なり、神籬の字借用ひて、ヒモロギと讀れしによらむには、神は御靈なり、古語に籬をばヒモといひけり、籬は內外を守る限りなれば、其字を讀てヒモロギとはなるれしなり、さらばヒモロギは籬神な守る所といふがごとし、もしくは榊木なりといふがごとくならば、今も神異の說によりす時には、爲製木なり、假にこじにこじて持讀事なり、是皇孫天降りましきに、天孫神籬を持來られしに始りけんもしらす、王の鼻さて面赤く鼻高き面ながうぶれるもの、讀るも讀國來の神座璽の御光にたちてつかうまつられし事に能れりといふ也、又磐境も天乃香久山の磐をひきつきしものならむには、則同の意に斷といひしものいこさくにこそ、隔ゆれ、略に神中籬木主の石窟とし、また磐主石面ともいふなり、神籬は磐なりといふ說のごとき、磐祠の字もさこれの良記陳傳にも出て、磐神水等磐神祠也と註したり、さらばいにしへにもりなどいひし條には相合へり、又磐境者先城なりといふがごときも、堺界曰先と註せし所によられしとみえたれ、先城とは磐限なこそいふなれ、但し我說いごときも、古よりいひつぎし習と借用ひし字によれるところなり、其正義に於てはわれもさよりふるべき所にあらず、

〔古事記傳十三〕比母呂岐と云物は、榮樹をたてゝ、其を神の御室として祭るよりして云名にて、柴室木の意なるを、布志を切て比と云なり、〇中略磐境は伊波紀と訓べし、崇神卷に磯堅城神籬とある磯堅城と同じことなり、神を祭る場を石を築周らして構へたるなり、

〔類聚名物考神祇十一〕神籬　ひもろぎ

是に二のわかち有、神籬をよめるは檜垣の意にて、神社には垣ゆひまはすもの故にいふ成べし、祕室垣なるべしとも思へども、ひめといふ詞は、祕の音語より出て、古言になければとりがたし、後世の神道家者流には、神祕のよしいへども、なにの徵もあらし、日本紀に見えし所さる故由有事とも見えず、

〔鐘酒響〔一〕神籬

或やむごとなき御あたりより問はせ給はく、比母呂岐と云ことこれかれの人に問へど、はやく弘仁の頃より其說まち〳〵にして、今に詳かならざるさまなり、〇中略こはいかに心得てよきにかとのたまはすに、答へまつらく、此語の本義は生諸樹の於の省りたるにて、本は神靈の憑鎭り坐る、森の樹立を指て申侍りき、其は上代は出雲伊勢などを除ては、をさ〳〵宮殿はなくして三輪山などの如く、生茂れる森ぞ卽神の御社なりつればなり、萬葉四に味酒呼、三輪之祝我、忌杉云云、又七に三幣取、神之祝我、鎭齋杉原云云、此等の忌杉も杉原も三輪山の比母呂岐を指る也、又十一二十八丁に天飛也、輕乃社之、齋槻とはべりて、其齋槻を指て神名火爾、紐呂寸立而、雖忌とよみたる類ひにて、先かつ〴〵さとらせたまへ、又此比母呂岐を、常には上下を略き御言をそへて御諸といひ、又其御諸を神南備と云も、神之森の約れる也義、又其母理は隱樹の繁り隱りかなるをいふの義にて、只いひなしの少づゝ異れるのみ、本は皆同語に侍るなり、〇中略卽神靈の留り賜へる生諸木なりければ、此比母呂岐てふ言に、神籬字は書ならひ來しにこそ、神代紀に、高皇產靈尊因勅曰、吾則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋云云、崇神紀に、磯堅城神籬云云、神籬此云比莽呂岐と見え、又雄略天皇大御歌に、美母呂能、伊都加斯賀母登とよみましつるも、猶比母呂岐の事なるからに、赤猪子が和歌に美母呂爾、都久夜多麻加伎齋哉玉垣也、是を古事記傳に樂哉玉垣也と註したるは誤

なり、と受侍りたり、是等にて神籬は卽比母呂岐、比母呂岐は卽神社なる事を思し定めさせ給へ、

磐境

おなじ君　亦問ひたまはく、上件に引れたる神代紀、又崇神紀等に神籬磐境とある磐境の事、兼良公の註に、磐境は謂兆域、漢郊志註曰、兆謂爲壇之塋域也云云、古事記傳十五卷四十一丁オ云、磐境は伊波紀と訓べし、崇神紀に磯堅城神籬とある磯堅城と同じことなり、神を祭る場を石をもて築周らして構へたる也といへる、若此意ならんには、上の神籬の辨ども猶少し疑出なんか、答てきこゆ、此磐境の事、後世の人は只文字に泥みて、なべて然のみ註し來れゝど、其はいみじき心得たがひに侍り、石以て築周すをいかで起樹神代紀に起樹天津磐境と見えたりなどはいはん、守部年來古書に記せる趣を考ふるに、上代に磐境といひしものは、磐境と書たるは只借字にて神の御魂を齋祭る時、榮樹に鏡を懸ていつく事の侍りつるが、此木は榊椎柃の類、又樫にまれ檜にまれ、其鏡を懸て齋祭る時の樹の稱名にて、名義は齋榮樹と云言の省りたるに侍り、此名やゝ後までも、古き神社の宮人等は云傳へのまゝに然う心得てありけむさまなるを、學者は却て書紀などの文字に泥みて、はやくより右のごとく心得違ひせる說どもの多く侍るなるべし、

〔日本書紀 二神代〕一書曰、高皇產靈尊因勅曰、吾則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣、汝天兒屋命、太玉命、宜持天津神籬降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉、乃使二神陪從天忍穗耳尊以降之、

〔釋日本紀 八述義〕天津神籬

私記曰、問、何物哉、答、爾今神祠歟、又問、此謂比母呂支、其義如何、答、未詳、先師說云、謂之比母呂支者、葦賢木之號歟、

〔古語拾遺〕逮于神武天皇、○中略建都橿原、經始帝宅、○中略爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、所謂高皇產靈、神皇產靈、魂留產靈、生產靈、足產靈、大宮賣神、事代主神、御膳神、已上今御巫所奉齋也櫛磐間戸神、豐磐間戸

神、已上今御門巫所ㇾ奉ㇾ齋也、生嶋、是大八洲之靈、今生島巫所ㇾ奉ㇾ齋也、坐摩、是大宮地之靈、今坐摩巫所ㇾ奉ㇾ齋也、

〔日本書紀五崇神〕六年、先ㇾ是天照大神、倭大國魂二神、並祭於天皇大殿之内、然畏其神勢、共住不ㇾ安、故以天照大神託豐鍬入姫命、祭於倭笠縫邑、仍立磯堅城神籬、神籬此云比莽呂岐、

〔萬葉集十一〕寄ㇾ物陳ㇾ思

神名火爾、紐呂寸立而、雖ㇾ忌、人心者、間守不敢物、

〔萬葉集略解十一下〕ひもろぎは、○中略檜室籬にて、卷廿庭中のあすはの神に小柴さしとよめる如く、檜の葉もて假に神室の籬を作をいへり、是は常有社の外に更に其神を崇祭る時に爲る事にて、何の社にもあれど、神なびを舉たるは、殊に畏み祟むゆゑなるべし、

〔日本書紀六垂仁〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、將來物、○中略熊神籬一具、幷七物則藏于但馬國、常爲神物也、

〔玉勝間四〕熊神籬

或人、垂仁紀に、新羅王子天日槍が持てまうで來つる寶物の中に、熊神籬一具とあるは、いかなる物にかとゝふに、こたへけらく、くまひもろぎとよむべし、くまのとのを添てよむはわろし、さて熊は借字にて、限隱などゝ同言にて、隱れこもりて、露ならぬをいふ、さてこは、韓國にて神を祭るに、其神體を坐する具にて、世に佛像をいれおく、厨子といふ物などの如く作りたる物なるべし、そは皇國の神籬とはやうかはりて、外をかこみて、内のあらはに見えず、隱れる故に、くまひもろぎと、皇國にて名づけたるなるべし、もとより神籬のさまにはあらざれども、神の御かたを坐する物なる故に、其名を負せたる也、

〔天文本倭名類聚抄三居處〕榑風、辨色立成云、榑風板、比宜、楊氏漢語抄同、

〔箋註倭名類聚抄三居處〕按榑當ㇾ作ㇾ搏、榑、搏桑字、音義皆異、但諸本皆從ㇾ木、神武紀亦作榑風、蓋搏風以

屋宅具、故變手從木、遂混榑桑字也、○中略比宜古事記作氷椽、又作氷木、大神宮儀式帳作比木、外宮儀式帳作比疑、或謂之知宜、神武紀榑風訓千木、延喜祝詞式作千木、谷川氏曰、搏風板標出屋上、兩木相交、其形如肘之屈曲、故名比治伎、上略云知伎、中略云比伎、其實一名之岐也、按古昔貴人屋宅之制、廈屋兩下、東西桷邊、南北兩木、上當棟相交斜標出屋上、謂之比宜、棟以上至宇者是搏風、貞和大神宮御餝記云、組目上謂千木、組目下謂之搏風、是也、蓋皇國上古、造屋不用釘、唯以葛繩結材耳、大殿祭祝詞、引結幣留葛目能緩比無久、顯宗紀室壽、取結繩是也、以繩縛南北椽、則椽得縛之餘斜標出棟上、後存其東西各一斜標以存古制也、大神宮儀式帳云、上搏風四枚、號稱比木、大嘗祭式謂之高搏風者皆是也、蓋西土無出標屋上之制、又比宜搏風板、其實一木、以在棟以上棟以下異名耳、故神武紀搏風訓千木、漢語抄、辨色立成、搏風版訓比宜也、廣本比宜作和名如字四字、按比宜屋上標出者、讀如字者、在棟下之搏風、其義不同、

〔神社啓蒙 或問〕問搏風何義　答、搏音博、俗言破不也差音略訓千木者、或言違木之義、社家者說片削搏風者、外宮內宮坎離之表也、予意不然、

〔近世畸人傳 五〕並河天民

天民の著述かたそぎの記あり、○中略左に掲ぐ、

かたそぎの記

七尺ばかりにけづりたる木ふたつを、おぐらの足のかたちになゝめに打ちがへて、神社のむねに牛の角をいたゞきたらんやうにたてるものあり、ちぎとぞいふ、またはかたそぎともいふ、あるはかつを木ともいふ、度會の神主の、かたそぎの千木は內外にかはれどもとゞめる、木のはしをかた〳〵にそぎたれば、かたそぎとはいふめる、打ちがへたればちがへ木といふを、はぶきて千木とはいふなり、かつを木は、丸き木を三尺四尺ばかりにきりて、あるは三つ五つ

ばかり、かたそぎの間に横に打ならべたる物をぞいふ、はしたる鰹魚やうのかたちにかよひたれぞかつを木といふ、千木鰹魚はおなじ物にあらず、延喜式に千木鰹魚木、とりはなしてしるしたれば、そのわかちいちじるきにや、さて此二つの木、枝葉のものゝやうに見え侍るに、内外にかはれども誓はおなじなぞよみ侍るは、ふかきことわりこそ侍らめとしらまほしくて、人にたづね侍れば色々にぞいふなる、みなそのこゝろ得ぬことをのみぞいふ、その中にも是は何のふかきことわりも侍らず、上りたる古しへの代には、人もすなほに事もすくなく、かはら、ひはだ、なぞやうのうるはしき宮づくりもまだなく、あめの下しろしめすすめみまのみづの御あらかも、みなわら、ちがや、なぞにておほひぬべし、いまもわらふきたるやねのかみには、わらをふとくつかねて、なりは、今の人のかしらのもとゞりゆひふせたらんやうにて、神社のかつを木おきならべたるすがたしたるものあり、田舎の人は是をからすをどりといふめる、是なくては屋根ぬいたるつかねのなはぶしあらはれ出て、雨露霜にくちはつれて、やねのことぶきみじかければ、かならず是をぞおく、むかしもわらふけるものにはかくてありつるを、檜皮にうつりても猶このかたちをのこして、かつを木とはいひたる也とぞ、これらぞさもありぬべきことなり、ち木といふものぞわきてしれがたき事にや、〇中略わらふくべき屋根は、先はねとする木を、ひだりみぎりより打ちがへ、この木を便としてさてぞふく、田舎人は合掌の木といふ、此木のうちあはせたる、人の手ふたつをあはせ佛ををがむに似たれば、かくは名づくるにや、いまはこの木のあまりを切すてゝそろへ調たり、あがりたる代にはそのまゝに殘して、かくやのうへに出したる也、是もあながちになだらかにとゝのふることを事とせざる古しへの風なり、それをのこしてぞ今は檜皮ふけるにも、神の社には此木をまうけたるなり、そのかみはおのづからなくてかなはざることに侍るめるを、ひはだにてふきかへたる後は、

やうなきものゝ樣也とぞいふ、是らのことわりや、すこしかなふべきやうなり、○中略正德三年長月ばかりに、京の北なる岩屋山見にまかりける道に、雲がはたといふ山里を過ぬ、すこしおくまりたる家に、千木さし揚たるをふと見つけぬ、おやしのことや、是は神の社にすなる物を、かくむね〳〵しからぬ家につくりたるは心得ずも侍るかな、○中略まらまはしくて、田がへしするをのこにとへば、これは何のこともなき里人の家居に侍るといふ、おのやうの木は神の社にこそするなるを、ことわりこそあらめと猶とへば、さることはしりはべらず、むかしより讓々も仕りなれたる事にて、おやしむべきことにも侍らず、是よりかく入給はゞ見たびなん、いづれかわのやうの木なき家や侍らん、心得ぬ仰ごとも侍るかなとて、すき打かへして後はまか〴〵いらへもきこえず、むつかしのとひごとゝはらだちたるなり、山里人のかたくなゝるくせなるべし、入行まゝに見れば、げにもいとさゝやかなるふせや、つちかべに塞ぬり殘したるわばらやまでも、大かたは千木をぞ揚たる、猶ことわりもあらんと、ふかくとはましきに翁におひぬ、かせぎにおふこかけて道のかたへにやすむ、爪木に折そへたるを見て、是はおけびとやいふなどいひよりてさてぞとふ、指さしてかれはなにのためにすることにかととへば、打笑てわらにてふき侍るは、軒端よりゆひふせもてのぼりて、終のつかねはおそひ竹をかためとし侍る也、されど風つよく吹しきるころは、大かたは此破風ぐちより吹はなちはべるに、おそひ竹ばかりのかためにては、風のちからにかちがたく侍るに、此木のおさへたるにぞ風には吹あげられざる也、かはらや板ふけるやなどには、おのづからかゝるくだ〳〵しきことはなくてもはべる、はらやはかくてぞなど耻げにいひけちつ、此おそひ竹といふを見れば、長き竹を屋根のむねに三本ばかりならべゝ、からすをどりの下にぞ通れる、椽をおさへふせたるなれば、おさへ竹といふべきを、辭のかよへるにておそひ竹といふにや、此山人のいふ

にぞ、ち木といふ物の、かやぶきなどにはかならずまうけつべきことわりいちじるくぞしりぬ、〇中略さて此木の名をいかにいふにやととへば、かつう木とぞ、いかでかつう木といふにやと重てとへば、かつう木にて侍れば、かつう木とは申侍るなりと、ことわりもきこえぬこたへをしつゝ、こゑすこしとがりてむづかしきかほぐさして柴打かたげつゝ立てゆく〳〵しくとふをろうじていふにやと、おしくおもひちがへたるなるべし、今すこしよくもをしへよかし、になふといひ、かづくといひ、かたぐるなどいふことばを、このわたりにては、かつうとぞいふ、この木の屋の棟にうちまたがれるすがたの、人の肩に物をかづくさまに似たれば、かつう木とはいふとはさてぞしられぬ、からすをどりやうの物をかつを木といふ、此ち木をば、そぎとも、さてはかつう木ともいふべきなり、此木をかつな木ともいふはかつうぎといふをあやまりていふにや、〇下略

〔東雅六宮室〕殿　古の時は天皇宮殿の制氷木たて、堅魚上られて、臣庶屋舍の制には同じからず、初橿原宮造られし制、皇孫日向國に天降まして始造られし瑞御殿に因りて、造つかふまつると、舊事紀古語拾遺等に見えしは、是等の事をいふなるべし、天皇の御舍には、堅魚上られしといふ事、古事記雄略天皇紀に見ゆ、此制いづれの御代に改められたりけむ詳ならず、後にはたゞ神社にのみ氷木堅魚の制を用ひらる、これは出雲の大神請給ひしによりて、垂仁天皇の御時は其宮制天皇の御舍のごとくに修め造られしに始れる事にぞあるべき、此事も古事記に其後寶龜の初諸國に官符を下され、大社中社小社の制を定められしにより、かゝる物にも定れる制ある事にぞなりぬる、氷木さまざまにしるしもし、また千木などゝもいへど、日本紀、倭名抄等にみえしごとくに、搏風の字を用ひ讀む事は、舊事紀、古事記、日本紀、倭名抄等に見えし所のごとくに、ヒギといふをもて正とすべし、舊事紀には搏風搏木、氷椽等の字を用ひらる、其搏風の字用られし事、搏風の字はもと儀禮士冠禮の疏に出し一つに、搏風ともしるしゝが故なるべし、古事記には、氷木、氷椽等の

字を用ふ、これを千木と云は、氷木の轉語なり、古語拾遺、延喜式祝詞、また元々集等にみえし處は、皆千木の字を用ふ、また比疑知疑などよませり、上古之俗、刀をばヒといひしを舊說に刀の氷のごとくなるをいふなりといへり、舊事紀、古事記に、建御名方神の武御雷神の手をとりて、立氷のごとく、劍刃の如く取成しといふ即此也、其代に風災を厭ふべきために屋上に雙刀を變植しを、後には木をもて其狀をうつしたてぬれば、それを名付て今も氷木といひしとみえたり、今も東國の方には猶此俗あるなり、東國の俗に、暴風の時に、鎌刀の類をもて屋上にたて、又は高竿につけてもたつ、かくのごとくすれば、風の爲に屋を覆かれずといふ也、都て夏風雷の變に乘じて雷の起るとき、必民家を倒し樹木を拔く事、我見もし聞もしつる事どもあり、此事を禁厭之方也とみえたり、雷は鐵を忌むものなりとは、漢人の說にもみえたり、

〔俗說贅辨 一〕千木堅魚木の說

世俗の社に、千木堅魚木を上ることあり、今按するに非なり、千木堅魚木は草葺にある物なれば、大かた内外兩宮に限れるなるべし、○中略古は天子の宮殿ならでは堅魚木あげぬことゝ見えたり、今五攝家の御家に御先祖の社あり、皆千木堅魚木を上たり、大臣以上は可用事歟、菅家は大臣なれども北野の社に千木堅魚木なし、御家もとより卑ければにや、油小路殿御宅に御先祖の社あり、千木堅魚木なし、禮に合ふあるべし、今凡人の靈社に往々千木堅魚木を上ぐ、是又僭妄の甚しき也、

〔秋齋間語 四〕千木の論

神社の棟にあるちぎかつを木と云物、むかしは、人家の屋の棟にもありしにや、京より三里計北、愛宕郡小野郷雲が畑と云村の家の棟には、今も所々にあり、所の人にとへば、風はげしきゆゑに、わらぶきの風にとられぬ爲におく木なりと云、此名を此所にて、かつう木と云よしなり、昔は家々皆わらぶきゆゑ、風おさへにおきし物と見えたり、ひはだにありては、入らざる具なり、神道家には大切の事とする故、淺見にては申難けれども、人家に用ゐるは風のおそれなり、それゆゑちぎとは風木と書也、風はちとよませたり、東風をこちといふにて可知、本書にはあ

らざれ共、風木の字是也、可ㇾ辨、

〔筆のみたび前四十三〕ちぎ

大なる屋根の千木と小き社の千木とはその樣もとより異に造れるなり、又大なる方には堅魚木あり、その樣異なるは造る便利によるなるべし、さて千木はかけ固めて離ざらん料の物にて、屋の棟は破やすければ、木の端をやりちがへ固めて、そこねざらんと作れるなり、今も此風殘れる地あるよしは書にも見えたり、京の北なる愛宕郡小野郷の雲が畑と云村の家の棟には、今も堅魚木を置を、何故ぞと問ば、わら葺の風にそこねらるゝを壓ふる爲なりとて、其稱をばかつうぎと云とぞ、さてちぎの樣、大なる屋根も古くは此小き屋根の如く作りけんを、古とは家の作樣もかはり行て、自に然作るは障ありなどとて樣を變もし、又見にくゝ思ふ事などもありて別に作て上にまたがらせ置事とはなれりしにやあらん、後世の物には必風穴とて此木の上の方に穴あくれど、こゝなるには多くなし、あけもあけずも有しならん、又千木の中只一ッに風穴をかけるあり、猶その外にも屋根をかけれど、千木の風穴なし、寫しもらせりとも見えず、さて此ちぎを異名つけてかたそぎとも云り、古き歌に、夜やさむき衣やうすきかたそぎの行逢の間より霜や置らんといふも是にて、二つが行ちがひてあれば、其交る所を行あひと云なり、行合の所はやがて屋の棟に當ればなり、風雅集の歌にも、かたそぎのちぎはうちとにかはれどもちかひは同じいせの神垣とあり、ちぎのそぎ法に內宮は內をそぎ、外宮は外をそぐと云れば、內外にかはれどもとは詠るなり、長門本平家物語十三に、夏山のみどりの木間より、あけの玉がきほのみえて、かたそぎ作の社あり、まへには鳥居ぞ立りける、太平記十二の卷に千木不ㇾ曲、形祠木不ㇾ橈なども見えたり、そは一の物を二に分云て言に文をなせるなり、

〔山彥冊子二〕天乃血垂

守部按に登陀流、血垂通音にて同じことなり、語の本は搏風垂(チギダリ)の約れるにて、(知岐は知垂の約れり)屋の搏風の垂下れる下に、炊烟を出さむとて開おく窓の如き物(俗に烟出と云)の事也、千木は其搏風の上に露物なれば、古書に搏風字を直に知岐にも用ひたり、神武紀に峻峙搏風於高天原云々、和名抄古本に、搏風、辨色立成云、搏風板、比宜と見え、大神宮延暦儀式帳に、正殿一區云云、上搏風肆枚(二丈八尺、弘八寸、厚四寸、)號稱比木と見ゆ、此二丈八尺の板を屋上の兩端に搦て、其狀✕如此やり違へたるが、上の∨を千木(比木とさい)といひ、その千木の下の△を千木垂(トダル)といふとぞおぼしき、此を古事記の上續きの文に登陀流天之新巣之凝烟之八拳垂摩底燒擧而とあるは、搏風垂(トダル)なる新しき實の云云と云つゞけにて、天之とあるは、彼於高天原千木高知といへる如く、屋の高き所に上ゲ置物なる故にいふ也、

〔傍廂(後編)〕千木鰹木

いにしへは今の鎹、鐶、鋲などなかりし故に、神社の柱は根は土中に立て、横にも竪にも筋違にも丸木を繩もて結び、藁もて屋をふきたる故に、兩端のたる木の上にてやり違へ、繩もて結び、棟包みの藁を風に損はれぬ爲に、短き木をよこに結び押へとしたるが、おのづからなるを、後にたる木のうへに出でたると、棟藁おさへの横木とを別に作り附けて、千木鰹木とかたちをつくりたるなり、

〔類聚名物考(神祇十一)〕かたそぎ　片削　片殺

千木のかたそぎといふを略して、かくもいふ也、

〔古事記 上〕此葦原中國者隨命既獻也、唯僕(大國主神)住所者、如天神御子之天津日繼所知之登陀流(此三字以音、下效此、)天之御巢而、於底津石根宮柱布斗斯理(此四字以音)於高天原氷木(氷木二字以音)多迦斯理(多迦斯理四字以音)而、治賜者、僕者、於百不足八十坰手隱而侍、

〔古事記上〕故爾追至黃泉比良坂、遙望呼謂大穴牟遲神曰、其汝所持之生大刀、生弓矢以、而汝庶兄弟者、追伏坂之御尾、亦追撥河之瀨、而意禮(二字以音)爲大國主神、亦爲宇都志國玉神、而其我(○須佐之男命)之女須世理毘賣爲嫡妻、而於宇迦能山(三字以音)之山本、於底津石根宮柱布刀斯理(此四字以音)於高天原氷椽多迦斯理(此四字以音)而居、是奴也、

〔古事記傳十〕氷椽は下には氷木とも作り、式八之卷なる諸祝詞に多かるは悉く千木と云り、常にも然云なるを、此記には三所に出たる皆比岐なり、(師に此氷字は埀の草書を寫誤れるにて、是も知岐と訓べし、知岐は卽埀木の多理を約て知と云る名にて、顯宗天皇紀の室壽の御詞に椽橑とある物なり、古への家の屋のさまは、今も田舍にのこりて、今は此を杈首と云、それが末を棟の上にて組て、本をば軒の端まで多く進べ埀て、屋瓦をも軒をも持するなり、さてその組たる末端は棟上に繁く進出てあるを以て、埀木高知とは云りと云れき、されど今思に、椽と千木とは別物なり、千木は棟上の兩方の端にのみこそあれ、繁く並出たる物には非ず、其中間には古にも堅魚木と云物あれば、下木はただ端にのみ有しこと云るし、たとひ一物にもあれ、千木は棟より上に出たる處を云、椽は棟より下を云へば、名は本より別なり、故に椽を千木とも、千木を椽とも通はし云る例さらに無し、其上多理木と云名は棟より下へくだり埀るよしなる物を、埀木高知とは高きことに云むは、古言の法に非ずこそ、然るを此記に椽字を書ることは、此比岐に正しく當べき漢字なき故に、強てことよれる字を當て、其物を知らせたるなり、されど正しく椽には非る故に、氷字を添たり、書紀に榑風と作るも當らぬこと次に云が如くなれば、これも正しく當べき字なき故なるを思合せよ、もし右の說の如く多利木の事ならば、たゞに椽とのみこそ書べきに、氷字を添、又氷を木とも書るにて、別なることを知べし、たとひ埀字の誤にもあれ、上文入田間大宮などの所にも、多理木は椽とのみ書るを、高知と云處にはいづれも此字を添へむこといかゞ、されば氷字も誤に非ず、知岐と訓べきにも非ず、比岐なること明けし、又千木を違木とも風木とも云說なども皆わろし、又智義の意など云は殊に云にも足ずこそ、)和名抄古本に榑風、排色立成云、榑風板比宜、楊氏漢語抄說同とあり、(流布の板本には比宜と云ことなくて、和名知字とあり、)大神宮延曆儀式帳にも正殿一區云々、上榑風肆枚、(長二丈八尺、弘八寸、厚四寸、)號稱比木と見え、同外宮儀式帳にも比疑高知と見えたり、(此等にても氷字誤に非ること明けし、)さて名義は、氷木、千木共に肱木にて、(和名抄に枅、比知岐、功程式云、肱木とあるは別物なり、)其比知の下を省けると上を省けるとの差のみなれば、本一の名なる故に、通はし云るなり、凡て物の形の∨かくの如くなるを比知と云、手の肱も此意もて名けたり、又肱金、肱折など

も同じ、その比はもと布理の切りたるにて、布理とは右の形の如く、本は一にて斜に左右へ末の分れたる物を云言なり、和名抄に杈枒方言云、河東謂樹岐曰杈枒、和名末多布里など云名是なり、〈掫分發と云も飄上より左右へ分れたるさまを云、又俗に道程などの二に、此處と彼處との中央處を布理分と云も此より出、又物の正直からぬを、布里の有と云も、此より出たり、〉さて此氷木と云物は、上代の家造に屋の左右の端に有て、其本は前後の軒よりして上りて、棟にて行合ふを組違へて、其末を長く上へ出したる物にして、其棟より上へ高く出たる處を氷木とは云なり、〈直人伊勢神宮の千木のことを論ひて云、貞和飾紀に組目上謂二千木一、組目下謂二博風一とあり、後世は千木なれば別に作る社もあれども、伊勢には今に博風の末を切す、直に千木に用るなり、さて甚置と敏に風穴を明るなりと云り、まても有へし、〉其は棟より下にては、即多理木と並て、同じさまなる故に、棟字を此記には當、又屋の左右の妻にては、博風と云物なる故に、書紀には其字を當られたり、然れども是らは棟より下にての名なれば、共に氷木には叶はぬことぞ、〈此千木の端を殺ぐこと伊勢内宮外宮にて、内なるそぐと外なるそぐとの差あるに就て、陰陽の理などこと〴〵しく云なすは、例の漢意の附會なり、こに尾張人吉見氏が云る如く、内宮と外宮とまよふなかへたるのみにて、何の意も有べきに非す、〉

〔日本書紀神武三〕辛酉年春正月庚辰朔、天皇卽帝位於橿原宮、〈○中略〉故古語稱之曰、於畝傍之橿原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原、而始馭天下之天皇、號曰神日本磐余彥火火出見天皇焉、

〔日本書紀通證八〕搏風、延喜祝詞式作千木、神代紀風字訓知、蓋風木之義也、今亦有名風騷者、祝詞式或作比木、蓋氷木之謂、防火災之表物也、〈○中略〉搏風字出莊子、搏作榑恐非、倭名鈔作榑風曰、和名知字、然爲音布憂反、則爲搏字之誤寫可見矣、留青日札作博風、俗用破風字者亦非也、舊事紀作榑榑、又作榑木、山海經東望榑木、說文榑桑神木日所出也、蓋取此義歟、然則當訓比疑蓋日木也、高日所知之標木也、〈○中略〉垂加翁曰、上古神皇之御殿、皆有千木堅魚木、中古以降唯神殿有之、千木御殿棟兩端各二枚、打違如乂字、而高出之木也、〈○中略〉堅魚木之形如堅魚、如搗砧、而中太、〈○中略〉或說今謂

秤輕重者、爲千木、取正直之義也、堅魚木蓋懸魚之屬、寄義於水物、以壓火災、與氷木意同、堅魚本飾之類、以其肉爲乾脯、日用之佳品、故有堅魚之名、以赤色而堅硬如松節、呼曰堅魚節、堅魚木則蓋取其象也、

〔延喜式祝詞八〕祈年祭

座摩乃御巫乃稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、(中略)○皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知氏、皇御孫乃瑞能御舍乎仕奉氏、天御蔭日御蔭登隱坐氏、四方國乎安國登平久知食故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

〔類聚神祇本源十一外宮別宮〕一大中小社差別事

太政官符　神祇官幷五畿七道諸國司

應早定置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥井幷四至內地町數事

一大社四至限九町

千木四支(長一丈三尺)

一中社四至限八町

千木四支(長一丈)

一小社四至限四町

千木四支(長八尺)

寳龜二年二月十三日(○節略)

○按ズルニ、本官符ノ事ハ、社格篇大中小社ノ條ニ詳ナリ、

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院

上榑風肆枚、(長二丈八尺、弘八寸、厚四寸、)號稱比木、釘覆大丗、

〔大神宮儀式解四〕號稱比木は比疑登奈豆久とよむべし、搏風の端を不剪、屋上におけたるを比木といふと也、古事記上於底津石根宮柱布斗斯理、於高天原氷椽多加斯理而居、又於高天原氷木多加斯理而居、外宮儀式山田原云云、比疑高知氐と見えたり、按に古代は知疑といはず、皆比疑といふ、近江大津朝廷の比より、知伎とも比伎とも互によべりと或人はいへり、祝詞式春日祭告刀巳下皆千木とあり、是も上世は比疑といひつらん、延喜より前に改めしなるべし、○中略考るに比疑は氷木の意にや、屋宇の稱、火を防がん爲に、水によりし物もて名とす、懸魚蜈蚣天井などの類これ也、一説知伎は風木也、風を防ぐ木なればそれを名としたるべしといへり、風を知とよむは、東風を古知、迅風を波也知といふ類也、此木に風穴てふものあるも據ありといへり、又茅屋にある木なれば、茅木なるべしともいへり、○中略此木の崎を剖捨さるは、大古は質素にして藻飾なし、仁德紀元年、宮垣室屋弗堊色也、桷梁柱楹弗藻飾也、茅茨之蓋弗割齊也とあるさま也、史記二世皇帝二年、吾聞之韓子曰、堯舜采椽不刮、茅茨不翦、飯土塯、啜土形と見ゆるも同じ意なり、此千木の末端、本宮は内宮なれば内を挨、豊受宮外宮なれば外を挨、是陰陽の謂也といふは後世の附會、決てよるべからず、外を挨は便なし、外宮の千木も古は内を挨しならん、内外陰陽の理をとなへんが爲、後に外を挨しなるべし、

〔新任辨官抄〕神宮事

正殿白木也、有木尻金物、餘不然、千木堅魚木皆在、千木如搏風、端如雁俣、堅魚木以丸木切天、横置棟上也、

〔鹽尻二編五〕千木鰹木

大神宮の千木堅魚木心御柱等は、神秘口訣にして他家知る事不能ものか、但し延暦大神宮儀式帳に、上搏風肆枚、長二丈八尺、弘八寸、厚四寸、號稱比木、釘覆大甘、堅魚木一、長七尺、徑一尺七寸、材木別編以金飾云云、然れば延暦以前より金の飾りの事ありと見えたり、神宮雜事記の說に、後朱雀院長暦元年の始

にて、堅魚木貫木左右端泥障板左右端鞭掛端等金物等被奉加粧と云へり、加の字にて彌初より金の粧ありしはしられ侍り、但し上古質素の宮造り、いかでかゝる華美のことあらむや、彼寶基本紀等神宮の舊記に種々の說ありて、其造制を神祕する事か、後世造宮の制も定りて後は、天地萬物に象を取りて、造り奉りし事なくてやあらん、されど岩屋本緣に、堅魚木を星宿の權化須彌四洲廻生の表示なんどいへるは、專浮屠氏の言也けり、豈取るに足らむや、〇中略抑千木は豐受御飾記に云、組目與利上謂千木、組目與利下謂搏風云々、是則上代草葺の搏風の端を固めたる木のすゑ指出て相違ひたるを、其儘置し古風なれば、違木といはん事いとあらはに覺え侍り、違木の略千木也、

〔貞和御飾記〕御遷宮裝束雜事

一千木金物事

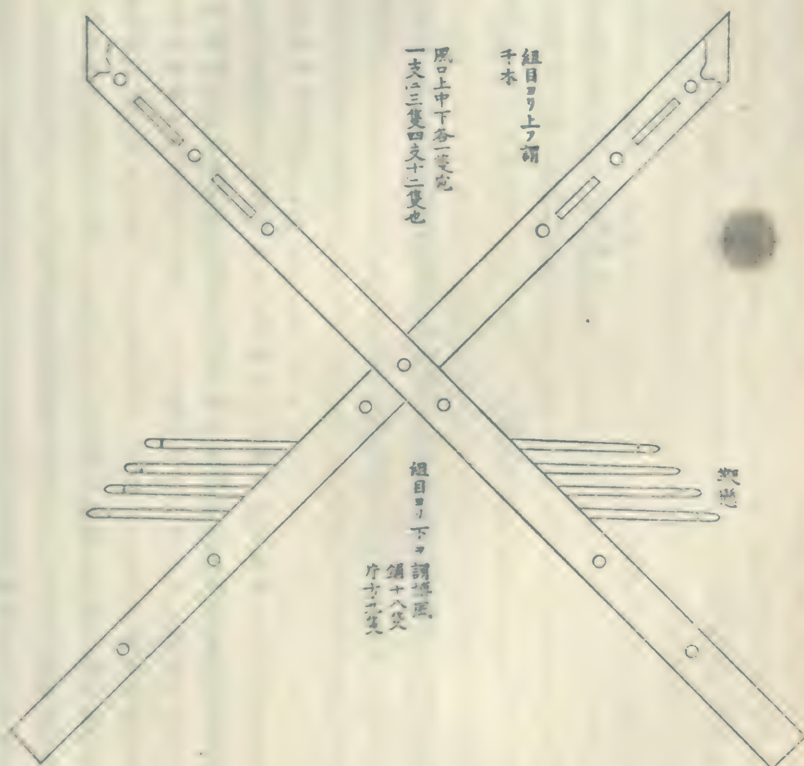
巽角千木金物一、頭方小工飾之、坤乾千木金物二、頭方小工飾之、艮方千木金物三、頭方小工飾之、〇中略

送宮符云〇中略

千木四支、打金廿四口徑各三寸〇中略

千木四支、端金四枚弘一尺二寸、厚五分、花崎四、

同四支鋪廿四口徑各三寸


組目ヨリ上ヲ謂千木
一支ニ三隻四支十二隻也
組目ヨリ下ヲ謂

〔平家物語七〕木曾の願書の事

木曾義仲〇源は羽丹生に陣を取て、四方をきつと見まはせば、なつ山のみねのみどりの木のまより、あけの玉がきほのみえて、かたそ木づくりの社有、まへには鳥居ぞ立たりける、木曾殿國のあんないしやをめして、あれをばいづくと申ぞ、いかなる神をあがめ奉つたるぞとの給へば、あれこそ八幡にてわたらせ給ひ候へ、所もやがて八幡の御領で候と申す、

〔太平記十二〕千種殿幷文觀僧正奢侈事附解脱上人事

文治比、洛陽ニ有二一沙門一、其名ヲ解脱上人トゾ申ケル、〇中略或時伊勢大神宮ニ參テ、内外宮ヲ巡禮シテ、潜ニ自受法樂ノ法施ヲゾ被レ奉ケル、大方自餘ノ社ニハ様替テ、千木不レ曲、形祠木不レ揆、是正直捨方便ノ貌ヲ顯セルカト見エ、古松垂レ枝、老樹敷レ葉、皆下化衆生ノ相ヲ表スト覺タリ、

〔應永十四年春日社造替日記〕應永十四年丁亥十月廿九日、午刻立柱上棟在レ之、〇中略御幣殿別ニ四本宛、チギノ浦ニ結付、五色ノ絹懸レ之、

〔柳營秘鑑追加八〕日光御宮異之御上棟之次第

寶暦三丁酉年御出來也、此時大工棟梁大谷甲斐申上けるは、東照大權現の御宮、御府内にては、紅葉山、東叡山、其外久能、仙波鳳來寺、世良田瀧山等之御宮拜見奉候處、知木之風穴何れも上に明き有レ之、又諸國之大社之知木何れも風穴上に明き候、然處日光御宮に限、風穴下に明候、風穴下に可レ明謂無レ之歟に候間、餘社之並に明度旨にて、知木之由來神祕、幷大工職の古實を書顯し申上に付、諸國大社之知木風穴御糺有レ之處、風穴上に有レ之、依レ之御門主江御懸合之上、風穴上に可レ明旨依二嚴命一、御宮之棟を下し知木を取替、此時御上棟の式は、異の御上棟可レ仕旨被二仰出一也、但知木、風木、千木何れも同、

〔武江年表十一〕元治元年正月、芝神明宮本社再建成就す、内外宮御拜殿故、千木の造り樣、一方は内宮の片損さし、一方は外宮の片損の形に

堅魚木

作り たり、

〔住吉社歌合〕社頭月

十番　右持　　修範朝臣

かたそぎの行あはぬまよりもる月をさえぬ霜とや神はみるらん

十四番　左持　　平經正

ゆきもあはぬちぎのかたそぎもる月を玉もこや神のおもひますらん

〔新古今和歌集十二戀〕崇德院に百首歌奉ける時　　大炊御門右大臣

我戀はちぎのかたそぎかたくのみ行あはで年のつもりぬる哉

〔新古今和歌集十九神祇〕

夜や寒き衣やうすきかたそぎの行合の間より霜や置らん

住吉の御歌となん

〔後鳥羽院御集〕雜

久方のあまの露しもいくよへぬみもすそ川のちぎのかたそぎ

〔玉葉和歌集二十神祇〕熊野新宮にてよみ侍ける　　中原師光朝臣

あまくだる神やねがひをみつしほの湊にちかきちぎのかたそぎ

〔擁壒集上神〕鰹木

〔神社啓蒙一問〕問、鰹木何義、答、此加椽木也、千木加都乎木、皆是上世茅茨之宮制也、

〔日本釋名上宮室〕鰹木　鰹をあめるごとくならべる故にいふ、中略凡和語はもと皆わが國のことば也、音を用るは後代の事なれば、上代より稱せし名と訓とは訓を用てとくべし、

〔東雅六宮室〕殿　堅魚木は堅結木なり、顯宗天皇紀の室壽の詞に取結ふ縄葛は此家長の御壽之

堅也とみえしは此物をいふなり、今も葦草をもて屋をふくに、その葦合せし所に、竹にもあれ木にもあれ串となし、萬葉集の歌に、打氷、刺す、刺竹などいふもあり、三尺許を隔ては、横たへさして、繩葛をもて堅め結ひて、其上に蘆荻等の物を束縛びて置を、俗にはカラスヲドリなどいふ也、昔は天皇の御舍を造らるゝにも、猶太古の制を存せられ、彼葦草をもてふきし屋に串を横たへさして、繩葛をもて結堅し状に象りて、木をもて造られしを堅結木とはいひし也、それを堅魚といひしは、凡宮室を造るにはむねと鎮火の事を言壽ぬれば、屋材之具、多くは水物をもて名づけいひぬる故也、屋材之具、水物の名に取りては、懸魚、蟇股、鮭腹、虹梁、千鳥などいふの類也、氷木堅魚木の制のごときは、太古の時には、比屋皆ありしにぞあるべき、今も猶田舍には其制ある事なれば、天皇御舍に其制を存せられしいとありがたき事也、是等の事秘訣ある事也などいふ說もあれど、其徴とすべき事なかるべきものには見えず、家乘梓說に出し所のごときは、信すべき事にもあらず、

〔筆のみたま前四十三〕かつを木

堅魚木は横様に二ッ置たる木なり、もとは草葺の屋の風に損やすき、その棟を押へ鎮めたる物なり、是をかつを木といひ、古事記には堅魚とのみも云り、かつは固(カタ)といふに同じ、をは長(ナヲ)また治(ヲサム)といふ如き意にて鎮る意なるべし、故にかつをとのみも、又木して作れば木と云言を添ても云るなり、たまたま魚の名に似たるをもて思まがふべからず、此義を解得ずて誤れる說あれど從べからず、

〔山彥冊子二〕かつを木

藤井百成上野桐生問云、神社の宮殿の上にあげたる、かつを木と云ものゝ名義は如何、答云、古事記雄略段に其上堅魚作舍者誰家とある處の傳注に、其形の鰹節に似たる故の名也といへりされど此說いかゞあらん、守部思ふに屋の上にあげたる木なれば、戴小木(カヅクコギ)の義加豆久の久を省るなりなるべきか、それに就て心得あり、先かづくといふ言は、常には潜字を訓て水鳥の水に沒、海人の海

中に沒なぞに奪らいへぞ、其語の本は頭衝の義なれば、頭を加ふのみ云は、頭傾なぞ云例のごとし、水に沒るを云も頭を衝入て沈む故にぞあなる、又世に小原女の栲木を戴くをかづくといひ、荷をかづくなぞいふも意の轉じたるには非ず、古くよりさやうに用ひて、なかなかに古言なるべくぞおぼゆる、然るに彼沈沒をかづくと云ならへるに就て、頭に上るをかづくと云をば俗言の如く心得めるはひが事なり、中古の言にもいたゞかせ給ふをかづけたまふといひ、纏頭をかづけものなぞ云にて知べし、かゝれば彼宮殿の棟に揚たる木をかつを木と云も、頭衝小木の義にぞあるべきを、さるを古書に多く堅魚木と書るは、たゞ便りにまかせて書ならひたる借字と見ゆ、延喜式なぞよりこそ堅魚煎と云ことも見えそめたれ、當昔後世の如くなる堅魚節のありけむとはおもはれず、又其を編連ねたる形を思ひいふなぞは、殊に後の事めきておぼゆ、

〔類聚神祇本源 十一 外宮別宮〕一大中小社差別事

太政官符　神祇官幷五畿七道諸國司

應早定在天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥井幷四至内地町數事

一大社四至限九町

堅魚木八丸(長五尺、徑九寸、)

一中社四至限八町

堅魚木六丸(長四尺、徑七寸、)

一小社四至限四町

堅魚木四丸(長四尺、徑七寸、)

寶龜二年二月十三日略〇節

〇按ルズニ、本書官符ノ事ハ、社格篇大中小社ノ條ニ詳ナリ

〔皇大神宮儀式帳〕一大宮壹院
堅魚木十枚長各七尺、徑一尺七寸、材木別端以金飾、

〔大神宮儀式解四〕堅魚木は加都乎疑とよむべし、これは覆板の上にならべし木なり、○中略案に今世茅屋島踊とも、又於牟登里ともいひて、棟の上に茅をつかね結たるものあり、是堅魚木の起元なるべし、堅魚木は加多米木也といひ、日本釋名には干鰹を編るごとくならべる故にいふといへど、猶有べく覺ゆ、加棟の音より出て、加棟木なんどいふにはあまり強たり、

〔古事記下雄略〕初大后坐日下之時、自日下之直越道、幸行河內、爾登山上望國內者、有上堅魚作舍屋之家、天皇令問其家云、其上堅魚作舍者誰家、答白、志幾之大縣主家、爾天皇詔者、奴乎、己家似天皇之御舍而造、卽遣人令燒其家、

〔古事記傳四十一〕堅魚は屋上なる堅魚木なり、まづ堅魚と云魚は、和名抄に唐韻云、鰹大鮦也云云、漢語抄云、加豆乎、式文用堅魚二字、とあれど、漢國の鰹は當らず、加都袁と云名は加多宇袁の切りたるにて、卽堅魚とは書るを、古書には皆此字を書り後に此二字を合せて、此方にて鰹字は作れるにこそあれ、漢國の鰹字を當たるには非ず、漢國の鰹は鱧にて堅魚とは太く異なり、さて古に堅魚と云るは、此魚の肉を長く裂て煎て乾たるいはゆる鰹節のことにて、貞觀儀式、延喜式などに多く見えたる皆是なり、故に堅魚幾斤とあり、儀式に堅魚一連ともあり、又和名抄鹽梅類に、本朝式云、堅魚煎汁、加豆乎以呂利とあるも堅魚の煎汁なり、さる故に堅魚とは云なり、もと生魚の名には非ず、今世さても海ありて此生魚ある國々にてこそ生なるをも加都袁とは云、鰹節をば鰹節といへ、京などにては常に加都袁と云は鰹節のことなり、さて屋上に置加都袁岐も、其形の鰹節に似たる故の名なり、然るを或は加棟木、岡木などと云、或は鰹は水物なる故に其名を取て火の防なりなど、種種の說あれども皆非なり、○中略さて此物後世には、たゞ神の宮にのみ有れども上代には然らず、此の事○上文古事記を見れば天皇の御殿にも有しなり、かくて此大縣主の家に是を上たるを咎め給へるを思へば、此物を置は天皇の御殿のみにして、主たちの宮には如何にありけむ知らず、神の社にあることは、凡て神は天皇に准らへて尊み奉ることさに多

けれは論なし、臣又民の家には置ことかなはざりし定か、將置ことは臣民の家までおしなべてのことにて、是を置るを告賜ふには非で其造りざま置ざまに異あるを、此は臣の家の堅魚木のさまに非ずして天皇の御殿のに似たる狀なる故に咎賜へるか、若然らば天皇の御殿のは、臣の家のとは甚く異なる狀にぞありけむ、此御舍のころに至ては、やう〳〵天皇の宮などは莊麗(イカメシ)くなりて、上代の形ながらにかゝる物の遺狀も具にぞありけむ、さて其造ざまを咎賜ふとするときは、此文上(アゲ)とは尋常ならず、高く莊(イカシ)くなど造れるを云るにて、上と云言を重く見べきか、將上はたゞ置を云て殊なるこゝろなくて似天皇之御舍而造と云に、造ざまの異なる意はあるか、もし臣民の家には此物を置ことかなはざるならば、上はたゞ置ことなり、又造ざまの異なるならば、上に右の二の違あるべし、此らの意儘に決めがたし、さて又屋上に此物を置ことは、もと風の防の爲に棟を押へ鎭めたるなりと云說あり、然もあるべし、成人云、山城國愛宕郡雲が畑と云村の民の家々、今も棟にかつう木と云てありて、風の防とせり、其外凡て田舍の家茅葺に棟に烏をどりと云物あるも同じことなりと云り、此說まことに然るべし、但し天皇の御殿にのみありて、臣民の屋には置ことかなはざる物ならむには、風防には非で、若風防ならむには、臣民などの家は、大宮よりはかりそめなれば、殊に此物はあるべければなり、本より殊なる故あるか、若又造狀に異あることならば、本は風防のためにて、貴き賤きおしなべてある物なるを、やゝ世移りては、天皇の御殿などのはおのづから飾となりて、こよなく莊麗(イカメシ)かりけむ、さて又此物常には堅魚木と云を、此には木といはで直に堅魚とのみあるは、時代に合せては略き過ぎたるさまに聞ゆるに就て、又思ふには屋に此物を置は、木より風防などにはあらで、魚名の加都袁を勝雄(カツヲ)の意に取成て、祝て彼鰹節の形代(カタシロ)を造て置たるにて、本よりたゞに堅魚と云しにもあるべし、若然らば、堅魚木と云は、後に木てふことを加へて呼名なるべし、若然らば天皇の御殿なぞのは殊に莊麗しかるべきことわりなり、總て此らのこともなほよく考て決(サダ)むべきなり、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

先祭七日鎭大嘗宮齋殿地、○中略五間正殿一宇、○中略甍置五尺堅魚木八枝、甍二、搏風、○又見延喜式

〔大神宮諸雜事記二〕長曆元年月日、依宣旨大神宮ノ正殿ノ堅魚木ノ木尻ノ貫木左右端、泥障板左右端、椽懸端等乃金物等被奉加粧、

〔文永三年內宮遷宮沙汰文〕伊佐奈岐宮小殿葺之、奉上泥障板堅魚木也、

〔貞和御飾記〕御遷宮裝束雜事

一千木金物事〇中略

堅魚木甍覆泥障板、垂木等金、以下次第打之、頭ニ皆有例役歟、面々請預之、

送官符云

堅魚木九支、左右端金十八枚、弘各一尺九寸、加波高三寸、

〔內宮禰宜荒木田守晨引付下〕本宮損失並火事不吉之近例〇中略

一明應元年八月一日仁、神殿堅魚木御葺萱等悉頽落須、

〔攝壤集上神〕廻廊(クワイラウ)

〔一貫和風抄下〕廻廊

問如何廻廊、曰、是兩部習合之社、例歟、伊勢吉田等不見之、

〔鳩嶺雜日記〕元永二年十一月一日、戌時鴨御祖社寶殿、並中門廻廊雜舍等燒亡、

〔百練抄七近衛〕仁平三年七月廿五日、奉幣賀茂社、依左大臣狼籍、可被改造中門東西廻廊之由被申之、

九月廿日大雨大風、〇中略賀茂社內大樹顚折、損御料屋渡殿中門廻廊等、

〔玉海〕治承二年二月十六日辛巳、申刻藏人左少辨兼光爲關白使來、使基輔傳命云、春日社修造之間、四面可建廻廊之由、大衆上奏、依請被宣下之後、曳地築垣之間、有種々煩神慮難測事等出來、郁停止之條、又非無所恐、進退惟谷、可計示者、　三月六日庚子、頭中將定能朝臣來談云、春日廻廊事、被行御卜之處、官寮共申被立廻廊不吉之由、仍可壞退之由雖被仰下衆徒敢不承引、仍召別當權別當於殿

下被仰子細云々、十一日乙巳、巳刻興福寺衆徒以所司示送廻廊之間事、副奏狀案並等記等、雖貢可出請文之由不承引、只以詞奏之、(其趣沙汰之時、可存此旨者、)

〔百練抄 八高倉〕治承二年五月卅日、春日社今度修造之時、改瑞垣可造廻廊之由衆徒進奏狀、依申請被宣下畢、而社家依有申旨、被行御卜之處、官寮共不快之由申之、而衆徒申云、不可依卜吉凶、仍被問諸卿、猶所請本社可有覆推之由定申之、遂改瑞垣造廻廊、

〔大日本史 神祇二十二〕是歲、〇治承二年修春日社、〇中略蓋廻廊佛寺所設、非社殿正式、然當時諸大社往往有設廻廊樓門者、古制漸變矣、

〔壬生家文書〕元久二年八月廿七日、大原野社司言上云、依大風口徑三尺松木顚倒、打破三御殿並四御殿、兪口二尺五寸裳見木顚倒、打破中門廊等者、

〔三長記〕建永元年六月廿九日己卯、北野宮寺申、內舍人藤以知本功上募左衞門尉功、可修造顚倒廻廊事、(去頃大風顚倒廻廊也、)勅定可令襃功程、

八月一日庚戌、北野宮、

去五月晦日、神殿巽方、椳片倶裂落、打破東廻廊事、

〔百練抄 十二順德〕承久二年四月十三日壬申、丑刻祇園社燒亡、御殿並東南廊、南大門、藥師堂已下、皆爲灰燼、　七月一日戊子、祇園神殿已下、廻廊、大門等上棟也、貴賤成群云々、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十二月廿九日庚戌、今夜夜半、伊豆國走湯權現寶殿、並廻廊、堂舍數十宇燒亡、其火至翌日午剋、而不滅云云、　三年正月四日甲寅、去年十二月晦日、亥刻走湯山御在所、拜殿、竈殿、常行堂、並廻廊、總門、金剛力士像以下回祿之由、平左衞門尉盛綱披露之、此事依爲重事、去一日不及頤、中間當山所司馳參雖申之、元三之間盛綱抑留之云々、

〔春日權現驗記十四〕東嚴院僧正隆覺、興福寺の別當になりて、いく程なくて衆徒蜂起して、本寺をおひはらひければ、いきどほりふかくして濫吹を結構せしかば、寺中の騷動やむ事なかりき、其頃御社の廻。廊。に參籠する人の夢に見けるは、○下略

〔春日權現驗記十五〕唐院得業といふ人、御社の東廊。に入て居たりけるに、修學者のふしたりけるがおきもあがらざりければ、やすからず覺て、いでさまに足にてかしらをけて出たりければ、此僧あさましと思へども、ちからなくてふしたりけり、

〔快元僧都記〕享祿五年○天文元年十一月一日、八足門西方廊。萱葺、後藤取沙汰了、

天文二年六月十七日回。廊。殿築地引繩被誘了、普請也、　三年二月十八日柱立等有之、後藤善小使小治奉行之、○中略

一鶴岡上宮廻。廊。奉行事

一方鎌倉番匠、此奉行朝倉與四郎、仙波肥前入道、後藤善右衞門、

一方奈良番匠衆、此奉行太田亦三郎、地藏院、田村與三左衞門尉、

一方玉繩番匠、此奉行者蔭山圖書助、渡邊次郎三郎、神保宮内入道、

一方伊豆番匠、此奉行山中彥次郎、窪田豐前入道、橋本九郎五郎、

右此人數爲請取、毎日改、番匠並小奉行迄モ無闕如、可被申付、出陣之時爲中間一人宛可殘置間、何モ嚴密可被申付者也、仍如件、

天文三年甲午二月廿二日　氏綱判

六月五日、連々奈良大工如申者、廻。廊。檜皮葺被成之者、御失墜可入、亦其故者板誘造作與申、作料釘過分ニ召仕畢、責而金釘ニ木釘ヲ打添者、可爲潤色與申、雖然自餘之番匠各仕來之間不受、

〔嚴嶋道芝記一〕客人宮○中略

兩社〇本社、客人社、總。廻。廊。五百四十步

大宮客人宮へ連りわたれる廊なり、楹入歩總屋根なり、左右の欄干の柱の間に、百八の燈籠を釣て燈す、

瑞籬

〔倭名類聚抄十三祭祀具〕瑞。籬。　日本紀私記云、瑞籬、俗云美豆加岐、一云以賀岐、

〔箋注倭名類聚抄祭祀具〕崇神三年紀云、遷都於磯城、是謂瑞籬宮、此所引私記蓋是然、是泉宮之名、非神社瑞籬、此當引大神宮儀式帳云、瑞籬一重、按瑞籬宮古事記作水垣宮、萬葉集亦有水垣、又有伊垣、則美豆加岐、以賀岐、並是古言、又不應引日本紀私記云俗云、疑俗云二字當衍、本居氏〇宣長曰、美豆加岐用瑞字不穩、其說詳見古事記傳、文長不載、按美豆蓋褒稱、以賀岐以美賀岐之急呼、齋垣記作忌籬、是可以證、

〔東雅四宮室〕瑞籬、ミヅカキ、　古語に伊都といひ、瑞津といひ、美津といひ、于都といふ、皆是相轉せし語にて、尊崇の義なる事は相同じ、亦イガキともいひし也、イとは齋也、

〔圓珠庵雜記〕みづがきをいがきといふは、たゞ同じことなり、

〔古事記傳二十三〕水垣宮、〇崇神天皇　凡て水垣と云は、みづみづしき垣と美稱たる稱なるを、瑞は借字なり、書紀に瑞字を書れたるは、さらに當らぬことなるを、美豆に用ふる字なき故に、普く此瑞字を書ならへり、宮號とせられたるなり、

〔日本釋名上宮室〕瑞垣　めづらしき垣也、みとめと通ず、下を略す、めづらしとは神威の奇特なるを云、

〔類聚名義抄八竹〕籬ミヅガキイハガキ　瑞籬ミヅガキイガキ

〔伊呂波字類抄伊雜物〕瑞籬イガキ俗云美豆加岐也

〔撮壤集上〕瑞籬ミヅガキ

〔和漢通用集天地〕瑞籬ミヅガキ

〔節用集伊〕瑞籬イガキ

〔節用集大全美九〕瑞籬也神垣

〔大三輪神三社鎮座次第〕腋上池心宮御宇天皇〇昭事御世、神明憑吉足日命曰、吾國造大己貴命也、〇中略令造瑞籬、奉齋焉、隨神託立瑞籬於大三輪山、遣吉足日命令崇齋大己貴命

〔今昔物語二十六〕飛驒國猿神止生贄語第八

男行著テ見レバ、山ノ中ニ大ナル寶倉有、瑞籬事々シク廣ク垣籠タリ、〇中略此男ヲ呼立テ裸ニ成

結ヲ放セテ、〇中略瑞籬ノ内ニ搔居ヱテ、瑞籬ノ戸ヲ引閉テ人一人モ无返ヌ、

〔長明四季物語四月〕當社〇賀茂はむかしはやまとの國高鴨にものし給しを、天武のすべらぎの

六とせにわたるきさらぎの頃、此都にうつされさだんみづがきいかめしうたゝせおはしまし

ぬ、仁和のはじめのとしになん、もろ〳〵の國に一の宮をさだめ給ふ時、此瑞籬を山城の國の一

の宮に定められ、〇下略

〔荏柄天神緣記〕天慶五年七月十二日、西京七條二坊に住せし賤の娘、あやこといひしものに託宣

しまし〳〵て、我昔世に有し時、しば〳〵右近の馬場にあそぶ事多年、みやこのほとりの閑勝の

地此所にしくはなし、されども非道の罪をかうむりて、西の海邊の浪にしづむといへども、潛に

かの所に行あそぶとき許ぞすこし心もなぐさむ、ほくらをかまへ、立寄たよりをえしめよと御

託宣はあれども、身のほどのいやしさに憚て、社をもつくりまゐらせで、柴の庵のほとりに瑞籬

を結ひて、五ヶ年の間はあかめまゐらせ給に、天曆元年六月九日ぞ北野へはうつしたてまつり

ける、

〔百鍊抄十三後堀河〕安貞二年七月廿一日、甚雨、〇中略賀茂社瑞垣流損、

〔春日祭舊例〕弘安三年二月十二日、〇中略恒例御祭、〇中略

次白妙幣御幣內大臣殿御拜之後、神主經世自水垣西參テ、直ニ賜之、備進之、

弘安十一年二月五日、御祭、○中略

次上卿御神馬一匹、毛河原引廻水垣、於這樓門前引立、神主賜之拜之、

〔快元僧都記〕天文二年五月晦日、大道寺上倉ス、神主方ニ宿所、昨日廿九日白壁師間土朱塗師來了、假殿瑞籬移色有之、

〔新編相模國風土記足柄下郡二十四〕松原明神社

天正九年十月瑞籬修理ノ事ヲ命ス、因光院藏文書曰、當社瑞籬大破之間、氏治買文達候、堺和泉曾代銭ヲ可出、於當年中早速可令建立、公物之不足有之者、追而可申付候、仍如件、辛巳十月廿一日、因光院 江雪斎奉之、虎朱印、

〔玉葉和歌集神祇二十〕十月ばかり賀茂にこもり侍けるに、瑞籬にふるはつ雪を白妙のゆふしでかくと思ひけるかな　增基法師

〔神祇提要九〕井垣圖

高麗社屋大小地勢廣狹、其堅木無定數、唯橫貫之木必用二行、其狀似乎井字、故曰井垣、

〔塵袋神祇五〕神社井垣

神社井垣は井の字義にあらず、舊事紀曰、宇摩志麻治命、先獻天瑞寶、亦豎神楯以齋矣、謂五十鈴、亦云、今木刺繞於布都主劒大神奉齋殿內、といへり、いがきは今木の垣にして、五十垣なりと眞野時綱がいへり、

○按ズルニ、いがきハ忌垣ノ略ナヌ、井ノ形ニ似タレバ云フト云ヘル說ハ取ルニ足ラズ、

〔萬葉集十一〕寄物陳思

千葉破、神之伊垣毛、可越、今者吾名之、惜無、

〔萬葉集略解十一下〕人の越て穢すを忌、神垣ゆゑに、いみ垣といふを略ける也、

〔古今和歌集五 秋〕神のやしろのあたりをまかりける時に、いがきのうちの紅葉をみてよめる、

つらゆき

ちはやぶる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

〔枕草子十一〕神は　大原野、かもは更なり、いなり、春日いとめでたく覺させ給ふ、○中略いがきにつたなどのおほくかゝりて紅葉の色々ありし、秋にはあへずと貫之が歌思ひ出られて、つく／＼と久しうたゝれたりし、

〔永德二年春日燒失記〕井垣、コボツ時モ、夫ヲバ神主殿ノ夫ニテメサル、

〔源氏物語十 賢木〕はなやかにさしいでたるゆふづくよに、うちふるまひたまへるさまにほひにるものなくめでたし、月ごろのつもりをつきづきしう聞え給はんも、まばゆきほどに成にければ、さかきをいさゝかをりても給へりけるをさし入て、かはらぬ色をしるべにてこそ、いがきをもこえ侍にけれ、

〔伊呂波字類抄太 地儀〕玉籬タマガキ

〔和漢通用集天地〕玉垣タマガキ 神祇 瑞籬ミヅガキ 同義

〔節用集上 太〕玉垣タマガキ

〔日本釋名上 宮室〕玉垣　朱にてぬりてひかりかがやく故に玉垣と云、みづがきは内にあり、玉垣は外にあり、

〔神祇提要九〕瑞垣圖 或作水垣

水垣又名玉垣、曰水、曰瑞、曰玉者、尊美神垣也、言清淨之義矣、高八尺、或五尺、或三尺、隨社壇之大小、近來以丹塗之、名曰朱玉垣、非上古之制、

〔神道名目類聚抄一 宮社〕玉垣　玉墻ハ宮殿ノ御後ノ方ヨリオシマハシ、前ハ幣殿ノ方ニ至テハ大方

渡殿ナルモノナリ、然ドモ宮社ノ便ニヨリ其品カハリアルナリ、

〔俗説贅辨一〕朱の玉墻の説

世俗、朱の玉がきとて、神社の垣を丹にてぬる事有、今按するに非なり、一書曰、源氏野分曰、黒木赤木、花云、木剝皮曰赤木、箋云、有皮曰黒木、無皮曰赤木、非唐木也、今按神社朱玉墻、可以此推之、朱塗之尤無謂也、

〔古事記下雄略〕一時天皇遊行、到於美和河之時、河邊有洗衣童女、其容姿甚麗、天皇問其童女、汝者誰子、答白、己名謂引田部赤猪子、爾令詔者、汝不嫁夫、今將喚而、還坐於宮、故其赤猪子、仰待天皇之命、既經八十歳、於是赤猪子以爲、望命之間、已經多年、姿體瘦萎、更無所恃、然非顯待情、不忍於悒而、令持百取之机代物、參出貢獻、○中略於是天皇大驚、吾既忘先事、然汝守志待命、徒過盛年、是甚愛悲、心裏欲婚、憚其極老、不得成婚而、賜御歌、○中略爾赤猪子之泣淚、悉濕其所服之丹摺袖、答其大御歌而歌曰、美母呂爾、都久夜多麻加岐、都岐阿麻斯、多爾加母余良牟、加微能美夜比登、

〔古事記傳四十一〕都久夜多麻加岐は、築や玉垣なり、（玉はほめたる稱なり、岐は清音なり、濁るべからず、）築と云は土以て築たる垣にて、今世に所謂る築地なり、（ついぢは築土と云ことなり、）古には神社にも築たる垣ありけむ、さて此に二の意あるべし、一には御室の周に垣を築なり、今一には垣を築て御室の境域を定むるなり、（此室なれば、室[illegible]は御室に籠る室なり、）

〔平家物語二〕卒都婆ながしの事

いつくしまへぞ參りける、○中略入社の御殿いらかをならべ、やしろはわたつみの邊なれば、しほのみちひに月ぞすむ、潮みちくれば大鳥井あけの玉がき、るりのごとし、潮ひきぬればなつの夜なれ共御まへのしらすに霜ぞおく、

〔仲資王記〕元久元年三月廿七日庚寅、稲荷下社神主忠清來申云、去頃田中明神近邊在家強盗亂入、

旅人遁出之間被切手了、件旅人參明神、血付玉垣云云、予仰云、如此事先例如何、忠清云、行社祓云云、依先例早可奉祓清、兼又付血玉垣桁板等可奉造替之由下知了、

〔百練抄十三後堀河〕元仁元年十月廿九日、紀伊國造宣康於玉垣內被射殺云云、依之大神祭發遣延引、

〔海道記源光行〕十八日(〇貞應二年四月、中略、)鶴岡にとて鳩宮にまゐらす、あけの玉がき金鏡に映じ、白妙のにしき幣風にそよめき、銀の鐺は朱檻をみがく、錦のつゝれははなにひるがへる、

〔荏柄天神緣記〕王城鎭守神々多くましませど、當社は靈驗あらたにましますゆゑに、朱の玉垣再拜せぬ人なし、

〔東關紀行源親行〕尾張國熱田の宮にいたりぬ、神垣のあたりちかければ、やがてまゐりてをがみ奉るに、木立年ふりたる杜の木の間より、夕日のかげたえ〴〵さし入て、あけの玉垣色をかへたるに、木綿四手風にみだれたる、ことがら物にふれて神さびたる、(〇下略)

〔道ゆきぶり今川貞世〕うちでのはまうちすぐれば、ざいご中將の、わがすむかたといひけん、あしやのさとになりぬ、それよりこなたに、磯ぎはちかき松かげに、玉垣神さびて鳥居などたてるところあり、北野の宮の此ところにやうがうしたまひてよりのち、御影のまつ原と申なるべし、

〔東國旅行談附錄五〕神貢之不思議
上野國神樂郡一之宮と稱し奉は、いかなる御神をか勸請ましますかしらず、古へは兩部の神道にて、朱の瑞籬にて有しとかや、今は唯一神道をもつて祭事をおこなはるゝ、正一位勳五等拔鉾大明神と申奉る、

〔匠家必用記下〕玉垣の事
玉垣は角なる木に貫を通し、神社の廻りに押通して之を設く、又は左の圖(〇圖略)のごとく厚き板にて造るもあり、是本式の玉垣也、或は木の皮を削らずそのまゝ用ふるあり、是を黑木の玉がき

鳥居

という也、玉がきを瑞垣とも荒垣。ともいふ、神社によりて二重三重にも設くる也、然るときは内にあるを瑞垣と云、外にあるを玉がきとも荒垣ともいふ也、皆是汚穢不淨を入ざるための垣也、谷氏曰、木の削りたるを朱の玉垣と云、朱に塗る謂なりと、今俗間にいふ玉がきは、過半上を立格子、或は組格子にして、下に壁を付、こし板打上に雨覆有、是は玉がきといふ物にはあらず、壁墻なり、神社の圍なり、心あらん人は本式の玉垣に造るべきこと也、

〔住吉社歌合〕社頭月

二十番　右　　　　堀川

雲はらふあらしのみがく月にまた光をそふるあけ。の。玉垣。

〔山家和歌集上〕社頭雪

玉。が。き。はあけ。も緑も埋れて雪おもしろき松尾の山

〔後鳥羽院御集〕同〈○正治二年〉八月一日新宮歌合　社頭祝

神をまつるゆふしでかくる榊葉のさかえやまさん宮の玉。が。き。

同十一月十一日新宮歌合當座　社頭夕風

ちはやぶるあけ。の。玉。が。き。神さびて榊葉ごとになびく夕風

〔吾妻鏡六〕文治二年十月廿四日丁酉、甘縄神明寶殿被加修理、今日立四面荒垣。、並鳥居、藤九郎盛長沙汰之、〔二品〈○源賴朝〉監臨給、

〔筑紫道記宗祇法師〕住吉の御社に參てみれば、あらがき。の。めぐりはるかにして、つらなれる松の木立神さびたり、樓門なかばはやぶれて、社壇もまたからず、

〔大社志〕荒垣。〈東西八十八間、南北百十間、〉

〔倭名類聚抄居處十〕欄楯　考聲切韻云、楯〈[illegible]〉今之門欄楯也、辨色立成云、欄楯。〈[illegible]〉

〔箋註倭名類聚抄 三居處〕按楣、門樞横木、可以栖雞、門戸具載訓度賀美、又鼠走是也、無屋之門、則可謂之鳥居、故辨色立成、楊氏訓之爲鳥居、又神祠衡門謂之鳥居、儀式帳所謂於不葺御門是也、蓋神祠衡門横木可以栖雞、故謂鳥居、後轉以爲門名也、此所擧則是、然則雞所以名曰雞栖則同、然其實不同也、(中略)○但西土無是物、無有漢字可充者、

〔伊呂波字類抄 止地儀〕鷄栖(トリヰ)(鳥所居也)　鳥居　楣　華表

〔下學集 上神祇〕鳥居(トリイ)(唐云花表)

〔運歩色葉集 登〕花表(トリヰ)(表阿之字)　花居(同)　鳥居(同)

〔和漢通用集 三天地〕鳥居(神門)　華表(同)

〔撮壤集 上神祇〕鳥居(トリヰ)

〔饅頭屋本節用集 土〕鳥居(トリヰ)

〔神道名目類聚抄 一宮社〕鳥居(トリヰ)　鳥居ニ數説アリテイマダ美ヲ盡サズ、今此ニ一二ヲ擧、或云、鳥居ハ日神天ノ石窟ニコモリ給シ時、八百萬神謀テ出御アラン事ヲ祈玉ヒ、ツヒニ木ヲ石戸ノ前ニ建テ、鷄ヲ其木ノ上ニ居ラシメテ鳴シム、所謂此ノ木則鳥居ノ初ナリ、故ニ鳥居ト云、或云ク、彦火火出見尊海神ノ許ニ至リ給フ時、海神ノ門ノ前ニ湯津杜ノ樹アリ、其ノ樹ノ下ニ井アリ、出見尊其ノ樹ノ上ニ登居タマフ、海神ノ女豐玉姫、出テ井ノ水ヲ汲ントシテ人影ノ井ノ中ニアルヲ見テ、仰テ出見尊ヲ見アラハシ奉ル、サレバ月ノカツラ男ト云事ハ、此樹ノ上ニ尊ノ御坐ヨリ吾國ニハ云ル事ナリ、門ノ前ト云ハ、今ノ神社ノ鳥居ト云ル、是海神ノ門ノ前ヨリ起レリ、鳥ハ戸ナリ、戸ハ門ナリ、居ハ井ナリ、門ノ井ノ心ナリト云リ、或云、鳥居ハ陰陽交感ノ表ナリ、或云、鳥居ハ天ノ字ヲ表ス、天(テン)ノ象ナリ、故ニ天門(トリヰ)ト云、此説ノ如キハ上古ノ義ニアラズ、文字來朝アリテノ説ナリ、

上件ノ説ノ中、大ノ所説ハイマダトリキノ名義ヲ解セズ、此外諸説アリ、コレヲ略ス、按ニ鳥居ハ、上古質素ノ時ノ門ナリ、是境ヲ限ルカマヘナリ、蓋シトリキノ字數多アリ、　鳥居　天門　神門　華表　頭木　鶏栖　助木　鳥井　此等皆トリキト訓ズ、附會ノ説ニヨリテ文字ヲ設ク、トリキノ事文字ニコヽロナシ、訓義ニ習アリ、アラハニ遮ンモ神慮ハカリガタシ、故ニコレヲ略ス、

〔古今神學類編 註十九〕鳥居 綱石鳥居、冠木鳥木、

按ズルニ、鳥居ノ字、或ハ鶏居、鶏栖、鳥井、華表、華門、衡門、八宿、祇園、華極、桓ノ類皆諸書ニ所見也、其中鶏栖ノ字ハ和名抄ニ出テ、鶏栖今之門鶏栖ト、又云、辨色立成鶏栖鳥居也、楊氏之説亦同ト、或云、人家鴨居天井ト云ニ同ク、火災ヲ厭フ神門ノ故名也ト、又鳥居ノ二字ハ、神代巻ニ出處アリ、其外ハ皆以牽合附會而不足取ト云ヘリ、二所宗廟ニハ鳥居三基也、一二三ノ鳥居ト稱ス、又覚垣御門四方ニ四基アリテ、四門ノ如シト也、大社已下ノ鳥居モ其定制丈尺アリ、或ハ三基二基一基其尊卑ニ付テ也、事ハ前ニ宮制ノ章ニ記シ了ス、神代俸受記ニ、神代巻天稚彦ガ門ノ前湯津杜ノ樹ニ無名雉ノ留リシ事ヲ引テ、寄鳥來居杜抄ト侍ルヲ以テ鳥居ノ二字ノ出據トス、中略勢ニ思案ヲ以推之、假名遣二人丸抄ニ通人障子、紫宸殿後、七間ノ中ノ間障子也、又鳥居障子トモ書也ト侍ルヲ思ソニ、鳥居ハ上古ノ神門ニシテ、其號ヲトリキト稱スルハ通入ノ約語也ト可知也、而シテ彼通入障子ヲ以神前鳥居ノ本據トスルニハ非ズ、唯其和語ト理義ノ一般ナルヲ取テ也、通入障子ト云物ハ、説々多端也、名目抄ニハ通障子トアリ、江次第ニモ通障子或稱トホリ障子哉也、長一丈高七尺計、上下張錦、内張絵人實ト云云、是モ名目抄ノ如ク、フシヤウジト點ゼリ、同書ノ頭書ニ所詮大ナルツイ立障子ニ御簾カケタル也ト云ヘリ、然レドモ二人丸抄ノ心ヨリ見之則フシヤウジハ名目也、トホリ障子トハ、御簾掛タル障子ノ透通リタルヲ云ナ

レバ、通入ノ二字ヲ神門ノ和語トリキニ思ヒ取ン事難ナク、而モ本致曉シ安キニヤ侍ヲン、彼或ハ華表ノ事ヲ以テ說、又ハ墓門等ノ附會ノ如キ、豈ソレ本意ナランヤ、是不辨時ハ虛實並ビ行ハルヽ中ニ、人ハ怪ヲ好ムニ牽レテ、故實ハ終ニ失セテ、附會習合而已盛ンニ成リ行キ侍ル、下學集ニ華表ニ起ルト云事モ、列仙傳ニ丁令威化鶴、飛上遼東華表ト侍ルヲ以テ也、此華表ト云物ハ、其圖ヲ見ルニ一柱也、其形鳥居ニ不似ト云ヘドモ、其柱ニ鶴ノ上ル事故、鳥居ノ字義ニ合ヒテヲ何トナク附會シ來ル者ナルベシ、彙邦神道百首抄ニ、唐ニ天地壇ヲ築キタルノ前ニ華表アリ、是鳥井ニ同ジト侍ルハ如何ト覺エ侍リ、又華表ト云ニ此柱ノ事ニ非ルモアリ、文選ノ註ニ善曰、謂華飾屋之表外也ト侍ルハ、華屋ノ文飾ヲ云ト也、又或記ニ華表ハ鳥居ニ異ナル由ヲ云ニ、崔豹古今註ニ、程雅問曰、堯設誹謗之木何也、答曰、今之華表木也、以橫木交柱頭狀若花形似桔槔、大路交衢悉施焉、或謂之表木、以表王者納諫也、亦以表識衢路也、秦乃除之、漢始復修焉、今西京謂之交午也、據古今註說及列仙全傳中所圖、華表止一柱也、又見佗圖畫有二柱者、與鳥居相似、但華表者橫木貫二柱、柱端如花形、其鳥居者橫木蓋柱上、是爲異耳ト、故ニ衞門トスル事元亨釋書ニアリ、衢路ヲ表識スル事ハ傍示ノ心ニシテ、導ク事ハ鳥居ニ似タリ又何平叔ガ景福殿賦ニ其華表則鎬々鑠々赫奕章灼ト、是ハ今ノ華表ノ事ニハ非ズ、唯華飾タル由注ニ侍ル趣、今已如記、又石ノ鳥居ニ據アルニ似タル由、或記ニ是ヲ載タリ、其意ニ云、太平廣記ニ、燕昭王墓前有華表ト、又漢書ニ墓前開道建石柱以爲標、謂之神道ト侍ルヲ以テ思フニ、此等ノ事ニ倣テ石ノ鳥井ナド巧ミ始シニヤト、尤是一理アリテ牽合ノ甚シキ者ナレド、本ヨリ鳥居ハ石鋼ヲ以テスベキ謂レニ非レバ、或人ノ如言、好事ノ所據サモアルベキニヤ、或云、本朝石ノ鳥居ノ元始ハ、九十一代伏見院ノ永仁二年ニ、釋忍性天王寺ニ石ノ鳥居ヲ立ツ是ナン始ナルベキ、是ニ倣テ神社マデモ今ハ必ズトセルニ似タリ、尤非古也ト云ヘリ、元亨釋書釋忍性ノ傳ニ、彼石ノ鳥

居ノ事ヲ、此寺大門之外有二衢門一、俗曰二鳥居一、鉅木宏材、歳久朽頽、性出二新意一以レ石新之、高二丈五尺、堅確瑩滑、國人拭レ目ト云云、或云、極樂律寺沙門忍性建二石鳥居一變レ古ト、鎌倉志ニ忍性菩薩行狀略頌書、其文中ニ永仁二年四天王寺大勸進、建二石鳥居一二大五ト云云、或云、神社ニ石鳥居銅鳥居ヲ興ス事ハ、皆是異朝ノ華表、幾門、標柱ノ附會アルヨリ、好事ノ人倣レ之也、唯是莊觀ヲ構ヘテ、神威ヲ添ルニ足レリト謂ヘリ、彼天王寺ノ石ノ鳥井ニ、相模國住人本間九郎資貞拔髻ノ時一首歌ヲ貽ス、花咲ヌ老木ノ櫻朽ヌトモ其名ハ苔ノ下ニ隱レジ、其男源内兵衞資忠至孝ニシテ親跡ヲ繼ゲリ、是亦小指ノ血レテ同鳥居ノ柱ニ、待シバシ子ヲ思フ道ニ惑フラン六ノチマタノ道シルベセン、ト云云、尤世ノ美談トスル所也、サレドモ血ヲアヤスノ事、寺門ナレバ難ナシ、神門ナラバ資忠ガコノ擧美玉ノ瑕瑾乎、

〔東雅 四神祇〕鳥居、トリヰ、　義不詳、倭名抄に考聲切韻に楔は今の門蹙楼也といふ、辨色立成に鶏棲は鳥居也といひ、楊氏が説同じと註せり、此條説多かれど、今徴とすべき所もなければ、悉く信ずるにたらず、[illegible]

時におりし事ども、なにかは是其事の始也としるされしものやはある、たゞ麻績麗且白羽神して麻を植て青和幣とす、今表を白羽と稱するは此其縁なりと舊事紀にしるされしことの外は見る所あらず、又華表柱の字を讀てトリ井といふがごとき、其制のごときは似たる處もあれど、すべて我國太古の事においては漢籍のことを援引きて、其徴とすべき事にあらず、

〔鹽尻 初編 一〕神社鳥居

神社の鳥居、昔は門といひて、とりゐとはいはざりし、伊勢神宮の一二等の鳥居も、第一の門、第二の門と古き書に見えたり、但寶龜二年の太政官符内外の鳥井など有れば、門とのみいはざりしと見ゆ、とりゐ通の轉訓といふ、然ども酉陽雜俎に東門雞棲木といふ事あり、これ鳥井の意に等しきにや、質朴のむかし神社の衝門に雞を宿せしめしより、雞棲の名あるにや、玄かれば鳥居とかくは古意なり、形につきて天の字義とし、又鳥井と書くは附會なり、華表と書誤なり、華表は門にあらず、只神社古俗の門と心得れば可なり、種々の珍說をまうけ、おくふかくいふは近世に出づ、

〔鹽尻 二編 五〕鳥居は衝門

鳥居はもと衝門なり、元亨釋書に衝門の事あり然るを異邦の華表に附會して、猶其理は本邦の故實なんどとりませていふ、尤似げなき事なり、下學集、及從邦が百首抄以來、華表の字を附會せり、とりゐは通入(トホリイリ)也といふは安らかなりけり、ふるき伊勢物語の繪に衝門に鷄の宿せし所をかける鷄栖の心もかよひて覺ゆ、もろこしに鷄栖といふは、にはとりを入るゝおりの類にて、其制亦別なり、四書對相に鷄栖の圖あり我國の神祠のとり居は、往古の門也、今とても村落には兩柱に横木をわたし戸もなき門あり、是を以思ひをいたすべし、今華美の鳥居を見て古風を忘れしより、さまざまの說あり、

〔神社啓蒙 或問〕問鳥居何義　答、予嘗視寶基本紀、其說云云、其在西者、言鳥居、鳥西同訓又稱智門、或言、取無名雉止于湯津杜梢之義、今人家承塵下橫木、言之鴨居、義又同、爲其厭火災、故取水物、或言、居當作井、表天眞井之義、或言、鳥居表天字也、或言、華表同義、予意蓋上古神門也、

〔俗神道大意二〕鳥居ノコトモコノ實基本紀ニ四方中以西方爲鷄門也、故以西方號鳥居ナド云ヘルヲ始メ、後ノ神道學者ナド色々ニ附會シテ云ヒ騷グドモ、凡テ取ニ足ラズ、コレハ尾張人吉見氏ガ殊ニヨク辨ジテ置レマシタガ、其說ニ依テ申サバ、儀式帳ニ於葺御門、不葺御門ト二ツノワケガ有テ、俗ニ云フ鳥居ハコノ不葺御門ノコトデヤ、延喜式大神宮式ニ高欄鴨居丸桁、高欄土居桁ト有テ、ソノ鴨居丸桁ト云ハ高欄ノ上ノ桁ノコトデ、此ヲ鴨居ト云ハ上ニ居ルト云ノ義デ、尤コノ大神宮式ニ鴨居ト書テアレドモ、同ク內匠式ニハ御輿鳥居ノ高欄トモアリ、マタ類聚雜要抄ニ、裝束ヲカタクル表架ノ圖アリナ、其笠木ヲ鳥居木トアレバ、凡テ鳥居トイフハ上ニアル横木ヲ云ト見エル、

〔類聚名物考神祇十一〕とりゐ　雜栖抄和名鳥居同字華表義以神門

この事古へにきこえず、神門神戶をいふなれども、それもなにのより所なし、又華表をあつれども、この物さらに其實にあたらず、これは唐の物にて、その事大に異也、おしていはゞみをつくしなどぞいふべき、されどもかりにここに華表の事を出す、見る人思ふべし、華表はたゞ墓のしるしなれば、甚神事には忌むべき事なるを人しらず、　楊升庵外集七華表漢書註、作和表、讖記字林俱作桓表、公室視桓楹註、桓墓前表柱也、華和桓三音相混、禹貢、桓夷底績、水經作和夷、桓譚新論、晋中經簿作華譚、則華表作和表桓表、義實吁矣、　述異記上廣州東界有大夫文種之墓、墓下有石爲華表柱、石鶴一隻、種者越王句踐之謀臣也、　後漢書四十四楊震傳、因飲酖而卒、時年七十餘云云、先葬十餘日、有大鳥高丈餘、集震喪前、俯仰悲鳴、淚下霑地、葬畢乃飛去、郡以狀上、時連有災異、帝感震之枉、○中略於是時人立石鳥象於其墓所、　今思ふに此事によれば、鳥居といふも猶墓のしるしに似たり、又列仙傳の丁令威が華表の事に似たる事なり、　千加屋草二鳥居の事、異說多く、列仙傳に載たる華表の故事などへかけ、直に華標華表の字を用る人さへあり、爾雅

第四釋宮篇曰、雞棲於弋爲榤、鑿垣而棲爲塒、疏云、弋橜也、詩經雞棲于桀といふ即是也、字彙に、橛其月切、門中橛爲闑、又木段即弋也と注せり、雞棲の號因て來る事尙し、吾大日本、古來より上長押とその上との間に小柱ありて、是を鴨居といふ、即雞棲于桀の處にして、水鳥の名を用ゐて火を防ぐの杭とす、類聚雜要などに、母屋寢殿の指圖を載たるにも人家に鳥居の號あり、神社の總門こゝより神地といふ限りをしめす物に、笠木とその下との間を雞棲とす、俗に通じやすき爲に鳥居とも書り、全體の名にはあるべからず、伊弉諾尊、伊弉冉尊二柱の故事にかけて、雞棲を說くのたぐひ論にたらず、　或人云、林春齋の書たる物に云、鳥居の事、鳥とはいやしき庶人下部をいふ、さるものは主の供しても神社の前までは行事かなはで、花標の下にて止り居れば、鳥はそこにをれといふ事のよし、神家の傳也といひしとかや、　今思ふに、此事なにの據處もなし、つねの牽合なれば信ずべからず、

〔傘のみたま後五十五〕神門

鳥居は、○中略大神宮儀式帳六に、御門十一間於葺御門三間云云とある次に、於不葺御門三門云云とある、その不葺御門やがて後の鳥居にて、門と同じ物なり、鹿島問答にも神門と指て云り、其は次に引が如し、又儀式帳に玉垣門といふあり、それも畫に鳥居の左右に玉垣したるがある如く、その玉垣のあるを、鳥居のみ立るに對へて玉垣門と云へるにて、不葺御門なり、江家次第伊勢公卿勅使の條には、入於第三鳥居、立幣案於第二御門外、齋部屈身跪地如捧案脚祗候、又引立御馬、禰宜等候第三御門內西腋庭中石壺座とありて、御門といひ、鳥居といへれど、此鳥居は卽ち儀式帳なる不葺御門の事なり、中右記寬治六年十月三日院日吉社に御幸にて、四日に還御の事を記して、寄南院御車とて、分註に、昨日一院自鳥居門下下御車行給、今朝直寄御車於御所とあり、是も門なるから門と添て稱へる也、今の世にては伊勢の神宮の鳥居の如きか古

縁の殘れる物なるべし、美麗にしたるは天竺にも是と形の似たる物あり、辨天など云佛の額の上にも付たる狀あり、佛法盛なる世に、その形の方へ流て打見るには同じ物の如なれり、されどもとより別物にて、佛法のに習ひて作そめたる物にはあらず、そも〳〵此物神の御社にのみかぎりて作り、はた神門なる事疑なければ、古きによりて不葺門とも神門とも云べき事なり、中むかしにくぎぬきといひ、今くぎぬき門と云物ぞ此なごりなりける、又とり居と云名の方を考るに、神の御門にのみかぎりて云べきにあらず、鹿島問答に、無名雉飛降、天稚彥宮前ノ湯津杜ニ居テ鳴ク事シキリナリ、神門鳥居ト名クルハ是緣也云云などいへるは、附會說にてとるべきにもあらず、鳥居は神門にかぎる稱にあらず、古くは葺ずのみ門とこそいひたれ、鳥居と云名も聞えず、和名抄には門をあげ、闕閣をあげ、坊門をあげ、鷄栖をあげたり、是にても鳥居は坊門の次に云はぞの物にて、神にかゝはりまうせる物ならぬ事を知るべし、とりゐと云は門の類の中にて甚いやしきを云名なり、和名抄の註に、考聲切韻云、揭今之門鷄栖也、辨色立成云、鷄栖鳥居也、揭氏說同と云り、更に神の事はなし、此鷄栖と云物は鳥のとまり木の樣なるより名づけたるならむ、されば、是もくぎぬき門の如き物と思はる、次に出す慕歸畫詞の畫の如き物なるべし、京わらべ上卷五條天神の祭の畫に、社のめぐりに玉垣して、其玉垣にかゝる口を設け、其より又外の方に去りて常の鳥居を畫り、是は神門にあらで鳥居と覺えたり、鍔口かけたるは近世の風にして云べきかぎりにもあらず、○圖略伊勢の神宮の神門の古代のさまにてかはらざるに合て考るに、神門は开の如く、鳥居は人家の門にて冂かくの如くにて、横の木の二つなるが違目なりけむ、本より同意の物にて、形も似たれば、人家にいふとりゐの名が神門の方にうつり、傳の鳥居の方をばくぎぬきと云事に混れ成て、其まゝに定れる物なり、大神宮諸雜事記に、弘仁四年九月十六日云云、自今以後雄胎

女不參入於鳥居內也云云とあり、其頃はやく鳥居の名の神門の方に轉りたるにや、又後にまか記るにやあらむ、何にも儀式帳のむねに合はざれば正しき名にあらず、猶鳥居の名其後も同書に見えたり、一鳥居など云稱も同書にあり、神門ならで古に鳥居といへる門は今も田舍などには多くありて、右に引る京童の中の畫の類にて、扉は有らずて只己が住居のかぎりの如く立たるにて、人の入るを禁むるための物にはあらず、〇下略

〔類聚神祇本源十一外宮別宮〕一大中小社差別事

太政官符　神祇官幷五畿七道諸國司

應早定置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣珠垣鳥井幷四至內地町數事

一大社四至限九町

內外鳥居二基 内一本、高九尺、口徑八寸、外一本、高一丈、口徑九寸、

一中社四至限八町

內外鳥居二基 高八尺、徑七寸、

一少社四至限四町

鳥居一基 高六尺、徑六寸、

寶龜二年二月十三日 〇節略

〇按ズルニ、本文官符ノコトハ、社格篇大中小社ノ條ニ詳ナリ

〔江家次第十二神事〕伊勢公卿勅使進發幷路次儀

宮司三人先行、渡宮川參豐受大神宮第一鳥居下下馬行列、〇中略至第二鳥居下內人二人、灑鹽湯獻大麻、畢進入、

〔大神宮諸雜事記一〕弘仁四年九月十六日、豐受宮大內人神主眞房妻參詣於彼宮御祭天、祇候玉垣

下之間、件女乍坐産生畢、○中略自今以後、姙胎女不參入於鳥居内也、

〔權記〕寛弘二年十二月十五日己丑、參豐受宮、於一鳥居外解劔、二鳥居大麻置湯、

〔古老口實傳〕一宮中鳥居内吐唾等事、用疊紙也、

〔文保記〕宮中禁制物事

弓箭兵仗大刀、男女念珠本尊持經、不持入二鳥居之内、但僧尼念珠威儀之上、不入第三鳥居中之間、非制限歟、

〔神祇提要九〕神社神寶祭器圖

凡鳥居有四、一曰二柱、二曰嶋木、三曰雙指、四曰嚢座、從其神社、其制各異、鳥居字有八、一曰鳥居、二曰天門、三曰神門、四曰華表柱、五曰額木、六曰鐙柄、七曰助木、八曰鳥井、此内以鳥居神門爲通稱、

凡二柱鳥居、神明大社建之、是鳥居本式也、

凡鳥居制法不一定、大小長短從其社宮大小其地勢廣狹、其寸法七分一也、下皆倣此、

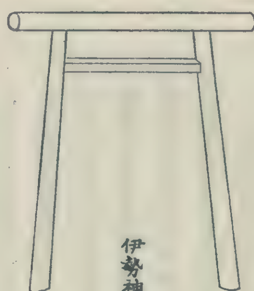
凡嶋木鳥井、蓋二柱誤也、然今大社小社共用之、且甚者以石作之、恐其習合弊也、卜部傳曰、鳥井所由初者、古昔日神入天石窟、諸神奏神樂、其時建木於石戸前、令鷄鳴、其木上所謂常世長鳴鳥是也、其木乃鳥居初也、故文字從鳥居、又云、右柱爲陰、左柱爲陽、蓋木在上通左右、是乃陰陽交感之理也、又云、二柱鳥井表天字、故名天門、此外數説不暇擧、擇其可者記之、

雙指圖略○圖

是制非宗源之式、權現天王大書齋等之鳥居也、且以丹塗之、皆宮寺之制、習合之式也、下嚢座鳥居亦倣之、

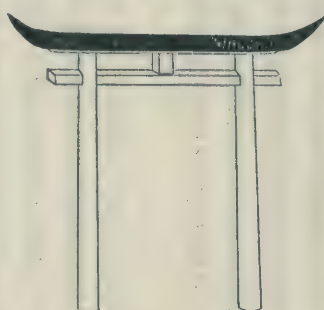
〔神道名目類聚抄一宮社〕鳥居　其制一ナラズ、神社ニヨリテ、嶋木、雙指、嚢座等ノ差異アリトイヘドモ、當世皆通ジテ嶋木ノ鳥居ヲ立、石ヲ以テ是ヲ作ルモノ、後世ノ費ナリ、

二柱鳥居

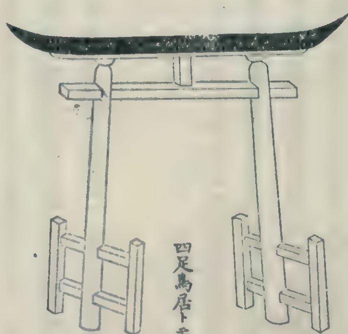


伊勢神宮ニ立

島木鳥居



鐘指鳥居



四足鳥居トモ云

藁座鳥居

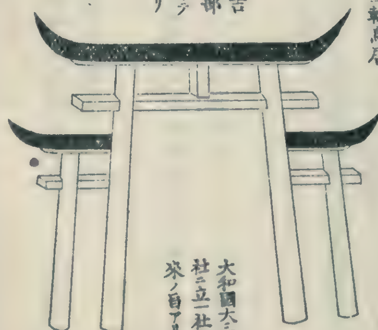


總合鳥居



近江國日吉社ニ立是兩部習合ノ制ニシテ一社ノ傳來アリ

三輪鳥居



大和國大三輪社ニ立一社傳來ノ旨アリ

〔類聚名物考神祇十一〕三柱鳥居

三方に三柱を三本立て、上の笠木等もみなもち合せて、鼎足に作れる鳥居也、この鳥居山城國西洛外木島といふ社の森の中に在て、清水の井有、その上に立てあり、

〔類聚名物考神祇十一〕總合鳥居　さうがうのとりゐ

近江國比叡山山王の社の鳥居は、笠木の上に又三角に立たる笠木有、是を總合の鳥居といふ、江戸東叡山の山王の鳥居もそのさまに同じ、この事神道名目類聚抄に兩部習合のよし見えたり、淺草寺の内にも山王社に此鳥居あり、

〔類聚名物考神祇十一〕三光鳥居　さんくわうのとりゐ

大和國三輪山にたてる鳥居は、二柱の左右にまたならびて、一段ひきく笠木付たる鳥居有、すべて柱四本をたてゝ、三間にしたり、三間ながら門扉をさしたり、是をば三光の鳥居といふなり、江戸護國寺の觀音堂の後に鎭守の社にこの鳥居有、されども扉はなし、その故をしらず、

〔屠龍工隨筆〕黑木とは皮むかざる丸木、あかきとは削りたる木なり、黑木の鳥居といふは野の宮などにある皮つきのけづらざる木也、黑木の御所などいふもけづらざる丸木にて立たるなるべし、あかきの鳥居といふは、けづりし所にて作りたる鳥居なり、

〔匠家必用記下〕鳥居の事

鳥居は神代の神門也、今宮社に用ふるは神代の遺風にして、木の鳥居を本式とす、當時鳥居を建るならば、先其宮の古例を尋、鳥居の風を定むべし、又は御神名に付ても造りやうある事なれば、よく吟味して造るべきこと也、鳥居に品々有、神明鳥居、黑木の鳥居、島木の鳥居、山王鳥居、三輪鳥居、稻荷鳥居、わら座の鳥居、丸木皮剝の鳥居等の製有、此ことをしらざる人は、識者に問て造るべし、若古例なき宮には、神明鳥居、丸木皮剝の鳥居、黑木の鳥居にして可也、近世押通り嶋木の鳥居

に造るは其宮によつて自然と誤も多かりなん、又外に雨覆ある鳥居、或は石すゑの鳥居は略義にして、式正のことにあらず、又石の鳥居唐金の鳥居は、是亦大略義也、心あらん人は木にて造り、時々造りかふるを本式とす、木は檜を用ふべし、餘の木を用ふべからず、伊勢に石唐金のたぐひを用ひざるを見て推量すべし、故に名目抄にも石にて鳥居を造るは後世の費なりといへり、番匠たる人常にこゝろ得あるべきこと也、

〔皇大神宮儀式帳〕御門十一間

於不葺御門八間各長一丈三尺、高九尺、

〔大神宮儀式解四〕於不葺は宇倍布加奴とよむべし、板葺を云、草もて葺ねば於不葺とはいふ也、葺はもと草にかぎればなり此八間を今の一鳥居、二鳥居、西鳥居、俗に三鳥居といふ南鳥居、東鳥居、北鳥居、八重榊鳥居、蕃垣御門なりといふは不勘也、下女嬬侍殿の次に、板垣廻長一百卅八丈六尺と見えて、是より上は大宮一院あり、此内に收めたる御門八間なれば、外院の鳥居には及ばず、仍考ふるに、こゝにいふ八間は、瑞垣北御門、現存、蕃垣御門、現存、これを俗に鵜頭門といへり、内玉垣北御門、現存、南第三御門、現存、後に鳥居とし、八重榊鳥居といふ、外玉垣東御門、西御門、北御門、各中絶、南第五御門、現存、冠木鳥居といふ、已上の八間あるべし、

〔嚴嶋道芝記一〕本社

大鳥居　一基　高さ十丈　笠木八丈餘

楠にて廻り一丈六尺、舌先より百五十間去りて、海の中正面に建つ、

鐵鳥居　一基　高さ五丈

鐵にて廻八尺餘、神前より三町餘、護王前と云所にあり、則鐵鳥居の町といふなり、

〔本朝俗諺志二〕住吉鳥井

攝州住吉四の宮の鳥井は、二柱四角なり、世に類ひすくなし、○中略

山王鳥井

江州山王の鳥井は、笠木のうへに又三角の笠木あり、是を總合の鳥井と云、〇中略

三輪鳥井

和州三輪の鳥井は二柱の左右に一段低き鳥井有、二ッともに扉ありて門す、是を三光の鳥井といふ也、

〔新編相模國風土記二十八足柄下郡〕箱根三社權現

大鳥居、石ニテ造ル、大門ノ入口、吾妻川ノ涯ニアリ、兩柱ノ間一丈二尺餘、高二丈五寸、一鳥居、大門ノ中程ニアリ、柱間九尺八寸、高一丈六尺、二鳥居、再建未成ラズ三鳥居本社ノ前ニアリ、石ニテ造ル、柱間一丈二尺、高一丈二尺餘、鳥居、横大門ノ入口八町坂ニアリ、柱間九尺五寸、高一丈五尺、

〔新編鎌倉志一〕鶴岡八幡宮

大鳥居、由比濱ノ方ニ有ヲ大鳥居ト云、兩柱ノ間下ニテ六間半、高サ三丈壹尺五寸、石柱ノメグリ壹丈二尺五寸、笠石ノ長サ八間ナリ、一二ノ鳥居ハ、兩柱ノ間下ニテ四間、柱ノメグリ七尺ナリ、東西ノ透門ニ又鳥居、アリ、兩柱ノ間壹丈三尺五寸、柱ノメグリ四尺五寸、東西同ジ、都テ五所ニ鳥居アリ、〇中略今ノ鳥居ハ、寛文乙巳ノ年ヨリ戊申ノ秋ニ至マデ、上下ノ宮諸末社等ニ至マデ、御再興有シ時ノ鳥居ナリ、其書付ニ鶴岡八幡宮石雙華表、寛文八年戊申八月十五日御再興トアリ、三所ノ鳥居共ニ如斯アリ、鳥居ノ石ハ備前國犬島ヨリ取寄ラル、其時ノ奇瑞等ノ事、寛文年中修復記ニ詳ナリ、

〔日光山志五〕石御鳥居、總高二丈七尺六寸五分、柱石差渡し三尺五寸、柱根入凡二尺五寸、地輪石八尺四方、東照大權現と彫たる文字篇額總唐銅の御額を掲ぐ後水尾院の御宸翰なり、是は黑田筑前守長政獻備の御鳥居にして、柱に銘文をゑるす、

石御鳥居之銘

奉寄進日光山東照大權現御寳前石鳥居者、於筑前國削鉅石造大柱而運之南海、以達于當山者也、

元和四年戊午四月十七日　　黑田筑前守藤原長政

〔遠水見聞私記〕六 山城八幡三鳥居銘

山城八幡　三鳥居

石淸水八幡宮者、本朝如在之宗廟、源家尊崇之英靈也、方今奉爲武門繁榮、懇禱邦國安泰、奉謹雕巨石以爲華表而建之、

正保二年五月吉日　　從四位下行信濃守大江朝臣永井氏尙政

民部卿法印林道春誌之

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕志賀辛崎になりぬれば、たが世にひける子日ぞと、問べき松はふりはてゝ、うらわはるかにたつ鳥井、あけのひかりもいちしろく、おほ江のうきはしうちわたり、三津の濱邊になりぬれば、富津のなかみちすなはにて、梶井濱は程もなし、

〔太平記〕二十六 芳野炎上事

武藏守師直、三萬餘騎ヲ率シテ吉野山ニ押寄セ、三度閧聲ヲ揚タレ共、敵ナケレバ音モセズ、サラバ燒拂ヘトテ、皇居並卿相雲客ノ宿所ニ火ヲ懸タレバ、魔風盛ニ吹懸テ、二丈一基ノ笠鳥居、二丈五尺ノ金ノ鳥居、金剛力士ノ二階ノ門、一時ニ灰燼ト成ハテ、煙蒼天ニ立チ登ル、淺猿カリシ有樣也、

〔吉野詣記〕三條西公條公 行々てよしのに入ぬれば、關屋の花はちりて所々のこり、ちりおつる花を谷風の吹あげたる世ばなれたるさまあり、こもりかつての兩社に參り、かねの鳥ゐ目おどろかれたり、鳥形の額あり、字形わきまへがたし、人にとひければ發心門とぞ申ける、人もて行まゝ

に、一里ばかりはいまをさかりなる花の木どもかずもしらず、おもひやりしにもきゝしにもこえたる壯觀とぞ覺えし、

〔快元僧都記〕天文四年四月廿四日、鳥居願、玉運小田原へ罷立、　廿八日、神宮寺高人諫日記付僧師狀云々、仍今日玉運歸倉、本加之事、屋形申入判形有之、本願玉運歡喜、　自今日當院へ被來、勸進帳事、

勸進沙門某敬白、相州鎌倉府由井濱大鳥居、蒙靈神之瑞夢、令再興之狀、

抑鶴岳八幡大菩薩者、號護國靈驗威力神通大自在王菩薩、〇中略　鳥居両柱胎金兩部之儀、笠木之平等願、正直之覺體、是則諸佛經行之處、善神出入之門也、故天王寺建石鳥居、吉野山立銅鳥居、其中央有額、文云、釋迦如來、久遠成道、當極樂土、東門中心、誰謂之無功德乎、昔韓朝有顯天仙者、忽化白鶴、昇華表去歷一千年歸來、于爰花表者是吾朝鳥居也、夫泰山不讓土壤、故能成其高、河海不厭細流、故成其深、以之思則不可嫌寸鐵尺木之施、亦無厭一紙半錢之小財耳、伏乞一天泰平國飲九年之蓄、兆民爲福祿之秋、永免瘴烟之患、仍勸進旨趣、蓋以如此、

天文第四暦仲夏初三日　　　沙門某敬白

〔大社志〕鳥居四基、中二基以青銅、其一基天正年中、大江輝元朝臣寄進、其一基寛文年中、大江綱廣朝臣寄進、

〔新編相模國風土記三十足柄下郡〕熊野權現社　村ノ鎭守ナリ

銅鳥居弁伊豆國熱海某寄附ト云

〔日光山志五〕唐銅御鳥居、御手水屋の前に建り、御額なし、笠木に金御紋五ツあり、高凡二丈許、

〔源氏物語十賢木〕物はかなげなる小しばをおほがきにて、いたやどもあたり〳〵いとかりそめなめり、くろぎのとりゐどもは、さすがにかう〴〵しくみえわたされて、わづらはしきけしきなるに、〇下略

〔和漢三才圖會七十二本山城〕野宮　在嵯峨二尊院南林木中、

伊勢齋宮之野宮也、黑木鳥居小柴垣等、形略有、

〔中右記〕保安元年四月廿八日、依有召參院御所、白河中略 ○右大辨顯隆朝臣被仰云、近日山三井寺大衆競發也、元者三井寺大津濱相分山寺分也、而山三分方、彼住人竊立鳥居、是不觸本山本社盜立也、然間三井寺僧侶破弃鳥居了、山僧衆徒爭此事亂發之間、寺衆徒追却切鳥居僧了、然而山衆徒不止、從院召各長吏被制止也、　廿九日依召參院、殿下、民部卿、治部卿、別當右大辨被參、權僧正行尊從三井寺歸參云、夜前相具僧綱公伊增智禪仁覺俊等入寺、相逢大衆等、且下知仰旨、且僉議之所、衆徒申云、無左右隨仰可立鳥居、但尋舊路顚入天可被立也、今從山方所立之新路邊也、仍廣博也、此議大路一同、但公伊僧都猶申云、山之請文、註神境由之上、立鳥居條不受者、衆徒不隨、仍早起座出了、自餘僧綱猶留座、與衆徒一同相議云、以鳥居顚入天尋舊路鳥居可被立者、以件旨人々相議可進申之由以右大辨顯隆可被仰下也、先別當被申云、隨申請入舊路可被立鳥居、治部卿、民部卿、被申云、入舊路可立鳥居事、一旦可被問延暦寺也、猶爲訴者如何、予申云、新舊路間依不見事躰難是申、遣官使令見定後、可被立鳥居歟、山寺共以無憂可爲也、以此旨奏聞之、仰云、權大僧都公伊、先日被問之處、偏申大衆申旨、被仰下事申不可下知由之上、夜前入寺、又背衆議、只不可立鳥居申、與大衆同意之由顯然也、早入本寺可平大衆亂發、不止衆徒濫行者、不可向京都、早々可追入本寺、若遲入ハ付撿非違可追也、但近日勤仕內御修法、早可召其替也、

又仰、三井寺長吏、如本可令立鳥居也、可立新路也

又仰、延暦寺立件鳥居、下手人慥可令召進也、是不觸本山、

又仰、延暦寺本社猥立鳥居條、意趣所企依非常也、件旨召遣頭辨伊通可被仰下者、其後令退出、今度仰旨尤可然、如此濫行慥不被制止者、爲園城寺有恐也、去永保元年六月、依如此下人燒三井寺、可先蹤在近、誠可被制止歟、

〔吾妻鏡　一〕治承四年十二月十六日甲午、鶴岡若宮被立鳥居、

〔鎌倉大草紙〕應永廿年三月六日、由比濱大鳥居御建立、奉行は上杉禪秀なり、此鳥井は賴朝公より代々公方の御再興のところ也、然ども久しく造替なくして、かさ木も朽果ける所に、此御代にかく御建立めでたかりける事ども也、

〔吾妻鏡　二〕養和二年（〇壽永元年）四月五日乙巳、武衞令出腰越邊江島給、（中略）是高雄文學上人爲祈武衞御願、奉勸請大辨才天於此島、始行供養法之間、故以令監臨給、密議此事、爲調伏鎭守府將軍藤原秀衡也云云、今日卽被立鳥居、其後令還給、

〔和漢三才圖會　六十七武藏〕淺草稻荷　在淺草寺境内、
俗稱安左衞門稻荷、靈驗最也、人賽禮則皆立華表、因所立鳥居不知其數、

〔大三輪神三社鎭座次第〕當社古來無寶倉、唯有三箇鳥居而已、

〔秦山集　六〕三輪大神、中有大鳥居、兩方有小鳥居各一、无神殿、只拜山耳、

〔東都歲事記　一下〕二月初午　神田紺屋町の邊は、常に小宮鳥居を造りて商ふ故に、俗宮町といふ、此月分て買人多し、

〔神道名目類聚抄　一宮社〕額　諸社大方鳥居ニカクル、亦社ニモカクル、神號、神階、社號ナド宜ニシタガフテ書ス、

〔徒然草　下〕門に額かくるをうつといふはよからぬにや、勘解由小路二品禪門（〇藤原行成）は額かくるとの給ひき、

〔大鏡　三太政大臣實賴〕おつとしの少將の男子、佐理大貳よのてかきの上手、任はてゝのぼられけるに、いよのくにのまへなるとまりにて、日いみじうあれ、うみのおもてあしくて、風おそろしうふきなどするを、すこしなをりていでんとし給へば、又おなじやうにのみなりぬ、かくのみしつゝ

日ごろすぐればいとあやしくおぼして、ものとひ給へば、神の御たゝりとのみいふにさるべき事もなし、いかなる事にかとおそれ給ける夜の夢にみえ給ひけるやう、いみじうけだかきさましたるをとこのおはして、此日のあれて日ごろへ給ふは、おのれがしはべる事なり、それはよ。ろ。づ。の。や。し。ろ。に。額。の。か。ゝ。り。た。る。に。おのがもとにしもなきがあしければ、かけんと思ふに、なべてのてしてかゝせんがいとわろく侍れば、われにかゝせたてまつらむとおもふにより此をりならではいつかはとて、とゞめたてまつりたるなりとの給ふに、たれとか申ととひ申給へば、このうらのみしまに侍るおきなりとの給ふに夢のうちにもいみじうかしこまり申とおぼすに、おどろき給ひてはまたさらにもいはず、

○按ズルニ、集古十種扁額部ニ、伊豫國三島社額、參議佐理卿眞蹟、日本總鎭守大山積大明神トアリ、ナホ本書ニハ此他諸社ノ扁額甚ダ多シ、

〔百錬抄 五白河〕應德二年七月、自朔日東西二京諸條毎辻造立寶倉鳥。居。打。額。、其銘福德神、或長福神、或白朱社云云、

〔大倭神社註進狀〕丹生川上神社一座、在同國〇大和吉野郡、
額。、正一位、授冠年月未考、

〔玉海〕承安五年〇安元元年七月十三日、今日右衞門督宗盛、以信基朝臣示送額輔朝臣云、伊津岐嶋額可申請、雖有恐本額前大僧正被書之、今又立鳥居、仍可打額、申他人有憚所申也、可然之樣相計可令申云云、依有恐懼愁領狀、凡此道事不堪第一、物事有進退谷事等、爲之如何、

〔嚴嶋道芝記 七〕古筆
大。鳥。居。額。
表　後奈良帝御宸翰　嚴嶋太明神

裏　圓　　　伊都岐嶋太明神

堅の長さ一丈、横の幅五尺あり、いにしへは此大鳥居の額、表の方小野道風、裏の方釋空海の筆たりしを、櫻尾の寶庫に納置ぬ、神主滅亡の時燒失す、

〔廿二社本緣〕北野社事

此神和太宰府乃天滿宮仁天坐す、彼乃額。仁天滿宮安樂寺部里、

〔園太暦〕康永三年八月廿九日、近江國栗太郡小杖神社神主源重顯誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、且事爲寶祚延長、且爲增神明威光、被授正一位狀、

右當社神明者、國中無雙之鎭守、郡内五所之隨一也、爲蒼御尊崇、被授位記、〇中略 然則正一位小杖神之由被懸額於鳥居、示社頭之莊嚴、神明之威光、何事如之哉、〇下略

〔宣胤卿記〕永正十四年七月三日、　正一位八幡宮、此額事、兼滿朝臣所望、八幡ハ天皇、正一位ハ臣下之位也、不可然之由申遣了、　五日、兼滿朝臣所望額事、女房傳達之間、かな書一紙遣之、

近年諸社の額に、正一位と書そへ候へと望候、いかゞにて候へども、申に任候、をかしき事に候、是は田舍かた山陰人もしらぬ神の威光に申候歟、八幡宮御事は、かた陰にも勸請申候へ、御威德は誰も奉知事に候、〇中略 所々にて額を見候も、八幡宮の三字ばかりにて候、東山慈照寺の鎭守の額は、平岡八幡のがくをうつし候へど、室町殿仰にて、故實久脩書候も、たゞ三字候、一位を書そへ候はゞ神慮にも違べく候歟、此樣所望申候方へ演說候はゞ可然候歟、額事は入木道七ヶの大事の内にて、相傳候はで書候へば、天罰を蒙候、愚老相傳は勿論候へども、八旬に及候て老屈候間、心を盡し候事無術候、先年も承候て書候ツ、又當年も承候て書候しは、額の分にては候はず、只かけ字の心に書候ツ、世尊寺は其家候、誰も申人候はゞ我方へ與奪し候へと申候て書たがり候程に、度々引付候し、是も申遣候はゞ悅候べき歟にて候、さりながら傳達は聊斟酌

事候、直に御使可然候、心中難盡狀候、

〔都名所圖會三〕祇園社は下河原を南面とし、鳥居は石柱にして感神院といふ竪額あり、照高院道晃親王の筆なり、

〔東牖子四〕祇園牛頭天王の鳥居の額に感神院としるさる、或書に感神院とは祇園宮寺の號なりといへり、按するに神明の鳥居に、宮寺の號を額とする事當るべからず、

〔都名所圖會五〕石清水正八幡宮

一鳥居山下宿院にあり、八幡宮の額に佐理卿の筆なり、實損しければ、松花堂(僧昭乘)これを補す、

〔遠碧軒記上神祇〕吉田額

日本最上日高日宮筆者清水谷　日本最上兩太神宮筆者清水谷

日本國中三千餘座天神地祇八百萬神筆者同上　大元宮元本八神宮筆者同上　日本最上神祇齋場筆者同上　天照皇太神宇氣皇太神妙善院富子筆日野家○足利義政室

〔山城名勝志十三愛宕郡〕齋場所在吉田社南、樓門額日本最上兩太神宮、中門額日本最上神祇齋場、本宮三額日本最上日高宮、大元宮、日本國中三千餘座、天神地祇八百萬神、

內外宮坐齋場所後八神殿東西、鳥居額外宮宗、內宮源云云、又木殿有額、外宮宇氣皇太神、內宮天照皇太神云云、此二額從一位富子筆、富子慈昭院義政公御臺也、

〔東國旅行談一〕鎌足公の宮

同國○陸奧須賀川宿の川あり、堤をわがれば森々たる森あり、額に大職冠鎌足大明神としるす、いかなる子細にて此所に勸請し奉るやらむ、傳記詳ならず、

〔並山日記〕廿七日○嘉永三年三月、中略、二宮明神にまうづ、○中略また夢窓國師の眞蹟とつたへて、やれくちたる杉のいたに神のみなをゑれる額あり、板目ふかくされやつれて、げに古きものとみえたり、

〔枕草子十一〕神は　八幡、此國のみかどにておはしましけんこそいとめでたけれ、みゆきなどに、なぎの花のみこしに奉るなど、いとめでたし、

〔本朝世紀〕天慶八年七月廿八日壬戌、攝津國言上、解文如左、

神輿

攝津國司解申請官裁事
　言上、神輿三前、指東方荷送狀
右得管豐島郡今月廿六日解狀偁、號志多良神。輿三前、以今月廿五日辰剋、從河邊郡方數百許人荷擔三輿、捧幣擊鼓歌舞羅列來著當郡、(略○中)尋其案內、一輿者以檜皮葺造鳥居、(略○中)今二輿者以檜葉葺、(略○下)
同上、

〔日本紀略一九 後一條〕正曆五年六月廿七日丁未、爲疫神修御靈會、木工寮修理職造神。輿二基、安置北野船岡上、

〔日本紀略一十 後一條〕長保三年五月九日庚辰、於紫野祭疫神、號御靈會、依天下疾疫也、(略○中)御。輿。內匠寮造之、

〔雍州府志二 神社〕今宮　在紫野、(略○中)一。基。神。輿。上。鳳。凰。羽。翼。之。下。有延。曆。四。年。五。月。九。日。之。字。又傍有作。者。之。名。一說古山門有嗷訴、則寄日吉神輿於禁門、其事不如願、則棄置神輿而歸、是謂神輿振、倭俗以振字、爲棄置之義、或作振棄、此神輿亦自日吉社所棄置之物、而以是爲當社之神輿云、

〔三長記〕元久元年四月十一日甲辰、今日日吉八王子三宮王子宮還宮也、亦七。社。御。輿合戰間汚穢、仍被新造之、院廳沙汰頭辨長房朝臣奉行之、卽參向社頭云々、
建永元年五月廿九日己酉、被行僧事、仍早旦參院奏成功覆子綱、(守家勤仕事也、被行畢、)仰云、修功之覆、可被計任歟、可申攝政、(略○中)
　長快(當社神輿造進功賞入闕)

〔百練抄十二 順德〕承久元年四月十五日庚辰、日吉社神。輿。七基被調進、以押小路殿爲行事所、院廳沙汰也、
諸女院被調進云々、去年奉振陣中之間、有所穢之疑被新造也、

〔新抄〕又永元年六月六日己酉、今日、祇園神。輿。三基新造、(一基前左大臣以伊賀國造進之、一基管領大夫隆行朝臣以長門國造進、一基伊賀入道源胤)

以二豐後關一造進、被レ奉レ送二本社一、明日御輿迎之故也、　二年十一月七日辛丑、仙洞御評定、關白以下參入之、筥崎宮神。輿。修造事被レ定レ之、一基行請法印二基國司沙汰都合三基云々、

〔元德二年三月日吉社並叡山行幸記〕三月〇正安三年廿四日、春宮後二條院御卽位わたらせ給ふ、同四年四月の祭禮に、大津生得の神人と駕輿丁の鬪と喧嘩を引出て、神。人。神。輿。を。射。奉。る。に。よ。り。て。、その日の祭禮なし、神人の方人は賴存憲猷なりければ、はやく衾の宣旨を下さる、神輿は狼藉の根元生得神人が所行なれば、神。人。に。か。け。て。造。替。せ。ら。る。べ。き。よ。し。定。ら。れ。け。り、山門申て云、臨時の珍事は天災力なし、而神人に還てつくらせられん事神慮はかりがたし、且其例なき由奏申けれども御許容に及ばず、科人には無力之間、京都の入神人にかけて三のまなをつくり、使廳の下部をもて譴責に及びければ、帝都の民多以侘際し侍りき、造進の神輿は乾元元年改元十一月廿一十二月五日に本社へ入奉りける、闕如の祭禮をつとめんがため、御こしむかへの儀を調て、神輿を八王子の神殿によせたてまつる所に、彌勒といふ宮籠俄にくるひいでゝ申やう、我八王子權現なり、跡を下界にたるゝ事は、慈悲利生のため也、而此神輿は人の愁をもてつくれり、更にのるべからずと託宣し侍しを、宮仕法師等物付を引籠て、おして神幸なし奉り、卯月五月の祭禮一ヶ月のうちに行はれければとる物もとりあへず、〇中略今度神人造進之神輿は、毎年におして神幸なしたてまつるといへども、乾元元年より當年〇延慶二年に至るまで、八ヶ年の間一度も式日の祭禮なくして、かく振舞たてまつれることぞ彌勒女が託宣まことに神言成けるとおもひあはせられ侍れ、〇中略同〇延慶四年〇應長元年正月廿四日、武家奏聞、申二日吉大宮閉籠回祿事一、云二神輿入洛一、云二凶徒狼藉一、門主貫首、其咎重疊之上は、社。壇。幷。神。輿。造。替。は、懸二三。門。跡一、可レ被レ修二急。速。之。功一、諸門主以下衆徒在京不レ可レ然、悉可レ住二山一云々、〇中略公家武家御沙汰嚴密之最中、いかなる不敵のものかありけん、同六月廿七日、また中堂に閉籠して申云、〇中略社壇神輿之造營、可レ被レ懸二門主之條一、不レ得二其意一、次時連行盛者眼前之



〔年中行事繪卷 城南神祭所 載神輿圖〕



神敵也、不被罪科之條、爲代爲神其理可然哉、〇中略同二年三月廿日、正和元年になる、六月十二日に又陸奥守宗宣他界して怪異どもおほく侍ければ、これにや驚けん、山門申、時連行盛事既流刑畢、神輿造替以下事と可爲無爲之由、關東改先度之事書、依て奏聞、同八月十五日仲親卿奉行にて被院宣、併中堂閉籠衆申神輿神殿事、任先規爲公家御沙汰可被託其功、〇中略同〇正和二年には新院御治世わたらせ給ひて、大宮並神輿造替の御沙汰あり、神殿の料足は戸津升米、神輿の功程は京都の土藏にかけられけり、山門子細を申ければ、山門氣風の土藏には件課役を被除之由仰下されけれども、其御喜とて一字別七百五十匹の沙汰をいたしつゝ修造畢りて、本社に奉送、〇下略

〔日吉神輿御入洛見聞略記〕傳聞、今度〇應安二年八月御歸座事、訴訟之篇、入眼之上者、奉觀還幸、於御輿者、於坂本可奉造替之由、自武家問答之間、即有御歸座云々、定又有先規歟、可尋之、凡者於京都造替之後、可奉勸御歸座哉、

同六年春頃、於京都可有神輿造替之由有其聞、於坂本可有其沙汰之由衆風聞虚說歟、又其後篇目相改歟可尋之、院廳爲奉行、造替所假屋數十間新造、（一條萬里小路南頰）於是召集諸道細工、可令造替之用意也、或云、造替所者、門以下檜皮葺也、每日有御幸之故也、今度假葺略儀歟云々、

同七年甲寅六月廿日酉刻、日吉御輿七基、幷赤山御輿一基、出雲路邊奉振寄之、當日無其聞、假儀歟、今度但爲古輿之間、不奉移御神體云々、

同夜奉入祇園社、神儀無御入洛之間、不及備神供云々、

傳聞、去年造替所雖有建立、未及造替之分間、舊輿奉返入之由云々、

又聞、造替未事行之故者、山門張本任訴召出之後可有其沙汰之由自武家問答云々、又者大講堂料所數箇所、任申請雖有御寄進、衆徒等徒分持而、雖柱一本未及造營之上者先返進彼料所者、先可令造替神輿、造替以後者、即可被返付之由問答云々、但神輿御造替料、諸國段別、大略運上、然而爲當山

門之非義、如此問答云々、實說猶可尋之、

同三年〇永和丁巳六月下旬、山僧杉生金輪院、圓明院等諸大名、十人出、又閣造替未事行之故者、山門張本任訴召出之、

康曆元己未閏四月十四日、武家執事武藏守賴之、依諸大名訴訟、自大樹被立御使之間、忽沒落四國了、於不落命之條、偏大樹之芳恩、此間之舊好也云々、是則日吉神輿數年雖有御在洛、造替事一切無沙汰之間、爲神罰之由乘人口歟、仍同五月頃、山門使節宿老數輩列參之時、大樹對面、造替事指定奉行、日時等嚴密被下知之間、山僧等開眉頭、先於神輿者、可奉歸入之由申之云云、

康曆二年庚申六月晦、七社御輿造營事畢、卽今日坂本奉送之人夫千餘人、自松本載舟唐崎可著之、於彼奉莊之云々、

〔日吉社神道秘密記〕神輿御造進者、第五十代桓武天皇行幸、延曆十辛未年卯月第二申日ヨリ七ケ日御參籠、增倍依勅願御輿御造進之事、大宮二宮兩神輿在之、其後時々、殘五社之神輿御造進也、巨細猶與記之、

〔神まつり〕十七日、〇天保十年四月、中略、御祭は世の常のさまとは事かはりて、まづ御迎の榊まゐる、すべてかう〳〵しう神さびしめやかなる事、たとへん方もなくかしこし、〇中略御祭の奉行青山大和守幸哉、松平市正親良衣冠して、僧綱ならびにその下司等したがふ、次に鹿沼木幡の社人狩衣、次に素袍著五十人、麻の上下きたる五十人、次に梨子地に金の御紋を蒔繪して、四方に御鏡かけてかがやける神輿は、白張著百人にて舁奉る、次に麻の上下著たるが十人、次にまた太皷鉦皷金の御幣、素袍著二十人つらなり、巴の紋蒔ちらしたるは、左の神輿といふ、こは山王にましますとぞ、また右の神輿といふも、おなじく太皷、鉦皷、金の御幣を先に立て渡り給ふ、是は摩多羅神にましますときこゆるはまことにや、蒔繪には茗荷の紋つけられしは、いかなる故か知らず、

〇按ズルニ、本文ハ將軍德川家慶日光參詣ノ日、圖書頭成嶋司直ガ錄セル祭禮ノ記ニシテ、近代ノ神輿ハ概ネ此類ナリ、

〔日光山志五〕御本社御神輿　白張著百人奉昇
御神輿金梨子地金御紋ちらし、錦の御戸帳、御かなもの金色なり、四方に御鏡を掛給ふこと數多なり、御上屋の上に金の鳳凰有、其外小鳥數十羽、又神輿の左右の下の方に金滅金の御衝立あり、竪一尺程、横一尺七八寸許、地紋虎の高蒔繪なり、其餘の結搆なる事は准じて知べし、雨天の時は猩々緋の御雨覆を奉懸事は三輿ともに相同、
御左の神輿　白張著五拾人奉昇
神輿金梨子地、錦の戸帳、御紋巴の金紋ちらし、上屋の上に金の鳳凰一羽、外に小鳥前に同じ、其餘大概相同じ、神輿の下の方に金滅金の衝立左右に有て、猿の蒔繪模様、これも御本社の御飾と同じ、
御右の神輿　白張著五拾人奉昇
神輿金梨子地、錦の戸帳、上屋のうへに金の寶珠あり、其外に小鳥すべて金色、丸の内に向ひ葵の金御紋ちらし、其餘前とおなじ、神輿の左右の下の方に朱塗の鳥居あり、

〔百練抄五堀河〕寛治二年十一月廿九日、前大貳實政除名、配流伊豆國、幷緣坐者同流罪、依射八幡宮神輿也、僉議之間、攝政直廬有光耀、在陣之公卿一兩見此物之靈異、
長治二年六月二日、諸卿定申太宰權帥季仲同意于八幡別當光淸、射竈門社神輿、殺害日吉神人事、幷竈門宮可爲八幡末社哉否事、
嘉承二年七月十二日、散位藤貞配流佐渡國、去長治元年押入香椎宮、射危神輿、殺害神人之故也、令勘罪名、

〔百練抄 高倉八〕治承元年四月十三日、延暦寺衆徒、相具七社神輿參內、欲入陣中之間、武士相防、流矢誤中十禪師神輿、未曾有之例也、神人宮仕等、同中矢亡命、然間衆徒弃神輿迯去、仍召祇園別當澄憲、可奉迎神輿之由被仰下、臨夕祇園所司神人參入奉迎之、

〔壬生家文書〕安元三年四月十三日、延暦寺衆徒、先神輿七基十禪、客、八王子、祇園三基、京極寺等也、推參陣頭之間、武士相禦、中矢殞命二人、被疵者兩三人、仍神人等弃置神輿分散、

同日以官使被實撿弃置神輿之處、二條北西洞院東所大神輿七基也、其內十禪師神輿矢一筋射立、怱花下、

同日、召祇園別當澄憲僧都、神輿等可安置祇園之由被仰之、蒙勅定退出、臨昏奉渡神輿於祇園社、〇中略

同日〇廿今月十三日警固之輩、相禦凶黨之間、其矢誤中神輿、事雖出不圖、猶被行其科給獄所、

六月五日、日吉幷祇園等社神輿、宜仰神祇官祓淸之由被宣下之、卽神祇官人等參向祇園社令祓淸神輿云々、

同日、三塔衆徒降西坂下邊、奉迎取日吉神輿三基於本社、

同月七日、被調獻祇園神輿三基、

同月廿二日、被調獻日吉神輿七基、幷京極寺神輿一基、

〔源平盛衰記 四〕山門御輿振事

治承元年四月十三日辰刻ニ、山門大衆日吉七社ノ神輿ヲ奉莊、根本中堂ヘ振上奉、先八王子客人權現、十禪師三社ノ神輿下洛有、白山早松神輿同振下奉、大嶽水呑不動堂西坂本下松伐堤梅忠城寺ニ成ケレバ、祇園三社北野京極寺末社ナレバ、賀茂河原ニ待受テ力ヲ合テ振タリケリ、東北院ノ邊ヨリ神人宮仕多ク來副テ、手ヲ扣キ音ヲ調テ喚叫、貴賤上下走集テ之ヲ拜シ奉ル、法施ノ聲

々篝天財施ノ散米地ヲ埋タリ、一條ヲ西ヘゾ入セ給ケル、マダ朝ノ事ナレバ、神寶日ニ耀テ、日月地ニ落玉ヘルカト覺タリ、

〔平家物語　二〕座主ながしの事

治承元年五月五日の日、天台ざす明雲大僧正、公請をちやうじせらるゝうへ、藏人を御つかひにて、如意輪の御本尊をめしかへひて、御ぢ僧を改易せらる、則ちてうのつかひを付て、今度神輿内裏へふり奉つし衆徒の張本を召れけり、

〔吾妻鏡　十一〕建久二年五月二日己酉、大夫尉廣元飛脚自京都參着、大理被獻書狀、去月廿六日、山門衆徒、爲訴申左衛門尉定綱、頂戴八王子客人十禪師祇園北野等神輿、參閑院皇居之間、則有群議、罪名減死罪一等、可被處遠流云々、其趣定被宣下歟由、又遠江守義定朝臣飛脚參申云、當時禁裏守護番也、去月廿六日神輿入洛之時、家人等仍相禦不可發鬪戰之由、頻有別當宣之間、謹愼處、家人四人同所從三人、忽爲山徒被刃傷、依仰朝威怖神慮、已如忘勇士之道、可殆招人之嘲歟云々、此事有其沙汰、善信、行政、俊兼、盛時等、依召參上之云々、

〔吾妻鏡　二十三〕建保六年九月廿九日丁酉、京都飛脚參着、申云、去廿一日山門衆徒、頂戴日吉祇園北野等神輿入洛、奉振閑院殿陣頭、仍遣北面衆被防禦之、又住京健士光員、基清、能直、廣綱等依勅定、馳參宮門、相支之處、加藤兵衛尉光貞(光員男、後號加藤左衛門尉)、切落八王子駕輿丁男腕之間、令汚穢神輿、仍奉振弃歸參、是石清水別當法印宗清執務檢西宮崎宮之間、天台末寺大山寺神人、船頭長光安爲宮崎宮留主、相模寺主行遍、并子息左近將監光助等被殺害、仍衆徒蜂起、勒奏狀訴申之間、行遍光助雖被禁獄、沒收宮崎宮、爲山門領、并可被配流宗清法印之由訴申之、所奉動神輿也、

〔百練抄　十四〕嘉禎元年七月廿三日甲申、日吉神輿已以入洛、仰武士被相禦之間、爲飛礫官兵多被打損、任法驗合之剋、於近衛院(法成寺巽角)宮仕法師多被疵、或被切伏了、各弃神輿、於衆徒者、自河原逃散、洛

中之騷動也、江州守護人信綱法師息左衛門尉高信、於高嶋郡刃傷神人之間、任建久例可被行死罪之由山門訴申之故也、八王子神輿觸穢血氣多懸云々、　廿四日乙酉、今曉神輿二基奉渡祇園、於八王子御輿者有死穢疑、奉安置于祇陀林佛前、道俗成群參拜云々、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年四月廿一日庚子、京都飛脚到著、申云、去十七日卯剋、奉振日吉神輿三基於縫殿陣口、警固之輩鏁諸門之間、取御正體投入築垣內、是園城寺戒壇事、依可有勅許也、

〔延喜式神名帳頭註〕丹波桑田郡

大井　月讀命也、建治乙亥四月、神輿依大井河大水而流此地、故國民祭之云々、

〔集古圖八〕東大寺八幡宮神輿三基略○圖

上司三位家所傳古文書

東大寺八幡宮遷宮神輿事、任天平所見可有其沙汰、但天子乘輿不相異之條不可然、爲神輿之上奉懸正體可用金物、御帳可爲紫錦候也、以此旨可被下知給也、院御氣色所候、仍上啓如件、

五月七日　中宮大進隆蔭

謹上　左大辨宰相殿

〔玉海〕治承三年六年十二日己亥、今夕行幸土御門第、大納言定房卿行召仰事、內侍所同渡御、中宮東宮又行啓云々、依令避祇園神輿路頭、次有行幸行啓也、

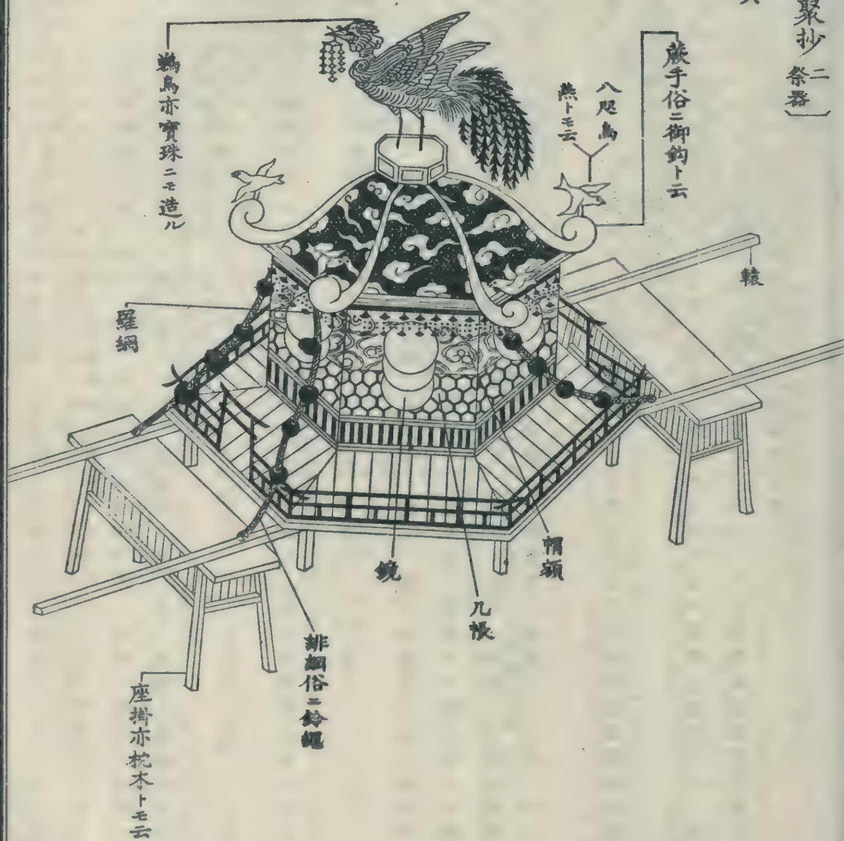
〔仲資王記〕建久五年三月四日乙丑、依造住吉社役料云、廣田神輿上道由告來、卽奏聞了、爲奉留左京神官二人沙汰、季親等夜內可下著之由召仰了、　五日丙寅、今朝神祇官官人代、並鎰取武末等、爲留神輿重下遣也、　六日丁卯、申剋、神輿於神崎奉留之由所告來也、卽申上、又公人一人、可被副遣之由申上了、無御召引之由云々、　十一日壬申、廣田社神輿歸座本社之由、官使並本官使等言上、酉時也今朝被仰下使廳之由、大理被示也、而一應先爭不辭申哉云々、

〔基量卿記〕元祿九年三月廿七日、辰刻內侍所假殿上棟如例、未刻淸祓、卜部兼連卿參仕、及酉刻渡御儀有催、抑牛車令昇出義、舊例刀自等女官之沙汰也、然而力不堪之間、以宮儀伯其外便宜近臣奉助力、近年寬文三同十三假殿渡御(大炎之後、暫時御二坐近衞右府之亭一之時也、)兩度如是、延寶三新殿渡御之刻、供奉次將等相加云々、立列之次將先例無之儀也、延寶度之儀不可然歟、然而此度供奉次將八人也、奉昇出之事被仰付、以上八人之內二人候脂燭、殘六人可昇云々、今度儀一向中御門大納言資熙申沙汰之間、奉行頭辨尹隆朝臣申談所、返答如此云々、其後頭辨又尋云、御牛車殊之外重シト、臨時次將六人ニテ奉昇儀可難被成歟、內々人數可有用意歟之旨被申談之所、其段中御門諸合申候、六人ニテ成程可成由也、依之閉口云云、臨時各列立、已欲令乘御之、御辛櫃甚重、漸奉乘於御牛車之後、次將六人等一向不堪力、難叶之間、頭辨語少納言弘資朝臣、相加八人而奉昇之處、猶以不叶、依之命宜顯卿光可被罷昇之令下知之處、依奉行命者不可奉昇、有所存之由申之、不勤列之間、頭辨走來告議奏、于時主上〇東山下御於庭上御侍之間也、頭辨御牛車以外重シ、次將等力不堪、依之頭辨少納言相加猶不堪、召宜顯卿光之處、稱有所存不承服、如何可仕哉之旨申之、依之人々驚入、中御門久我等大納言、柳原正親町等中納言走參、主上被聞召、近臣之中三條中將久世中將兩人可急參由被仰出、則馳參各奉昇猶不叶、依之外樣內々罷爲見物參集之輩走集奉昇漸下御、駕輿丁被昇、無事入御云々、

〔雍州府志二神社〕祇園社　在東山八坂鄕、號感神院、〇中略　六月七日、〇中略　午後三社神輿寄本社廳外、祇園執行寶壽院遷神於輿中、而遊行四條京極旅所、於是梅坊遷神於旅所假宮、同十四日朝所飾之山鉾行、午後梅坊於旅所遷神於輿中、而入本山、於是執行又遷神於本社、空輿先途神前、凡五月晦日、三丈中爲三神輿一丈、入夜出四條宮川邊、則還本山、二基神輿共同置拜殿、古第三神輿於河邊灌水於空輿洗塵埃、今雖無其儀、謂神輿洗、七日十四日祭儀畢、十八日夜又如五月晦日之式、是亦謂神輿洗、而後納三基神輿於神輿屋、

〔神道名目類聚抄 二 祭器〕

神輿



神輿舍

〔神道名目類聚抄 五祭祀〕神輿洗 山城國祇園社ニアリ　五月晦日、六月十八日兩度アリ、暮ニ及デ神輿ヲ四條ノ川邊ニ舁出シ、水ヲソヽギテ祓清、四條ノ流、三條ノ下、松原ヨリ上ノ方、是祇園社ノ祓川ナリ、宮川トモ云、翌朝六月朔日、神輿ヲ餝神前ニ居奉ル、是祇園會式ノ初ナリ、○中略又同十八日御餝ヲ撤シ、神輿ヲ四條ノ川邊ニ舁出シ、水ヲソヽギ祓清ル事、五月晦日ニ同ジ、本宮ニ歸テ神輿舍ニ納ム、是ヲ祇園ノ神輿洗ト云、

〔神道名目類聚抄 一宮社〕御輿舍(ミコシヤドリ)　神輿倉(ミコシクラ)

〔類聚名物考 神祇十二〕御輿舍　みこしやどり

神の行宮にて、神輿の出おはしましやどらせ給ふ所を云なり、常にも車舍などいふことの有に同じ、

〔古今神學類編 二十三神社〕神。輿。宿。御。旅。所。

按ズルニ、二所宗廟ニ御輿宿ト云ハ、神輿ノ事ニ非ズ、齋王ノ御輿宿也、故ニ末ニ記シテ、或ハ御。輿。次。トモ書テ諸社皆在之、或ハ俗ニ御。旅。所。ト稱スル是也、又是ヲ頓。宮。トモ稱スルニヤ、祭禮ノ日神輿ヲ此所ニ安置シ奉ル所也、故ニ頓宮ノ名アリ、○中略或記ニ賀茂ノ御形(ミアレ)ノ日、御生所御形野ト云ハ、玉依姫ノ別雷神ヲ生マシ給フ地ノ名也ト云說アリ、御生所ハ神館ニアリ、祭ノ時ノ御旅所也ト云云、

〔百練抄 十一土御門〕承元二年閏四月八日、被レ行二軒廊御卜一、是依二七月廿七日稻荷社御。輿。宿。屋。無レ風顛倒一也、

〔出羽國風土記 四田川郡〕神。輿。舍。○羽黑三所權現

壇上に役行者の影像を置、六月十五日、三所の神輿を大堂の前へ渡御し、御手洗を一遶す、御先に榊を渡す、又寺家よりは幟數多出し、神幸の供奉す、社家いづれも供奉、其後獅子を舞、古來は能武者等出しとぞ、山中寺家大堂の椽樣に席を設、神輿を拜す、

〔日光山志 三〕御神輿舍

陽明御門の西の方にあり、銅葺黒塗、前後に御唐戸ありて、御天井に天人の繪あり、

〔新編相模國風土記二十八足柄下郡〕箱根三社權現

神輿藏、桁行三間、梁間二間、神輿三ヲ藏ム、

〔神道名目類聚抄一宮社〕御旅所、御旅宮社トモ、　祭禮ノ時神幸有テ、假ニ鎮座ノ所、是ヲ御旅所ト云、

〔枕草子十一〕神は　平野は、いたづらなる屋ありしを、こゝは何する所ぞとひしかば、みこしやどりといひしもめでたし、いがきにつたなどのおほくかゝりて紅葉の色々ありし、秋にはあへずと貫之が歌思ひ出られて、つくづくと久しう立たれたりし、

〔百練抄七二條〕平治元年十一月廿六日、六條院因幡堂、河原院、崇親院、祇園旅所燒亡、

〔百練抄八高倉〕治承二年三月廿四日、子刻炎上、○中略稻荷旅所等燒亡、

〔明月記〕建永二年六月十四日、曉女房等令參祇園旅所、

嘉祿元年六月八日、未時許、女房參詣賀茂幷祇園旅所、

〔百練抄十三後堀河〕嘉祿二年二月十三日、午時、稻荷上中兩社旅所八條坊門猪熊燒亡、

〔荏柄天神緣記〕仁和寺なりける阿闍梨、北野の御輿西京の旅所におはしましけるに、車にのりながらとほりけるに、其牛俄に倒臥て死にけり、

〔さかき葉の日記〕おとゞし○貞治二年の冬つかたより、御榊都にわたらせ給へば、○中略かたの樣なるかりやきりかけだつ物などの内に、神司の四五人十人ばかり所々にむれゐて、あはれやうやう夜さむにもなりぬ、いつとなき御旅所かな、神の御愁だにも此三年叶事なし、まして人の歎いつのよにか民のこゝろもひらけ侍べき、

〔春日臨時祭記〕五月○嘉慶元年十九日、點祭之定日畢、○中略廿二日夕、於御旅所有試樂之儀、舞少々舞之、

○中略

御旅所行事中綱(了録、順宗、竟錬、少用、)

仕丁(善順、覺舜、勝宗、眞信、永祥、○中略)

已上供奉人三百餘人、○中略行列各渡畢之後、役人悉入自御旅所中門、

〔康富記〕寶德二年八月一日壬申、北野神輿令出西京御旅所、

〔京雀二〕中御靈前町　此町は上御靈の御旅所にて、七月十八日より八月十八日まで、御靈の御輿こゝにおはします、

御旅町　むかし祇園前御旅所この町にありし、今は四條寺町に引うつされたりとかや、

〔京雀六〕四條通　この筋寺町通より東の方一町を冠者殿前の町といふ、こゝはぎをんどの御旅所として、毎年六月七日より十四日まで御こしをとゞめられ、參詣の貴賤道をさりあへず、舞殿には神子かんなぎなみゐて神樂を奏するに休隙なし、

〔雍州府志二神社〕祇園神旅所　則齋場所也、在京極四條辻南北兩所、凡每年六月七日午後、當三基神輿於祇園本社各位三座前、執行寶壽院侍神前、奉幣唱祝詞、遷神於輿中、每一座遷畢時、舁神輿人、大呼三聲、於茲各勇進舁出之、執行亦乘腰輿供奉神幸、到四條御旅所假宮、三家社僧中、梅坊預候假宮前、於茲又當牛頭天王、幷八王子兩神輿於東假宮前、梅坊遷輿中之神於假宮、又遷一基神輿少將井之神於南假宮、其式與本山遷宮同、唯有執行與梅坊之異而已、然後置天王幷八王子之空輿於北御輿屋、置少將井之空輿於南御輿屋、如此則神存假宮、然近世社司獻供物幷燈火於空輿、而街之貨來錢、夫神輿元神之爲所遷、則敬之可也、獻供物於空輿則何有之乎、參詣兒女不知此義、先拜假宮畢、還拜空輿也、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕祇園御旅所(元在烏丸東高辻北大政所町、亦少將井御旅所、在烏丸東冷泉北、)御旅所社家記云、圓融院御宇助正者住高辻北東洞院西、天延二年五月下旬、參助正宅有神幸云云、○中略六月七日件所爲御旅所、御輿

迎始于此、（按、今旅所在四條京極東、是豐臣秀吉公時所遷也、）

〔雍州府志神社三〕齋場所　稱荷御旅所、在油小路七條南、弘法大師營東寺時、八幡爲土地神、而後稻荷神現出、暫寓芝守長者家、歷年月移稻荷山、今旅所則芝守之宅地也、祭祀時神輿在茲二十日、斯遺風也、見于東寺緣起、

〔攝陽群談神社十一〕新宮　同郡（○能勢）垂水村ニアリ、岐尼神輿ヲ渡ス旅所ナリ、土俗岐尼神ノ母神也ト云リ、

湯小屋社　同郡山田村ノ民家ニアリ、土俗岐尼神ヘ始テ御湯ヲ捧祭ルノ處也ト云リ、至于今神輿ヲ渡ス時、先此處ニ渡御、舊例ヲ修シ、次ニ新宮旅所ニ遷シ祭事トス、

〔和漢三才圖會七十六和泉〕宿院　在大町大道東入處、住吉明神六月晦日祓、神輿行宮、（曰御旅所、）二町四方、有大鳥居、東北有名越岡、岡前有鳥居、瑞籬四圍、

〔東都歲事記二〕六月五日、神田社地天王二の宮祭禮、大傳馬町二町目御旅所（假屋を補理す）へ神幸ありて、八日に歸輿あり、（元和の頃より、神事備ることいふ、）

七日、神田神地天王一の宮（素盞嗚尊）南傳馬町二町目の御旅所（假屋）へ神幸ありて十四日歸輿あり、（當所へ御（旅出の事は、慶長十八年六月七日に始ると云、行粧、大傳馬町に同じ、但し四神の矛は、當社ばかりは、宮元の町内に置て、行列に加へず、）

十日、神田社地天王三の宮、（奇稻田姬、或は山田の大蛇、）小舟町壹町目の御旅所（假屋を補理す）へ神幸ありて十三日歸輿あり、（祭禮の元始詳ならず、行列の次第、大傳馬町のごとし、御旅出の間、賑ひことに勝れたり、）

〔江戶名所圖會七〕香取大神宮

當社は龜戶村草創よりの勸請にして、此邊第一の古跡なりといへり、（中略）○旅所は吾妻森より二三十步東の方、田の中にあり、往古祭禮を行はむとせし頃は、此邊なべて海面なりしかば、春を流し其止る地を以旅所に定むべしと誓ひたりしに、其春かしこに止りしとなり、故に今も昔の例

により、僅の間ながらも十間川に至りて神輿を船に移し、旅。所。へ神幸なしまゐらす、

〔出羽國風土略記 六飽海郡〕月山神社 〇中略

宮海 〇村名 は御。旅。所。にして、毎年四月中の酉に、當社の御鉾獅子頭をわたす、

〔下野國誌 三〕東照宮

御。旅。所。と申すは則山王の社にて、三間に二間、西向なり、前に拜殿あり、是は四間に五間なり、其間凡四間四方許の鋪石にて、東遊は舞ふなり、

〔日光山志 五〕御。旅。所。

長阪を登り右の方なる地をいふ、中山通りなり、御旅所とて、別に御宮殿を設給ふにあらず、此御旅所と稱するは山王の社なり、其本社へ神輿三輿をすゑ奉るなり、山王社 大サ三間に二間程、向拜附朱塗、上蔀も朱塗なり、椽貫、前に拜殿あり、四間に五間許、丹塗椽貫、前後に扉あり、上蔀有、黑漆大床造、御神事の砌供御の式あり、御供所もありて、此殿へ歩廊を亘す、東遊舞樂を奏する所は、拜殿と本社の間の石敷の所にて舞樂を奏する事なり、

〔類聚三代格 一〕詔、攘災招福、必憑幽冥、敬神尊佛、清淨爲先、今聞、諸國神祇社内、多有穢臭及放雜畜、敬神之禮、豈如是乎、宜國司長官自執幣帛、愼致清掃、常爲歲事、

神龜二年七月廿日 〇又見續日本紀

〔延喜式 三臨時祭〕凡神社四至之内、不得伐樹木及埋藏死人、

凡鴨御祖社南邊者、雖在四至之外、濫僧屠者等不得居住、

〔聞傳叢書 十〕屋敷内祠建候事

是は武州豐島郡立屋村名主長藏儀、實父の廟所の祠ニいたし、靈號申請度望にて、年寄を以、京都吉田家へ相願候處、伊賀鎮靈神と申神號と、四組木綿手繦之許狀被下候旨訴出候ニ付、御代官開

置ニいたし可然哉之段、其筋へ承合候處、右體之儀は決而不相成事ニ付、當人御咎可有之候間、早早吟味いたし、取次人私領の者ニ候はゞ、其差支をもつて御奉行所へ可差出旨挨拶有之候ニ付、右之趣長藏へ申聞候處、驚入早々許狀京都へ返上可致候間、屆書下ゲ吳候樣頻と申し候ニ付、下ゲ遣し候、然ル上は自分の居屋敷內へ勸請致し、他へ一切不拘候共、新規ニ祠建候儀は不相成事と相聞候、以後之爲心得、爰ニ記置候事、

〔平戶記〕寬元三年五月十三日丙午、依有炎旱之氣、可被行水天供云々、一墻爲加州所課、可沙汰進之由被仰下、當國造社之間、如此之役、年來被免、當代被破之苛政之故也、難遁避事歟、今夜亥剋、有奇雲云々、

〔朝倉敏景十七箇條〕一神社佛閣、幷町屋等を通られむごときは、少々馬を留めて、奇麗なるをば聊稱美し、破損せるをば稍惠憐の詞をも加へられ候はゞ、到らぬ者共は、御詞を懸りたるなどゝて、歡抃に堪ずして、惡きをば早く改め、能は彌可相嗜候乎、然れば造作も不入して、見事に持なす事も專可依主君の一心候事、

〔續善隣國寶記〕日本國防長豐筑肆州大守大內左京兆尹多多良朝臣義興、奉書朝鮮國禮曹參判足下、密承殿下威震海外、道協天心、俟 雖處異域、以同系之好、無任屛營之至、欽惟俟 之西鄙赤間關、有神廟、號曰龜山、草創于今六百四十七年也、厥神之靈驗、分和光影於日月、而吾朝一方之鎭護也、而比年以來、依國之多故、不瓦不釘、梁棟傾斜、柱礎之摧朽、觀者靡不嗟惜也、然則不憑殿下扶助之力、爭俾延宏舊構之基址矣、繇旃差通信使安中西堂、聊表寸誠、所獻菲瑣物件具別幅、采納惟幸矣、仰望綿紬壹仟匹、綿布壹仟匹付回使、以全壞宮再興之盤困者、實覓藻之悅、億兆無窮之賜也、龜之氣兮不遮風雨、龜之拚兮不中梁柱矣、庶幾察俟 之卑懷、前契勿渝矣、餘寒料峭、春風未溫、能自珍嗇、

永正參年二月十日　大內左京兆多多良義興

〔萬葉集 三雜歌〕娘子報佐伯宿禰赤麻呂贈歌

千磐破、神之社四、無有世伐、春日之野邊、粟種益乎、

〔萬葉集 十一古今相聞往來歌〕吾妹兒、又毛相等、千羽八振、神社乎、不禱日者無、

〔夫木和歌抄 三十四神祇〕をやしろ

上西門院兵衛

うなゐごがかきねにいはふをやしろもおもふことだにならばたのまん

古事類苑

神祇部十一

神領

古事類苑

神祇部十一

神領

神領ニハ、神戸神田等ノ數種アリシガ、後世ニハ其制大ニ頽レ、總テ神領又ハ社領ノ名ヲ用キタリ、然レドモ神田ノ名モ希ニハ存セルヲ以テ、今ハ後世ノ神領ヲバ神田ノ中ニ收メタリ、

神戸ハ、カムベト云フ、神社ニ隷スル封戸ニシテ、租庸調ヲ納ルヽモノナリ、延喜式ニ據ルニ、毎戸丁男五六人ヲ以テ率ト爲シ、衞士仕丁事力ニ點セザリシガ、其後ニハ普通ノ例ニ從ヒ、正丁四人、中男一人、田租四十束ヲ以テ一戸ノ率ト爲シ、五十戸ゴトニ仕丁一人ヲ點ジ、米ヲ以テ之ニ代ヘシガ如シ、此神戸ニハ神戸司、神戸預等アリテ之ヲ管シ、神祇官其名籍ヲ掌ル、サテ封丁ハ、社殿ノ修造及ビ其他ノ雜事ニ役シ、租調ハ、祭祀料及ビ社司ノ俸祿等ニ充用ス、崇神天皇七年神戸ヲ定メ、垂仁天皇二十七年之ヲ更定シ、平城天皇ノ朝ニ至リテハ、全國ノ神戸凡ソ七千有餘ニ及ベリ、

神奴ハ、又神賤トモ云フ、神社ニ隷スル所ノ賤民ニシテ、良民ト婚姻スルヲ得ズ、而シテ神奴ノ史ニ載セラレタルモノハ、鹿嶋神宮ヲ以テ殊ニ多シトス、

神郡ハ、卽チ神戸ノ大ナルモノニシテ、一郡悉ク神社ニ隷スルモノヲ云フ、伊勢大神宮ヲ始メ、安房、香取、鹿嶋、出雲、日前、國懸、宗像等ノ諸社ニ、各神郡アリ、而シテ伊勢大神宮ノ事ハ、其神

領篇ニ詳ナリ、凡テ神部ノ租調ハ、宮司之ヲ勘納シテ、國司ト共ニ雜務ヲ行ヘリ、

御厨ハ、ミクリヤ又ミクリト云フ、御贄ヲ獻ジテ以テ御厨ノ用ニ供スル地ニシテ、御厨預、御厨司等アリテ之ヲ管セリ、御園ハミソノト云フ、即チ御園ヨリ生ズル物ヲ以テ其用ニ供スルモノニシテ、此モ亦御厨ト同ジク、御園預御園司等アリ、共ニ伊勢兩宮ニ隷スルモノ多シ、

神田ハ、ミトシロト云フ、單純ナルモノト、神戸内ノモノトノ二種アリ、共ニ官ニ在リテハ不輸租田ニシテ賣買スルヲ禁ズ、而シテ神戸ナルハ多クハ口分田ニシテ、地子田ナルモアルベク、神社ニテ自ラ耕スモアルベク、而シテ單純ナルハ皆地子田ナルベシ、其田租ハ貯藏シテ神税ト稱シ、祭祀修造ノ用途、神祇官人及ビ社司ノ俸祿等ニ充テタリ、後世ノ神領モ社司之ヲ掌リテ、租賦ヲ徴收シ、以テ祭祀造營等ノ諸費ニ充テ、其用キル所ニ從テ、日供料所、御供料所、朔幣田、年中行事領、臨時祭料所、放生會料所等ノ名アリ、而シテ一年ノ所納ヲ約シテ其地ヲ人ニ預クルコトモアルベシ、

後鳥羽天皇ノ壽永三年、源頼朝奏シテ、諸社ノ神領ヲ加ヘ、最モ神祇ヲ崇敬ス、然レドモ守護地頭等、漸ク神領ヲ押領シ、恣ニ神人ヲ驅使スルモノアルヲ以テ、北條氏足利氏ニ至リ、屢禁令ヲ發シ、其地ヲ返納セシメ、神領ノ中、守護ノ入部ヲ禁ズル事アリ、之ヲ不入ノ地ト稱ス、又社司神領ノ租税ヲ負リ、之ヲ賣買スル者アルヲ以テ、北條氏ノ時、屢之ヲ禁ジ、足利氏及ビ德川氏モ亦之ヲ嚴禁セリ、德川氏ノ制、諸社ノ領地ニ劵狀ヲ附シ、將軍ノ印ヲ捺ス、之ヲ御朱印ト云フ、

神戸

〔令義解一職員〕神祇官

伯一人、掌、神祇祭祀、祝部、○中略神°戸°名籍、謂祝部名籍、神戸戸籍也、案戸令、神戸戸籍、更寫一通、各送本官、神戸戸籍依同令、在此也、○下略

〔令集解二職員〕神戸 謂、同、神戸行事、言、神祇令云、神戸調庸、及田租、並充造宮及供神調度、皆國司檢校、申送所司者、是知、神°戸°名°、神°調°庸°租°、並°充°造°神°宮°及°供°神°料°名°、但神祇官惣其事也、

於今有格、役掃社等、○中略名籍帳朱云、祝部神戸名籍者、國總造籍三通之外、別更寫一通、送神祇官耳、未知神戸計帳亦掌何、貞說不掌也、諸說皆同也、私情不安、何不掌心(心恐之誤)而有神戸人不計作計帳何、答乃見後記也、讀說、祝部神戸名籍者、祝部名帳也、神戸戸籍、計帳並掌、[illegible]又更云、籍者猶計、何者門籍是不必戸籍故者、又此書云、神戸名籍者、今案、此等說、神祇官只掌名籍也、戸籍不可掌、未知其理何、但令釋及諸說、戸籍掌者、(中略)同、此司掌神戸籍帳意、答爲勘知彼調庸並田租等也、

〔延喜式 三 臨時祭〕凡神戸百姓、不得輙令得度、

凡諸國、○中略神戸計帳、祝部等名帳、每年勘造、送此官、○神祇計會知實、即付返抄、

〔續日本紀 九 元正〕養老七年○神龜元年五月己卯、制、神戸當造籍帳、戸无增減、依本爲定、若有增益、即減之、死損即加之、

〔新抄格勅符抄〕太政官符　神祇官○中略

一停止春日神封廿烟　常陸國

右割神封物、充祭料畢、仍納件封還收下、符民部省畢、宜承知以前件帖如前、官宜承知依件行之、符到奉行、

延暦廿年九月廿二日

〔類聚三代格 一〕太政官符

應以大社封戸修理小社事 四箇條之初條

右撰格所起請偁、太政官去弘仁十三年四月四日下大和國符偁、得彼國解偁、撿案內、太政官去弘仁三年五月三日符偁、有封之社、令神戸百姓修造、無封之社、令禰宜祝部等永加修理、國司不存撿校、有致破壞者、遷替之日、拘其解由者、國依符旨行來尚矣、而今有封神社、已有治力、無封神社、全無修料、仍貧弊祝部、無由修社、吏加撿責、各規遁隱、推其苦跡、誠有所以、仍撿神苗裔、本枝相分、其祖神則貴而有封、其裔神則微而無封、假令飛鳥神之裔、天太玉、○玉下恐脫玉二字臼瀧、賀屋鳴比女神四社、此等類是也、望請以無封苗裔之神、分付有封始祖之社、則令有封神主領無封祝部、然則社有修掃之勤、國無祟咎之

兆者、右大臣宣、奉勅依請者、事施一國、遵行有便、伏望下知四畿内及七道諸國者、中納言兼左近衛大將從三位藤原基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔類聚三代格〕一太政官符

應令停止分神封鄕寄神宮寺事

右得神祇官解偁、坐越前國正一位勳一等氣比大神宮司中臣清貞解偁、撿舊例、太政官去齊衡三年四月七日下國符偁、寺別當與神宮司共可勘知封物出納者、自爾以降相共勘知、先納神宮、後分寺家、是宮司之處分、非國宰之所行、而國去九月二日送神宮寺移云、依別當僧平鎭牒狀、分足羽郡野田村封鄕、爲神宮寺料者、宮鎭無例之狀、副郡司禰宜祝等申文、再三移送、而曾無封移、又未改行、因茲平鎭等入接封鄕、徵妨調物、供神之物、先爲僧侶之食、役社之輩、還稱寺家之人、國宰所行、宮司難制、望請官裁被停分鄕、但宮司依例總納封物、供神之後、隨色頒行者、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅依請、

寛平五年十二月廿九日

〔類聚符宣抄〕一太政官符民部省

應以山城國愛宕郡捌箇鄕奉寄賀茂上下大神宮事

四至東限延暦寺四至、南限皇城北大路同末、西限大宮東大路同末、北限郡界、

御祖社四箇鄕

蓼倉鄕　栗野鄕　上粟田鄕　出雲鄕

別雷社四箇鄕

賀茂鄕　小野鄕　錦部鄕　大野鄕

右去年十一月廿五日行幸彼社、以件八郷被奉寄了、今商量便宜、平均田圖、所定如件、（中略）自今以後悉爲神領、卽以其應輸物、永宛恒例祭祀神殿雑舍、幷上下枝屬神社神館神宮寺等修造、幷臨時巨細之料矣、正二位行大納言兼右近衞大將藤原朝臣實資宣、奉勅依件分宛者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左少辨正五位下兼近江守源朝臣　　　正五位下行左大史兼播磨權介但波朝臣

寛仁二年十一月廿五日（〇又見小右記）

〔日本書紀　五崇神〕七年十一月丁卯、命伊香色雄、而以物部八十手所作祭神之物、卽以大田田根子爲祭大物主大神之主、（〇中略）便別祭八十萬群神、仍定天社國社及神地神戸（カミトコロカムベ）、

〔日本書紀　六垂仁〕二十七年八月己卯、令祠官卜兵器爲神幣吉之、故弓矢及横刀納諸神之社、仍更定神地神戸、以時祠之、

〔日本書紀　十二履中〕五年十月甲子、葬皇妃、既而天皇悔之不治神祟而亡皇妃、更求其咎、或者曰、車持君行於筑紫國、而悉按車持部、兼取充神者（カムベラノタミ）、必是罪矣、天皇則喚車持君、以推問之、事既實焉、因以數之曰、爾雖車持君、縱撿按天子之百姓、罪一也、既分寄于神祇車持部、兼奪取之、罪二也、則負惡解除善解除、而出於長渚崎、令祓禊、既而詔之曰、自今以後不得掌筑紫之車持部、乃悉收以更分之、奉於三神、

〔常陸風土記　香嶋郡〕自高天原降來大神、名稱香嶋天之大神、天則號曰香嶋之宮、地則名豐香嶋之宮、（〇中略）神戸六十五烟、（本八戸、難波天皇（孝德）之世、加奉五十戸、飛鳥淨見原大朝（天武）加奉九戸、合六十七戸、庚寅年（持統四年）編戸減二戸、令定六十五戸、）

〔續日本紀　十八孝謙〕天平勝寶二年二月戊子、奉充一品八幡大神封八百戸、（前四百二十戸、今加三百八十戸、）位田八十町、（前五十町、今加三十町、）二品比賣神封六百戸、位田六十町、

〇按ズルニ、宇佐八幡ノ神封ハ東大寺要錄ニ、天平十二年封二十戸ヲ奉リ、同十八年ニ大神ヲ三位ニ叙シ、封四百戸ヲ奉ルトアリ、是三品ノ位封ナリ、天平勝寶元年十二月大神ニ一品ヲ、比

神郡

咩神ニ二品ヲ奉リシニ依リテ、更ニ封戸ヲ加ヘラレシハ、祿令ニ凡食封者、一品八百戸、二品六百戸トアルニ准ジテ奉リシナリ、尚宇佐神宮篇ニアリ、參看スベシ、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶七歲三月丁亥、八幡大神託宣曰、神吾不願矯託神命、請取封一千四百戸、田一百四十町、徒无所用、如捨山野、宜奉返朝廷、唯留常神田耳、依神宣行之、

〔新抄格勅符抄〕神事諸家封戸 大同元年牒

神封部

合四千八百七十六戸

○按ズルニ、此神封ノ總數ハ、神郡ノ封戸ヲモ算入セルモノニシテ、太宰府管内ノ神戸ハ除ケルモノヽ如シ、若シ之ヲ加フルトキハ、凡ソ七千有餘ニ及ブナラン、

〔中右記〕元永二年十二月五日、今朝依新子孫事、割家封備後國十烟、奉寄石清水八幡宮、聊奉幣付權別當法眼圓賢了、

〔常陸風土記 香島郡〕古老曰、難波長柄豐前大朝馭宇天皇之世 孝德 己酉年、大乙上中臣鎌子、大乙下中臣部兎子等、請總領高向大夫、割下總國海上國造部內、輕野以南一里、那賀國造部內、寒田以北五里、別置神郡、○鹿島神宮

〔令集解 十六選敍〕釋云、養老七年十一月十六日太政官處分、伊勢國渡相郡、竹郡、安房國安房郡、出雲國意宇郡、筑前國宗形郡、常陸國鹿嶋郡、下總國香取郡、紀伊國名草郡、合八神郡、聽連任三等以上親也、

〔延喜式 十八式部〕凡郡司者一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓除同門外聽任、神郡 ○中略 者不在制限、謂伊勢國飯野、度會、多氣、安房國安房、下總國香取、常陸國鹿嶋、出雲國意宇、紀伊國名草、筑前國宗形等郡爲神郡、

御厨御園

〔神道名目類聚抄 六祭物〕御厨　神領ナリ、御贄調進ノ魚鳥、野菜果實ノ類ヲ奉ル所ナリ、

〔後拾遺和歌集 十一戀〕女のもとにつかはしける　藤原道信朝臣

おふみにかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼

〔倭訓栞 前編三十〕みくり　御厨をよめり、〇中略白居易が詩に珍羞降御厨と見えたり、御贄を奉る所をいふ也、大明會典に、神厨の字見えたり、御供所といふ是也、越後國美久理神社式に見えたり、枕草紙にみくりの社といへり、

〔皇大神宮儀式帳〕初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事

右從纏向珠城朝庭〇垂仁以來、至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇〇孝徳御世、有爾鳥墓村造神庤氏、爲雜神政行仕奉支、〇中略同朝庭御時仁、初大神宮司所稱神庤司中臣香積連須氣仕奉支、是人時仁度會山田原造御厨氏、改神庤止云名氏、號御厨、

〔大神宮諸雜事記 一〕延長六年四月十三日、一志神戸嶋拔御厨預等申文云、當神戸者、是二宮御鹽調備供進之所也、〇下略

〔大神宮諸雜事記 二〕康平三年八月三日、伊勢義孝被配流於隱岐國已了、事發以去元年七月天、件守爲撿田入部一志郡之處、郡司伊元宿禰之住宅燒拂已了、而件宿禰乍爲郡司、豐受大神宮之御領、字阿射賀御厨司兼任也、仍供祭物徴納之間、同以燒失了、依即件訴天被配流也、

〔續世繼 二釣せぬ浦々〕此の御時〇白河、中略生きとし生けるものゝ命をすくはせ給ひて、かくれさせ給ふまでおはしましき、皐月のさやまにともしする賤のをもなく、秋の夕ぐれ浦に釣するあまも絶えにき、おのづから網など持たるあまの笘屋もあれば、とり出だしてたゞなはの殘るもなく烟となりぬ、もたる主はいひしらぬめども、罪をかぶる事かずなし、神の御厨ばかりぞゆるされて、かたのやうに備へて、その外は殿上の臺盤なども六齋にかはる事なかりけり、

〔百練抄 五堀河〕寛治四年七月十三日、賀茂上下社被奉不輸田六百餘町、爲御供田、〇中略又分置御厨於諸國、俗諺曰、將亡聽政於神、此謂也、

〔賀茂社古代庄園御厨〕月供料

御厨九箇所

寛治四年七月十三日〇中略

御厨散在所々

播磨國伊保崎　伊豫國宇和郡六帖綱　伊豫國内海

紀伊國紀伊濱　讃岐國内海　豐前國江島

豐後國水津　木津　周防國佐河牛嶋御厨

抑御厨供祭人者、莫附要所、令居住之間、所被免本所役也、仍櫓棹通路濱、可爲當社供祭所之條、寛治以來代々宣旨以下勅裁分明也、見舊記

〔吾妻鏡六〕文治二年三月十日戊子、伊勢大神宮領地頭等之中、乃貢已下事、可致精勤之由日來有其沙汰、今日被施行之、御信仰異他故也、

下　伊勢國神宮御領御園御厨地頭等

可早任先例辨備御上分神役幷給主禰宜得分物事

右當國神領神民之中、令停止狼藉、有限御上分雜事幷給主禰宜神主得分物、不致對捍、任先例可令辨備也、若依處之異損、泥本法之辨者、雖地頭得分、慥可令急用正物、於神役者、敢不可闕怠之故也者、御園御厨住人、宜承知、不可緩怠之狀如件、

文治二年三月十日

〔神宮雜例集一〕

一御。厨。御。園。事。

合四百五十餘處

度會郡

二宮御領　大橋御園

內宮

鹽合御園　野中御園　大野田御園　永沼御園　柑子御園　岡依御園　田中御園　永野御園　高柳御園　津嶋崎御園　泊浦御園〇節略

〔大神宮諸雜事記二〕永承四年六月、〇中略神主陳狀云、寮頭女別當ノ被行之旨、奉爲神宮非常事等條々也、何者、大神宮御領、字志貴御園預麻績近吉ヲ女別當ノ家司平致重任意天捕縛天、且令食犬屎、且禁固其身天、于今不免、又同御粥見御園司時季ヲ殺害セル犯人丹生出山住人、紀重常、同常晴爲直等也、〇下略

〔吾妻鏡一〕治承四年十月廿一日庚子、令詣三嶋社給、御祈願已成就、偏依明神冥助之由御信仰之餘、點當國內奉寄神領給、則於寶前令書御寄進狀給、其詞云、

伊豆國御園　河原谷　長崎

可早奉免敷地三嶋大明神

右件鄕園者、爲御祈禱安堵公平、所寄進如件、

治承四年十月廿一日　源朝臣〇頼朝

〔政所賦銘引付〕文明十三年

中播大

一伯二位家雜掌　十一、廿五、

廣田社領攝州橘御園內、地頭恒富代官職事、令契約前田兵庫助候處、十餘年不遂筭用、過分號有借錢、可預御糺明云云、

神田

〔伊呂波字類抄〕(見地儀)神田(ミトシロ)

〔八雲御抄(三上地儀)〕みとしろ(社田)

〔倭訓栞(前編三十)〕みとしろ　三代實錄に御戸代に作れり、祝詞式には、御刀代とあり、日本紀に神田、又神戸田地とも見え、儀式帳に御田代御田乎佃(フツクリ)奉氐と見ゆ、と°はた°の轉音にして、代は附ていふ詞成べし、一說に、刀は戸の義、神戸也、百姓の戸をいふ、代は田也、續日本後紀に、御戸代田一町なども見えたり、

〔令義解(田三)〕凡田六年一班、(○中略)神田寺田、不在此限、(謂此卽不從田也、縱有崩埋侵食、不可更復加授也、)

〔令集解(田十二)〕釋云、其寺田雖崩埋、而亦不更加授也、穴云、神田寺田、先班之後、更不改給、若有爲水侵食、覓改入文、尙无田神寺耳、田租一如令釋、爲師說習耳、其職田亦无租、亦爲師說、令釋稱師說者、作令釋稱師說者、作令云、論无租所定、更不可有別式也、古記云、神田條不在收授之限、謂收而不授百姓也、一云、神田餘者不收欠加、寺田雖欠乘、不在收加之例、問神田寺田輸租以不、答並輸、各入本主、問神田寺田總賣買以不、答寺田總賣買也、神田不合、

〔延喜式(民部二十二)〕凡位田、(○中略)及神寺等田者、各據本地、不須輙改、

〔延喜式(主稅二十六)〕凡勘租帳者、皆據當年帳、(○中略)其神田、(○中略)爲不輸租田、

〔日本書紀(崇神五)〕七年十一月丁卯、定天社國社及神地(カムトコロ)神戶、

〔倭姬命世記〕御間城入彥五十瓊殖天皇、(○崇神)卽位五十一年甲戌四月八日、遷木乃國奈久佐濱宮、積三年之間奉齋、于時紀伊國造進舍人紀麻呂、良地口御田、

五十四年丁丑、遷吉備國名方濱宮、四年奉齋、于時吉備國造進采女吉備都比賣、又地口御田、

〔日本書紀(神功)〕九年、(○中略)二月、足仲彥天皇(○仲哀)崩、(○中略)夏四月甲辰、北到火前國松浦縣、而進食於玉嶋里小河之側、(○中略)旣而皇后則識神敎有驗、更祭祀神祇、躬欲西征、爰定神田(ミシロ)而佃之、

〔日本書紀顯宗十五〕三年二月丁巳朔、阿閉臣事代、銜レ命出二使于任那一、於レ是月神著レ人謂之曰、我祖高皇產靈、有下預鎔二造天地一之功上、宜以二民地一奉二我月神一、若依レ請獻レ我、當二福慶一、事代由レ是還レ京具奏、奉以二歌荒樔田一、(歌荒樔田、在二山背國葛野郡一、)　四月庚申、日神著レ人謂二阿閉臣事代一曰、以二磐余田一獻二我祖高皇產靈一、事代便奏、依二神乞一獻レ田十四町、

〔日本書紀持統三十〕四年正月庚子、班二幣於畿內天神地祇一、及增二神戶田地一、(ミトシロ)

〔新抄格勅符抄〕大同元年牒

一太宰神封

八幡神　田百卅六町九段二百卌四步(神田六町九段二百)　位田百卌町　一品八幡大神位田八十町(先事二五十町、今加二卅町一、)　二品比咩神位田六十町

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年二月辛亥、正一位勳一等賀茂御祖大社禰宜外從五位下鴨縣主廣雄等款狀云、去天平勝寶二年十二月十四日、奉レ充二御戶代田一町一、自爾以降、未レ被二奉加一、因茲年中用途乏少、請准二別雷社一、加二增御戶代田一町一、勅許レ之、　三月壬申、勅奉レ充二山城國乙訓郡山崎明神御戶代田二町一、

〔延喜式八祝詞〕廣瀨大忌祭

皇御孫命能、長御膳能遠御膳止、赤丹能穗爾聞食幸、皇神能御刀代乎始氏、(下略)

〔百練抄五堀河〕寬治四年七月廿三日、賀茂上下社被レ奉二不輸田六百餘町一、(○賀茂社古代庄園御厨ニ爲六、七百四十五町ニ作ル、)御供田一、近日稱レ有二夢想一、供二御膳一依二神稅不足一也、

○按ズルニ、賀茂社古代庄園御厨ニ、本文ト同日ノ事ヲ掲ゲテ、月供料庄園十九箇所、遠江國河村庄公田三十町、美濃國梅原庄公田四十町、紀伊國仁儀庄公田三十町、長門國厚狹庄公田三十町、土佐國津野庄公田三十町、讃岐國葛原庄田地六十町、因幡國土師庄田地四十町、安藝國竹原

庄四十町、備後國勝田庄田地四十町、備中國富田庄六十町、但馬國土野庄田地五十町、丹後國木津庄田地四十町、攝津國小野庄四十町、近江國高嶋庄五十町、越前國志津庄田地四十町、越中國倉垣庄田地三十町、越後國石河庄公田四十町、丹波國三和庄公田四十町、美濃國席田庄公田十五町トアリ、

〔古今著聞集一神祇〕基隆朝臣、周防國をしりける比、保安三年十月にかたりけるは、彼國にしまの明神とておはしまします、神主牢籠の事有て、論じけるもの有とて、神田をかりとらむとしければ、寶前より蛇三百計出たり、其内につの有二つ有けり、しはしありて入ぬ、其後猶からんとしければ、鳥數萬とび來りて、神田の稲の穂をくひぬきて、みな神殿の上に積けり、ふしぎの事なり、本國の神、かゝる事なかなかおはする物なり、

〔吾妻鏡三〕壽永三年二月廿五日甲申、朝務事、武衞〇源頼朝注御所存、條々被遣泰經朝臣之許云云、其詞云、

言上

條々

一 朝務等事〇中略

一 諸社事

我朝者神國也、往古神領無相違、其外今度始又各被新加歟、〇中略以前條々事、言上如件、

壽永三年二月日 源頼朝

〔吾妻鏡十九〕承元四年八月九日甲子、神社佛寺領、興行事思食立、有不慮類例事否可尋注進之旨、今日被下御書於守護人等云々、

〔玉葉〕建暦二年三月廿二日宣旨 左大臣 右大將

一可停止諸國吏寄進國領於神社佛寺事

抑如聞、諸國吏或稱身新、或得人語、恣以國領公田、寄進神社佛寺、非啻當時奉寄之志、剩載永代免許之字、新司欲停之、則本所頻爲結愁緒之源、當任欲充之、亦後代定不殘立錐之地歟、吏途之法、循良失術、聖斷之處、裁封有煩、謂其不治、職而斯由、於不帶勅免之地者、宜令國領兼、又自今以後永從停止、莫令更然、

〔吾妻鏡四十〕建長二年七月廿二日丙戌、都鄙神社廢陵事、殊可有興行之由及御沙汰、於勅願所事者、追可被任奏聞、先至關東御分所々者、任被定置之旨、可抽修理之功、若又及大破者、不日可令言上、隨其左右、可有御沙汰之由所被仰出也、是當世別當神主等、只貪佛物神領、輙無興隆之志之旨、度々評定之時、凝群議如此云々、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年二月廿九日辛酉、關東御分寺社、殊可興行於神事之由、日來有其沙汰、今日被始行之、〇中略

一可修造本社事

有封社者、任代々符、少破之時、且加修理、若及大破言上子細者、隨其左右、可有其沙汰之由被定置訖、而近年社司恣貪神領利潤、無顧社壇之破損、匪啻不恐神慮、專可謂忘公平、自今以後、於背此制法輩者、可被改補其職矣、

〔新編追加雜務〕一鎭西神領幷名主等所領事、弘安九

如日來、無相違各可領掌、縱雖有御使下知、先如元可令沙汰付、但非分押領、幷新儀濫妨事者、各寄合尋明、可令注進之由可被仰少貳入道、兵庫入道、薩摩入道、河内權守入道等、

〔新御式目〕弘安七、五、廿、卅八箇條

寺社領如舊被沙汰付、被專神事佛事、被止御造寺社、可被加古寺社修理事、〇下略

〔建武以來追加〕一寺社本所領事觀應三、八、廿一、御沙汰、○中略

寺社一圓所領等事、且爲新國家之安全、且爲全面々之運祚、軍士等、尤可令禁愼哉、況本所領、曾不可致違亂、

〔建武以來追加〕寺社本所領事、依勅許所被定下也、早分國之所々、守事書嚴密人々遵行、來月中可被申左右、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

應安元年六月十七日　武藏守判

佐々木大夫判官入道殿

〔尺素往來〕神明寄進、○中略庶子割分之地者、不可有悔返改動之儀、

〔長曾我部元親百箇條〕掟

一諸社神事祭禮等、從先年如相定、不可有退轉事、附以其社領寄進物、可成程者、可加修理、若及大破不叶時者、奉行人迄可相理者也、右於無沙汰者、神主社家可爲曲事事、

〔加茂御祖皇大神宮諸國神戸記二〕

上粟田鄕　一乘寺村

一乘寺之内在之下鴨社領拾石八斗五升三合事、如先々可有社納之狀如件、

天正十二十月廿五日　玄以在判

下鴨社家中

〔武家嚴制錄十二〕駿州久能山東照宮領御寄進

駿河國久能山

東照宮御領、當國有渡郡之内所々十六ヶ村、都合三千石之事、任元和六年三月十五日先判之旨、令寄進畢、但高百石ニ付而、四十五石宛可定納、共可爲諸斷使不入之地、若於犯科人出來ハ非例之限者、守此旨榊原越

中守照清令沙汰之、神前諸役、國家祈念、永無怠慢、彌可勤仕候狀如件、

正保三年十月十七日　從一位左大臣源朝臣判○節略

〔諸國寺社領〕社領九百廿八ヶ社　領拾四萬貳千九百七十九石

〔吾妻鏡一〕治承四年十月十六日乙未、爲武衞○源賴朝御願、於鶴岳若宮、被始長日勤行、○中略以相模國桑原郷、爲御供料所、

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一兵主社內時任名

申日御供料所　後高倉院○高倉皇子、後堀河皇考、正治年中御寄附、權禰宜成貫相傳知行、

〔徵古文書乙集相模國〕大庭文書

足利成氏知行安堵狀

鶴岡八幡宮御供料所、武藏國青木村內宗興寺林慶昌庵買得之○中略等事、雖令沽却、爲德政所返附也、早止買得人綺、如元可令知行之狀如件、

寶德二年九月廿一日　花押○足利成氏

當社少別當御房

〔鹿嶋神宮古文書〕鹿嶋大神宮領田數注文○中略

每月朔幣田七町八段月別六段

〔常陸國吉田神社文書〕下　吉田社領

可早任先例令勤仕朔幣田事

七月朔幣田貳段　袴塚郷

十二月朔幣田貳段　常磐郷

右件朔幣田事、任先例可令勤仕也、不可有新儀之狀如件、

建仁二年閏十月廿九日

〔武家嚴制錄十二〕駿州久野山東照宮領御寄進

駿河國久野山

東照宮御領、當國有渡郡之內、所々十六ヶ村、都合三千石之事、任元和六年三月十五日先判之旨、令寄進之畢、此內百六十二石五斗餘、年中行事領、右者以大谷宮川片山三箇村、可配當之、共可爲撿斷使不入之地、若於犯科人出來ハ、非制之限者、守此旨榊原越中守照淸令沙汰之、神前諸役、國家祈念、永無怠慢、彌可勤仕候條如件、

正保三年十月十七日　從一位左大臣源朝臣判（○略）

〔吾妻鏡四〕元曆二年四月廿日癸酉、今日迎伊豆國三嶋社祭日、武衛（○源賴朝）爲果御願、被寄附當國糠田郷於彼社、而先之御奉寄地三箇所有之、今已爲四箇所也、相分之、以河原谷三園、募六月廿日臨時祭料所、被付神主盛方（號東大夫）、以糠田長崎、爲八月放生會（二宮八幡宮）料所、被付神主盛成（號西大夫）、是皆北條殿（○時政）御奉、令施行給云々、

〔賀茂社古代庄園御厨〕御祈禱料所

安藝國

都宇庄

竹原庄

鴨社領、安藝國都宇竹原兩庄事、爲嚴重之神領、公用其沙汰候處、一亂中以來無社納云々、仍神役幷天下御祈禱闕怠之條、太以不可然、被成勅裁候、所詮如先規被加御成敗、嚴密被致其沙汰、可被渡彼社雜掌由、被仰出之旨、按察殿御奉行所候也、仍執達如件、

文明十五十月十一日　親繼

小早川中務少輔殿見本書案

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一太田野保　二季御神樂幷大般若轉讀料所

權禰宜友雅知行、但甲乙人等押領之間、神役闕如畢、

〔鹿嶋神宮古文書〕鹿嶋大神宮領田數注文○中略

最勝講田十町○中略

春秋二季最勝講田廿町○中略

四季轉讀大般若田二町三段小

〔伊豆國三嶋宮文書〕奉寄進　伊豆國三嶋大明神

同國稻梓鄕內、土屋近江五郎入道跡一圓、除庶子分、

右爲不斷護摩料所、所奉寄附之狀如件、

應永廿二年十一月九日　安房守憲基花押

〔賀茂社古代庄園御厨〕樂田　丹後國　氷室庄

文明六年十二月十九日、鴨樂田事、丹後國氷室庄可被下安堵之勅裁云々、當知行不可有子細云々、

見舊記

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一淺井郡員辨神田伍町陸段小

季節神供幷御神樂料所

〔吾妻鏡 四〕元曆二年正月廿二日丙午、以出雲國安東鄕、先日令寄附于鴨社神領給訖、而可爲冬季御神樂料所之旨被仰遣、廣元施行之、

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一伊豫國桑村本郡

四季御神樂料所　西園寺家、承久年中被寄進、　神主成久知行

〔賀茂社古代庄園御厝〕夏季御神樂料所

越中國

寒江庄

當社領越中國寒江庄、爲別納所被付分領也、全知行、日供幷夏季御神樂兩役、任請文之旨、無懈怠可被致沙汰之由、被仰下之狀如件、

左少辨 在判

應永二年三月十日

鴨禰宜館

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一入千草村神田

毎月柴田樂料所、地頭押領神用闕如畢、

〔賀茂社古代庄園御厝〕夏冬御神服料所

丹波國

小野庄

賀茂庄

元永二年十二月五日、御服裝束事、以丹波御庄年貢一年一度所調供來也、而自故禰宜惟季時被立加美乃御庄之後、二季調進之、至于當季已調獻了、見舊記

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一尾張國千代丸保

十禪師宮御服料所　國司寄進、權禰宜成貫奉行、成材成貫等相傳知行之處、國衙押領、神用闕畢、

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一備中國大市庄

大宮侍所臺盤料所、地頭押妨、年貢減、有名無實也、後白川院御寄附、禰宜俊貞知行、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年七月廿日丙午、此間於鶴岡若宮之傍、被新造社壇、今日所被勸請熱田大明神也、武衞〇源賴朝參給、〇中略御遷宮事終之後、爲貢税糧所、被奉寄相模國内一村、筑後權守俊兼被召寶前、書御寄附狀云々、

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領

一粟太北郡二宮神田拾町

每夜燈油料所、

〔徵古文書乙集武藏國〕神田氏所藏文書

感神院所司等解　申進　申文事

請被殊蒙恩裁、停止社頭幷四至内狼藉、號九郎御曹司仰、武勇輩等寄事於左右、或稱有所緣爭、或付寄宿者事、不觸社家、恣行追捕間、云社邊、云住僧、即及損亡逃散、不勤公家御祈禱、季等神事有違例條々子細狀、

一當社御常燈用途料領、丹波國天田郡宗我部郷土肥、乍成下文、依式部大夫惟成子息木工助訴、背

先下知木工助方可知行由令成與下文間、有限御常燈、及斷絶子細狀、

右件鄕者、前備前守時房朝臣相傳之所領也、而當社往古常燈依及懈怠、且爲令勤仕神事、且爲被免國衙之萬雜公事、去年六月日所令口常燈領也、然則停止彼木工助之無道妨、可勤日別御油役之由、被成下御下文者、同欲致御祈禱矣、仍言上如件、以前條々、爲蒙御裁許、大略註進之狀如件、以解、

壽永三年三月　日

〔鹿嶋神宮古文書〕鹿嶋大神宮領田數注文〇中略

每夜御燈油田七町二段小〇中略

每月五箇度御燈油田一町三段

〔東武實錄　三〕元和三年九月六日、春日ノ社ニ寺領ヲ賜ル、

春日社領竝興福寺

一千六百五拾壹石八斗餘　燈明田（但禰宜方）

右可令社納、但五師預分支配等、可相守別紙目錄之旨者也、

元和三年九月六日〇略

〔東武實錄　七上〕元和六年三月十五日、駿河久能山東照大權現ノ社ニ神領ヲ寄附セラル、

東照大權現（駿河國久能）　社領之事、都合三千石、此内千石神供料、貳百石社僧料、千八百石神主領、以上

右件々、在所ハ當國有渡郡之内、所々十六ヶ村（目錄在別紙）事、奉寄進之訖、永代令停止撿斷使者也（但記）過人出來者、非制之限、者、榊原大内記照久、全之神納神事社役等可勤仕之狀如件、

元和六年三月十五日

〔續日本紀　十八孝謙〕天平勝寶二年八月辛未、攝津國住吉郡人、外從五位下依羅我孫忍麻呂等五人、賜依

貢賦

羅宿禰姓、神奴意支奈、祝長月等五十三人、依羅物忌姓、

〔續日本紀考證六〕神奴 蓋大依羅神賤也

〔新撰姓氏錄攝津國神別〕神奴連(カミノヤツコノムラジ)

天兒屋根命十一世孫、雷大臣命之後也、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字二年九月丁丑、常陸國鹿嶋神奴二百十八人、便爲神戸、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年四月庚子、放鹿嶋神賤男八十人、女七十五人從良、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年六月丙午、常陸國鹿嶋神賤一百五人、自神護景雲元年立制安置一處、不許與良婚姻、至是依舊居住、更不移動、其同類相婚一依前例、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年十二月壬子、常陸國言、脫漏神賤七百七十四人、請編神戸許之、但神司○鹿嶋妄認良民、規爲神賤、假託靈異、已侵朝章、自今以後、更莫申請、

〔續日本紀三十九桓武〕延暦七年三月辛亥、下勅曰、調發東海東山坂東諸國步騎五萬二千八百餘人、限來年三月、會於陸奥國多賀城、其點兵者先盡前般入軍經戰敍勳者、及常陸國神賤、然後簡點餘人堪弓馬者、

〔新抄格勅符抄〕太政官符　神祇官

一應割神封物充春日祭料事

調布五百端 下總國香取神封二百端、常陸國鹿嶋神封三百端、

庸布三百端　商布六百端

麻六百斤　紙六百張 香取神封

右件神封物、割充如前、仍須每年納送祭所、自餘雜物、一同前符、官宜承知依件施行、○中略

延暦二十年九月廿二日

〔神宮雜例集〕一神封事

一七ヶ國封戶

二百九十戶〈○中略〉

代米

畑別所當

調絹一匹　庸米一石二斗

中男作物油七合　租穀四石

封戶〈○戶恐丁誤〉廿五畑一人

運賃

隨國有法、但美乃副夫領、信乃、上野副駄賃仍除之、

合准米

除色代濟國分、

尾張國

本封

調絹九十匹

庸米十一石

租穀四十石　傜功米三十六石

中男作物胡麻油七升

封丁一人

新封

調絹二十五匹　庸米三十石
租穀百石
中男作物胡麻油一斗七升五合
封丁一人

○按ズルニ、此書ノ二百九十戸ノ畑別ノ所當ハ、民部式ノ封戸以正丁四人中男一人為一戸トアル、通常ノ封戸ノ法ニ依リタルモノニテ、神戸ノ法ニ依ラズ、調絹庸米中男作物ハ、主計式ノ調絹四丁成匹庸米三斗、中男作物胡麻油七合トアルニ合ヒ、租穀封丁ハ、民部式ニ、率租毎戸以卌束(郎穀四斛)為限、點仕丁者、毎五十戸二人トアルニ合フ

〔令義解 二神祇〕凡神戸調庸、及田租者、並充造神宮及供神調度、其税者一准義倉、(謂租税者、並是田賦、唯新輸曰租、經貯曰税也、一准義倉者、不出擧也、)皆國司撿校申送所司、

〔令集解 七上神祇〕釋云、撿諸家字詁、租税並是田賦、本雖同物、見令所行、新出曰租、經年稱税耳、一准義倉者、謂不得出擧耳、租音則胡反、内相宜云、自今以後、神戸調庸者、充供神用數、及所殘之數、具令申、然後給之、亦伊勢神税出擧之類、准令停之跡云、税謂百姓出時曰田租、置倉之日云税、然此始收納、幷供神之餘、並國司撿校、令申神祇官、朱云、神戸調庸及田租、謂神戸人之田租、未知神田何、穴云、税者一准義倉、具説新令私記及令釋了也、其神戸義倉、一混合公戸貯官倉也、或云、調庸等物充用之殘者、亦名税者、博士不依、但調庸之殘耳、古記云、問神戸調庸及租、幷充造神宮及供神調度也、若有乘者何、答昔治置神祇官、中間給神主等、今治置神祇官、臨時准量所用多少給充荷已訖、問其税者、一准義倉意何、答神戸義倉如公民戸義倉耳、其説字義倉云耳、○(中略)朱云、申送所司、謂神祇官也、先可申太政官者後度、貞云、如文申神祇官耳、但時行事先申官者、(未明)古記云、所司何司、答依文神祇官、但今行状者、自大辨至民部、民部至神祇官、給至所在故所司耳、又問、義倉文至神祇官以不、答調庸幷田租義倉等文、又神戸戸

籍、更各寫一通、送神祇官耳、

〔延喜式三臨時祭〕凡諸國神税調庸帳、〇中略每年勘造、送此官、〇神祇計會知實、即付返抄、

凡諸國神社、隨破修理、但攝津國住吉、下總國香取、常陸國鹿嶋等神社正殿、廿年一度改造、其料便用神税、如無神税、即充正税、

凡神戶調庸、充祭料幷造神社及供神調度、但田租貯爲神税、

凡年中祭祓料所須篦千三百六十四隻者、大和國以神税交易、十月以前進之、

凡伊豆紀伊兩國、以神税交易所進祭料、雜皮八十五張、（伊豆國熊皮五張、猪皮十張、鹿皮廿張、紀伊國熊皮五張、猪皮五張、鹿皮廿張、）並付貢調使進此官、〇神祇即與諸司出納、

凡但馬因幡美作三國、以神税交易所進之弓矢大刀者、充臨時祭祓料、（但馬因幡兩國、各弓廿八張、征矢五十隻、美作國大刀三柄、征矢五十隻、）

凡因幡伯耆兩國所進相嘗祭料、荒筥八十八合、（國別卌四合）每年以神税交易、十月以前差使進上、

凡鷂三百七十八枚、攝津國以神税交易送此官、充年中祭料、

凡諸國所進神税交易雜物、〇中略挍此官諸司出納、

凡鴨御祖、別雷、熱田三社神税穀者、社用之外不得用、雖充社用、申辨官待報、

凡官人〇神祇季祿馬料要劇、幷供奉神事官人裝束、宮主神琴師龜卜長上季祿馬料月粮、及卜部御巫等衣服者、以神税充之、（但宮主月粮以官田給之）

凡史生二人、官掌一人、神部四人、粮米者以神税物充之、月別各白米一斗五升、

〔日本書紀二十九天武〕六年五月己丑、勅天社地社神税者、三分之一爲擬供神、二分給神主、

〔續日本紀二文武〕大寶元年四月丙午、勅、山背國葛野郡月讀神、樺井神、木嶋神、波津賀志神等神稻、自今以後給中臣氏、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應停止官人品官等季祿依自解文給諸國神稅事

右得神祇官解偁、撿案內、承前之例、官人及諸宮主等季祿、以神稅交易輕物勘納本官、依太政官符與諸司共充給、而頃年各修自解申官、競賜諸國神稅、至于勘會彼帳、既致物煩、望請□被從停止、將絕猥濫、但事不獲已有可給者、依官解然後宛給、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

貞觀十七年二月一日

〔加茂御祖皇大神宮諸國神戸記六〕

近江國　高嶋庄

三所祝鴨秀世辨申

欲早被停止非分之沙汰、被行其身於反坐科、任元弘勅裁竝將軍家御敎書等旨、令成安堵思、專御祈禱、山徒山本坊定祐、稱爲南谷定心院集會事書、令殺害山門公人得力法師由、構堅固不實、令濫行鴨御祖大神宮嚴重日次神供料所近江國高嶋庄、重疊罪科不輕間事、

副進　一卷　勅裁幷將軍家御敎書、武家使節註文以下條

右當庄者、爲一圓不輸社領、嚴重不闕之神用、幷社頭造營之勤役以下、連々神用、重營異他之地、而彼定祐、致非分押領之間、□□去元弘年中、□□□以何篇可侵殺害之大罪哉、高季所在暗在哉、倩案事情、造意結構之意趣者、件定祐乍荷日來之重科、重今年二月廿三日夜、差遣家人等於當庄盜取嚴重神稅米等、致種々惡行狼藉訖、子細所進具書、仍就令觸訴于佐々木佐渡判官入道、如兩使出羽三郎入道道光、永田四郎信氏等起請之請文者、去二月廿三日夜、定祐差遣家人等、押取神稅之間、可令糺返之旨、雖相觸之、不叙用云云、依之去七月廿三日、被成嚴命御敎書之間、定祐失爲方之餘、爲寄罪名、致奸訴之條顯然也、且云公家云武家、當時專被重大社、被先正理之最中、定祐不恐朝威、不顧神罰、構

出墾固之不實之條、反坐科爭可遁避哉、然者早被停止彼謀訴、令成安堵思、增欲專天長地久四海靜謐之御祈禱、仍披陳言上如件、

建武四年八月日

〔延喜式四伊勢大神宮〕神田卅六町一段

大和國宇陀郡二町

伊賀國伊賀郡二町

伊勢國卅二町一段

右神田如件、割度會郡五町四段、二町四段大神宮、三町度會宮、令當郡司營種、收獲苗子、供用大神宮三時、幷度會宮朝夕之饌、自餘依當土估賃租充供祭料、

〔大內家壁書〕一今八幡社頭幷御神領事條々

一修理造營之時、社領中人足、有催促可召仕也、然而號地子辨濟、不勤仕人足以下諸役云云、大綱修造之時者、縱雖爲地子收納地、可相催之、若及異儀之仁者、不可居住社領中之事、○中略

一社邊掃除者、宮司幷神人等可致奔走事、

一諸人號屋地、雖申給神領內、則不作家、不辨收地料、剩於彼地內、定置百姓、納取地子、偏如私領有受用族云云、於自今已後者、縱以上裁雖預給、至如此之仁者、言上子細、爲社家可召放件地、若又乍居住不社納地料者、就訴訟之是非、可被付渡其家於其地事、

右條々堅固所被仰出也、以此旨可有其沙汰之狀如件、

文明十年卯月十五日　遠江守正任奉

〔蜷川親俊記〕天文十一年七月十四日壬戌、永原越前重隆申下條寺社本所地子錢先年引替、雖被成御下知候、難澁候間、口只今被仰出候、親俊諏訪神左衛門へ書狀遣之、

〔諏訪社家文書纂〕爲大政所領、靑錢拾貫文之分、於于田邊之鄕之內被渡下候、如舊規、神役嚴重可相勤之旨被仰出候者也、仍如件、

丁卯十一月十二日　　吉田左近助

龍丸朱印　　　　　　奉之

神長官殿

〔武家嚴制錄十二〕春日社領、御下知條々

春日御供御修理祭禮下行幷學問領五師預分

一高五千五百八拾七石五斗餘　大和國所々

一納方寺務、幷喜多院權別當以差圖、一年替從寺中三人宛、中坊五師時之觸江出合、百姓別物成相窺、春日御藏唐院新坊江納之、相對可付置事、

一五師田共高百五拾石分、雖其年物成、可爲五師領事、

附口米五師可爲代官給事

右之條々堅可被相守此旨者也

元和三年九月七日

安藤對馬守

土井大炊頭

板倉伊賀守

本多上野介

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十一月五日甲辰、熊野山本宮造營事、就雜掌參訴有其沙汰、且彼社頭美濃國垣富以下地頭等、止色代可濟現物之由、被仰出之云々、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年七月七日辛亥、駿河前司惟義使者、自京都到來、持參藤中納言資實本書、是賀

茂河堤事、除江丹兩國幷神社佛寺權門庄領等、可致穩便沙汰之由、可被下知、惟義等、又此趣被仰諸國守護人者、駿州使者申云、件堤事、當時致其沙汰之處、去月廿四日、藤中納言資實卿奉仰、被相觸云、堤事被仰關東時、全可費煩諸國之由不思食寄、而仰九箇國御家人、不論權門勢家神社佛寺領、可充催由、被加下知之間、賀茂八幡已下庄々面々訴申、就中修理職杣役事、於此所々者、奉公異他之地也、又大嘗會卜合兩國在此中、彼是可免許云々、惟義申云、件杣分可充催何所乎云々、而此申狀事太以不足言也、仍直被遣奉書之由、同廿五日重被仰之旨云々、

〔常陸國吉田神社文書〕下　吉田社領

可令任官行事所配符辨濟造伊勢大神宮役夫公米事

副下配符一枚

右任配符支配鄕々、慥可令辨濟也、抑當社領、先例以准布雖令進濟、於今度者不可有其儀、諸國一同可濟見米、若非見米者、以錢百文宛八升、可令窮濟之由所被下也、存此旨、努令夕無遲怠、早可令辨濟之狀如件、

嘉祿二年七月　日

主殿頭小槻宿禰

〔康正二年造内裏段錢幷國役引付〕合

拾貫文　五月廿八日定、送狀アリ、請取出、　北野社領　所々段錢、實成院

貳拾貫文　五月廿七日定、送狀アリ、請取出、　春日社領　南都松林院段錢

四貫文　五月廿九日、廿六日定、送狀アリ、請取出、　三條八幡宮領　越中國御服之庄、吉川之段錢、

五貫文　六月二日、閏五、廿日定、　春日社領　泉州深井段錢

貳貫文　六、三日、閏納、五、廿日定、　松尾社領　攝州山本庄且段錢

九貫文（六月自七日、至十一月九日定、）　鴨御社領（越前國志津庄段錢）

壹貫文（六、十四日定、進狀アリ、請取出、）　日吉社領近江國（小幡位段錢）

貳拾三貫六百文（六月廿三日、同廿一日定、）　八幡宮領（丹波國篠村庄所々段錢）

〔春日社舊記〕應令春日社司進上證文社領大和國伴田庄被免除主水司氷馬役事

右得彼社司等去月卅日解狀偁、謹撿按內、大明神垂跡之後、以彼庄田割置供祭料、調備來尙矣、隨代代宰吏、且口神威、且仰舊跡、不入國使、不宛課臨時雜役、而郡司則貞寄事於宣旨、忽背先例、宛氷駄、押取質物、所行之旨、科條不輕、就中當國八幡宮寺領九箇所、諸寺庄薗、其數不勝計、皆不帶免除之證驗、猥以本所之威勢、不勤件役、加之當社事、以先例不可勤氷馬之由代々被下長者宣、敢無牢籠、望請天裁早任先例、且停止件役、糺返質物、且被召誡則貞身者、將仰大明神之嚴威、奉祈百年之寶祚者、左中辨藤原朝臣爲隆傳宣、權中納言藤原朝臣宗忠宣、奉勅宜令彼社進上免除證文者、

天永三年七月六日　　左大史小槻宿禰在判奉

〔常陸國吉田神社文書〕左辨官下　常陸國吉田社

雜事三ヶ條

一應令免除同社領勅事國役等事

右得同前解狀（〇承安元年三月十九日社司解狀）云、謹撿案內、神田者不輸之地、全非公田之儀、神人者不課之民、更非等巡之人、然者勅事國役、不可宛課、而伊勢二所大神宮役夫工、造內裏大嘗會之時、猥令譴責條、左道之甚也、望請官裁欲被免除勅事國役者、同奉勅依請者、〇中略

承安二年十二月廿九日　　大史紀朝臣

右中辨藤原朝臣

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮護國寺

應停止當宮御領充課伊勢大神宮役夫工雜事米事

右得彼宮寺去三月廿日奏狀偁、謹撿案內、夫石淸水八幡宮者、鎭護國家宗廟也、因玆先々不充雜事、而近來國司猥巧新儀、或稱加納、或號出作、充課役、煩此神領之間、當宮用途、闕及闕怠、宮寺訴訟何事如之哉、望請天恩永可被停止新儀課役之由、成賜當時鳳詔、欲備後代證驗而已者、中納言藤原朝臣宣、奉勅依請者、宮寺宜承知依宣行之、

承安三年五月一日

少辨藤原朝臣在判

右大史中原朝臣在判

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年二月十日丁亥、於安房國洲崎神領、在廳等成煩由、有神主等之訴、仍可停止之由、今日所令下知給也、

下　須宮神官等

可早令安房國須宮免除萬雜公事事

右件宮萬雜公事者、先日御奉免畢、重神官等訴申事、實者尤不敵也、早可令免除之狀如件、仍在廳等宜承知勿違失、

治承五年二月　日

〔尺素往來〕役夫工米事、諸國平均先例不可違歟、但於三社神領、及三代御起請之地者、不可被准自餘也、

〔當宮緣事抄〕當社領信濃國小谷別宮、外宮役夫工米事、可被免除之由被仰遣宮所候畢、可被存其旨者、依御氣色執達如件、

文永四　五月十三日

右中辨在判

八幡撿校法印御房

徭役

〔鹿嶋神宮古文書〕常陸國鹿嶋社領内御□□□所々造伊勢大神宮料役夫工米事

右當役者、依爲朝家無雙之重事、不嫌之社領三代御起請之地、不論先例之勤否證文有無平均可致沙汰之由、代々雖被定下、自往古無件役勤仕例之由、於御奉行所被申子細之上者、任先例於□□□社家方一圓下地進止之地、不可懸催此役、一向所避進也、至地頭等下地進退之所々、及公田分者、不可有□□□并社家之綺、就地頭方可致沙汰也、兩方相互爲令停止向後之違亂、避狀如件、

正應二年五月六日　造大神宮所使右衞門尉兼定在判

〔普廣院殿元服記〕正長二年三月廿九日、今日伺事、可被聞食始之由俄被仰出之、披露之當番兩人申次之、秀藤披露篇目、

住吉社領播磨國所々御即位段錢事

免除證文分明之上者、可止催促之旨、被仰出之、

〔當宮緣事抄〕石淸水八幡宮寺諸國神領目錄在別紙事、段錢以下諸公事、并守護役、人夫傳馬等、向後所令免除之狀如件、

應永十九年五月十日　內大臣源朝臣御判〇足利義持

〔類聚三代格　一〕太政官符

應令神戸百姓修理神社事

右奉勅、諸國神戸、例多課丁、供神之外不赴公役、宜役其身修理神社、隨破且修、莫致大損、國司每年巡撿修造、若不遵改、更致緩怠者、隨狀科祓、

弘仁二年九月廿三日

〔延喜式　三臨時祭〕凡祈年、月次、神今食、新嘗等祭料、楯板置座木等之類、仰五畿內諸國神戸百姓、令採進之、

凡年中御卜料、婆波加木皮者、仰大和國有封社、令採進之、

凡出雲國所進御富岐玉六十連、（三時大殿祭料卅六連、臨時廿四連、）每年十月以前、令意宇郡神戸玉作氏造備、差使進上、

〔延喜式二十二民部〕凡封戸、以正丁四人、中男一人、爲一戸、率租每戸以四十束爲限、每鄕滿課口二百人、中男五十人、租稻二千束、若不滿此數、通計國內令塡、但遭損之年、不總通計滿給、（其田分封五十戸亦准此、）其神○○○寺封丁○、依五六丁之例、准人封不可增減、

凡神○○○寺封丁○、不得點衞士仕丁事力、

〔類聚三代格一〕太政官符

不可割取伊勢大神宮神戸百姓事

右神祇官去閏十月廿九日解偁、大和、伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江等國司論云、去延曆廿年七月二日格云、撿案內、太政官四月十四日符偁、自今以後、神戸限以二町、田租定十五束、（○町正丁及田租）者、丁減物少、供祭應乏、宜天下諸社同共改張、丁幷租數一依舊例、又養老七年格云、神戸增益卽減之、死損卽加之者、宜後有增丁隨減之、但至于死損取彼加此、於事不穩、宜勿更加者、仍案彼延曆廿年四月十四日格偁、大神宮封戸非改減之限、而件國神戸百姓愁云、神戸有死、須依實除帳、而國司勘返不除帳、名雖附帳、實無其身、因玆丁數空過五六丁、爰國司號除丁、卽出自神戸貫於官戸、至于課役皆悉徵納、若致延怠、遂加決罸、神事雖濟職此之由、望請件大神宮封戸丁、雖有餘剩永無減省、以供神宮、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅凡大神宮事異於諸社、宜依延曆廿年四月十四日格、永無改減、若有乖忤科違勅罪、

貞觀二年十一月九日

〔類聚三代格十五〕勅

一凡田租取令前束、擬令內把、令條段租、其實猶益、朕念百姓有食萬條卽成、民之豐饒猶同充倉、宜

段租一束五把、町租一十五束、

慶雲三年九月廿日

〔類聚三代格八〕太政官符

應同率神戸官戸課丁事

右得紀伊國解偁、撿案内、官戸課丁少數、常煩所司勘出、尋由緒、官戸悉爲神戸百姓之所致也、何者此國有封神社總十一處、所充封戸二百卅二烟、可有正丁千二百七十六人、〇一戸正丁五人率此則依式毎戸以五六人所率之數也、而今神戸所領正丁之數、或戸十五六人、或戸二三十人、官戸所有課丁之數、或戸僅一二人、或戸曾無課丁、詳撿其由、神戸課役頗輕、官戸輸貢尤重、因斯脫彼重課、入此輕役、謹案式云、戸以正丁五六人爲一戸、其神寺封丁、若有增益者、隨即減之、死損者不須更加、而國造幷禰宜祝等、寄事神祇、曾無改正、積慣之漸、忽然難變、望請不論神戸官戸、總計國内課丁、毎戸同率貫附、辨定之後若有輙改替者、尋其所由、依法科罪、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

寛平六年六月一日

〔延喜式二十二民部〕凡伊勢齋宮仕丁卅八人以神郡幷神戸百姓等充之、

〔家忠日記追加十二〕天正十九年十一月、大神君〇徳川家康關左八州社領の印を賜る、其内に上總國市原郡八幡宮に御自筆を以て賜はる、

寄進　八幡宮　上總國百五十石事

右如先規令寄附之訖、守此旨、彌抽武運長久之精誠、殊可守祭禮之状如件、

天正十九年辛卯十一月　日　朱印

上總國市原庄　八幡郷　そうしや　きくま　村上　やまき　ごゐ　府中　ごしよ

〔大猷院殿御實紀六十九〕慶安元年三月十七日、先代御朱印たまはらざる寺社領、こたびその願に

守護不入

より新にたまふもの百八十二、

〔大猷院殿御實紀七十二〕慶安元年十月十七日、諸國寺社御朱印たまはる所三百三十四通、十八日けふ寺社に頒賜せらるゝ御朱印三百四十八通、十九日寺社御朱印三百五十四通分たる、

〔憲教類典寺社四ノ十四上〕寛文五乙巳年三月朔日

覺

一御當家御三代之御朱印所持之寺社之ともがらハ勿論、御兩代之御朱印頂戴之分ハ、不依寺社領之高下、継目之御朱印可被下事、

一御一代之御朱印、頂戴之寺社領ハ、先五拾石以上之分、御朱印可被下事、

一寺社領無之境内計之御朱印雖有之、於一宗之本寺者、継目之御朱印可被下事、

右之通被仰出之間、面々領分ニ有之寺社之輩、今年六月中、江戸へ先御代之御朱印持參仕候樣可被相觸候、此紙面之外ハ、重而可爲御沙汰之間、不及參府旨、堅く可申渡者也、

〔憲教類典寺社四ノ十四下〕寶暦十庚辰年八月十八日

松平攝津守殿御渡

覺

一御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少ニ、境内計之雖爲御朱印、於今所持者、御朱印可被下之間、御領私領に有之寺社領御朱印に寫を差添、來酉正月より三月迄之内江戸へ致持參、阿部伊豫守戸田采女正殿へ相達候樣ニ、可被觸之候、以上、

〔加茂別雷神社文書〕□茂當社領石見國久永□守護所使入部、幷高野山流人雜事間事、社解[illegible]具如此、子細狀所詮如、永元二年十月十五日關東御下知狀案者、故右大將殿〇源頼朝御時御寄進之後、一向社家進止之地也、停止守護所之沙汰、於大番侍者、隨先例之勤、可有左右、至于其外課役者、可令免許、

云云者、承元二年被レ下二御下知一候後、無レ被二毀破一之狀者、任二彼狀之趣一、且停二止使者入部一、且可レ免二許流人雜
事一之狀如レ件、

寬元二年六月三日　　相模守花押〇北條時房

守護代

〔玄以法印下知狀〕賀茂社領境內六郷、幷所々散在等事、從二先規一三社之內爲二守護使不入一、度々御下知
被レ帶二御朱印一、殊秀吉被レ遣二御折紙一之上者、山林竹木人足非分課役以下、如二先々一令二停止一之狀如レ件、

天正十一十二月廿三日

賀茂總中

〔武家嚴制錄十一〕伊勢內宮御條目

定

一伊勢大神宮領之內、可レ爲二守護使不入一事、

附諸法度、任二先規一年寄共可二申付一事、

寬永十二年七月廿八日

〔御成敗式目追加〕一鎭西爲二宗神領一事、甲乙人等、稱二沽却質券之地一、猥管領之由有二其聞一、尋二明子細一、如レ舊
爲レ被二返付一、所レ差二遣明石民部大夫行宗、長田左衛門尉敎經、兵庫助三郞政行一也、

〔新御式目〕弘安七、五、廿、　卅八箇條〇中略

九國社領、止二甲乙人賣買一、如レ舊可レ致二沙汰一事、

〔新加制式〕一可レ崇二神社一、敬二寺塔一事〇中略

寺社領私令二沽却一、太以零落之基乎、尋二究之一、速可レ被レ召二放件地一、

〔憲敎類典四ノ四十上寺社〕寬文五乙巳年七月十一日

諸社神職御條目

一神領一切不令賣買事

附不可入于質物事

右條々堅く可守之、若違犯之族有之ニおいてハ、隨科之輕重可沙汰者也、

御朱印

神領交換

〔寶暦集成綸錄十九寺社〕寶暦七丑年十二月

御勘定奉行へ

日光御神領之内、當夏洪水ニ而損毛之分、物成米御金ニ而金百八拾兩除當年之分被遣之候、且永荒地之儀ハ、御引替可被成旨被仰出候、替地之儀ハ、來春ニ至、懸吟味相伺候樣、御勘定奉行へ申渡候間、被得其意、上野執當へ可被達候、尤御勘定奉行可被談候、

神領訴訟

〔長秋記〕長承元年五月十五日甲戌、秉燭大辨開文讀之、鴨御祖社司與吉田社司相論御供田四段間、吉田社司申云、件田粟田左大臣爲長者、以私領施當社、隨長和四年可爲社領之由口宣符、數百歲間、無牢籠所領掌也、其旨見所進長和官符、而鴨御祖社司乖此旨、始自去年致其妨云々、鴨司申云、寬仁二年分一郡所被寄進當社、其中雖有神社佛寺領、非官省符所者、尙於官物三斗辨當社、於地子辨本所也、而件吉田領、本官省符由不見、仍所徵官物三斗也、仍進其官符案等者、右宰相中將成通朝臣發語定申云、以兩方所進文書被下法家、理非勘決後可被裁許歟、內大臣宗忠○藤原、民部卿忠教、新大納言實行、右衛門督實能、左兵衛督宗輔、中宮權大夫忠宗、左宰相中將宗能、左大辨實光等皆同之、下官師時○源獨申云、所論賀茂吉田兩社司、各皆於神威所進長和寬仁二箇符共出自綸言、理非難決、左右申之、先於官底對問論人、比按官符、其後可被裁許歟、左兵衛督定申云、吉田社司之所進者、左大辨讀之書之、長和寫官符張坪奉免、其狀云、粟田左大臣爲長者時、

分私領所寄進也者、鴨御祖社司所進寛仁二年官符、一郡皆進、其狀云、於社領寺領、幷氷室寄人、右近馬場守等作田、比叡山四至等免除、其外雖私人領、於三代國司免除所、非自專云々、如此狀云、雖有寛仁一郡所進符、於長和奉免地、吉田社可領知歟、倩按、鴨司申狀云、所免之官省符不輸田也、於地子領地、任官符當社徵三斗官物例也者、此事尤可被對決、傍例顯然歟、

長和官符、粟田左大臣長者云々、件人不分明、不審也、符按皆在官底、被比校時、眞僞無其隱歟、仍所申此旨也、

諸卿無心倂在吉田方、皆是爲氏人、其程可然歟、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年九月十七日庚申、就關東御寄進石清水、住吉、廣田等御領訴訟事、社解令到來者、不經宿可申沙汰之由、被仰問注所云々、

〔新編追加雜務〕神社佛寺

一依爲神領、不依年紀、付理非被裁許事、田河左衞門尉隆村與爲胤、相論伊勢國麻生浦事、爲周防兵衞大夫泰忠之奉行、弘安八年二月廿八日、如爲胤所給御下知、隆村帶貞永、嘉禎、正應、仁治、建長、正嘉、關東六波羅御下知等、知行經年序之間、如式目者、雖難被改替、以非據領掌、寄事於年紀、押領之條、輙難被許容之間、所被停止隆村領地也云々、

〔八坂神社文書〕元弘以來、被收公祇園社領事、如元不可有相違之狀如件、

建武三年七月十八日　花押（○足利尊氏）

〔建武以來追加〕一本所寺社領事

方々施行停滯、頭人幷奉行緩怠、虛經廿ヶ日者、任本條、宜經直訴、嚴密遵行之、可申左右之由、差日限可仰本引付方、但有限日數已前、諸方雜掌亦猥及濫訴者、暫可被閣彼訴訟也、

〔建武以來追加〕一寺社本所領可被返付條々事（文和四、八、廿二、御評定山城國分事）

神領雜載

右於濫妨國々者、可爲半濟、但於所務者、可爲本所進止矣、至靜謐國者、悉急速可被打渡之、

〔建武以來追加〕意見

一近年中給神領御判地、依本主訴訟、可被返附否事、就訴訟御糺明之處、於理運之儀者、雖爲神領被返下凡人之段、先蹤在之歟、然者任證文之旨、宜有御成敗乎、

文明元年六月廿一日　左衛門尉貞頼〈○以下十一人略〉

〔大猷院殿御實紀二十二〕寛永十年六月四日、伊勢國二見浦二千百石餘の地を、皇大神宮の神厨に充らる、この地、往古は神厨ありしが、六十年ばかり前より、九鬼が所領となりしかば、神人等年々愁訴して絶えず、然るにこたび九鬼長門守守隆と、内藤伊賀守忠重轉封によりて、かの地へ撿斷使大目付水野河内守守信、使番土屋市之丞勝正を下され、査覈せしめられしに、神人連年愁訴する所、たがひなきがゆゑなり、よて令せらるゝは、こたび二見郷六村を内外兩宮神田に寄せ給ふにより、神事怠慢なくつとむべし、江村、三津村、小田原村は内宮に屬し、今一宮村、西村、庄村は外宮に屬せしめらるれば、諸役隣郷の例につとむべし、神事つとむる所こたび造營せらるれば、此後は六村より修理すべし、山林竹木みだりに伐とるべからず、されど修理のときは、費用に應じ伐とるべし、〈○下略〉

〔大神宮諸雜事記一〕養老六年〈癸亥〉三月三日、大和國宇陀神戸司進於神祇官申文、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〈○建保元年〉十二月十八日甲辰、今日修理亮〈泰時〉以伊豆國阿多美郷地頭職、令寄走湯山權現給、是元者件神領也、而頃年仁田四郎忠常令領之、被滅亡之後、匠作拜領之給訖、根本由緒、今朝始聞之、卽爲放生之地、永所被寄進也、

〔新御式目〕弘安七、五、廿七評、

寺社御寄進所領事

令興行佛事神事、爲不退轉御祈禱、被奉寄候處、別當神主一向知行之、不及其沙汰云々、早尋明年貢之分限、可被宛置件之用途等鎌倉中、急速可申沙汰之由可仰引付、〇又見新追加

〔後愚昧記〕貞治五年八月十八日、攝州幷若州寺社本所領等事、守護未補之間、下遣京都奉行人、各一同沙汰付云々、

〔賀茂社古代庄園御厨〕近江國邇保庄、越中國倉垣庄、如元所被付社家也、致知行、可全神用者、天氣如此、悉之以狀、

延文五年十二月廿五日　　左少辨在判

鴨禰宜館

〔賀茂社古代庄園御厨〕請申鴨大神宮御領土佐國津野本庄所務職事

右當庄所務職事、對津野地頭備前守繁高、被成御契約上者、每年公用捌拾貫文內、三月中仁肆十貫文、十月中仁肆拾貫文無未進懈怠、可致其沙汰也、但於庄內合戰出來者、可有半濟之沙汰、於于國動亂出來者、可三分二之沙汰、如此相互堅契約申上者、若云月宛分、云總員數、相懸公用後年者、改所務雖有契約、他人不可申一言子細者也、且可被申行、別而御罪科御沙汰也、仍爲後日契狀如件、

應安五年九月八日　　備前守繁高在判

〔加茂御祖皇大神宮諸國神戶記六〕

美濃國　梅原庄

文明三年五月祠官言上狀云、美濃梅原庄代官土岐被官齋藤彌次郎請口之分、京著之定、三百九十餘貫之處、亂世以來、公用不致沙汰者也、但自地下直進物兩季神服、幷長日人夫等事者、于今令運上訖、而爲請取彼神服、社使每年兩度下向之次、令催促公用之處、彼內壹貳千匹之分、可致其沙汰之由雖申、猶以令難澁之、最少分致沙汰之歟、雖然使者路錢、幷在庄公用等仁引取間、不全社納之者也、神

神職分領

服以下、於運上之通路者、自管領佐々木故大膳大夫方〔江〕被加成敗之間、于今無爲者也、

〔神鳳抄〕諸神田注進文〇建久四年在京國中略

多氣郡

一段　竝宮御筒作內人德成勞

飯野郡

二段　竝宮御筒作內人德成勞〇中略

安濃郡

一町一段在安西郡、竝宮大內人德元勞、

重昌神田、宮守子良神田五段、在同郡、同宮二內人時久勞、〇中略

中萬神田十一町之內、二町五段之宮守子良神田、

五段在同郡、瀧原宮二內人武光勞、七段半字等小恒內宮守子良神田、

一町九段百八十步、在同郡、村主鄕二段、爲忠神田、宮守衣糧田、

一町二段在同郡、字草生神田三町五段、在同郡、瀧原大內人勞、當時有公用貢〇中略

一町七段百八十步、大物忌父氏弘子良糧料、

二町在安東郡、號樋食內人末澤勞、

二町五段在安東郡、大物忌父季貞神主子良衣糧料、

一町五段在安西〇西下一本有東字郡、同季貞神主子良糧料、

二町七段在安西郡同助永勞、

三町七段在安西郡、大物忌父光兼子良衣糧料、

三町安東郡、一町安西郡、二町號淸祓神田、同光兼沙汰、

一町四段在安西郡、大物忌父氏弘、子良衣粮料、
五段在同郡、同物忌氏弘勞、
二町在安西郡、一禰宜勞、
二町在同郡、四禰宜勞、
二町在安東郡、三禰宜勞、
四町在安東郡、山向内人貞次勞、〇下略

〔權別當宗淸法印立願文〕敬白
立願事
一別當已下可支配莊園事
別當　四箇所
權別當三人　各三箇所
修理別當二人　各二箇所
俗別當神主　各一箇所
正權三綱等　各一箇所
山上執行　一箇所 加三綱略之
已上卅五箇所 加二執行一卅六箇所
此外官符少別當人別一箇所〇中略
建保五年正月廿七日　弟子石淸水護國寺權別當法印大和尚位宗淸

〔日吉社社領註進記〕日吉社社領
一蒲生上郡　狛月谷神田

小比叡禰宜道貞奉行
一高島南北散在本神田
社司等配分知行
右往古重邑神領等、社家知行所々大概注進如斯、此外所務各別之地、山洛借綱衆徒、幷甲乙人等知行神領社領等多之歟、非社家進止之上、云在所云領主、不存知之間不能勒矣、仍注進如件、
元應元年十月　日

小比叡社
神主　従四位下祝部宿禰孝昌
祝　従四位下祝部宿禰昌宗
禰宜　従四位下祝部宿禰道貞各在判

大社
神主前大宮大輔従四位上祝部宿禰成久
祝　従四位上祝部宿禰匡長
禰宜　正四位下祝部宿禰俊貞各在判○部略

〔加茂御祖皇大神宮諸国神戸記入〕因幡国土師庄
契約
社司分領因幡國土師庄間事
右當社之內、上司職者、爲貴布禰權禰宜殿御分領、御知行無異論、將又於下司職者、爲社家分領、當知行無相違、爰御來事、依有所存、重經奏聞、以折中之儀、令中和與者、彼御來事、於半分者、可有御知行、殘至半分者、社家可令知行者也、此上自他更不可有違失、然者停止公方訴訟、以和與之儀、相互申不□

勅裁、向後可レ令二知行一矣、若如レ此口令レ申二契約一、令レ改二變一者、可レ蒙二當社下上、河合、貴布禰御罰一者也、仍爲二後日一
契約狀如レ件、

貞治三年九月廿二日

鴨祐家判

古事類苑

神祇部十二

氏神

古事類苑

神祇部十二

氏神

氏神トハ氏ノ祖神ノ義ニシテ、之ヲウヂガミ、又ウヂノカミト云ヒ、之ヲ祀レル社ヲウヂノヤシロト云ヘリ、凡諸神ノ裔ニハ各其氏アリ、諸氏ノ人各同族ヲ稱シテ之ヲ氏人ト云ヒ、氏人ヲ統治スルモノ、之ヲ氏ノ長者ト云フ、故ニ祭祀アルトキハ、氏ノ長者タルモノ、必ズ氏人ヲ率キテ、各其祖神ヲ祭ル、例ヘバ中臣氏ハ其祖天兒屋命ヲ祭リ、忌部氏ハ其祖天太玉命ヲ祭リテ氏神トナセルノ類是ナリ、サレド又是ヨリ一轉シテ、ソノ祖神ナラザルモ殊ナル由緒アル神ヲバ、汎ク之ヲ氏神ト稱スルモノアリ、卽チ藤原氏ハ春日神社ノ外ニ、鹿嶋香取ノ二宮ヲモ其氏神トナセルガ如キ是ナリ、鹿嶋宮ハ武甕槌神ヲ祭リ、香取宮ハ經津主神ヲ祭リテ、共ニ藤原氏ノ祖神ニアラズ、其相殿ニハ天兒屋命ヲ祭レドモ、此ハ後ニ河内國平岡神社ヨリ移シ奉レルナリ、然ルニ其以前ヨリ鹿嶋香取ノ二神ヲバ氏神ト稱シテ、却テ平岡神社ヲバ氏神トナサヾルナリ、其他尾張氏ノ熱田宮ニ於ケル、橘氏ノ梅宮ニ於ケル、又源平兩氏等ノ平野社ニ於ケルガ如キモ亦此類ナリ、

凡氏神ノ祭祀ハ、毎年二月、四月、十一月ニ、氏ノ長者タルモノ、各其氏人ヲ集ヘテ行フモノニシテ、其供物作法等大概他ノ諸神ノ祭式ト異ナルコトナク、或ハ百花ヲ供シ、或ハ神馬ヲ獻ジテ以テ其神靈ヲ慰シ、一族安穩子孫繁榮等ヲ祈ルヲ以テ常トセリ、而シテ其特ニ厚キモ

ノニ至リテハ、前年ノ末ヨリ潔齋シテ飲食ヲ愼ムモノアリ、此ノ如キハ實ニ其祖先ヲ念フノ至情溢レテ此ニ至リシモノニシテ、他邦ニ於テハ多ク其比ヲ見ザル所ナリトス、

抑氏神ノ史乘ニ見エタルハ、舊事紀ニ崇神天皇ノ時、物部氏ガ石上宮ヲ崇メテ其氏神ト爲セルヲ以テ始トス、光仁天皇ノ朝、藤原良繼ノ病ミシ時、其氏神鹿嶋香取ノ二宮ニ、朝廷ヨリ神階ヲ上リテ、爲ニ之ヲ禱リ給ヒ、淳和天皇ノ天長元年、紀氏ノ氏神ヲ以テ官幣ニ預ラシメ、清和天皇ノ貞觀九年、伴氏ノ氏神ヲ以テ官社ニ列セラル、此後、陽成、光孝、宇多、醍醐ノ四天皇ノ間、氏神ニハ斯ル特典ニ預リ給フモノ少シトセズ、然レドモ多クハ皇家ノ外戚、若クハ其族類ノ祖神ノ外ニ出デズ、此時代ニ在リテハ氏神ノ祭祀モ猶舊ニ仍リテ盛ニ之ヲ行ヒシカバ、皇家モ亦甚ク之ヲ好シ給ヒ、或ハ之ニ社地ヲ賜ヒテ以テ祖神ヲ祀ル處ト爲サシメ、或ハ之ニ祭田ヲ賜ヒテ以テ春秋祭祀ノ費ニ充テシメ、而シテ其祭時ニ當リテハ、氏人五位以上ノモノハ特ニ官符ヲ待タズシテ京外ニ出ヅルコトヲ聽シ、又正稅ヲ賜ヒテ以テ之ガ行旅ノ資ニ當テ給フガ如キコトアリ、亦以テ當時ニ在リテ、上下一同ニ其祖先ノ祭祀ヲ重ズルノ情ノ至テ厚カリシヲ見ルベキナリ、

後世ニ及ビテハ、其祖先ノ神ニモアラズ、又其氏族ニ由緒アルニモアラザルモノヲ尊崇シテ氏神ト稱シ、更ニ一轉シテ各地ノ產土神ヲ以テ其氏神ト爲シ、其地ニ生ルヽモノヲ以テ氏子ト稱スルニ至リ、古ノ謂ユル氏人ノ制大ニ變ゼリ、猶氏子ノ事ハ、產土神篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

名稱

〔節用集字〕氏神(ウヂガミ)

〔增補下學集 神祇上之一〕氏神(ウヂガミ)

〔類聚名物考 神祇五〕氏神　うぢがみ　うぢのかみ

〔神道名目類聚抄神祇四〕氏神（ウヂガミ） 氏神トハ姓氏ノ始祖ノ神ヲ云、其苗裔ヲ氏子ト云、藤原、中臣、卜部ハ春日神ヲ氏神トシ、橘氏ハ梅宮、源氏ハ石清水八幡宮ヲ氏神トスルノ類、是亦所以アリ、世俗產神（ウブカミ）ヲ以、氏神ト云ハアヤマリナリ、

〔倭訓栞前編四〕うぢがみ 舊事紀に氏神と見えたり、祖先の神をいふ也、よて氏子と對しいへり、產土神とひとつに必得るはわしゝ、

〔類聚名物考神祇十一〕氏社 うぢのやしろ

姓氏につきてあがむる處の神社は、藤原氏は春日をもて氏社とするなり、氏寺もまた同じ、

〔先代舊事本紀天孫五〕伊香色雄命

此命、春日宮御宇天皇〈○開化〉御世、以爲大臣、磯城瑞籬宮御宇天皇〈○崇神〉御世、詔大臣、爲班神物、定天社國社、以物部八十手所作祭神之物、祭八十萬群神之時、遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑、則天祖授饒速日尊、自天受來天璽瑞寶同共藏齋、號曰石上大神、以爲國家、亦爲氏神、崇祠爲鎭、則皇后大臣奉齋神宮、

〔大日本史神祇一〕按、石上社、本祭布都御魂劍、不宜稱物部氏神、然并祭其祖神瑞寶於本社、故稱氏神乎、附以備考、

〇按ズルニ、氏神ノ一氏ノ祖神ノ謂ナルコトハ既ニ解題ニ言ヘルガ如シ、然レドモ古來祖先ナラザル神ヲモ稱シテ、氏神トスルコトノ殊ニ多キヲ視レバ、氏神トハ原來一氏累世舉リテ尊崇スル神ニシテ、只ニ其祖先ノ神ヲノミ稱スルニハアラザルカ、姑ク附シテ後考ヲ待ツ、

〔今昔物語十一〕聖德太子建天王寺語第廿一

今昔聖德太子、此朝ニ生レ給ヒテ、佛法ヲ弘メテ、此ノ國ノ人ヲ利益セムト思給、〈○中略〉守屋ノ大臣ト云フ者有テ、此事ヲ不請シテ天皇ニ佛法崇ムル事ヲ申止ム、是ニ依テ太子守屋ト中惡ク成給

ヒメ、蘇我ノ大臣〇馬子ト云フ人ヲ語ヒテ守屋ヲ責罰テ、國ノ內ニ佛法ヲ弘メムト謀給フ、〇中略其ニ軍ヲ引將テ守屋ガ家ニ行テ責ル、〇中略守屋大ナル欅ノ木ニ登テ、誓テ物部ノ氏ノ大神ニ祈請シテ箭ヲ放ツ、其箭太子ノ鐙ニ當テ落ヌ、

〔聖德太子傳曆上〕用明天皇二年秋七月、大臣〇蘇我馬子與諸皇子率軍討大連、〇物部守屋又大伴咋子連、阿倍臣、平群神手臣等、率兵從志紀郡會于澁川、共伐大連、於是大連部率子弟及奴等、築稻城而接戰、其軍强盛、塡家溢野、皇軍恐怖、三廻却還、是時太子生年十六隨大軍後自忖曰、非願難濟、乃命軍允秦造川勝、取白膠木、刻作四天王像、置於頂髮、一云置軍鋒立而發願曰、今使我勝敵、必奉爲護世四天王起立寺塔、大臣又發願如此、進軍相戰、太子復攻、此時大連登大榎木、又云、昇朴枝間、誓放物部府都大明神之矢、中太子鐙、太子命舍人跡見赤檮、放四天王之矢、定弓和贊忍當遠遠、中大連胸、倒墜木、賊衆躁亂、川勝斬大連頸、〇中略三小將軍直入大連家、子孫資財田宅皆爲寺分、

〔大鏡裏書〕藤氏之社事
鹿嶋社大職冠於常陸國誕生、仍祝於此所、
春日社奈良都之時祝之、稱德天皇神護景雲二年戊申、藤氏四所明神在祝春日山、
大原野社長岡京都(桓武)之時祝之、文德天皇仁壽元年二月二日、始大原野祭、
吉田社平安京都(桓武)之時祝之、一條院御宇永延元年四月始吉田祭、元中納言山陰卿一家所祭也、

〔廿二社本緣〕春日事
此神ノ社ハ、天兒屋根命仁坐ス、藤原氏大中臣氏等ノ祖神也、本社ハ河內國平岡也、〇中略常社鎭坐ハ神護景雲年中ノ事也、〇中略常陸仁常陸ノ自鹿嶋遷給ト云傳ヘタリ、而ニ春日祭ノ宣命仁鹿嶋仁坐ス武甕槌神、香取仁坐ス齋主神、平岡仁坐ス天兒屋根命ノ神、姫大明神云々、然者本社皆各別也、鹿嶋神古今雙甲遷座給テ、天兒屋根神平岡ヨリ本社ニ坐スト見タリ、但所々ニ四所坐歟、鹿嶋仁其社各

各也、社家秘之、香取仁和四所乃御殿分明也、然者藤氏乃祖和平岡仁坐す、余乃三所和寄宿神仁天坐也、依天神代乃幽契仁寄宿志給歟、○中略姫大神等和藤氏乃祖神仁和不坐云惠登所々仁天寄宿志給計留也、如此乃事、諸社仁有留其類者也、

〔春日權現驗記〕一大和國平群郡夜摩郷に一の靈地あり、竹林殿と號す、春日大明神御影向の所也、○中略正暦三年のころ藤原吉兼が夢に、家の西南の竹林のうへに、貴女飛來ての給やう、我は汝が氏口春日大明神也、家たかく竹しげくして、竹林園に似たるゆゑに、この所に來宿す、もし竹しげくさかりならば、汝が子孫繁昌すべしと被仰と見けり、やがて社をたてて神をあがめたてまつりて、ながく神竹をきるべからざるよし起請をかきけり、いまに修竹いよ〳〵か口して、梁園にことならずとなん、

〔權記〕長保二年正月廿八日丙午、早旦參内、此日藏人頭正光朝臣、奉勅詔女御○一條后藤原彰子御曹司傳之、左大臣○藤原道長立后宣命日、可令擇申之由、先日内々以此氣色可告大臣之由蒙勅命、然而申自院被傳仰可有便宜之由、上諾之、大臣内々依院(圓融)仰所被承也、今日依吉日露所被仰也、此事去冬之末、太后崩給以來、度々催奏其旨、當時所坐藤氏皇后、東三條院○圓融后詮子皇后宮○圓融后遵子中宮○一條后定子皆依出家無勤氏祀、職納之物可充神事、已有其數、然而入道之後、不勤其事、雖帶后位、雖有納物、如尸祿素飡之臣、徒貪私用、空費公物、論之朝政、未有何益、度々依恠、所司卜申神事違例之由、疑慮所至、恐在如此之漸歟、永祚中有四后、是漢哀亂代之例也、初立之議雖有謗毀、例致爰出、准據無難歟、況當時所在二后也、今加其一、令勤神事、有何事哉、我朝神國也、以神事可爲先、中宮雖爲正妃、已致出家入道、隨不勤神事、依有殊私之恩、無止職號、全納封戸也、重立妃爲后、令掌氏祭、可宜歟、又大原野祭、尋其濫觴、在於后宮之所祈、而當時二后共無所勤、左大臣依氏長者獨勤其祭、雖不被闕怠、恐非神明之本意歟、是亦可謂神事之違例、小臣○藤原行成以藤氏末葉爲思氏祭所申也、於其可否、只在聖擇、此間所奏雖多、不能悉詳之、

〔榮花物語二十八若水〕かゝるほどに、大宮の御前〇三條后藤原妍子あやしうなやましうおぼされて、ともすればうちふさせ給ふ、〇中略かくて四五日にならせ給ぬ、關白殿〇后兄藤原頼通參らせ給へるに、なぞ御氣色のくるしげにおはしますぞと申させ給へば、内侍のすけ御前にて、此四五日にあらせ給ぬ、御かぜにやとて、朴などきこしめせど、おこたらせ給はずと申させ給へば、いとふびんなる御事にこそとて、さぶらひめして、守道めしに遣はすべきよし仰らる、さてまゐりたれば、かう〳〵おはしますよしをとはせ給へば、御氏神のたゝりにや、つちのけなど申せば、御前にて御祓つかうまつる、

〔續古事談一王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和漢ノ才智ヲキハメサセ給フノミニアラズ、天下ノ政ヲヨク〳〵キヽオカセ給テ、御即位ノ後、サマ〴〵ノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功ト云事長ク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクリタレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大二條殿〇藤原敎通マゲテ申サセ給ケルニ、事カタクシテタビ〳〵ニナリケレバ、主上逆鱗ニオヨビテ、仰ラレテ云ク、關白攝政ノオモクオソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハンゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ事ノ外ニ御ムヅカリアリケレバ、殿座ヲタチテイデサセ給フトテ、大聲ヲハナチテノタマハク、藤氏ノ上達部ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハケフウセハテヌルゾトイヒカケテイデ給ケレバ、氏ノ公卿マコトニモ一人モノコラズ、ミナ座ヲタチテ殿ノ御トモニイデケレバ、事ガラオビタヾシクゾアリケル、主上コレヲキコシメシテ、關白殿幷ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ、南圓堂ノ成功ヲユルサレニケリ、殿ノ御威モ、君ノ御心バヘモアラハレテ、時ニトリテイミジキ事ニテナムアリケル、

〔中右記〕大治五年二月十日、春日使立日也、依例奉幣、〇中略右少辨示送云、春日祭分配辨闕類也、假病

者、萬死一生、依不能參向、又左中辨實光不堪騎馬、兼日有仰者、以舟可下向也、於今者藤氏辨皆以故障、早々可參向由、以中將仰下也、凡一日從奈良上道之後、所勞無術之由申了、但重又被追下ハ、共人一人不可叶、馬又不給、一日下向之間、萬事屈了者、入夜從殿下〇藤原忠通被仰云、宗成必可參向也、氏社祭不可默而止、返々不便也、申云、給御馬一匹可追下由申了、又被仰云、馬辨共人一人可遣、早可下也者、申承了由告右少辨許了、或說顯頼下向ハ、御寺〇興福寺大衆一旦可問事有之由風聞、依顯頼辭了云云、件事不知何事、尤不便歟、右少辨共人七人出來、誠以神妙歟、

〔台記〕久壽二年九月廿八日壬申、一昨日禪閤〇藤原忠實召泰親占內覽遲々事、占申曰、依神事違例、氏神成祟、□□謝祟、來十月、及明年正月節中、可有祈禱驗、乃今旦奉白妙幣及馬一匹於春日、用吉服、使憲忠有告文、

維久壽二年歲次乙亥九月乙巳朔廿八日壬申吉日良辰仁、掛毛恐幾春日大明神乃瑞乃廣前留、從一位藤原朝臣〇忠實恐美恐美毛申給止波久申久、謬以庸昧之陋質天、苟爲氏族之長者利、登台階天年久具□政柄天、日積利禮、是則宗社乃靈貺、累祖乃餘慶能延天所及利奈、方今聖上〇近衞新踐祚天、僚下各稟薑久、而奏請宣行乃事、依舊天雖可降綸旨毛、紫詔停滯天之丹心鬱陶須、奉公天輔弼無怠久、願身留忠勤無貳志、若是不慮之外留、咎祟乃所致止加令占求之處留、依神事違例天、氏大神成祟須、又社樹乃祟奈利止占申世利、因之天驚遑天忽尋問之處留、御笠山乃樹木乎庶人濫久伐取古有度申世利、早加禁制天、速從停止津、占推之趣、畏懼多端之、故是以散位從五位下藤原朝臣憲忠乎差使天、白妙御幣留善馬一匹乎奉副天奉出給布、大明神此狀乎平久安久聞食天、叡慮和解之、恐心散憤天、柱石之基不動須、金玉之質彌堅之天、家門繁昌仁榮被增長天、夜守日守留護幸給止倍恐美申給止波久申、

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

南都ノ大衆、イカナレバカク太政入道〇平清盛ヲ惡ムラント云ケレバ、或人ノ申ケルハ理也、攝祿ノ

臣ヨリ始テ、南家、北家、花山、閑院、日野、勸修寺前官當職ノ公卿殿上人、十之八九ハ藤氏トシテ、春日大明神ノ氏人也、代々ノ國母仙院、多ハ此家ヨリ出給ヘリ、皇王ト云、臣公ト云、我朝ノ政事專此氏ニ在、然ルニ平家世ヲ取テ、萬乘ノ世務ヲ妨奉リ、諸卿ノ理政ヲ蔑如ニスレバ、爲國爲人、春日大明神衆徒〇寺僧實ニ替入セ給テ、角騷動スルニヤ有ラン、イカ樣ニモ南都ノ失ル歟、平家ノ滅ルカ、子細アラントイフ、

〔玉海〕壽永三年三月廿三日壬子、光長參送云、廣季只今人來云、賴朝奏條々事於院、〇後白河其中下官〇藤原兼實可爲攝政藤氏長者之由、令申了之由、自廣元之許廣季子男也所示送也云々、卽其正文、可經御覽之由、廣季令申云云、當時攝政〇藤原基通若可有主恩者、只賜一州可足云云、件狀加一見返遣了、件脚力去十九日到來、賴朝奏院之狀卽廣元執筆、付泰經卿云云、同廿一日、遣御返事、最可申左右之由被仰云云、大略此事被仰不可然者歟、〇中略凡此事次第可謂難堪叡念也、所參無疑、下官之懸望也、縱雖有此疑、已無其實、強不可爲苦、〇中略而當時洛中之貴賤上下道俗男女、下官可有吉慶事之由謳歌殆過法云云、此事已嗚呼也、又尾籠也、取諸身無冥顯之過怠、何因氏明神〇春日幷本尊三寶、可令顯尾籠之名於後代哉、冥鑒之處、只奉仰佛神者也、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年三月三日、今日將軍家〇藤原賴經始令拜春日別宮給、是叙四品給之後、始奉其袍御、仍被進拜賀、可參彼社御云云、

〔園太曆〕貞和四年八月十四日、明日放生會、上卿春宮大夫〇藤原實夏參向、雖未拜氏社、依別勅參向也、文和四年四月廿六日、抑今月諸社祭以下、近來諸人無音信、是朝家非人之所致也、而存命之間、如然事猶不審、頗無益事歟、然而相尋神祇大綱意、是宿願返報徴也、去廿日吉田祭被行云云、而氏社奉幣以下神事、可相談之由、自先年仰付大納言、而無沙汰云云、如奉幣者依幣物不合期、近來不及發遣、如形心中神事何不致沙汰候哉、毎事此所存也、無力也、　十一月十八日庚子、今日大原野祭、不可被行

橘氏神

云云、幣料闕乏之故也、而如形也沙汰出、今日〇中略氏社祭可神事之旨、兼仰大納言了、而今日不社事歟、凡不信也者也、況又祭延否不定勿論歟、

〔宣胤卿記〕文明十三年二月廿九日甲戌、今日兼俱卿書狀到來、吉田社事、御堂殿〇藤原道長御書案送之注左、

奈良京之昔者、以春日社爲氏社、以興福寺爲氏寺、平安城之今者、以吉田社爲氏社、以法成寺爲氏寺、隨社頭之興廢、宜測藤門之榮衰者、一天安全、四海平定、殊可抽當氏繁昌之祈禱者、愼之莫怠矣、

長和元十一月十八日　御草名

于時兼忠
神道長上左衛門權佐殿

〇按ズルニ、本書御堂殿御書案ト云フモノ頗ル疑ハシ、其ハ法成寺ハ治安中ノ建立ニシテ長和元年ニ後ルヽコト殆ント十年ナリ、加之當時神道長上等ノコトアルベクモナシ、蓋此書案ハ、兼俱ノ僞作ニ出デシモノナラン、姑ク附記シテ參考ニ供ス、

〔日吉社神道秘密記〕春日岡

春日大明神御影向之靈地也、〇中略春日大明神、天兒屋根命是也、〇中略公家藤原氏上祖、近〇近衛、九〇九條、二〇二條、一〇一條、鷹司、悉氏神也、

〔戴恩記〕秀吉公關白になりたまひしを、玖山公〇九條稙道きこしめしたまうて、此官を他家へ渡す事其例なし、かならず春日明神の御罰をあたりたまはんとつねに仰られしが、はたして秀次關白殿御謀叛の時、近衛殿は九州の捧の津、菊亭殿は信濃へながされたまふ、其上御息女一臺殿車にて渡されさせたまひし時こそ、玖山公の仰られし御詞はわひぬと、人みなおどろきはべりけれ、

〔簾中抄神事下〕梅宮橘氏神

〔伊呂波字類抄諸社无〕梅宮

諸陵男巻下云、太后〈○嵯峨后橘嘉智子〉氏神祭於圓提寺、〈此神始犬養太夫人(藤原不比等室)所祭神也、太夫人子藤原太后(光明子)及乙牟漏女王(美努王女、光明子異父姊)祭於洛陽川頭、其後遷祭於相樂郡拼山、〉此神爲仁明天皇成祟、出於御卜、復託宣宮人云、我今天子外家神也、我不得國家大幣、是何緣哉云々、天皇畏之、欲竪立神社、准諸大社每年令崇祀、太后不肯曰、神道遠、而人道近、吾豈得與先帝外家齊乎、天皇固請之、太后曰、但恐爲國家成祟、仍近移祭於葛野川頭、太后自幸拜祭焉、今梅宮祭是也、

〔諸神記上〕一梅宮

當社神者、仁明天皇母后、文德天皇祖母、太后橘氏神也、歷承和仁壽二代以爲官祠、又曰、仁明天皇母后、橘淸友女爲皇后宮、〈○又見諸社根元記、諸神根元抄、〉

當宗氏神

〔小野宮年中行事四月〕上酉日當宗祭事〈午日使立〉

仁和四年四月乙亥御記云、朕〈○宇多〉之外祖母當宗氏神、在河內國、今年始可祭之狀仰了、

〔世俗淺深秘抄下〕一寬平法皇〈○宇多〉御外祖母氏神、在河內國、所謂當宗社也、仍自仁和五年被祭之、或說曰、實御母儀也、御母儀、仲野親王女班子女王由雖記之、其年齡頗不可然、爲後見如此雖註、實ハ當宗氏女也、大槪見寬平御記歟、

入姓氏神

〔伊呂波字類抄比諸社〕平野〈或記云、延暦中奉遷之、一神殿大日、二殿正親音、平氏、三殿地神、高階氏、四殿大江氏、雜社、中原、小神、中臣、卜部、小野氏神也、〉

〔簾中抄下神事〕平野〈入姓氏神〉

〔二十二社註式〕平野

延喜式曰、山城國葛野郡平野祭〈○祭神社諸〉四座、

第一　今木神　日本武尊　源氏氏神

第二　久度神　仲哀天皇　平家氏神

第三　古關神　仁德天皇　高階氏神

第四　相殿比賣　天照大神　大江氏神

縣神天照大神子穗日命、中原、清原、菅原、秋篠、已上四姓氏神、

〔諸神根元抄〕平野五社

第一今木神　日本武尊　源家氏神

第二久度神　仲哀天皇　平家氏神

第三古開神　仁德天皇　高階氏神

第四比賣神　天照大神　大江氏神

第五縣神　天穗日命

四姓氏神　中原清原菅原秋篠等

本地第一大日第二聖觀音第三地藏第四不動第五毘沙門

延曆年中立件社

貞觀元年十一月九日始祭之○又見諸社根元記、諸神記、

〔大日本史神祇八〕按、江家次第、左經記、仲資王記等書皆云、後世源氏亦預祭、以本社爲氏神、然無一緣故、且世稱本社爲八姓祖神者、蓋以桓武皇別有平、長岡、良岑、久賀四氏、高野皇太后族有和、大江、秋篠、菅原四氏也、而考二十二社註式諸社根元記等書、本社攝社有縣神社、祀天穗日命、諸書又據此以今木爲源氏祖、久度平氏祖、古開高階祖、比咩神大江祖、縣神中原、清原、秋篠、菅原等祖、以傅會八姓祖神、今皆不取、

〔吉田家日次記〕應永九年十一月八日丁亥、前大外記師豐朝臣送書札云、平野社爲八姓祖神之由承及、件姓不審、可勘付云々、返狀云、　源　平　高階　大江　菅原　中原　清原　秋篠、以上八姓之祖神也者、一殿源　二殿平　三殿高階　四殿大江　縣社、菅原以下四姓之祖神也、然而不及巨細

平氏神

之返答也、及晚兼有宿禰來、對面談云、○中略平野社爲八姓祖神哉之旨、西園寺大納言被尋之、不存知候間、雖相尋、兼右同前如何云々、源平高江勿論、此外不覺悟之由答了、此事不存知歟、可悲可悲、殘四姓注左有所存、如此返答了、

〔神祇正宗〕氏神氏子之事

兼名曰、○中略四姓ノ氏神トハ、日本武尊ハ源氏ノ神也、仲哀天皇ハ平氏ノ神也、天兒屋命ハ藤氏ノ神也、仁明天皇ノ母后ハ橘氏ノ神也、是四姓ノ氏神也、又應神天皇ハ高階氏ノ神、仁德天皇ハ大江氏ノ神、餘氏ハ略之、

〔續世繼 二三紫野〕當代○高倉は、一院○後白河の御子、御母皇后宮滋子ときこえさせ給、贈左大臣平時信のおとゞの御むすめ也、○中略いま又たひらのうぢの國母、かくさかえさせ給うへに、おほじうぢのかんだちめ殿上人、このゑづかさなどおほくきこえ給、このうぢのしかるべくさかえ給ときのいたれるなるべし、たひらのうぢのはじめはひとつにおはしましけれど、にきの家とよのかためにおはするすぢとは、久しくかはりて、かた〴〵きこえ給を、いづかたもおなじ御よに、みかどきさきおなじ氏にさかえさせ給める、平野はおほたのいへのうぢ神にておはすなれど、御名もとりわきてこの神がきのさかえ給ふときなるべし、

〔清輔朝臣集 夏〕平家の人のつかさなれるよろこびに

おひのぼるひらのゝ松はふく風のおとにきくだに涼しかりけり

〔古事記傳 三十三〕平野を平氏の氏神とすることの由は、桓武天皇の御產土神に坐が故なるべし、其は續紀に寶龜六年三月、直酒田村衞宮群臣奉觴上壽、極日盡歡とあるを思ふに、田村舊宮は、光仁天皇のいまだ白壁王と申せし時の御宅にて、今木大神は其地に鎭坐し神なり、かくて桓武天皇も其所にて生坐つれば、御產土神なるべし、されぱこそ延暦元年に分て位階をも授奉り賜ひ、

源氏神

遂に平安京に移祭り賜へるなり、此大神を平安京の平野に移奉られしも、延暦年中のことなり、其よし類聚三代格に見えたり、

〔年々随筆四〕平野社は、そのかみ殊ある御尊崇なりけるを、今も其定なるべけれど、御社のいたう荒まどひておはしますが、かしこう心ぐるし、平家の氏神にておはしますに、今は源氏の御代なれば、無沙汰なりなど丶民間にはいへど、さる事にはあらじ、おのづからゆゑある事なるべし、平家の氏神たる條は、何くれの書どもにみえたるを抄してもおかず、○下略

〔類聚既驗抄〕一嚴嶋大明神　平家氏神也、○又見二高祖遺書一

〔拾遺和歌集十神樂〕源遠古朝臣こうませて侍けるに　もとすけ

おひまげれひらの丶はらのあや杉よこきむらさきにたちかさぬべく

〔八代集抄十八〕平野第一御殿源氏の祖神なれば、源の遠古の子をなぞらへて平野のはらのあや杉よといへり、あや杉はちいさき杉なり、こき紫は三位以上の袍なり、高位にも至れとの祝言也、

〔廿二社本緣〕平野事

平野乃社、常仁波仁德天皇乃垂迹登申す、或和又仁德乃御弟登毛云惠利、舊記不レ詳、當社和源氏乃長者、管領之正統是神主ヲ云也、等乃祠官毛長者乃宣仁任二補す一之、藤氏乃長者乃春日等乃祠官毛如レシ被二加補一、以レ之思仁之、平○○源氏○○乃氏神也、然而仁德毛祖皇仁和不レ坐、若隼總別乃皇子歟、是波應仁第八乃御子、繼體天皇乃御高祖父也、猶可二勘知一す、

〔吉田家日次記〕應永九年十一月五日甲申、平野祭也、奉行藏人右少辨定顯、上卿中院中納言、源光顯行事左中辨藤原經豐朝臣、外記中原師鄉、史安倍盛久、内侍不參、○中略社司預兼右、衞門權預兼世宿禰、○中略戊刻、兼世宿禰退出談云、○中略上卿自二北野觀音寺一出立云々、不レ恐二氏神之冥慮一不敵之至也、末代之

式莫言、

〔十輪院内府記〕文明十三年三月廿五日、餘供卿參會、平野季加等也、凡源氏神以平野社爲正也、於八幡宮、清和源氏義家以來事也云云、往古以八幡爲氏神之條、不可有所見云云、此事猶不審事也、

〔錦所談一〕平野社可爲源氏々神事

平野社ハ桓武天皇外祖神ナル故、平家ノ氏神ナルコト勿論ナルヲ、源家ノ氏神トスルコト諸人訝ベキコトナレドモ、則元久元年六月九日仲資王記ニ、當社無遣水、去比招仁和寺石立僧立石、餘又遣水了、年來無此事、今度始之、件水荒見川水也、入田之流也、穿北築垣入水於社内也、即内侍屋前渡橋云云、其尻出南水門歟、于時長者源大納言(實淳)被參會、社頭修造猶以優美也、山水之條も依此事出來歟、殊可悅申之由可觸予之旨、源亞相有命云云、マタ文明十三年三月廿五日十輪院内府記ニ、餘供卿參會、平野季加等事也、凡源氏神以平野社爲正也、(○中略)ナドアリ、專源氏ノ人人、社ノコトニ預ハ如何トナレバ、元ヨリ源家ニ限ズ、總テ王氏ノ人ハ預ベキコト、儀式平野祭條ニモ、皇太子行啓、及王氏ノ見參等ノコト有テ、敬神嚴重ナリ、又江次第新年祭條ニ、源氏若江氏、顯平野幣之後可出歟ナドアリテ、考ニ宇多村上等源氏ノ氏社トテ鎭祭ナシ、抑桓武天皇ハ平宮ニ遷都シ、千歳不變ノ都城ヲ造玉ヒ、國家ノ爲ニ叡慮ヲツクサレタレバ、代々ノ天朝此總ヲ仰、其外祖神ヲ氏神トシ、皇太子諸王氏ニ至マデ祭ニ預ナルベシ、行幸御幸等モ又其故ナリ、コレ八幡行幸御幸モ、元天慶ノ兵亂シヅマリタル神徳ヲ提・マス代々ノ天皇ノ敬神ヲツギ、後世マデモ崇敬シ玉ヒ、御幸等アルガゴトシ、是等ニヨルニ平野社ヲ源家ノ氏社トスルコト何ノ憚カアラム、

〔保元物語三〕北方身なげ給ふ事

去程に秦野の次郎は、則六條堀河へまゐりたれば、母(○爲義室)はいまだけからもなき、よつて八幡

のかたへはせ行に、おかゐ河原の邊にてまゐりあふたり、のぶかげ馬よりとびおりて、こしのながえにとりつけば、やがて輿をぞかきすゑける、〇中略六條殿にわたらせ給ひつる四人の君だちをも、舟をか山にて只今うしなひ申候、是は乙わか御前のさいごの御かたみをまゐらせられ候とて、くだんのかみをとり出し、御有さまをくはしくかたり申しかば、母うへ是をきゝ給ひ、夢かうつゝかいかゞせんとて、すなはちきえ入給ひしが、やゝしばらく有てすこし心地出來て、けさ八幡へまゐりつるも、判官〇源爲義や子共のためぞかし、氏神にておはしませば、たのみをかけてぞまゐりしに、みな〳〵うせぬらん、神ならぬ身のかなしさよ、

〔平治物語三〕賴朝被宥遠流事附呉越戰事

尾張守〇平賴盛ノ母、池ノ禪尼〇淸盛繼母、中略、小松殿〇淸盛子重盛、中略ヲヨビ奉テ、賴朝ガ尼ニ付テ、命ヲ申助ケヨ、父ノ後世ヲトハント申ナルガ、餘ニ不便ニ侍、能樣ニ申テ給ヘ、殊ニ家盛〇池禪尼子ガ幼立ニ少モ不違ト聞バ、ナツカシウコソ侍レ、右馬助〇家盛ハソレノ御爲ニモ伯父ゾカシ、賴朝ヲ助ケテ、家盛ガ形見ニ尼ニ見セ給ヘト宣ケレバ、重盛參リテ父ニ此由被申ケリ、淸盛聞テ、〇中略先十三日ヲバ被延テ、僅ノ返事ハナカリケリ、然レバ今日斬ラルヽ、明日失ルヽナド聞エシカドモ、其日モ延ケレバ、兵衞佐〇源賴朝是ハ偏ニ氏神八幡大菩薩ノ御助也ト、彌心中ニ祈念深クゾ御坐ケル、

〔參考平治物語三下〕賴朝遠流附盛安夢合事

京師本、杉原本、鎌倉本、半井本並云、賴朝伊豆國蛭嶋ヘ流サルベシト定ラル、〇中略サル程ニ賴朝流サレ給フヲ、イザヤ見ントテ、京中邊土ノ上下、大津浦マデ市ヲナシケルガ、人皆賴朝ヲ見テ限ザシコツガラ人ニカハル所アリ、此人ヲ伊豆國ニ流シ置ハ、千里ノ野邊ニ虎ノ子ヲ放ツニ異ナラズ、哀末ノ世ニ如何ナル事カアラント私語ケル、宗淸名殘ヲ惜奉リテ打送申程ニ、佐殿〇賴朝勢多橋ヲ過給フトテ、アレニ見ユル森ハ如何ナル處ゾト宣ヘバ、建部宮トテ、八幡ヲ祝進ラセテ候ト

申セバ、サラバ今夜通夜シ、暇申テ下ラバヤト宣ヘバ、宗淸申ケルハ、賴朝コソ流サレケルガ、宿ニハ著ズシテ、山林ニ留リケルヨト平家ニ聞召レバ如何候ハント申セ共、氏ノ御神ニ暇申サンハ何カ苦シカルベキト宣ケレバ、建部宮ニ入奉リ、賴朝御社ニ通夜シテ、南無八幡大菩薩、願クハ今一度賴朝ヲ都へ返シ入給へト祈給フ、

〇按ズルニ、大日本史神祇志ニ、近江栗田郡建部神社、蓋祀建部君祖稻依別王トアリ、本書ニ建部宮ヲ以テ八幡宮トセルハ誤ナリ、

〔吾妻鏡　一〕治承四年七月五日乙卯、昨日遣御書、被召走湯山住侶文陽房覺淵、今日參向北條御亭、武衞(○源賴朝)被謁、仰子件龍象而云、吾有所存、心底、而法華經之讀誦終一千部之功、後、宜顯其中丹之由、雖有發日素願、緯巳火急之間、殆難延及後日、仍轉讀分八百部、故欲啓白佛陀、如何者、覺淵申云、雖不滿一千部、被啓白條、不可背冥慮者、則供香花於佛前、啓白其旨趣、先唱表白云、

君者忝八幡大菩薩氏人、法華八軸持者也、

〔源平盛衰記　十九〕聞性檢八員事

御先祖貞純親王ノ御子、六孫王(○經基)ノ御時、武勇ノ名ヲ取テ、始テ源氏ノ姓ヲ給シヨリ以來、經基、滿仲、賴信、賴義、義家、爲義、義朝、佐殿(○賴朝)マデ八代也、又故伊豫守賴義三人ノ男ヲ三社ノ神ニ奉ル、太郎義家石淸水、次郎義綱賀茂社、三郎義光新羅ノ社、其中ニ佐殿正統トシテ八幡殿ノ後胤也、八幡宮ノ氏人也、

〔異本曾我物語　三〕兵衞佐殿(○源賴朝)の御先祖伊豫守賴義朝臣、奧州下向の時も、御先祖淸和天皇の御興隆の地なればとて權現へ法樂を奉らんと七日七夜の御神樂なり、(○中略)然ば當山には、八幡大菩薩も當山を護持し、三寶走湯權現もいかでか捨んと思召んや、當山守護神、我等に力をあたへ給へ、佐殿を助奉らん、源氏の流ながく絶えず、我山も繁昌すべき時節なり、大衆達も一筒に山本

が鼻惡を防ぎ、源氏の怨敵を平げて、末代の榮耀を待給へやと有ければ、一山の大衆尤然るべしと一同して、熱海越百坂兩道を堀切て、今やよするぞ待かけたり。〇中略佐殿是を御覽じて彌力付てぞおぼしめされける、御心の中に、仰願は大慈權現、八幡大菩薩、賴朝が此度の宿願を、遠くは三年近くは三月の內に、成せしめ給へ、わが願滿る程ならば、先山木を亡し、次には伊藤をうたしめ給へとぞ祈念せられける、

〔源平盛衰記 四十六〕義經行家出都幷義經始終有樣事

同三日〇文治元年十一月八幡ノ伏拜ノ所ニテ、義經馬ヨリ下、甲ヲヌギ、弓脇ニ挾テ跪キ申ケルハ、忝八幡大菩薩ハ源氏氏神トナラセ給フ本意ヲ申セバ、高祖父賴義蒙夢告、怪キ傀儡ノ腹ニ男子ヲナス、則八幡ノ宮ニ奉テ八幡太郎ト世ニ申傳タリ、一天ノ固トシテ鎭四海、而ヲ近年平家ノ逆亂サカリニナリシ間、源氏跡ヲ失事二十一年也、今又平家ノ宿運盡テ源家世ヲ取中ニ、木曾冠者義仲朝威ヲ輕シメ過分ノ故ニ、義經手ヲ下シテ義仲ヲ誅ス、是義經ガ奉公ノ始ナリ、加之四國九國ニ趣テ、若干ノ平氏ヲ誅戮シ畢、此ニ雖無誤無犯、舍兄賴朝ガ讒訴ニツイテ、今義經行家都ヲ罷出、譬バ岸ノ額ニ離根草、江頭ニ不繫舟ノ如シ、一門一味ニシテ世ヲトリシ平家モ、運盡ル日ハ一人モナシ、實シトイヘ共、賴朝心狹クシテ、一人世ヲ知ント思事、神慮實ニ難測、大菩薩ハイカヾ守ラセ給ラン、今ハ今生ノ望候ハズ、本地彌陀ニテオハスナレバ、後生ヲバ助給ヘトテ、指ヲ折テ南無阿彌陀佛ト百返計申テ、立樣ニ口ズサミケルハ、

思ヨリ友ヲウシナフ源ノ家ニハアルジ有ベクモナシト云、合掌伏拜テ立、

〔吾妻鏡 十三〕建久四年八月二日丙申、參河守範賴書起請文被就將軍、是企叛逆之由依聞食及、御尋之故也、其狀云、

敬立申起請文事

右爲御代官度々向戰場畢、平朝敵盡忠以降、全無貳、雖爲御子孫將來又以可存貞節者也、且又無御疑叶御意之條、具見先々嚴札、秘而蓄箱底、而今更不誤、而預此御疑不便次第也、所詮云當時云後代、不可挿不忠、早以此趣可誡置子孫者也、爲之一(モ仁)令違犯此文者、上梵天帝釋、下界伊勢、春日、賀茂、別氏神正八幡大菩薩等之神罰(於)可蒙源範頼身也、仍謹愼以起請文如件、

建久四年八月　　參河守源範頼

〔梅松論下〕去程に御陣(○足利尊氏)は篠崎の寺にて有しに、當社の祠官等賞翫し奉る事限りなし、御奉幣の義は、合戰の觸穢の間輕く有べしとて、御行水有て、廻廊の前にて八幡宮を拜し奉り給ふ、(○中略)則寄附の地有べしとて、御文章の爲に、社家の古文を召出されし中に、昔鎭西八郎爲朝寄附の狀の有しを御覽ぜられて、當家の祖神、實難有思召て、御社頭に向ひて合掌あつて、御敬信淺からずぞみえ給ひし、

〔安齋隨筆前編十二〕八幡宮爲源氏氏神

俗に八幡宮を源氏の氏神と云は、義家朝臣を八幡太郎と云しに依て、八幡を氏と心得て、氏神と云習はしたるか、然らば加茂二郎義綱の氏神は加茂皇大神宮なりと云はんか、新羅三郎義光の氏神は、新羅大明神なりと云はんか、三人ともに兄弟にて、氏神各別にはあるべからず、八幡加茂新羅は氏には非ず、烏帽子名の上に神名を付たるなり、されば八幡を源氏の氏神とは云べからず、源家崇敬の神なれば、源氏の守り神とは云べし、淸和源氏の氏神は淸和天皇なり、嵯峨源氏、宇多源氏、村上源氏なども、各其元祖の天皇は、其家々の氏神なり、外に氏神はなし、

〔吾妻鏡二十二〕建保二年五月七日辛未、園城寺回祿之間、可被修造唐院幷堂舍僧坊之由、有其沙汰、以駿河前司惟義朝臣、豐前守尙友等、爲總奉行、(○中略)當寺者、源家數代崇重寺也、所謂豫州刺史賴室(頼義)朝臣、以一男快譽阿闍梨、加智證大師門徒、以三男刑部丞義光、爲新羅明神氏人、以降、鎭守府將軍(義家)

大江氏神

朝臣殊特當寺之丹祈、○下略

〔大江俊光記〕寶永六年三月廿三日、日向申候ハ、平。野。大江。姓。神。へ願一七ケ日、社司伊藤主水賴、初穗ニ金百匹上候由、○中略大江氏神、今迄は北より第四ノ御殿、比賣御神と覺候へ共、伊藤主水申候は、其說は先年鈴鹿氏ノ說也、其後三家寄合遂吟味、大江氏ノ神ハ北より第三ノ御殿、古開(フルアケノ)御神と緣起に御座候故、是ニ相極、禁裏へも關東向へも書付遣申候、則此書付トテ三禰宜之名有之候書付一紙給候也、今迄ノ覺ヲ今日より相改候也、別紙ニ書付有之候也、大江氏ノ神ヲ第四比賣御神と申ハ、板本所々ニ有之候說也、とかれ共、社ノ緣起ニ有之旨ヲ公武へ書付上候由也、

〔大江俊光記〕寶永四年五月三日、親王様より初而金子貳百匹充御祝儀ニ、朔日ニ付包ニ而俊光俊尙別ニ拜領仕、初而ノ拜領故、爲祝義如左、

伊勢外宮十二燈　內宮同　吉田同　平野。同

〔大江俊尙記〕寶永七年閏八月廿四日、高倉黃門衣紋之事、數年願申、此節一入願、宜成肝煎候て、早速相濟、

誓約

御裝束衣紋御相傳之條々、他人者不申及、縱雖爲一子、相傳申間敷候、尤御家之義跡略仕間鋪候、右之趣於相背者、日本大小之神祇、殊可蒙氏神之御罰者也、仍誓約如件、

寶永七庚寅年後八月　北小路日向　俊尙

高倉前中納言樣家　松山內藏丞殿

竹田氏神

〔新撰姓氏錄左京神別〕竹田川邊連

火明命五世之後也、仁德天皇御世、大和國十市郡刑坂川之邊、有竹田神社、因以爲氏神、同居住焉、

〔延喜式神名九〕大和國十市郡竹田神社

尾張氏神

〔尾張國熱田大神宮緣記〕宮酢媛下世之後、建祠崇祭之、號氷上姉子天神、其祠在愛智郡氷上村、以海部氏爲神主、海部是尾張氏別姓也、稻種公者、火明命十一代之孫、尾張國造乎止與命之子、母尾張大印岐之女、眞敷刀婢命也、實尾張氏祖也、因茲以熱田明神爲尾張氏神、(宮酢媛、及建稻種命、大宮相殿神也、)使以尾張氏人補神主祝等職也、

伴氏神

〔延喜式九神名〕山城國葛野郡伴氏神社(大、月次新嘗、)

紀氏神

〔延喜式九神名〕大和國平群郡平群坐紀氏神社(名神大、月次新嘗、)

〔諸國神名帳二〕大和國平群郡平群坐紀氏神社

紀氏之祖、武內宿禰也、

津守氏神

〔延喜式九神名〕攝津國住吉郡大海神社二座(元名津守氏人神、)

賀茂朝臣氏神

〔元々集三〕賀茂朝臣氏神者、葛上郡鴨都美波八重事代主神也、高鴨味鉏高彥根神、葛木御歲、(下照姫云々)

同爲彼氏神云々、

鴨縣主氏神

〔中右記〕元永二年十一月朔日癸卯、殿下參院御所三條烏丸、事以頭辨被仰云、賀茂下御社、此戌刻拂地燒亡了、火出從廊中、及寶殿之由、只今禰宜惟長、祝惟助馳參所奏也、誠驚思食、僉議子細可申者、〇中略予奏云、先年渡坐所、甚以可無便事也云、嘉承元年四月十二日夜上御社燒亡、巳時御正體所奉渡貴布禰社也、依彼例若所殘之小社候ハバ可奉渡也、禰宜申云、氏神社と號小社殘也、然者欲奉渡彼社如何、奏事之由尤可然也、〇中略天不明前、可渡御氏神社旨仰社司了、社司等奉仰馳歸本社、

〔神社啓蒙二〕賀茂社者在山城國愛宕郡去王都北半里許、山麓有宮曰賀茂別雷皇大神宮、所謂社、

氏神社(在本宮坤二十町許、)

〔山城名勝志十一愛宕郡〕比良木社(在本社巽、賀茂四所下社鴨主神、(中略)宮社下社社家、並在境人氏神也、古名柊一樹鼻村間冬比良木樹、)

高階氏神

〔類聚三代格一〕太政官符

應准筑前國本社置從一位勳八等宗像大神社神主事〈坐大和國城上郡登美山〉

正六位上高階眞人仲守

右得氏人内藏權助從五位下高階眞人忠峯等解狀偁、件社坐大和國城上郡登美山、依太政官去年三月廿七日符旨預官社訖、自從清御原天皇〈○天武〉御世至于當今、氏人等所奉神寶幷園地色數稍多、高階眞人累代鱗次執當社事、而今經世久遠、人意懈緩、或不勤守掌、紛失神寶、或彼此相讓、闕怠祭事、如是之故、屢致重祟、仍可准本社置神主狀、去年申官、而未蒙裁下、件仲守天性淸廉、堪爲神主、望請早被補任令掌神事、但待氏長擧被補其替、相替之限、一依格例、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宣、奉勅依請、

元慶五年十月十六日

〔類聚三代格〕一太政官符

應充行宗像神社修理料賤代傜丁事

從良賤十六人、正丁、在筑前國宗像郡金埼、充行傜丁八人、大和國城上郡四人、高市郡二人、十市郡二人、

右得彼社氏人從五位下守右少辨兼大學頭高階眞人忠峯等解狀偁、件神坐大和國城上郡之内、與坐筑前國宗像郡從一位勳八等宗像大神同神也、舊記云、是天照大神之子也、大神勅曰、汝三神降居道中奉助天孫爲天孫所崇祭者、今國家每有禱請奉幣件神、是其本緣也、唯筑前社有封戸神田、大和社未預封例、因茲忠峯等始祖太政大臣淨廣壹高市皇子命、分氏賤年輸物令修理神舍以爲永例、而年代久遠、物情解體、氏衰路遙不堪催發、須依貞觀十六年六月廿八日格、申請祖神封物以充修理料、而大神宮事既異諸社、氏人等狐疑猶豫、空經年序、所在神舍既致破壞、今件賤同類蕃息、已有其數、望請進件賤爲良、將令備調庸、其代永請隨近傜丁以充修理料、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞

大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請者、仍須件傜丁待牧氏高階眞人長者幷神主等共署申請充之、差充之後不得輙差他役、但其死闕及耆老之代、又同待請充之、永以爲例、

寛平五年十月廿九日

〔年中行事抄〕同日〇前文闕失、月日不詳、宗像祭事　官幣不立、氏人祭之、

〔神名帳考證土代九之三〕大和國吉野郡宗像神社三座

信友按ニ、〇中略高市皇子ノ母ハ、紀ニ胸方德善女トアリ、筑前胸方神ヲモテイツケル胸形君ノ縁ニヨリテ、高市皇子ノ外戚ノ氏神トシテ祭リ玉ヘルヲ、其御後ノ高階ノ氏人等ガ祖神トアガメタルナリ、

秦氏神

〔二十二社註式〕稲荷社

人皇四十三代元明天皇、和銅四年辛亥始顯、坐伊奈利山三箇峯平處、是秦氏祖中家等拔木殖蘇也、秦氏人等爲禰宜祝、供仕春秋祭、依其靈驗、有被奉臨時御幣、相次延喜八年、故贈太政大臣藤原朝臣時平修造件三箇社者也、

山城國風土記云、稱伊奈利者、秦中家忌寸等遠祖伊侶具秦公積稻梁、有富裕、仍用餅爲的者、化成白鳥、飛翔居山峯、子生遂爲社名、至其苗裔、悔先過而拔社之木、殖家禱祭之、其木蘇者得福、木枯者不福、

或記曰、人皇五十二代嵯峨天皇弘仁十二年夏、智證大師參詣熊野、以顯密法逗向之時、遇紀伊國石田川下稻羽里之間、一人老翁多刈稻荷之、二人女亦隨荷不知行方失蹤、其夜大師夢、一人老翁者上宮、二人女下中社云々、今案稲荷社者、秦氏遠祖也云々、

中臣氏神

〔神宮雜例集一〕御鎭座事

中臣氏祖神

正一位勳一等　鹿嶋神宮在常陸國鹿嶋郡

正一位勳一等　香取神宮 在下總國香取郡

正一位勳三等　平岡大神 在河內國河內郡

相殿姬神

此神者、件三所明神、神殿內相住給、別無宮殿、

〔大宮司長則記〕寬元四年正月元日、離宮朝拜神事、幷氏神神事有之、宮司列參也、禰宜遲參之間、先參氏神、手水神拜如例、○中略五月五日、離宮幷氏神神事、二宮禰宜遲參之間、先參氏神、宮司皆參也、大司盛房、權大司長則、少司通繼也、手水神拜如例、權神主元忠對面、饗膳如例、

〔和漢三才圖會七十一伊勢〕離宮院　在度會郡小俣村二町南、○中略又有中臣氏社、是亦荒廢、而寬文年中再興、

四座　與春日同

〔皇大神宮年中行事正月〕十一日旬神拜事

次氏神荒木田社、氏寺拜、西方、件拜等一殿乾角柱乾方坤蹲踞也、

〔氏神まうでの記〕御代の名、あめ明らけしてふ年の八とせの卯月十日の日、田の邊の鄕○伊勢國度會郡なる荒木田氏社にまうでぬ、そも〳〵此荒木田の氏は、天兒屋根命より出て、此命より十つぎ、あまり二つぎにわたる御はつこを天見通命と申す、これなん遠つ祖神にまし〳〵て、此社にしづまります、さるは磯城の水垣の宮に天の下しろしめしゝすべらみこと○崇神の大御代に、大御神大和の國を出おはしまして、大宮所を國々にまぎたまひけれど、大御心にかなはず有ければ、ここにかしこにうつりおはしましけるを、卷向の珠城の宮に天の下志ろしめ志ゝすべらみこと○垂仁の大御代になん、此神風のいせの國のわたらひがた五十鈴の原は、大御心の志づまりますす國とさとしおはしまして、此所にしも大宮柱ふとしきたて、高天の原に千木高志りて、祝ひまつりて、くさ〳〵の神わざをもさだめおきてたまひ、いろ〳〵の神づかさをも治めたまひける、此

渡會氏神

ときにかの天見通命をなん禰宜てふつかさにめされしより、そのはつこら、そのつかさをうけつがひて、今につかへまつり來ぬるなり、さて志賀の高穴穗宮に天の下しろしめしゝすべらみこと〇略成の大御代に、天見通命より六つぎにあたれる最上てふ人、神主にめされけるを、此大御時にしも荒木田てふ氏の號をたまひて、同じつゞきの人たちの中に、禰宜神主といひ、荒木田神主といふけぢめ出來にたり、ともにともに代々大御神につかへまつりて、大宮の事をしりにき、かくていつの比よりかこれをわけて二門一門とぞいふなる、このふたつのながれは、今の世にもわかれて、おの〳〵家のもろ〳〵ののりも、おとのまに〳〵うけつぎつゝ、いちしるくけぢめあり、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年五月廿三日壬子、伊勢國度會郡大神宮氏人神主、姓荒木田三字、大神宮氏人、有三神主姓、荒木田神主、根木神主、度會神主是也、自道大肆荒木田神主首麻呂以後、脫漏荒木田三字、今首麻呂會孫向官披訴、故因舊加之、

〇按ズルニ、本書ニ謂ユル氏人ハ、大神宮ノ神主トナルベキ氏族ヲ云ヘルモノニテ、卽荒木田根木度會三氏ノ氏人ヲ指セルモノナリ、

〔和漢三才圖會伊勢七十一〕荒木田氏社　在宇治鄕石井田山

一座　天見通命

〔詠大神宮二所神祇百首和歌季〕時雨

松風ヤ小串ノ野屋古ヲダニモラヌ時雨ノ昔ノミゾスル

天牟羅雲命ノ岩屋也、渡會ノ氏ノ先祖ニ坐シテ、外宮鎭ノ河内ト云處ニ坐、

〔大神宮參詣記〕むかし天村雲命、下界の水は不熟也、天上の水をくださむとて、天原にのぼり給ひて、天忍の水をくみて馬瑙の鉢にいれながら、外宮にとゞめおき給ふ、この水にて神供の御膳を

かしぐに、くめどもつきず、くまねどもあまらず、是第一の奇特なり、天村雲命と申は、天照大神あまくだりたまひしとき、三十二神御供したまひたりしその中の一神なり、祠宮渡會氏の祖神云云、

〔類聚神祇本源 十一 外宮別宮〕一宮崎氏神社、坐度會於宮崎、度會神主氏祖、右度會神主氏遠祖天牟羅雲命、一名天二神命、一名後小橋神、天御中主尊十二世孫也、天照皇大神天孫二柱神、天降坐時、御前立氏奉仕、

〔神社啓蒙 一〕大神宮參道經歷諸社

宮崎氏神社

在伊勢國度遇郡宮崎、所祭神一座、廟六座、有禰宜相傳之習、

天村雲命一座

社記云、天御中主尊十世孫也、飛鳥本紀云、天村雲命、天二登命、後小橋命止云三名負給支、社家名説、此社仍爲社家祖廟、參宮常日忌諱之、遂准廟參之儀也云、

〔神祇提要 七〕伊勢外宮遷座記

攝社

一宮崎氏社　坐度會郡宮崎、度會氏祖天牟羅雲命、一名天二上命、一名後小橋命、

天御中主尊十世孫也云云

〔台記〕久安三年十月十三日癸卯、先日典藥頭重基朝臣申曰、來十七日、爲拜氏神下向丹波國、請賜馬及指貫、今日送此二物、

〔夫木和歌抄 三十四 神祇〕丹波國あまてるの社にて　丹波忠茂朝臣

おほ江山むかしのあとのたえせぬはあまてる神もあはれとやみん

〔延喜式 十 神名〕丹波國天田郡天照玉(アマテルタマ)命神社

紀國造氏神

〔大日本史神祇十七〕按延喜式、山城大和等諸國、有天照御魂社、蓋祀天火明命、火明卽丹波國造之祖、本社蓋亦祀之也、但世所傳丹波系圖、以丹波朝臣爲後漢靈帝後丹波史之流、考姓氏錄、此說亦非無據、而今重基奉本社以爲氏神、則本氏疑亦國造之族、系圖或誤其出自乎、姑附待後考、

〔日前國懸兩大神宮書立〕氏神社古在新免鄉

曆應四年日前宮神事記曰、四月上申日氏神社祭、近來總官社務間、一度參詣、代官之時、夫筋以行事爲代官、於新免大道北田中立神木四本、有懸魚二懸、祝師一人、行事一人、於田所院橫道敷薦、對艮方奉幣、中臈之座、神官北用舖役、神馬二疋曳之、一疋祝師、一疋行事、其後荷前納禮之酒一獻、其後御下宮、參西中門外、自中門以北、於二三許丈西向着、以北爲上構新竹棚、其備荷前奉幣如前、神馬不曳之、其後於酒殿廳有飲酒、勸盃二獻、祝師行事等者飯采四種、此內精進一種、中臈三種、酒者酒殿守、飯者下土師、十一月仁波上土師、魚者浦役、浦使沙汰、

應永六年日前宮神事記曰、十一月上申日、氏神御祭、如四月、

國造俊範記曰、新免鄉氏神社、神皇產靈尊、天道根命二座ナリ、行義以後ニ武內宿禰ヲ合祭ナ三座トス、

右祭神之儀者、國造先祖ニ而、則紀氏神ニ而御座候、古ヘ新免鄉ニ有之候、新免鄉者、古ヘ秋月村與鳴神村與之間ニ有之候、當時鳴神村領ニ新免與字を中田地御座候由、且又右社跡に於而、古代神領鄉々之者共、座を致し候、當時社斷絕、秋月村之艮之方ニ芝原御座候、是新免鄉之氏神之跡與申傳候、

氏神社古在小宅鄉

正平九年檢田記錄曰、小宅鄉氏神、北堺歟、

康曆二年庚申六月七日、光弘卿方御名田畠等注文曰、

小宅鄕　大氏神北

右之通相見候ヘ共、社傳等不詳候、小宅鄕〈當時手平村ト申候〉右社只今北出嶋村ニ有之候社ニ而可有之候歟、

佐陀神主氏神

〔神社啓蒙　五〕佐陀神社　在出雲國秋鹿郡、所祭之神四座也、〇中略

攝社

氏神社〈在神殿傍、神主祖神、〉

〔和漢三才圖會　七十八出雲〕佐陀大社　在秋鹿郡、〇中略

攝社

氏神社　在神殿之傍、〈神主之祖神〉

那須氏神

〔源平盛衰記　四十二〕屋嶋合戰附玉蟲立扇與一射扇事

兩方〇源平二軍引退キ、又强健處(對ヽカハントスル)ニ、沖ヨリ莊(カザリ)タル船一艘渚ニ向テ漕寄、二月廿日ノ事ナルニ、柳ノ五重ニ紅ノ袴著テ、袖笠カヅケル女房アリ、皆紅ノ扇ニ日出タルヲ杌ニ挾テ船ノ舳頭ニ立テ、是ヲ射ヨトテ源氏ノ方ヲゾ招タル、〇中略源氏ハ遙ニ是ヲ見テ、當座ノ景氣ノ面白サニ目ヲ驚シ心ヲ迷ス者モアリ、此扇誰レ射ヨト仰ラレント肝膾ヲ作、難唾ヲ飮ル者モアリ、判官〇源義經畠山〇重忠ヲ召、〇中略誰カ在ベキト尋給ヘバ、畠山當時御方ニハ、下野國住人那須太郎助宗ガ子ニ、十郎兄弟コソ加樣ノ小物ハ賢仕リ候ヘ、彼等ヲ召ルベシ、人ハ兇シ候ハズ共、强弓遠矢打物ナドノ時ハ可蒙仰ト深申切タリ、サラバ十郎トテ召レタル、〇中略弟ニテ候與一冠者ハ小兵ニテ侍レ共、懸鳥的ナドハヅルヽハ希也、定ノ矢仕ヌベシト存、可被仰下ト弟ニ讓テ引ヘタリ、サラバ與一トテ召レタリ、〇中略進出テ判官ノ前ニ弓取直シテ畏レリ、アノ扇仕レ、晴ノ所作ゾ不覺スナト宣フ、與一仰承〇中略甲ヲバ脫、童ニ持セ、揉烏帽子引立テヽ、薄紅梅ノ鉢卷シテ、手綱搔繰、扇ノ方ヘゾ打向ケル、生

河野氏神

年十七歲、色白小髭生、弓ノ取樣馬ノ乘貌、優ナル男ニゾ見エタリケル、波打際ニ打寄テ、弓手ノ沖ヲ見渡セバ、主上〈○安德〉ヲ奉始、國母建禮門院〈○高倉后德子〉北政所〈○平清盛室時子〉方々ノ女房達、御船其數滿並、屋形屋形ノ前後ニハ、御簾モ机帳モサヾメキケリ、〈○中略〉妻手ノ沖ヲ見渡セバ、平家ノ軍將屋嶋大臣〈○宗盛〉ヲ始奉、〈○中略〉皆甲冑ヲ帶シテ數百艘ノ兵船ヲ滿並テ是ヲ見ル、水主梶取ニ至マデ、今日ヲ晴トゾ振舞タル、後ノ陸ヲ顧レバ、源氏ノ大將軍大夫判官ヲ始テ、〈○中略〉源氏大勢ニテ轡ヲ並テ是ヲ見ル、定ノ當ヲ知ザレバ、源氏ノ兵各手ヲゾ握リケル、サレバ沖モ渚モ推ナベテ何所モ晴ト思ケリ、ソコシモ遠淺也、鞍爪鐙ノ菱縫板ノ浸ルマデ打入タレ共、沛艾ノ馬ナレバ海ノ中ニテハヤリケリ、手綱ヲユリスエユリスエ鎭レ共、寄ル小波ニ物怖シテ足モトヾメズ狂ケリ、扇ノ方ヲ急ト見レバ、折節西風吹來テ、船ハ艫舳モ動ツヽ、扇枕ニモタマラチバ、クルリクルリト廻リケリ、何所ヲ射ベシ共覺ズ、與一運ノ極ト悲クテ、眼ヲフサギ心ヲ靜テ、歸命頂禮八幡大菩薩、日本國中大小神祇、別而ハ下野國日光、宇都宮氏御神那須大明神、弓矢ノ冥加有ベクバ、扇ヲ座席ニ定メテ給ヘ、源氏ノ運モ極、家ノ果報モ盡ベクバ、矢ヲ放ヌ前ニ深ク海中ニ沈メ給ヘト祈念シテ、目ヲ開テ見タリケレバ、扇ハ座ニゾ靜レル、

〔豫章記〕親孝子親經〈河野新大夫、又氏長者ト云也〉此比清和源氏正統伊與入道頼義、當國國司トシテ在國有、〈○中略〉親經ニハ女子一人計ニテ相續者ナキ故、頼義ノ末子ヲ貰取、家ヲ令續、頼義ノ子四人有、〈○中略〉四男三嶋四郎親清ト號、家ヲ繼、河野冠者伊與權介名、〈○中略〉又親清ニモ長子無リケレバ、女中親經之女、氏神三嶋宮ヘ參籠有テ家ノ事ヲ祈請セラル、

○按ズルニ、三嶋宮ハ延喜式ニ、伊豫國越智郡大山積神社トアル即是ナリ、

〔河野系圖〕

親清〈三嶋四郎　伊豫權介、號河野冠者、〉

雖爲賴義末子、實義家末子、祖父養子成、親經之婿君號、養子續彼跡、自賴義賜具足白旗赤地錦直垂等、

通清自此人三嶋大明神實子也、背骨高而三鱗鯹肩也、依母之祈、伊與權介、治承年中、奉後白河法皇叡宣、任國務、

曰、河野新大夫親經息女親清妻、男子無之故、參三嶋大明神妊、寶通之心仁天、通字從是始也、

〔臥雲日件錄〕文明二年二月十四日、薰一因話伊豫川野之事曰、三島明神權現裔也、伊豆三嶋自伊與勸請云々、又此神大通智勝佛之垂迹、而川野代々皆十六王子所化也、

〔北條五代實記二〕早雲三嶋參籠附靈夢之事

抑三嶋大明神ト申ハ、元來ハ伊豫國ニ御鎭坐アリ、人王第七孝靈天皇ト申ハ、忝モ彼御神ノ化身也、本地ハ大通知勝佛ニテ御坐ス、是ニ依テ彼御神ノ氏人、伊豫ノ河野ノ一門ハ、今ニ至テ大通ノ通ノ字ヲ名乘トカヤ、越智ノ姓是也、

〔八幡愚童訓下〕伊豫國住人河野六郎通宗、○宗一本作有、異賊警固ノ爲ニ本國ヲ立シ時、十年ノ中ニ蒙古不寄來者、異國ニ渡テ可合戰起請文ヲ十枚マデ書、氏神三嶋社ヲシテ口灰ニ燒テ自飮ナドシテ、○下略

〔豫章記〕通有河野六郎、任對馬守、母井門三郎長義女、後宇多院ノ御宇弘安四年、蒙古襲來ス、大軍志賀鷹能古等嶋々海上充滿セリ、夷國退治之事ハ、家ノ先例ナル間、大將トシテ筑前ニ進發ス、○中略夷賊十萬八千艘ノ船々ヲ見渡セバ、吳山蜀嶺ニ向ガ如シ、通有如何ニモシテ先懸セバヤト思ヘ共、恒沙ノ如ナル舟中ニ入テハ不可得利、此方可渡共不見、無詮方心中ニ日本國大小之神祇、別三嶋、八幡祈念申、肝膽ヲ碎給フ處ニ、沖ノ方ヨリ白鷺一ツ飛來ル、檣ノ上ニ被置百矢ノ中、鳥羽作征矢一ツクハヘテ上ケルガ、夷賊ノ船ノ上翔行程ニ、兩陣ヨリ見送リケルニ、夷國大將ト覺シキ大山如成大船樓閣、重重金銀ヲ磨タルニ、旗旌片々トシテ風ニ飜タル舟ノ上落タリ、蒙古ハ是天ノ與ル所ナリトテ悦

大友氏神

牛尾氏神

アヘリ、日本ノ陣見之堅唾ヲ呑テ居タリ、通有ハ是則明神ノ敵ノ大將船ヲ救ヘ玉フ者也、少モ不可遁々トテ、伯父伯耆守通時ト二艘ニテ漕出テ、敵ノ船中ヘ分入ケル、味方ノ軍兵見之大驚怪ミ、如河野ニハ物付カト云ケレ共、耳ニモ不聞入、差ニナシテ漕行ケル、

〔大友記〕石松源五郎立花ノ城ニ參ラルヽ事附戸次道雪〈鑑連〇大友宗麟〉御老中ヘ申遣ル口上書之事

一鎮連〈〇據道氏〉ヘノ申分、先年長尾ニオイテ、愚老砕手候砌、後付候テ遠手火矢ニ疵ヲ被蒙候、此節ノ儀ニ大綱ノ砌候間、隨分手前ヲ相ハゲマレ、鑓疵ヲカウブリ名譽ヲイタサルベキ事、サリトテハ餘義アルベカラズ候、自然未練ノ覺悟ニオイテハ、氏神八幡、愛宕、飯綱、摩利支天モ御照覽、愚老致詰腹、惡靈ニマカリナリ、子孫ヲ絶申ベク候、カマヘテ一命ヲナゲウチ可被勵粉骨ヲ、事メデタカルベキトノ旨可申事、

〇按ズルニ、此ハ大友氏ノ氏神ニテ、即チ豐後國ノ鎮守由須原八幡宮ヲ指セルモノナリ、

〔陰徳太平記〕〈四十〉牛尾豐前守降參之事

牛尾豐前守ハ弱年也シ時、美姿世ニ類無リケル故、尼子晴久寵愛甚シカリケリ、サル故千萬人ガ敵ニ屬スル共、吾一人ハ當家ヲ背ジト思入テ居タリシガ、忽敵ニ降ケル事ハ是妻故也トゾ聞エシ、彼牛尾ガ室女ハ安藝ノ武田元繁ノ孫ニシテ、伴五郎ガ息女也、〇中略此女熟ト思ケルハ、此タハ尼子家滅亡シテ、豐前守、大庭左衞門モ敵ノ爲ニ討レヌベシ、不如元就ヘ降參ヲ乞、夫ノ一命ヲ助ケ、今宗領遠江守ガ所領ノ牛尾七百貫勳賞ニ申賜ラン、然バ牛尾ノ家不斷絶シテ、爾子ノ大庭左衞門ハ立身スベシ、サリトテ今豐前守ハ是非ニ付テ、義久ノ先途ヲ見屆可申覺悟ナレバ、カタト云共ヨモ同心セラレジ、先吉川ノ元春ニ附テ、降參ノ約ヲナシ、元就父子ノ判物ヲ執テ後コソ夫ノ豐前ニハ云ベキナレト、吾貫等ニ思惟シテ、密ニ洗合ヘ使ヲ遣、〇中略元就豐前守降參セバ、彼一門ハ悉ク味方ニ可屬ゾトテ、父子三人ノ判物ヲゾ被出ケル、彼女是ヲ懷ニシテ夫ニ向ヒ、ナク如

以有名之神爲氏神

何ニ開給ヘ、尼子ノ微運ニ引テ牛尾ノ家ヲ亡シ給ハン事ハ、氏諏訪大明神ノ照覽モ如何オハシマサン、先一旦毛利家ヘ降參シテ、牛尾七百貫ヲ領シ、當家相續ノ謀ヲ被運候ヘト云ケレバ、豐前守是ヲ聞テ、女ノ無詮謀哉、吾ハ他ニ替リ思子細ノアレバ、義久ノ御身ノ浮沈ヲ見屆可申也、重テカヽル事不可申ト云ケル所ニ、彼女判物ヲ取出シ、〇中略侍ハ渡物ニテ候ゾ、先一旦毛利家ヘ降參セサセ給ヘ、カヽル例モ古今多キ習ニテ候ゾヤト、或ハ恐リ或ハ涙ヲ流テ云ケレバ、サシモ二心無リシ豐前守モ、終ニ此儀ニ同ジ、或夜城中ヲ忍出ニケリ、

〔百練抄安德九〕壽永二年七月八日、今日平氏公卿十人、前内大臣宗盛以下以連署起請送叡山、准藤氏興福寺、以延曆寺爲平氏氏寺、准春日社、以日吉社爲氏社之、

〔吉記〕壽永二年七月十二日甲戌、傳聞、平家公卿十人連署、内大臣已下也以日吉社爲氏社、以延曆寺爲氏寺、可奉歸仰之由、書起請狀被送衆徒中云々、若是密事歟、聞此狀悲淚難抑、但棄平野社用氏社、神慮有恐事歟、

〔源平盛衰記三十〕平家延曆寺願書事

平家今ハ防戰ニ力盡ヌ、佛神ノ加被ニアラズバ、爭カ彼凶賊ヲ鎭ベキトテ、平家ノ一族ハ、公卿モ殿上人モ同心ニ願書ヲ捧ゲ、山門ノ衆徒、日吉ノ神恩ヲ憑ムベキ由被申タリ、其狀ニ云、

敬白

可以延曆寺歸依准氏寺、以日吉社尊崇如氏社、一向仰天台佛法事

右當家一族之輩、殊有祈請旨趣、何者叡山者桓武天皇御宇、傳敎大師入唐歸朝之後、弘圓頓敎法於斯處、傳舍那大戒於其中以來、專爲佛法繁昌之靈崛、久備鎭護國家之道場、方今伊豆國流人前右兵衞權佐源賴朝、不悔身過、還嘲朝憲、加之與姦謀叛、致同心之源氏等、義仲行家以下結黨有數、隣境遠境抄掠數國、年貢土貢押領萬物、因茲且追累代勳功之跡、且任當時弓馬之藝、速追討賊徒、可降伏凶

黨之由、苟衒勅命、頻企征伐、旻魚鱗鶴翼之陣、官軍不得利、星旗電戟之威、逆類似乘勝、若非佛神之加被守鎭、叛逆之凶亂、是以一向歸天台之佛法、不退仰日吉之神恩而已、何況忝備臣等之羈縻、可謂本願餘資、彌可崇重、彌可恭敬、自今已後、山門有慶、爲一門之慶、社家有憂、爲一家之憂、付喜付憂成喜成憂、各傳子孫、永不失墜、藤氏者以春日社興福寺、爲氏社氏寺、久歸依法相大乘之宗、平家者、以日吉社延暦寺、如氏社氏寺、新値遇圓實頓悟之教、彼者昔遺跡也、爲家思榮幸、是者今新誓也、爲君祈追罸、仰願山王七社王子眷屬、東西滿山護法聖衆、十二大願醫王善逝、日光月光十二神將、照無二之丹誠、垂唯一之玄應、然則邪謀逆心之賊、遂平黨於軍門、暴惡殘害之徒、必傳首於京都、我等之素懷、諸佛神其捨諾、仍當家公卿等、異口同音作禮而請所如件、　敬白

壽永二年七月日

従三位行右近衞權中將平朝臣資盛○此下署日下入名連署今略

前内大臣従一位平朝臣宗盛○中略

トゾ書レタリケル、是ヲ聞ケル人々ハ、宿老モ若輩モ皆涙ヲゾ流シケル、去共年比日比ノ振舞、神慮ニ不叶、人望ニモ背ケルニヤ、本ヨリ角コソトテ、事ノ體ヲバ憐ミケレ共、靡ク衆徒ハナカリケリ、○又見二六代勝事記一

○按ズルニ、是ヨリ先平氏ハ平野神社ヲ以テ氏神ト爲セリ、然ルニ當時延暦寺ノ僧徒等甚ダ盛ナリシカバ、其力ヲ藉ラント欲シテ、更ニ叡山ノ鎭守日吉神社ヲ以テ其氏社ト定メタルナリ、

〔宇和郡舊記六〕三嶋大明神ハ永長郷氏神也

〔愛媛面影五宇和郡〕三嶋明神

神領村に在り、西園寺公○藤原下向の時、氏神として上伊豫大三嶋より勸請し給へり、神野俵津道へ遷、夫より神領大森山を宮處と定、

以産土神稱氏神

〔南海通記　二十〕香西藤尾八幡宮記
賓村此所（○讚岐香川郡）ニ居ヲ占テ、萬世ノ始ヲ成ス、然シテ當所擁護ノ神社無クテハ有ベカラズ、（○中略）八幡宮ヲ勸請スベシトテ、豐前國宇佐宮ヘ使者ヲ遣シ、（○中略）神靈ヲ迎ヘ奉ル、（○中略）神人再拜シテ曰ク、邦君謹テ八幡宮ヲ此所ヘ勸請シ奉リ、氏神ト崇敬シ給フ信心深シ、（○中略）藤家ノ苗裔擁護ノ御神ナレバトテ、磯崎ノ名ヲ改テ藤尾八幡宮ト祝ヒ崇メ奉ル也、夫レ神ハ人ノ敬ヲ以テ威ヲ增、人ハ神ノ德ニ依テ運ヲ添フル習ヒナレバ、神威高ク輝キ、氏子ノ末ヲ守リ賜ヒ、子孫永ク繁榮シ、冥加ヲ得ベキ始也ト祝ハヌ者ハナシ、

〔臥雲日件錄〕文安四年八月十三日、早與平仲徒步、赴地寶寺齋、出門一町、有住吉明神祠廟、誦咒以獻、凡世人以神明主于我所生之地者、謂之氏神、予生于泉州界南、故住吉乃氏神也、不圖殊方偶逢此神、

〔雍州府志　三神社〕小倉明神　在大山崎北、圓明寺村西、而斯邊之氏神也、倭俗某土地所有之神社、是稱氏神、是土人始祖神之義乎、所產其神地之人、總稱某神之氏子、氏神或稱生土神、產其神地之義也、今處々神社有牛王寶印札、其牛王之字、以生字下之一畫加土字上者也、故以生土神之印璽貼門戶、而禳障礙之義也、

〔山城名勝志　十八久世郡〕石田神社　八幡山巽一里半許、有岩田村、今屬綴喜郡、森內有社、此村氏神也、是石田神社歟、

〔延喜式　九神名〕山城國久世郡石田神社（大、月次新嘗、）

〔山城名勝志　十八久世郡〕巨椋神社　今小倉村森內有神社、村氏神也、九月十一日祭之、

〔延喜式　九神名〕山城國久世郡巨椋神社

〔山城名勝志　十八久世郡〕伊勢田神社　今伊勢田村、在小倉村坤半里、大和路西、森內有氏神社、是伊勢田神社歟、

〔延喜式九神名〕山城國久世郡伊勢田神社三座鍬靫

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授正六位上伊勢田神從五位下、

〔大和名所圖會四〕大和大國魂社　新泉村にあり、〇中略近鄕八村の氏神とし、例祭四月朔日、

〔延喜式九神名〕大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座並名神大、月次相嘗新嘗、

〔大和名所圖會四〕石上布留社　布留村及び四十八村の氏神なり、例祭九月十五日、

〔延喜式九神名〕大和國山邊郡石上坐布留御魂神社名神大、月次相嘗新嘗、

〔諸神根元抄〕長谷八幡

八幡、長谷、石園、中村三輪ノ氏神、

〔大猷公御上洛中の詠歌〕文月〇寛永十一年七月朔日はま松に著せ給ひ、〇中略台德院殿〇徳川秀忠御產有し所まで聞召およびしとて、

二葉よりおひ立影に行すゑの千代をも契るはま松の風

五社の明神、諏訪明神は、古相國〇秀忠の御氏神〇大猷院殿御實紀附錄作ニ御產神と思召て御參詣ありし、殊に新規の社領そこばくあて行給ひし、

たらちねのそふの社にもうでつゝ猶あらためていのる行すゑ

〔靈安寺御靈大明神略緣起〕大和國宇智郡靈安寺御靈大明神者、〇中略御靈ヲバ始メハ井上內親王ト申シキ、〇中略井上皇后〇光仁廢后及ビ御子達ノ御祟ドモ度々アリテ、皆〇中略ノ御惱シゲカリケレバ、〇中略昔カノ怨靈ヲシヅメタテマツランガタメニ、神ニ祝タテマツリ給ヒテ、宇智郡ヲ一圓ニ御敷地ニマヰラセ給ヒキ、〇中略昔ハ緣起アリケルトキケドモ、宇智郡動亂ノ時、紛失シタリ今ハナシト云傳ヘタリ、然間御氏子達ノ中ニモ、只御靈大明神ト申ス計ニテ、何ナル人ノ神ニ御顯ハレアリテ、御靈大明神ト申スト云事ヲ分明ニ知來リタル人ナシ、此事餘リニ歎カシクテ、身ハ東大

寺ニ住ストイヘドモ、心ニ御氏神ヲ信仰申シテ、毎日顯密ノ法施懈怠スル事ナシ、然レバ則御氏神ノ御威光ヲ增シ奉リ、諸人ノ信心ヲモ發サシメタキ志アリキ、是ニヨリテ御氏神ノ御由來ノ御事ヲ形ノ如クナリトモ記錄シ置度所存アリ、〇下略

〔諸社緣起文書三〕曾我兩社八幡宮幷虎御前觀音緣起

後鳥羽帝建久四年五月二十八日、丑ノ刻計ニ祐成ハ討死ス、時致ハ同二十九日申刻ニキヲレヌ、〇中略虎前ハ祐成兄弟ノ死ヲ慟哭、〇中略十九歲ナリシガ、薙染シテ信州善光寺ヘ赴、如來ヲ拜、山野ヲタビノ宿トシテ靈佛靈社ヲユキメグリ、月日ヲ送リ、其後吾故鄉ヲコヒテ大磯ニ歸、高麗寺ノ奧ニ芝菴ヲ結、日夜勤行不怠、寬元三年五月七十一ニシテ死ケリ、駿河富士郡厚原村ノ氏神トナリ、虎前ノ十一面觀音是也、建久八年四月、將軍〇源賴朝ノタマヒケルハ、富士ニテ死ケル曾我兄弟、我ニ恨ヲフクム由夢ニ度々ミユルナリ、殊更無雙ノ勇士、孝行ノモノナレバ、兄弟ヲ神ニ祝ヒ、富士ニ社ヲカマヘ、曾我兩社八幡宮ト崇べキ由、駿河人岡部權守泰綱ヲ奉行トシ、兩社御造營有之、サテ神主ヲツケ、神樂祭禮ヲ始、所ノ氏神ト祭タマフ、社領ヲ其時ヨセ給フ、其文書ニ曰、寄附曾我宮社領之事、駿河國富士郡北山御厨幷假宿鄕、右件鄕園者、爲賴朝沙汰、感祐成時致ガ勇敢、所令永寄附也、全不可以有其妨、仍爲後日沙汰證文書以與之、如件、建久八年八月二十八日、源朝臣トアリ、サスレバ其砌將軍御夢ニ、兄弟忽然ト來告曰、難有ト恩ヲ謝シテ、我從今日父母昆弟ノ讎ヲタヤスタウチエサスベキ守護神トナラントミエテ夢ハ覺ケリ、賴朝モ喜テ、從夫以來每年五月二十八日、氏子集リ祭禮アリ、

〇按ズルニ、曾我宮及ビ虎御前ノ社ハ、後世其地ノ鎭守ノ神ニシテ、卽產土神ナリシガ故ニ、氏子等因リテ以テ之ヲ氏神ト稱スルニ至リシナルベシ、

〔神祇正宗〕氏神氏子之事

兼名曰、總テ社司タル人ノ云事也、假令此ヨリ其境マデハ祇園ノ氏子、或ハ稻荷ノ氏子、或ハ御靈ノ氏子、或ハ今宮ノ氏子ナドヽ云、更ニ無本據也、祇園ノ社ハ淸和天皇ノ御宇貞觀年中ニ勸請ナレバ、下京祇園ノ領地也、御靈ノ社ハ朱雀院ノ御宇天慶二年ニ勸請ナレバ、上京ハ御靈ノ領地也、稻荷ノ社ハ元明天皇御宇和銅年中ニ始テ顯ル、今宮ノ社ハ一條院御宇長保三年ニ始テ祭ル、大人ノ四町マチノ御所ニモ鎭守ト申テ社ノアレバ、其內ニテ生レタラン人ハ、產神トコソ崇敬イタスベキ、氏神氏子ノ儀古來無其沙汰、文盲ナル靑女ナドノ申シアヘル事ヲ、上樣ノ人聞食テ、其ヲ本說トスル事口惜キ次第也、殊更山城ノ國愛宕郡ニテ生レタラン人ハ、賀茂大明神ノ御氏子勿論也、〇又見諺邪百首歌抄

〔鷹峯文集 四十九〕氏神氏子辨

鷹門童問竃下養曰、今旦設饌何事、養者答曰、汝不知今日當祇園會乎、童曰、祇園者何、養者曰、是洛東鎭座之靈、主人之氏神也、童曰、我聞洛北賀茂神爲平安城之鎭、而主人產於王城下、則可爲賀茂神之氏子、彼祇園何與焉、養者曰、不然、延曆定都之初、勅使先來告事於賀茂、則此神元是城州之總鎭也、故歷朝尊崇在伊勢之次、其後降一等曰伊勢石淸水賀茂、所以他神不能及也、然其社距王城稍遠、祇園、稻荷、御靈、今宮四社、在王城近處、故中葉以來四分洛中、爲四神所鎭也、主人生於祇園所鎭之地、爲氏神者明矣、主人在東武年久、然不可忘其本、凡爲氏子者何不祭氏神哉、頃日主人有同胞之喪、然國俗服忌既除、則今旦可有遙拜之儀、故設饌以待焉、童曰、如汝言則賀茂本也、祇園末也、主人不用賀茂用祇園、則不媚於奧、而媚於竈之謂乎、且君子先正其名、如祇園則西域精舍之名也、豈爲神明之舍哉、賀茂社在賀茂川邊、則神與地其名相應、主人何取不正、而捨其正哉、養者不能答、而質疑於膳夫、膳夫曰、人各有職分、養者唯炊米、我唯割肉、豈其關鬪門戶、童不寧曰、仲尼之門、五尺之童知尊王賤霸、我何默哉、乃去問侍史、侍史曰、若就一本言之、則天照大神者、六十餘州宗廟也、然諸州各有一之宮、以爲一國

之總鎭、一郡一鄕一村一里、亦各有神社、生於其地者、各以其近處之社爲氏神、是我邦之流例也、何必賀茂祇園而已哉、稽其古、則三輪神爲和州總鎭、然一州悉不爲其氏子、以今見之、則簸川神爲武州總鎭、然城下各有分鎭之神、譬猶日月遍照下土、然天下分野、各以星宿當之、且其姬姓無不出自文武、然魯衞者、祭周公康叔、晉鄭祭唐叔桓公、其餘可類推之、淸和帝貞觀年中、崇素戔烏之靈於王城東、然其地號祇園、其靈託牛頭天王者、浮屠者爲之、豈就其名、併其實以爲不正哉、季氏旅泰山、以大夫僭諸侯、非禮之甚、主人今若捨所產之鎭神、僭祭王城總鎭、則是不正也、非禮也、豈以奧竈之例議之哉、童曰、善哉言也、我猶有所疑、侍史曰、何、童曰、藤氏者天兒屋根之裔也、以春日爲氏神、其身稱氏子者、良有以也、源義家元服於石淸水、故以八幡爲氏神、猶似有由也、其餘諸氏、神別有氏神、有氏子者、皆非無例也、然不爲神系者、漫稱氏神、號氏子者、我竊惑焉、侍史曰、詩不云乎、維嶽降神、生甫及申、然甫候申伯、豈其嶽神之子乎、唯假其地之靈言之而已、由是觀之、則產其鎭地者、謂之神明之子孫、亦無妨乎、指至尊稱天子、亦其意同乎、古用氏字、必非姓氏之義、用其地名以爲姓氏者、所謂有扈氏越裳氏、及韓趙魏三氏之類是也、然則氏神氏子假用之以爲地神地子、亦可相通乎、其言未畢、主人屬耳於牆叱曰、易曰、陰陽不測謂之神、傳曰、未能事人、焉能事鬼、孟子曰、聖而不可知之之謂神、汝曹何知焉、小子避之、主人歌曰、神不可度思、如水在地中思、大哉其德思、肅然其風思、萬古不易兮、霄壤無窮兮、王城武州兮、不隔西東兮、

〔槃居雜錄補抄〕うぶすな

今の世に、產土の神をさして氏神といふは誤なり、產土の神をばうぶすなといひ何になれ其一氏一氏の氏の大御神をこそいはめ、藤原家にて祭り給ふ春日大明神、是氏の大み神なり、氏神うぶすな混ずべからず、

〔貞丈雜記 十六 神佛〕氏神と產土神と一ツ事に覺たる人あり、あやまり也、產土神は人々生れたる在所の鎭守の神なり、氏神は氏の元祖神なり、藤原氏は天兒屋根命なり、平氏は桓武天皇を氏神とす

るなり、橘氏は敏達天皇を氏神とす源氏は、淸和源氏は淸和天皇、嵯峨源氏は嵯峨天皇、村上源氏は村上天皇を氏神とする也、又八幡を源氏の氏神といふ人あり、おやまりなり、八幡は軍神なり、八幡をあがめ貴む事、源氏のみに限るべからず、

〔神道問答下〕氏神

問云、氏神とは其所の鎭守の神をいふか、答云、其所の鎭守の神は產土神にて、氏神にはあらず、我が氏姓の大祖の神を氏神といふ、たとへば藤原氏は春日社、淸原氏は藤森社を氏神といへるたぐひなり、

〔松廼落葉二〕氏神氏子

うな神とは、おのが遠つ祖神をいへり、伊勢物語に二條后の氏神にまうでたまふ事見えたるは、此后藤原氏にて、遠つおや神の天兒屋命をまつれる大原野社にまうでたまへるをいへるにてしるべし、續日本後紀六の卷に、勅遣大春日布瑠粟田三氏五位已上、准小野氏春秋二祠時、不待官符、向在近江國滋賀郡氏神社とあるは、祖神のまつりのいと〳〵おもければなるべし、氏子とは氏の祖神の子孫といふことなり、たゞし日本後紀に、大神宮にみてぐら奉りたまへる詞に、五十鈴乃河上爾稱辭定奉大神乃大前爾申給久、氏子親王乎大神御杖代止言正とあり、天子に氏はなけれども、天照大御神の御子孫におはしますゆゑに氏子とまをせば、氏のゑれさる人にもて、その家の遠つ祖神をば氏神といふべく、其人をば氏子といふべきなり、これによりて高尙つらつら考るに、今の世にゐなかの里々にて、地主の神を氏神といふ、初はそこの家々のおや神をひとつにいはふとて、社をたてゝ春秋のまつりもいひあはせてなゑ、ひと里の氏神とせしを、やがて地主の神ともいはへるにこそ、又もとよりありつる地主の神の社に、里の家々の祖神をあはせまつりて、其神の社の氏子といひしもあるべし、かくいひならひて後々は、地主の神をみな氏神

といひ、ざるからに氏神といふは、地主の神のことなりと里人のこゝろえて、ことのたがひはいできつるならんとぞおもはるゝ、いにしへはおのが家のおや神と、地主の神とは、ともにおもくうやまひて、ことにいつきまつるならひなりしかば、かならずさやうなるべし、ためしに申はかしこけれど、伊勢と加茂とに齋宮齋院とて、同じやうに内親王を御杖代となしたまへるをみても、いにしへの世のさまをさとるべし、今の人のおもへるとは異なり、伊勢は天子の御祖神、加茂は大宮の地主の神なり、さて今は氏神社といふは名のみにて、もはら地主の神ばかりをまつるは、佛わざの世にひろごりて、祖神をば佛といひなして、家のうちに佛龕とて、くまひもろぎのやうなるものしつらひすゑてまつるならひとなりて、里の社にてまことの氏神まつる事はたえたるゆゑなるべし、むかしのさまになさまほしきことになん、

〔玉手繦五〕此說は、〇中略甚く誤れる說なり、伊勢の大御神、また賀茂大神に、御杖代の内親王奉り給ふ時の御詞には、必その内親王の御名を聞え白し給ふこと常例にて、氏子と申すは淳和天皇の女御子の御名にて、仁明天皇の御從妹に坐なり、其は皇胤紹運錄を見て知るべし、三代實錄仁安元年四月二日の下に、無品氏子内親王薨淳和太上天皇第一女也とあり、然れば氏神に對し云ふ氏子の例と爲べくも非ず、また其つら〳〵考へたりといふ說もまひ言なり、此主〇藤井高尚わが〇平田篤胤學びの兄にて、歌文の事などには曉り得られし事ども有れど、道の學問は其樣ならず、

〇按ズルニ、松廼落葉ニ伊勢ト加茂トニ齋宮齋院トテ、同ジヤウニ内親王ヲ御杖代トナシ給ヘルハ、伊勢ハ天子ノ御祖神、賀茂ハ、大宮ノ地主ノ神ナルガ故ナリト云ヘルハ誤ナリ、サルハ賀茂ノ齋院ハ藤原仲成ノ事ヨリ起リタルモノニテ、地主ノ神ナル故ニアラズ、但シ嵯峨天皇ノ祈リタマヒシハ、地主ノ神ユヱニテモアラン、

〔玉手繦五〕さて世には產土神と氏神とを同じ事に思ふめれど、元より差別ある事なり、そは產土神とは、其神の敷坐す土地に生出る諸人の產土の神なる由なるが、氏神とは其氏人の祖神といふは更なり、其氏の祖神ならぬも、殊なる由緒あるは、一家及び一族までも氏神と稱せる古の例にて、氏(ウヂ)はもと內(ウチ)と同言なるが、其一族また一鄕の內にて、親く仕へ祀る神の義なり、然れば內神といふに同く、氏子は內子と云ふが如く、其神の御內子なる義なり、氏(ウヂ)と內(ウチ)と清濁のかはり有るに難あるべけれど、伊勢の內宮の在る所を宇治といふも、五十鈴の川內なる故の名なるを、宇遲と云にて知べし、然れば氏をうぢと云ふも同じ族內なる義より出たる言なり、〇中略然れば神名式に伴氏神社、伴林氏神社などある類は、胡亂なき祖神なれど、光仁天皇紀、寶龜八年七月の所に、內大臣從三位藤原朝臣良繼病、叙其氏神鹿嶋神正三位、香取神正四位上と有る鹿嶋社は、武甕槌神、香取社は經津主神にて、藤原氏の祖神ならず、但し其相殿に天兒屋根命も坐せど、此は後に河內國平岡社より移し坐たる神なり、然るに中臣氏藤原氏にて、平岡社を氏神と稱せる事なく、鹿嶋香取を氏神と稱するは、中臣氏の遠祖よりして、此兩社に殊なる故ありて仕へ奉り、その內人と在りし故なり、〇中略また平野社は桓武天皇の御外祖たちを祀れる社なるを、源平兩族の氏社と定め、梅宮を橘氏の氏神と定めたるなどを思ふべし、〇中略偖いと上代には、國々の國造など其領る處に祖神を祭れるが多かれば、其氏祖の神やがて產土神なるも多かりし故に、世になべて氏神と產土神とを混一に思ふ事となりけん、然は有れど中昔の書どもを閲するに、產土神に對しては其地に生るゝ諸人を氏子と稱し、氏神に對しては其を奉ずる諸人を氏人と稱せる趣なり、此差別は〇中略著聞集などの文にて知べし、

〔胡蝶菴隨筆〕京、江戶、大坂はいふに及ばず、日本國中在々所々に氏神といふものあり、いづれの代よりかくは祭り來る事にや、氏神といふは、藤氏の春日明神を祭らるゝごとき氏神とは云べけれ、其神の苗裔にあらざる人も、其所にある神を氏神といひて祭れる事は、いかなる由緣ありこ

いふ事を知らず、

〔世事百談 二〕氏神

俗にうぶすなの神社を、わが氏神と心得たるはあやまりなれど、いつの頃よりかいひならひけん、臥雲日件録に世人以神明主于我所生之地謂之氏神と見えたれば、近きことにもあらざるべし、もと氏神といふは、藤氏は春日明神を祭るごとき、わが氏の神をいふなり、

〔産須那社古傳抄〕産須那神をまた氏神とも稱し、其支配し給ふ地に生産する人をさして氏子といふ、其故は其地其地に隷る氏々は甚多かれど、何氏の人といへども、悉く産須那神の御支配に關り居るものなれば、其處に住る氏々の神といふの義をもて、氏神とは稱し奉り、其氏神の成造し給ふ所の子といふの義をもて、氏子とはいふなりけり、然るをこれも中古の書籍に、氏々の祖先の神を指ても氏神とも云ひ、其祭を氏神祭とも云へる事より、此産須那神と同一に混じつる說も有ど、これはた誤なり、氏に就たる先祖を氏神といふと、産須那神を氏神と稱すとは同語ながら其義別なり、思ひ混ふべからず、されば中古といへども、祖先神を氏神とは稱つれど、其子孫をさして氏子と云へる事は一切ある事なし、

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應禁正五位以上及孫王輙出畿內事

大和國春日社二月十一月祭、○中略應參氏人及散位諸司五位以上其人有限、臨期直參、又諸人氏神多在畿內、每年二月四月十一月何廢先祖之常祀、若有申請者、直下官宣、如此之類往還有程、不得任意留連經日遊蕩、其違越者錄名言上、處違勅罪、

寛平七年十二月三日

〔玉手繦 五〕氏神といふは先祖に限らぬこと上に云ふ如くなれど、先祖を祭るが本にて有し故

に、何應先祖之常祀」とは宜へり、古道に志さむ人は、殊に此官符の旨を思ふべきなり、然て此官符を拜するに、古く諸人の氏神祭は、かならず二月四月十一月に行ふ例なりけり、其は神宮雜例集に、二月中申日、外宮禰宜氏神祭、禰宜中臣事申詔刀、四月上申日、中臣氏神祭、宮司當社幣主奉仕之、祭用途司中勤之、發遣祭使之時、同司中勤之、十一月上申日、中臣氏神祭、如四月、中酉日、外宮禰宜氏神祭儀式同二月」とあるを思ひ合せて知らる、

〔延喜式一四時祭〕春日神四座祭略○中

右略○中春二月、冬十一月上申日祭之、

大原野神四座祭

右略○中春二月上卯、冬十一月中子日祭之、

〔儀式一〕春日祭儀二月、十一月上申、

大原野祭儀春二月上卯日祭之、冬十一月子日祭之、若子有三、用中子、有二子、用下子、

〔西宮記二月〕一大原野　春日祭在十一月一大原野、春日同日遣使、春冬同之、差氏略○中使、

〔小野宮年中行事二月〕上申日春日祭事未日使立

貞觀太政官式云、參春日祭藤氏五位已上六位以下、見役之外、給往還上日四箇日、

上卯日大原野祭事當日使立

貞觀太政官式云、參大原野藤原氏、見役之外、給上日二箇日、

仁壽元年二月二日、右大臣宣、據春日祭式、以平野梅宮祭式續而行之、

此日饗饌、藤氏后宮所儲、氏后不在之時、氏長者儲饗、

〔權記〕長保二年二月七日乙卯、大原祭也、於惟弘宅沐浴、出河原奉幣、於大原野乘助并少女少兒同奉幣、歸宅、

〔神宮雜例集 二〕年中行事

二月中申日、同宮〇外 禰宜氏神祭事、

禰宜中堪事申詔刀

〔古老口實傳〕一年中行事

二月　氏神祭日、御坐紙一帖、一禰宜所進之、〈祝預請〉正權禰宜等幣紙一手〈用紙四枚也、春二枚也、〉進之、〈祝請取之、〉服氣之時不進之、

〔神祇提要 八〕外宮年中御神事

二月中申日氏神神事

〔年中行事秘抄 四月〕上巳日山科祭事

延喜十一年格云、宮道氏人、依有寛平十年宣旨始也、

〔公事根源 四月〕山科祭　上巳日

このやしろは宮道氏の祖神也、寛平十年よりまつりははじまる、

〔延喜式 一四時祭〕平野神四座祭〈今木神、久度神、古開神、相殿比賣神、〇中略〉

齋服料

物忌王氏夏絹五尺、〈冬加一疋、〉綿十屯、紅花小六斤、錢一貫六百卅文、〈冬料准此、〉和氏、大江氏並夏別絹二疋、〈冬加一疋、〉綿三屯、紅花小三斤、錢六百卅文、〈冬料准此、〉〇中略

右夏四月、冬十一月上申日祭之、

〔江家次第 六 四月〕平野祭〈平野祭上申日、延喜格云、延暦年中立件社、太政官式云、凡平野祭者、桓武天皇之後王、〈改姓爲臣者亦同、〉及大江和等氏人、並預見參、〉

〔神祇志料 六〕蓋今木神は、桓武天皇の御母高野皇太后天高知日之子姬尊の遠祖、百濟國主聖明王を祭る、〇中略 久度神、古開神、及比咩神は、蓋皇太后の御母大枝朝臣の祖、及族類の神を祭れり、

此故に桓武天皇の後王、及大江、和氏人みな其祭に預る、

延暦にこの神社をば造立ありて、貞觀にかの祭禮を始行せらる、○中略第一の御殿は源氏、第二は平氏、第三は高階氏、第四は大江氏、すべて八姓の祖神にてましますなるべし、

〔公事根源四月〕平野祭　上申日

〔年中行事歌合〕十二番

右　梅宮祭四月上酉　秀長朝臣

神まつる卯月の榊とりそへて梅の宮居にたつるみてぐら

右梅宮は是定などいひて、大臣の管領する社にて侍るにや、これは橘氏の人、氏神にてわたらせたまふとぞうけたまはる、

〔公事根源四月〕吉田祭　中子日

この社は中納言山蔭卿、貞觀の比ほひ建立して、一條院永延元年より、始めて官幣を奉らせ給ふ、春日の社と同體なり、奈良の京の時は春日社、長岡の京の時は大原野、今の平安城の時は吉田社あり、皆帝都近き所をしめて、御門を守り奉らせ給ふにや、これは御堂の關白○藤原道長の法成寺と吉田社とを崇め給ひしことは、興福寺と春日社とに思ひよせられけるとぞうけたまはる、

〔吉記〕壽永三年四月二日辛酉、今日梅宮祭也、上卿右大辨兼光参仕、先可勤氏社之由雖仰申、依別仰参勤、以之可用神態云々、

〔親長卿記〕文明十年四月三日、彌久、棟久、諸平等來、社務未定、明日神事難治云云、貞久故障事、御聞所詮明日氏神祭神事、先爲一社無爲之儀、可加談合之由、可被成奉書云云、仍聞勅許、

○按ズルニ、此ハ藤原氏ノ氏神祭ナリ、

〔公事根源四月〕當宗祭　上酉日

是は河内國に侍る神社なり、午日使たつ、杜本、當宗は程ちかき故に、獨の使兩社の祭のために下向す、宇多御門の御外祖父は、當宗氏なるによて、仁和五年四月十四日に祭をはじめおこなはる、

〔紀貫之集三〕四月神祭

まつる時さきもあふかな卯花は猶氏神の花にぞ有ける

〔殿暦〕天永三年四月十四日、吉田祭延否條、以頭辨被問民部□俊明、中納言宗忠卿之處、兩人申云、氏社祭以長者神馬為宗、又見次第、而穢已發長者家也、可被延引也者、以此趣奏院〇白河延引也、

〔神宮雜例集二〕年中行事

四月上申日、中臣氏神祭事、

宮司當社神主奉仕之、祭用途司中勤之、饗膳無使之時、同司中勤之、

〔二所大神宮神名略記〕離宮院坐中臣氏社四座、在院西、或云、春日社元在度會郡津嶋崎、延暦十六年遷此地、四月十一日上申祭之、

〔皇大神宮年中行事四月〕

一初申日氏神參、為供奉、除當番之外、正權神主彼社頭參、但件社兩所也、荒木田氏二門、田邊本社參祭、同一門小社湯田野社參祭也、但當時宇治郷岩井田山勤請、兩門并兩所子細不記、抑當時二門禰宜任巡番、并物忌父等之參向祝御初請預次第、如山宮祭勤、但手水祓神拜後著座平帳、北向、物忌西、東上北向、家子侍東、西上北向、先禰宜并大物忌父石部之乘馬各紙手付、鳥居三度牽輪、大物忌父馬前也、其後清宮預、次直會饗膳輪饗盛役是十六、并菓子等、勸盃配膳御茶、所從分以下沙汰、如山宮祭時、但今日者魚鳥珍物調、當時猶不足云云、馬草自野篠進、所從走懸酒自原郷進、事畢又手水神拜御初等、又下向次第如山宮、前日官首進、

抑件役所氏。神。領。也、預所職官首始、又其主相替時、捧任料被補例也、若有无沙汰事者、可被改替也、

件饗膳運送依爲大儀、近代申請當日早朝遷番、傍官御宿所送進、其饗如社頭勤、家子侍雜色所從分送事同前、所從麵五宛也、酒略之、於社頭進上下人數、量日伺用意之、而間於社頭者小付御飯遣、麵五汁、菓子御茶、酒三獻所從在之、

件料所外社領原郷、所在齋田育穀、納例也、〈○中略〉又宇治氏、石部氏、同初申日祭也、宇治氏宇上社祭、石部氏岩井田山口祭也、

〔氏神まうでの記〕此遠つ祖神〈○荒木田氏社〉をまつるにも、ながれのまに〳〵してたがへず、とし毎の卯月霜月上の申の日になん、一門二門のやからおの〳〵こと所にてそのまつりをつとめ行ふ、〈○中略〉ことし〈○天明八年、中略〉卯月は四日の日丙申の日なりければ、かの大宮地の山の中、酒殿の東のほとりにて氏神祭は行へり、馬曳立、みてぐら、おものさゝげて二人つかへまつる、十一月は二日の日庚申の日なれば、同じくつかふまつるべし、

〔東宮年中行事十一月〕かみのさるのひ、かすがのまつりのはうべいの事、

ひつじのひ、つかひたつこと、〈同二月〉

おなじき日、ひらのゝはうべいの事、〈同四月〉

かみのとりのひ、むめの宮のまつりのはうべいの事、〈同四月〉

なかのねの日、おほはらのゝまつりはうべいの事、〈同二月○中略〉

なかのさるのひ、よしだのまつりはうべいの事、〈同四月〉

〔公事根源十一月〕宗像祭　上卯日

筑紫の胸形社の祭なり、氏人これを執り行ふ、

平野祭　上申日

これも四月におなじ、臨時の祭もおなじくあり、

氏神祭

〔大宮司長則記〕寛元四年十一月五日、氏神祭、大司盛房、權大司長則、奉神主時能、權神主元忠、供奉館舍饗膳社頭儀式等如例、祇承憲清勤之、

〔拾芥記〕延德二年十一月十八日、氏神出仕也、予依亡母忌日不參向、

〔神宮雜例集二〕年中行事
十一月上申日中臣氏神社祭事如四月
中酉日外宮禰宜氏神祭事二月儀式同

〔神祇提要八〕外宮年中御神事
十一月中之酉日氏神神事

〔玉手繦十〕古く二月四月十一月の靈祭は、今世に絕たるかと思ひしに、近頃聞けば、薩摩國にては、十一月には必氏神祭とて、家々に祭る習ひ也とぞ、但し二月四月に祭る事は无しとぞ其仕法を聞くに、大抵其家に依りて日限定りあり、但し親族中みな同日には非ず、此は互ひに往來集會する爲なり、又日限を定めざる家も有とぞ、親類の中互ひに招つ招れつ、慇に賑々しく祝ひ祭る事なりとぞ、此はいと〳〵愛たき古風にて、何方にても斯く有たく所思ゆるなり、彼國は始め天孫降臨の御本國なれば、自から人心淳く、古風の遺れるにや、

〔續日本紀六元明〕和銅七年二月丁酉、以從五位下大倭忌寸五百足、爲氏上、令主神祭、

〔令集解七上神祇〕仲冬上卯相嘗祭(中略)釋云、大倭社、大倭忌寸祭、宇奈太利、村屋、住吉、津守、大神社、大神氏上祭、

〔萬葉集三雜歌〕大伴坂上郎女祭神歌一首幷短歌
久堅之、天原從、生來、神之命、奧山乃、賢木之枝爾、白香付、木綿取付而、齋戸乎、忌穿居、竹玉乎、繁爾貫垂、十六自物、膝折伏、手弱女之、押日取懸、如此谷裳、吾者祈奈牟、君爾不相可聞、

反歌
木綿疊、手取持而、如此谷母、吾波乞嘗、君爾不相鴨、

右歌者、以天平五年冬十一月、供祭大伴氏神之時、所作此歌、故曰祭神歌、

〔拾芥記〕延德元年十一月十八日壬申、長者長坂(〇敏基諱字)氏神出仕也、和長(〇菅原)子(〇菅原爲學)闕參向、第二大內記在數朝臣(〇菅原)依父重服不參、長者衣冠持笏、和長以下布狩衣也、(俊綱狩衣也)目代狩衣、雜色一人狩衣著之、先參祓殿、於河邊列立、長者次第洗手祓之、參向氏神、於鳥井外下輿入鳥井、長者以下共位重行再拜、以西爲上、長者北上東面、次第左右相分列立、次供祭物、一社飯二合、菜二合、又一社同前、吉祥院侍等役之、自下臈懸手、長者取大土器、入御酒於御前御盃、兩社共供之、二長者參、則東一社可供御酒事也、雖然今度不參、長者立返如元列立、侍取長者所持之大土器、次ニ懸手口供之、如元列、兩社各一拜退下著座、次立置十列馬於鳥井外、今度二匹也、次長者以告文之宣命、召第二人、取副笏而授之、第二人請取也、於神前中央疊一拜、讀告文了、又一拜退下、告文取副笏而返長者也、次各捧幣帛、侍各役之、各二捧持、左右拜之時同手持之、立而乍坐再拜、返所傾、又再拜禰宜二人來、取幣帛立兩社前、其作法先侍等來取幣授禰宜也、次十列馬引廻、今度二匹之間二反引也、次於西馬場合廻之、次長者參社前、一拜之後立向對氏人、坐賽之時、氏人敬笏合手承之、次長者賽口不復坐立、社西邊第二人以下如先進立再拜、立對撤神供、先御酒、次飯以下撤之、長者以下懸手也、並居鳥井外、各撤了、一拜退下、著鳥井外座、三獻終退下、

〔永正記〕下一氏神祭以後番禰宜沐浴事

當宮禰宜宮中當番之時、氏神參向、山宮社參事、可有思慮、具見于年中行事、亦歸參時沐浴事、參籠禰宜可存也、

〔陰德太平記四十〕雜賀彌太郎殿立花事

女房、立花ニ向、明日ハ吾氏神ノ祭ニテ侍ヲ、ワレ賤キ身ノカヽル御情ヲ受、人天ノ榮花ヲ極ムル事、偏ニ此御神ノ御加護ニヤト思侍ヘバ、有シヨリ勝ニ有難モ尊クモ覺エ候、便明ニ三寸ヲ供ヘ、

御内ノ人々ニモ酒ヲ進メ侍バヤト云ケレバ、立花此程ハ何トヤラン心モ不解、歎キ沈ミタル形象也シガ、今日ハイツシカ引替テ強面サ見セシ下紐ノ打トケ顏ナルコソ嬉シケレト思、能コソ承リ候ヘ、御身ノ宣ンニハ蓬萊ニ有玉ノ枝、燕ノ持タル子安ノ貝ナランダニ求テ進ズベキニ、マシテヤ是ハ易キ間ノ事ナレバトテ、翌レバ九日折ニ逢タル吾宿ノ菊ノ下露、今日毎ニ落積リツツ淵ト成迄モ替ラス契ヲ守ラセ給ヘト、神ニ御酒奉リ、家子若黨ニモ醉泣スル許呑セ、吾身モ數杯ヲ重ネケル間、上中下ト無、舞ツ謠ツサヾメカシ、夜已ニ更タリケレバ、或ハ杯ヲ枕トシ、銚子提ヲ抱テ其座ニ伏ナド、狼藉タル有樣ニテ、立花モ前後ヲ不知爛醉シ、帳内ニコソ入ニケレ、(○下略)

〔大江俊章記〕寛延三年四月九日、明後日平野祭也、從今夜神事、　十日神事中不他行、　十一日平野祭也、巳刻沐浴、出行到鈴鹿三品亭、大學允俊盛俊興同伴、於件亭予著淨衣、(白布淨衣、烏帽、奴袴、持笏、)兩人異體、予昇拜殿東階神拜、(座上)先拜第三殿、兩段再拜、(中臣祓、三種祓、)次拜縣社同前、次拜總社二拜、退出於神供所謁鈴鹿左京進一盞、新侍中參詣、(異體)不斗行遇、又揚盞、同伴歸路、於家内祝儀如例、

〔氏神まうでの記〕ことし(○天明八年)は二門神主の、かの二つの祭り(○氏神祭、山宮祭、)はおのれ(○荒木田經雅)專當おこなふべきさだまりの年にてありければ、昔よりの例にて、年のうちは雉子山鳥すべて赤のたぐひくふ事をとゞむ、まづむつきの初めつかた、正員禰宜の中二門の氏人どもより、かの田邊なる氏社のめぐりはき清むべき料足をとりあつめ家の子をかの社にさしつかはし、しめなはひきはへ、御榊さしはやし、御膳ものまつりてをがみまつらしむ、又をり〳〵はき清むべき事をしも、かの田邊の村長、中嶋の何がしにあとのまに〳〵沙汰し置く、(○中略)かくことしはおのれつかへまつるべき年にしあれば、かの田の邊なる社にもまゐりをろがみ、又かの積良谷なる山宮にもまゐりなんとす、(○中略)かゝる所は、まだしらぬ若き人たちをもともなひて、見せもし、をしへもおかまほしければ、卯月の十日といふ日にまゐれり、ともなふ人にもかねてよりかたらひ置て、

まだ夜ぶかきに家を出ぬ、たてまつるべきみてぐらやうの物唐櫃に納れてもたしむ、〇中略田丸といふ町を過て、大和の初瀬にかよふ道をゆけば、をしぼ崎てふ浦あり、此はとりなる岡の上にかりそめにひらばりまつらはせ、水くませ、口そゝぎ手あらひて、心ざせるかの氏社荒木田氏祖天見通命にまうづ、みてぐら八はさみ、御けものまつる高机四具、高もり盛葉、はたのひろものさもの、又みわほりすゑて奉る、贄ははぶきたればは日記して四匹たてまつれり、ひろまへにぬかづきて、もろ〳〵の神態さわる事なくつかへまつらしめたまへ、うみの子の八十つゞきたひらかにめぐみたまへとしもねぎまつりぬ、

〔寛埃隨筆　八〕感應

肉云、〇中略日向は神代發端の國なればにや、先大小の百姓、己が四壁の中に小祠を安置し、先祖を祭りて氏神と云、月々社人を乞て祓す、中にも二月毎家神祭と號して膳を造り、また膾を神供とす、小豆の御供をもて棄を備ふ、社人來りて祓する中、烏鳥來りて御供をはみ行は祭禮終れりとし、頓て親族鄰友をもてなせり、烏もし御供をはまざるときは幾たびも火をあらため、炊きかへて備るなり、〇下略

〔續修東大寺正倉院文書二十〕安宿廣成請暇解文

安宿廣成謹解　申請暇事

合三箇日

右爲私神祭祀、請暇如件、以申、

寶龜二年四月十五日

〔續修東大寺正倉院文書二十〕美努石成請暇解文

美努石成解　申請暇事

合五箇日

右依可私氏神奉、暇所請如件、仍注状謹以解、

寶龜三年(加筆)十月廿八日　上眞繼

〔續修東大寺正倉院文書二十〕某氏請暇解文斷簡

□□□□

右以今月十四日、欲鴨大神又氏神祭奉、由此二箇日閑受給、以謹解、

四月十三日

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月辛丑、小野氏神社、在近江國滋賀郡、勅聽彼氏五位已上毎至春秋之祭、不待官符、永以往還、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年二月癸卯、是日勅、聽大春日布瑠粟田三氏五位已上准小野氏、春秋二祠時不待官符、向在近江國滋賀郡氏神社、

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年九月九日辛未、掌侍(○掌侍、原作大侍從、依一本及類聚國史而改、)從五位上春澄朝臣高子、奉幣氏神向伊勢國、勅賜稻一千五百束、以爲行旅之資、

○按ズルニ、春澄ハ本姓猪名部ナレバ、延喜式ニ載スル所ノ伊勢國員辨郡猪名部神社ハ、其氏神ナルベシ、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年二月十九日乙酉、詔、山城國正税稻三百束、賜從五位下山背忌寸大海全子、以奉幣氏神向阿波國也、

○按ズルニ、山背忌寸大海ハ元大海姓ナリシガ、山背ノ忌寸ニ緣アリテ、山背忌寸ト冠ラセタルナラン、故ニ此ニ氏神ト指セルハ、延喜式ニ阿波國名方郡和多都美豐玉比賣神社トアル蓋是ナラン、

氏神詣

〔三代實錄陽成三十八〕元慶四年八月廿九日庚戌、河內國飛鳥戶神社、賜田一町、以充春秋祭祀之費、緣氏人主稅助外從五位下百濟宿禰有雄、主殿權允正六位上御春朝臣有世等之請也、

〔吾妻鏡十一〕建久二年九月廿九日乙亥、北條殿〇時政室家上洛、是爲奉幣氏神云云、幕下被遣色々餞物、又諸人同致丁寧沙汰云云、

〇按ズルニ、此氏神詳ナラズ、或ハ平野神社ヲ指セルナランカ、

〔伊勢物語下〕昔二條の后〇藤原高子清和后のまだ春宮のみやすん所と申ける時、氏神〇大原野にまうで給ひけるに、このゑづかさにさぶらひける翁〇在原業平人々のろく給はりけるついでに、御車より給はりてよみて奉りける、

大原や小鹽の松もけふこそは神世のこともおもひいづらめ

〔古今和歌集雜十七〕二條のきさきのまだ東宮のみやすむ所と申ける時に、おほはらのにまうでたまひける日よめる　なりひらの朝臣

おほはらや小鹽の山もけふこそは神世のことも思いづらめ

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年正月十日壬午、今朝參詣吉田平野、年首物詣以氏明神爲先之故也、

〔玉海〕嘉應三年〇承安元年三月七日辛巳、今曉小兒〇良經年五始參詣春日社、以館所參也、明日爲吉日、仍明曉可奉幣、前駈六人和泉守季長、四位上總守基輔、肥後守光經、散位光能、六位散位定成、已上五位藤原賴實、四當等也、先例不論四五位儒者君達、只見在之衆皆所前駈也、賴輔朝臣依爲不能騎馬、先向館津、今夜可著西御門也、欲出之時、先有祓事、雖非當日爲致潔齋也、　八日壬午、亥刻、小兒自春日歸洛、參社之儀無殊事云々、前駈六人、網代車四人副、共侍四人、先於祓殿有御祓、次昇致車、居中門、神主泰房申祝詞、前駈光能取幣、奉渡事了給社司祿、前駈一人肥後守光經五位取之、次若宮社正面同率川幣以小使分奉之、次歸宿所、相具女房等、奉謁大僧云々、午四點乘船云々、

〔明月記〕寛喜三年八月十八日辛未、明日有參詣春日之宿願、遠路之煩、貧家之不具、年來懈緩、近日官途事已絶望、在世之計、已思切訖、最後爲拜氏社也、

〔薩戒記〕永享二年四月五日乙亥、自今夕始神事、爲春日詣也、　七日丁丑、今日參詣春日社奉、

〔神拜次第秘抄下〕氏神社拜

天見通命

此氏神社者、在岩井田山巖社森之東、此神宮禰宜一門之氏社也、○中略年中行事四月初申日條云、初申日氏神參、爲供奉除當番之外、正權神主彼社頭參、但件社兩所也、荒木田氏二門田邊本社參祭、同一門小社湯田野社參祭也、但常時宇治鄕岩井田山勸請、兩門并兩所子細不記、

荒木田社拜

天見通命

此荒木田社者、禰宜二門之氏社、在田乃家村也、今此社廢亡、仍兩門氏人祭於一所也、凡自由貴殿以下、至荒木田社拜、於一所石疊勤仕之也、

年中行事正月十一日條云、由貴殿酒殿拜、次朝拜、次山神巖社拜、次氏神荒木田社拜、西方代拜等、一殿乾角柱乾方押蹈踞也、

〔氏神まうでの記〕御代の名あめ明らけしてふ年の八とせの卯月十日の日、田の邊の鄕○伊勢國度會郡なる荒木田氏社にまうでぬ、○中略いにしへはとし毎の卯月の始の申の日に、大宮○伊勢大神宮の宿直にあたれる人をおきては、二門の氏人等はみなこの田の邊の鄕荒木田社にまうむかひて、御祭りをつかへまつり、原野篠の村里のわたりにすめる物忌父等も、ともに〳〵祭の場につらなりてつかへしを、中むかしさわがしかりつる世より、何事もすたれにたれば、此御まつりもかの社にはまゐらずて、五十鈴川の大宮のほとりにて行ふことになりぬ、又一門の氏人等はいにしへ

同じ氏神を小社に遷し、湯田野にあがめまつりけるを、いつの比よりか大宮山の北なる岩井田山にうつしまつりてければ、湯田野にまうづることはやみにき、かくて何事もすたれ行世のまゝに、一門の氏人も近きところは、又その岩井田山の御社にも參らずて、二門の氏人と同じく大宮のほとりにてぞ、祭りはつかへまつるなる、

德川時代氏神

〔事蹟合考〕〔一〕御城內鎮守の事

山王の社をば紅葉山へ引移し、〈○中略〉その後秀忠公〈○德川〉の御子樣方御誕生被遊候而は、紅葉山の山王へ御參詣被遊、御機嫌能御成長被遊候をもつて、諸大名諸御旗本町方までも、紅葉山へ氏神詣仕候に付、段々と繁昌いたし、就中秀忠公社頭を結構に御建立被仰付、只今にもつてその社は上野に相殘りこれあり候となり、

鎌倉時代氏神

〔吾妻鏡〕〔二十四〕建保七年〈○承久元年〉七月十九日、左大臣〈道家公〉賢息〈二歲、母公經卿女、建保六年正月十六日寅剋誕生、○中略〉下向關東、是故前右將軍〈○源賴朝〉後室禪尼〈○政子〉重將軍舊好之故、爲繼其後嗣、依申請之、去月三日可有下向之由宣下、同九日參社稷日、〈乘車、殿上人一人、諸大夫三人、侍十人在之、共云々〉

元旦拜氏神

〔江家次第〕〈正月一〉四方拜事

庶人儀〈拜屬星、數唯云云〉

北向拜屬星、向乾拜天、向坤拜地、〈○中略〉次氏神、〈隨所拜歟〉

〔律記〕長保三年正月朔日癸酉、鷄鳴拜屬星、天地四方、二親墳墓、幷氏神、

〔皇大神宮年中行事〕〈正月〉元日〈○中略〉於酒殿前置石在拜、先酒殿、次氏神〈○○〉乾方、〈各坐〉其後乾向朝拜、〈坐〉

〔大江俊光記〕貞享三年正月元日神拜、氏神拜如例、

〔大江俊韶記〕寶永五年正月元日己酉、風起〈夜月代、[illegible]〉二國岸健康候、奉拜先東方、〈天神、曾祖〉氏神、〈拜〉

[illegible]時拜氏神

〔殿中[illegible]記〕〔二十九〕新入婚禮書事

木曾ハ軍ヲバ不急ケリ、先四方ヲ乾ト見渡セバ、北山ノハヅレニ當テ、夏山ノ繁ノ木間ヨリ、耕ノ玉墻風ノ見エテ、片削造ノ社壇アリ、山林高聳テ鳥居久苔ムセリ、木曾當國住人池田次郎忠康ヲ召テ、彼ハ何宮ト申ゾ、又如何ナル神ヲ奉祝タルゾト尋給ヘバ、答テ申、八幡大菩薩ヲ祝進セテ侍ルガ、垣生莊ニマシマセバ垣生新八幡ト申候ト云、木曾大ニ悦デ、手書ニ大夫房覺明ヲ召レタリ、（〇中略）今度ノ軍勝ン事疑ナシ、但且ハ後代ノ爲、且ハ當時ノ祈ニ、願書一紙社殿ニ進セバヤト存ズ、其相計ヒ給ヘト云、覺明馬ヨリ下、木曾ガ前ニ跪テ、箙ノ中ヨリ矢立取出シ、墨和筆染、疊紙ヲ押開テ、古物ヲ寫ガ如ク、案ニモ及バズ書之、其狀云、

歸命頂禮八幡大菩薩、日域朝廷之本主、累世明君之曩祖、爲守寶祚、爲利蒼生、改三身之金容、開三所之權扉、（〇中略）就中曾祖父前陸奥守義家朝臣寄附身於宗廟氏族、自號名於八幡太郎以降、爲其門葉者、無不歸敬矣、義仲爲其後胤、傾頭年久、（〇中略）伏願冥慮加威、靈神合力、勝決一時、怨退四方、然則丹祈相叶冥慮、幽贊可成加護者、先令見一之瑞相給、仍祈誓如件、

壽永二年五月十一日　源義仲敬白

〔太平記 九〕高氏被籠願書於篠村八幡宮事

去程ニ明レバ五月七日（〇元弘三年）ノ寅剋ニ、足利治部大輔高氏朝臣二萬五千餘騎ヲ率シテ、篠村宿ヲ立給フ、夜未深カリケレバ、閑ニ馬ヲ打テ東西ヲ見給フ處ニ、篠村ノ宿ノ南ニ當テ、陰森タル故柳疎槐ノ下ニ社壇有ト覺テ、燒荒タル燎ノ影ノ幽ナルニ、禰宜ガ袖振鈴ノ音幽ニ聞エテ神サビタリ、何ナル社トハ知ネドモ、戰場ニ赴ク首途ナレバトテ、馬ヨリ下テ甲ヲ脫テ叢祠ノ前ニ跪キ、今日ノ合戰、無事故朝敵ヲ退治スル擁護ノ力ヲ加ヘ給ヘト祈誓ヲ凝シテゾ坐ケル時ニ、賽シケル巫ニ此社ハ如何ナル神ヲ崇奉リタルゾト問ヒ給ヒケレバ、是ハ中比八幡ヲ遷シ進ラセテヨリ以來、篠村ノ新八幡ト申候也トゾ答ケル、足利殿サテハ當家尊崇ノ靈ニテ御坐シケリ、機感最

モ相應セリ、宜キニ隨テ一紙ノ願書ヲ獻バヤト宜ヒケレバ、匹壇妙玄鎧ノ引合ヨリ矢立ノ硯ヲ取出シテ、筆ヲ相ヘテ是ヲ書、其詞曰、

敬白　祈願事

夫以八幡大菩薩者、聖代前烈之宗廟、源家中興之靈神也、本地內證之月、高懸于十萬億土之天、垂跡外融之光明、冠於七千餘座之上、縁雖分化、卒未享非禮之奠、靈雖利生、偏期宿正直之頭、偉哉爲其德矣、擧世所以盡誠也、爰承久以來、當棘累祖之家臣、平氏末裔之邊鄙、恣執四海之權柄、橫振九代猛威、剩今遷聖主於西海之浪、困貫頂於南山之雲、惡逆之甚、前代未聞也、是爲朝敵之最、爲臣之道不致命乎、又爲神敵之先、爲天之理不下誅乎、高氏苟見彼積惡、未遑顧匪躬、將以魚肉之味、偏當刀俎之利、義卒勠力、張旅於西南之日、上將軍鳩嶺、(石淸水)下臣軍篠村、共在于瑞籬之影、同出乎擁護之懷、函蓋相應、誅戮何疑、所仰百王鎭護之神約也、懸勇於石馬之汗、所憑累代歸依之家運也、寄奇於金鼠之咀、神將與義戰、靈威成德風加草而靡敵於千里之外、神光代劍而得勝於一戰之中、丹精有誠、玄鑒莫誤矣、敬白、

元弘三年五月七日　　源朝臣高氏敬白

トゾ讀上タリケル、文章玉ヲ綴テ詞明カニ理濃ナレバ、神モ定テ納受シ御坐ス覽ト聞人皆信ヲ凝シ、士卒悉懇ヲ懸奉ケリ、足利殿自筆ヲ執テ判ヲ居給ヒ、上差ノ鏑一筋副テ寶殿ニ被納ケレバ、舍弟直義朝臣ヲ始トシテ、吉良、石塔、仁木、細河、今河、荒河、高、上杉以下、相隨フ人々我モ我モト上矢一ヅヽ獻リケル間、其箭社壇ニ充滿テ塚ノ如クニ積擧タリ、夜既ニ明ケレバ、前陣進テ後陣ヲ待、大將大江山ノ峠ヲ打越給ケル時、山鳩一番飛來テ白旗ノ上ニ翩翻ス、是八幡大菩薩ノ立翔テ護ラセ給フ驗也、此鳩ノ飛行ンズルニ任テ可向ト被下知ケレバ、旗差馬ヲ早メテ鳩ノ跡ニ付テ行程ニ、此鳩閑ニ飛テ大內ノ舊跡、神祇官ノ前ナル樗木ニゾ留リケル、官軍此奇瑞ニ勇テ內野ヲ指

テ馳向クル、

〔參考太平記　九〕尊氏納願書篠村八幡宮事

尊氏篠村八幡宮願書云

按此願書、與本書所載甚異、然文義鄙陋、誠不足見、是故作太平記之時、蓋改作而載者乎、

敬白立願事

右八幡大菩薩者、王城之鎭護、我家之廟神也、而高氏爲神之苗裔、爲氏之家督、於弓馬之道護人不復虞哉、此上四字不通依之代々滅朝敵、世々誅凶徒、于時元弘之明君〇後醍醐爲崇神、爲興法、爲利民、爲救世、被成綸旨之間、隨勅命所擧義兵也、然間占丹州之篠村宿、立白旗於楊木本、於彼木之本、有一之社、尋之村民、所謂大菩薩之社壇也、義兵成就之先兆、武將頓速之靈瑞也、感淚暗催、仰信有憑、此願忽成、我家再榮者、令莊嚴社壇、可寄進田地也、仍立願如件、

元弘三年四月二十九日本文作五月七日、未知孰是、

前治部大輔源朝臣高氏敬白

〔陰德太平記　四十二〕五月十八日合戰之事

戸次入道ハ、田原入道重忍、柳川左近將監、佐伯惟教、毛利鎭實、臼杵吉弘、志賀、清田、武田、本城、其外宗徒ノ一族侍大將ヲ集會シテ、〇中略カク多ノ勢ヲ以テ後詰シナガラ、當城〇立花無云甲斐攻落サレナバ大友家ノ耻辱、各吾等ガ武勇ノ拙ガ所致也ト屋形ノ怒リ給ベキ所モアリ、率今一度敵陣ニ薨リ、有無ノ勝敗ヲ決シ候ナンズト被申ケレバ、各他ノ儀ナシト同心ス、道雪先日ハ前後ノ列不正、多勢ニ誇リ敵ヲ侮リシ故仕損ジテ候、今度ハ拔懸ヲ堅ク制シ、〇中略一人ノ功ヲ思テ、萬夫ノ列ヲ亂ルヽコト無レト嚴重ニ法ヲ出サレタリ、又大友家ノ氏神由原八幡ヲ陣中ニ勸請シ、神前ニ於テ鬮ヲ取、先陣後陣ヲ定メ、一勢々々總軍相符ノ外ニ一手切ニ符ヲ付、吉日ヲ撰テ、同十八日〇永祿十二年五月辰ノ刻ノ一戰ト掟ヲナス、

出家時拜氏神

〔春日權現驗記四〕知足殿院〇藤原忠實天下の執柄として、生前の榮花をきはめ給しかば、すでに四句の偈をすぐして、いたづらに九夜のやみをまつことをおそれて、功成ぬれば身しりぞかんとおぼしたりければ、出家のいとまを申さむとて、春日のやしろにまゐらせ給たりけるに、十一二ばかりなる兒童にはかにけだかきすがたになりて、離觀事理皆不離識、然此內識有境有心、心起必託內境生故、わなおもしろやといふに、殿下たゞ事ならずおぼしてかしこまり給へるに、この童の申樣、我は是春日第三神也、このたび見參はことにうれしく侍り、そのゆゑは世のつねなきことをおぼしめして、かざりをおろさむと思ひきざし給へるうれしさに、隨喜の淚のところせきをもしらせたてまつらんとて託宣し侍り、相構てわすれず無常を心にかけ給へ、それぞ我はうれしとおもふべき、〇下略

〔玉海〕仁安二年十月十五日己酉、今日聞、若君〇良通、兼實男於七宮〇覺快法親王、鳥羽皇子白川房有出家事、仍余〇藤原兼實向件所、直衣上達部少々告示、中御門中納言、春宮權大夫、左大辨等也、但左大辨束帶、若君著童裝束、先參拜氏神春日、次拜公家、次拜師、各一度、拜了改裝束、著鈍色裝束、件裝束余調之、仍自女院所調進也、向臨[illegible]、已以剃髮、其間事僧等勤仕之、

〔竹林院左府記〕弘安六年八月十三日甲午、今日今出川院〇御年三十一、藤原嬉子有御出家事、右少辨俊定奉行之、〇中略於三身堂〇西園寺內、小御堂也、有其儀、當日早旦奉仕御裝束、〇中略亥刻御戒師〇前大僧正參上、〇中略次仙院渡御御座〇御簾中、戒師起座著半疊、塗香灑水等、打磬二三度、如來唄、唱白以下如常、仙院御拜、氏神春日、國主、故相國〇實氏公、御父、御墳墓二品大夫人等也、

正應六年〇永仁元年六月七日、東二條院〇後深草后、藤原公子、實氏女、御出家也、〇中略酉二點法皇〇後深草召公衡、可有渡御戒場之由有仰、仍以預法師告申前相國果、裹傷以前相國令參給、女院渡御御所、法皇同御坐御總闕所南面、召公衡公卿可召之由有仰、〇中略小時戒和尚青蓮院無品法親王〇慈助、後嵯峨皇子、經賢子

參上給、（○中略）次戒師起座著禮盤、次塗香灑水等、次女院御拜、（兩段再拜如形歟、依爲簾中不見其儀）次先春日社、次先公（○實氏）墳墓、次准后、（常時令坐嵯峨給）

告災異於氏神

〔玉海〕安元三年（○治承元年）五月一日庚子、去夜關白（○藤原基房）送書被示云、氏院（○勸學院）燒亡之後事、何樣可行哉、無先例之間失計略了、能思慮可示送、如此之（○之下恐脫時字）氏公卿可令議也、而近代之法、親昵不來、況疎乎、無人于相訪、爲之如何云々者、余昨日就愚札付其返事所被示也、今日就其報狀曰、先氏社及本願墓等可被祈謝、廿八日丁卯、未刻左衛門權佐光長參入、爲聞先日返事所來也、（○中略）余令申條々御返事、（○中略）余令申之趣、

一氏院火災以後可被行事

可被申氏三社、（○春日、大原野、吉田、）並多武峰本願贈大相國（○藤原鎌足）墓所等也、

社地

〔日本紀略 淳和〕天長六年四月乙丑、山城國愛宕郡丘一處、給右衛門督紀朝臣百繼等、爲祭祀神地、

〔續日本後紀 三 仁明〕承和元年正月庚午、山城國葛野郡上林鄕地方一町、賜伴宿禰等、爲祭氏神處、

別立氏神

〔大鏡 七 太政大臣道長〕かまたりのおとゞむまれ給へるは、常陸の國なれば、かしこのかしまと云ふところに、氏の御神をすましめたてまつり給ひて、その御よよりいまにいたるまで、あたらしき御門后大臣たち給ふをりは、みてぐらづかひかならずたつ、みかどならにおはしましゝ時は、かしことほしとて、大和國みかさ山にふり奉りて、春日明神となづけたてまつりて、いまに藤氏御氏神にて、おほやけをとこ女つかひたてさせ給ひ、后宮その氏の大臣公卿みな此明神につかうまつり給て、二月十一月上申日御まつりにてなん、さま〴〵のつかひたちのゝしる、みかどこの京にうつらしめ給ひては、又ちかくふり奉りて、大原野と申、きさらぎのはつうの日、霜月初子日とさだめて、としに二度のまつりあり、又おなじくおほやけのつかひたつ、藤氏殿原みなこの御神にみてぐら十列たてまつり給ふ、なほもちかくとて、又ふりたてまつりて、吉田と申ておは

しますめり、この吉田の明神は、山かげの中納言のふりたて奉り給へるなかし、御まつりの日、四月後の子日、十一月下申日とをさだめて、我御ぞうにみかど后宮たち給ふものならば、おほやけまつりになさんとちかひ奉りておはしましければ、一條院の御時より、おほやけまつりにはなりたるなり、

〔年中行事歌合〕十番

左勝　大原野祭二月上卯日　經賢僧都

きさらぎやけふ神まつる小鹽山はやかげそへよ花のしらゆふ

左大原野祭、二月十一月兩度別の子細なく侍也、此社は后宮のまゐらせ給はんために、春日の本社は遠き故に、うつし奉らるゝあり、

〔神宮雜例集〕一改宮地事

一中臣氏祖神

正一位勳一等　鹿嶋神宮常陸國鹿嶋郡

正一位勳一等　香取神宮下總國香取郡

正一位勳三等　平岡大神河内國河内郡

相殿姫神

此神者、件三所明神御殿内相住給、別無宮殿、

元明天皇和銅二年己酉、都在奈良京之時、近奉崇居春日神社也、爾時遷祀之由、被祈申大神宮、勅使祭主神祇伯中臣朝臣東人參神宮也、

聖武天皇天平十二年庚辰四月五日、春日御社奉遷高久山御社、是右大臣大中臣清万呂卿致仕、籠居攝津國嶋下郡高久郷之間、住家近所奉崇也、

孝謙天皇天平勝寶八年丙申三月十一日、春日御社、奉祭鎭於伊勢國度會郡嶋﨑也、是宮司從五位下津嶋朝臣○大中臣同祖子松所申請也、

桓武天皇延暦十六年丁丑八月三日官符、移立離宮院於度會郡湯田鄕之時、件社自津嶋﨑奉遷鎭彼院西方也、于時祭主參議正四位下行神祇伯大中臣朝臣諸魚、宮司正六位上中臣朝臣眞魚等也、

〔江戸舊事考 七〕三叉富永町氏神勸請ノ願書

乍恐書付ヲ以奉願上候

一三俣富永町庄八店善兵衞、深川三左衞門屋敷佐右衞門店五郎左衞門奉申上候、乍恐三俣新地之儀ハ、一ヶ年之内貳三ヶ月程繁昌仕、相應之渡世茂御座候得共、春秋冬者殊外淋敷、地代等茂上納仕兼、難儀至極仕候、然ル所當新地住居之者、銘々旦那寺者御座候得共、當所出生之子供氏神無御座候故、所之者共打寄、内々相談罷有候計ニ而、取〻御願申上候者茂無御座候、然ル所、深川伯隆屋敷瑞蓮寺鎭守秋葉權現、三俣新地ニ而御供米講中多御座候而、其上火伏御神ニ而御座候ニ付、右秋葉權現三俣富永町ヘ勸請仕、當所出生之子供氏神ニ仕度奉存候、依之瑞蓮寺住僧江申聞候所、私共願之通御上相濟候者、其旨許容之趣、則寺社御奉行所樣ヘ御願可申上旨被申聞候、當時右秋葉權現地面之儀者、願人五郎左衞門地面千坪餘御座候、内百五十坪瑞蓮寺借地仕罷有候、然ル所右千坪餘之所、此度乍恐御上ヘ奉差上度奉存候、依之三俣におゐて、地面三千坪秋葉權現ヘ被下置、内五百坪社地ニ被爲仰付、殘り貳千五百坪家作地ニ仕度、右之内ヘ料理茶屋十五軒被爲仰付被下置候者、總御地面共ニ繁昌可仕奉存候、依之三俣新地中より壹ヶ年に金千兩宛、中ヵ年三ヶ年之間上納仕、四ヶ年目より七ヶ年之間金千五百兩宛上納仕度、左候得者年中秋葉參詣旁繁昌仕、自御上納無遲滯、追々御益ニ相成候樣乍恐奉存候、何卒御慈悲

を以願之通被爲仰付被下置候者、三俣新地住居之者共迄、莫太之御救と難有仕合奉存候以上、

三俣富永町庄八店
願人　喜兵衛

天明貳寅年十一月

深川三左衛門屋敷
佐右衛門店瑞蓮寺主
願人　五郎左衛門

祭祀

〔三代實錄陽成三十八〕元慶四年八月廿九日庚戌、河内國飛鳥戸神社賜田一町、以充春秋祭祀之費、從氏人主稅助外從五位下百濟宿禰有雄、主殿權允正六位上御春朝臣有世等之請也、

〔氏神ならでの記〕此御社鹿木田氏社の料田、いにしへは御藏神主の家に來りける事、此神主の家に寛正の比、當重神主その事を忘り、それより天正の比まで、料田收納の日記のこりてありつることなどあるをおもひ出て、何くれとどひあはす、けふ此郷の長中嶋の何がしめして物かづけつゝ、つねに此御社の事申さたするものなり、

神階

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜八年七月乙丑、内大臣從二位藤原朝臣良繼病、叙其氏神鹿嶋社正三位、香取神正四位上、

〔續日本紀考證十〕神宮雜例集云、中臣氏祖神正一位勳一等鹿嶋神宮、正一位勳一等香取神宮云云、案大鏡裏書中抄、伊呂波字類抄皆云、鎌足公常陸國人、中臣氏鹿嶋香取神爲氏神、蓋以此、

〔續日本後紀仁明五〕承和三年五月庚子、授无位小野神從五位下、依遣唐副使小野朝臣篁申也、

社格

〔類聚國史神祇十〕天長元年八月丁酉、依從三位右衛門督兼播磨權守紀朝臣百繼、從四位上行越前加賀守紀朝臣末成等奏、紀氏神□□□幣帛例、

〔續日本後紀仁明十七〕承和十四年七月丁卯、修造〔中略〕肥後國阿蘇郡國造神爲官社焉、

神具

〔三代實錄　十四清和〕貞觀九年二月廿六日丙申、以河内國志紀郡林氏神預官社、

〔三代實錄　三十六陽成〕元慶三年十一月六日辛酉、停梅宮祭、梅宮祠者、仁明天皇母、文德天皇祖母、太后橘氏之祖神也、歷承和仁壽二代以爲官祠、今永停廢焉、

〔三代實錄　四十五光孝〕元慶八年四月七日丁酉、是日始祭梅宮神、是橘氏神、頃年之間、停春秋祀、今有勅、更始而祭、

〔年中行事秘抄　四月〕上酉日當宗氏祭事　午日使立

寬平御記云、仁和五年四月十四日乙亥、朕外祖父當宗氏神在河内國、自今年可祭始之狀仰畢、又世紀云、寬平五年四月七日戊辰、是日始奉遣河内國志紀郡當宗氏神祭幣帛使、國司一人專當其事、使食薹等並用國正稅、永爲恒例、當宗社天皇外祖母之氏神也、○又見延喜式神名帳頭註、諸神記、諸社根元記、

〔本朝月令　四月〕上巳山科祭事

太政官符、神祇官、應附官帳、坐山城國宇治郡山科神二座事、右得宮道氏人内藏少允宮道良連等去年八月七日解偁、件氏神、依去寬平十年三月七日奉勅之宣旨、初享公家春秋之祭祀、雖然未附官帳、歲月稍久、望請特被天裁、准於本神、被附官帳、預四度幣、然則值聖主之昌運、永流神冥之威德、以成感歎、鎭守國家者、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣忠平宣、奉勅依請者、官宜承知、依宣行之、延喜十一年正月六日

〔諸社根元記　下〕一山科社

新國史云、延喜十一、正、六、宣旨、山科神二前、右依宮道氏人内藏少允宮道良連等去年八月七日解、初附官帳四度幣、偁件氏神依去寬平十年三月七日奉勅之宣旨、初預享公家春秋祭禮、又預四度幣、○又見諸神記

〔春日權現驗記　四〕三條内大臣○藤原公教重病をうけられたりけるに、松林院の敎緣僧正公圓法橋を

春日社へまゐらせていのり申されける、おの〳〵御社にこもりて日來へにけり、曉京へのぼらんとしけるに、若宮の御殿にて巫女一人舞けるが、庭にいで、おほくの人のなかにこの兩人につげていはく、かの祈申事はたすくべけれども、身氏。人。として大位にのぼりながら、あへて我をおがめず、尤遺恨也、さかわればこのたび命をめしをはりぬといふ、兩人あやしみながら、その曉上洛するに、京の使者道にあひて、すでに事きれ給ぬと申けり、

〔十訓抄十〕行成(〇藤原)は道風が跡を繼てめでたき能書なりけり、(〇中略)彼卿の孫に帥中納言伊房(〇行經子)とておはしけるも、いみじき手書なりけり、春日大明神の示現によりて、すゞろに御經藏と云額を一枚かきて置給ひたりけれども、只今打過ぎ經藏もなければ、あるやうあらんとて置たりけるほどに、帥もうせ給ひて後、遙に年へて後に、思の外に公家より此社に一切經を安置しまゐらせられける時、誰か額をば書べきと沙汰有けるに、此帥の子孫の中より、かゝる事有て彼帥かきおける額有とて、えり出されたるをうたれたるに、神慮に叶給まで有ける事、やんごとなく覺ゆ、

〔古今著聞集一神祇〕仁安三年四月廿一日、吉田祭にて侍りけるに、伊與守信隆朝臣氏人(〇藤原)ながら神事もせで仁王講をおこなひけるに、御あかしの火障子にもえ付て、その夜やけにけり、大炊御門室町なり、そのとなりは民部卿光忠卿の家也、神事にて侍りければ、火うつらざりけり、おそるべき事にや、

〔平治物語三〕頼朝遠流事附盛安夢合事

サテモ頼朝(〇源氏)ハ伊豆國へ流サレケレバ、(〇中略)侍共同心ニ申ケルハ、今ハ御出家ノ事ヲ被申ナ御下向候ハヾ御心安ク候ヒナン、池殿(〇平頼盛母池禪尼)モ能思食、平家ノ人々モ可然トコソ被存候ハメト申進メケルニ、纐纈源五盛安計ゾ耳ニサヽヤキ申ケルハ、如何ニ申候トモ御髪惜マセ御坐

セ、君ノ助ラセ給フ事只事ニ非ズ、八幡大菩薩ノ御計ヒト覺候ト申セバ、打ウナヅキ給ヒケリ、御出家アレト云ニモ、ナヽリ給ヒソト云ニモ、共ニ音モシ給ハヌ心ノ中コソ憚シケレ、永暦元年三月廿日、〇中略曉池殿ヲ出テ東路遙ニ被下ケリ、郎等少々有シモ皆被留テ、僅ニ三四人コソ具シタリシカ、盛安モ大津迄トテ、馬鞍尋常ニシテ供シタリケルニ、佐殿ハ餘所人ノ被流ハ大ナル歎ナルガ、頼朝ガ流罪ハ希代ノ悦ナリトゾ宣ケル、〇中略夜更人聞テ盛安申ケルハ、都ニテ御出家不可然由申候ヒシハ、不思儀ノ夢想ヲ蒙リタリシ故也、君御淨衣ニテ八幡へ御參候テ大床ニ坐ス、盛安御供ニテ數多ノ甃ノ上ニ伺候シタリシニ、十二三計ナル童子ノ弓箭ヲ抱テ大床ニ立セ給、義朝ガ弓胡籙召テ參テ候ト被申シカバ、御寶殿ノ内ヨリケダカキ御聲ニテ、深ク納置ケ、終ニハ頼朝ニ給ハンズルゾ、是頼朝ニクハセヨト被仰レバ、天童物ヲ持テ御前ニ差置セ給、何哉覽ト見奉レバ打鮑ト云物也、君恐テ無左右參ラザリシヲ、其タベヨト被仰、數へテ御覽ゼシカバ、六十六本アリ、彼鮑ヲ兩方ノ御手ニテ押ニギリテ、太キ所ヲ三口進テ、小キ所ヲ盛安ニ投給シヲ取テ懷中スルト存候シハ、故殿〇頼朝父義朝コソ一旦朝敵ト成セ給へ共、御弓胡籙八幡ノ御寶殿ニ被納置、終ニハ君ニ給ハンズル也、又打鮑六十六本參シハ、六十六箇國ヲ打被召候ハンズルト合セ申テ候ツト申セバ、〇下略

〔源平盛衰記二十一〕兵衛佐殿隱臥木附梶原助佐殿事

大場〇景親モサスガニ不入ケルガ、猶モ心ニカヽリテ、弓ヲ差入テ打振ツヽ、カラリ〳〵ト二三度サグリ廻ケレバ、佐殿〇源頼朝ノ鎧ノ袖ニゾ當リケル、深ク八幡大菩薩ヲ祈念シ給ケル驗ニヤ、臥木ノ中ヨリ山鳩二羽飛出テ、バタ〳〵ト羽打シテ出タリケルニコソ、佐殿内ニオハセンニハ鳩有ルマジトハ思ケレ共、イカニモ不審也ケレバ、斧鉞ヲ取寄テ切テ見ント云ケルニ、サシモ晴タル大空俄ニ黒雲引覆ヒ雷オビタヽシク鳴廻テ、大雨頻ニ降ケレバ、雨ヤミテ後破テ見ベシトテ、杉

山ヲ引返ケル、

〔源平盛衰記十七〕源中納言侍夢事

平家ハ都遷トテ福原ヘ下給タレドモ、皇化ノ善政ヲ打トヾメ奉リ、神明ノ擁護ニモ背ケルニヤ、月日ハ過行ドモ、世間ハ閑シヅマラズ、胸ニ手ヲ置タル様ニ心サワギシテゾアリケル、一門ノ人人ハ二位殿ヲ始奉、サトシモ打頻、夢見モ様々悪カリケリ、依之神社佛寺ニ祈頻也、源中納言雅頼卿ノ侍ノ夢ニ見ケル事ハ、イヅコトハ慥ニ其所ヲバ知ラズ、大内ノ神祇官カト覺シキ所ニ、衣冠タヾシキ人ノユヽシク氣高キガアマタ並居タリケル、座上ノ人ノ赤衣ノ官人ヲ召テ仰ケルハ、下野守源義朝ニ被預置御劍、イサヽカ朝家ニ背ク心アリシカバ、召返シテ清盛法師ニ被預給タレ共、朝政ヲ忽緒シ、天命ヲ惱亂ス、滅亡ノ期既至レリ、子孫相續事難シ、彼御劍ヲ召返ナリ、汝行テ劍ヲ取テ、故義朝ガ子息前右兵衛權佐頼朝ニ預置ベシト有ケレバ、官人仰ニ隨テ赤衣ニ矢負テ、滋籐弓脇ニ挾ミ、御前ヲ罷立ケルガ、無程劍ノ袋ニ裹タル大刀ヲ持テ參テ座上ヘ進上スル處ニ、中座ノ程ニ有ケル上臈ノ、頼朝一期ノ後ハ吾子孫ニタビ候ヘト被申ケルニ、紅ノ袴著タル女房ノ世ニモ嚴クオハシケルガ、縁ノ際三尺バカリ虚空ニ立テ被申ケルハ、清盛入道深ク吾ヲ憑テ、毎日不退ノ大般若經ヲ轉讀シ侍ニ、御劍暫入道ニ預置セ給ヘト申、座上ノ次二番目ニ居給タル上臈、ユヽシクシカリ音ニテ、入道イカニ汝ヲ憑トテモ、朝威ヲ背ニ依テ、議定既ニ畢、謀臣ノ方人所望希恠也、ソ顯實ト仰ケレバ、赤衣ノ官人ツト寄テ、彼女房ヲ情モナク門外ニ實出ス、アナオソロシト思ナガラ、夢ノ中ニソバナル人ニ問テ云、座上ノ人ハ誰人ゾ、アレコソ天津國ノ御主伊勢天照大神ヨ、サテ吾子孫ニタベト仰ラルヽハ誰ゾ、天津兒屋根尊春日大明神ヨ、第二番目ノソ顯實ト仰ラレツルハ誰ゾ、鬼門ノ峯ノ守護神日吉山王ヨ、赤衣官人ハ、誰ゾ西坂本ノ赤山大明神ヨ、紅袴ノ女房ハ誰ゾ、安藝國ノ嚴嶋ノ明神ヨト答ト見テ覺ヌ、通身汗水ニ流レテ、サメタレ共猶夢

ノ心地也、恐ロシナドハ云バカリナシ、明旦ニ急主ノ源中納言雅頼ノ許ニ行テ此事ヲ語申ケレバ、中納言、我外ニ又人ニヤ語タルト問給ヘバ、汗水ニ成テ驚テ侍ツレバ、妻ニテ候女ガ、何事ゾ、物ニオソハレタルカト申ツル間、其計ニハ語テ候、中納言サルニテハ此事一定披露スベシ、サラバ汝事ニ合ナン、妻子相具シテ且ク忍ベト宣ケレバ、資財取納テ深隠忍ニケリ、隠スヽトセシカ共バツト世間ニ披露アリ、入道此事聞、大方入道ガ事トイヘバ、上モ下モ目ニ立、口ヲ調ヘテ、加様ノ事云沙汰スル條コソ希怪ナレトテ、蔵人左小辨行隆ニ仰テ、其男搦進ヨ、雅頼卿ニ相尋ヨト噴給ヘリ、行隆行向テ件ノ男ヲ相尋ヌルニ、逐電シテ人ナシ、家内追捕シテ主ノ雅頼ニ相尋ケレバ、其事努々承及ズ、彼夢見テ侍ラン奴ニ付テ御尋有ベキトゾ被申ケル、朝敵誅罰ノ大將軍ニハ節刀ト云御劍ヲ給習也、太政入道日比ハ四夷ヲ退ケシ大將軍ナリシカ共、今ハ勅宣ヲ背ニ依テ、神明節刀ヲ被召返ケリ、高野ノ宰相入道成頼、此夢ノ事聞給テ、座上ノ人ヲ天照大神ト申ケルハ左モ有ケレ、紅袴著タル女房ヲ嚴嶋大明神ト申モ左モ有ベシ、彼明神ハ沙竭羅龍王ノ娘ヲ勸請シテ崇奉ル、春日大明神トテ我子孫ニ預給ヘト被仰ケルハ不審也、ソモ又末ノ代ニ源平共ニ絶果テ、一ノ人ノ御中ニ將軍ノ宣旨ヲ蒙テ天下ヲ治給ベキニモヤ有ラント宣ヒケルガ、ゲニモ源氏三代將軍ノ後、知足院ノ入道殿〇藤原忠實ノ御子ニ、太政大臣忠通公三代ノ孫道家公ヲバ光明峯寺殿ト申、其末ノ御子ニ寅ノ歳寅ノ日刁(トラ)ノ時ニ生給ヒタリケレバ、三寅御前〇頼經ト申、歳九ニテ關東へ下テ世ヲ治メ給ケリ、入道將軍トハ是事也、雅頼卿ノ侍ノ夢モ、成頼入道ノ物語モ違ハザリケリ、成頼ハ花洛ヲ捨テ深山ニ籠シ後ハ、偏ニ往生極樂ノ營ノ外ハ世ノ事ニ汚(イロフ)ベキニハ無レドモ、元ヨリ心深人ニテ善政ヲ聞テハ悦、惡事ヲ聞テハ歎給ケレバ、世ノ成行ンズル有樣ヲ兼テ宣ヒケルニコソ、〇又見二平家物語一

〔源平盛衰記 四十三〕源平侍遠矢附成良返忠事

氏人

肥後國住人菊池次郎高直、原田大夫種直等ハ、平家ニ相從タリケレバ、三百餘艘先陣ニ漕向ヘ、弓ノ上手大矢共ヲソロヘテ散々ニ射ケレバ、源氏ノ兵多ク討レテ舟共指退ク、平家ハ勝ヌトテ、阿波國住人新居紀三郎行俊、唐皷ノ上ニノボリテ責皷ヲ打テ舞ケリ、判官〈○源義經〉ハ軍負色ニ見エケレバ、鹽瀬ノ水ニ口ヲ漱、目ヲ塞テ合掌、八幡大菩薩ヲ祈念シ奉ル、加神明擁護給白鳩二羽飛來テ、判官ノ旗ノ上ニゾ居タリケル、源平共ニ、アレ〳〵ト云程ニ、東方ヨリ一村ノ黑雲タナビキ來テ、軍場ノ上ニカヽル、雲ノ中ヨリ白旗一流オリ下テ、判官ノ旗頭ニヒラメキテ雲ト共ニ去ヌ、源氏ハ合掌拜之、平家ハ身ノ毛竪テ心細覺シケル、

〔運步色葉集字〕氏人(ウヂ)

〔神道名目類聚抄五神官〕氏人(ウヂウド)　職ニアヅカラザル神官ナリ

〔驢驢嘶餘〕加茂下上神職事

神司トハ神主祝等ヲ云、其次ハ座ノ上ミ、是ハ神司ノ弟、或ハ庶流ノ人也、神司ガ闕レバ神司ニ加ル事モアリ、又成下テ氏人ニナル事モアル也、其次氏人ナリ、是ハ侍也、サレドモ綸或歌ノ御會ナドニ、才智ニヨリテ被召出事モアリ、長明ナド其類也、

〔鹽尻十〕諸社神祭其氏人司ル　諸社の神人は、其祭る所の神の子孫祀を奉じ侍る事正史の記文なり、其氏人絕ぬる事あれば定ありて命せらる、後世はかゝる禮典亂れて、勢にまかせて神職をも動ける、猶戰國に及びて、遁逃の武人等神社によりて隱れ、後に自ら其神人となれる多し、〈熊野本宮は二階堂氏之叶、尾州津島は氷室氏神主となる、此類國々に多し、古へよりの神職にあらず、〉

〔今書上〕古昔先賢者、各合其氏姓之祖而享焉、故謂之氏神、而其中有宗子、宗子者其宗所同長、故謂之氏長、且國社亦必多用其神子孫爲祭主、假如大和三輪社、卽以大神氏、河内枚岡社、卽以中臣氏、而其爲姓氏錄二氏各其所祀之後也、武藏有出雲社焉、蓋亦同其國造之先所由出、其命宇是矣也、

〔走湯山縁起五〕第十三帝、志賀高穴御宇〈○成務〉被定諸國之堺、至當國以此二人〈○日神、月神〉所治定之畢、此二人爲夫婦、以月之上旬入八穴之道籠除之、以下旬籠擬當山、國人以之號神冥崇重之、此權現氏人之元初也、

〔伊都伎嶋大明神縁起抄〕鞍職子孫絶無氏人、以他姓人補任此職之時、尚可受鞍職姓也、

〔八幡愚童訓上〕天平勝寶七年御託宣ニ、若吾氏人中一人モ有愁歎、去社住虚空、天下發種々災アルニ、當時氏人懐道理ナガラ溺悲涙、神事衰廢シテ崇敬無誠、可留神明跡ニヤ、天變地夭、風水旱魃、疫癘兵革、横死頓病打連、國土不穩、人民絶事ナシト雖、政ヲシテ蝗虫カリシ畳忌〈史記〉天ハ不勝徳タメシ稀也、

〔權別當宗清法印立願文〕敬白

立願事〈○中略〉

一　別當已下可支配莊園事〈○中略〉

右當所八幡宮者、拜本地者、則一子平等慈悲之教王、仰垂跡者、亦百王鎭護靈驗之尊神、濟度之悲願、誠雖遍三界、内外之利益、殊被于吾朝者歟、〈○中略〉但宮寺領非氏人者、輙莫讓佗人、縱雖暫讓與、一期之後可返付本主氏人之餘裔矣、

〔類聚三代格一〕太政官符

應任諸國神宮司神主事

右大納言從三位神王宣、奉勅、掃社敬神、銷禍致福、今聞神宮司等一任終身、侮黷不敬、祟咎屢臻、宜自今以後、簡擇彼氏之中潔清廉貞堪神主者補任、限以六年相替、

延暦十七年正月廿四日

〔三代實錄〈陽成〉三十九〕元慶五年三月廿六日甲戌、是日制、令五畿七道諸國諸神社祝部氏人本系帳、三年

一進、

〔類聚三代格 一〕太政官符

應三年一進諸神祝部氏人帳（○上文三代實錄作本系帳）事

右得伊豫國解偁、撿案內太政官去貞觀十年九月十四日下當道諸國符偁、貞觀八年四月十一日符偁、去年五月廿五日符偁、右大臣宣、諸社祝部停補白丁、擇八位以上及六十以上人堪祭事者補之、自今以後立爲恒例、但先是補者令終其身者、今諸國所行事忘本符、偏偁氏人幷神戸、悉擬補課丁、論之政途事乖公平、大納言正三位藤原朝臣氏宗宣、奉是氏人幷神戸百姓、而先盡八位已上及六十已上堪事者、若無其人乃擬年少、但至稱氏人無徵實、仍須神主禰宜祝部等氏、每社令勘申細由、國司覆撿造帳申送、永備計會者、國隨符旨、六位以上社祝部氏人帳、每年勘造附朝集使進官、今件帳期限無程、頒類勘造、尋其勘據於公無益、望請官裁、准郡司譜圖一紀一進以備勘會、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宜奉勅宜三年一進、諸國准此、

元慶五年三月廿六日

〔日本紀略 三十七〕天曆元年九月五日丙辰、今日勸學院（○藤原氏學館）椎木無故折、令占云、氏公卿可愼云云、

〔類聚符宣抄 一〕太政官符神祇官（外印）

應補坐土佐國安藝郡從四位下乃（○乃字原無、據一本補、）業神社祝從八位下布師首勝士丸事

右得彼官去七月廿一日解偁、彼社氏人社頭刀禰等解狀偁、件神坐郡內靈驗別嚴、人民所怖無不到盛、愛件勝士丸年來之間、爲擬祝之上、天性貞廉、齡及六十、帶八位、既叶格旨、望請本官裁被補上於官、以件勝士丸被補正員祝、彌令到如在之禮者、加覆審所申有實、望請官裁、被補正任祝、將令勤仕職掌者、正三位行中納言兼左衞門督藤原朝臣師氏宣、依請者、官宜承知依宜行之、符到奉行、

左少辨　　右大史

康保四年五月七日

〔拾遺和歌集雜十〕大原野祭の日、さか木にさして女のもとにつかはすとて、　一條攝政（○藤原伊尹）

おほはらの神もしるらん我こひはけふ氏人のこゝろやらなむ

〔左經記〕寛仁元年十一月三日丁酉、爲行祭事參梅宮、先著外幄座、催行雜事等、又諸司兼儲饗饌、盃酌一兩巡之間、修理大夫被著、仍起座率外記史、上卿相共著祭場座、裝束雜事皆如常、但氏人等遲參、又供奉諸司内侍同不參、仍以大膳少進從五位下上野朝臣廣遠爲神主、并大藏宮内等置代、（先例以氏人爲神主、而遲參、仍有定以廣遠爲神主、又兩省置代、先例用諸司六位官人、而今日可然諸司官人不參、仍以廣遠爲輔代、令賜蘲木綿并餞等、件事頗不快、不可爲例、）祭事漸畢之間、諸陵頭橘内位參入、奉仕和舞、事畢上下分散、

〔江家次第五二月〕大原野祭

先著行事座、居膳、（所司并后宮居、不居、此日饗膳、藤原氏后儲之、氏后不在之時、氏長者儲之、○中略）

著著到殿、

次氏人院別當等同著座、○中略

著到事

院別當申云、氏人著到奉仕（禮留）正六位某司藤原朝臣某、辨結取（天）云、六位乃上ノシナ某司政ヒト藤原朝臣某申歟、別當稱唯、辨申上卿云、著到奉仕氏人某司政ヒト藤原某、上卿諾、辨稱唯、

〔江家次第五二月〕上申日春日祭事

當日上卿先著宿院饗所、（上卿東面、辨南面、五位已上氏人南北相分、六位西面、上﨟從南、辨并諸大夫從北著之、諸司使中有氏人者同著、）催諸司使内侍等、（有官別當奉辨仰、以雜色令催之、内侍近衞府使遣國氏人催之、）有杯饌、三獻或一獻、使使來集列見辻、上卿率辨氏人等參向、各著祓戸座、六位別當催氏人使使等、上卿座（一行）、辨座（一行）、使使座、（一行、其後參會氏人座、次外記史、并有官別當座、使次座、）

○中略祓畢(異姓使使自此退歸)著著到殿、(不氏人者不著、氏六位以上任次書判、筆硯辨官儲之、上卿西面、五位氏人等南面東上、有官別當六位氏人着南座、無官別當氏人着其後座、他北面東上、)

〔延喜式 十一 太政官〕凡平野祭者、桓武天皇之後王、(改姓爲臣者亦同、)及大江和等氏人、並預見參、

〔江家次第 六 四月〕平野祭

上卿參入、(神出隣向)立相揖、率著神殿座、(字合屋七間四)上卿(入自西角、著座)辨以下五位以上、(入自神角著座、以上北面東上、)以上若爲氏人者、先奉幣後着、以上北座、(件座亦有神祇伯部職等官人、巫女以上座、)外記史并有官氏人一列、無官氏人一列、外記官史生官掌喚使一列、以上南尾、(北面東上)

〔春日權現驗記 三〕知足院殿、(○藤原忠實)長者にておはしける時、永久二年十月のころ、常陸國司鹿嶋の宮を造營して、御社のありさまを記錄して、國司かよひける殿中の女房のもとへつかはしたりければ、殿下御覽じて、御扇をかの女房に給はせけり、○中略國司これをみて一首をそへて鹿嶋の宮にたてまつりけり、

千とせまでかけてぞまもる氏人のかみへといます君のたまづさ、これをみな寶殿にをさめけり、

〔永久四年百首 雜〕社　顯仲

杉村にまめ引かけてうち人のひかるばかりにみがく玉がき

〔中右記〕長承二年八月二日甲申、祈年穀奉幣也、○中略以召使諸社使次第一々召之給宣命、○中略梅宮(氏人無○中略)給畢、四年八月廿四日、一日下給諸道勘文入道返上之、○中略神社之前、以異姓使人補幣、可被停止、猶令氏人可補歟、

〔春日權現驗記 十六〕建久七年九月廿七日の夜、閑房等を引率して當社に參詣す、正預等をりふし從候せざりければ、當番の氏人におほせて、御山の御榊の枝五六尺ばかりきらせて、やがて氏人

にかの御榊の枝をもたせて、一御殿の寶前にて祝を申させてのち、上人〈○解脱〉御榊をうけとりて、南門の櫻の外の西腋に置たてまつりて、〈○下略〉

〔續後撰和歌集〈九神祇〉〕神樂をよませ給うける　土御門院御製

榊とるやそうぢ人の袖の上に神代をかけて殘る月影

〔吾妻鏡〈十九〉〕承元五年〈○建暦元年〉十月十三日辛卯、鴨社氏人〈○人字、據一本補〉菊大夫長明入道〈法名蓮胤〉依雅經朝臣之擧、此間下向、奉謁將軍家〈○源實朝〉及度々云云、

〔十訓抄〈十〉〕近比鴨社の氏人に、菊大夫長明と云者有けり、和歌管絃の道、人に知れたりけり、社司を望けるが不叶ければ、代を恨みて出家して後、同じく先立て世を背ける人のもとへ云やりける、

いづくより人は入けんまくず原秋風吹し道よりぞこし、深き恨の心のやみはしばしの迷也けれど、此思をしもしるべにて、實の道に入と云こそ生死涅槃と同く、煩惱菩薩體一也けることわり、違はざりけりと覺ゆれ、

〔古今著聞集〈一神祇〉〕大夫の史淳方わかゝりける時、常に賀茂へ參りけり、ある夜下のやしろに通夜したりけるに、人來て淳方に告けるは、汝かならず大夫史にいたるべきものなり、其時偏頗あるべからず、氏人祐繼といふものあり、それを師とすべしとてうせにけり、夢さめてふしぎの思ひをなして、祐繼といふ氏人やあると尋ければ、禰宜祐賴が次男に、いまだ年わかきもの有と聞て、尋あひて祈りすべき由ちぎりて、其後祐繼も禰宜に至り、淳方も前途とげてけり、官務九年が間清廉の聞えありし、ひとへに神の御はからひなりと覺てやんごとなし、

〔詔刀師沙汰文〕內宮祠官等謹言上

欲早停止二宮相兼非儀、被相分詔刀師於二宮、蒙平均神恩、爲外宮祠官等、以諸國參詣輩等所捧御幣物、抑留當宮分條、神慮有恐子細事、

右稱三姓氏人者、大中臣荒木田度會是也、仍中氏者掌天神地祇祠職爲三氏之上﨟兼二宮之拜趁者也、爰正權禰宜、內宮者荒木田、外宮者度會氏、各居一宮奉仕之職、全無兩宮兼行之法、然間王侯卿相從奉獻幣帛之時、二宮御祈禱師令奉幣者例也、關東將軍家、相州刺史以下大名、又以同前也、而以諸國參詣貴賤幣物、外宮祠官職掌人等一向抑留、而令拜領之條神慮有恐、且雖當氏之人難啓白之故也、因玆彼宮氏人等者、錢帛宛藏、酒肴堆集、貧富雲泥、自今以後者、分幣帛於內外宮、可遂神拜之由被下御下知者、雖雛鳳前彌儀禮、其齋屋露底登均慈惠、凡處々權屬社官等、各憑諸權之力、令繼累葉之業、何限于當宮不申達理途哉、然早停止二宮相兼非儀、分遣刀師於內外宮、爲兼平均神慮言上如件、

元弘二年三月日

〔醍醐雜抄〕一離宮兩社事

下社者、仲哀天皇御子忍熊皇子（應神天皇御舍兄）、離大津之宮、宇治河之汀留跡御坐、依神託延喜聖代仰山城國司、神殿已下被致造營、是下社屬離宮中、（自延喜年中、至長暦年中、）五百餘年、（○中略）下社祭禮供節勤仕氏人事、

四姓氏人者、（宇治氏、酒波氏、佐伯氏、勝部氏、）

〔歌林四季物語〕一廿五日（○正月）の北野のたいさくけんさくのことはじめは、菅原の氏人、第一のかんだちめのなし給ふ事なるべし、

〔諸神記〕上一賀茂大明神

天武天皇六年二月丙子、令山背國營賀茂神宮云云、

鴨氏人爲秦氏之聟也、秦氏爲愛聟、以鴨祭讓與事、

〔峯相記〕酒見大明神者、養老六年（壬戌）住吉大明神并五所王子當國（○播磨）ニ入坐ス、（○中略）住吉ハ本地高貴徳王菩薩、酒見ハ十一面觀音ト云々、毎年四月初丑日、飾磨津ニ御祓トテ御出ノ後ニハ、田原川

雜載

ヘ御出、鈴森是也、當時ハ社頭ノ南常滑ヘ御出テ、氏人神人供僧等供奉ス、

〔和漢三才圖會 大和七十三〕石上布留社 在布留郷

七月七日修護摩、自寶藏奉負出、而衆僧有行法、謂之寶渡、永久寺、龍禮寺僧、及氏人等百人執行之、

〔古今神學類聚抄 神道二〕神道併見辨

道ハ則元祖神ノ道ヲ其儘ニテ神道ト云ヒ、國ハ本ヨリ神產ノ御國ニテ神國ト稱ス、是故ニ萬般皆以神斷リ來レル風儀ニシテ、○中略至尊ノ外ハ皆諸神ノ枝葉分レテ各始祖神アリ、故ニ四民諸工ノ產態祖神アリ、其產業悉ク玄古ヨリ傳來セルノ神道ニシテ、神職ハ猶祭官祖神ノ苗裔氏人ヲ以規模トシ、社職ニ補任スル故實也、

〔空穗物語 梅の花笠〕は、かた藤氏におはします、うちに御願ありて、かすがにかぐらたてまつり給はんとていそがせ給ふ、○中略かくて二月廿日になんまで給ける、○中略民部卿源さねまさ、春日のみや、

うぢ人のまとゐるけふはかすがのゝ松にも藤の花ぞさくらし

〔橘窓自語 中〕伊勢にて荒木田度會二姓の外をば異姓といひ、八幡にて紀氏の外を他姓といへり、春日社に藤原氏の外の人參れる時は異姓といへり、

〔西宮記 臨時六〕諸社遷宮事

凡氏社事、氏人承行云々、

〔新編式目追加〕一郡內寺社事

右件寺社者、多是爲領家進止歟、若又地頭氏寺氏社者、私進止歟、所詮任先例、今更不可及新儀、

〔相模集〕つねよりも思ふ事あるをり、心にもあらであづまぢへくだりしに、かゝるついでにゆかしき所みんとて、三年といふとしの正月、宮根にまうでゝ、なにごともえ申つくすにまじうお

ぼえしかば、道にやぜりてふり、つれづれなりしをり、心の中におもふことを、やがてたむけのぬさをちいさきさうしにつくりて、かきつけし百ながら、みなふるめかしけれども、やがてさしはへてけしきばかりかすむべきならねば、まことにさかしう心づきなきこともおほかれど、にはかなりしかば、やしろのしたにうづませてき、精進のほどはとききといふ事をぞせし。○中略

早夏

ふたかたに我うながみをいのる哉このてがしはのひらでたゝきて

〔中古歌仙三十六人傳〕相模

父不詳、不知氏神之由、見家集云々。○又見拾芥抄

〔源氏物語二十七行幸〕女はきこえたかく、ながくし給べきほどならねも、人の御むすめとて、こもりおはするほどは、かならずしも氏神の御つとめなど、あらはならぬ程なればこそ、年月はまぎれすぐし給へ、此もしおぼしよることもあらんには、春日の神の御こゝろたがひぬべきも、つひにはかくれてやむまじき物から、あぢきなくわざとがましき後の名までもうたゝあるべし、

〔醒睡笑入〕しうく

夏の天に數日雨ならて、民家旱損を歎、氏神の社頭に風流をかけ、雨を乞に一滴もふらず、いつもふるが奇特やなぞ沙汰しあへり、かたくなゝる宿老打うなづき、今度のをせりがうらは一向氣にあはなんだ、なにが太鼓をば、てのつけ、てれつけ、てつてれつけとうち、鐘をばてんき〳〵やとたゝいて、笛をひよりやひよりとふいた物、何としてふらふに、

〔玉鉾百首〕世世乃祖乃美加寶忘勿、代代乃祖波己賀氏神、己賀家之神、

〔玉鉾百首解下〕代々の先祖は、すなはち我家の氏神ぞとなり、おの〳〵ほど〳〵に家の業ありて、世を安くわたるは、みな先祖の御蔭なれば、その家々にとりては神なり、先祖の御蔭は一日

も忘るまじきわざぞとなり、朝夕祀り奉りて、孝養をつくすべきなり、

〔胡蝶菴隨筆〕辨道書に云、佛法には殺生を堅く禁ずれども、海邊の民は耕作せず、魚を捕て產業とする故に、其邊に住僧侶は朝暮に佛を禮し經を誦し、或は大法を修し、或は大般若經を轉讀などして、ひたすら漁家の爲に福を祈り候、漁家の福と云は、魚の多くあつまりて人に捕るゝにて候、魚多くとらるれば、漁家其利を得て產業豐かになり、其繁昌する故に佛も僧も其餘澤を受候、左かれば海邊に住僧は手づから魚を殺すと同じ科にて候と云々、誠に此一條の辨道は太宰の道理極成の所なるべし、出家者の祈禱の法を行ずるさへ本業にはあらざるに、況や漁者の殺生を業とする爲に其利を祈るといふは、海邊に住僧侶の大なる誤りなるべし、是等の祈禱こそ其所の氏神の巫祝をして勤さするが相應なれ、出家者のすべき祈禱にはあらず、

古事類苑

神祇部十三

產土神

古事類苑

神祇部十三

産土神

産土神ハ、之ヲウブスナノカミト云ヒ、轉リテハウブシナノカミトモ云ヒ、略シテハウブスナト云ヒ、又ウブガミトモ云ヘリ、ウブトハ生ムト同語ニシテ、スナハ或ハ砂ノ義ナリトシ、或ハ住場、若クハ爲根ノ轉語ナリトモ云ヒテ、未ダ一定ノ説アラズト雖モ、要スルニ、ウブスナトハ、各人ノ本居、即チ各人ノ産出セル土地ヲ云フモノニシテ、産土神ハ其産土ヲ守護スル神ノ稱ナリ、

産土神ノコト、古來史籍ニ載スル所實ニ希ニシテ、之ヲ詳ニスルニ由ナシト雖モ、塵袋抄ニ引ク所ノ尾張國風土記ニ、葉栗郡若栗郷宇夫須那ノ社アリ、廬入姫誕生産屋ノ地ナリ、故ニ此號アリト云ヘルハ、蓋其初見ナルベシ、廬入姫ハ景行天皇ノ朝ノ人ナリ、次テ清和天皇ノ朝、讃岐國宇夫志那神ニ、神階ヲ奉リ給ヒシコト三代實錄ニ見エタリ、二書ニ云フ所、共ニ産土神ノ一轉シテ社名トナレルモノニシテ、産土神ノ稱ノ既ニ當時ニ有リシヲ知ルニ足ル、後世ニ及ビテハ産土神ヲ以テ氏神ト稱シ、其地ニ生ルヽモノヲ以テ産子ト云ヒ、又氏子トモ云ヘリ、

氏子ハ古ノ謂ユル氏人ナリ、コハモト氏神即チ祖神ニ對シテ、其氏ノ子孫ヲ指ス稱ニシテ、原來産子ト同ジカラザレドモ、共ニ其地ノ生民ヲ守護シ給フコトノ相似タルニ由リ、終ニ

之ヲ混ズルニ至リシナリ、

氏神氏人ノコトハ、別ニ氏神篇アリ、參看スベシ、

名稱

〔運歩色葉集 宇〕産社(ウブスナ)

〔節用集 宇〕産宮(ウブスナ)(宇夫須那)

〔增補下學集 上一 神祇〕産宮(ウブスナ)

〔書言字考節用集 三 神祇〕生社(ウブスナ)(生土神、本居同、本朝俗呼二産地之神一爲二生社一、)産宮(ウブスナ)

〔日本書紀通證 二十七〕本居(ウブスナ)(字夫須那、生土也、)

〔塵添壒囊抄 十三〕本居(ウブスナ)事

ウブスナト云ハ何事ゾ、當時ハ所生ノ所ノ神ヲ云歟、或ハ本居ト書キ、或ハ産生(ウブ)ト書キ、又宇夫須那共書也、風土記ニ云、尾州葉栗郡若栗郷宇夫須那ノ社アリ、廬入姫誕生産尾ノ地也、故ニ此號アリト云云、廬入姫命ハ景行天皇ノ御宇人也、又ハ強神ノ心ナケレ共、只所生ノ處ヲウブスナト云也、日本紀ニハ本居ト書テ、ウブスナトヨム也、本有シ所ヲ云義也、又推古天皇ノ御宇、阿曇連阿部臣ガ申タル辭、葛城縣ハ僕ガ本ノ産生(ウブスナ)也ト侍リ、是等ニハ神ノ心不見也、

〔日本書紀 二十二 推古〕三十二年十月癸卯朔、大臣(馬子)○蘇我遣阿曇連(闕名)阿部臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、葛城縣者、元臣之本居(ウブスナ)也、故因其縣爲姓名、是以冀之、常得其縣、以欲爲臣之封縣、○下略

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜五年八月甲申、勅、外國五位已上、身亡本居者、自今以後、宜割當國正稅、給其賻物、

〔續日本後紀 三 仁明〕承和元年六月辛丑、大和國人、外從五位下伴宿禰直足(○直足、本作直足、)等卅五人、改本居貫附左京、

〔三代實錄 六 淸和〕貞觀四年二月廿三日壬戌、河内國志紀郡人、外從五位下行木工助兼右大臣家令

志紀縣主員成、正六位上行鼓吹佑志紀縣主福主、散位大初位上志紀縣主福依等三人、賜姓宿禰、即改本居(ウブスナ)隸左京職、　廿八日丁卯、攝津國河邊郡人、正六位上行內膳典膳高橋朝臣藤野等、改本居貫左京職、

〔三代實錄清和九〕貞觀六年八月八日壬戌、播磨國飾磨郡人、陰陽寮陰陽師從八位下弓削連是雄父、正六位上弓削連安人等、改本居貫附河內國大縣郡、近江國犬上郡人、左近衛府生正七位下春良宿禰諸世、改本居貫附山城國愛宕郡、河內國若江郡人、故從五位下春江宿禰安生、式部大錄正六位上春江宿禰良並、太宰大典從六位上春江宿禰敏雄蔭子、正六位上春江宿禰常嗣等、改本居貫左京職、　十日甲子、山城國乙訓郡人內膳典膳正六位上丈部谷直福麻呂等、改本居貫附左京、河內國丹比郡人、太宰大典正六位上安原宿禰臣雄、左近衛將曹從六位下安原宿禰貞臣等、改本居隸右京職、　十一日乙丑、伊賀國名張郡人、左史生從六位下伊賀朝臣春野、改本居貫山城國葛野郡、

〔平治物語三〕賴朝遠流事附盛安夢合事

三月〇永曆元年廿日ノ曉、池殿〇平淸盛繼母池禪尼ヲ出テ東路遙ニ被下ケリ、郎等少々有シモ皆被留テ、僅ニ三四人コソ具シタリシガ、盛安モ大津迄トテ、馬鞍尋常ニシテ供シタリケルニ、佐殿ハ餘所人ノ被流ハ大ナル歎ナルガ、賴朝ガ流罪ハ希代ノ悅ナリトゾ宣ケル、去レ共內ノ藏人ニテモ有シカバ、雲上ノ交モ難忘、后宮宮司ニテモ侍シカバ、其餘波モ惜カリキ、親ニモアラヌ池ノ禪尼ノ情ヲ懸給ニモ、別奉レバ袂ノカワク隙ゾナキ、越鳥南枝ニ巣ヲカケ、胡馬北風ニイバヘケルモ、生土(ウブスナ)ヲ思故ゾカシ、東平王ト云者ノ旅ノ空ニテ失ケルガ、墓ノ上ナル草モ木モ故鄕ノ方ヘゾ靡ケル、生ヲカヘテノ後迄モ、生土ハ忘ヌ習ナルガ、追立ノ撿使靑侍季通、粟田口ヨリ次第ニ路次ニ弄物ヲ奪取テ、狼籍殊ニ甚シ、

〔神道名目類聚抄 四神祇〕産社(ウブスナ)　産神(ウブスナカミ)　産社トハ、出生セシ本土ノ神ヲ云、譬ハ帝都ノ二條ヨリ上ノ方ハ、上下ノ御靈社ノ敷地ナリ、此地ニ出生ノ兒ハ、上下ノ御靈社ヲ産社トシ、兒ヲ御靈ノ産。子。トス、二條ヨリ下ノ方松原ニ至テハ、祇園社ノ敷地ナリ、此地ニテ出生ノ兒ハ祇園社ヲ産社トシ、其兒ヲ祇園ノ産子ト云ナリ、或云、産スナトハ梅宮ノ儀ナリ、婦女安産ヲ彼神社ニ祈、社ノ砂ヲ受來テ産ノ守トス、是故ニ産砂ト云事アリト云リ、是ニ就テ宜得アリ、安産ヲ梅宮ニ祈、社ノ砂ヲ守トスル故ニ産砂ト云事左アルベシ、彼社ノ砂ハ是産砂ノ義、安産ノ守トスル故ナリ、産社ヲウブスナト訓ズル事、深秘ノ義ナリト云ドモ、迷ヲ覺サンタメニ粗其由ヲ述、社ヲスナト訓ズルハ、砂ハ土ノ義ナリ、是出生ノ本土ノ神ヲ云、諸社ヨリ出ル牛王ノ守札亦此義ナリ、猶秘訣アリ、

〔睡居雜錄補抄〕産やに砂をちらす事

梅宮社記云、抑當社明神者、人皇五十二代嵯峨帝后檀林皇后廟也、當時嵯峨帝、其志常以黎民如子也、故天下皈之、如湊市之貨、國中服之、似水流下也、雖然帝以無太子未生、而寂々不樂、因扶被祈上下神祇之中、殊被祭木花開耶姫也、一夜三更之比、忽有一丫鬟小女而イ枕上、帝問汝是誰之女子耶、對云、妾是大山祇之神兒、木花開耶姫也、神代昔一夜有身、遂生四柱口而無恙、汝願我尤切也、不日可有懷胎、爲妃造産屋以待之、語畢夢覺、厥後檀林已有姙子時皇后云、吾當産之時、必産室敷清砂、其後産月既滿、而所乞敷清砂也、皇后其上生兒歸生矣、帝抱欣喜無有限、依所今民家欲産者、當社砂敷産婦之下者、蓋是神道法也云々、

〔睡居雜錄〕本居

推古紀、大臣奏曰、葛城縣者元臣之本居也、是をウブスナト傍訓せり、後世の俗説なるべけれど、猶古語かもしらねば引り、生産ノ時、其氏神の社の土をとりて、産屋に敷ことあり、かの梅宮より奉る砂是なり、それを本にて先祖より生れし地をも、我生れし所をもいへり、

〔縣居雜錄補抄〕うぶすな
後々は神のみうへにのみいふことのやうに成行て、たゞ產土をさしてうぶすなといひし事みあたらず、
○按ズルニ、本書ニ後々ニ產土をさしてうぶすなといひし事みあたらずト云ヘルハイカヾアラン、サルハ下條引ク所ノ玉手繦ニ、世ノ諺ニ人ノ性質ノ生土ニヨリテ異ナルコトヲ產土(ウブスナ)がらなど云ふト見エタルニテモ、後世猶此語ノ存スルヲ知ルベシ、

〔倭訓栞前編四字〕うぶすな　日本紀に本居をよめり、產土の義成べし、邑里の名にいふも名ある人の出たる所をよべり、その義風土記などに見えたり、俗に本村の社祠をもいへり、神名帳に宇夫須那神社といへるも皆同じ、西土に齋土地など見えたり、

〔神祇稱號考〕三本居(ウブスナ)　產土神
本居の宇夫は、もと宇牟と同語也、生はウミ、ウマルなど自他に活用すれども、產はうごかざる體の語なり、されば產婦、產屋、產殿、產衣、產湯、產養、產毛など總て出產の時の物にかぶらせいへり、こを鵜葺草葺不合尊の故事をとりて、產屋を鵜羽もて葺けるよりいふといへる說はうけがたし、さてウブスナは產住場(ウブスミニハ)にて、產出てやがて住場(スムニハ)なればいふにや、須美の美を省き邇波の切那なれば、宇夫須那とはいへりと見ゆ、場は處といふにおなじ、大庭などいふ地名あるにても知るべし、漢字に配れば生土すなはち宇夫須那なり、推古紀卅二年の條に、葛城縣者元臣之本居也、故因其縣爲姓名云々、續日本紀卅三に、外國五位已上身亡本居者云々、續日本後紀三に、伴宿禰直足等廿五人改本居貫附左京云々、三代實錄六に攝津國河邊郡人正六位上行內膳典膳高橋朝臣藤野等二人改本居貫左京職云々、これ等に、本居とかきたるもみな生土の心也、本居の所見、歷史をはじめとして古書にいとおほかり、宇夫須那神といふも、我產土の鎮守なればなり、○中略三代實錄

九に讃岐國梶州天川宇夫志奈神あり、志と須は通音なり、また須美の切志なれば、やがて産住場の心としてもきこゆ、さて後に産土神を誤て氏神ともいへり、氏神氏社は一族崇仰の神社の事なれば、通ざるにはあらねど、古くは其祖先を祭れる神社の稱なり、臥雲日件錄第四に、凡世人以神明主于我所生之地者、爲之氏神、予生于界南、故住吉乃氏神也云々とあるは、下りての世の稱なり、

〔産須那社古傳抄〕されば産須那と稱すは、爲産根といふ事なるを、根と那とは親しき通音にて、産須那とは稱るにて、萬物を生產せしむる根本神と申す義なり、然るを產砂の義なりとて、近世の學者の產土の字を墳きつるは大きなる誤なり、

〔產須那社古傳抄廣義〕產須那といふの義は、既に本文に述るが如く、爲產生といふ言なるを、ミムを約むればムとなるを、通音のブに通はして、宇夫須とは云るにて、其本須とは、產靈神と申を始め、苔のむす、或はむす子、娘などもいふむすにて、俗に云はゞ、苔のむすは苔の出來ること、むすこ、むすめは、出かした子、出かした女といふほどの意なり、さるは生成すといふが言の本なればなり、然るを蒸といふ義ぞとおもふは非なり、かゝれば產須那といふ時は、萬物を出かし坐す根本といふ意とはなる事なり、其は那とは根といふ事なるを、同韻の那とは通はしたるにて、少彦名命と申す神を、少彦根神とも申も同じことにて、其根とは草木の根と云ふも同じく、根より幹も枝も葉も生ずるものなれば、草木に根のあるが如く、氏子地に生ずる萬物の根元といふ義を以て、產須那とは稱し奉れる也、其は母といふ枕詞にたらちねどいふも、身體を合且足根本といふ事なるに思ひ合しても悟るべし、此を重し根といふの義ぞと思ふはいふに足らず、

〔延喜式神名九〕尾張國葉栗郡宇夫須那神社

〔玉手繦五〕宇夫須那といふ語の正しく所見たるは、尾張國風土記に、葉栗郡若栗郷宇夫須那社、廬入姫誕生地也、故有此號と見え、それを神名式に宇夫須那神社と出されたり、神學類編に、此神社は手力雄命なりと云ふ說あり、廬入姫の誕生より、社號を宇夫須那と稱せるにや、此姫は景行天皇の皇女なりと云へり、此は然る說ながら、若くは御產の安からむ事を祈りて、手力男命の、かの石戸を開たまひし事などを思ひて、此時ことさ更に祭り給へるにも有べし、但しこは廬入比賣命の產土神にこそ有れ、今云ふ產土神は、誰にまれ其生れたる土地の鎭守を申せり、其生れし土地を宇夫須那といへる例は、推古天皇紀三十二年の所に、蘇我馬子が天皇に奏せる語に、葛城縣者、元臣之本居(ウブスナ)也、故因其縣爲姓名とあり、諸書に生土(ウブスナ)、產土(ウブスナ)なども書效ひ、淸和天皇紀貞觀六年十月の所に、讃岐國梶州天川宇夫志奈神從五位下といふ事も所見たり、然れども此は何神と云こと詳ならず、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年十月十五日戊辰、加授讃岐國正六位上宇夫志奈神從五位下、

〔歌林四季物語春一〕當社〇賀茂神社はことにこの御國の一の宮井にておはして、みかどの御うぶすなの御神なれば、桓武のすべらぎより、ありがたくあさましきまでたうとみ信じおはして、くらづかひ例幣などすゑ〴〵の御つかひ、すさうさゝらなることにて、百王の御まもり、よそのみやゐにあにおとらめや、

〔諸神記中〕一八所御靈

一至德元年九月二十一日宣旨

　從二位御靈神

　宜奉授正一位之記

　　　　　　　　　　藏人頭左中辨藤原賴房奉

口宣一紙獻上之、早可令下被行之狀如件、

　九月廿一日　　　　　　左中辨賴房奉

進上　大炊御門大納言殿

御位記持參事、被仰家君〇卜部兼凞給旨云、

御靈神位記可令持參給之由、攝政殿〇藤原基凞御氣色所候也、仍執達如件、

九月廿一日　左中辨賴房

謹上　神祇大副殿

抑大内記服暇之後被補也、於位記者追可被進之歟、且先例證文、天慶諸神一階位記、至天曆延引了、先以宜下被告申社頭、追可被進位記也、刑部大副殿〇卜部兼豐父紫野今宮極位事、然本居中御沙汰、今上御靈社者、家君予〇卜部兼敬之本居也、追被例被申沙汰了、神慮定有擁護者歟、

〔新社緣起文書七〕常陸州新治郡賀茂部村賀茂大明神志年譜

吾賀茂村頭賀茂大明神者、〇中略治曆乙巳〇中略元年、以年之十二月、公〇源頼義之二男賀茂次郎義綱公、適領此國、茲安隨身之產神賀茂緊像于當社、而封以賀茂部一邑〇今新治以屬中山、矣、考其地紀乃直千解之量也、公齊奉幣帛而請約神永爲其氏武化之鎭守、

〔新神記中〕一粟田口天王事

日吉十禪師

東鄕庶主二尊令勸請給也、四百年計已前事也、武將君公本居天王者四十年已前、故二品御勸請也、天文八年七月九日祀之

〔信濃國中條宮辨才天由來記〕信濃國川中嶋海津の南、中條宮辨才天女の靈應勸請の由來を尋來るに、寛正文明の頃、〇中略千曲川の東寺尾の鄕の領主、寺尾前豐後守重升といへり、外には五常をまもつて神道を崇め、内には慈悲を專にして佛法を敬ひ、民を憐み諸從を愛し、武備正しく國家靜謐の良堅あり、智仁勇の名士なり、幕下に坂井、田中、富岡とて、豪强不敵の者共、忠烈私なく、上を敬ひ下をなつけ、〇中略同國埴科郡の領主志を通じ服心せり、其中に淸野の地猶稜骨山の城主は、年

來寺尾と不平にして動もすれば鬪諍に及ぶ、寺尾の諸從是を惡む、其中に富岡の何某は其心順直にして、佛神を崇敬し民を憐むが故に、深く是を嘆き、當所の產の宮諏訪大明神へ參籠して、怨敵退散、內外和合の祈願丹誠を盡しける、滿ずる夜不思議の靈夢を感ずる事あり、〇中略其後數百兵を催し淸野を攻る、淸野も早速人數を出し、〇中略防戰數日に及ぶ所に、一人の女性、敵味方の堺なる多田山の嶺に顯れ出、〇中略敵陣悉く破れて諸の城に楯籠る、然して彼神女化童は中條の森の陰に立かくれぬ、按るに此女性童子は、是則宗像神辨才天女十五童子成べし、故に城主を初め富岡田中坂井、其外諸士諸軍に至る迄、辨才天女十五童子の御惠心肝に徹し、信敬し奉る、〇中略中條に兩社を建立して健御名方の御神上下田心比女の命の御神を勸請し奉り、〇中略諏訪上下大明神は當國の一宮、昔より寺尾の鄕の生子神にて在ますによつて本社とし、辨才天靈驗社兩宮相殿の神變加持不可思議なる事、奇なる哉妙なるかな、よつて由來の起文如件、

慶長四年辛丑閏月乙丑日書寫畢　　中條宮　富岡駿河

〔紫の一本下〕四ツ谷天王

戒行寺谷のはじめの谷へ下りて、又山へのぼれば天王の社あり、別當をば寶藏院といふ、わづかなる宮地にて緣起もなし、四ツ谷に人の家居初りてよりの產土神とす、

〔神名帳考證一勳位〕今尾張國智多郡大野村牟山神社、爲大野小倉兩村之產神、

〔愛媛面影二越智郡〕藏敷八幡宮

藏敷村にあり、今治一落產土の神なり、八月廿五日を祭日とす、或は云ふ、河野の祖神を祀れりと、

〔奧羽觀蹟聞老志七上〕鹽竈神社

三河國岡崎六所明神者、勸請當社別宮、是東照大神產生神也、

〔南方海嶋志〕新嶋

以產土神爲氏神

正一位三嶋明神　一嶋ノ土(ウブスナ)神也、外ニ十二神ヲ配スル故、十三社明神トモ稱、神主前田長門守、外社人十七人、祝部五人、禰宜十二人、

〔臥雲日件錄〕文安四年八月十三日、早與平仲徒歩、赴地賓寺齋、出門一町、有住吉明神祠廟、諷呪以獻、凡世人以神明主予我所生之地者、謂之氏神、予生于泉州界南、故住吉乃氏神也、不圖殊方偶逢此神、

〔山城名勝志久世郡十八〕石田神社　八幡山巽一里半許、有岩田村、今屬綴喜郡、森内有社、此村氏神也、是石田神社歟、

〔延喜式神名九〕山城國久世郡石田神社（大、月次新嘗、）

〔大和名所圖會三〕住馬社　一分村（平群郡）にあり、寛文記曰、生駒祠七社、生駒黨十七家の氏神也、

〔延喜式神名九〕大和國平群郡住馬坐伊古麻都比古神社二座（並大、月次新嘗、）

〔和爾雅二神祇〕生土神　日本紀稱之本居、倭俗稱在我產土之神、曰生土神、產其神地之義也、又稱產靈、今俗以生土神爲氏神者非也、氏神者謂祖神、藤氏以春日爲氏神、菅氏以天滿宮爲氏神之類是也、

〔縣居雜錄補抄〕うぶすな　今のよに產土の神をさして氏神といふは誤なり、產土の神をばうぶすなといひ、何にまれ其一氏一氏の氏の大御神をこそいはめ、藤原家にて祭り給ふ春日大明神、是氏の大御神也、氏神うぶすな混ずべからず、

〔世事百談二〕氏神　俗にうぶすなの神社をわが氏神と心得たるはあやまりなれど、いつの頃よりかいひならひけん、臥雲日件錄に、世人以神明主予我所生之地者、謂之氏神と見えたれば、近きことにもあらざるべし、

〔玉手簾五〕世には產土神と氏神とを同じ事に思ふめれど、元より差別ある事なり、そは產土神と

は其神の鎭坐す土地に生出る諸人の產土の神なるが、氏神とは其氏人の祖神をいふは更なり、其氏の祖神ならぬも、殊なる由緒あるは、一家及び一族までも氏神と稱せる古の例にて、〇中略いと上代には、國々の國造など、其領る處に祖神を祭れるが多かれば、其氏祖の神、やがて產土神なるも多かりし故に、世になべて氏神と產土神とを混一に思ふ事となりけん、

〇按ズルニ、產土神ヲ以テ氏神ト稱スルコトハ、氏神篇ニ詳ナリ、故ニ今ハ僅ニ其二三ヲ錄セリ、

〔南海通記〕二十一佐藤掃部希ニ應ジテ、鄕士ドモ武具ヲ所持シ武藝ヲ習フヲ許シ給フ故ニ村々ノ產神ニテ百手ノ的ヲ射流ス、鏑馬(ヤブサメ)ヲ走シテ神事ヲナス也、

〔事蹟合考〕三山王祭禮之事

一台德公〇德川秀忠御代、元和元年初て五月十五日、江戶山王產土の町中はいふに及ばず、その外も祖諸町より祭禮の出しねりもの等御城内に懸け、櫻田本宮より渡し申べきよし被仰付により、おの〳〵おもひ〳〵に出しねり物を相渡申候、

〔紫の一本〕下山王權現

六月十五日なり、以前は每年行はるゝといへども、中頃より隔年にあり、天下〇德川氏の產土神なれば、公儀の御祭ゆゑ、江戶中うごくなり、

〔諸國圖會年中行事大成〕四月三稻荷祭常月卯日二ツあれば上卯日、三ツあれば中卯日を用らる、山城國紀伊郡にあり、京師五條通今の松原通といふ是也の南側より九條までの產土神とす、〇中略往古の祭祀嚴重なりし事古繪卷物に見えたり、應仁年間より中絕し、其後纔に神輿ばかり渡御ありて、生土地(ウヂコ)の町々より思ひ〳〵の戯邌物をいだし、其後には散錢の落たるを拾ん爲乞食多く附從ふが故に、俗に乞食祭と汚名せしを近世安永年中生土(ウヂコ)の人速水恆幸なる者、深く歎じて丹誠を凝し、生土地の人を化し、今の如き祭式

となれること、實に逸水氏の功なり、

〔鵝峰文集雜著四十九〕青氏神氏子辨後

原夫源姓藤姓末派、各有林氏、出自源氏者在濃州、出自藤氏者在北越、蓋利仁苗裔、而平家物語所謂林六郎光明者、亦其一流乎、我家之祖秘在紀州、而入京師以住焉、先考信勝〇林及東舟以下同胞、至敬吉及余恕〇林靖振娘、共產京洛、其家在祇園所鎭之地、故每歲六月十四日、先妣會親族設宴、余兄弟往拜神輿、而觀祭會、雖東來之後、先妣當此日、修遙祭之儀、而贈兒輩之願、然三十餘年之際、敬吉東舟及其二子相繼物故、近歲考妣亦歸泉、而今春靖也亦沒、噫余與振娘僅存、如信常及勝澄產於東武、而不爲祇園之氏子、則不關涉焉、嗚呼炎熱之苦、夏日之長、彼此追懷不易言焉、困臥一睡、欠伸而醒、漫記此一篇以消今日、淚與汗共濺、爲筆頭露、辛丑六月十四日

〔閑窻淺語〕神事祭禮の時、近方馳せ聚まり、大群聚するときは、兎角物騷がしきことあり、神は其所其地を呵護するものなれば、隨分安靜に祭禮をさせ度趣意ならん、俗間に神は血を見たがるなどいふは僻事なり、若し左樣の事ならば、神は皆惡魔にて、阿修羅とも云ふべき者あり、左傳に祭祀以爲人也九條十年といひて、氏神の祀は氏子の爲にする祭なり、若し氏子の怪我過ちに頓著なきことならば、氏神の祭は爲すに泣ばす、產神に誤ひて、產子なりくり、今僻くいふなり、只只祭禮の時は、若者大達打ち寄り酒宴を催し、一杯機嫌にて大喋することと故、喧嘩口論も始まるなり、

〔梅窻筆記上〕神事ニ當屋ト云コトアリ、吉田鈴鹿家記、應永六年六月十日庚申晴、當屋鈴鹿勝昌中務始テ神事ヲ勤之トアリ、今モ諸社ノ祭禮ニ、產神ノ祭ニ町家村々ナドニモ當屋トテ勤ルコトアリ、

〔節用集宇〕產宮諸

〔今昔物語三十〕大和國人得人娘語第六

今昔□□ノ守□□ト云フ人有ケリ、〇中略其ノ妻懷妊シタリケルニ、亦可然キ所ニ有ケル宮仕人也ケル女房ヲ難去ク思テ、年來有ケルニ、其モ一度ニ懷妊シケリ、〇中略其レガ七條邊ニテ產レタリケレバ、產神ニ御ストテ、二月ノ初午ノ日、稻荷ヘ參ラムトテ、大和ヨリ京ニ上テ其ノ日歩ニテ稻荷ニ詣デタリケル、〇下略

〔簾中舊記〕正月御はがためやうだい

一御はがためのこと、御日どりしだいにて候はどに、日は定り候はず候、〇中略御所々々にもまゐり候、上さま〇利氏足のはそのときの御うぶすなへ參らせ候とて、御まへにて伊勢に三の御さかづきたびて、御ふくたび候、御すゑにて御いはひぶきやう三の御さかづきいたゞき、御ふくたび候、伊勢には小上らふ御しやくぶぎやうには御なかがしらたび候、

〔長明四季物語正月〕遠山眉の雪も春來にけりと黑髮をつけ、行かひしげき都はさらにて、人めまれなる山里も、事たつことゝて、あるは薪やうの物によねの袋をそへ、あるはちひさき器に御酒をもり、白き布にべにといふものさして、かづきつれたる賤の女も總角も、うぶすなの神につかうまつり、何事にかはのみ試み奉れば、神の御親のはどもゑみをふくませ給はんと笑はしき物から、〇下略

〔大猷院殿御實紀二十五〕寛永十一年七月朔日、濱松城にやどらせ給ふ、城主高力攝津守忠房饗し奉る、この城は神祖〇家康久しくすませ給ひ、台德院殿〇秀忠もこゝにて御誕生ありし所なれば、こと更御感情尤も淺からず、當國五社諏訪の社は御產神にましませば、明日御詣あるべしと仰出さる、 二日つとめて五社諏訪明神へ詣給ふ、新に神領二百石よせ給ふ旨神主に御朱印下さる、其文にいふ、五社大明神田領、遠江國敷智郡濱松庄のうち百石に、新に二百石加へられ、都て三百石社務たるべし、幷に山林竹木諸役等是をゆるさる、當社は台德院降誕の地神なり、この故に御

崇敬の至り、新に社領を寄附する事永代相違あるべからず、されば神事社役等怠慢すべからずとなり、

〔大猷院殿御實紀附錄六〕寛永十一年文月の朔日、濱松の城にいらせられ、中略此城は神祖〇家康久しくすませ玉ひ、台德院殿〇秀忠もこゝにて降誕ましましける事あれどり／＼おぼしめし出されて、

二葉よりそだちし松の千代をへて變らぬ御代は濱松の風、その國にいつき祭る所の五社の明神、及び諏訪大明神は、先代の御産神なればとて、二日の早旦にまうでさせたまひ、社領若干よせられ、還御の時に、

垂乳根のそふの社にまうでつゝ今あらためて祈る誓ひは

〔東都歳事記一〕正月元日　毎月産土神參、毎月朔日十五日廿八日の日には、貴賤生土神へ詣す、三神田社、芝神明宮、深川八幡宮、市谷八幡宮、御藏前八幡宮、其餘諸神社參詣多し、

生兒詣産土神

〔神馬引付〕天文五年四月十一日若君様〇足利義輝御ウブスナトシテ初而マイル、在所粟田口

一成神院新宮御馬一疋河原毛、印書日付、　武田進上

〔走衆故實〕一天文五年十一月廿八日、若君様〇足利義輝始て御うぶすな參、還御候て各御大刀參る、御供衆被參候て、沼田殿進上候、

〔白水郎子記行一〕渓河

妻は中略ふくらかなりしはらも安く産の斗をなしおほせて、まみのけしきのたゆくもみえず、むまれしむすめの忌の日もあきて、御霊の宮詣そこ／＼と志つらひ、いとうれしげにみえしに、いかなるものゝとやこほりにや、霜月いくかばかり、さやさ霜夜のくれ竹、ふしわづらふ事になむなりぬ、

〔古今神學類編 七 神道〕産神詣

按ズルニ、神國ノ風儀トシテ、産子ノ穢ヲ過シテ、其處ノ産神氏神ニ詣スル事、是其神恩報謝ノ禮也、異朝ニモ、廟ニ見ユルノ禮、尤先ンズル事ト見エタリ、文公家禮ニ、生レ子見廟註ニ、主人生ニ嫡子ヲ則滿ル月而見、嫡孫亦如之、生ニ餘子ヲ則殺ニ其儀ヲト云々、西域ノ說ヲ見ルニ、彼土ニモ亦諸州此禮アリト云ヘリ、其法男子ハ三十一日目、女子ハ三十二日目ニ於テ、必ズ其處々ノ神廟ニ見エシムトゾ、然レバ産神ノ理リ其義ノ通例ナル、又産土ノ靈物、産ノ根柢ナル謂レヲ可レ味爾、本朝ニ於テハ其處ノ物忌令ニ從フ故ニ、廟見ノ定日ナキニ似タリ、或ハ百日以後、或ハ七十五日、或ハ五十日、四十日、三十日等ノ不同アリ、然レバ其處其社ノ舊例也ト云ヘドモ、多ク兩部習合以來ノ違例モ亦不レ鮮ザレドモ、久シク因順スレバ後世改ムベキノ義ナキニ似タリ、

〔倭訓栞 前編 四 宇〕うぶすな　兒を生んで産土の神に詣る事、竺土も同じ、王戩ニ獨抱ニ太子、謁ニ大自在天神廟ヲと涅拌經に見え、乳母抱而詣ニ城堭天神ヲといふ事、法苑珠林に見ゆ、よて城堭をうぶすなと譯す、

生誕日詣産土神

〔大江俊光記〕元祿十一年四月二日、俊光誕生日、諸神祖拜、朝飯後出京、生。神下御靈へ參、次ふや町へ參、先祖幷亡父拜、

寶永六年四月二日、俊光誕生日、諸神拜、下御靈へ社參、

髪置袴著帶解等時詣産土神

〔俳諧歲時記 四 冬〕十一月　髪置 十五日　袴著 同　帶解 同

今の俗、男女三歲になるときは、はじめて頂髪を置、十一月十五日を以て本居神に詣しむ、或は新製の衣裳に美花を口し、或は大に酒宴を設けて親戚朋友を招く、この事貴賤となくみなしかり、これを髪置の祝ひといふ、又男子五歲を袴著と稱し、女子七歲を帶解と稱す、そのなすところ、髪置の賀ひにおなじ、

〔東都歲事記 四〕十一月十五日　嬰兒宮參　髮置（三才男女）袴著（五才男子）帶解（七才女子）等の祝ひなり、當月始の頃より下旬、但し十五日を專らとす、貴賤により分限に應じて、各あらたに衣服をとゝのへ、產土神へ詣し、親戚の家々を廻り、その夜親類知己をむかへて宴を設く、女兒の祝ひに、白髮又たすきがけと號して、麻苧眞綿に末廣松梅の作り花を五彩の水引を以て飾り結び、かづかしめて生土神に詣るよし江戸砂子に云り、此事近年市中に少し、

〔嬉遊笑覽 一上容儀〕髮置　ある老母の物語を聞しに、予が髮置の時、扇を開き、柄のかたに麻苧を長く下げて、色水引にて扇に結付たるを頂に置て、產土神に詣でき、予が祖母は京都の人なれば、これは定めて上方の風俗なるべしと云へり、（寶曆の末の事なり）

〔女諸禮集〕髮置の事

男女ともに三歲の霜月十五日なり、又霜月の內にて吉日を撰びてもすべし、玉女の方にむかはせ、左右を少しづゝ九つはさむなり、男子は左の鬢より始め、女子は右の鬢よりはじむるなり、親類にておとなしき人の役なり、さて式の酒事あるべきなり、此日より紐をとりて常の帶をさすべし此とりたる紐は生土の社へ奉るなり、神巫禰宜等是を用て、神樂の鈴の飾り緖とする事なり、親類をかなたこなたへと行く事なり、或は隣家懇意の人々待受けて、壽をいふことなり、

〔兼盛集〕大將の家に、むすめの袴きたるに、

ちはやぶる神の社をたづねつゝけふのためてふいのりをぞする

〔夫木和歌抄 三十四神祇〕　西行上人

かしこまるしでになみだのかゝるかな又いつかはと思ふあはれに

この歌は、そのかみよりなれけるならひに、世をのがれて後も、加茂の社に參りけるに、とし

たかくなりて、四國の方へ修行しけるに、又まゐらぬ事もやとて、仁安三年十月十日の夜まゐりて、幣まゐらすとて、たなをの社の許にてしづかに法施奉りける程に、木の間の月のほのぼのにて、常よりも神さびて、哀に覺侍ければと云々、

○按ズルニ、陰德太平記ニ本歌ヲ引用シテ首途産土神參詣ノ事トセリ、

出家時詣産土神

〔玉手繦 五〕我○平田篤胤 本生の國、出羽の秋田の民の俗に、子を生て産土神に參詣せしむる事は何所も同じ趣なるが、旅立するに必ず産土神に參りて、歸り來むまでの事を祈願して、神主より旅中の守符をうけ、かつ其社地なる淨き土砂を少ばかり賜はりて、其を生土(ウブスナ)と云ふを紙に包みて懷中に納め、何事に依らず快からぬ事あれば、其土を少く嘗るに、決めて旅中の災難なき事と心得たるが多かり、諸國の事をも尋ぬるに、薩人を始め、然する國所も多しと聞ゆるは、疑なく古風の遺れるなり、其生土を旅中にて用ふる趣は、舟中などにて水あたりの病など、其外にも心わろき時は、いさゝか水にひれ入れて飲むなり、然して旅より歸りて後に、其餘れる生土を御社の本の所に返し納めて、賽(カヘリマウシ)し申す事なり、また常に産土神の守符は、身を放れつまじき物ぞと云ことは、祖父母たち、父母たちの書れしを、今もたしかに覺えたり、

〔梁塵秘抄口傳集 十〕仁安四年、○中略 二月七八日頃、おほゆきふりたりし日、さ。ま。を。か。へ。む。い。と。ま。申。に。賀。茂。へ。ま。ゐ。り。き。○後白河 まづ下のやしろにまゐりて見るに、おもしろき事限りなし、おまへの梅の木に雪ふりかゝりて、いづれをむめとわきがたく、わけの玉がきまでみな白たへに見えわたりて、たゞひなくおぼゆ、次第の事みかぐらはてゝ、そのゝち法花經一部千手經一巻を轉讀したてまつり、をはりてのちに成親卿平調に笛をならす、さいばらを資賢卿いたす、

○按ズルニ、本文さ。まをかへむいとま申にトアルヲ、梅窻筆記及玉手繦に、ざ。と。をかへむといとま申にト作り、轉居ノ時産土神ニ參ル事トスルハ誤ナリ、

元旦拜産土神

〔大江俊尙記〕寶永五年正月元日己酉、夙起、月代髮、衣服改、緣ニ圓座儲、屈候、奉拜先東方、○中略 稻荷、後尙産神、

〔大江俊在記〕享保二年正月一日丙辰、未刻退下清湯、先東方、大江祖神、○中略 稻荷、

朔旦拜產土神

〔大江俊矩記〕寛永五年七月一日乙亥、向東方一拜、〇中略稻荷俊矩產神、六年五月一日、拜禮如例東方、〇中略稻荷、

神異

〔古今著聞集一神祇〕前大和守藤原重澄は賀茂につかうまつりて、大夫尉迄のぼりたる者なり、若かりける時、兵衞尉に成侍らんとて、當社の土屋を造進ありけり、嚴重の成功にて、社家推擧ありければ、はづるべきやうもなかりけるに、たび〳〵のぢもくにもれにけり、重澄が上の社の師にて侍けるものに申付て、ぢもくの夜祈請せさせける程に、まどろみたる夢に、いなりより御つかひ參たるもの有、人出あひて是を聞くに、かの御使の申けるは、重澄が所望殊更に任せらるべからず、我ひざもとにて生れながら我をわすれたるものありと申ければ、申つぎの大明神に申いるるよしにて、度々御問答ありけり、さらば此度計なされずして、思ひしらせて、後の度のぢもくになさるべしと申ければ、御使歸りぬ、師おどろきて急ぎ重澄がもとへ行て、此由を語りて、驚おやしむ程に、其夜のぢもくにははづれにけり、此夢の誠をしらんがために稻荷へ參て、つぎの度のぢもくには申も出さゞりけれども、相違なくなされにけり、

〔續太平記〕一駿河國幷數十ヶ所の所領は、此後篇の時の恩賞なり、國に入部し給ひし時、我等少年の初にて、供して富士淺間宮に神拜時、神女託して云、遠江國ちかくして吾氏子にはしかりしかば、赤坂の軍の時我告し事は知れりや〳〵と云り、入道殿〇今川範國座を退て何事にか候けむ不覺悟と申給しかば、筮とるしの事を案し時、我赤鳥をたびし故に勝事をも得、此國を給ひきと託宣せしかば、故殿其時思合て、女の具は軍にはいまふ事ぞかし、いかで思ひよりけむ、誠に神の御謀と信を取給しより以來、我等も子孫もかならず此赤鳥を可用と被仰き、

〔神界物語〕文化の頃なりしが、吾紀伊國若山の府城の東に住ける明葉圓左衞門と云ひしは、吾父と同僚にて、御先手の同心を勤めたり、生質朴實なる者にて在けるが、氣鬱病にて長く煩ひたり

しが、十二月の或夜、初更のころ便所に行とて、裏口へ出けるが、歸りの遲きを怪しみ、人々出て厠中をはじめ、其邊りを搜し索むれども見えず、若や門より出づらん歟とて、表に出て見れども、門は鎖て人の出入り有しとも見えざれば、彌怪く思ひて、提燈など携出て、門外を普く尋ねけるに、城池の犬走の草に、圓左衞門が著たる衣服を帶にて括り付たり、さては此邊りにかとて池中を覘き見ければ、圓左衞門は裸體にて、水際の石垣に取付居たり、冷こゝえたる有狀なりければ、即引上連歸りて身を煖めて、暫し打護りたる程に、正氣付ければ、始よりの次第を尋けるに、裏に出ける時、大の法師が吾項に手を掛て、抓みて引揚るが如く思えしかば、いつしか高く騰りて、御本丸の邊りまで連行て、我を殺さんと爲し時、烏帽子を著、白き裝束して御幣を持給へる御鼻の高き人、何處とも無く出來り、吾をつれたる法師を呵嘖て、此者は吾領內の氏子なり、汝何故に如此するや、速く命を助くべし、此後は必かゝる事をなすべからず、若違背せば嚴く罰んと叱り給しかば、恐怖りたる狀にて、我を池中に墮したりと云へりき、此助け給へる人といふは、卽圓左衞門が產須那社は、狹田彥神を祭れる社なりしかば、此產須那神に坐ましける、此人常に武術に誇るの癖は有しかども、恒に產須那社を信敬したりしかば、かゝる靈驗をも蒙りしと思はる、

〔玉手繦五〕文化十二年の事なるが、江戶の小石川戶崎町に、石屋長左衞門と云ふ石工ありて、其弟子に丑之助といふ若者あり、重き瘡毒にて、醫者らも愈まじき由を云しかば、元より酒客にて有けるが、讃岐國象頭山の神に禁酒の立願しけるに、然しも重き病の漸々に愈けり、然るに酒は何よりも好物なれば、得禁じがてに、時々は酒まほと誑けて藥物にひたし、飮たる事も有しとぞ、斯て其年の九月十日は、處の鎭守氷川明神の祭日なりしが、其前日に處の若者ども、かの丑之助に云へるは、和主は狂踊を上手なれば、明日はかの踊をせよと言ふに、丑之助きゝて、我が瘡毒は愈まじき病なりしを、金毘羅神に禁酒の立願して愈たること、和主らも知れる事なり、醉のまれ心

ならで彼踊り爲らるべきかと辭ふに、若者ども口を揃へて、明日は鎮守の祭禮なれば常とは異なり、酒を飲み踊りも爲よと强ふるに、丑之助げにもと言ひて、當日は朝より友どちと酒飲み遊び踊りつゝ醉狂れてぞ有ける、然るに巳時ばかりより忽に大熱さして、あらあつや堪がたや、金毘羅さま免させ給へと云ふに、皆々驚きて如何と問へば、庭の空を指さして、人々には見えざるか、あれに御坐す物をと云ふ、皆々見れど目にかゝる物も無れば、如何なる御有狀にておはし坐と問ふに、丑之助火の如き息をつきて、御神は御黑髮長く垂れて、冠裝束をめされて、雲の上に立たまひ、數多の御供つき從ひ、爪折の緋蓋を差かけ奉り、御前に鬼神のごとき力士ありて、其仰せを承はり、汝が病きはめて愈さじかりしを、强に祈り申せる故に愈さしめ給ふ所なり、然るに折々ひそかに酒を飲たるだに有るに、今日は朝より思ふさまに酒を飲て、醉狂ること憎く思食すに依りて、手足の指をみな折しめ給ふ由なりと言ひも果ぬに、早うつ伏にふして免し給へと、大汗を流して泣叫ぶ有さま、物の爲におし伏られて、其足の指を折るゝ狀にて、恐ろしなど云ふも更なり、然れども若き者ども心を勵まし、諸共に引起さむと立よるに、物に投らるゝ如く覺え、うち倒されて近付こと能はず、その有狀いと物すごく恐しければ、日頃は鬼をも挫きてむと競へる男ども、皆逃のきて慄き居たり、斯て片足の指はみな折たると思ふほどに、丑之助また產土氷川御神入らせ給へりと云て、この御禍を救はせ給へと叫びけるが、稍ありてまた多久藏司稲荷來り給へりと言て、人々に近寄こと勿れと制しつゝ、起直り畏まりてしばし在けるが、膝退ながら庭におりてひれ伏し、神等を送り奉る狀しけるが、物狂はしき狀は止たり、爰に人々うち寄て其由を問へば、金毘羅神の怒り給へる御氣色、まをすも中々恐ある御事なるが、雲の上に坐まして、我が方を流し目に一目見返り給ふごとに、我をおし伏たるかの力士、わが足の指を一づゝ折たり、左の足の指はみな折たりと思ふほどに、鎮守神來り給ひ、これも束帶にて供人あまた具

し給へるが、金毘羅神に向ひて宣へるは、此奴いたく好める酒を斷ちて、其御前に祈白せる故に病を愈し給へる事を忘れて、今日いたく酒飲たるを祟(トガ)め給ふは然ことに侍れど、元より我が氏子として、殊にわが祭日なる故に、我をなぐさむる態仕らむとて、人等にそゝのかされて酒は給たるに侍り、然れば免し給ふかたも有むを、假令祟め給はむにも、我に一わたり其事を宣ひてこそ、兎もかくも罰め給ふべき態なめれ、然る事もなく我が氏子を思召すまゝに御罰あらせらるゝ事こそ心得はべらねと宣ふにぞ、金毘羅神げにもと思召せる御有狀ながら何のいらへも無く、二神互ににらみ相ておはしける所に、傳通院の多久藏主稻荷神來り給へり、此は僧體の如く見え給ひ、淺黄の深頭巾を冠られたり、御二方の間に平伏して、甚く恐愼める狀にて申すやうは、己は傳通院の多久藏主にはべり、金毘羅宮の御怒り、氷川明神の仰せ、ともに道理ありて承はり候、かく承り候も元こやつが怠より事起りて侍れば、左にも右にも罰め給ふべきを、此奴をりをり我が許へも詣で來て、身の上の事を祈りつるを聞たもち侍れば、此所へ參り侍り、いかで御雙方の御怒りは我に給ひて、是奴が罪を免し給へ、さらば我ら相計らひ、金毘羅宮へはこやつを賽しに參詣しめ奉らむと懇懃に申されしかば、二柱神はそれに御心を和し給へるさまにて、互に式代して伊豆々々(イヅイヅ)しく立別れ給ひつと、大息つき振ひ慄きてぞ語りける、斯て左の足の指は骨うち折られて痿れたり、人々始めよりの有趣をよく見たりければ、恐怖るゝこと限なく、打よりて路用の物ども調へて、丑之助を象頭山の御社に參詣せしめけるに、彼折たりし指も本の如く愈りしとぞ、

〔玉手繦〕五難波なる松村完平、わが○平田篤胤許に在ける時の物語に、其邑に聲いと善くて、今様の長唄を謡ひて業とする男ありき、或日ものへ行く途にて、山伏體なる男あへり、行違ひながら其方の聲の美たきを我にしばし貸てよと云を、道行ぶりの戯言と思ひて、唯と云つゝ笑ひ過けるに、

三日ばかり有りて病む事もなきに離かれて出す、されど彼異人に聲を貸たる事に心づかず、住吉神社は産土神なれば祈り白さむと出行ける途にて、かの山伏體なる人來り逢て、先ごろ我が請へる如く聲を貸ながら、そを忘れて産土神に申し祈らむと爲すこそ心得ね、汝かしこに祈らば、必われを罪し給はむ、然るに於ては我また汝にからき目を見せむ物ぞ、然らむより今まばしの間なれば、まげて貸たまへと云ふに、始めて先に聲を借らむと云ひし時に、唯しつる事を思ひ出して、俄に恐ろしく成りて、産土神に祈る事はやめむと堅く約りて、途より立歸りけり、此後三十日ばかり有て、物へ行く途にて、また彼異人の行逢けるに、其方の聲は今返すべしと云ふに、はや本の聲になりぬ、斯て異人この報を爲べしとて、禁厭の術を授たるが、萬づの病に驗ありて後には唄をうたふ業を止めて、禁厭のみまて世を安く送りしと言ひ、また今井の秀文〇大國隆正が或侯の語り給へるを承りて語れるは、其侯の治給ふ所の或童子、異人に誘はれて行方まれず成ぬるを、兩親いたく泣歎きて、産土神に祈りけるに、四五日ありて歸り來て語りけるは、伴はれし處は何所とも知らぬ山なるが、山伏體なる異人おほく居て、劒術など習ひて在まが、折々酒を飲かはす事もありて、然る事どもに役はれたるが、昨日の言に、汝が親ども切に願へばとて、産土神のとく汝を返し遣れと仰せ有れば、留めがたしとて送り返されつと語れりと言ひ、彼備後國なる稻生平太郎といひし者の許へ來れる山本何某と名告れる妖物と、平太郎が應對せる時に、その産土神身に副ひて護り給へる故に、平太郎その妖氣を受ざりし事などを思ふべし、かく思ひつゝくるに、妖物の人につきて禍害をなす事あれば、某々の産土神たち專と掌り守護り遂退たまふ御事なり、

〔再生記聞〕こゝに我も人もしか産土神をねんごろにすと聞につけて思へば、彼の勝五郎を伴ひたる翁といへるこそ疑ひなく産土神に在けめといふに、源藏〇勝五郎父云、其事は此ほど西敎寺へ

ものしける時に、彼處にても然いはれたりき、或はその翁をかの久兵衛ならんなどいふ人もあれど、產土神ならんといふにつきていさゝか思ひあたれることの有を、今日迄人に語れることなけれど、深切に物とひ給へばとて又いひけらく、勝五郎が姉ふさと申すは、今年十五歲になり侍り、去々年の事なりき、庖丁刀を失ひたることの有けるに、彼が母たゞ叱りたるに、其後また庖丁刀を失ひたり、此度はます〳〵叱られん事を思ひて、本居神熊野宮へ詣でゝ、失へる庖丁刀のあり處をさとし顯はし給へ、然らば百度詣し奉らんと祈りたりける夜の夢に、髮ながく垂て山伏といふ者の如き頭の翁なる人枕上に立て、失ひたる庖丁刀はそれの處の田の草かげに、刃の上にむきて有むをとり來るべしと告給へるに依て、夙めて行て見るに、果してその如く在けりとて、取歸りて後夜べの夢の告をはじめて云々と語り侍り、其母これを聞て、こやつさばかりの物失たらんに、本居神などにこひ祈申すべき事かは、いと有まじき事なり、よて其罪を謝して、とく賽しの百度詣し奉るべしとて詣させき、又其後、ふさ或日の朝さめ〳〵と泣うれふる狀あり、父母その故を問ふに、おとつ夜より夜べまで三夜つゞけていと悲しき夢を見たり、一夜ばかりは思はぬ夢を見るも常なるを、かく三夜つゞけて同じ夢を見しは、神の御誨なりけりとて又さらに泣を、よく〳〵問へば、さおとつ夜の夢に、又彼山伏のごとき翁と、今一人枕上に來て、汝は昔し惡しき事したる男なり、今かくてあれど、能せずば此家に在がたくて苦しき目見るべしと告賜へり、されどおろそかに心得て在し、次の夜も夜べも正しく同じ夢を見侍り、さて山伏のごとき人は何とも物のたまはず、今一人の男の、件の事を告給ひて、吾は蛇體の者なりと曰へり、かゝる夢見しことは徒事にあらじ、いかなる憂目をか見んと悲しくて泣也と云に、元來さる跡なし事の夢見たるが心にかゝりて、又次々に同じ夢を見たるなめり、心になかけそとなぐさめ置たりき、其後勝五郎が物語に、髮を垂給へる老人のしか〳〵といふが似たるを思へば先に庖丁刀

産子

を失ひつる時に、山伏の如く見え給へる翁も、おなじ類の神にこそおはすらめ、かく同じ趣なる事の有しを思ひ合すれば、娘が過にし夢の告も今更奇しく覺侍りと語りて、さて今かく物語るに付てふと思ひよれる事は、己れもと江戸の小石川に夫婦住たりける時に、ふさ生れたり、其處の本居の神は氷川大明神なり、今一人の男の我は蛇體の者なりと曰ひしは、若くは氷川大明神にもやおはしけんと密かに思はると語るに、堤朝風その座に在て、是を聞て云く、氷川大明神は龍體の神なりといひ傳ふる由は、早く聞居れりといふにぞ、益々思ひ合せられたり、中略そもそも再生のこと、和漢にいと多かるを弘く採並べて考ふるに、顧況が長子の顧非熊と生れ、趙氏が子の夭折と生れ、程淮の藤肅が今の勝五郎と生れたるなどは、本居神漢國にて謂ゆる城隍神のわざと知られて正しく聞ゆれども、この外に妖魔の、わざと再生轉生せしむる事はことに多かり、

〔玉手繦五〕我〇平田篤胤が弟子なる龜井忠篤は、江戸の湯島に住みて、孝行の事ども公儀に聞えて、御褒美をも賜はりし篤行の者なり、これが妻は越後國頸城郡高森村の產なるが、國を出る時の夢に、その產土諏訪明神の御形は見えねど、高らかに我が氏子菊女を御許へ參らす、宜しく計らひ賜ひねと宣ふに、わが家の屋根より高く雲上に菅原天神おはし坐て、たしかに預かり給ふよし御答ありしと見て覺けるが、江戸へ來て間もなく湯島天神の氏子に嫁し來れるは奇しき事と、嫁きて後に語れりと忠篤云へり、

〔神道名目類聚抄四神祇〕產社　產神　帝都ノ二條ヨリ上ノ方ハ、上下ノ御靈社ノ敷地ナリ、此地ニ出生ノ兒ハ、上下ノ御靈社ヲ產社トシ、兒ヲ御靈ノ產子ウブコトス、二條ヨリ下ノ方松原ニ至テハ、祇園社ノ敷地ナリ、此地ニテ出生ノ兒ハ、祇園社ヲ產社トシ、其兒ヲ祇園ノ產兒ト云ナリ、

〔常陸國稻田神社緣起〕常州新治郡稻田社は、地神第一天照大神の御弟、素盞嗚尊の妃、奇稻田姬の

以產子稱氏子

命を祠れるなり、〇中略慶長中に伊奈氏の家臣磯某、舊跡の頽敗を憂て、四宇の神離を新に造營せられけれども、世遙に年ふりて、其後修補を加る人もなければ、又神殿破壞せしを、上下稻田の邑長を始て、諸の產子(うぶこ)等、神社の衰廢を歎き、力を合せ心を一にして、やうやく形ばかりに造り營み奉りて、元祿辛未冬十月十日に四所明神を遷し鎭め奉り、天下太平國家安全、所豐饒にして、產子(うぶこ)繁榮、牛馬の蹄に至るまで、安けく平けく守り幸給へと、朝な夕な丹誠を抽る事しかり、

〔祇園會細記〕一地の口の事

祇園生土子(ウヂコ)の町々、皆祇園の產子にて、山鉾出る所々、その組々を定め、古例を以て米錢あるひは菓子をおくる、

〔訓蒙淺語〕氏神の祀は、氏子の爲にする祭なり、若し氏子の怪我過ちに頓著なきことならば、氏神の祭は爲すに迨ばず產神(ウブ)、產子(ウブコ)なり、今暫く俗に從ひて斯く云ふなり、

〔諸國里人談五氣形〕鯉社仕者

丹波國並(ナビカ)河村鯉大明神の仕者は鯉なり、〇中略鯉大明神の產子(ウブコ)鯉をくらへば、立所に口中腫痛事神變なり、八幡の者鳥類を喰ひ、奈良の者鹿をくらふの類ひなり、

〔藤森社緣起〕謹勘舊記、當社三所天王者、神護景雲年中、山城國紀伊郡藤尾之靈地垂跡者也、〇中略弘仁七年、大師稻荷大明神爲勸請、藤森天王敷地之內、所望之由被達叡聞、被伺中當社神慮之處、可奉借之由依有神託、三山之麓勸請之、自爾以來、號彼所於稻荷矣、五十町四方依爲天王敷地、近鄕幷京中自五條至九條仕民等、悉以爲當社氏子、稻荷社人等同前也、雖然於京中氏子者被寄稻荷之社、依之五月五日、神幸奉成京中者也、

〔高祖遺書六〕諫曉八幡抄

今日本國ヲ案ズルニ、代始テ已ニ久ク成ヌ、舊キ守護ノ善神ハ定テ福モ盡キ壽モ減ジ、威光勢力

モ衰ヌラン、佛法ノ味ヲ背テコソ威光勢力モ增長スベキニ、佛法ノ味ハ皆タガヒヌ、爭カ國ノ災ヲ拂ベキ、又氏子ヲモ守護スベキ、其上謗法ノ國ニテ候ヲ、氏神タル故ニ一子ノ大科ヲユルシテ、年久成候ヘバ、既ニ佛前ノ起請ニ背キ給ヌ、

〔高祖遺書十一〕内房女房御返事

此國ハ始ハ神代也、漸ク代ノ末ニナル程ニ人ノ意曲リ、貪嗔癡強盛ナレバ、神ノ智淺ク威モ力モ少シ、氏子共ヲモ守護シガタカリシカバ、漸佛法ト申大法ヲ取渡シテ人ノ意モ直ニ、神モ威勢強カリシ程ニ、○下略

〔豐邦神道百首和歌〕神○中略

總而祇園の社司共、二條の南のかはより五條の北のかはまで、これに生るゝ者を氏子といひ、二條の北のかはより大原口まで五りやうの氏子といひ、一條はり川より西のかたを今宮の氏子といひ、五條の南のかはより九條まで、この内に生るゝものをいなりの氏子と號する事、更に無本說事也、所の神とこそいふべけれ、山城國の總社賀茂大明神の御拜領也、八幡の神人、社家の氏神いましますゆゑに、山城國は八幡大菩薩の御事などゝ申事、あとかたなきこと也、たゞ物をしらざるゆゑ也、殊更おたぎの郡においては、賀茂大明神の御拜領也、祇園は清和天皇の御宇貞觀年中、八幡同貞觀年中御すいじやく、賀茂の御事は上古よりの御事也、たゞ皆もんもうにしてかゝる事を申あへり、おさなしき事也、けりやう大人の四町まちの御所のうちにも、ちんぢゆとておはします也、その内にて生たらん人は、う。ぶ。所。の。神とこそあがむべき事也、氏神氏子とはさらさら無本說こと也、物もしらぬ青女などの申あへるを上ざまの人きこしめして、それを本說とおぼしめすこと、おさなしき御事也、然ば山城國殊更おたぎの郡に生人は、賀茂大明神の御氏子也、せめて年に一度參詣をも申、日に一度北にむかひて、祈念をもいたすべきことにや、

〔伊豫國三島社緣起〕三國佛神無非彼孫

天神第六代面足尊惶根尊末孫〇越智氏代々異國敵誅伐目錄

六十八代後一條院以降、寬仁三年己未二月廿七日、新羅軍對馬來、氏子近淸彼軍誅、七十三代堀河院位康和二年庚辰異國軍渡、其時幡三流出御殿虛空飛廻、彼氏子彼幡取下怨敵亡、

〔諸社緣起文書二〕稻田姬宮由緒聞書

一祭之節神主氏子共寄合神酒をいたゞき大きに祝申候、則其所をさつへい田と申候、

〔常陸國賀茂大明神由緒書〕一寶物之石櫃ニ納、永惜朽事、元和之比、神主氏子等土返爲見、忽背神慮族以有之、漸地ニ納、其後拜事無御座候事、

〔梵舜日記〕元和四年八月十八日甲戌、今度下御靈社氏子共、始而奉行板伊州〇京都所司代板倉勝重へ御理申入、具足、母衣、作大刀已下御祭之御供可仕候由申入、神慮尤馳走可然之由義ニ而、町人氏子共念入神輿之御供仕也、事外見事見物也、予罷出、於町屋令見物也、

〔遠碧軒記上神祇〕下御靈略記

上下御靈兩社者、桓武天皇建立、下出雲寺の記有り、これ御靈の神宮寺也、古諸國に有之云々とみゆ、又三十六所は慥に見ゆ、貞觀年中自三條至五條祇園氏子被定歟、其外洛中諸社氏子と申事更無謂者也、

〔五元集亨〕山王の氏子として

我等迄天下祭や土ぐるま

〔紫の一本下〕下谷稻荷

二月廿一日の祭なり、此宮、前は下谷御徒士町のうち、三明院の東、近藤平三郎の屋敷の西に在しが、一年下谷火事の節、家居おほく燒けたれども、此いなりの氏子一人も類火にあはず、〇下略

〔祇園會細記〕一御輿洗の事
五月晦日、朝の間諸人本社へ參詣して、杉葉の守札を受て歸る、〇中略今夜生土子の者、迎挑灯を捧て、本社に詣する事おびたゞし、

〔德川禁令考寺社四十〕文政七未年七月
　氏子をはなれ度旨之事
小笠原彌正より寺社奉行水野左近將監江問合挨拶
御書面、莊村八幡之氏子を離、居村之八幡社を氏神に致度由、新規之儀ニ而容易ニ難相成筋ニ付、たとへ莊村江對談之上差障等無之趣ニ候共、其時ニ至被問合候方と存候、

〔都のにぎはひ〕四條橋新造之記
爰に往古は、四條通のひがし、加茂川に大橋掛りて、是を祇園橋と稱へ、下流を宮川とよぶことは、彼御やしろに歩みを運ぶ大路なるが上、年々の祭禮には浮橋を懸、また神輿を此川の邊りへ舁出て水を濺ぎ奉るも、俗にみこし洗といふ御祓河の絶ぬ謂なりけむ、さるに本橋永く廢れて、唯假そめの小板橋なりければ、出水の度毎に漂ひ流るゝ事また〳〵なり、〇中略下古京宮者の人々及祇園神輿輿町氏子長二條通至三條松原通町々、其外祇園町嗣新地六丁の者共申合せ、諸人濟度の爲、殊には祇園の大神の冥慮にも叶ふべしとて、四條河原へ本橋新造の事をば公へ願ひ上、〇中略今茲〇寛政四年夏四月の末經營全く成就しぬ、斯て吉日を撰み、四月廿九日渡初の式行はれしかば、此事に聞れる下古京をはじめ、祇園輪町幷に産砂いさごの地はいふもさらなり、京田舍の人々までも歡びあへること限りなし、

〔都のにぎはひ序〕平けく安らけき大御代の御惠は、いゆき到らぬ隈しなければ、絶にし物どもも繼て興され、廢れにし事どもをも古にかへさるゝ中、今の大御世をうれしみ賜なみ、絶て久しく成ぬる四條大路の橋を掛渡させ〳〵祇園社の氏子の人々の思よりて、其よし公に請ねぎまを

しゝかば、ねぎしまに〳〵許し給ひ命せ賜ひて、かく成竟つるはいともめでたく貴き書業になも有ける、かくてぞ都のすがたも取よろひて足ひにける、されば大神もあなめでた、あなおむかしとめで賜ひ悦びたまひ、氏子の人等も、常にまうづる道の妨无く河の煩ひなく、今より後は加茂の川水絶る事なく、石の柱のすたるゝことなく、天地のむた遠長く、彌次々に造續もてゆかむ、末の世の人も今の大御代の德化を仰がざらめや、いそしみ成しつる人の功績をたゝへざらめや、

安政四年四月　　美濃守六人部宿禰是香

〔雍州府志三神社〕小倉明神　在大山崎北圓明寺村西、〇綴喜郡而斯邊之氏神也、倭俗某土地所有之神社、是稱氏神、是土人始祖神之義乎、所産其神地之人、總稱某神之氏子、氏神或稱生土神、産其神地之義也、

〔玉手繦五〕中昔の書どもを閲するに、産土神に對しては、其地に生るゝ諸人を氏子と稱し、氏神に對しては、其を奉ずる諸人を氏人と稱せる趣なり、

〔南留別志一〕神社に地をさかひて、こゝまでは此神の氏子なりといふは、神封の地なるべし、後には封戸なき神にもそのまねをしていへるは、たれがゆるしたるにか、亂世には人も神も心のまゝに地を領せるなるべし、されども神いくさのなきはいかにぞや、

〔嬉遊笑覽七祭祀〕氏子　南留弊志四神社に地をさかひて、こゝ迄は此神の氏子なりといふは、神封の地なるべし、後には封戸なき神にも其まねをしていへるは、誰が許したるにや、〇中略と有り、例の先生誤れり、元より今いふ氏子の義なきことは勿論なり、氏子とは藤原氏の春日社、橘氏の梅宮におけるが如く、其祖神を氏神とし、その子孫なれば氏子といふなり、土地をもていふものは産土の神なり、神名帳に宇夫須那神社とあるもその義なり、氏子を古は氏人といへり、風雅集に、

みかさ山その氏人の數なればさしはなたすや神はみるらん、

〔產須那社古傳抄〕產須那をまた氏神とも稱し、其支配し給ふ地に生產する人をさして氏子といふ、○中略其氏神の成造し給ふ所の子といふの義をもて、氏子とはいふなりけり、

〔產須那社古傳抄廣義〕一凡天下弘しといへども、太古より以來、產須那の神の鎮坐し給はぬ地は有事無く、其御陰を蒙らざる人も有ことど無し○中略

さて其產須那神の太古と云ひて神代より其處此處と境界を持分て、社々に鎮坐し給ひて、その產須那の土地々々の人民は申に及ばず、山川草木鳥獸の類に至るまで、一切の事を掌り支配し給へれば、人畜草木共にその神の德化に依らざるは有事なし、さて其支配し給ふ氏子地には、廣きもあり狹きもあり、元は廣かりしが、後に其境界の內に勸請の社出來て狹まりつるもあり、たとへば此山城の國に就て云はゞ、今の下京より上は悉く加茂下上の社の氏子地なりしを、後に上下の御靈社、祇園、今宮、北野社など出來て後は、それ〳〵に堺を分て、氏子地と定りつる後は、其境界の裏に生れいでし人々は、今の產須那神卽氏神に坐ます事勿論の事なり、また松尾社は上古より葛野郡の廣き產須那社に坐ませるを、是も後には月讀社をはじめ、數多の社々も出來つれども、何も產須那地を分て支配し給はざれば、今世に至るまでも、大略上古の趣きにて、廣き氏神社にて坐ませり、此事は後に出來たる社の尊卑に依れるにも、又は社領の多少に依れるにもあらず、元より後に出來たりし社を、本社の神職の支配するが故にもあらず、其本の氏神の御心、さては出雲大社に鎮坐し給ふ、幽政の大本を執政し給ふ大國主大神などの御謀らひに依る事にて、凡人の上よりとかくの道理を推て云べき事にはあらず、○中略偖右加茂社は、追々に氏子地を後の社々に分配し給ひて、其地々の氏子どもを掌らしめ給へれども、元來山城國中の一宮なれば、何の社の事をも幽政に關る事どもは、其地々の產須那

社より先此加茂社に御示談在せられし上、事をはからはせらるゝ事故、元の產須那社の筋合の失はれたるといふにはあらず、他の社の上も是に准へて悟るべし、

〔遠碧軒記上神祇〕上賀茂の大田に眷子と云社有り、社の下に清水有り、これを產婦のめば難產を免と云、又血穢をすゝぐと云なり、これは此眷屬の子になりたる氏子と云類なり、たとへば此家の眷子はいくたり有るぞと云、賀茂にての詞なり、

〔塵添壒囊抄十二〕可ㇾ參ㇾ詣大神宮ㇾ事

其所ノ鎭守ナンドヲ閣テ、大神宮ヘハ可ㇾ參詣事歟、總テハ神ニ事ル心向ケハ如何侍ルベキ、此事以ㇾ管見ㇾ難ㇾ申披ㇾ也、〈○中略〉其心向トハ、先其所ノ神明佛陀ニ慇懃ニ奉仕シテ、其暇ニハ他所ノ靈驗ヲモ可ㇾ仰、當所ノ鎭守本尊ニハ極メテ不法懈怠ニテ、他所ノ靈佛靈社ニ參詣セバ、爭ヲ蒙其利生ハ不ㇾ可ㇾ有ト見タリ、

〔玉手繦五〕法師の記せる物ながら、壒囊抄に神に仕ふる心向けの事を論ひて、まづ其所の神に慇懃に奉仕して、其餘暇には他所の靈驗をも仰ぐべし、〈○中略〉此心をもて仕ふべき也と云へるは、能く神の情狀を窺ひ得たる說なり、實に此說の如く素直なる心をもて他道々の意に率られず、神隨なる道に志して、一向に氏神また產土神を信み奉りて在なんに、神の御幸ひ無らめや、其は人人の心々に此事は彼神に、彼事は此神にと定め、或は殊に信ずる神ありて殊更に祈りを爲すも然る事には有れど、產土神を忘れては、彼重澄〈○事見上文古今著聞集〉がごとく其祈りの叶ざる事あるを、己が氏神產土神に能く奉仕して祈願さむに、若その神の預り給ふ事ならずば、他神たちの其事を知給ふに物して、叶へ給ふ道理なりと心得べし、

〔神祇拾遺〕神社牛玉

近代寺社相混ジテ牛玉ノ名アリ、然シテ二字ノ音共ニ不ㇾ適レバ、自靑女ノ言ヘルニ似タリト云

人モ有、或ハ本ハ佛語ナリシヲ、習合ノ族假用シテカヽル名アリト云人モ有レバ、更ニ一決ナキニ似タリ、佛書ト云ヘルハ、如意輪神呪經ト云中ニ、手取白牛玉、塗觀自在菩薩足、幷塗眼中、所有眼病無不除差、二遶塗之、頭病口病悉得除愈矣ト云ヘバナリ、夫日本神社ノ牛玉トイヘルハ、牛黄旋毛玉ヲ愛スルニ非ズ、神璽ノ器ナレバ生土ノ二字ヲ作爲シテ牛玉ト云稱タルナリ、生土ノ二字ニ產洲名ノ訓有、故ニ何社ノ產子ト云義ヲ像テ、其神ノ冥助ヲ願奉者也、然ヲ寶珠形ノ圖ナド印捺コト不可然、古ノ遺風有ル宮社ニハ、今モ其社ノ下ノ土ヲ掘テ水ニ解テ、カナタコナタニ二三付ルコト也、是能生土ノ字義ヲ模ト云ベシ

〔神社啓蒙 五 問〕一問牛玉何義　答此生社也、或言、牛玉〈牛玉之牛黄〉圖ニ能厭不祥、予寔、生社之義爲近是、

〔答問雜稿〕國々の一鄕一村に生土神(ウブスナノカミ)として齋祀るに、祭神のたしかならぬが多し、〈天神、山王、山の神の類〉世の大方の說に件の神は式外のなれば、淫祀なりとやうに云は非じ、祭神のたしかならざるは素よりわかぬことながら、古よりしかまつり來んには仰ぎ尊むべきことにや、さりながら式外の神はみだりなることも有べきなれば、よく〳〵由來を正して斟酌すべきにや、

答　御說の如く僻なり、淫祀なりといふは非なり、仰ぎ尊むべき事なり、由來はたゞさまほしき事なれども、この事は今にてはしられぬ事のみなり、

〔玉手箱 五〕眞野時綱が說に、其國その土地の靈の御德は各々異にして、人物動植みな其神氣を得て產生する故に、地宜方物各々その性を異にす、產土神はこれ土地の靈なるが、大八洲に各自の國魂神あり、一國には國魂といひ、一處には產土神と稱す、地勢方角に從ひて、其靈異なる故に、方隅不產の物あり、人またその容貌言語志氣の不同あり、是みな土地の神靈の寓する所ある故なり、〈淮南子墬形訓に、堅土之人剛、弱土之人肥、墟土之人大、沙土之人細、息土之人美、耗土之人醜と見え、周禮の地官司徒に、以土會之法、辨五地之物生とて、すべて其地の物人々に異なる事を載たり、異域も同じ理なり、〉是を以て漢土にも人生れて其土に依て姓を命ずるは、本土に報ゆる謂なり、其は后稷

隱公八年の傳に、因レ生以賜レ姓、胙二之土一、而命二之氏一、とある是なりと言へるは實然る説なり、この時編著せる神階編に見えたるを、今は其業を去り、文なも甚く引約めて記せるなり、が説に、其世の諺に、人の性質の事につきて、産土(ウブスナ)がらなど云ふめるは、右の説にかなへり、抑神の幽冥より人を治め給ふ事の本は、〇中略神世に天照大御神、皇産靈大神の詔命によりて、杵築大社に鎭坐す大國主神の無窮に治給ふ御業なること、神典に委く傳へて著明なるを、猶その古傳に本づき熟々推究めて考ふるに、大國主神は幽冥の事の本を統領め給ふにこそ有れ、末々の事は一國に國魂神、一宮の神あり、一處には産土神、氏神ありて、其神たちの持分て司たまひ、人民の世に在る間は更にも云はず、生れ來し前も、身退(マカ)りて後も、ほど〳〵に治め給ふ趣なり、

〔志斐語附錄上〕いせやいづもやうぶすなのかみのおかげでよはたもつ

この天地間は論なく、人間上の小事件に至るまでも、目にこそ見え給はね、一事一物として、天神國神八百萬神の御恩澤に因らざるは更に有る事なし、〇中略さて出雲大神とは、杵築大社に鎭坐す大國主大神と申て、〇中略先神代の初時より我天皇の御大祖邇々藝尊は、天下の顯明政を統主らせ賜ふ大皇に成まし、出雲大神は、萬國の幽冥の政を統掌り賜ふ大皇と、皇祖天神の神詔に因て定賜へるより、貴人も賤人も、善人も惡人も、富人も貧人も、生ある人は必ず此世を罷て後に冥府に參りて、此大神の御政事を受賜はらでは相ならぬ事なる故に、兼て大神を深く信仰奉りて、常に幽界に愧ぬ樣にと言行を愼むべきこと勿論にて、〇中略さはいへど出雲の大神はその大本を掌給ふ大君にこそ坐せ、その細小の末事に至ては其國々處々に鎭坐す産土神、また氏神の各此を持分て御治め賜はる事にて、譬へば天下の大政は天皇の御朝より出ても、國々縣々に百官人等の有て、其々に持別て御治有ると同理なり、或人言に、君父を殺し盜賊をなし、人倫に背く事あらば、公儀或は領主地頭より踵を回らさず誅戮を加へ給ふ、是天下の常なり、然るをさまでの惡事にもあらねど、日用の小事にも道に背く事あれども、誅戮を上より加へ給ふ程にも至らず、

されども天道許し賜はぬ日には、譬へば三間の路も一間狭く成賜ふ道理なりと云へり、實に父の子を思ふも、君の民を見給ふも、此心有べしと云るは然說にて、產土神の氏子を見給ふも亦かくの如し、されど凡て善惡の報は死後に定る事と心著ざるは疎漏と云べし、さて人間の此世に生れくる、本より一生の内は勿論にて、幽界に歸入て後までも、第一にこの產土大神の萬緒に御世話賜はれる事は、委き師〔○平田篤胤〕說また近き慥なる證據も多く有て、已に記せる物あり、然れども何ほど慈仁深き父母も、教訓を受ぬ不孝の子はせん方なく勘當し、いかなる名醫にても、藥も灸針をも用ゐぬ病には施す術なきが如く、神明のます事もかつてえ知らず、放蕩不拘の無賴の小人の無狀の行の甚きに至りては、產土大神の寛仁大度に坐すも、遂には此を厭嫌はせ賜ふより、妖鬼のその間を窺よりて、其心魂に入變りて、彌惡事にのみ長せしめ、現世にて大逆を犯して、刑罰をも蒙りなどもするに至る事とぞ聞ゆめる、

古事類苑

神祇部十四

鎭守神 地主神附

附地主神

古事類苑

神祇部十四

鎭守神 地主神附

鎭守神ハ、一ニ鎭主神ニ作ル、卽チ其土地等ヲ鎭安守護シ給フ神ナリ、其別ヲ擧グレバ、一國ノ鎭守神アリ、王城ノ鎭守神アリ、後院ノ鎭守神アリ、城內ノ鎭守神アリ、神社、寺院若クハ第宅ノ鎭守神アリ、又氏ノ鎭守神ト云フモアリ、

一國ノ鎭守神ハ、國內ノ著名ナル神ヲ以テ其鎭守ト稱スルモノニシテ、多クハ一宮ヲ以テ之ニ充テタリ、出羽國大物忌神社ヲ本朝世紀ニ、鎭守正二位勳三等大物忌明神ト記シ、若狹國若狹彥若狹姬神社ヲ同國一二宮緣起ニ、一州三郡ノ鎭守ト爲スト記セルガ如キハ、卽チ一宮ヲ以テ鎭守神ト稱スルモノニシテ、尾張國熱田神社ヲ本朝文粹ニ鎭主熱田宮ト記シ、周防國出雲神社ヲ東寺文書ニ、鎭守正一位兩所大明神ト記セルガ如キハ、卽チ名神ヲ以テ鎭守神ト稱スルモノナリ、又別ニ數神ヲ合祀シテ、以テ其國ノ鎭守神ト稱スルモノアリ、淡路國大田文ニ、當國鎭守十一箇所大明神ト記シ、上野國神名帳ニ、鎭守十二社ト記セルガ如キ、卽チ是ナリ、

王城鎭守神ハ、帝都ヲ守護スル神ノ稱ニシテ、後院鎭守神ハ院內ヲ守護スル神ナリ、城內鎭守神ハ、特ニ其城內ノ地ヲ守護スル神ニシテ、後世德川氏ガ、鎭守山王ヲ以テ城內ノ守護神ト爲シヽヨリ、諸藩ノ之ニ模倣スルモノ多シ、

名稱

寺院ノ鎮守神ハ、其境内ナル神社ヲ以テ守護神ト爲スモノニシテ、或ハ其國郡若クハ他國ノ神社中、殊ニ著名ナルモノヲ祀リタルアリ、例ヘバ東大寺東寺等ハ八幡大神ヲ祀リ、仁和寺ハ熊野十二神ヲ祀リ、廣隆寺ハ鹿野香取鹿嶋等三十八所ノ神ヲ合セ祀リテ、其鎮守ト爲セルガ如キ是ナリ、又新ニ寺院ヲ設クルニ方リテ、古來其地ニ鎮座シ給ヘル地主神ヲバ、更ニ祠宇ヲ造リテ以テ鎮守トナシタルモアルベシ、

第宅鎮守神ハ、第宅内ニ社殿ヲ設ケテ齋ヒ祀ル所ノ神ヲ云フ、此ハ第宅神ノ篇ニ詳ナレバ就テ見ルベシ、

氏ノ鎮守神ハ、卽チ其氏族ヲ守護スル神ノ稱ニシテ、源頼義ノ子義綱ガ、其產土神ナル山城國賀茂ノ社ヲ常陸ニ遷レテ、以テ氏ノ守護神ト爲シタルノ類是ナリ、

鎮守神ヲ類別スレバ大約前陳ノ如シト雖モ、之ヲ要スルニ、其一區域ヲ鎮護シ給フ神ノ稱ナリシカバ、後世ニ至リテハ、氏神ト產土神トヲ擇バズ、總テ其地ヲ守護シ給フ神ヲバ、廣ク之ヲ鎮守神ト稱セリ、

〔伊呂波字類抄〕知疊字鎮守

〔節用集〕知神祇鎮守チンジユ

〔神道名目類聚抄〕四神祇鎮守社シンジユノヤシロ　境内ニ神社ヲ祭テ、其所鎮守ノ神トス、又寺院ニ神社ヲ祭テ、其寺院ノ鎮守ノ神トス、其佛法守護ノ神ト云、

〔日吉社神道秘密記〕一山王者、三國名山之守護、故號山王、天竺靈鷲山之鎮守山王權現、无熱池、大唐天台山之鎮守山王權現云々、晁明鏡我朝比叡山之鎮守山王權現云々、湖水池アリ、靈峯守護神金毘羅神、三輪明神是也

〔神祇提要十二〕神道大意

夫鬼神者、萬物之主、而人心之所レ宗也、故鬼神鎭則國家安、鬼神亂則國家危、是故伏羲畫二八卦一祭二八神一、釋尊爲二天地一祭二十二神一、爲二佛法一祭二八十神一、爲二伽藍一祭二十八神一、爲二叡山鎭守一祭二金毘羅神一、乃十二神之內也、此金毘羅神者、日本三輪大明神也、傳敎大師歸朝記文載レ之、他國尙如レ此、何況於二吾神國一哉、

〔異俗佛事編 一 新譯〕寺院安二鎭守一（同、寺院ニ多ク鎭守ノ社アリ、是本朝ハ神國ナル故歟、異域ニモ若茲ナルカ、答、素ヨリ精舍ノ規式ナリ、要覽曰、四分律云、伽藍中立二神屋一、）

又曰、傳云、中國僧寺立二鬼神廟一、（[illegible]）次立二伽藍神廟一、次立二賓頭盧廟一、

〔神祇稱號考 一〕鎭守　鎭○主○

鎭守は其地に鎭座して守護するのよしの名なり、○中略本朝文粹十三匡衡願文には、鎭主熱田宮とあり、鎭主は其地に鎭座し、主領するよしの名なるべし、

〔神社私考〕鎭守總社の事

諸國に鎭守また總社と稱ふ神社の多きは、いかなる由にて、いかなる神を祭れるにかと考るに、共に國史には見えざる號にて、其より後の古書どもにはをり〳〵見えたり、まづ鎭守の稱のふるく書に見あたりたるは、本朝世紀、○中略また小朝熊神鏡沙汰文に引たる小槻廣房の勘文、○中略など見えたり、（中略）、（上野國の神名帳に、上野國總五百七十九座を記して、其首に鎭守十二座と擧て、當國の式社十二座悉く載て、次に郡を分て式外の諸社を載たり、然るは式社をば殊に重じて、國內の鎭守と稱して、分載たるものなるべし、）

〔本朝世紀〕天慶二年四月十九日庚寅、諸卿參入、昨日被レ定二官符等一、請二結政請印一、給二彼國使一了、官符三通、皆給二出羽國一、○中略一通鎭守正二位勳三等大物忌明神山燃、有二御占一、

〔本朝文粹 十三 願文〕於二尾張國熱田神社一供二養大般若一願文　江匡衡

當國守、代々奉レ爲二鎭○主○熱田宮一、奉レ書二大般若經一部六百卷一、已爲二恒例之事一、○中略

寬弘元年十月十四日　正四位下行式部大輔兼東宮學士江朝臣匡衡敬白

〔若狹國鎭守一二宮緣起〕一宮（上社）元正天皇御宇靈龜元年乙卯九月十日、當國遠敷西鄕內靈河之

源白石之上始垂跡、○中略二宮〈諏下宮〉同御宇養老五年辛酉二月十日、以前靈石上始垂跡坐、○中略則被レ成二下正一位勳三等若狹彥若狹姬大明神綸旨一、爲二一州三郡之鎮守一宮、

〔曾我物語七〕南無歸命頂禮、申當社明神、神威揭焉、天地感動、神火自燒、大海以來、人皇四十代天武天王御宇朱鳥元年乙酉年、始顯二伊豆國鎮守一、自二其時一以還、代々帝率崇敬、其後人王五十三代淳和天皇御時、天長六年己酉年七月八日夜半許、信濃國水內郡中條郷竹葉村上人云二法泉沙門一人託宣、我是伊豆國鎮守三嶋大明神、是本地藥師、后妃十一面觀音、王子亦本地地藏尊、是今立伊豆國賀茂郡津河里、

〔園太曆〕康永三年八月廿九日、近江國栗太郡小杖社神主源重賴誠惶誠恐謹言、

請下特蒙二天恩一且奉上レ爲二寶祚延長一且爲レ增二神明威光一被レ授二正一位一狀

右當社神明者、國中無雙之鎮守、郡內五所之隨一也、○中略

康永二年十二月日

〔諏訪大明神畫詞一〕夫日本信州に一の靈祠あり、諏訪大明神是なり、神降の由來其儀遠矣、竊に國史の所說を見るに、○中略科野の國洲羽のうみに至時、建御名方の神申さく、我此國を除ては他所に不行と云々、是則垂跡の本緣也、自爾以降、靈場を示て瑞籬押開給て、永和の明時、爵一級奉り給しより、寬平天慶にいたりて、既に極位を授られまし〳〵き、されば式內の大神として案上の禮奠是嚴重也、王城擁護の誓願のみにあらず、武關鎮守の靈驗あるが故に、上下盡敬誠をいたし、夏夷爾崇志を同す、

〔神道集四〕信濃國鎮守諏訪大明神秋山祭事

抑信濃國一宮諏訪上宮申、本地普賢菩薩是也、二宮諏訪下宮申、本地千手觀音也、亦大慈觀世音名、○中略

〔小朝熊社神鏡沙汰文〕永保三年閏六月十五日、出雲國司言上云、鎭守水澤明神御正體失御坐者、

〔源平盛衰記二十三〕新院自嚴嶋還御附新院恐御起請附落書事

十月六日〔治承四年〕新院〔高倉〕嚴嶋ヨリ還御アリ、〔中略〕十一日ニ夢野ト云所ニ、新キ御所ヲ造テ御渡有ベキ由入道相國〔平清盛〕被申ケレバ、法皇〔後白河〕御輿ニ召テ御幸アリ、左京大夫脩範一人ゾ御伴ニハ候ケル、名モイマ〱シキ樓ノ御所ヲ出サセ給テ、尋常ノ御所ニ移リ入セ御坐シテ御心安モ、嚴嶋ノ御幸ノ驗ニヤトゾ被思召ケル、彼明神ト申ハ、安藝國第一ノ鎭守也、國務ノ人ハマヅ此神拜ヲ專ニス、

〔東寺文書〕元永二年九月十六日、當國鎭守、正一位出雲兩所大明神宇豆廣前仁、國司正四位下行周防守藤原朝臣家保恐美恐美毛令申事由波、去年十一月廿九日、但馬國與利、當國仁遷任、今月十三日入境著府、卽官鎰乎受領、任口天種々御神寶物乎調作天、今日御神拜乎行布、其修貢物弓二張云云、

〔延喜式十神名〕周防國佐婆郡出雲神社二座

〔上野國神名帳〕鎭守十二社

正一位

拔鉾大明神　赤城大明神　伊香保大明神　榛名大明神　甲波宿禰大明神

從一位

小祝大明神　火雷大明神　倭文大明神　大國玉大明神　加茂大明神　美和大明神　宇藝大明神

〔備前國內神名帳〕國內祝給鎭守諸大明神百廿八社

八幡大菩薩雄島宮　坐上道郡

一品吉備津彥命宮　坐津高郡

正二位安仁大明神　坐邑久郡

從二位神根大明神　坐和氣郡

從二位布施大明神　坐赤坂郡

從二位賀多山大明神　坐邑久郡

從二位天津石門別大明神　坐三野郡

從二位高藏大明神　坐赤坂郡

從二位深田大明神　坐上道郡

和氣郡坐八社

磐梨郡坐十八社

邑久郡坐十六社

赤坂郡坐廿七社

上東郡坐四社

上道郡坐十三社

三野郡坐九社

津高郡坐九社

兒島郡坐九社

小豆島郡坐二社

鄕內莊內致祝給諸神等、四方上下道祖神等、法樂莊嚴、威光增益故也、

于時明應四年乙卯十二月廿五日　權少僧都宥圓書之、〇下略

〔大友記〕由須原八幡御祭之事

豐後國ノ鎭主、由須原八幡宮ノ御神事ハ、毎年八月十四日ヨリ明ル十五日マデ放生會御祭トテ、上古ヨリ取オコナフ、

〔諸社緣起文書七〕當社賀茂大明神宮緣起

抑常陸州新治郡中郡庄加茂邊村賀茂大明神宮者、御惠四海の外まで普く、利生を施し、衆生の願をみて給ふ、〇中略爰ニ仁王五十二代嵯峨天皇之御宇、弘仁壬辰紀州高野山金剛峯寺弘法大師回國之節、當社參籠之時、御山震動之奇瑞に驚き、四方にかへりみれば、草樹金色の光にえいじ、高嶽にんにくの衣にとゞむ、〇中略老翁忽然として壇上に立給へり、大師問云、子者是何人ぞ、何故に爰に至、老翁答曰、予正に此所に住する事數千歲之春秋を過たり、爲守一天泰平五穀成就、葦原中津國之鎭守加茂大明神と答給へり、

〔集古文書五十二起請文〕武田信玄起請文　葉田平七郎藏

敬白起請文之事

一相馬遺跡幷要害、貴邊御本意之義里見義弘談合申可相稼候、殊者一國之内ニ候共、無他之綺末代共ニ任置可申候、畢竟房州へ御入魂肝要ニ候之事、〇中略

以上

右僞候者、可蒙梵天帝釋四天王、殊八幡大菩薩、富士淺間大菩薩、關東鎭守伊豆箱根兩權現、三嶋大明神、別而者氏神新羅大明神御罰者也、依起請文如件、

元龜元年庚申十二月七日　信玄書判

洗心齋

〔中右記〕長承二年五月八日、今日宇治鎭守明神、離宮祭也、宇治邊下人祭之、未時許、行向平等院透廊見物、巫女馬長一物、田樂散樂如法、雜藝一々、遊客不可勝計、見物下人數千人、著河北岸、小船數十艘

如並瓦、田樂法師原、其興無極、笛無定曲、任口吹、鼓無定聲、任手打、鼓笛喧嘩、人驚耳目、神輿三所致如在禮、(或四月八日御輿迎、渡御旅所、今還御本宮也、)供神膳、臨晩頭、競馬十番、(左鳳水島住人、右宇治邊住人、)一番左(勝)、次次番勝負相決、人馬競馳、日入後事了、　三年五月八日、今日離宮祭也、其路從今年、過小川殿門前河、於侍所棧敷見物、先左右競馬十番、宇治幷眞木嶋住人等爲騎乘、同童部、其裝束十番、使之作法者二人、(飾馬、牽馬、手振、雜色如常也、)神輿三所、致如在之禮、巫女卅餘人村布衣、騎馬者數十人、或束帶、或布衣者、不知何方、又以數人□□□口、或捧幣帛之者、或帶弓箭之者、各々面々不可勝計、田樂乙類、鼓笛喧嘩、巫女之輩、衣裳飛揚、見物男女、夾道無隙、未時許渡了、於本社有競馬、供神膳云云、去年見物此祭、遙見本社作法、

〔朝野群載(五朝儀)〕田原御栗栖住人申文

請殊蒙恩裁、只依先例旨、召問在地、被裁許、爲紀貞則男貞次、押作相傳所領御栗栖大明神御祭一〇(本作經)料田四段百八十町狀、

右謹檢案內、作田親父友光先祖相傳所領也、而往年奉寄御栗。栖。鎮。守。大明神兩所二季六節御祭御供料田矣、(〇中略)

天永四年閏三月一日　　御栗栖住人山背友武

〔山城名勝志(十九宇治郡)〕御栗栖鎮守大明神　栗林傍有社、土人云、祭八幡宮、又有小社、云天王社、土人云、天武天皇祠云々、按、是御栗栖鎮守大明神兩所歟、

〔日吉社神道秘密記〕倉園大明神、衣冠帶大刀、八。條。鎮。守。社、第十三代成務天皇王宮穴太有之、江州此神出現、元三大師之時、社建立之事、本地毘沙門、是成務天皇御倉神明也、故如此現形神德事、那園社中八條町鎮守是也、於井上辻如此演也、女體御裝束、本地普賢菩薩、三宮御一體、

〔神馬引付〕一鎮守八幡宮　一匹

同十八日(〇文明五年十二月)奉之、謂御送狀悉以宛所者御師也、各請取到來之、

〔氣比神宮年中所當米已下所出物之記〕蓟野作田六拾三町四反二百四拾歩承元三年實檢定

除田拾五町五反

鎮守劒大明神御祭料田　三町四反

〔氣比神宮年中所當米已下所出物之記〕氣比庄作田四十三町四十歩內承元三年實檢定

除田三町八反　鎮守林宮祭料田　一町

〔二十一社記〕諸社事

王城鎮守神とて廿一社を定置ﾀﾙ、是圓融院、一條院以來事歟、凡臨時の御祈禱等、諸國までは遼遠なる故に、此廿一社に奉幣せらるゝ也、二十一社におきても上中下に分けたり、伊勢石淸水は宮なれど總じて社と號する歟、二十一社の事大概可ㇾ記ㇾ之、

伊勢大神宮　石淸水八幡宮　賀茂社　松尾社　平野社　稻荷社　春日社

已上上七社

大神社　大倭社　石上社　廣瀨社　大原野社　吉田社　住吉社　日吉社　廣田社　梅宮社

祇園社　北野社　丹生社　貴布禰社○中略

〔朝野群載二緣起〕加茂社櫻會緣起　江佐國作

朝家鎮守皇大明神、天降坐以還、年紀久累、不ㇾ知₂幾百廻₁矣、上自₂一人₁三公、下至₂百僚衆庶₁、戴₂其神德₁保₂此景福₁、然則萬乘之幸臨、經₂代々₁以儀式彌嚴、博陸之參詣、逐₂年々₁以祗敬無ㇾ懈、乃至都鄙貴賤道俗男女、莫ㇾ不₂欽仰₁矣、○下略

〔賀茂皇大神宮記〕人皇五十代のみかどをば、桓武天皇とも申、またかしは原の天皇とも申ける、○中略延曆十三年十月廿一日に、長岡の京より今の京平安城にうつされけり、○中略今の京と申は、延曆三年六月甲子、參議近衛中將紀朝臣船守を賀茂皇大神御社につかはして、奉幣をもて遷都の

よしをつげ奉り給ひ、王。城。の。鎭。守。として、御めぐみふかくまなじりをめぐらし給ふゆゑに、代々をへて繁昌ましまし、うごきなきこそめでたけれ、

〔扶桑略記拔萃 桓武〕延暦十五年、有勅草創東寺、造東寺長官從四位上藤原朝臣伊勢人造鞍馬寺、則彼寺緣起云、伊勢人倂、我奉勅命雖造東寺、私願未遂、爭建一堂安觀音像、伏願觀音示其勝地、夢見洛城之地有一深山、東西高峙、中有平地、洞水開流、宜洗塵心、爰老人出來、卽相語云、汝知此地甲于天下、建立道場、尤得便宜、伊勢人問云、仁爲誰人、老人對倂、我是王。城。鎭。守。貴。船。明。神。也、感汝道心、敎斯勝地、其夢既覺、心神感動、試任騎馬、祈赴北山、漸涉於數十里、自到夢地、歔淚數行、下馬再拜、○又見伊呂波字類抄所引本朝文集、二十二社註式、歴運記、壒嚢抄、

〔今昔物語 十一〕藤原伊勢人始建鞍馬寺語第卅五

今昔聖武天皇ノ御代ニ、從四位ニテ藤原ノ伊勢人ト云フ人有ケリ、心賢クテ智リ有リ、其時ニ天皇東大寺ヲ造給フ、此人其ノ行事トシテ有間、心ノ内ニ思ハク、我レ宣旨ヲ奉ハリテ道場ヲ令造ト云ヘドモ、未ダ私ノ寺ヲ不建、佛ヲ不造奉、就中ニ我レ年來觀音ノ像ヲ顯サムト思フ心有リ、若シ其志シ不空バ、願クハ伽藍ヲ建立セム所ヲ示シ給ヘト祈リ請テ寢タル夜ノ夢ニ、王城ヨリ北ニ深キ山有リ、其體ヲ見ニ二ノ山指出テ、中ヨリ谷ノ水流出タリ、繪ニ書ケル蓬萊山ニ似タリ、山ノ麓ニ副テ河流レタリ、此所ニ年老タル翁出來テ、伊勢人ニ告テ云ク、汝ヂ此所ヲバ知レリヤ否ヤト、伊勢人不知由ヲ答フ、翁ノ云ク、汝ヂ吉ク聞ケ、此所ハ靈驗揭焉ナラム事他ノ山ニ勝レタリ、我レハ此。山。ノ。鎭。守。トシテ貴布禰ノ明神ト云フ、此ニシテ多ノ年ヲ積レリ、下○

略

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年二月十六日壬戌、未剋鞍馬寺燒亡、失火云云、自小堂火出來、當寺者桓武天皇御宇、延暦十五年丙子、藤原伊勢人依貴布禰明神之告、草創以降、星霜既三百八十餘年、専爲

帝都擁護精舍、

〔東寶記三〕大菩薩殊當寺相應事

私云、當寺〇東寺講堂安仁王經秘曼荼羅、額號敎王護國寺、大菩薩依仁王經增威力、名護國靈驗大自在王菩薩、爲王城鎭守、遷坐當寺、彼此相應因由、以可知而已、

〔平家物語二〕卒都婆ながしの事

康頼入道はあまりにこきやうのこひしきまゝに、せめてのはかり事にや、千本のそとばをつくり、阿じのぼし、ねん號月日けみやう實名、二首の歌をぞ書つけける、〇中略これを浦にもつて出て、なむきみやうちやうらい、ぼん天たいしやく、四大天王、けんらう地神、王城のちんじゆ諸大明神、別してはくまのゝごんげん、あきのいつくしまの大明神、せめては一本なりとも都へつたへてたべとて、おきつ白波のよせてはかへすたびごとに、そとばをうみへぞうかべける、

〔荏柄天神縁記〕王城鎭守神々多くましませど、當社は靈驗あらたにましますゆゑに、朱の玉垣再拜せぬ人なし、

〔淡路國大田文〕王城鎭守諸大明神、當國鎭守十一箇所大明神神罰冥罰、在廳等身可蒙候者也、仍爲御不審起請文以解、

貞應二年四月卅日

〔尾張國內神名牒〕正月十一日、有座主讀國內神名帳神事、

熱田大神宮、奉唱王城鎭守諸大明神、

伊勢二所梵尊　　比叡山王三聖大菩薩

八幡三所大菩薩　　宇佐大菩薩

金峯山金剛藏王大菩薩　　熊野三所大權現

白山妙理大權現　立山滿行大菩薩
竹生嶋大辨才天女　熱田大福田大菩薩
多賀信行大菩薩　中山滿行大菩薩
伊豆滿行大菩薩　氣比氣多兩所大菩薩
高野木河兩所大菩薩　二荒滿行大菩薩
賀茂下上大明神　稻荷大明神
松尾大明神　住吉大明神
廣田大明神　垂水大明神
比良大明神　淺間大明神
神野大明神　葛木大明神
春日大明神　大原野大明神
瀧藏大明神　伊福貴大明神
三嶋大明神

〔日吉社神道秘密記〕大宮權現、日本國之御主、故號大國主神、〇中略稱大比叡大明神事、人王第一神武天皇王宮ヨリ同座鎮座アリ、天子護持故號之、第一ヨリ至第十御宇御同殿加護所、第十代御宇別宮御建立有、從宮有之、和州三輪是也、〇中略人王第一御宇ヨリ主上加護之御本質是也、平安城開闢以來、比叡社猶以帝都之鎮守大明神是也、

〔神社啓蒙三〕梅宮
梅宮者在山城國葛野郡、去王城西可二里所祭之神四座、相殿神四座、
酒解神

大若子神

小若子神

酒解子神

梅宮社記幷舊傳曰、件四社以孝謙帝天平寶字年中祭此地、爲帝基守護鎭守、〇中略被定南方鎭守始

第七十四代鳥羽院治十年、永久五年丁酉六月、炎干御卜入云云、

〔山城名勝志 四洛陽〕後院隼神社

諸社根元記云、京中式内神内隼社、坐朱雀院內、坐四條坊門油小路之小社、爲隼神者一說、然而所載國史、坐朱雀院歟、東三條內角振隼者、各別事也、

〔拾芥抄 中末宮城〕朱雀院 累代後院、或號四條後院、三條北、朱雀西、四町、四條北面、坊城東、

〔延喜式 九神名〕京中坐神三座、並大左京四條坐神一座、月次新嘗

隼神社

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年六月十五日甲午、授後院〇朱雀院無位隼神從五位下、

〔三代實錄 二十六清和〕貞觀十六年八月四日庚申、授後院從四位下隼神從四位上、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶三年九月四日丙寅、奉授左京正四位上隼神從三位、

〔百鍊抄 八高倉〕治承元年正月卅日、朱雀院鎭守石神明神燒亡、

〔山槐記〕治承二年十一月十二日辛未、差召使幷諸人從者、奉神社佛寺等、

神社四十一箇所、〇中略朱雀院石上、

〔百鍊抄 四後冷泉〕永承五年七月三日、新造冷泉院放火、諸國木守等撲滅之、

或記云、六月十六日、冷泉院石上明神、被移立神殿了、

〔古事談 五神社佛寺〕中山社嚴神者、冷泉院中嶋ニ令祝火神給云々、其後事外放光、後冷泉院御時歟、託宣云、門前車馬多時、出入不輙、給此所一向不欲住云々、依之令去移他所給云々、

〔年中行事秘抄 四月〕中山祭事

坐給冷泉院石神也、自後冷泉院御時預官幣、天喜元年四月也、

〔年中行事秘抄 十一月〕中山祭事

〔公事根源 四月〕中山祭　中酉日

永承五年六月十六日神社を建立し、同六年十一月八日に從三位の神位を授け奉らる、これは冷泉院にます石神なり、後冷泉院天喜元年四月よりはじめて官幣あり、

〔公事根源 十一月〕中山祭　上酉日

四月におなじ

〔年中行事 加茂氏人保憲所撰〕四月上酉日中山祭事〇中略

十一月上酉日中山祭事於冷泉殿内

〔續史愚抄 後光明〕承應三年十一月十六日壬寅、神祇少副兼起奉仕清祓於内侍所前庭、次於法皇御所鎭守社有同事、

〔槐寓自語 中〕靈元院の院中の時、御庭の御鎭守の例月朔日の立楽に、楽所のともがら參りたるに、折々立楽すみて後に、いろ〳〵の楽をせさせて聞食けり、

〔續史愚抄 中御門〕正德四年十月十一日己卯、有法皇御所下御所鎭守春日社假殿遷宮、　十一月十一日己酉、法皇御所鎭守社春日歟正遷宮、

享保九年十二月三日壬申、法皇〇靈元被造栫本社於仙洞、下御所也、御書院前鳥居云、去月十日地曳、木作始、廿七日上棟、今夜戌刻、卜二位兼敬行神體遷宮儀、此間法皇下御宮御所前地、次於拜殿有御奉幣、卜二位兼敬取御幣云　四日癸酉、

城內鎭守神

此日有法皇御所鎭守柹本社和歌御法樂、(三十首)藏人右中辨宣誠講之、

〔大江俊冬記〕安永九年三月五日、自久我家來如左、

明日仙洞御鎭守御奉幣候、從今五日晩至六日午刻、僧尼并重輕服之輩、參院可被憚候、依爲心得申達候、尤次(江茂)可被相達候也、

三月五日

〔續百一錄〕享保廿一年(○元文元年)八月廿九日、吉田三位樣江御使石井隼人御預ケ置候靈社はこんニ付、此間御家來ヨリ家來迄被聞、九月二日、吉田家鈴鹿周防守ヨリ申來ル、明三日御鎭守下遷宮執行之由、三位樣(○吉田)之仰候旨申來ル、十二日、靈社修覆出來ニ付、今日正遷宮、十三日、御鎭守御社御修□□入用覺、

右貳拾六匁御屋根一式

右九匁三分(大工貳人、日用三人、)

右七匁三分四厘(御のし方、御社ぬり代)

右三匁(かざり方、海老錠代)

鳥目五百文(十二日遷宮、神供其外入用)

右銀〆四拾五匁六分四厘

鳥目五百文

九月

〔事蹟合考〕一御城內鎭守の事

一天正十八年八月、權現樣(○德川家康)小田原表より御當城へ御移り被遊候節、榊原式部大輔殿を被爲召、當城內に鎭守の社はこれなく候やと御尋被遊候節、式部殿被申上候は、定て鎭守の社に

てもこれあり候や、これより北の方に當り、御曲輪の内に少さき社立兩社相見え候との儀に付、すなはち御覽可被遊候よしにて、式部殿御案内にて被爲入候處に、小坂の上に梅の木を數多植まはし、その內に宮立兩社これあり候を御覽被遊候て、道灌は歌人ゆゑ天神の社を建立したりと仰にて、殘る一つの社の額をも御覽被遊候て、すなはち御拜禮被遊、式部々々、扨も不思議なる事の有はとの仰につき、式部殿御側へ被參候得ば、當。城。の。鎮。守。の。や。し。ろ。これなきにおいては、坂本山王を勸請すべきと思ひつるに、以前より山王のやしろ建置るはと仰ありければ、式部承はられ、仰のごとく奇妙なる儀にて候、ひとへに御城御長久、御家御繁昌の御吉瑞に御坐候と被申上候得ば、殊の外御機嫌の御様子となり、

〔愛媛面影 五宇和郡〕山王社

寬永二年再建の棟札に、藤堂泉州の時、此所に勸請かといへり、寬文三年癸卯、領。主。の。氏。神。な。る。に。依て、城。内。に。勸。請。し。給。ひ。、社壇をはじめ、神輿に至るまで新に造給へりと宇和舊記に見たり、

〔土州淵岳志 上〕高。知。御。城。鎮。守。所祭三社アリ、本社諏訪大明神也、口社ハ八幡大神宮也、今世人御城鎮守ハ、八幡ト一社ヲ稱シ奉ル也、

〔江戸砂子 六〕富岡八幡宮、又稱深川八幡とも

當。社。四。隅。鎮。守。

蛭子宮　丑寅　摩利支天社　未申　荒神社　辰巳　大勝金剛社　戌亥

此四社境内をすこし離れ、五町三町の間にあり、

〔類聚大補任 龜山〕文永六年己巳九月、神。服。機。殿。鎮。守。神。殿。御裝束幌紛失、○中略神。麻。續。機。殿。鎮。守。神。殿。、幌御鏡一面紛失、○下略

〔神名秘書〕神服麻續兩機殿

神服機殿（在飯野郡流田郷服村）

麻績機殿（在同郡井手郷）

機殿儀式帳云、此機殿者、昔纒向珠城朝廷（○垂仁）倭姫皇女、奉傳大神、齋奉飯野之高宮、于時機殿立長田郷、是處立社、號麻績社、亦名河埼社、是大神御靈也、稱麻績屋姫神、于後機殿遷於岸村、是處立社、號稱岸社、亦是大神御靈也、

〔大神宮儀式解〕二十四 兩機殿は機殿儀式帳、纒向珠城朝廷倭姫皇女仕奉大神、齋奉飯野之高宮、于時機殿立長田郷、是處立社、號麻績社、亦名河埼社、是大神御靈也、稱麻績屋姫神、于時機殿遷岸村、是處立社、號稱岸社とあるは、麻績機殿及鎭守社也、神名帳伊勢國多氣郡麻績神社といふも同じ、鎭守は卽機殿の傍にあり、今世機殿、鎭守、共に井手郷井口村（今は飯野郡）にあり、上館といへり、（○中略）麻績機殿はかれこれ遷しぬれど、服織機殿はかはる事なし、今時も多氣郡流田郷服村（又云、大垣内村、此邊すべて御糸郷といふ、）に建たり、これを下館といふ、神名帳伊勢國多氣郡服部麻刀方神社二座といふは、服織機殿の鎭守にて、機殿の傍にあり、（同郡服部伊刀麻神社は、御糸郷出間村にありといへり、）件の兩所鎭守の神社各一宇、寶殿各二宇、機殿各一宇攝社等、當時も二十年一度造立せり、（○中略）件兩機殿、古は公より造立られて、百練抄保延二年三月廿三日、大神宮麻績機殿燒亡と見えしも、公より造立らるゝより注進せしなるべし、（○中略）嘉元假殿記、神麻績鎭守神殿、幷屏門、同八尋殿、爲大風顚倒、又云、神麻績機殿已下十二宇、令修造とあるも、公より造奉られし事志るし、

寺院鎭守

〔東寶記〕三 鎭守八幡宮

當寺影向不違神託、借形之御體現于空中、其遷坐之元由者、桓武天皇御宇、延曆遷都之初、東寺草創之刻、爲帝都鎭護有勸請之儀、王城之降臨以之爲初、（此時未奉安置御體、只勸請之儀許也、）至嵯峨聖代、平城天皇御事出來之時、與大師有御密談、先御立願成就之後、去弘仁年中大師奉勅重勸請之、此時三所尊體御影

現空中云々、三所御體(法體、女體、俗體、)幷武內宿禰親影現虛空、初寫紙形、後刻木像、被奉安置社壇、眞身之影現、權者之影刻、本朝諸神、何社有此例乎、

〔東寺執行日記私用集二〕東寺鎭守八幡宮御事

私云、東寺八幡宮勸請者、弘仁元年(庚寅)大師御勸請、男山八幡宮勸請者、貞觀二年(庚辰)行敎和尙、自男山東寺勸請者、五十一年以前歟、

〔東寶記三〕當社遷宮事

建久八年四月六日、八幡宮御正體奉渡新社、(今度奉渡金堂內云々)執行嚴慶沙汰也、餘人不寄云々、文覺上人修理奉行也、

正中二年七月廿四日、爲社殿造營、奉出御體於假殿、假殿灌頂院東門南脇東向三間立之、及夜陰執行、嚴伊大僧都著鈍色小袈裟、開社殿之正面戸、以龜綱奉覆神體、奉舁出之、(御影堂三綱人內、淨達房相從、執行入社殿、御役了、)中綱已下皆覆面、經拜殿從東門出御、經北庭入御假殿、路次敷淨薦、薦上敷布、先中、次南、次北、三所如次奉出之、假殿立床、其上敷小文高麗、奉安置之、御殿修造之後、同八月十九日亥刻遷宮、其儀式如前、奉歸入御體於社壇之後、備神供、執行奉幣、次御神樂、八乙女八人、職掌六人、祿物酒肴等下行之、今度修造高野金剛三昧院長老上人、爲私立願令沙汰之、以往遷宮之儀可尋舊記也、

〔東寺王代記後小松〕應永十五年八月十三日、鎭守八幡宮修理事始、同廿一日、御遷座假殿灌頂院

道場西院

〔東寺執行日記私用集一〕正月執行方事〇中略

一同日〇朔日鎭守御供一前給之、　自舊多代物十五匹、宮仕一膳渡之、仍遣之、〇私之儀中略

一朔日鎭守御神供勾當備之、(重衣)五前之內二前執行、一前御子、　三前預三人、宮仕六人給之、神樂足七十文先綱守出之、引違ヲ此外每月分ニハ五十文出之、　二石三斗一升水田納之時、此代米

下行之、號朔日瓶料畢、

一御神供下久世莊役　御供ノ備事ハ神事方ニ註之

〔百練抄　十五後嵯峨〕寬元元年八月廿二日己亥、今日法性寺成就宮、東福寺鎭守、被始行祭禮、禪定殿下、藤原道家右大臣殿、藤原實經左大將殿、藤原忠家准后倚侍兩御方、內々御參、南廻廊爲御所、各被啓幣帛、前越前守以良朝臣奉行之、殿下幷右大臣殿右大將三所御隨身爲舞人、騎御馬、先是有東遊、次神樂、陪從召人已下有祿、神供用途被支配庄々、社司以下祿物兼被奉送社家、

〔諸社根元記　中〕一鞍馬寺由岐　叡明神　天慶中勸請之、後宇多延慶元、五、十七、前左大辨宰相宣房朝臣爲奉行被仰下云、件神有尊崇事、可被授位記、本位可注申者、本位不詳、五條天神正治二、四、廿五、被奉授正五位下、時本位不詳、以嘉祥二韓神位記、被授之由注進之、以之案之、件明神疫神歟、紫野、今宮、韓神、五條天神等同體也、

〔仁和寺諸堂記〕鎭守　始者被奉勸請熊野若王子、北院御室御時、被勸請三所權現、當御時被奉請十二所、以外被奉貴敬也、

〔清涼寺緣起　五〕當寺の鎭守愛宕護山の緣起、幷契券等藏于寺中、建久元年罹回祿時焚燒、　應仁二年九月、丹波勢嵯峨中に亂入の時、堂舍佛閣在家等の炎上、譬ば劫火の如し、二王の門五大堂も燒けるうへは、清涼寺へも類火かゝりて、既にあやふくみえける處に、軍勢の中に白髮たる山伏、六具さしかためてあり、爰に嵯峨の傍に久しく住ける宗才といふ老僧あり、彼山伏宗才にむかつて、いそぎ棟に上て火をけすべしと云ふ、宗才某が身にては不可叶といふ處に、山伏大に嗔り大音聲を出して、わ僧上りけさずは忽に汝が命を奪ふべしと、大の眼にかどをたてゝ叫けるあひだ、何としても存命不定なりと思て、〇中略梯をさし登て箒木をもつて火を掃落す所に、風すこしなほりて御堂はつゝがなかりけり、則やねより下てみれば、軍勢とては一人もなかりけり、この

よし諸人に語りければ、悉奇特のおもひをなせり、所謂當寺の鎮守愛宕護の權現にてましまし
けりと、貴賤共に手を打て感ず、

〔諸神記中〕一清瀧社事(醍醐)　弘法大師入唐歸朝之時、爲東寺眞言擁護、有御同船、除醍醐山上醍醐巽方窟上給、小野僧正仁海之時、依祈雨効驗、被叙一位、娑竭羅龍王第三御女云云、本大唐清瀧寺鎮守云々、堀川院御宇寬治三年四月四日、依夢想、三寶院權僧正勝覺御房公子自本宮奉遷上醍醐、初立神殿等、同御宇承德元年四月十七日、同僧正下醍醐立社奉遷之、以上三箇所鎮座之本宮、自上醍醐辰方大磐石御坐云云、

〔扶桑鐘銘集二山城〕醍醐寺東谷鐘銘
谷有西東、谷西鎮守謂之清瀧權現、谷東鎮守謂之白山權現、

〔千載和歌集六冬〕醍醐の清瀧のやしろに歌合し侍りける時よめる　讀人しらず
ふる雪に軒端の竹も埋れて友こそなけれ冬のやまざと

〔大雲寺緣起〕鎮守、當山秘所之靈神、石坐明神之社稷(江)、高德之神明七所勸請、八所大明神(爲其號)、

〔諸社根元記下〕一北岩倉大雲寺鎮守
八所大明神石座　新羅　八幡　賀茂　松尾　山王　春日　住吉
十二所大明神者、右之八所加大神宮、平野、稻荷、貴布禰、長德三年四月十八日、有其感、奉勸請高德明神七所、號八所大明神、然後自爾處影向之靈祇(兩社)、加之別社(仁建)十二所、○(又見寶神記)

〔山城名勝志九葛野郡〕高山寺(在栂尾山)
鎮守社壇四字(有三間兩拜殿)
一社(中央)大白光神(梵云因羅迦神)多天竺雪山神也、有顯法擁護之誓、故勸請之、即十二神之隨一也、一社(右方南)春日大明神　一社(左方北)善妙神、新羅國神也、有花嚴擁護之誓、故勸請之、嘉祿元年八月十六日(甲寅)

寅時、白光善妙兩神奉納之、一社(右方南端)仕吉明神、右此神者、自上人(○明惠)託胎之始、與春日大明神相共、殊致擁護云云、嘉禎四年正月廿九日還宮了、

〔蔭凉軒日錄〕寛正二年五月九日、參詣于栂尾、(○高山寺)奉拜見春日大明神幷明惠上人之像、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月九日丙寅、今日二品(○源賴朝)猶逗留蜂社、而其近邊有寺曰高水寺、是爲稱德天皇勅願、十一日戊辰、高水寺鎭守者、奉勸請走湯權現、十七日甲戌、淸衡已下、三代造立堂舍事源忠已講、心蓮大法師等注獻之、○中略寺搭以下注文曰(注申之、○中略)

一關山中尊寺事○中略

鎭守、卽南方崇敬日吉社、北方勸請白山宮、○中略

一毛越寺事○中略鎭守者、總社金峯山、奉崇東西也、○中略

一無量光院(號新御堂)事○中略

一鎭守事

中央總社、東方日吉、白山兩社、南方祇園社、王子諸社、西方北野天神、金峯山、北方今熊野、稻荷等社也、悉以模本社之儀、

〔臥雲日件錄〕文安四年二月十五日、上生院主來、因曰、南禪寺有綾戶明神祠、此神蓋關東所崇也、某都寺就南禪作祠祭之、大有和尙南禪寺記所載恐非乎云々、

〔久能寺緣起〕鎭守者、十二所大權現、皆日本國之大神也、

〔諸神根元抄〕光明峰寺殿御鎭守事(當寺東福寺鎭守是也)

石淸水　賀茂　稻荷　春日　日吉

已上五社

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十二月廿八日壬申、若宮別當僧正自京都下著、去十月爲勸請如意寺鎭守

諸社上洛云々、

〔諸神記 中〕知恩寺(俗號二百萬遍、一條小川在寺之時也、)鎮守社、一宮之內御戸三殿也、

左脇　荒神　稲荷　平野　伊勢

中間　辨才天　貴布禰　賀茂神　三十二神

右脇　八幡　北野　今宮　赤山　愛宕

此四社者、當寺根本之鎮守也、其外左右之諸神者、前住幷常住等之新勸請云々、

〔二水記〕享祿五年二月廿一日、罷向勸修寺、　廿三日、早旦行水參八幡、一寺鎮主、古老云、石淸水已前之勸請云々、舊社回祿、如形造營云々、

〔山城名勝志 十七 宇治郡〕勸修寺八幡　坐寺南二町許、號吉利倶八幡、

〔艸山集 十六〕遊勸修寺八幡宮

冬暖似春景、攜童入翠微、仙宮鎖瑤戸、僧舍掩岩扉、坐石脫吾履、拂泉振我衣、金鷹何處化、白鴿此林飛、偶伴浮雲到、又隨流水歸、空山神所讚、只俱客來稀、

〔吉田家日次記〕應安四年八月四日甲申、傳聞、天龍寺鎮守靈庭廟八幡、今日正遷宮也、寮遠宿禰奉行、神寶五種、御劒、御鉾、御鏡、御弓、御矢之料足十一貫文、自武家下行、御裝束神供以下之總用二千疋、此外御廳自寺家直下行、(三百匹)彼二千疋自寺家同致其沙汰、寮遠東帶留戸役、行持衣冠勤御體役、是寮行繁、著布衣候所役、午刻向西郡宿坊自寺家□□自彼所出立、吉時亥子時云々、神供三前納長櫃持參云々、神馬一匹云々、

〔康富記〕享德四年七月廿三日丙申、今月二日等持寺鎮守ヨリ赤氣指北出云々、○中略此鎮守ハ赤山明神、八幡大菩薩、吉備大臣、北野等、此四所被勸請之云々、

〔宣胤卿記〕永正十四年七月五日、兼滿朝臣所望額事、女房傳達之間、かな書一紙遣之、○中略
所々にて額を見候も、八幡宮の三字ばかりにて候、東山慈照寺の鎭主の額は、平岡の八幡のかたをうつし候と室町殿仰にて、○下略

〔山城名勝志九葛野郡〕稱念寺氣比社在稱念寺側

大覺寺門主義俊被遣稱念住持狀云、當山者、氣比大明神地主神也、仍可被擁護當寺鎭守者也、

天文廿三年甲寅十一月七日　義俊御判

稱念寺住持緣譽上人

〔塵添壒囊抄十二〕北山觀勝寺當寺鎭守事附白山泰澄法師事　熊野權現事　清瀧事

當寺鎭守ニテ御坐セバ、白山、熊野、清瀧御事、大方其三所御事、北ハ白山、中ニ熊野、南ハ清瀧ニテ御坐ス也、

〔塵添壒囊抄十九〕觀勝寺當寺事

鎭守ハ又白山妙理權現、和光同塵本誓、實ニ憑モシキ者也、本ハ一社ニ御坐シヲ、上人回○大清瀧熊野ヲ勸請シ副テ、三所權現衛護被奉仰、

〔西琳寺流記〕鎭守幷拜殿　護法善神也　八幡譽田　天神伊岐宮　牛頭天王　小鎭守輪海龍王也

同拜殿者、應安元年地震時顚倒、然永和四年緇素合力造營云々、

〔東大寺緣起〕八幡大菩薩當寺影向事

同○天平勝寶二年十二月戊寅、著御于平城宮梨原宮、同月十日丁亥、遷御當寺之由兼定日、次依有御託宣、重被百官□□先□御前著御于當寺西面了、北門待奉、招□御前、依之號彼門於手搔□彼門之內經一□餘、伶人打一依之搆□所於□、故其日聖武天皇、孝謙天皇、共有臨幸大佛殿、大菩薩同入御于禮堂之時、被行一萬僧會、此時於內裏天下太平之文字自然出現、依之改勝寶之字號天平寶字、神明

靈威其折影向之軌則最重也、〇又見二東大寺要錄一

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年〇中略十一月己酉、八幡大神託宣向レ京、十二月戊寅、遣二五位十人、散位二十人、六衞府舍人各二十人一、迎二八幡神於平群郡一、是日入京、卽於二宮南梨原宮一、造二新殿一以爲二神宮一、請二僧四十口一悔過七日、

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

東大寺、〇中略鎭守權現ト申ハ、則八幡大菩薩是也、神託ニ任テ、勸請ノ爲ニ勅使百官ヲ宇佐宮ニ立ラレタリケレバ、天平勝寶元年十一月己酉日御影向アリ、則尊神ト天皇トモロ共ニ大佛殿ニ御參リ有リテ、一萬僧會ヲ被レ行シニ、大內ニ天下泰平ト云文字現ジケルニ依テ、又天平寶字ト改元アリ、神明ノ靈威種々顯テ、影向ノ軌則巍々タリ、其ヨリ已來當寺ニ跡ヲ垂御坐テ、晝夜ニ大佛ヲ拜シ、八宗ノ敎法ヲ護給ヘリ、

〔和漢三才圖會七十三大和〕東大寺諸堂

鎭守　八幡宮　在二手向山下一上〇略

三座　八幡大神神功皇后大神玉依姫

天平勝寶元年十一月十九日、禁裏嗚二七歲童子一曰、可レ遷二八幡於大佛傍一、因石川年足藤原魚名奉レ勅勸請之、

〔東大寺緣起〕天照大神示二聖武天皇一云、我靈跡於厨院之邊一示二僧濟門一也、熟未熟云々、依レ之堂寺食堂之北邊就建二立玉殿一、被レ奉レ崇二靈神一、尊之寵殿矣、凡伊勢大神者、本朝之內輙改無勸請鎭座之儀、感二叡願之鄭重一、降二御藍之殊妙一、神明自發起、成二寺門之鎭護一給、誠是當寺最重之靈德者哉、依レ之每事以二法花會之次一、備二祭祠之饗食一、捧二轉讀之法味一矣、

〔東大寺八幡驗記〕炎上以後造宮等事

右安德天皇御宇治承四年十一月廿八日、依平家惡逆、四聖同心之靈場忽令魔滅、八幡三所之仁祠悉成灰燼、寺中之哀慟、天下之驚歎、翰墨爭記、爰後白河法皇殊發叡願、右幕下將軍〇源賴朝閑他事被再興之間、滿月之尊容更耀文治之秋空、成風之花口重聳建久之春天、然間且爲致祈請、且依爲要樞、大勸進重源上人、早速令造營八幡宮社壇畢、但御體事、寺家無左右依難治定、文治四年五月下旬經奏聞之處、任宇佐宮之例、可被專如在之禮由被宣下事、

中御門右大臣宗忠公記云、東大寺守護八幡御體燃失之後、可被造哉否事、文治四年五月廿四日己丑、權右中辨定長朝臣(遣東大寺長官)來曰、東大寺守護八幡宮大佛殿燃失之時、同以回祿、而今寺家造畢件神殿、而古老住僧等申云、御體御座之由承傳之、或曰、以御脇足准御體云々未定、可被奉造立御體歟、將只可用如在禮歟、可計申者、予申云、先可被勸文、其上可有沙汰、但本縱雖御體御坐、新造之條難計申、石淸水火事之時、敦實親王奉造立法體(阿彌陀三尊云々)燒失給、其後有議定、不被改造之、宇佐宮御體不御坐、只供神座結薦御枕、准彼等例、被用如在之例可宜歟之由申畢、卽權辨申攝政(太政大臣)(兼實、號九條殿)云々、可然之由被仰云々、仍大外記淸原賴業、中原師尙、左大史小槻廣房等所勘申也、又祠官重延注進畢、卽祠官注進狀云、

中一宮　阿彌陀立像(御高三尺許)加光定

南二宮　菩薩形立像(御高二尺四五寸許)巡光

北三宮　女體立像(御高同菩薩像)上御髮唐女形

御殿五間一面(其體幷人形口子形等注之、然而不注留之、件三所母屋三間御座、)

右件子細、祖父末延存生之時、爲代官爲備御供、參入內殿之時、粗雖奉見知之、不及注申寸法等、大略注進如件、

文治四年六月十日　前大膳口左近府生重延(在判)

頼業勘文趣、依宇佐宮託宣、奉迎於宮南梨原宮、造新殿以為神宮、其後無所見、定遷向豐前國宇佐郡歟、同於所々被授品位例注申、(六月廿六日勘申)

師尙勘文大略如頼業、但遷向事不注、其趣同予計申、(五月廿五日勘申)

廣房勘文又同之、上御體改造例不詳、(六月一日勘申)

已上

〔百練抄十一土御門〕建仁三年十一月廿五日、被發遣石清水、東大寺鎭守八幡別宮、日吉社奉幣使、

〔帝王編年記二十七伏見〕永仁二年七月十三日、東大寺鎭守八幡神輿三基、奉振置富小路内裏陣外、十四日、神輿三基、自陣外奉入東寺内、

〔文保三年記〕正月十八日、申剋東大寺八幡宮御入洛、依兵庫關違亂也、自窮冬彼寺貽訴訟、奉入神輿於大佛殿、無御裁許之間及入洛畢、裹頭四五輩武者少々供奉云々、十九日、寅剋御京着、於衆徒者、自法性寺邊逃去畢、神人等頂戴神輿進發之處、於七條河原、武士(遠江一族、並駿奉行歟)最前馳向奉防禦、衆徒兩人搦取之、後日追放了、神人一人打殺、其外被疵輩三四輩、如此散々奉防之間、振棄神輿於河原、神人等逃去了、依十九日入夜奉入神輿於蓮花王院御堂云々、

〔東寺執行日記私用集二〕一東大寺八幡宮依訴訟王城奉振之時者、神輿當寺奉請取例、永仁二年七月十三日院宣等有之、神輿ノ御迎ニハ、中綱職掌輿丁在地人等召具參向、當寺鎭守拜屋奉入之、委細記有之、

同時日御供、加武內、但神木許四前分、毎日可為四百疋、

但彼者以略儀可調進仕也、毎日二百疋注文アリ、

一文保三年正月十八日、夜中東寺神輿一基被奉渡蓮花王院畢、神供事嚴伊注進之、右大辨宰相隆長奉之歟、

一注進云、東大寺八幡宮神輿、永仁入洛之時御供事、
御飯四前 高一尺
御合四前 各八種
居御菜四前 各四種
御汁　四前　各一種
菓子　四前　各三種
御酒　一瓶子
御酒肴四前　各三種
三所大菩薩幷武內御料
私云永仁二年例多之　委細有之

院宣
一東大寺東寺本末依相論之、神輿御迎事、寺家被難澁也、依之本末不可有相論之由、
元應元年十一月廿六日　宣房奉
正文可被尋候　案文アリ

綸旨
一東大寺御神輿之時
神輿御迎神人事、子細度々嚴密被仰下畢、而猶寄事於左右抑留之條、太不可然、今間催右近、此上若申子細者、云供僧云寺官、不可遁違勅之科、忩可被注進實名之由、重而被仰下畢、仍執達如件、
十二月十八日　覺狀大丸 近年官務方ニ此字尊ニ、藤原賴隆公、
東寺執行法印御房

〔園太曆〕康永三年八月十五日、今朝彼是云、東大寺八幡宮神輿入洛、武士奉防之間、振置五條橋上與衆徒神人退散了、剩神人被殺害云々、珍事也、仍忿遣狀於師右朝臣尋先例、今日卽雖馳參仙洞禁裏遠忌日之間不然、五種行了、歸宅之時進春宮大夫申入了、御物沙汰猶豫日限以下事、有被仰合旨、所存申入了、巳剋許、爲五種行入道場之間、自武家有使者、行珍也、懺法一時了、召入謁之、彼神輿在洛之間、謹愼之體談之、不審置其所之間、庭上可下居上其後者、正躬已下事、神木在洛之時、氏衆沙汰准據報了、　東大寺八幡宮御入洛例一通、謹注申上候、公事省略事、隨所見注載候、件時仙洞雖訴奏事、停否無所見候、但御前經定已下不經日數候歟、所見一紙同注進候、件度々氏公卿出仕無子細候乎、且永仁議定之時一條故大納言、延慶評定之時堀川故內府、大將時右　文保度六條故內府、一品時　被出仕候歟、兼又八幡山○男放生會、不可依東大寺神輿入洛候乎、先々御在洛之時、放生會每度如例候、以此旨可有御披露候、師右誠恐謹言、

八月十五日　　師右請文

淸澄注進賚之

師右例同物也、但少々有漏脫事、仍續淸澄注進也、

東大寺八幡宮神輿入洛例

永仁二年七月十三日、申時東大寺八幡宮神輿三基入洛、二基右衞門陣前、一基富小路西唐門前奉振棄也、○中略

右例注進如件

康永三年八月十五日　　左大史小槻淸澄

東大寺八幡宮神輿入洛時雖訴停否事

永仁二年七月十二日、東大寺八幡宮神輿入洛、

同月十七日、記錄所對問、

同月廿六日、御前評定、記錄所寄人等參入、○中略

正和四年十二月十八日、同神輿入洛、○中略

十七日、今日雜訴沙汰延引云々、是東大寺八幡神輿入洛故也、凡雜訴七箇日可被止歟、衆人訟尤不便、凡近日政道怠慢、爲之如何、

〔園太曆〕延文元年七月十九日、傳聞、神輿昨日奉渡東寺云々、大略武家申沙汰候歟、宰相中將獻神馬幷劔云々、奉入彼亭、神鏡榊同舁入東寺云々、抑頭辨時光朝臣傳天氣、被問明後日任大臣節會延否、請文已下續左、兩局例永仁已後康永以前例注之、其內康永三年八月十六日駒引、師茂不注之、匡遠注之、所存見請文、但及曉實夏卿參內、內決雖無廢朝、其日數有御謹愼之條可叶敬神歟之旨、了而不可有延引之旨、右幕歎申之趣、實俊僧正馳走、且可加詞之旨以使者盡衣之了、不可趣也、

明後日廿一日可被行任大臣節會候、而依東大寺八幡宮神輿入洛、延否事其沙汰候、右大將狀兩局注進如此候、可爲如何樣候哉、可參申候之處、聊故障事候間、且言上候、以此旨可令洩申給、時光誠恐頓首謹言、

七月十九日　時光

丹後守殿へ

明後日廿一日任大臣節會、依東大寺神輿入洛、可爲何樣哉事、兩局勘例以下加一見返上之、當宮神輿入洛之時、不及廢朝公務、又不被閣之條勿論候哉、就中康永三年入洛、翌日駒牽儀雖似准據之恒例儀式、與臨時宴會可有差異否、短慮迷商量、以御延否之間、須被決聖斷候哉、以此趣可令計披露給之狀如件、

七月十九日　判

東大寺神輿入洛時、無廢朝之條、文保康永兩度勿論候哉、至男山神輿者、弘安元應廢朝五箇日之由見舊記候、且康永度翌日被行勘率了、上卿大宮大納言、參議國俊卿、幷經隆朝臣、次將教言朝臣以下令參仕候き、兼綱卿于時爲職事申沙汰了近例也、但然候上者、廿一日不延引之樣、殊可有申御沙汰候也、謹言、

七月十八日　通相

頭辨殿

〔東大寺緣起〕東南院

鎭守二荒明神者、下野國二荒山地主也、而依有三論守護之誓、使者蜂現當寺重々託、仍聚寶起社勸請之、模彼山堀池口自云三論文力不面沉池塵幷中嶋重儼然者也、

〔朝野群載 十六佛事〕興福寺大衆牒八幡宮寺

欲大安寺本宮神輿令入洛給御共被令供奉神民神寶等狀

牒、當寺大衆爲蒙天裁、以來廿二(本作五)一日參洛、總依爲南京之訴、七大諸寺各奉昇鎭守神輿、可被供奉也、其中大安寺本宮與石淸水宮寺者、雖其處異、同是大菩薩靈應之地也、其故者行敎和尙寫御影於三夜光、奉崇大安寺中、後奉遷石淸水上、崇其神化、同行敎和尙之門流、思其玄宗、共法相大乘之學徒、是以本宮愁者、宮寺愁也、而今本宮神輿令入洛給之日、宮寺衙豈虛然哉者是也、衙察狀、早欲神民等相具神寶被令供奉之狀如件、以牒、

天永四年四月口日

〔臥雲日件錄〕文安六年四月九日、小睡起來、把座傍和漢編年覽之、曰、癸酉歲、右大將冬嗣興福寺中建南圓堂、安置丈六三目八臂不空羂索觀音像、蓋八角寶形之堂也、又曰、弘仁四年癸巳、右大將冬嗣築興福寺南圓堂之壇、時春日大明神混役夫中、有御詠歌云、補陀落乃南乃岸爾堂立天北乃藤浪今曾

榮由留、補陀落者八角山也、彼山藤盛也、藤氏四家、南家、北家、式家、京家、就中北家之流可繁昌之由也、此觀音像左肩著鹿皮、被模其體、春日大明神者、以鹿爲使者、亦自鹿嶋令移御笠山、是昔因緣也云々、蓋本尊鎭守乃春日大明神、今方修理其祠、矧寺亦名鹿苑乎、

〔多武峰略記 下〕勸請鎭守

右當寺鎭守者、天一神等一百餘所也、修正神名帳所列是也、又安和二年正月十日、如覺禪師啓白文曰、當寺鎭守七十餘所諸大明神矣、故昔奉勸請七十餘所歟、

〔諸社緣起文書 七〕龍田大明神御事

第四太子我寺近勸請供佛施僧事

有記云、當寺〇法隆寺坤方在神社、名正一位龍田大明神、當寺鎭守也、總平群郡之神也、此宮者龍宮也、本宮者在立野、大和河邊、其本宮八講緣起云、聖德太子告此大明神宜我寺近住令守護給、其御喜我寺住僧、御祭九月十三日、三十人可進法施僧、仍移此新宮給云々、至于今法施僧無懈怠云々、

法隆寺龍田會表白詞云

爰當社大明神者、崇神天皇御代降臨龍田山之峰、聖德太子、往時遷座斑鳩寺之側、伽藍守護誓約無替、佛法護持之神慮有憑哉云々、

〔龍田緣起〕一廣瀨大物忌大明神、又ハ號水足大明神、長琳寺鎭守也、此寺ハ推古天皇ノ御願也、

南向中殿風神　西殿七ノ御前、火神、若宮、　東殿小柳太玉命也、三大神住吉也、　東向、中龍田大明神、左住吉、右平岡云々、

同御本地事河合　一觀音十一面　二彌陀

本宮同之　若宮毘沙門云々、坤角有之、　新宮同之

以上河合末社畢

〔廣隆寺來由記〕鎭守三十八所、

醍醐天皇延喜年中、大別當增命以三十七所護法神之繪像安置一社、永爲鎭守、鳥羽院御宇、加秦大夫爲三十八所也、拜殿一宇、供花堂一宇、御子宿所一宇、華表等有之、

奉勸請三十八所諸神、鹿野(男、正一位、丹波國、)香取(女、正一位、下總國、伊勢內宮、)鹿島(正一位、常陸國、)熊野(紀伊國)大酒(正一位)住吉(男、正一位、攝津國、)稻荷(男、從二位、)布流(正一位、大和國、)春日(男、正一位、大和國、)大神(男、正一位、大和國、)葛木(男、正一位、大和國、)垂水(女、正三位、攝津國、)熱田(尾張國)多度(伊勢國)廣田(女、正一位、攝津國、)梅宮(女)氣多(能登國)氣比(男、正一位、越前國、)月讀(男、正一位、伊勢國、)賀茂(正一位)松尾(男、正一位、)八幡、木嶋(女、正一位、)金山(大和國)比叡(日吉大宮、近江國、)比良(近江國)愛宕、大和(正一位、大和國、)白山、飯道(近江國)大原、高天(大和國)弘瀨(大和國)神野、諏訪(男、正一位、信濃國、)櫟谷、平野(男、正一位、)秦大夫(小德位、大花上、)

〔春日權現驗記十六〕笠置般若臺の鎭守に春日大明神を勸請したてまつらんがために、小社を一宇造營す、建久七年九月廿七日の夜、同朋等を引率して當社に參詣す、正預等をりふし從候せざりければ、當番の氏人におほせて、御山の御榊の枝五六尺ばかりきりせて、やがて氏人にかの御榊の枝をもたせて、一御殿の寶前にて祝を申させてのち、上人(○解脫)御榊をうけとりて、南門の櫻の外の西腋に置たてまつり、若宮の御前にまゐりて拜殿に侍はせに、心中に心ならず歌を詠せられけり、

我ゆかんゆきてあがめん、とてまはし有て又、般若經といひつ、かくて上人下向せらるゝに、拜殿の北のほどにて、にはかに物のうちおほふやうに覺えて、目くれ心きえて、頂上兩所ゆびにてさすやうに甚おもし、又さきのやうにおのづから、

釋迦の御のりのあらんかぎりは、と詠せらるれば、たち歸て若宮の御殿を再拜して、又大宮の御前へまゐりて後、同朋異惠房御榊をわらどもにつゝみて、いだきたてまつる御榊にとびうつらせ給ぬと覺て、上人の頭上はかろ〳〵となりぬ、さて異惠房是をもちたてまつりて、笠置の入

町坂を身もすゝしくかろ〲として、一度もやすまずのぼりけり、さき〲は七八度やすみてぞのぼりける、

〔翰林葫蘆集 一〕丁未〇長享元年五月、有事於大神宮、自二十六日出洛、至二十九日入伊、而宿於横地館、六月三日登朝熊嶽、所謂虚空藏菩薩鎭坐道場也、〇中略遂摘山中勝境題五絶句、〇中略

七社 寺之鎭守

古廟年深鎭此山、扶藜上扣白雲關、好持無底七家鉢、盛取紙錢三萬還、

〔吾妻鏡 十九〕承元四年十一月廿四日戊申、駿河國建福寺鎭守馬鳴大明神、去廿一日卯剋、託少兒、酉歳可合戰之由云云、別當神主等注進之、今日到來、相州〇北條義時披露之、仍可有御占歟之由、廣元朝臣雖申行之、將軍家〇源實朝彼廿一日曉夢合戰事、得其告、非虛夢歟、此上不可及占云云、被進御劍於彼社云云、

〔吾妻鏡 十五〕建久六年十二月十六日丁卯、於伊豆國願成就院、可奉崇鎭守由、有其沙汰、是去比寺中毎夜有怪異等、所謂或以飛礫打破堂舍屛、天井動搖如人之步云云、妖不勝德、佛神崇敬其不詐者、魔鬼障碍有何危哉、

〔鎌倉大草紙〕寶德三〇三、一本作二、年十月、憲實〇中略伊豆國名越國淸寺にて出家となりかくれ居ける、〇中略此天長山國淸寺と申は、上杉代々の氏寺にて、尊氏將軍の御叔父上杉兵庫頭憲房、法名瑞光院雪溪道欽のために、其子息上杉民部大輔憲顯應安元年に初て建立の處也、〇中略鎭守の社は、淸瀧權現、文珠明神、木宮明神、杉椅明神、祇園天王、藏王權現、鷲大明神、四阿山權現等を崇、又上杉代々武州の守護にてありしゆゑにや、武藏府中六所大明神をも、此寺の內に勸請して社壇あり、

〔吾妻鏡 四十四〕建長六年四月十八日庚申、聖福寺鎭守諸守諸神神殿上棟、所謂 神驗 武內 稻荷 住吉 鹿嶋 諏方 伊豆 筥根 三嶋 富士 夷社等云云、

〔叡岳要記上〕山王院在總持院西方東塔西谷

或舊記云、件山王院緣起云、傳教大師勸請三輪明神、爲鎭守云々、伽藍傳敎大師所崇也、

〔國花萬葉記十近江〕日吉神社山王權現　志賀郡坂本村に在、比叡山の鎭守也、

〔日吉山王新記〕神號附日吉社號山王稱號

三寶輔行記云、先師於求法歸朝之海中、遇暴風逆浪之巨難、至心發願祈念平着、一人童子化現船頭、先師問曰、童子是誰耶、童子答曰、吾此天台山鎭守國宗擁護明神也、隨使佛法東漸、將居聖人之本國、先師重問曰、如何稱號耶、答云、下竪三點、加橫一點、引三點、加竪一點云々、先師此時恭敬合掌、唱諸佛救世者、住於大神通、爲悅衆生故、現無量神力之偈、實拭感淚致瞻禮、而未及上首、忽爾不見玉ハズ矣、

〔夫木和歌抄三十四神祇〕弘安日吉一品經歌

きたのみねふかきみのりをあふぐかな神は日吉のかげをならべて　正三位能淸卿

〔赤山大明神緣起〕赤山事

叡山鎭主赤山大明神緣起曰、大明神者、震旦國明州之山神也、有佛法守護之誓、隨慈覺大師垂跡於叡岳之西坂、於是大師、日本承和三年仁明天皇御宇有詔勅、爲求法遠渡大唐國、到明州山神赤山之廟社拜謁、大師悲泣願發曰、無有障碍留難、如大師告傳顯密之大法、遂歸朝之素意者、我還本朝建禪院安置一切經等、顯密大法傍勸請赤山之神、爲佛法之鎭主、起居禮拜、數百萬遍讀誦法花經、備山神之法樂、其夜非夢幻化人老翁告曰、我是明州之山神也、此山洞作來茲一百萬歲之星霜、我從劫初成以來、未曾聞如此之妙法音、悅哉幸相日本國求法聖人、受甚深不可說之法味、既除三熱之苦患、一時之中忽得空平等地位也、聖人早如發願傳顯密之大道、遂歸本朝、乘王乘上弘法之峯、可傳弘此國之佛法、我願隨求法之聖人、垂跡日本國護持佛法王法、至于慈尊三會之出世、可守護聖人之佛法、於是

慈覺大師成道悅如山神告傳持眞言止觀之大道、日本嘉承〈祥〇承恐誤〉元年戊辰春仁明天皇御宇入帝都登山、遂蒙詔勅於叡岳之道場、始行灌頂之大法圓宗敎迹、玆念佛三昧行法弘一天四海之中、大唐會昌二年、有勅禁僧尼令還俗、時赤山明神隨大師、一時甕無離、論護扶持之故、遁彼羅維難之苦患、佛像經卷傳來、偏是赤山明神之護持之力也、貞觀六年慈覺大師入滅之時遺言曰、予入唐求法之日、奉爲赤山明神誓發造禪院之願、亦是爲令求法事無障碍也、而未果之、蓋也道心同法相替必果之、又告曰、赤山明神既受圓仁之約諾、凌萬里之滄溟口西坂之杉村中垂跡給、而未造其神殿、願安惠阿闍梨爲其上首經上奏、公家必可造其神殿兼加年分度者云云、於是安惠座主受大師遺言、貞觀六年造禪院、安置一切經等、同十年始有勅、以近江國所當被造赤山大明神之一間四面之神殿、同三月五日、安惠座主申叙正四位、幷申加年分度者六人、安惠座主入滅之後、神殿破壞、無修法一人、南山相應、元慶八年、夢中山神告曰、我居住之神殿破壞無修造人、我法身體顯見苦候、極無術候也、聖人幸故慈覺大師之弟子也、可願令與我造神殿、則相應和尙感山神一言、捨三衣一鉢、如明神告造一間四面神殿、遂山神之本意、始行問答講、則相應內供爲講師、令講法華經、光孝天皇即位仁和二年春二月、申加年分度者六人、寬平二年宇多天皇御宇、增命內供以赤山明神申叙正三位、昌泰元年、醍醐天皇寄進御供田卅町、辨調百味飾饌、如醍醐之法味、同年四月十一日、天皇明神之社壇詣拜、幅十人名僧磨一乘實敎玉、增本地窮竟之莊、延喜元年、酬赤山明神之託宣、天皇下詔旨被叙正二位、同年依山神之告、重一年之中被上正一位、奉獻弓箭、其後守大師之佛法、顯權化之威勢、松杉嵐閑一乘之護持新淸、四魔三障之怖棄、天台風和扇擁護佛法之色無變、蘿洞月靜照、癡眼蒙昧之霧永晴、願者直齋蒙山神之利益、生々世々隨順明神、欲遂得脫之終、和光同塵結緣之始、八相成道以論其終蓋謂之歟、

天曆二年口口朔　　橘朝臣直齋謹記之

〔嚴神抄〕一塔下ノ三座總社ト申ハ、中比此所ニ明達律師御菴室在之ケリ、律師山王ノ法樂ニ護摩

ヲ修シ玉フ時、三座御形止テ嬬垣ニ現玉フ、既ニ三座影向ノ所ナレバ、此律師ハ此所ヲ去テ他所ニ住玉フ、卽彼庵宅ヲ以テ三座ノ御社トス、○中略其後遇心先德、七社權現ノ御神體ノ手ヲ自ヲ作リ寫シ奉ヲ、此社ハ餘社ニ不□不可有二火事ノ難一トテ此宮ニ悉ク安置シ玉フ、故ニ三座ニ不限、七社總體御スナリ、是ヲ號二下總社一、次八王子ノ奧ノ總社、上ニテ總社ト申ス也、是ハ龍山人ノ爲ニ勸請シ玉フト、卽神宮寺ノ鎭守ニテ御坐スベキニヤ、

一唐宮藏尾ノ山王ハ、中堂ノ鎭守ニテ御スナリ、根本大師一見二山王ノ御形ヲ作リ寫玉テ中堂ノ內陣ニ是ヲ安置シ玉フ、其後智證大師御山務ノ時、堂中ハ觸穢ノ雜人ノ入堂有、其便、虛空ノ業ニハ社ヲ立テ移玉フナリ、次慈惠大師ノ御時、是ヲ虛空藏ノ尾ニ移シ申サセ玉ヒケリ、其後西方院ノ院源座主ノ御時、此山王衆徒同座スベキ由御託宣有ルニ依テ、禪林院ノ彼岸所ノ內ニ奉レ移之玉ヲ、彼ノ遷座ノ代々ニ每度御勸請ノ儀有之、院源座主ノ御時マデニ七社御神體悉ク奉二崇メ一、其代々御勸請ノ次第委細記錄別ニ在之、

一常谷千手堂鎭守山王院ノ御社、智證大師於二千手堂一灌頂ヲ行玉フ時、三聖共ニ僧形ノ神體ニテ影向シ御ス、其時ノ御形ヲ智證大師自ラ奉二造リ寫シ一、彼ノ堂ノ不斷經ノ所ニ安置シ玉ヒケリ、是モ堂中ノ觸穢恐レテ、其今ノ社且ニ奉二移シ一、山王院ノ院號ハ、千手堂ノ寺院也ト云ヘドモ、彼ノ山王ヲ今ノ社ニ奉二遷時、人皆山王院ノ御社ト申傳タル計也、社且ノ院號ニテハ不可有事也、根本ノ御神體ノ御印像等損ジ玉フ故ニ、到二其後一又三座ノ御體ヲ新像シテ奉レ崇畢ヌ、其外根本ノ御體モ相副テ、俗體ト如形ト根本ノ三座ノ左右ノ下座ニ御ス、是ハ只三座ノ神ト同御座ニテ御スベキナリ、

〔古今著聞集二神祇〕智證大師御起文云、予○中略依二山王御託宣一、於二大唐國一、受二持佛法一、遂二本朝一、海中老翁現、於予船而偁、我新羅國明神也、和尚受持佛法、至二于慈尊出世一、爲二遂持一來向也者、如是言訖之後、其形既

隱、予著岸申公家、即遣官使所持佛像法門被運納於太政官、于時海中老翁亦來云、此日本國有一勝地、我先至彼地、早以點定申於公家建立一伽藍、安置興隆佛法、我爲護法神、鎭加持矣、所謂佛法是護持王法也、若佛法滅者、王法將滅矣、予出登本山千光院、從千光院至山王院、受山王託宣、早法門移運此所者、明神俙、此地者末代必有喧事歟、其奈何者各受北長下也、其內此山可盛事今二百歲哉、我見勝地、來世衆生可爲依所、興隆佛法護持王法、至彼地可相定者、明神山王別當西塔予共、到近江國滋賀郡園城寺、問寺案內於住僧等、爰住僧等申云、不知案內、有一人之老比丘、名謂敎待、出來云、敎年百六十二也、此寺建立之後、經百八十餘年也、有建立檀越子孫者、即敎待呼彼氏人、爰氏人姓名大友都堵牟麻呂出來云、都堵牟麻呂生年百四十七也、此寺先祖大友與多、奉爲天武天皇所建立也、此地先祖大友太政大臣之家地也、公家堺其四至被宛給也、文略敎待大德年來云、獨可領此寺人渡唐也、遲遙來之由常語、而今日已相待人來也、可出會者、今以此寺家奉附屬、此寺之領地四至內、專無他人之領地、而時代移、人心諂曲、當國之刺吏稱私領之地、然而氏人無力辨定、早觸國可被糺返者、附屬之後山王還給、明神住寺北野、無量之眷屬圍遶、他人之所不知見也、見知明神住給野、乘輿之人引率百千眷屬來向、以飮食奉饗明神之處、老比丘敎待到於彼明神之在所、遞以喜悅、即比丘與輿人形隱不見、于時問明神俙、此比丘與輿人忽不見、是何人耶、明神答之、老比丘是彌勒如來、爲護持佛法住給此寺也、輿人者是三尾明神也、爲訪我來也、予還到寺、敎待有無問都堵牟麻呂、專不知此老比丘案內、年來此比丘不魚不飮食、不酒不湯飮、常到寺領湖邊之江、取魚鱠爲齋食之菜、而欲謁和尙忽隱矣、悲哉悲哉、不惜音哀泣、今大衆共見住房、年來干置魚類、皆是蓮華莖根葉也、於是知不例人之由、今敎待已隱、我院早可被興隆者也者、予問俙、此寺名謂御井寺、其情如何、氏人答云、天智天皇、天武天皇、持統天皇、此三代之天皇各生給之時、最初之時御湯料水、汲於此地內井奉浴之由俗詞語來、作井水依經三皇御用號御井者、予聞此緣起、漸見地形、宛如大唐青龍寺、奉受附屬、畢別當西塔共還本山、別當共參內裏

奏事由、勅急造唐坊、佛像法門運移彼寺、予改御井寺、成三井寺、其由何者、件井水三皇用給之上、此寺長爲傳法灌頂之庭、可汲井花水之事、令繼於彌勒三會曉、故成三井寺云々、

〔長等の山風 下〕そも〳〵此寺○三井寺の緣起を記さんとならば、まづ大友天皇の御事より、道理によりて天武天皇の勅許をうけて、大友與多の建立して、其子孫住持してありけるを、圓珍に附屬せる由緣を詳に記すべき事なるを、然る事をばつゆばかりもいはずして、まづ延暦寺にて山王三聖といへるものをこゝにも徙しこしらへて、寺の鎭主明神と呼て崇めおき、かたとけなくも三尾明神をば定當院佛法外護といひ、宛本山護法善神、時々刻々特番守護給也など云ひ、勿論拜餘社神殿、此院繁昌偏山王擁護之力也など云ひたるは、もとより圓珍がわざにして聞にも堪ぬ誣妄言なるを、いかなれば夜須良麻呂等さるやむごとなき氏人として、寺院本願主俗別當と稱ひつゝも相うづなひて、いふがひなくかゝるたぶれ言書たる圓珍と連署したるにかど、今うち讀○天台座主記だにあさましくはたいきどほろしくてなむ、

〔古今著聞集 一神祇〕三井寺の鎭守新羅明神は、娑竭羅龍王の子也、智證大師渡唐の時、大師の佛法をまもらんとちかひ給ひて、かたちをあらはし、かの寺にあとをたれ給へるなり、圓滿院僧正明尊はじめて祭禮をおこなはれける、明神よろこばせ給ひて、一首の和歌を託宣し給ひける、

からふねに法をまもりにとこしかひはありけるものをこゝのとまりに○又見續古事談

〔續古事談 四神社佛寺〕三井寺ノ新羅明神ハヤムゴトナキ神也、宇治殿ノ御祈ニ頼豪阿闍梨マヰリタリケレバ、寶殿ノ妻戸ヨリ御直衣ノ袖サシイデタリケリ、

〔峯相記〕貞和四年戊子十月十八日、播州峯相山鷄足寺ニ參詣ス、○中略當山麓ニ稻根明神トテ坐ス、其跡久シテ本緣舊タリ、昔ハ當山鎭守九座其一也、古老ノ說ニ云、高嶽上大磐ノ間小水溢タリ、今有ル也、崇神天皇御宇十三年秋九月日、香稻四本出生セリ、卽チ子細ヲ奏ス、彼稻ヲ種トシテ、諸國普

ク耕作スベシト云々、其以前ハ山野ニ自然生タルヲ、人民分領定メ、乃貢ヲ備ヘ私ヲ顧ルト見タレドモ、更ニ此類ニ非ズ、當時國土流布ノ香稻、恐クハ此種子ナルベシ、當初勅ニテ彼地ニ神殿ヲ造リ、稻根明神ト號ス、當國古來隨分ノ本社也、國衙ヨリ是ヲ祭テ村里仰ギ奉ル、國衙奉二免田地一四至有リ、山嶽嶮難ナルニ依テ、祭祀ノ煩有ル間、麓ニ崇メ奉ル時、二如來、二菩薩ノ感應、夢想アルニ依テ、天慶年中、其地神殿移造奉ル、今ノ社跡是也、天下撫育ノ本社也、

〔諸社根元記　下〕

一長門赤間關阿彌陀寺八幡宮

大御前三所（社壇向ニ異方）

東（左）　大帶姫（十五代神功皇后）

中　八幡宮（十六代應神天皇）

西（右）　仲哀天皇（十四代）

若宮四所　宇禮　久禮

〔大傳法院本願聖人御傳〕本願聖人、諱ハ覺鑁、正覺房ト稱ス、〇中略嘉承二年丁亥（于時堀川院御字）之夏ノ比歟、遙ニ西海之白浪ヲ凌テ、北闕之青郊ニ入リ、成就院之一菴ニ歸シ大僧正之拜謁ヲ遂グ、于時大僧正、〇中略此小童（〇覺鑁）ハ郎當院ニ參住セシム可キ之由仰セ含メラル、雖テ當院出世ノ者、圓林房ヲ世俗ノ後見ニ之ヲ付ラル、眞諦ノ小師ニハ、法橋定尊律師也、嘉承三年（〇天仁元年）戊子（鳥羽院御字）世俗之小師圓林房、内々思ハク、大師ノ御記文ニモ、法相三論ニ入レテ、法ノ性相ヲ學バシメヨト遊バシ候、興福寺ノ圓如房得業ハ、元ヨリ大僧正ノ御弟ナレバ、南都ニ具足シテ倶舍等ノ法相ヲモ受學セシメ、御暇ヲ申シ給ヘバ、大師御記文ニモ符合シテ、其儀然ル可トテ御許容有リケレバ、興福寺圓如房得業ノ坊ニ移住シテ、倶舍法相之奥儀ヲ極、〇中略後彼小童ノ靈夢ノ中ニ、高貴神女化現

シテ、膝ノ上ニ掻キ載セ、額髮ヲ撫デ下シテ言ク、汝ハ佛法ノ明器也、然レドモ吾寺〇興福寺ノ寶ト爲ル可ラズ、他山ニ住シテ異言密教ヲ興隆ス可シ、我ガ宗ヲモ破シ思フ可ラズ、我又必ズ他山ニ通ジテ、汝ガ佛法ヲ擁護セントテ涙ヲ流シノ給ヒケルガ、幼童之袖ニ懸リケリ、小兒誰レ人ニテ御坐シ候ゾト問ヒ奉ラレケレバ、我ハ是レ春日〇興福寺鎮守神四御殿也トゾ答給ケル、夢覺テ袖ヲ見ルニ、現ニ涙殘テ珠ノ如クノ露貫ナリケル、末代之勝事、希代珍事也、此御約束ニ依テ、後傳法院御社之外ニ、別ニ下ノ院ト號シ、一社ヲ建立シ勸請シ奉ル、一千社之中ニ、春日大明神本主ト爲シテ鎮座シ給ヒ、寺家之佛法ヲ擁護シ御坐也、〇中略

下ノ院御社一字、拜殿三間、當社明神ハ是レモ三部權現ナリ、然リト雖ドモ、南都ニ於テ、我レ住テ上人ノ佛法ノ擁護ヲ爲ント御約束ニ依テ、一千餘社ノ諸神ノ御中ニ、春日大明神ヲ棟梁ト爲レテ勸請シ給フ也、此ノ時ハ鬢頰結タル童形ニテ示現シテ、上人ニ御對面有テ入リ給フ也、

〔大傳法院本願聖人御傳〕高野山ハ、八葉之靈洞、弘法大師入定之勝地、根來山一乘之仙窟ハ、役ノ優婆塞經行ノ古蹤也、備者靈地勝劣無ク、能住淺深無シ此ノ山ニ於テ御廟ヲ移シ、上皇今上之寶祚ヲ祈リ奉ル可シトテ、上人ハ遂ニ歸山シ給ハズ、未來ヲ鑒ミ給フニ依テ、兼テ鎮守神宮寺大明神ノ寶社ヲ根來寺ニ建立シ、十二月ニ配當シテ、十二日ノ鎮守大會ヲ勤修セラル、〇中略抑聖人此ノ寶社ニ諸神ヲ勸請シ奉ラルヽ之時、大小一千餘社之諸神達、召請ニ應ジテ鎮座シ給ヘリ、〇中略爰ニ一之奇特瑞相之レ有リ、一千餘社ヲ鎮座ノ事定テ後、俄ニ氣高キ御神體化現有テ、上人ニ向テ言ク、當寺之佛法衞護之爲ニ、日本朝中ノ神祇大小、既ニ一千餘社ヲ勸請シ給フ、我レ既ニ佛法ヲ隨喜シ擁護ヲ爲ス之處ニ、今度上人之勸請ニ漏ラサルヽ事不肖之至リ歟、恨之至極也ト云々、上人大ニ驚キ、何ナル神ニテ御渡リ候ゾト申サレケレバ、我ハ是レ白山妙理權現也ト名乘リ給フ、上人大ニ恐怖シ、罪ヲ懺悔シテ言ク、當社ハ諸神ノ鎮座ノ事定リ給ヒ候、然ル可キ御社ヲ一字構

へ申ス可キトテ、根來寺辰巳ノ方ニ當テ山有リ、即チ根來寺山ノ方内也、一社ヲ建立シ勸請シ中サル、今ニ白山權現トテ崇敬シ奉ツラレ畢ヌ、不思議之瑞相也、

〔阿波國大龍寺緣起〕崇二和食明神一爲二鎭守一

〔見聞雜記〕一文明六、七月十八日、阿州大龍寺參詣畢、別當坊仁一宿、同十九日南北ノ捨心江參、南ノ捨心仁小堂アリ、本尊不動尊也、是ハ大師求聞持ノ法勤修ノ御時、帝釋現ジ玉ヒテ御グシヲ造玉フ、兩ノ御手ヲバ伊勢神宮ノ御作、御身幷御袈裟ヲバ大師造玉フ、兩ノ御足ヲバ和食明神(宮寺鎭守)ノ造玉フト云々、緣起ノ分大概注レ之、

〔一遍上人六條緣起〕文永十年癸酉七月に、豫州浮穴郡に菅生の岩屋といふ所に參籠し給ふ、此所は觀音影現の靈地、仙人練行の古跡なり、むかし佛法はまだひろまらざりしころ、安藝國の住人、狩獵の爲に此山に來りて、岑に登てかせぎをまつに、持たる弓を古木にゐてゝはりてけり、其後此木よもすがら光をはなつ、晝になりてこれを見るに、上は古木なり、青苔處々にむして、其かたちたしかならず、中に金色なる物あり、すがた人に似たり、かの獵師佛菩薩の名體いまだしらざりけるが、自然發得して觀音なりといふ事をしりぬ、歸依の心たちまちおこりて、持所の梓弓を棟梁とし、著所の菅簑をうはぶきとして、草舍をつくりて安置し奉りぬ、其後兩三年をへだてゝ、又此地に來りて在り所を求るに、草舍落やぶれてあとかたも見えず、岑に登り谷にくだりてたづねあるきけるに、草ふかくあやしき處あり、たちよりて見れば、ありし簑の菅生しげりし中に、本尊赫炳としておはします、いとうれしくおぼえて、かさねて精舍をかまへ、莊嚴をいたして菅生寺と號して歸依の志をふかくす、我此所の守護神と成べしとちかひて、野口の明神といはれていまに現在せり、かくて星霜やゝうつりて後、用明天皇の御宇、震旦朝使來りて、隋の文帝の后懷胎の間靈瑞ありとて、三種の寶物(戒定惠筥、鐘、錫杖、)を此觀音に奉れり、かの朝使すなはち此所にとゞま

りて、又鎭守となららんとて白山大明神とあらはれ、堂の南にいはゝれ給ふ、

氏之鎭守神

〔諸社緣起文書 七〕常陸州新治郡賀茂部村賀茂大明神志年譜

吾賀茂村頭賀茂大明神者、〇中略治暦乙巳、〇中略以年之十二月、公〇源義頼之二男、賀茂次郎義綱公、遂領此國、玆安隨身之產神賀茂榮像于當社、而封以賀茂部一邑(今眞壁郡新治郡中山)矣、考其地記、乃直千斛之邑也、公嘗奉幣帛而請約神、永爲其氏武化之鎭守、

總鎭守神

〔愛媛面影 越智郡 二〕大山積神社

延喜式に越智郡大山積神社名神大とあり、御社は三嶋宮浦に立せり、俗に三嶋明神と云、當國一宮是也、二十四社考に、所祭は三座にして、中社は大山積神、上社は雷神、下社は高龗也といへり、〇中略

佐理卿額

日本總鎭守大山積大明神の十一字を竪板二行に書たり、〇銘文見集古十種

〔茅窻漫錄 上〕六波羅寺額

東齋隨筆に、佐理大貳任はてゝ、鎭西より上る時、伊豫國の泊にて、風波惡くて船を出だす事能はず、其夜の夢に、三嶋明神社の額をかゝしめむとて留め給へる事見えたり、御神の御尙にて額を書きて打ければ、順風になりて煩なく着岸せり、日本第一の能書なり、三嶋の額と六波羅密寺の額とは此人の筆跡なりと、さもあらむ、筆力勁健、當時汎々の書ける、及ゞ所にあらず、厳塚物語に、參議佐理卿は三嶋明神の神言によりて、日本總鎭守三嶋大明神といへる額を書き給ひけるとぞ、伊豫の三島は越智郡の島にあり、大山祇神々鎭座あり、伊豆の三島は伊豫より遷す、攝津の三島は神代よりあり、

〔神社私考〕鎭守總社の事

一條兼良公の東齋隨筆に、參議佐理卿太宰大貳秩滿、歸路至伊豫三嶋、風浪甚不能發船、夢三嶋明神告

曰、乞書額、覺乃書、應時海上穩、榜曰、日本總鎭守大山積明神と見えたるは疑はし、この事は十訓抄に、建長四年の撰むかし佐理卿大貳の任はてゝ上られける道にて、案圖を按るに、正暦年中なり、伊豫國三嶋明神の託宣ありて、彼社の額を書れたりけるもめでたかりけり、と見えたる時の事に合ひては聞ゆれど、佐理卿の頃、神社に日本總鎭守といへる號のあるべくもおもはれず、そのかみの世のありさま名稱など、考合せて識るべし、殊に彼三嶋の神は、伊豫國風土記に、宇智郡御嶋坐神、御名大山積神、一名和多志大神也、是神者所顯難波高津宮御宇天皇御世、此神自百濟國度來坐、而津國御嶋坐と見えたる韓神なるを、日本總鎭守などかけても稱べきにあらず、おもふに彼卿よりはるかに後世に、彼社司などの中に、かの佐理卿の古事をおしたてゝ、僧徒等が例せる僞妄說のごとく、然る額を作り置て、己が神社を人に尊ばせむとかまへたるにこそはあらめ、然はいへど、兼良公の隨筆にも記し給へるをおもへば、むげに近き世の事にはあらず、かの公は、文明十三年八十にて薨給へり、そのかみ既くまる僞妄說ゑたりけん事おしひやるべし、(中略)さて又く彼卿の書給へりといへる額を模寫たるものなりとて、世に寫傳へたるがあるを、おのれも既に見たることありき、筆道にる額字とか云へる書ありて、殊更にいたはりつくらひたるが如き書ざまなるものを、また板に搆ひ彫りたるが、筆びたるはいづくなる額字もおほかた同じ書ざまなるものなれば、かの額字の摸(ウツシ)も己が目には、いみじき手書のならんとも思はれざるを、古筆の鑑定する人は、いかゞ云ふらんかし、

○按ズルニ、群書類從ニ收ムル所ノ東齋隨筆ハ和文ニシテ、而モ日本總鎭守大山積明神ノ文ナシ、此書或ハ別本アルカ、姑ク記シテ疑ヲ存ス、

〔新撰佐渡風土記〕當國總鎭守の事

當國の總社を案ずるに、金北山に鎭座ましますす大權現を尋奉るに、本地將軍地藏なり、人皇四十二代文武天皇丁酉年、此山に垂跡ましますす、

〔伊水溫故〕二阿拜郡敢國神社

一ノ宮村、千歲村ノ内本宮二座、少彥名の命、南宮金山日賣、當國の一宮にして、一州の總鎭守、本社は大彥、名號正一

鎭殿

位敢國角大明神、延喜式伊賀二十五座の大座なり、

〔新篇江戸志一〕橋本稻荷社　靈巖嶋總鎭守　別當（眞言宗高野末）醫王山圓覺寺

略緣起云、當社正一位稻荷の社は、そのかみ紀州高野山の麓、橋本の里に宮居まし〳〵、弘法大師の異作なり、其むかし大師入唐の內、筑紫に於て初て出現し給ひ、其後歸朝の比、京都東寺御建立の折から、不思議に應現し給ふ所の御姿を、大師そのあたりに移し給ふ日域隨一の靈像なり、然るに此靈巖嶋を往古中嶋と號せし時、神體を此社に移せしより、靈巖一嶋の鎭守とはなれり、

〔塵添壒囊抄十二〕可參詣大神宮事

其所ノ鎭守ナンドヲ閣テ、大神宮ヘハ可參詣事歟、總テハ神ニ事ル心向ケハ如何侍ベキ、此事以管見雖申披也、雖然大底法アルカ、先和國ニ受生人、大神宮ヘ可參詣事ハ勿論ト云々、巳ニ此國ノ本主、神明ノ王ニテ御坐セバ、各鎭守ヲ仰グ所モ幷ニ自餘ノ社人モ君ニ事ツルヲ以テ、法施ヲモ可奉見タリ、〇中略但大神宮ハ元來ヨリ、法性ノ神トシテ、其理ヲ諸神ニ令蒙、仍所々ノ鎭守靈神ノ賞罰、併テ神宮ノ冥慮也、仍近クハ鎭守、遠クハ神宮ノ冥慮ニ奉背ヌ樣ニ振舞給フベキ也、其心向ト者、先其所ノ神明佛陀ニ、慇懃ニ奉仕シテ、其餘暇ニハ他所ノ靈驗ヲモ可仰、當所ノ鎭守本意ニハ、極テ不法懈怠ニテ、他所ノ靈佛靈社ニ參詣セバ、罰ヲ蒙共、利生ハ不可有見タリ、

〔八幡愚童訓上〕御體御事

弘法大師ハ、東大寺ノ南大門ニテ御對面〇八幡神アリテ、相互ニ御影ヲウツシ給ケリ、高雄山ニ安置シ玉ヒシヲ、東大寺ノ鎭守ニ祝進セントテ、南都ヨリ望申サレシカドモ、不叶シテ今ニアリ、是不思議ノ重寶ナリトテ、鳥羽勝光明院ノ寶藏ニ納置レタリ、

〔八幡愚童訓下〕佛法事

右一代ノ聖敎ハ、機根ノ不同ニヨリ、悟入ノ遲速アリト云ヘドモ、金杖ノ二ニ折テ共金ナルガ如

ク、五百ノ身因、解脱ノ道ニアラズト云事无ガ如、大菩薩モ日本國ニヒロマル所ノ佛法、何モ愛シ守リ玉ヘリ、依之東大寺ノ八宗兼學ノ所ニハ、大菩薩ヲ鎭守トシ奉ル、是故ニ御託宣ニ、京都ニ向テ大佛ヲ拜シ奉ランガ爲ト有、諸宗ヲ守護シ玉フ故、大伽藍ト云所ニ大菩薩ヲ鎭守トシ奉ル、南都七大寺、大路ハ八幡ニテ御坐スナリ、弘法大師ハ東寺ニ祝ヒ、傳教大師ハ中堂ニアガメ、園城寺ニハ社壇ヲタテ、興福寺ニハ南圓堂ニシテ法味ヲ備ヘ、自餘ノ寺院、遠近ノ靈地ニ勸請シ奉ル事、六十六箇國ニ滿々テ、其數知ガタシ、御託宣ニ、眞言ノ興起、往生極樂ノ薩埵也トアルハ、證初歡喜地往生極樂國ト云フ文ヲモテ、千部ノ論主、顯密ノ祖師、龍猛菩薩ニテ御坐スニヤ、八宗九宗ヲ勝劣ナク守護シ玉事、他社ノ神明ノナキ所也、

〔吾妻鏡 六〕文治二年五月二日己卯、前對馬守親光、可被還任之由重所被申京都也、此親光在任之間、平氏下向鎭西、可參向屋嶋之由雖相觸、不從、仍以少貳種直郎從等欲追討之間、遁渡高麗國訖、彼氏族滅亡後、依二品〈源賴朝〉御無爲上洛、其翔已大功也、加之任中之間爲御祈禱、或令修造八幡宮以下鎭守諸大明神六十餘社之御寶殿、或奉飾同宮放生會御輿裝束、幷錦御帳、及神殿御戸帳舞裝束等、其准顯爲三萬餘疋云云、載目六、先日持參關東、凡任國之時、修造此等神殿之者、募其賞被仰重任遷任之例也、可蒙賞之旨言上、

〔延文四年記〕八月八日戊戌、土岐禪門參籠鎭守八幡宮、自北白河歸住、　十五日乙亥、今曉土岐禪門退出、卽參男山了、鎭守大般若結願了、　廿二日壬午、於御影堂幷鎭守御祈、秋季分也、千反ダラニ千卷讀經、

〔諸神記 上〕一八幡御託宣

一諸記云、八幡大菩薩者、朝廷之宗廟也、當昔傳教和尙、建立叡山伽藍、弘通天台敎法之日、詣宇佐宮請爲鎭守、大菩薩辭曰、我有甚深之誓願、殊護慈尊遺法、雖隨濟、須啓他社云云、

名稱

〔地主神〕

地主神ハ、チヌシノカミ、若クハチシユノカミト云フ、又トコヌシノカミトモ云ヘリ、卽チ其土地ヲ主領スル神ヲ稱スルモノニシテ、上古ノ時、旣ニ大國主神ヲ以テ、葦原中津國ノ大地主神ト稱セシコトアリ、然レドモ中世以降、別ニ社祠若クハ寺院ヲ建立スル時、舊ヨリ其地ニ鎭座セル神ヲ以テ、之ヲ地主神ト云ヒ、又新ニ神社ヲ創設シテ、之ヲ其地ノ地主神ト稱スルコトアリ、

〔節用集 知〕地主

〔神道名目類聚抄 四神祇〕地主神　由意アリテ上古ヨリ某所ニ鎭座ノ神アリ、後又祭べキ事アリテ別神ヲ其所ニ祭バ、元ヨリ鎭座ノ神ヲ地主ト稱スル事アリ、又某所ノ地主タル神アリ、或說ニ地主神ト稱スルハ、大國主神ヲ祭レリ、

〔古史傳 十六〕地主神は、登許奴志能神と訓べし、(地を登許と訓るは、仲哀紀に、地口てふ縣多かり、其文を神祇本紀に引たるに、トコクチと訓る處あり、後世の出來し頃まで有し古言と聞えたり、今世にも、登許呂を登許とのみ云ことさへ多し、)登許呂を登許と云は、呂の省かりたる言と思ふは委からず、登も許も共に所字の義なるが(大殿、殿所、其所、此所、など云を以て知べし、)其二言を重ねて登許と云に、(其は麻も佐も共に眞の義なるを、二つ重ねて正と云が如し、)呂てふ辭の添れるなり、(其呂は野眞、麻呂などいふ眞呂におなじ、)さて地主とは字の如く、其地の主たる由なり、

〔延喜式 齋宮五〕大社十七座(在宮内)　地主神一座

〔諸社根元記 下〕離宮明神

舊記云、此神者廐太子云云、又忠文民部卿二人爲地主、位記、治暦三、十、七、正三位、

〔日前國懸兩大神宮書立〕中言神社 二座(在日前宮林中)

當宮祭文曰、兩神者國神、而男女兩神也、名號都、殊此名號之宮地之主鎭護神也、此故奉號名號姬

命名帥彦命也、
日前宮舊記曰、中言兩宮者侍臣也、
又曰、名草郡地主神也、○中略

右社之儀者、兩宮末社之上首ニ而、格別之社ニ御座候、社頭も御再興以來御修覆所ニ而、兩宮江御參詣之節ニ御參詣被遊候、且又中言兩神之義者、名草一郡之地主神ニ而御座候ニ付、郡中所々ニ勸請致し祭有之候、古今祭禮式法等之儀者、繁多ニ付略申候、

〔大江俊尙記〕寶永五年正月元日己酉、月代髮、衣服改、綠ニ圓座儲屈候奉拜、先東方、春日、東天神、氏神、平野、下御靈、鐵、ヤ、町地主、稻荷、後座神、東天王、東屋敷、地主、七月一日乙亥、向東方一揖、雜化ノ初リ大神宮、鳥内ノ神、平野、神直御靈、京屋敷、地神、稻荷、後座神、東天王、所ノ社○中略各拜揖、

〔大倭神社註進狀〕纏向珠城宮御宇天皇垂仁廿七年九月戊申朔甲子、以皇女倭姬命、爲御杖代、貢天照大神、倭姬命隨神誨、立宮於伊勢國渡遇五十鈴川上、奉遷焉、是時倭太國魂神著大水口宿禰而誨之曰、太初之時、期曰、天照大神悉治高天原、皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官者、言已訖焉云云、大地主神之號起于是時矣、

〔日本書紀垂仁六〕二十五年三月丙申、一云、是時倭大神、著穗積臣遠祖大水口宿禰而誨之曰、太初之時、期曰、天照大神悉治天原、皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官者、言已訖焉、○下略

〔古語拾遺〕昔在神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人、于時御歲神之子、至於其田、唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒、以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹、於是大地主神令片巫志止止鳥肱巫今俗竈輪及米占也、占求其由、御歲神爲祟、宜獻白猪白馬白鷄以解其怒、依敎奉謝、

〔廿二社本緣〕大倭事
此社和、大國魂神ニ坐ス、此神乃御事諸說不同歟、但シ加留ニ科簡乎、出雲乃神ニ坐ヲ留歟、大汝乃

神乎波、大地主郁毛、大國主ト毛、顯國玉郁毛云事利、

貴船社事

此外皇都。近國仁毛、式內式外乃神多久坐寸、○中略出雲神乃、我國乃大地主仁天坐寸、

〔二十二社註式〕日吉社日吉與三輪、延喜神祇式云、近江國滋賀郡、此國地主、○下略

〔山家最要略記〕日吉七社降臨垂迹時代事

扶桑明月集云、○中略大比叡明神、俗形、翁之體、人王三十代磯城嶋金刺宮欽明天皇卽位元年庚申大和國城上郡大三輪神天降、第卅九代天智天皇大津宮卽位元年壬大比叡大神顯、但日吉與三輪大物主神此國地主也、○中略

康和元年正月十一日　　大江匡房謹記

〔惟賢比丘筆記〕神祇宣令云、匡房神記日本國地主者二神、一保神住山城國乙訓郡賀茂村、一保神住近江國滋賀郡、

〔惟賢比丘筆記〕嚴神靈應章云、傳敎大師御尺夫伊弉諾伊弉冉二神御宇、天地創開、州縣新作以降、土地最初者、是小比叡神山也、示土爲社示申號神識了、小比叡大明神者爲吾國之地主、爲吾山之山王文、

建武二年六月八日○中略　　大乘菩薩戒小比丘惟賢記之

〔新拾遺和歌集十六神祇〕靜妙法師、延暦寺執當解却せられて後、日吉の地主權現にまうでゝ、終夜祈請しけるに、夢のうちに寶殿のうちより詠せさせ給けるとなん、

たのめつゝこぬ年月をかさぬればくちせぬ契いかゞたのまん

〔榆中抄九〕志るしのすぎ

日吉明神とまうすは、三輪明神を傳敎大師の天台宗守護神のために、勸請したてまつり給へる

と申は大宮權現也、大ひえと申す、二宮は地主也、をひえと申す、大宮は、本地は釋迦、垂迹は法形也、二宮、本地は藥師也、垂迹同之、

〔廿二社本緣〕日吉社事

本和大比叡小比叡部天二神坐寸、〇中略大小比叡乃御事、其證不同也、常ニハ大比叡和三輪乃神、小比叡和地主仁氏坐部云云、昔シ潮上仁異人乘船志浮遊志計留乎、祝部乃氏乃先祖奉見天勸請申志計連波、唐崎乃濱仁船乎付給計里、是則大宮仁氏坐寸、三輪乃明神乃化現奈理都云云、地主和本來乃神仁氏坐寸毛部云惠利、〇中略又二宮乎三輪部毛可申歟、三輪和本出雲乃神仁氏坐寸、大地主乃神部稱寸禮波、地主乃號相似多里、然者大宮和大歲神乃子、二宮和大地主乃神也、親族乃神仁氏坐寸禮波、非無仁其乃由、

〔日吉社神道秘密記〕地主大明神

天神第一尊神、天地初之神是也、日本波母山是也〇中略

二宮僧形 堅實合掌 法服黃被

天神第一 國常立尊 藥師 華臺菩薩 地主權現 小比叡大明神、天地開闢之神、諸神總大祖神是也、〇中略

二宮者、天與地二儀主神御、天始地始其中間出現給、故大地主權現號、大字略號地主權現、天地陰陽兩儀加護大明神、

〔神名秘書〕與玉神五十鈴河上地主也

件神無寶殿、以賢木爲神殿也、衢神猿田彥大神是也、

舊記云、衢神孫大田命、是土公氏遠祖神、五十鈴宮處之地主神是也、

〔御鎮座傳記〕山田原地主大土御祖神二座

〔長秋記〕長承三年六月廿一日己亥、按察使談云、明日可有仗議事、朝家大事必可參豐受大神宮土宮、

彼外宮地主也、然而年來無預官幣、而今度准七所別宮、可預官幣之由、自本宮依申請、已蒙裁許、

〔走湯山緣起 二〕同御宇、(丁未〇稱德天皇神護景雲元年)當山鳴動、如血大雨降、當翌日湯濱畔、吹寄一査長四五尋、廣五六尋、猿猴數十爲群黨乘査、遂上陸、詣社殿之許之、各各吐異類音、三ヶ日夜、然後失不知行方、社司神人民怪視之、社壇搖動、神殿戸開、神鏡飛翔、入天雲、見者悲傷、聞者恐懼、加之溫泉乾涸、爰住侶職事等、以巫婦請託宣、七ヶ日夜、巫女宣託云、吾是地主明神也、大神歸國、悲感之心如存、其故當今女帝賜賞錄於弓削、八幡菩薩含恨、太爲妖媒、閉神戸、隱音形、而權現與八幡芳契最深、爰以棄國移高麗、汝等雖致祈請、輙以無效驗、我試爲汝等涉高麗、再奉請權現云云、住僧社職雖愁地主明神託宣、神鏡不還、湯泉無涌、空送四十三年星霜、弘仁元年(庚寅)二月十五日、當山松樹花開、溫泉所々涌、香氣谷々薫、爰緇素歡喜、測知權現還御、爰地主明神託巫女云、我奉爲權現勸請、去天應年中投高麗、然未叙思緒、彼國廟神等、冥以美酒、供以腥宍、酔酩之餘忘素意、既送多年、廉事(高麗年號歟)始醒寤愉、勸請、今權現還御、正是時也、公等抽渇仰盡歸命、託宣云、終神鏡翔降、還入宮殿、如舊、爰社職住侶欣感地主之恩、而於楠山之麓奉勸請、世人號來大明神是也、(奉二還權現一故、以來爲名、)依之來明神、惜酒味不容受、權現再來、此明神之秘計也、尤可奉運信仰之忠貞哉、

〔竹生島緣起〕古老口傳云、此嶋出花嚴經說、故自金輪際出生金剛寶石者、自神代在之、淺井姫命下坐此寶石上、後召諸魚此石周圍疊重石、隱寶石也、仍兩說無相違、淺井姫命(今號地主)者、釋迦如來化現也、故下坐、在世說法之金剛座也、

〔帝王編年記 十九鳥羽〕元永二年十一月一日、戊剋鴨御祖社寶殿以下燒亡、(天火)御體先奉渡御讀經所、其後奉移地主明神神殿、(號比良木明神)

〔神社啓蒙 二〕鴨御祖大神宮　所攝社

比良木社　當宮地主神也

〔諸社根元記 上〕神樂岡社○中略

當社地主艮方

〔神社啓蒙 三〕吉田　所攝社

神樂岡社當社地主雷大神

〔神祇拾遺〕北野天神

地主天神

菅原天神地主ノ神也、其名同シテ其神別ナリ、仁明天皇承和三年二月、爲遣唐使祠於天神地祇於北野也、已上此當社鎭座ノ始ナルベシ、

〔神社啓蒙 三〕北野社者、在山城國葛野郡、○中略

北野天神宮神眞音

在菅原天神菅仁廟傍可五十歩也、○中略

按當社者、菅原天神地主之神也、祭奠及參詣之輩可先祭乎、蓋皇統太祖之靈宮也、惜哉不知名同而神異、混合至不辨焉、今欠垂跡者、欲使社官自考也、予非祕而不言、

〔諸社根元記 下〕離宮明神

舊記云、此神者廐太子云云、又忠文民部卿二人爲地主、位記治曆三、十七、正三位、

〔厚覽草〕尾張國愛智郡熱田神社ニ參詣之次ニ末社ヲ巡見、○中略築地ノ北ノ端ニ社有、拜殿ヲ建タリ、千竈ノ社ト云、熱田ノ地主紀大夫ヲ祭ト云、此人富貴ニテ數千ノ竈ヲ造レリト云、今案ニ神名帳ニ上知鹿間社、下知鹿間社有、熱田ノ地主ニ紀大夫源大夫ト云人アリ、源大夫ハ稻種公ト申ス、宮簀姬ノ父也、大神宮ヨリ遙ニ南ノ方ニ社アリ、此二人ヲ地主ト云傳ヘ上下ノ名アルカ、千竈ノ文字ニ書タルヲ音ニ讀ナシ富貴ノ說アルカ、神名帳ニハ假字ニ書タルヲ、後ニ千竈ト書タル乎、

寺院地主神

知鹿間ハ熱田ノ内ノ里名ニテ上下ノ名有、若ハ數千ノ金竈アリケル乎、如何ゾヤ、

〔熱田神社問答雜錄上〕千竈御前 式內 一座　尾張國造乎止與命 一ニハ作二小豐一 神階正二位名神 俗號二源大夫一 熱田地主也、 國造本紀曰、志賀ノ穴穗朝、以二乎止與命一定二賜尾張國造一、命ハ火明命十一世之孫也、建稻種命、宮簀媛命、皆此命ノ子也、其子孫今ニ至テ祭祀ヲ奉、一說建稻種命ヲ配享ストト云々、

〔多武峯略記上〕地主

右當寺地主者、藤門大祖大織冠聖靈也、

〔書言字考節用集三神祇〕地主權現 ヂシユゴンゲン 城州淸水寺鎭守、所レ祭大己貴、

〔雍州府志二神社〕地主權現　在二淸水寺一、是則地主之神、而爲二鎭守一、實大己貴命也、古旅所在二白山通五條北一、今石地藏之所存也、年々衰頽、四月九日祭日暫居二神輿於經書堂前一、是[illegible]之敬意也、

〔京羽二重大全五神社〕地主權現社

在二東山淸水寺本堂後山一、相傳、坂上大宿禰田村丸所[illegible]也、

〔玉葉和歌集二神祇〕

つらけれはつらしといひつつつらからで賴むとならば我もたのまん

此歌は治承の比、淸水寺僧長玄、彼寺をはなれて、法性寺邊にすまんと思ひたちて、地主權現の御前に通夜したりける夢に、おづけしはこをばとりかへすなりと仰られければ、おさましく思ひて、をこたり申とて七日こもりたりけるに、又寶前より取返しつるはこもとのごとくかへし給はるとて、此歌をたまはりけるとなん、

〔康富記〕文安四年四月九日庚午、淸水地主權現祭也、執行坊構二棧敷一入二申室町殿一、自二猿日一可レ參之由、彼仰之間、異體參之、十綸 小寄 少將次口右門保家朝臣俊賀等也、神輿午刻有二渡向一、其後師子舞、ヌシ田舞 本

座等舞了、

〔晴富宿禰記〕明應二年四月九日、癸卯清水寺地主祭禮云云、當月今日恒例也、

〔五鳳集〕題清水地主櫻花　惟高

地主天神櫻與梅、東山北野被花催、惡詩到處雖題去、音羽飛流好洗回、

〔大江俊光記〕寶永六年四月九日、清水地主祭、前内府公〇久我通誠より申來、高臺寺ノ小寺主税方へ參、追付前内公御座敷へ御入、主税留主故、子平之丞御馳走に出、四半時分湯、餅酒出、其中主税歸宅、又八時分ニヤキだうふ、冷飯、酒出、八ッ過より祭見物所へ御供申參、三年坂下、北廻、靈山入口より五六家西、七ツニ過候へ共、神輿は御通候へ共、ねり物御連シ、誓願寺洞仙院ニ而夕飯有ニ付御立、某へ御供申候而御相伴申、眞靜被參、廉之介主税所幷見物所へ御連、夕飯ハ東因方へ參仕廻、又洞仙院へ參、暮同道シテ在所へ歸了、

〔京羽二重大全〕八年中行事四月九日　清水地主祭

古事類苑

神祇部十五

總社

古事類苑

神祇部十五

總社

總社トハ、數社ヲ一所ニ總合シテ之ヲ祀ルノ謂ニシテ、參拜ニ便ニスルヨリ出デタリ、而シテ一國ノ總社アリ、寺院ノ總社アリ、第內ノ總社アリ、其間ニハ鎭守ヲ稱シテ總社トスルアリテ、必シモ合祀セザルモノアリ、或ハ一宮ヲ以テ之ニ充ツルアリ、故ニ總社ニハ式內大社、式內小社アリ、式外ノ社アリテ均一ナラズ、總社ノ最モ古キモノハ、多武峰略記ニ引ケル要記ニ、延長四年ニ總社ヲ造ルト云ヒ、廿二社本緣ニ、後一條天皇ノ朝ニ、賀茂神社ヲ以テ山城ノ總社ト爲ストアルヲ始トシテ、之ニ繼グルハ百鍊抄ノ久安四年ノ法成寺ノ總社、六年ノ法性寺ノ總社等是ナリ、

〔白山之記〕凡國々必有總社一宮二社、加賀國白山一宮、府南總社也、府南總社名付事、每月朔日每國勅使國八社詣、奉御幣奉禮之、彼八社廻事、有其煩間一所奉祝之、故府南總社名付也、

〔西遊行囊抄 二〕總社〇村名 上州ノ總社、此所ニアリ、〇中略 一宮總社ハ諸國ニアリ、一宮ハ一神ヲ祭リ、總社トハ、其國中ニアル諸神、又ハ總宗廟ノ神ヲ一所ニ祭ルナリ、タトヘバ吉田ノ神社ノ如シ、

〔寬永日記〕嵯峨天皇之時代ヨリ、於諸國五月五日初、國司等天神地祇六神之祭禮アリ、王城賀茂之祭ハ、天子ヨリ勅使ヲ被立有祭禮、於國々ニハ、天神地祇六神ヲ其國之府中ニ一所ニ勸請申號總社、〇中略 於常陸國ハ、代々平氏ノ大掾祭之、府中ニ猶六社アリ、

〔河内志 十四 志紀郡〕總社、略○中古昔國府必建社、有事于國内官社、則國司率僚屬、先修典禮於此、其儀猶京師神祇官、然、

〔淡路常盤草 三 六 原郡〕總社　十一箇所村に有、總社十一明神と稱す、○略中按ずるに、古へ式社の祈年祭に國幣を奉る時ハ、國守以下散齋致齋して、祭に會し幣を班つ事、延喜式文に見えたり、淡路の國の式社、大社二座、小社十一座、國中に散在す、故に吏務の國司、祭の時各社に至りて奉幣する事難し、大社二座に於ては、自ら其祭に會せざる事を得ず、因て餘りの小社十一座を、國府の中に祭場を造りて、國司其祭に會して幣を班つ所とす、各所の十一座を一社にいはふ、故に總社とはいふ也、其十一座は湊口、笑原、久度、由良、湊口、築狹、賀茂、岸河、志筑、來馬、石屋、河上以上十一神社是也、

〔玉手編 五〕諸國に、一宮の外に、國魂社と云ふあり、總社といふあり、○略中總社と稱する社の事は、多くはむかし國府の有し地にありて、式内にて其神社とある社も多かるが、亦式外にて、只に總社と稱するも多かり、此は按ふに、往昔國々に國司を置給へりし時に、其始めて入府せる時は、國守の神拜とて、其國なる諸社を遍く巡拜し、また然らぬ時々も巡拜する式なりしかば、其社々を一社に總祀ひて、總社と稱せるが、新に社を建たるも多かれど、中には其國府の地なる、一宮社に配せ齋へるも有りし故に、只に總社といふと、式内にて某神社と云ふ社を總社と稱するも多しと聞えたり、

〔神社私考〕鎮守また總社の事

諸國に鎮守また總社と稱ふ神社の多きは、いかなる由にて、いかなる神を祭れるにかと考るに、共に國史には見えざる號にて、其より後の古書どもにはをり〱見えたり、○略中按ふに、其總社と稱へるは、國内の神々を勸請て、總て其を中央に祀り、四方に他國なる件の神々をも祀りて、其を合せて鎮守と稱ひて祀りたるものなり、然れば此はかの大物忌明神のごとく、舊くより祭來

れる式社を鎭守と稱ふとは殊なり、○中略吾妻鏡に、陸奧國の總社の事のきこえたる、文治五年より前の二年五月廿八日の條に、神社佛寺興行事、二品日來思召立由所レ被レ申二京師一也、且於二東海道一者、仰二守護人等一被レ注二其國總社、並國分寺破壞、及尼寺顚倒事等一、是重被レ經二奏聞一、隨二事體一爲レ被レ加二修造一也、と見えたるをおもふに、そのかみはやくより諸國に總社と稱ふがありて、其國々の鎭守とし崇めたりしなるべし、其國ノ總社、並國分寺、國分尼寺といへるをもても、諸國に總社のありけんこと、おもひ合すべし、○中略谷川士清が和訓栞に、諸國に總社あり、○中略河内の總社は國府村にあり、伊勢の總社は鈴鹿郡國府村にあり、播磨の總社は姬路の城内にありといへるは、然ることとなるべきことゆれど、其證をいはざれば此說にのみは從ひがたし、古の國府わたりの地に、總社のある所、士清が云へる三國のほかにも、なほ所々にきこえたり、されど又國府ならぬ所にしも在りて、一國の内に總社と稱ふが、二社三社あるところもきこえたり、さはいへど、おほかた件の說の如くなるべし、然るは諸國に國司を任て治め給ふ制となりて後、世の中漸事しげくなりもてゆき、はた御政も緩て、國司の怠もいできぬるにあはせて、國内神社の順拜、また時々の奉幣などにも堪がたきときは、かねて國府のわたりに總社と稱ふを建置て、國内の諸神を勸請て拜所とし、奉幣などの神事を行へる國のいできたりけるが、その便よきに倣ひて漸に諸國にもおよび、遂に諸國なべての例のごとくなれるにて、陸奧國なるもそれなりしなるべし、世々の書どもを讀あぢはひて、おもひやるべし、今三河國寶飯郡此郡名、もと寶飫なるを、字も唱も訛れるなり、白鳥村は、昔時の國府の地なりといふに、總社明神社ありて、永和四年の棟札に、總社五十八社大明神と誌せりと國人云へり、此國の式社は二十六座なれば、三十二座は式外の神に當れり、これも國司の計らひなりしなるべし、さて又いにしへの府のわたりならぬ處にも、總社とてあるがきこゆるは、其わたりにて勢ありける人などの、おのがたのみをかくる神々を合せ祭りしなるべし、其は上に擧たる蓮華王院、常光院の總社〇寺院總社並見二下文一に祭れる神々のさまに准へて、おしはからるゝなり、○中略とりすべて論はんには、總社を鎭守とは稱ふべく、鎭守を總社とは稱ふまじき理なり、

〔類聚名物考 神祇十一〕總社　さうじや

今思ふに、是はいづれの國にも有て、皆その國府に有事なり、武藏の國のは、今は舊府となりし豐嶋多〇豐嶋多摩誤郡の内、今は府中と云、甲斐の道なり、そこに六所明神とて有、是古へ國府の總社なり、上野國にも赤城山の東に、今も總社といふ地有て、社ものこれり、これ古への國府なるべし、それを卽ち俗には、一宮ともいふなり、そのもとは官より幣をわかたれし時に、國の守その國中に在諸神を、こゝにみなあつめ祭りて此所にて、遙拜の處なり、そこより官幣をわかつに次第有て、それを一ノ宮、二ノ宮、三ノ宮などいふなり、この事はやう物に見えたり、上野國に厩橋のこなた、利根川の南に、總社村とて今有、そこに總社の舊跡有、下總にも總社村あり、その外諸々にあり、

〔吾妻鏡 六〕文治二年五月廿九日丙午、神社佛寺興行事、二品〇源賴朝日來思食立由、且所被申京都也、且於東海道者、仰守護人等、被注其國總社、幷國分寺破壞、及同尼寺顚倒事等、是重被經奏聞、隨事體、爲被加修造也、爲善信、俊兼、邦通、行政、盛時等奉行、今日面々被下御書云々、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年四月十四日丁卯、大神宮八幡宮以下大社、可被奉神馬之由被定云々、是御下向無爲之上、依爲將軍始〇宗尊親王也、評定訖而國司持參事書給、御覽之後被施行之、御幣神馬可被奉獻之所々、〇中略諸國二宮總社云々、

〔明月記〕天福元年七月七日己酉、川崎總社祭、殊結構、歌舞叫喚、民戶景氣似豐年、

〔諸神根元抄〕藪里總社　本社牛頭天王、末社、西方賀茂、東方山王、

〔山城名勝志 十二愛宕郡〕高野鄕總社　坐蓮華寺北、三月五日祭之、

〔山城名勝志 十三愛宕郡〕粟田口天王　坐靑蓮院宮東、粟田口村總社也、九月十五日祭之、

〔梵舜日記〕元和十年十月廿四日、粟田口在所總社天王淸祓也、自當所沙汰申也、

〔河内志 十四志紀郡〕總社　在國府村、

〔攝津志八河邊郡〕高賣布神社　在高平谷坂井村、今稱總社、上梁文曰、永正十年越前守小野時家修補、

〔攝津志四生郡〕山口神社　山口村、呼曰總社、與北宮原西村柴嶋十八條共祭祀、

〔張州府志二十中嶋郡〕尾張大國靈神祠　在國府宮村、祀大國靈命、大己貴命之別稱也、〇中略社傳號正一位總社大神宮、謹按神祇寶典云、俗號國府宮、卽一國之總社也、

〔尾張國妙興寺文書〕尾張國總社修理料田事

廳宣如此、早任被仰下候旨、彼料田令領知、可被致修理沙汰者也、仍執達如件、

建武四年二月廿八日　目代九兵衛尉

久田孫四郎殿

〔梅花無盡藏六雜文〕尾州中嶋府中總社大明神化緣疏幷序

娑婆世界南贍部洲大日本國東海道尾州中嶋郡府中國玉之大明神者、國之總社、而大日覺雄之垂跡也、〇中略從示和光同塵之化儀於總社以來、不知幾百歲、每歲五月六日、廼大明神下降之辰也、年代深遠、而無窮推其支干曆數者也、昔係回祿之厄、而記錄悉亡失矣、丙丁不奪、而存于今日者、唯最勝王經一卷而已、〇中略總社大明神、有四十二王子之列廟、以象四十二章經也、第一號角玉明神、〇中略第二號御玉明神、〇中略餘則一々不可勝記焉、總有國玉、角玉、御玉三處之名也、神巫則秘而不顯、

〔遠江國風土記傳七豐田郡〕淡海國玉神社　向坂鄉磐田明神也、後移于見附號總社、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年二月廿二日、自駿河國進使者申云、一昨日廿日丑刻、當國總社幷富士新宮等燒失、神火云々、

〔駿河國志四府中神社〕賤機山社府城ヨリ六町四

淺間神社

總社本社

御朱印社領二千六百石餘

總社本社　神部神社　相殿神二座

類聚國史に止豆鰭大己貴神社、又延喜式に當國安部郡神部の社と申奉るは、則總社の御事なり、本社は大己貴の大神にましますと、又國史に、總社は栲幡千々姬と瓊々杵の尊雨神を祭奉るとありて、紛らはしき樣なれども、本社は大己貴命にて、瓊々杵尊と栲幡千々姬は相殿にまします、神部神社は、別社七社の中に天照大神まします、日本武尊此國に下り給ひし時遙拜の靈跡にて、伊勢大神を祭り給ふとぞ、右の神達を凡て總社と申奉るものならし、總社とは一國の神所にて、國の諸神集會し給ふ、大己貴大神は、大國主神とも、大物主の神とも申奉る、國津神を從へ天神を守護し給ふ、

〔天保集成絲綸錄寺社五十六〕寛政五丑年八月

大目付江

駿河富士本宮淺間社頭總代

富士長門

駿河　甲斐　信濃

右富士本宮、淺間、總社。等就大破、修復爲助成、右三ヶ國、并御府内武家方、寺社町方勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參神主別當、并社人、當丑八月より來ル卯八月迄、御料私領寺社領在町可致巡行候間、志之輩者、物之多少によらず、可致寄進旨、御料者御代官、私領は領主地頭より可被申渡候、

丑八月

右之通可被相觸候

〔天保集成絲綸錄寺社五十五〕天明八申年正月

大目付江

甲州巨摩郡御嶽山

社僧

社人總代

社家

內藤攝津

右甲斐國第一之總社金峰山、御嶽山、兩藏王大權現社頭就大破修復爲助成、信濃、美濃、近江、大和、播磨五ヶ國、去ル巳年二月より去未年十二月迄、巡行御免被成下候內、去々午年世上一統別而不作ニ付、勸物集兼候付相休、去未年出來作ニも候間致巡行候處、無間茂年限に相成、助成少ニ付此度相願、右巡行相殘候、美濃、大和、播磨三ヶ國、當正月より十二月迄、年延巡行御免被成下候間、去ル辰十二月相觸候通相心得、志之輩は物之多少ニよらず可致寄進旨、御料御代官、私領者領主地頭より可被申渡候、

申正月

右之通可被相觸候

〔吾妻鏡十二〕建久三年八月九日己酉、早旦以後、御臺所御產氣、○中略相模國神社佛寺、奉神馬被修諷經、所謂、○中略總社柳田一宮佐河大明神

〔新編相模國風土記四十淘綾郡〕國府新宿

六所明神社　當社ハ本州ノ總社ト唱ヘ、當村及ビ國府、本鄕、生澤、虫窪四村ノ鎭守ナリ、○中略古ハ柳田大神ト號セシト云、柳田ハ、所在ノ古名ナリ、祭神ハ稻田姬命ニシテ、素盞嗚大己貴ノ二尊ヲ合祀ス、崇神天皇ノ御宇勸請アリシト云、例祭正月三ヶ日護摩ヲ修行ス、五月五日國中一宮高座郡宮山村ニア

リ二宮郡中山西村ニアリ三宮大住郡三宮村ニアリ四宮同郡四宮村ニアリ及ビ平塚新宿ニ鎮座スル八幡ノ神輿、神揃山納村ノ郷ニ集リ、一人ハ三種ト號セル、鉾ノ如キモノヲ馬上ニ押立、又一人ハ守公神ト號シテ榊ヲ持チ、次第ニ列シテ神揃山ノ下、高天原ト云所ニ至ル、彼五社ノ神輿、次第ニ山ヲ下リ、爰ニ至リ、神事終リテ歸社ス、此祭事ハ養老年間ニ始ムト云ヘド未詳ニセズ、

〔武藏國總社六所宮緣起〕武藏國總社六所宮者、人皇第十二代景行天皇四十一年五月五日、威神現形告曰、吾是大國魂大神也、立祠於茲而能祭吾、不祭吾則四海不安靜焉、國造奏由於帝都、奉詔立大祠於此地矣、仍祭相殿五神、○中略 武藏國國之神職等、年々集會總社之神社、奏神樂舞、賀五穀之成熟、祈天下太平、

〔府中總社文書拾遺〕常陸國總社造營役所地頭等請文注文事

一通　大枝三郎ニ地頭代左衛門三郎請文○以下十八人姓名略

以上十九通

右目六如件、

文保三年正月廿日

〔府中總社文書拾遺〕依要用有永代賣渡畠一所事

・合代錢貳貫六百文者

右件畠者、常陸國南郡府中總社神主師治名の內、□畠□年貝六百五十入の處にて、於直錢貳貫六百文、永代賣渡申處實正也、○中略 此處くう物者、三月三日用途十五文、又七月十六日に用途十五文、こめながら□□總社御まつりれうたるべく候、仍爲後證之永代うりけん狀如件、

應永八年辛巳七月廿五日　賣主常州南郡府總社神主師治

〔府中總社文書拾遺〕依有要用永代賣渡申田畠之事

合本錢四貫文者

右件田畠之處、常陸國南郡府中總社神主師治永代持之所、口堀内久禰より之畠一所、南より中にこくね境より北之町一所、合年貢六百文、又田は同神主名總社おきぬまはたくつかたの、并に三斗まきたて丶二歩三步作田一段、年貢四百文、田畠共に合直錢一貫文之所、於永代本錢四貫文に賣渡申所實正也、〇中略

應永九年壬午七月廿八日　　賣主常陸國南郡府中總社神主師治

(田中庄總社文書)奉寄進

常陸國田中庄總社山王大般若經讀誦料所、新治郡内、田畠幷屋敷等之事、分錢拾貫文者、

右正月八日 五月一日 九月一日 十一月一日 守此旨可致天下安全之御祈禱、奉寄進之狀如件、

應永卅三年丙午五月三日　　梵方

禰宜殿

(田中庄總社文書)常州田中庄之内、田中郷田三反、總社江寄進申處狀如件、

正長元年十二月廿五日　　理兼〇花押略

田中禰祇殿

(田中庄總社文書)常陸國田中庄總社山王大般若田年貢拾貫之事

右如元所令寄進也、天下安全可致御祈禱精誠狀如件、

永享七年乙卯四月廿一日

禰宜太郎兵衛尉

(府中總社文書拾遺)新治郡〇常陸　府中平

一貳石八斗者　　神主手作分

一廿七石二斗　藏前にて渡す
合三拾石也
慶長九年辰十一月五日　六郷兵庫頭
總社神主へ

〔府中總社文書拾遺〕新治郡〈○常陸〉田木野谷村
はしくたり 中田一反一せ廿七歩　田木野谷坊
同 中田六せ廿四歩　わた引作
石の本 上畠拾四歩　いゝつう作
同 下畠仁せ歩　はやと作
道まつり 中畠七せ拾一歩　平右衛門
同 上畠壹反六せ歩　せん二郎作
同 下畠仁せ廿五歩　同人作
同 下畠壹せ拾歩　同人作
たいしさう前 中畠四せ拾歩　内せん
合五石
慶長七年十二月二日　嶋田次兵衛
府中總社

〔宣胤卿記〕永正十七年十一月十二日秀房朝臣來、條々問之、
近江國神崎郡小幡社、可奉號總社大明神之由被聞食之者依天氣執達如件、
永正十七年十一月十二日　左中辨判

小幡山神官中

〔美濃明細記 三神社〕南宮攝社　總社猿田彥大神、入口鎭座、數立宮トモ云フ、

〔上野名跡志 二編上群馬郡〕總社

鳥居ノ額正一位護國靈驗總社大明神　拜殿ノ額上野總社　當社ニ古ク傳ハリシト云、上野國ノ神名帳ニ、宮中十社相殿、

正一位拔鉾大明神　　正一位赤城大明神

正一位伊賀保大明神　　正一位岩根大明神

正一位若伊賀保大明神　　正一位榛名大明神

正一位小祝大明神　　從一位火雷大明神

從一位倭文大明神　　從一位淺間大明神

攝社五百四十九社、皆上野國十四郡ノ內也、安閑天皇元年甲寅三月十五日鎭座トアリ、

〔集古十種 扁額六〕上野國群馬郡總社額、宸翰不詳、

正一位護國靈驗總社大明神

〔西遊行囊抄 二〕總社 村名○ 上州ノ總社此所ニアリ、昔ハ大社ニテ在リシ也、

〔西遊行囊抄 二〕高崎 上野○ 城中ニ二宮ノ神社アリ、或書曰、總社上州高崎ニ立、社領卅石、但別當光岩寺ト云、

〔下野國誌 神祇鎭座三〕總社六所大明神

都賀郡國府にあり、社ある所を總社村と云なり、○中略 當社祭神は木花開耶姫命にて、相殿は天照大御神、天忍穗耳尊、日子番能邇々藝尊、日子穗々手見尊、大山祇命なりといへり、社領三十石、○中略 さて當所は室八島にて、○中略 室明神とも唱ふるなり、祭禮は毎歲八月朔日、

〔越藩拾遺錄中〕南條郡〔前〇略〕府中總社

〔天保集成絲綸錄五十六寺社〕寛政七卯年五月

寺社奉行江

隱岐國總社大明神司職

隱岐國造

銀五枚

右持傳候驛路鈴上覽被遊候付、書面之通被下候間、其段可被申渡候、被下銀は御納戸頭相談可被請取候、

〔丹後國諸庄鄕保總田數帳〕與佐郡

總社田　五町一段百八十步內

四段二百八十步　山田拾介

四町六段二百五十二步　不知行

〔但馬國大田文〕氣多郡

國中諸寺沙汰

總社大般若田　四町〔略〇中〕

總社毗沙門講田　一町　地頭治田小太郎入道願西

同社三昧田　一町七反六十步　地頭同人

〇按ズルニ、是ハ弘安八年ニ注進セルモノナリ、

〔美作記一〕總社宮緣起之事

正一位總社大明神、祭神國造大己貴の命なり、〔略〇中〕欽明天皇二十五年甲申四月十一日午の日に

御鎭座あり、一宮、二の宮、總社宮、一國の三社となる、人王四十二代文武天皇三社ともに再興まします、慶雲四年の御事なり、〇中略當宮へ九月十一日は、一の宮、二の宮の御旅あり、一國の社人參集して、天下國家の御祈禱執行、〇中略又一説には總堂といふは、今の總社宮の事なり、太平記の比までは當社を一の宮と云ふ、其後苫東郡より右神明の神を一の宮へ遷し、今の中山大神宮是なり、寛文の比一の宮へ下馬札を給ふ、此札も總社たるべき事なるに、是程ぞ世の末なり、何にもせよ總社は當國初發の神なり、一國大小の神祇、此御社に鎭座し給ふ、依て總堂なり、今の社は明暦二年に造營ある、同十一月に遷宮ある、當國に凡九百十二社と記す、又は四千三百七十五所ともあり、

〔淡路國大田文〕三原郡榎烈村　總社宮一所、〇中略貞應二年四月日、

〔伊豫國二十四社記野間郡〕野間神社名大神

在神宮村　土俗稱野間總社

所祭神天照皇大神和魂

〔愛媛面影二越智郡〕總社川　此川を總社川と名けたるよしは、古は國府に總社と云ふを建て、國司參拜の所と定められたるを、此川邊に總社の在けるによりて、總社川と名付たるなるべし、民部帳に總社田などあるをもて知べしと、玉井春枝かたりき、〇中略

高尾光賀云、五十嵐村なる伊加奈志神社、一名總社明神と云りと、此社五十嵐の山上に立して此川に程近き所なれば、實は古の總社なるか、

又一説に、鳥生橋畔有小祠、號總社明神と今治夜話に見たり、

〔土州名勝志上長岡郡〕總社

今國分寺境内に有、國中の總社なり、昔は國分の西にありしが、いつの頃よりか、今の所に移、

〔土州淵岳志上〕總社ハ本國府ニアリ、近年國分寺ノ境內ニウツス、土佐國中ノ總社也、ソノ跡今國分寺ノ作式トナル、

〔豐府志略二〕總社宮

總社宮は緣起燃失する故、由所詳ならず、或說に王代の古へ、廳屋政所の跡成よし、又一說には總社宮は諸國共にあり、新掌の社なり、故に春秋兩度社祭有由、社の號に依而市中をも總社町といふ由、又一說には皇后三韓征罰の祈の爲、此所に於て六十餘州の大小の神祇を勸請有し故、總社宮と云ひ、町の名を總社町といふ由、兩說共に見所なき故不審、

〔諏訪大明神畫詞一〕桓武天皇の御子開成皇子と申人おはしましき、忽に世事をなげすてゝ偏に菩薩を願給、○中略靈神諏訪○明神の加護あれば、皇子御願成就す、終に寫經六百軸に、佛舍利幷佛菩薩、十六羅漢、十六善神、法誦常誦、梵天皇等像、鈴杵閼伽の具を相副、六角の淨場に奉納、供養をとげ、深く是を埋みて慈尊の出世を期す、仍彌勒寺と號す、其砌に總社を建立して、八幡大菩薩、地主權現、金剛藏王、諏訪南宮等を勸請して護法神と定む、今に三所權現と號す、寶龜九年八月十一日、皇子手づから祭り始給しより、此方正月八日の祭禮未斷絕せず、

〔多武峯略記下〕總社檜皮葺

要記云、延長四年始造總社矣、天仁燒失、其後所造御寶殿、承安燒失、其後承安四月正年廿一日斧始、廿四日柱立、廿七日作事了、其後建久五年三月十八日、御寶殿三四丈許、奉曳南方、八月二日、尙五六尺許、奉曳移南方、

三面拜殿檜皮葺、正面七間、南面三間、北面三間、元三間一面、

天仁燒失、其後所造拜殿五間、承安燒失、其後建久五年四月十九日、柱一本立、之上假棟、五月七日斧始、

大工散位友成、六月十三日棟上、同六年四月廿八日葺了、元總社地者、今講堂閼伽井程也、今總社地

者、元曼茶陀羅堂跡也、建久四年七月廿四日曳鐘曼陀羅堂跡成平地、同五年三月十八日、曳移總社於彼地、

〔百錬抄 七 近衛〕久安四年二月十七日、炎上及數十町、其中法成寺總社、法興院燒失、

〔台記〕久壽二年九月廿三日丁卯早旦著心喪直衣（帽烏）參法成寺、（金堂、無量壽院、總社、藥師堂、五大堂、諸堂、）於講堂聽聞法華講、了退出、

〔山槐記〕治承二年十一月十二日辛未、行御誦經、用白布、差召使幷諸人從者等、奉神社佛寺等、

神社四十一箇所法興院總社、○中略 法成寺總社、

〔百錬抄 十 後鳥羽〕建久五年九月九日丙申、今日法成寺總社祭也、

〔百錬抄 七 近衛〕久安六年八月廿四日、攝政（忠通○藤原）於法性寺新造堂、被行總社祭、新始崇之、

〔百錬抄 八 高倉〕安元元年六月十六日、蓮花王院總社、鎭座八幡已下廿一社、其外日前宮、熱田、嚴島、氣比等社、本地御正體圖繪像、但日前、熱田御本地無所見、仍只被用鏡、　十月三日、蓮華王院總社祭、公卿侍臣僧綱等騎進馬長、有相撲御神樂、自今年所被始行也、有試樂後宴、

〔諸神根元抄〕仙洞法住寺殿御鎭守（號蓮花王院總社）

石清水　加茂　松尾　平野　稻荷　春日　大原野　大神　石上　大和
廣瀨　龍田　住吉　日吉　梅宮　吉田　廣田　祇園　北野　丹生
貴布禰　日前國懸　熱田　伊都岐　氣比

已上廿五社

〔山槐記〕治承二年十一月十日己巳、今夜宮（○高倉后德子）侍幷有官輩、於常光院總社、（御所内、異說有之、）有八女田樂事、各亂髮、面施黛、渡南庭、是御產御祈云々、豐前前司光季爲神主代申祝云々、件社伊津岐嶋御坐云々、

〔明月記〕元久二年四月十二日、今栖霞寺總社祭云々、田樂外無他事、

〔吾妻鏡十八〕元久二年十月十三日丙寅、五條判官有範使者自京都參著、申云、去二日子刻叡山法華堂渡廊放火、○中略總社、○中略以爲灰燼、

〔日吉社神道秘密記〕

一塔下社、日本ノ總社是也、依宣下也、○中略此地北尾谷明達律師之里房也、明達行力達者、現妙之行者也、第六十二代朱雀天皇朝敵惡人將門親王於東國御移住、然而爲朝敵上洛有、調伏之法對明達有勅定、則將門親王滅亡畢、明達法成就之砌、多寶塔建立アリ、故號塔下社、日本總社者、依宣下六十餘州大小神祇勸請之、塔下社者調伏祈念所也、○中略

一總社日本國大小神祇鎭座、御神體山王七社、伊勢、八幡、春日社、幷諸神勸請之、傳敎大師御時、

〔山城名勝志十二愛宕郡〕一乘寺總社、今一乘寺村氏神也、三月五日祭之、諸社根元記云、本社八大天王、末社伊勢三社一字ツヽ有也、神號不知之、

〔集古文書四十二寄附狀〕北條政有寄進狀甲斐國金山寺藏

金山寺寄進

每年正月七箇日夜、不斷千手供養法、佛性燈油田事、

合水田貳段者

在上道鄕菅田里、廿一坪總社宮長日法華經免田也、○中略

右當寺寄進志者、每年彼勤行無懈爲丁寧勤、爲無緣之輿行之間、以愛勵無力以政有相傳私領田相副手繼狀等、所令寄進于當寺佛前也、於無主地至于盡未來際爲寺領、永不可有相違、然心中所願速疾滿足、壽福增長、現世安穩、後世善處、乃至法界衆生中等利益者、各以信心彼行法之時、可有祈請、仍爲後代牢寄進狀以解、

正和元年壬十一月廿三日　　平政有書判

第内總社

〔吉田家日次記〕應永九年正月一日乙酉、參北山殿、〇足利義滿第、總社、兼村、兼成同參仕、予勤神供之陪膳、兩輩役送之、北神二所同供之、先規不然、祭禮御神樂日供之許也、予以散神供之、予奉幣、四拜次申祝撤之、當社同御戸開也、元三神事、數十箇年中絶再興、珍重定有冥感歟、

以鎭守稱總社

〔廿二社本緣〕賀茂事

後一條院行幸之時、山城乃國乎寄進シ給字仁、仍今者當國乃總社仁天坐ス也、

〔新撰佐渡風土記〕當國總鎭守の事

當國の總社を案ずるに、金北山に鎭座ましますは大權現を尋奉るに本地將軍地藏なり、人皇四十二代文武天皇丁酉年、此山に垂跡ましますす、〇中略林鐘の頃はひ、國中の人民群參して、渴仰の禮奠他に異也、社は絶頂に建て、わづかの禿社たり、夫より春秋遙に移りて、雜太の城主本間信濃守是を建立す、時に本間十郎奉行蒙りて造營し畢ぬ、然しよりこの方彌靈驗國内に冠たり、故に今に至る迄大樹の台命に依て、時々御修覆を加へ給ふなり、

以一宮稱總社

〔神社便覽雜社〕健部　延喜式神名帳云、近江國栗太郡

健部神社一勢田也、近江國總社也、　一宮記云、大己貴命也、

〔神社啓蒙六〕總社　在播磨國飾磨郡姬路城中、所祭之神一座

大己貴命、　額曰、軍八頭正一位總社伊和大明神、當國一宮伊和社、載二一宮卷一

〔播磨名所巡覽圖會四〕總社伊和明神姬路侍士町にあり、祭神東殿五十猛命、西殿大己貴命、中殿九所神、祭神秘社傳曰人皇四十七代淡路廢帝天平寶字七年、當國ノ一宮に宍粟郡伊和社、軍戰勝利を祈誓せし時、大己貴命水尾山に降臨ましますす、今城西秩父山是なり、正暦二年六月朔日、正一位を授奉り、同年神託ありて九所の靈神を併せ祀り、椰木の地に遷座ある、今京口門内廣大路也、其後養和元年正月廿三日、草上鄕射楯兵主神社、神名帳に出二座の内五十猛命を併奉り、二神一光の傳あり、同年六月十一日末社

を封し、同十一月十五日、延喜式神名帳、播磨國五十座神大七座、小四十三座、を大己貴命左右に併せ、額の銘曰、軍八郎正一位總社伊和大明神と書す、

古事類苑

神祇部十六

官衙神

古事類苑

神祇部十六

官衙神

神祇官ノ御巫祭神、八神殿ト云フ座摩御巫祭神、御門巫祭神、生嶋御巫祭神、太政官ノ厨主神、外記廳ノ守神、宮内省ノ園神社、韓神社、縫殿寮ノ御匣殿神、縫殿神、著酒神、陰陽寮ノ守護神、織部司ノ辰巳隅神、戌亥隅神、大膳職ノ御食津神社、火雷神社、高倍神社、大炊寮ノ大八嶋竈神、齋火武主比命、庭火皇神、主殿寮ノ寮家、釜殿、松山、炭山等ノ神、内膳司ノ忌火庭火神、平野竈神、造酒司ノ大宮賣神社、酒殿神社、園池司ノ御氣津神、主水司ノ鳴雷神社、御井神、氷池神、左馬寮ノ生馬神、左京職ノ戌亥隅神、齋宮寮ノ大宮賣神、御門神、御井神、卜庭神、地主神、鑄錢司ノ黑山神、火山神、鎭守府ノ石手堰神等、都テ二官、一省、六寮、六司、二職、一府ニ祭ル所ノ諸神ノ祠宇神階、及ビ祭典ノ如キ、就中宮内省ノ園韓神、二月十一月二祭ノ如キ、歷世ノ久シキ斷滅スル事ナク、盛儀觀ルニ足ルモノアリ、ノ載セテ此篇ニ在リ、

〔延喜式九神名〕神祇官西院坐御巫等祭神廿三座並大、月次新嘗、

御巫祭神八座並大、月次新嘗、中宮東宮御巫亦同、

神產日神　高御產日神

玉積產日神　生產日神

足產日神　大宮賣神

御食津神　事代主神

〔祝詞考上〕生魂は、古事記に、大年神娶活須毘神之女生大國魂神と見え、且其生魂神は、神魂命の御子也と或ものに書しはさぞ有なむ、足魂は右の生魂神の和魂なるべし、○中略大宮の賣は、太玉命の子にして、天照大御神の宮の内の事を執給ひ、○中略御膳都神は、同記に粟國を大宜都比賣といひ、又二神○伊邪那岐伊邪那美、大宜都比賣命を生給ふと見え、且この神の身に五穀その外の物の生初し事有、仍て大膳職にも齋奉る大神也、

〔古事記上〕天地初發之時、○中略次國稚如浮脂而久羅下那州多陀用幣流之時、流字以上十字以音○中略次成神名、○中略次角杙神、次妹活杙神、○中略次淤母陀琉神、次妹阿夜上訶志古泥神、此二神名以音

〔古事記傳三〕活杙神、○中略神祇官坐御巫祭八神中の生產日神は、此神なるべし、淤母陀琉神、○中略神祇官坐御巫祭八神中の足產日神と申すは、此神なるべし、此七代神世十二柱神の中に、たゞ活杙神と此淤母陀琉神とのみ、取分て彼八神の列に數て祭たまふことは、彼八神は、もはら天皇の大御身を御守護のためなれば、活さ中し足さ中す、神靈の由縁なるを以てなるべし、

〔古事記傳十一〕事代主神、○中略神祇官坐御巫祭神八座の中に、大穴牟遲神○事代主神父は坐さで、此事代主神の坐ことは、まづ此八座神のうち、餘の七座いづれも天皇の大御身の上を守り幸へ坐神たちなるを、其中に大宮賣神は、古語拾遺に、天照大御神の御前に侍坐よしありて、如今世内侍善言美詞、和君臣間、令宸襟悦懌、と云るに準へて思へば、此事代主神は、下に父大穴持命の言に僕子等百八十神者、即八重事代主神、爲神之御尾前而仕奉者、違神者非也とある、此等の所以由にて、殊に天皇の御守神なればなるべし、

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、○中略爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、所謂高皇產靈、神皇產靈、魂留產靈、生產靈、足產靈、大宮賣神、事代主神、御膳神、已上今御巫所奉齋也

〔大内裏圖考證十九神祇官〕八神殿

古文書曰、神祇官内東西所院事、八足門内、有神殿八又曰、八神殿不安御體、只用賢木也、

〔百練抄崇徳六〕大治二年二月十四日、園韓神社、神祇官以下八神殿、幷內外院門垣〇中略等燒亡、〇中略園韓神御正體同奉取出之、但後日象俊宿禰曰、八神殿園韓神、自元無御正體、但園韓神有神寶劒桙云云、〇中略又見右記

〔玉海〕安元三年〇治承元年四月廿八日丁酉、亥刻上方火、樋口富小路邊云々、〇中略燒亡所々、〇中略神祇官、〇八神御正體燒失、又見百練抄

〔顯廣王記〕安元三年〇治承元年六月九日、八神殿遷宮了、假殿也依大治之例、本官所造進也、禰宜史生實正申詔戶、

〔百練抄後堀河十三〕貞應元年六月五日、今夜神祇官八神殿遷宮、

〔玉英〕曆應三年三月十九日、大藏卿雅仲爲勅使來、神祇官可有修造、武家執奏之故也於神體者、凡無御座、由伯業濟王所申也、此所如何、又任先例先可有假殿造營歟、將又直可被作正殿如何、且可計申、且可相尋卜部輩者、予申云、早可相尋候、神祇官神體爲神木サカキ之條勿論歟、伯申條不審、又須直作正殿也、其故者神體御座之時、先作假殿奉移神體之後、有正殿造營、於此度者神體已紛失給、假殿無其詮、雖片時可被急正殿也者云々、

〔吉田家寬文九年注進〕天正十八年三月十三日、神祇官之八神殿、於吉田齋場所境內、可有御再興之由被仰出云々、〇中略慶長十四年九月十六日、奉幣使發遣之刻、於八神殿前、神祇官之作法被執行訖、是於吉田神祇官作法之始也、

〔孝亮宿禰記〕慶長十四年九月十六日甲午、伊勢一社奉幣發遣日時定、陣儀有之、〇中略陣儀以後、于直參向神祇官代吉田最上所前、奉幣發遣御作法有之、天正年中迄、神祇官代有內野、然而件內野敷地、被構大樹御屋敷內之故、今度神祇官代被用吉田、初例也、

〔伯家部類〕神祇官屋敷事、秀吉太閤撿地之後ヨリ無之候歟、八神殿ハ慶長二年吉田ヘ移ス、其時迄

ハ其フルキ社其ヲ直グニ吉田ヘ引用シト云、此時分迄ハ、二條ノ城ハ曾テ以ナカリシナリ、

○按ズルニ、宣胤卿記延德元年十月十六日、兼倶神異密奏ノ條ニ、去三月廿五日夜亥刻、風雨雷鳴之刻、黑雲八流靡降于齋場之兩宮、并八○○○神殿及大元宮之上云々トアリ、當時既ニ、私ニ吉田神社ニ八神殿ヲ祀ヒ祭リシコト明ナリ、記シテ參考ニ供ス、

〔孝亮宿禰記〕元和三年三月七日壬申、神祇官代之事、今度吉田者不可被用、仍內野ニ神祇官屋敷四町有之、彼地今度八神殿被勸請由有風聞、　十二日丁丑、東照宮就一社奉幣、神祇官參向、(神祇官代、內野也、)

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官无位神產日神、高御產日神、玉積產日神、生產日神、足產日神、並從一位、　二月丁亥朔、神祇官從一位神產日神、高御產日神、從一位玉積產日神、從一位足產日神、並奉授正一位、

〔延喜式 二四時祭〕御巫奉齋神祭(中宮東宮御巫准此)

絁一匹四丈、五色帛各四丈、絲四絇、綿六屯、倭文四尺、調布六端、庸布四段、紙一百張、凡木綿麻各二斤、鍬八口、錢五百文、酒一斗、米六斗、糯米四斗、稻八束、大豆小豆各二斗、鰒堅魚腊海藻各十二斤、鮭八隻、鹽四斗、明櫃二合、折櫃八合、筥八合、杓二柄、坩堝各四口、缻八口、杯八十口、槲五十把、席二枚、薦二枚、食薦八枚、簀二枚、

右(中略)○於神祇官齋院祭之

〔神祇官年中行事 三月〕三日、八神殿節供、

〔神祇官年中行事 五月〕五日、八神殿節供、

〔神祇官年中行事 七月〕七日、八神殿御節供、

〔神祇官年中行事 九月〕九日、八神殿御節供、

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年八月廿七日甲辰、夜偷兒開神祇官西院齋戶神殿、盜取三所齋戶衣、幷主上

結御魂、結等、

〔帝王編年記二十七伏見〕永仁二年九月卅日、神祇官八神殿御戸開、盜犯所爲歟、

〔延喜式九神名〕神祇官西院坐御巫等祭神廿三座並大、月次新嘗、

座摩巫祭神五座並大、月次新嘗、

生井神　福井神

綱長井神　波比祇神

阿須波神

波比岐神

〔古事記上〕故其大年神、○中略又娶天知迦流美豆比賣、訓天如天、亦自知下六字以音、生子、○中略次阿須波神、此神名以音次波比岐神、此神名以音

〔祝詞考上〕座摩は、本攝津國西生郡の所の名にて、式にも同郡に同神の社あり、此次に皇神の敷坐云々てふ文にも依に、いにしへよりこの大神の敷坐し所に、仁德天皇宮造し給ひて宮中に齋まし丶故に、其後大和山城と京を遷されても、同じくうつし齋はれて、そこを卽座摩といひしなるべし、

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、○中略爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、所謂○中略坐摩是大宮地之靈、今坐摩巫所奉齋也、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官无位生井神、福井神、綱長井神、波比祇神、阿須波神、並從四位上、

〔延喜式二四時祭〕座摩巫奉齋神祭

絁一匹二丈五尺、五色帛各二丈五尺、絲二絇、綿三屯、倭文二尺、調布二端、庸布二段、紙五十張、凡木綿麻各二斤、鍬五口、錢二百文、酒九升、米四斗、糯米二斗、稻五束、大豆小豆各一斗、鰒堅魚腊海藻各六斤、

鮭五隻、鹽二斗、明櫃二合、折櫃五合、筥五合、杓二柄、瓫堝各二口、研五合、杯五十口、槲卅把、席二枚、薦二枚、食薦五枚、簀二枚、

右、○中略於神祇官齋院祭之、

〔延喜式一四時祭〕御川水祭十二月准此、中宮亦同、

五色帛各二丈五尺、絁二丈五尺、綿五屯、倭文二尺、絲五絇、木綿麻各五斤、紙一百張、布五端、錢八十文、鍬五口、酒二斗、米糯各五斗、大豆小豆各一斗、糯米三斗、稻五束、鮭五隻、鰒堅魚腊海藻各二斤、鹽五顆、明櫃二合、杯五十口、食薦五枚、席薦各二枚、折櫃五合、韮籠一脚、槲一俵、匏五柄、

右、○中略御川水祭座摩巫行事、

○按ズルニ、神祇令ニ孟夏大忌祭アリ、而シテ延喜式亦此祭ヲ大忌祭ノ下ニ列シタレバ、四月祭ナルコト明ナリ、他例ニ准ズルニ其前行ニ、四月祭ノ三字アリシガ脱失セルナラン、

又按ズルニ、御川水ハ御溝ヲ謂フ、古今和歌集二春ニ、東宮の雅院にて、櫻の花のみかは水にちりて流れけるを見てト云ヒ、源氏物語藤裏葉ニ、右近の陣のみかは水の邊になすらへて、西の渡殿の下より出るみぎはちかううつさせたまへるナドアル是ナリ、

〔神祇官年中行事四月〕御河水祭○中略

已上件祭之幣物等、以本官奏請、兼日付官請之、本官史生持參也、件用途料知下宣旨、近代無其沙汰歟、

〔延喜式三臨時祭〕御川水祭

絹四丈五尺、五色薄絁各六尺、布二端、倭文二尺、綿五屯、絲五兩、木綿麻各五斤、紙一百張、錢八百文、鍬五口、米酒糯各五斗、稻五束、大小豆各二升、糯米三斗、鰒堅魚各六斤、腊四斤六兩、鮭五隻、海藻八斤、鹽五升、明櫃二合、折櫃五合、杯五十口、匏五柄、槲一俵、韮籠一脚、席薦各二枚、食薦五枚、

〔延喜式神名九〕神祇官西院坐御巫等祭神廿三座並大月次新嘗、
御門巫祭神八座並大、月次新嘗、
櫛石窻神各一座四面門　豐石窻神各一座四面門
〔古事記上〕天石戸別神、亦名謂櫛石窻神、亦名謂豐石窻神、此神者御門之神也、
〔古史傳十〕この天石戸別命と云は、手力男神の亦名なること、古語拾遺に、○中略見えたる文のつゞきを熟思ひ、古事記に、○中略天石戸別神、此神者御門之神也とあるを、大神宮本紀に、御戸開神、天手力命また元々集に引る麗氣記にも、天手力男神、亦名豐開神とも見えたり、とあるを思ひ合せて曉るべし、
〔古語拾遺〕于時天照大神赫怒、入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、○中略令豐磐間戸命、櫛磐間戸命二神、守衞殿門、是並太玉命之子也
〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、○中略爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、所謂○中略櫛磐間戸神、豐磐間戸神今御巫所奉齋也已上御門
〔三代實錄清和二〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官无位櫛石窻神、豐石窻神、並從四位上、
〔延喜式祝詞八〕御門祭
櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波、四方內外御門爾、如湯津磐村久塞坐氐、四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾、古語云、麻我許登、相麻自許利相口會賜事無久、自上往波上護利、自下往波下護利、待防掃却言排坐氐、朝波開門、夕波閉門氐、參入罷出人名乎問所知志、咎過在乎波神直備大直備爾見直聞直坐氐、平久氣安久氣令奉仕賜故爾、豐磐牖命、櫛磐牖命登御名乎稱辭竟奉久登白、
〔延喜式一四時祭〕四面御門祭十二月准此
五色帛各四丈、絁四丈、絲八絇、木綿、麻各八斤、綿八屯、紙二百張、倭文四丈、布八端、錢一百文、鍬十六口、黃蘗五十枚、糯米八斗、大豆、小豆各四斗、米八斗、酒五升、糟八斗、稻十六束、鹽十六顆、鮭十六隻、鰒、堅魚、

脯、海藻各四斤、席、薦各四枚、食薦十六枚、明櫃、折櫃各八合、杯八十口、筥籠四脚、匏五柄、槲二俵、〇中略

右四面祭御門巫〇中略行事、

〇按ズルニ、本文亦前行ニ、四月祭ノ三字アリシガ脫失セルコト、上文御川水祭ノ下ニ云ヘルガ如シ、

〔延喜式 二四時祭〕九月祭

御門巫奉齋神祭（祭料物同御巫）〇中略

右〇中略於神祇官齋院祭之

〔神祇官年中行事 四月〕四面御門祭〇中略

已上件祭之幣物等、以本官請奏兼日付官請之、本官史生持參也、件用途料知下宣旨、近代無其沙汰歟、

〔仲資王記〕元久元年三月六日、裏書、權大副卜部兼衡來、是轉任之後爲其慶□來也云々、談云、本官西院北舍坐四面御門神ハ、大內建禮建春門等今坐之神也、本社在但馬國、今坐宮城門之□□鎭座、當官北舍也、（八神殿）非本官四面門神□也、而或官人存本官門之由、今料見、尤不可也云々、

生嶋神　足嶋神

〔延喜式 九神名〕神祇官西院坐御巫等祭神廿三座（並大、月次新嘗、）

生嶋巫祭神二座（並大、月次新嘗、）

〔古語拾遺〕逮于神武天皇東征之年、〇中略爰仰從皇天二祖之詔、建樹神籬、所謂〇中略生嶋（是大八洲之靈、今生島巫所奉齋也、）

〔三代實錄 二淸和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授神祇官无位生嶋神、足嶋神、並從四位上、二月十一日丁酉、授神祇官從四位上生嶋神、足嶋神、並正四位下、

太政官祭神

〔延喜式二四時祭〕生嶋巫奉齋神祭

絁一匹一丈、五色帛各一丈、絲一絇、綿三屯、倭文二尺、調布三端、庸布一段、紙五十張、凡木綿麻各一斤、鍬二口、錢二百文、米、糯米各二斗、酒六升、大豆、小豆各一斗、稻二束、鰒、堅魚、腊、海藻各六斤、鮭二隻、鹽二斗、明櫃、折櫃、筥各二合、杓二柄、瓮、堝各二口、坏二口、杯廿口、槲卅把、席二枚、薦二枚、簀、食薦各二枚、

右(略○中)於神祇官齋院祭之

〔諸神根元抄〕太政官　厨主神

承平七、六、四、正五下、

外記廳祭神

〔山槐記〕長寬二年三月廿七日、巳始剋召使來曰、(略○中)即參上、(乘毛車、隨身垂袴、如恒、相具深沓、雨時等用沓也、)于時午終剋也、於陽明門下車入南間、(略○中)至外記西折南、召使等來向此邊、隨身以下留之、於外記門前下尻、過了取之、(此事不見諸家次第記等、依大納言殿命也、爲敬外記廳主君神、猶可下也云云、可尋、)

〔諸神根元抄〕外記廳守神事

大宮賣神　註云太玉命

故師季朝臣存知住吉神云々

宮內省祭神

〔延喜式九神名〕宮內省坐神三座(並名神大、月次新嘗、)

園神社

韓神社二座

〔古事記上〕故其大年神娶神活須毘神之女伊怒比賣、生子大國御魂神、次韓神、次曾富理神、

〔古事記傳十二〕韓神、名義未考得ず、韓は借字か、正字か、地名などか、將韓國に由あるか、凡て知がたし、(書紀に、素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處云々と云ことあれば、其時に此韓神をも、率て往たまひて、彼國にして功なとありしにや、曾尸茂梨と曾富理とも似たるをや、されど彼は出雲國に降り坐せし以前の事なれば、時たがへり、此は試にいへるのみなり、)曾富理神、此も未考得ず、地名などにやあらむ、(略○中)さて常に園韓神と一に連ねて申しならへる故に、此の曾富理神を即園神ならむと、

誰も思ふことにて、信に然もありぬべし、但シ園神とは別にても有なむか、（彼宮内省なるは、上古よりたまたま常に遷れて申しならへるにこそ、）其故は若此曾富理神ならば、韓神の御弟に坐せば、韓園と序次べきことなるに、園韓と序次て、其祭禮も園を先にせらる、且彼は園とのみ何の書にも見えて、曾富理と云ることなく、又曾能と曾富理と言の通ふ由も无ればなり、（延佳（度會氏）曾富理は、園祇かと云しかど、祇てふこと神名に由なし、）若しくは韓神二座のうちの一座や、曾富理神にてはあらむ、猶よく尋ぬべし、

〔大倭神社註進狀〕大神氏家牒曰、養老年中藤史亦建二園韓神社一奉レ齋焉、○中略舊記云、件神等素戔嗚尊之子孫、守二疫神一也、傳聞、園神者、大己貴命之和魂大物主神也、（案此神、國華飛散之時、發二疫病一守二護之一、鎭二止之一、仍云二園神一歟、園猶二草木之處一也、集解所レ謂三枝和靈祭云二當社之事一、又大物主神可レ謂二素戔嗚尊之孫一、）韓神者、大己貴命、少彦名命也、兩神經二營天下一、爲二顯見蒼生一則定二其療病之方一、（或抄云、大己貴命、少彦名命、神託曰、昔遊二葦原中國一、故去往二東海一、今爲レ濟二民、更亦來歸、因以號二開神一、云二韓神一歟、古語外國云レ韓也、亦案神皇產靈尊曰、少彦名命與二大巳貴命一爲二兄弟一、如此少彦名命可レ謂二素戔嗚尊子一、）紫野今宮三座、社家者流如レ右、

○按ズルニ、大倭神社註進狀ニハ、園神ヲ以テ大物主神ト爲シ、韓神ノ二座ヲ以テ大己貴命及ビ少彦名命ト爲ス、古事記傳ニハ、韓神ノ中ノ一座ヲ、古事記ナル大年神ノ御子ノ韓神ト爲シ、一座ヲ疑テ曾富理神ト爲シ、園神ヲ別神ト爲ス、未ダ其孰レカ是ナルヲ知ラズ、故ニ兩存シテ後考ヲ俟ツ、

〔拾芥抄〕（下本諸社）園韓神（在二大内宮内省一、園神一社、韓神一社也、）

〔古事談〕（五神社佛寺）園韓神社者、本自坐二大内跡一、（○跡一本作レ所）而遷都之時、造宮之使等可レ移二他處一云々、于時託宣云、猶坐二此處一奉レ護二帝室一（○室一本作レ皇）云々、仍坐二宮内省内一云々、

〔長秋記〕大治四年三月廿一日己亥、未刻參院見參、○中略卿云、去夜本院（○白河）御夢想有二老人一稱二宮内省住人一申云、近日居住近邊雜人等亂入甚難レ堪也、此事可レ令レ訪給也、今朝被レ尋之處、彼園并韓神二社、入二參籠中一歟、件社燒亡後、未レ築二四面垣一（○垣一本作レ塊）仍雜人等亂入云々、

〔延喜式三臨時祭〕凡園韓神兩社、讃岐國封戸調庸租米者、送納此官、〇神祇官 充修社料、

〔朝野群載六神祇官〕園幷韓神社

請特蒙天裁被下宣旨差賜官使勘注神殿雜舍廻垣等損亡令別功輩致修造狀

右謹撿案內、御社去治暦二年修造以後、漸及廿箇年、神殿舍垣等、多以破損、難避風雨、二季禮奠、諸官供奉、祇敬之間、蒸嘗有煩、望請天裁被下宣旨、差賜官使、勘注損亡、將令別功輩早致修造、仍勒在狀、謹解、

永保二年正月十三日　預宮主從五位下行神祇大祐卜部宿禰兼宗

〔百練抄六崇德〕大治二年二月十四日、園韓神社、神祇官以下八神殿、幷內外院等燒亡、園韓神御正體同奉取出之、但後日兼俊宿禰曰、八神殿園韓神自元無御正體、但園韓神有神寶劒桙云々、

〔雍州府志二神社〕園幷韓神兩社　舊在宮內省、後移禁庭、〇中略 今無斯社、惜哉、

〔文德實錄七〕齊衡二年九月癸丑、以園神、韓神列於名神、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月甲子、遣右大辨兼右近衞中將從四位下藤原朝臣氏宗、向園神、韓神等社、策命曰、天皇我詔旨留申給久、御冠奉授止禱申賜比之依天、從五位下乃御冠乎奉授利、崇奉留狀乎、御位記令持天奉出須、此狀聞食天、天皇朝廷乎常磐堅磐留護幸奉賜止倍申給止久申、

〔伊呂波字類抄所諸社〕薗神社嘉祥三年始有祭、宮內省坐神三座內、

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授宮內省從三位園神、韓神並正三位、

〔年中行事秘抄二月〕上丑日園幷韓神祭事

若有三丑、用中丑、但春日祭後丑云々、春日祭有故延引、以下申祭之時、至園韓神祭者、以何日可祭哉、延喜御記曰、云々、二月大時、朔日當申日、有春日祭、六日、十八日、卅日、並丑日也、以何日可祭園韓神乎、先例不定、或曰、以用春日祭後丑、以六日可祭、或曰、以中丑祭之、以十八日可祭云々、然而承平年中以

十八日祭時、稱神祇官過已進過狀、猶以六日可祭歟、（寬治七以上丑祭也）

承平六年二月一日庚申、春日祭也、十八日丁丑、園韓神祭也、但今月有三丑、件祭須用春日祭後丑、而偏案中丑、至今日、仍左大臣宣、仰神祇官人、令進過狀、又外記官須諸司難怠申行也、同以懈怠可勘誡、然而非一人事、仍優免、

應和二年依內侍不候、以女史為代、

仁壽元、大嘗宮內共申血鼻穢、仍以內舍人為代、

〔年中行事秘抄十一月〕中丑日園韓神祭事（用新嘗會前丑）

新嘗會後園韓神祭例

延長元年十一月十三日癸丑、園韓神祭、依犬死穢延引、十五日乙卯、新嘗會也、十六日丙辰、豐明、廿五日乙丑、園韓神祭、

〔年中行事抄十一月〕中丑日園幷韓神祭事（用新嘗會後丑）

若有二丑、下丑行之、但一日當寅卯之時、尙以上丑可用也、一日當寅、十二日行園祭、十四日行新嘗祭、定例也、（永承四年、天永三年、）

園韓神祭者、春日祭後丑也、而春日祭延引之時、猶可用式日之由度々被宣下之、

〔儀式一〕園幷韓神祭儀（二月春日祭後丑、十一月新嘗會前丑）

其日早朝、神祇官率神部卜部炊女等、向於神院、掃部寮鋪設、神祇官立高机於神殿前、（園神在南、韓神在北、其立机先南後北、）內侍就座、（二月戌一刻、十一月酉三刻、）次大臣就座、次諸司依次就座、神祇官供神饌、訖神部二人執賢木、建於庭中、卽燃庭火、于時大臣喚召使二聲、召使稱唯就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣喚治部省、召使稱唯、差退喚之、省丞一人稱唯就版、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣率歌人參來、丞稱唯、率雅樂寮幷歌人歌女等就座、訖大臣喚召使二聲、召使稱唯就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣、神御

馬將參、共稱唯牽神馬入、訖大臣喚召使、召使稱唯就版、大臣問阿誰、召使稱姓名、大臣宣喚大藏省、召使稱唯出外門、差退喚之、省丞一人稱唯就版、大臣問阿誰、丞稱官姓名、大臣宣賜鬘木綿、丞稱唯退出、即容木綿於筥、相率而入、先賜神祇官人、訖丞賜參議已上、錄賜五位已上、次史生賜諸司判官已下召使已上、次藏部賜諸司史生已下歌女已上、並拍手受之、（主典已上安藝木綿、自餘凡木綿、）訖御巫先進再拜兩段、神祇官共拜、御巫徹聲宣祝詞、再拜如初、御巫拍手兩段、次神馬退出、訖神祇副（若無副則祐代之）喚琴師名、二人共稱唯、次喚笛工名、二人共稱唯、命云、琴笛相和、（詞云、美許止仁布江安波世、）四人共稱唯、笛工先吹笛一成、次調琴聲、始奏歌舞、訖御神子先廻庭火、供湯立舞、次神部八人共舞、訖移北神殿供祭、其儀同南殿、訖更歸南殿、副喚琴師名、二人共稱唯、命云、變調琴聲、共稱唯、始奏歌笛、祐已上和舞、次宮內丞一人、次侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人舞、訖辨大夫喚官掌二聲、官掌稱唯就版、辨大夫問阿誰、官掌稱姓名、辨大夫命喚宮內省、官掌稱唯出外門、差退喚之二聲、錄稱唯趨入就版、辨大夫問阿誰、錄稱官姓名、辨大夫命、御飯早速令賜、錄稱唯、退喚膳部二聲、膳部五六人共稱唯、錄仰云、御飯賜之、膳部共稱唯、大膳進屬已下共起、先賜神祇官、次大臣已下、訖屬趨入就版、申云御飯賜了、神祇官拍手三段、（先稱唯後）酒盃三行、了拍手一段、大臣已下以次退出、神祇官率御巫物忌神部等歌舞、即調神樂於兩神殿前、造酒司史生酒部等、候進朝神樂料酒一缶、主殿寮殿部等、供庭燎、事了退出、

〔九條年中行事　二月〕上丑日園并韓神祭事（若有三丑者用中丑、或用春日祭後丑日、）

所司供設、及神祇官調神御食、畢大臣若參議已上著座、神祇官獻御食、畢上喚召使二聲、稱唯就版位、宣誰也、召使申姓名、上宣召治部省、召使稱唯、出外門召治部省、判官一人稱唯就版位、上宣誰也、申姓名、上宣率來歌人、稱唯率歌人幷歌女等著座、畢上喚召使、召使稱唯就版位、上宣誰也、召使申姓名、上宣召左右馬寮、召使稱唯、出外門召左右馬寮、判官各一人稱唯就版位、上宣誰也、各申官姓名、上宣率來神御馬、稱唯率神馬、畢上喚召使、稱唯就版位、上宣誰也、召使申姓名、上宣召大藏省、召使稱唯、出外

門、召大藏省、判官一人稱唯就版位、上宣、誰也、申姓名、上宣、給穀木綿、稱唯賜了、神祇官始行神態、次辨大夫喚官掌、官掌稱唯就版位、大夫宣、誰也、官掌申姓名、大夫宣、召宮內省、官掌稱唯、出外門召宮內省、判官一人稱唯就版位、大夫宣、誰也、官人申姓名、大夫宣、御飯早速令給、稱唯召膳部給之、行盃之後打手而退出、

〔北山抄二一月〕中丑日園韓神祭事（用春日祭後丑）

上卿入自宮內省南門、著神院北屋座、（西第三間南面、辨以下侍從內舍人等著件座、）神祇官獻供神物、（內侍女孺人不仕、如例、）次發絲竹音、迎山人、（院南門內設座）左右衞士山人申畢、取新置南北炬火屋、次上召召使二聲、稱唯參入、上宣、阿誰、召使申職姓名、上宣、治部省召、丞參入、上宣、阿誰、申官姓名、上宣、歌人率來、（爲天万字古）雅樂寮歌人等著南屋座、次召召使二音、召使參入、問答如前、上宣左右馬寮召、允等參入、上宣、誰、各申官姓名、上宣、神御馬率來、御馬各二匹、牽立神殿前、次召召使問答如前、仰云、大藏省召、丞參入、上宣、誰、申官姓名、上宣、穀木綿給、隨召給之、次祝師（成祝云、御巫子、）申祝詞、上卿以下拍手、次引廻御馬七廻畢引出、次神遊御巫舞、畢神部等拝神寶舞廻、次度北神殿、神遊如先、畢又就南、大膳職羞饌、造酒司獻盃、（術置盃於酒饌、上卿令史勸、辨侍從等史生給、外記以下、）所司敷倭舞座、次倭舞、（先神祇官、次本官丞、侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人、）次辨召官掌、令召宮內省、仰御飯事、大膳官人申給畢之由、上卿以下分散、

天慶二年二月十七日、外記貞周云、今日祭參議以上、皆悉有障不參云々、依大原野祭無上行例、可行之由仰畢、貞周申告治部卿令參事、是任意招取有病老卿也、（貞御記〇天慶以下、又見年中行事抄、）

〔江家次第五二月〕園幷韓神祭（中丑日云々、若有二丑者用上丑、）

二月用春日祭後丑、十一月用新嘗會前丑、上卿以下著座、（西上南面、入自南門、）第三間（上卿）第四間（辨）第五以東（上官）外記申代官、神祇官獻供神物、（內侍女孺人等參進、）先供南、（神殿）次供北、（神殿）次發絲竹音、迎山人、左右衞士山人申畢、取新置南北炬屋、（主殿寮儲置之、）

次上卿召召使、稱唯參入、(上問誰、)召使稱官姓名、上宣治部省召、稱唯出召之、省丞參立、(上問誰、)省丞稱官姓名、上宣歌人將來、省丞稱唯退出、率歌人歌女等著南座、次上召召使、召使參進、(問答如前、)上宣左右乃馬寮召、稱唯出召之、兩馬允等參入、上宣(誰、)允稱官姓名、上宣御馬將來、稱唯出、率御馬各二匹、率立神殿前、次上宣召使、稱唯參進、(問答如前、)上宣大藏省召、省丞參入、上宣誰、省丞稱職姓名、上宣緩木綿給、省丞稱唯退出、更參入獻木綿、(上以下取之、纏冠巾子、)

次南祝師申祝詞、上卿以下拍手三段、

次馬寮引廻御馬、廻畢退出、

次神祇官歌遊御巫舞、先於南殿幔中舞、次出舞、

次神部四人、持神寶舞退、榊桙弓劒等也、

次御巫子舞北、次神部四人持神寶舞、畢就南、

大膳職羞膳、

造酒司獻盃、(三獻、)佑置盃於酒臺獻上卿、令史勸辨幷五位、史生給外記以下、所司鋪倭舞座、

次倭舞、先神祇官人、次本省丞、次侍從二人、次內舍人二人、次大舍人二人

次辨召官掌、次官掌參入、辨問(誰、)官掌稱職姓名、辨宣、宮乃內乃省召、稱唯出召之、

次宮內丞參入、辨問(誰、)丞稱職姓名、辨宣、御飯早速給、稱唯出仰之、

次大膳職出、申御飯加多良加(留)給畢、

次上卿以下退出、

〔延喜式十一太政官〕凡春日、大原野、園韓神、平野祭、辨、外記、史、左右史生、官掌各一人、參祭所行事、

凡園幷韓神祭二月春日祭後丑、十一月新嘗會前丑、參議以上一人參、(事見儀式、)

〔延喜式十三大舍人〕凡鎭魂、園韓神、平野等祭、官人一人、史生一人、率舍人能和舞者四人參之、

〔延喜式二十一雅樂〕凡園韓神、平野等祭、○中略省丞、錄各一人、率允、屬各一人、歌人歌女等供奉、

〔延喜式三十大藏〕二月十一月園韓神祭懸幔、又所須雜料、安藝木綿二斤、(五位已上料)凡木綿四斤、(六位以下料)丞率馬官依例班給、

〔延喜式三十一宮內〕凡○中略園韓神、平野、鎭魂祭等日、辨官令官掌召省、錄稱唯進就版位、卽宣令給食、錄稱唯差退、唱膳部二聲、膳部稱唯、錄宣給食、卽給僎行酒、

凡○中略園韓神祭、丞已上一人與諸司共和舞、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡平野夏冬祭、樓飼馬四匹、○中略園韓神祭二匹、白鑪人匹別馬部二人、每祭官人一人、率馬醫供奉、其馬祭畢、並還本寮、

〔延喜式四一四時祭〕園幷韓神三座祭(園神一座韓神二座)

五色帛各八尺、夾纈帛、紫帛、紫纈帛、緋帛、淺綠帛、赤練帛各四尺、帛二丈、練絲二兩、細布四丈、商布二段、安藝木綿一斤、凡木綿八斤、錢一貫文、鈴四口、五色玉一百枚、紙卅張、米二斗、糯米二斗、大豆小豆各五升、酒一斗二升、油二升、橘子一百八十顆、筥二合、荒筥八合、食薦四枚、缶堝各十口、椀四口、鉼六口、杯卅口、酒臺六具、盤四口、匏四柄、柏九十把、炭四籠、薪二擔半、置簀四枚、(已上神祭料)五色帛各三尺、(韓神樂料)五色帛各一丈二尺、絁一匹、縹帛四尺、絲二約八兩、綿二屯、五色薄絁各二丈、調布一端、洗布二丈、商布四段、凡木綿四斤、麻二斤、紙卅張、色紙卅張、錢八百文、鍬四口、稻八束、(神祇官所充)米一斗、酒一斗二升、糯一斗、鹽二顆、杯十口、鉼二口、合盛饊四籠、黃蘗卅枚、柏廿把、(已下解除料)黑米一石、白米五斗、絁一匹、錢五百十二文、(已上園神祭料)飯五斗六升、酒一斗八升、(已上神部八人、卜部二人、神山人十人料、)

齋服料

物忌二人、別夾纈帛、淺綠帛各三丈、絁一匹二丈五尺、帛一匹五丈六尺五寸、長裙一腰、帶一條、縹帛二丈四尺、緋帛一丈五尺、紫絲二兩、綿四屯、東絁三尺五寸、履一兩、紅花五兩、支子五升、御巫一人、絁一匹、

淺綠帛一匹、綿二屯、表裙一腰、物忌御巫別綠絁一匹、備供神物、女孺一人絁一匹、綿二屯、調布一端、表裙一腰、女丁二人、別調布二丈一尺、紺布二丈一尺、細布五尺、神祇官人當色一領、彈琴二人、別黃帛三丈六尺、帛三丈六尺、綿三屯、卜部二人、別調布二丈七尺、膳部八人、別調布二丈七尺、紅花二兩、守神殿一人、商布一段、

右春二月、冬十一月丑日祭之、（春用春日祭後丑、冬新嘗祭前丑、）參議已上一人就祭所行事、其內侍到來乃始祭之、

但雜給料所司各供備之、（見雜式）

〔延喜式三十二大膳〕園韓神祭雜給料（春冬並同）

白米二斗、糯米四斗、小麥一斗二升、大豆小豆各一斗九升、胡麻子七升二合、酢一斗、㽵酒一斗、醬六升、鹽二斗、胡麻油八升二合、東鰒、隱岐鰒、烏賊各十六斤、縄貫鰒、佐渡鰒、堅魚各十四斤、熬海鼠、腊、干蛸各十二斤、煮堅魚十一斤、雜腊卅斤、鮨五十斤、雜鮨三缶、堅魚煮汁一升四合、海藻廿三斤、芥子一升四合、饌案六脚、覆敷料曝布十二條、（覆長各六尺、敷長各五尺、）折櫃六十合、敷料調布六十條、（各長三尺）大筥六十合、片盤卅八口、（案別八口）片椀十二口、（案別二口）窪坏二百四口、（案別四口、折櫃別三口、）㽵坏二百七十六口、（案別六口、折櫃別四口、）平坏三百六十口、（折櫃別六口）瓫六口、堝五口、食薦五十枚、弓弦葉五擔、蒜一斗、葱二斗、蘿蔔五十把、芹六斗、萵苣五斗、芸薹二斗、胡蒜五升、蘭十把、蔓菁六斗、葵二斗、（已上十種、內膳司所進、）筋竹卌株、（山城國所進）鮮魚充直、（鮮魚、菓子、直布六端、自餘諸祭同料不注、）（布數、皆效此、）糖八升、松明八十把、炭二斛、薪三百六十斤、（松明以下直）官人當色一領、膳部六人明衣佐渡布、人別二丈一尺、

〔延喜式三十五大炊〕園韓神祭料（夏冬亦同）

稻八束、（受神祇官）雜給米二斛六斗二升八合、（饗飯五斗、平飯五石八斗二升料、）土埦六合、（加盤）鋺形六十口、柏卅把、薪百五十斤、

〔延喜式三十六主殿〕園韓神祭料

油二升、油𤮾一口、燈盞八口、燈炷布二寸、

〔延喜式三十九内膳〕諸祭雜菜（春秋並同）

園韓神祭三斛（中略）色目見大膳式、

〔延喜式四十造酒〕園韓神祭料（春冬同）

酒二石、絁三尺、（瓫三插料）細布二尺、（酒壺二具拆敷料）調布三丈六尺、（一丈四尺、缶七口覆料、二丈二尺、机二前覆并拆敷料）坩二合、缶七口、

酒坏二合、（盛御酒料）瓫坏卅口、盤卅口、瓮四口、八足机二前、（一前五位已上料、一前命婦料）匏七柄、黑葛三斤、（缶結料）

〔延喜式四十主水〕園韓神祭料（春冬並同）

蘖料米四升、高盤四口、土椀四合、陶椀六合、瓮四口、布篩一口、（四尺）匏二柄、炭五斗、

右（中略）〇官人一人率水部二人及仕丁等向祭所供事、

〔神祇官年中行事二月〕園韓神祭

祭以諸奏長官加署付官、卜部長者沙汰、

〔延喜式三十八掃部〕凡園幷韓神春祭、宮內省神院南方舍西第一間設内侍已下御神子等座、次西一間北上神祇官、治部省、雅樂寮、幷御琴師、歌人等座、南壁下北面西上歌女座、北舍西第一間設御神子座、第二間北邊南面東上御琴師座、北廂歌人座、第三間南面西上公卿座、其東五位已上座、公卿座後、外記、史、中務丞、錄、內舍人、大舍人等座、外記、史座後、太政官幷諸司、史生已下座、冬祭亦同、

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月廿日丁丑、停園韓神祭、

〇按ズルニ、此年八月文德天皇崩ジタマヒ天下諒闇ナルニ由テ、停止セラレタルナラン、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月十四日乙丑、園韓兩神祭如常、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年二月七日癸丑、園韓神祭、公卿向宮內省奉祭如常、

〔三代實錄二十清和〕貞觀十三年十一月十七日己丑、停園韓神祭、

○按ズルニ、此年九月七日太皇太后順子崩ジタマヒシニ由テ、停止セラシレナラン、

〔三代實錄 二十五 清和〕貞觀十六年二月十五日乙巳、欲修鎭魂祭、而十二日皇太后宮犬死、今日內裏犬產、神祇官卜云、園韓神今年春秋不祠、仍成祟、

〔三代實錄 二十六 清和〕貞觀十六年十一月十六日辛丑、先是十月二十七日、木工寮史生出雲嶋成死、喪家人入寮、寮官人參入內裏、由是○中略園韓神、鎭魂等諸祭皆從停廢、大祓於建禮門前、

〔三代實錄 二十七 清和〕貞觀十七年二月廿三日丁丑、停園韓神祭、　廿五日己卯、向上諸祀並所以停者、以冷然院火、幷救火人燒死也、

〔三代實錄 三十七 陽成〕元慶四年二月十七日辛丑、內裏犬產之穢、延及所司、仍停園韓神祭、

〔三代實錄 三十九 陽成〕元慶五年二月十一日己丑、是夜園韓神祭如常、不歌緣諒闇也、

〔日本紀略 一 醍醐〕延喜二年二月十二日己丑、止園韓神祭、依宮內省穢也、

〔扶桑略記 二十五 裏書〕承平元年二月十三日辛丑、園韓神祭依穢疑停、

〔日本紀略 二 朱雀〕承平六年二月十八日丁丑、園韓神祭有三丑之月、可用春日祭後丑、而案○案恐定誤中丑用今日、仍神祇官人進過怠、

〔日本紀略 四 村上〕康保二年十一月十一日丁丑、園韓神祭延引、依宮內省犬死穢也、

〔日本紀略 五 冷泉〕安和元年二月十二日乙丑、園韓神祭延引、依上卿不參也、可用次丑之由被宣下、　廿四日丁丑、園韓神祭、

〔日本紀略 六 圓融〕天祿二年二月十一日丁丑、園韓神祭、左少辨菅輔正爲上卿行事、天延元年十一月十五日乙丑、園韓神祭、以權左中辨菅原輔正爲上卿代、

〔日本紀略 七 圓融〕天元五年二月廿六日己丑、園韓神祭式日、依內裏穢延引、

〔日本紀略 十一 一條〕長保三年十一月十九日丙戌、大原野園韓神祭等可停止者、

○按ズルニ、此月十八日內裏燒亡アリ、コレニ依テ停止セラレシナラン、

〔日本紀略 十一條〕寬弘五年二月十日辛丑、園韓神祭延引、

○按ズルニ、此月八日花山天皇崩御アリ、コレニ依テ延引セラレシナラン、

〔日本紀略 十一條〕寬弘六年十一月十四日乙丑、園韓神祭、權中納言賴通參神祇官行之、

〔日本紀略 十二條〕寬弘八年十一月廿日己丑、園韓神祭停止、

○按ズルニ、此年十月廿四日冷泉天皇崩御アリ、コレニ依テ停止セラレシナラン、

〔小右記〕長和五年二月十三日戊子、召使申云、外記元規令申云、明日園韓神祭分配可參給者、令仰云、左大將分配也、外記所令申甚以荒涼、少還歸來云、外記文任令申云、左大將被申障、仍從下臈次第所令申上也、仰有所勞由了、召使所申初稱元規仰、後申文任仰、　十四日己丑、早旦外記文任來云、昨日召使申誤也、所申太多、

〔左經記〕長元元年十一月十一日辛丑、及晚景、(中略)○著園韓神祭所、及深夜右武衞被參入、(依新宰相障、加所參著云、)行事以大膳進從五位下廣遠朝臣、爲大藏宮內等省丞幷造酒佑等、以內舍人敦高、爲左右馬允代、事畢上下分散、　八年二月十日乙丑、左少辨參園韓神祭云々、衰國之後末、行公事、雖忌欠日、依爲分配所參入云々、

〔康平記〕康平三年二月六日乙丑、存可有園韓神祭由、諸司參入、而有三丑、可用中丑由有議定、外記俊光參入令申事由、可從先例者、後聞之延引云云、

〔中右記〕寬治八年二月廿三日乙丑、早旦參內、終日祗候御前、入夜權左中辨基綱朝臣參仕被奏云、今日園韓神祭分配也、仍向宮內省處、上卿幷家侍不參來、仍爲相尋所參內也者、被仰云、式日已延引、其後不知何日、仍今朝山座主參御前、重服姬者月水女房濟々候御前、行事辨幷藏人宗佐子、不尋奏、奇怪第一也、頗有勘責、依道理无所陳申、但假候禁中、掌侍高階業子依仰向宮內省、重服ノ房等只今

被出陣外、及曉更業子還參云、上卿不參、及雞鳴右大辨纔參仕、如形次第事了、

康和四年二月十六日、今日園韓神祭、左大辨依仰參勤之、依神事今日法王〈○白河〉御他所也、行幸〈○堀河〉以後、法王又還御高松也、

嘉承二年二月八日、晚頭參殿下、〈○藤原師通〉入夜歸家、付寢之間召使來催云、今夜園韓神祭、本分配左衞門督俄被申障、他公卿雖相催不被參、有殊仰件祭主上卿可令參勤者、雖及深更申承了由出立、〈網代東、侍〉〈隨三人相具、〉到郁芳門下、從〈○從下恐脫車字〉下入從宮內省南門、〈件門額倒、只礎石許也、〉著座、〈南面四上、此舍又無實、仍立幄、右少辨實光、外記師安、史孝廣、〉〈官掌等在座、〉內侍在車、〈不下云々〉次供神物了、山人向歌笛、主殿炬火、予〈○藤原宗忠〉召召使、〈二聲〉召使參、予問云誰、稱姓名、予仰云、治ムル省サ召セ、召使召之、次省丞參、予問云誰ソ、稱姓名、予仰云、歌人率來、次歌人著、次召召使、〈二聲〉召使參、又問稱姓名、次仰云、左右ノ馬寮召セ、召使召之、左右馬允參、予問云誰、各稱名、予仰云、御馬率來、次牽立神馬於前庭、次予又召召使、召使參、問之又稱之、予仰云、大藏省召、召使出召、次省官參、又問、稱姓名、予仰云、緩木綿給へ、次省官持來木綿、取之結冠巾子、〈辨以下各如此〉次祝師詞了、次拍手、次廻御馬、〈七廻引出〉了神祇官歌遊、御神巫子舞廻、神部四人持神寶舞廻、大膳居膳、造酒司獻盃、〈三度不舞人〉敢倭舞座、倭舞內舍人大舍人舞之、次右少辨召官掌、〈吉行參來〉問之、稱姓名、仰云、宮乃內省召、官掌出召、省丞參入、又問、稱姓名、辨仰云、御飯堅ヲカニ給、稱唯了、仰大膳官人、官人申給了由、其後退出、

天永二年二月八日、依分配勤園韓神祭、右少辨實光、外記政綱、史佐忠參入、內侍遲來之間及夜、深更相催之處、肥後內侍來、代官申事尋外記之處、政綱申云、以召使欲申代官、大奇怪也、政綱大略不堪申上相構歟、仍追止了、此外次第如例、亥刻歸家、

大治二年十一月十五日辛丑、園韓神祭俄延引、宮內省中死人頭見付也、次丑日可被行云々、　廿七日癸丑、今夕被行園韓神祭云々、師賴相公、右少辨宗成參勤云々、

〔長秋記〕大治五年十一月十四日癸丑、著園韓神祭、任中納言後始奉事也、〈○中略〉喚使來催云、可著新嘗

祭、下官丙合也、乙卜合人人多、何可催丙合哉、加之所勞更發比也、今夜著園韓神祭、明後日著神官者、彌病增、於命可有其恐也、仍申所勞由畢、入夜著宮内省、入自南門之間、召使二人來向先行呵叱、主殿寮者擧火、經南舍東二間、著北面、召使等褰西第二間、入自是經座東至座北立揖居、又揖南向、左中辨師俊朝臣在同三間座、下官〇源師時云、如舊日記、上卿座可在第三間歟、辨云、然者可改直歟、予云、先年著此事奉行時、如今夜第二間、若所司存此旨歟、相尋後年可被改直也、次召外記問諸司具否、申皆具云云、依始行不令申代官、次問供神物具否於辨、被申具由、問内侍參否、已參云々、次供神物、次申祝、予仰辨云、於祝詞不可申歟、仍止畢、仰辨令迎山人、發歌笛迎之、衞士等持新盤炬火屋、次召召使二音、參後問籍畢、仰云、治司召ヽヽ、召使稱唯退出、召治部二音、治部參、又問籍、上宜歌人キチマ字コ、治部歸本、雅樂歌人著南舍、次召左右馬寮仰云、御馬持來、左右御馬各二匹引立南舍間、左二匹西、次右二匹北、其西向也、次召大藏省仰云、椴木綿給へ、大藏省進椴木綿、予以下被之結冠巾子、此後令申祝、事畢下官拍手、辨以下不打手、不知故實歟、次廻御馬、南北兩社間有樹、廻其木也、七匝畢引出畢、次御神樂、御巫子不舞、仍仰可舞之由、次神部等棒神寶廻南社、巫子被抱人立先廻、近來於南社神樂、於北舍无此事、下官令辨於北舍又令神遊、令廻神寶如先、事畢歸南舍、次大膳羞膳、造酒司獻盃、次和舞畢、辨召官掌、令召宮内省仰云、オモノカタラカニ給へ、官人稱唯退出、此後上卿出歸家、召使等給祿、見參三人、然而給十人料引絹十匹也、相加官掌料給也、又十一人料米二石二斗饗料也、今夜給下文、限後日又請取也、召使十人官掌一人料、

〔中右記〕天承二年二月十五日丁丑、今夜園韓神祭也、上卿右衞門督實能卿、右中辨宗成參仕云々、春日祭上申日依世間丙穢延引、春日祭來廿二日也、然者可用其後丑歟、有沙汰被勘例處、外記申云、春日祭上申日雖延引、園祭猶用本丑例年歟、勘□□□□□丑之由見式文也、雖然上申日春日祭延引之時、猶用本丑之由、外記勘申也、

長承元年十一月廿日、今日園韓神祭、右兵衞督顯頼、(別作前)行(一本)左少辨公行勤之、中時許舞師給例祿、以車從了、　二年二月十五日、今夕園韓神祭、右宰相中將成通、右少辨俊雅參勤云々、

〔兵範記〕仁安元年十一月十三日癸丑、今夜園韓神祭、上卿左兵衞督實國、權右少辨爲親奉行、　四年〇嘉應元年二月十四日辛丑、今日園韓神祭、參議親範卿、右中辨長方朝臣參向奉行了、

〔吉記〕承安四年二月八日乙丑、今日園韓神祭也、上卿左大辨〇藤原實綱右中丞重方朝臣□之、神殿前度顚倒之後、近年被用幄、而雨儀依不可叶、南門敷上卿已下座、外記擁笠候築垣外、如忘隄防、无他路之間、上卿已下引入神馬之時、被起座云々、希有事也、

壽永元年二月十二日癸丑、今日園韓神祭也、可參行之由一日來催、然而不令勤氏社、可〇可上恐脱不字爲神態、仍難參勤之由答了、其後无音也、後聞上卿遂闕如、辨行之、

〔花園院御記〕正和三年二月十一日乙丑、此日園幷韓神祭矣、掌侍三善行子參內、內侍所供物、丹波國役難澀之間及闕如、以別儀種々沙汰、別仰爲基朝臣令沙汰進、仍及曉更、

〔後拾遺和歌集雜十六〕資良朝臣藏人にて侍ける時、園韓神のまつりの內侍にもよほすとてみそぎすれど、この世の神はえるしなければ、そのからかみにいのらんといひて侍ける返事によめる、

ちかきだにきかぬみそぎをなにかそのからかみまでは遠く祈らん　少將內侍

〔神樂歌採物〕韓神

みしまゆふ、かたにとりかけ、かたにとりかけ、我から神のからをぎせんや、からをぎせんや、やひらでを、手にとりもちて、われから神の、からをぎせんや、からをぎせんや、

〔神樂歌入綾中〕考〇賀茂眞淵曰、からをぎ、古本に乎支(チキ)とかければ、わざをきの乎支なるべし、同書入云、宣長〇本居云、體源抄に、淸暑堂の御神樂の時に、人長が枯たる荻を持事あり、是を枯荻(カラヲギ)と云よ

し見えて、源氏物語にも、いと白う枯たる荻を、高やかにかざしてなどいへり、それをこゝは體語になして、からをぎせんやとはいへるなり、今按に此說よろし荻はよく音のする物なれば振なるべし、かの小竹葉を振と同じ心ばへなり、一首の意は、三嶋木綿を肩にとりかけ、韓神の名のわれ枯荻せんやと人長が云詞を、直にうたへるなるべし、

縫殿寮祭神

〔延喜式十四縫殿〕寮神三座夏祭冬祭准此

御匣殿神一座

五色薄絁各三尺、絹二匹、綿二屯、絲二絇、納幣明櫃一合、其絹綿等充冬祭物忌御巫冬料亦充夏祭」贖、酒二斗、饌食二缶、脚別机四前、二座幣料、二座饌食料」井內膳司供、調布一端、充二把案二丈八尺、敷置一丈四尺、祝史料、庸布二段、

縫殿神一座

木綿大八兩、酒二斗、米糯米各一斗、大豆、小豆各五升、鰒五斤、腊、乾魚、海藻各六斤、

著酒神一座

五色薄絁各二尺、木綿大一斤、鮮物直酒四斗、米三斗、糯米一斗、大豆、小豆各五升、鰒五斤、腊、乾魚、海藻各六斤、物忌童女裝束絹一匹、夏料〔紫絹三丈、調綿二屯、冬料

以上三前神、四月十一月上卯日祭、前三日受件料物、

陰陽寮守護神

〔增鏡七北野の雪〕そのころ〇文永四年大風吹て、人々の家そこなはれうする事數しらぬ中に、〇中略陰陽寮の守護神の社もまろびぬ、

織部司祭神

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年閏十月廿三日己酉、是日授織部司正六位上辰巳隅神、戌亥隅神、並從五位下、

〔延喜式三十織部〕七月七日織女祭

五色薄絁各一尺、木綿八兩紙廿張、米酒、小麥各一斗、鹽一升、鰒、堅魚、腊各一斤、海藻二斤、土椀十六口、

加盤坏十口、席二枚、食薦二枚、錢卅文、

右料物請諸司辨備、造棚三基、二基司家料、一基臨時所料、一祭官一人、祭郎一人、供事祭所、祭郎先以供神物次第列棚上、祭官稱再拜、祝詞訖亦稱再拜、次稱禮畢、

〔延喜式九神名〕大膳職坐神三座並小

御食津神社　火雷神社

高倍神社

〔本朝月令六月〕朔日內膳司供忌火御飯事

高橋氏文云、挂畏卷向日代宮御宇大足彥忍代別天皇○景行五十三年癸亥八月、詔群卿曰、朕顧愛子、何日止乎、欲巡狩小碓王又名倭武王所平之國、是月行幸於伊勢、轉入東國、冬十月、到于上總國安房浮島宮、○中略是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉天、若湯坐等始祖意富賣布連之子、豐日連乎令火鑽天、此乎忌火止爲、伊波比由麻閉天供御食、幷大八洲爾像天八乎止古、八乎止咩定天、神齋大嘗等仕奉始支、但云安房大神爲御食神者、今大膳職祭神也、今令鑽忌火大伴造者、物部豐日連之後也、

〔年中行事秘抄十一月〕中辰日豐明節會

高橋氏文云、六雁命、七十二年秋蕘、天皇○景行宣命云、十一月新嘗會毛膳職御膳ノ事毛六雁命ノ勞始成流所ナリ、是以六雁命御魂乎膳職爾伊波比奉天、春秋永世ノ神財ト仕奉志女牟、

〔山城志一京師〕大膳職坐神三座、昔在中御門南、大宮西、社廢、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授大膳職正四位上御食津神從三位、　三月廿日丙子、授大膳職醬院無位高倍神從五位下、

〔延喜式三十大膳〕御膳神八座

五色薄絁各五尺、倭文二尺、木綿、麻各八兩、鍬二口、白米五斗、糯米二斗、大豆、小豆各五升、酒二斗、鹽一

升、東鰒十二斤、嶋鰒、熬海鼠、螭、雜腊各六斤、堅魚九斤、雜鮨六十斤、海菜十二斤、食薦四枚、祝史料庸布二段、

膳院高部神一座

竈神四座

五色薄絁各二尺、倭文一尺、木綿、麻各八兩、緋帛五尺、蓋料鍬一口、白米三斗、糯米一斗、大豆、小豆各三升、酒一斗、鹽六升、雜鰒二斤、堅魚、熬海鼠、腊各六斤、雜鮨十六斤、煮鹽年魚十二斤、海藻四斤、祝史料商布二段、

菓餅所火雷神一座

五色薄絁各三尺、倭文一尺、木綿、麻各八兩、鍬一口、白米三斗、糯米一斗、大豆、小豆各三升、酒一斗、鹽六升、雜鰒二斤、鰹魚、雜腊各六升、雜鮨十一斤、海藻四斤、祝史料商布二段、

竈神四座

五色薄絁各三尺、倭文二尺、木綿、麻各八兩四分、鍬四口、白米二斗、糯米一斗、大豆、小豆各二斤、酒一斗、鹽四升、雜鰒二斤、鰹魚、腊各六斤、鮨五斤、海藻四斤、

右四祭春料依前件、秋亦准此、但御膳神二月十一月上酉日祭之、

大炊寮祭神

〔文德實錄七〕齊衡二年十二月丙子朔、大炊寮大八嶋竈神、竈火武主比命、庭火皇神、並授從五位下、

○按ズルニ、本書是ヨリ後、天安元年四月癸酉ノ下ニモ亦、有勅大炊寮大八嶋竈神、內膳司忌火庭火神、並授從五位下トアリ、兩者必ズ一誤アラン、記シテ參考ニ供ス、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授大炊寮從五位下○大炊以下七字、依一本補、大八嶋竈神、入前竈火武主比命神、並從五位上、

〔延喜式三十五大炊〕竈神八座

五色薄絁各四尺、商布八段、鍬八口、木綿八兩、麻一斤、東鰒三斤、猪宍、雜腊、堅魚、海藻各二斤八兩、鹽一升六合、米酒各八升、稻八束、〈但稻請二神祇官一〉

右春祭料依二前件一、冬祭准レ此、

〔日本書紀 二十七 天智〕十年、是歳大炊省有二八鼎鳴一、或一鼎鳴、或二、或三俱鳴、或八俱鳴、

〔竹取物語〕人申やう、大炊づかさのいひかしぐ屋の棟に、つくの穴ごとにつばくらめは巣をくひ侍る、それにまめならんをのこどもをゐてまかりて、あぐらをゆひかけてうかゞはせんに、そこらのつばくらめ子をうまざらんやは、さてこそとらしめたまはめと申、中納言よろこびたまひて、○中略 われのぼりてさぐらんとのたまひて籠に入てつられのぼりて、○中略 さぐりたまふに、ひらめる物さわりける時、われ物にぎりたり、今はおろしてよ、おきなしえたりとのたまひて、集りてとくおろさんとて綱を引すぐして綱たゆる時に、八嶋のかなへの上にのけざまにおちたまへり、

〔百練抄 十六 後深草〕寶治二年閏十二月廿二日乙丑、近日大炊寮釜破離云々、仍奏二聞事由一、任レ例召二土產國一云々、

主殿寮祭神

〔延喜式 三十六 主殿〕神廿三座、〈寮家四座、釜殿三座、松山三座、炭山十三座、〉

五色薄絁各五尺、倭文三尺、木綿三斤、麻二斤、鍬五口、酒三斗、飯一斛、米四斗、糯米二斗、大豆四升、鹽一斗五升、鰒、堅魚各一籠、腊三籠、雜鮨一缶、海藻四籠、滓醬二斗、糟四斗、食薦四枚、柏一俵、商布五段、〈並用二寮物一〉

〈但釜殿神料、自二内藏寮一請之、〉

右春祭料依二前件一、秋祭准レ此、

内膳司祭神

〔文德實錄 九〕天安元年四月癸酉、有レ勅、○中略 内膳司忌火庭火神並授二從五位下一、

〔三代實錄 二 清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉レ授二内膳司從五位下庭火皇神從五位上一、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年正月廿六日丁卯、授内膳司從五位上庭火皇神從四位下、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年七月八日辛丑、授内膳司從四位下庭火神從四位上、

〔日本紀略四村上〕康保三年八月廿六日戊午、授内膳司正四位下庭火神從三位、

〔享祿本類聚三代格十〕供御事

口榛進納、内膳司所司卽採物別其表、而召阿房之刀自部、令祀膳神、但春秋之祀物者、臨時取口口淨物依恒數宛行、自今以後永爲恒例、

天平三年九月十二日

〔延喜式十六陰陽〕庭火井平野竈神祭(並内膳司)

神座十二前(各六前)

名香二兩、紙六十張、布一丈六尺、黍稷飯各一斗二升、酒二斗、鯉魚四隻、乾魚鮓各二斤、東鰒二斤、堅魚六斤、豉鹽各二升、赤白餅各卅六枚、棗栗各二升、糯米烏穀各二斗、垸十二口、坏卅口、盤卅口、折櫃六合、桶一口、杓二柄、缶一口、中取一脚、柏六把、炭五斗、松明廿把、席四枚、食薦八枚、淨衣六具、(料布六段)巾二條、

祿酒料錢一貫文、

右毎月癸日之中、擇其吉日祭、(若當忌日避之)其料物者、前祭申省、省移所司請受、

〔中右記〕嘉保元年正月十一日、裏書、御竈神事、

長德三年三月廿一日、藏人信經私記云、今日雨降、又遣召宮主令奉御祓、(御厨子所井内膳司)仰詞云、陰陽寮依例奉仕癸御祭、而月來之間、奉仕之勤不如法也、此由所不知食也、癸日者御膳非例、仍令占申之處御竈神祟之奉致者、此由可祓申者、藏信奉宣旨、向彼司奉仕御祓、返參令奏聞云々、内膳司御竈神三所也、一所平野、件癸御祭奉仕之神也、一所庭火、是尋常御飯奉仕之神也、一所忌火、三神也、是則十一月新嘗祭、六月神今食祭奉仕之神也、而癸御祭不如法之由、欲祓申之處、件平野神無所在、仍召聞司官

人、申云、件神圓融院御時、爲人所盜取、（依件神事□□朝臣被除籍云々、）奉改以後、納置内膳御戸宅内、是有事危之上、依無神殿也者、因之月來於庭火神御前、奉仕件癸御祭云々、是尤乖舊規、則奏聞事由、宣旨云、隨兼信所申之旨、如舊跡可令奉仕者、仍召修理職官人等、仰造立神殿之日時了、昨日依左大臣仰、召宮主兼信、奉仕御祓、（御厨子所）

件記從治部卿許、（遍痛）後借得て書付也、

〔延喜式二 四時祭〕毎月朔日忌火庭火祭（中宮東宮庭火准此、但忌火不祭、）

五色薄絁各四尺、倭文二尺、木綿四兩、麻大四兩、庸布二段、鍬四口、米、酒各四升、鰒、堅魚各二斤、腊四升、海藻二斤、鹽二升、瓼二口、坏四口、永瓮二口、

右宮主於内膳司行事、但東宮於主膳監行之、

〔中右記〕大治五年三月朔日癸卯、入夜中宮權大進有業送書云、忌火庭（○庭下恐脱火字）祭、毎月朔日可被祭、而今日宮（○崇徳后聖子）御衰日也、初度可有憚歟由宮主申云、初度以吉日可被行、於次之者、不可嫌善惡日者、如宮主申状、以吉日可被行歟、將又雖御衰日、付朔日可被祭歟、可尋申由御氣色候也、予申云、御衰日可有憚也、尤後日以吉日可被祭也、

○按ズルニ、前文延喜式ニ、中宮東宮准此、忌火不祭トアリ、本文忌火ノ二字、式ト合ハズ、

〔延喜式一 四時祭〕六月祭

忌火庭火祭（中宮准此）

五色帛各四尺、絁二匹、倭文四尺、木綿麻各二斤、絲二絇、綿二屯、布二端、庸布二段、鍬四口、米、酒、鹽各二斗、鰒、堅魚、腊、海藻各二斤、食薦二枚、坏八口、匏二柄、槲十把、

右大殿祭畢、宮主於内膳司行事、

○按ズルニ、本文ハ、本書供神今食料ノ下、供神今食御巫等裝束ノ上ニアリ、蓋神今食ニ就キテ

ノ忌火庭火祭ナラン、

〔續日本紀〕（十一聖武）天平三年正月乙亥、神祇官奏、庭火御竈四時祭祀永爲常例、

〔神祇官年中行事〕（四月）忌火庭火祭（○中略）已上件祭之幣物等以本官請奏、兼日付官請之、本官史生持參也、件用途料知下宣旨、近代無其沙汰歟、

〔延喜式〕（三臨時祭）御井幷御竈祭

五色薄絁各三尺、倭文一尺、木綿三兩、麻二兩、鍬一口、米、酒各一升、鰒、堅魚各一斤、腊一升、海藻一斤、鹽一升、瓱坏各一口、食薦一枚、柏四把、

○按ズルニ、本文ハ、本書行幸時諸祭ノ下ニアリ、行幸ニ就キテノ御井幷御竈祭ナラン、

〔延喜式〕（三臨時祭）御竈祭

五色薄絁各二尺、倭文一尺、木綿三兩、麻六兩、鍬二口、米、酒各二升、鰒一斤、堅魚二斤二兩、腊十四兩、海藻二斤二兩、鹽一升一合、坏、瓱各二口、庸布一丈四尺、

〔延喜式〕（二十三民部）凡御贖幷中宮御贖、及祭忌火、庭火、御竈神料雜物、神祇官所受、待彼官移文充之、（春宮坊、并齋院司所祭亦同、）但陰陽寮所祭者、待中務省移充之、

〔延喜式〕（三十大藏）凡御、幷中宮御贖、及祭忌火庭火御竈神、平野御竈神料雜物、神祇官所受者、待彼官移文充之、（春宮坊、并齋院司所祭亦同、）陰陽寮所受待中務省移文充之、

〔日本紀略〕（四村上）天德四年十一月廿日丙辰、此日辰時御殿鳴、巳時内膳御竈神鳴、召陰陽寮有御占、

〔日本紀略〕（七圓融）永觀元年十月一日癸未、卯刻内膳司平野庭火御竈被盜取了、　十二月廿五日丙午、内膳司平野御釜如元置本司、件釜先日被盜取畢、仍新所鑄也、

〔業資記〕寛元四年四月廿九日戊子、今夜院（○後嵯峨）始有御神祭、兼日撰吉日、仰作所奉行人知有、令立内

膳屋、主水屋同所也○中略抑竈神自御在位之時可有之、脱屣以後院司參內裏內膳屋可奉渡之、而近來公家竈神御釜無新造之儀、累代同物也、尤無四度計事歟、今依不可默止有新造也、後堀河院御時雖有此議、遂以無沙汰云々、

〔百練抄 十六後深草〕寶治二年十月廿二日乙未、內膳屋燒亡、御竈神燒損給云々、　廿四日丁酉、近日御竈神燒損、可鑄改哉否事被問諸卿云々、　閏十二月廿二日乙丑、被定內膳御竈可鑄改日時定、來廿八日云々、

〔增鏡 五內野の雪〕寶治二年十月廿日ごろ、紅葉御らんじがてら、宇治に御幸○後嵯峨したまふ、○中略此御るすの程に、二條油の小路に火いできて、閑院殿のつい垣のうちなれば內膳屋燒て、神代より傳はれる御かまも、やけそこなはれけるをぞいと淺ましき事には申侍りし、彼のかまむかしは三ありける、一をば平野、一をば忌火、一をば庭火と申けるを、圓融院の御世、永觀のころ二はうせにけり、今一のこりたるに、かゝる事いとよろしからぬわざなりとて、神祇官に尋ねられふるき事どもかんがへらる、平野といひけるを陰陽寮にすゑて、みづのとの祭といふ事に用ゐけれど、中ごろよりかの祭はたえぬ、忌火といふにては、六月十二月の御神事の御せんを調じけり、庭火にて常の御せんをばつかまつれり、かゝればいとたいぐ／＼しき事にて、はじめて鑄もじに仰せらるべしとも申、ふるきをそこなはれたる處ばかりを直さるべしかとも色々にさだめかねられたり、

〔葉黄記〕寶治二年十一月十九日、今日於殿御直廬、內膳釜燒損事有議定、○中略先見下文書、內膳司申狀、官外記勘例、官御卜形、家次定申、

〔西宮記 臨時六〕內膳御竈奉遷他所事以生絹覆上、舍人八人舁之、宮主前、除納言一人、辨外記史以下步行供奉、

〔禁秘御抄 上〕竈神

行幸他所之時、中納言以下供奉、尤可爲靈物、女房不忌之、男主上外不沐浴也、四五破、但指合用之、不

可説物也、

〔日本紀略四村上〕天德四年十一月十九日乙卯、今夜坐内膳司忌火庭火等御神、奉遷冷泉院内膳、仍權大納言師尹卿已下奉遷之、平野謂釜二口也、庭火謂鑄一口也、各有臺長櫃等、衞士持之奉移院乾方新屋、庭火平野別々屋也、安置之後、宮主申祝詞、

應和元年十一月廿日庚辰、今日亥二點、天皇自冷泉院遷御新造内裏、〇中略巳二點内膳司御竈神三所、自彼院奉渡之、中納言兼明卿供奉、

〔小右記〕長德五年七月一日、内豎來仰、可早參由、即藏人辨道方朝臣仰者、彼辨注書狀云、明日内膳御竈神奉移事可行、今日有障不可參者、且奉綸旨之由令申了、　二日、日入間參内、以藏人辨令奏事由、仰云、今日可奉移御竈神、其事可行者、召外記善言朝臣、問六衞府候不、申云、悉參入者、余問云、佐若候哉、申云、見年々日記、供奉判官以下者、此間戌一點、相率辨小納言外記史等、入自上東門、經朔平門、向内膳司、諸衞祗候、先以宮主令奉仕御祓、戌二點、其後奉迎御竈神、三所忌火、庭火、平野、天元三年日記云、至于平野不奉移、然而依度々例奉移、六衞府左右陣列、其中央奉荷御竈神、宮主奉膳典膳相從、上卿以下候後列、入自院西門、奉移院乾舍、今日着遣之了、以宮主又令御祓、

〔日本紀略十一一條〕長保元年六月十四日乙丑、亥刻内裏燒亡、　十六日丁卯、今日天皇渡御一條大宮院、

七月二日壬午、奉渡御竈神於一條院、　二年十月十一日甲寅、戌四剋天皇自一條院遷御新造内裏、〇中略中刻御竈神渡御内膳司、

〔日本紀略十一一條〕寬弘二年十一月廿七日辛未、夕天皇幷中宮〇彰子幸左大臣〇藤原道長東三條院、御竈神同奉渡之、

〇按ズルニ、此月十五日、内裏燒亡ニ依テ遷幸シタマヒシナリ、

〔小右記〕寬弘二年十一月廿七日辛未、今夜亥刻奉移御竈神、中納言隆家從其役、

〔日本紀略 十二三條〕長和四年九月廿日丁卯、天皇自左大臣藤原道長枇杷第入御前前恐於誤新造内裏、中略次御竈神奉渡之、十一月十九日乙丑、天皇自太政官遷幸枇杷第、中略御竈神自内膳司奉渡枇杷殿、

○按ズルニ、此月十七日内裏燒亡ニ依テ遷幸シタマヒシナリ、

〔日本紀略 十三後一條〕長和五年六月十日壬午、今夜賢所、御竈神、自上東門第奉渡一條院、

〔春記〕長曆四年十一月廿九日庚辰、今夜亥時奉渡御竈神、四條中納言定賴先日奉迎供奉、辨少納言諸衞尉已下供奉之云々、

〔吉記〕治承四年四月廿六日戊申、三條大納言著陣、令改勘御竈神渡御日時、直著外座、召仰權辨光雅朝臣令勘之、殿下已御退出了、仍申請内覽云々、件御竈神、去月四日遷幸定了、次同被勘日時了、而遷幸行事所、空不致沙汰之間、去九日空不渡御也、但新院御竈神折々遷御他所、猶御内膳司、依不可御同宿、予尋搜此子細、令延引也、後日渡御、長和例也、

〔山槐記〕治承四年四月廿六日戊申、今夜被奉渡御竈神於大内云々、其間作法今朝右衞門督實家被尋送、而及秉燭、花山院中納言兼雅又被相尋、若金吾辭退歟、後聞金吾雖申胸所勞之由、依落居猶供奉云云、遷幸大内夜同可被奉渡歟、而無其沙汰、件竈神也、件御竈神又可奉渡院、而共無沙汰、大略兩方似不存知、或人云、如内侍所相傳之由人々存歟者云々、後日帥大納言隆季、新院執事、被談曰、新院高倉御竈神今夜同自大内内膳、奉渡院、當今安德坊時御竈神、御坐于閑院之内膳、新院在位時御閑院、當今儲貳之時御坐此院也、自件所奉渡大内、而新院御竈神可奉渡之處無其所、雖尋先例不明、廻今案奉渡前坊内膳屋、令渡給也、

〔百練抄 十五後嵯峨〕仁治三年十月九日戊午、今夜内膳御竈神渡御新造内膳云々、不相觸宮主、又上卿不供奉、未曾有事也、

〔延喜式 三臨時祭〕中宮御竈祭東宮准之

五色薄絁各一尺、倭文五寸、木綿一兩、麻二兩、鍬一口、米酒各一升、鰒堅魚各一斤、腊一斤、海藻一斤、鹽一升、缻坏各一口、

〇按ズルニ、本文ハ、本書行幸時諸祭ノ下ニアリ、蓋中宮東宮行啓ノ時ノ御竈祭ナラン、

〔小右記〕天元五年六月廿日庚辰、今日申二點、奉移中宮御竈神於內膳司、(是四條本竈神、辰時部運ニ內膳、)尾、左右兵衛陣、及內膳司官人宮主、及宮司等相副、

〔日本紀略 後一條 十三〕寛仁元年二月廿五日甲午、中宮御竈神、自高倉殿奉渡三條院、

〔枕草子 五〕めでたきもの

后のひるのぎやうけい、御うぶや、みやはじめのさはう、しゝ、こまいぬ、大しやうじなどもてまゐりて、御ちやうのまへにしつらひすゑ、內膳御へつひわたしたてまつりなどしたる、ひめぎみなど聞えしたゞ人とこそ露見えさせ給はね、

〔中右記〕大治五年四月十五日、〇中略 中宮權大進有業、送書云、宮御神祭、箕平員相尋所令例不分明、何樣可候哉、關白殿初度(飯十六合、菜十六合、)也、被尋左大辨之處、無所見、但飯菜各十六合許可候歟、又女院御時例、被尋顯賴朝臣之處、箕平一具、飯四合、菜四合、於物口者、可依當時之儀者、人々申狀不分明、何樣沙汰候哉、又穢ニハ不被行事歟如何、(十三、十五無也、)委可令量申給、申云、件事子細慥不知給候、但且新女院例、可口如此事用吉例、無忌事也、穢時不被行條、全不知、一旦可被問家榮朝臣歟、准據例自候歟、十七日戊子、今日中宮御竈神祭始、先被作立御竈神屋於東三條御倉町云々、(中略)神祭、家榮申云、一具ハ飯八、菜八也、依可有二具、各十六被儲云々、陰陽寮進日時勘文、宮主行祭事、

〔日本紀略 後一條 十三〕寛仁四年四月十日辛卯、皇太后宮(〇三條妍子)御竈神、奉渡上東門第、

〔延喜式 三十九 內膳〕園神祭(春秋)

十四座(京北園二座、長岡園三座、羽束志園三座、奈癸園一座、奈良園三座、山科園一座、蔵所一座)

右五位一座、京北圖 六位十三座、

五位神一座料

五色絁各三尺、倭文一尺、木綿麻各八兩、鍬一口、白米三斗、糯米一斗、大小豆各二升、酒一斗、鰒二斤、堅魚腊各六斤、雜鮨十一斤、海藻四斤、鹽六升、

六位神料

座別五色薄絁各一尺、倭文一尺、鍬一口、木綿麻各一兩、米一升、酒七合、鰒、堅魚、腊、海藻各五兩、鹽七合、

祝料庸布二段、

〔延喜式九神名〕造。酒。司。坐。神。六座大四座、小二座、

大宮賣神社四座並大、月次新嘗、

酒殿神社二座並小

酒彌豆男神　酒彌豆女神

○按ズルニ、大宮賣神社四座ハ、大日本史ノ神祇志ニ、執政所鈔引、天治二年宮咩祭奠文ヲ引キテ、蓋祀大宮津姫、大宮津彥、大御膳津彥、大御膳津姫四神トアリ、

〔諸國神名帳宮中一〕酒殿神社二座　酒彌豆男神　酒彌豆女神　姓氏錄云、大鷦鷯天皇之御代、從韓國參來人、兄曾々保利、弟曾々保利二人天皇勅有何才、皆有造酒之才、令造御酒、於是賜麻呂號酒看都子、賜山鹿比咩號酒看都女、因以酒看都爲氏、

〔山城志一京師〕造酒司坐神六座　昔在中御門北、壬生西、社廢、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月廿七日甲申、奉授造酒司從五位下大戶自神從五位上、无位酒殿神從五位下、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十月十一日辛亥、造酒司從五位下酒美豆男神、酒美豆女神並授從五位上、

〔文德實錄八〕齊衡三年九月辛亥、造酒司酒甕神、從五位下大邑刀自、小邑刀自等、並預春秋祭、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十一月壬寅朔、造酒司從五位下次邑刀自甕神、准大邑刀自小邑刀自甕神等、預春秋二季祭、

〔延喜式一四時祭〕大宮賣神四座（坐造酒司）

五色薄絁各二丈六尺、絁二丈六尺、綿四屯、倭文二丈四尺、木綿麻各大六斤、絲四絇、（坐帶料）紫絁絲絁各一丈八尺、（坐神御衣、幷蓋料、）布二端二尺、（敷布幷覆、及裹帶料、）黄蘗五枚、紙五十張、白米一斛二斗、糯米二斗五升、大豆小豆各六升、酒九斗、鰒堅魚各廿斤、腊卅八斤、鮨二斗五升、鮭八隻、鹽一斗五升、錢五百文、（鮮物幷菓子、土器直、）油四升、綿一屯、（燈料、）灯缶四口、酒壺四口、酒臺八基、杯八口、盆堝各八口、明櫃四合、折櫃六合、机四前、（高各四尺、廣二尺、）切机二前、食薦八枚、瓢八柄、柏二俵、薪九擔半、（直、）稻四束、（神祇官所充、）當色一具、（神主忌部官人料、）絹三疋、絲三絇、（坐同獻料、）布二端二丈八尺、（忌部四人明衣料、）

右料物前、祭申官請受、春二月、冬十一月上午日祭、即神主供事、

〔延喜式四十造酒司〕祭神九座（春秋並同）

二座（酒彌豆男神、酒彌豆女神、）並從五位上

座別五色薄絁各五寸、倭文五寸、木綿麻各大八兩、紫絁二尺五寸、（蓋裹一尺二寸五分、衣料一尺二寸五分、）絲絁二尺五寸、（頭裹一尺二寸五分、衣料一尺二寸五分、）帛二尺二寸五分、（衣裹幷寄料、）雜腊十兩、雜鮨三斤、堅魚四斤八兩、雜鰒海藻相盡各三斤、鹽五合、糯米一斗五升、米一斗、酒三斗、大豆小豆各二升、祝史料庸布二段、鍬二口、

四座（竈神）

座別五色薄絁各二尺三寸、木綿一兩、麻二兩、猪完雜腊各二斤八兩、東鰒六兩、堅魚海藻各五兩、鹽二合、米酒各一升、稻一束、祝史料庸布二段、鍬四口、

三座（從五位上大邑刀自、從五位下小邑刀自、次邑刀自、）

座別五色絁各五寸、倭文五寸、木綿麻各大八兩、紫絁二尺五寸、（一尺二寸五分蓋裏料、一尺二寸五分衣料、）帛二尺二寸五分、（衣裏并袴料、）雜盛一籠、堅魚四斤八兩、海藻三斤、（一尺二寸五分蓋表料、一尺二寸五分衣料、）緋絁二尺五寸、雜腊十兩、雜鮨三斤、鹽五合、糯米五升、白米一斗、大豆小豆各一升、酒一斗五升、祝史料庸布一段、鍬二口、

〔續古事談〕（一王道后宮）造酒司ノ大刀自ト云ツボハ、三十石入也、土ニ深クホリスヱテ、ワヅカニ二尺バカリイデタルニ、一條天皇ノ御時、コエナク地ヨリヌケ出デ、カタハラニフシタリケリ、人オドロキアヤシミケルホドニ、御門ウセ給ニケリ、三條院御時、大風フキテ、カノツカサタフレニケルニ、大トジ、小刀自、次トジ、ミナウチワリテケリ、

〔三代實錄〕（五清和）貞觀三年五月甲戌朔、授園池司無位御氣津神從五位下、

〔延喜式〕（九神名）主水司坐神一座（小）

鳴雷神社

〔諸國神名帳〕（一宮中）主水司坐神一座　鳴雷神　鳴雷神者行雨神也、故所齋祭主水司也、

〔山城志〕（一京師）主水司坐神一座　鳴雷神社　昔在春日南匣東、社今廢、

〔延喜式〕（四十主水）鳴雷神一座祭（春秋並同）

五色薄絁各一尺、木綿麻各三兩、倭文一尺、鍬一口、白米酒各一斗、糯米六升、大豆小豆各二升、鰒二斤、腊海藻各三斤、鹽三升、祝史料商布一段、

〔延喜式〕（三十八掃部）諸司年料

神祇官諸祭料、狹席五十八枚、（鳴雷神春秋祭料十二枚）

〔玉海〕承安四年十二月一日甲寅、此日京官除目也、○中略　西市權佑正六位上大江朝臣國房、（修造主水司社料）

十五日戊辰、關白（○藤原基房）被語雜事被示事等、○中略

一今度除目尻付、修造主水司社料令注、是依請文狀也、而件社字不可然之由、卿相有傾奇人云々、此

事又不可然、諸司皆有神社、今依主水司社修造事、浴恩之者任請文注之、有何難哉云々者、

余申云、若不可有社字歟、只修造主水司ト可注歟如何、

命曰、不可然、本司神社各別也、爭乖請文哉云々、

〔延喜式四十主水〕御井神一座祭（春秋並同）

五色薄絁各二尺、倭文二尺、木綿一斤、鍬二口、酒五升、糙米飯各一斗、鰒、堅魚、腊各一斤、海藻二斤、鹽二升、麻筒一口、杓一柄、祝料商布一段、

〔延喜式三臨時祭〕御井祭

絹一匹、五色薄絁各四尺、絲一絇、綿一屯、倭文二尺、木綿八兩、麻一斤、布一端、庸布一段、鍬二口、米酒各二斗、稻四束、赤小豆二合、東鰒一斤、堅魚二斤、腊四斤、海藻三斤、鹽三升、甕二口、盆一口、坏二口、匏二柄、裹葉薦一枚、楉四把、輿籠一脚、食薦二枚、明衣料調布二丈、夫二人、

〔延喜式四十主水〕御生氣御井神一座祭（中宮准此）

五色薄絁各二尺、倭文二尺、木綿一斤、鍬一口、酒五升、糙米飯各一斗、鰒、堅魚、腊各一斤、海藻二斤、鹽三升、商布一段、（已上祭料）絹篩一口、（一尺五寸）缶一口、土椀一合、（加蓋、下皆准此）片盤五口、（已上汲水料）

右隨御生氣、擇宮中若京内一井堪用者定、前冬土王令牟義都首渫治、即祭之、至於立春日昧旦、牟義都首汲水付司擬供奉、一汲之後廢而不用、

〔延喜式四十主水〕氷池神十九座祭

座別五色薄絁各五寸、木綿一兩、麻二兩、米酒各一升、鰒堅魚各五兩、腊十一兩、海藻凝海菜各五兩、鹽五合、坩一口、

右每年十一月祭之

氷池風神九所祭（山城國五所、大和國一所、河内國一所、近江國一所、丹波國一所、）

所別五色薄絁各一尺、米一升、酒二升、海藻一斤、雜魚二斤、祝詞料商布一段、

右若有年溫氷薄、隨祭之、尋常寒歲不在此限例、

左馬寮祭神

〔三代實錄 三十五清和〕元慶三年二月四日甲子、授左馬寮無位生馬神從五位下、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜元年七月一日庚戌、加左馬寮坐生馬神一級、御馬依苦勸甚也、○又見扶桑略記、

左京職祭神

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年十二月三日辛酉、左京職正六位上戊亥隅神授從五位下、

齋宮寮祭神

〔延喜式 五齋宮〕大社十七座在齋宮內

大宮賣神四座　御門神八座

御井神二座　卜庭神二座

地主神一座

座別絹五尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿二兩、麻五兩、庸布一丈四尺、鍬一口、楯一枚、八座置、四座置各一束、鰒堅魚各五兩、腊二升、鹽一升、海藻、滑海藻、雜海菜各六兩、酒二升、坩一口、但加宮賣神馬一匹、御門神各槍二竿、

〔延喜式 二十八兵部〕凡伊勢齋宮寮宮賣祭馬三匹、中略○以下總國牧馬逐充、

鑄錢司祭神

〔三代實錄 二十四清和〕貞觀十五年九月廿七日己丑、授鑄錢司正六位上黑山神、火山神並從五位下、

鎭守府祭神

〔三代實錄 六清和〕貞觀四年六月十五日壬子、陸奧國鎭守府正六位上石手堰神預官社、

○按ズルニ、延喜神名式載ル所、陸奧國膽澤郡石手堰神社アリ、同神ナルベシ、

古事類苑

神祇部十七

第宅神

神棚圖

附神棚

雜載

古事類苑

神祇部十七

第宅神 神棚附

第内社ハ、第内ニ別ニ社殿ヲ設ケテ斎ヒ祀ル所ノ神ヲ云フモノニシテ、而シテ原ヨリ其地ニ鎮座セル神ヲ祀リタルモノアリ、藤原良房ガ宗像及ビ石戸開ノ二神ヲ東京一條ノ第ニ祀リ、角振、隼ノ二神ヲ東三條ノ第ニ祀レルガ如キ即チ是ナリ、又己ノ常ニ尊信スル所ノ神ヲ迎ヘテ其第内ニ祀リタルモノアリ、平清盛ガ安藝ノ嚴嶋ノ別宮ヲ建テ、綺所行元ガ丹波ノ大芋ノ社ヲ遷セルガ如キ即チ是ナリ、後世ニ及ビテハ、第内ニ斎ヒ祀ル神ヲバ、總テ之ヲ鎮守神ト稱スルニ至レリ、

宅神トハ、家宅ヲ守護シ給フ神ノ稱ニシテ、舊クハ之ヲヤカツミカミトモ、ヤケノミカミトモ云ヒ、又イヘノカミ、ヤドノカミトモ云フ、祭ル所ハ保食神ニシテ、毎年四月ト十一月トノ二季ニ於テ之ガ祭祀ヲ行ヘリ、後世ニ至リテハ、家祈禱ト稱シテ之ヲ正五九ノ三月ニ祭ル、

竈神ハ、竈ヲ守リ給フ神ナリ、カマドノカミト云ヒ、又ヘツヒノカミトモ云ヒテ、奥津日子、奥津比賣ノ二神ヲ祭ル、其祭祀ハ、始ハ宅神祭ト同ジク、四月ト十一月トノ二季ニ於テセシガ、後世浮屠ノ説漸ク盛ナルニ及ビテハ、之ヲ荒神祓ト稱シテ、毎月晦日、若クハ正五九ノ三月ニ、神職修驗ノ徒ヲシテ祭ラシムルニ至レリ、

井神ハ、井ヲ守護シ給フ神ニシテ、ミキノカミ、又ミヅヤノカミト云フ、祭ル所ハ水波能賣神、

第内社

御井神、鳴雷神等ナリ、

厠神ハ、カハヤノカミト云ヒ、又コウカノカミトモ云フ、厠ヲ守リ給フ神ニシテ、蓋埴山毘賣命、水波能賣命ノ二神ヲ祭ル、

門神ハ、門戸ヲ守護シ給フ、モンノカミト云ヒ、又カドノカミ、カドモリノカミト云フ、其祭神ハ豐石窻命、櫛石窻命ナリ、

庭神ハ、ニハノカミト云フ、祭ル所ハ庭津日神、庭高津日神、阿須波神、波比岐神等ノ諸神ニシテ、庭ヲ守護シ給フ、庭トハ人家門内ノ空地ヲ稱スルナリ、

〔山州名跡志二十二洛陽〕官社亡滅所

宗。像。社。　在一條東一條殿第地　往昔冬嗣公、神ノ示現ニヨツテ所勸請也、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年二月卅日丙辰、太政大臣〇藤原良房東京一條第、從二位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵島姬神、並授正二位、

〔三代實錄九清和〕貞觀六年十月十一日甲子、坐太政大臣〇藤原良房東京〇京下、一條殿第字正二位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵嶋姬神、並進階級、加從一位、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年四月十七日丁卯、內藏頭從五位上藤原朝臣安方、向太政大臣〇藤原良房東京第社、並奉楯桙御鞍等、告文同石淸水、

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年三月廿七日庚辰、以大和國城上郡宗像神、預於官社、坐太政大臣〇藤原基經東一條第、又坐筑前國宗像郡、皆是同神別社也、

〔大鏡三太政大臣忠平〕このおとゞは、これ基經のおとゞの四郎君〇中略此三人の大臣〇實頼、師輔、師尹、たちのまゐらせ給ふれうに、小一條のみなみ、かんでのこうぢには、いしだゝみをぞせられたりしが、まだ侍ぞかし、むなかたの明神おはしませば、洞院うしろのつひよりおりさせ給ひしに、おめな

どのふる日のれうとぞうけたまはりし、大かた其一町は人まかりわるかざりき、今はあやしき物も馬車に乘つゝみしく〳〵とわるき侍るはとよ、〈○中略〉此貞信公〈○忠平〉は、宗像明神うつゝにものなど申給けり、我よりよ御位たかくてゐさせ給へるなんくるしきと申給ければ、いとふびんなる御事なるかなとて、神位は申まさせ給へる也、

〔山城名勝志 三洛陽〕東一條第宗像社

土記云、延久元年五月十八日、春宮權大夫良基來、語申云、小一條本緣、内麻呂大臣爲三位之時、爲男正六位上冬嗣、自當麻松長手被買取云云、冬嗣爲內舍人參內、到東洞院近衞御門之間、虛中有聲云、暫留聞、吾者應聲暫留、乃示云、於小一條買取件地、可居住、福及子孫、我又住此邊、爲汝護、有聲無形隨有怖畏、答云、如只今者、無可買取之力云云、其後經一兩月、又有聲、所示如初、答又同、又若自身力不堪者、可被申嚴父也、於是彼大臣許諾、次問此聲爲誰乎、答云、我是住筑前國宗像郡及大和、以此相尋自知歟、又件家傍作善居所、我心護汝一家、雖我住所所、有可教化洛陽之思也云云、

〔山槐記〕治承二年十一月十二日辛未、差召使幷諸人從者、奉神社佛寺等、　神社四十一箇所〈○中略〉

宗形

〔諸神記 中〕一宗像社

建治二年勘文曰、東一條宗像神社三座元爲式外之神、而去年建治元年、彙文依勘奏、子細可預四度官幣之由宣下畢、

〔山城名勝志 三洛陽〕天石戸開神〈○諸社根元記云、宗像同社內、〉

花山院家記云、〈天石戸開神〉大石也、有靈、

〔三代實錄 十清和〕貞觀七年三月廿一日壬寅、授太政大臣〈○藤原良房〉東京第、无位天石戸開神從三位、

〔三代實錄 三十一陽成〕元慶元年四月十五日丙戌、是日頒幣梅宮、貴布禰、太政大臣東一條戌亥隅神、告文

曰、云云、大極殿幷東西樓廊等、以今月九日吉日良辰天、始作留云云、

〔山城名勝志洛陽三〕戊亥隅神是天石戸開神同神歟、可考、

〔山城名勝志洛陽三〕花山院

花山院家記云、聖德太子御時、巨勢河人符之、其時衆星飛降現石上、諸神影向坐石上給云云、其後經卅餘代、安倍清明又符之、星宿影向、諸神降臨如前、仍代々世人成恐、動石事無之、貞信公○藤原忠平拜北斗之時、七星影向、或降東木、或降石上、貞保親王住此所、常吹笛給、北斗影向石上、又親王御座之石亦有之、人不坐此石、

〔山城名勝志洛陽三〕稲荷命婦社已上三社、宗像、天石戸開及本社、至今花山院家第鎮座、

花山院家記云、命婦社、昭宣公○藤原基經時為守護神住此地云云、

〔山城名勝志洛陽四〕角振神　隼神在東三條第

〔拾芥抄中諸名所〕東三條圓融院誕生所、或重明親王家云々、二條南町西、南北二町、忠仁公(藤原良房)家、貞信公(忠平)大入道(兼家)傳領、長久四、四、廿、燒失、

〔日本紀略二朱雀〕天慶三年十一月廿六日丁亥、授正六位上隼總神従五位上、

〔日本紀略九一條〕永延元年十月十四日癸卯、天皇行幸攝政○藤原兼家東三條第、○中略又授角振神、隼神従四位下、○又見扶桑略記

〔榮花物語七鳥邊野〕さはす○長保三年にも成ぬれば、おはやけわたくしわかぬ世のいぞきにて、所わかずいとなみたり、かゝる程に、女院○圓融院后、東三條院詮子、ものせさせ給て、なやましう思しめしたり、との○藤原道長御心をまどはしておぼしめしまどはせ給、はかなく覺しめしゝに、日頃になれば、わが御心ちに、いかなればにかと心ぼそうおぼさる、○中略御物のけを四五人にかりうつしつゝ、おの〳〵僧どものゝ、ゐりわへるに、此三條院のすみの神のたゝりといふ事さへいできて、そのけしきいみじうわやにくげなり、おそろしき山にはといふらんやうに、いとゞしきに、かゝる事さへあれ

ば、所をかへさせ給べきなめりといふ事いできて、御うらにもあふところは、惟仲の帥中納言のまる所にわたらせ給べきに御さだめあり、やがてその日行幸あるべし、

〔日本紀略十一條〕寛弘三年三月四日丙午、自東三條遷御一條院、中宮○彰子同行啓、○中略又行慶賞、角振、隼兩神、竝授位、

〔爲房卿記〕康和二年七月六日辛未、戌刻奉渡東三條二角神於本神殿、御簾、御座、御帳帷新所被奉供也、又御供備進、御座、御帳先例不分明、然准他社被調奉之、前駿河守廣貞行事、　十一日丙子、角二所明神被奉幣、使盛家、　十三日戊寅、大殿渡御東三條、仍參入、自今日限三箇日、於角神寶前、以三口僧被講仁王講又不動法、法性寺座主被行

〔春日權現驗記四〕知足院殿○藤原忠實東三條におはしましける比、御夢のうちに、或たうとき僧をめして密教をうけさせたまひけるに、そのかたはらにまらぬ法し二三人すゝみまゐりてゐたり、なに物ぞと御覽ずるに、その僧のくちに鳥のはしつきたり、天狗にこそありけれと思食て、いかにこの東三條の中などに、かやうの物はまゐるぞ、角振の明神はおはせ侍ぬると仰られたりければ、その御聲につきて、春日神主時盛まゐりて候けり、これをみて天狗法師どもみなくにげうせにけり、つのふり、はやぶさの明神は、春日の御眷屬にて、御社におはしますなり、

〔中外抄〕保延四年正月廿八日、朝隆申云、東三條の角振、隼明神は、帝王不覺御後見也、聖人歟、又後身也件事實歟、仰云、不聞食事也、隼明神者、春日王子也、又尾州熱田の御神にて□□□□□□□□□□□昔ハ强□□□□憚也、而後末□□□□より强禁中ニハ被憚也、東宮□□□□□間有御願す、

〔台記〕久安六年正月一日己卯、今日今麻呂被聽昇殿、早朝修諷誦、石清水、加茂、平野、春日、大原野、吉田、祇園、角振、隼、

〔台記別記〕久安六年正月六日甲申、自今日五箇日、奉幣帛於東三條角振、隼神社、

○按ズルニ、コハ女御入内ニ就キテ、幣帛ヲ奉リタルナラン、

〔台記〕久安六年正月廿二日庚子、是日天子〇近衞自東三條遷幸四條東洞院、〇中略中刻、大相府〇藤原忠通與書曰、禪閤〇忠通父忠實嚴命如此、宜計示者、即見禪閤御消息、載三箇條、〇中略角振、隼、宜加階、亦必可〇中略公通朝臣下神饌日時於內記、臣、臣移外座、先下、弑後下日時於外記、了欲歸奧座、余〇忠通弟頼長止之曰、可有神加階事云々、覽勿歸著者、範家來仰、〇中略角振、隼加階、〇下略

〔廿二社註式奧入〕東三條角振神、隼神、〇中略久安六年正月四日、天皇御元服、於東三條有御元服事、廿二日庚子、天皇還御四條皇居、先勸賞、兩神正一位、〇又見諸社根元抄

〔兵範記〕仁平二年十一月十七日丁未、被行東三條御神樂、

〔台記〕仁平四年〇久壽元年九月十一日辛酉、今日參入省之次、奉拜角明神、是申大將饗無妨之慶也、

〔保元物語 一〕新院〇崇德御謀反露顯幷調伏の事附內府意見の事

同八日、〇保元元年七月關白殿下〇藤原忠通大宮大納言伊通卿、春宮大夫宗能卿參內して、來十一日左大臣〇藤原頼長流罪の由定申さる、謀反の事既に露顯に依て也、其故は左府東三條に成儈をこめて、祕法を行はせ內裏〇近衞を呪咀し奉らるゝ由聞えて、下野守義朝に仰て、其身を召れければ、東三條殿に行向て見るに、門戶を閉て籠けれども明ず、依て西表の南の小門を打破て入ぬ、角振、隼の社の前を過て、千卷泉の前に壇を立て行ふ僧あり、〇下略

〔山槐記〕治承二年十月十四日甲辰、於伊都岐嶋別宮〇六波羅御所鎭角御座也被行御神樂、入道大相國〇平淸盛沙汰云々、　十七日丁未、於伊都岐嶋別社〇入道相國亭云々有御神樂、三位中將〇知盛沙汰云々、

〇按ズルニ、コハ高倉天皇ノ中宮、平清盛ノ女德子ガ、懷妊ノ事アリシニヨリテナルベシ、

〔春日權現驗記 一〕大和國平群郡夜摩鄕に一の靈地あり、竹林殿と號す、春日大明神御影向の所也、むかし右馬允藤原光弘、廣瀨郡吉南殿といふ所にすみけり、大和河の北の邊を見れば、よる〳〵ひかる所あり、貴女この所におはして、子孫繁昌すべき所なりとの給、いかなる人いづれの所よ

り來給にかと光弘申ければ、

我宿はみやこのみなみ玄かのすむ三笠の山のうき雲のみや、かくおほせられて見え給はず、

光弘夢想によりて天暦二年二月廿五日、はじめて土木をかまへて、村上天皇に奏聞して、同年六月十六日より此ところにすむ、其後正暦三年のころ、藤原吉兼が夢に、家の西南の竹林のうへに貴女飛來ての給やう、我は汝が氏口春日大明神也、家たかく竹玄げくして、竹林園に似たるゆゑにこの所に來宿す、もし竹玄げくさかりならば、汝が子孫繁昌すべしと被仰と見けり、やがて社をたて神をあがめたてまつりて、ながく神竹をきるべからざるよし起請をかきけり、いまに修行いよ／＼か口して梁園にことならずとなん、

〔太平記二十五〕自伊勢進寶劍事附黃粱夢事

今年〇貞和四年古安德天皇ノ壇ノ浦ニテ海底ニ沈メサセ給シ寶劍出來レリトテ、伊勢國ヨリ進奏ス、〇中略日野前大納言資明卿ニ屬テ、寶劍ト祭主ガ起請トヲゾ出タリケル、資明卿事ノ樣ヲ能々聞給テ、〇中略寶劍ヲバ前栽ニ崇メ給ヘル春日ノ神殿ニゾ納メラレケル、神代ノ事ヲバ、何ニモ日本記ノ家ニ可存知事ナレバ、委ク尋給ハントテ平野ノ社ノ神主神祇ノ大副兼員ヲゾ召レケル、〇中略大納言能々聞給テ、〇中略委細ノ說、大略日來ヨリ誰モ存知ノ前ナレバ別ニ異議ナシ、但此說ノ中ニ十束ノ劍ト名付シハ、十束アル故也ト聞ツルゾ、人ノ左右ナク可知事ナラズト覺ル、其劍取出セトテ、南庭ニ崇給ヘル春日ノ社ヨリ、錦ノ袋ニ入タル劍ヲ取出シテ、尺ヲサヽセテ見給フニ、果シテ十束有ケリ、サテハ無不審寶劍ト覺〇下略

〔吉田家日次記〕應安四年八月廿八日戊申、今日繪所刑部少輔行元家鎭守勸請事談合、行持之間奉遷、詔戸大副書遣之云々、繪所領丹州大芋社云々、彼社神名帳多紀郡櫛石窻神社二座、並名神大彼額道風書也、櫛石窻、豐石窻神云々、式文二座云々、一座者豐石窻神歟、

宅神

〔諸神根元抄〕近衛殿御鎮守事（近衛室町御亭）春日四所幷若宮
二條殿御鎮守事（押小路室町御亭）春日若宮
八幡殿御鎮守　佐女牛若宮　最初無末社之儀
三條坊門殿御鎮守　石清水若宮　末社之儀同前
北山殿（足利氏第）御鎮守
石清水　加茂　松尾　平野　稻荷　住吉　日吉　梅宮　吉田　祇園　貴布禰
已上十三社
室町殿（足利氏第）御鎮守
北方南面五社
（東端）第一石清水　第二住吉　第三日吉　祇園
第四北野　第五宇賀宮（因幡一宮）
東方西面二社
南一社　賀茂、貴布禰、　北一社　春日
己上社壇七社之內、九神勸請、

〔雍州府志二神社〕御所八幡　在二條南高倉東、古斯處等持院尊氏公之第宅地也、康永三年、尊氏公使卜部兼豐家內勸請八幡宮、猶藤原氏攝關家內春日社、曾建武年中、尊氏挑軍於新田義貞、尊氏祈斯神、時有靈鳩飛翔之異、於茲義貞敗死云、爾後爲寺、號等持寺、居十刹之第一位、直以八幡宮爲鎮守、今寺絕、凡倭俗高貴第宅曰御所、故到今稱御所八幡、

〔大江俊章記〕寶曆十年五月廿四日、詣高辻黃門鎮守天滿宮、祈中家內和平、供神饌、

〔貴嶺問答〕月次祭者、神祇官祭、如庶人宅神祭也、

〔八雲御抄三下神〕うけもちの神（家神也）　やかつ（同上○又見靈草）

〔奥儀抄中之下〕ふかみぐさにはにさげれる花のかをいへよきてへようけもちのかみ

うけもちのかみは、いへの神なり、和名には保食神とかけり、

〔宣胤卿記〕長享三年正月一日庚申、早旦、（中略）拜四方、（中略）次宅御神、（向家内）

〔延喜式（八祝詞）〕大殿祭

皇御孫之命乃天之御翳、日之御翳止造奉仕（禮流）瑞之御殿、（古語云、阿良可、）汝屋船命（爾）天津奇護言（古語云、久須志伊波比許登、）以（氐）言壽鎭白久、此乃敷坐大宮地（中略）平（氣）久安久奉護（留）神御名（乎）白久、屋船久久遲命（是木靈也）屋船豐宇氣姬命（是稻靈也、俗詞宇賀能美多麻、今世產屋以辟木束稻置於戶邊、乃以米散屋中之類也、）以御名（乎）稱奉（利）、皇御孫命乃御世（乎）堅磐（爾）常磐（爾）奉護（利）、五十橿御世乃足（良志）御世（爾）田永（能）御世（止）奉福（留）依氏、（下略）

〔令義解（二神祇）〕季夏月次祭（謂於神祇官祭、與祈年祭同、即如庶人宅神祭也、）

〔倭訓栞（前編二十九末）〕まつる　令義解に、月次祭を如庶人宅神祭也とあるは、祖先の祭をいふなるべし、

〔權記〕長保六年四月廿九日壬午、宅神祭也、

〔小右記〕長元元年十一月廿五日乙卯、今夜（中略）宅神祭、

〔年中行事秘抄（十一月）〕撰吉日事

御廚子所御神祭事

天承二年十一月、天下有穢事、御廚子所御神祭、穢中有否如何、左府（藤原家忠）令申給云々、陰陽寮式云、宅神祭云々、有忌者用次癸云々、就之案之、御忌國忌歟、將何事乎、有用末癸之由見式、尤可有沙汰也、私人傳々之穢不忌云々、

〔顯廣王記〕長寛三年四月卅日戊申、家神祭也、

〔夫木和歌抄神祇三十四〕屏風に四月家神祭所

みむろ山みねのさかき葉よろづよにをりてまつらんわがやどの神

能宣朝臣

〔新古今和歌集神祇十九〕ある所の屏風の繪に、十一月神祭る家のまへに馬にのりて人のゆく所を、

大中臣能宣朝臣

榊葉の霜うちはらひかれずのみすめとぞいのる神の御前に

〔忠見集〕四月いへの神まつる

年ごとにまつらんかずはきねぞみむいたゞくかみのしらけゆくまで

〔經信卿母集〕しも月神祭るところに榊さす

ときはなる山の榊を折とりてかはらぬ宿のしるしにはさす

〔躬道濟集〕十一月神まつりする家

神代よりいはひそめてしゐし引の山のさかきば色もかはらず

四月神まつる家に卯花あり

ゆふかけてたれかみわかんみてぐらに咲みだれたる宿の卯花

〔木工權頭爲忠朝臣家百首夏〕神祭

兵庫頭仲正

山がつのかきねにいはふやかつかみ卯花さけるをかに口るかと

伊豆守爲業

わつかたてはさらとりすゑやかつかみまつるうづきにはや成ぬとか

〔土御門院御集〕名所夏

かしは木の杜の下ばををりしきてやかつみかみをまつる比かな

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕祭宅神吉日

乙丑　庚午　乙亥　丙子　丁卯　己卯　甲申　乙酉　丙戌　己丑　戊申　壬子　癸丑　乙卯　庚申

元日拜宅神

〔宣胤卿記〕文明十三年正月一日丙子、寅一點浴湯、次著衣冠、持笏於庭上座、兼敷疊一帖、其上向北稱屬星名號七遍、幷拜、○中略次拜宅中神、向家中、

長享三年正月一日庚申、早旦浴湯著衣冠、於庭上敷疊拜、其儀先向北、稱屬星名號、南無祿存星七反再拜、○中略次拜天、乾次拜地、坤次拜四方、東西南北次大將軍、南次王相、東次天一、次太白、東次宅御神、向家內、次竈神、以上拜之二拜、

每朝拜宅神

〔每朝神拜詞記〕辭別氏宅神屋船命乃御前乎愼美敬比、此乃家居乎伊豆乃眞屋斗幸閉給比、突立琉堅乃柱乎、齋柱登幸坐氏心靜部久、天之血垂飛鳥乃禍無久、桁梁戶牖乃錯動鳴事無久、夜目乃伊須須伎、伊豆都志伎事無久、守給比幸幣給閉斗、畏美畏美毛拜美奉留、

宅神雜載

〔古史傳四〕木草に幸ひ給ふ御靈を屋船命と申す、此御名の意は、屋を古言に屋船と言るには、あらじかと年頃思へるに合せて、御鎭座本記を見れば、外宮神を御船代に鎭め奉れる事を云る下の注に、船代、則謂天材木屋船之靈、故瑞舍名屋船緣也、とあり、此文、誤より靈までは、文體あやしくて聞取がたけれど、全文を見通して其意を取べし、此に依れば屋船とは、瑞殿を云古言にて、船代とは、御靈實を納め奉る器を、屋船代と云意に活かして云名なり、然れば屋船命とは、豐宇氣毘賣命の屋船を幸ひ護り給ふ御靈を稱す御名にぞ有ける、今世にも屋骨、また屋戶など云ふ言もあるは、古言の訛り傳れるにも有べし、かくて神祇令に、季夏月次祭條義解に、謂於神祇官祭、與新年祭同、卽如祝人宅神祭也と見え、野府記曰、長元元年十一月廿五日乙卯、宅神祭、與儀抄に保食神は、宅神也とも見え、また□□□に、宅神は倉稻魂命云々とあるなどを合せて思ふに、此頃までは、なほ屋船命と申すは、豐宇氣毘賣神の事なる由を世人の知て、宅神と云て月々にいみじく祭りけむこと知られたり、おな尊きかも、この大神はも食物を幸ひ坐す御功德は更にも云ず、

竈神

さす、経緯の事も此大神の御身に竈の生れるより始まり、木にも草にも幸ひ給ひて、屋船をさへに守護給へば、食物住所衣服の道を霊幸へ坐す本つ御祖神に坐て、尊しなど申すも更なる神徳になむ坐々ける、うべ天照大御神の重く此御霊を祭らせ給ける事よ、

〔伊呂波字類抄人部合付鬼神〕竈神ヘツイ

〔神道名目類聚抄神祇四〕竈神カマドノカミ　澳津彦神　澳津姫神

三寶荒神サンボウクワウジン　諸社根元記ニ云、神素戔嗚尊、速素戔嗚尊、素戔嗚尊、以上三ノ名、三寶荒神ナリ、

〔書言字考節用集神祇三〕竈神カマドノカミ、酉陽雜俎、竈神有六女、常以月晦上天、白人罪狀、又見風俗通、伏龍カマドノカミ、竈神也、時珍云、三寶荒神サンボウクワウジン、竈神、一名鎮竈荒神、俗云、事見禮事記、

〔梅園日記四〕竈神

古事記傳云、竈は加麻と訓べし、和名抄に四聲字苑云、竈は炊爨處也、和名加萬とあればなり、又閉都比と云名も古し、神樂竈殿遊歌に止與戸川比と見え、枕冊子に御へつひとあり、加麻とは差別ありしか、未思得ず、按ずるに、伊呂波字類抄に竈神をヘツイと訓たり、また塵添壒嚢抄竈神事條に、ヘツイヲ祭ルト云ハ、竈ノ神歟、沐浴ノ神歟、此國ニ釜ヲバ湯ワカス器トス、大國ニハ飯ヲスル器ナリ、是故ニ釜ノ神ヲ竈神トス、此朝ニハ釜飯ヲスル事ハオボロケニハ無ケレドモ、其神ヲバ祭ヲヘツイ祭ルト云フニヤ、などあるを見てヘツヒは竈神なるを志るべし、又是にて神樂歌の止與戸川比美阿曾比寸良志、又木工權頭爲忠家百首に、神祭を親隣歌、ならがしはそのやひらでをそなへつゝやどのへつひにたむけつる哉などあるも、よくきこゆる也、閑際筆記に、東武及諸州、毎月晦日、巫來リ竈ヲ祭、其譌甚鄙猥トイヘドモ、亦禁過スベカラズとあり、此日此神を祭る事は唐土にならへる歟、古今養性録に、抱朴子并酉陽雜俎云、竈神有六女、常以月晦上天、白人罪狀、俗間毎晦日使婦巫以禱祥、蓋出於此とあり、又按ずるに尚古く太平御覽百八十六に、萬畢術云、竈神晦日歸天、白人罪、また雜俎の後には、中州集に劉従益が歳除夕次東坡守

歲暮詩に、南隣祭竈喧、北里驅儺譁とあれば、金の時も晦日なり、清朝にも硯壽堂集、江鄉節物詩小序に、除夜祀竈曰接竈、言竈神自天上歸來也、乾隆建德縣志に、臘月二十四夜、祀祭竈、有不及舉者待除夕とあり、また晦日團子とて此神に供ふるは、石湖詩集の祭竈詩に、豆沙甘鬆粉餌團とあり、姑蘇志に、此團を引て粉團餅に作れり、海鹽縣圖經に、臘月二十四日、暮祀竈、謂之送竈、用糖粉團、淸嘉錄に、六月初四、十四、念四、比戶祀司竈、謂之謝竈、祀時以米粉作糰、素羞四簋、八月二十四日、煮糯米和赤豆作糰祀竈、謂之餋糰、十二月念四夜、送竈、比戶以米粉裹豆沙餡為餌、名曰謝竈糰、また竈神の前に小松の枝を手向るは、萬葉見安に、爾波奈加能阿須波乃可美爾、注に、かまどの神なり、あしもとの神といふこゝろなり、古志波佐之、注に、かまの上、松杉の葉なんどを手向る心なり、と見えたり、

〔玉手纏 八〕師○本居宣長の記傳に、今世には三寶荒神など云ふ穢き名を申すは、最淺ましき事なる哉と云れしは、實に然る言なるに就て思ふに、火神は伊邪那美神の御語にも心惡子と詔へる如く、御心荒く坐まし、火に穢ある時は荒び給ふ神にます故か、古くも荒神と申せりと聞えて、木國の玉置山と云ふ山に、荒神祭神社と申す有りて、此は火神を祭れる社なりと天野信景が鹽尻に見えたり、然れば俗に竈所の神を三寶荒神と稱して、頭の三ありて、髮の逆さまに生たる物を祭ることは、火神を荒神と申すに就て、兩部習合の說を始めし以來、天竺に謂ゆる障礙神の一名を荒神と稱して、此は何事にも障礙をなす物なりとて、諸の修法の始めに、まづ此神を祭り和むる事あり、こは密家の秘法にて、其法を荒神供とぞ云なる、斯てそを文字の同きまゝに、竈所に祭る神たちに附會して混一せる物なり、抑この障礙神と云ふは、世に大聖歡喜天とも、聖天とも云ふ物の事にて、天竺にては毘那夜迦と云ふ、曾て竈所の事には由緒なき邪物なり、こは信景が鹽尻に早くいひ置たる說に、已が辨をも加へて云なり、謂ゆる密家の儀軌てふ物を普く見るに、其修法ごとに、大かたは此邪物を調伏する法を載たり、また殊にこの物を祭る修法を記せる儀軌も數部あり、然れば古道に志さん人は、然る卑しき邪物の畫像などは疾く拂ひ捨て、よし修驗者にその祭り

を任するとも、神實は古風の竈神に祭り替ふべき事にこそ、其は折々も云如く、天竺の神よ佛よと云ふ類は、大抵は有名無實なるを、其像などは後世の僧らが杜撰に作れる物には有れど、其を實有の物として取はやし祭りなど行へば、正神の御守護なく、彼妖鬼遊魂の類なる物ども、處を得たりと憑來りて、種々の障碍をもなす事なり、俗書の三世相など云ふ物に、障碍神がくさ〳〵の障碍を行ひて、夫婦をいさかはせ、婆が擂木を取て夫に打かゝれば、夫は擂鉢をかぶりて打れじとまたる状などを書たるが有るは、あまりなる事の如くには有れど、實は然る事も有まじきに非ず、

〔竈神祭考〕この竈神はしも、○中略そのかみ庶人の家々にも拜祀りしが、則今の世までも傳へて祀り來れることいと志るきを、何の御世の頃よりか、三寶荒神といへる名はおふせ奉りけん、いとおぼつかなきを、草緣集とて、近き世に江戸の歌人が撰たる歌卷の後に、辨類とて目を出したるに、猿渡盛章神主がわきまへたる三寶荒神のことわりといへる、いとさゝやかなる文を記したるを見れば、だいごじの賴瑜僧正の秘藏口傳抄に、陰陽師くわうぢんぐを行ふことあり、内典のさやうでんぐこれなり、されど先師僧正この事をうけがひ給はねば、とり用ひざるよし見ゆとかゝれたり、さればいにしへ荒神供などいへること、陰陽師行ひしと見えたり、この神主の說、すべてよろしくも聞えればしるしつ、なほ餘々の書どもにも、こゝらのことあるべけれど、さまであなぐり求るにも及ねば、只中古の間よりとは思ふべきなり、さて三寶荒神といへる名義は、竈祭秘錄とて潜龍堂主人のものせし書に、此潜龍堂主人の說もすべていさをまなし、今其要を採りて餘は書きつ、いはゆる神道者などいふ風と見ゆ、云云、彼等が其說に曰、三寶とは佛法僧なり、荒神とは所謂貪欲神、障碍神、飢渴神の三神にして、貪瞋癡の三毒より化現して、一切衆生の福德を奪ひ、又一切の障礙を爲し、貧窮、災難をあらしむ、常に家々の竈に住て荒神となり、其眷族悉く惡鬼邪靈にして、人に祟り災厄をなさしむ、故に能祭りて三毒を轉じて三寶となすといふ、嗚呼竈神何ぞ豈加樣の不正不義の惡鬼ならんや、孟浪邪說信用爲ること勿れ、貪欲飢渴障礙神の事は、彼等が尊敬する辨天經に出たり、凡辨天經、

大黑經、又荒神經の類は、皆僞經にして佛の諸說にあらず、後世賣僧の僞作せしものなり、故に佛者といへども又心あるものは用ひず、況や神道に於てをや、此を以て三面八臂の說僞たることを知べし、神は非禮を受給はず、かやうの邪神を以て祭るとて何の効かあらん、愼て早く改め祭るべき者也とあるにて、今世の荒神といへるものゝ、誠は賣僧の私に設けたる名なることをよく〳〵知るべきなり、

〔古事記上〕大年神、〇中略娶天知迦流美豆比賣、訓天知天、亦自知下六字以音、生子奥津日子神、次奥津比賣命、亦名大戸比賣神、此者諸人以拜竈神者也、

〔先代舊事本紀四地神〕大年神〇中略娶天知迦流美豆姬爲妻、生九兒、兒奥津彥神、次奥津姬神、此二神者諸人拜祠竈神者也、

〔元元集七〕上代本紀曰、御間城入彥五十瓊殖天皇〇垂仁三十九歲壬戌、天照大神遷幸但波乃吉佐宮、今歲止由氣之皇大神結幽契天降居、〇中略爾時天照皇大神與止由氣皇大神合明齋德居焉、如天上之儀、一處雙坐焉、和久產巢日神子、豐宇賀能賣命、屋船稻靈神也生五穀而善釀酒奉御饗御炊神氷沼道主業姜島尊孫也、名罷御子神、今世號御炊其緣也、奉四九三十六竈神而朝大御氣夕大御氣於炊備天奉御饗留、

〔諸神記中〕一中央土神

奥玉神也竈神也　家之口訣也

〔和爾雅二神祇〕竈神カマドノ　奥津彥神、奥津姬命、亦合祭土祖神、俗謂之三方荒神、

〔日吉社神道秘密記〕一大宮竈殿、大日金剛界、俗形奥津彥神是也、大年神御兒也、諸人家々竈殿神是也、

杵春大明神
大國主神

――大年神　　　奥津產神〈竈是也〉

〔諸社一覽〈六近江〉〕日吉　志賀郡坂本村ニ有リ〈略○中〉

大竈　澳津產命也　此卽大歳神子也、大歳者杵築大神御孫也、諸家竈神是也、

竈殿　澳津姬神也

〔古事記傳十二〕竈神、竈は加麻と訓べし、和名抄に、四聲字苑云、竈炊爨處也、和名加萬〈又唐韻云、窯燒瓦竈也、漢語抄云、加波良加萬、新撰字鏡には、竈、須惠加萬、〉とあればなり、〈今俗に釜をも加麻と云ゆゑに、竈を加麻と云に釜より出たる名と思ふ人あれど、さに非ず、古釜を加麻と云ることなし、釜は加奈閉、また末路賀奈倍と和名抄に見えたり、思ひまがふべからず、或人釜を加麻と云は朝鮮語なりと云り、さもあるか、又竈より轉りたる名にてもあらむ、〉又加麻度とも云は竈處なり、萬葉五卅丁に可麻度柔播、火氣布伎多氏受とよめり、〈玄記に、加麻井者竈跡也と云るはひがことなり、又閉都比と云名も古し、神樂に竈殿遊歌に止與戸川比と見え、枕冊子に御へつひとあり、加麻とは釜斯ありしか未思得ず、又俗に竈を久度と云は誤なり、和名抄に、文字集略云、竈後穿也、和名久度と見え、竹取物語にかまどを三重にしこめてと云々、くどをあけてとあり、然れば古の竈に後に穴を開て、そを久度とは云しなり、さて竈字は字書に見えず、若くは竈の誤か、竈は竈と同じ、竈突也と註せり、又大膳式に竈神といふあれば、其も同じくて竈の誤か、〉式に筑前國御笠郡竈門神社〈名神大〉あり、〈藤原經衡、歌の詞書に、かまどの明神とあり、新續古今に見ゆ、百錬抄には、宰府竈門宮とあり、竈門山の歌、拾遺集に見ゆ、〉紀伊國名草郡に竈山ありて、竈山神社も式に見ゆ、是此神にや、〈略○中〉さて此に竈神と云は、比古神比賣神二柱を指るか、はた比賣神一柱か定かならず、〈古事記には、此二神者とあれど、例の依りがたし、若二柱を指ていはゞ、此二柱神者とあるべき例なり、且大戸てふ名も比賣神にのみあれば、竈神は此一柱神をのみ云か、されどなほ定めがたくぞおぼゆる、世俗の說に、竈神は女神なりと云ことのあるは、漢籍にも然云ることあるより出たるか、又は古よりの傳か、〉いかにまれ諸民に炊爨事を敎へ賜ひし功ある神なるべし、さて續紀に天平三年正月、神祇官奏、庭火御竈四時祭祀、永爲常例、大膳職式に御膳神八座、高部神一座、竈神四座、宮神四座とあげて、各其祭の料物品を載せ、右四祭春料依前件、秋亦準此云々とあれば、年每の春秋に祭ありしと見ゆ、〈竈は上に引る和名抄の說と同じかるべく聞ゆれば、久度と訓べし、〉されど四時祭式には見えず、臨時祭式に御竈祭云々、御井幷御竈祭云々、中宮御竈祭〈東宮准此〉云々、鎭竈鳴祭云々などとあり、〈略○中〉さて竈神は如此く公家にも祭賜ひ、又古より諸民までも各祭しこと此記文にても

知るべく、江家次第、正月元旦四方拜條、庶人儀に竈神をも拜むこと見ゆ、(重舊内傳と云ものに、丙丁日不ㇾ祭二竈神一と云ことありかゝることは云に足れど、是にても昔祭しことしるべし、)さて今世には三寶荒神など云穢き名を申すは、いとあさましきわざなるかも、

〔古史傳十六〕師(○本居宣長)言に、此に竈神と云は、比古比賣二神を指るか、はた比賣神一柱か、定かならず、舊事紀には、此二神者とあれど例の依がたし、若二柱を指ていはゞ、此二柱者と有べき例なり、(○中略)とあれど、此二神者と云ずても、自然に上の比古神へもひゞきて聞ゆれば、舊事紀の傳をも妄とは言がたし、竈神を女神と云ことは、疑なく漢籍より出たる說なり、炊爨の事はかならず男女かねたる神の爲始め給ふべき事なるをや、

〔玉手繦八〕奥津比古奥津比賣神は、(○中略)大年神の御子にて、此者諸人之持伊都久竈神也と神典に見えて、竈とは即へつひの事にて、其在處を竈所と云ふ、俗に臺所と云ふ處なり、抑この神は公家にも御食物に預かる所々に祭り給ひ、(但し朝廷にて祭らせ給ふには、奥津比古、奥津比賣神とは申し給はず、庭火ノ皇神とのみ御記に見えたり、○中略)師(○本居宣長)說の如く、諸民までも各々家々に祭りしこと、諸人の持齋くと有にて知べく、(○中略)奥津と申名の意は、師說に地名かと有れど、此神たちの御名に地名を負坐むこと似つかはしからねば、置土(オキツチ)を略して奥津と云ふか、竈は土を置て作ればなり、(また若くは、奥は燠(オキ)か、其は古今集におきのゐて身をやくよりも云々と有るおきは、火の事を云り、然れば津は助辭なり、)斯て此二神火を燧出して炊煮する道を敎へ始め給ひし故に、火神と配せ祭りて竈神とは申せり、(諸人の竈神に火神をも祭る事は所見(ミエ)されども、公家の御竈所に火神と配せて祭り給へば、諸人の竈所にも然有しことを知べし、)

〔俗神道大意一〕大年神ガ天知迦流美豆比賣神ト申スニ御合アソバシテ、御生ミナサレタルガ、奥津比古神、奥津比賣神ト申テ、スナハチ、本文ニ、此者諸人以拜竈神也ト有テ、コノ二柱ハ諸民ニカマドヲ立テ、煮炊ク事ヲ御敎ヘアソバシタル神ニ坐ス故、神代ヨリイタシテ家毎ニ祭リ奉ッタルコトヂヤ、ソレ故本文ニカヤウ御記シナサレタモノデ、尤モ朝廷ニ於テモ、大炊寮ト申テ、天皇

ノ御膳ヲ御饗キナサル、所ニ、重ク御祭リアソバサル、コトヂヤ、扨コノ天皇ノ宮ニ御祭リナサル、所ハ、延喜式ニ竈神四座ト有テ、コレ火産靈神ト庭火神トヲ加ヘテ御祭リナサレタモノデ、此ハ火神ノ御靈ヲ賜ハッテ物ハ成ルコト故、イカニモカヤウ有ルベキコトヂヤ、

〔類聚名物考 神祇 三〕竈神　かまどのかみ　へつひのかみ

奥津比賣之別名一名大戸比賣神○中略

今按に、竈神西土にも有、淮南子十三 氾論訓、炎帝於火而死爲竈、注、炎帝神農以火德王天下、死託祀於竈神、と見えしも同意なり、俗に三寶荒神といふは此神なるべし、

〔竈神祭考〕竈神と申は、古事記に故其大年神云云、娶天知迦流美豆比賣、生子奥津日子神、奥津比賣命、亦名大戸比賣神、此者諸人以拜竈神者也、とあることの御神なり、さて御名義、奥津日子神、奥は熾字の火を省きてかけるか、又借字にてもあるべし、今世竈の内なる炭火を於支といへるも是と同じく聞ゆ、されはこの御神の名は、竈に焚く所の火に依りて稱へ奉れるならむ、古今集俳諧歌に、小野小町、人にあはんつきのなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり、おきてに、燠をかねたるなり、同集物名部に同人、おきのゐて身をやくよりもかなしきはみやこしまべの別れなりけり、これも燠の居てなり、此外にもあり、新撰字鏡に燠、烏到於六二反、熾字同、熱灰也、於支比、又阿佐波比、また燼燠、於支比、又保太久比、などみえたるこれ證なり、古事記傳に、奥津は地名か、古今集に貫之が和泉國に侍ける時に、倭より越まうで來てよみてつかはしける、藤原忠房、君をおもひ沖津の濱に鳴く鶴の云云、沖津濱、或書に和泉國にありとし、又日根郡に在とし言へり、これか、和名抄に、彼國和泉郡輕部鄕あるも御母の名によしあり、○中略又駿河國にも此地名あり云云、鈴屋大人はかく地名より稱へ奉れるならんと解せ給つれど、この大年神の條下なる子神等の御名ども、多くは事物によられたるさまなれば、いかゞあらん、○中略津は助辭、日子比賣は男女の稱辭なり、亦名大戸比賣神、亦名に、奥津比賣命の亦の名なり、大は稱辭、戸は借字にして、竈へ竈なり、○中略竈

に戸字を借りて書るは、漢國にて民家を戸と云故に、此方にても民家を閉と云に、○中略此字を用るなり、さて竈を以て民家をよぶ事を、今世にも幾竈といひ、又竈絶るなども云めり、又民戸幾烟と云も此意なりと、傳に傳は、古事記傳をいふ、謂れたるが如し、○中略さてこの二柱神は、共に炊爨の業を世人に敎給ひて、いひしらず御功績坐せしゆゑ、後の御世にも、諸人の家々に竈神と以拜奉る事とはなりけらし、故御名をも竈の火また竈もて稱奉れる也けり、おもふに、今俗竈神は女神なりといへるによれば、二柱のうちにも別てこの奥津比賣命の炊爨のことに御功多かりし故なるべし、故亦名を大戸比賣神とも別て稱へまをしゝならん、又おもふに、いにしへも今も女の炊爨の事に預りて、それとりまかなふも、もとはこの大戸比賣の自をしへさとし給へるが傳はりて、かくは定りしにもあるべし、大戸比賣神と申御名は、外にをさ〳〵見えざるが、大膳職式に載られたる竈神の條に、高部神一座とあるは、此御神なるべし、

〔拾芥抄下本諸社〕竈神事家榮書中

問曰、自何十可祭哉、男女共儲夫妻之後可祭矣、如何、外女親王如何、重服人又祭之云云如何、答云、何十事事歟、只別家者可奉祭、不可依夫妻歟、宮宮例不分明、重服人祭之常事也、但始諸祭者可有憚、又○。○。○。○。○。○。○。○。常祭之時、四月、若十一月、相當七七内者不可祭之、又喫宍人祭之不可有歟、其故可用脯之、祭其脯之、其代用魚類者凡常例也、只獻魚喫齋食、

〔塵添壒囊抄四〕竈神事

ヘツイヲ祭ルト云ハ、竈ノ神歟、沐浴ノ神歟、此國ニ釜ヲバ湯ワカス器トス、大國ニハ飯ナスル器ナリ、是故釜ノ神、福神トス、此ノ朝ニハ釜ニ飯ナスル事ハヲボロケニハ無ケレドモ、其神ヲバ祭サヘツイ祭ルト云フニヤ、其レ後漢宣帝ノ時、陰子方ト云ヲ人有ケリ、孝心有テ情ケ深キ者也、臘日ツトニオキテ炊、竈神形ヲ顯シテ見ケリ、是ハ黄羊ヲ祭ル、俄ニ家富豐也、田七百餘頃徑百五十四歩也有リト云ヘリ、此ノ古キ跡ヲ尋テ今人モ祭ル、竈神ノ名ハ彈、字子郭也、黄衣ヲキテ髮カブレリ、其名ヲ呼ベバ惡ヲ除ク、頭猪ノ如クト云云、古今註、犬一名黄羊ト云ヘリ、竈神祭ハ實ノ羊歟、禮記云、竈者老婦之祭也云云、註云、

老婦先炊者也云云、飯スル老女ノマツリト云歟、カマニモカギラズ、禮記ニハ盆瓶炊器也トイヘリ、カマノ足三アルヲバ鼎トナヅク、大國ニハ是ヲ用フ、

〔禮記曲禮下〕天子祭天地、祭四方、祭山川、祭五祀、歲徧、諸侯方祀、祭山川、祭五祀、歲徧、大夫祭五祀、歲徧、

〔禮記月令〕孟春之月、（中略）其祀戶、祭先脾、（中略、仲春、季春同、）孟夏之月、（中略）其祀竈、祭先肺、（中略、仲夏、季夏同、）中央土（中略）其祀中霤、祭先心、（中略）孟秋之月、（中略）其祀門、祭先肝、（中略、仲秋、季秋同、）孟冬之月、（中略）其祀行、祭先腎、（中略、仲冬、季冬同、）

〔禮記祭法〕庶士庶人立一祀、或立戶、或立竈、

〔論語八佾〕王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂也、子曰、不然、獲罪於天、無所禱也、

〔酉陽雜俎十四諾皋記〕竈神名隗、狀如美女、又姓張、名單、字子郭、夫人字卿忌、有六女、皆名察（察一作祫）、常以月晦日上天、白人罪狀、大者奪紀、紀三百日、小者奪算、算一百日、故爲天帝督使、下爲地精、己丑日、日出卯時上天、禺中下行署、此日祭得福、其屬神有天帝嬌孫、天帝大夫、天帝都尉、天帝長兄、硎上童子、突上紫官君、太和君、玉池夫人等、一曰、竈神名壤子也、

〔五雜俎二天〕俗皆以十二月二十四日祀竈、謂竈神是夜上天、以一家所行善惡奏於天也、至是日婦人女子多持齋、余於戊子歲、以二十五日至姑蘇、蘇人家家燒楮陌茹素、無論男婦皆然、問其故曰、昨夜竈神所奏善惡、今日天曹遣所由覆覈耳、余笑謂古人媚竈之意、不過如此、然不脩行於平日、而持素於一日、竈可欺乎、天可欺乎、今閩人以好直言無隱者、俗猶呼曰竈公也、（中略）酉陽雜俎云、竈神有六女、常以月晦上天、白人罪狀、（中略）然則今以廿四五持齋者、不大丕計耶、

〔太平御覽百八十六居處〕竈

禮有五祀、竈居一焉、（中略）漢書、李少君祀竈、皆可致神物、而丹砂可化爲黃金、黃金成以爲器、以食則

釜壽、壽釜則海中蓬萊仙者乃可見之、封禪則不死、黄帝是也、天子親祀竈焉、○中略淮南子曰、黄帝作竈、死爲竈神、○中略萬畢術曰、竈神晦日歸天、白人罪、

〔類聚雜要抄二調度〕康平六年七月三日壬寅、内大臣〔○藤原師實〕移御花山院、○中略同移徙作法、○中略入宅明旦祀諸神、〔○諸神者、門、戸、井、竈、堂、庭、厠等也、〕以飯内盛五穀祀之、三日亦祀、以童女盛水火、炊釜内五穀祀之、○中略

康平六年七月二日、主税頭賀茂朝臣道平、同月三日壬寅、内大臣殿移御花山院勘文也、

勘解由次官親隆

〔木工權頭爲忠朝臣家百首雑〕神祭

ならがしはそのやひらでをそなへつゝやをのへつひにたむけつる哉

〔明月記〕建久十年〔○正治元年〕四月卅日、今夜家神祭云云、件竈神日來坐坊門、去廿七日渡此宿所坤方了、

〔閑際筆記上〕東武及諸州、毎月晦日巫來リ竈ヲ祭、其禮甚鄙猥ト雖ドモ、亦禁遏スベカラズ、按ズルニ禮記ニ、大夫ハ祀五祀、士ハ立二祀、庶人ハ立一祀ト云ヘリ、竈其祭ザルベケンヤ、本邦ノ人家多ハ不祭之、唯此巫アルノミ、

〔好色一代男三〕あらおもしろの竈神や、おかまの前に松うゑてと、すゝしめの鈴をならして縣神子來れり、

〔和漢三才圖會三十一庖厨〕竈

今修驗行者、毎月晦日於竈前奉幣、誦眞言以爲荒神禳者、據酉陽雜俎、萬畢術等恠談矣、蓋竈炊飲食、資生命之重器、恐夫有神、毎爲清淨可也、○又見華實年浪草

〔大祓執中抄上〕朝廷に御竈をやんごとなき物にたふとびたまへるは、命繼食物を焚く所なればなりけり、されば是は朝廷のみの事にはあらず、上中下おしなべて重くあがめ祭て、朝夕に焚く薪と火とに心を用ひ、穢なきやうにすべし、神祇令に季夏月次祭の義解に、卽如庶人宅神祭也とある宅神を、貴嶺問答にヤカツカミと訓り、土御門院御集に、かしは木のもりの下葉を折しきて

やかつみ神を祭る比哉、（宅をやかと訓事、源氏の東屋に、やかの翼のすみとあり、）此宅神卽竈神にて、家毎にある竈處（かまど）の事なり、（木工權頭爲忠朝臣百首に、神祭を爲賦、ならがしはその中ひらでをたなりつゝ、やどのへついにそなへつるかな、こある神祭し、家神祭なること、やどのへついとあるにて知るべし、出見集に、四月家の神まつる、年ごとにまつらんかずはきれぞ見むいただくかみのしらくるまでに、とある家神も宅神におなじ、）その證は明月記の建久十年四月廿日の件に、今夜家神祭、（中略）件竈神、日來坐坊門、去廿五日渡此宿所坤方了、と見えたるにて、宅神の竈神なることど明らかなり、（拾芥抄に、祭宅神吉日とて、日をば載たれど、月をば記さず、されどかく出見集明月記等の所見四月なれば、此月に祭るにやあらん、爲忠朝臣家百首に、或は卯花をよみあはせ、或はまつる卯月といふ歌を載たるなどを參考しておもふべし、）かゝれば世人常に竈神を淨め齋きて、火穢を犯すことなかれ、

〔竈神祭考〕今世おしなべて家々にいつき祀れる竈神はしも、佛法の神とかいへるものにして、誠はそれ彼方にても正しく古より祭り傳へたるものにはあらで、漸くだれる世に、この國の貪僧の私に作り構へたる名也とぞ、さてその拜き（り）祭る繪像とかいへるもの丶形容よ、いとむく〳〵しきものにて、鬼とかいふめる類にひとしく、更に此世のものともおもはれざるやう畫て、名をも三寶荒神とぞいふなる故、この三寶荒神といへる名は、ゑわぼうしの號奉りしものにて、その始はいとも〳〵上古より竈神とて、正しく二柱神を以拜奉りしを、何の御世の間にか御名の世に埋れ給ひて、かゝるあやしの名は負持たまひ、はたそは法師等の正。五。九。月。な。ど。に。經。文。を。讀。誦。て。竈。祓。と。い。ふ。こ。と。行。ふ。や。う。は。な。り。に。け。ん。

〔琅邪代醉編二〕正五九月

正五九月不上官、戴埴云、釋氏智論、天帝釋以寶鏡照四大神州、毎月一移察人善惡、此三月照南贍部州、唐人以此不行死刑、曰三長月節鎭、因戒屠宰不上官、後世因之、歐陽永叔治平丁未三月、出知亳州、陛辭乞便道過潁許之、公與曾舍人書云、在潁無所營爲、所以少留者、蓋避五月上官爾、此老未能免俗、亦可笑也、王元美曰、宋人以是三月食素諱惡、已可笑矣、今人不斷屠宰、但不上任、尤爲無謂、

或曰、宋朝火德、火生于寅、旺于午、墓于戌、此三月謂之灾月、官員例減祿料、無羊、故又謂無羊之月、乘皆避之似勝、但長生帝旺祿命家所喜、何以謂灾、王胡太僕汝嘉謂火君象臣下宜避尤無謂、

〔釋氏要覽雜紀下〕三長月不空羂索經云、諸佛神通之月、智論云、天帝釋以大寶鏡、從正月照南剡部洲、二月照西洲、至五九月皆照南洲、察人善惡、故南洲人、多於此月素食修善、故經云、年三長齋也、又一說、北方毘沙門天王巡察四洲善惡、正月至南洲、亦如鏡照、至五九月皆察南洲故、

〔竈神祭考〕古朝廷にて爲させ給ふ竈神祭のものに見えたるは、續日本紀天平三年正月、神祇官奏、庭火御竈四時祭祀永爲常例云云、また大膳職式に、御膳神八座、高倍神一座、竈神四座、竃神四座云云、右四祭春料依前件、秋亦准此とみゆ。〇中略さて朝廷にはかく春秋行はれしが、民間にはいかにありけん、推量考るに、六月十二月などにや祭り奉りしならん今世竈祓さて、正五九月三度民間に行ふは、例の法師よりおこれる事にして、古きものに見えず、かの佛國の國暦は、正月より四月までを熱時といひ、五月より八月までを雨時といひ、九月より十二月までを寒時といふよし、聰尻にいへるをみれば、年中三季の初月を祝ひて、正五九月に、家祈禱、竈祓、そのほか萬の祝事を此月に行ふに、みな天笠風にして、此皇國に要なきことなり、なほ三季なるよし諸經にみえたるおしぶき、松陰雜談にも載にいへり、故その明證は、六月晦日、十二月晦日に行る、月次祭に、鎭火祭とてこの祭は、災なからしめんとての祭祀なり、則小祀なるを、神祇令季夏月次祭の義解に、謂於神祇官祭、與祈年祭同、即如庶人宅神祭也、とある宅神祭は、鎭火をはじめ、門井竈すべて家内の神を祭り奉ることも聞ゆればなり、これ即今世の家祈禱といへるもの、此遺風とはおぼゆるなり、そはとまれかくまれ、早く三寶荒神といへる名を改めて、四時か、又は春秋か、おのおのが好むかたによりて、賑はゝしく祭り奉るべきなり、さてその祭の法などは神主を頼みて、力のあらんかぎり味き酒、好き肴を奉り、おのれが家内のものより同じ氏の人々にも食しめ、よろづ身の分に隨ひて樂しむべく、はた神主の示教のまにまにとりまかなひて、かりにもけがし奉らず、よからん上にもよく、味からん上にも味くして、神の御心を和しめ奉り、國の大御爲、家の爲、おのおのが身の幸福をも乞祈まつり、別ては火の災をはじめ、萬の禍ことなからんことを拜み拜み申奉るべきものなり、かくせば自然に善事榮えて凶事は隱ろひぬべきものぞ、さてその合

せ祀るべき神々は、

奥津日子神　二神竈神に坐す

奥津比賣神

火結神　火神所謂軻遇突智神

埴山姫神　土神

罔象女神　水神

此三神は、鎭火祭祝詞に見えたる火防の御神なり、

さてこのほかにも合せ祭るべき神等多かれど、そはおしなべて別の神忌棚に祀りたれば今ははぶきつ、

〔簠簋内傳金烏玉兎集二〕丙丁火神、本地觀音、軍荼利夜叉、南方平等性智精魂、心臟、少腸腑、魂魄速成、火光三昧、故此日不造家、不立屋敷、不圍館邪、不通市町、山野不放火、田園不立烟、不提灰、不致葬、不祭竈神、〈中略〉總而祝言幸祐成、禍起矣、

〔拾芥抄上本諸事〕九條記云、卯剋庶人者拜四方、後〈中略〉竈神、先聖、先師、以上再拜

〔江家次第一正月〕四方拜事　正月一日寅一剋

庶人儀　拜時前屈數座云云

北向拜屬星、向乾拜天、向坤拜地、

次四方、自子終酉〈中略〉次氏神、兩段再拜竈神、可加先聖先師、再拜墳墓、兩段再拜

〔宣胤卿記〕文明十三年正月一日丙子、寅一點沐浴、次著衣冠、持笏於庭上座、敷疊一帖、其上向北稱屬星名號七遍并拜、〈中略〉次拜宅中神、向家中竈神、向其方等、

長享三年正月一日庚申、早旦沐浴、著衣冠、於庭上敷疊拜、其儀先向北稱屬星名號、南无貪狼星七反

月朔拜竈神

每朝拜竈神

再拜、○中略次竈神、以上拜之二拜、

〔大江俊在記〕享保二年正月一日丙辰、未刻退下、淸湯、先東方、大江祖神、下御靈、稻荷、東天王、井、竈神、神棚、年德神、次佛壇、

〔大江俊章記〕元文六年正月一日丁卯、申刻總詣、先整容拜神、其儀、神宮祖神、各兩段再拜、中臣祓、一反大祓、初三反、後三反、賀茂、下上北野、岩淸水、下御社、東天王、各二拜、皆向其方、竈神、井神、兩段再拜、中臣祓、一反大祓、初三反、後三反、各向其所、大黑天、腸星各二拜、

〔日本歲時記一春〕正月元日

今夕、常に飯を炊く竈に燈を點ずべし、

〔大江俊尙記〕寶永五年七月一日乙亥、向東方一揖、雜化ノ初リ、大神宮身内ノ神、平野、祖神御靈、京屋敷地神稻荷、後向座神東天王、所社ノ神棚、荒神、年中用所井神、同上先祖、安祥院、父公、各拜揖、連座朝飯巡盃、　六年五月一日、拜禮如例、東方、平野、宿願拜、日リ臨時、三月稻荷、御靈、東天王、神棚、竈神、井神、カウソ、觀音、安祥院、先祖、合拜、父公御盃頂戴、妻子獻之、

〔大江俊在記〕享保二年七月一日癸丑、井、かまど、神棚、佛壇等拜、當月も加護ニテ、安穩ニ過候樣ニ宿願、

〔答問錄〕鈴屋翁○本居宣長每朝拜神式

拍手二つ額突氐

竈乃大神乃御靈乎愼美爲夜麻比、恐美畏美毛拜美奉留、

〔每朝神拜詞記〕竈所の神の御前に向ひ

辭別氐竈處爾齋伎奉留、火產靈神、奧津比古奧津比賣神乃御前乎愼美敬比、今日毛賜波留天津火宜、天之香山乃火登令受氐、枉神乃禍事在世受、諸能穢乎淸米給比氐伊豆能御靈乎幸閉給斗、畏美畏美毛拜

美奉留、

〔竈神祭考〕日々に祭り奉るさまは、諸の神を以拜き奉るが如く、朝夕釜に煮炊きたるもの、よきもあしきも人の食ふはそのものは、魚菜をはじめ、何にでもまづ奉りて、さて後に食ふべきなり、又拜み奉るさまは、朝起出て鋭手口など例の如く洗ひ、身を清めて、神棚の前に額突き拜みて、平手二うち、（平手は手を拍つこと、これの如し、）願言を申て、（願言は人の好なによるべし、されど次下に作れるをも見よ、）又額突き拜み奉りて退くべし、さてその願言の文は人々にて違ひぬべければ、定めいふべくもあらねば、貴人に對ひて申如く、何にても敬ひ奉りて、其乞禱奉る趣を申奉るべきなり、故左におのれが思ひよれる一ふしを記したるは、人々つねに拜み奉りて、幸福を乞禱まつるおしなべての願言を、古書どもに從ひて作り出たるなり、

言卷毛由々志畏志、掛卷毛綾爾尊支、是乃竈乃神忌棚爾鎭坐須、奥津日子、奥津比賣二柱神、許多乃神等乃大御前爾、鹿自物膝折伏、鵜自物頸根衝拔氐、乞禱奉留事波、竈乃火與理生出起留諸乃凶事無久、家内乃者等賀過穢志過犯須事乃有牟乎、見直志聞直志坐氐、我々賀負止爲行布職與理、千萬乃事乎、八十限不陷、日乃守夜乃護止、幾久爾遠長久、惠幸福閉給比、子々孫々御名爾負持給布、息水久令在給閉止白須事乃由乎、熟良爾具細久、彌日爾異爾聞知食助給比、阿奈々比給閉止、恐美惶毛拜白須、

今これを俗言に轉じて言はゞ

恐多けれど、尊きこの竈の神棚に鎭り坐す、奥津日子奥津比賣二柱神、その外の神等の御前に額突きて禱奉るは、竈の火より起る諸の凶事なく、家内の者らが思はず知らず火を穢し、又思はず知らず神の御心にたがふ過犯事あらば、それ見直し聞直し給ひて、我々が爲行ふ職職より、廣くとり行ふことを日夜に守護給ひ幸福へ給ひて、子々孫々に至るまで、御名に負持ち給

へる息長く、長命ならしめ給へと白事を、よくよく聞食給ひて、助け給ひ叶へ給へとおそれ入を申上る、

といふはその事也、かならずしも拘るべからず、人々の心々に、いかやうにもねもごろに願奉つるべきなり、おなかしてや、

〔諸社一覽 一〕問云、兩大神宮ノメグリニ辨才天、大黑、三。寶。荒。神ナドヲ繪ニ書テ、參詣人ノ散錢ヲムサボルモミグルシヽ、是ハイカヾ、

答、是ハ亂世ノ比、世ヲワタルベキタヨリナキマヽニ、何ノ社カノ社ナドヽ云ヒテ、不案內ノ參詣者ニイヒキカセタル不作法、今モクセトナリテ、泰平ノ御世ニテイヨ〳〵有也、

〔谷響集 九〕荒神

客問、荒神者何神也、三國相傳耶、又有荒神供次第法一帖、有賴瑜跋、弘安九年傳受云々、又彼法尾云、小野僧正成尊撰集、未審如何、答、按舊記、本朝示現之神、非三國相傳、昔役優婆塞、宴坐葛城峰、望東北方山、有紫雲靉靆、往而謁見、與神語論、神自言、有治罰惡人、故稱爲亂荒神、又衞護三寶、故號三。寶。荒。神。、有九萬八千夜叉眷屬、按彼次第法、非成尊作、何以知之、昔予問法務寬濟僧正、答曰、醍醐流無有此法、故知後人假名記之矣、又按、瑜公眞俗雜記十三、載荒神事云、問憲深僧正、答曰、陰陽家有祭彼神法云、報恩院流無荒神供法、又聞餘流有行彼法者、不信用焉、今詳其神可敬崇、其供養法信者、行之有人摘諸天法中所撰集矣、

〔鹽尻 三〕荒神供　或問、荒神供、密家の正法になきよし谷響集に記せり、然るに眞言宗の僧徒、正法の荒神供ありと云へり如何、答、されば谷響集にいへる所は、世俗竈神として祭る荒神の事をいへり、これは倭俗作り出せし事にて、唐土道家習合の邪法なる由をいへり、瑜義經等にいへる毗那耶伽(譯大聖歡喜天)の本身障礙神を、一に荒神と稱す、これに忿怒と如來との二像あり、一切法の障礙

となる神ゆゑ、修法の時、先降伏する事密家の大事也、これ竈神に非ず、其本地金剛薩埵と習ふ故なり、是を祭るを荒神供と云、是は密家傳來の正法也と云々、但荒神と云ふ號唐になし、我國ふらふる神といふことを荒神と呼ぶ、

〔壒嚢鈔 九〕荒神、荒神供、　荒神は毘那夜伽(ビナヤカ)にして蓮花三昧の所説を正法の本とす、顯教は普賢大士の變作とし、密教には金剛薩埵の所變を習ひ、愛染明王と體を同じくす、世間流布の荒神供は、後人の附托にして正しからずとぞ、荒野とて、草もはへずあれたるを云、然に暴神に荒の字をかくは、僻のかな書なり、

〔源平盛衰記 一〕清盛行大威德法附行陀天幷清水寺詔事

抑清盛打續繁昌シ給ケル事、幼少ノ昔、中御門家成卿ノ許ニ局ズミシテ有ケルニ、彼卿ノ祈ノ師ニ大納言阿闍梨祐眞トテ、貴キ眞言師アリ、家成卿ノ持佛堂ニテ護身加持シテオハシケレバ、清盛モ常ニ有對面聞給ケル事ハ、眞言上乘ノ秘法ノ中ニ、何ナル法カ加樣ノ在家ノ者ノ奉行、揭焉ノ預利生事候ト被申タリケレバ、阿闍梨答云、信心至テ修行スレバ何レノ法モ可成就、但振威於一天、抽德於萬人者、五大明王ノ其一、大威德ノ法コソ成就アレバ、必天子ノ位ニ昇トハ申タレト云ケレバ、則阿闍梨ヲ師匠ト憑テ、件ノ法ヲ傳受シテ、七箇年ノ間一向清淨ニ齋戒シ、何曾カ滋味ヲモ斷ジ、玄石ガ美キ酒ヲモ禁ジテ、勇猛精進シ、信心勤行シ給ケリ、○中略彌致精誠祈念シケレ共、餘ノ貧者ナリケレバ、倩案ジテ思ヒケルハ、我諸國庄園ノ主也、縦ヒ何トナケレ共、生得ノ報トテ、身一ツ助ル分ハ有ゾカシ、況清盛ガ身ニ於テヲヤ、希代ノ果報哉ト怪處ニ、或時蓮臺町ニシテ、大ナル狐ヲ追出シ、弓手ニ相付テ既ニ射ントシケルニ、狐忽ニ黄女ト變ジテ、莞爾ト笑ヒ立向テ、ヤヽ我命ヲ助ケ給ハヾ、汝ガ所望ヲ叶ヘント云ケレバ、清盛矢ヲハヅシ、如何ナル人ニテオハスゾト問フ、女答テ云ク、我ハ七十四道中ノ王ニテ有ゾト聞ユ、サテハ貴狐天王ニテ御坐ニヤトテ、馬ヨリ下テ敬屈スレバ、女又本ノ狐ト成テ、コウ〳〵鳴テ失ヌ、清盛

案ジケルハ、我財寶ニウエタル事ハ荒神ノ所爲ニゾ、荒神ヲ鎮テ財寶ヲ得ニハ、辨才妙音ニハ不レ如、今ノ貴狐天王ハ妙音ノ其一也、サテハ我陁天ノ法ヲ成就スベキ者ニコソトテ、彼法ヲ行ケル、

〔諸神記 中〕三寶荒神

神素盞嗚尊　速素盞嗚尊　素盞嗚尊

件尊、三之御名、三寶荒神也、

〔神道名目類聚抄 五祭祀〕荒神祭　竈神ヲ祭事ニアラズ、是人ノ身體ニ備ル神アリ、此神アルヽ時ハ必病ヲ生ジ災至ル、故ニ是ヲ祭ヲ荒神祭ト云、別ニ深秘ノ義アリ、ト部家抄ニ、人ニ九萬八千五百七十二ノ荒神アリ、是如影隨形ナリ、其眷屬九億四萬三千四百九十二神アリ、一竅ニ一千六百十九神ヅヽアリテ、九竅ニハ合テ一萬四千五百七十二神ナリ、口ノ一竅ニハ一神多、故ニ總數ニテ一神多シ、又八萬四千ノ毛孔ニ、八萬四千ノ神アリ、九竅ノ神ト毛孔ノ神ト、合テ九萬八千五百七十二神ナリ、人ノ身ニ生ズル毛頭ニ此神マシマセリ、毛頭ハ外、毛根ハ内ニコモルナリ、毛頭ノ根ノムスボレヌ時ハ病ナシ、一念亂テ氣ノ迷倒スル時ハ、毛頭ノ根ムスボルヽナリ云云、

〔軍神問答〕問云、九萬八千軍神と昔より云習はしたり、いかなる神ぞや、又是を祭るべきや、答云、佛家の説に、九萬八千夜叉神と云は、三寶荒神の眷屬にて、具さにいへば九億九萬八千七百七十二神(荒神經に見ゆ)あり、常には略して九萬八千と云、三寶荒神は三世三寶荒神とて、過現未の三世に作る所の惡業に付て來る神也、人の家に種々の障難あるは、皆荒神の祟なり、過去荒神を祭れば、過去九萬八千夜叉神を撥ひ、現在荒神を祭れば、現在九萬八千夜叉神を撥ひ、未來荒神を祭れば、未來九萬八千夜叉神を撥ふと云、按るに、古の書に九萬八千軍神と云事見えず、中古源

平合戰の物語以來の書に、九萬八千軍神と云事見えたり、然れ共軍神には非ず、九萬八千夜叉神は人に祟をなし、障難を施す事を好む惡神なる故、中古以來の武士是を祭り、我身方にして敵方に祟をなさしめんと欲して、推して是を軍神として、九萬八千軍神と稱し習はせる成べし、かの夜叉も佛家の說にして、天竺の神也、前にも記す如く、我國の軍神を指置て外國の神を祭るは不義也、かの夜叉神の說とるにたらず、

〔神道問答下〕三寶荒神

問云、三寶荒神は、木の神久々能知命、火の神加具都智命、土の神埴安命、金の神金山彥命、水の神美豆波能賣命也といふ說あり、かくては五神なるを、三寶とは如何、

答云、そは竈に木火土金水ある故に、淺意のをこ人が、皇朝の誠をしらず、眼前の理屈もて五行に配當して作り出したるおよづれごと也、古事記に奧津日子神、次に奧津比賣神、亦名は大戶比賣神、此者諸人以拜竈神者也とあり、此竈神の事は、續日本紀、文德實錄、三代實錄、延喜式、西宮記、中右記、禁秘御抄、百練抄等にあり、世に竈神は女神なりといへるもよしあるか、外國にも酉陽雜俎に竈神狀如美女とあり、三寶荒神は過去現在未來の三寶、九萬八千の夜叉神とかいへるにて、皇朝の神にあらず、竈神とは異なり、

〔俗神道大意一〕コノ國ニ神道ト云道ハナイト太宰純〇ガ云タハ、定メテ今ノ諸社ノ禰宜神主、マタハ土御門ノ流ヲ汲デ、陰陽家ノ神道者ト云モノ、鈴ヲ振テ門々ニ立チ、三種祓トカ云フヲヨミタテ、高天原ヲ云テアルキ、荒神祭ナドシテ世ヲ渡ル輩ヲ、神道ト心得テノ評ト見エルガ、彼ラガコトハ、〇中略實ハトルニ足ラヌモノデ、鉢坊主モ同ジコトヂヤ、

〔琉球年代記〕託女荒神ばらひ

此國奇なることは、託女とゝなへて巫女おほく、民間にこと〴〵くこれを信ず、每年正三五九

月を吉月として、家々いはひたのしむ、朔望には早朝よりかの託女をまねきて、荒神ばらひの如き祈禱あり、託女のまへには八重山酒(みりんの如き酒也)一盃を盃にのせていだす、第一にシチリキユ、アマミキユ、あまつかみ、うなばらのかみ、八幡宮、天滿大自在天神を拜し、爲朝公ヨリ代々の賢王の御名をとなへ、琵琶を彈じながら、法華經禮文をだみたるこゑにて、いともながきふしにとなふ、荒神といふは天孫神のことのよしにて、祈禱神慮にかなふをキメテスリと云、祈終バ、八重山酒をのみて、その盃へ札一枚をのせてかへる、

〔古事記上〕大國主神之兄弟八十神坐、○中略其八十神各有欲婚稻羽之八上(ヤガミ)比賣之心、○中略於是八上比賣答八十神言、吾者不聞汝等之言、將嫁大穴牟遲神、○中略故其八上比賣者雖率來、畏其嫡妻須世理毘賣、而其所生子者、刺挾木俣而返、故名其子云木俣神、亦名謂御井神也、

〔古事記傳十〕御井神とは、此神處々に井を作りて、民の利をなし賜へる御功ありしに因て、稱奉れる御名なるべし、さて御井神社は、まづ出雲國には、帳に秋鹿郡と出雲郡とに見え、又大和國宇陀郡、美濃國多藝郡、各務郡などにも見ゆ、さて神祇官に坐、座摩御巫祭神五座中の生井神、福井神、綱長井神と申すも、此御井神を稱奉し三名なるべし、○中略臨時祭式に御井祭と云も見えたり、井は殊に重くすべき處なれば、誰家にもほど〲に隨ひて、此神をば齋奉るべき物ぞ、

〔詠大神宮二所神祇百首和歌雜〕山家
山里ノ朝氣ノ水ヲ結身モ御井ノ神ノ惠トハシレ

〔民家敬神錄〕民家にて神をまつるべきやうのあらまし
民家にて神を祭る屋を神の棚といふ、何の御神にもませ、其神靈をうつし齋ひて、○中略必ず拜み奉るべき御神等といふは、左に擧げたる神々なり、○中略
御井大神(井戸の御神なり)

井神祭

〔類聚雜要抄二〕康平六年七月三日壬寅、內大臣〈○藤原師實〉移御花山院、〈○中略〉
同移徙作法、〈○中略〉
入宅明旦祀諸神、〈諸神者、門、戶、井、竈、堂、庭、廁等也、〉以甑內盛五穀祀之、三日亦祀、以童女擎水火、炊釜內五穀祀之、

〔延喜式八祝詞〕六月月次〈十二月准此〉
集侍神主祝部等諸聞食登宣、〈○中略〉
座摩乃御巫辭竟奉皇神等乃前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、婆比支登御名者白氐、辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知氐、皇御孫命瑞乃御舍仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

〔延喜式五齋宮〕忌火、庭火、御井、竈神祭、〈遷入野宮之初所祭等、月朔祭、二季料亦准此、〉
五色薄絁各四尺、倭文二尺、木綿八兩、麻一斤、庸布一段、鍬二口、米、酒各二升、鰒、堅魚、海藻各一斤、腊二升、鹽一升、柏二把、瓱坏各一口、〈已上井神祭料〉
二月新年祭廿一座〈竈神二前、御井神二前、〉

〔中右記〕天永二年十一月廿五日壬午、今日院第一姬宮有齋院卜定事、〈○中略〉
故神祇少副兼俊申云、初齋院次第、大殿定齋院、御禊指寶木、御井祭、實數女男〈下人〉三、御竈神祭、

〔白虎通一〕五祀者何謂也、謂門、戶、井、竈、中霤也、所以祭何、人之所處出入所飮食、故爲神而祭之、

〔太平御覽百八十九居處〕井
禮記曰、井與門、戶、竈、中霤爲五祀、〈○中略〉白澤圖曰、井神曰吹簫女子、

〔吾妻鏡二十〕建曆二年四月十八日癸卯、爲將軍家〈○源實朝〉御願、大倉鄕卜一勝地、令經始一寺給、今日午剋、立柱上棟也、是爲被報君恩父德云云、相州〈○北條義時〉武州〈○北條泰時〉大官令〈○大江廣元〉等被參向、戌剋於此所、被行水神井七座土公祭、橘三藏人奉行之、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年三月廿日丁丑、可被新造幕府幷御持佛堂等於若宮大路東頰事、今日於御所有其定、日次以下、陰陽道勘文、晴賢文元等、所令連署也、　七月十日乙巳、今日爲大膳權大夫師員、伊賀式部大夫入道光西、藤内大夫判官定員等奉行、於御所新御所御移徙間事有其沙汰、召聚陰陽師等、忠尙、定昌、泰貞、晴賢、宣友、晴茂、宣賢、廣賢、國繼參進西廊緣、自一座次第被尋仰之、來月四日、可爲新御所御移徙也、　八月三日丁亥、戌刻、於新御所被行鎭御祈、大歲神(泰貞朝臣)宅鎭(晴賢)大土公(晴茂)大將軍(宣賢)王相(國繼)井靈(廣賢)廐鎭(道氏)七十二星、西岳眞人鎭、忠尙朝臣於里亭勤行之後、(○中略)退出云云、　四日戊子、戌刻、將軍家(○藤原頼經)若宮大路新造御所御移徙也、

〔羅山文集四十祭文〕祭井文(正保二年七月作)

夫井之爲靈也、水由地中行、伏見不測、鑿地得水、到處皆然、井之爲德也、寒泉養人、浸灌施物、不可一日無之物也、嗚呼后土玄冥之擧、其靈顯其德、人皆賴焉、方今雖有子貢之桔槹而省其勞、然安知無葛洪之丹砂之含其氣、汲之不盡、日用有餘、譬諸民之於仁、宜哉飮者皆不爽口、滌煩濯病、溫冷適時、唯其所用、而移酈縣之菊潭於此、尙饗、

〔大江俊尙記〕寶永五年正月元日己酉、夙起、(月代髮、衣服改)椽ニ圓座儲屈候、奉拜先東方、(春東○中略)天神、神棚、(諸神)竈神、井神、(年中恩ヲ謝拜)

〔大江俊章記〕元文六年正月一日丁卯、申刻總詰、先整容拜神、其儀神宮祖神、各兩段再拜、中臣祓一反、大祓(初三反、後三反、○中略)三竈神、井神、兩段再拜、中臣祓一反、大祓(初三反、後三反、)各向其所、

〔諸國圖會年中行事大成一正月〕元日

門松飾薹、今日より十五日まで、(○中略)井戸、竈、神棚、湯殿、厠に至迄、松を立、輪飾とて、注連を輪にして懸るなり、(○中略)

鏡餅　餅を鏡の形になし、一重し、(二ツを一重と、幾重といふ、)づゝ臺にのせ、齒朶楪を敷き、上には橙、昆布、其餘祝

果をのせ、竈、井〈○中略〉に備ふ、

月朔拜井神

〔大江俊尙記〕正德五年七月一日甲午、竈、井、神棚、佛棚、先祖尊父拜禮、畢朝飯例也、　八月朔甲子、竈、水。神。神棚、佛、各拜、父公拜禮、　九月一日甲午、井、竈、神佛棚拜、尊父拜、　十月一日癸亥、井竈兩神、神棚、佛棚拜、畢父公御禮、

毎朝拜井神

〔答問錄〕鈴屋翁〈○本居宣長〉毎朝拜神式

拍手二つ額突氏

御井乃大神乃御靈乎愼美爲夜麻比、恐美畏美毛拜美奉留、

〔毎朝神拜詞記〕次に水屋(ミヅヤ)の神の御前に向ひ

辭別氏、井之神斗奮後奉留、水。波。能。賣。神。御井神、鳴雷(ナルイカヅチ)神乃御前乎愼美敬比、今日毛賜留天津水等、天ノ忍石(オシハ)乃長井(ナガヰ)能水登令受氏、枉神乃禍事在登、諸乃穢乎清米給比氏、伊豆乃御靈乎幸閉給登、長美長美毛拜美奉留、

廁神

〔和爾雅居處二〕廁(カハヤ)　圊、溷、墻、並同　後架(コウカ)　俗稱廁曰後架　登司(トロス)　俗稱廁曰登司、按事物異名云、登司同郭登、廁神也、登主也、今人誤曰登司、

〔下學集家屋上〕西淨〈東司〉廁(カハヤ)〈郭東司也、然日本之俗、閻圊呼相似、呼廁云高野、可笑也、又一說云、我朝高野山、[illegible]形、蓋異受陀羅義、不令人人留不淨於此山、故常屋必架河上、而淨不淨也、因是高野一山、呼東司曰河屋也、〉偖廁(ソウシ)〈律家呼東司、云僧屋也、〉後架(コウカ)〈故厭處也〉

〔書言字考節用集三神祇〕郭登(カハヤノカミ)〈廁代神[illegible]〉

〔玉手編八〕廁を掌給ふ神の名は、古書に此者廁神と載傳たる文は無れど、世に卜家の神道、また橘家の神道などを傳ふる人々の說に、埴。山。毘。賣。神。と、水。波。能。賣。神。なりと云ふは、實然も有べく覺ゆ、其は此二神は土神水神にて〈是に、井戸神をカ。ウ。カ。神と謂じ、云に、水神の急す故なるべし、〉伊弉那美神の御屎と、御尿に成坐ればなり、〈俗に、佛家の烏芻沙摩明王と云物を、廁の神なりと云ふは、密宗より出たる說なるが、昔より、廁に祀しと云る如く、陰りにて、信るに足らず、殊にこの明王の像なるけず、効なきなす由なる記せ〉

廁神祭

僞る、穢跡金剛法禁百變法門經、穢跡金剛說法術靈要門と云ふ物ありて、一切經に收たれど、唐土の僧が支家法術說をぬすみて、僞作せること疑なき物なるをや、これは寂照堂谷響集にも、早く其辨ありしを所思たり、

〔古事記上〕伊邪那美命、○中略生火之夜藝速男神、○中略因生此子、美蕃登此三字以音見炙而病臥在、○中略於屎成神名、波邇夜須毘古神、此神名以音次波邇夜須毘賣神、此神名亦以音次於尿成神名、彌都波能賣神、

〔類聚名物考神祇三〕廁神　かはやのかみ

輟畊錄十二廁の考に、錢義が廁神、李赤が廁鬼と見ゆ、所出可考、

〔輟耕錄十二〕廁籌

按說文廁淸也、○中略圊也、居高臨垂邊曰廁、高岸夾水曰廁、○中略萬石君傳、建取親中裙廁牏身自澣洒、注孟康曰、廁行淸牏行中受糞函也、至於晉侯食麥脹、如廁陷而卒、趙襄子如廁執豫讓、○中略錢義廁神、李赤廁鬼、○中略之類則眞溷圊矣、

〔類聚雜要抄二調度〕康平六年七月三日壬寅、內大臣師實○藤原移御花山院、○中略同移徙作法、○中略入宅明日祀諸神、諸神者、門、戶、井、竈、堂、廁等也、以飯內盛五穀祀之、三日亦祀、以童女肇水火、炊釜內五穀祀之、

〔倭訓栞前編六加〕かはや　廁又溷又圊をよめり、側舍カハヤの義といへり、又川屋の義也、○中略今俗、除夜に廁に燈を明して神を祭るは、異聞總錄にいふ、照虛耗の風俗にて、廁鬼を汗すまじき爲なる由、雜譬喩經に見えたり、今の禪刹に、烏芻瑟麼を圖に祀るは、甚誤れる事也、紫姑神を祀て廁神とするは、朱子語類に論ありといへり、

〔類聚名物考神祇九〕獄屋神　ひとやのかみ

獄屋に入る人、今の世にては、廁室を祭る事をなす、唐にも神有て祭ると見ゆ、

〔諸國圖會年中行事大成一正月〕元日

門松飾藁　今日より十五日まで、○中略竈、神棚、湯殿、廁に至迄、松を立、輪飾とて、注連を輪にして懸

るなり、

毎朝拜廁神

〔毎朝神拜詞記〕次に廁の方に向ひ
辭別氐、廁乎掌須神等乃御前乎愼美敬比、過犯須事能有乎婆見直志聞直坐氐、枉物乃禍事有世受、夜乃守日能守爾守幸閉給閉斗、畏美畏美母拜美奉留、

〔玉手纔入〕廁神、○中略さて過犯須事乃有乎婆、見直志聞直志坐氐と申すは、例の文ながら、此は殊に能く心得て在べし、そは廁は、屋の中にも不淨の極たる所なる故に、人また卑み汚がりて、神の掌給ふ事を忘れて愼む事なく、自づからに無禮をも行ふことの有ればなり、然るは世にも流行目の病は、廁神に祈りて愈し給ふと云ひ、常に廁の穴に唾すれば眼を病むと云ふに、信に然る驗ある を以ても辨ふべく、また女の日々に廁を掃き淨めて、毎日ごとに燈明を獻るは、腰より下の病を愛ひずなども云めり、

門神

〔和爾雅二神祇〕閽ミカドノカミ神(豐石窻神、櫛石窻神也、舊事中曰二神者御門也、)

〔古事記上〕天石戸別神、亦名謂櫛石窻神、亦名謂豐石窻神、此神者御門之神也、

〔古語拾遺〕豐磐間戸命、櫛磐間戸命二神、守衞殿門、(是並太玉命之子也○中略)櫛磐間戸神、豐磐間戸神、(已上、今御門巫所奉祭也、)

〔神名秘書〕御門神
豐石窻櫛石窻神座也

〔神道問答下〕矢大臣
問云、豐岩間戸命、櫛岩間戸命は、古事記にては天石戸別命の名とし、古語拾遺其外には二神とせりいかゞ、
答云、もと一神なれど、御靈二つにわかれて其わざをなし給ふ故に、おのづから二神となり給へ

り、此例神の御うへには常也、一神の御靈、或は荒靈に別れ、夫より數々にわかるゝ事常也、今眼前一神の社、國々に大なるも小なるも數多あり、そも夫々に御靈ありて、其わざはなし給ふにてもしるべし、

〔書言字考節用集三神祇〕閽神(カドモリノカミ)本朝神祠外門、往々設二看督長像一、俚俗呼爲二矢大臣一是矣、　隨身門(ズイシンモン)土俗謂二之矢大臣門一、

〔倭訓栞前編六〕かどのをさ　看督長と書り、○中略今神社に閽神とて、弓箭を帶せる像を設け、俗に矢大臣と呼も、かどの長なり、

〔本朝續文粹一古調詩〕參二安樂寺一　江都督○大江匡房

康和二年秋、清涼八月時、秋詣二安樂寺一、寺在二東北陲一、出レ府七八里、先望二彼門楣一、○中略門。塾。安。木。梗。挾。箭。共。哆。嘁。瞻視儼如レ生、跋扈勢嶷々、

〔神道問答下〕矢大臣

問云、神社の門の左右に、闕腋を著し、卷纓の冠に緌して、劍をはき、箙を負ひ、弓を持ちたる木像あり、是を矢大臣といへり、これは誤なるべし、大臣は高官なれば、かくなめげにすべきいはれなし、思ふに、矢大將なるべきを、左右にある故に矢大臣左大臣といふなるべし如何、

答云、左右大臣の高官なる事はいふも更にて、左右大將も相當從三位にて、大臣納言の兼官なれば猶高官なり、これは隨身といひて二樣あり、ひとつは行幸の御先にたつ隨身なり、古事記に、天忍日命、天津久米命二人、取二負天之石靫一、取二佩頭椎之大刀一、取二持天之波士弓一、手二挾天之眞鹿兒矢一、立二御先一而仕奉云々とあり、神代紀にも其よしあり、萬葉集に、久堅のあまの戸開き、高千穗の嶽にあもりし、すめろぎの神の御代より、はじ弓をたにぎりもたし、眞鹿兒矢をたばさみそへて、大久米のますらたけをゝ、先にたて大刀とりおはせ云々とよめり、又ひとつは御門を守る隨身也、

門神祭

〔類聚雜要抄 二 調度〕康平六年七月三日壬寅、内大臣 藤原師實○移御花山院、○中略同移徙作法、○中略入宅明旦祀諸神、謂竈神、門、戸、井、堂、庭、廁等也、以飯内盆五穀祀之、三日亦祀、以童女擎水火炊釜内五穀祀之、

〔延喜式 八祝詞〕六月月次 十二月准此

集侍神主祝部等諸聞食登宣、○中略

御門乃御巫能辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命、豐磐間門命登御名者白氐、辭竟奉者、四方能御門爾、湯津磐村能如久塞坐氐、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氐、疎布留物乃自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜乃守日乃守爾守奉故、皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

御門祭

櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波、四方内外御門爾如湯津磐村久塞坐氐、四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾、古語云麻我許登、相麻自許利、相口會賜事無久、自上往波上護利、自下往波下護利、待防掃却言排坐氐、朝波開門、夕波閉門氐、參入罷出人名乎問所知志、咎過在乎波、神直備大直備爾見直聞直坐氐、平久安久令奉仕賜故爾、豐磐牖命櫛磐牖命登御名乎稱辭竟奉久登白、

〔古老口實傳〕年中行事

十二月晦日夜、門神祝詞文、不可有讀略之儀也、以文可申上也、

門神雜載

〔神祇拾遺〕閽神

件神、或ハ門閽神ト云、或ハ善神王ト云、或隨身ト云、或門客トモ云ク、由來コト不明レバ人々モ難心得シテ、徒ニ過コト也、共ニ高木神ノ御子ナレバ、其寄モ尋常ナルベカラズ、神代ノ昔、天孫ヲ下奉ントシテ左右ニ添申サルニ、忍日來目ノ二神ヲ模タルコト也、仍手ニ弓ヲ取リ、背ニ岩靫ノ形アリ、天神ノ外安置無益ノコトナルベシ、

〔神社啓蒙或問〕一問、闇神何義、答、此見于紀、而然其衣冠之制、予甚疑之、凡千木、加都乎木、闇神、宜撰其神而置之、社官無慮安之、寔可嘆也、

〔諸社一覧一〕問、闇神ハ何ノ義ゾヤ、答、門守也、凡千木、加棟木、闇神等ハ、此神ニ應ジテ立べキ事ナリ、中國ノ俗ハ是ヲ門客人ト云ヘリ、衣冠ノ體、黒赤ノ色、五位已上ノ装束ニシテ綏ヲシ、矢籠ヲ負、弓矢ヲ持セタリ、是誤也ト云々、アダシタ難云、

〔古事記上〕大年神、○中略 娶天知迦流美豆比賣、訓天如天、亦自知下六字以音、生子、○中略 庭津日神、次阿須波神、此神名以音 次波比岐神、此神名以音、○中略 次庭高津日神、

〔古事記傳十二〕庭津日神、名義、前後の神の類を思ふに、庭は家庭の意なるべく、日は產靈の靈なるべし、○中略 續紀、文德實錄、三代實錄等に見えたる庭火神は、卽此神の御名に依れるなるべし、火は借字にて、必庭燎のことには非じ、猶下に大嘗祭式を引る處考合すべし、阿須波神名義未考得ず、されど書に強て云ば、足場の意にや、足を阿須と云は、左に引地名の足羽など是なり、凡て何處にまれ、人の足踏立る地を足場と云、今世の言にも、足場の好き惡きなど云此れなり、凡て場と云は、庭の略にて、大庭を意富婆と云類多し、又場字をも書波と訓こともあり、何にまれ事を爲す地を某場と云、さて某場と云ときは音便にて濁れども、もと書波の略なれば、波と清音なり、故此の神名の波は、清音に唱ふるなり、さて此神は、人の物へ行とても、萬の事業をなすとても、足踏立る地を守坐神なるが故に、家毎に祭しにや、此神の事なほ次に云り、波比岐神、名義は是も未思得ず、例の強ていはゞ、波比入君の意か、伊は比の類にある故に、本より省き、又理と美とを省けるなり、如此き活用の理を省く例多く、又君の美を省く例も多かり、後撰集春上に、通ひ住侍ける人家の前なる柳を思ひやりて、躬恒、妹が家の波比入に植る青柳に今や鳴らむ鶯の聲、堀川百首にも、柴の屋の波比理の庭におくか火の煙うるさき夏のゆふぐれ、是らを思ふに、門より舍屋内に入までの間の庭を波比入と云しなり、古言なるべし、波比入されは、たゞ歩入にて、今世の言にも入を波比流と云これなり、波布とは、いさゝかの間の庭を歩き行となり、故源氏物語などに、家内などにて、彼より此へ來ることなどを波比波など多く云り、須磨浦と明石浦との間をたゞはひわたるほどい云ること、彼卷々に見えたるも、甚近きよしなり、後世にはたゞ、虫などの行をのみ波布とは云ふ、それも虫などは甚小き物にて、いさゝかの程をわづかに歩く物なる故に云なるべく、又人も僻伏て手と足として行を、波布と云、是も遠くはえ行れぬ物なれば、いさゝかの程を行意より云なり、[illegible]の人家の波比入も、門より舍まで遠からぬほどなる故に、其間を歩行入る意なり、かくて此神は

（其波比入の庭を守坐神にやあらん、故家毎に祭りしなるべし、此波比入は、古然るべき家にては、大庭と云、今世には玄關前白洲など云なる處なれば、家庭の中に就ても、むねとすべき處なる故に、殊に其神坐なるべし、）さて右の二神の事は、まづ祈年祭祝詞に、座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、波比支登御名者白氏、稱辭竟奉者、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知氏、皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氏、また月次祭祝詞にも如此見ゆ、此神社は、神名帳に宮中神卅六座の中に、座摩巫祭神五座（並大、月次新嘗、）生井神、福井神、綱長井神、波比祇神、阿須波神とある是なり、さて阿須波、波比岐二柱神の、古より如此御井神と一處にしも鎭坐りしは、共に人ノ家庭に就る神なればなるべし、又貞觀儀式、延喜大嘗祭式などを考るに、悠紀主基の兩國、各齋郡に齋院と云を構て、八神殿を造りて、御歲神、高御魂神、庭高津日神、大御食神、大宮女神、事代主神、阿須波神、波比伎神、この八柱神を祭らる、抑此齋院は御稻拔穗のためなる故に、御年神大御食神などを祭られ（高御魂、大宮女、事代主などは、神祇官にても祭らるゝ神なれば論なし、）又其庭を守坐故に庭高津日神を祭り、阿須波、波比岐二神も祭らるゝ由あるなるべし、（庭高津日は、凡ての庭、波比伎は其波比入の庭を守坐神なるべし、又齋場より、其を京に運送ふまでの、種々の事を行ふ處々を守坐がために、阿須波神をも祭らるゝなるべし、是を以ても二神の名義を、右の如くならんかと思ふなり、故に、此二神をし竈神なりと云は非なり、そは例に上に、竈神者也とあるをや、又かの齋郡の齋院は、たゞ拔穗のためのみにもて、炊爨の事には關られば、竈神は祭るべき由なし、又庭神なりと云に就て、波比岐など灰の竈ぞなど云はいよいよ非なり、灰木と云ことのあらむやは、）萬葉廿（二十二丁）上總國防人歌に、爾波奈加能阿須波乃可美爾、古志波佐之、阿例波伊波々牟、加倍理久麻低爾、此歌に庭中之とよめるを以て、當昔民家の庭に竈神などゝ共に、此阿須波神をも祭りしこと知るべし、さて此神を祭るうへは、庭高津日神、波比岐神などをも同く祭りつらん、（或るに取分て阿須波乃神爾としもよめるは、旅行を祈る故なるべし、行前々足ふみ立る地を守坐故なり、旅は家を離れ行せば旅行を祈らんと由なし、）さて右の歌は末二句を味ふに、彼阿須波神は己が家のには非で、行前の宿々の家に祭れるを伊波比つゝ行むとよめるなれば、何國にても家ごとに祭ることゝ志られたりに、（玄當）攝津國河邊郡阿須波神祠、在米谷村、今稱荒神と云るも、此神を祭れるなるべし、（中略）[illegible]國に[illegible]引神社のあるにつきて、往時に思ひけるは、かの座摩御巫祭神五座は、本[illegible]天皇の[illegible]に大

坐ましゝ時其國にて殊に崇たまひし神たちを、御位に即たまひて後、京城にも、齋祀たまひしより傳はりて、後の京京にも、同じごと祭られしにや、(中略)右の考に依るときは、阿須波は、もとかの越前の地名より出たる神名なり、されば波比岐も、又同く本は地名にて、彼國にありし神社なるべしと思ひしかど、猶さにはあらで、彼足羽社も、此の阿須波神を祀れるものと思ひなりぬ、さて後に或書を見れば、越前足羽社記曰、古者男大迹天皇、居於坂井郡三國之地焉、於是鎮祭大宮地之靈、故呼足羽、以爲地名也と云る、此說古き傳と聞ゆ、大宮地之靈を鎮祭とは、此の阿須波神を祭りたまふを云なり、庭高津日神、御兄○庭津日神に同名あり、彼神と同功德の御名なり、然るに此は其功の殊に勝りたまへりし故に、御弟なれども高と申すなるべし、此神大嘗祭の齋郡の齋院に祭らるゝこと上に引るがごとし、

〔類聚名物考神祇七〕阿須波神　あすはのかみ　社

今案に、越前國足羽郡に足羽神社有、又攝津國大坂座摩神社五座の內にも、阿須波神、波比岐神ませせり、古歌に庭中のあすはの神とよみしは、庭津日神と兄弟にておはしますゆゑか、

〔民家敬神錄〕民家にて神を祭る屋を神の棚といふ、何の御神にもませ、其神靈をうつし齋ひて、○中略必ず拜み奉るべき御神等といふは、左に擧げたる神々なり、○中略

庭津日大神　　庭高津日大神

御兄弟の御神にて、家庭を守給ふ、

阿須波大神　　波比岐大神

物へ行き、萬のわざをなすに、其蹈たつる地を守り給ふ御神なり、すべて家庭につける御神なり、

〔玉手繦八〕阿須波神、波比岐神は、是また大年神の御子にて、○中略此二神、神名式に、座摩巫祭神五座、竝大、月次新嘗とありて、御井神たちと共に朝廷に重く祭らせ給へり、其は記傳にも引れたる越前足羽社記と云ふ物に、鎮祭大宮地之靈、故呼足羽と見え、此神たちを祭り給ふ祝詞に、皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立云々と有にても知るべし、但し其は大宮地にも此神たちを祭り給ふ

宅神祭

故にこそ、然は言へ、實には大宮地は更也、諸人の家地も總ては土神の掌給ふ所にし有れば、今詞〇下條所引朝神拜錄記毎には、彼是をかねて總氏此乃屋地乎守賜布神乃御前とは申せり、〈土神こに即增山見實時なり〇中〉略毎年に分布し授け給ふ曆の始めに、土公春はかまど、夏はかど、秋は井、冬はにはと有るは、即その土地神の四時によりて、所座の違ふ由を敎へて、犯し有せじと爲給ふなり、其は曆書どもに、土公春在竈、不可泥塗竈墟、夏在門、不可修營門戶、秋在井、不可掘穿井泉、冬在庭、不可穿鑿庭土、四時所在不可犯之、但在庭者、犯土無咎など有るに依給へるにて、其元は漢籍に出たる說には有れど、其理なき事に非ざれば、此御敎へに從ひて、隨分に犯しなく、其屋地の御守りを祈白すべき事にこそ、

〔倭名類聚抄二鬼魅〕土公　董仲舒書云、土公、春三月在竈、夏三月在門、秋三月在井、冬三月在庭、

〔簠簋內傳金烏玉兎集三〕土公變化之事

春三月者在竈　龍臥　南北　東西

夏三月者在門　龍臥　北南　西東

秋三月者在井　龍臥　東西　南北

冬三月者在庭　龍臥　西東　南北

右今案者、土公四時變化也、爾土公三千大千世界主堅牢大地神也、所謂土公之變作者、當季安座舍宅也、此故不犯安座地、將又龍臥變化者、腹背頭足之四威儀也、柱立尤一二三四之相承有之所要也、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

爾波奈加能、阿須波乃可美爾、古志波佐之、阿例波伊波波牟、加倍理久麻低爾、

右一首帳丁若麻續部諸人〇中略

二月九日、上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂進歌數十九首、

〔萬葉集略解二十上〕古事記に、大年神の子に庭津日神、次阿須波神云々と有て、竈神也、祈年祭祝詞に、座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、婆比支登御名者白氏云々と見ゆ、是は庭の中に小柴もて、神籬をかりそめに造るなるべし、それをこしばさしとはいへり、

〔袖中抄十六〕あすはの神こしばさし

にはなかのあすはの神にこしばさしあれはいはゝむかへりくまでに

顯昭云、あすはの神にこしばさすとは、上總國にあすはと申神おはす、その神のちかひにて、ちひさき柴をたてゝ祈事ありといへり、上總防人歌なり、後賴朝臣悔離別と云事をよめる、

今さらにいもかへさめやいちしるきあすはの神にこしばさすとも

此歌は萬葉の歌に、あれはいはゝんかへりくまでにとよみたる心をとりて、わかれにしいもは今さらにいかゞかへらんとよめるなり、さきにわかれたることを悔るなり、

〔古事記傳十二〕袖中抄に、上總國に阿須波と申す神おはすと云るは非なり、又爾波奈加を彼國の地名とする說もわろし、

〔藻鹽草神十四〕あすはの神にこしばさし

あすはの神、〇中略又云、竈神なり、それに旅人出とて、柴などを折かけて祭をして出となり、但是はいかゞ、不可用歟と云々、

〔本朝俗諺志五〕鹿嶋龜卜

鹿嶋立、世俗旅立の日を鹿嶋立と云事有、阿須波明神を祭るなり、此神かしまに鎮座有ゆゑに云なり、前立の社といふは此神なるべし、

庭中のあすはの神に小柴さしあれはいはゝんかへりくまでに、(若麻績部諸人)神を立、神酒備、餅を以旅の安全を祈るに、旅に居る人飢つかれずと云り、俗に影膳といひて餐は此遺風なり、

〔古史傳十六〕鐵胤云、己この頃上總國武射郡邊に行たるに、里人の門内に、わたり一尺四五寸許なる小さき家形を作りて、屋根は藁にて葺たるが所々見ゆるあり、奇しく思ひて其郷人大高秀明に問けるに、此は誰にまれ、家なる人の伊勢參宮したる跡にては、必かくして朝毎に飯茶なぜ供ふるなり、何なる神を祭ると云ことは知ざれど、此邊みな然する習ひなりと云へり、これ決めて阿須波神を祭る意なるべし、かくて近き國々これ彼問試みたるに、同じ樣にする處もありといへり、彌々古の遺風なるべし、但し伊勢參りに限りて然すと云は、神參りの旅行なれば恙なくと殊に重みしての事ならんかし、

〔延喜式(八祝詞)〕新年祭

座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久、生井、榮井、津長井、阿須波、婆比支登御名者白氐、辭竟奉者、皇神能敷坐、下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知氐、皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氐、天御蔭日御蔭登隱坐氐、四方國乎安國登平久知食須我故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣、

〔延喜式(七踐祚大嘗祭)〕凡拔穗田者、國別六段、所作八神殿一字、(○中略)卽於齋院祭神八座、(御歳神、高御魂神、庭高日神、大御食神、大宮女神、事代主神、阿須波神、波比伎神、)

〔散木弃謌集(六神祇)〕傍離別といへる事をよめる

いまさらにいもかへさめやいちまるきあすはのみやにこしはさすとも

〔新千載和歌集(十四戀)〕文保百首歌奉りける時　法印定爲

たのひそよあすはの宮にさす柴のしばしが程もこねば戀しき

毎朝拜庭神

〔答問錄〕鈴屋翁〇本居宣長氏毎朝拜神式

拍手二つ額突

庭津日大神、庭高津日大神、二柱乃御靈乎愼美爲夜麻比、恐美畏美毛拜美奉留、

同前

阿須波乃大神、波比岐乃大神二柱乃御靈乎、

同前

土乃御祖乃大神乃御靈乎

〔毎朝神拜詞記〕辭別氏大年神、御年神、若年神、阿須波神、波比岐神、及此乃屋地乎守給布神乃御前乎愼美敬比畏美毛拜美奉留、

附神棚

神棚(カミダナ)トハ、屋内ニ棚ヲ架シテ以テ神祇ヲ奉祀スルモノヲ云フ、抑モ神祇ヲ棚上ニ奉祀セシ事ハ、遠ク太古ノ時ニ在レドモ、之ヲ庶民ノ屋内ニ設ケシハ、蓋シ伊勢兩宮ノ神職若クハ社僧等ガ、私ニ其神符ヲ天下ニ配付セシ頃ニアルベシ、當時之ヲ稱シテ大神宮ノ棚ト云ヘリ、惠比須棚ハ、常ニ惠比須大國ノ神影ヲ安置セルヲ以テ其名ト爲シタルモノニシテ、猶荒神ヲ奉安セル棚ヲ稱シテ荒神棚ト云ヘルガ如シ、此等ノ神棚ハ、多ク之ヲ室内ニ設クルモノニシテ、又別ニ廚ニ設クルモノアリ、之ヲ荒神棚ト云フ、

荒神棚ハ、荒神卽チ竈神ヲ祀ル所ナ、世俗常ニ之ニ獻ズルニ松枝ヲ以テシ、時ニ或ハ畫鷄ヲ貼シテ以テ祈請ノ料ニ供スルコトアリ、

歲德棚ハ、一ニ之ヲ兄方棚トモ稱ス、毎年正月曆家ノ謂ユル明(アキ)ノ方ニ向ヒテ高ク棚ヲ架シ、注連ヲ引キ、松竹ヲ立テ、供物燈火ヲ獻ジテ以テ之ヲ祀ル所ノモノナリ、

神棚掩紙

凡ソ神棚ハ、觸穢ノ時ニハ必ズ先ヅ之ガ戶ヲ閉シ、若クハ白紙ヲ貼シテ以テ之ヲ掩フヲ例トセリ、

〔大江俊尙記〕寶永五年正月元日己酉、夙起、月代發、衣服改、綠二圓座一備屈候、奉レ拜二先東方一、春東天神 氏神、平野 下御靈、鉄ヶ町地主 稻荷、俊尙產神 東天王、京屋敷地主 年德棚、神棚、○○諸神 竈神、井神、年中恩ヲ謝拜 天子、院御所、太閤、關白、左大將各遙拜、持佛堂、○中略 北小路先祖合拜、

〔古事記上〕伊邪那岐命大歡喜詔、吾者生二生子一、而於二生終一得二三貴子一、卽其御頸珠之玉緖母由良邇此四字以レ音、下效レ此、取由良迦志而賜二天照大御神一而詔之、汝命者所レ知二高天原一矣、事依而賜也、故其御頸珠名、謂二御倉板擧之神一、訓二板擧一云二多那一、

〔古事記傳七〕御倉板擧之神、こは御祖神の賜し重き御寶として、天照大御神の御倉に藏め、その棚の上に安置奉て、崇祭たまひし故の御名なるべし、さて板擧は書紀垂仁卷に、天湯河板擧てふ人名ありて、其にも板擧此云二拕儺一と見えたり、板を高く構擧て物置所に構る故に如此云るならん、新撰字鏡に、棚閣也、太奈、和名抄に、棚閣、和名多奈とあり、常にも此棚字を用ふ、萬葉にも多那てふ言の借字に此を書り、

〔民家敬神鈔〕民家にて神をまつるべきやうのあらまし

民家にて、神を祭る屋を神の棚といふ、何の御神にもませ、其神靈をうつし奮ひて、吉を招き凶を除んとの爲なれば、家の內にても淸淨なる處、二階あらば、上を人の往來せぬ所を見つくろひてまつらふべし、從來家每に祭り來れる神等、又祭るさまの仕來りも有べければ、今一槪には定めがたけれど、必ず拜み奉るべき御神等といふは、左に擧げたる神々なり、

天照皇大御神今世を照し給ふ天つ日にして、上にいへるが如し、伊勢內宮鎭座、

一高御產巢日大神天地をはじめ、萬物事業、皆此二神の產靈によりて成り出るものなり、

神產巢日大神 此二神、鎮座處々にあり、

豐受皇大御神 食物の御神にして、天照大御神と等しく祭り奉べき由緣ます御神なり、伊勢外宮鎮座、

熊野大神 天照大御神の御弟、須佐之男命なり、出雲熊野宮鎮座、

大國主大神 天下を修理固め給ひ、諸病を愈し、幽れたることを領し給ふ御神なり、出雲大社鎮座、

少毘古那大神 大國主大神に幷びて、天下を經營し、諸病を治め、醫藥の事を領し給ふ御神なり、鎮座處々にあり、

事代主大神 大國主大神の御子なり、天皇の御守り神にて、大に功ある御神なり、鎮座處々にあり、

大歲大神
御歲大神 御親子にて穀物の御神なり、鎮座處々にあり、

土御祖大神 土の御神なり

竈大神 今三寶荒神といふは、佛家の說なり、

庭津日大神
庭高津日大神 御兄弟の御神にて、家庭を守給ふ、

阿須波大神
波比岐大神 物へ行き、萬のわざをなすに、其蹟たつる地を守り給ふ御神なり、すべて家庭につける御神なり、

御井大神 井戸の御神なり

某國御魂大神 其一國を領し給ふ御神なり

某鄕總護產土神 うぶすなの御神なり

某處大神 村或は町内の鎮守の御神なり

家業大神 其職其商ひ等にて祭る御神なり

先々祭來ル大神 先代より祭り來る御神は、必ず廢すべからず、

吾信仰〻大神吾格別に信じ奉る由緒ある御神なり

此神等の御靈を殘らず祭り奉りたき事なり、されど民家間狹なるに、さばかりの御神等を一柱づゝいはひ奉らむも、家によりては成がたかるべければ、二座三座、又は一座にも齋こめ奉るべし、一座に祭んと時は、天神地神八百萬神を一つに祭るべし、二座とせん時は、一座は伊勢兩宮、一座は八百萬神となすべし、皆其々功ある御神なればなり、其上吾志す御神に物奉らむと思ふ時は、其八百萬神の御前に奉りて、其こゝろざす神にと申拜み奉れば、その心ざす神靈即ち受給へば、狹き家にても事足りて、返りて煩抹にもなるべからず、其御神體勸請なし奉る事は、何れの神社なりとも、委敷神職の人を語らひて取行ふべし、

伊勢兩宮を齋奉るに、御師より納る御祓を神體として祭る家多し、是は彼御宮の祓の麻にて、神體には事たがへど、神體には鏡、大刀、弓、矢、榊、石等、種々のものを齋奉れば、御祓をとりふへず神體と崇めんも咎むべき事にはあらず、若御神體別に勸請せば、御祓は其傍、又は外に納むべきなり、

大黒蛭子の二像を家毎に祭り來れる事、いと古き事と思はるゝなり、此二神の說まち〳〵なれども、委しき由來しれがたし、其說の中に、大黒は大國主大神、蛭子は事代主大神なりといふあり、此說もいかゞなりといふ人あれど、元來大國主、事代主御親子の大神は、必ず伊勢兩宮につぎて祭るべき大神なれば、取敢ず此二神になし、いつき祭らむも宜しかるべし、

此餘別に竈、井戸の神等、其處に祭りて拜むべし、竈門を築き、井を堀れば、神靈即其處に寄りたまへばなり、

〔毎朝神拜詞記〕拜家之神。拜詞

此乃神林ニ神籬立テ、招奉リ令坐奉リテ、日ニ異ニ稱辭竟奉ル、伊勢兩宮大神等ヲ始奉リ、天御神

八百萬國御神八百萬能神等、大八島之國々島々之、大小社々爾鎮座坐須千五百萬乃神等、其從爾給布百千萬之神等、枝宮枝社之神等、曾富登神乃御前乎毛愼美敬比、過犯須事能有乎婆見直志聞直志坐氐、各々掌分坐須御功德乃隨爾、惠賜比幸爾給比氐神習志米、道耳功績乎令立給閇斗、畏美畏美母拜美奉留、

〔諸國圖會年中行事大成一正月〕元日

門松飾藁　今日より十五日まで、○中略根引松を門に立、間口に應じ注連飾を張り、其餘裏口、井戶、竈、神棚、湯殿、廁に至迄松を立、輪飾とて注連を輪にして懸るなり、○中略

鏡餅　餅を鏡の形になし、一重二ツを一重とし、幾重といふづゝ臺にのせ、齒朶、楪を敷き、上には橙、昆布、其餘祝果をのせ、竈、井、及び神。棚、土藏、或は其家產に取扱ふ處の諸器物に備ふ、

〔大江俊在記〕享保二年七月七日、井、かまど神、神。棚、平野大江氏神御靈地主神天照大神、神々、次持佛堂拜、畢父公拜、仮後禮に出る、

〔大江俊冬記〕安永七年二月一日、今早朝家內不殘沐浴、淸火改替悉淸シ、靑侍沐浴濟後、神。棚、其外神神ノ掃除申付畢、予髮ヲ洗、小元結等ヲ改替、沐浴畢、令神拜、先諸神、先々通、次佛拜如例、家禮祝儀等神供佛供等獻、但神之おしき、主冬同姓方へ調置給候樣にと頼置、仍今日取遣、新調用ゐ、

〔西播怪談實記〕佐用郡の井野の扶持人に、大村平七と云ふ者あり、大神宮を信仰すること一方ならず、元文年中の事なりしに、ある夜門番に行てまどろみける夢に、老翁來て告て宣賜はく、朕は此邊の神なり、汝天照大神を信仰する事他に異なり、此門の外の藪の中に、故ありて大神宮の鏡埋れて有り、堀出して尊敬すべしといひて搔消す如く失にけり、平七目覺めて不審には思ひけれども、人にも嘗て物語りもせざりしに、また明る夜夢見ること前の夜に違ふ事なければ、いよいよ奇異の思ひをなすといへども、堀る事たやすからず、萬一堀て無き時は、亂心と言れむは必

大神宮棚

定なりと猶豫しけるに、三夜目の夢に、ふりし老翁來て云く、汝二夜まで靈夢を感ずと云ども、尙疑ひを抱く事、甚以て心えず、所は藪の中かやうなる所にあり、明朝早々掘るべしと老翁少し怒れる體にて立去賜ふと見て夢さめぬ、平七感涙を流し、夜の明るを待て目つけ來へ內意を伺ひ、藪の中に至り告に任せて堀りけるに、土を穿つこと深からずして、一つの石鏡現はれ給ひければ、いと〳〵信心を凝し、淸水を以て淸め奉るに、徑尺餘にして柄あり、銘はなし、宅の神棚に入れ奉りて尊敬しけるが、後にみはり山に社を建て祝ひ奉れり、これを聞傳ふる人々參詣して拜す、されば時は末世に及べども、神德のいちじるき事を感ぜぬ人ぞなかりける、

〔玉勝間十一〕肥後國の神樂歌

高所(タカドコロ)　たんなんたひらの神棚に、かはよき女體おはします、をつとはたれぞととひたれば、松のうら葉のとみ男、をさなききんだちみやしろに、學問せよとてあげたれば、うめと櫻にたはぶれて、五葉の松とぞなり給ふ、

〔世間母親容氣二〕嫁が姑と形風流の常言

得意の庄屋方へ、これまで送りし京草履を厭にして、書翰紙に歲旦の詩を書き、朱唐紙のかけ紙をして、晉上春詩と表書して持廻りければ、在々の庄屋百姓、直に神棚へ納め、燈明とぼしける心、何と心得たるや知らまほし、

〔江戶禁誌〕伏見なる辰見屋久左衞門といふ豪商の先祖は、伏見河舟の船頭にて、至極正直なる者なり、或時船中にて金袋を拾ひ持歸り、其金を明ても見ず、直に大神宮の棚へ上おき、三年の間每日何卒此金主知らせ賜へと祈りしとなり、三年目に久左衞門船の、大坂に住居して、炭薪諸國より廻し候大問屋乘合候處、大問屋、久左衞門に物語申候は、此邊に二三年已來、假分限に成候者なぞは无之哉と尋候へば、久左衞門成程有之候、此河上に久左衞門と申船頭御座候、三年以前船中

にて金を拾ひ、俄分限に成候と申せしかば、右の問屋艀より上り、船頭久左衛門宿を尋て參り見申候へば、先に咄申せし船頭の久左衛門なり、問屋驚き何と船中にては他事の樣に申たるやと申候へば、久左衛門、船中にては乘合も多く有之候へば委細咄し難く、宿にて篤と物語致すべしと存じ、外の人の樣に敘申候とて段々咄し、三年以前船中にて金袋拾ひ候へども主知れ申さず、氣の毒に存候へども其儘捨置難く、拾ひ候まゝにて直に大。神。宮。の。棚。に上置、この金主何卒知れ、返し申度段每日祈念申候處、願の通今日其元へ出合申事の嬉しさよとて殊の外悅び、直に彼金袋の儘問屋へ返し申せば、問屋も久左衛門が志深き事を感じ、我元より落し候事も時節なり、貴殿の拾れしも時節にて授られし事なれば是非取まじ、其上我等身代にて、是程の金失ひ候とて少も障る事なし、貴殿の物に致されよと云ひしかども、久左衛門兎角合點せず、問屋へ戾し候につき、問屋も致方なく請取り、扨も貴殿は古今珍敷人哉、然らば只今の業を相止、我等方へ參られよ、我何れとも能樣に計むとて、久左衛門夫婦共に召連、問屋方に差置、炭榁の商賣致させ候處、右の善事の惠みにや、久左衛門する程の事仕合よく、段々分限に成り、當辰巳屋久左衛門まで三代の內、二百萬兩の身代に成り、手代も四百六十人餘も抱へ、大坂にて無雙の分限にぞ成ける、

〔胡蝶菴隨筆〕延喜式に曰、凡そ王臣以下輙く大神宮に幣帛を供する事を得す、其三后皇太子、若供すべきものあらば、臨時に奏聞せよと云々、此式文を見るに、王臣已下は大神宮へ奉幣一向かなはざるなれば、平人は彌以て參詣をも許さぬはづの事と見えたり、しかるにいつの比よりか伊勢參宮と云て、日本國こぞりて參ることとなり、又神前にて神樂を奏する事あたはざる故に、御師の館にて大々神樂などゝいふ事をなして、百姓町人の錢貨を貪る事、淺ましき事にあらずや、併ながら此式文のごとく、平人の大神宮に近付事あたはざる時は、彌以て神道の衰微と云ものなるべし、今時は百姓町人の家。內。に。神。棚。を。設て、大神宮を勸請し、朝夕に拜む事故、庸夫愚婦も神

惠比須棚

道と云事を知るなり、是に依て朝廷よりも强て咎め給はず、いにしへの式文をもしらぬふりにして置るゝと見えたり、

〔玉手繦 六〕凡て今世人の家々に、一向宗日蓮宗の外は、誰が家にも神棚をおきて、まづ第一に伊勢兩宮の御祓の玉串を申請て、そをやがて兩宮の御神體として齋ひ奉り、但し今は日蓮宗一向宗と云へども、深く其宗旨に執せざる者は、人並に祭れるも多かり、また某々に信心の神は更なり、彼神の御靈代、この神の守符と、得るがまに同じ神棚に齋ひて、其祭日また式日などに御酒洗米をも獻るは、即有ゆる神々を勸請れる意ばへにて、實さも有べき事なれば、殊にその義を表して兩宮大神を始め奉り、有ゆる神等を招奉れる御屋として、○中略拜み奉る事なり、

〔伊勢大神宮神異記 下〕慶安三年○中略十月に、弘宣○大神宮御師久保倉氏刀下野國より常陸國水戸へ行て大麻を賦けるに、那珂の湊と云所、屋敷に祓頂戴せしを、七百軒餘の中にたゞ一家、在は一向宗也とて大麻を拒みぬる間、彼が心に任せけるに、其夜かの一向宗の家より火出て燒にけり、その一向宗は云に及ばず、那珂の湊の人皆驚きて、大神宮不信仰の所に、たゞ一家火災は神罰也とて、明朝水戸へ來て、色々懇望して大麻頂戴し、其後は彼一向宗の人も大神宮信仰深く成けると、○中略弘宣物語なり、大麻をこばむは、日本第一の宗廟伊勢大神宮を輕しめ奉るなれば、忽に神罰あたりしも理なり、日本國に生れながら、近代は異國人のきりしたんの樣に、一向宗日蓮宗のみ伊勢大神宮を輕しめて、神恩をも不知ぞあさましき、

〔雍州府志 二神社〕惠比須宮　在建仁寺門前、凡稱惠比須者、是蛭兒命也、○中略凡倭俗惠比須大黑天爲一雙、民家戸々作小像、安置棚頭祭之、是謂惠美須棚、凡自外所入家内之金銀絹帛幷酒茶肴核之類、先供斯棚、言又祈得之也、故異稱神惠美須、幷祭之者乎、

〔伊勢大神宮續神異記〕六月○寶永二年十七日、八ッ時大雨神鳴して後、山田上中の郷山本儀右衞門と

いふ者の竈のうへ、さはさはとなり渡るゆゑ、下女の市、覗きみれば、何やらんちらちらとして手近う落たり、取上奉るに包御祓なり、こはいかにと驚き、主人儀右衛門をはげしくよぶこゑ向ひ隣も聞付、みなみな掛付驚歎し、まづ恵比須棚へ納め奉りしに、參詣群をなし侍る、

〔後撰夷曲集 一春〕元日　　　元信

めでたいをかけてぞ思ふ戎棚つつた所がおもしろいとは

〔雅筵醉狂集 春〕とし玉を

釣揚年玉若夷架

書經云、文王至磻溪見呂望、望釣得玉璜、　夷の魚は珍しからで、年玉を釣たまふやう也、

〔千紅萬紫〕淺草市

淺草の市のにはとりしめ繩を荒神棚にかけろとやなく

〔竈神祭考〕竈神祭

今世にもこの神は、神棚を炊屋に作り、竈近きわたりにて拜祭るが如く朝廷にも大膳、大炊に御靈實を坐まつりて、職寮中に仕奉る臣等の以拜奉り、又春秋二度の祭祀も行れしなり、

〔玄同放言 一上〕雷魚雷鷄雷鳥（雷獸異形圖井）

雷震記に、（中略）陳眉公が祕笈の中なる太平清和といふ書を引て、灶神といふ鳥あり、朱冠烏衣とあれば、この方の雷鳥に似たり、灶神は竈神なり、國俗荒神の繪馬に鷄を畫るは、灶神の誤なるべしといへり、（灶神鳥も亦方言なるべし）この說致据あるに似たれども求め過たり、竈神の繪馬なる鷄は、原らいの鳥を畫るならん、今も荒神の棚には件の繪馬とともに、松をまゐらせざるものなし、らいの鳥松を好めばなり、この鳥はよく火災を除くといふによるのみ、又雷をおそるゝもの、正月の門松を藏めおきて、雷鳴のとき焚ことをおなじこゝろばへなるべし、事みな彼を師とするにあら

年德棚

す、灶神鳥は求め過ぎたり、世に彼繪馬を竈神にまゐらするは、寶永以來の事なるべし、何となればいづれの年にや有けん、上皇宮の亭子に、彼鳥の像を畫せ給ひしかば、その亭、寶永五年の火災に免れしとなり、この事は東涯の雜說にいへり、前に載たる輶軒小錄なる來鳥の事と異なることなければ略抄す、紹述文集、卷九說類越之白山有鳥、其名曰鶆、字出爾雅、朱冠玄衣、青趾白腹、翅端云云、州豪小武氏友梅、世虔奉山靈、新廬山腹、以休登陟者之勞、上山者數矣、竟獲視之、圖而傳之、謙時風早中納言實積卿奏進之上皇宮、宜圖其像于亭子、寶永戊子之災、亭免于燬、圖者友梅本頗卿介孫實積朝臣、屬以畫製題其上顚、屬予記之云、享保十四年己酉四月同集卷十二贊類題鶆圖、越山有鳥、其名曰鶆、潛迹深松、棲彼雀蒐、朱冠玄衣、雙々徘徊、圖而傳之、曰能避災、癸丑冬日、坊城俊實公需、これらの事世にいひもて傳へしかば、當時繪馬を作るもの、來鳥を畫きつゝ、荒神の繪馬とて賣出せしならん、かくて年たち人近ままに、はやその原を得ざらすなりて、今はをさ〳〵鷄を圖するもの歟、虎を畫きて狗となる類なり、

〔東都歲事記四〕十二月、日不定此節より竹賣ありく、荒神のふようりありく、

〔大江俊光記〕元祿十二年十二月十六日、歲德棚ツル、

寶永七年正月元日、諸神、先祖、兩親觸穢故心念計、歲德神棚ツリ、シメ計、歲德、カマド、水神、中略小餅少供、其外ヘ不供、カザリナシ、中略觸穢故也、中略京家々シメカザリ在も在、又無も在、

〇按ズルニ、寶永六年十二月十八日、東山天皇崩御アリ、本書ニ謂ユル觸穢トハ、蓋シ之ヲ云フナラン、

〔後撰夷曲集一卷〕元日之時

としどくの棚をもかりにまつらへば宿茶に似たるけふの大ふく

〔諸國圖會年中行事大成正月一〕歲德棚又兄方棚とも云其歲の吉兆の方を兄方と稱し、家每に其方に

向ひ高く棚をつり、葦索を飾り、供物燈火を獻じ、これを祭る、凡新年出收物、飯食の類は先これを獻す、神佛參詣萬事の經營此方より始む、簠簋內傳云、歲德神とは頗梨賽女にして、八將神(大歲神、大將軍神、大陰神、歲殺神、歲刑神、黃幡神、歲破神、豹尾神、)の母龍王の妻なりと云々、得方とは甲己の歲は寅卯の間、丙戊辛癸の歲は巳午の間、庚乙の歲は申酉の間、壬丁の歲は亥子の間に鎮座し給ふ、これを得方といふ、○中略中世京師街頭を鞍馬の毘沙門天の紙符、幷弱惠美須等の福神の簡を賣る、四民これを買うて門戶に貼、或は歲德棚に供じ、これを拜して福を祈り祚を索む、

〔簠簋內傳金烏玉兎集〕一歲德神方

九(甲己)年東宮在甲、(寅卯)間、　八(乙庚)年西宮在庚、(申酉)間、

五(戊癸)年中宮在戊、(丑辰、未戌)間、或(巳午)間、

七(丙辛)年南宮在丙、(巳午)間、　六(丁壬)年北宮在壬、(亥子)間、

右北方者頗梨采女方、八將神之母也、容顏美麗、忍辱慈悲之體也、故尤諸事可用之也、

〔雅筵醉狂集〕春試筆

家ごとに注連かざり繩くるとしの德隣ある神の棚かな

論語云、德不孤必有隣、管子云、春嬴育、夏長養、秋聚收、冬閉藏、此之謂歲德、これは異國の說にて別なり、年德とは神書に所謂大歲の神なり、日本の國風にて、春のはじめ家々に棚をかまへ、注連はり、此神をまつり、酒菓など供する也、

〔東都歲事記一正月〕元日

今朝若水を汲む、今日より三日迄、貴賤雜煮餅を食し、大服をのみ、屠蘇酒をすゝむ、屋中年德棚を儲く、今日より六日迄を松の內といふ、

門神棚

〔水戸歳時記〕正月六日、今日ヨリ常ノ食ニ復ス、薄暮門松ヲトリ、木杪ヲ切テモトノ穴ヘサシオク、歳德ダナ、松カザリモトル、タナバカリノコシオク、

〔類聚名物考神祇二〕年德神　としとくえん

年德とは、神書に所謂大歳の神なり、日本の國風にて、春の初め家々に棚をかまへ、注連はり、此神を祭り、酒菓など供するなり、

〔俳諧歳時記卷一〕正月

えはう棚　陰陽家來年の支干によりて、四方の間吉兆の方を致へ、これをあきの方といふ、俗又これをえはうといふ、俗間家毎にその方に向ひ、高く棚を張り、幣帛を飾て松竹を建、供物灯火を獻じてこれを祭る、これを歳德棚といふ、凡そ新年出納のもの、及飮食の類、必先これを獻ず、萬事の營み、この方よりはじむ、

〔玉手箱八〕毎年に、上より分布し給ふ假名暦に、歳德明方、ことしは何方ぞと御教をなして、萬よしと徵させ給ふ事なるが、此は唐土の暦法を用ひ給ふより始れる事にて、暦法の書どもに、向此方萬事有大幸とも、歳德方一年間有德方也とも見えたり、中略是を以て此正朔を奉ずる限りの人は、貴賤貧富を云ず、誰しの家にも正月には、其謂ゆる明方に歳德棚と云を設けて、注連を引亘し、いみ清めて種々の物を獻りて、當年の穀物の生就は更なり、幸福をも祈り白す事なるが、其祭る意ばへは唐土の暦書の旨とは異にして、專と御年の皇神たちを祭る意なるを思ふに、此はいと古昔より上件の由緒によりて、戸ごとに年の始には祭り來にけむを、分ち賜はる暦の歳德明方の御教令に從ひ奉り、其をうち混じての祭禮と見えて、實に然も有べき事とこそ思はるれ、

〔華實年浪草卷一上〕門神棚

未詳、其義、按月令廣義曰、除夜祭門神、注、道家謂門神、左曰門丞、右曰戸尉、蓋司門之神、其義本自桃符、

以神茶鬱壘辟邪、故樹之于門云々、本朝亦據此意乎、

〔華實年浪草一春上〕門松

禮月令集説曰、戸者人所出入、司之有神、此神是陽氣在戸之内、春陽氣出故祭之、

〔俳諧歳時記春一〕正月

門の神棚　門松

〔大江俊矩記〕文化二年四月先妣御事雜誌

十四日丁卯、亥刻御終焉、　十五日戊辰、神棚、大黒、荒神、悉以紙張之、從是十三月之間、如此閉置也、

〔竈神祭考〕觸穢の事一ッ二ッを擧て論

抑この火の穢を神にふれ奉るときは、禍津日神所を得て荒び給ふことなれば、穢ある限りは神棚を戸ざし奉り、又其主人も猥りに他人と同火を忌むべき也、

〔玉手繦六〕諸觸穢の事は、今公より定め給ひて、世に推竝て用ふる所は箇條も少く、日數も少く、本より簡易に定め給へる事なれば、誰も從ひ用ふべき事なれども、今爰に論ふ所は神拜に付ての事なれば、神宮の御令を以て規則とせん事然るべく所思ゆ、〇中略扨こゝに同じ神拜と云ふ中にも、遙拜をなし、或は產土神、氏神、または家に齋奉る神籬を拜み奉る事などは、各々內外親疎の差別有て、忌穢の日數も多少あるべき事なれば、今その大概を示す事左の如し、〇中略家の神棚は〇中略大御神の御靈代を始め奉り、八百萬神等を齋き奉りたる神籬なれば、其神實の尊き事は申も更なる事なれど、直に其本宮に參りて拜み奉るとは其趣異なり、然るは本より家內に齋奉りては、其身其家既に穢るゝ時は、神棚にも穢の及ばむ事、こは何とも止べからざる事なり、然れば予が家にては、父母の喪なれば五十日、祖父母の喪には三十日の遠慮として、暇の日數のみ神拜を止めて、忌明には身滌祓をなして其より拜禮する事なりて、產穢、死穢、改葬等のけがれも右に准へて、世間普通の日數な限りさす、又獸肉

の穢はいと重き事なれば、慎みて食ふべからず、されど若過ちて穢るゝか、其外種々の穢に觸たりさし、三日或ハ五日すぎて沐浴ひ、又は行水などして、其後は神拜奉る事なし、但し當分は常の者座より少し退きて拜み奉らむも然るべし、また若くは其身穢れたりとも、一族又は家子等の中にて、忌服なき者を撰びて、別火潔齋を爲さしめ、我に代りて怠らず神事を勤しめむも然るべし、總て神酒御饌、その外供物など獻るに付ては、種々子細ある事なれども、それは此に盡し難ければ、省きつ、大凡は上に云る事どもに准へて、各も〱心を竭して過犯し無るべく仕へ奉らん事、云も更なり、穴かしこ、

〔竈神祭考〕忌服と汚穢とは差別ある事の論

服中家内の神は拜み奉るべし、神社に參詣する事はならずなど、こざかしくいひまろふめり、これいたく誤り也、家内の神棚の神も、外々の社々の神も、神は同じ、家内の神をば拜み、神社に參詣する事はならずといふ理あらんや、ともに忌憚り奉るべきことにこそ、

〔百錬抄四後一條〕長元四年八月五日、召問祭主輔親去六月荒祭宮託宣之趣、申云、齋宮寮頭藤原相通妻宅内作大神宮寶殿、詐假神威、誑惑愚民、其罪已重、早可配流者、　八日相通配流伊豆國、妻比美古曾流隱岐國、先令諸卿定申、

〔南嶺子四〕天照皇大神は朝家の宗廟なり、公卿百官といへども私に祭るべき様なし、延喜式に、皇后皇太子といへども、私に幣物を上る事をゆるさゞるの禁あり、いはんや賤民をして宮社に親近しむるの非禮をいかん、百錬鈔第四曰、長元四年八月、○中略八日相通配流伊豆國、妻比賣古曾流隱岐國云云、後世の巫覡等私に是を家に祀り、祈禱して神威を借をよしといはんや、庶人の家内に天照大神、八幡大神等の天子の祭場をかまへ、侵汚の僭上おそれざるは愚の至極といふべし、

〔答問錄〕三條　折にふれて祭らんと思ふ神のあるに、其社の近きあたりになくて詣ることの難き、或は其御社の今にきこえぬなどは、吾家の奥の床などを心のかぎり忌清めて、清き机代物奉りて祭るべきか、さらば其御靈實はいかにすべきか、

答、○本居大平わが家の奥床にいはひ清めて祭らんもようしかるべけれど、古へより遙拜といふこ

とあれば、わが身をいみ清めて、はるかに拜まんもよろしかるべし、その御靈實は、鏡、劒、笏、玉、鈴、石などをまつれること古書どもに見えたり、淸淨の土地より得たらん形よき石をするも、又臨時には榊、松、竹、何にても常磐木の枝を茂く結び立て、御室として祭らんもよろしかるべし、事のさたによりて今の代の俗のまゝに、御札、祓の大麻などやうの物も、御靈實とあがめまつらんに何てふことかあらん、

古事類苑

神祇部十八

大嘗祭一

古事類苑

神祇部十八

大嘗祭一

大嘗ハ、古言ニオホニヘト云ヒ、轉ジテオホムベトモ云フ、後世ハ字音ヲ以テダイジヤウト稱シ、又大嘗祭ト云ハズシテ、大嘗會トノミ云フハ、節會ノ方ヨリ稱スルナリ、此祭ハ天皇即位ノ後、始メテ新穀ヲ以テ天照大神及ビ天神地祇ヲ奉祭シ給フ一世一度ノ新嘗ナレバ、之ヲ大新嘗トモ云ヒ、又即位後必ズ行ヒ給フヲ以テ、踐祚大嘗祭トモ云フ、諸祭祀中ニ在リテ大祀ト稱スルハ此祭ニ限レリ、故ニ其準備ノ鄭重ニシテ、其儀式ノ盛大ナルコト、其比ヲ見ズ、儀式ハ十一月卯日ノ祭ニ始マリ、辰巳兩日ノ節會、及ビ午日豐明節會ニ至ルマデ、四日間ニ亘レリ、其中忌火御飯、及ビ御贖物ヲ供ジ、忌火庭火祭アリ、大殿祭アリ、式畢テ解齋ヲ行ヒ、及ビ職員ヲ卜定スル等ノ事ハ、新嘗祭神今食ニ異ナラズ、又祭神及ビ五節舞姫ノ參入殿上淵醉等ノ事モ新嘗祭ニ同ジキヲ以テ、此等ハ彼篇ニ詳ニシ、此篇ニ略セルモノ多シ、

凡ソ大嘗祭ニハ、悠紀ノ國アリ、主基ノ國アリ、之ヲ兩齋國ト云フ、即チ此二國ノ稻ヲ用ヰテ神饌ト爲ス、故ニ預メ其國郡ヲ卜ス、是ヲ國郡卜定ト云フ、中世以後ハ郡ノミヲ卜シテ國ヲ卜セズ、毎ニ近江ヲ以テ悠紀トシ、丹波備中ヲ以テ交番ニ主基ト定メタリ、多クハ其年ノ四月中ニ行フ例ナレドモ、時宜ニヨリテ早キハ二月ニ行ヒ、晩キハ九月ニ至ルコトアリ、然レドモ、何レモ即位後ノ事ナルヲ、後白河天皇、後伏見天皇ノ二朝ニ在リテ、即位以前ニ行ハレ

タルハ異例ト云フベシ、國郡ト定ニ次デ撿挍行事等ノ職員ヲ定ム、撿挍ハ祭祀ニ關スル一切ノ事ヲ監査董督スル職ニシテ、大中納言參議ヲ以テ之ニ充ツ、行事ハ悠紀主基ニ分レ、各其事ヲ分掌スル職ニシテ、辨官等ヲ以テ之ニ充ツ、次ニ行事所始ノ事アリ、撿挍行事等ノ職員、日時ヲトシテ行事所ヲ開始シ、宣旨官符等ノ奏請宣行ヲ始トシテ、出納所、齋場所、小忌所、細工所、女工所、樂所、風俗所、和舞所、大炊所等ノ預ヲ定メ、或ハ才伎藝術ノ人ヲ選ビテ、各其職ニ從ハシムル等、凡ソ此祭典ニ就キテノ政令、大概此所ヨリ出デザルハナシ、

八月下旬、悠紀主基ノ拔穗使ヲト定シテ齋國ニ發遣ス、拔穗使ニハ宮主ト部ヲ以テ之ニ充ツ、各其齋郡ニ到リ、國司ト共ニ薦享酒醴ノ料稻ヲ拔キ取リ、九月下旬歸京シテ之ヲ齋場ニ納ム、又八月上旬、大祓使ヲト定シテ五畿七道ニ發遣シ、伊勢大神宮ノ爲ニハ特ニ同使ヲ近江、伊賀、伊勢ノ三國ニ遣ス、大祓使發遣ノ後、奉幣使ヲ差遣シテ、伊勢大神宮ヲ始メ、五畿七道ノ大小ノ神社三千一百三十二座ニ幣帛ヲ奉ラシム、是ヲ大奉幣ト云フ、卽チ新年祭ニ預ル所ノ神社ナリ、別ニ由奉幣ト云フアリ、大嘗祭ヲ行ハントスル由ヲ神祇ニ告ゲ給フナリ、初ハ伊勢大神宮ニノミ奉幣セシガ、後ニハ石淸水、賀茂ノ二社ヲ加ヘテ、是ヲ三社ノ奉幣ト云フ、後世大奉幣使ノ典廢スルニ及ビテモ、此奉幣ノミハ行ハレタリ、又八月上旬、神祇官ノ史生ヲ河內、和泉、尾張、參河、備前ノ五國ニ遣ハシテ、神御ノ雜器ヲ監造セシメ、九月上旬ニハ、ト部ヲ紀伊、淡路、阿波ノ三國ニ遣ハシテ、神御ノ雜贄ヲ監作セシム、共ニ之ヲ由加物使ト稱ス、又九月上旬ニハ、神服社ノ神主一人ヲ參河國ニ差シ、神服部ヲシテ調絲ヲ績ナシメ、之ヲ齋場ニ齎チ歸リテ、和妙ノ神服ヲ織ラシム、是ヲ神服使ト云フ、

是ヨリ先キ、宮城ノ北野ヲト定シテ、東西ニ悠紀主基ノ齋場ヲ設ク、齋場ハ內外兩院ニ分チ、內院ニハ八神殿、稲實殿、黑白酒屋、倉代屋、贄屋、臼屋、大炊屋、麴室等アリ、外院ニハ多米酒屋、倉

代屋、供御料理屋、多米料理屋、麴室等アリ、別ニ神服院アリ、小忌院アリ、出納所、細工所以下所所ノ屋舍アリ、其他官人ノ宿屋雜舍等數フルニ遑アラズ、拔穗神服、由加物以下、神御ノ料物、祭祀ノ調度等、悉ク此所ニテ調理設備シ、卯日ニ至リテ大嘗宮ニ送致ス、大嘗宮ハ大嘗祭ノ正殿ニシテ、祭ニ先ダツコト七日、始テ工ヲ起シ、五日內ニ造リ畢ル、東西二十一丈、南北十五丈、之ヲ中分シテ東ヲ悠紀院ト爲シ、西ヲ主基院ト爲ス、外ハ繞ラスニ柴垣ヲ以テシ、內ハ隔ツルニ屛籬ヲ以テス、東西南北ニ各小門ヲ設ク、別ニ廻立殿アリ、膳屋アリ、膳屋ハ神僎料理ノ所ニシテ、廻立殿ハ天皇ノ沐浴シテ祭服ヲ著ケ給フ所ナリ、北野ノ齋場ハ卯日ニ至リテ毀撤シ、大嘗宮ハ、辰日齋國ノ人夫ヲシテ壞タシメ、其殿舍雜具ハ中臣忌部等ニ頒チ賜フ、大嘗宮ノ地ハ、古來一定セズ、孝謙天皇ハ南藥園新宮ニ於テシ、淳仁、光仁、桓武ノ三天皇ハ、太政官院（淳仁天皇ノ時ハ、乾政官院ト云フ、）ニ於テシ給ヘリ、仁明天皇以後ハ、時ニ豐樂殿、又ハ太政官廳ヲ用キ給ヒシコト無キニアラザレドモ、多クハ大極殿龍尾道ノ前ニ大嘗宮ヲ作レリ、又高倉天皇ノ治承元年、大極殿燒失ノ後數朝ノ間ハ、紫宸殿、太政官廳等ヲ用キ給ヒシカドモ、四條天皇以後、後土御門天皇ニ至ル迄ノ間ハ、大極殿前ノ舊址ニ大嘗宮ヲ作リ、東山天皇ノ貞享以後ハ、都テ紫宸殿ノ前庭ニ大嘗宮ヲ作リテ祭祀ヲ行ヒ給ヘリ、辰日以下節會ノ殿ハ、古ハ豐樂殿ヲ用キシガ、後世專ラ太政官廳、又ハ紫宸殿ニテ行フコト、ナレリ、

齋戒ハ、文武天皇ノ大寶令ニハ散齋三月、（九、十、十一月、）致齋三日（十一月中ノ丑寅卯ノ三日、）ト定メシガ、後平城天皇ノ大同三年ニ、散齋三月ヲ改メテ一月（十一月朔日ヨリ晦日ニ至ル、）トス、其制、十月中旬、太政官符ヲ京畿諸國ニ下シテ、齋戒ノ事項及ビ忌詞等ヲ告知シ、又時ニヨリ北辰ノ奉燈ヲモ禁ゼシ事アリ、

十月下旬ニ至リ、天皇河上ニ臨ミ給ヒテ祓禊ノ事アリ、之ヲ御禊ト云フ、是ヨリ先キ九月中旬ニ、御禊裝束司及ビ次第司等ヲ定ム、先ヅ河上ノ點地アリ、幄舍ノ分配アリ、點地ノ時ハ、國

土ヲ踏ズル者ヲ召シテ郷邑ノ名ヲ問ヒ、繪師ヲ召シテ其地形ヲ圖セシメ、輕舍分配ノ時ハ、山城國ヲシテ儀仗ヲ備ケシムルヲ例トス、行幸ノ當日ニハ、先ヅ節旗ヲ進メ、文武百官乘輿ニ從フ、幼主ノ時ハ、母后同輿ノ儀アリ、節下（節旗ノ下）ノ大臣以下騎馬ノ陪從、皆唐鞍ヲ用ヰ、女御代以下供奉ノ女官、車ヲ連ネテ衣ヲ出ス等、行裝大ニ他ノ行幸ニ異ナリ、上ハ院宮ヨリ下ハ庶人ニ至ルマデ、或ハ棧敷ヲ設ケ、或ハ路頭ニ群集シテ之ヲ拜觀ス、御禊ノ地亦一定セズ、平城天皇ハ、初メ葛野川ニ於テシ、後再ビ近江國大津ニ於テシ給ヒ、嵯峨天皇ハ松崎川ニ幸シ、淳和天皇ハ佐比河ニ幸ス、仁明天皇以後ハ鴨河ニ於テセラル、東山天皇ノ貞享以後ハ、河上ノ行幸ヲ廢シテ、清涼殿ノ東庭ニ於テ之ヲ行ヒ給フコトヽナレリ、又檢校行事以下內外祭儀ニ預ル職員等ノ解除ニハ、九月ニ荒見河ニ於テ祓禊アリ、（此祓事ノ後、齋場ヲ卜定スル例ナリ、）後世ハ紙屋川ニテ行フ、又八月ヨリ十月マデハ、晦日每ニ大祓アリ、十一月晦日ニ至リテ、在京諸司ノ解齋大祓ヲ行ヒ、十二月上旬ニ至リ、齋郡ノ解齋大祓ヲ行フ、

卯日平明、神祇官幣帛ヲ新年祭案上ノ神祇ニ班チ、夜ニ及ビテ天皇廻立殿ニ行幸アリ、沐浴ノ後祭服ヲ著ケテ悠紀ノ正殿ニ御ス、小忌大忌（小忌大忌ハ、即チ小嘗大嘗ナリ、職員卜定ノ時、卜ニ合フヲ小嘗トシ、其他ヲ大嘗トス、小嘗ノ人ハ、特ニ齋戒ヲ勵ミ、小忌衣ヲ著テ神事ニ奉仕スレドモ、大嘗ノ人ハ、天皇沐浴ノ後ハ、大嘗宮及ビ廻立殿ニ入ルコトヲ得ズ、）ノ群官參入ノ後、宮內官人、吉野ノ國栖ヲ率ヰテ古風ヲ奏シ、悠紀ノ國司歌人ヲ率ヰテ國風ヲ奏シ、出雲、美濃、但馬等ノ語部ハ古詞ヲ奏シ、隼人司ハ、隼人ヲ率ヰテ風俗ノ歌舞ヲ奏ス、次ニ天皇親ラ神饌淸酒ヲ神祇ニ供ジ、亦自ラ御饌ヲ喫シ給フ、既ニシテ廻立殿ニ還御シ、更ニ沐浴シテ祭服ヲ改メ主基ノ正殿ニ御ス、國栖以下ノ奏、及ビ薦享ノ式、悠紀ニ同ジ、辰日ハ悠紀ノ節會ニシテ、御膳及ビ白黑酒ヲ天皇ニ供ジ臣下ニモ亦饗膳ヲ賜フ、悠紀國司ヨリ多米都物鮮味等ヲ獻ジ、又插頭和琴等ヲ獻ズ、壽詞ノ奏アリ、標山ヲ立ツル事アリ、壽詞ノ奏トハ、中臣ノ天神壽詞ヲ奉マ

ルヲ謂フ、古ハ此時忌部ノ神璽ヲ奉ル事アリシガ、此禮早ク絶エタリ、標山ハ悠紀主基兩國司ノ列立スベキ標木ニシテ、山形ヲ作リ、種々ノ裝飾ヲ施セルモノニテ、卯日齋場ヨリ供神物ト共ニ之ヲ挽ク、是亦東山天皇貞享以後ハ廢絶セリ、巳日ハ主基ノ節會ニシテ、壽詞ノ奏ナク、白黒酒ヲ供ズル事ナシ、其他ハ大略辰日ニ同ジ、但辰日ニモ、悠紀節會ノ後ニ、主基ノ節會ノ略儀アリ、而シテ巳日ニモ、亦主基節會ノ前ニ悠紀節會ノ略儀アリ、故ニ辰巳兩日、悠紀主基兩節會アルナリ、而シテ巳日ニハ、主基節會畢リテ後、豐樂殿ノ後房淸暑堂ニ臨御シ、終夜神宴御遊アリ、之ヲ淸暑堂御神樂ト云フ、後世他殿ニテ節會ヲ行フ時ハ、便宜ノ所ヲ淸暑堂代トシテ行ハレタリ、午日ニハ豐明節會ナリ、悠紀主基兩國司、及ビ群臣ヲ豐樂殿ニ會シテ宴ヲ賜フ、吉野國栖歌笛ヲ奏シ、久米舞アリ、吉志舞アリ、五節舞アリ、宣命使宣命ヲ讀ミ、群臣祿ヲ賜ヒテ退出ス、其他御膳獻酒等ノ次第、他ノ節會ニ異ナルコトナシ、

未日ニハ、神祇官幷ニ諸司六位以下ノ官人、及ビ齋國ノ郡司役夫等ノ敍位賜祿ノ事アリ、但他ノ日ニ於テセシコトモ少カラズ、殊ニ其他ノ人々及ビ女官ノ敍位賜祿等ハ、或ハ卯日以前ニ行フコトアリ、或ハ未日以後ニ行フコトアリ、又古ハ兩齋國ノ租庸ヲ免ズル事アリ、其地ノ貢獻多端ニシテ、負荷甚ダ重キヲ以テナリ、蓋大嘗祭ノ用途ハ、當初ハ兩齋國ヲ始メ、山城及ビ河内以下ノ五國、紀伊以下ノ三國等ノ如ク、特ニ其國郡ヲ定メテ負擔セシメシガ、後ニハ一般ニ諸國ニ課シテ、段米、段錢ヲ徵發スルアリ、又成功ヲ募リテ其足ラザルヲ補フコトモアリシナリ、德川氏ノ時ニ至リテハ、一切ノ用途ヲ擧テ、幕府ヨリ之ヲ支辨セリ、其他大嘗宮以下諸殿ノ裝飾、儀仗、調度、祭具雜器、及ビ職員ノ齋服、歌詠本文等ニ至リテハ、事多端ニ涉レルヲ以テ、今一々解説スルニ遑アラズ、

抑大嘗祭ハ前ニモ略陳セルガ如ク、其義全ク新嘗祭ニ同ジキヲ以テ、古ハ大嘗ヲモ新嘗ト

名稱

書シ、新嘗ヲモ大嘗ト書シテ、其區別明ナラズ、故ニ淸寧天皇二年十一月ノ大嘗、皇極天皇元年十一月ノ新嘗ノ如キハ、共ニ卽位ノ大嘗ノ如クナレドモ、其實果シテ如何ナリシカ、之ヲ知ルベカラズ、天武天皇ニ至リ二年十一月ニ、卽位ノ大嘗アリテ、其五年及ビ六年ニ新嘗ノ事アリ、是ニ至リテ大嘗新嘗ノ區別稍明ナリ、サレバ天武天皇以前ナルハ、都テ新嘗祭篇ニ載セ、此篇ニハ專ラ天武天皇以後ノ大嘗ヲノミ收メタリ、〈猶此等ノ事ハ新嘗祭篇ニ詳ナリ、就テ看ルベシ、〉而シテ貞觀儀式ノ制、受禪ノ天皇ハ、其卽位七月以前ニ在ラバ、當年大嘗ヲ行ヒ、八月以後ナラバ、明年ニ行フベキ事ト定メタリ、サレド古來變例ナキニアラズ、淳仁天皇ハ、八月ニ卽位シ、其十一月ニ之ヲ行ヒ、後白河天皇、後伏見天皇ハ、共ニ十月ニ卽位シ、其十一月ニ之ヲ行ヒ給ヘリ、是レ竝ニ卽位後、時ヲ經ズシテ直ニ行ヒ給ヒシ例ナリ、之ニ反シテ卽位後種々ノ事情ニ由リテ延引セシアリ、持統、元明、平城、嵯峨、文德、朱雀、三條、安德、順德、四條、後土御門、櫻町等ノ天皇是ナリ、又先帝ノ崩後ヲ承ケ給フ所謂諒闇登極ノ天皇ハ、必ズ諒闇期滿ノ後ニ大嘗ヲ行ヒ給フ例ニテ、平城、文德等ノ天皇是ナリ、而シテ國郡卜定及ビ御禊等ヲ行フ後、故アリテ翌年ニ延引スル時ハ、御禊ハ必ズ復ビ之ヲ行ヘドモ、國郡卜定ハ再ビ行フ事アリ、或ハ行ハザル事モアリテ一樣ナラズ、其他一帝ニシテ、再ビ大嘗ヲ行ヒ給ヒシアリ、稱德天皇是ナリ、或ハ全ク大嘗ヲ行ヒ給ハザリシアリ、崇光天皇是ナリ、後世兵亂相踵ギ、朝廷ノ典禮大ニ衰フルニ及ビテ、此大典モ亦舊制ノ如ク行フコト能ハズ、後土御門天皇ノ文正以後ハ、永ク中絕セシガ、東山天皇ノ貞享四年ニ至リテ再興セラレシニ、中御門天皇ノ時復タ行ハレズ、櫻町天皇ノ元文三年、更ニ復興セラレテヨリ以來、永ク歷朝不刊ノ大典ト爲レリ、

〔類聚名義抄〕十僧大嘗オホ▲

〔釋日本紀〕二十一秘訓六 大嘗オホニヘ 私記

〔古事記 上〕爾速須佐之男命、〇中略亦其於聞看大嘗之殿屎麻理散、

〔古事記傳 八〕大嘗、書紀には新嘗とあり、同じことなり、續紀廿六二十五丁には大新嘗ともあり、何れも意富爾閉(オホニヘ)と訓べし、〇中略さて後世には、踐祚大嘗を大嘗と云、毎年のを新嘗と分て云へども、古は通し云て同事なり、

〔日本書紀 十五清寧〕二年十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、

〔日本書紀通證 二十〕大嘗、天武紀訓於保牟倍、又訓於保爾倍、仁德紀苞苴訓同、而古事記作大贄、其義可見、蓋大嘗之日、始出于此、而古者不必別大嘗新嘗、故顯宗紀作新嘗、

〔天智天皇外記〕二年戊辰十一月二十四日癸卯、行大嘗祭、王者一世一度大祭始于此、日本決釋

〔續日本紀 二十六稱德〕天平神護元年十一月庚辰、詔曰、〇中略大嘗乃政事乎取以奉供止之念行天奈毛位冠賜久止宣、〇中略又詔曰、今勅久、今日方大新嘗乃猶良比豐明聞行日仁在、〇下略

〔大日本史 神祇四〕按、大嘗、蓋大新嘗之約、續日本紀宣命有大新嘗之語、可以證也、

〔八雲御抄 三神下〕大嘗會は、おほんべと云、

〔古今和歌集 二十大歌所〕眞金ふくきびの中山おびにせるほそ谷川の音のさやけさ

此歌は承和の御べのきびの國の歌

〔古今餘材抄 二十〕おほむべは大嘗也、おほなめともいへり、〇中略御べと書るは誤也、

〔古今集遠鏡 六〕千秋云、おほんべは、大嘗(オホニヘ)のにを音便にんといひ、へを濁るは、上をんといへば也、

〔名目抄 臨時〕大嘗會(ダイジャウヱ)

〔下學集 下態藝〕大嘗會(ジャウヱ) 天子即位之年、以其新米獻伊勢大神宮、謂之大嘗會、十一月卯日也、

〔神道名目類聚抄 五祭祀〕大嘗祭(オホムベノマツリ/ダイジヤウサイ)　大嘗會(ダイジヤウヱ)トモ

〔鹽尻 四〕大嘗會　大嘗 禮記祭統曰、外祭則郊社是也、内祭則大嘗禘是也云々、我朝大嘗會本之者也、

〔空穗物語二〕このおびをさすこと、大嘗やうゑことしのないえんになんさしつる〇下略

〔代始和抄〕大嘗會事

大嘗會は、一代一度の大神事なり、令書にはおほむべと訓せり、毎年に行はるゝをば是を新嘗會といふ、新嘗の二字、日本紀にはにひなめとよめり、嘗はなむる也、新穀をなめんとして、まづ神祇にこれを供するを嘗の祭といふ、和漢の義その心おなじ、大嘗も新嘗も、共に十一月中の卯の日也、さだまれる例也、〇中略御卽位は漢朝の禮儀をまなぶものなり、大嘗會は神代の風儀をうつす大嘗會の式をば、前行の大臣作進するもの也、

〔大嘗會儀式具釋一〕大嘗會ト云ハ、其年ノ新穀ヲ天子ミヅカラ天神地祇ヘ供ジ、天子モ亦キコシメシタマフ義也、大ハ大小ノ義ニハ非ズ、尊稱也、大嘗ト云ハ御嘗ノ義也、訓ジテオホンベト云、又新穀ヲ供ズルガ故ニ、新嘗トモ云抑大嘗ノ字ハ、古事記ニ天照大御神聞召者大嘗トアル是初ナリ、卽是ヲ日本紀神代上ニハ新嘗ト記セリ、サレド是ハミヅカラキコシメスノミニテ祭ニハ非ズ、其後日本紀神代下ニハ天稚彥之新嘗トアルモ亦同ジ、人代ニ至リテハ、日本紀仁德天皇四十年ニ、當新嘗之月以宴會日賜酒ト見エ、古事記履中記云、坐難波宮之時、坐大嘗而爲豐明之時、於大御酒宇良宜而大御寢也ナドヽ見エタレドモ、何樣ニ行ハレタルヤ知ベカラズ、日本紀淸寧天皇二年十一月ニ、依大嘗供奉之料遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯ト見エタリ、其播磨國ハ齋國ナルト見エタレバ、大嘗ノ儀ハ正シク此時ヨリ初マルトヤイフベカラン、マタ顯宗天皇二年十一月ニ、播磨國司伊與來目部ノ小楯於明石郡親辨新嘗供物ト見エ、天武天皇五年九月ニ、爲新嘗卜國郡也、齋忌則尾張國山田郡、次丹波國訶沙郡ナドヽモ見エタレバ、昔ハ大嘗トモイヒ、又新嘗トモ云テ、サシテ差別モ見エズ、其後大寶元年ノ令ニ至リテハ、スベテ大嘗ト云テ、其中ニ毎年行ハルヽハ事小ニシテ、御一世ニ一度ヅヽ行ハルヽハ事大ナルヲ、共ニ新嘗トハ云ハザリ

シ、今ヨリ後ノ國史貞觀延喜等ノ書ニ至リテハ、御一世ニ一度ヅヽノ事大ナルバカリヲ大嘗ト云テ、毎年ノハ新嘗ト云ヒ別ル事ニ成テ、今世マデモカクノ如シ

○按ズルニ、本書大嘗新嘗ノ辨ニハ誤アリ、是ハ新嘗祭篇ニ詳ナレバ就キテ看ルベシ、

〔令義解 二神祇〕凡天皇即位、總祭天神地祇、(謂即位之後仲冬乃祭、下條所謂大嘗者毎世一年、國司行事是也、)

凡大嘗者、毎世一年、國司行事、

〔延喜式 一四時祭〕凡踐祚大嘗祭爲大祀、

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

天皇即位之年、(七月以前即位、當年行事、八月以後、明年行事、謂受讓即位、非謂諒闇登極、)

〔三代實錄 三十陽成〕元慶元年十月卅日丁酉、所司大祓於朱雀門、緣欲供奉大嘗會也、十一月戊戌朔、頒告百官五畿、豫禁凶事、凡天皇受讓踐祚、七月以前即位者、當年行事、八月以後者、明年行事、

〔延喜式 七踐祚大嘗祭〕凡踐祚大嘗、七月以前即位者、當年行事、八月以後者明年行事、(此據受讓即位、非謂諒闇登極、)

〔北山抄 五〕大嘗會事

天皇即位之年、(七月以前即位、當年行事、八月以後、明年行事、諒闇時、踰年後行之、即位者、謂行即位儀乎、)

〔延喜式 十一太政官〕凡踐祚之初有大嘗祭、(○中略)大臣奉勅召神祇官、卜定悠紀主基國郡、(政封卜之)奏可訖、即下知依例准擬、又定撿挍行事、八月遣使兩國、卜拔穗田及齋場雜色人、令行事、幷仰諸國造供神器、九月造齋場、織神服、備供神物、十月遣諸國大祓及差奉幣使發遣、即天皇臨幸川上爲禊、十一月爲散齋月、(自朔日至晦日)月內致齋三箇日、(自丑至卯)前祭七日造大嘗宮、寅日以前內外庶事整齊已畢、卯日旦神祇官班幣帛於諸神、小齋人奉所司供擬大嘗宮服御物、諸衞立仗、司陳威儀物、如元日儀、兩國供物發自齋場向大嘗宮、神祇官引神御物入收大嘗宮、所司各供其職、

凡(○中略)辰日祭事畢、鎭祭大嘗宮、即令壞却、車駕臨豐樂院、群官入就位、中臣奏天神壽詞、辨大夫奏獻

國郡卜定

物數、史須給諸司、兩國獻御贄、給饗五位以上及六位、奏國風、亦如常儀、巳日獻御贄、給饗奏國風、政同辰日、但亦奏和舞田舞、午日召五位已上及六位、同前日、叙位兩國司及諸氏人等、又奏久米舞吉志舞、幷大歌五節舞、供奉解齋和舞、訖賜祿皇太子已下五位已上有差、又諸司六位已下、及兩國駈使丁已上給祿、（諸司六位已下給祿、兩國主典已下叙位式、及未日參議一人行事、辨大夫宣命、）遣使兩齋國解齋、晦日在京諸司集祓、如二季儀、（事見儀式）

〔塵添壒囊抄 五〕悠紀主基事

和訓集ノ事書ニ、大嘗會ノ悠紀方主基方アルハ何事ゾ、悠紀主基共ニト食ノ心アレ共、先悠紀ハ神事ニ潔齋スル義也、サレバ日本紀ニハ齋忌ト書テ、ユ。キ。トヨメリ、潔齋ノ故也、主基トハ次ト云心也、大嘗會ノ時、神祇官ニ仰テ、御門新嘗シテ聞食ス時ノ國ハ、何クカ可能カルト御トアルニ、神ノ御心ニ叶ヒテ、其國ヲト思食ガトニ合也、是ヲト食トハ云、墨ヲ以テ龜ノ形ヲ書テ是ヲ燒クニ、ヤケテ行方ヲトニ合ストハ云也、其方ノ米ヲ新嘗ニ用ラルレバト食トハ申也、〈中略〉○近比ハ只悠紀ハ近江國バカリ、主基ハ丹波ト備中ト打替々々勤ムル也、〈中略〉○昔ハ其國不定、今三箇國ヲ定樣ナルハ、近來ノ事ナルベシ、此トヲ龜トト云也、

〔玉勝間 八〕大嘗ゆきすきの國

大嘗の悠紀主基は、かならず京より東と西なる國を定めらるゝやうに見えたれども、さしもあらざるにや、神龜元年の度は、由機備前國、須岐播磨國也、天平神護元年の度は、由機美濃國、須岐越前國なりき、

〔代始和抄〕大嘗會事

大嘗會には悠紀主基の國郡の定あり、悠紀は齋忌といふ心なり、神齋の事也、主基は次といふ文字をすきとよめり、次の神齋といふ心也、次といへばとて天地懸隔の心にはあらず、たとへば左右前後などいふ程の事也、大嘗會神膳の儀兩度あるに依て、後の度のをばすきといふなり、悠紀

主基字和訓なり、神事潔齋の心のみ也、

國郡卜定は、二月より九月にいたるまで八ヶ月の中は、毎月其例あり、皆卽位以後の事也、但後白河院は久壽二年九月十三日國郡卜定、十月廿六日卽位の事あり、後伏見院永仁六年八月廿五日卜定、十月十五日卽位の事有、此兩度は卽位以前まづ國郡卜定あり、尋常ならずといへども共に以て佳例たり、多分は四月中に行はるゝ事也、國は上古は定れる事なし、延喜以後近江をもて悠紀とし、丹波備中をもてかはる〴〵主基とす、但後冷泉院は播磨をもて主基とす、郡は卜定に依也、其儀大臣陣に著て、國郡の名を書て、神祇官に給て卜定せしむ、執筆の參議これを淸書して奏聞のゝち、辨に給て官に下知せしむる也、

〔大嘗會便蒙上〕先國郡卜定といふことあり、是は悠紀主基の國郡を、何の國何の郡とうらなひ定めらるゝ儀式也、悠紀とは、日本紀の私記にいはひきよまはるの辭といへり、されどいつきといふ詞にもあらんか、主基とは、次といふ義にて、悠紀に次でものいみする意也、扨悠紀主基にあたりたる兩國の國司、其年の大嘗の事を奉行し、且大嘗の時に奉らるゝ御飯白黑の御酒等も、悠紀にあたりたる國の悠紀に當りたる郡、主基にあたりたる國の主基に當りたる郡、兩郡の稻を用ゐらるゝ也、故に前びろにうらなひ定めらるゝ事也、是は八月の內にて日を撰みて定めらる、

〔柱史抄下帝王〕悠紀主基叙位宣命用杖例狀

國史曰、古語云、悠紀是齋忌之國、主基次之國云々、日本紀私記云、師說、湯者潔齋之儀也、今云、由紀者是湯之義也云々、主基者是其次也、然則湯者伊波比支與麻波留之詞也、

〔釋日本紀十五述義〕齋忌、次、

私記曰、古稱須支、師說次、於齋忌也、今稱主基者訛也、先師說曰、謂悠紀者湯貴也、是則浴湯齋忌之義也、主基者相繼于湯貴、同可齋忌之故用次字、

〔玉勝間 一〕悠紀主基

大嘗の悠紀主基の主基の事、書紀の私記に、師說、次、於齋忌也といへるより、今に至るまで人皆此意とのみ心得ためれど、ひがこと也、かの說は、天武紀に、齋忌此云踰既、次此云須岐とあるによれるなれども、齋忌こそ此字の意なれ、次は借字にして、此字の意にはあらず、古はすべて言だに同じければ、字は意にはかゝはらず借て書るに、次を須岐ともいへるから、言の同じきまゝに借て書ならへるを、そのまゝに書れたる物也、次の意にあらずといふゆゑは、悠紀と主基とは、何事も二方全く同じさまにして、一事もいさゝかのおとりまさりあることなければ、次といふべきよしさらになし、天武紀なるは借字なること疑ひなき物をや、主基は濯の曾岐と同言にして、濯といふことなり、みそぎも身濯にて、そゝぐとすゝぐと同じきを、共につゞめて曾岐とも須岐ともいへる也、さればこれも齋忌と同じさまの名にして、濯ぎ清めたるよしなるぞかし、

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

天皇卽位之年、○中略大臣奉勅召神祇官、密封令卜定悠紀主基國郡、奏畫訖卽下知其國、官符在別卷、下民、凡遣諸國官符幷驛事、急者附驛傳、自餘附在京使幷雜掌、

〔儀式 四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

太政官符其國司

應供奉悠紀事主基准此

右得神祇官解偁、應供奉大嘗會悠紀彼國其郡卜定如件者、國宜承知、符到奉行、

辨位姓名　史位姓名

年月日下皆同

太政官符五畿内七道諸國司

其國（悠紀）其國（主基）

右被大臣宣偁、前件兩國、今年應供奉大嘗會、宜仰諸國、件兩國所誂事、早速令行、勿致拘留者、諸國承知、依宣行之、

〔江家次第十五踐祚〕大嘗會

卜定悠紀主基國郡事

或先被勘卜定日時（天慶九年例）

又仰外記令召設神祇官（或仰辨）

大臣以下著左仗、藏人仰可令卜申件國郡由、

或先公卿等定申某國

大臣奉仰著外座、（第一大臣本在外座）仰官人令敷膝突、召外記問神祇官參否、（讓仰辨者、可問辨、）

掃部寮敷座、主殿主水設水火、大膳奉坏、

又仰辨官令敷座於軒廊

仰外記令進硯紙等、外記獻之、（硯筥入紙四枚）

仰外記令召神祇官、神祇官引寮官參入自日華門著軒廊座、

大臣自書兩國郡名（每國二郡四枚）

天慶九年右大臣（小野宮藤原實頼）○書近江四郡備中二郡、令藏人辨奏之

承平元年左大臣（貞信公藤原忠平）○著陣令大辨書之、依爲攝政歟、

每國二郡書之

一枚
近江國　坂田郡
一枚
近江國　愛知郡
一枚
備中國　英賀郡
一枚
備中國　下道郡
書畢後召外記令封之、（不知墨紙、外記具小刀參入封之、）
大臣取之入筥　外記退出
大臣召神祇官第一人名、（四位召官姓）其人稱唯進就膝突、
大臣乍筥給之、
神祇官取之復座、卜訖返上復座、（封下注乙不合若丙合、若不合皆注不合者、大臣又召外記令進紙書之令封令卜如例、）
大臣召外記令開之見了、（留筥）神祇官退出、
大臣召外記令撤硯筥、
近例或外記便置參議座、是不可然歟、猶待出後更進也、
大臣召外記令進例文幷折堺紙、外記進之、例文進大臣入筥、入往代例文二卷補任二卷今度可行事、
人人交名一紙折堺、進參議座、
大臣目參議、參議進候、
大臣給卜文幷風記等、（入筥）參議取筥復座書之、參議書畢入筥返上之、

大臣見了、令藏人奏之、（入筥、作居座令奏之、）
奏下了、大臣先召大外記、給撿校行事文、入宮例文等同入之、（不合卜形等同入之）
次又召辨給卜文、（執手給之）
大臣所書之卜形、或相添下辨云々、或亦只下參議所書、
次退出
後日外記、返上不合卜形等於大臣云々、
悠紀　近江
　滋賀　栗太　甲賀　野洲　蒲生　神埼　愛智　大上　坂田　淺井　伊賀　高嶋
主基　丹波（丹波備中代充之）
　桑田　船井　多紀　氷上　天田　何鹿
　備中
　都宇　窪屋　賀夜　下道　淺口　小田　後月　哲多　英賀
寛平（近江愛智、丹波多紀、）　承平（近江神埼、丹波氷上、）　天慶（近江野洲、備中下道、）　康保（近江野洲、播磨飾磨、）
天祿（近江坂田、丹波氷上、）　永觀（近江高島、丹波天田、）　寛和（近江野洲、備中下道、）　寛弘（近江坂田、丹波天田、）
長和（近江甲賀、備中下道、）　長元（近江愛智、丹波氷上、）　永承（近江甲賀、備中英賀、）　治暦（近江愛智、備中英賀、）
延久（近江坂田、丹波多紀、）　寛治（近江甲賀、備中賀夜、）　天仁（近江甲賀、丹波氷上、）
〔神祇官年中行事（臨時）〕大嘗會
國郡卜定、中臣二人、卜部兩三人參陣、史生兩三人、
〔大嘗會儀式具釋一〕國郡卜定次第
諸卿著仗座

諸卿トハ當日出仕ノ公卿ナリ、仗座トハ陣座ト云ニ同ジ、是ハ紫宸殿ノ南階ノ左右ニ、近衞ノ官人警衞ノ爲ニ兵仗ヲ帶シテ陣列スル所ナリ、東ハ左近ノ陣左仗トモ云、西ハ右近ノ陣右仗トモ云、其兩陣ノ後ニ當リテ、廊ノ座ニ著ヲ陣座ニ著ト云、儀式ニ依テ或ハ左仗ニ著、或ハ右仗ニ著、國郡卜定ノ陣座ハ本儀式左仗ナルガ、江次第ニハ大臣以下著左仗トアリ、然レドモ今ノ禁中ニハ、西廊バカリアリテ東廊ナシ、仍テ右近ノ陣座ノミナレバ、陣座ノ儀皆右仗ニテ行ハルヽナリ、昔ハ參議以上悉著座セシカドモ、中古以來ハ諸事アラカジメ定リテ、唯儀式バカリニ著座スルコトナレバ、集會シテモ益ナク、且座モセマキニ依テ六七許人出仕スルナリ、○中略著座ノ樣ハ、中納言以上ハ陣座ノ西邊ニ東面北上、參議ハ陣座ノ南邊ニ北面東上、

職事來仰詞

職事トハ、昔ハ諸官ノ當官ノ事ヲ云シヲ、中古以來ハ藏人ノ事ヲ云コトニナレリ、藏人ニモ藏人頭、五位藏人、六位藏人ナドアリ、此所ハ五位ノ藏人也、來トハ陣座ニ來ルナリ、仰詞ハ卽勅ニテ、其詞ハ大嘗會ノ國郡ヲトヒ申サシムベシト云ナリ、職事出來リテ內大臣ノ右ノ方ノ後ヨリ內大臣ニコレヲ申ス、

上卿移著端座

上卿トハ、上ハ上下ノ義ニハ非ズ、ワカフル義也、公卿若干ノ中ニテ一人專ラ其日ノ事ヲ掌ル人ヲ上卿ト云、俗ニイハヾ當番ノ公卿ト云ガ如シ、今日ノ上卿ハ卽內大臣也、端座ハ又外座トモ云、陣座ノ東北ノ端ナリ、內大臣モ初ハ西邊ノ最北ノ座ニ在テ、大中納言ト一列ニ著座セラル、仰詞ヲ承テヨリ座ヲ起、陣座ノ西ヘ下リテ、大中納言ノ後ヲ經テ南ニ行、宣仁門ヲ入テ、參議ノ後ヲ經テ東ニ行、左ニ折テ北ニ行、陣座ノ最北ニ當リテ東方ヨリ西面シテ座ニツク、膝ヲ直ス時左ヘ捻テ南面ニ著座セラル、卽初著座セラレシ座ノ向ナリ、是ハ一上ノ座ナル故、一上ナ

ル人ハ初ヨリ此座ニ著ス、一上ニ非ザル人ハ、仰詞ヲ承テ後ニ此座ニ移リ著ナリ、大臣タル人上卿ナレバ、其移リ著トテ座ヲ起レシヨリ端座著座セラレテ、座定マルマデノ間ハ、参議平伏ス、大中納言ハ拘ラズ、今度モ上卿内大臣ナル故ニ此儀ノ如シ、

次上卿令官人敷膝突

官人ハ陣官人ナリ、下皆同ジ、○中略膝突ハ半畳ノ薄縁ナリ、白縁アリ黄縁アリ、大嘗會ニ用キラレシ膝突ハ皆白縁ナリ、左ニ見エタル職事、辨、外記、中臣等ノ著タメニ、上卿ノ座ノ左ノ方ノ前ニコレヲ敷ナリ、勿論陣ノ座ノ中ニハ非ズ、

次上卿令官人召大外記、大外記參膝突、○中略次上卿問神祇官參否、○中略外記申候由、○中略次上卿仰可持參硯由、○中略次少外記置硯紙於上卿座前、○中略上卿書國郡名、

此事蓋昔ハ數國數郡ノ名ヲ書立テ、其中ニテトヒシコトナレドモ、延喜以後ニ至リテハ既ニ定リアリテ、悠紀ハ必近江國、主基ハ丹波國ト備中國トヲ更ニ充テヽ、一枚ニ一郡ヅヽ、一ケ國ニテ二郡ヅヽヲ書ナリ、假令バ一枚ハ近江國滋賀郡、一枚ハ近江國栗太郡、又一枚ハ丹波國桑田郡、一枚ハ丹波國船井郡ナドヽ合紙四枚ニ書ナリ、○中略

次上卿召外記、仰可持參筥由、外記持參置上卿前、○中略次上卿入卜串於筥、仰外記令封之、外記封畢進上卿、○中略次上卿書封字入筥、○中略次上卿令官人召辨、辨參膝突、○中略次上卿仰可敷神祇官座由、○中略次掃部寮敷座於軒廊、南面東上、主殿主水儲水火、大膳奉杯、○中略

軒廊、今ノハ紫宸殿ノ西階ノ下ヨリ西廊陣座マデノ間ニ、東西ニワタシタル廊ナリ、殿ノ軒下ニアル故ニ軒廊ト云、今度此座ハ軒廊ノ北邊東第一ノ柱ノ外ヨリ、東第三ノ柱ノ内マデニ、白縁ノ軾(ヒザツキ)五枚ヲ敷ク、左ニ見エタル神祇官人ノ著ク料也、主殿寮ハ薪炭ノ事ヲ掌ル故ニ、八角ノ火鉢二ツニ炭火、并ハヽカノキ、庭櫻ノ薪ヲ添テ、今度五枚ノ軾ノ内、東ヨリ第四第五ノ軾ノ前

ニ、中央ヨリ少シ右ノ方ヘ寄テコレヲ置、是ハ龜ヲ灼ク料ナリ、〇中略主水司ハ水ヲ掌ル故ニ、水器二ツニ水ヲ入テ、東ヨリ第四第五ノ杌ノ前、火器ノ左ノ方ニコレヲ置、是ハ灼タル龜ニ水ヲ引ワザアリ、其料ナリ、〇中略

次上卿令官人召外記、仰可召神祇官由、

是ハ神祇官人ヲ陣座ヘ召ニハ非ズ、神祇官人軒廊ニ著座スベキ由ヲ外記ニ仰スルナリ、故ニ貞享〇東山ノ次第ニハ、仰神祇官可著座由トアリ、

次神祇官著座

今度〇元文三年權大副、吉田三位兼雄卿少副長矩、伊勢大宮司權少副兼成、吉田淡路守權少副敬芳、鈴鹿周防守權大祐章茂、鈴鹿豐後守以上五人、束帶日蔭心葉ヲカケ、當日巳剋吉田ヨリ行列參內、清和門ヨリ下乘シテ入リ宣仁門ノ外ニ留マリ、著座スベキ由ノ仰ヲ承テ宣仁門ヨリ入、軒廊ト陣座トノ間ヲ斜ニ北ノ方ヘ行テ、軒廊ノ北ノ方ヨリ著座ス、南面東上、但江次第ニ見エタルハ國郡卜定軒廊御卜共ニ日華門ヨリ入、東廊ナレバナリ、今ハ西廊ナレドモ、是ニ准セバ月華門ヨリ入ベシ、宣仁門ヨリ入コト所見アルニヤ、

次上卿召中臣賜筥、仰可卜申由、中臣授筥於卜部、

中臣ハ神祇官伴部ニテ、祝詞ヲ讀ミ、其外ノ神事ニモ關カリ勤ル者ナリ、必中臣氏ナル故ニ、今ニテハ其職ノ沙汰ニ及ズ、唯中臣氏ナル人ヲ中臣ノ役ニ充用ユルナリ、今度ハ長矩出仕ス、大中臣氏ナレバナリ、卜部モ同ジク神祇官ノ伴部ニテ、龜ヲ灼テ事ヲトシ、又ハ解除其外ノ神事ニモ預リ勤ムル者也、必卜部氏ナル故ニ、今ニテハ其職ノ沙汰ニ及ズ、只卜部氏ナレバ卜部ノ役ニ充用ユル也、今度ハ權大副、及兼成敬芳章茂勤ム、並ニ卜部氏ナリ、長矩上卿ノ召ニ應ジテ、軒廊ノ座ヨリ起テ陣座ニ向ヒ、上卿ノ前ニ至ル、上卿卜串ノ入タル筥ヲ授ケテトヒ申スベキ

由ヲ仰ス、長矩筥ヲ受テ退キ、軒廊ニ至リ權大副ニ授ケテ、本ノ座ニ復ス、○中略

次卜部卜訖、書卜合授中臣、中臣返進卜串筥、

今度此龜卜ノ態ハ敬芳章茂兩人ニテコレヲ勤ム、預メシヤレタル龜甲ノ至リテ薄キ長サ八寸ナルガ、頭ヲ三角、尻ヲ二角ニ、象棋ノ駒ノ形ノ如ク切成シタルヲ四枚、錦ノ切ニ包ミ、葛筥ニ入テコレヲ具ス、而シテ權大副其龜甲ヲ取上テ、筆ヲ以テ先中央ニ下ノ端ヨリ上ノ端ヘ竪條ヲ畫ス、次ニ墨ヲ點ジテ、其竪條ノ中央ヨリ一寸三四分下ニ當リテ、中央ヨリ右端マデ橫條ヲ畫ス、次ニ墨ヲ點ゼズシテ、竪條ノ中央ヨリ一寸三四分上、初メ畫セシ橫條ヨリハ二寸六七分上ニ當リテ、中央ヨリ左ノ端マデ橫條ヲ畫ス、如此四枚ナガラニ墨ヲ畫シテ、錦ノ切ニ包ミ筥ニ入テ、右ノ方ヘ押遣ル、長矩取テ又右ノ方ヘ押遣ル、兼成取テ又右ノ方ヘ押ヤル、敬芳其龜甲二枚ヲ取出シテ我前ニ置、二枚ハ筥ニ殘シテ右ノ方ヘ押ヤル、章茂二枚ヲ取出シテ我前ニ置ク、而シテ敬芳モ章茂モ同時ニハヽカヲ燃テ、龜甲一枚ヲ挾竹ニ挾ミテ、是ヲ灼ク、灼了リテ龜甲ニ水ヲ引ク、次ニ又敬芳章茂一枚ヅヽ、コレヲ灼テ、水ヲ引クコト初ノ如シ、而シテ章茂灼タル龜甲二枚ヲ筥ニ入、左ノ方ヘ押ヤル、敬芳モ亦灼タル龜甲二枚ヲ筥ニ加入テ押遣ル、次ニ兼成次ニ長矩、初ノ如ク次第ニ左ヘ押ヤリテ、權大副ノ前ノ右ノ方ニ至ル、權大副先敬芳ガ灼タル龜甲一枚ヲ取出シテ、我前ノ少シ左ヘ寄セテコレヲ置、是ヲ左ノ一ト云、次ニ同人ガ灼タル一枚ヲ、左ノ一ノ左ニ竝ベ置、コレヲ左二ト云、次ニ章茂ガ灼タル龜甲一枚ヲ左一ノ右ニ竝ベ置、コレヲ右一ト云、次ニ同人ガ灼タル一枚ヲ右一ノ右ニ竝ベ置、是ヲ右二ト云、筥ハ右二ノ右ニアリ、是ヨリ前ニ權大副卜串ノ封ヲ開キ見テ更ニ封ジ置キ、龜甲ヲ竝ベテ後ニ卜串ヲ取テ左ノ手ニ持チ、右ノ手ニ筆ヲ取テ左一ヲ委シク見テ、卜串ノ封ノ下ニ卜合ヲ書、其書樣ハ卜串ノ國郡ノ名四通ヲ甲乙丙丁ト定置テ、假令バ甲合、乙不合、丙合、丁不合ナドヽ書ナリ、書畢リテ

筥ニ入レ長短ニ授ク、長短上卿ノ前ニ持參シテ是ヲ返進ス、今度悠紀ハ近江國滋賀郡、主基ハ丹波國桑田郡トニ合フ、

次上卿令官人召外記、賜筥、仰可開封由、○中略外記開之、○中略次上卿一々披見、畢仰神祇官可退出由、○中略次神祇官退出、○中略次上卿令官人召辨、仰可撤座由、○中略次諸司官人撤所初設座幷雜具、○中略次上卿召外記、賜硯、外記取之置參議座前、次上卿目參議、參議參進、○中略次上卿賜卜串、參議取之復座、書卜合之國、郡、畢進上卿、○中略次上卿見畢入筥、○中略

江次第ナドニハ、初上卿ヨリ筥ニ入テ參議ニ賜ヒ、參議書畢リテ筥ニ入返上スト見ユ、今ノ儀ト同ジカラズ、

次上卿令官人召職事、職事參膝突、○中略次上卿賜筥、令奏之、先内覽奏聞畢返賜、

筥ヲ賜ハト合ヲ入レタル筥ヲ職事ニ渡シ賜フナリ、内覽トハ凡何ニテモ皇帝ニ奏スル文ハ、內覽トテ先關白ニ覽セシメ、其上ニテ奏覽スル事ナリ、此處モ職事先ト合ノ入タル筥ヲ殿上ノ間ニ持參シ關白ニ進ツル、關白內覽畢リテ職事ニ返賜フ、職事卽又御前ニ持參シテ奏覽ス、御覽畢リテ職事ニ返賜フ、職事卽陣座ニ持參シテ上卿ニ進ツルナリ、

此序職事仰檢校及行事等、註ニ折紙、過之、○中略次上卿令官人召辨、賜卜合文、辨結申、○中略

結申ハカタチマウスト讀ム、除目結政ナドノ時、數通アル文ヲ一ツニ束ネテコレヲ結固ムルヲ結スルト云、今此ト合ノ文ハ一通ノミナレバ、賴要受テコレヲ帖ミ固ムルノミ、故ニ古キ儀式ニハ、此所ヲ結申ト云事イマダ見及バズ、

上卿仰仰詞

仰詞ハ催勉ラスベキヨシヲ仰スルナリ、先ニ奏聞セルト合ノ如ク、悠紀主基ノ國郡へ下知セヨトノ義ナリ、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年十一月己卯、大嘗、遠江〇扶桑略記、一代要記、並作近江、但馬二國供奉其事、

〔類聚國史 八神祇〕平城天皇大同二年二月辛酉、將有大嘗之事、伊勢國爲由貴、備前國爲須貴、

嵯峨天皇大同四年四月辛丑、參河國爲悠紀、美作國爲主基、

〔續日本後紀 一仁明〕天長十年三月己酉、卜定大嘗會事、以近江國高嶋郡爲悠紀、備中國下道郡爲主基、

〔文德實錄 三〕仁壽元年四月癸丑、定悠紀主基等國、伊勢國爲悠紀、播磨國爲主基、並卜之所食也、

〔三代實錄 二清和〕貞觀元年四月十五日庚子、是日神祇官卜、以參河國播豆郡爲悠紀、美作國英多郡爲主基、

〔三代實錄 三十一陽成〕元慶元年四月十九日庚寅、卜定悠紀美濃國席田郡、主基備中國都宇郡、並卜食、

〔三代實錄 四十五光孝〕元慶八年三月廿二日癸未、喚神祇官於左仗頭、〇中略定大嘗會國、悠紀伊勢國員辨郡、主基備前國和氣郡、並卜食、

〔日本紀略 一醍醐〕寛平九年七月十四日丁亥、今日政也、以近江國依智郡爲悠紀、丹波國多紀郡爲主基、

〔貞信公記〕承平元年五月八日、出陣定大嘗會國郡撿挍行事、但卜郡不卜國、是依寛平例所行也、見神祇官文簿、

頭書 攝政著陣定大嘗會事、但不卜合、依有前例也、

〔日本紀略 五冷泉〕安和元年三月二日乙酉、右大臣〇藤原師尹參入、被定大嘗會國郡、悠紀近江國、主基播磨國、八日辛卯、大嘗會國郡卜定、去二日大略定兩國、今日被卜定郡、近江國野洲、播磨國飾磨、

〔日本紀略 六圓融〕天祿元年三月五日丙午、於太政大臣〇藤原實賴職曹司、被定大嘗會悠紀主基國、近江丹波又被卜兩國郡、

〔小右記〕寛弘九年〇長和元年七月廿二日戊子、今日於殿上問予、丹波守匡衡卒、有前例乎、已是主基國也、如何者、答云、國司雖卒去、不可被改國歟、定其國卜定郡司、亦有何改易乎、相府案無所據、歸宿尋見前

例、藤原高堪、承平二年正月任近江守、〈悠紀國〉同年十一月卒、伴保平、承平二年十一月廿六日任、後日左宰相中將云、右府示右宰相中將云、主基國司卒去、彼國可被改他國也云々、略許事也

〔日本紀略〕〈十三後一條〉長和五年四月七日庚辰、卜定大嘗會國郡、悠紀近江國甲賀郡、主基備中國下道郡、

〔小右記〕長和五年四月七日庚辰、傳聞被定悠紀主基國之由、〈悠紀近江、主基備中、〉卜定於郡、右大臣〈藤原顯光〉行之云々、　八日辛巳、昨日卜定作法、問遣大納言〈藤原道綱〉御許、返狀云、卜定事、似不覺、或中不定行事、欲被奏御卜、然而依彼此示定書被奏了、此間退出、不見後事者、頭中將資平云、昨日右大臣申剋參入、㠯不被戒神祇官攝政〈藤原道長〉氣色不宜、多不快御詞、以頭辨經通被傳示悠紀主基國事於右府、〈悠紀近江、主基備中、〉右府被申可卜之郡事、被報云、可卜天慶卜定郡、但令卜之時、毎國書二箇郡者也、今一郡撰有嘉字之郡、上達部相議可被立卜也、兼可令候諸卿、思忘不候、而上達部參入、相共可被定也、仍卜定、〈悠紀甲賀、主基下道郡、但卜定了、以頭辨被奏也、卜定了、更以左大辨令書、大外記文義問卜定郡、頭辨云、備中上道、文義云、上道名偏前郡名也、備中有下道郡、頭辨驚而招出左大辨道方、相議改上字下字、大臣大納內改書、如何、思慮不立參歟、注諸郡名、往古不聞耳、〉

〔中右記〕天仁元年八月三日庚辰、依有仗議、未時許參內、先左大臣〈源俊房〉被參會了、此外公卿七八人參會、大嘗會國郡卜定也、藏人頭修理權大夫爲房來、滕實仰云、國郡卜定可行、則起座了、爰左大臣頗有被傾氣、近代指國被仰下、所令卜郡也、而只國郡卜定之由被仰下、如何、往古國郡共雖卜定、寬平以後、被仰國之後、只所卜定郡也、如何、人々被申云、重令尋申給、可候歟、又招返頭爲房、被尋問之處、近江丹後者、〈大略爲房朝臣忘失本歟〉次以官人召辨、權右中辨爲隆參、被示可令敷座之由、權辨起座、仰令掃部寮敷座於庭中、〈東西行、置水火、〉召外記、少外記祐隆參入、可召神祇官由被仰、神祇官人參著、〈伯大副卜部兼宗、少副大中臣輔清、權少副卜部兼政、權大祐伊岐致元、五位少史卜部兼定、〉次召外記、被仰可進紙硯之由、外記祐隆持參硯筥、〈入白紙〉置左大臣前、歸入了、爰左大臣自書國郡名、〈悠紀二通、主基二通、〉次召外記、筥幷可封之具可持參之由被仰、外記祐隆持參筥、入作文四通、以外記令封、外記退了、左大臣封目二書付封字、直入筥、〈右方悠紀二通、左方主基二通、其中長紙也、是爲合分如悠紀主基也、但左方二所時、悠紀也、悠〉

而爲口傳右方置悠紀也、是相違テ爲不令知卜者歟、頗有謂歟、召輔清、(雖第二之人、伊勢之事時所召中臣氏人也、仍召輔清也、但軒廊御卜之時、召官人祠、四位ハ官朝臣、五位ハ名朝臣、六位ハ名許也、召輔清五位也、猶可被加朝臣字歟、然而今日名許召事別説歟、如何可尋知事也、)輔清起座之間、誤著傍人之沓、衆人有咲氣、輔清來藤突、左大臣下給、(作入筥給之)輔清持筥歸本座、爰少史兼定燒龜甲、頗不得心歟、致元燒之、兼政卜之、致元執筆書付合否、如本入筥、輔清起座持參、召外記祐隆參上、令開之、見了左大臣神祇官可罷出由被仰、(軒廊御卜之時可罷出之由、多被仰外記也、可用作議歟、)神祇官人等退歸了、大臣召外記、例文可持參由被仰、入筥持參了、次返給硯筥、令置宰相上﨟座前、大臣目左大辨、大辨起座著上﨟座了、左大辨召外記令進折堺紙、(白紙)大臣命左大辨令書卜合國郡名、(悠紀主基載一紙)次令書撿按、又書行事官、書了奉大臣、大臣相加入卜合文、撿按文、行事官文三通於筥、令藏人頭爲房令奏聞、(于攝政殿御直廬也、)則返給、召辨權右中辨爲隆參上、下給卜合文、結申起座、次召外記下給撿按行事文、(入筥)之、次又例文筥等下給、取重歸出之、次又取重硯筥退出了、(定文等在別紙、于時酉剋、)

〔本朝世紀〕康治元年七月廿七日戊午、左大臣、權大納言源雅定卿、藤原宗輔卿、同伊通卿、權中納言藤原宗能卿、同成通卿、同公教卿、同重通卿、參議藤原公行卿、參仗座、卜定大嘗會國郡、(悠紀近江國野洲郡、主基丹波國氷上郡、)

〔百錬抄〕(十後鳥羽)元暦元年八月十日丙寅、大嘗會國郡卜定也、(近江甲賀郡、丹波多紀郡、)

〔山槐記〕元暦元年八月十日丙寅、今日有大嘗會國郡卜定事、後聞、秉燭左大臣、源宰相中將、右大辨、(兼光)參陣、(閑院)又攝政被參內、悠紀近江國甲賀郡、主基丹波國多紀郡、右大辨執筆云々、○中略後日尋取卜定定文、行事文等績之、

合

悠紀

近江國

甲賀郡

主基

丹波國

多紀郡

元暦元年八月十日

〔玉葉〕建暦二年四月廿三日、權左中辨經高朝臣來、傳院宣曰、大嘗會下宜國、已去年定沙汰了、而丹波國、殊以國衰民疲、毎事不合期、仍可被改之由思食、而改近江國候條如何、余申云、自中古以來、多被用近江丹波、猶任例可被用歟、但上古存指吉例者、被改備中何事有哉、可被問例於外記也、　廿八日、此日大嘗會國郡卜定也、上卿右大臣道光卿、隆範朝臣等參入云々、悠紀近江國、主基丹波國、去年於國□被用他郡云々、

〔萬一記〕正安三年四月十日、早旦向坊城前中納言○定俊亭、即被謁訪條々事、○中略

國郡事

近江者毎度事也、今一方者、備中丹波相替、先度丹波也、仍今度備中勿論也、不可及伺申、郡者當座外記可致沙汰、○中略

仰官外記事○中略

來廿五日可有大嘗會國郡卜定、任例可致沙汰之狀如件、

四位大外記殿

大夫史殿○中略

來――日可有大嘗會國郡卜定、可令參陣給者、依天氣――

謹上　――宰相殿

十三日、早旦、向坊城前中納言亭、〇中略國郡卜定宣下事、四箇日事等、藏人方可申沙汰也、凡雖爲辨方沙汰、藏人方致沙汰者也、然而自兼日相尋ハ、官外記觸藏人方、只能程ニ爲何樣哉可承存ナド、內々可尋沙汰也、官方沙汰トテ不可見放、諸事以不闕如可爲先、宣下事等可問答宜、廿三日、早旦、參院、〇伏見付前平宰相、仲兼奏條々事、

大嘗會條々

國郡卜定上卿事土御門大納言領狀

仰被聞食

國郡事

奏云、仁治〇後嵯峨國郡卜定、近江甲賀郡、備中英賀郡、文應〇龜山同卜定、近江甲賀郡、備中國英賀郡、

仰云、今度可被用仁治例、

廿五日、早旦參院、〇中略大嘗會國郡卜定、御卽位女敍位、以何先可被行哉、伺申入之處、可示合執筆之旨有勅定、殿下〇藤原基忠被申云、御卽位事雖可被行、以神事可爲先、仍可被行國郡卜定之由被仰下之、此兩事予〇藤原宣房所奉行也、秉燭以後人々參集、土御門大納言、令掌燈于陣哉之由被相尋之、次土御門大納言雅房、花山院新中納言師信、已上奧座、右宰相中將實躬、著仗座、次予經參議座後、脫沓昇奧座、不懸膝於長押、經公卿座下後、宣下云、大嘗會國郡令卜定ヨ、上卿氣色、次起座著沓退去、不見歸、故實也、次大納言移著端座、次大納言召悠紀行事右中辨定資朝臣、仰御卜座事、辨仰史、史仰掃部寮令鋪之、次大納言召外記、仰神祇官人可參之由、次神祇官人權大副卜部兼秀、同兼益、同兼淳、同兼顯、中臣權大副永宣等著座、諸司置御卜櫃并炭、次召外記、仰硯紙可持參之由、卽持參置上卿前、次大納言取紙令書國郡名、合四通、紙一帋、〈本云、外記書之也、〉近江〈野洲郡〉〈甲賀郡、一紙、備中、下道郡、英賀郡也、〉次上卿召神祇官人於軾給筥、入卜文、官人復座、卜訖返上之、納言召外記被開之覽了、留前神祇官人等退出、〇中略

合

近江國

野洲郡

備中國

英賀郡

正安三年四月廿五日

大嘗會事、被用仁治例、國郡卜定上卿、左右兩府被申子細、仍土御門大納言勤仕之、大納言勤仕例文應也、彼時上卿二條大納言良教卿、左衛門督基具卿、左宰相中將伊頼卿、新宰相高定卿也、檢按新大納言師繼卿、參議經俊卿等不參、今度自然叶彼例、檢按堀川大納言具守卿、參議有房卿等不參也、尤可爲佳例、

〔園太曆〕貞和六年○觀應元年四月廿九日、抑今日大嘗會國郡卜定也、兼日不及沙汰、每事不具、公卿人數代々數輩也、而近日出仕人不幾、仍種々有沙汰、四條大納言、今出川宰相中將等領狀、其外無人云々、春宮大夫○藤原實夏爲支公務闕如參陣也、凡卑上卿之時爲位次參仕、頗雖非無斟酌、更不可謂事也、仍可參由仰了、其儀可尋記、○中略

大嘗會國郡卜定

悠紀

近江國野洲郡卜乙卜合

甲賀郡卜丙合

主基

丹波國多紀郡卜乙卜合

冰上郡卜丙合

卜者中臣官人召座上、不叅、正說例、

神祇權大副卜部兼員

兼豐

兼前

二年六月十四日、抑昨日被尋下間事所存載折紙、付按察卿了、

大嘗會國郡卜定間事、大同以來延引蹤跡七八箇度歟、其內被行件儀者、建曆○順德一代例也、推此事、若養和○安德近例不快之間、爲異件例重有卜定歟、而天福文曆又被違建曆例之處、三箇度相違、皆以非吉例之上者、今度只任承平○朱雀以來先蹤被略卜定儀、自行事所始有御沙汰之條有何事之哉、兼又延引之時、行事所始、五六月大略雖爲先規、卜定七八月吉例多存之上者、就卜定准據件比沙汰不可有相違哉、但卜食國役舍屋以下、若兼日沙汰可爲大切者延縮之沙汰可被仰合官底歟、此上事須在時宜矣、

大嘗會間兩條○中略

一卜定幷行事所始六月例

崇德院保安四年六月十六日卜定、同月廿九日行事所始、

觀應二年六月十一日

十六日、今日都護消息次示云、大嘗會國郡卜定儀不可有之、來八月自行事所始可有沙汰之旨被仰出云々、

〔薩戒記〕永享二年四月廿二日壬辰、明日大嘗會國郡卜定參陣事、去二日頭右大辨送御敎書、其狀云、來廿三日可有大嘗會國郡卜定、可令參陣給之由、攝政殿○藤原持基御消息所候也、仍執達如件、

四月二日　　右大辨忠長

中山宰相中將殿〈○定親〉

同五日、催促請文、然而予今不亂之構試之故也、今日又催促之、仍送請文、其狀如此、

來廿三日可有大嘗會國郡卜定、可令參陣之狀謹所請如件、〈○件一本作此〉

四月五日　　參議、、、

廿三日癸巳、今夜有大嘗會國郡卜定事、予〈○藤原定親〉可參陣之由、頭右大辨忠長朝臣依院〈○後小松〉御點傳攝政消息、仍秉燭後著束帶、〈如常〉參內、于時雨脚如沃、及深更右大臣〈○藤原房嗣〉參入、先被奏轉任慶、次有著陣事、忠長朝臣献申文、此程右府、萬里小路大納言、〈時房〉西園寺大納言、〈公名、綸按、〉勸修寺中納言、〈經成〉予、新宰相〈尹賢〉等著仗座、〈不經按察宰相宗繼、不知由緒、〉次忠長朝臣就右府座下、仰大嘗會國郡可卜定之由、〈兼日國郡上示合於〉〈勸修寺中納言予示之、予曰、治承吉田大納言仰詞、以近江國甲賀郡、丹波國多紀郡朱上郡令卜申云々、中山內府擬此事云々、予實之、大嘗會悠紀主基國郡卜先例ア後二、如此可仰歟、若守寛治爲房卿記例歟、件度先有沙汰、三月以綸旨之時、近例四月必被卜定、卜近江國甲賀郡野洲郡卜仰、有其沙汰由、先不合口具事、只仰書口宣、江國卜仰定凉歟者、件度不論理之當不當、令守寛治例給歟、然者今又綸旨被仰何事有乎、但件度若不及思慮、今守寛治例給、不可被用之者、被中山內府殿、如人會同國司字、又可宜歟、納言云、治承所爲者、有所思歟、已爲度不仰件字、何事之有哉者、大納言之後日予問之、此近云、以近江國坂田郡野洲郡、丹波國多紀郡冰上郡令卜申之者、〉右府移著外座、令敷軾、令官人召外記、〈人、外記師世朝臣參上、〉開神祇官參否、御仰硯可進之由、〈治承中御門左府先召外記仰之、座事、其後延召外記召硯歟、〉少外記中原康富持參之、置右府前、右府書國郡各四通、〈治承先召外記、被仰神祇官可令入之由、被書之也、〉置硯、仍令官人召外記、召筥納國郡文四通、賜外記、令封之、書封字於封目上、被置前、次召官人召左中辨資親朝臣、〈悠紀行事也、治承中御門左府、召外記仰神祇官之由、召鋪設座事也、〉被仰可令敷座之由、敷座於軒廊、次令官人召外記、被仰神祇官可著座之由、神祇大副兼勝朝臣、少副兼繼朝臣、〈已上〉中臣某等入宣仁門著座、〈宮可入之由、次設官著座云、〉次右府召中臣、〈兼日也〉中臣參進、賜文筥、復座傳上之、此間置卜口、并水火等、各卜了、封上書合否字、中臣持參返上、右府召外記、賜筥、令披封見之、了還置卜合二通於筥、取不合文二通入懷中、此後仰外記可被出神祇官歟、今日不然、右府仰外記令置硯筥

於予前、被目予、□□□居昇第一座、（予第二參議也）右府又□□□也、予揖起座、（先押遣硯於座下）參進、小揖指笏賜卜文、（二通入筥）復座、乍持筥揖置筥於座前、拔笏置右膝下、以左手擡筥、以右手引上硯於筥右方、以筥置硯筥左方、（作法等如敍目時）摺墨染筆、卷返紙、白紙也、是上卿被書卜文之餘紙也、□□先所悠紀、先例或紙屋紙云云、國郡卜形披置硯筥左方、書寫之了、取卜形卷之置前、又取主基卜形披置之、書寫之同前、卜國文書樣、〇中略卷之置前、次取卜形文二通入筥、取所書之卜國文入其右方、以左手擡筥、以右手推下硯筥、以筥於硯筥跡取笏退足、指笏取筥揖起參進跪上卿前、小揖置筥取廻進之、上卿取笏氣色、仍予卽歸座、先是忠長朝臣宣下撿挍幷行事等、以詞仰之、〇中略予且獻卜合淸書了、次右府以官人召忠長朝臣、被奏卜國文、〇中略則被返下、

〔後法興院記〕文正元年四月廿二日癸亥、是日被行國郡卜定、上卿左大臣、〇足利義政參勤云々、自申刻被始行云々、後聞今日二條關白〇持通著衣冠參内云云、上卿之儀見物之、　廿三日甲子、早旦參武家、（進大刀）昨日上卿御參仕目出御禮也、傳聞昨日卜定之國郡近江坂田、備中下道、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年四月十九日、來廿二日國郡卜定御參内、御神事自明日被始之云々、但此參内之前、奉行披露事、可閣之由今晨被仰出也、仍恐老閣僧事披露也、　廿二日、今日國郡卜定御參内、但大嘗會御評定始云、以御神事故不參、閣僧事也、八皷刻御參内云、　廿三日、前日國郡卜定御參内御禮、今晨御大刀被獻也、此日陰雨昨日快晴、悉御快然云、以龜卜收江州酒田郡、備中下道郡年貢獻之、具于大嘗會御供也、尤先規也、當領主爲恨也、

〔季連宿禰記〕貞享四年八月十三日己未、依使者參頭中將基勝朝臣、（大外記閫道）頭中被命云、來廿三日可有國郡卜定、可令催沙汰云々、申承之由、　十五日辛酉、依使者參頭中將基勝朝臣、來廿三日國郡卜定、火鉢二口（悠紀一口、主基一口、）主殿寮可調進之由可下知之由有命、承之後召主殿大允伴友治下知之、件火鉢其體不分明、兼日有沙汰、以行事官重基調進神寶之中圖、今度可調進之由議定了、一口之

料足白銀三拾目之由、衆日所申也、

十六日壬戌、國郡卜定、神祇官人座構圖一枚、今日頭中將被渡大外記、(下不見之、件座構者、官方沙汰歟、然而大外記掃部頭兼帶之間、依座方調進之儀、被沙汰歟、先規可考、)　十八日甲子、參頭中將基勝朝臣、被命云、來廿三日就大嘗會國郡卜定、波々嘉木調進之事被仰出、行事官重基之間、可下知其旨云々、(昨日、召亮仲、依仰下云々、)猶遣使者示重基了、

波々嘉木、櫻木壹尺許ニ切テ、橘枝ノフトミノ如クニ破テ、百本許ト定、衆日可調渡吉田家云云、

波々嘉木ヲかばかきト唱フ由、吉田申之由亮仲所語也、

廿日丙寅、依使者參頭中將基勝朝臣、被命條々記左、

一明日申刻、攝政殿(○一條殿冬經)里亭可有國郡卜定御習禮催方、諸司可參仕、　廿二日戊辰、入夜令神齋、依明日國郡卜定也、其儀月障女房重輕服輩等出家內、如恆宮中御神事一夜云々、參陣人々堂上地下輩等各一夜齋云々、神祇官輩者可爲各別、日數不知之、　廿三日己巳、今日大嘗會國郡卜定也、辰半刻著朝衣、令參陣、諸司各參集、巳下刻許被始行、(上卿內大臣殿御參之時、被經床子座前、關白候陣座前、如例、)其儀一如御次第歟、管見之趣以朱加之、申初刻許事了、(○中略)今日事畢各解神事、(○中略)今日歸路予直參攝政殿幷近衞殿、今日無異無事被遂行之條、奉賀申、

國郡卜定官方調進(依日以御訪方頭書加之、)

行事官調進

一波々賀木百卅本

大藏省調進

一陣疊(新調)　一小板敷疊(同)

主殿寮(佐伯)

一陣卦燈二條

同伴
一火櫃二口　一炭斗一口　一炭

〔大嘗會記錄〕百十四代東山院貞享四年、○中略先郡國ノト定アリ、○中略八月十四日吉田家ノ家臣鈴鹿修理亮中臣治之ヲ遣堺ノ藥屋、ト定龜甲ヲ求メシム、是中古ノ例ナリ、上古ハ國主ノ奉ラルヽ所ナリ、波々賀ノ木ハ行事官重基調進、上古ハ芳野ノ宮ヨリ調進トアリ、櫻木幅一分餘、長サ五六寸ノ皮ツキノ木ナリ、昔炭ナクシテ波々賀ニテ甲ヲヤキヌ、○中略竹鋏醒シ竹ノ二色ハト部家ニテ調ラル、八月廿三日國郡ト定ノ日限辰刻許ニ、神祇管領ト部兼連朝臣束帶帶劔行列ヲ催シ、廻轅四脚ノ御門ニ進マル、御門ノ邊ニ轅居ユル時ニ、祝部鈴鹿佐渡守中臣勝敎衣冠ニテ進ミ、轅ノ簾ヲカヽゲテ、管領ノ前ニアル處ノコリヲ取出シ持テ先驅ス、此コリ、カケゴアリ、內ニハト定ノ龜ノ甲四枚、左一、左二、右一、右二ト書付アリ、錦布裹ナルモノニ包テ、アトサキナククリテアリ、醒シ竹、波々賀ノ木、竹鋏四箇、手文等ノ物ヲ入ラルヽナリ、次宮主神祇少副ト部兼林、束帶乘輿次神祇權大佑ト部連直、束帶步行次周防守ト部連屋、同上等各跡ニ隨フ、神人者不及記、角テ事ノ儀式始マレリ、內辨ハ近衞內大臣家熙公、外辨ニハ今出川大納言伊季卿、萬里小路大納言淳房卿、廣幡新源中納言豐忠卿、東坊城參議式部權大輔長詮卿、中山參議左中將篤親卿、執筆之各著陣、行事兩辨勸解由小路左中辨韶光朝臣、葉室藏人右中辨賴重、等事儀アリテ、掃部寮ハ敷座、主水司儲水、主殿寮儲火、次內辨ノ召有テ、著座アルベキ由ヲ大外記管領ニツグル時、管領ト部兼連朝臣、先軒廊二ノ間ニ著座、東上南面次藤波神祇權大輔大中臣德忠、帶劔次宮主兼林、次權大祐連直、ト部連屋等列座セリ、次件ノコリヲ公文氏辰持出テ管領ノ座ノ前ニ置ク、次ニ上卿ヨリ筥ヲ中臣起座シテ取テ兼連ニ授テ復座、是則ト串四ツアリ、其後管領兼連、コリノ紐ヲ解キ、龜ノ甲ヲ取出シ、包物ノ錦ノ上ニ竝ベ置キ、一枚ヅツ取テ左ノ手ニ持チ、右ノ手ニテ筆ヲ取テ事ノ義ヲ書シ、又如元竝オカル、四枚共ニ同之、此時ニ權大佑連直、座ヲ立テ管領ノ後ノ方ニ進ム、其時管領コリノ蓋ニ甲二枚、ハヽカノ木、醒シ竹、竹鋏、手文等ノ物ヲ入ラル、是主基方ナリ、各調度ヲ入テ連直ニ授ラルヽ、取是後元ノ座ニ復ラル、次ニ一揖二拜有テ、祈念ノ祝詞ヲ微音

ニ讀メリ、手文ニ書之、手ノ中ニタレリ、龜ノ甲ヲアブラレ、竹鋏ニテハサミ、兆時成ハ油多出テ形不見時ハ、ナカヘ縮シ竹ニテ摘ハル、灰水一滴ヲソヽギ、如元鼓ベオキ又一枚如此アブリテ鼓オカル、權大副達直ノ所作同之シテ、前ノ蓋ニ各取入テ持チ、起座如初、管領後ノ方ニ進テ管領ニ授ク、此時兼連四枚共ニ其兆所ノ形ヲ見テト定有テ、其趣ヲト文ニ丙合乙合悉ク書テ、以中臣上卿ニ奉ラル、上卿又以職事奏聞、先達ニ經政、次奏聞、次管領如最初調度ヲ取納テコリヘ入、龜ノ甲四箇モ如元包錦、コリニ入テ紐ヲ結ビ、封ヲ付テ前ニオカルヽ時ニ、又氏長取之退、次大外記進テ管領ニ一揖、又答揖有テ、次第ニ自下臈退下、

傳聞、悠紀ハ近江國ニテ志賀野洲ノ兩郡、主基ハ隨時備中、或播磨、或ハ丹波等、其外ノ國ヲモ用ラルル由舊記ニ見ユ、然ニ中古ヨリハ近江ト備中、又近江ト丹波トヲカハルヾヽニ用ラルヽノ由、考ルニ文正ノ時ハ近江ト備中ト也、サルヨリ此度ハ丹波國ニテ桑田氷上ノ兩郡ヲト定アリシニ、ト食ノ面ハ近江國ニテ志賀郡山中村、丹波國桑田郡拉川村此二國二箇所ノ稻ヲ用ラルヽ也、拔穗使ノ御沙汰ト聞ユ、

文正年中○後土御門國郡ト定ノ上卿ハ近衞政家公ナリシガ、其時勞并筈紙マデ殘リテ、此度内大臣家熈公持參アリシハ、目出度御事顯ニケルト也、

〔續百一錄〕元文三年八月廿六日、來廿八日、就國郡卜定、從廿七日晩、至廿八日暮、御神事候、○中略

來廿八日、國郡卜定ニ付、御非役之御方樣、高遣戸諸大夫間より者、御昇降被成間敷候事、

一庭上江御往來ノ節、平唐門之內江者、侍分一兩人之外者被召連間敷候事、尤下部者、平唐門之外ニ可被殘候事、

一所々警固有之候、其內江者召具被入間敷候事、

一召具之輩、萬端猥ケ間敷義無之樣ニ、堅可被仰付候事、

一御參役之御方樣江者、大嘗會御傳奏御奉行より觸頭可有之候、其旨御守被成候樣ニ被致候事、

右之旨、番々〈江〉無漏脱可申傳旨、〇中略

〔大江俊冬記〕天明七年四月廿八日、國郡卜定、貞享以來雖爲八月、自今可爲四月被仰出事、前以傳聞畢、

〔行厚記〕文政元年四月廿四日、大嘗會國郡卜定陣儀也、催卯半刻云々、〇中略

國郡卜定次第

刻限諸卿著仗座、次職事仰仰詞、次上卿移著端座、次上卿令官人敷軾、次上卿令官人召大外記、大外記來、軾、次上卿問神祇官參否、外記申候由、次上卿仰可持參硯之由、次外記置硯紙於上卿座前、次上卿書國郡名、〈四通〉次上卿召外記仰可持參筥之由、外記持參置座前、次上卿入卜串於筥仰可封之由、外記於軾封、畢入筥進上卿、次上卿書封字入筥、次上卿令官人召辨、辨來軾、次上卿仰可敷神祇官座之由、次掃部寮敷座於軒廊、〈西上北面〉主殿寮儲火、主水司儲水、次上卿令官人召外記、仰神祇官可著座之由、次神祇官著座、次上卿召中臣賜筥、仰可卜申之由、中臣取筥退授卜部、次卜部卜畢書卜合、書畢授中臣、次中臣返進卜串筥、次上卿令官人召外記賜筥、仰可開封之由、外記開之進上卿、次上卿一々披見入筥、仰神祇官可退出之由、次神祇官退出、次上卿令官人召辨、仰可撤座之由、次掃部寮撤座、次上卿召外記賜硯、外記取之置參議座前、次上卿目參議、參議參進、次上卿賜卜串、參議書畢進上卿、次上卿見畢入筥、次上卿令官人召職事、職事來軾、次上卿賜筥仰可奏聞之由、職事奏聞、畢返賜、〇中略次上卿令官人召辨、賜卜合文、辨取之結申、上卿仰仰詞、〇中略次令官人撤軾、次諸卿退出、

〔大祀放求〕嘉永元年三月廿一日、予重服中國郡卜定催沙汰伺書差出事、　廿五日、大祀傳奏御用召、出會被示條々如左、

一來月廿四日巳刻國郡卜定被仰出間、如文政催沙汰旨事、

一遇日予重服中、國郡卜定催沙汰之事、如何被仰下旨被申渡事、

四月十三日、國郡卜定之圖附奉行事、〇中略大嘗會國郡卜定下行之事、別帳分者未傳奏より無沙汰間、諸司參勤身下行調進物之事、三催差含取計可申事、傳奏示命由傳達、十六日、大嘗會國郡卜定下行之事、先右下行分計早々草帳可差出、〇中略國郡卜定請文交名傳奏へ付事、

〔輔世卿記〕嘉永元年四月十日癸丑、依御招入來、小野筑前守、右者大嘗會國郡卜定、來廿四日巳剋卜被仰出候御觸モ有之候得共、爲御心得御内々御達、右ニ付卜定ノ内、中仕切幔、明和ノ度ニハ設撤却等ノ儀、主殿寮ノ所役ニ相見得候得共、天明以來之處ニ相見得不申、如何覺悟被致候哉、以圖面御尋之所、此間總テ取調、尤明和度ニハ掃部寮談合ノ議ニ付、少書留モ有之候得共、其後之所相見得不申、乍併折角御尋ノ儀故、今一應取調可申上、夫迄御圖面拜借相願被貸遣候、且卜定ノ節調進物、未御沙汰無御座候、尤心懸居候得共、表向御達ノ儀被相伺候處、右等ノ儀相伺候上、近日御調進可被成旨御返答ノ所、要退出也、　十四日丁巳、御使小野主殿助へ片岡數馬、右者以御別紙、文政度國郡卜定ノ節、火爐水器以下神祇官座方等、從最始被設候哉、又ハ次第通ニテ從史有仰之後設之、又可撤之由有仰後撤之候哉否之事、早々被取調候樣、右御承知被成度旨被仰遣候所、委細承候旨也、　廿四日丁卯、今日國郡卜定、家君〇小槻以寧依御重服中、分配參勤之史、村田右大夫春芳へ御與奪也、

〔實久卿記〕嘉永元年四月廿四日丁卯、此日大嘗會國郡卜定也付勾當掌侍申、甚賀〇 殿下〇實 政所 令參給、申承雜事、參仕公卿内大臣實、廣橋大納言光、中山大納言二、德大寺大納言公、右大辨宰相資、宰相中將實、軒廊御卜、不及見卜合國郡、近江國甲賀郡、丹波國桑田郡、

〔大嘗會書類〕嘉永元年四月廿四日、國郡卜定也、〇下略

一正長剋出仕、於非藏人口以差次藏人、先自分出仕御屆申之事、〇中略

一辰半刻前諸具候旨、以六位言上候事、

一陣之座床子等之敷設、豫取整之上、御裝束被仰出、猶亦取調具候旨言上候事、

一神祇官之座敷設之事、六位邦昌ヱ夫々被示之事、

但敷設雖如御次第、一應敷設之處、神祇官ヨリ内見之儀申願、卽内見有之事、

一巳刻被始陣

上卿自敷政門令參進給、諸卿自化德門參進、先是右中辨恭光朝臣、少外記邦昌、大史（帯刀）、著床子、（致禮如例）

一史所役

上卿召辨、仰可敷神祇官座由、辨退著床子、被爲目、受之先著横切、直進寄奉仰詞、其詞云、

可有大嘗會國郡卜定、令敷神祇官座、

奉之復横切、直起座立本床子之艮、示掃部寮、（兼而誂候之事示置、尤其次主殿寮所役、主水司等ヘモ爲中傳置、）寮藤利政徵唯退、撤

却之節同樣之事、仰詞、

御卜ノ座撤セヨ

一卜合文被下之儀

辨退著床子、受目著横切、其儘進寄賜文取之、復横切披見、（無掛紙、）奉仰詞結之、起一揖復本座、其詞ニ

云、卜ノ趣ニマカセ官符ヲタマヘ、

次第事訖、上卿以下自敷政門御退出、致禮如恒、于時申刻、

一文殿之硯水滴ニ無水、爰長朝臣御當惑之旨、以六位如何ヤ御尋也、實以忘却之旨恐入、御理邦昌

ヨリモ申述之處、御執筆之御作法モ有之、既上卿ニモ御執筆之事、猶思召相伺候上ト仰也、

一先例自殿下御菓子被下之處、今度無其儀、俊壽朝臣供奉ニ付、自厚生内々尋問之處、御先例御承

知無之、猶閇繕之上トノ時也云々、

神祇官參上之儀

外記奉上宣、向日華門召之、其儀外記向上首幷中臣之方氣色、上首中臣共微唯參進著座、但良芳卿爲室上之間先進著座、上卿召中臣賜卜串、其儀上卿問中臣之位名於上首給、上首答申之後、卿令顧面給之時、中臣逃足敬屈、微唯進賦賜之、傳卜部良芳即復座、卜串返上之儀一如始、外記仰神祇官退出、

合

悠紀

近江國

甲賀郡

主基

丹波國

桑田郡

嘉永元年四月廿四日

定檢校行事

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

天皇卽位之年、大臣奉勅召神祇官、密封令卜定悠紀主基國郡、〈中略〉次以大中納言二人、參議一人、爲悠紀主基兩所檢校、行事四位各一人、五位三人、〈辨在此中、凡直於會所諸大夫、不官辨殺幷國郡不充預諸國事、〉諸司判官已上四人、〈史在此中、〉主典已下五人、〈左右史生各一人在此中、其判官已上依闕、主典已下申ノ臣、其諸所事共中亦同、〉官掌一人、使部直丁各一人、

〔北山抄五〕大嘗會事

大臣奉勅、〈中略〉召例文幷折堺等、令參議著會檢校、〈大中納言各一人、參議〉兩所行事、〈各四位一人、五位三人、辨在此中、諸司判官以上四人、史〉

（在二此中一、主典以下五人、官掌等後日申二大臣一、）相二加御卜合一、辨官奏、奉覽畢返給、卽以二御卜一給二辨一、下知官符以二撿挍行事文一給レ外記一、令二告仰一、○中略

行事辨以下監二臨畫所、細工所、北野等事一、（度々有二此事一、○中略）

寅卯二日間、撿挍以下巡二撿大嘗宮幷豐樂院事一、（永平天慶非二撿挍一公卿共向、）

〔代始和抄〕大嘗會事

大嘗會は、悠紀主基の國司その事を行ふに依て、國司の除目、ならびに叙位等の事あり、又撿挍行事の辨を定らる、撿挍は三人、大納言、中納言、參議、行事の辨は、悠紀主基に各一人、中少辨なり、其外史八省の丞等あり、

〔大嘗會儀式具釋一〕國郡卜定次第

此序職事、仰二撿挍及行事等一、（註二折紙一賜レ之）

撿挍ハ、其本蓋大嘗一會ノ事ノ遂例遂式アルヲ撿挍シテ正ス名ナルベシ、本ヨリ一會ノ事ニアヅカリ勤ムル事、貞觀儀式以下ニ見エタリ、但今ニテハ定メラルヽバカリニテ、サシテ勤ムル事見エズ、大嘗ノ當日ニハ出仕モセズ、辰巳兩日ノ節會ニハ出仕ノ公卿ノ一列ニアレドモ、本ヨリ小忌ヲモ著ズ、唯挿頭ヲ獻ツル時ト、行酒ノ時、事ニ預カルノミ、其人ハ大納言ノ中ニテ一人、中納言ノ中ニテ、一人、參議ノ中ニテ一人定ムル例ナリ、行事ハ字ノ如ク、大嘗一會ノ事ヲ專ニ奉ハリ行フ職ナリ、其人ハ昔ハ悠紀主基各四位一人、五位三人、辨此中ニアリ、諸司判官以上四人、史此中ニアリ、主典以下五人、左右史生各一人ツヽ、此中ニアリ、官掌一人、使部直丁各一人、合十五人ヲ定ムルヨシ見エタリ、中古以後ハ悠紀主基各八人ツヽ、其中ニ必辨史アリ、此序ハ職事、卜合ノ國郡ヲ奏聞セル序ニ、撿挍行事等ヲ定ムベキノヨシ仰セ出サル、其仰ヲ折紙ニ註シテ之ヲ賜ヒ、職事ヨリ之ヲ大臣ニ進ル也、

次上卿披見、○中略上卿仰二仰詞一、

仰詞ハ擢ヅラスベキヨシヲ仰スルナリ、先ニ奏聞セルト合ノ如ク、悠紀主基ノ國郡ヘ下知セヨトノ義ナリ、

次上卿令下官人召二外記一、仰中可レ進二例文一由上、

例文ハ撿挍行事ノ例文ナリ、故ニ貞享ノ次第ニハ、仰二可レ進二撿挍行事例文一由一トアリ、江次第ニ往代例文トアル是ニテ、先跡ノ撿挍行事ニ定メラレタル人名ヲ書タル文ナリ、其例ニ准ジテ今度ノ撿挍行事ヲ定ムルガ故ニ、外記ニ仰セテ進ラシム、如レ此舊例ハ何ニテモ外記コレヲ知ル官ナレバナリ、

次外記持二參例文一、入レ筥、置二上卿前一、○中略次上卿目二參議一、參議參進、次上卿賜二撿挍行事折紙及例文一、令レ書二定文一、○中略參議書訖進二上卿一、

書訖ハ定文ヲ書ナリ、其體左ノ如キ歟、

撿挍

權大納言藤原朝臣私云、三條利季卿、　權中納言藤原朝臣私云、萬里小路隆房卿、

參議藤原朝臣私云、飛鳥井雅香卿、

悠紀行事

左大史從四位上小槻宿禰盈春　權右中辨正五位上藤原朝臣賴要

兵庫頭從五位上源朝臣實豫　右大史從五位上藤原朝臣景春

木工頭從五位下賀茂縣主康顯　少監物正六位下和氣朝臣貞倫

治部少丞正六位下宗岡宿禰重行　民部少丞正六位下小槻宿禰方教

主基行事

掃部頭正五位上中原朝臣師守　　左小辨正五位上藤原朝臣清胤
大炊頭正五位下藤原朝臣庸德　　主稅頭從五位上藤原朝臣光祐
右大史從五位下安倍朝臣盛行　　式部少丞正六位下卜部宿禰兼矩
宮內大丞正六位下中原朝臣成壽　　大藏少丞從六位下藤原朝臣利平

如右書訖リテ上卿ニ進ル、昔ノ撿挍ハトヲ以テ定メラルヽ歟、今ハ其儀見エズ、行事ハ江次第ニ見エタルハ、今度行事スベキ人々ノ交名一紙ヲ、外記ヨリ參議ニ進リ、參議コレニ從ヒテ書ナリ、今ハ其儀モ見エズ、撿挍行事共ニ此陣座ニテ初テ定ムル分ナレドモ、本ヨリアラカジメ定メ置テ、今日ハ唯儀式マデナレバ、參議モ初ヨリ今度ノ撿挍行事ノ人ヲ知ルガ故ニ、自分ノ風記又ハ記臆等ヲ以テ直ニ書クナルベシ、其折紙例文等モ同ジクコレヲ返進ス、

次上卿悉披見畢、召職事奏聞、(先內覽)畢返賜、(〇中略)次上卿召外記賜之、仰可催廻由、(〇中略)催廻ラストハ、撿挍行事ニ定メラレシ人ノ許ヘ此由ヲ申廻ラスヲ云、總テ如此キ事ヲ催ト云、(〇中略)

外記稱唯退下、(〇中略)次上卿召外記仰可撤硯例文之由、外記撤之、(〇中略)次諸卿退出、

〔文德實錄　三〕仁壽元年四月甲子、定大嘗會行事司、

〔三代實錄　三十一陽成〕元慶元年四月廿六日丁酉、是日預定大嘗會撿挍辨悠紀主基行事、以正三位行中納言兼右近衞大將皇太后宮大夫藤原朝臣良世、參議從三位行左衞門督大江朝臣音人、參議從三位行民部卿兼播磨權守藤原朝臣冬緖、參議正四位下行左大辨兼近江權守源朝臣舒、撿挍大嘗會事、從四位上行右京大夫兼美濃守源朝臣覺、式部大輔正五位上兼美濃權守橘朝臣廣相、從五位上守左少辨巨勢朝臣文雄、左衞門權佐從五位上兼行美濃權介藤原朝臣維範、從五位下行肥後介藤原朝臣智泉、從五位下行美濃介藤原朝臣時長、幷六位四人、行悠紀事、從四位上行右近衞中將兼備

中守源朝臣直、從五位上守右中辨藤原朝臣保則、從五位下行備中介藤原朝臣清瀨、權介源朝臣元、散位伴宿禰春雄、外從五位下行笇博士兼但馬介阿保朝臣今雄、幷六位四人、行主基事、

〔類聚符宣抄一〕太政官史生大石忠利

天慶九年八月八日

右大納言藤原師輔卿宣、件忠利奉仕大嘗會主基行事所主典代之間、宜自去五月十六日准見仕給上日者、

月　日　　少外記出雲有時奉

史生槻本忠茂

右大納言藤原師輔卿宣、件忠茂從三月七日奉仕大嘗會悠紀織工所、宜准見仕給上日者、

天慶九年十二月廿一日　　大外記三統宿禰公忠奉

〔日本紀略五冷泉〕安和元年三月八日辛卯、大嘗會國郡卜定、〇中略又被定檢挍已下行事等、

〔類聚符宣抄一〕太政官史生肥田惟延

康保五年〇安和元年八月十一日

權大納言藤原伊尹卿宣、件惟延奉仕大嘗會悠紀行事所主典代之間、自去四月二日宜准見仕給上日者、

月　日　　少外記坂上望城奉

〔小右記〕寬弘九年〇長和元年八月十二日丁未、右中辨〇大江致遠權左中辨〇藤原重尹來相逢、今日右大辨〇藤原朝經權左中辨著吉服、件兩人先日依爲大嘗會行事、著吉服、未有左右之間、暫不改本裝束歟、右大辨至今不可行會事、大辨爲物行事不聞、亦悠紀行事以左中辨爲行事、主基以右口辨爲行事歟、重尹轉權左中辨、是本主基行事也、爲之如何、今朝召史是氏、仰可勘代々大嘗會行事辨史等之由、但尋見安和

例、悠紀行事右中辨濟時、右少辨輔正、前例各辨一人也、而有二人如何、或云、濟時有所勞之間、被加右少辨輔正云々、以右辨爲悠紀行事、今如件例不可論左右歟、　十四日己酉、早旦史是氏、進大嘗會行事辨勘文、悠紀所右中辨菅原朝臣資忠、(寛和二年)右中辨源朝臣昌、(寛平九年)右中辨平朝臣季長、(仁和四年)主基所左少辨藤原朝臣佐世、(仁和四年)令仰云、悠紀主基兩方有右中辨行事例云々、仰可令尋勘之由、〇中略類任朝臣傳左相府(〇藤原道長)命云、大嘗會行事辨事、早可被奏定也、辨必不依左右、以右辨爲悠紀、以左辨爲主基之例間存者、其例等云々、不能追記、但左中辨經通、(悠紀)權左中辨重尹、(主基)可爲行事歟者、右中辨景理新任者也、理雖相當、不知案內歟者、可然事也、　十七日壬子、小臣候陣之間、〇中略相逢頭中將、(〇藤原公信)案內大嘗會行事辨、答可奏驚之由、小時歸出云、傳勅云、悠紀行事經通朝臣、主基重尹朝臣如元者、即仰左少辨積善了、

〔吉記〕壽永元年六月三日壬寅、召使盛安持來大嘗會撿挍宣旨一見了、可返之由示之云々、而如此宣旨皆留家、至于此事、未知先例、書寫可返之由返答了猶留之、

參議左大辨兼近江權守藤原經房朝臣

正二位行大納言兼左近衞大將藤原朝臣實定宣、奉勅宜令件人爲大嘗會撿挍者、

養和二年五月廿七日　　少外記三善弘康奉

〔山槐記〕元曆元年八月十日丙寅、翌日召使持來撿挍定文、件文書樣(書白紙、非屆紙、)

撿挍

權大納言藤原朝臣　　權中納言藤原朝臣

參議藤原朝臣

元曆元年八月十日

披見返給之、大納言者予(第五)也、〇藤原忠親中納言者兼房、(第一)也、參議者兼光(第八)也、撿挍多者一大納言勤仕

歟、第一源大納言(定房)申穢氣之由、第二皇后宮大夫(實房)輕服、第三中御門大納言(宗家)重服、至于去月、然而未出仕、第四權大納言(兼雅)申有憚神事之由、(何事哉不審)第五予、第六八條大納言(實綱)無其儀歟、第七右大將(良通)所勞、予近日脚痛更發、尤難出仕、然而上首皆如此、先入定文、猶雖出仕者、後日可辭事歟之由、頭中將通資朝臣示送、答可在御計之由了、仍被定入歟、

〔萬一記〕正安三年四月廿五日、宜檢校行事等、其儀著軾仰云、大納言源朝臣、權中納言藤原朝臣、參議源朝臣、宜爲檢校、悠紀主基行事所、高檀紙書之下上卿、檢校同書折紙下之、書樣在左、上卿氣色、次予(〇藤以宣房)氣色起座、次外記置硯於參議前、(如紙)先是高倉宰相(經守)著座、次令左宰相中將(實□)書之、(先卜合國、次行事、)書畢進上卿、次上卿召予奏之、予著膝突取之奏聞、歸著軾返下定文、次上卿召外記下檢校行事文、召辨下國郡文、辨下史、次上卿以下退出、

書樣

檢校

大納言源朝臣(具、大納言源朝臣附人也、(具守權房)□書片字、羽林川大納言所神事雖治中子細、然而所被宣下也、)

新中納言藤原朝臣(師、新中納言藤原朝臣數輩之也、仍師字資也、神事自行事所始可始之由被示、)

參議源朝臣(左大辨宰相有房朝臣也、依弁官有其例、然而保安敕功城左大辨宰相殿經沙汰、參議卜合書給、仍守被例、有房朝臣爲御使下向賀茂、可爲他參議歟也、予先日申入之、然而大辨宰相常儀也、參議神事盛當月始也、仍難可爲左大辨由被仰下、今夜殿下與子細、勘定之趣同前也、)

悠紀行事　右中辨正四位下藤原朝臣定資、内匠頭從四位下和氣朝臣吉成、左大史正五位下小槻宿禰伊綱、大監物從五位上安倍朝臣範秀、左少史正六位上中原朝臣景範、中務少丞正六位上宗岡宿禰行貞、少監物正六位上藤原朝臣定氏、民部少丞正六位上藤原朝臣景藤、

主基行事　主計頭正四位下賀茂朝臣在重、右少辨正五位下平朝臣惟輔、兵庫頭正五位下丹波朝臣忠守、大藏少輔從五位上安倍朝臣惟俊、左大史正六位上安倍朝臣盛廣、式部少丞正六位上紀朝

臣行親、大藏少丞正六位上中臣朝臣季定、宮內少丞正六位上源朝臣泰重、以上折高檀紙書也、兩通書也、不書年號月日也、先例雖書之、是者可宣下事也、而書折紙下之、然者不可書年號月日之由所存也、且示合坊城前中納言畢、

〔吉續記〕正安三年十一月十日乙巳、權大納言被示云、撿挍事難治之由申切了、此上予所望事、定有沙汰歟之由被命、十一日丙午、撿挍事權大納言申切之由令申、亞相所望事、此上何樣可候哉之由付女房申入了、十五日庚戌、傳奏宣房申、撿挍事罷向土御門大納言許委申處、重々難治之由申之、居猶不愈、難從神事、及誓狀難叶之由申之、此趣奏聞、被仰殿大納言〇二條兼基子道平、時年十五、年少之間、揷頭臺難昇之間、難治之由殿下〇二條兼基被申、十六日辛亥、自御所女房奉書到來、撿挍事都及闕如、可用意之由被仰下、卒爾仰天、而且畏存、可叶承久佳例之由申入了、頃之被仰下云、自法皇〇龜山御方被仰大炊御門大納言〇冬宗可隨被左右之由重夜仰下、勅定變々迷惑者也、法皇有御障礙歟、倩案就撿挍闕如誠可爲無念歟、以天運與祖神御計也、

〔薩戒記〕永享二年四月廿三日癸巳、今夜有大嘗會國郡卜定事、〇中略先是忠長朝臣宣下撿挍幷行事等、以詞仰之、彼自懷中取出折紙、後日大丞注進云、以權大納言藤原朝臣、權中納言藤原朝臣、參議藤原朝臣、爲撿挍、以左中辨資親朝臣、左少辨明豐朝臣、爲兩方行事、自餘四位已下任先例令注申者、如此也、今夜於殿上示合予之時、大納言已下欲注名片字云云、又辨等可加姓云云、不可然、無先例之由予示之、仍止也、注紙屋紙也、奉右府、〇藤原房嗣是予書卜合文之間也、上卿則召例文、一度可被令書之歟、而無其氣色、仍予且獻卜合清書了、次右府以官人召忠長朝臣、被奏卜國文、入筥、先例多賜卜國文、返給之時被仰下撿挍行事等、其時上卿更召例文折堺等也、此次第叶理之由見治承中山殿御記、或又參議書卜國文之間、職事仰撿挍以下事、其時上卿召外記召例文、外記持參之、傾聽折堺於參議前、書卜國文了、即又令書之、參議以件定文等加入一紙返上、上卿一度奏聞之例也、今日此儀可然歟、而違期了、如何、又或參議書卜國文了、且持參之次、被授撿挍行事等小書出、尤有傾、參議歸座、更又書之、取副筥進之、上卿取之加入卜國文筥、一度奏聞之又例也、所詮此間次第先達所爲區區也、而今日儀一向別樣也、可尋可不、則被返下、次右府被氣色于予、此事如何、先召外記可召例文歟、仍予不思得、暫思惟、人々又屬目、右府被仰云、大嘗會撿挍幷行事定文者、予申云、此間者可給土代折

紙歟、右府諸自懷中取出土代、所下之折紙給之、予□進□入懷中復座、此事雖不可然、奉□使定之時、或磨墨□書候時臨期給也、或未磨墨以前召參議給也、其先例也、而於今儀者、卜國文淸書之時已摺墨了、更不可摺之、已取筆欲書之時給□者、甚可有事煩、仍密々奉尋之處、無左右給之、似參議推衍行甚不可然、人々定□□□凡今日上卿一向無言、適被示候事微言間、迷惑之餘也、不可爲例、此後予見硯無折堺、仍召官人、(無一度召參議如此也、)仰云、外記折堺持テ參レト仰(與)、即少外記康富持參白紙(入筥、紙、)折堺一卷、(續二枚行事文料也、又不續紙三枚卷重之、相副獻之、)予置笏取之置座前、先取不續紙卷返之、副笏伺氣色、右府無□集之詞、只有目許、仍予見折紙書之、先書撿挍文、卷之置座前、次卷返續紙書行事文、

(季連宿禰記)貞享四年八月廿三日己巳、今日大嘗會國郡卜定也、○中略

國郡卜定次第○中略

此序職事仰撿挍及行事等、(注折紙賜之、)

此折紙、後日大外記師庸朝臣被語曰、宿紙之折紙也、撿挍行事辨許賜之、自餘之行事者、可被量定之由職事所仰也云々、

上卿披見畢懷中折紙、○中略次上卿令官人召外記、仰可進撿挍行事例文由、次外記持參例文筥置上卿座前、次上卿目參議、參議參進、上卿賜撿挍行事折紙及土代、令書定之、

土代之事不分明之由、後日大外記被語之、何物歟可勘記、土代例文爲一物歟之由予存之、然而後日大外記被語之旨非一物也、自外記筥所出歟、何物歟可考、今度雖被獻御次第、土代無其實云々、

參議書訖進上卿、次上卿悉披見、畢召職事奏聞、(モ逆語、致如例、)職事奏聞了返賜、次上卿召外記賜之、(入筥賜之、)仰可催硯之由、外記賜之稱唯退下、次上卿召外記、仰可徹硯例文由、次外記徹硯例文、次諸卿退出、

(敬義宿禰記)天明七年十一月三日、近代大嘗會之節、撿挍之人々、卯日參勤之義無之、如何之間、北山抄等ニモ、撿挍卯日大嘗宮運撿等之儀有之、今度卯日參勤有之、於大忌幄可被供奉之間、右ニ付下

行等煩無之哉、被尋之、予申格別下行之煩不可有之乎、

〔大嘗會書類〕嘉永元大嘗會撿挍宣旨寫

正二位行權大納言源朝臣基豊

內大臣宣、奉勅件人、宜爲大嘗會撿挍者、

嘉永元年四月廿四日　少外記兼兵部大丞少內記中原朝臣邦昌本〇中略

大嘗會撿挍幷悠紀主基行事等定文寫

大嘗會撿挍

權大納言源朝臣　權中納言藤原朝臣

參議藤原朝臣

嘉永元年四月廿四日

悠紀行事

右中辨正四位上藤原朝臣恭光　兵部權大輔從四位上藤原朝臣俊璹

右大史正五位下高橋朝臣春芳　大監物正五位下紀朝臣正恒

兵庫頭從五位下源朝臣任賢　大學權助正六位上藤原朝臣重房

宮內少丞正六位下紀朝臣重就　掃部大允正六位下藤原朝臣利政

主基行事

大藏權少輔從四位下菅原朝臣光德　左少辨正五位上藤原朝臣光愛

右大史從五位上紀朝臣厚生　宮內大丞從五位上藤原朝臣求遠

中務少丞從五位下中原朝臣職孚　式部少丞正六位下平朝臣胤典

刑部少丞正六位下中原朝臣定靜　中務少丞從六位上源朝臣常邦

嘉永元年四月廿四日

〔代始和抄〕大嘗會事

卜食の行事所は、大内の諸司の中に卜食の所を用ゆ、所々の預、主典代、繪所、木の道の工等、諸道の輩、その事にしたがはずといふ事なし、一々しるすにいとまあらず、

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

撿挍納言已下召神祇官、令卜悠紀主基行事所幷小忌院等、卜訖行事史申大臣、奏訖即仰陰陽寮擇吉日、著之、〈先是權取便所爲行事所〉即廳借行鋪設宣旨下宮内省、〈宣旨在例卷、下旨同、〉其設座、撿挍西面北上、行事四位已下南面東上、主典東面北上、諸所預幷國司北面東上、〈國司當三位及參議設座、四位五位同席、六位亦絶席在末、〉才伎長上諸司史生等在四位五位後、北面東上、其座兩所共同、其始行事日時令陰陽寮定之、次可進翻奏宣旨下中務民部兩省、次可充收韓櫃廿合狀下大藏省、〈凡注物數者、兩所共同、〉次可進紙筆墨狀下中務省、可進硯十枚狀下宮内省、次可甄給行事以下百度狀下所司、但其代令當國塡之、次奏聞可請正稅稻一萬束卜食郡調庸幷雜物之狀、〈凡會所請雜物、亦正稅稻幷絹布綿絲米等類、行事幷國司五位以上署名、自餘輕微之物、不署名、〉即下知兩國、次奏聞可兩所用印之狀、仰大學寮令進字樣、召内匠寮以木彫作、其文曰、悠紀所印、主基所印、並用小篆字、即用印之狀下知五畿内七道諸國、次應行多每物之狀下符兩國、次可買進甕狀下知左右京職、次仰左右京令進估價帳幷價長等名簿、次依撿挍宣、仰中務省令進大舍人四人、仰式部省令進諸司史生十人散位位子等册人、仰民部省令進拔出丁四人、次錄諸火長四人衞士八人之狀、辨大夫付内侍奏聞、訖喚所司仰之、次定所所預、出納所五位二人六位已下六人、齋場預五位五人、六位以下八人、〈諸雜食代〉幷小忌所五位四人、六位以下六人、繪工所〈經畫所〉幷五位三人、六位以下八人、女工所五位二人、六位以下四人、樂所五位四人、六位以下八人、風俗樂所五位二人、六位以下二人、和舞所五位二人、六位以下二人、大炊所〈諸人給所〉六位以下六人、〈所諸司主典以下〉其食法、行事主典已上、日白米一升五合、史生大舍人官掌使部國書生一升二

合、火長仕丁黑米八合、所所判官代已上、日白米一升五合、主典代膳部國書生一升二合、雜工二升、其從者行事五位已上三人、判官主典代二人、所所五位已上二人、人別赤米八合、所所判官主典代一人、人別黑米八合、爲令縫御帳帷幷御鏡緒等、請內豎幷左右近衞兵衞等奏進於內裏、次進請左右近衞府樂人幷雅樂寮歌女等奏、次牒送借諸寺樂人樂器之狀、次應行會料正稅之狀下知諸國、次應進會所雜物之狀下知諸國、次應卜定齋場之狀牒送山城國、○中略次卜定採大嘗宮材木萱幷御琴料材柏等山野、即下知卜食國、次應交易雜物之狀牒送諸國、○中略次內侍就女工所行事、次可下大殿御衾幷雜物符下大藏宮內等省、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

左辨官下宮內

　疊卅枚　長筵廿枚　長疊十枚　薦十枚

右其所諸所預等座料、彼所所請如件者、

　年月日　　　　　辨姓名奉

大臣宣、宜借收、

太政官符民部大藏宮內三省

民部

海老鰭槽一隻

大藏

絁三匹卜部三人料各一匹調綿十三屯六兩、卜部三人各四屯、造酒童女一人一屯六兩、調布六端三丈四尺、卜部各二端、造酒童女一人二端四尺、酒

（波女二人各三丈六尺、）絲二分三銖、（雜殿料）五色薄絁倭文各五尺、木綿麻各三斤、（已上四種、造使卜料）

宮內

鏟二具、小鏟二具、鎌二具、鑺二口、（已上拔穗使料）筥一合、甂四口、瓱四口、缶二口、甋廿五口、小坏二口、波佐布二口、筥坏廿口、酒垂二口、阿波大廿口、短女坏廿口、高坏廿口、足皋取次廿口、壺廿口、多志良加二口、陶碓二口、都婆波缶二口、贄土師物韓竈一口、瓮二口、堝二口、高盤廿口、御刀子口柄、御疊五枚、短疊三枚、薦八枚、

右得神祇官解偁、供奉大嘗會其所調度、依例所請如件者、省宜承知、依件充之、

太政官符宮內省

御刀子一柄、阿爲刀子卌柄、東刀子卌柄

右得神祇官解偁、大嘗會其所用度、依例所請如件者、省宜承知、依件充之、

〔三代實錄 三十 陽成〕元慶元年五月二日壬寅、賜悠紀主基行事所印各一面、

〔類聚符宣抄 一〕史生佐伯藤岑（悠紀所）　清岑高道（主基所）

以前右大臣（○藤原基經）宣、件等人宜令直彼所者、

元慶元年五月十一日　大外記嶋田朝臣良臣（奉）

〔類聚符宣抄 一〕右大臣（○源多）宣、大嘗會記文、隨悠紀主基行事所請宛行者、

元慶八年四月廿七日　少外記大藏善行（奉）

〔類聚符宣抄 一〕史生上毛野有統

右大納言藤原朝臣良世宣、件人宜令直大嘗會悠紀御書所者、

元慶八年五月廿六日　少外記□□□□□

〔類聚符宣抄 一〕史生爲原部廣繼（悠紀所）　史生波多部正世（主基所）

右左大臣〇源融宣、件人造畢記文之間、宜令直被所者、

仁和元年三月廿一日　　大外記大藏善行本

〔小右記〕寛弘八年八月十八日己未、左中辨來云、大嘗會事、官底無前例使者、件事是儀式二三四卷取出、件卷々令見畢、爲取引合他書等、若無相違就式文可行之由相示了、　廿三日甲子、參內、於陣頭左右辨進悠紀主基所請申印文、各印文一面、木印一面、用途料正稅稻一萬束文、於官東廳始行事所日時文、今日中刻定、主典代文、各四枚、右中辨進主基所定主典代文行事所始文、主典代文等、各見了下給、印稻等文二通以左中辨令奏、　廿四日乙丑、右中辨來申、大嘗會雜事之內、欲令書印字樣書博士城外之由寮申者、件字樣大博士爲忠朝臣知之云々、仍以爲忠朝臣令書也、更有何事乎、　九月七日丁丑、右中辨來言主基事之次、持來元慶大嘗會記文、以采女正時原春風令書古文字樣、給內匠寮令彫木印者、彼時若書博士他行歟、今般書博士等城外、仍小臣思慮、以明經博士爲忠朝臣令書字樣、頗合先賢之高慮耳、　十日庚辰、悠紀主基所申無物之由、可給近江丹波掾各十人、但令勘前例可令奏聞者、仰左中辨、即大外記致賴朝臣勘申三代例、不見給悠紀主基所之由、只引除目勘申也、所疑者之中有人給等歟、令仰官令勘申、依可見彼間文書也、　十三日癸未、右大辨云、左衞門督云、作物所愁文、悠紀標所被充書所人、主基標所被充作物所人、而今般作兩被定書所人、可示事由者、余答云、先日有此事、即答可尋之由、而無所指見者、今有此事如何、辨云又々尋見、相遞奉仕歟者、兩方辨各所取別不被尋前例如何、作物所所愁申叶前跡、被改定又有何事、一日作物所進同愁文、然而先日有左金吾消息、隨又々被示、可有左右也、仍不仰子細耳、　九年〇長和元年六月廿七日癸亥、左中辨來云、依縦作立相遞頭辨云、一日左相府云、始行大嘗會之官符未成云々如何、中納言云、有給宣旨之例者、相府云、隨宜可行者、此事最可爲奇、大嘗會中絕、〇去年、冷泉天皇ノ崩御ニヨリテ停止ス、又更始行之例只在承平、彼時給官符、以何例所陳乎、依前例作官符度外記了、重令只待致可請印、抑亦隨當時定可有左右歟、且以此旨示可觸頭辨之由了、予過穢之

後可示子細者也、

〔本朝世紀〕康治元年八月十六日丙子、今日大嘗會行事所始也、以大膳職爲悠紀行事所、以民部省爲主基行事所、　十九日己卯、大嘗會官符被請印、權大納言藤原宗輔卿參仗座行之、　廿九日己丑、權中納言藤原成通卿參仗座、行內印事、大嘗會官符等少納言源師教卿等參仕如常、

〔兵範記〕仁安三年七月八日丁卯、沐浴解除、參行事所、隆職宿禰六位史則貞史生以下參著、諸國召物、諸司所課、多成牒、又請印即分付了、　十一日庚午、巳刻行水解除、參著行事所、大夫史幷右大史章貞史生官掌祇候、女工所、細工所、出納所、繪所、已上屋々可造立由牒送卜食國了、　九月十三日辛未、右大史三善章貞持來始悠紀繪所日時勘文、見了返出了、即今日於行事所令畫始御屏風一帖、○中略

陰陽寮

撰申可被始大嘗會悠紀繪所日時

今月十三日辛未　時申二點

仁安三年九月十三日○以下署名略

陰陽寮

撰申可被行大嘗會悠紀所雜事日時

始女工所日時

十月三日辛卯　時午二點　若申

始風俗所日時

十一月二日己未　時午二點　若申

陰陽寮

撰申可被始大嘗會悠紀幷主基小忌所日時

十月六日甲午　時未二點　若申
十七日乙亥、參行事所、(悠紀)大夫史以下所々行事道々細工多以參集、次第所作終日沙汰、廿九日丁亥、參行事所、(中略)大夫史同參著、御調度塗調螺鈿地小々居具、又蒔繪物宗茂書繪様、四尺御屏風同墨書、擬御挿頭臺風流、銅細工劒造召付之、　十月三日辛未、行事所渡始、所作物長絹一匹、糸一勾、紅花一斤、茹安等云々、是寛治式目也、次内侍被退出了、自今夕可被宿侍也、而織物綾以下并染草等未濟調之上、寛治元年十月五日内侍參入始所作即退出、其月中旬以後令移住云々、且准彼吉例、主基内侍少納言、同今夕參入云々、其後出否可尋知之、毎事沙汰畢、下官大夫史等退出、　五日癸巳、向行事所、諸國召物多以辨濟、道々細工就職掌勤仕、晩頭參殿下條々奉宣下趣又申上退出、

仁安三年十月五日宣旨
宮城東西、并朱雀大路至于七條、掃除泥途、殊可令修固、兼又京裏之制具載式條、今開墾溝渠、煩往來、侵奪道路、耕作田畝、論之政途、可謂違濫、宜令左右京職撿非違使永加糺斷従停止者、
藏人頭權右中辨平信範(本)
件宣旨奉撿按左大將即返給、下官下知官了、　十六日甲辰、女工所内侍、自今夕渡住、

〔山槐記〕元暦元年八月廿日丙子、今日大嘗會行事所始也、予爲撿按、仍今朝沐浴不及解除、爲令勘申日時、未始刻參内、(朔院前駈二人、盛房邦長等也、盛房軽服日數内也、然而除服已了、仍相具之、)直著端座令敷軾、召頭左中辨光雅朝臣、(悠紀行事)仰云、大嘗會行事所始日時、辨退歸即持來勘文、(有懸紙)(中略)頭辨昨日内々示送曰、日時先例或載二時、或載一時、仁安有沙汰可承存云々、今日尋其子細示曰、寛治載二時、天仁載一時之處、故久我内大臣(別當公)任寛治例可載二時之由被示、仍勘改也者、予問云、今度被用何年例哉、答曰、被用天仁例歟者、予又問云、今日於陣覽文何々哉、辨云、主典代文許也者、舊例或加他文、仍所問也、又問云、主典代文隨召歟、進(天)獻之歟、辨云、先例不定歟、但元注風記申上、令參議書下、而近代雖無其儀、進(天)獻之歟者、(中略)申

終刻兩辨〈共取笏、結緒各持一人、相具脱緋、無共侍云云、〉率來、予著直衣〈冠〉出客亭之後、頭辨副文於笏著座、揖卽進來予座前、置笏授文於予、予取之置座前板、解結緒返置、披懸紙推文於右方、一々取之披見、

一通〈請印四面文、悠紀主基各文印一面、木印一面、兩方辨史加署、〉

一通〈請正稅稻二萬束文、兩方各一萬束、兩方辨史加署、〉

一通〈請借數三千二百四十斛文、兩方、辨史加署、〉

一通〈請正稅穀二萬九千五百五十束文、一紙二方辨史加署、〉

一通〈請鐵米文、一方辨史加署、〉

一通〈請雜物文、一方辨史加署、〉

一通〈可被行悠紀主基所雜事日時、可造日時、[illegible]可始用印日時、可始卜食行事所日時、[illegible]〉

一通〈可被立悠紀主基所小忌院并膳日時、[illegible]〉

一通〈悠紀所可修行事所請司、[illegible]可爲小忌院諸司、[illegible]可爲小忌井諸司、[illegible]〉

神祇官人三人、權大夫卜部兼貞、宮主權大祐同兼基、權少祐大中臣有能加署、

一通〈悠紀所可採大嘗宮料材山、[illegible]可刈萱野、[illegible]可採鵜尾等料山、[illegible]可採柏山野、[illegible]〉

加署同前

已上十通禮紙一枚、內卜文二通卷籠、日時二通卷籠、正稅稻以下五通卷籠、如此各籠之、若先例歟、尤不審、下結申、如元結之返授辨、辨欲結申、予止之省略也、不可被奏之由、予又云、奏聞之後直可被下也、又々此內有上宣文歟、辨云皆令奏也、予曰、先例分明歟、但可依例也、〈中略〉

權辨又副文書於笏直來予座前、〈先是爲召辨、同在此所、〉授文於予、予披見之、

一通〈請正稅穀二萬九千五百五十束文、一方辨史加署、〉

一通〈請稻米文、一方辨史加署、來書樣不似悠紀方、悠紀者米二百斛、白百斛、黑百斛、如此書之、主基者白米百斛、黑米百斛、如此相並書之、〉

一通（請雜物文、一方辨史加署、書樣如悠紀、）

一通主基所可爲行事所諸司、[illegible]可爲小忌井諸司、[illegible]本可爲小忌院、諸司、[illegible]

神祇官人三人、大副卜部兼友、權少祐大中臣有能、皇后宮宮主直是清加署、

一通（主基所可採大嘗會料材木山、[illegible]并可漑萱野、[illegible]可採鴟尾葺料材木山、[illegible]可採柏山、[illegible]）

加署同前

已上五通、籠懸紙一枚、内結申兩方辨史加署文三通、日時勘文二通、悠紀辨覽之、仍其外各別文五通所覽也、如元結之返辨、辨欲結申、予又止之、〇中略予問行事所始次第、答曰、官東廳顚倒無實、仍立幄、（間敷）（如本敷也）北第二間東上南面敷撿校三人座、其南東西相對敷辨座、（悠紀東、主基西、）其南同相對敷史座、其南横切東西行敷主典代座、其南同東西行敷史生座、主典代座東頭西面敷悠紀官掌座、同西頭東面敷主基官掌座、史生座西頭敷召使座、南砌敷使部座、主基史座下南敷陰陽寮座、同辨座後敷神祇官人座、頭辨入東方著座、光長入東面南第二間、（可有戸間也）經座末著西座、是承保元年隆方朝臣用此路也、而天仁雅兼卿爲主基辨、入東廊戸自西面著之、寛治例之由執之云々、其後人々所爲大略用西面歟、然而用隆方例、了兩方著座、了諸司兼居饗、（大膳、大炊、造酒、行事所之後、國司勤之、）分先一獻、次成吉書、召硯筆墨等、下宣旨、（此書不覽、）（上卿自行事所下知、）次二獻、下文等事、次三獻申了退出、頭之稱可參殿下、（基通〇藤原）之由退、抑予示頭辨曰、主基方可奏之文、悠紀辨可奏給歟、至于内覽者、各不可有妨歟者、頭辨曰、辨官皆奏文事也、何可然哉、予曰、權辨爲地下之故也、寛弘左中辨朝經殿上辨也、右中辨重尹爲地下辨、小野右府被命旨如此、但今爲幼主、（〇後鳥羽）不可及御成敗、只存其旨許歟、又有限可奏文可有其儀也、頭辨説此事同可示權辨事也、而忘却者也、　廿二日戊寅、巳時許、權右中辨光長朝臣以左大史能光示送曰、只今參院并殿下間、印字樣且所覽也者、勘文二通籠懸紙一枚入覽筥、〇中略辨曰、此印字以吉時於東廳行事所今日可令彫也、而隆職宿禰内々申云、近代内匠寮皆爲銅細工彫木事不得其骨、仍兼令佛師彫也者、又曰、文印者、印行

事所文書等也、木印者、如件之材木點定之時印彼木也、近代無點材木事、仍此印不中用歟、然而猶同彫之、文印者小、木印者大也者、（件印共貫鶴木彫之云々〇中略）

今日移行事所儀可尋注、去廿日行事始者於官東廳行之、兩方行事官共著之、所司設饗、至今日造印了、請印之後、兩方行事出官東門、相分各著行卜定之行事所、（悠紀陰陽寮、主基一本御書所、）卜食國設鋪設居饗饌也、

一昨權辨曰、近年諸司大略無實、左近府爲先度之行事所有憚、大炊寮去年亂逆之間皆被壞取梁、柱許如形立、仍點一本御書所、而監職宿禰曰、先例未被用此所、隨可點諸司云々、此所非諸司、頗有恪惜之氣、此有被用皇居之時、仍痛損亡歟、然而無他所、又齋宮齋院始入諸司多又入御此所、雖請入諸司不用之故、仍所點也、

於行事所勘日時等定所々預幷繪師雜工、今日不覽之、

悠紀方文書

一通（可被奉謝大嘗會悠紀主基卜食國、行事幷日時、廿二日、時辰若申、）

一通（可被行大嘗會八月上下旬大祓日時、廿八日、時未若申、九月十七日、時午若申、）

一通（可被行大嘗會日時次大祓日時、廿八日、時申、）

一通（可被行大嘗會悠紀主基定見川瀨幷齋場所鎭事日時、定見川瀨、[illegible]點齋場所、[illegible]）

一通大嘗會悠紀定所々預事

小忌所　内藏頭藤原朝臣高佐、主税權助三善朝臣行衡、玄蕃頭惟宗朝臣清直、主水正清原眞人良業、

齋場所　大學頭菅原朝臣在茂、皇太后宮亮藤原朝臣行雅、勘解由次官平朝臣親國、左馬助藤原朝臣爲成、

細工所　太皇太后宮權大進高階朝臣忠業、散位惟宗朝臣定賢、

出納所　助教中原朝臣師直、主計助中原朝臣師茂、
給所　文章博士藤原朝臣光範
風俗所　右馬頭源朝臣資時
和舞所　隼人正橘朝臣清定
女工所　縫殿頭賀茂朝臣宣憲

元暦元年八月廿二日

一通大嘗會悠紀所定所々預事
小忌所　主計允大江季遠、掃部允藤原邦隆、大學屬紀俊久、
齋場所　宮内丞藤原貞季、右衛門尉小野忠經、中務錄紀良貞、民部錄中原宗廣、
細工所　中務丞惟宗時賢、大炊允中原成清、
出納所　少監物源頼成、主計允中原貞賢、
風俗所　兵部丞藤原兼宣、左近將監狛則近、右近將監多近久、
和儛所　右近將曹秦信光
女工所　縫殿允藤原國親、大膳屬藤井貞永、
大炊幷人給所　大炊屬藤井吉遠
標所　内舍人源良季

元暦元年八月廿二日

一通大嘗會悠紀所定所々主典代事
小忌所　左史生中原康貞、右史生大江忠兼、民部史生大江資宗、
齋場所　左史生紀良直、右史生中原季景、勘解由史生藤井國末、

細工所　左史生惟宗久經、勘解由史生中原國弘、
出納所　左史生秦久仲
風俗所　左史生大江盛元、左近府生大石久直、
繪所　左史生中原景弘、大藏史生佐伯季景、
和儛所　右史生中原良盛
女工所　左史生菅野兼久
　元曆元年八月廿二日
一通大嘗會悠紀所定繪師並雜工事
繪所
墨畫　修理進藤原有宗
淡　內匠少允中原光永
作繪　中原吉久
張手　豐原永久
細工所
御挿頭　木道安藝介中原安信、木工散位中原貞時、漆工右衛門少志源良直、决入工中原貞仲、
　蒔繪工右衛門少志紀助正、磨物工紀末次、
御器　鍛冶工源貞次
金物　武藏介紀清則
鏡工　武藏介葛原貞則
鑄物師　西市令史大春日守正

綾織　散位佐伯爲光
薄師　原守安
平文師　散位淸原貞光
打物　右京少屬中原淸永
繡工　紀守保
玉工　中原貞次
轆轤工　大春日守正

元曆元年八月廿二日

○按ズルニ、此下主基方ノ文書アレド、大略悠紀ニ同ジケレバ略ス、

〔萬一記〕正安三年五月十一日、參院、付頭卿奏條々事、官申、大嘗會主典代見參料、民部大藏少錄無其仁之間、所望濫任永仁正應例可被任之由申之、仍奏聞處、此間可被行小除目、可申沙汰、其時可被任之由被仰下之、　十二日、大嘗會行事所始、御教書書樣事、

撿校許

來廿日可在大嘗會行事所始、可令參陣給者、依天氣言上如件、

進上

或ハ撿校左大將口刻可被參、存其旨可被催也、

來廿日可在大嘗會行事所始、任例可被致沙汰之狀如件、

悠紀主基辨許ヘハ、撿校左大將口刻可被參、可令存知給ト可書也、六位許ヘハ任例可被申沙汰ト可書也、仰トハ不可書也、

廿六日、今日大嘗會行事所始也、參殿下、尋申御參有無之處、於日時勘文內覽者、可被略之旨被仰下

也、次參內、酉剋撿按堀川大納言具守參仕、辨遲參之間賁儀、秉燭之間催勢、先撿按大納言花山院新中納言師信著仗座、上卿召悠紀行事右中辨定資朝臣、仰行事始日時事於史、史仰寮召勘文付右中辨、辨覽堀川大納言、大納言入官筥、以定資朝臣奏聞之、於內覽者被免之間、予示事、定資朝臣於鬼間付女房奏之、即被返下、上卿下辨、辨下史、次悠紀辨覽悠紀主典代文於上卿、即被返下辨、辨下史、次主基行事右少辨惟輔、覽主基主典代文於上卿、即被返下辨、辨下史、此後上卿以下退出、日時可定申事、職事或不仰或仰之、仁治不仰之、寬元仰也、仍兼示堀川大納言處、可守仁治例之由被示之、仍不仰之、如此事依上卿所存定例也、仁治次第、堀川大納言被相尋之間注遣也、官東廳儀追可尋記、　七月十八日、早旦參院、以二條中納言奏條々事、○中略

寄撿非違使事

申云、仁安辨申沙汰之、重方朝臣記分明也、然而藏人方近年致沙汰、且宣下事也可爲藏人方沙汰歟、可差進可然之仁由可仰大理歟、仰云、早可仰大理、

廿七日、參內、大嘗會悠紀主基兩所官符請印也、先爲內文請印、撿按大納言通頼卿未剋參內、而官符遲々之間及夜陰、仍再三遣使責催之處、官符三百餘枚之間令遲々、非緩怠儀之由大史伊綱申之、兼不致沙汰之條被違失也、爰及子剋悠紀官符到來、主基官符辨料遲々之由申之、仍上卿且著陣、著奥座、招予之間參進、被奏事由、以頭云、內文儀、次予奏聞、次還向仰聞食由、氣色許也、次上卿移著端座、此間主基官符猶未到、悠紀許奏聞不可然、可相待歟之由上卿以使被命、尤可然之由予答之、重再三仰遣官之處到來、上卿起座就弓場、予出逢奏之、入筥、悠紀主基[illegible]爲使者官符也、於鬼間付內侍奏之、於內覽者可爲御覽歟之由如例申入之處、可爲御覽之由殿下被仰也、次被返下、上卿歸著仗座、其後請印、陣儀不及見也、少納言信雅、將監用代六位史少外記等參之、上卿少納言等藏人方催也、官外記同相觸也、次請印政也、於結政被行也、上卿少納言等參向也、仁治七年被行之、內文外文等請印同日也、上卿撿按大納言被參之、仍今度被用彼例、內文奏聞後予歸廬、于時夜

已爲丑刻、八月十四日、來十七日荒見河祓也、仍寄撿非違使事、忩所宣下也、○中略

正安三年八月十四日宣旨

撿非違使左衞門少尉藤原季氏、大志中原章房、

宜令行大嘗會悠紀所事

撿非違使左衞門少尉中原季兼、少志中原章有、

宜令行同主基所事、

藏人兵部少輔藤原宣房奉

廿五日、大嘗會女工所勾當宣下也、宣旨書樣、

正安三年八月廿五日宣旨

掌侍從五位下藤原尹子

宜爲大嘗會悠紀所女工所勾當

掌侍正六位上藤原信子

宜爲大嘗會主基所女工所勾當

藏人兵部少輔藤原宣房奉

〔後深心院關白記〕永和元年五月廿三日壬午、俊任來云、大嘗會行事處始日時定、上卿撿校三條大納言公豊卿輕服之間、（叔父融親上人圓寂）被仰他人之處、撿按事未無領狀之仁、非撿按人上卿例被尋兩局處、師茂勘例、（注先例不詳之由被請文）詳文如此、何樣可有沙汰哉、可計申者、余申云、仁安例不庶幾、早被改補上卿事、撿按中納言參陣奉行雖無先規、已及闕如之上者、以新儀有沙汰之條可爲何樣哉、余○藤原道嗣申云、就闕如被用新儀之段者、宜在時宜矣、廿五日甲申、俊任申送云、（付書狀於顯尹朝臣、仰調如此、仰調注別紙）大嘗會行事所始日時定、卅日己丑、大嘗會行事所始日時定、上卿洞院中納言公

定卿(按察納言也)行事云々、按察大納言參行流例也、而依爲輕服、中納言參行新儀也、　六月廿七日丙辰、
傳聞今日造立大嘗會行事所云、

〔季連宿禰記〕貞享四年八月廿日丙寅、大嘗會行事所始之事、今度被略之、只可有其由許也、仍兩局無催沙汰之事、　廿六日壬申、依使者參頭中將基勝朝臣之許、頭中將被命云、今日大嘗會行事所始日時勘文自辨可被下之間、件日時幷刻限等可傳仰行事官重基云々、申承之由、基勝朝臣被命云、大嘗會行事所始、依密々儀、於行事官重基許可有其事、辨史等不及行向、只調進物之內聽可造始、此分可沙汰云々、又宣旨等不及沙汰之間、勘文者留官、只日時之趣以口狀可示遣重基云々、

〔大嘗會雜事錄〕明和八年之度(知音卿御記)

一行事所始於行事官敷地有之、兩行事辨予大外記等各出仕云々、但貞享以來如此云々、
兩行事史ヨリ、上首ハ座次依口口稱所勞、當日不參由、一會傳奏被命ニ付、如此交名ニ不參之由注之也、

〔爲秀記〕天明七年五月廿五日

一幸德井陰陽權助入來也、唯今頭辨殿より被招、非藏人口江參候處、明日行事所始ニ付、依古例勸盃之役被仰付候間、早々御請申上候樣と被仰出候、尤明日辰刻束帶ニ而、官東廳エ向テ參仕可申之旨被仰渡、且又勤方萬端承度候ハヾ、行事官江向テ參、とくと可承之旨御申故參候由物語故、則畫圖等爲見申、尙明日辨殿參向之上、休息之節とくと御尋、勤方御示合セ被成可然存候由申之、

一多村造酒令史入來、唯今大外記より被招被申渡候ハ、明日官東廳代行事所始ニ付、勸盃之節取瓶子候樣被仰付候也、依古例被仰付候由也(下略)

一先日被相渡候御次第ニ、主典代一人勸盃、同一人取瓶子ト有之候處、主典代より圖書出、主典代

迄ハ一員之義ニ御座候間、乍恐勸盃ハ他官江被仰付可被下旨、且又辨史同樣ニ、主典代江も饗被仰付可被下旨願被申候處、尤ニ候由ニ而、夫故依舊例勸盃ハ陰陽寮造酒司被仰付候由也、饗も舊例辨史同樣ニ有之候ヘドモ、此方ニ而取計被仰付、別段ニ御下行も無之、殊ニ明日之今日ニ而難調思召候故、饗之儀ハ此度ハ何角被略候故、不被及御沙汰候由也、一夕景官務より招ニ付、山名播磨守爲名代出頭之處、明日行事所始之節、勸盃主典代相勤候由御次第ニ御座候得共、依古例陰陽寮造酒司江被仰付候間、此段得御意候樣、奉行より被命候間申渡候、尤御次第別ニ書改可被下候得共、右人體之相違計リニ而、外ニ相替リ候義無之候間、別段ニ不被下候旨ニ御座候由也、

右之通天明度所見有之候得共、文政度者難相分候、

〔行厚記〕文政元年五月廿八日、大嘗會行事所始日時定、并小除目臨時叙位等也、○中略昨日辨殿ヘ相窺置候儀、官務ヲ以被示候條々如左、

行事官

東廳代之儀、今度次第ハ不被出候、天明度之通相心得可申事、

但座之設、天明度之通ニ候得共、此度ハ幄之內一面ニ弘筵ヲ敷滿、其上ニ程ヲ計テ半帖ヲ被設候事、

幔仕切、天明度トハ少シ違アル事、

勸盃ノ事、天明度ハ辨史別盃ニ候得共、此度ハ悠紀辨ヨリ主基辨ヘ、主基辨ヨリ主基史ヘ、予依爲上薦也主基史ヨリ悠紀史ヘ巡流ノ事、尤乍座可授盃事、專如新嘗祭西舍座勸盃ノ通ニ可相心得事、

日時勘文之事、一獻之後、悠紀辨ヨリ行厚ヘ被氣色候間、予可奉仕之事、

両行事辨覽主典代文了、出床子座下、賜官務了、起座直ニ東廳代ニ可被參向之間、史以下主典代等相從可參向事、

右之條々官務ヨリ被傳達候事

巳半剋被始陣、（中略）○上卿直ニ著端座、令官人敷軾、次召悠紀行事辨仰仰詞、辨承仰出床子座目左大史、左大史目左少史秀壽復座、上卿召外記筥以職事奏聞、了召辨賜御文仰仰詞、辨退出床子座下賜左大史、次上卿召外記令撤筥、次悠紀行事辨目左大史、左大史目左少史、秀壽受目起座持參主典代文進辨、著横切床子、辨披見參陣之後復座、次主基行事辨目左大史、左大史目予、予受目揖テ起座參進（依テ取ニ副主典代文於筥）進主典代文了、著横切床子、辨披見了參陣之後復座、辨出床子座下賜左大史（主典文無）（秋聞ニ上宣云云）此間撿按中納言重能卿起座御退出（自化徳門）上卿猶在座被行除目、執筆參議豊季卿參陣、悠紀主基之辨史起座之後、右少辨隆光右少史三善亮織等著床子座、次悠紀主基行事辨起座、次予左少史等起座、辨以下直ニ參向東廳代、（行事官也）主典代各相從、（中略）○官東廳代之儀、

幄內敷滿弘筵、其上設黃端半帖爲座、東上南面、敷撿按三人座、其南東西相對敷辨座、（悠紀東、主基西）其南同相對敷史座、其南横切東西行敷主典代座、先悠紀主基行事辨著座、次ニ予著座、（如東面揖）次ニ左少史著座、（西面）次主典代各著座、（辨史座後）先一獻、（悠紀史生隣保久取瓶子、主基史生隣保信取瓶子）悠紀辨吞了受酒、擬主基辨、兩辨相互ニ膝行進寄、主基辨受盃復座、吞了擬史、予拔膝受之、置筥（左膝）乍座聊相向受盃、居直リ吞了受酒擬左少史、左少史來座下、予聊膝行進出授盃、左少史受盃復座、吞了置座下、（以下）次悠紀辨目予、予受目起座出當間、更ニ自第三間參進候辨前、（南）辨仰仰詞、（其詞云、可有大嘗會之由、日時ヘ申サレメ）、予承之退出、到幄門外取筥、（入日時勘文一通、今如本鈍色持之）更參進、辨、辨披見了懷中勘文、返賜筥、予取筥退出、返與鈍色了復座、次二獻、（其儀同）次置筥立著、次三獻、（其儀同二獻）次主典代各起座、（先ニ下臈）次左少史起座、次予起座、經本路出幄外、次主基辨、次悠紀辨起座、辨以下再入休所、暫テ兩辨御起座、次予以下歸宅了、（予時本許也）

〔文政度大嘗會調進物記〕行事所始
一彩色瓶子　一口
一盃土器　六枚
一酒具臺　一脚
一清酒
右調進
瓶子取造酒令史代、造酒司史生上首以參勤仕候事、
〔壬生家記〕文政元年五月廿五日、大嘗會行事官始、辨史饗饌味、天明之度者、
飯　汁　生物　干物　菓子二種　箸
此度者菓子一品加追物候旨、大膳職より申出候、且又人車記ニ、辨者様器ト有候間、餘日無之候得共、右之通私心得ヲ以傳奏相□候事、
〔輔世卿記〕嘉永元年五月十四日丙戌、家君〇小槻以寧、御出門、〇中略頭辨様御面會、御頼之條々左之通り、
一行事所始、陰陽寮何方より被催候哉御尋之處、天明文政共何方より御催ニ候哉、委細難相分候得共、何分官方御注進交名ニ被加御注進ニ候間、於此度者御兩局觸狀ニ被加、御催之御覺悟候旨御返答之處、御尤ニ御承知也、〇中略
一文政度勸盃、主基之辨少々御心得違ニ而、陰陽寮呑酒畢而進辨へ候所、今度天明度御定之通、獻盃之方ニ御治定候間、造酒司をして令盛酒不呑之、悠紀之辨ニ可進、悠紀之辨呑畢而座下ニ向、爲造酒司令盛酒、主基之辨ニ進メ候頃、陰陽寮可退旨被示之、尤文政度者、主基之辨勧修寺様より、陰陽寮へ進退之事御申含ニ候得共、此度者官之東廳代之儀故、總而御當局へ御達有之候間、御當局より事之由御達可有之旨也、

十六日戊子、家君御出門、右者非藏人口より御例席へ御通、大嘗會傳奏奉行御面會ニ而、昨夜坊城頭辨樣へ御內談被仰入候、小野大藏少錄來十八日行事所始內々憚日ニ相當之處、全忘却御請申上候、如何御取計可被成哉、○中略 右之次第甚不埒之至候得共、何分最早行事所始迄僅日限も無之義故、何卒被相宥、東廳代參向臨時所勞不參之儀ニ而も御含ニ者相成間敷哉、則近例天明七年悠紀方主典代之內、右史生代、峯木工大允紀親賀臨期依所勞、非官掌庭田加賀守紀政紹語合、顧濟東廳代參向、主典代之文ニ被載候、又明和八年迄者、東廳代參向之內、座次差支之面々ハ、當日不參之例度々ニ候、又祥忌之人之名、神事文所々被載候例、延寶七年七月御當局御先代季連宿禰御實父祥忌之日、神宮文書御奉奏之例等在之候間、右等之御准例ヲ以、主典代之文ニ者被載之、參向者當朝依臨期所勞不參之樣ニ而も御取計可被成哉御談之處、御返答ニ者、至極御尤ニハ思召候得共、何分外之儀とも違ひ、傳奏御奉行限り御含ニ而御指圖も難被成候間、內々關白樣(○政通、鷹司)へ御伺之上御差圖可有之故、本人より殊之次第有體ニ相認、御理書爲差出、御當局よりも御取計方內々御伺書被遣、早々御差出可有之旨御達也、　十八日庚寅、家君御出門、右者行事所始日時定幷小除目等ニ付御參陣、○中略 巳半刻計、日時定陣儀初ル、引續小除目陣儀也、○中略 今日行事所始、兩行事辨樣已下午刻前東廳代行事官亭へ御參向、午半刻許事相濟候也、

拔穗使

〔儀式 二〕踐祚大嘗祭儀

天皇卽位之年、○中略 八月下旬、○中略 神祇官卜定拔穗使、中官發遣、(稻實卜部一人、禰宜卜部一人、)到國、率國司、於齋郡大祓、(齋郡百姓、幷明所郡、○中略)祓畢賜直會酒肴、次使與國司共卜定稻實殿地、卽以木綿繫賢木立地四角、次卜定御田六段、(田所ニ大田、稻所ニ撰子、)卽使及國司向御田、以木綿繫賢木、立田四角、令夫四人守之、次卜定物部人十五人、(男六人、女九人、)造酒童女一人、(以郡大少領女未嫁者卜之、爲食先之、神語佐可都古、)稻實公一人、大酒波一人、大多米酒波一人、粉走二人、相作四人、燒灰一人、採薪四人、歌人廿人、歌女廿人、(歌人歌女並卜之、)次賜使別衣料絹二匹、綿八屯、布

二端、(人別絹一匹、綿四屯、布一端、用國物、)次鎭稻實殿地、其料各五色薄絁各五尺、倭文五尺、木綿麻各三斤、鍬二口、斧鎌各二柄、(已上官所充)庸布二段、綿二屯、絲二絇、軾料絹二匹、米酒各一斗、堅魚鰒各一連、海藻一斤、稻四束、(已上用國物)鎭畢使執齋鉏鎌艾除草木、始堀柱穴、其院方十六丈、以柴爲垣、(高四尺、以桙結之四節)門在東方、編葦楉爲扉、(高八尺、廣一丈、)院四角插賢木、其內搆作雜殿、入門二許丈、縱三間使政所屋一宇、(長二丈四尺、廣一丈二尺、)其北橫五間拔穗使宿屋一宇、(南戶長二丈四尺、廣一丈二尺、東三間爲稻實卜部宿所、西二間爲禰宜卜部宿所、)其西橫五間屋一宇、(南戶長廣同上、東三間爲物部男宿所、西二間爲稻實公宿所、)其西橫三間造酒童女宿屋一宇、(南戶長二丈、廣一丈二尺、)其南少西、縱八間八神殿、(東戶長二丈四尺、廣七尺八寸、柱高八尺、與使政所屋相對、)其南少東、高萱御倉一宇、(北戶一丈方)其東橫三間稻實殿一宇、(北戶長二丈四尺、廣一丈二尺、)其東橫三間物部女等宿屋一宇、(北戶長廣同上)其制也、八神殿者爲片廂、葺以青草、內安竹棚、(高四尺)其上敷席爲神座、薦廻以葦、開東戶、懸葦簾、高萱御倉者葺萡以青草、開北戶、以葦爲扉、內作竹棚、其上敷薦以安御稻、稻實殿者葺萡以青草、戶亦用草、使宿屋者葺以青草、萡之以葦、開南戶、使政所屋者葺萡同宿屋、開東戶、造酒童女宿屋者葺萡以青草、開南戶、以葦爲扉、稻實公物部男宿屋葺萡以青草、開南戶、以葦爲扉、物部女宿屋葺萡以青草、開北戶、以葦爲扉、並以黑木搆作倒葺、九月(中略)○是月拔穗使在國、率國郡司物部人擔夫三百人、就水湄而解除、訖至御田拔取御稻、造酒童女先之、稻實公次之、酒波次之、物部男女次之、擔夫次之、總拔得御稻若干束、(以四把爲束)乾之齋院、就中以先拔四束、別納高萱御倉、(嘗日稻實公所貢稻也)自餘爲白黑二酒料、次使率物部人始入齋殿、次祭八神、(中略)○次以韓櫃七合、(各長二尺六寸、廣一尺八寸、深一尺二寸、)實御稻十四束、(合別二束、)一合爲荷、褁之以薦、居筥形、(足高一尺四寸、)一籠若干合、(數隨稻多少、籠口徑各二尺、深各一尺五寸、)各合別實御稻一束、二合爲荷、(荷別有四脚、以木綿賢木插籠上、其擔丁外更有擧相副者、下鋪設亦同、)一夫擔之、以若是子弟廻立於內及蓋等、訖開齋場門、上道向都、其行列健兒四人各執白木、左右列立、(後陣健兒亦同)子弟四人執著木綿賢木、(後陣子弟亦同)次之、禰宜卜部當途而列、稻實公著木綿鬘次之、御稻韓櫃幷籠次之、(每十荷子弟一人、執白木領之、)物部男五人次之、當郡鋪設當途而列、(疊茵各卌枚、席長薦各七十枚、簀五十枚、)子弟四人健兒四人次之、造酒童女駕輿當途、(擔丁四人)物部女九人次之、書生一人次之、郡司次

之、國司次之、〈已上乘私馬〉稻實卜部次之、下旬至京齋場、官人幷國司、持麻幷鹽湯迎南門、灑御稻幷雜物、訖納院外權屋、〈無先作儀〉次賜明衣、造酒童女、布二端、綿一屯六兩、酒波女二人、布一端三丈、〈人別三丈六尺〉

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十月上旬〈略〉〇中各拔穗御稻幷雜物遷納內院、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

太政官符大藏宮內等省

大藏省

五色薄絁五尺、倭文五尺、木綿大三斤、麻大三斤、

宮內省

鋤二具、小鋤二具、鎌二具、鑊二口、

右得神祇官解偁、爲供奉大嘗會、遣悠紀國拔穗使卜部等用度、依例所請如件者、省宜承知、依件充之、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡拔穗田者、國別六段、〈用百姓所營田、其代以正稅給之〉八月上旬、申官差宮主一人、卜部三人發遣、兩國各二人、其一人號稻實卜部、一人號禰宜卜部、到國各於齋郡大祓、〈料絹一匹、大刀一口、弓一枝、鹿皮一枚、庸布一段、木綿一斤、堅魚、鰒各四斤、海藻、滑海藻各四斤、米、酒各四斗、鹽四升、齋部佩、父嚼別刀子一柄、鍬一具、盆一口、麻一斤、藁一束、〉訖卜定田及齋場雜色人等、〈歌人歌女不卜〉造酒兒一人、〈神語曰、佐可都古、以當郡大少領女未嫁卜食者充之〉御酒波一人、篩粉一人、共作二人、多明酒波一人、〈已上女〉稻實公一人、燒灰一人、採薪四人、歌人廿人、歌女廿人、訖鎮齋場、其幣五色薄絁各五尺、木綿麻各三斤、倭文五尺、鍬二口、斧小斧鎌各二柄、卜部二人明衣料、絁二匹、調布二端、綿入屯、造酒兒酒波等調布三端一丈四尺、綿一屯半、縫絲一兩一分二銖、竝用大藏物、〈但鎌等、酒稻、春等、當國供之〉所作入神殿一字、〈長四丈、廣一丈〉稻實齋屋一字、〈長二丈、廣八尺〉使部屋一字、〈長四丈、廣一丈二尺〉稻實公等屋一字、造酒兒等屋一字、〈長各

二丈、廣二丈二尺、一竝以黑木及草構葺、壁蔀以草、掘井一處、蓋以片屋、院內方十六丈、以柴爲籬、編木爲扉、卽於齋院祭神八座、御歲神、高御魂神、庭高日神、大御食神、大宮女神、事代主神、阿須波神、波比伎神、其幣座別絹四尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿一兩、絲一絇、綿一屯、布一段、鍬一口、稻一束、米酒各四升、鰒、堅魚、海藻各二斤、腊鹽各二升、竝用國物、凡拔穗者、卜部率國郡司以下及雜色人等、臨田拔之、先造酒兒、次稻實公、次御酒波、次雜色人、次庶民共拔、訖於齋院乾收、先割取初拔四束、四把爲束、擬供御飯、自餘皆擬黑白二酒、總盛以籠、籠別一束、以二籠爲一荷、荷別著足、蓋以編茅、插賢木著木綿、訖令驅使丁荷、每十荷子弟一人領之、卜部及國郡司、率雜色人以下、前後撿按運送、其行列者、御飯稻在前、自餘物次之、稻實公著木綿鬘引道、九月下旬到京、所卜定齋場院之外、預作假屋暫收御稻、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡齋郡之齋院、祭神八前、卜部二人兩國各給明衣幷襖、凡大嘗祭畢、差神祇宜卜部二人、遣兩齋國祭御膳神八座、卽爲解齋、明日燒却齋場、其供神物者、以當國物充之、

〔神祇官年中行事臨時〕大嘗會

拔穗使六七月中下旬比差進之

四人悠紀二人、主基二人、

件使以卜部伊岐氏人差進之

神部八人一方副神部四人

〔代始和抄〕大嘗會事

拔穗の使は、九月に神祇官人兩國に下向して、齋郡の稻の初穗を拔て神膳に備へむとす、おのおの和歌を作りて、これをうたひて穗を拔なり、

〔日本紀略八花山〕寬和元年十月十五日乙卯、今日近江國拔穗使、率八省八女參場所、

〔小右記〕寛弘八年九月廿七日丁酉、右中辨持來丹波國解郡解等、答先申左府〇藤原道長隨被命之趣、可付左中辨之由、國解趣拔穗使致非法濫行、責取種々物等之事也、依穢以資平令傳云々、乘晚又辨來云、申左府、命云、奪取雜物可被糺返、極不便事也、早可令奏聞、　廿八日戊戌、頭辨下宣旨、是丹波國解文、拔穗使濫行事也、非法事加制止、又可糺返責取雜物、

長和元年八月十七日壬子、左大臣自殿上向仗頭、欲定申大嘗會事、〇中略　近江國申、被停拔穗使、注申澱田三町被卜定、後國司拔進事、諸卿申云、去年卜定稻實公歌男女等、但神祇官國司相共臨田頭可拔備、又可祭八神、可遣其座、國司一人不可專其事、拔穗使數日經過事、依卜定稻實公歌男歌女而去年卜定了、不可經數日、只臨來月上中旬間、隨國司申、泥向彼所、卜定田祭八神、可無經過煩之由可被仰下歟、〇中略

〔本朝世紀〕康治元年十一月二日庚寅、悠紀主基兩國拔穗使、率六男八女稻實公等、參入齋場所、〇中略　至近江國拔穗使事、來月中旬許可遣件使、從類供給等事、可被從儉約之由也、

〔兵範記〕仁安三年七月廿七日丙戌、行水解除、參行事所、召陰陽頭令勘申來月次第日時、〇中略

陰陽寮

擇申可被立大嘗會拔穗使日時

九月十七日乙丑　時午二點

仁安三年七月廿七日

權大允賀茂修平

主計頭賀茂在憲

九月十九日丁丑、行水解除、先參殿下、內覽拔穗使條々申狀、

齋郡々司神事用途、幷使供給等疎略事、無事支配田內、國司免除用途不叶事、

十月八日丙申、參內、晚頭退出之間、拔穗使卜部兼貞來臨、齋郡不叶、假屋未造、供給不足、神事未備、所部庄園權勢強威之間、徒過數日、度々雖申上、其事不行之故、自地歸京云々、國司成房〇藤原成經子所行條

條、取具文書、細々出詞、卽馳參院、〈〇後白河〉別當被候、且依仰付件人委奏聞了、直可催沙汰事、可仰國司之趣奉仰退出、　十三日辛丑、早旦參院、拔穗使驛家雜事不叶、中間歸京、殊被咎仰、又不勤雜事之所、已國領莊園被付撿非違使盛安了、卜部兼貞日中可向齋郡由被仰含了、次參行事所行雜事之間、有召歸參、拔穗雜事對捍所々、重給注文、下知盛安了、入夜歸華、　廿二日庚戌、悠紀拔穗使宮主卜部兼衡、昨日御禊役了、下向齋郡之次、來示云、齋郡每事不調、次第神態未勤一事、廿八日入洛不可叶者、卽參院申此由、次爲御使參殿下、御返事云、主基拔穗使、廿八日可入洛之由被定仰了、今朝已依卜食國歟、悠紀使延引、〈來月三日〉主基拔穗入洛、〈廿八日〉前後參著可被問先例歟、下官申云、寬治元年十月廿九日悠紀拔穗使神事不調、十一月三日入洛、主基拔穗令逗留路次、十一月二日入洛之由所見候、重仰云、准件例、尤可有沙汰歟、但可被尋問人々之由有仰、向太政大臣〈〇藤原忠通〉亭、〈花山院〉次向左府、〈〇藤原經宗〉次向內府、〈〇源雅通〉各一同被申云、悠紀拔穗使、依神事不調延引之條、令寬治吉例、於今者主基使雖出彼國、逗留路次、來月二日入洛之由被仰下了、及深更直歸華、　廿三日辛亥、早旦參院、奏聞殿下已下公卿申狀、次依仰召主基行事辨重方、備中拔穗使雖出彼國、各一兩日逗留路次、來月二日可入洛之由、被仰下子細畢、次右少辨以仰旨下知本官、又播磨、備前、攝津之驛家等各一宿、雜事可勤仕之由仰遣國司許畢、

廿七日乙卯、拔穗使來月二日可入洛、可行向粟田山、又可掃除路次之由仰寄撿非違使二人了、

十一月一日戊午、早旦參院、次參殿下、今朝左兵衛督成範卿大炊御門京極家燒亡、是卜食國司親父、偏彼卿沙汰也、可愼可恐、明日拔穗使可入洛、其間萱女八女六男稻實公子弟等裝束齋場所、儲大嘗宮點地雜事、依彼火災遣尋、難召之處、相儲他所之間、不可闕怠之由武衛所申也、凡今度卜食國勤每事懈怠、既遇火事、踈略之愼、彌可怖畏者歟、行事所史生、幷撿非違使左衛門尉盛康志基廣、明朝早罷向粟田山、任日時勘文、午時可令入洛彼使等之由下知畢、外記史生二人同下知畢、　二日己未、拔穗使入洛、又大嘗宮點地也、早旦行水解除、先詣撿按左大將〈〇藤原師長〉亭、執申雜事、悠紀國司家燒亡事、怖

畏由殊示給、又申子細、次參行事所、大夫史以下併參會諸事沙汰、申刻引率參齋場所、先巡撿神服院內院等作事、四面木柴垣黑木屋皆造營畢、次著廳座、卜食國鋪設、如內院神服院棟上日、但母屋西一間、敷紫緣疊、爲童女座、北面、下官座南也、同母屋南自西二三四間、敷同疊、爲禰宜卜部、稻實卜部、國司代書生座、禰宜卜部對座五位史、稻實卜部對座六位史、書生對座主典代、南廂自西三四間、敷布緣疊、爲入女座、同第五間、敷同疊、爲稻實公座、東第一間切懸下敷六男座、下官以下行事官卜部國司六男等座皆居饗、當所出納備之、皆用机、下官前儲樽器、自餘皆草器、入女六男居折敷、童女前不居饗膳、廳前庭西第三間當東西柱去砌二許丈立卜部標、禰宜西、稻實東、禰宜標南立稻實公標、南鳥居外東西掖構黑木棚、安置鹽湯并賢木、悠紀方寄撿非違使左衞尉橘盛安、志中原基廣、今朝向粟田口、又外記史生二人同差遣了、主基行事辨同著廳行事、晚頭主基行事拔穗使、自宮城西大路已參上、行事官出合致次第沙汰、秉燭之後悠紀使入洛、自二條末西行、自洞院東大路北行、自上東門大路西行、自宮城東大路北行、自一條西行、至于齋場所南鳥居前列立、

行列次第

先子弟四人、捧榊搖響蹕先行、鎰々著還紅塵例、今度雖調儲、娘亡之由國司申了、次鈴負一人、布衣、乘馬、次拔稻四十荷、以四把爲一荷、以二荷爲一擔、一荷、又納白木辛櫃、次鋤鍬鏃以下雜物雜勤參編、每十荷子弟二人、捧榣領之、次童女乘白木輿、有荷丁、三面垂生絹帷、次造酒兒、次入女、次六男、次卜食郡司國司、代書生、次神部二人、以上四人衣冠、次禰宜卜部、宮主象衡、稻實卜部紀伊權守象貞、次外記史生中原俊貞、今一人可尋、次撿非違使二人、以上騎馬參會、次國司代書生入南門、自屛垣東來立廳前庭中、令拔穗使參來之由申給卜申、齋場所主典近元官□□取答許提、次近元答云々令參、目六位史、史目下道ヲ、即起座、近元貞友等列南門左右、以賢木鹽湯灑行列、童女下輿加行列、次卜部二人、稻實公著庭前標、童女入女六男列立稻實公後、列立定了、卜部二人著母屋第二三間座、國司代著同四間座、童女著母屋一間座、入女著廂座、稻實公著其末座、六男著東座、次盃酌三獻、下官著至大夫史以下官掌卜部二人書生等、則行酒、次居汁、次食了、禰宜卜部以雜物解文覽下官、下

官見畢下、主典代、主典代成外題、卜部二人相共起座、令撿納於倉代、（件解文拔穗以下供神物目錄已成外題、又五位史、六位史、年々不同、今年依寬治例、令史生成也、）次卜部以下歸著、

〔山槐記〕元曆元年八月廿六日壬午、早旦悠紀行事、史國通〇中略副進拔穗使差文、

神祇官

差進悠紀所拔穗使事

稻實卜部宮主從五位□行權大祐卜部宿禰兼基

禰宜卜部從五位下卜部宿禰兼守

神部肆人

右依官宣、差件等人充使、爲被發遣、依例差進如件、謹解、

元曆元年八月廿日　　　　　正六位上行權少史齋部宿禰友□

正四位下行伯仲資王

此差文者、來廿三日持向辨里亭云々、件文未覽上卿、

〔業資王記〕建曆元年九月廿三日壬申、拔穗使事、以兼高可差進之由被仰下、今度卜合云々、

（裏書）拔穗使

悠紀

稻實卜部宮主正五位上兼久

禰宜從五位下行權少副兼高（卜合）

主紀

稻實從四位下行權少副兼茂（氏長）

禰宜從五位上行權少副兼直（奉行勞）

今度兼茂、兼直、兼久等三人先定了、今一人兼衡、兼經兼高子巖望之間、被行御卜歟、兼衡雖爲舊勞故實之者、依被憚前官歟、　十月一日己卯、拔穗使等今日進發云々、

〔百練抄〕十五後嵯峨仁治三年十月十五日甲子、悠紀拔穗使上洛、訴申齋郡狼藉事、仰武家有沙汰、　十一月六日、南方拔穗使入洛也、悠紀方人馬懈怠之間、及深更參著齋場所、

〔園太暦〕觀應元年九月廿四日丙子、抑左少辨時經爲勅使入來、有勅問事、申詞續左、

丹波國河關所役、大嘗會拔穗使下向假屋以下事、如國司信賴申者、當役當所代々致其沙汰云々、兼停進院宣以下、非正文之條雖非無示充遷替國司被成下院宣國衙不帶正文條、强非巨細歟、所詮期日相迫之上者、於此事者、不論國所停否、令遵行之條、可爲何樣候哉、別若召武家使者可被仰談歟、不然者被付他料足可爲一儀兩樣之間、可在時宜矣、

〔季連宿禰記〕貞享四年十月一日丙午、近江國志賀郡大嘗會拔穗稻、禁中侍不知名今日向志賀郡取之云々、卽今日件稻先行事官重基許納之、重基拔穗調進物等有之云々、拔穗使儀作法等一向不及沙汰、只堅固密々儀也、其儀追可尋記丹州桑田郡之分來四日取之云々、是等今日重基來所語也、拔穗使神祇官雜等參向無之云々、○中略

大嘗會拔穗使調進物使日以御訪帳寫加之

行事官調進

一長辛櫃四合棒四本　一荷辛櫃八合棒四本　一緘緒晒布六匹長辛櫃荷辛櫃料　一荷籠八ッ棒四本

一引臼二　一舂臼二　一杵六本　一鍬二丁

一鎌二丁　一菜刀二　一土鍋二　一疊面二枚薦二枚

一桶二　一續紙二枚

以上

四日己酉、丹州桑田郡拔穗稻、禁裏侍〔名不知〕今日向丹州取之云々、神祇官齋等不及參向、只堅固內々儀也云々、　五日庚戌、後聞丹波拔穗稻使歸京、件稻今日渡行事官重基之宅地云々、

〔大嘗會私記〕貞享四年、〇中略此冬大嘗會執行アルベキトテ諸司ヲ催サル、〇中略拔穗使ハ路ニテ、吉田ヨリ大隅宇右衛門ニ、禁裏ヨリ青侍一人指添ヒ、十月朔日ニ近江志賀ノ郡山中行先ニテ、モミ壹石、ヌキ穗籠ヘ入、二荷取來トナリ、十月四日丹波桑田郡竝河ヘ右ノ使ユク、一說ニ佐伯ト云、モミ幷拔穗上ノ如シ、古ノ拔穗使ハ大儀ノ事ニテ、大使八人、轅ヘ小使八人、退紅二十人、是ハ拔穗三荷ヅヽ十二人シテ荷フ、其餘八人ハ手ガハリ也、猿女二人、巫女二人、稻君翁二人、童男童女十二人、神歌ヲウタフ由ナリ、是ハ持明院家敎玉ヨシ、管領ハ珠輿ニ乘玉ヒ、大忌衣ヲ著ストナリ、珠輿ハ天羽車ニ似タリ、右簡略ニテ上下五百人計ナリ、文正年中ニハ上下壹萬人バカリト也、

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴訟届等留牒

奉願口上

大嘗會御當日調進物之內、不足之品、別紙以書付及言上候通、〇中略兩度三通、此度調進被仰付候樣偏奉願上候已上、

八月　行事官

官務殿

口上覺

大嘗會拔穗使調進之內

長辛櫃　四合

荷辛櫃　八合

荷目籠　八ツ

右者國郡より御稻到着之節、御用被持居候分、寛延之度雨天ニ而、御稻ニ少々水入リ候而難澁仕候間、右辛櫃并龍等之雨覆、此度調進仕度奉存候事、

八月　行事官

〔厚敦記〕天明七年八月廿七日、柳原殿ヨリ庭上江辰半刻出仕候樣申來ニ付出仕、山名家ヘハ官務ヨリ申來候由、

神祇官

差進悠紀所拔穗使事

稻實卜部宮主從五位上行神祇權少副卜部良久

禰宜卜部從五位上行神祇權大祐卜部光康

神部肆人

右依官宣、差件等人、充使、爲被發遣、

天明七年八月廿七日　正六位上行少史紀朝臣助長

伯從四位上資延王

九月十五日、柳原殿ヨリ使來、今日晝迄之内ニ可參旨申來、即參上之處、拔穗進發歸京、近江國風土記事等、明卯半刻迄ニ覽宮持參可有之事也、　十六日、卯半刻柳原殿亭江參上、〇中略辨殿被下、三通、仰詞ニ上卿之モトヘミセシメヨ、夫ヨリ花山院大納言殿亭江參上、〇中略愛德卿三通共被見被返聞、予被見、仰詞云奏聞、其後直ニ可被下旨可示辨、退出、夫ヨリ辨殿江參上、右ノ仰詞ヲ申、辨殿勘文二通懷中、近江國風土記事ハ日野殿ヘミセシメヨ、依而日野家ヘ持參之處、内々ニ而被請、空宮被返、夫ヨリ庭上江參仕奏聞了、

〔壬生家記〕文政元年九月廿日、大嘗會拔穗次第

前一日拔穗使到國稻實卜部一人、禰宜卜部一人、神部肆人、以吉日到齋郡齋場所、先是在廳官人代官等祗承供給、次兩使率國郡司代以下雜色人等就水湄而大祓、(齋郡司、幷百姓亦預焉、)其儀神部到川邊著軾讀祓詞、訖持麻祓兩使、次在廳官人代官以下至役事百姓等悉祓之、次賜直會酒肴、次兩使與國司代共卜定稻實殿地、卽以木綿繫賢木之四角、次卜定御田六段、訖、(田稱大田、稻稱撰子稻、)次兩使及國司代向御田、次木綿繫賢木立田四角、四方曳廻標繩垂木綿、令夫等守之、次卜定雜色人等、(皆於卜家卜之、)次賜兩使明衣幷祓料、(絹二匹、)次鎭稻實殿、鎭畢執齋鉏鎌芟除草木、始掘柱穴、其院四角插賢木、曳廻標繩垂木綿、(所謂齋院也、又稱齋場、)其院內造社一字、屋二字等、八神殿一字、其制也、以黑木構作之、爲片廂、葺以靑草、內安竹棚、(高四尺、)葺廻以葦、曳廻標繩垂木綿、殿四角插賢木繫木綿、使政所屋一字、稻實齋屋一字、當日刻限、於齋場辨備諸事、裝束鋪設訖、在廳官人代官等申時刻至且辨備訖之由、次兩使率神部等參齋院、次兩使率神部等著政所屋、驅使丁持籠置齋殿前、其儀政所屋北上東面稻實卜部著座、次禰宜卜部著座、西上北面神部四人著座、造酒兒稻實公酒波雜色人驅使丁庶民男女(謂拔穗之人)集會候前庭、次稻實卜部召神部、(訓曰、カムトモノヲ、)第一神部稱唯參進座前、仰曰、解除、(訓曰、ハラヘマツレ、)神部稱唯退、次神部著軾、向巽方讀祓詞、訖執大麻臨大田祓之、次祓籠、次祓造酒兒以下庶民等訖、次禰宜卜部召神部、神部稱唯來跪、仰曰、神座供神物、(訓曰、神座ミテグラ奉レ、)神部稱唯、次神部四人起座敷神座於齋殿竹棚上、其次第、(以東爲上、座別席一枚、)御歲神、高御魂神、庭高日神、大御食神、大宮女神、事代主神、阿須波神、波比伎神、右所祭八座、座別絹四尺、五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿壹兩、絲一絇、綿一屯、布一段、鍬一口、稻一束、米酒各四升、鰒堅魚海藻各二斤、腊鹽各二升、並用國物、一人持鍬稻束等、一人持荒筥、盛絹絁倭文木綿絲綿布等、一人持葉椀、盛米酒鰒堅魚海藻腊鹽等、右供神物座別神部供之、次稻實卜部參進神前著軾、(當第神前、)禰宜卜部參進神前著軾、(當第八神前、)各申祝詞、次稻實卜部復座、次禰宜卜部進政所屋軾、向巽八度拜、八開手、祈申訖、次禰宜卜部復座、次稻實卜部召神部、神部稱唯參進、仰曰、大田撰子稻乎令拔與、神部稱唯、仰稻實公、次

造酒兒以下臨大田拔取御稻、先造酒兒、次稻實公、次酒波、次雜色人、次庶民、共拔訖於齋院乾收、先料取初拔四束(四把爲束)擬供御飯、自餘皆擬黑白二酒、右所拔得御稻總盛以籠、以二籠爲一荷、荷別著足、蓋以編茅、插賢木著木綿、訖令驅使丁荷之、次神部四人起座參進齋殿、撤神座供神物等、次兩使檢察御稻束數訖退出、次神部退出、次國郡司代以下雜色等退出、

〔壬生家記〕文政元年八月十四日、今日拔穗使發遣ニ付、伯家次第、

大祐尹昌著座、次公文所氏意著座、次伯著座、(大祐公文所動座)次伯目許、公文所參座前、仰差文持參之儀、(此間伯仰家司硯持參儀)次公文所差文持參、入覽筥、伯加署、(家司撤硯)次伯目許、大祐伯座前參、拔穗使發遣差文、悠紀主基辨亭可持參由奉、大祐差文持退、大祐差文入覽筥、先悠紀勸修寺殿(江)持參、雜掌單狩衣著用出會落手、次主基廣橋殿同樣、

九月十七日

兩國拔穗御道具

一長唐櫃四合(棒四本、編布入箱、)　一荷唐櫃四荷(棒四本、編布入箱、)　一荷目籠四荷(棒四本)　一鎌貳丁

一鋤貳丁　一菜刀貳丁　一疊表貳枚　一薦二枚

一雨覆貳拾枚　一雨覆箱貳荷(棒二本)

以上

九月　行事官

右拔穗使御道具目錄、吉田殿家司入來相渡候事、

廿二日

覺

一竹三拾本　一箕三ッ　一筵五拾枚

右大嘗會御稻御用也、慥ニ請取申處如件、

九月　　行事官印

廿六日、今日兩國御稻到著、副使山田阿波介、社門より入、倉代江ハ各納置、悠紀東方、主基西方江相納置候事、

一吉田殿副使より相渡御稻并御籾等目錄

悠紀方

一目籠二荷、拔穗四把入、

一辛櫃四合、籾壹石四斗入、但增籾二斗共、

一長辛櫃二合、籾壹石六斗入、

以上

主基方○悠紀方ニ同ジケレバ略ス

〔春芳記〕嘉永元年八月十四日、差文伯亭江持參、公文所家司披見了、大祐祭主亭江持參、祭主加署、再伯亭江持參、家司披見、兩辨亭江大祐持參、家司中門外江出向申次、差文覽宮納、辨披見了、空返退出、主基同上、廿二日、午刻斜、裏松殿ヨリ御消息并神祇官賜差文、如左、

悠紀所拔穗使神祇官差文如此、早可被下知之狀如件、

八月廿二日　　左中辨

右大史殿

差文

神祇官

差進悠紀所拔穗使之事

大祓使

稻實卜部宮主從四位下行少副卜部朝臣良祥
禰宜卜部從四位上行權少副卜部朝臣連胤
神部肆人
右依官宣、差件人充使、爲被發遣、依例差進如件、謹解、
嘉永元年八月二十二日　從五位下行大祐紀朝臣以昌
從四位上行伯
正三位行大副大中臣朝臣敎忠〇主基、同文ナレバ略ス、

〔輔世卿記〕嘉永元年九月五日乙亥、御使行事官へ竹中右近、右者拔穗使參向之名前、并右參向之節勅使と被稱候哉、且右ニ付內見參向之義有之候哉、右御承知被成度候間御尋被遣候處、不分明ニ付、尙調白亭ニ而承合セ、御返答可申上旨也、　十二日壬午、家君〇小槻以寧御出門、右者坊城頭辨樣へ御出之處、拔穗使行事官調進之御道具、何日頃行事官より相渡候哉、以書付尋來候ニ付、先例相渡候日限、并今度相渡候日限等御取調之事御達也、且行事官へ到著之稻、賀茂へ相渡受取候日限手續等も御取調之事御賴之處、何も御承知、右者先例行事官より直ニ傳奏御奉行へ相伺候由故、御當局ニ而ハ委細不相分候間、尙行事官へ御達シ、明朝行事官より直ニ御返答可申上旨、御斷之處御承知也、　十月三日癸卯、入來行事官、右者兩國拔穗使歸京、請取候旨御屆被申上候處御承知、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡大祓使者、八月上旬卜定差遣、左右京一人、五畿內一人、七道各一人、下旬更卜定祓使差遣、左右京一人、五畿內一人、近江伊勢二箇國一人、

〔延喜式四十二左右京〕凡踐祚大嘗大祓所須、馬一匹、劍九口、鏃九口、鹿皮九張、紙四百五十張、木綿六十三枚、苧小九斤、稻九束、米鹽各九斗、鮭九隻、堅魚鰒海藻各九連、柏九把、食薦九枚、並別均分置兩之、其儀先祭一日、職率中官請受、官人率坊令坊長姓、於羅城外、東西相對分列左京西面北上、右京東面北上、朝使者坐中央南向、訖即解除、

〔北山抄 五〕大嘗會事

八月上旬、遣大祓使、左右京一人、五畿内一人、七道各一人、○中略下旬別卜定、更又遣大祓使、左右京一人、五畿内一人、近江伊勢一人、神祇官式如之、而儀式伊賀加之、可依彼式歟、待案如儀式、

〔神祇官年中行事 臨時〕大嘗會

八月上旬大祓使

左右京職五木内七道、一道各一人、神部二人、伴使中臣卜部伊岐氏差進之、

八月下旬大祓

左右京一人、忌部同一人、五木内一人、

〔續日本紀 一 文武〕二年十一月癸亥、○七日進使諸國大祓、　己卯、○二十三日大嘗、

〔續日本紀 二十 淳仁〕天平寶字二年八月乙卯、遣使大祓天下諸國、欲行大嘗故也、

〔三代實錄 三 清和〕貞觀元年九月十日壬戌、大祓於朱雀門前、爲行大嘗會事也、依式八月上旬可行、而以諒闇之內延及于今日、

〔三代實錄 三十二 陽成〕元慶元年八月廿五日癸巳、分遣大中臣氏人於五畿七道諸國、祓除境內穢惡、爲供奉大嘗會也、

〔三代實錄 四十六 光孝〕元慶八年八月十六日甲辰、分遣大中臣氏人等左右京五畿內七道諸國、解除、以十一月可修大嘗會也、

〔日本紀略 一 醍醐〕寛平九年八月廿八日辛未、遣祓使於五畿七道諸國、○中略爲行來十一月大嘗會也、

〔小右記〕長和元年八月六日辛丑、左中辨持來發遣大祓使之日時勘文、今月八日、時正午、仰可令作官符之由、辨云、彼日臨時奉幣日也、可無致爲之如何、答云、彼造官符十一日考定有致歟、其次捺印同日發遣有何事乎、○中略如式者上旬發遣者、去年遣兩度祓使、至今般有臨時儀、不知去年祓事依大嘗會延引事、

殊所被發遣也、雖及中旬不可謂違式歟、下旬大祓、奉幣天神地祇之使去年發遣了、於年下旬大祓并奉幣使等事、可似重疊歟、可候案內於相國之由相含訖、　七日壬寅、左中辨來云、尋出當月下旬大祓之符案、卽持來符案、其文云、太政官符、近江、伊勢、伊賀等國司、右得神祇官解偁、供奉大嘗會、更爲令祓備後國并大神宮等定作人、依例申送如件者、國宜承知、依件行之、符到奉行、年月日、驛鈴一口、剋三今如件符案者、依大嘗會事以祓淸國也、大神宮等猶可被行下旬大祓歟者、予答云、如符案尤可被祓淸、又辨云、神祇式載近江伊勢二箇國、儀式載三箇國、符案同載三箇國、未得其意、予答云、路次伊賀伊勢也、但尋常往還路用近江、仍被淸三箇國歟、就中符案載三箇國、然可依三國例、又往還伊勢之路、用伊賀近江等之故歟、　十七日壬子、予著南座、〇中略下旬大祓使可遣事同令奏聞、件使依大嘗會事可被淨大神宮者、必可遣之使也、召外記仰可奉大祓官符之由、卽盛覽宮進之、見了返給、

〔兵範記〕仁安三年七月廿七日丙戌、參行事所、召陰陽頭、令勘申來月次第日時、陰陽寮官人相共所定、且顯先例也、

陰陽寮

擇申可被行大嘗會八月上下旬大祓日時

八月三日壬辰　時未二點

廿七日丙辰　時巳二點

仁安三年七月廿七日

權大允賀茂朝臣修平

主計頭賀茂在憲

〔山槐記〕元曆元年八月廿六日壬午、國通云、來廿八日可被發上旬大祓、件官符請印可有政、仍申二位中納言之處、未著行政、九月有障者、中納言有障者、可申案內之由行事辨所被申也者、予〇中略答曰、如此請印、多中納言之撿挍所奉行歟、此事非他事、已可爲政者、依初度可被行略儀歟、又九月著座猶有例歟、又依別勅者、不可被憚月之吉凶哉、須以此間可申辨也、將又作官符內印六、儻不覺悟者、史又

向辨許、即歸來曰、件官符爲內印、然者中納言定被參歟、又示給之間尤可然事也、抑去十日於撿非違使義經宅、故出羽守信兼子息三人、或被殺害、或自殺、件穢及院中歟之由有疑、仍昨日雖可有御幸日吉、忽以延引、然者又光雅其後參院也、承此子細之後不參、進退惟谷、此間事申頭中將（通資）許了、未承左右、爲如何、予答曰、此事極大事也、被用穢者、天下江所可淨哉、然者又嚴重神事、此間被行之條尤有恐、雖默止、　廿七日癸未、頭辨曰、信兼子息等殺害穢事、日來無沙汰、○中略　明日大嘗會上旬大祓、又每月大祓同可被行也、件進退且可申合下官之由有仰、九月有例者、又可延引歟者、又大夫史隆職申云、有穢氣之時、爲被淸其事、被行大祓者別事也、此大祓者不似彼儀、成官符爲令潔齋五畿七道所被發遣也、而京內穢中差遣符使、專不叶物議歟者、九月大祓者久壽例也、但件度自九月沙汰起、雖勿論、取例之事又何可不准哉者、予曰可爲穢歟、儻可被仰下、其間又雖有疑、無儻事者不可及沙汰之處、雨樣仰實雖計申事也、然而粗仰趣此間難被行神事之由歟、隨又隆職宿禰申旨非無其謂、穢氣混合之條漸以遍滿、於今者勿論歟者、頭辨曰、依是等仰趣、先明日大祓者延引之由仰下了、　九月十七日癸卯、今日又發遣大嘗會上旬大祓使、（吉時午二點若中）　八月上旬卜定使遣左右京五畿內七道也、而去月十日有國郡卜定、同廿日始行事所、仍同廿八日可被行此祓之處、又依天下穢及今日也、使差文兼日辨覽上卿事也、於主基者辨以史覽了、悠紀未覽如何、件使官符今日有內印事云々、後聞二位中納言（兼房、撿挍）、申刻參陣、先著奧座、令藏人左近將監仲國被奏內文候之由、奉仰之後移端座、一方官符未渡外記之間、良久少外記三善口衡覽之、即令外記內覽（攝政坐里亭）、即歸來、納言就御所奏聞、返給復陣、外記隨上卿目、持官符出宣仁門代、次納言召近衞將監被仰印事、次掃部寮立案、兼置印櫃不可然也、于時及秉燭、少納言重綱將監等參上印了退出、官符百餘枚云々、事了上卿退出、此內文先例多撿挍中納言所行也、

〔業資王記〕建曆二年五月廿九日甲戌、大嘗會大祓（五畿七道）使差文加署了、自官有其催云々、今度值（交名）如去年、令差進了、是各不達前途之故也、　八月卅日癸卯、大嘗會大祓官符到來、（去廿四日官符）五畿七道如例

歟、抑去比號月次大祓、七道官符數通重疊可被下也、此條不載式條之上、先例不覺悟之旨、以公文史生清穎、觸此子細於官、返官符了、行事所失錯歟、不可々々、

〔爲一記〕正安三年八月廿六日、參內、今日大嘗會八月下旬大祓定也、仍有內文請印、依奉行也、及子剋上卿花山院新中納言（師信）參陣召予、予參進、中納言候奧座、仍昇陣座（着端）參居之、中納言云內文、次奏聞、（於內覽御覽之由中納言示之、仍如然之由答申、）次歸出、氣色後仰云、捺印、上卿氣色、次退去、次上卿移著端、召外記召官符、就弓場奏之、予取之於鬼間以內侍奏、次返下、次退出、少納言信雅參陣、請印以後不奏例也、　廿九日、

大嘗會兩條事內々奏之、

大祓女工所勾當參向出車事

中入云、仁治三年十月廿九日、故吉田中納言（經俊、于時五位職事奉行之、）記云、內侍出車悠紀（顯嗣）主基（右少辨）等各獻車、予下知六位之處、無領狀人云々、仍獻辨車、可爲藏人方沙汰之由雖相觸、先例官方沙汰由返答畢、仍辨各致沙汰云々、而惟輔云、仁安家記云、藏人方沙汰云々、此上可爲何樣哉、仰云、任仁治例可爲辨車者、仍仰權右中辨光定朝臣之處、雖申子細、重仰之處申領狀、而主基行事右少辨惟輔參仕、仰此趣之處、仁安藏人方沙汰之條分明、大祓辨可參行間、差合歟之由對申子細、仍奏聞之處、女工所始以前者、藏人方沙汰、女工所始以後者、官方沙汰歟之由被仰下、仍今度所相觸六位也、此後引見仁安記之處、女工所始以前藏人方、女工所始以後官方沙汰也、

今日大嘗會八月下旬大祓也、仍女工所勾當參向朱雀門、被內侍出車、藏人藤正經獻之、備前內侍（諸大夫業尹息）悠紀內侍有故障不參向、仍主基內侍（少將內侍刑部卿爲信朝臣息）一人參向、悠紀掌侍不參替、他內侍參向、可爲何樣哉、檢挍宰相不參之時、他參議參行常例也、若可被准歟之由申入之處、掌侍事不可似參議、悠紀內侍今度可略之由被仰下、檢挍左大辨宰相（有房）參行也、兩行事辨光定朝臣惟輔等參向云々、參議參雖爲官方沙汰、予又所相觸也、

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

八月下旬、略〇中發遣奉天神地祇幣使、大神宮諸王五位已上一人、中臣一人、齋部一人、山城大和攝津各一人、河內和泉一人、七道各一人、中臣齋部二氏相半差之、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕凡大祓使發訖、卽差遣供幣帛於天神地祇使、大神宮諸王五位以上一人、中臣一人、忌部一人、卜部一人、五畿內一人、七道各一人、中臣忌部兩氏供之、其幣法、大所各絹五尺、五色薄絁各一尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、小所各絹三尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹薦總九十枚、竝以大藏物充之、大所小所、謂諸社預祈年祭者、繩七十了、夫五十二人、枌五十二枚、

〔北山抄五〕大嘗會事

八月下旬、略〇中發遣奉幣天神地祇使、大神宮、諸王五位以上一人、中臣忌部各一人、山城大和攝津一人、河內和泉一人、七道各一人、中臣忌部相半差定、於神祇官發遣、仍不驗務、又無宣命、上卿行內印事、不參彼官、只召官人令請官符也、件幣料或充大藏省物、而近例官符依裁下可用當國正稅之由、不充省物、

〔神祇官年中行事臨時〕大嘗會大奉幣

宮中京中京職使一道各一人、中臣忌部卜部伊岐氏等差進之、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年九月廿五日癸亥、分遣中臣齋部兩氏人於五畿七道諸國、班幣境內天神地祇三千一百三十二神、緣供奉大嘗會也、

〔日本紀略一醍醐〕寬平九年八月廿八日辛未、奉幣於諸社、爲行來十一月大嘗會也、

〔本朝世紀〕寬治元年九月七日丙辰、政幷內印、依大嘗會諸國大奉幣、幷同拔穗使官符等也、今日被立件使等云云、

〔中右記〕天仁元年九月廿日、今日大嘗會大奉幣云云、左兵衞督被行內文云云、

〔本朝世紀〕康治元年十月二日辛酉、依大嘗會事、被立天神地祇大奉幣使、權大納言藤宗輔卿參行之、於神祇官被立之、上卿不參、左少辨源師能參仕、散位資長王爲使、中臣卜部忌部等如常、

〔兵範記〕仁安三年九月四日壬戌、下知大外記賴業眞人、大夫史隆職宿禰、令催諸司、未刻大嘗會撿校

權中納言實國卿參著仗座、被奏可定申大嘗會五畿七道大奉幣日時由、勅可之後、仰右少辨重方、〈主基行事也、下官爲行除目事、然後之間、被仰下歟云々、〉召日時勘文、次内覽、〈辨持參殿下云々〉奏聞返給、即被下、辨云云、　七日乙丑、發遣五畿七道諸國大奉幣使、○中略下官率奉行史章貞參神祇官、發遣五畿七道諸國幣使、入東院棟門、著膳殿座、其儀北第一間壁下敷下官座、第二間以西東敷長帖、爲史史生官掌座、門西相對敷同帖、爲神祇官中臣以下使々座、西壁下廚子前備置幣物、次史生持官符筥置下官前、先以東海道官符召給伊勢使王、是依奉入大神宮也、次五畿七道等使々次第召之、給官符祝詞等、道別官符一通祝詞一通也、次神祇大祐忌部明友爲諸道使等仰子細、注留目錄於本官、次下官退出、

件大奉幣幣物、以大藏省切下文付諸國、日來催促、當日官掌於本官裹納渡本官也、

五畿內諸國司神六百五十八前

東海道七百三十一前

東山道三百八十二前

北陸道三百五十二前

使官符

左右京職一通、五畿內一通、東海道一通、東山道一通、凡內案一通、〈加二字〉伊勢使一通、〈中臣以下同〉

波覚妙御衣一通、門戶座一通、參河神服使一通、門內案一通、〈加二字〉

八日丙寅、裹書、

右大史章貞來云、神祇伯顯廣王被申云、大奉幣使官符中、悠紀奉行左右京職五畿內被載神部、東海東山北陸道等神部不載、已違例也、若被注落乎、早可被加載者、先尋問大夫史之處、寬治有沙汰、不被載件官符神部、今度准彼例也云々、且以此旨答神祇官處、又被申云、寬治不被載、若失禮歟、可承不被加之由緖、加之今度主基四通、存式被加載、事不可違、主基七通可一同之故也者、兩方申狀

如此、下官答云、可申上撿校、又歸來云、左大將〇藤原師長仰云、官申狀深可信受、但七道相違、主基加之條、猶可問隆職宿禰由有仰、卽尋問之處、主基執行史不知、寬治例加神部已失也、全不可依主基所行、加之寬治以往代々無神部加例、皆引勘了由所申也、仍申上撿按了云々、早可仰神祇官由示含了、抑日時有限下給官符了、于今不發遣極無便、早可令進發由重仰了、後日隆職宿禰云、主基奉行史中原盛直、不申合官符申成上、自由文尤無便候、左少辨不被子細歟、如此之間兩方不同云々、

〔仲資王記〕建曆元年十月九日丁亥、大嘗會大奉幣官符(左京五畿七道)被下云々、但四姓使大神宮奉幣、今度無沙汰歟之由兼茂申之、如式者勿論事歟、

〔萬一記〕正安三年八月廿二日、參院奏條々、〇中略

大奉幣事

奏云、仁治九月被發遣、今度所載風記九月十日也、然者十日可被發遣歟、但諸國守護地頭役不可勤仕之間、永仁關東下知、仍永仁被略也、今度去頃被仰武家畢、未申被左右、被行之條可爲何樣哉、伯申云、先被發遣者、帶官符可申關東者、仰云、來月十日早可被發遣、但關東未申左右、猶可仰合伯、

九月五日、早旦參院、以相國奏大嘗會條々、

大奉幣定事

予〇藤原宣房申入云、天仁元年九月九日、行事辨爲隆、參殿下覽大奉幣日時、向撿按亭宣下、仁安三年九月一日、左衞門督(實國)參陣、〇中略大嘗會大奉幣日時令勘之、仁治三年於陣不被勘日時、兼日奉行史召勘文覽辨、仁治以後同前云々、先例如此、今度定日次可爲來八日、件日神宮事可有其沙汰云々、於陣有定者、可爲佳例歟、可爲何樣哉、仰云、任仁治例可申沙汰者、仍其趣卽仰惟紀辨光定朝臣畢、

十日、參內、今日被發遣大嘗會大奉幣、秉燭以後花山院新中納言(師信、按察、)參陣、以官人召予、予出陣、上卿

由奉幣

著奧座、予參進、上卿云、內文、予氣色、次起座、次奏聞、次歸出、仰云、捺印、上卿氣色、次予起座、上卿移著端座、(陣家此以設天ニ見及也)上卿進弓場奏內文、予取之奏聞、主上(經二御覽一於二中門一密々御見物、然下御座、御覽畢候、)(仍官符等置二殿上、殿下令二取給、御披閲已後被二返下一也、)次返下上卿、次請印、少納言信雅參陣、將監外記沙汰也、次有請印政、上卿少納言以下參衙如例、慈紀行事辨光定朝臣向神祇官行之、

〔後深心院關白記〕永和三年三月六日甲申、昨日勅問事、忩可申所存之旨頭辨示之間、今日付申詞於頭辨了、(仰詞幷申詞注裏)仰詞如此、

大嘗會大奉幣米事、於宮中洛中諸神者、爲公方被付別料足、有其沙汰了、至諸國大小社者、近代被成官符於神祇官許歟、隨而去年終不及發遣之儀哉、縱又雖遂其節、以諸國正稅可支具之賦、被載官符之處、今度如大嘗會米、一國平均宛催之條御不審之間、被尋官幷伯二位、業定王資方朝臣請文等如此、此上如何樣可有沙汰乎、

申詞如此

大嘗會大奉幣米事、可用諸國正稅之由被載官符之上、業定王資方朝臣等請文不申異議、然者非諸國平均之沙汰者乎、於發遣之有無者、被尋究可被經御沙汰乎、

〔氏經卿神事記〕寬正七年(○文正元年)十二月八日、占部吉田神主代官申云、大奉幣事可令告知之處、吉田神主爲大嘗會拔穗、江州ニ下向畢、仍令失念、不及件告知之條、以外失錯也、雖然既官幣奉送上者、以次可有奉納由再三令懇訴之間、外宮有奉納否之由相尋、外宮者云、無告知、件神事不知案內之由被申不行云々、仍外宮ニ先立、神事ヲ行、無例之旨返答、然者明日令返留、外宮可申行、無當宮相違者可奇存之由申、大奉幣官幣者正殿ニ奉納之例也、仍禰宜七ヶ日令參籠、可遂外殿之間、不可叶之由依申下向畢、

〔大嘗會便蒙上〕由奉幣(ヨシノミテグラ)といふ事あり、由とは大嘗會を行はるべきよし也、奉幣とは幣帛を神に奉

らせ給ふ義にて、是はことし此月元文三年十一月下の卯の日に大嘗會を行はるべきよしを、伊勢、石清水、賀茂の三社へ勅使を以て告らるゝ也、此儀は霜月上旬の內にて日をえらばるゝことしは三日を用ゐらる、是には陣座の儀、神祇官代の儀とて、同日に兩度の儀式あり、陣の座の儀は、上卿以下紫宸殿の西廊右近の陣の座に著て、三社の使を定め仰せ、又內記に仰せて三社の宣命を作らしめて奏聞し、是を淸書せしめなどする儀也、此儀畢りてすぐに神祇官代の儀あり、神祇官代には、京の東山神樂岡の八神殿吉田の社の近所にあり、今の人或は誤りて八神殿を吉田の社と思ふ者あり、の邊を用ゆ、其儀先行事の辨史以下此所にて三社の幣物をつゝみ、上卿も陣の座の儀畢りてすぐに此所に來り、三社の宣命を三社の使々に渡し、すなはち御幣も此所よりたつ事也、是は昔は神祇官の官舍にて行はれし事なれども、今は神祇官なきが故に、神樂岡の八神殿の邊を神祇官の代とたてゝ此事ある也、八神殿はむかし神祇官にありし物なれば也、

〔北山抄五〕大嘗會事

可行大嘗會之由被申伊勢事仁和四年十一月十日、天慶九年十一月六日、被立件使、安和元年又有此例、或御禊以前被立云々、

〔柱史抄下臨時〕大嘗會由被告申三社事伊、石、賀、

當日上卿著陣召內記、內記持參宣命草、奏之、次第如恒、天皇幸八省、進發伊勢使幼主之時、攝政參著八省院、之後、於陣上卿石賀二社使被立也、無行幸之時、伊勢幣於東廊立之、石淸水賀茂使於北廊被立、

〔大嘗會儀式具釋五〕大嘗會由奉幣次第

上卿著仗座、次參議著橫切座、職事來仰日時使等事、次上卿令移著端座、次上卿令官人敷膝突、次上卿以官人召辨、辨參膝突、上卿仰日時事、次辨進日時勘文、上卿披見、辨退出、次上卿以官人召外記、仰可持參例文硯由、次外記持參例文筥、歷名帳一卷、舊定文一卷、使交名二通、折紙一枚等入之、置上卿前、次外記持參硯、置參議座上、次上卿披見例文等、訖目參議、

例文等トハ、例文使交名等ナリ、其歴名帳ナドハ披見スルニ及バズ、是ハ外記ノ進ツレル使交名ノ中ニ、若上卿ノ意ニ應ゼザルアル歟、又ハ奏聞セル時、叡慮ニ合ハザルナド有テ改定ムル時ノ爲ニ、歴名帳ヲ奉ルナリ、今ハ諸事アラカジメ定置テ、當日ニハ儀式マデニ行ハルヽ故、此使交名ノ面モ初ヨリ定置タルマヽナレバ、當日ニ至リテ改定ムル事ナシ、仍テ歴名帳ハ云ニ及バズ、例文トテモ實ハ用ナシ、唯例ニ從フテコレヲ進ムルノミ、

次參議移著座上、次上卿見合例文交名等、令書定文、次參議書定文畢進上卿、次上卿披見定文、取出例文等入日時勘文定文於筥、令職事奏之、奏聞畢返賜、次上卿披見日時勘文定文等結申、職事仰仰詞、

是ハ日時使人共ニ、奏シノマヽニスベキ由ヲ上卿ニ仰スルナリ、モシ叡慮ニ合ハザル所アラバ本ヨリ仰出サルベシ、但上ニ云ル如ク、アラカジメ定置タル事ナレバ、今ノ世奏シノマヽナラズト云事ナシ、然レドモ日時使人共ニ、此ニ至リテ初テ定マレル分ナリ、其伊勢使ハ王定通王、但今ノ世用ユベキ王氏ナキガ故ニ、阿波守光枝（小佐治）ヲ以テ王代トス、定通ト云者ナケレドモ、宣命ニハ定通王ト是ヲ載ス、中臣神祇少副長矩（伊勢大宮司）、大忌部親門、但今ノ世用ユベキ忌部氏ナキガ故ニ、右衞門少尉中原武住（高屋）ヲ以テ忌部代トス、親門ト云者ナク、又武住從六位上ナレドモ、忌部モ中臣ト同ジク五位ヲ用ユル例ナルガ故ニ、宣命ニハ從五位下忌部宿禰親門ト是ヲ載ス、此外ニト部モ一人參向ス、是延喜式以下ニ見エテ今モ然リ、但使ノ限ニ非ズ、又宣命ニモ載セズ、伊勢使ノ王代ハ、兵庫頭豐賢（細川）ヲ充ベキ其家ノ例ナリ、然ルヲ今度光枝ヲ充ラレシ事、一會傳奏庭田前大納言（重孝卿）ノ失錯ニシテ、一會畢リシ以後其沙汰ニ及ベリ、

次上卿以官人召外記、外記參膝突、次上卿加入例文等於筥賜之、外記披見日時勘文定文結申、上卿仰仰詞、此序仰伊勢使事、外記稱唯退出、

伊勢使事トハ、伊勢使ニ定メラレタル人々ヘ催廻スベキ由ヲ仰スルナリ、本ヨリアラカジメ定メラレテ、三社共ニ其使々各承得シアル事ナレドモ、中ニハ伊勢ハ專ナレバ、儀式ニモ是ヲ仰スルナルベシ、

次參議還著本座、此間外記撤硯、次職事就膝突仰宣命事、次職事下内藏寮請奏、內藏寮ハ錦綾ヲ掌ルニ依テ、今ヨリ後ハ幣帛ヲモ掌ル官トナレリ、請奏ハ何ニテモ請申ス奏文ヲ云、此所ハ三社ノ幣帛ヲ申請フ請奏ナリ、上卿披見、職事退出、次上卿以官人召辨下之、辨結申、次辨進神祇官請奏、上卿披見令辨奏之、奏聞畢返賜下之、辨結申、

是奉幣使發遣ニ依テ、幄幔ノ類ノ所用ノ物ヲ請フ請奏ナリ、

次上卿以官人召內記、仰宣命事、次外記參小庭、申使王御馬事、次內記持參宣命草、上卿披見畢賜內記、次上卿參弓場代令職事令奏聞之、此序奏使王御馬事、次職事奏聞畢返賜、仰可令清書由、次上卿還著仗座、仰可清書由於內記、次內記進清書、

伊勢宣命之體

天皇我詔旨良萬止、掛畏岐伊勢乃度會乃下津磐根爾大宮柱廣敷立氐高天原爾千木高知氐稱辭定奉留、天照坐須皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申給者久止申久、朕寡昧乎以氐天日嗣高御座乃業乎承傳倍、去享保二十年十一月三日爾即位氐、食國乃御宇須始爾依氐先奉給遣幣禮奈遲止毛、有難行事天兩箇乃春秋乎延多利、由是氐今年乃今月乃下乃卯日爾大嘗祭乎式乃隨乃政止天之被行倍岐奈利、此狀乎告申久、吉日良辰乎擇定氐、王從五位上定通王、中臣正五位下行神祇少副大中臣朝臣長矩等乎差使氐、忌部從五位下齋部宿禰親門加弱肩爾太手繦取懸氐、禮代乃大幣乎持齋者利令捧持氐內外乃宮爾奉出給布、掛畏岐皇大神平久安久聞食氐、天下阜豐爾海內靜事爾、天皇朝廷乎寶

位無動愈増爾護賜比、天地日月止共爾常磐爾堅磐爾夜守晝守爾惠幸賜倍止恐美恐美毛申賜者久止申、

元文三年十一月三日

石清水宣命之體

天皇我詔旨止掛麻久毛畏岐石清水爾御坐世留八幡宮乃廣前爾、恐美恐美毛申給者久止申久、朕菲薄乃德乎以寶祚乎受計、去享保二十年十一月三日爾即位氐、食國乃御宇須始爾依氐先奉給邊留禮奈禮止毛、有難行事天兩儀乃春秋乎延多利、由是氐今年乃今月乃下乃卯日爾大嘗祭乎式乃隨乃政止之天被行倍岐奈利、此狀乎告申久、吉日良辰乎擇定氐、從二位行權大納言源朝臣長忠、正五位下行圖書頭丹波朝臣尙秀等乎差使氐、禮代御幣乎令捧持氐奉出給布、掛畏岐八幡宮平久安久聞食氐、遐邇無事久上下有序氐、天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜護日護爾護幸給比、萬邦豐饒兆民安穩爾惠助賜倍止恐美恐美毛申賜者久止申、

元文三年十一月三日

賀茂宣命之體

天皇我詔旨良麻止掛畏岐賀茂乃御祖乃皇大神、別雷乃皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜者久止申久、朕神璽乃緒乎得氐帝業乃緒乎承計、去享保二十年十一月三日爾即位氐、食國乃御宇須始爾依氐先奉給邊留禮奈禮止毛、有難行事天兩儀乃春秋乎延多利、由是氐今年乃今月乃下乃卯日爾大嘗祭乎式乃隨乃政止之天被行倍岐奈利、此狀乎告申久、吉日良辰乎擇定氐、正三位行權中納言兼右衛門督藤原朝臣業親、左兵衛權佐從五位上藤原朝臣光香等乎差使氐、禮代乃御幣乎令捧持氐奉出給布、掛畏岐皇大神平久安久聞食氐、天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸賜比、四海八紘風天毛無事久無故久、今毛往前毛世寧久民穩爾恤助護給倍止恐美恐美毛申賜者久止申、

元文三年十一月三日

右今度ノ宣命如此シ、昔ノ宣命ハ年號官位等ノ外ハ、止ム事ナキニ非ザレバ字音ヲ用ユル事ナシ、近世妄ニ西土ノ熟語ヲ取テ、字音ヲ用ユル者古體ニ合ハズ、

上卿披見畢賜内記、次上卿參弓場代、令職事奏之、奏聞畢返賜、此序仰使王御馬事并召由、上卿不還著仗座、自弓場代直參神祇官代、

神祇官代儀

辨史以下著北廳代座、有幣裹事、上卿參神祇官代、辨外記史出立南門外、上卿向上首揖、次上卿入南門著座西方東面、次使々入南門著座東方南北對座、次上卿以召使召辨、辨參膝突、上卿問幣物具否、辨申具由、次上卿以召使召外記、外記參膝突、上卿問使々參否、外記申參由、此序仰可賜使王御馬由、次上卿以召使仰可持參宣命於内記由、内記持筥進立、次上卿著北廳代座、辨以下著座、上卿辨西上北面外記史南上西面召使蹲踞便所、内記持宣命筥置上卿前退著座、次上卿仰辨令催發遣、辨仰史、史以召使催之、御幣發遣、次上卿以召使召使王、使王參膝突、上卿賜宣命、使王取之退出、次自下﨟起座内記取筥退列立使所、上卿向上首揖、次上卿還著南門座、次上卿以召使仰可持參宣命於内記由、内記置宣命於上卿前、次上卿目石清水使、使參進膝突、上卿授宣命、使取之還於南門外、授宣命於次官、次上卿目賀茂使、使參進膝突、上卿授宣命、其儀如石清水、次上卿退出、辨以下出立南門、儀如初、○節略

〔伯家部類〕元文三大嘗會由奉幣御諄辭

掛毛畏岐伊世兩宮乃廣前爾恐美恐美毛申氏申佐久、朕以薄德氏天之日嗣傳賜事波非賢佐須、偏爾是神助奈利、已往卯之年巳爾即位世利、然者大嘗會之事速爾行流可岐之所、故无久志氏年月於經多利、今茲元文三年中乃卯大嘗會於執行□須、依是幣使於差使須、掛毛畏支皇大神乎介久安介久、聞食氏、寶祚無動久食國乃天下毛無事泰平爾守給比幸給江止恐美恐美毛申氏申佐久、

〔日本後紀十七平城〕大同三年十一月辛卯、〇十四日奉幣帛於伊勢大神宮、以行大嘗事也、是夜御朝堂院、行大嘗之事、

〔類聚國史八神祇〕弘仁十四年十一月癸丑、〇三日天皇〇淳和御大極殿、奉獻幣帛伊勢大神宮、爲御大嘗也、

〔續日本後紀二仁明〕天長十年十一月庚申、〇八日爲行大嘗會事、奉伊勢大神宮幣帛、

〔文德實錄三〕仁壽元年十月庚申、〇廿二日遣使者向伊勢大神宮、告以大嘗祭事、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年九月十日壬戌、〇神嘗奉幣前日遣使奉幣於伊勢大神宮、

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十一月二日己亥、遣使於伊勢大神宮奉幣、十八日乙卯、夜天皇御豐樂院、自供大嘗祭、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年十一月十日丁卯、遣散位從四位下良末玉、奉幣於伊勢大神宮、告以可修大嘗會、天皇御朝堂院小安殿發使焉、

〔日本紀略五冷泉〕安和元年十一月廿一日庚子、行幸八省院、被遣伊勢奉幣使、

〔日本紀略九一條〕寬和二年十一月一日乙丑、於八省院奉幣、三社幣使、伊、石、賀、

〔日本紀略十三後一條〕長和五年十一月四日甲辰、奉幣三社、伊、石、賀、被告大嘗會事、仍攝政〇藤原道長參入省院、

〔本朝世紀〕治曆四年十一月十日己卯、被定大嘗會御新三社奉幣使事、伊、石、賀、十三日壬午、於神祇官被立大嘗會御新三社奉幣使事、伊、石、賀、上卿大納言信長、

寬治元年十一月八日丙辰、被立大嘗會三社由奉幣使、伊、石、賀、仍民部卿經信參入、奏宣命草、開卜串、次攝政殿以下諸卿參入八省、被立使、

天皇我詔旨止掛畏支其皇大神乃廣前仁恐見恐見毛申賜波久申須、高天原仁事始給比之皇御孫乃尊仁事寄奉給部留豐葦原乃水穗乃國乃天乃日嗣高御座乃次乎受賜比氐、今月乃中卯日爾國寄大嘗會聞食之牟爲爾依氐、其狀申賜比、官位姓名等乎差使氐、宇豆乃大幣乎令捧持氐奉出給布、此狀乎不

久聞食氏天皇朝廷乎寶位無動久常磐堅磐爾夜護日護爾護幸奉給比、天下無事爾海內樂業氏、四時調和志、五穀豐饒爾令有給へ恐見恐見毛申賜はく申、

寛治元年十一月八日　作者大內記菅在良

〔台記〕康治元年十一月三日辛卯、今日大嘗會由被告伊勢國、攝政殿參向大極殿、上卿權大納言宗輔卿云々、

〔本朝世紀〕康治元年十一月三日辛卯、權大納言藤原宗輔卿參仗座、被立三社奉幣使、蓋被告大嘗會由也、伊勢、石清水、賀茂、當日有定、此日以參議季成卿爲賀茂使、伊勢使散位行兼王給左馬寮御馬、散位源季忠朝臣爲石清水使、

〔兵範記〕仁安三年十一月四日辛酉、晩頭左大將○藤原師長參著仗座、下官○平信範仰云、大嘗會由三社奉幣令勘申日時使等、三、○中略次右大辨實綱卿書使定文奉上卿、上卿入加勘文筥、下官內覽奏聞、內覽參里亭、次返下上卿、上卿召外記下給畢、次下官下伊勢幣料、內藏寮請奏、上卿返給、下官結申、次於床子下史了、

六日癸亥、率分所明後日三社幣料物付諸國切下文、於官掌即催促了、　八日乙丑、奉幣於諸社、被申大嘗會由於三社也、早旦行水解除、先參殿下申奉幣事、次參內、示御浴事、幣料纒綱、內侍早可従事仰藏人能頼、又宣命紙事仰出納、此間上卿幷殿下未參、令參內給、及午刻參八省、暫相待之間、伊豫內侍參入、藏人借車、龍口相從、道、入自朱雀門東掖門、自大極殿西就昭慶門西掖門、掃部司敷筵道、薦、女官圍繞云々、下車被入小安殿馬道西屏風中、次下官著同馬道西座、北向、右大史三善章貞著其西座、東向、先是內藏寮菅野季康幷史生兩人、舁居幣物辛櫃於下官座前、次召齋部官人、與藏司史生指幣物尺寸、令女官裹調之、先內宮御料、其式法如例、內侍監臨觸手、次藏寮捧之奉安東母屋巽廌上、次外宮御料、次第同前、內侍歸參內、下官退座、令史生守護御幣、次仰史章貞官掌宗職、相共於中和院南築垣下幄、令裹調八幡賀茂幣物、悉立嘉喜門東西、八幡西、加茂下東上、

小安殿儀、南面除第一間馬道外皆立布障子、馬道間以東敷長筵、馬道東掖間壁下東北西三方、立

廻大宋屏風三帖、南面不立、其中敷繧繝縁帖三枚、爲攝政御座、南向、其西立布障子二本、北面立也、不立中央、馬道中間敷繧繝縁帖二枚、爲扈從公卿座、屏風東敷御拜座、如例、昭慶門東披廊公卿幷辨官上官等座如常、東廊座同前、但掃部司失錯、兼敷歩廊南面東福門掖、臨期敷改東廊、了、裝束司失也、

未剋攝政令參入省給、權中納言宗家、資長、參議親範、賀茂使、右大辨實綱卿等扈從、藏人左衞門佐經房、同治部少輔兼光等同候御共、殿下經廊北幔外、入昭慶門、直令著小安殿座給、上卿左大將同時入嘉喜門、被參著同門西掖座、次上卿召外記、被問使々參否、次召下官、被尋幣物事、此次申神祇官幣料請奏、日來不申、已懈怠也、此間殿下召御手水、主水司儲之、御手洗、楾、手巾、紙、置御臺、居立高坏、藏人權佐經房兼光等役之、先例四位侍臣爲陪膳、今日五位役之如何、此間公卿被候馬道座、次召下官、被尋仰事具否、次解御劍、移著屏風東半帖座、令拜給、跪向云々、向御幣云々也、兩段再拜、了召使、下官傳仰外記、外記召之、使々三人入昭訓門、列立小安殿南庭、次齋部卜部一々參上、取幣立本列、次殿下召下官、召中臣、下官脫沓參進御座邊、奉仰出長巳間、召神祇祐永親、經布障子外歸馬道著沓、永親參上、近被召寄御座前、奉仰退下、卒御幣進發、此間上卿被移著東廊座、少内記靜長持宣命筥扈從、下官外記史等相隨、下官著座、内記獻筥、外記史一同著座、次上卿召召使、二召使王、使王參上、給宣命退去、次上卿歸著北廊座、内記又置宣命筥、上卿被目左衞門督實國、自陣早參、候座、金吾進寄給宣命、復本座、更起著沓出嘉喜門、衞士捧幣前行、金吾下給宣命次官民部大夫久明進發、次上卿被目平宰相、宰相揖起座、進居上卿座邊、中敷、揖、上卿被給宣命、相公取副笏揖復本座、揖更起座著沓立還、揖退去出門、衞士六人捧賀茂幣前行、相公給宣命於次官民部大夫範安、進發、此間殿下於本座帶劍率諸卿令退出給、次上卿退出、于時秉燭、仍下官以下無北庭出立儀、

於禁中上卿參著仗座、令藏人權佐被奏宣命草、無辭別云々、次奏清書了、此次被奏伊勢使御馬申由、仰聞食云々、

〔伏見院御記〕正應元年十一月十三日甲午、三社伊勢、石淸水、賀茂、奉幣、撿校權大納言藤原朝臣家教著陣奏、

宣命草、俊光奏之、覽了返給、則奏清書、使石清水、權中納言藤原朝臣、（資奉）賀茂、參議源朝臣、（具賞）於神祇官賜宣命、聞伊勢幣發遣之由、著束帶出南殿奉拜、頭中將爲兼朝臣獻笏、

〔後深心院關白記〕永和元年十一月六日壬戌、俊任來、有勅問事、仰詞申詞等注裏、

仰詞如此

　大嘗會條々

三社奉幣使可被發遣之處、使々以下無領狀人、任久壽以來例、被停止之條可爲何樣哉、○中略

余申詞如此

　大嘗會條々

三社奉幣事、爲國家之重事之上者、尤可被發遣哉、但使々以下依不被沙汰出停止之條、宜任時儀矣、

〔季連宿禰記〕貞享四年九月二日丁丑、大嘗會由奉幣幣物調進之事、左官掌紀氏辰、并大藏省弘之兩方有訴訟之事、申狀二通、（左官掌氏辰一通者、以御即位由奉幣准據例申之、大藏省弘之一通者、以延喜式等旨願申也、）今日令付大嘗會傳奏庭田中納言、重而可有議定之由有命、　十月十九日甲子、三社奉幣神祇官代主殿寮幔可調進哉否之由、已前主殿職方申之、依之今日令尋申頭中將之處、陣幷神祇官代幔、可用古物之由頭中將有命、仍其旨令下知主殿寮、　廿一日丙寅、來月三社由奉幣、三社共自神祇官發遣也、載幣物八足案、石清水賀茂下上料者、如伊勢幣案寸法可用意之由可仰木工寮云々、（內外宮案二脚、八幡一脚、賀茂下上一脚、以上八足案四脚也、）奉幣使官符之事、石清水賀茂之分、以近年跡可用意哉、但石清水賀茂等者、古案無所見、可爲如何哉之由、已前尋申頭中將之處、今日頭中將被示云、此事窺申攝政殿（○藤原冬經）之處、攝政殿仰云、古案無所見者、八幡賀茂之分者不可用意、於伊勢官符者如例可用意云々、　十一月六日辛巳、今日大嘗會由奉幣發遣刻限也、（○中略）卯

神祇官

勘申大嘗會由奉幣石淸水賀茂兩社幣帛事
石淸水社三前　賀茂別雷社一前　賀茂御祖社二前
絹各五尺　五色薄絁各一尺　絲各一絇　綿各一屯
木綿各二兩　麻各五兩　枌三枝　衞士三人
右依宣旨所勘申如件
貞享四年十一月六日　從五位下行大祐紀朝臣重基
正四位下行伯雅光王

〔貞享四年大嘗會由奉幣記〕十一月八日、戊刻許神祇權大副德忠朝臣、下着于五禰宜末彥神主之里亭、九日甲申、雨降及夕止午刻許奉幣使被參于外宮、可爲外宮已剋、內宮午剋之由、被下知、依雨降、剋限延引、中臣從五位上行神祇權大副大中臣德忠朝臣、十八歲王從五位下兼字王、代川越兵庫助忌部從五位下忌部宿禰親守、代攝津守、各束帶、宮司大司從四位下行神祇權少副長春朝臣、束帶先于官使到二鳥居外南傍、卓立北面、官使各於一鳥居下乘、御神馬二匹、白青各一、白丁四手、自二鳥居內御馬飼內人牽之、白張次御幣韓櫃一合、白丁二人舁之衞士相隨、次中臣、中臣使者於地下、則其列在王使之下、今者殿中臣以爲殿上人、在王使之上、次王、次忌部、到二鳥居之外南面列立、對于宮司揖拜、祗承宮掌參候、次大宮司獻大麻、役人二人白張進到一殿、當例兩儀各獻之、當時御與宮亡、故獻一殿、今禰宜一常和、二常有、三韻彥、五末彥、六親彥、七常俱、八貞命、九貞並、十貞盈、各束帶、但明衣、引率權官列立殿內東面北上、物忌父等衣冠列立禰宜之北南面列南立、居高案二脚、玉串大內人代伊光、父弘光依老耄伊光代之、衣冠、候殿內坤方東面、有二殿官使入自西門、列立于殿內、西面北上、對拜如常、先以御幣御韓櫃舁居高案下、次官使宮司用手水、中臣使、爲主家、手水役人、權宮代權宮二人、古會持杓、貞國持紙、並着衣冠、役之、白丁各水、役之、次衞士開御韓櫃蓋、次忌部進俯高案下、取御幣物及送文、居案上、復本列、次大物忌父益弘取送文獻一禰宜、禰宜次第相揖拜見、到十禰宜、授益弘、次大物忌父益弘、弘房、貞秀等奉御[illegible]之上裹、以尺矩檢知御幣物、且以送文讀合、次中臣著木綿鬘、復本列、權禰宜會取副、先是日代持之、

王使者不著鬘、忌部者取懸木綿鬘太縒、倚案下、拜御幣、（其儀如常）次宮司著木綿鬘、取玉串、直進卓立于三鳥居前、參道南傍、次一禰宜已下次第相揖、取玉串、各進發揖、宮司到第四御門前、分頭國列、（各下磯）著座玉串門下、（舊例兩儀者、就齋王侯殿讀宣命、今時此殿亡、故就此門）中臣相率宮司著座、先是物忌父等昇居幣案於瑞籬門下、忌部相隨、御幣西面著座、官使者北面西上著座玉串御門東間、宮司者御門中間北面著座、禰宜者宮司之西北面東上著座、（門内狹隘、故中折著座、末座東面、）物忌父候禰宜之後、既而中臣起座跪案前之鋪設、（天私二年公卿勅使詣宮勤進之行事云、凡座石壺爲神拜用舖設、可思慮乎云々、正保天和公卿勅使共兩儀、而不用舖設者也、）奉讀宣命、其儀以宣命取副笏、進出版位、兩段再拜跪座、措笏於右傍披宣命、以兩手取合兩端、捧而披之被奉讀、（此間官使宮司禰宜以下悉平伏）讀畢卷收之、執笏取副宣命、拜揖而左廻復本座、次一禰宜有名召物忌父等、次第起座、取宮司以下之玉串、而納置于瑞籬門下、（今按古例非齋王御玉串者、不納瑞籬門、今日雖兩儀、宮司以下玉串猶可納玉串門乎、）次二禰宜常有神主、大物忌父益弘以下數輩、物忌父起座開瑞籬御門、昇高案而奉納幣帛於東寶殿、畢退出復本座、次大物忌父兄部益弘跪一禰宜前、言御祈拜復座、即使以下各八度拜拍手、訖退出到遙拜所別宮遙拜、（如常）次解却木綿鬘縒等懸賢木枝、禰宜拜辭歸宿館、（勸盃禰宜者、到候一殿、）官使宮司自北口就一殿、其座東壁際中臣、次王、次忌部、（各西面北上）次宮司就南壁下北面勸盃、禰宜就西壁下東面、（對忌部）鋪設大紋高麗端疊、（按舊例三位者大紋高麗、四位以下者小紋高麗之例也、）肴物用結机、著座以前居置之、陪膳中臣者、手水權官兼勤之、自餘者祗承役之、中臣勸盃者、九禰宜貞並、宮司勸盃者十禰宜貞盈也、酒三獻用瓶子、訖撤膳各起座退出、於殿前相揖、勸盃禰宜自一鳥居被參內宮了、

行豐受大神宮一社奉幣帛之事

奉送

五色綾	五疋	白綾	壹疋
五色絹	五疋	帛	壹疋
兩面錦	壹段	麻	壹斤

木綿　壹斤　調布　壹段

右大嘗會由奉幣料所奉送如件

貞享四年十一月六日　左官掌紀朝臣氏辰

未刻許（雨止）勅使各到內宮一鳥居下乘、御神馬二匹（栗毛、黑毛、著四手、）御幣韓櫃、（衛士相副）前進、中臣已下行列一同于外宮、到二鳥居外列立、官使北面、（南傍）宮司南面、（北傍）相對拜揖、祇承宮掌（衣冠）參候、獻御鹽湯大麻、（役人二人著衣冠）官使宮司進到玉串所、禰宜一經盛、二守宗、三經在、九經晃、十永親、（各束帶）引率權官列立玉串所、南面西上、（宮依雨止、用晴儀、）官使宮司著禰宜列立之西、南面東上有拜禮、先是物忌父等立高案二脚於玉串所東傍、大物忌父已下列立案後西面、玉串大內人定彥土公（衣冠）著座南傍北面、（有二疊設）手水役人候其左、先是居御幣韓櫃於高案前、衛士開御韓櫃蓋、忌部執御幣及送文居置案上、復本列、次官使宮司各用手水、（中臣手水者、重代權官二人參長守重著衣冠役之、自餘者御鹽湯役人役之、）次政所執送文進一禰宜、一禰宜取之拜戴、授二禰宜、二禰宜而拜覽、禰宜次第相揖至十禰宜、後授政所、政所以送文置案上、物忌父等撤知御幣、此際官使各著木綿鬘、復本列、就中忌部者著木綿鬘及木綿襷、進傍高案下拜御幣卓立、（其儀如常）次物忌父等奉舁幣案進發、次宮司著鬘木綿、（手取玉串）一禰宜列立之前相揖進發、卓立于第四門前西傍東面、次禰宜進到揖宮司、於第四門內分頭列立、調列就石壺北面東上如常、（禰宜無玉串、行事失錯乎、）次官使進發、次官使宮司到中重著版位、各一拜而著座、北面西上如例、（敷二疊設）宮司者著一禰宜座上、（可以後如此）先是物忌父等奉舁居御幣案於中庭、忌部相副著座西方、御神馬二匹者、牽立玉串御門前、（各西頭）物忌父等者、祇候東傍西面、既而中臣起座進中庭之版位、（新版設之、元舊版設、）奉拜而披奉讀宣命、其儀一同于外宮、官使以下各平伏、讀畢復座、次奉納官幣、物忌父等自案上納御韓櫃、而奉舁之、官使已下各入度拜拍手伏拜、訖退出、禰宜者自西御門退出、列立遙拜所之東側、勅使宮司者、自南御門退出、經禰宜列立之前、相揖而就遙拜所、禰宜亦隨就、各遙拜別宮拍手、禰宜并官使歸齋館、官使解木綿鬘木綿襷等、而就一獻勸盃、禰宜隨候其座、中臣以下使使南面

東上、宮司者對中臣北面著座、勸盃禰宜座東方、西面北上、中臣勸盃者九禰宜經晃、宮司勸盃者十禰宜永親也、鋪設中臣者疊筵上敷小紋高麗端半疊、自餘者疊筵也、饗膳用供饗有飯、著座以後居之、手水役人及祗承等役送之、酒三獻用銚子、王忌部者無勸盃、撤膳之後起座、於殿前相揖、勸盃禰宜退出、於一鳥居邊禰宜各參候拜揖、次官使駕輿歸寄宿、

〔壬生家記〕明和元年大嘗會門下諸司訴訟局書等留牒

奉願口上

今度就大嘗會由奉幣之節、外宮御幣物左官掌調進之事、貞享元文寬延等之度々調進仕候間、今度も如先例被仰付被下候樣奉願候、此旨宜御沙汰奉願候以上、

申八月　　　　左官掌大炊大允紀氏富

官務殿〇中略

奉願口上

今度就大嘗會由奉幣之節、內宮御幣物大藏省調進之事、貞享元文寬延之度々調進之仕候、此度も如先例被仰付被下候樣奉願候、此段宜御沙汰奉願候以上、

八月　　　　大藏省

官務殿〇中略

乍恐奉願候口上書

一當冬就大嘗會、先例之通伊勢江御奉幣之御用有之候ハヾ、衛士兩人參向仕候、依之御下行先年者一人ニ五石宛兩人拜領仕、尤御幣持之人足幷馬等之御朱印無之候故、爲人馬料一人ニ壹石五斗宛兩人拜領仕候、然ル處近年御幣物道中何角御念入、雜用前々より者多掛り候ニ付、〇中略寬延年中大嘗會御奉幣之節、去年御卽位由奉幣之節、御加增之儀御願申上候處、願延引仕御帳

も相濟、不及御沙汰、重而相願候樣被爲仰付候故、一人五石宛被下置參向仕候處、遠路參向之御用ニ候得者、入用多甚難儀仕候、其上神祇官發遣之節、御幣持之白丁、其外御幣櫃雨氣之御雨具等用意仕、勿論勢州御著迄、道中之御外包具、日蓋雨具、其外彼是御入用多、尤於勢州御幣櫃雇人足多仕、白丁等も多入申候事ニ御座候得共、別ニ御入用料不被下置候故、私共頂戴仕候御下行之內ニ而相勤申候、殊更當時諸事高直ニ罷成、困窮之私共ニ御座候得者、是等之儀甚難儀仕候、右之趣被爲聞召分、御大禮之砌御憐愍ヲ以、御加增被爲成下候樣ニ奉願上候、還宮奉幣之節衞士兩人江拾石五斗宛頂戴仕候、何卒右之樣ニ被下置候ハヽ難有可奉存候、此段宜御沙汰奉願上候以上、

明和元申年八月

衞士口重數馬

同藤井若狹椽

官務殿　○中略

奉願口上

大嘗會由奉幣之節、神祇官代江史生參向御下行米、此迄頂戴不仕候、今度參向之史生江御下行米何卒被下置候ハヽ難有仕合奉存候、此段奉願候條、宜御沙汰奉願候以上、

八月　大藏省

官務殿

〔以事類記〕文政大嘗會一會文書部類

神祇官請奏料紙開紙、在懸紙、

請　石淸水賀茂兩社幣料之事

石淸水社三前、賀茂別雷社一前、御祖社二前、

絹各五尺、五色薄絁各一尺、絲各一絇、綿各一屯、木綿各二兩、麻各五兩、杭三枚、衞士三人、

右大嘗會由奉幣之料、所請如件、

文政元年十一月八日　　正六位下行大祐紀朝臣尹昌

內藏寮請奏料紙已下同上

請　伊勢皇大神宮幷豐受宮幣料事

錦一匹、兩面一匹、五色綾五匹、白綾一匹、五色帛伍匹、木綿小二斤、庸布貳端、柳筥二合、明櫃二合、

右大嘗會由奉幣之料、依例所請如件、

文政元年十一月七日　　正六位上行少屬大國宿禰守長

　　正六位上行少允大國宿禰守榮

官符本紙大高檀紙、以同紙爲懸紙、

太政官符伊勢國

應預奉兩大神宮幣帛事

使正三位行神祇權大副大中臣朝臣光忠

右內大臣宣、奉勅爲奉兩大神宮幣帛、差件人、宛使發遣如件、國宜承知、依例行之、符到奉行、

右少辨正五位下藤原朝臣隆光判　　正五位上行主殿頭兼左大史筭博士小槻宿禰判奉

文政元年十一月八日

〔大嘗會書類〕嘉永元申年十一月九日、大嘗會由奉幣發遣神祇官代儀備忘、

一辨參向、此已前少史參向、此時午刻過辨侍ヲ以被尋諸司具否、卽申具由、次被著幣裏座、辨史北上西面

史生官掌東上北面忌部南面著座、起座者爲先下萬御幣於案上之時、辨已下平伏、

一北廳代座已下、辨御點撿有之、畢被入御休所、

由加物使

一上卿御參向、（未刻）辨外記史於南門外出立、上卿御一揖、辨答揖、外記史平伏、上卿入南門著座給、次石清水使參進一揖、辨已下答揖、次南門著座、次賀茂使參進如前、（中略）次上卿御起座、著北廳代座給、（西上北面）次中臣座、次辨、次外記史內記等如圖著座、次內記置宣命宮上卿座前、訖內記著座、次上卿仰辨令催御幣發遣、辨仰史、膝ヲ直シ承之、次召使（江）氣色ス、召使史ノ座ノ右ノ後ロエ來申之、御幣發遣、伊勢、石清水、賀茂次第發遣、上卿已下平伏、次上卿令召使召中臣、中臣著座、次上卿御目、中臣起座參軾、上卿賜宣命、中臣取之退出、次內記取宮退、次自下臈起座、次列立便所、（南門座ノ西、北上東面）上卿御一揖、辨答揖、外記平伏、次南門外（江）出列立、

一上卿還著南門座給、（中略）次石清水使於南門壇上授宣命於次官、次使進發、使一揖、辨已下答揖、次賀茂使如前、次上卿御一揖御退出、辨答揖、外記史平伏、畢退出、（中刻過）

神祇官

差進大嘗會由奉幣伊勢大神宮使之事

中臣正三位行大副大中臣朝臣敎忠

忌部正五位下忌部宿禰則能

卜部從五位上卜部朝臣光烈

神部肆人

右依官宣所差進如件

嘉永元年十一月九日　從五位下行大祐紀朝臣以昌

從四位上行伯資敬（○此下有石清水賀茂發遣文、今略、）

〔延喜式〕（七踐祚大嘗祭）凡應供神御雜器者、（神語曰由加物、）所司具注所須物數、預前申官、八月上旬差宮內省史生、遣五國監造、河內和泉一人、尾張參河一人、備前一人、到國先祓後始造作、其幣國別、五色帛各一丈、

木綿麻各六斤十兩、鍬四口、熊皮二張、並以大藏物充之、
河内國所造、甂筥廿合、大手洗瓫十八口、䍃十八口、小手洗瓫九口、短女坏十六口、渴瓫十六口、小盤十六口、片盤廿八口、高盤百廿口、鹽坏十六口、粥盤八口、前下大盤五十六口、酒盞八口、盞廿口、多加須伎八十口、比良須伎八十口、比良加卅口、
和泉國所造、甂筥九口、池由加一口、由加十口、鉢一口、燈坏六口、燈盤六口、油䍃二口、叩盆六口、
尾張國所造、甕八口、缶五十口、宮坏卅口、𤭖八口、瓫十口、短女坏卅二口、酒䍃八口、匜十六口、片坏卅口、
陶臼八口、餝𤮕八口、高盤卅口、坩十二口、都婆波十二口、酒盞十二口、酒垂八口、
參河國所造、等呂須伎卅口、都婆波卅二口、(大十六口、中十六口、)多志良加八口、山坏小坏各六十口、巳豆伎匜各六十口、
備前國所造、𤮕卅口、水瓫卅口、都婆波六十口(大卅口、小卅口、)缶卅口、置蓋卅口、酒垂卅口、匜卅口、宮䍃卅口、短女坏卅口、山坏卅口、片盤卅口、酒盞卅口、小坩卅口、陶臼卅口、巳豆伎卅口、
○按ズルニ、儀式ニハ、此外ニ參河國ニテ酒盞十二口、備前國ニテ、盞十二口ヲ作ルコト見ユ、
〔日本諸手船(五神祇)〕由加物
釋詁、吾神宮(伊勢)〇祭祀亦有由加物、按由加悠紀也、加紀音通、悠紀由介與字介同、食義也、所謂悠紀主基之訓義、亦不異乎此、
〔延喜式(三十一宮内)〕凡踐祚大嘗會年、省遣史生三人、催五國供神御料雜器、(河内和泉兩國一人、尾張美濃參河(恐誤)兩國一人、備前國一人、)
〔儀式(二)〕踐祚大嘗祭儀
九月上旬、〇中略神祇官差遣卜部三人、申官差遣紀伊淡路阿波等國、監作由加物、
〔延喜式(七踐祚大嘗祭)〕凡應供神御由加物器料者、(神語號雜贄同爲由加物、)九月上旬申官差卜部三人、遣三國、先大

祓後行事料馬一匹、大刀一口、弓一張、箭廿隻、鍬一口、鹿皮一張、庸布一段、木綿八兩、麻一斤、鰒堅魚海藻滑海藻各二斤、鹽二升、米酒各二斗、（已上當郡所輸）馬一匹、大刀一口、弓一張、箭廿隻、鍬一口、鹿皮一張、庸布一段、木綿麻各一斤、堅魚鰒各四斤、海藻滑海藻各四斤、（○儀式作二二斤一）酒米各四斗、鹽四升、（已上阿波國麻殖郡賀那郡所輸）其供神幣物幷作具及潜女衣料、（人別布一丈四尺）竝以大嘗物充、但糧以當國正稅給、人別日米二升、（紀伊七日、阿波十日、）其物造了、卜部監送齋場、分付兩國、但阿波國獻鰒布木綿付神祇官、

紀伊國所獻薄鰒四連、生鰒生螺各六籠、都志毛古毛各六籠、螺貝燒鹽十顆、並令賀多潜女十人量程採備、其幣五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿麻各五兩、葉薦一枚、潜女所須鑿十具、刀子二枚、

淡路國所造瓮廿口、（各受二一斗五升一）比良加一百口、（各受二一斗一）坩二百口、（各受二一斗一）其幣五色薄絁各三尺、倭文三尺、木綿麻各一斤、葉薦一枚、作具鑁斧小斧各二具、鎌二張、造訖使當國凡直氏一人著木綿鬘執賢木引導、

阿波國所獻、鹿布一端、木綿六斤、年魚十五缶、蒜英根合漬十五缶、乾羊蹄、蹲鴟、橘子各十五籠、（已上忌部所作）鰒卅五編、鰒鮨十五坩、細螺、棘甲蠃、石花等並廿坩、（已上那賀潜女十人所作）其幣五色薄絁各六尺、倭文六尺、木綿麻各二斤、葉薦一枚、作具鑁斧小斧各四具、鎌四張、鑿十二具、刀子四枚、鉇二枚、火鑽三枚、並令忌部及潜女等量程造備、

凡紀伊淡路阿波三國造由加物使向京之日、路次之國掃道路祗承、

〔神祇官年中行事（[illegible]）〕大嘗會

阿波國荒妙神服使一人、由加物使一人、戸座當使一人、神部二人、

淡路國由加物使一人、神部二人、

紀伊國由加物使一人、神部二人、然之上沙汰、

〔儀式（四）〕踐祚大嘗祭儀

頒下諸司諸國官符宣旨例

太政官符諸國司

紀伊國

海部郡薄鰒二連　生鮑三籠　生螺三籠　都志毛三籠　古毛三籠　螺貝燒鹽五壺

右六種國所造備

米七斗　人別日二升

右潜女五人七箇日食、以正稅充之、

五色薄絁各五寸　倭文五寸　木綿二兩二分　麻二兩二分　鑿五柄　刀子一柄　水褌布二段一丈三尺

右幣帛、幷潜女等料所給分、〇此下河波淡路二國有造備品目、今略、

以前得神祇官解偁、供奉大嘗會其所由加物、依例所請如件者、國宜承知、依數造備進上、

太政官符諸國每國有符

應造新器

河內國

御飯筥廿合　水平十合　水片坩廿口　大御手洗十八口　小御手洗九口　足下坏十六口

御鹽坏十六口　後盤八口　前下大盤十六口　片粥盤八口　大片坩卅六口　御手湯瓮十六口　片盤五十六口　御酒坏八口　間坏廿口　大高坏卅口　枚次材八十口　次材高坏八十口　大比良加卅口〇此間有和泉尾張參河備前雜物、今略、

已上御料〇中略

以前得神祇官解偁、爲供奉大嘗會、應須雜物幷潔祓具如上件者、國承知、一事以上依例、行之、事有期會、不得闕怠、

神服使

太政官符宮内大藏兩省

宮内

鑓三口、斧三柄、鐇三柄、鑿十一柄、(布二柄、常柄九、)刀子三柄、(削刀一、爲二、)鉋一柄、錐一柄、小斧三柄、

大藏

五色薄絁倭文各五尺、木綿麻各大一斤十兩二分、商布五段、折薦一枚、(直)

右得神祇官解偁、爲供奉大嘗會、其所造紀伊淡路阿波等國由加物幣帛、並潜女等用度、依例所請如件者、省宜承知、依件充之、

〔兵範記〕仁安三年九月四日壬戌、今日神祇官進差文、三善大史章貞持來之、見了返給了、不及覽上卿云々、〇中略　一枚出加物使等

紀伊國　伊岐致友　神部二人

淡路國　伊岐致親　神部二人

阿波國少史伊岐致顯　神部二人

〔山槐記〕元暦元年八月卅日丙戌、權右中辨光長朝臣、令主基行事史能光覽文書九通、

一通　紀伊國由加物使同差文

九月廿二日戊申、午時悠紀史國通持來神祇官差文、請奏等入筥、

一通　紀伊國由加物使差文

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

九月上旬、神祇官差神服社神主一人、爲神服使、申官賜驛鈴一口、遣參河國、喚集神戸、卜定織神服長二人、織女六人、工手二人、

〇按ズルニ、神服社ハ參河國赤日子神社ニシテ、神服部ノ祖神ヲ祭レル所ナリ、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

十月上旬、神服使率服長、織女工手等十人、持神服部所輸調絲十約到來、悠紀主基各五人次各祭八神、名號其料各五色薄絁各一尺、絁三丈二尺、座別四尺木綿二斤、絲綿各八斤、座別一斤商布八段、鍬八口、麻四斤、酒一缶、米五斗、鰒堅魚各一連、雜腊一籠、海藻一連、鹽二升、雜菓子一斗、凡料布二段、中略○中旬、中略○各神服使并國司齋場預、率服長織女等鎮神服院地、其料各五色薄絁各一尺、倭文一尺、木綿五兩、麻一斤五兩、鍬四口、米酒各一斗、堅魚鰒海藻各一連、坏四口、瓶四口、其調度服板七枚、長各八尺、廣二尺、厚二寸甕二十口、席三枚、薦七枚、茵四枚、服覆廝布一段、知岐黑綿一屯、使并服長織女等明衣料布五端三丈一尺、使一人、長二人、各二丈、織女六人各一丈六尺、巾料各三尺三寸、襷料各五尺、褌料各五尺、即兩國相共造神服院、每院有四屋、二國各造二屋、先造酒童女執鋤初堀四角柱穴、工夫終之、其制也、開門東北兩方、北門掖、横五間神服殿一宇、南戸、長三丈五尺、廣一丈二尺、南垣下、横五間屋一宇、輿服殿相對、西三間隔壁爲神服女宿所、東二間爲服丁宿所、並北戸、長三丈五尺、廣一丈二尺、已上二字悠紀造之、北門西掖、縱五間屋一宇、東戸南垣下、横五間屋一宇、北戸、已上主基造之、並構以黑木、葺以萱、以葉柴蔀之、

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀

須下諸司諸國官符宜旨例

太政官符參河國司

應進上服部女三人服長一人神調絲五約使其位神服某甲

右爲供奉大嘗會、其所差件人、充使所喚、如件、國宜承知、使賚調絲、依例進上、

太政官符宮內大藏省兵庫寮

宮內省

鑿二柄、刀子二柄、鉋二柄、小斧二柄、鋸二柄、

大藏省

鐵一廷、鹿皮一枚、折薦二枚、〈盛〉木綿一斤十兩二分、

兵庫寮

筥牛連

右得神祇官解偁、供奉大嘗會神服等供奉、和御服用途料、依例所請如件、省寮承知依件充之、

〔小右記〕長和元年七月五日辛未、拔穗事、神服𧘱妙御服事等、早仰國司可令申請、以國解先經奏聞可定申之由、於相府使仰左中辨了、　八月十七日壬子、左大臣殿〈○藤原道長〉自殿上向使頭欲定申大嘗會事、〈○中略〉仍下官〈○藤原實資〉以近江阿波國解、幷神祇官勘申式文等奉左府、又三河國申神服料絲事、雖無國解事、依一同可被定申也、件仰詞告彼是文書等見下了、各々不申、亦相議可申也云々、〈○中略〉阿波國申、𧘱妙御服去年織進了、不可重織事申請子細在解狀、又三河國絲事、大略同阿波、中納言俊賢云、件兩國所申可然、不似近江者、〈○此時近江國、拔穗使ヲ停メ國司ヲ拔進セシメントセシナリ、〉相府有被同之氣、予申云、阿波𧘱妙御服三河神服絲等、以當年織物可被充用歟、以去年觸汗穢〈○去年十月冷泉天皇崩〉物被充用如何、相府云、去年物當年物等間可被充用乎否、依此一定可有左右歟、彼是同下官之所申、俊賢卿亦同、下官復云、隨國司申有事定也、事旨依式可被行也、不可及詮議者、遂初定詞、諸卿定申依式可遣使由了、

云々、

〔兵範記〕仁安三年九月四日壬戌、今日神祇官進差文、三善大史章貞持來之、見了返給了、不及覽上卿、

一枚　大嘗會神服使、

正六位上神服政景　神部二人

一枚　荒妙御衣使

正六位上少史伊岐致賴　神部二人

十三日辛未、右大史三善章貞、持來始悠紀所日時勘文、〈○中略〉

陰陽寮
擇申可被歸京大嘗會悠紀所神服使日時
十月廿九日丁巳　時午二點　若申
十月廿七日乙卯、早旦參行事所、大夫史已下行事官寄人等多以參集、先可被行來月次第日時沙汰評定、勘文云、○中略
陰陽寮
擇申可被織天羽衣日時
十一月七日甲子　時巳二點　若未
仁安三年十月廿七日
十一月七日甲子、今日令織始天羽衣、件神服使、去月晦任日時、歸京、今日又任勘文、於神服院令始織也、史生行事辨及史等不及參向云々、

〔百練抄九安德〕壽永元年十一月十一日、諸卿定申大嘗會參河神服使空歸洛事、

〔山槐記〕元曆元年八月廿二日戊寅、予問云、阿波國荒妙神服事、平家在四國、仍往返不通、又鎭西不通、有限事等如何、辨曰、此事尤可有沙汰事也、未及文書沙汰之間、未注出、委注出可經御覽也者、

〔三長記〕建曆元年九月六日乙卯、參河神服阿波荒妙御衣、三箇國由加物、戸座童使差文等上了

〔宮主秘事口傳〕荒妙和妙御服者、兼日官方催促也、爰正慶○光嚴大祀之時、號參河國無沙汰、不備進、只竹籠許置案、希代之珍事、臨期之違亂也、但當官者只昇立之所役許也、曾不申沙汰事也、然而忽大祀之違亂周章之間、兼豐于時勸宮主代井主基大使代相談兼彥兼員等宿禰之處、只今難出來之上者、以紙爲其代令昇立畢、曆應○光明文和○後光嚴大祀之時、雖非當道之最存君之忠、兼日依申奉行令備進其形畢、雖向後內々兼日可和談事也、



明治三十年十一月十六日印刷
明治三十年十一月二十日發行

神宮司廳

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一
發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地
印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)｛一〇五四番 三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03058 7661